

---

# 機動戦士ガンダム0086 StarDust Cradle

廣瀬 雀吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダム0086 StarDust Cradle

### 【Nコード】

N7694J

### 【作者名】

廣瀬 雀吉

### 【あらすじ】

『星の屑』から三年、デラーズの残した傷跡は連邦の勢力図を大きく塗り替えた。地球至上主義者である『テイターズ』の台頭によって世界は歪な形の平和を取り戻しつつある。

だがデラーズフリートの敗北は全ての始まりに過ぎなかった。デラーズ紛争を生き抜いた四人に与えられた現実は『宿命』と言う名の運命によって、再び戦乱の歯車を廻し始める。二ナと別れて農夫となったコウを蝕む不治の病、握り締めた記憶に苛まれながらオークリー基地に残った三人が見つめる新たな未来、そこに忍び寄るテ

イターズの傭兵部隊。

落着寸前のコロニーでガトーがニナに語った『操りし者共』とは？ 自らの命を掛けてまでガトーがコウに手渡そうとした物とは？ 彼らが全てと引き換えにして為し得た『星の屑』の真の目的とは一体何だったのか。

そしてフラナガンの後継者に『生まれながらの新人類』と呼ばれた、ニナ・パープルトンの運命は。

原作の新解釈によって紡ぎ出された『StarDust Memory』の新たなアフターストーリー。『グリプス戦役』までの短い期間に行われた歴史の裏側の戦いを作者の妄想一本で描いた二次作品。

散って逝った星屑が再び集まる時、『揺り籠』は世界を変える。

## 星の屑の記憶

其処は嘗て『阻止限界点』と名付けられた戦場ヶ原。

『星の屑作戦』と嘗てのジオン公国宇宙軍大佐、エギ ユ・デラーズによつて命名された紛争最期の激戦地は母なる星の輪郭を間近に臨む高度四百二十キロ上に位置する地球周回軌道上を封鎖する形で存在していた。

敵味方の区別無く打ち棄てられた艦船の残骸と其処から発進したであろう無数のモビルスーツの屍。最期の瞬間まで其れを駆つて戦い続けたであろう戦士達と共に命を散した機械の手が、何かを求め様に光を目指して差し伸ばされて。

紛争終結から二年の時を経た平穏の時間でさえ彼らに安寧を与え、る事を許さず、彼らが其処で死に絶えた事を嘲笑うかの様に、太陽は漂い続ける彼らの無残な亡骸を真空の墓場に照らし出した。

巨大なデブリと化した残骸の散乱する其の宙域を清掃する予算が今の連邦政府には無い。『デラーズ紛争』を引き金に連邦軍内部で巻き起こった『アースノイド至上論』者で構成された『テイターズ』と呼ばれる内部勢力は、其の予算の殆どを『スペースノイド』内に存在する来るべき脅威に対抗する為の軍事費の拡充に当てるべく、政治軍事両面での圧力を連邦議会内で強めた。

『一年戦争』の歴史的な勝利の後に勃発した、ジオンを名乗る少数の艦隊による『コロニー落とし』。嘗て誰もが経験し、恐怖のどん底に陥れられた『ブリティッシュ作戦』を髣髴とさせるその行為は連

邦議会内に存在する融和派の議員の意見を完全に駆逐した。

『勝者の余韻に浸っている場合ではない、そうしている間にも地球は悪意の危機に晒されている』

議会の壇上に立った彼らが知り得ないティターンズの一将校の発言は、一連の紛争に於いてその政治力を弱体化させつつあった改革派の議員を沈黙させ、代わりに保守派の議員達の大きな賛同を得た。彼の発言は彼自身の政治力の拡大へと繋がり、彼が率いるティターンズは設立当初の目的であった『ジオン軍の残党狩りの為に組織された一軍団』と言う枠を大きく逸脱した。

その事を危惧する少数派の議員は軍事独裁の危険性を声高に叫んだが、既に彼の手によって懐柔籠絡された多くの議員はそれらの声を封殺せざるを得なかった。

長年に渡って権力の社の中で情眼を貪って来た議会を構成する議員達にとつて、それら少数派の主張を聞き入れる事は自らの地位を脅かす以外の何者でもなかったのだ。強い力を携えるカリスマの出現。戦後混沌とする連邦内の諸問題から民衆の視線を逸らす為には彼 ジャミトフ・ハイマン准将の様な強硬な主張を掲げた旗手が必要とした。

万来の拍手の中で出迎えられた、軍部出身の彼の政治参画はそのまま彼の率いるティターンズの更なる勢力拡大へと繋がる。彼に群がる思想無き議員の集まる政党はそのまま彼が肩書きとして持つ地球連邦財務高官の権力を彼の言のままに拡大し、その予算配分の殆どの過程を彼の配下である財務局へ移管する法案を可決した。

議会の力によって合法的に政治への発言力と実権を手にした彼等ティターンズ。過酷な戦役によって多くの仲間をジオンの手によって奪われ、復讐に燃える彼らが最初に着手した事は自分達が画策した陰謀の証拠を抹消する事、つまり彼等が状況を利用して自らの力を拡大した要因となった『デラーズ紛争』内での陰謀の証拠を抹消する事であった。

アイランド・イーズ落着を食い止める為に『阻止限界点』宙域に

参加した艦隊の指揮官は第1地球軌道艦隊司令代理バスク・オム大佐を始め、既に彼等の息の掛かった者達だけで構成されていた。問題は其処に自らの加害者責任を携えて参戦を果たしたコーウェン將軍旗下の第3地球軌道艦隊所属、ペガサス級最新鋭揚陸艦『アルビオン』の存在のみ。

証拠の漏洩、風説の流布の可能性という事態を重く見た彼等は異例とも言える軍事裁判を開廷するに至った。被告として出廷を強制された二名の名前は『アルビオン』艦長、エイパー・シナプス大佐とオーストラリア方面軍トリントン基地所属のテストパイロットであるコウ・ウラキ戦時中尉。課せられた罪状は『コンペイ島宙域に於ける機動艦隊の多大なる損害と其れを勃発させたガンダム二号機の奪取による軍事機密の漏洩及び三号機の独断による使用損傷』

軍事行動に於けるそれらの損害は本来、一個人に負わせる性質のものではない。観艦式の最中に巻き起こった其れの責任を取るのには本来ならば其の宙域を管理していた『コンペイ島駐留艦隊』の責任者が取るべきであり、またガンダム二号機の奪取に関しても唯の一テストパイロットが負う物では無い。それどころかコウ・ウラキ戦時中尉はデラーズが画策した『コロニー落とし』を阻止しようと、最期まで其の宙域に留まった憂国の士である。

彼等をそう弁護した連邦軍に所属する弁護士は其の次の日に謎の失踪を遂げた。

開廷から二日と言う異例尽くしの軍事法廷は彼等に自己弁護の機会も与えられずに判決の時を迎えた。陪審員代わりの軍関係者によって彼らに下された結論はエイパー・シナプス大佐への極刑とコウ・ウラキ戦時中尉の禁固一年と言う、やはりこれも異常なまでに重い刑罰であった。

彼らの処分と残存する『アルビオン』乗組員達に向けられた狡猾極まりない取引によって、彼らからの宣誓書を手に入れたティターンズ。彼らが持てる権力の粹を凝らして立案した隠蔽工作は何の滞りも憂慮も無く完遂されるかと思われた。

だが此処で事態は急展開を迎える。

『コンペイ島宙域』での観艦式を襲ったガンダム二号機。連邦軍より奪取された其の機体から発射された兵器が『核弾頭』であった事がコウ・ウラキ少尉の身辺及び罪状を大きく変化させた。

ガンダム二号機が使用した核兵器はMk-82と呼ばれる戦術核。其れは本来『ルウム戦役』後にジオンとの間で締結された『南極条約』によって使用を禁止された兵器の一つであった。それが連邦軍の最重要機密であった試作兵器によって発射されたと言う事実は

既に其れはデラーズの演説によって明るみにはされていたが軍の主力として全権を掌握しつつあるティターンズの内部でもやぶさかでない論議を巻き起こした。

連邦艦隊総司令を含む艦隊の喪失という事実を覆す事は出来ない。しかしそれが自分達が開発していた兵器によって引き起こされた事実は永遠に封印すべき物なのではないか？ 万が一コンペイ島宙域で起こった事件が明るみに出よう物なら、条約違反を犯してまで開発を続けている連邦政府に離反するコロニーの勢力、即ち『第二のジオン公国』が現れるのではないか。

それは現在でも戦後復興に追われる連邦政府内に於いても同意見であった。

最初の人類が新たな可能性を求めて宇宙へと飛び出して約一世紀。太陽の引力圏内にラグランジュの法則に基づいて配置された、連邦を構成するコロニーは既にそれぞれが独立した共和国としての政治形態を確立している。彼等の協力や同盟無くしての勢力を維持し続ける事は困難である。

ましてや先のデラーズ紛争によるアイランド・イーズの到着は、地上に残った人類の食物需給の四割を占めるカリフォルニアの大穀倉地帯を残らず焦土に変えていた。搾取同然の貿易を軍勢力と恫喝によって尚継続の意志を持つ地球政府は自分達を支持し続ける民衆の離反と訪れる飢餓の可能性について言及し、それはティターンズの内部にも先に行われた自分達の陰謀の隠蔽に対する手段の変更を

強いられる事となった。

ティターンズが已む無く導き出した判断は、次世代型ガンダム試作機の永久凍結及び開発計画の抹消。GPシリーズと呼ばれた四機のガンダムは作られた事すらも記録に残す事を許されず一切の記録を消去された。それは唯一機残存するガンダム三号機のテレメーター、システムメモリーから月面都市フォン・ブラウンに開発拠点を置くアナハイム・エレクトロニクスのスーパーコンピュータの閲覧記録の末端に至るまで、完璧に実行に移された。

その事によって架空の機体と化したGPシリーズ。存在しない機体に関わる、掛かる罪は同じ様に存在しない。罪状までもが消失し、禁固を解かれたコウ・ウラキ中尉は『戦闘下に於ける友軍に対する発砲』と言う軽微な罪での戦時階級の剥奪という、当人にとっては無罪同然の処分の後に、軍名簿への再登録を果たした。

一連の紛争に置けるコウ・ウラキ少尉の活躍は既にティターンズ内部でも話題になっていた。『悪魔<sup>エクソシスト</sup>抜い』と言う、本人が与り知らぬ場所で囁かれる二つ名を冠した彼の存在の影響力は『一年戦争』を潜り抜けた手強いジオンの残党を狩り続けるティターンズの前線部隊に希望の光を齎した。

各所で小競り合いを続けるティターンズの損耗率は二十パーセントを超え、伸び切った補給線を維持する事もままならない彼ら前線の兵士にとってコウ・ウラキ少尉の様な存在は嘗て『白い悪魔』を駆って大戦を勝利へと導いたアムロ・レイ曹長に匹敵する戦力として歓迎された。

果てし無く続く神出鬼没の敵と戦う彼らの士気は、当の昔に疲弊の域に達していたのだ。

復帰する原隊を失ったエースの動向。其の一挙手一投足が注目される中で彼が配属されたのは緞帳を掲げて登壇を待つ最前線の宙域からは遠く離れた連邦軍北米方面軍カリフォルニアベースに所属する、コロニー到着の余波に巻き込まれたオークリー陸軍基地。其の人事の一報を手にした、事情を感知し得ない将兵の多くが絶望と



嘆息と疑問の声を上げた。彼らに『軍』と言う足枷が存在しなかったとしたら其の人事によつて引き起こされた不平不満は何らかの實力行使を伴つてテイターズ内部を混乱の境地に陥れていたに違いない。

それ程の危険を冒してまでもコウ・ウラキ少尉を地球の片隅へと封印したのはテイターズ首脳陣のあざとい姦計による物だった。

軍事法廷に於いて一切の発言を拒否し続けたコウ・ウラキ少尉。其の動機が軍内部に対する猜疑による物である事は、彼が紛争の最後に放つた友軍艦船に対するライフルの連撃が証明している。加えて彼は、証明こそすら出来ないが其の力の全てを用いて謀反を図つたシーマ・ガラハウの艦隊を単機で壊滅せしめている。軍に対して忠誠を誓わぬエースの存在などデラーズを裏切つた彼女と同様、獅子身中の虫以外の何者でも無い。

首脳陣の大方の予想通り、彼は他の乗組員が署名した宣誓書へのサインを拒否した。本来であれば『命令不服従』を新たな罪状として  
本人としてはそう願つたのかも知れない 懲罰を科する事も可能であった。だが既に動向を注視されている彼の存在に対して何らかの処分を下すには余りにも遅きに失した。

悲鳴を上げる前線からの、彼の配属を求める嘆願書は秘匿回線にまで伝播し、コウ・ウラキ少尉の軍への復帰は既定の事実として認識されつつあつたのだ。

これ以上の軍内部での混乱と、軍に対する批判を携える彼の存在の影響力をこのまま看過する訳には行かない。

偶然にも記録し続けていたシーマ・ガラハウとの交信記録が首脳陣の前に並べられた。中枢に身を置いた背徳者のやり口。彼らは彼女の身の振り方を反面教師として彼らはコウ・ウラキ少尉の人事に役立てる決心をする。

其れは強い影響力を持つ裏切り者を中枢より遙か遠くに封印すると言つ手段であつた。

選ばれたのは連邦軍の中でも其の力の行き場を失つた陸軍。戦域

が宇宙へと拡大した為に其の活躍の手段を専ら治安維持と復興へと  
転換せざるを得なかつた少数派<sup>マインリテイ</sup>。彼と、彼と志を同じくする少数の  
人員の人事はそうして生れた。

赴任する再建中のオークリー基地に残つた戦力は最早戦力と呼ぶ  
に値しない、時代遅れの兵器ばかり。ジオンから接收したモビルス  
ーツと其れを管理する整備員。少数派に陥つて戦意を失つた陸軍の  
地上部隊と防御用の僅かな火器。それがティターンズに忠誠を誓う  
事を躊躇つた者達の末路。

其処は『忘れられた博物館』<sup>ロスト スミニア</sup>と人々に揶揄される、極遠の地。

荒漠たる、広大な大地に浮かんだその基地から眺める景色を遮る  
物は唯一つ。其れは其の地を焼き尽くした紛争の傷跡即ちアイラン  
ド・イーズの残骸のみ。

西の大地に突き立つた其の姿は落ちる西日を遮つて基地の敷地に  
巨大な影を落とす。その度に新たに其の基地へと赴任させられた彼  
らはそのオベリスクを見詰めながら自分の犯した罪を自分自身に問  
い掛ける。

彼らの心に渦巻く叛意を更なる後悔と自戒によつて二度と立ち上  
がれない程に埋め尽くす。それはティターンズがコウ・ウラキ少尉  
を含む帯同勢力に加えた、無慈悲な暴力であつた。

地球の輪郭をなぞつて其の美しい姿を宇宙空間へと浮かび上から  
せる太陽。億では利かないカラットを誇るダイヤの輝きが周回軌道  
を埋め尽くしたままの巨大なデブリ群を動かす。其の宙域を取り囲  
んで暗い蝕と化した場所を警戒する自律制御型攻撃監視衛星。

戦災復興と食糧の増産を支援する補助金によつて余剰の予算が無  
くなつたティターンズは、其の宙域を隔離する為に苦肉の策を弄し  
た。航空図に記載される大気圏離脱用のルートから其の場所を除外  
し、新たな閉鎖宙域として策定した。

政府機関より配布される航空図の信憑性を疑う民間会社は存在し  
ない。信用を逆手に取つた其の戦略はティターンズが手中にした力

の強大さを物語る。

万が一何らかの意図を携えて其処へと接近する艦船に対しては監視衛星が有無を言わさぬ攻撃を開始する。ミノフスキー粒子によるレーダー障害を回避する為に設けられたドップラーレーダーと併用される三点投射方式に寄る距離測定システムは侵入者の正確な位置を衛星の頭脳に伝える。照準を司る双眼異色たる彼の目は目標を固定して攻撃の意思を伝える。左右のウエポンベイにぶら下げられたランチャーから放たれたタングステンコンポジットのフレシエッタアローは侵入者の体を音も無く貫いてその場から強制的に排除する。封鎖空間を守護する十二機の首飾りは、廃墟と化したコンペイ島宙域の周辺に展開していた監視衛星の生き残りを残らず掻き集めて再編成された、惨めな役割を押し付けられた成れの果ての姿であった。真空の風を揺らめかせる太陽の光。光の粒子が物質に叩きつけられて力を発生させる現象。太陽風が其処に満ち溢れるデブリを震えさせる。千回を繰り返した其の現象は彼等の亡骸を徐々に周回軌道上からの離脱へと道を差し向ける。

最下層に位置する者から地球の引力に囚われ、離れていく姿。母から差し伸べられる癒し手は無念の魂を抱きしめて、彼等が必要とした大気の中へと亡骸ごと誘う。其れが光と炎を放ちながら跡形も無く燃え尽きて、残る一筋の光は彼等の魂の昇華の如く宙へと刻みつける。

全てのデブリが其の過程を潜り抜けるのもそう遠い日ではあるまい。隠蔽と陰謀と言う名の葬送行進曲は彼等の葬列を彩る様に時の流れの中を奏で続けている。

質量の軽い兵士の亡骸は、傍に漂うモビルスーツの残骸へと千切れた体を押し当てる。

パイロットスーツに包まれた彼の破片は奇跡的にその形状を維持し続けていた。光に浮かび上がる高貴な紫は其の者が生前、他の兵士とは一線を画する能力を持った戦士である事を暗に示していた。細かく罅割れたシールドは白く曇って持ち主の顔を覆い隠す。額に

輝く金の楔と赤い色は彼の苛烈な生き様の果ての死を象徴しているかのようであった。命を当に失った彼の頭が、光の風に吹かれてこつんと背後の残骸を叩く。

其れが彼の墓標であるかの様に空間に存在を誇示し続ける巨大な残骸。彼の棺桶に成り得なかつた白い卒塔婆はやはりその場に無残を晒すモビルスーツの屍とはその存在感を大きく異にしていた。

太陽の光に照らされて浮き上がる機体の色は明灰色。空間迷彩を纏わないその機体は全天不敗の意思の表れ。目にした者に畏れを与える全容は朽ち掛けながらも其の威光の残滓を残したまま、『新たな目標』と冠された其の名を知る者の脳裏に焼き付ける。

それはこの機体が一般兵士の為に量産されたモビルスーツ等ではなく、選ばれた戦士のみが駆る事を許された『モビルアーマー』で在った事を示していた。

微かに動いた其の亡骸に向けて首飾りから距離測定用のレーザーが照射されて。だが其れが『デブリ』と認識された瞬間に彼等の目は興味を失ってその場を後にする。幾度と無く繰り返された其の闘ぎ合いの後に、不意に彼の手が空間に揺らめいた。

差し出される彼の右手が宙をなぞって地球を求めて。在りし日の夢を見る屍は自らが託した『新たな目標』<sup>ノイエ ツィール</sup>に縋る様に、命の通わぬ其の手を震わせ続けた。

「ジャブローでは無い。」

ガトーの口から絞り出された其の一言は二ナの心に動揺と衝撃を与えた。

阻止限界点を越えたアイランド・イーズの中央制御管制室に木霊する彼の叫びと意図を理解しようとする沈黙が交互に流れて。其の沈黙を破る様に、再びガトーの呟きが流れた。

「それでは意味が無いのだ。我々が犠牲になる。」

「犠牲に……なる？」

「そうだ。」

視線を逸らしたガトーの目は既にモニターに釘付けになっている。優れたシステムエンジニアである二ナには彼が何のプログラムを入力しようとしているか位は即座に判断する事が出来る。次々に立ち上がるウィンドウに記される数値とグラフ、そしてコンパイラによって変換された数字の羅列。

「言語で打ち込まれる其の命令文は全てが推進剤の再起爆と軌道変更に関する項目。」

「君と別れたあの日から、私の命は失われていたのだ。……此処を生き長らえたとしても、何れは。」

「どういふ事、なぜ、貴方が」

「どういふ事？」

嘲笑交じりの言葉がガトーの口と表情に滲む。コマンドプロンプトの黒い画面の端に浮かび上がった（Y/N）の白い文字を睨みつけたまま、言葉を続けた。

「君も目にした筈だ。今日起こった出来事の全てが、この世界の真実だ。この戦いは矮小で醜悪な一握りの人間の手によって操られている。我々の信念や理想を隠れ蓑にして自分達の利益や欲望を拡大しようとする、見えない力によって。大勢の同胞や連邦軍の将兵が流した血の上で胡坐を搔いて戦争の拡大を画策する勢力の存在。私は……いや、我々は。デラーズ閣下は。」

言葉を切ったガトーの指がYのキーを力強く叩いた。静かな唸りが続けていた大気循環ユニットの機械音に混じって、どこか遠くの方で巨大な機関が駆動を始める振動が足に伝わる。

「このコロニーが地球上の何処に落ちるかは問題ではない。落ちるか、落ちないか。我々の為すべき目的　『星の屑』にはそう

いう意味があったのだ。そして其れは成った。私はこれを『決してジャブローに落とさぬ様に』する為に此処に来た。そうする事で宇宙にも地にも等しく住まう全ての人類を戦いの泥沼に誘おうとする『操りし者共』を地の奥深くへと眠らせない為に。」

「待って、ガトー……待ってっ！」

混乱する思考に頭を抱える二ナ。

奪取されたガンダム二号機と彼を追って此処まで来た。奪還の任を負ったアルビオンに身を置かざるを得なかった状況は彼女に一方的な価値観と判断しか与えなかった。其の全てを否定して、嘗て自分が愛した男は自らの目的と命の行く末を二ナに暗示し続ける。

そうまでして達成しようとする『星の屑』の真の目的とは、一体何？

「貴方達は一体何を待っているの？ 自分達の命を投げ捨ててまで、何をしようとしたの。『操りし者共』って、何！？」

激昂は紅い彩を伴って澱んだ空気の中を舞う。血を吐く様に叫ぶ二ナの姿を見詰めるガトーの瞳から伶俐な輝きが解けて落ちる。

口を閉ざす沈黙と裏腹に彼女に与えられた視線には理想と信念に生を傾ける軍人としての光は無く、変わって其処に溢れた物は答えを求めて泣き叫ぶ愛し児を見守る様に穏やかで優しい、あの時の瞳。

「答えて、ガトー！ 何故、貴方は突然私の前から姿を消したの？」

心を捲り上げて、傷を深く抉り抜いて。それでも二ナの言葉は溢れ出す。三年の月日と失われた思い出を取り戻そうとする二ナの問い掛けは、ガトーの心の秘めた感情を浮き彫りにする。

隠し切れない決意とほんの僅かな後悔。其の複雑な表情を隠す事無く、ガトーは言った。

「全てを忘れて欲しかったのだ、二ナ。 …… 運命の定められた私の存在と、月に身を委ねて時が満ちるのをひたすらに待ち続けたあの日の記憶の全てを、運命の定められていない君に。」

二ナに与えられる真実の告白。訥々と語られる言葉の一つ一つが二ナの記憶の中にあるアルバムの写真をセピアに染めて。それでも二ナの手はその一枚をもがく心で掻き抱いて。

「そんな ……」

それ以上続ける言葉を見つけ出す事の出来ない二ナの顔を穏やかに眺めて、ガトーの口はあの日の声で言葉を続けた。

「私を忘れて新たな未来を過ごして欲しかった。新たな人と出会い、新たな恋をして、子を産み、育て。私は君にそんな未来を歩んで欲しかった。だから死すべき運命を課せられた私の事は忘れて」

「忘れようとした、いいえ、忘れてたわ！」

「忘れてた……？」

其れは互いに思いも掛けず産声を上げた、二ナの現在から繋がって行くとする未来を暗示する言葉。驚きと安堵の入り混じるガト一の顔が二ナの口からそれ以上の台詞の続きを奪い去る。うるたえながらも白紙の台本を無理矢理読み続けようとする二ナに向ってガト一は静かに呟いた。

「そうか、君は既に得難い者を得たのだな。ならば、其の者の為にも尚更、私は」

ガト一の視線が二ナの元を離れる。其の手がコントロールパネルの一角に備えられた小さなシャッターへと伸びる。翳された掌の下で小さな摩擦音と共に開くシャッターの下に隠された『CAUTION』の文字と朱色のレバー。非常時に際してのみ使用を許された緊急離脱用の推進剤点火装置。

再度の許諾確認を求める様に点滅する赤い光を潜って、ガト一の手が其れを力強く握り締める。

其の光景を為す術も無く見届ける二ナ。失われて行く力とは正反對に、心の声は常に二ナに問い続ける。

しっかりして。貴方は何の為に此処まで来たの、二ナ・パープルトーン！

叱咤する其の声が彼女の体を動かした。絶望に曇った視界が景色の輪郭を鮮明に取り戻してガト一の体の動きを追う。

其の目の端に飛び込んできた、廃墟と化したコロニーにはある筈の無い、そして似つかわしくない物の存在。

其れは非常光の明かりに照らし出されてコントロールパネルの片隅に放置されていた。黒い輪郭はそれ自体が不吉な力と威圧感を彼

女に目に焼き付ける。絶る様に其れを手取る二ナ。

握る掌に齎す物は人の命の重み。構える腕が二ナに覚悟を問い掛ける。指を僅かに動かすだけで将星の先に浮かんだ人の命をいとも容易く砕け散らせる事の出来る、古の昔いにしへから何等変わらぬ機構と役目を携えた『拳銃』と言う小さな武器がガトーの命を指呼の間に捉えている。

独りでに荒ぐ息遣いは其れを拒もうとする証拠。逸らす視線は自分が犯す罪を直視出来ない弱さの表れ。将星の先に揺らめくガトーの姿を必死に固定しようとして、二ナはあの男の姿を思い浮かべる。彼もまた多くの人の命を戦いの中で奪った。戦う毎に、殺す毎に殺した者の人生に連なる多くの希望と未来を奪い、自分の未来と運命を呪いながら、それでもまだ彼は砕けた心を引き摺って背徳に塗れた宇宙そふを駆け巡る。

コウ。貴方はこんな思いを飲み込んで戦って来たと言うの？ こんな気持ちを抱えて、それでも貴方はまだ。

ガトーは彼女の手の中に握られた其れが、彼女に相応しい物であるかどうかを知っている。

其の罪を犯した者は等しく輪廻の輪の中に繋がれる。終わる事のない舞踏会のホールへと足を踏み出して、己が最期の瞬間が訪れる其の時まで贖罪と言う名の舞踏を舞い続ける。

其れを本能で知る人の魂はその場へと進み出て、共に手を携えて踊る相手を見つける事を拒んで『壁の花』へと成り下がる。目の前で繰り広げられる甘美な、其れでいて血生臭い『闘争』と言う名のナンバーを踊り続ける愚か者の姿を見届ける為だけの傍観者になるのだ。

其処に立つ資格のある者は、罪と未来を担う覚悟をした者のみ。彼女に其の資格があるとは思えなかった。少なくとも自分の知り得る『二ナ・パープルトン』という少女ならば。

しかし。



「君は変わったな、二ナ。」

揺らめく銃口を間に挟んで対峙する二人。永遠に訪れないであろう其の瞬間を待ち侘びる様にガトーが言った。

「私を知る君ならば、こんな所へ来る筈が無い。ましてや戦場を潜り抜けて敵と会うなど考えもしない。無邪気で明るい表情の裏側で父親の影に怯えてフォン・ブラウンへと逃げて来た、あの頃の君では。何故、此処に来た？」

「貴方を止める為よ、ガトー。私には其の責任が有る。三機のガンダムの基礎理論を開発し、其れによって多くの人を犠牲にしてしまった責任を取る為に、私は此処に居る。もうこのコロニー

は止められない。貴方達の思惑通りになってしまったのかも知れないけれど、其れでも私はこれ以上の犠牲を出す事を望まない。このコロニーを被害の少ない山岳地帯に到着する様操作する為に、私は来た。」

「其れは、嘘だ。」

「えっ？」

有りつ丈の覚悟を即座に否定されて、二ナは驚きの声を上げた。自分自身の嘘偽りの無い其の動機を真つ向から否定するガトーの目に映る二ナの表情。うるたえる其の顔を貫く様にガトーの声が二ナの耳に届く。

「それだけの理由で此処に来る筈が無い。其れをするのは本来軍人の役目だ、民間人の一開発者たる責任者がやる事じゃない。君が此処に来た理由は他にある。」

「嘘じゃないっ！ 私は貴方を止める為に此処まで来た。本当よ！」

「……まだ分からないのか、二ナ？ 自分の本当の気持ちに。

……『誰』の代わりに君は此処に来た？」

思わずコウの名を口走りそうになり、喉を詰まらせる二ナ。其の姿を優しく見詰めるガトーの声が彼女を、彼女自身にも見つけられない答へと導く様に言葉を続けた。

「『彼』が背負う心の罪を少しでも軽くしようと。それでも償い切れない彼の未来を支える『杖』となる為に、此処に来たのではないのか？」

自分でも気付かなかった本当の動機。ガトーの声によって引き剥がされる、建前によつて武装された二ナの気持ちが一糸纏わぬ姿に曝け出されて。其の言葉を否定する事も肯定する事も叶わず、視線を落とす二ナの顔を眺めながらガトーは呟いた。

満足そうな笑顔は後悔を残さぬ証。視界の端に其れを捉えた二ナの顔がゆつくりと上がる。

「君を其処まで変えた男がどういう素性の者かは分からんが……其の男もきつと強い男なのだろうな。今の君よりも、ずっと。」

呟きながら目の前に設えられた姿勢制御のパネルを見上げるガトー。其の目は其処に描かれたコロニーの線描画を見ているようであり、決して其処に描かれる事の無い遠い過去に吹き晒された景色を瞼の裏に焼き付けて。

「私の影に父親の姿を重ね合わせていた三年前の君とは違う。頼つて、委ねて、縋り付いていたあの頃の君とは。……私には君を

其処に導く資格が無かった。ジオン再興にこの身を捧げると誓った、この私には。」

取り戻す現実と自分自身を晒う様に表れるガトーの笑顔。

「だが、私にはやらねばならない事が、成し遂げなければならぬ事がある。君と其の男には悪いが、これだけは死んでも譲れんのだ。

分かってくれ、二ナ。」

「ガトー、止めてっ！ もう十分だわ。落とす事が目的ならば、せめて」

「事を成してこそ、私達の志を継ぐ者が生まれる。デラーズ閣下の亡き今、私が私で在り続ける。其の彼らを導く『ガトー少佐』である為には、これだけは何としてでもやり遂げなければならぬのだ。」

ガトーの手に力が籠る。何かを思い出す様に一点を見詰めるガト

「の瞳。」

「そうだな。例えば、あのガンダムのパイロット。彼等は私亡き後の遺志を継ぐに足る男だ。      皮肉にも其の身の置き所を違えてしまったが。」

其の言葉が二ナの正気を奪い去ろうと。心の中で燃え上がる何か  
が彼女の脳を思考まで焼き尽くして。有り余る熱量は彼女の体に命  
の重みに耐えかねた震えとは別の痙攣を二ナに与えた。

絶望では無い何か二ナの視界を曇らせる。其れが絶望ならばま  
だ良かったのに、と世界から身を閉ざす二ナの心は後悔の叫びを上  
げた。

今、何と言ったの、ガトー。貴方は誰の事を其の口にした!?

「……腐った連邦になぞ属さねば、あれ程苦しむ事もなかつた  
ろう。だが何度も刃を交え、彼とは何度も会話した。百の言葉で互  
いを憎み、千の言葉で心を分かり合う。凡そ知る事の無かつた其の  
気持を彼は私に教えてくれたのだ。今の彼こそが、私の踊る舞台に  
立つ唯一の資格を持つ男。」

止めて、ガトー。其れは私が、今の私が。

「彼の様な男がこの先にもきつと現れる筈だ。連邦、ジオ  
ンを問わず私達が命を賭けて成し遂げるこの『星の屑』の未来に起  
こる動乱を目の当たりにして、志を同じくする者達が。……彼  
を通じて其の希望を見出せただけでも、今の私に後悔は無い。」

やめて、ガトー！ コウを、コウをっ！

声にならない慟哭が二ナの全てを貫き通して。焦点の合わなくな  
った瞳の蒼が濁りを増して彼女を襲う。喪失が言葉と言う形を成し  
て、二ナの全てを奪い取ろうと。鬨ぎ合う心の闇が二ナの感覚を狂  
わせて行く。

凍り付いた二ナの全て。彼女が動きを止めた思いが何であるか等  
知る由も無く、二ナの元から心を離れたガトーの目に輝きと強い意  
志の光が戻って来る。其の視線の先に固定されたレバーを握る手が

微かに動き始めて。

「……………最後に此処で君に出会えて、良かった。だが此れでお別れだ、二ナ。」

連れて行かないでっ！

動き始めるレバー。だが二ナの眼と心は既に其処を離れて、この宇宙の何処かで血の階段カスケードを駆け上がる彼の姿に思いを馳せる。遙か遠くの大気に霞むコロニーの壁の向こう側で、壊れる心の欠片を拾い集めながら戦い続ける彼の姿を。

「君は君の空を臨め。……………思えば君こそが、『星の屑』の真の目撃者に相応しい者だったのかも知れん。」

ガトーの眼光が強く。其の輝きに眼を奪われる二ナ。『星の屑』の集大成を、散って逝った男達の意味を其の握り締めた右手に込めて。

止められなかった、と。

何一つ変えられなかった自分の無力さ、噛み締める愚かさ、我を失ってガトーの姿を見詰めるだけの存在。今の彼女に与えられた役割は、彼の言う様な強さも覚悟も欠片も持ち合わせない、傍観者に与えられた『壁の花』。

その諦観交じりの景色を映し続ける視界の中に、不意に飛び込む影を二ナは見止めた。

ガトーは其れに気が付かない。彼の視界の外から現れた白い影は其の手に握り締めた、二ナの手の中にある物と同じ物を振り翳してガトーの姿へと突き付ける。

其れは二ナの心を今の今まで狂わせていた男の姿。

決して此処に、ガトーの前に姿を現してはいけない、彼女が愛する男の姿。

二ナの心が彼の名を絶叫した。

“コウ！”





## 狂戦士の宇宙

花卉をもぎ取られた蘭の花が混沌の宇宙を疾駆する。

蹴立てる足から噴出すスラストバーバーストの炎は敵味方の境目を無くした阿鼻叫喚を切り裂いて、其の巨体を能力の限界地近くまで押し上げた。Gスーツを持ってしても償却し切れない慣性重量はコウの体を見動き出来ない力でリニアシートに押し付け、脳の血液の循環を滞らせる。

虚血状態に陥りグレイアウトを起こすコウの意識はそれでも目の前に立ち並ぶウインドウの数値を読み取って、『奴』に関する手掛かりを妄執に駆られた瞳で捜し求めていた。

其れは越えてはならない一線を超えた。巨大な『アイランドスリー鳥三号』は彼の接近を拒もうとする様々な障害を押しつけて。襟首を掴もうとするコウの腕も、『アルキメデスの鏡』と呼ばれた太陽炉の壁も彼のアイランド・イーズを此処まで導いたデラーズの遺志を阻む事は叶わなかった。

全ての希望を失ったコウの目の前を誇らしげに通り過ぎる彼らの野望。

コロニーの落着を食い止める為に血を吐く思いで手に入れた手段と奪い続けた命。其の全てを摘み取って嘲りの声を上げる、彼の仲間。

そして更なる嘲りの叫びを周回軌道上に残して、彼の仲間の手によって作られた偽りの神の御標を砕き割る『星の屑』の魂。

呼応する絶望と怒りがコウの口から飛び出した。神をも呪う其の雄叫びは此の世の果てに現れる悪魔の咆哮。

「ウラキ中尉、状況を！ ウラキ中尉っ！」  
音声によってでしか状況を知る事の出来ないモーリスの叫びがコウのヘルメットの中で響く。自分の身を案じて掛けられる戦場の繋

がりを凌駕して彼を操る魔界の使者は人の優しさなど歯牙にも掛けず、コウの体に憑依した。彼の体を強制的に動かし続ける薬物が体内で精製される劇薬アドレナリンに力を貸して。その時彼の能力は記録され続けたパーソナルデータを何かの誤解かと思わせるほどの値をデータデイスクに刻み付ける。

顕現する『悪魔払い』が纏った『悪魔』の力。残像を残してコントロールパネルを跳ね回るコウの指が次々に火気管制コントロールのウインドウを呼び出して目の前のスクリーンの一角に立ち上げる。モニターの認識を遥かに超えて、1/120フレームで立ち上がるウインドウが周囲の景色を歪ませる。それでもコウは其れを上回る速さで、其処にある全ての火気管制コマンドへと次々に(Enter)を入力した。

被弾して傷だらけのコンテナハッチが開放される。

吐き出されるユニットは其れ一つ一つが死の固まり。『ヘッジホッグ』と称される三台のユニットがデンドロビウムの加速に後押しされて、コウの敵が立ち塞がる前方の空間へと放たれる。空間掃討の任を受けた合計三百発余りのマイクロミサイルは彼らの中心で全身に仕込まれた棘を一斉に放出した。

蔓延する断末摩の絶叫と炸裂する機体、湧き上がる閃光。振り下ろされる悪魔の鉄槌は人のもがきを肉塊に変えて挽き潰す。爆発の余波が残る、掃き清められた空間を次の犠牲者を求めて突き進む新たな『白い悪魔』。

今の彼にとつて、いやコウにとつてはCIP(Combat Identification Panel: 敵味方識別パネル)の見えない全ての者が、討ち果たすべき敵。悲劇を纏った雲の隙間から遙か眼下に望む、友軍を回収しようとする自らの身の危険を顧みずガイドビーコンの光を空間に放出したままの巡洋艦の姿でさえ。

ステイメンの右手がトリガーグリップを握り締める。サラミス級巡洋艦の主砲に匹敵するジェネレーターのエネルギーがチャンバー内に送り込まれてミノフスキー粒子の縮退が始まる。



不安定状態に陥った原子の質量の欠損は其れを埋め合わそうとする物理界の法則によつてエネルギーを発生させる。其れを掻き集めて圧縮するチャンバー内の圧力はオーキスの体側に抱えられた全長90メートルの長大な砲身を震えさせた。

「沈めえつ！」

コウの叫びと共に引かれる右手が撃発位置へ。砲身内に刻まれたライフリングに従つて螺旋を纏うメガ・ビームは貫通力を伴つた一筋の光となつて、恋人と再会したいと熱い思いを歌い続ける歌い手<sup>ディートリッヒ</sup>の頭上へと降り注いだ。

其の一閃はザンジバル級機動巡洋艦「リリー・マルレーン」を一撃で沈黙させた。艦上部から打ち込まれて真下に貫通するメガ粒子。其れは間違ひ無く深奥部に位置する熱核エンジンを直撃した筈だ。

「言わんこつちや無いっ！」

其の光景の後に起こる悲劇と喪失を予感するシーマの叫び声が、彼女の安否に向けられた最後の通信の途絶音と共にコクピットに響き渡る。喉を貫かれた歌い手は全身を死の痙攣に憑り付かれて、彼女の目の前で彼女の同士と共に爆散した。

其処に広がる一瞬の空白に絶句するシーマ。其の眼前を白い閃光が駆け抜ける。

自らが手にした戦果を確認する事無く通り過ぎる、彼女の大事な者を根こそぎ奪い去つた悪魔の影。

「お前があつ！」

シーマの足がペダルを踏み込む。空間内高機動を実現する為に両肩に備え付けられた巨大なフレキシブルバーニアが火を吹いた。引き離された敵に追い絶る為にプロペラントを脱ぎ捨てて、<sup>ガーベラ・</sup>「神秘」<sup>テトラ</sup>の赤は彼女の怒りと共に空間をひた走る。

機体後部のパッシブセンサーが敵機の襲来を警告する。コウの左手が即座に閃いて、新たな火気管制システムに要求した。ロック

オンを防ぐ為のミノフスキーマスカークが粒子の泡となってシーマの照準を狂わせる。其の間隙を縫って放たれるフラッシュフレア。モニターが焼付けを起こすほどの凄まじい火花がシーマの行く手を遮って、彼女が求める敵の姿を眩ませる。

「ちいつ！ 目眩まし等この機体にはっ！」

焼付けを防ぐ為に一時的に直接視認モードに切り替わったモニターの果てに小さく写る白い影。フラッシュフレアの輝きは皮肉にも其れを放ったデンドロビウムの機体をも照らし出して、其の後に続く迎撃ミサイルの存在をもシーマの目に飛び込ませる。巧みに手足を駆使してガーベラ・テトラを制御下に置き、光の光源とミサイルの光跡の間に機体を滑り込ませるシーマ。白兵戦に特化した機体ならではの急激な推力偏向は彼女の脳を激しく揺さぶる。

焦点を失いかけるシーマの眼。だがその瞳の奥に輝く恨みの炎だけは消す事が出来ない。

練りに練り上げた、自分と自分に忠誠を誓う仲間達を再び日の当たる場所へと導く為の一世一代の大博打。背信を罪と言うなら其の博打に負けた事は大目に見てやってもいい。

だが全てを失うほど私は悪い事はしていないっ！

私にこれほどの罰が与えられるというのなら、私にコロニーの殲滅を命じたあの者達に与えられる罰は何処にある！

「お前の様な一兵卒如きに、あたしの戦略があっ！」

あたしは其れを認めないっ！

全力で押し込むスロツトルに反応したジェネレーターが悲鳴を上げる。振り絞る限界はシーマの視界を紅く染めて、その形相を嘲笑う様に遠ざかって行く仇の影。願いを踏み躪る程の圧倒的な出力差を目の当たりにするシーマ。

だが其の呆気に取りられるほどの火力と出力の差は彼女に彼我の戦力差を思い知らせ、陥った不利な状況は彼女に打開策を見出させようと冷や水を浴びせた。沸騰した液体が気化する様に怒りを昇華させるシーマの感情。取り戻す冷徹な判断。

策謀の士として慣らす彼女ならではの新たな策略がその時閃いた。状況を突破する糸口となるそのプランを自画自賛し、恨みの炎に塗れた表情が一変した。替わってシーマの表情を支配する、冷酷な微笑。

「なるほど、あれも連邦軍の開発した最重要機密と言う訳か。ならば、あれと私の機体の秘密が世間に公表されると、連邦にとっては何かと都合が悪い訳だ。」

其の機体を奪取する事は今後の取引に何かと有利に働く筈だ。単機で百戦錬磨のあたしの艦隊を葬り去った其の火力。其れを量産する事は純軍事的なパワーバランスの崩壊を意味する。『一年戦争』の勝者たる連邦軍がその様な機体をいまだ尚開発し続けていると言う意味、其れは彼らの中にいまだ仮想する敵が存在していると言う事を物語っている。

其の事実を知った他のコロニーは、どんな反応をするのかな？

「と、なれば。あたしのすべき事は  
阿弥陀くじの中りから上へと道筋を遡るシーマの戦略思考。其処に提示される無数の戦略手段の取捨選択を繰り返して、遂に今の自分の置かれている状況へと辿り着く。」

シーマの指がデラーズフリート側の無線周波数に数値を合わせた。指揮系統を失って混乱の坩堝と化している艦船に向って、シーマの声が放たれる。

「私はシーマ・ガラハウ。付近を航行中の艦船に要請する。母艦を損失した為補給と修理をお願いしたい。受諾できる艦船は速やかに着艦の許可を。繰り返す、着艦の許可を。」

悪魔の囁きに載せられた生贄の山羊達は、彼女の眼下で次々にガイドビーコンを暗闇に展開する。其の光と其処目掛けて殺到する白い点を同時に視界に収めて。

「…… さあ、これで選り取りみどりだ。好きなだけ鱈腹喰らうがいい。」

張り付く笑顔は狂気と狂喜の境目をシーマ顔に刻み込む。歪んだ

口が言葉を繋いで。

「あの馬鹿どもはお前の餌だ。餌を食う為には足を止めなきゃいけない。其の際にあたしが其の懐を取らせてもらう。如何に火力が大きいかが所詮はモビルアーマー、懐を取られちまえば為す術が無いだろ？」

ガーベラ・テトラの手に握られたロングレンジライフルのEパツクが切り離された。新たなEパツクが装填されて、左手がボルトを引いて初弾をチャンバー内へ送り込む。

「あいつらへのせめてもの香典代わりだ、其の機体はあたしが戴くよ。だけどねえ」

「咳くなりシーマの手が再びスロットルを眼一杯押し込んだ。急激な加速で眼が眩み、レッドアウトを起こす眼球。其の血走った視野の中にデンドロビウムが獲物を手当たり次第に捕食し続ける光景を睨みつけながら、叫んだ。」

「お前は、殺すっ！」

砲身冷却の間に合わなくなったメガ・ビーム砲に遂にその時が訪れた。チャンバー内の圧力の過負荷、暴発を防ぐ為に掛けられるセフティーロックがステイメンの右腕を固定する。

ステイメンによる攻撃の手段を閉ざされたコウの指が次なる手段を実行する為にオーキスのオペレーションを立ち上げる。モニターの下半分を二種類の異なる制御ウィンドウが一斉に開いた。其の一つ一つを瞬時に読み取って自分の求める攻撃手順を模索して。

脳細胞は其の膨大な情報を処理し切れずに、神経単位で焼ききれる。激しい眩暈と頭痛、湧き上がる嘔吐。混乱を始める思考を薬物が押さえ込んで攻撃衝動のみが彼の肉体を支配して。火器管制をオーキスへと移行したステイメンがメガ・ビーム砲のトリガーグリップを手放してオーキス内に収容された。

替わって開く巨大なアーム。機体下部に仕込まれていたオーキスの両腕が新たな花を咲かせる様に其のクローを展開した。花の内部

の雄蕊から伸び上がる光の柱が彼を対空砲火で出迎えようとする艦船の将兵全ての口に恐怖と絶望を呼び込む。

「何だ、あれはっ！」

其れは彼らが目にした事の無い巨大なビームサーベル。席卷する恐怖を打ち払う様に放たれる対空砲火。

だが其の巨大な光の柱を前面に押し出して突撃して来るデンドロビウムに対して其の迎撃手段は余りにも稚拙且つ無力であった。実弾ではないパルスビームはその力を全てビームサーベルを構成するイフィールドに弾き飛ばされて。狙われたムサイの艦橋に立ち竦む彼らがその事に気付いたのは、視界全てを覆い尽くす光の刃が撫で斬る瞬間であった。

艦橋を直撃したコウの刃は其処に居合わせた数十人の人間を窒息の苦痛も味合わせぬまま消し飛ばしていく。頭の鉢を飛ばされたムサイが無傷な両舷のエンジンを吹かしながらよろよると戦域を離脱しよう。意思決定を失ったその船体に向って、再びオーキスの刃が駆け抜けた。

減り込むエネルギーが弾薬庫を直撃する。艦体を分断された後に起こる致死性の痙攣を伴って巻き起こる誘爆を省みずに、コウの意識は次の獲物へと向けられる。

眼下を逃げる紅いムサイ。次はお前だ。

翻す機体を目掛けて放たれる主砲の一斉射撃。正確な照準は其の船が並々ならぬ兵である事をコウの意識に刻んだ。バレルロールで躲す機体を擦過する彼らの殺意。其れがコウの殺意をさらに刺激して。

ウエポンインフォメーションの盤上で唯一つ残った、明滅を繰り返すコンテナ。其れはガトーの操るあのモビルアーマーを仕留める為に最後まで残しておいた、取って置きの兵装。

黒い殺意に塗り潰されたコウの指が其れを呼び出す。オーキスとして放たれる最後の兵装は其の意志に答えてコンテナハッチを開放した。

ブースターの炎を撒き散らして発射された一番銚は唸りを上げて宇宙を奔る。鋭い先端がムサイの艦首に隠された大気圏突入用のシヤトルを貫通して、返しの刃を展開する。二度と抜けない其の銚を引き抜こうと、エンジンの咆哮を悲鳴代わりに上げて振り払おうとするムサイ。デンドロビウム四倍の出力が放たれて、彼を仕留めようとするコウの機体を大きく引き摺る。其の勢いに任せて銚に繋がる太い綱のロックを解除する。遠心力によって振り回されながら艦体の周囲を急激なGを纏って急旋回し、綱を巻きつけていく。

限界まで引き伸ばされた綱がコンテナ底部の固定索から切断される。解き放たれるデンドロビウム、逃亡を図る紅い鯨。だが其の切断こそが起爆プロセスの引鉄。

巻き付けられた綱が爆発を開始する。爆発の衝撃で艦体が歪み始める。深海での圧壊の如く潰れて行く艦体はさながら力任せに丸められる紙屑の様に其の姿を変えて元の形を失っていく。連鎖の爆発が導火線のように先端部に伝わった瞬間に、その百戦錬磨のムサイはこの空間に存在する事を禁じられる。仕留められた鯨は打ち上げられもせずに跡形も無く姿を消した。

「爆導索！」

一部始終を目にしたシーマの口から迸る、ムサイを苦も無く葬った兵装の名。其れはそもそも空間内に敷設された機雷を除去する為の物。そんな物で軽巡とは言え戦闘艦を轟沈するとは彼女の戦闘経験に照らし合わせても有り得ない光景だった。霧散するムサイの残骸の陰から飛び出す狂戦士の白い影。其の上方からのダイブを試みながらシーマは、計略に嵌めて追い詰めつつあるモビルアーマーのパイロットの戦闘センスに舌を巻いた。此れではまるで。

「やるねえ、お前。まるでガトーの様に上手に戦うじゃないか。其の機体といい、お前の様な奴といい、連邦はまだそんな物を隠し持っていたのかい。侮れない連中だよ全く。だが」

自分が組した者のあざとさを嘲って、シーマは全てのバーニアを

全開する。捕食の為に速度を落としたデンドロビウムは頭上へと急降下を仕掛けるガーベラ・テトラが急激なGで機体を震わせる。勝ち誇ったシーマの叫びがコクピット内に充滿した。

「動きを止めたか。この下手糞めっ！」

怒りに任せて握り締めるトリガー。吐き出される断続的なビームの雨。射程外からの弾幕は空間に充滿するミノフスキー粒子によって威力を削られて貫通力を失う。だがシーマの持つ執念はそれでも尚自分の資産を奪い去った目の前の敵に対する怒りに満ちて、彼女の怒りを孕んだビームは確実にデンドロビウムの機体上部に着弾の傷跡を穿ち始めた。

二発、三発、四発。着弾の衝撃でモニターの画像が乱れる。鳴り響く接近警報と共にインフォメーションに表示されるダメージレポート。着弾箇所と機能不全を起こした箇所を示す紅い点滅がコウのバイザーと網膜に反射する。自分に向って牙を剥いた新たな目標を血走った瞳で見上げるコウ。破壊されて飛び散る第一装甲板と緩衝材の飛沫の影から一直線に舞い降りてくる、紅い機体の陰影がコウの視野に映り込んだ。

「上！？」

危機を察したコウの意識とデンドロビウムはブレイクを開始する。指示に従って回避機動を行おうとする六基のスラスタが基部を動かして巨大な機体を旋回させようとする。

だが圧倒的な出力に物を言わせて敵の上部へ回り込もうとする意志は咳き込むブースターの機能停止によって阻まれた。事態の異常に気が付いたコウの眼に飛び込むダメージレポート。デンドロビウムの三面図が示された其処には主機二番、補機四番の一時的な停止が赤く塗り潰される形で表示されている。

自動消火中を示すダメージコントロールの点滅に思わず毒付くコウ。これでは機体が元の推進力を取り戻すまでには幾許かの時間が必要だ。だが、そんな悠長な事を。

「遅いよっ！ この位置からでは何も出来まい、この愚か者っ！」

眼球の毛細血管が破裂して赤く染まった視界の中に加速度的に広がるデンドロビウムの巨体。勝ち誇ったシーマの叫びが彼女自身が操る機体と腕を激しく震わせる。全弾を撃ち尽くしたEパックが自動的にリリースされてガーベラ・テトラのモノアイを掠めていく。次のパックをスロットに叩き込んでボルトを引く。澱み無く展開される其の一連の動作と、『トリガーハッピー』と言う新兵特有のパニック現象を展開するシーマの意図。

彼女の狙いは敵の注意を頭上に引き付けてからに有った。悶絶を繰り返す敵が苦し紛れに取る回避運動こそが自分の勝機。剥き出しになった其の腹に潜り込んでしまえば後は自分の思いのまま。生かすも 其れは絶対に有り得ないが 殺すも。まさか死角になった其の場所に自分の寝首を掻こうとする輩が存在する等とは夢にも思つまい。

敵の攻撃を偶然にも潜り抜けて、安堵の溜息を其の口から漏らした其の瞬間に、あたしは

「お前は確かにいいパイロットだ、認めてやるよ。もう数年経つたらあたしをくれてやってもいいと思う様な男かもねえ。」

晒いに歪んで乾いた唇を舐め上げる舌がモニターを埋め尽くすビームの光に照らされる。

「だが！ お前は殺しすぎたっ！ あたしの仲間を、あたしの夢を！」

荒れ果てた空間をバーニアの炎を伸ばして一直線に呐喊する紅い機体。頭上より押し寄せる死のプレッシャーを見上げるコウの血走った目と悪魔の力が機体制御系のプログラムを目にも止まらぬ速さで呼び出す。機体のコントロールを失わない為に予め禁止されている推進系と制動系のバランスプログラムを全てキャンセルして。

「どつちが敵でどつちが味方か。そんな事も自分で判断出来ない大馬鹿野郎はあたしの前にいる資格は無いっ！ デラーズやガトーと同じ、建前だけの偽善者が！」

眼前のモニターにはつきりと機影を浮かび上がらせた白い巨体が



震えた。着弾の衝撃に悶絶する以外に起こす、異常で不規則な振動がシーマの視界に捉えられて。長年に渡る苛烈な戦闘経験は其れが回避行動の前兆である事を彼女自身に教えた。

さあ、お逃げ。それでお前は終わりさ。其の瞬間にあたしはこの機体でお前の腹に潜り込んで、コクピットだけを撃ち抜いてやる。

「お前の我儘に付き合っつて殺された大勢の者達の恨みを思い知れ！

この餓鬼

┌

雄叫ぶシーマの声を他所に、デンドロビウムの制動用スラストーが一齐に炎を吐いた。最大戦速維持状態からの急制動は其れを命じたコウの体をシートから引き剥がそうと強大なマイナスGを彼自身に叩きつけて。揺さぶられる脳が正常な判断と意識を失いかける。

それでもコウの手はレバーをフル制動の位置に押し込んだまま動かない。

速度を失ったデンドロビウムが自らの放つ弾道を追ってダイブするシーマのモニターから消失した。その理由は一つしかない事を『<sup>エクス</sup>撃墜王』の称号を持つシーマは理解している。急制動によるオーバーシユートで相手の照準から逃れ、其の隙に自機に有利な展開へと状況を持ち込もうとする為の空戦機動。だが

「悪足掻きをつ！ 大人しく

┌

ゲルググやリックドムならいざ知らず。この機体にそんな子供騙しが通用すると思っっているのか。空間内高機動を特徴に持つ白兵戦に特化したガンダム四号機、ガーベラ・テトラに。

憤るシーマの手が再び憎き敵の姿を視界に納める為の肩のバーニアを一齐に噴かす。最大戦速から急激に軌道を変化させる機体は、急制動を行ったコウと同じ体の変調をシーマにも齎した。押し留める事の敵わない生理現象を意志の力で捻じ伏せようとするシーマ。僅かな眩暈が敵の輪郭を失わせて。

だが例え眼が一時的に見えなくとも自分が手にした勝利の手応えを確信するシーマ。

悪足掻きは所詮悪足掻き、自分の仕掛けた罠に頸まで嵌った哀れな獲物に逃れる術は無い。この一瞬の空白の後に訪れる現実には計略によって齎される勝利しか在り得ない。思惑通りに運ぶ状況と相手の心理。予定通りに運ぶ状況が意味するものはやはり不動の自分の勝利。

予想外？

そんな物は自分に自信の無い愚かな策士が口にする言訳だ。全ての可能性を事前に操ってこそその戦略。そんな愚かな考えしか持ち合わせないから、あたしなんか裏切られたりするんだよ。

こめかみをあたしに撃ち抜かれてやつと気が付いたかい、デラーズ閣下？

機体の中心を正しく貫く様に設計されているデンドロビウムの推進器。大気という抵抗を持たない宇宙空間に置いては方向転換にスラスターの偏向という手法が用いられるのが一般的な常識だ。

主機四本、補機二本で構成されるデンドロビウムのスラスター。其の全てがフライバイワイヤー方式によって操作され、パイロットの意志を受けて自在に動く事によって巨大な機体は自由に宇宙空間を飛び回る事が出来る。だがサラムス級の半分と言うジェネレーター出力の強大さはデンドロビウムの機動性能を司る偏向スラスターの自由度を大幅に制限している。

人の体が耐えられるGの限界は約9から10G。如何にハードが高性能でも其れを操るソフトが耐えられなければ意味が無い。故に設定された機動力はどちらかと言うと一年戦争で開発された初期のモビルアーマーのそれに等しい物だった。デンドロビウムと言う機体が保持する『拠点防衛用』と言う役割が其の必要性を認めなかったと言う事も其の設定に寄与した事は否めない。

限定された拠点だけを防御する為の戦術兵器。其の為に装備されたウェポンコンテナであり、エフィールドジェネレーターである。万が一敵の襲撃に遭遇した場合には彼女を制御するステイメンが分

離して迎撃行動に移行する。

最も、その様な事態が発生した時にステイメンが駆使できる火力はデンドロビウムの其れには遙かに及ばない。だからといって強大な火力を失う事を惜しんで分離を躊躇うようであればデンドロビウムは其の攻撃の前に為す術が制限される。空間内機動性能に置いてはビッグロやヴァルヴァロ程度の自由度しか持たない、時代遅れの機動兵器にしか過ぎないのだ。

だが、コウによって制御系の制約をカットされた今の機体は其の頸木から解放された巨大な猛獣と化した。制御不能に陥る可能性を持つ操作を安全装置によってキャンセルするプログラム。

コウのコマンドによって消去されたオペレーションプログラムは其のシステムの基礎理論を立ち上げた二ナ・パープルトンの思惑を超えて彼の手中に収まった。機体前部に備え付けられた上下八本の制動バーニアの内上部の四本だけが持てる力の全てを吐き出して、狂った様に空間内を疾走するデンドロビウムを押さえ込む。

アンバランスに働く力の衝突は容易くデンドロビウムの巨体を其のモーメントの発生に委ねた。正中線の軸が歪んで機体後部から前方下部に向って推進力が移動する。胴体を押し折らんばかりに作用する暴力的な力はオーキスを支える骨組みとコウの体を限界まで軋ませる。

機体の損壊を回避しようとするデンドロビウムは其の瞬間に機首を大きく振り上げた。宇宙と言う海の中に獲物を求めて屹立する巨大な機体、天の星星を握り潰そうと差し上げられる長大な砲身。

一瞬にしてピッチアップを果たしたデンドロビウムの機体に吸い込まれる様に突入<sup>ダイブ</sup>して来る、<sup>アウエンジャー</sup>紅い復讐者。

視界を鮮明にしたシーマの眼前に迫る物。其れは彼女の想像とは全く違う、黒い黄泉の穴であった。

「なにっ!？」

叫ぶシーマ、回避を試みる手足、連動するガーベラ・テトラ。操

縦者の肉体を破壊する事も厭わずに嘔き上がる制動用バーニア。だが其の全てが手遅れと化した。

怒りに任せて、勝ち誇って自分の勝利のイメージに全てを預けた酔い痴れる者が予期せぬ事態に対処出来る筈が無い。自分を死に引き込もうとする深く瞑い暗黒の姿を見つめる目が絶望に彩られて。

叩き付けられる。叩きつけて来る。馬鹿げた大きさの、奴の砲口が。

砕けるコクピット、押し寄せる制御パネル、押し潰される下半身、そして吐き出される大量の自分の血。

衝撃で破壊されたモニターが真空の外界との通路を開いてコクピット内の酸素を吸い出す。罅割れたバイザーが内外の気圧差に耐えかねて一瞬で砕け散る。肺の中の酸素まで奪われるシーマ。其の先に顎を開いて待ち受ける、確定した自分の死。

緊急脱出の際に手足を強制的にパージする爆薬の炸裂音が薄れ行くシーマの意識に囁き掛ける。今わの際に搭乗者の命だけは護ろうとするエジェクトシステムがコクピットを保護するカプセルを打ち出そうとシーマの背後で発火する。強制的に吐き出そうとするガーベラ・テトラの最期の願いを巨大な砲身が打ち砕く様に、仄かな光と熱を湛えて立ち塞がった。

“畜生っ！ せめて”

急速に閉ざされて行く視界の中で狂った様にトリガーを引くシーマ。だが全ての電力を絶たれて被災したコクピットが其の意思を伝える事は無く。致命的な損傷を負って手足を切り離れたガーベラ・テトラがその手段を行使する事は無く。音の失せた空間に骨を伝わって流れ込んで来るトリガーの接触音だけが彼女の脳を刺激する。

“こんなのが、あたしの結末だって言うのかい！ こんな事がっ！”

全てを失う事が。あたしが奪ってきた全ての者と同じ様に失う事が、あたしに与えられる罰だと。

抗うシーマの心の叫びが最期まで彼女の視界を支配する。目の前

に突き付けられた敵の砲身。ホールドアップと呼ぶには余りにも馬鹿げた其の巨大さを嘲笑いながら、息を亡くしたシーマが叫ぶ。

“お前の様な奴が、戦争を呼ぶっ！ お前の様に自分の我儘を通そうとする輩が。お前の様に理想に殉じようとする愚かな魂がっ！”

呼吸を失ったシーマの顔を照らす光。砲口が遥か下方のチャンバ―内で発生する熱を吹き上げる。シーマのヘルメットがもぎ取られて、濃い翠色の長い髪を棚引かせて。

“お前のした事が許されると思うな。あたしの罪がお前に罰せられると言つのなら、お前の罪も何れは誰かの手で罰せられる。だから”

砲口が眩い光に満たされる。充滿するメガ粒子の光と熱がシーマの顔を焼き始めて。シーマの口が最期の息を使って、今わの際に毒を吐いた。

「……先に行つて待つててやるから早く来な、坊や。可愛がつてやるからさ」

仄かに浮かべた微笑とコウへの遺言は地獄の底より湧き上がる砲声によつて掻き消される。光の中に埋もれるシーマの体。

そして吹き飛ぶガーベラ・テトラ。放たれる一筋の閃光が断罪の牙を宇宙の彼方に届かせて、欲望のままに大きく引き裂いた。

沈黙する宇宙、掴んだ命。其の事実が狂想曲の調べに身を委ねたコウの意識を現実の平静へと引き摺り戻した。

砲身の先に舞い散る紅は又一つ積み重ねた自分の罪の証。二つに引き千切られた機体の行方を呆然と見詰めながら、コウは自分の犯した罪の数々を振り返る。

「何人、殺した。……どれだけ死ねばこの戦いは終わる？」  
目くるめく狂乱の最中に奪った命の重みが手足を鈍らせる。震える視野が断罪の光景の断片をコウの脳裏に浮かび上がらせて。思い起こす毎に、噛み締める毎に其の景色はコウの胸を猛烈に掴み上げて砕かんばかりに締め上げる。生じる痛みは吐き気を催し、コウの

手が其れを押さえようとバイザーに遮られて届く事の無い口に叩き付けられた。

口角から漏れる胃液を無理矢理に飲み下して、舌の上に残る酸っぱい罪の味を噛み締めて。

汗で湿った掌が握り締める操縦桿とスロットルレバー。それを誰よりも巧みに動かす事によって行われる儀式は余りにも凄惨で、現実味に乏しく。しかし自分は今この狭いコクピットの中で息を続け、自分が手を下した者達は記憶の断片の中にしか生きた証を残さない。それは隠し様が無く否定する事すら出来ない事実。

音の届かぬ真空に散る彼らの怨嗟の声がコウの体を包み込む。其れはコウの背中に見えない重荷を背負わせようとする見知らぬ敵の総意。

十字の形を成すコウの犯した罪は其れを背負って足枷を引き摺るコウを何処へ誘おうと言うのか。彼らが拳こぶしつて指し示すゴルゴタの丘は、一体何処に。

「ガトー……これがお前の言っていた『義の無き戦いに身を委ねた者』の末路か。……お前はそうはならないと。」

其れは一号機と二号機が相打った時。互いにコクピットから脱出を果たしたその瞬間に見合わせた顔。忘れようとしても忘れられない、深く刻み込まれた記憶。コウの瞳がこの宇宙で勝ち名乗りを上げて両手を掲げるガトーの顔を思い浮かべて呟いた。

ガトーは言った。『私の戦いは義によって成っている』と。

それは『奴』が大義の元で戦う以上、命を奪う事も失う事も覚悟を決めているという事。自分が信じる未来の姿を実現する為ならば、背負った罪を償う事など当たり前だと。だから『奴』の剣には躊躇いが無い。そして『奴』の振るう力には殺戮者としての驕りが、無い。

それが『奴』と今の自分との大きな違い。

それが『奴』と今の自分との立場の違い。ガトーは自分の願いを様々な困難に打ち勝って手に入れた。それに引き換え、俺は

ガトーの願い。モニターの隅に遠ざかって行くアイランド・イズの巨大な影。戦域を大きく離脱したデンドロビウムの位置からでもそれははつきりと捉えられる、コウのもう一つの罪の形。

「罪を償う事が当たり前だと言っのなら、自分が望む未来を手にしなければならぬと言っのなら、俺は」

『奴』を討たなければならぬ。あの災厄を再び地球に齎さない為に、それを成し遂げた『ソロモンの悪夢』を、二つ名の上に新たに冠される称号と名誉と共に。

「ガトー、…… 何処だっ。」

震えの収まらない瞳が天空に広がる光の瞬きを凝視して。叱咤するコウの意志がスロットルを全開位置に押し込んで。推力を取り戻したスラストターが蒼白い炎を上げてデンドロビウムの巨体を再び戦域復帰の道筋へと押し出した。

生死を繰り返す命の点滅の先に過ぎ去ろうとするガトーの願望の成就を阻止する為に、そして自分の犯したもう一つの罪をこれ以上重ねない為に。

最大戦速を維持したまま乱戦の続く宙域へと飛び込むコウとデンドロビウム。命の遣り取りに鎬を削る戦域への予期せぬ来訪者の出現は敵味方を混乱に陥れる。

メインモニターに大寫しになる白い巨体のモビルアーマーを敵のそれも今し方多くの艦船を一撃で葬り去り続けたガトーの物と誤認したサラミスが、そして明らかに敵の者だと判断して敵意を燃やすムサイが互いにミサイルをデンドロビウムに向けて放つ。ミノフスキー粒子の干渉を受けない赤外線誘導型の対艦ミサイルが其の外套を脱ぎ捨てて加速ブースターに点火した。

スラストターが吐き出す蒼白い炎に向って殺到するミサイル群。送り狼の接近を感知したデンドロビウムの後部より吐き出される<sup>デコイ</sup>囿とフレア。接触するミサイルが次々と誘爆を繰り返して彼らとコウの

間に巨大な炎の壁を作り上げる。

輝きを背に其の宙域を駆け抜けるコウ。狭窄する視野が読み取る数値には未だにあの巨体が放つエネルギー粒子を提示する物は無く、焦る気持を嘲笑う様に立ち並ぶ数値がコウの恠気を刺激する。

「畜生っ！ 何処だ、何処にいる！ ガトー！」

口を吐く悪態がコウの心拍と血圧を意識の維持限界まで高める。焼ける様な網膜の痛みがコウの視野をか細くする。これ以上のGの負荷には耐えられないと悟った本能と、索敵システムの無能さを呪って直接視認に方針を変更したコウの腕がスロットルを引き戻した。スラスターから吐き出されていた炎は見る間に治まり、惰性による空間航行に移行するデンドロビウム。全視界モニターの全てに映し出される宇宙の、ほんの僅かな異変も見逃すまいとコウはリアシートの上で立ち上がった。前後左右、そして天地の光の輝きを余す所無く見詰める為に。

「お前がこの程度の戦いで墮とされる等有り得ない。何処に隠れている、ガトー！」

贖罪の執念に取り付かれたコウの瞳が暴走する宇宙を舐める様に見渡す。モニターの大半を覆い尽くす青い星。其の蒼を背景に最も瞬く光が多い場所が戦いの最前線であり、『ソーラーシステム？』が設置されていた空間。

制御を失ったリフレクトミラーの残骸が太陽の光に煌いて、此処で消えて行く多くの戦士の魂を鎮める巨大な墓標の様にも見える。巡礼を終えたアイランド・イーズは彼らが起こす喧騒に背を向けて、地球周回軌道に沿ってゆっくりと其の巨体をモニターの端に浮かべていた。上層大気に接近する太陽電池パネルが微かに放電を始めている。その翼が大気の抵抗に捕まった時が落着のプロセスの入り口。速度を失ったコロニーが地球の引力に捉えられて大気圏へと突入する。

『空が落ちて来る』のだ。自分が幼い日に見上げたあの光景が、今再び自分のせいだ。



慙愧の念に駆られながら見詰めるコロニーの姿。其処に目掛けて宇宙を舞い跳ぶ、小さな光の蝶。

「…… 光。何だ？」

其の光を目にした瞬間にコウの指は解析ウィンドウを立ち上げた。ガトーの操るモビルアーマーとは違う、モビルスーツですらない其の光の大きさを持つ機体。光の正体が脱出シャトル程度の大きさである事を、解析システムは数値によってコウに対して提示した。

状況から考えればそれはありえない事ではない。撃破された艦船から脱出する事が出来たと言う事は彼らにとつては僥倖だ。それがたまたまコウの目に付いたと言うだけの事、戦場ではたまに出くわす光景の一つに過ぎない。事実コウ自身もコンペイ島宙域

ガンダム二号機が核を放った直後　　で何度もその光景を眼にして、その度に自らの犯した罪の意識に苛まれた。

何の変哲も無く、其れが発生する事は当たり前であろう光。だがふらふらと頼りなく、不安定な機動で戦域より離脱を果たす其のシヤトルの放つ煌きからコウは眼を離す事が出来ない。

波を打つてよるめきながら宇宙空間を飛び回る様はどう考えてもパイロットの、いや候補生の其れでもない。どう高く見積もっても其の機体を操る者はズブの素人か、非戦闘員の筈だ。

あまつさえ其のシヤトルが這う這うの態で逃げ込もうとする場所は、寄りにも拠って今正に大気圏に突入しようとしている、アイランド・イーズの中。

七転八倒を繰り返した拳句にコロニーの外壁の破れ目から内部に向って吸い込まれていく小さな光。行方を見定めたコウの手が思わず機体を操作して、其の行き先をコロニーに定めた。

「馬鹿、あの人死ぬ気か！」

吐き出す言葉と共に霧散する様々な負の感情。ガトーへの怨みも憎しみも、自分の犯した罪に対する憐憫も、そして成し遂げなければならぬ責務すらも其の瞬間を迎えたコウの心中には存在を許されなかった。

只ひたすらにコウが求める物、それは落着間際のアイランド・イズに逃げ込んだ人間　　多分非戦闘員　　を助けなければと言う、『悪魔被い』の本質を取り戻したコウの良心に他ならなかった。

彼我の距離を一刻も早く詰めようとするデンドロビウムのスラストターが再び炎を巻き上げる。残された時間が秒単位で削られて行く景色の中で、コウの想いは光が消えた其の場所目掛けて巨大な機体を一直線に奔らせた。

## 悪夢との邂逅

「馬鹿野郎、モンシアッ！ お前の機体じゃ無理だ、死にたいのかっ！？」

ベイトのジム・カスタムがランドセルのバーニアを吹かして飛び出そうとする片腕の無いモンシアの機体を力づくで押さえ込む。独断で行動しようとした其の行為を見透かされたモンシアがモニターに大写しになったベイト機に向って怒鳴り声を上げた。

「ため、ベイト。どっから現れやがった！」

「お前の考える事何ぞ全部お見通しだ！ 何年の付き合いだと思ってる？」

尚も押さえ込もうとするベイトのジムの腕を残った腕で振り払ったモンシアが、制止の怒鳴り声を上げるベイトに負けない声で吼えた。

「解ってんなら行かせろ！ 二ナさん一人ほっぽらかしてこのままじっとしてられっか！？ あんな良い女を見す見す死なせたと在っちゃあベルナルド家の家訓に傷を残すつてもんだ」

「お前は貴族じゃねえだろが、この『シシリー生れの種馬』が！ こんな所で盛ってんじゃねえ！」

「何だと、この」

言い返そうとするモンシアのコクピットに警報が鳴り響く。確認もせずの上体を下げる二人。その頭上を掠める様にアルビオンに肉薄して来た敵のモビルスーツから放たれたバズーカの弾頭が通過して反対の空へと消えて行く。

逸早く敵の位置を確認したベイトが手の中のマシンガンを其処目掛けて乱射した。残弾全てを放った頃にその場所に生れる爆発と閃光。空になったマガジンをリリースして新たなマガジンを叩き込みながら怒鳴った。

「見る、言わんこっちゃねえ。お前が持ち場を離れただけでこの有

様だ。片手の無えポンコツは其処で大人しく対空砲台にでもなつて  
る！」

「じゃあ聞くがよ、編隊長殿。一体誰が二ナさんを助けに行くつて  
んだ？ まさか指揮官の手前が部下をおっぱらかして行くつてんじ  
や」

「僕が行きます！」

無線を通じて二人の会話に割り込むキースの声。既に大破した左  
舷のモビルスーツ発艦デッキの先端で両肩のキャノンを打ちまくる  
ジム・キャノンが二人の方を振り返る。

「良いでしょ、僕一人くらい持ち場を離れても。行かせて下さいべ  
イト中」

「馬鹿か、手前は！」

二人が同時に声を合わせて、キースの提案に罵声を浴びせた。あ  
まりの大声にキースのヘッドフォンの音量調整装置が最小位置まで  
感度を下げる。甲高いモンシアの怒鳴り声がその後が続いてキース  
の鼓膜をぶっ叩いた。

「自惚れんじゃねえ、このお味噌野郎！ 手前みたいな『どん亀』  
キャノンがどうやってバーニア装備のコア・ファイターに追い付こ  
うつてんだ？ 満足に敵も仕留めた事の無え手前こそ、前だけ向い  
て手え動かせ！」

「そんな」

「モンシア中尉の言う通りだ、キース少尉。」

それまで沈黙を守って三人の会話を聞いていたアデルが口を開い  
た。右舷カタパルトの先端で姿勢を変える事無く対空防御に徹して  
いるもう一機のジム・キャノンが、絶え間無くキャノンビームをア  
ルビオンの進行方向に撒き散らしながら。

「俺達は此処でアルビオンの進路を確保しなければならぬ。お前  
が其処から離れただけで弾幕の薄くなつた左舷から浸入してくる敵  
を抑えられなくなる。一人前と認められているのだよ、キ

ース少尉。自信を持っていい。」

「ア、デル！ 俺はそんな事まで言つて無え！ 手前らの機体じや追い付けねえと言つただけだ！ 深読みついでに余計な事まで

「では、どうするのですか？」

アデルの口調は普段の物静かで穏やかな人柄の物ではなく、怒つた様な強い響きを孕んで、モンシアの耳に叩き付けられた。

「誰がニナさんを助けに行く？ 『此処に居る者』には手も足も出ない彼女の身柄を、誰が確保すると言うのですか？」

「アデル、手前

暗に回答まで提示されたアデルの言葉に歯軋りするモンシア。その音が三人のヘッドフォンを通じて聞こえんばかりの耳障りさで。音が止んだ瞬間に入れ替わって、モンシアの怒鳴り声がアルビオンの通信オペレーターに向けて飛んだ。

「モーリスッ！」

突然の呼び掛けにモーリスの反応が一瞬遅れる。その間を咎める様に再びモンシアの怒鳴り声がアルビオンの戦闘艦橋に響き渡った。「モーリス、聞いてねえのか！ 死んでねえのなら返事ぐらいしやがれっ！」

恫喝の大音響に顔を顰めるモーリス。すぐさまヘッドセットのマイクに向つて言葉を返した。

「こちらアルビオン、モンシア中尉どうぞ。」

慌てて反応したモーリスにとつて意外だったのは、火の出る様な勢いで吐き出された声に応答した自分の声に当のモンシアが直ぐに反応しなかった事だ。最悪の事態を想像したモーリスの眼が閉鎖された防御シャッターの裏に映し出される艦外部の景色を凝視する。

彼の眼で認識される味方のモビルスーツはその配置を換える事無く四体。沈黙した対空砲台の代わりに役割を罵声の前と変わりなくこなし続けている。

通信の中断を不審に思ったモーリスが再度の応答をモンシアに求める。

「モンシア中尉、どうしました？ モンシア中尉！」

「耳元で怒鳴んな！ ちゃんと聞えてる！ 通信回線を開け、  
オープンチャンネル全周波数帯域でだ、今直ぐに！」

「中尉！」

モーリスの顔色がそれが意味する事を悟って見る見る青ざめた。

「それでは本艦の位置を敵味方全てに喧伝する事になります！ 通常なら兎も角戦闘宙域での帯域開放は」

「やつかましいっ！ つべこべ言わずにとつととやれっ！ それであの『鉄砲玉』のウラキに言っつてやれ！ 『手前の女が大ピンチ』だつてなあ！」

口汚く罵る言葉の影に秘めた意図を読み取るモーリスが思わず背後のシナプスの顔色を窺った。

眼前の不利な戦況を表示するスクリーンから眼を逸らしてモーリスに向つて、許諾の意味を示す小さな頷きを返すシナプス。間髪を入れないその反応に驚きと喜色を隠す事無くモーリスが通信機の向こうで返答を待つモンシアに向つて言った。

「了解です、モンシア中尉。直ちに全周波数帯でウラキ中尉にコンタクトします。電文内容は『手前の女が大ピンチ』でよろしいですね？」

「言い方なんざあどうだつていいっ、二度も三度も言わせんなっ！ 返事が返つてきたらニナさんがコロニーに向つたと伝える！ そつすりやケツに火い点けてすつ飛んで行くに決まつてるっ！」

悔し紛れに感情の捌け口を求める様に怒鳴り声をマイクに叩き付けるモンシア。その声を聞いてベイトが笑いながら言った。

「モンシア、随分とおりこうちゃんな発言をするじゃねえか。とうとうニナさんの事はウラキに譲る気になつたか？」

「ああっ！？」

怒鳴ると同時にモンシアの手が閃いてベイトの肩越しに撃ち捲く。アルビオンの艦橋に肉薄してマシンガンを打ち込もうとしたザクをその一連射で宇宙の藻屑に変えた。

「勘違いすんな。今日の所はあの童貞野郎に花を持たせてやるだけだっ！ 浮気つてのはな、人の物を奪<sup>もん</sup>つてからの方が燃えるんだよっ、なあ、アデルッ！」

「お言葉ですがモンシア中尉、自分には経験が無いので分かりません。」

苦笑交じりに応えるアデルの声が艦橋に響く。激戦で消耗している戦意を和ませる様な取り止めの無い会話に、艦橋内の空気が和らいで行く。その空気の中でシナプスが始めて会話に割り込んだ。

「だがモンシア中尉。此れだけのリスクを背負ってウラキ中尉の安否を確認する必要があるのか？ 彼の肉体は既にモビルスーツの運用限界時間を遙かに越えている。本来ならばとうに帰投補給していなければならん。言い難い事ではあるがウラキ中尉は既に撃墜されている事も考慮せねばならんのでは無いか？」

「そいつは取り越し苦労つてもんですぜ、艦長。」

シナプスの質問を受けたモンシアは唸り声を上げたまま返答を拒んでいる。『そんな事俺の口から言えるか』と絶対の拒絶を続けるモンシアに替わって編隊長のベイトが応えた。

「考えても見て下さい。ウラキは何度あの『ソロモンの悪夢』と戦いました？ その悉くを生き延びて内一回は相打ちだ。そんな『悪運』の持ち主を俺はウラキ以外に知りませんぜ。他の野郎は皆死んでる。」

「ですが、もし今回はその『悪運』がウラキ中尉の味方に付かなかつたとしたら？」

アデルの緊迫した声が全員の耳に届く。

「幾らウラキ中尉の才能が優れていたとしても生き延びたあの時とは違います。見た事も乗った事も無い機体でモビルアーマーに乗ったガトー相手に互角に戦えるとは自分には思えません。ガトーもそんなウラキ中尉を見逃すとは思えない。奴のウラキ中尉に対する拘り方は、異常だ。」

誰もが目を背けていたその可能性。背筋を駆け抜ける悪寒はその

アデルの言葉を耳にした全ての乗組員が共有する感情。重苦しい沈黙に包まれようとするアルビオンの艦内を、その時モンシアの怒鳴り声が駆け巡った。

「そんな時や土下座だ、土下座あつ！」

声を張るモンシアのマシンガンが唸りを上げて再び敵に火を噴かせて。モンシアの背後を背中合わせに守るベイトが容赦の無い乱射で敵を牽制しながら同意の叫びを上げた。

「そりゃいいモンシア！ 死んだらウラキには是非そうしてもらわねえとなつ！」

「おお！ 俺との決着を着けずに勝手に死んだりなんかしてやがったら承知しねえ、あの世でバニング大尉の前で土下座させてやるっ。額の皮が擦り剥けるまでなあつ！」

その叫びに息を吹き返すアルビオン。既に戦死した者を引き合いに出す不謹慎な発言が彼らの士気を高揚させた。

そんな事は絶対に在り得ないと。

二人なりの会話を使った激励が、消沈した様に見えた対空防御の雨を復活させて周囲の敵に向けてばら撒かれる。乱戦の続く戦域を突破して原隊と合流を果たそうとするアルビオンの艦橋の前で仁王立ちしたモンシアがベイトを背にして叫んだ。

「モーリスッ！ 手前は早くウラキを呼び出せ。二ナさんの還る所は俺がしっかり守つといてやるから」

全弾を撃ち尽くしたモンシアのマシンガンのマガジンが自動的にリリースされる。ボルトが後退したままのその銃を肩越しにベイトに手渡すモンシア。返すその手には既にベイトの物であったマシンガンが握られて。

「手前は死んでも惚れた女を連れて帰って来いってなあつ！」

明りの消えたコクピット。待機電源によって駆動する僅かな機器の中で唯一完全な状態で稼働する無線機の、受信を知らせる発光ダ



イオードの光が明りの消えたコクピット内を仄かに照らし上げ、その光は其処に居る筈のコウの姿を映し出す事が出来なかった。

開け放たれた前面のハッチからコロニー内に吸い出された酸素が気圧差で発生した靄と共に吐き出されて空間に漂う。思い掛けなく発生した気流はコクピット内に打ち棄てられた、蓋が開きつ放しのエマーゼンシーキットを靄の中からコロニーの空間へと押し出した。

モビルスーツのパイロット用に装備されている、幸運にも生き残った時の為の救命キット。だがステイメンに装備されている物は通常のモビルスーツに共通配備されている物とは用途も意味合いも異なっている。

はめ込まれた三本の簡易注入式ディスプレイ

既に後一

本しか残ってはいないが　　は肉体機能の反応促進剤のアンブレルが内封されており、デンドロビウムという機体を操縦する上で重要不可欠な物とされている。モビルスーツとモビルアーマー、二つの異なった形態のオペレーションを認識し、滞り無く操作する為にはその様な危険な薬品に頼らねば通常の人間に操作する事は出来ない。

何時まで続くかも解らない戦いの中でコウは出来るだけその薬品に手を付けずにデンドロビウムを操って来た。寧ろこれだけ長時間の運用下で未だに二本しか消費していないコウの精神力と才能の方が、機体を開発したルセット・オデビーに賞賛されて然るべき行為であろう。

コウが未だに生きて尚且つ正常な精神状態でステイメンのコクピットに坐り続けていると言う事実を、彼女が生きて知る事が出来たとしたら。

そしてもう一箇所、抜き取られて窪みだけが残された場所にあった物。其処には個人携帯用の拳銃がはめ込まれていた筈。護身用ではなく、秘密を敵に漏らさない様にする為の『自決用』の拳銃が。

コウの命を蝕む二つの必要悪が隠されて居なければならぬ場所

から姿を消して。命を付け狙われるコウの姿はそれから身を隠す様に姿を消して。無人のコクピットを支配する無重力下から抜け出そうとする空同然のケースが外部に向って柵引く無線機の有線コードに絡まってゆらゆらと、主の帰りを待ち侘びる子供の様に漂っていた。

「あれはっ！」

逃げ込んだシャトルの搜索を続けるコウの目に飛び込んで来た、明らかに幾何学的な建造物とは違うシルエツト。外壁を構成する透明な超硬化テクタイトを透かして差し込む太陽の光に映し出される巨大な影。

例えどんな所に居ようと、自分がその姿を見間違える筈が無い。そして忘れる事も二度と、無い。

熾烈な戦域を奔走し、その過程で大勢の命を奪わなければならぬ運命をコウに課した巨体は、捜し求めたコウの目を嘲笑う様にコロニー公社が管理する中央制御棟の屋上に屹立していた。

自分が目にした光景の真偽を疑い、其処に奴がいる事の整合性を認めるその瞳が怒りに燃える。湧き上がる感情と自分の身の危険を悟ったコウの肉体が瞬時に攻撃態勢へと移行した。反射的に火器管制をアクティブに切り替えてメガ・ビーム砲の安全ロックを解除する。明灰色の巨大な怪鳥を照準の中心に捉えたまま機体を横滑りさせて、ガトーの攻撃に備えるデンドロビウム。最小限の出力に留めて居るとはいえ、其処に発生したスラスターの乱流は無重力下のコロニー内を漂う様々の残骸を塵芥の様に掻き回す。

「ガトー！」

思わず叫ぶコウの眼がバイザーに投影されるターゲットスコープを睨み付けた。ロックオンを完了した赤の四角が激しい点滅を繰り返す。それはコウの意識の中に忍び込んで殺意と言う名の衝動を刺激し続けた。

撃て、と呟くコウの中のもう一人の自分。それがどういう結果を

齋すかなど知った事では無い。お前がその引鉄を引きさえすれば、又戦いが始まる。痺れる様で、甘美な香りを放つ、

命の遣り取りが。

眼前に大寫しになったモビルアーマーは投射されるコウの殺意に對して何の対処をする事も無く、ただ照準を固定されるがままに任せて其処に居る。

そつだ、お前は其処目掛けて怒りを叩きつける。そして、

殺せ。お前の手が潰して来た大勢の者と同じ様に。

お前はその為に、此処にいる。此処で出会った。

引鉄代わりの発射ボタンを押そうとする右の親指が微かに震えて、押し込もうとする力を遮る物など、拒む理由など何も無い筈。それを一回押し込むだけで、あの巨大な怪鳥はこのコロニーと運命を共にする事になるだろう。

『動力反応の欠片も見せないあの機体』を沈める、此れが千載一遇のチャンス。

だが、コウの指を其処から一ミリたりとも動かさない理由が其処に在った。

「……なぜ、動かない？」

稼働しているならば。此方の存在に気が付いているならば煌々と光を放たなければならぬモノアイ。幾らなんでもこの距離ならば自分が狙っている事など承知しているだろう。それでも和えて動かない振りをして、自分の攻撃を誘っているとしても言うのか。

自分と戦うガトーが自分に対して畏を仕掛ける、そんな必要が何処に？

矛盾は疑念へと形を変えてコウの判断を仰いだ。コウの親指が微かにボタンから離れて其処から先の行程に移行する事を躊躇った。

そんな回りくどい事をする様な相手ではない。それならばこのデンドロビウムをアルビオンごと沈める機会は幾らでもあっただろう。最初の会敵の後に補給に帰還した自分の後を追撃すれば、簡単に済む事だった。だがその送り狼の部隊の中にガトーの姿は無く。母艦

さえ沈めてしまえば帰る所を失ったモビルスーツ部隊など只の戦災難民と化して広い宇宙を漂うだけの存在になつてしまつにも拘らず。他のデラーズ・フリートの将兵の思惑はともかくとして少なくとも奴は、『ソロモンの悪夢』だけは自分と正面から、正々堂々と戦いを挑み雌雄を決して来た筈だ。決して騙し討ちや罠などを仕掛ける様な姑息な人柄ではない。

それは一つの確信だった。自分が奴と刃を交えた事によつて得た、コウとガトーの間に生れた奇妙な信頼感。

「いないのか、奴は。」

戦いを求める心の誘惑に打ち勝つたコウの指が引鉄から離れる。別の意志を宿した両腕と足がデンドロビウムの巨体を繊細に操つて着陸態勢へと推し進めた。下部のアームをランディングギア代わりに展開してノイエ・ジールの正面へと接地する機体。抱えたメガ・ビーム砲は仄かな光を湛えたまま、チャンバー内に溜め込まれた粒子を臨界以下に押さえ込んで待機する。照準は最期まで捉えたまま、いつでも砲撃が可能な状態で戦いの火蓋が再び切られる事を待つ長大な砲身が、震えた。

アームが押し潰す廃墟が残骸を虚空に撒き散らして。巻き上がる砂塵の中にその体を休める白い蘭の花。雄蕊であるステイメンのメインカメラの光が消えて、電力が待機モードに切り替わつた事を外部に知らせる。

モニターの画像が消えたコクピット内でスタンバイモードへと電源を切り替えるコウ。パワーゲージがアイドリング状態を示す赤い点滅に変化した事を確認して、ヘルメットから無線機に繋がる有線ジャックを引き抜いた。頸椎を損傷から保護する為の電磁式のHANS (Head and Neck Support) の電源を切つて、シートの下に差し込まれたジュラルミン製の箱を抜き出す。

その箱を両手の上に置いたままじつと眺めるコウ。やがて意を決した様に、それでも震えるコウの指がそのケースのラッチを外した。ゆっくりと蓋を開けた中に収められた個人用装備の拳銃と反応促

進剤のデイスペンサー。震えの収まらない手が残った二本の内の一  
本を掴んだ。そのまま一息に袖を下ろして剥き出しにした左腕に押  
し当てる。接触を感知する事によって自動的に押し出される針がコ  
ウの筋肉に薬剤を注入して。引き攣れる様な痛みに思わず顔を顰め  
る。

「くそつ、こんな事なら地上戦闘訓練を真面目に受けておくんだっ  
た。」

反応促進剤と抗精神剤のカクテルは、恐怖から来る震えを取り除  
く事に成功した。更なる薬剤の効果は使用者に興奮と高揚感を齎す。  
薄れる恐怖を覚えながら拳銃を手に取り安全装置を外す。スライド  
を後退させて薬莖の排出口からチャンバーを覗いて初弾が其処に収  
められた事を確認して手を離れた。勢い良く前進したスライドと上  
がったままの撃鉄を確認して、暴発防止の為に再び安全装置で固定  
して腰のホルスターへと収めるコウ。

深呼吸を一つ。パイロットスーツを元通りに着用してヘルメット  
の生命維持装置のモニターのスイッチを入れる。気密が確認された  
事を示すブルーのランプがコウの眼の上で点滅した。

準備は整った。軽く閉じた瞼の裏で凡そ自分の考えが及ぶ全ての  
事を思い浮かべて対処方法をシミュレートする。

このコロニー内に逃げ込んだシャトルの姿を見つける事は出来な  
かった。だが今は取り合えずガトーの目論見を阻止する事が優先だ。  
恐らく奴は残った推進剤に点火してジャブローへの落下軌道を演出  
する為に危険を顧みずに此処に来た。

ならば自分はガトーを倒してその権利を手に入れる。そうすれば  
このコロニーを操作して着陸を遅らせ、人の居ない山岳地帯へと導  
く事も出来るだろう。着陸の時間さえ遅らせる事が出来るのなら、  
その間に此処に逃げ込んだシャトルを搜索する事は十分可能だ。

「……よし。」

自分を鼓舞する様に一言呟いたコウの手がハッチの開放ボタンを  
押し込む。リニアシートから立ち上がり、手足を引き付けて体を丸

くして無重力に身を任せて次に自分に訪れる現象に備えるコウ。開いたコクピット内から急激に吸い出される空気の流れに乗って、コウの体は無重力下の廃墟へと放り出された。

其の光は死に絶えたアイランド・イーズの中で唯一生存した区画を示すLED。真つ暗な回廊の中でぼつんと輝く小さな明かりを目にしたコウが思わず呟いた。

「あそこだ、管理センターのエアロック。」

辺りに浮かぶゴミを静かに押し退けながら手探りで辿り着いたコウは、急いでその周囲の壁面を弄った。指先に感じる幾つもの突起を闇雲に押し光の反応の変化を見守る。幾度目かのトライの後に光の色を変化させたLEDはコウの掌に伝わる振動によって、ロックを解除するハンドルが自動的に回り始めた事を知らせた。

コウの視界の中に現れる新たな暗闇。コウの体はそれを待ち切れないと言った風情で内部へと踊り込んだ。

センサーが生体反応を確認して、室内灯の点滅によって注意を促す。コウの背後で締まるエアロックの扉。第一の扉が閉まると同時に点滅は常時点灯の仄かな明かりへと変化する。控えめに灯された赤い光によって、コウはその場所が二重エアロックの与圧室である事に気が付いた。バイザーに映し出される生命維持管理のインフォメーションにはその小部屋が見る見る空気で充たされて行くデータと数値の変化をリアルタイムで表示している。

「まだ生きているんだ、此処は……流石『棺桶』<sup>グレイヴ</sup>と呼ばれるだけの事はある。」

生命維持環境が完全に内部と一致した状態を確認した第二の扉がロックを解いて開き始める。その事実は空気によって伝えられる音と振動によってコウの全身へと。開く毎に大きく差し込んで来る廊下の光を壁に張り付いてやり過ごしながら、ヘルメットのバイザーを開放して肉眼で通路の先の状況を伺う。

非常用電源によって点灯された廊下の証明は通常の物よりも薄暗

くはあるが、それでも廊下の突き当たりまで見通すには十分な明度を持つている。拡大した瞳孔を細めて明かりの強さに目を慣らしながら、コウは銃を構えて廊下へと歩み出た。

内部構造が剥き出しになった廊下。核シエルターにも匹敵する強度を誇る管制センターはコロニーの軌道管制を一手に引き受ける重要なブロックである。万が一不慮の事態が発生して

巨大なデブリの衝突等による重大且つ危機的な状況

コロニー

ーが瀕死の状態に陥った時、此処に勤務する職員は身分不相応に受け取る報酬の代わりにコロニーを自らの責任を持って墓場へと導く任を負う。人的、物質的被害の無い何処かの空間、若しくは太陽への到着軌道へとコロニーを導く。故にこの区画は「アンダー墓掘り人夫」と揶揄される不遇な職員の身柄を護る為にコロニー内のどの区画

無論動力ユニットは除外する

よりも頑丈な造りになっていた。

独立して機能し続ける環境維持システムも今までの過程を見る限りでは正常に機能している様だ。何故なら稼動し続ける大気循環ユニットは侵入者の存在を拒むかのように騒々しい機械音をコウの耳へと叩き付ける。フル稼働を続けるシステムは恐らく外部の激変した環境を感知して非常事態モードへと機能を移行しているのだから。

だが其の音はコウの気配を消してくれる代わりに、何処に潜んでいるかも分からないガトーの気配もコウの耳から覆い隠す。聴音装置のポリウムを絞りながら、コウは毒づいた。

「これじゃ、肉眼で相手を見つけれしか無いのか。…… 時間が無いって言うのに。」

磁力靴のスイッチを切る。無重力に従って浮き上がる体は空間内の速やかな移動を可能にする。足元となった壁面を蹴って慣性による空間移動を試みるコウ。開いている片手を使って壁を伝いながら、廊下を照らし出す照明の羅列の先にぼんやりと見える突き当りの壁を目指して遊泳する。

辿り着く直前に体を翻して、水泳のターンの要領で壁に両足を押し付けて移動慣性を殺す。コウの左右に続く通路を交互に見比べて表示物の何も無い壁面に視線を泳がせながら、其処に何の手掛かりも表示も無い事に気付く。

「くそつ、これじゃどつちに管制センターの中枢があるのか分かりやしない。」

再び眼を凝らして、ほんの僅かな違いも見逃さない様に周囲を観察する。だがどちらの壁も同じ構造と同じ配列をした鉄骨に囲まれて、管制センターどころかその先に何があるのかさえも指し示す手掛かりになる様な物は何も無かった。その事が、自分の居る場所がコロニー内でも最重要施設である事をコウに認識させた。

軍用艦船では当たり前の構造、そしてそれはコウの母艦であるアルビオンの艦内に於いても見慣れた仕様に違いない。内部の回廊は敵の侵入に備えて目標や目印と言った類の物を決して表示しない事になっている。同じ様な景色しか敵に見せない回廊はその瞬間に巨大な迷路と化して敵自身の現在位置を見失わせ、その隙に乗じて各所に据えられた防御ポイントで敵を迎え撃つ。其れはこの時代に限らず長い人類の戦争の歴史の中で培われた、そして最重要と認識される軍、民間の施設全てが設計に盛り込んだ自己防衛の為の公式の様な物だ。

この状況を打破する為に戦闘員は外部との連絡を綿密に取って、現在位置を絶えずモニタリングして貰う必要がある。戦場での外部とのデータリンクと言う行為は如何なる状況下での戦闘行動に於いても重要不可欠な要素の一つなのだ。

だがコウは急ぐ余りに迂闊にも、ステイメンの通信機を通じてアルビオンのメインコンピューターにリンクするコクピット内のトランスポンダーを無線操作に切り替える事も忘れて外に飛び出してしまった。ジャックを引き抜いたからと言って自動的に切り替わってくれるほど戦闘兵器は優しく出来ていない。コウは自分の犯した不手際に苦渋の表情を滲ませた。



闇雲に搜索するにはこの管制センターは広すぎる。その前に自分がこの迷路に捕まってしまったらガトーを探すどころでは無くなる。だが迷っている間にも刻々と時間は過ぎ去っている。ここでまごまごしている間にも、ガトーは恐らく着々と

その後のイメージがコウの脳裏に閃光の様に浮かんで消えて。不吉な映像だけが浮かび上がる映写会の中に一人佇んで、為す術も無くそれを見せ付けられる自分の姿と齎される絶望。想像するだけで身震いを起こす身体。

自らの選択の袋小路に行き詰るコウの思考。焦りだけがコウの決意を後押しして刹那の選択をコウに迫る。堪り兼ねたコウが思わず自分の勘に判断を委ねて左の通路へと行く手を決断したその瞬間、コウの意志を翻意させる様に、音が聞こえた。

「…… 何だ？ 何の音」

聞き止めたコウが思わず呟いて振り返った。最小に設定していた聴音装置の感度を元に戻して。拾い上げる循環ユニットの機械音がヘヴィメタルのコンサート会場に置かれたスピーカーの様な轟音を上げてコウの聴覚を埋め尽くす。

だがその中に聞える、微かな違和感。無機質な殆どとは明らかに一線を画す、有機的な柔らかい雑音。聴力が低下するかもしれない可能性を完全に無視して、コウはヘッドホンに耳を押し付けた。

「…… 人の、声、か？」

微かに響く柔らかな音色がコウの鼓膜を刺激する。自分が向おうとしていた反対側の通路へと身体を投げ出す。柔らかな雑音はそれだけの行為でも容易くレベルを上げて、それが人の声だという確信をコウの意識に与えた。

「間違いない、人がいる。…… もしかして、ガトー、か？」

その名を口にした瞬間に高まるコウの動悸が耳に届く音を鈍らせる。その果てに存在する音源の主を求めてコウの足が壁を蹴り付けた。目指す方向が歪んで目の前に迫る壁を手で押し流しながら無重力の支配する廊下を一足飛びに泳ぐ。壁に突き当たる度に頭を左右

に振って声の大きくなる方向を確かめながら。

同じ行為を何度も繰り返した果てに辿り着いた、廊下の行き止まり。視界の先に立ち塞がる壁の向こうにもう通路は無い。

だがその手前の壁面から一際明るく廊下を照らす光がコウの注意を引き付けた。そしてコウを此処まで誘った音源の主も、その光の溢れる室内に存在している事をコウに教えた。

磁力靴のスイッチを入れて床へと両足を付ける。金属の触れ合う音が意外に大きくコウの耳に飛び込んで、緊張の頂点に立つコウの心臓を大きく握り締める。音から声に、そして言葉へと切り替わったそれが何の変化も無い事を、身動きせずにかめたコウの身体が光を溢れさせる、開放たれた扉の影へと静かに進んでいく。

其の声途切れ途切れの言葉へと変化した瞬間に、コウの記憶は自分の記憶の中に保存された人物の声と音紋を一致させた。脳裏に浮かんだ人物の名をある種の感慨と憤慨を籠めて。思わず口にするコウ。

「………… ガトー。やっぱり此処に辿り着いていたのか！」

その名を燃料にするかの様に激しく打つ心臓の鼓動。過呼吸を起こしかける心肺機能。大きく開いた口を教導過程に習った救急救命の知識に準えて力強く嚥むコウ。鼻腔から流れ込む酸素が喉を刺激して思わず咳き込みそうになる。だが流入量の激減した酸素による呼吸は少なくとも過呼吸による痺れと言う事態だけは回避する事に成功した。それでも興奮を抑えようと激しい呼吸を続けるコウの耳から、ガトーの言葉が微かに流れ込んで来る。

「…………… 最後に此処で君に出会えて、良かった。」

“誰と、話している。俺は此処にいるぞ、ガトー。お前の直ぐ傍にっ！”

ガトーが誰かに向って放ったその声音は、敵としてガトーと対峙し続けたコウが一度も聞いた事の無い、そしてコンペイ島宙域での通信でも聞いた事の無い柔らかな物だった。だが。

“誰と喋っていたとしても俺がお前の声を聞き間違える筈が無い。”

分かるぞ、ガトー。お前は其処に居るんだなっ！”

頭の中を走馬灯の様に駆け巡る、コウの周囲でガトーの為に命を散した人の顔。カレント隊長、アレン中尉、カークス、バニング大尉、ケリイさん、そして、ルセットさん。

冷静さを保とうとすればする程逆巻く様に大きくなるもう一人のコウの殺意。視線の先まで掲げた拳銃の安全装置を親指で解除して全身に蔓延する薬物がその瞬間だけコウの脳と指先の機能を支配して。瞬く間に正気を失って、殺意に塗れて執着に駆られた焦点が瞳の奥の黒を大きく広げてコウの視界を狭めていく。

コウでは無い何かに変貌を遂げたその耳に流れ込んで来る、殺したいと渴望する敵の声がコウの中の何かを猛烈に刺激して。

「 思えば君こそが、『星の屑』の真の目撃者に相応しい者だったのかも知れん。」

その言葉がコウ以外の者に放たれている事も今のコウには気付かない。其処に立つのは冷静な判断を失った、一人の殺戮者。頭の中を埋め尽くす冥界からの叫び声が甘美な音色でコウの意識を埋め尽くした。

“ そうだ、俺が目撃者になってやる。但し其れはお前の望みが潰える様を見届ける為の目撃者としてっ！”

濃度の上がった薬物のジョイントがコウの脳皮質を刺激して反応速度を上昇させる。慈悲の欠片も持たない殺戮者と化したコウが再び悪魔の力を取り戻して。命を握り潰す度に冷えていく血に無常の快楽を覚えながらコウの足は床を蹴り、室内へと翻す体は渴望する殺意に身を委ねて悪魔の欲求の望むがままに、手にした拳銃を無防備なその背中に目掛けて振り上げた。あの時に上げた雄叫びが、コウの心の中で陰湿な音を立てて轟き渡る。

“ 終わりだっ、ガトー！ お前はここで俺の手で ”

引鉄に籠められる力が人差し指を白くして。極限にまで上昇した反応速度は常人ならば普通に感じ得る筈の罪の呵責に苛まれる事無

く、刹那の躊躇いすら捻じ伏せて其の行為にコウの肉体を没頭させる。将星の先に大寫しになった男の背中。其処に繋がるシルバーグレイの長い髪。それが真っ赤な血と脳漿を噴出して飛び散る様を想像して予感して。目の前に過ぎ去ろうとする未来の地獄絵を頭の中に浮かべて、その絵を鑑賞して悦に浸る『コウ・ウラキ』と言う名のもう一人の自分が歓喜に塗れて。

それ以外はもう眼に入らない。殺意と言う名の狂気に駆られたコウの視界がそれ以上の情報を拒絶する。ガトーの後姿だけを切り取って鮮明にする焦点、網膜に映る余計な物をコウの脳を支配した薬物が押し流そうとして。

だが、その網膜に僅かに映り込んだ、在り得ない人影のシルエツトがコウの殺意の一角を切り取って脳の一部へと送り込んだ。ガトーと会話を繰り返して広げていたもう一人の人間。そしてその人物は自分が耳にした事の無いガトーの声を演出する事に成功した

“ 女の人！ ”

想像だにしなかったその存在に、全てを埋め尽くした筈のコウの殺意は揺らぎを見せた。狭窄した視野がその領域を瞬時に拡大して取り零した情報を掴み取ろうと躍起になる。モザイク以上に不鮮明になっていた物と人の輪郭は、僅かに残ったコウの意志に従ってその人物の映像データを正気の残る頭脳へと視神経を通じて送り込む。判明する人物の姿は鮮明で。そして余りにも残酷で。

その女性が身に纏っている物は連邦軍の非戦闘員が着用する防護用宇宙服に間違いが無かった。そして其処に繋がる華奢な頸。柔らかな輪郭を覆い隠して揺れるダークブロンドの豊かな髪、そして。

見開かれて自分を見つめる、泣き叫ぶ様な蒼の虹彩。その視線に貫かれて叫びを上げるコウの心。それが悪魔の咆哮なのか、コウ自身の叫びなのか。聞いた本人にも分からない。だが。

俺はこの人を知っている。ガトー以上に忘れようが無いっ！ 何で君が此処に居るっ！？

“二ナツ！？”

殺意を超える圧倒的な衝撃がコウの全身を貫いて、機能障害は一瞬にして薬物の効果を捻じ伏せて全身の末端にまで及んだ。殺意の快楽に溺れて微動だにしなかった右手は猛烈な痙攣に見舞われて、将星の先に捉えた獲物の姿を見失う。だが引鉄を引いた人差し指がその行為を中断する時間は何処にも残されては居なかった。

コウの指がトリガーリングに押し付けられて。静寂を裂く硝煙の燃烧音、空気を伝わる発砲による衝撃波、そして着弾によって周囲に撒き散らされる、肉を叩く鈍い音。

コウの視界の中で揺らめくガトーの体、予期せぬ痛みにも耐え兼ねて吐き出される苦悶の嗚咽。それでも求める様に差し伸ばされた手が先にある何かを掴んで崩れ落ちて。

推進剤の点火に伴う衝撃が三人の身体を大きく揺らした。姿勢を変えるアイランド・イーズ。そして傾く床。バランスを崩したコウの手が思わず傍の壁面を握り締めた。その視界の中に映る光景。

壁面のモニターに描かれたアイランド・イーズの三面図が大きくその角度を変えて。館内からの退避とコロニーからの緊急脱出を促す警報音がコウの聴覚を占拠しようと思鳴を上げる。

瀕死の振動を伝えるその床の上に倒れ臥す、自分が命を要求したアナベル・ガトーという名の男。流れ出る大量の血が床の傾きに従ってコウの足元へと押し寄せる。

その先で動き出す、自分が命懸けで愛した掛替えの無い女性の姿。二ナは床を大きく蹴って、コウに向かって宙を舞う。その口から飛び出すように、人の名前を思い描いて。

「ガトーっ！」

コウの瞳孔が更なる衝撃で見開かれて。その瞬間にコウの意識は

現実ではない、他の宇宙へと吸い込まれたような気がした。

## オークリーの残照

「…… 此処は …… ?」

その眩きさえもが吸い込まれて行く深い闇。コウの視線の直ぐ先まで覆い隠した漆黒の黒は手掛かりを求めて周囲を見回す努力すらも跳ね返して、コウの全てを奪っていた。

半開きになった口から漏れる溜息、吐き出す希望。取って代わる絶望に打ちひしがれながら、それでもコウの足は其処では無い何処かに眠っているかも知れない光を探しに行こうと歩む決心をする。踏み出す為に力を込める片足。

鋭い痛み。

「痛っ！」

不意に襲い掛かってきた痛みに思わず顔を顰めて視線を下ろす。見えない筈のその先に確かにある自分の足。何故かその景色だけが視覚野の外から飛び込んで、コウの脳に貼り付ける様に訴える。

両足に絡まった、足元から生える無数の茨がコウの足を絡め取って離さない。動かそうとした足は鋭い棘に切り刻まれて夥しく血を流して。

「あ、足が」

コウの脳裏を恐怖が奔る。何故だか分からないが此処にいちやいけない、とコウの本能が叫んだ。

此処にいたらきつと還れなくなる。そうなる前に此処から出なきや、自分の体を、自分に罪の贖いを求めて捕え続けるこの

茨に見えた物、それは血塗れの無数の腕。コウの足を切り裂いたのは其処から伸びる人の爪。鋭い先端が肉を切り裂き血管を傷つけ、骨を穿つ。其処から伝わって来る呪詛。其処まで来た仇に与えられる寿ことぎの祝詞。

此処へ来い、と。

もう戻れないのだ、お前は。お前の奪った命と関わる倍の未来が

お前に未来を与えない。

お前に、人並みの幸福しあわせは二度と訪れないのだ、と。

怨嗟アリアの詠唱は絶え間無くコウの良心を苛んだ。罪の呵責に耐え兼ねたコウの心がうるたえながら闇からの声に問い掛ける。

「ではどうすればよかったんだ！ 何をすれば良かったんだ！ ガトーが来たあの日にトリントンに残って、地球に残ってコロニーが落ちて来るのを只見てれば良かったのか？ そうすれば誰も死なずに バニング大尉やケリイさんも死なずに済んだって言うのか！？」

「そうだ、殺した、お前が殺した。」

詠唱は尚も激しさを増して。痛くなる耳を塞ごうとした両手にも襲い掛かる、足に加えられた物と同じ痛みと同じ傷、同じ呪いが自由を奪う。自由を取り戻すために抗うコウの慟哭は激しさを増して、体の一片まで取り込もうとする血塗れの腕かひなの山に向って叩き付けられる。

「違う、これは戦争だっ！ 俺が殺した人達も俺を殺す権利を持っていた。殺らなければ殺られていたんだ！ 仕方がなかったんだっ！」

嘘だ、お前は嘘を吐いている。

お前は確かに楽しんでいた、人が死ぬのを、殺すのを、自分の手が穢れる事を。何故ならば

突然フラッシュバックする映像。闇が裂け、其処に大写しになる自分の顔、そしてステイメンのコクピット。

眉間に寄せた皺、見開かれた両目、焦点の定まらない瞳、歪む口、だがその表情は

笑っている。晒っている、嘲っている！

「ああああアツッ！！」

突き付けられる真実、吐き出す絶叫と共に崩壊する理性。本能の趣に身を任せるコウの体が、四肢が引き裂かれようともお構い無しに猛然と力を解放した。解き放たれる手足の自由の代償は夥しい自



分の血と身動きも許さないほどの激痛。等価以上の交換によって取り戻した、不自由になった自由を抱きかかえて蹲って。闇から抜け出す術を失ったコウの心が遣り場の無い絶望に満たされて。

「 違う、違う。俺は 」

それは吐き出す様に、叩き付ける様に。理性をなくしたコウが拠所とする人としての最後の良心が詠唱に向って最後まで抗う。流れ出る血が自分の足元に大きく広がって。血溜りが裏返しに移る、子供の様に蹲る自分自身の惨めな姿をコウの目に焼き付けて。その姿までもが焼き顰こめての様にコウの心を痛め付ける。

萎なえて萎はしんでいく最後の抵抗。光に向って手掛かりを求めたコウの指の爪までも剥ぎ取って奈落の底へと導こうとする暝い呼び声に屈して、何もかも失って消えていこうとするコウの心に微かな囁きが呼びかけた。

“ コウ・ウラキ ”

その力強い声音の主をコウは知っている。思わず顔を上げた視線の先に、今の自分には手にする事の許されない光を背景に佇む男の姿があった。

風に棚引くシルバーグレイの長い髪、そして一度見たら忘れる事の出来ない、気高き猛禽を髻はづぶつとさせる鳶色の瞳。放たれる強い意志の輝きが折り畳まれようとするコウの心の琴線に触れる。

その男の名を思わず口にするコウ。

「 アナベル・ガトー …… 」

コウの声を聞いたガトーは静かに笑みを浮かべた。

その表情には一点の曇りも無く、驕りさえも無く。誇り高きジオンの戦士は携えた誇りのままに、打ちひしがれてしゃがみ込むコウの姿を卑下する事無く見つめている。

「ガトー、知っているなら教えてくれ。お前があの日、ガンダム二号機を強奪した時に俺はどうすれば良かったんだ。 …… 俺がガンダムに乗った事が間違いだっただのか、お前と戦う為に、追いかける為に。そんな事をしなければあんなに大勢の人を殺さずに済んだ

のか？ 何もかも失わずに済んだというのか？」

目の前に立つガトーに向って尋ねるコウ。だがガトーはコウの問い掛けに応える事も無く、その微笑を崩す事も無く。静かに下ろされる視線がコウの両目を捉えたままで。

「教えてくれ、ガトー。お前は どうして そんなにも 誇り高く居られる？ お前は俺より大勢の人を 敵を殺した。……俺とお前の違いは何なんだ。何故、お前はそんなに綺麗で居られる？ 俺の手足は自分の犯した罪でこんなに血塗れだって言うのに。」

「知りたいか？」

コウの心に響き渡ったガトーの声が、闇に埋められたコウの何かを引き摺り上げた。絶望に曇っていた視界が瞬時に輪郭を取り戻して世界を映し出す。鮮明になった光の溢れる世界の中に佇むガトーと蹲ったままのコウ。

影の無くなつた空間の中に浮かんだガトーの手がゆっくりとコウに向けて差し伸べられた。その掌を呆然として見詰めるコウの瞳。

「行くか、答えを探しに」

力強く促すガトーの声。はっとして見上げるコウの目に映る顔、そして強烈な正義の輝きを放って道を見失った戦士を導こうとする手。

「何処へ、行けばいい？ 何処に向えば、それは解る？」

ガトーから下ろされた視線に目を背けずに尋ねるコウ。だがコウの瞳には既に一時前までの狂乱の色は失せていた。取り戻した輝きは見下ろすガトーの物と同じく、強い意志と新たな希望に満ちている。

「お前が居なければならぬ、お前がお前として生きて行く事の出来る、所へ。」

心に響くガトーの声は、コウを捕らえようとした怨嗟の詠唱を掻き消した。残った無音の世界の中で頷くコウの顔。ずたずたに切り裂かれて酷く傷つけられた血塗れの手をやっとの思いで持ち上げて、差し伸べられたままのガトーの手を取ろうとした。

その時。

「 やめて、コウ。」

心を凍らせる様なその声はコウの背後から。思わず振り向いたその目の中に映り込んだ二ナの姿。突き付けられた銃口は微動だにせず正確に、そして迷う事無くコウの胸元に狙いを定める。

「二ナっ！ どうして」

心の奥底から疑問符と共に迸るコウの叫びは二ナには届かない。結界に隔絶された二ナの姿は光の溢れる世界の全てを拒絶して、蒼の瞳を潤ませながら世界を圧倒する強い光を湛えてコウの顔を真正面から見詰めている。

行かせない、逝かせない。絶対に。

叩き付けられる視線に籠められた二ナの言葉と強い意志。その顔を、その表情を、その瞳を。コウの記憶は遠く遡って断片を拾い出す。忘れようにも忘れられないフォン・ブラウンでの日々。あの時自分に向って『出て行け』と言った、同じ眼をした女性の姿を思い浮かべてその名を呼んだ。

「ラトーラさん!？」

叫びと共に弾けるフラッシュ。二ナの銃がコウに向かって火を噴く。硝煙の陰で揺らめく二ナの面影、そして胸に叩き付けられる激しい衝撃。

詰まる息の苦しさに大きく見開かれる瞳。

欠乏した酸素を取り込もうとする肺は同時にコウの意識も悪夢の底より浮かび上がらせた。ぼやける焦点で見上げる天井。

だがコウの瞳に映った物は梁が剥き出しになった天井の見慣れた景色ではなく、僅かに差し込む朝の光を受けて煌く金色の双眸であった。自分の呼吸と悪夢を止めたその主の名前を呟きながら、コウは微かな笑いを浮かべた。

「…… お前か、エボニー。」

ほう、と吐き出したコウの溜息を顔に受けて、胸の上に堂々と坐って寝顔を眺めていた黒猫は前に向けた髭を震わせた。くすぐったそうに眼を細めてしきりに舌なめずりを繰り返す。それが貴方の朝一番の仕事だと要求する黒猫の顔を眺めながら、コウは言った。

「もう、そんな時間なんだ。…… 待つてる、今やるから。」

コウの両手がエボニーの脇に差し込まれて持ち上げられる。身動きして嫌がる彼をそのままベットに預けてあった自分の足と共に床へと下ろした。催促する様に先に餌皿の元へと歩み寄るエボニーの後からコウが枕元の餌袋を取り上げて歩き出す。一歩踏み出す毎に天井の梁と同じ年数を刻む板張りの床がギシリと鳴った。

皿に餌を溢す濁いた音。それを聞いた途端に待ち切れなくなったエボニーが皿の中に顔を突っ込む。無心に朝食を貪る後姿を見詰めながら、コウは再び自分のベットへと腰を下ろした。

額から顎に伝わっていた汗の滴がポタリと音を立てて、足元の床に小さな染みを作る。それで始めてコウは自分の全身が油汗で濡れそぼっている事に気が付いた。

額を濡らす冷たい汗を手で拭おうとして、思わず両手で自らの顔を覆って視界を閉ざす。其処に生れた暗闇の先に未だに浮かぶ、鳶色の双眸。

「…… あれから二年以上経ったって言うのに。 …… またあ

の夢か。」

その悪夢の答えを求めて彷徨うコウ。

何時も肝心な所で途切れてしまう出来ない脚本はコウの焦りを一層募らせる。

だがコウは知っていた。その夢に答えも結末も用意されてはいないのだと。

何故ならば、自分の時間はあの日を境に刻む事を諦めてしまっていたから。

ガトーがああ battlefield に散った事も、ニナが自分から、いや自分が二

ナから離れてしまった事も既に過去の事になってしまった。結末を描く為に必要な二人の重要なキャストは既にコウの前から姿を消して、残された者は途方に暮れて答えを探す為の即興劇を演じるコウ一人。だがその余りにも滑稽な一人芝居はコウ自身をも孤独な舞台へと立たせた拳句に照明すらも向けられない。切り離そうとすればするほど鮮明になる悪夢の影に怯えながら、それでも必死に人生と言ふ喜劇を演じ続けるコウ。

そう。喜劇だ、此れは。救い様の無い。

未だに掴めぬ自分自身の新たな生き方を模索して、取り留めの無い押し問答を繰り返した拳句に、闇を齎した両手を顔から離して視界を取り戻した。

ベットの脇の小さな明り取りの窓から朝日が差し込んでコウの住む小屋の中を照らし出す。ベットの他にはコンクリートで出来た打ちっぱなしの洗面台兼用の台所の流しと、トイレとシャワーしかない質素な木造の一部屋がコウの今いる世界。壁に立て掛けられた鋤や鍬、そして壁に掛けられた鎌。どれもが既に機械化によって失われた旧時代の農機具。

自分がモビルスーツパイロットであつた頃に駆使したビームサーベルやライフルの代わりに手にする事を自ら望んだ、生きる為の新たな武器。

壁面を眺めていたコウが小さな音を聞き留めて、床を鳴らして立ち上がった。食事の終わったエポニーがドアの隙間に爪を立てて開こうとしている。背後から近寄るコウの顔を見上げた、絶る様な眼のエポニーを手助けする為に建て付けの悪い扉を引き開いて。

光の溢れる新しい今日とコウの顔を交互に見やるエポニーに向つて、コウは優しく言った。

「先に畑に行つておいで。俺も後から直ぐに行くから。」

コウの声に後押しされてエポニーの体が朝光の中へと進み出た。階段を駆け下りて畑に続く一本道を駆けて行くエポニーの後姿をコウが見送る、それが何時もの光景と毎日の日課。悪夢に犯された自

分を呼び覚ます光と、変わり無く始まるうとする日常に安堵とも諦観とも付かない溜息を漏らす。

そのコウの耳に小さく囁くサイレンの音が飛び込んで来た。

コウの顔が反射的に地平の彼方に小さく写る、朝日に浮かぶアイランド・イーズの残骸を見詰める。突き付けられる自分の罪の記念碑モニュメントを。

コウの記憶と体はそのサイレンが何を知らせる物であるかを良く知っている。体に染み付いたままで抜ける事の無い軍人としての性癖を僅かに呪いながら、コウは呟いた。

「……そうか、今日は早朝訓練の日か。」

「アデリアっ！ 何やってんだよ、遅れるなよっ！」

「そ、そんなこといったって」

デザートイエローに塗られた二機のゲルググが背中に担いだバツクパックから炎を吐いて、垂直にそり立つ残骸の壁面を舐める様に飛び上がる。プロトタイプガンダムを凌ぐ出力を叩き出すバーニアが鈍重にも見える巨体を軽々と空へと舞い上げた。勢い良く迫る頂上のシルエットを睨みながら僚機を恫喝したパイロットが叫ぶ。

「今日負けたらしやれになんないんだよ。キース隊長を説き伏せてやっとなゲルググに機体を換えて貰ったのに、これで負けたりしたら其れこそ何言われるか」

「そんな事、貴方が勝手に言ったんじゃない！ 私は何も言っていないわよ。」

アデリアと呼ばれた女子の乗ったゲルググのモノアイが併走する隣の機体を睨み付ける様に赤い光を放った。恐らく自分の関与しない場所での取引によって勝手に決定付けられた事の成り行きに不平の言葉を呟きながらも、其の瞳は刻々と変化するメインスクリーン上の数値から目を離さない。

「マークスがザクがいやだって言うからこうなったんじゃない。これで負けても自業自得よ。そんな事より巻き込まれた私はどうなる

「のよ！」

「うるさいな。勝てばいいんだよ、勝てばっ！」

マークスと呼ばれた男子が怒鳴り声を上げた瞬間にモニター全面に開ける視界。一気に頂上まで飛び上がった二人の眼下に広がる涸れたオークリーの大地。赤茶けた地面と自分達の基地の他には何も無い、無辺の荒野。遠くに見える基地の滑走路を視界に収めながら推進力をカットした二機のゲルググが上昇曲線の頂上で一瞬静止する。其の時、アデリアの緊迫した声がマークスのコクピットに響いた。

「マークス！ ロックオズワート 照準警報、十時の方向！」

警告だけを無線に残していきなり発砲するアデリア。模擬銃から吐き出されるペイント弾が、残骸を盾にして二人に狙いを付けていたザク目掛けて襲い掛かった。着弾によって飛び散る赤いペンキの雨を巧みに交わして残骸の影に姿を消す、キースのザク。その成り行きを見たマークスがバーニアを吹かしながら嬉しそうに叫んだ。

「いいぞアデリア。そのまま隊長をあそこに釘付けにしる。俺が回りこんで」

「ちよっ、マークス！ 私を囮にするつもり！？」

「頼んだぜっ！」

非難の声を上げるアデリアの意向を無視して、勝手に損な役回りを押し付けたマークスのゲルググが急激な横移動を開始する。足元とスカート内に仕込まれたジェットブースターを全開にして残骸の背後へと回りこむ。

空中を飛ぶ様に移動したマークスがザクが潜んでいたであろう鉄骨の裏へと回り込んで銃を構えた。だがその照準に収められるべき淡緑色のザクの機体は既に影も形も見えず。背後を取ったと思い込んで、その顛末に呆気に取られるマークス目掛けて、アデリアのペイント弾が唸りを上げて殺到した。

反射的にバーニアを吹かして、同士討ちと言う最低の事態だけは回避するマークス。回避しなければ間違い無くマークスを行動不能

に追い込んだ筈のペイント弾が着弾箇所を中心に、赤いペンキをぶち蒔ける。

「アデリア、何すんだよっ！ 危なく演習中止だぞ！？」

怒鳴るマークスの声に負けないアデリアの非難が、マークスの耳に襲い掛かった。

「マークスこそ何で射線上で止まるのよ！ 撃ってくれって言ってる様なものじゃない。ぼけっとしてないでさっさと動いてよ！ 隊長は？」

「ロストした。一体何処に えっ！？」

叫んだ瞬間にマークスの耳に響くアラート音。驚愕で見開かれたマークスの眼に、床に空いた穴の暗闇に輝くモノアイの光が飛び込んで来る。両足のペダルを踏ん張ってホバーを操作し、滑る様に回避行動を取るマークスの機体の脇をキースの放ったペイント弾が唸りを上げて通過した。

「ちっ、隊長。土竜かよっ！」

体勢を整える暇も無く、間髪を空けずにモノアイの光目掛けてペイント弾を叩き込む。だが着弾と同時にキースのザクが放っていたと思われる光は消失し、マークスの照準から与えられる情報は彼の放った弾が一発たりとも目標に命中していない事を示していた。

思わず口の中で舌打ちするマークス。

「マークス。状況は？ 隊長は何処に隠れたの？」

「下の階へ逃げた！ 俺は隊長の後を追うからアデリアは下の階で隊長を待ち伏せしてくれ。挟み撃ちだ。」

「それはいいけど……でも隊長相手にマークス一人で大丈夫なの？ 隊長いつも言ってるじゃない、二人一組ツーマンセルで行動するのが基本だっつて。」

「大丈夫さ、幾ら腕利きの隊長でも所詮はザクだぜ？ あの機体の事は俺達の方が良く知ってるって。ゲルググ相手じゃ逃げるのが精一杯の筈さ。」

彼我の戦力差を考えれば恐れる事は無い、とアデリアの杞憂きゆうを晴



らす様に笑いながら静かにキースの逃げ込んだ穴へと忍び寄るマークス。センサーの感度を最大にまで上げて注意深く階下の暗闇を覗き込む。

「勝つたら今日こそ教えて貰うんだ。ウラキ伍長と技術主任の話。」

「……貴方って本当、そればかりね。話したがないんだから別にいいじゃない。そつとしいてあげれば。」

「ばっか、アデリア。お前は興味無いかよ？」

下の階に敵性脅威の反応を確認出来なかったマークスが静かに階段代わりの鉄骨を下って、アデリアの前から姿を消す。下の階層に到達したマークスが床に手を付けて振動感知のレベルを最大に上げた。何処かで何かが移動していれば、建物を構成している鉄骨やコンクリート等の素材を伝わって掌にある振動センサーに大きさや移動速度まで伝えられる仕組みになっている。微かな振動を感知したコロニー戦専用の特殊装備は振動の発信源が齎す数値をメインモニターの隅に表示した。

「隊長は二階層下だ。結構早いな。……アデリア？」

「べ、別に興味が無いって訳じゃないんだけど、ただそう言うのって悪趣味って言うか、何となく気が引けるって言うか。」

「まんざらでも無いって事だろ？ だったら、勝とうぜ。」

外壁の直ぐ外側を降下するアデリアの機体が噴かすバーニアの轟音がマークスの耳にダイレクトに届く。音が遙か下方で途切れて消滅した事を確認したマークスが、そのまま上体を起こして下の階層へと繋がる通路を探した。赤い光を湛えたモノアイが顔面のスリット上を忙しく左右に動く。

「気が付いたらこんな僻地<sup>へんち</sup>まで飛ばされてたんだ。そんな楽しみでもなきや割に合わないし、やってらんないよ。他にやる事が無いんだから。」

「……はいはい、分かった。今回は貴方に付き合っ<sup>セロスリー</sup>てあげるわよ。配置に付いたわ、『シャーリー03』。指示をお願い。」

「了解。これからウサギを追い落とす。『05』<sup>ゼロファイブ</sup>は待ち伏せのまま、<sup>アンブッシュ</sup>待機。」

「コピー。」

アテリアの返事を確認したマークスが傍にある残骸に身を寄せて、背後に据えた階層の外壁を伺う。廃墟の一番端にぽっかりと開いた黒い破壊痕は既にマークスの興味を引いていた。どうやらこの階から下に移動する為の出入り口は其処しかない様だ。

表示されるセンサーの値がさつきと変化していない事を確認して、マークスは一気に鉄骨の影から躍り出て穴の淵へと滑り込んだ。必要以上の足音と騒音を響かせてその階層の床に転がる残骸を蹴散らすゲルググの足。

追い掛けるマークスにしてみれば陽動は派手な方が何かと都合がいい。そうする事で追われる相手にプレッシャーを掛け、待ち伏せされていると言う可能性を相手の判断から消去する。ましてや自分達が相手にしているのは量産型のザクだ。幾ら技術主任が手を入れたってガンダムとほぼ同等の性能を誇るゲルググ相手に勝ち目など

その慢心がマークスの注意力を僅かにそぎ取った瞬間、まるでそれを見越したかの様に穴の淵からザクの頭部だけが飛び出した。その直ぐ脇に据えられた模擬銃の銃口が真直ぐマークスのモニターを狙っている。

回避しようの無い殺気に襲われたマークスの手がゲルググの両腕に備えられた補助ジェットを操作した。キースの構えた銃口目掛けて滑り込む機体を無理矢理に捻じ曲げて回避を試みるマークス。

直前での機動変更が功を奏したのか、放たれたキースのペイント弾は躲し損ねた左腕のみに叩き付けられるに留まった。着弾の衝撃を確認した模擬戦のシミュレーターは其の瞬間にマークスの左腕の回路を電氣的に遮断する。

ペンキで赤く染まって動かなくなった左腕を引き摺ったまま身を

翻したマークスがキースのモノアイ目掛けて反撃を試みた。ロツクオンのサインも待たずに直接照準で乱射する模擬銃から放たれたペイント弾が、キースが今まで顔を出していた開口部目掛けて殺到する。

だがマークスの放ったうろたえ弾など嘲笑うかの如く既に姿を消しているキース。行方を捜す為に押し当てられた両手のセンサーには、既に動きの欠片も見られなかった。

うつ伏せのまま両足のホバーを全開にして穴の淵まで滑り込み、牽制の为一連射を腕だけ伸ばして下の階へと撒き散らす。弾切れを起こした模擬銃のマガジンが自動的にリリースされて下の階に落下して大きな音を立てる。キースの居場所を知る為の何かの切っ掛けになればと画策したその行動さえも無視されて、悔しさを顔に滲ませたマークスは急いで予備のマガジンを叩き込んだ。直ぐ頭上で繰り広げられる激しい戦闘の喧騒を耳にしたアデリアがマークスに尋ねてくる。

「『03』、どうしたの？」

「ちつくしよ、こっちが隊長の待ち伏せに遭った。左腕中破。作戦には支障無し、このまま続行する。」

「…… ねえ、何か嫌な予感がするんだけど。…… ひよつとして狩り出されてるのは私達の方じゃない？」

「そんな事！」

否定するマークス。だがマークスの中にも嫌な予感があった。本当ならばさっきの待ち伏せで自分は仕留められた筈。だが隊長の視線は自分の機体を僅かに外して放たれた様な気がする。

気のせいかな？

自分を侵食する不安を首を振って否定するマークス。不安材料を払拭する手掛かりを戦力差という数値に委ねて、マークスは心配そうな声で尋ねて来るアデリアに向かって言った。

「…… ある訳無い。俺が隊長を其処まで追い込むから、アデリアは隊長が現れるのを待っててくれ。…… 狙いは決めてあるん

「だろう？」

「ええ、一応。この階に下りてくるには此処しかないって場所に狙いを着けてるわ。」

「じゃあ、そのまま待機。いくぞ。一気に追い込む！」

力強く言葉を吐き出したマークスが意を決して穴から一気に飛び降りた。

階下の床を映し出すモニターの隅に映し出されるキースのザク。左手を失った事に意気消沈しておっかなびっくり現れるだろうと、銃を構えて待ち伏せていたキースは完全に裏を搔かれた。

照準を固定していた銃身を上から下へと移動させる。だが重力の重みの加わった銃身をうまく調整して目標に当てる事は、どんな射撃の腕を持った強者つわものでも困難を極める。案の定狙いを定められずに放たれたキースのペイント弾がマークスの予想通りに頭上を擦り抜ける。思惑の嵌ったマークスが階下で身構えるキースの機体目掛けて、嬉々としてペイント弾を乱射した。

ホバーによる急激な機動手段を持たないザクが信じられない事に大きく後方に跳びずさって、ほぼ至近から放たれたともいえるマークスの弾幕から逃れる。

「！ 早い！ 俺のザクじゃないみたいだ。何であんな事が出来るんだ？」

追い掛けるマークスの弾幕を走って躲しながら移動するキース。その姿を睨みながら着床の体勢に入るマークス。両足のホバーとバーニアを全開に噴かして重量のあるゲルゲグに加わる衝撃を緩和させよう。

だが其の瞬間、乱流によって巻き上げられた土埃がマークスの周囲に立ち込めて視界を遮った。自動的に赤外線モードへと切り替る目の前のモニター。だがそれも自分が噴かしたバーニアの熱を感知して、陽炎の様に揺らめく景色だけを表示している。

「しまった！ これじゃなんにも」

叫んで機体を靄の中から脱出させようとするマークス。ホバーと

バーニアの影響下から逃れようとスロットルレバーを引いて出力を下げる。着床の衝撃でよろめくマークスの足元。その時、埃と熱で不鮮明な表示しか出来ないマークスのモニターに黒い影が大写しになった。

それがザクのショルダーアーマーだと気が付いたのは、激突するほんの一瞬前。

「うわわわっ！」

地上での肉弾戦を想定して開発された、それはザクとグフにしか出来ない芸当。

ショルダーアタックを喰らったマークスの体がシートから弾かれて、その直後にマイナスGに反応したシートベルトとHANSがマークスの体を強かにシートへ叩きつけた。そして次の瞬間に壁へと叩き付けられるマークスのゲルググ。背中をぶっ叩く衝撃が胃袋を競り上げて、胃液しかない筈の内容物を吐きそうになる。

脳震盪を起こしてぼやけるマークスの意識。其処へ回線を初めて開いたキースの勝ち誇った声が忍び込んできた。

「残念だが色々な意味でまだまだだね、マークス軍曹。君は機体の性能に頼りすぎだ。そんな事じゃ何時まで経っても俺には勝てないね。」

マークスのモニターに映るザクが構えを解いて佇んでいる。その姿に言い様の無い憤りを感じて、マークスは一時的に沈黙した駆動システムを緊急稼働させた。蘇った照準システムがゲージをモニターに表示してザクの胸へと狙いをつける。

眩む頭を振りながら引鉄を引こうとするマークスに向って、再びキースの声が飛び込んで来た。

「それに君は状況判断が甘い。自分の機体、自分の居る場所、足元のデータ。そういう物を全て加味して戦いに臨まない」と

その瞬間、マークスの足元でドン、と言う鈍い音が響いた。照準のレティクルから消えるザクの姿。

「ええっ!？」

「 そういう事になる。覚えておいた方がいいよ。」

途端に崩れるマークスの足元。着床の際に噴かしたバーニアとジェットによって痛め付けられた廃墟の床がゲルググの重量に耐え兼ねて崩壊した。蟻地獄に囚われた蟻の様に瓦礫に飲み込まれるゲルググ、そして無線から飛び込んでくるアデリアの叫び声。

「何、ちよっと、何なのよ、一体!」

アデリアの抗議の声を聞きながら、マークスのゲルググの下半身に叩き付けられる硬い衝撃。

マークスのモニターに映し出されたアデリアのゲルググが自分の機体と、共に落ちて来た瓦礫の下敷きになって埋もれて行く。その光景を目の当たりにしながら自分の機体にも降り注ぐ、『演習中止』を意味する衝撃を感じながら。

穴の淵に佇んで階下に落ちた部下の無様な姿を眺めるキース。折り重なって瓦礫に埋もれて、身動きの取れなくなった二機のゲルググを眺めながら無線のスイッチを入れた。

「モウラ、キースだ。済まないけど、『スイーパー』の手配を頼む。ゲルググが二機、行動不能だ。」

“了解。又派手にやったねえ。二人は大丈夫なの?”

心配そうにマークスとアデリアの安否を尋ねるモウラに向かって、キースは笑いながら答えた。

「多分。少なくともペナルティの往復マラソンをこなせる程度には、ね。」

「ねえマークス。貴方、負けた時の事を私に言わなかったわよねえ?」

非常電源に切り替わって赤く染まったコクピットの中で、ヘルメットを脱いで汗塗れの長い髪を振り解きながらアデリアが尋ねた。手首に掛けてあったゴムでポニーテールに自分の髪を結わえながら、

黙ってマークスの返事を待つ。

「…… ちよつと、マークス。何とか言ったら？ 隊長が言ってたペナルティーは何の事？ 往復マラソン？ はあ？」

「い、いやぁアデリア、悪い。負けちゃった。」

「…… 負けちゃったじゃないわよ！」

剣幕の表情まで伝わって来るアデリアの怒声に首を竦めるマークス。二の句も告げさせない勢いでアデリアの罵声がマークスの耳に叩き付けられる。

「また私のいない所で勝手に話を進めて！ マラソンって何処から何処まで往復するのよ、ウイングマンとしてエレメントリーダーに説明を要求するわ、く・わ・し・くね！」

「あ、いやぁその、つまりだな。…… ゲルググを使う代わりに負けたらペナルティーとしてアデリアと一緒にマラソンをするって

「……」  
「そんなの無線を聞いてりや誰だって分かるわよ！ 私が聞いているのは何処から何処まで往復するのかって事よ！ って言うか、何で私ものよ！？」

「いや、だから、基地から…… 此処、ま、で。」

「な、何で…… すって？」

アデリアが言葉を失ってシートに崩れ落ちる音がマークスの耳に届く。耳を欝てるマークスにアデリアの悲観した呟きが聞えた。

「基地から此処まで二十キロあるじゃない…… 往復で、何？」

フルマラソン？」

「ごめんっ！ アデリアっ！」

顔の前で両手を合わせて頭を下げるマークス。だが無線から流れるアデリアの声はマークスの謝罪も聞き入れられないといった風情で呟きを漏らしていた。

「…… なーんかおかしいと思ってたんだよね。用意されてるのが何時ものザクじゃ無くてゲルググだったし。喜んでたらモウラさんが気の毒そうに笑って肩叩いてくるし。整備班の皆が総出で見送

「つてくれるし」

「お、おい。アデリア？」

「いーわよ、もう。……こうなったら皆の期待に伝えて走ってやるうじゃないの！ もう、頭にきたっ！ マークスっ！」

「は、はひっ？」

引き攣った声で返答するマークスに向ってアデリアが大声で告げた。

「今日の貸しは高く付くからねっ！ 貴方は今度の非番の日、私の買い物に街まで付き合う事、いいわねっ！？」

「うそだろっ！？ 街ってサリナスまで二百キロ以上あるぜ？ そんなとこまで何買いに行くんだよ。」

「つべこべ言わないっ！ 女の子には何かと必要な物があるのよ、PX（売店）に売ってない物だつてあるんだから。全部奢れとは言わないから、せめてご飯と足のガソリン代くらいは出しなさいよ。」

「女の子って……俺と同じセッティングでモバイルスーツを動かす奴が何言ってるんだよ」

「何か言ったっ！？」

「それだけ喋る元気があるのなら、大丈夫そうだな二人とも。」

二人の口喧嘩を遮断するキースの声。外部からの供給によって切断された予備電源に火が入る。映像を再開したマークスのモニターに大寫しになった『スイーパー』と呼ばれる回収役の二機のザクが瓦礫を取り除いて、二人のゲルググの自由を確保した。機体を制御して瓦礫を振り払って立ち上がるマークスとアデリア。

「今日の演習は此れで終了だ。……後は分かってるよな。」

「了解しています、隊長。」

コクピットの中で敬礼するマークスとアデリア。二人の見上げる先に光る、勝者となったザクのモノアイが敗者となった二人には眩く、そして忌々しく感じる。

「OK、じゃ帰投しようか。先ず朝食を取ってからだな。消化剤は早めに飲んで置けよ、マラソンの途中で吐かない様にね。」



踵を反して穴の淵から立ち去るキース。その後姿に向つて二人は別々の場所から同時に舌を出して抗議の意思を示した。

「二人はどう？ キース。」

基地への道程を歩くキースに向つて、モウラが携帯を通じて尋ねてきた。ヘルメットを脱いだキースがその声を聞いて、片側だけのハンスフリーヘッドセットに付け替える。

後方警戒モニターに映る、とぼとぼとキースの後を付いて歩くゲルググをチラリと流し見ながらモウラの質問に答える。

「優秀だよ。少なくともトリントンにいた頃の俺やコウよりはね。」

普通のザクなら負けてた所だった。二ナさんのチューニングのお陰だよ、今日勝てたのは。」

「二ナの？」

「そうだよ、パープルトン技術主任の。アビオニクスが旧式のジオニック社の物からアナハイムの物に換装されたとは言え、此処まで使い勝手が違うとはね。取り回しや反応の仕方はどちらかと言うとジム・カスタムに近い。お陰で助かったよ、あいつ等に色々聞かれなくて。」

「それってコウと二ナの話？ …… 全く懲りないねえマークスは、何時までたつてもお子様ちやんぱで。 …… キース？」

てつきり笑い声が還ってくるだろうと予想したモウラの思惑に反して流れるキースの沈黙。その沈黙が何処かしら重苦しい物に感じてモウラは再びキースの名を呼んだ。

「どうしたの、キース？」

「あ、いや。 …… ちょっと気になつてはいるんだ。マークスのコウに対する拘り様は彼にとって危険なんじゃないかって。」

キースの言葉がモウラにも共通の認識を齎す。確かにキースの言う通りだ。コウと二ナの事、二人の話の聞くと云う事は即ち

「 …… デラース紛争の事実を知る事に、なる。そういう事ね。」

コロニーの落下事故として世間で公表されたあの事件の裏側を知る

事になってしまふ。とはいっても既に都市伝説の様にネット上では語り継がれている話だしねえ。事実が何処かしらから漏れ出してるつてのも事実だし。」

「俺やモウラ以上に、コウとニナはあの紛争のコアな部分を見た目撃者だ。実際シナプス艦長は極刑だったし、今でもあの事件の関係者が密かに処分されているって言う噂は良く耳にする。俺達が此処から離れられない事と言い、除隊してからのコウの事と言い、どっちも徹底的過ぎる。色々な事から考えてみても、他の誰かが

誓約書を取り交わさない外部の人間がああ的事件を新たに知る事は許されないんだよ。」

心なしに暗い声で語るキース。その言葉を受けてモウラは出撃前のハンガーの片隅でキーボードを叩き続けてモニターを睨み付けているニナの姿を思い出した。

「だからニナが徹夜でチューニングしてたのか。……嘘でもないからニナと口裏合わせて話を作っちゃえば？ ニナとコウは恋人同士だったけど、コウの浮気がばれて大喧嘩の拳句に別れてしまいましたーって。」

「あのコウが、かい？ あはははっ！」

陽気に語るモウラの話の聞いて大笑いするキース。笑い声がモウラのヘッドセットから溢れて随伴する指揮車の車内に漏れ出す。慌ててイヤパッドを耳から離れたモウラが、笑いの止まらないキースに向って愚痴った。

「そんなに大笑いする事無いだろ？ 例えばの話だよ、例えばの。マークスくらいならそんな話でも十分騙せんじゃない？」

「単細胞のマークスはね。でも、モウラ。アデリアはどうかな？」

「ああ、あの娘か。」

呟いて押し黙るモウラ。眉間に皺を寄せて考え込んだ拳句に。

「……駄目かも。あの娘は勘が鋭いからね。」

「だろ？ そうなったらあいつ等は絶対に本当の事を聞きだそうと

無茶な事を仕出かすに決まってる。アデリアは理性的だけど、どう  
いう訳かマークスの無茶を止めた試しが無いんだよ。」

「そりゃ、キース、」モウラがキースの言葉にっこりと笑った。

「男と、女だもの。あんたやあたしと同じおんな様に、ね。」

一粒の麦、地に落ちて

五月の太陽の南中点は天頂にある。景色から一切の影を無くした赤い大地の上を走る二人の姿が陽炎に揺らめく。

乾燥したカリフォルニアの気候は二人の流す汗を掻いた端から蒸発させて大気の中に溶け込ませる。それでも初夏を思わせる気温と真上から照りつける日差しは、二人が着ているパイロットスーツの上半身を肌蹴させるには十分な威力を孕んでいた。タンクトップ一枚になったマークスとアデリアは息を切らせて、体と喉を襲う渴きに耐えながら残骸の根元へと到着するなり徐に座り込んだ。おもむろ

「や、やっぱりキツイわ。私達、無事に基地まで帰り着けるのかしら」

顎を上げながら大きく口を開けて必死に酸素を取り込もうとするアデリア。その傍で膝に手を当てたまま上体を屈めたマークスが背中にしよったバックパックから水を取り出して、アデリアに差し出した。熱を孕んでお湯と化した水をアデリアは一気に頭から被る。

「うっひゃあ、気持ちいいっ！」

嬌声を上げるアデリアが残った水を一気に喉に流し込んで。水を浴びた長い栗毛の髪と藍色の瞳が日の光に揺れる。その光景を見詰めるマークスが突然顔を赤らめて地面を見詰めた。

不自然なマークスの成り行きに気が付いたアデリアがペットボトルを口から放して尋ねた。

「どうしたの、マークス？ 気分でも悪いの？ 顔、赤いよ？」

「い、いや、何でも、な、い……」

「何でも無くないでしょう？ そんな赤い顔して。貴方の方が持っている水の分負担が大きいんだから。バックパック貸して下ろして休めば少しは違うわ。」

心配そうな顔で立ち上がりマークスの傍に近寄るアデリア。それを拒む様にならずさりするマークス。アデリアが浮かべた心配そうな

顔はそのマークスの行動によって別の方向へとシフトした。

抗議するアデリア。

「マークス。何意地張ってんの？ 私心配してんだからね？」

「いや、アデリアの好意は身に染みてありがたいんだけど、こ、これは、その…… 違うんだ。具合が悪い訳じゃない。」

「具合が悪くなかったら何よ。自分の状態を包み隠さず話すって言うのが僚機バライてもんでしよう？ どうしたの、何があったの？」

立て続けに問い詰めるアデリアの顔を恐る恐る覗き見るマークス。膝の上にあつた手がゆっくりと持ち上げられてアデリアを指差した。その指を見詰めながら首を傾げるアデリア。

「？ 私？ 私がどうかした？」

「い、いや、アデリア。その」

マークスの指がアデリアの体をなぞる様に下がる。その動きに導かれて視線を下ろすアデリア。

毀れた水で濡れた自分の白のタンクトップが眼に入った。透けた事によって露になった上半身に生地が張り付いて、アデリアの生身を剥き出して、更に浮き上がらせて。

「！」

絶句したまま熟れた林檎の様に赤く染まるアデリアの顔。透けて見える両胸を思わず両手で隠して。その仕草に慌てふためくマークス。

「ご、ごめん！ わざとじゃないんだ、ただ、なんていったら良いのか、その」

「わ、私の方こそ、ご、ごめん。な、何にも考えてなかった。み、水を被ったのは私なんだから、マ、マークスがあや、謝る事ないわ。うん。」

しどろもどろに言葉を詰まらせながら背を向けるアデリア。ゆっくりと歩き出すその足を止める様にマークスが思わず声を掛けた。

「ど、何処へ行くんだ？」

「え、いや、ちょっと…… 服乾かしてくる。渴いたら戻ってく

るから、マークスは此処で待つて。」

言うなり脱兎の如く駆け出して残骸の角を曲がって姿を消す。後姿を見送りながら座り込んだマークスが大きな溜息を一つ吐いて、両手を胸の前に持ち上げて呟いた。

「気が付かなかった …… 結構胸でかいんだ、アデリアの奴。」

「 …… はあ、私ったら何やってんだろ。よりもよってマークスの前で。」

膝を抱えて蹲り、足元の地面を見詰めるアデリア。顔を赤く初める火照りは真上から差し込む日差しのせいだけでは無いだろう。治まらない動悸と羞恥による赤面と、自分の想いを悟られない様にマークスの傍を離れた事を考えて自己嫌悪に陥る。

「 …… に、しても暑いわね。こんな事ならマークスから水貰ってくるんだった。 どうせ見られちゃったんだもの、今からもう一回戻って、」

呟いてその姿を想像して。再び脳裏に蘇るほんの少し前の記憶とマークスの顔。思い出した瞬間に血が上り始める顔。思わず頭を振ってその考えを否定しながら。

「 だめだあ。どんな顔してマークスに話しかけられるか見当も付かない。 …… どうしよう。喉は渴いたし、あんまり休んではっかもいらんないし。」

頭を抱える。じりじりと照りつける太陽と自分の思考の纏まらなさに頭の中が焼け付きそうになる。ぐるぐると廻る思考に眼が眩んで足元の地面をじっと見詰めるアデリアの眼。その視界の端に砂を踏む音と共に、黒い影が差し掛かった。

高鳴るアデリアの心臓。こら、止まれっ！

「マークス、直ぐ戻るって言ったじゃない。お願いだから向こうで待つてて。」

激しい動悸がアデリアを襲う。赤面した顔を上げる事も出来ずに話しかけるアデリア。蹲ったままのアデリアに向かってその影はペッ

トボトルを差し出した。それを見詰めて、アデリアが笑った。

「ありがと、マークス。ごめんね、変に気を回させちゃって。もう大丈  
」

そのペットボトルを手を取ったアデリアが異変に気付いた。手に取ったペットボトルはまるで今まで冷蔵庫に入っていたかの様にひんやりとした感触をアデリアの掌に与えた。思わず振り仰いで影の主の正体を確かめる。

「誰!？」

思わず立ち上がって鋭い視線を影に向って叩き付ける。親切にもアデリアに水を与えた影の主はアデリアの剣幕に思わず後ずさりしながら、丹精に整えられた髭を歪めながら言った。

「おっと、突慳貪つっけんどんだなあ。そうびっくりする事は無いだろう? たまたま此処を通りかかったらお嬢ちゃんが蹲って泣きそうな顔をしていたんで、ついな。おせつかいだったかな?」

「おせつかいといいでに泣いてません! それより貴方は? 此処の地域は軍の演習場です、民間人の立ち入りは固く禁じられていると閉鎖区画の柵に表示してありませんでしたか?」

「まあ、そう固い事言つなよ。基地に用事があるんだが何せ普通の道だと遠回りなんでね。いつも時間を見計らって此処を使わせてもらってるんだが、こんな残骸の影で女の子が一人で蹲ってたら何事かと思うのが人情つてもんだろ? で、慰めてやろうと思って声を掛けたって訳だ。」

「な、なくさめるう!？」

あまりの男の言い草に憤慨するアデリア。何か言い返してやろうと正面に立つ男の姿を頭から爪先まで観察する。

年の頃は三十過ぎだろうか? 日に焼けた浅黒い肌と彫りの深い顔立ち。生やした髭が年齢より上の印象を与えるが、それほどの歳では無い様な気がする。上背はマークスより少しばかり高いから百八十センチ位か。だが使い古されてはいるが清潔そうなジーンズとインディゴ染めのダンガリーを胸元まで開けたその上半身に隠れた

筋肉の太さが男の身長を高くは感じさせない。

そして初対面の人間に対する腹立たしい位のその余裕。

どこかけちをつける所が無い物か、と見詰めるアデリアの眼。その表情を余裕綽々で楽しそうに観察する男。

と、不意にアデリアがニヤリと笑って口を開いた。

あつた！

「……残念だけど私、眉毛の無い『叔父様』に興味無いんです。ナンパされるのでしたらそういう趣味の方を探されたら如何ですか？」

「ま、まゆ」

思わず額を押さえて困惑する男の表情。自分の指摘が相手に対して思わぬ破壊力を秘めていた事に反撃の糸口を掴むアデリア。容姿の欠点を指摘するのは喧嘩の常套手段だとばかり、尚も煽るような口調で捲し立てる。

「もつともお、ペットボトルの水一本で引つ掛けようと言う位ですからさぞかし普段はおモテになるんでしょうけども、そんな手口に引つかかるのは余つ程窮地に陥った女性に限られるんでしょうね、食べ物が無くて飢えているとか、路頭に迷って困っているとか。何をどう迷ってこんな土地まで彷徨ってきたのかは存じませんが此処にはそんな女性はいませんから。『叔父様』のお眼兼ねに叶った女性が沢山いそうな場所にでもお移りあそばした方が」

勝ち誇って滔々と、得意満面に喋り続けるアデリア。額に手を当てたままその姿を声も無く眺めていた男が、突然大声を上げて笑い出してアデリアの暴言を遮った。予想外の反応を見せる男の前に言葉が中断して、アデリアは男に怒鳴った。

「何がおかしいんですか！ 先程も言いましたが此処は軍の施設内です、基地に用事があるのなら速やかに一般道に移動」

「いや、流石は『ベルファストの鬼姫』だ。見かけの淑やかさとは違って惚れ惚れするような気風の良さだな。参ったよ、俺の完敗だ。」



その言葉を聞いたアデリアが突然真顔に戻って身構えた。

『ベルファストの鬼姫』。それは此処に来る前に所属したヨーロッパ方面軍ベルファスト基地に於いてアデリアが起こした大立ち回りによって密かに付けられた『二つ名』。それを知っている者は軍関係者。特に情報関係に精通した者でなければあり得ない筈。

危険を察知したアデリアの神経が戦闘モードへと移行した。

「何故その名前を知っている？ 軍を代表して貴方の身分と官職の提示を要求します。速やかに答えなさい。」

冷静さを取り戻すアデリア。だがその声音の変化も気に留める事無く、今度は男が滔々と喋り始めた。

「勿論知ってるさ、アデリア・フォス伍長。いや、元曹長。去年起こしたベルファスト基地での集団暴行事件の責任を取らされて降格の上転任。お前さんは部下の女性が基地の隊員に暴行を受けた事を知って相手の宿舎に単身乗り込み、当事者とその仲間八人を袋叩きにした。残念ながらその相手が『ティターズ』であつたが為に、お前さんだけが罪を全部着せられてこの地へと来る羽目になつたと。…… どうだ、合ってるかい？」

「その事を知っているのは軍の中でも人事部が情報部に限られる筈。姓名と認識番号、所属を答えなさい。もし提示出来ない様であれば」

「あれば？」

脅しが効かない事が憎らしい。アデリアの問い掛けににやりと笑う男の顔を敵意に満ちた瞳で見詰める。その二人の対峙を打ち破る様にマークスの叫びが届いた。

「アデリア！ 何があつた!？」

アデリアの大声に事態の異変を察知したマークスが駆け込んで来て、二人の間に割り込んだ。アデリアの剣呑な気配を感じて同調するマークスの表情。険しい眼で睨み付けるマークスの視線を、何事の無いかのように見詰める男が愉快そうに言った。

「おっと、此処でナイトの登場か。君がアデリアだとすると」

「 マークスの陰に隠れたアデリアと立ち塞がるマークスが共に湛えた、変わらぬ敵意に満ちた表情を交互に見やりながら、

「 君は、マークス・ヴェスト軍曹、という事になるのかな？ 北米方面軍ニューアーク基地所属。命令不服従七回、出撃拒否五回、上官への暴言と懲罰となった対象項目には枚挙に暇が無い。ま、君の様な異端児には『テイターズ』に居る場所が無いよな？ 規則と規律に雁字搦めになった軍に『絶滅種』の生息する余地は無いさ。『忘却博物館』<sup>ロストスミニア</sup>送りが妥当な人事って所か？ 」

「 あんた、何者だ！？ 」  
気色ばむマークス。自分の経歴の疵を取り上げて並べ立てる男の素性を後ろに控えるアデリアと同様に疑って。

「 軍関係者ならば名乗るべき物があるだろう！ 所属と姓名を名乗れ。話はそれからだっ！ 」

マークスの要求を耳にした男の顔色が変わった。張り付いていた笑いが突如として消滅し、浮かび上がってきたのは鋭い眼光と微かな怒りであった。縄張りに侵入して来た来訪者を迎え撃つ虎の様な殺気を仄めかせて、男が言った。

「 恫喝は良くないな、坊や。目上の者 ましてや民間人に対して言う台詞じゃない。そんな事だからこんな僻地に送られるんだ。未だにその辺りが矯正されていない所を見ると、この基地の隊長はさぞかし部下に甘甘なんだろうな、全くどっという教育をしているんだか。 」

「 貴様、隊長まで 」  
言うなり頭に血の上ったマークスが、アデリアの制止の声も無視して男に殴りかかった。全身の力を込めて繰り出す右ストレートが男の顔面を掛けて。打ち抜けば昏倒は必至、後の事は全く視野に無いマークスの拳が男に迫る。その拳の織り成す軌道を見据えた男が、激突寸前で軽く頭を動かして回避する。

「 ！ 」

男のこめかみを摺り抜けるマークスの右腕。次の攻撃を繰り出すととするマークスの眼前に、あるう事が男の顔が勢い良く迫って来た。マークスの動きに合わせて一步踏み出してきていたのだ。

「なにっ!？」

男の顔がマークスの眼前で後ろを向く。その瞬間に浮き上る体。地面の感触を失った両足が男の腰を支点に持ち上げられて。

逆さになる天地。目も眩む様な浮遊感。モビルスーツの機動でも味わった事の無い旋回運動を体感した拳句に、マークスの体は強かに地面に叩き付けられた。巻き上がる砂塵と突き抜ける様な衝撃。受身の取れなかったマークスの全身を激痛が襲った。

「ぐっつ!!！」

「マークスっ!! …… よくも、マークスをつ!!」

一本背負いを掛ける為に捉えていたマークスの腕を、男が離れた一瞬の隙を付いてアデリアが蹴りを放った。振り返った男の目に映るアデリアの膝。脇腹目掛けて放たれたと思われるその蹴りは膝を支点にしてその向きと軌道を変化させた。柔らかに動く膝の関節を支点として繰り出された足は一気に男の首元目掛けて空間を直走る。完全に男の不意を付いたと思われるその蹴りを、男の差し出した手がいともあつさりと捉えた。驚愕に眼を見張るアデリア。

「…………… 成る程、これが噂の『右上段回し蹴り』か。なかなかの威力だが」

アデリアの足を掴んだ男がそのまま力一杯押し戻す。バランスを崩したアデリアはそのまま地面に投げ出された。

「そんな蹴りじゃあ精々戦争知らずのお坊ちゃまパイロットに通用する程度だ。護身術程度にはなるだろうが、それ以上じゃあ無い。」

言い放つ男の視線を他所に素早く起き上がり、倒れたままのマークスを庇う様に男の前に立ち塞がるアデリア。未だに変わらぬ戦意に溢れる視線を目にした男が、ポツリと呟いた。

「私は、ヘンケン・ベツケナー。元連邦軍中佐で、今は除隊してこ

の先にある農地復興プロジェクトの指揮に当たっている。まあ、言うなれば組合長みたいな者だ。…… 此れでお気に召したかな？

「その階級名を耳にした二人の体が硬直した。剥き出しになっていた敵意があつという間に霧散して、困惑の色だけが二人の瞳に残されて。」

「中佐、だつて？」

苦しげに吐き出す呼吸交じりに声を上げ、起き上がるマークス。手を貸したアデリアの肩に腕を回して立ち上がる。

「中佐つて事は、ウエブナー司令と同じ階級つて…… 事？」

呟きながら条件反射の様に敬礼するアデリア。慌ててマークスがそれに続く。その仕草を見たヘンケンが殺気を収めて、再びにこやかな笑いを浮かべて二人に言った。

「おいおい、俺はもう民間人だ。敬礼なんかせんでいい。それよりどうだ、今日の所はお互い不問と言う事で手を打たんか？ 民間人に手を上げたとばればまたぞる懲罰の対象に成り兼ねんし、ましてやその民間人に叩きのめされたとあつちゃあ何かとばつが悪かるう？ 代わりと言つては何だが、帰りは俺が基地まで送つて行つてやるう。どうだ？」

「いえ！ その様なお気遣いは無用であります。知らぬ事とは言え数々のご無礼失礼いたしました！」

アデリアの肩に体を預けたまま敬礼を続けるマークス。アデリアは何も言わずにマークスに発言を任せている。

「まあ、そう言うな。第一その体であと二十キロも走れる訳が無いだろう。それに走れたとしてもゲートで必ず止められるぞ？ そんな土塗れの二人を見たら警備員が何と言うかな？」

「それは、その 何とか言い訳をして、二人とも転んだとか何とか。」

「お前さんは嘘がへただなあ、ヴェスト軍曹。直ぐ顔に出る。」

「…… そうは思わんか、フォス伍長？」

「はっ！ その通りにあります、中佐殿。自分もそう思います！」  
大声で答えるアテリアの横顔をおいおいと言った顔で眺めるマークス。二人の姿を眺めたヘンケンが楽しそうに言った。

「お前さん達のそう言う所は微笑ましい限りだな。まあ、此処は俺の顔を立てるといふ意味でも俺の提案を呑んでくれ。……俺もいい眼の保養をさせて貰ったそのお礼とでも思ってくれればいい。」  
ヘンケンのその言葉に思い当たったアテリアが真っ赤になって、胸元を両腕で隠した。支えを失ったマークスが突然の事に呆然となつて崩れ落ちる。

「ご、ごめん！ マークス！」  
「俺の後から着いて来い。車に着くまでは振り向かないからパイロットスーツを着るといい。……車は良いぞ。モビルスーツのコクピットとは違って冷房が効いてるからな。」

踵を反して二人に背を向けるヘンケン。その遙か先の軍用車専用道に駐車された車を目指して、右手のキーをくるくると指の先で回しながら歩き始めた。その後姿を見ながら腰に巻いていたパイロットスーツの上着をいそいそと着始める二人。

「……ねえ。」  
痛みに耐えて苦しそうに上着を着ようとするマークスの耳元でアテリアが囁いた。

「何だよ、いきなり？」  
「どう考えても怪しくない？ 身分証も提示しないし、やたら強いし。絶対に額面通りの『元連邦軍人』じゃ無いわよ、あれ。」

「強いのは認める。でも僕達の経歴をあそこまで詳しく知ってるなんて正規に所属した連邦軍関係者意外考えられないよ。司令と同じ階級だったとしたらアクセスレベルは4だ。知っててもおかしく無いだろ？」

「実は内部に潜り込んだジオンのスパイ、とか？」  
「……何しにこんな所まで。スパイするならジャブローだろ？  
こんなとこに来たって得る情報なんか」

「…… 無いわよねえ、確かに。」  
パイロットスーツを着終わった二人が徐に立ち上がった。手を貸そうとするアデリアの行為を押し留めて、マークスはゆっくりと歩き始める。その横にびったりと寄り添って、庇う様に歩くアデリアの姿。

「まあ、此処は素直に好意を受けようぜ、アデリア。どうせ基地に着けば分かる事さ。…… それに、いい人っぽいじゃないか。」

「貴方って人が良いのね、地面に叩きつけられたって言うのにそんな言葉が出るとはね。貴方の人を見る目がどうだか分からないけど、私には」

そう言うとアデリアは遙か前方を楽しそうに歩くヘンケンの後姿を睨み付けて毒づいた。

「…… ただのセクハラ親父にしか見えないわよ。」

嘗て宇宙を駆けていた頃は、天地の存在しない空間で自分の位置を知る為の重要且つ不変の指標たる太陽。その輝きは雲一つ無い星の大気を突き抜けてコウの体を火照らせる。

滴る汗を大地に滴らせながら腰を屈めて大地に芽生える雑草を丹念に引き抜くその腕を、成熟した麦の香りが包み込む。頭を覆う麦藁帽子の影がコウの目の前に地面に小さな影を落とす。その影を追って追われてコウの体は麦の並びを掻き分ける。

「…… ふう。」

吐息交じりの声を上げてコウが折り曲げた腰をゆっくりと伸ばした。凝り固まった腰の筋肉が押し縮められる痛みと伸ばされる腹筋が僅かに痙攣して。手にした雑草を腰に回した籠に収めるその動作でさえ億劫に感じる。

だが其処に齎される痛みこそが今のコウには生命を実感させる唯一の情報であった。悪夢を忘れ、コウ・ウラキという一人の人間に立ち返る為に必要な唯一の。

真上からの日差しを受けて出来る帽子の鏝ごしに眺める風景。コ

ウの周囲二百メートル四方に広がる広大な麦畑は収穫の時を迎えて金色こんじきの野と化していた。実った種を外敵から守るように天を突く穂先が光煌いてコウの視覚を埋め尽くす。その光を見入っているコウの傍をそよ風が駆け抜けて。

草いきれと共にコウの全てを押し包む生命の謳歌。台地を覆う風ウイの振鈴ンドチャイム。カラカラとキラキラと、言葉では形容し難い自然の協奏曲がコウの存在を包み込むように。その音と揺れる煌きの中にただ一人身を委ねて立ち尽くすコウ。

「綺麗な音色ね。」

忘我を誘う音色に負けない艶やかな声がコウの背後から儼かに流れる。浸る意識に疵の一つも付ける事の無い声音を耳にしたコウが静かに声の主を振り返った。

肩まで伸ばした濃い翠の髪をそよがせながら微笑んで見詰める女性性がそこにいた。

「こんにちは、セシルさん。……ええ、本当に。」

「……謳っている様。そうね、『豊穡の賛歌』と言った所かしら。ウラキさんの努力の賜物ね、この畑の麦達は。ハード・レッド・ウィンター種（硬質小麦。パンの原料に最適。育成が難しく品質にばらつきが出易い。冬蒔き）をよく一年で此処まで……。」

セシルの褒め言葉にコウは恥ずかしそうに微笑んで答えた。

「いえ、此れもセシルさんやヘンケンさんのお陰です。何の知識の無い俺に色々力を貸していただいて。」

「あら、お上手。自分の才能だとはおっしゃらないのね？」

そう言っているところと笑うセシル。アイボリーのチノパンに七分袖のカットソーというラフな出で立ちにも拘らず、その体から滲み出る気品は一つも損なわれる事が無い。周囲の空気ですら和ませるその人となりを眩しそうに 決して日の光のせいではない

見詰めながらコウは尋ねた。

「そう言えば今日はヘンケンさんは？ てっきり一緒にいらっしやるものだと」

「主人の事？ ごめんなさい、本当は今日にでもお伺いして様子を見ようって言っていたのだけど、急に基地との話し合いの話が舞い込んで来て。」

「基地？ オークリー基地にですか？」

その言葉を口にする度に一抹の痛みを胸に覚えるコウ。表情には出ないその痛みを知ってか知らずか、セシルは静かな声で説明した。「此処の所小麦の取引価格が上がっているでしょう？ うちの組合で出荷される品物の一部は基地に直接納入されるのだけど、小麦だけは半年前の価格で維持契約を結んでいるの。大分前から契約の見直しをうちの人が基地の兵站部に申し入れをしていたのに無しのつぶてだったのが、昨日、やっと話し合いに応じるって返事が来て。朝一番に喜び勇んで出掛けたわ。」

「……へえ、そんな事が。」

事の経緯に感心した様に呟くコウに頷くセシル。微笑みながら言葉が続けた。

「うちの人もあれはあれで皆の生活を守る為に一生懸命なのよ。幾ら政府の援助があるからと言っても何時までも頼る訳にはいかないし、補助金の枠が外された時に少しでも手元にお金が残る様に今からして置かないと。いざと言う時に困った事になるわ、農業は他の仕事と違って計算が出来ない仕事だから。」

「でも、それはセシルさんの思惑ですよ、多分。」

コウは何度もヘンケンの家を尋ねて公私に渡って世話になっている。その過程でこの夫婦の役割分担が家庭内でどういう風に構築されているのかを知っていた。

豪快なヘンケンと対照的に物静かで穏やかなセシル。だが組合の事からベツケナー家の家事一切に到るまでセシルが切り盛りしているのは明白であった。セシルがいなければ髭剃りの一つも見つけられないヘンケンにそんな細かい事が出来る筈が無い、と。

しかしヘンケンもセシルもその事を変に隠したり取り繕ったりする事は無い。互いが尊敬し合い、認め合う間柄。コウはベツケナー



家における二人の関係を好意を持って、そして羨ましいとさえ思っていた。

コウの質問にっこりと笑ったセシルが言った。

「私の言った事は主人の言った事。私の思った事は主人の思った事。逆は違いますけど、私が考えた事を主人が判断するのは夫婦として当然の事よ。例えそれが間違っていたとしても　夫婦ですもの、私は主人についていくだけ。」

セシルの言葉がコウの心に重く押し掛かる。

脳裏に浮かんだ女性の面影に思いを馳せて。一時も忘れた事の無い、忘れられないただ一人の、そして唯一の。

二ナ・パープルトン。

アイランド・イズでの出来事をひた隠しにしたまま、変わらぬ関係が続けようとした半年。だがコウの中の二ナに対する蟠りわだかまは日増しに大きくなって。持ち応えようとする二ナの気持を思う度にそれはやり場の無い怒りとなって、捌け口を求めて。それでもお互いを傷つけまいとする思い遣りにも似た恐怖心が共有する記憶と言う太い幹から猜疑の枝を次々と伸ばして、葉を付けて。

二ナ、どうして君はガトーの名を呼んだ？

どうして僕に銃を突きつけた？

なぜ、地球に　　僕の所へ還って来た？

知らずの内に眉間を寄せて険しい表情を浮かべたコウの耳に、セシルの両手を打つ音が響いて。

「そうそう。そう言えば私、ウラキさんにお尋ねしたい事があったの。お会いする度に何時も聞きそびれちゃって。」

冥界の淵に沈む魔術師を呼ぶ様なその音と涼やかな声に、コウの意識は元居た麦畑の海原へと帰還する。はっとして落とした視線を、変らず其処に佇むセシルに向けた。

「俺に……ですか？」

尋ねるコウに向ってにこやかに頷くセシル。彼女が浮かべる他意の無い無邪気な笑顔が、今コウが心に浮かべた事についての質問で

はないのかとコウの心を身構えさせる。

だがコウの心中など何処吹く風と、セシルはコウに尋ねた。

「なぜ、ウラキさんは麦を選んだの？」

「俺が…… 麦を選んだ、理由ですか？」

途切れる声は安堵の証、そして再び蘇る在りし日の記憶へとコウを誘って。

このオークリーの地へと赴任して来たあの日に目にした光景、そして何もかも失ったと思い込んでいたその手に握り締めた、たった一つの。

セシルの問い掛けを呟く様に反芻するコウの顔をじっと見詰めて、セシルが言った。

「そう。だって此処に来た人の殆どは皆最初に何処でも育つ、芋とか蕎麦を選択したわ。なのにウラキさんはいきなり麦って言い出すんですもの。」

主人も驚いてたわ、こんな所でいきなり時間と手間の掛かる麦を選ぶ奴は端から補助金目当てに来た食い詰め軍人か、そういう趣味のある奴に違いない、って。…… 今だから正直に言うけど私もあまりウラキさんの事は信用してなかったの。

此処での穀物の栽培はうちの主人を見て知っているから。なのにあんなに荒れた土地を機械も使わずにたった一年でこんな立派な畑に仕上げるなんて、並大抵の努力じゃ出来ないわ。…… ねえ、ウラキさん。貴方はどうして麦を選んだの？」

理由を尋ねられたコウの眼がセシルの姿を通り抜けて、握り締めた掌を思い出す。開かれたその中に残った、一房の麦。

「…… 一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、此れを失い、此の世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。」

訥々と語られるコウの言葉に静かに耳を傾けるセシル。微かに残る言葉の余韻を引き立てる麦の音。世界を彩る至善の音色は二人の時を止め、行き着く当てを求めない未来にまでその旋律を響かせて。

セシルがにこりと笑って、言った。

「素敵な言葉ね。まるでその言葉がウラキさんの全てを支えているように。」

遠くに投げ掛けた視線の焦点を言葉の主まで引き戻したコウが、セシルの言葉を受けて恥ずかしそうに答えた。

「聖書の一節です。一粒の麦が地に落ちてても、それが死ななければ麦は一粒のまま。でもその麦が死んで種となれば、其処から多くの麦を生む事が出来る。」

「後半の意味は？」

「分かりません。今の俺には遠すぎて……でもそれが分かれば何かが変わるような気がするんです。少なくとも自分の中にある、何か。」

悪夢を思い出す。差し出された手を取る事を認めない二ナ。遠ざかって行った彼女の、そして戸惑う自分の進むべき未来への道程がその言葉の中にきつとある筈。

「変わると良いわね。ウラキさんの為に。」

慈愛を込めて呟くセシルの言葉がコウの心に浮かんだ悪夢の容を雑ぐ様に斬り掃う。黙って視線を合わせるコウとセシル。紡がれた言葉の意味を互いに肯定する様な微かな微笑が二人の顔を揺らして。「そろそろ行かなくちゃ。」

セシルはコウの顔を見詰めたままで呟いた。その視線がゆっくりと野に霞むオベリスクを遠く眺める。

「これから、ですか？ 何処へ？」

「……基地まで。」

「え……」

コウは思わず辺りを見回した。自分とセシルと一面の麦の他には何も見当たらないと思われたその片隅に、人目を遠慮する様にちよこんと置かれた自転車がコウの目に留まった。

「セシルさん、まさか」

真顔になって尋ねるコウの表情を不思議そうな顔で見ながら、さ

も当然の様にセシルが答えた。

「そうよ、自転車。多分ウラキさんが一生懸命に畑の手入れをしてるだろうと思つて、車を置いて来ちゃった。」

「い、いえ、そうじゃなくて。此処から基地まで四十キロありますよ？ 幾らなんでも自転車なんかでいける距離じゃないですよ。」

「そう？」

そう言つて形のいい掌を頬に当て、首を傾げて考え込むセシル。

魅了的な仕草に見とれるコウの視界の中でセシルは何かを閃いた風情で、ぱつと表情を晴れやかにして言った。

「大丈夫よ。四時間もあれば基地に着くじゃない。帰りは主人に送つてもらえばいいんだもの。」

「それじゃあ基地で待たされるヘンケンさんが可哀想ですよ。：

分かりました。俺のバイクで良ければ基地まで送つていきます。ここで少し待つて貰えますか？ 今家に帰つて取つてきます。」

コウの足が麦の並びを掻き分けてセシルに向つて歩き出した。そこに申し訳なさそうに尋ねるセシルの声が届く。

「え、でもまだお手入れの途中なんじゃないの？ そんな、お仕事の手を休めてまで」

「いいんですよ。もう大体終わりましたから。其れに」

コウの足が畑から一步を踏み出した。その足元、麦の陰からゆっくりと出てくる黒猫の姿。セシルはエボニーの姿を見るなり、しゃがみ込んで手を差し出した。

「あら、エボニー。ご主人様のお手伝いしてたんだ。」

セシルの手に擦り寄るエボニーが答える様に一声鳴いて、セシルの顔を見上げる。小さな顎をセシルの手が撫で上げただけで、エボニーは満足そうに喉を鳴らして円らな眼を細めた。

「こいつのご飯もやらなきゃいけないんで、ついなんです。」

コウはそう言つとセシルの自転車に向つて歩き出していた。ハンドルを握つてスタンドを倒して、くるりと向きをセシルの方へと向けて。決定された事の様に振舞うコウの動きを見て、微笑みながら

「じゃあ、お願いしようかしら？　ウラキさんが帰ってくるまで、私は此処で待ってるわ。もう少しこの景色を眺めていたいし。」

満面に湛えられたセシルの笑顔がコウの気持を和ませる。古傷を思い出させる痛みに苛まれたつあったコウの心を包み込む様な、癒しの御手にも似たセシルの声が弱気になる背中を押して。

「はい。こちらこそお願いします。　　じゃあ。」

言葉少なくそう告げるとコウは踵を反して、自転車を押しながら家路を辿り始める。その傍を足並みを合わせて小走りに寄り添うエボニーの小さな体。

ゆつくりと遠ざかって行く二つの影を眺めながら、セシルは小さな溜息を一つ吐いた。

悲しくて、険しい、秘めた双眸を浮き上がらせて。

「だから、小麦の値段が上がってるんだって何度言やあ解るんですか？ 他の所の取引価格が上がってうちだけそのままじゃあこつちだつて割に合わんでしょうが！」

「い、いや組合長。君の言う事ももつともだが、主食の値段を上げるといふのは基地の予算的にもちよつと」

二人の男の押し問答がオークリー基地内の電算室に響き渡る。その一角に置かれたデスクトップのモニターには会話の内容が次々に文字で表示されていた。

記録された会話は自動的にハードディスクに蓄積されある程度の容量に達した所で遠く離れた北米方面軍本部であるカリフォルニアベースのログ・ディレクトリへと転送される仕組みになっている。そこに保管された会話は何らかの犯罪に類する事態 主にクーデター が勃発した際に重要な証拠としての合法性が認められた、『盗聴法』に準じて行われる陰湿な盗聴記録である。

「予算？ そんな物軍なんだから幾らでも理由は付けられるでしょうに。モバイルスーツの予備部品一つ余分に水増しして請求するだけで、どれだけの農家が助かる事か！ こつちは連邦の政策の一環としてあの荒地を耕してるんですよ？ それに陸の孤島みたいなこの基地へうちが品物を納入しなくなったら、司令は兵站部に対してどう責任を取るつもりですか？」

捲し立てるヘンケンの音量は音声レベルのインジケータを端から端まで埋め尽くして。脅迫紛いの発言を受けたもう一人の男が怒鳴り声を上げた。

「君っ！ 私を脅す積もりかね！？ 仮にも過去に軍に在籍した者が、その言い草はなんだっ！？」

「全く、ジャミトフの考えそんな事だな。ここまで猜疑心が強いと

その内、誰もついて来なくなるぞ。」

擦り切れたソファにどっかりと腰を下ろして、煙草を燻らせながらヘンケンが小声で言った。背後の壁に駆けられた絵画に貼り付けられた、小指ほどの大きさのICレコーダーが二人の男の押し問答の続きをがなり続けて。

ヘンケンの正面に坐った初老の男がヘンケンに向って灰皿を勧めながら、絵画を流し見て言った。

「奴にとって『軍』とは『ついて来る物』ではなく、『従える物』なんでしょうな。まあ、現場知らずの文官上がりにはよくある傾向です。理想と現実が同じ物だと思ひ込む、厄介な持病です。」

「だが、その持病持ちが率いている『テイターズ』が今や連邦軍の主力となりつつある。奴の抱える理想は現実への道を歩み始めた…… このまま行ったら『軍閥政治』どころか『恐怖政治』に成り兼ねんぞ。そんな物の為に何人の人間が死ぬ事か。」

吐き棄てる様に言うヘンケンは煙草を揉み消した。残り香を伴って漂う紫煙が天井に到達する頃、ドアが二回ノックされて一人の老人が入って来た。ヘンケンの顔と部屋の匂いをかいだ瞬間に、老人は呆れ顔を浮かべてばやく。

「また軍の施設内で煙草を吸いおつて。何人の人間が死ぬかを思案する前に、自分の体を心配したらどうじゃ？」

「なんだ、聞いていたのか、ドク。」

肩越しに投げ掛けられた毒舌に振り返って片手を上げるヘンケン。「ドク」と呼ばれたその老人はヘンケンの挨拶にも答えず、すたすたと向かい側のソファへと回り込んで小脇に抱えた分厚いファイルの束ごと勢い良く腰掛けた。

「いずれお前さんの定期健診の結果を改ざんしてセシルに見せてやるうと思つとるわい。なんなら肺の所を真っ黒に塗り潰そうかともな。何時までたつても宇宙での悪癖が直らんのじゃつたらそれ位の事は許されるじゃろう。」

「勘弁してくれよ。『スルガ』からの付き合いじゃねえか。」

そう言つて笑つと挑発する様に煙草の箱に手をやった。抜き出すととするヘンケンの手を腕組みをしながら睨み付ける老人。流石に気が引けたのか、ヘンケンはその手を引つ込めながら笑つた。

「分かつたよ、分かつた。これからはドクの言い付けを守つて少し減らす様に心がける。だから機嫌を直して」

取り成そうとするヘンケンの言葉を聞いた老人はフン、と鼻白んで吐き棄てた。

「出来もせん約束に興味は無いわい。なんじゃ、年寄りの戯言だと馬鹿にしおつて。」

憤る老人が噛み付く様にヘンケンに口答えして、其の表情と口調に苦笑しながらヘンケンの手が、再び煙草の箱を手にとつた。口に啜えて火を点ける様をやれやれ、といった表情で眺める向かい側の二人。

ヘンケンが一口目の煙を吐き出した後、肩章に二つ星を付けた初老の男性が口を開いた。

「糧食の値段の上昇、ですか。やはり本当なのですか？ 軍が戦争の準備を始めているという噂は。」

眉を僅かに顰める其の表情に樂觀的な要素は微塵も垣間見えない。デラーズ紛争以来目立つた小競り合いも見られなくなった連邦の勢力範囲内での社会状況の変化は、数値と言つ形態をとつて何かの前兆を表していた。其れを『戦争』と言つ表現でヘンケンに尋ねる男の顔を、ヘンケンは上目遣いに見つめて言った。

「ウェブナー。軍の佐官がそんな事を軽々しく口にするもんじゃない。俺が掴んだ状況はあくまで不確定な要素に過ぎん。ただ此処の所の香港（香港先物取引市場）やドバイ（産油国価格協議委員会）の値動きを見ていると、軍需に関する品物だけが急激に上昇している。禿鷹連中の投資に偽装している様だが、それにしても大規模で節操が無い。」

「では、ヘンケン中佐のお考えは？ この値動きが軍によるものではない、との見解を？」



「俺は民間人だからあえて言わせて貰おう。……これは『備蓄準備』の為の軍による買占めだ。ルオの所にも非公式に軍から打診があったらしい。独占交渉権をちらつかせられてな。」

ヘンケンの表情が陰りを見せた。平和の影で打ち鳴らされる軍靴の響きを耳にして心躍る者などいない。

「……と、なると相手はどこだ？ 今の状況ではアクシズしか相手がおらんが。」

「そうとは限らんど、ドク。そんな目先の事に囚われるジャミトフとも思えん。第一奴は財務局の元次官だ。数値に関する戦略には一日の長がある。これだけの情報で迂闊に動き出す訳にはいかん、其れこそ俺達の様な反勢力を炙り出す為の罠とも限らんしな。」

「姑息な事を。」

恐らくヘンケンの危惧通りであろう其の洞察を受け入れた老人の表情が嫌悪に歪む。老人の顔を見つめながらヘンケンは言葉を続けた。

「だが、表立って動いていない所を見ると奴等も直ぐに事を起こすといった訳ではない様だ。連邦内に強い発言権を持つ勢力がやってるにしてみれば動きが小さすぎる。やるならもつと派手に買占める筈だ、それこそ俺達の畑を土地ごと買って行く位、派手にな。」

「という事は、現段階では『準備の為の準備』を始めている、といった所ですか？ 我等の様な反勢力の動きを牽制して、封じ込めようとする意図を持った？」

静かに語られるウェブナーの分析を聞いたヘンケンが、軽く目を閉じた。何かを思い浮かべる様な表情で沈黙を守った後に呟く。

「俺にも良く分からん。ただセルがこんな事を言っていた。……」

「『テイターズ』には切り札が欠けている、と。其の切り札が到着するのはあるいは出来上がるのを待っているのではないかと。」

危機的な状況を示す赤い点滅が実験棟内に区画された狭い分析ブ

ースを染め上げた。狂った様にキーボードを叩いて状況の回復に努めようとする三人のオペレーターの苦労を嘲笑う様に、彼等の前に設置されたモニターの数値は設定された安全境界の上限を大きく超えて尚も上昇を続けている。

これ以上の復旧は困難と判断したオペレーターの一人が冷や汗に塗れたヘッドセットに向って叫んだ。

「所長、これ以上の実験の継続は危険です！ 直ちに回路を閉鎖して」

「そのまま続行しろ。」

耳にした者全ての心胆を凍えさせる様な、姿無き悪魔の囁きがオペレーターの人としての良心を握り締めた。我が耳を疑ったオペレーターが慌てて叫ぶ。

「しかし！ これ以上の続行は被験者の生命維持に重大な問題が発生する可能性があります」

血走った目がモニターに表示されるバイタルサインに向けられる。心拍数280、血圧300、呼吸回数180という数値は一瞬後に心臓が爆発してもおかしくない程の状況が被験者の肉体に発生している事を示している。

「これ以上は、彼女が死んでしまいますっ！」

「死ぬ？ フン。」

ヘッドホンから流れる声がオペレーターの悲鳴を一蹴して。

「代わりは幾らでもいる、構わない。データだけを収集しろ。お前達に手抜きがあればそれだけで被験者の死が無駄になる。これ以上犠牲者を増やしたくないのなら」

其の時、悪魔の声を覆い尽くさんばかりの絶叫がブース内のスピーカーから迸った。何かに臓腑を掴み上げられ、捻じ切られる人の咆哮。人が放つ事の出来る全ての周波数を其処に叩きつけて。耳にしたオペレーターが立ち上がって目の前の硝子越しに設置された素材剥き出しのコクピットに注がれた。

素材を通して其の内部で繰り返り広げられる阿鼻叫喚の地獄絵図。悶

絶する少女の肉体、大きく開かれた口を埋め尽くす震える舌、そして、

自分を慕ってくれた、信じて実験に臨んだ少女のあどけない笑顔が。

脳裏に浮かんだ其の面影を掴む様に、オペレーターの手が手元のレバーへと伸ばされる。実験棟内の全ての電源を遮断する緊急停止レバー、収集され続けるデータが其の行為によって失われる可能性を秘めた最終手段を、そのオペレーターは目の前で死の淵に佇む少女の為に行使しようとする。

「馬鹿が。」

彼が聞いた此の世で最後の、蔑む声。

立ち上がった彼の背後で響く、少女の咆哮に紛れた小さな発砲音。撒き散らされた赤い液体と透明な液体と、柔らかな白い内容物が彼が今まで睨み付けていたモニター前面にぶち撒けられた。

額に開いた大きな射出口を隠す様に前へと崩れ落ちる彼の体。着弾の反動は一瞬にして命を失った彼の肉体を強かに制御パネルへと叩きつけて、モニターを床へと弾き飛ばす。

断線するモニター。消失する数値。それに同期するかの様に少女の咆哮も断絶する。

取り残される沈黙の中を赤い体液の滴る音だけが鳴り響いて。

「お前の代わりも、幾らでもいる。馬鹿が、憲兵の手を煩わせやがって。」

流れる沈黙と同じ様に取り残された二人のオペレーターの、凍り付いた五感に向って悪魔の声が呟いた。

「何故、結果が出せんのだ!？」

嘗て受けた拷問によって著しく低下した視力を補う為の補正眼鏡をぎらつかせた巨躯の男が怒鳴り声を上げた。其の出で立ちに見合った野太い声がまるで二階から投げ落とす様に、目の前に佇む白衣の小男に叩きつけられて。

だが怒りの対象とされた其の男は何の感情も持たない声で、巨軀の男の怒りに静かな声で答えた。

「結果が出ないのは私共のせいでは有りません。それもこれも貴方が開発提供するモジュールに問題があるのです。」

平然と言い放つ白衣の男の顔。煽る様な言葉に怒りの嵩を高めた巨軀の男は顔を歪ませて吼えた。

「貴様、軍の開発機関を愚弄するかつ！ 自分の無能を棚に上げての其の物言い、断じて許せん！」

「問題があるから問題があると申し上げているのですよ、バスク・オム大佐。」

洗い晒した蓬髪ほうはつを根元から掻き揚げながら、白衣の男はバスクの眼鏡を睨み上げた。鋭く伶俐な視線に射抜かれたバスクの口がそれ以上の言葉を失う。

「見なさい、此れを。…… 当研究所に在籍する被験者の全リストです。そこに記された数値が現す様に、彼らの能力は既にロールアウトした強化人間のレベルを遥かに凌駕している。問題なのは貴方方の欠陥品によって貴重な検体が次々に消耗しているという事実だけです。貴方の言を借りて言わせて貰えるならば、此方の方こそ貴方方の無能に付き合っている暇は無い。」

「おのれ、一科学者の分際でっ！」  
堪忍袋の緒が切れたバスクが右の腰に手をやった。そこにぶら下げられたホルスターのラッチを外す様を見詰める白衣の男。自分の命を脅かすその行動にも何の恐怖も持たない声で言う。

「どうぞ、バスク大佐。私を殺しなさい。それで貴方の気が済むというのなら…… 私も自分の命になど興味が無い。私が興味があるのは私の研究が正しいかどうか、つまり『実証』のみです。貴方方の不手際によって邪魔されているとは言っても貴方方の資金でこの研究所が運営されているのも事実。雇用主がその威光を笠に着て暴拳に出た所で、雇われている私の身では文句の言い様がありませんからね。」

動きの止まるバスク、微動だにしない白衣の男。

バスクの全身から放出される殺気が殺風景な所長室内の空気を重苦しい物に変える。

広いデスクとその上に置かれたモニターとキーボード、そして来客の為に置かれた一揃えのリビングセットだけが置かれた広大な空間を殺意の沈黙で満たしてゆく。だかその重圧の中を平然と佇む白衣の男。次の瞬間には自分の命を潰そうとしている男の顔を眼を細めて眺め続ける。

「…………… どうしました？」

まるで自分の掛けた言葉で起こる事の成り行きを観察したいが為に放たれる問い掛け。バスクの手がホルスターのラッチを止め直して、男の顔を見た。

「貴様の思惑通りに事が運ぶというのも納得がいかん。…………… 命

拾いをしたな。貴様が先任のDr. ナカモトの紹介でなければこの瞬間にも収容所送りにしてやったものを。」

「ナカモト？ あんな下衆と……………」

吐き棄てる男の口。その名を聞いた男の表情が歪んだ。秀麗に見えるその顔を湧き出す怒りに委ねたまま、男の声がバスク目掛けて叩き付けられる。

「一緒にされては心外だ。奴はまだ開発の余地があるにも拘らず不完全な強化人間を世に送り出した、何人も何人も。人である事を尊重する余りに人格などと言う不確かな制御装置に手を着けないまま逃げ出した哀れな男だ。あんなのは科学者とは言えない、寧ろ『フラナガン』の名を穢した……………」

怒りに濁った目がバスクの体を突き抜けて宙を踊る。口角を引き攣らせながら吐き出された感情。

「…………… 愚か者だ。」

『フラナガン機関』と『ニュータイプ新人類』。『一年戦争』終結後にジオンと連邦政府の間で締結された和平条約の副産物として関係者の間に転

がり出た、宇宙世紀初頭を飾る言葉として代表されるこの二つのキーワード。

フラナガン・ロムと言う一人の科学者がいる。嘗てジオン公国内で『フラナガン機関』と言うニュータイプ開発研究の先駆けと成る研究所を創始した彼は、元々大脳生理学の研究者でありジオン公立難病医学研究財団に籍を置く一介の医師に過ぎなかった。

当時彼が研究対象として選んでいた物は不治の難病に指定されていたALS（筋萎縮側索硬化症）の発症のメカニズム。運動伝達を行う筈の神経だけが犯されて筋力を失いやがては人を死に至らしめるALSと言う名の病は最初に症例が確認された紀元後十九世紀から、宇宙世紀という科学が未曾有の進歩を遂げたその時に至るまで完全な解明には至っておらず、医師としての彼の興味はその撲滅へと注がれた。

『難病への挑戦』と言う謳い文句を掲げる彼の元へは多くの科学者が集まり、多くの科学者が公式の手続きを経て送り込まれて。発症の九割が染色体の突然変異に起因する『五年以上の生存率一パーセント以下』と言う不治の病は、彼らの絶え間無い努力とフラナガンの熱意によって解明まで後一步の所に漕ぎ着ける。

彼らが手にした膨大な研究結果から導き出され、その過程から齎される物は既にALSのみの発症原因の解明を越えて、『染色体異常によって引き起こされる既往症』  
ダウン症、エドワード症候群等に  
適応出来るまでになっていた。

難病の完全解明に心躍らせ、歓喜の声を上げる科学者達。勿論その輪の中に中心となったフラナガンの姿も当然存在した。神の気まぐれで与えられる試練を克服した達成感はあるだけの、そしてフラナガンだけの物である。そして彼らの将来にはその栄光に見合うだけの未来と、人々の感謝の言葉が満ち溢れている筈だった。

だが、幻想に身を委ねる彼らに現実の不幸が襲い掛かる。ジオンと連邦の間で勃発した、『一年戦争』の切っ掛けともなった紛争

世に言う『一週間戦争』である。

戦時下による緊縮財政を強いられたジオン公国は軍事研究以外の予算を凍結せざるを得なかった。後に控えるジオン軍艦艇の大半を動員して行われる『ブリティッシュ作戦』その後には恐らく勃発するであろう連邦軍との戦闘に備えて、国費の殆どを戦費に回すしか戦争に勝つ手段は残されていなかったのだ。

戦後復興の為の基礎研究の継続を願う多くの科学者の直訴を他所に、当時のジオン公国の実質的な指導者、ギレン・ザビ総帥はその全ての申し立てを悉く無視した。

次々に閉鎖される研究所、路頭に迷う科学者。自分達の願いとは程遠い所へと去っていった国家の中に、平和を謳う彼らの生きる場所など存在しなかった。フラナガンもまた大勢の仲間達と同じく、閉鎖された研究所を平和の為に血道を開けて探り出した研究データと共に財団を後にする。

だが、彼は携えた資料の中に奇妙なデータがある事に気付いていた。

フラナガンが着目したのは彼の専門分野である大脳生理に関するデータ。

ALSは運動を命令する脳波パルスが途絶える為に筋肉が萎縮退行してしまう病である。その解明の為に採取した被験者全ての脳波パターンの中に、ごく稀ではあるが異常な波形パターンが検出される症例があったことをフラナガンは記憶していた。

運動を命令する信号は大脳の頭頂部、運動連合野から小脳で処理されて身体各部へと伝達される。言うなれば大脳で発生した『意志』を小脳が解析し、その実現に見合った筋肉動作を的確に各部に過不足無く伝えて体を動かす。それが基本的な人間の運動パターンである。

だがその運動に必要な筋肉を動かせなくなった被験者 四肢の一部の欠損と同様な状態 の中には、以前と変わらずその箇所が動いた様な錯覚に陥る者が多く存在した。俗に言う『幻肢感』の現れである。

其れまでのALSに対する治療法は対処的な物に過ぎなかった。筋肉が衰えた箇所筋電義手（筋肉の収縮に使用される微弱な神経電流を感知し、つかむ・はなすという把持動作をモーター駆動の部品で再現する。筋電の任意検出の出来ない患者には使用出来ない）を装着して、運動機能の補助を行うといった方法がジオン公国内では一般的な治療方法であった。

しかし病状の進行はその神経電気すらも次第に喪失させて、病状の範囲を拡大させていく。延命治療とも言えるその方法に異議を唱えたフラナガンは、だからこそALSの根治的な治療方法を求めてこのプロジェクトに身を投じたのだ。

失意に溺れるフラナガンの目と熱意はそのデータの中に顕在する僅かな不特定パターンの解析に向けられた。

運動連合野から小脳へ流れる脳波パルス。其れがごく稀に大脳全体に蔓延して異常な波形を創り上げる。瞬間稼働率が波形計測器の上限を振り切るほどの激しさで波打つパルスが大脳の全ての連合野を駆け巡って、其処に『小さな世界』<sup>インナースペース</sup>を構築する。

そこで発せられる人の意志は無意識の内に体を飛び出して、動かなくなった筈の身体の運動機能に僅かながらの影響を与えた事が、レポートには記されていた。

『緊張化の意識の飽和によって空間内に放出される意志の伝達』。  
『ニュータイプ』を語る上で欠かせない基礎理論、『感応波』<sup>サイコウエイブ</sup>の発見。

その発見がすぐさま以降の医学の発展に寄与した訳ではない。其れを活用しようにも戦時下のジオン国内の内情に於いては闇へと葬り去られる事は目に見えている。フラナガンはこの発見を、見捨てられた同胞の科学者を救う為に活用する事を決心する。

当初は筋電義手に替わる新たな義手に役立てる為の基礎理論のつもりであった。戦争化での四肢欠損など日常茶飯事の事。手足を失った兵士が戦後も何不自由なく生活が送れる様にする為には、モーターとシリンドーピストンを電気信号によって駆動する筋電義手よ



りも理論上は精神波を介して反応速度のタイムラグを無くした新開発の義手の方が優れている筈だ。フラナガンは彼の呼びかけに賛同した有志と共に、『感応波』発生のメカニズムと解析に着手した。

だが自らの蓄えを取り崩して行う研究に得られる成果は無い。行き詰った研究と集まった科学者達の熱意に絆ほだされたフラナガンは研究を離れて行動に出た。兵器の開発には直接は関与できないが兵器を扱うのは人間である。兵士の将来の為の研究ならば軍事研究の一環として予算が下りる可能性があるかと踏んだ彼は、全ての研究データを軍に持ち込んだのだ。

当初は誰一人として興味を示さなかったフラナガン達の研究結果。だがその執念にも似た彼らの訴えは、一人の地位在る女性の手によって表舞台へとのし上がる事になる。

その女性の名は、キシリア・ザビ少将。ジオン公国軍突撃機動軍司令であり、ザビ家の長女である。

兄であるギレンがその研究を無視した事もキシリアがその研究を取り上げた事に起因しているであろう。常に兄との覇権争いに対する抗意識を燃やすキシリアはその研究が未知の可能性  
軍事転用  
を秘めている事にいち早く気が付いた。

遠隔操作による兵器の運用。ミノフスキー粒子の蔓延する戦場に於いて今まで実現不可能とされて来た理論が一人の科学者が持ち込んだ研究によって現実味を帯びてくる。次男ドズル・ザビと同じく『戦争は数が力』と言う信念を持つキシリアにとって、フラナガンの持ち込んだ研究は兄ギレンの覇権を争う為の切り札に成り得る。

前線での死傷する兵士の数が減らせるのなら、何れは戦力が逆転する筈。兄の持っている近衛師団よりも多くの兵力を保持して、  
私は

キシリアによって予算が付けられたフラナガン達の研究はそのまま軍の研究機関としての昇格を意味した。

発起人であるフラナガンの名を冠した研究機関は、潤沢な資金を元に『感応波』の解析の速度を加速させると同時に当時公国下の国

営企業であったM I P社と接触、『感応波』を増幅して機械信号に変換するインターフェイスの開発を依頼した。

その二つによって生じる未来、傷病者が失った手足を嘆く事無く、変らずに家族や恋人と平和に暮らせる未来を信じて。

キシリアの思惑を善意と解釈して研究に没頭するフラナガン機関。だがその信頼はM I P社から試作品として送られて来たインターフェイスと、それに付随する兵装の数々によって粉々に打ち砕かれた。荒野に立つ一戸建ての家を思わせる巨大な、『サイコミュ・システム』と名付けられたインターフェイス・モジュール。だがそれでもフラナガンは構わなかった。それが今後の第一歩の為の現実であり、少なくとも自分の願う望みに一歩でも近付く足掛かりになるのならばと。

その背後に聳える、奇妙な形の巨大なモビルアーマーを目にするまでは。

人を救う為に進化した研究が、人殺しの為に使われる。

科学に対して常に真摯で、一途な思いを抱えて生涯の大半を研究に費やしたフラナガン・ロムと言う科学者は、自らが裏切られ、穢れたと思ったその瞬間に変容を果たした。

其れは軍によって後戻りの利かない一本道に追い込まれてしまったと感じたのかも知れない。仲間を巻き添えにしてしまった罪の償いであったのかも知れない。だが、何れにせよ彼は、其れまでの純粹な科学者としての仮面をかなぐり捨てて、『新人類』の発見と能力開発の為の人体実験に没頭した。

何人の被験者が廃人に追い込まれようと、命を落とそうと、狂った様に。

それは、フラナガン・ロムと言う一人の科学者の、ジオンに対する復讐なのかも知れなかった。

凍った視線と湧き上がる憤怒の炎。その二つを補正眼鏡を通して見詰めるバスクがにやりと笑った。

「…… 貴様にもそんな人の心があつたとはな。フン。」

男の変貌に溜飲を下げたバスクが差し出されたままのレポートの束を手に取った。一枚一枚捲り上げるその紙片に記載された被験者の数値は男の証言を正当化する様に、強化人間としては極大に位置するとも思える数値をバスクの脳に刻み込む。その姿を変らぬ瞳で睨み上げる男の顔。凍り付いた時間と空気。

全てを閲覧したバスクが男の視線に対峙した。

「…… 腹立たしい事に、このレポートを見る限りでは貴様の言い分が正しい様に思える。では改めて貴様に尋ねよう。何故、結果が出ない？」

冷静さを取り戻したバスクが野太い声で男に尋ねた。自分の提案が認められた事で科学者としての伶俐な感情を取り戻した男が、以前の声音を取り戻してバスクの問いに答えた。

「その理由はですね」

「何にせよ、切り札が無いのはこちらも同じだ。」

ヘンケンが腰掛けたソファの背にもたれ掛かりながら呟いた。最後の一口を溜息混じりに司令官室の空間へと吐き出すと指の間の煙草を灰皿に押し付けて、徐にドクの方へと向き合った。

「だがティターンスのそんな動きを察知したからには、こちらも何らかの手は打たなければならぬ。とりあえずは戦力の増強と云う点が急務となるんだが…… ドク、彼はどうだ？」

「ヘンケン。お前には悪いが、この際はつきり言わせて貰う。」

ドクの手が目の前に置かれた一番上のファイルを手にとって、ヘンケンの前に投げて寄越した。取り上げて開くヘンケンの表情が微かに曇る。

「彼は、無理じゃ。」

その声を耳にしながらヘンケンの目はファイルの一番上にクリップで留められているコウの写真に注がれている。

「彼は コウ・ウラキ予備役伍長は、既にモバイルスーツを運

用出来る状態には無い。」

「理由を聞こうか。Dr・モラレス。俺の納得する、『悪魔払い』を諦める事の出来る正当な理由を。」

その言葉には既に偽装した『農協の組合長』としての色彩は無い。あくまでも上司としての威厳に満ちた命令が、正面に坐るモラレスの発言を促した。強制を孕んだヘンケンの物言いに眉を顰めたモラレスが、両手を口の前で合わせて前屈みになりながら、まるで人目を憚る様な仕草で口を開いた。

「詳しい事はその報告書の中にも書いてあるとは思いますが、解り易く言って置こう。コウ・ウラキ予備役伍長の病名は『複雑性PTSD』、複合的な心的外傷後ストレス障害じゃ。」

その言葉を沈黙を守って聞き届けたヘンケンがモラレスの顔をじろりと睨んだ。

「…… 砲弾神経症シエルショックか。確か戦闘に於ける極度の緊張感の持続と恐怖体験によって発症するヒステリー反応、だったか。だがドク、帰還兵の一部が罹患する様な在り来りの病名を聞いて、俺が納得するとても？」

「思つたらん。本題はこれからで、此処からは儂の分析と推測じゃ。信じる信じんはお前達の判断に任せる。…… 次のページじゃ。」

促されて紙を捲ったヘンケンの目に飛び込む数値とグラフの羅列。予備役兵に義務付けられた年に一回の軍事教練記録。そこに記された物はシミュレーター演習時に於けるコウのパーソナルデータと医療記録であった。

訓練前に電極を取り付けられた時点から演習終了までのタイムテーブルを最上段に、血圧、心拍呼吸数、脳波、そしてコウの操った模擬機体の稼働状況、撃破記録などが事細かに記載されている。

一般人には何の事だかさっぱり見当の付かないその記録も、元佐官であったヘンケンの目には当時に目にした書類の一つに過ぎない。じっと目を凝らしながらヘンケンは、現役時を髣髴とさせる姿を複雑な心境で見守るウェブナーに尋ねた。

「この時のウラキ伍長の演習状況を覚えているか？」

「はい。ウラキ伍長の機体設定はザク。相手はゲルググJ型一個小队。装備はウラキ伍長はマシンガン。弾数は予備と合わせて六十発とヒートホーク一本、相手は弾数無制限、ビームサーベル。時間は十分。」

「……随分と高難易度な設定だな。それで結果は？」

ヘンケンの問い掛けにウェブナーは呆れた様に笑いながら、

「そこに書いてある通りですよ。全機撃破、タイムは残念ながら十分十秒、規定タイムには僅かに届きませんでした、」

それでも未だに信じられない、と軍人としては憚られる言葉を暗に示しながら言葉を切った。その返事を受けたヘンケンはウェブナーの思惑を外れて意外にも深刻な声で呟いた。

「その十秒の遅れがこの異常な脳波の昂ぶりの後に訪れる、無反応になった時間による物だと言う事か。……ドク、どういう意味だ、これは？」

「それがPTSD特有の症状でな。『身体運動性障害』、つまりは『金縛り』じゃ。何らかの追体験と同じ状況に陥った時、体が自分の意志に反応しなくなるんじゃ。ウラキ伍長の場合、それが十分間の間に三回も発生しておる。戦場では致命的な障害じゃ。」

「ですが、ドク。」

何かを疑問に思ったのか、ウェブナーが二人の険悪な空気に割って入った。

「その様な精神的な病なら長期に渡ってカウンセリングを続ければ克服する事も可能な筈。薬物を使って治療を進める事だつて」

「ウェブナー。」

モラレスが呼ぶ名に籠められた、提案を否定する色合いがウェブナーの声を押しとどめた。苦悩の表情を浮かべたモラレスが硬く目を閉じて呟いた。

「……その薬物が使えん体だったとしたら。いや、そもそも彼

の『PTSD』自体が精神の病などではなく、薬物によって引き起こされている物だとしたら、どうする？」

「薬物だと？」

問い掛けるヘンケンの顔を見据える為に、何かを訴える様なモラレスの瞳が薄らと開いた瞼の奥で鈍く光った。

「……最後のページに、演習終了直後に行った彼の健康診断の結果が載っており。その血液検査の項目を見てみい。……言つて置くが公式にジャブローへ送る方は儂が書き換えてある。これは此処だけの記録で、見たお前達も儂と同罪じゃ。」

ヘンケンの指がレポートの分厚い束を一気に捲り上げて最後のページを開いた。そこに赤いペンで手書きされた文字を見て、思わず叫ぶ。

「アンフェタミン！ ドク、これは」

「組成が類似してるからそう記載したが本当はそんな生易しい物じゃないわい、彼の体に残留しているのは。恐らく極秘裏に軍で開発された純度の高い合成麻薬じゃ。何の為に、どういう目的で彼の体内に注入されたのかは知らんが、彼は人体実験の材料にされたと言つてもおかしくない。……もつと恐ろしいのは」

モラレスの瞼が、その先の言葉を綴る事を躊躇う口と同じ様に閉じられて。声を待つ二人。

「この物質が恐らく小脳（アドレナリン作動性神経系）の構造に入り込んで彼の神経核を作り変えてしまっている可能性がある事じゃ。つまり何らかの危機が迫った時に生成されるノルアドレナリンの代わりに彼の神経系はアンフェタミンに似た合成麻薬を生成し、神経伝達反応を促進させ続けるのじゃ、この先永遠に、死ぬまで。」

「そんな、在り得ないっ！」

大声を上げて立ち上がるうとするウェブナーをヘンケンの目が制止させた。未だに盗聴を攪乱する為に録音音声を張り上げる絵画に一瞥を呉れて、ウェブナーに着席する様無言で命令した。

「仮にも軍が兵の人権を無視してその様な危険な薬物を投与する事など。もしそうだとしたら、それはウラキ伍長の同意があつての投与行為に違いありません。」

「いや、ウェブナー。俺はそうは思わん。これが極秘裏に開発された物ならば、ウラキ伍長は何らかの軍事機密に接触していたと言う事だ。その過程に於いて投与されたのだとすれば本人に自覚が無い事も辻褄が合う。軍事機密の試運転という物は携わつた者まで含めて一つの兵器と化す事が目的なんだからな。」

ウェブナーの言を否定するヘンケン。その顔をじつと見詰めながら、ウェブナーが声を潜めて尋ねた。

「……やはり、本当なのでしょうか、新開発のガンダムが存在したと言う噂は。まさかそれにウラキ伍長は」

「迂闊な事を口にするな、ウェブナー。司令官のお前がそんな事では軽重の鼎を問われるぞ。現状こそが軍人に与えられる唯一の判断材料だ、忘れるな。」

ウェブナーが口にした疑問を封殺した形で抑えたヘンケンが再びモラレスの顔を見詰めた。

「ドク、お前の推測を整理するとウラキ伍長は何らかの薬物を投与された事によつて、戦場に出る度に神経反射を増大させる麻薬が脳内で作り出されるようになった。それが彼の類稀なモビルスーツ操作能力の源である、と。だがそれと彼が『行動不能』になるのとはどう関係がある？」

「……これだけならば僕も彼にモビルスーツに乗るな等とは言わん。寧ろ手駒として考えるならばその方が都合が良いくらいじゃ。なんせ超人的な能力で『死ぬまでがむしゃらに』戦い続けるのじゃからな、相手が自分のどちらかが消え失せるまで。……問題は

その合成麻薬が分泌された直後に発生する、G A V A 神経系から分泌される脳内麻薬様物質の事じゃ。此れが彼の動きを止める最大の理由と言つてもいい。」

「オピオイド？」

首を傾げて尋ねるヘンケンとウェブナー。不思議そうな表情を浮かべる二人の顔をじろりと一瞥して、モラレスは言った。

「人が最期の瞬間に分泌する『救い』の麻薬じゃ。全ての感情が凍り、動きを止め、抵抗を止め、そして全てを受け入れる準備をする為の。」

「全てを受け入れるって、ドク。それは、」

尋ねたウェブナーの声を遮る様に一つ頷いて横目で睨んだモラレスが、断言した。

「『死』じゃ。…… コウ・ウラキ予備役伍長は本人も自覚し得ない『自殺依存者』なんじゃよ。」



## 予期せぬ出会い

ダビデとゴリアテにも似た二人の対峙の緊張はダビデを模する蓬髪（はげ）の男の言葉が語られる毎に昂まりを見せて。その姿に視線をくれる事無く手にした書類を眺める巨躯のゴリアテは一方的に言葉を綴る、男の口が閉じられた事を見計らって反撃に出た。

「成る程、貴様の言い分は良く分かった。」

冷静な中に侮蔑の響きを込めたバスクの声（こゑ）が所長室の静寂を破った。相対する蓬髪（はげ）の男はその声を、さっきの経緯など歯牙にも欠けない面持ちで無表情に聞いている。

「だが、我等が開発出来るサイコミュ・システムは現状の段階ではあれが最新の物だ。開発部からもその様な回答が為されている。とは言え」

バスクの目がギリリと補正眼鏡の奥で濁った輝きを見せる。

「今のシステムは貴様が嘗て属していたフラナガン機関から接收したモジュールをバージョンアップさせた物。貴様の歪んだ理想を満たす物等、人類の何処にも無いと言う事だ。何処かに埋もれている貴様の様な狂人が後生大事にその理屈を抱えていると言うなら話は変わるが。」

「理屈、ですか。……それは例えばかの相対性理論を発見したアインシュタインの様な『先ず回答ありき』といった具合の、理論の飛躍的進歩を指すのですかな？」

喧嘩文句の売り買いの様に言葉を遣り取りする二人の視線に火花が走る。度重なる暴言に業を煮やしたバスクの声が殺気に満ちて、眼下に据える男目掛けて振り下ろされた。

「単純に言えば、そうだ。だがそんな者がおいそれと此の世に存在する筈が無かるう？ …… フン、例えて言うなら貴様が造っている者は不必要なまでに高性能な、金食い虫の生体コンピューターだ。幾らソフトが高性能でもそれを受け止めるハードが無ければ何

の役にも立たん。…… 全くとんだ所で時間を無駄にしたものよ。

吐き棄てたバスクの手に握られる拳銃が男の顔面に突付けられる。その銃口を無表情で見詰める男の目。

「現時点を持つてこのプロジェクトは凍結、貴様は先程の不敬な態度と失敗の責任を取る為に、今この場で命を以って解任だ。安心しろ、貴様の開発した強化人間達は然るべき後に後任へと引き継がせて処遇を決める。…… さあ、辞世の句を聞こうか。」

不逞の輩を断罪する歓喜に顔を歪めるバスク。自分のプライドを散々に穢した男を抹殺する為に突付けた拳銃を握る手に力が籠る。ひとさし指を染める白さが最大に達しようとしたその寸前に、バスクにとつては哀れな子羊程度の存在に成り下がった男の口から嬉しさを籠めた言葉が漏れた。

「…… 見つかつていれば、問題は無い訳ですね？」

その言葉の意味と声音はバスクの殺意を得体の知れない好奇心で凍らせた。命乞いの言葉を密かに期待したバスクは、男の口から微かに吐き出された毒に侵されてその指を撃針の落ちる寸前で辛うじて押し留める。男の言葉の意図を図り兼ねる様に僅かに首を傾げて、バスクは訪ねた。

「拳句の果てに貴様の口から飛び出した言葉がその様な世迷言とはな、命乞いならまだ可愛げがあったものを。…… そんな戯言で永らえようとしても無駄な事、貴様は既に俺の死亡者リストのトップに上がっている。」

言葉とは裏腹に噴き上がる殺意には翳りが見える。最後の一ミリを引き切れないバスクの葛藤を見抜いた男の声が勝ち誇った様に告げられた。

「話は最後まで聞いた方がいい。私を処分した後で貴方が上層部から処分を免れると言う意味でも。」

「…… どういう意味だ、貴様。これ以上の侮辱は最早 抑制を掻き乱された憤怒の感情がバスクの背後から煙の様に立ち

上る。再び狙いを定めた拳銃の影で、位牌同然となつた男の手が白衣の懷を弄つて何かを取り出す。男の顔が将星の先で奇妙な笑いを浮かべると指に挟んだその紙片を黙つてバスクに差し出した。

「先ず此れを御覧なさい、私を殺すのはそれからでも遅くない。

…… この者が私の選んだ候補者です、私が手塩に掛けた可愛い強化人間をテイターズに役立てる為の。」

バスクの前に差し出された紙片は四つに折り畳まれ、何度も開き閉じを繰り返された事を物語る様に折り目が所々破れかけている。

傲慢な指図とも思えるその提案を忍耐の極致で鬨ぎあうバスクの感情が辛うじて飲み込んで、だがやり場の無い怒りを表してひつたくる様に男の手から紙片を奪つた。自らが差し出した宝物を乱雑に扱うバスクの顔を、僅かに怒りを湛えた男の顔が睨み付ける。

「…… なんだ、これは？」

破れる事も意に介せず紙片を開いたバスクの目に飛び込んで来た、それは『候補者』の職務経歴書。いや、経歴などはない。何故ならそこに書かれた人物は嘗てただ一社にしか在籍していないのだから。殆どの項目がその人物の履歴に関する物だと知つたバスクが怒りと疑問を同時に男に叩き付ける。

「何かと思えばこの様な下らん書類で時間稼ぎとは！ 何の特務機関にも、何の開発機関にも属した事の無い者が貴様の目に適つた『候補者』だと言うのか？ 馬鹿馬鹿しい、この様な小娘一人に軍の開発機関の科学者が寄つて集つて敵わない等と！ それにこの小娘はよりにもよつて、」

収まらない怒りが手にした紙を握り潰す。手の震えに同期を果たした口角が大きく歪んで、彼にとっての忌避すべき言葉を吐き出した。

「『ルナリアン 蝙蝠野郎（月面人）』ではないかっ！」

紙屑となつた紙片を床に投げ捨てて、バスクは再び男に向つて銃を突付けた。

「『アースノイド至上主義』を標榜する我等『テイターズ』がこ

の様な者の力を借りる等と、断じて有り得ん！ それを俺に勧めた貴様も国家に対する反逆罪に値するわ！ 軍法会議に掛けるまでも無い、今この場で俺が直々に処断してやる

「成る程、貴方は正しく軍人の様だ、バスク大佐。その狭視たるや賞賛に値する。その様な生れ育ちの差別で自らの前に存在する素晴らしい未来に目を背けるとは。」

「やかましいっ！ これ以上貴様の戯言に耳を傾ける事など我慢がならん！ 死んで貴様の実験台になった者の前で膝を着いて謝ってくるがいいっ！」

「『ガンダムGPシリーズ』っ！」

命を縊られる寸前の男が上げた大声と言葉。遠い過去に完全に抹消された筈の、何処にも記録など残っていない筈の単語が男の口から飛び出した。

その単語はバスクの心中にある死亡リストを引き千切る様に消失させて。一瞬にして裏返しになった殺気が動揺となってバスクの表情と言葉を凍らせた。

「き、貴様……何故、それを」

「……貴方の事を『正しく軍人』と評した訳はもう一つあります。貴方は目の前にある兵器に関心は寄せても、それを創った『開発者』には何の興味も無い。例えば彼女が『GPシリーズ』三機それぞれのオペレーションシステムの基礎理論を作った開発担当者だとしても。」

「何だとっ！？」

男に突付けていた拳銃を慌ててホルスターに収めて、今し方自分が投げ棄てた紙屑を拾い上げようと。だがバスクが動く前に目の前の男は屈み込んで、見るも無残に丸められた宝物を既に拾い上げて注意深く開いていた。震える指を駆使して広げられたそれが、再びバスクの手に残られる。

「元アナハイム・エレクトロニクス、フォン・ブラウン支社勤務。モビルスーツのシステムを研究開発する同会社内の『クラブ・ワー

クス』に籍を置き、彼女はその素質を認められて『GPシリーズ』の主任開発責任者に抜擢されて、各機の運用基礎理論を『一人で独自』立ち上げた奇跡のシステムエンジニアですよ。今は連邦軍に在籍しているようですが。」

「そんな事はどうでもいい、貴様、何処でこの資料を手に入れた！？」

手にした皺だらけの書類を男の眼前に突付けてバスクが怒鳴った。焦燥に塗れるその発言を耳にした男が片眉を吊り上げて、見識の不明さを哀れむ様な顔で言った。

「その資料は貴方方が完全に消去したと思いつ込んでいたアナハイムのメインコンピュータの中にあつた物です。……データを消すなら直接メインコンピュータに接触すれば良い物を、貴方方は本社外の場所からアクセスしましたね？ その際に使用したサーバーのメモリに残っていた複製データキャッシュです。勿論アナハイムの間にも知られてはいません。私が独自につてを当たって手に入れた物です。」

「他の資料は何処に隠している？ 貴様、隠し立てするならば」

「とんでもない。」

薄笑いを浮かべた男が顔の前で片手を振って、バスクの危惧を否定する仕草を見せた。

「隠すなんて、人聞きの悪い。今の貴方に全部渡せばそれを証拠に何を仕出かすか分からない。これは言うなれば私の身の安全に対する保証の様な物です。貴方方が力づくでこの資料を握り潰そうと言うのなら、私はこの資料を知り合いを通じて全地球圏に公開する。それは」

切れ長の男の目が冷たい殺気を湛えてバスクの瞳を射抜く。気圧されたバスクが、微かに状態を仰げ反らせて。

「何時でも出来る。……命拾いしたのは、貴方の方かも知れませんな。」

敗北と言う汚辱に塗れたバスクの顔が今にも炸裂しそうなほど赤く染まって。だが既に男に対する殺意の影は男の言葉と視線によって握り潰されていた。完全に上手を取った男の声が、怒りに全身をわなわなと震わせる敗者に向けられた。

「貴方はどうでもいい事だと思っっているかも知れませんが、私にとって彼女の存在は一筋の光明だ。その発想たるや実に素晴らしい。」

…… 試作一号機は重力下、無重力下どちらの環境においても簡単なシステムデータの変更とコアファイターの換装によって現在稼働を続けるどのモバイルスーツをも凌駕する機動性能を発揮する汎用型。試作二号機は戦術核装備によって敵対勢力に絶大なる脅威を与える最終機動兵器。そして、

男の瞳が焦点を失って宙を彷徨う。擦り切れるほど眺める事によって脳裏に刷り込まれたデータをバスクの背後の空間に思い浮かべながら、嬉々として喋る。

「何よりもあの試作三号機の運用理論。拠点防衛と言いなから明らかに一艦隊に相当する火力を有し、モバイルスーツとモバイルアーマーの双方の機動性の確保。何よりも特筆すべき事は

その言葉は男の心の中の狂気を震えさせた。怪しく輝く虹彩がその記憶の一点を睨み付けて。

「全天周囲モニター搭載のあの操縦席。脱出の為に無理矢理くっつけられたコアファイターなど無視して、あくまでもパイロットごと一つの兵器として運用される事を前提に考えられた、正に新世代の理論。そればかりか彼女は、その二つの異なったシステムをパイロットに制御させる為に薬物の開発にまで言及していたのですから！ 何という慧眼だっ！」

自らの放つ言葉に陶醉する男の表情は最早人の物とは思えない。目の前に立つバスクとは相対する感情の震えに取り付かれた男の口が微かな泡を毀れさせて動き続ける。

「そう！ 彼女こそ私の同類だ、自らが探求する真理の為に如何なる犠牲も顧みる事の無い真の科学者。いや、もしかしたら

男の歡喜は極致に至る。見開かれた臉が蒼白い白目の中に走る毛細血管の一本一本までをバスクの視野に焼き付けて。彼はその瞬間に嬉叫を上げた。

「彼女こそが『至高』<sup>ザ・スプリーム</sup>！ フラナガンの予言した『生まれながらの新人類』<sup>リベリタイ</sup> その人なのかも知れないっ！」

「まあ、なんて格好なの二人とも、と言いたい所だけど、いかにも急拵えと言った風情で色褪せた、剥き出しの対爆コンクリートの外壁と鉄の屋根に覆われた簡素な格納庫の巨大な扉の前で、腕組みをして土塗れのアデリアとマークスを睨み付ける一人の女性。日の光に揺れる鮮やかなブロンドの髪が見るからに華奢な首筋を隠して。金色に縁取られた涙滴形のサングラスが光を跳ね返して、強い視線と共に頂垂れる二人の元へと送られる。」

「今貴方達のデータディスクを回収して分析している所。その間に着替えて食事を済ませて、ブリーフィングルームに来る様にとの隊長からの伝言よ。私も結果を持ってモウラと一緒に後から行くから。」

「え、技術主任も、ですか？」

尋ねるマークスの視線が上品に動く二ナの唇に注がれる。薄く引かれたローズが透き通るように白い肌の色と相まって艶やかに視線に映る。見とれるマークスの気配を察知した隣のアデリアが二ナから視線を逸らして僅かに舌打ちした。

「そうね、キース中尉の起つてのお願いだから私も講義に参加するわ。『モビルスーツの操縦の仕方をサルでも解る様に教えてやってくれ』と頼まれたから。」

「…… ひでえ言われ様。」

「あたし達つて、サル以下？」

「そう言われても仕方ないわね、今日の演習の有様じゃあ。」

不満そうな表情を浮かべて二ナを見詰める二人に向って、やれやれと言った風情で言葉を続ける。

「ゲルググ二機掛りで隊長のザク一機に撃破されるなんて、普段いかに運用理論を勉強していないかって言ういい証拠だわ。今日はその所をみっちり教えてあげますからね、覚悟しなさい。」

「そう、勉強不足だぞ、二人とも。」

二ナの背後から愉快な響きを湛えた大きな声が二人に投げ掛けられた。色褪せたモスグリーンの繋ぎの上半身を脱いで両袖をベルト代わりに腰で縛った、色黒の大柄な女性が歩み寄ってくる。

「元アナハイムのエンジニアが直々に講義してくれるんだ、もっと嬉しそうな顔をしな。そんな事、軍でも滅多に無いいい機会なんだから。」

「い、いやバシット中尉、それは大変にありがたい事とは思っていますが、自分はどうにも座学は苦手です。」

「だってさ、キース中尉。どうする？」

「え。」

二ナの背後に控えたモウラの視線を追うマークスの後頭部に痺れる様な痛みが走った。叩かれたと理解したのは視界の中にキラキラと無数の星が流れた時。反射的に振り返ったマークスの目に、オレンジ色のシューティンググラスを掛けたキースの姿があった。

「たっ、隊長。何時の間に。」

投げられたり叩かれたり。今日は散々な一日だと思いつながらマークスは慌てて敬礼する。痛み顔に顔を顰めるマークスと心配そうに横目で眺めるアデリアの顔を同時に視界に入れて、キースは口を開いた。

「お前たち、技術主任のご好意に対してその態度は何だ！ 本来ならば自主的に教えを請う所を、不勉強なお前達の為に技術主任が徹夜明けの体を押して教えて下さると言うんだ、ありがたいとは思わないのか！？」

金髪を頂上からの光に揺らしながら怒鳴るキースの瞳が怒りを湛えて二人を見詰める。あまりの剣幕に声を失う二人。モウラと二ナはその光景に口出しする事も無く、ただじっと見守っている。



軍である以上、上官と下士官との遣り取りに口出しする事は出来ないと言う事を二人はアルビオンでの経験から理解していた。

「お前たち程度の腕で、敵と互角に戦える等と思うなよ。二人一組ツーマンセルで戦えと言う原則を無視して別行動をとったり等するから今日の様に、自分のザクに遅れを取るんだ。自惚れるんじゃない！」

「お言葉ですが、キース隊長。それは我々の相手がキース隊長だったからだと理解しております。データログを解析していただければ我々の作戦行動がザクに対していかに有用であったかを理解して戴けると、自分は確信しております。」

「ばか、なにいつてんと言わんばかりに、アデリアの肘がマークスの脇を小突いた。しかしマークスは持論を譲らない。自分の判断を疑われるならともかく、そこにアデリアが巻き添えになる事がどうしても納得がいかなかった。マークスは姿勢を変える事無く、睨みを利かせるキースの視線に正対した。」

「自分は各隊を転々として参りましたがキース隊長ほどの實力を持った上官に出会った事ありません。今日の演習結果が我々の敗北に終わった所で、それはただ単に我々と隊長の實力差による物。決して作戦や行動のミスによる物では無いと思われます！」

怒鳴られるのを覚悟で上申するマークス。だがその発言はキースを尊敬するからこそその発露であり、自分達の力を少しでも認めてもらいたいと願う希望から漏れ出た言葉だった。

キースの睨みが閉じられる。何かを思い浮かべる様に暫くの沈黙を於いて。

「…… そんな事では、戦場で死ぬぞ？ 俺を超えられない様では。」

怒鳴り声の代わりに呟かれた言葉が、投げ掛けられたマークスとアデリアの眉を顰めさせる。予想外のキースの反応にマークスは思わず言った。

「そんな、隊長！ 隊長を超えるなんて」

「本当の事だ。俺程度を熨せない様では、生き残れない。……」

「そうだな、モウラ中尉？」

キースに言葉を求められたモウラが眉間に寄せた皺に指を当てて、何かを考えながら呟いた。

「キース隊長の言う通りだね、マークス。…… アテリアもよく聞きな。言っちゃあ悪いが世間にはキース隊長ほどの腕の奴がごまんといる。そんな奴と出会ったが最後、今のあんた達じゃ何も出来ずに死んじまうのがオチだ。あんた達が死んじまえば…… キース隊長も死ぬ。」

背後から掛けられる言葉の中に秘められた深刻さと、モウラの危惧を感じたアテリアの喉がごくりと鳴った。

「そうならない様にキース隊長は、持てる技術の全てをあんた達に教えようとしているんだ。あんた達もその期待に応えなきゃダメだろ？」

「そうよ、マークス。アテリア。」

二ナの声だった。凜として響くその声に残る微かな優しさを噛み締めて、二人の瞳が揺れる。

「…… 軍に入った以上、私達は貴方達に生き残ってもらいたい。その為ならば私は貴方達に何でも教えるし、何にでも応えるつもり。もう二度と悲しい思いをしない為にも、私達は……」

「…… 二ナさん？」

その言葉に何らかの意図を感じたアテリアが思わず振り返る。その言葉を呟く二ナの表情を垣間見ようと。

そのアテリアの視線の片隅に、バイクに跨って司令塔に向う二人の人影が映った。耳慣れない爆音を轟かせて近寄る影を見詰める五人の瞳。

燃料タンクの横にドウカティと赤く描かれたモトクロスバイクが司令塔の入り口の直ぐ傍に着けられる。L型2気筒1100ccのエンジンは生き物の心臓の鼓動を思わせる様な重低音のリズムを刻んで、抱える排気量と力の強大さを誇示している。

コウの体に両手を回していた後席の女性がその手を解いて、しなやかな動作で地面に降り立つ。赤いヘルメットのストラップを解いてコウの手に渡しながら、セシルが微笑んだ。

「ありがとう、ウラキさん。送ってもらっちゃって。」

頭を僅かに左右に振って癖の付いた髪を振り解く。その仕草を防塵ゴーグルだけを掛けたコウの目がある種の羨望を湛えて、無言のまま見詰める。

「……どうかした？ 私の顔に何か付いてる？」

コウの視線に気付いたセシルが顔を覗き込んで尋ねた。その仕草に慌てて顔と視線をそらせる。

「いつ、いえ、何でもありません。すいません、何か見とれちゃって」

はにかむコウの表情を見て、にっこりと笑うセシル。

「いいわ、他ならぬウラキさんですもの。ちよつとうれいかも。」  
煽る様な言葉と後ろ手に回した腕を持ち上げる様に上半身を屈めて。上目遣いの悪戯っぽい少女の様な瞳で見詰めて。

「どうもありがとうね、帰りに主人とウラキさんの家に寄るから。自転車置かせてもらってごめんなさい。」

「そんな、帰ったら自転車見ときます。何かペダルの所から音が出てましたから。」

「わあ、嬉しい。主人たら機械は得意なんだけど、ああいう昔の物はからつきしなのよね。ご好意に甘えてお願いするわ。」

そう言うつとセシルの顔がコウに近付いた。驚くコウの顔を摺り抜けて、セシルの柔らかな唇がコウの頬に触れる。

電気に打たれた様に動きを止めて、セシルの為すがままにその行為を受け入れるコウの姿。

「……コウ？」

二ナの声がそう呟くのを。スモークの後ろで揺れる瞳をアデリアは見逃さなかった。二ナの視線の先にあるバイクに跨った人影を追

つてアデリアの顔が動いた。二つの人影が分かれてただ一人残ったその男は送られる視線の存在に気付いて、此方の方に顔を向けたまま動かない。

カーキ色のカーゴパンツを軍用のブーツの中に託し入れ、長袖のTシャツから僅かに覗く胸の肌は浅黒い。その色はさつき自分達の自信をプライドごと叩き折った民間人と同じ、日焼けによる肌の色だ。身長はマークスと同じ位なのに妙に大きく感じるのは、肩の盛り上がった筋肉と厚い胸板のせいだろう。たまに基地でも見かける陸戦隊のやさぐれ兵士よりも立派な体つきをした男の人影から目を逸らせないでいるアデリアに気付いたマークスが、小声で尋ねた。

「アデリア、お前ひょっとしてああいうマツチヨがストライク？」

「うん、ど真ん中。」

間髪いれずに答えたアデリアの横顔を複雑な表情で見詰めるマークス。その二人に向って突然キースの命令が届いた。

「よし、取り合えず小言は此処までだ。一時間後にブリーフィングルームで今日の損害評価を行う。分かったな。」

「え、そんな。あの隊長達のお知り合いなんでしょう？ 紹介して戴いても」

「復唱しろ、マークス。」

そこからの関与の一切を拒絶するキースの強い命令。口調の強さに渋々マークスが敬礼して復唱した。

「……マークス・ヴェスト軍曹、アデリア・フォス伍長の両名  
只今から一時間後の1400時にブリーフィングルームに集合いたします。」

「よし、解散。」

鋭く向けられたキースの視線が、そこからの二人の退場を促す。後ろ髪を引かれる様に釈然としない足取りでその場を離れようとするマークスの背中をアデリアの手が押した。

「ほら、マークス。行こう？ 早くしないと時間が無くなっちゃう。」

アデリアの声に後押しされたマークスの足が早足になって。小走りになってその場を離れた所で、アデリアが小声でマークスに言った。

「…… コウ・ウラキ伍長よ、あの人。」

ポツリと呟いたアデリアの言葉に衝撃を受けたマークスが思わず振り返りそうになって。その行為をアデリアの手が制止した。済んでの所で思い止まったマークスが慌てて尋ねた。

「何で知ってんだよ、見たことも遭った事も無いのに？」

「二ナさん、さっき呟いたもの。『コウ』って。」

「本当かよ。」

アデリアの分析眼に思わず感嘆の声を上げるマークス。だがマークスのその仕草にも何の感概もない、静かな怒りに満ちた声でアデリアが言った。

「二ナさん、悲しそうだった…… きつと今でもウラキ伍長の事が好きなんだわ。それなのにあんな所を見せ付けられて…… きつと二人が別れたのってウラキ伍長の浮気が原因よ、間違いないわ。」

「お、おい、アデリア。お前ひよつとして、怒ってる？」

憤慨の気配を孕んだアデリアの声に慌てたマークスがそう尋ねた時、二人の姿は丁度兵舎の入り口に到達した所だった。ドアを潜った所でアデリアが入り口の影に身を翻して叫んだ。

「当たり前じゃないっ、あんないい人を裏切るなんて！」

噴き上がるアデリアの怒声にマークスの足が止まる。マークスに背を向けたアデリアの肩が怒りで震えて。

「女の気持を利用して踏み躪る男なんて許せないっ！ ベルファーストの時もそうだった、あの子はあいつの事が本当に好きだったのに、あいつは。あの下衆野郎は！」

その顛末をマークスは人づてに聞いた。一小隊を超えるパイロットの悉くに重傷を負わせ、基地のモビルスーツ部隊の機能を一時的に麻痺状態に陥らせた『アデリア・フォース曹長』。

通報によつて事態を知つたベルファスト基地の保安要員が駆け付けた現場は、暴風の過ぎ去つた後の様に什器備品の散乱するプレイルーム。目にした物は惨状のあちこちに虫の息で横たわる人影と鬼のような形相で動き続ける女性隊員の姿だつたと言う。血泡を吹いて仰向けに倒れた男の股間を、泣きながら縋り付いて制止するもう一人の女性隊員の哀願の声も全く無視して何度も何度も蹴り続ける『ベルファストの鬼姫』。

その地獄絵を思い浮かべて背筋に寒気を覚えるマークス。

情状酌量で降格と転属のみの処分で済んだものの相手の男は二度と『男』としては役に立たない体になり。軍は二人の間の怨恨による私闘を回避する為にアデリアの赴任先としてここ、オークリーを選択したのだろう。それは時を同じくして、納得のいかない命令を拒否し続けたマークスのロッカーがある日突然消え失せた時に、自分の身の回りに起こつた状況と重ね合わせて推察した結論だつた。

転属命令も報告も無く突然に異動処分を受ける輩が集まる吹き溜まり。そんな場所が軍の何処かの存在すると言う事は予てから噂にはなつていた。だが、まさか自分がその当事者になる等とは想像していなかつたのだ。

この基地に赴任して来た日の事をマークスは未だに昨日の事に覚えていて。それはアデリアと初めて出会つたのと同じ日であつた。

「あの、すいません。」

突然の異動で書類の整わないマークスの身元を照会する為に管理棟へと向つた警備員の背中を見送つて相当の時間が立っていた。未だに姿の欠片すら見えない人影を待ち惚けたマークスが無駄な時間を楽しむ決心を固めて、スーツケースに腰掛けたままぼんやりと立っていたその背後から掛けられた女性の声。

「……はい？」

思わず振り返つたマークスの目に飛び込んで来た少女の姿。初夏

の日差しから隠れる様に被ったキャップの隙間から伸びる栗色の長い髪が大地をそよぐ風に揺れて。何処をどう見ても少女にしか見えないその姿を無言で見つめるマークスに向って、その少女はおどおどとした口調で尋ねた。

「あ、あの、私今度此処で働く事になったんですが、何処に行ったらいいか分かんなくて…… えっと、基地の方ですよね？」

「いや、違うよ。俺も此処に来たばかりだから。」

そっけなく答えるマークスの目の中で少女の藍色の瞳が変化した。長い睫毛に縁取られた大きな目が途端に失望の色合いを湛えて。自分の受け答えの迂闊さを後悔したマークスが取り繕う様に言葉を続けた。

「ごめん、今警備の人が俺の用事で出払ってるんだ。その人ならきつと解ると思うから、此処で一緒に待っていていよう。」

マークスの言葉に少女が気を取り直してにつこりと笑った。自分の背丈の半分ほどもある大きなスーツケースをずると引き摺って、マークスの隣に同じ様に座り込む。

人気の無いオークリー基地の敷地を見詰める四つの瞳。餌となる野鼠を求めて頭上を舞う鳶の甲高い鳴き声と無機質なコンクリート剥き出しの建物の他には何も無い風景。その沈黙と自分の直ぐ先にある行く末に思いを馳せるマークスの思考を遮る様に少女の顔が現れた。

「……綺麗な目。」

眩きに我に返ったマークスの視界に大写しになった少女の顔。日の光を跳ね返す両目がマークスの顔の間近に迫って、そのまま顔を差し出せば形のいい唇に触れそうなほど。突然の事に慌てたマークスが大きく仰け反って顔の距離を離す。その動きを見て自分の行動に初めて気が付いた少女が弁解した。

「ごっつ、ごめんなさい！ あんまり綺麗なんでつい見とれちゃって。右と左の目の色が違う人なんて初めてだったから、つい」

慌てて言い訳するその仕草に、今までその身体的欠陥の事で自分

が受けた差別の悪意を感じなかったマークスが微笑んだ。

「いいよ、ついでに言えばこの髪も、だろ？」

頭を指差すマークスに向って大きく頷く少女。

「そうですね、銀髪の人なんて。まるでおとぎ話の中の王子様みたいで。」

「王子様、か。」

少女の口から毀れた陳腐な表現に、マークスの表情は微笑から笑いへと変化した。その感情の変遷を不思議そうに見守る隣の少女に向ってマークスは告げた。

「……ま、現実はそのも行かないんだけどね、これは遺伝子の病気だから。ワールデンブルグ症候群と言って俺の目と髪は生まれ付きこうなんだ。本当は耳もおかしくなる筈なんだけど幸か不幸かそれだけは免れているけど。」

「幸か不幸か？」

マークスの言葉に首を傾げる少女。暗にその言葉の先を求める少女の表情を見てマークスは答えた。

「身体の何処にも不具合が無いのはラッキー。でも俺の眼と髪を見て気味悪がる連中の陰口が聞えるのは不幸。<sup>アンラッキー</sup>」

「そんな、こんなに綺麗な髪と目を」

「今までにそう言ってくれたのは君だけさ。世間の人みんな君と同じ価値観を持っててくれてれば良かったんだけどね。」

そう、本当にそうならよかったのに、と。マークスは今まで自分と自分の家族が受けた仕打ちを思い出して表情を曇らせた。

人とは違う形をした者を見て『異端者』と蔑んだ人々。彼の生れたスイスでは古くから『魔女』の存在が信じられ、世界で最古の異端審問が行われた場所でもある。宇宙世紀に入った現在においては流石にその様な暴挙が公然と行われる事は無くなったが、人々の間に根強く残る差別意識が解消される事は無かった。

彼を『生んでしまった』両親は連日繰り返される言われなき差別と陰口からマークスを守る為に北アメリカへと移住した。だが自由



を求めて逃げ込んだその地でも繰り返される差別の嵐。

ならばと実力本位の世界である軍に自分の生きる道を見出そうと決心したマークスは連邦宇宙軍士官学校（Earth Federation Space Force Academy、EFSFA）への入学に挑戦する。戦時間近という当時の状況も相まってマークスは上位の成績での合格を果たした。

士官学校に入学したからと言ってマークスを取り囲む状況が激変する事は無い。周囲から降り注ぐ好奇と偏見と差別の仕打ちを成績と言う、自分に残された唯一の攻撃手段によって打破するマークス。だが卒業時にはダントツの成績で主席卒業を果たした彼が、果たして卒業生総代として答辞を述べる事は無かった。

そんな事どうでも良かったのだが。

マークスが入隊した時には既に『一年戦争』は終了していた。軍の中でも彼の見た目に対する差別は大きく、特に『ティターンズ』と言う勢力が台頭してからその勢いは加速していた。加速する度に上官とぶつかり、同僚ともめ、乱闘と営倉送りと降格を繰り返すマークス。最後に辿り着いたニューアーク基地の上官に至っては、自分を最前線の激戦区へと単身送り出し

殆ど厄介払いに近いあわよくば殉職させようと画策する始末。その意図を察したマークスが黙ってその命令に従う筈も無く。

出撃拒否と命令不服従を繰り返した拳句に放り出された『忘却博物館』。反逆と諦観の果てに自分が辿り着いた、最後の楽園。

口を閉ざしたマークスの心中を気遣う様に無言で肩を並べる少女。その少女の心遣いを嬉しく、そして暖かく感じるマークス。穏やかな静寂を取り戻した風景の中に存在するのは二人だけなのかも知れないと言う錯覚に陥りそうなほど長閑な空気を、遠くの方から歩いてくる人影が揺らめかせた。

「やれやれ、やっと来たか。」

呟きながら立ち上がるマークスに釣られて、隣の少女も立ち上がった。一人の筈が二人に増えた人影を鬱陶しそうに眺めながら、如

何にもやる気の欠片の無い警備兵が仏頂面でマークスに尋ねた。

「あーあんた、マークス・ヴェスト軍曹だっけ？ 転属書類はまだ向こうにあるってよ。確認取れたから入って良し。」

恐らくその男はマークスよりも階級は下なのだろうが、それ位の物言いには慣れている。寧ろその兵士が自分の人となり嫌悪感を抱いていない 興味が無いだけなのかもしれないが

事に感謝したマークスは姿勢を正して敬礼を返した。その背後で咳かれる少女の声。

「マークス・ヴェストって …… 『マークスザウイロック魔女のマークス』？」

士官学校時代の仇名で呼ばれたマークスが思わず少女の方を振り返った。ほんの僅かな距離でお互いの驚いた視線が交錯して。

「それを知っているって事は …… 君ももしかして」

尋ねようとするマークスの言葉を警備兵の問い掛けが遮った。あんな達の事は後にしてくれと言わんばかりの不機嫌な声が、少女を見詰めるマークスの背中に掛けられた。

「所で、もう一人はどうしたんだかあんた知らないか？ 今日もう

一人補充が来る予定なんだがなあ。」

「もう一人、ですか？」

再び警備兵の方へと顔を向けるマークスに向って、警備兵が言った。

「おお、まだ来ねえんだよ。全くこんな荒地のど真ん中で迷ったりしてたらとんだ迷惑だつてのに。まあウサギ狩りに出ている連中の網にでも掛かりゃあ、搜索隊を出す手間も省けるんだがねえ。」

「ウサギ狩り、ですか？ なんで。」

「今日の晩飯に決まってるじゃねえか。演習場に山ほどいらあな。ま、余りは小遣い稼ぎに町に売りに出るんだがね。結構高値で売れるぜ。どうだい、慣れたら兄さんも一緒に行くかい？」

「あ、あの、私今日の晩御飯はいいです。遠慮します。」

マークスの背後から少女のか細い声が聞えて、口を押さえたその姿を見る警備兵とマークス。好奇に満ちた表情でじろりと一瞥した

警備員がマークスに尋ねた。

「……………嫁さんかい？ 申請出てなかったけど。」

警備員が何気無く呟いた言葉に慌てたマークスが、少女と警備員の顔を見比べながら言い訳する。

「い、いえ、違います。この女性とは偶然此処で出会って

なんでも今日から此処で働く事になっていると言う事で、それで確認をお願いしようと、」

「困るんだよねえ、そういう事は一遍に言ってくれないと。」

日に焼けて色褪せてくたびれた帽子の淵を手にしたボールペンの尻で掻き揚げながら、警備員がファイルを開いた。紙面の隅々を往復して視線を上げた警備員の瞳には不満の色が溢れていた。

「ちっ、またデータ漏れかよ。参ったな、もう一度管理棟に行つて確認」

「誰が此処に赴任して来るんですか？ モビルスーツパイロット？」

言葉を呟く度に不機嫌の度合いを高める警備兵を宥める様にマークスが尋ねた。尋ねられた事で幾分自分の愚痴をぶつける場所を得た警備兵が間髪いれずに答えた。

「ああ、とんでもない『凶状持ち』らしいぜ。何でもベルファスト基地で大乱闘をやらかしてパイロット八人を病院送りにしたって言う強面の女だ。まあ、この基地にはそんな『脛に疵持つ』奴等しかいないがね。」

「それって！」

思わず叫んで辺りを見回すマークス。うろたえるその姿をにやにやと眺めながら、

「『ベルファストの鬼姫』こと、アデリア・フォス曹長……………おっと降格で現伍長か。　　しっかし大の男を、それも現役の軍人を八人もぶっ飛ばすなんてどんなごつつい女なんだろうな。只でさえ中にはゴリラみたいな整備班長が巾を利かせてるって言うのにそんなのが二人になったら男連中は肩身が狭くしてしょうがねえぜ。」

それとも二人をぶつけて基地内の覇権でも争わせるか、そうすりや賭けでちったあ退屈凌ぎになるうってもんだがなあ。」

「……はい……」

小さく漏れた少女の声がある時二人の耳に飛び込んで来た。目を向けた二人の視界の中で少女が空いているもう片方の手を小さく上げていた。

「どした、嬢ちゃん？ 気分でも悪いのか？ 吐くんならその辺に行って吐いちまえよ、大丈夫。誰も見てやしねえから。」

「い、いえ。そうじゃなくて……」

警備兵の勧めを否定する少女の姿を心配して見詰めるマークス。やがて手で覆われた少女の口からくぐもった声が流れた。

「……アデリア・フォス伍長、只今オークリー基地に到着いたしました。着任の許可を。」

一瞬の沈黙。少女の口から流れる言葉を心の中で反芻した二人の体が意思に反して大きく跳びずさった。驚愕の瞳のままでも声も無く少女を見詰める警備兵とマークス。

その少女がマークスの方に薄らと涙の滲む目を向けて、呟いた。

「……さつきは思わず仇名を呼んじゃってすいません。……」

でも、これでおあいこ。」

涙で揺らめく藍色の少女の瞳が、マークスをどきりとさせた。その心中を押し量る事も無く、少女の片手が栗色の髪に隠れたこめかみに真直ぐ押し当てられて。

「……ですよね？」

## 会議は踊る？

マークスの回想は一瞬の出来事に過ぎない。走馬灯の様に頭の中を過るその思い出を一瞬にして消し去ったのはあの時と同じ、マークスを覗き込むアデリアの顔だった。

「……ねえ、マークス。人の話聞いている？」

腰に手を当てマークスに詰め寄るアデリア。眉を吊り上げ藍色の瞳を全て露にした視線がマークスを襲う。今までコウ・ウラキ伍長に向けられていた怒りが何時の間にか自分の方に向けられている事はその表情と口調で明らかだった。

「え、何？」

「やっぱり聞いてない！ 何よ、上の空で。どうせまた二ナさんの事でも考えてたんでしょ？ どうして男って影のある年上の女性にこうも弱いのかしら。ほんと、やらしいったらっ！」

マークスの眼前でアデリアの形のいい頬が僅かに膨らむ。

「まっ、待てよアデリア、お前さっきと怒りのベクトルが違った方に向いてるぞ？ お前の話を聞いてなかった事は謝るけど、お前の想像は全くの見当違いだ。一体何でそうなった？」

「だから、貴方の話にも一枚咬ませてって言ってるの！」

「へ？」

会話の展開に追いつかないマークスの思考が必死で『自分の話』の具体的内容を模索する。ほんの一瞬前から過去の出会いにまで遡ろうと記憶の海を走査するマークスの意識が、忘れかけていた自分の欲求に突き当たった。

「……ウラキ伍長と、技術主任の話、か？」

「そう、それっ！ その話、私達で調べるのよ。」

我が意を得たアデリアの表情がマークスの眼前で変化する。怒りだけに覆われた顔の中に浮かぶ喜びの色。だがそれは逆にマークスの心中に聊かの危惧を齎す。背筋に走る予感に後押しされてマーク

スが尋ねた。

「調べるってどうやって？ 二人の関係を知ってそうなのはこの基地じゃ隊長とバシット中尉だけだぜ。他の部隊に当たるにしたってウラキ伍長は軍人だからまだしも技術主任は元民間人」

「そこよ、狙いどころは。隊長とモウラさんから話を聞かずに調べるキーワードは。」

「 どういう意味だ？」

アデリアの意図を読めずに首を傾げるマークスをじれったそうな表情で見るアデリアが我慢出来ずに口を開いた。

「だから、『軍人と民間人』のカップルって言うのがミソなのよ。軍人と民間人が接触できる機会はそう多くないわ。例えば基地の一般開放日とか いや、ニナさんは元アナハイムのシステムエンジニアだからひよっとしたらモバイルスーツの評価試験にウラキ伍長が立ち会ったのかもしれない。とにかく軍の中でもそんなカップルはそう多くない筈だわ。だから」

「そうか！」

思索していたマークスの目から靄が晴れる。間近に在るアデリアの瞳に焦点を合わせて。

「つまりウラキ伍長と技術主任が出会いそうな機会が有った軍の行事を、ウラキ伍長の経歴を遡って調べていけばいい訳だ。それで二人が出会った日時を推測する。」

「そこから今までのウラキ伍長の行状を調べていけば後は簡単よ。あの男がいかにか女つたらしで、ニナさんが想う価値の無い人間かって事をニナさんに教えてあげればいいんだわ。元彼女カの目の前であんな事する奴だもの、きつと懲罰記録はソレ関係で真っ黒よ、真っ黒！」

「お前、だんだん突撃レポーターみたいになつてきたな。……」

それで話は戻るけど、どうやって調べるんだ？ 軍のデータログにアクセスしようにも降格続きの俺とお前じゃあ門前払いになるのがオチだぜ？」

尋ねたマークスの目の前にアデリアの手が伸びてくる。人差し指を立てて左右に振りながらウインクするアデリアが人の悪い笑顔をマークスに向けた。

「心当たりが一人いるのよ。そいつなら簡単にデータログに侵入できる筈よ。たとえそれが『連邦軍本部』<sup>ジャブロー</sup>の最深部にあるメインコンピュータのデータログだったとしてもね。」

「おいつ、お前。それって」

ハッキング、と言おうとしたマークスの手をアデリアの手が慌てて塞いだ。驚きに見開かれたマークスの視野の中でアデリアの人差し指が自らの唇に当てられて。

「しーっ。声、大きい。」

慌てて周囲の人影を窺うアデリア。誰もいない事を確認してほっとした表情を浮かべて言った。

「今のは言葉のあやよ。大丈夫、そんな所まで入り込みはしないから。あくまで士官が調べる事の出来る範囲内のログまでにするから。」

自分の立案した作戦計画に許可を求める部下の表情をしたアデリアがマークスの目を再び覗き込んだ。懇願する藍色の瞳に根負けしたマークスが認可の言葉を伝えようとして。

だがマークスはその瞬間にふっとある事に気が付いた。

「そういや、お前。さっきウラキ伍長の事を『ど真ん中のストライク』とか何とか言ってたっけ？」

「言ったよ？ 何で？」

「いや、だからさ」

不思議そうな顔でマークスを見るアデリアの表情に、自分がさっき感じた嫉妬にも似た感情を思い出す。その感情を絶対に面に出さない様に、さり気無い声音で尋ねた。

「お前のタイプなんじゃないの、ウラキ伍長は。さっきずっと見たじゃないか。」

「見てたよ。何処で出っくわしても絶対に忘れない為に。」

「何？」

当然の様に答えるアデリアの言葉に含まれた意味が、自分の想像とは全くの対極の有った事を思い知るマークス。それをすぐさま証明するアデリアの言葉。

「だから『ど真ん中の攻撃対象』<sup>ストライク</sup>だつて言ってるじゃない、あんな女だったらし。今度何処かで会ったら有無を言わさず絶対にぶつ飛ばしてやるんだから。」

歩み寄つて来るキースの姿を見留めたコウがバイクのキーに手を伸ばしてイグニッションをオフの位置へ。休息を命じられたドウカティのエンジンは従順な僕よろしく鼓動を休めて凶暴な吐息を止める。

獣の心臓を構成する金属が冷却による収縮音を上げる以外は普段と何も変わらない日常の喧騒を取り戻した景色の中で、コウはサイドスタンドを下ろして基地の渴ききったコンクリートの上に降り立った。

「やあ、キース。…… 久し振り。」

ゴーグルを外しながら複雑な笑みを投げ掛けるコウに向つて、キースが応える。外したシュートインンググラスをキースの後を着いて来ていたモウラの気配目掛けて放り投げると、目の前で自分の到来を出迎える友人とは違つ晒いを浮かべて言った。

「俺に全部押し付けていきなり基地を去つた友達の挨拶にしちゃあ

」

コウの間近、半広の距離に迫つたキースの上体が突然沈み込む。視界の地平に消える刹那に見せた、禍々しいキースの表情を確認したコウが次に起こり得る筈の事態を予測して腹筋に有りつ丈の力を込めた。キースの下半身がコウの期待を裏切る事無く溜めた力を一気に吐き出して、脇に構えた拳の一点に集約させる。

「随分とそっけないんじゃないか？ この野郎っ！」

感情のままに撃ち出されたキースの拳がコウの腹に減り込んだ。



分厚い革の太鼓を力一杯叩いた様な鈍い音が、キースの後から歩いてくるモウラの耳にもはつきりと聞こえる。後背からは全く予期出来なかつたキースの行動にモウラの足が動きを早めて、同時に口は遅蒔きながらの制止の声を上げた。

「キース！ あんたなんて事をつ！」

幾ら予備役とは言え軍人が民間人に手を上げれば只では済まない。懲罰で済めばまだいい方で下手をすれば刑務所行きだ。頭の中を一瞬にして過る最悪の経過と至る結末を思い描いたモウラの手が、それ以上の暴行を働こうとするキースの肩を掴んだ。

「あんたの気持は分かるがコウはもう民間人だ、それ以上やったらあんたの立場に関わる」

「……大丈夫だよ、モウラ。此れくらいの事で訴えたりはしないよ。」

その声は意外にも被害者であるコウの口から放たれた。加害者で有る筈のキースは薄いＴシャツの表面に浮き彫りになった、繊維の太いコウの腹筋に拳を押し当てたままで微動だにしない。手に加わった衝撃と頭の芯にまで響いた痛みに驚いて、キースが呟いた。

「一体どういう風に鍛えりゃ、こんな体になるんだ？ これでも結構目一杯なんだぜ、」

そう言つとキースは上目遣いに被害者か加害者か立場の判然としない友人の顔を見上げて、満面の笑みを浮かべた。

「コウ。」

破顔するキース。安堵の溜息を吐いたコウが腹に捻じ込まれたままのキースの手を握り締めて。

「済まない、キース。……元氣そうだな。モウラも。」

投げ掛けられた微笑と二人の握手を目の当たりにしたモウラの緊張が解けた。その光景で遡っていく記憶が、嘗ての二人の関係を思い出させる。

記憶の輪の中に囚われたモウラが無意識の内に敬礼しようと右手を上げた。その手を押さえる様に握るコウの左手のぬくもりと肉刺まめ

だらけの掌の感触にはつとずるモウラ。焦点を合わせる彼女の視界の中で小さく頭を振るコウ。

意図を察したモウラがその手を負けない力で握り返して。

「久し振りだね、コウ。近況の分らないあんた以外は皆元気さ。

…… あんたも、元氣そつで何よりだ、」

なぜ、こんな他人行儀な挨拶しか思い浮かばない、とモウラは思う。自分にそう思わざざるを得ない、自分の手を握り締めたコウの浮かべる微笑が何故かモウラの癪に障った。何もかもを達観した様な面持ちで自分の顔を見詰めるコウに向つて湧き上がる微かな怒気が言葉に変わる。

「もう軍人には見えない。」

モウラの笑顔と眉間に寄せた皺、それはモウラの中で産声を上げつつある<sup>もと</sup>悸る感情を表していた。再会を喜ぶ気持と戸惑い、思わず飛び出したその言葉に微かな憂いが秘められて。

モウラ達がオークリー基地に赴任してきた時、此处は『はみだし者の吹き溜まり』だった。

戦場に活躍の場を失った陸軍。その中でも常にジオンの地上軍と対峙し多くの犠牲の上に戦果を積み上げて来た陸戦隊をまるで厄介者の様に隔離した、掃き溜めの様な場所。それがこの基地に対するモウラ達の第一印象だった。

陸軍にとつて彼らモビルスーツパイロット若しくはそれに関わる人員というのは憎悪の対象以外の何者でもない。彼らから活躍の場を奪い、彼らの尊い犠牲の上を我が物顔で踏み付けていくモビルスーツの存在を陸軍の兵士達は常に呪った。そしてかの大戦の帰趨を決めたのがさも自分達だと言わんばかりにのさばる宇宙軍の兵士はそれは『テイターンズ』も例外ではない 同様に散

つていった彼らの仲間の尊厳を踏み躪る『ジオン以上の敵』でしかなかった。モウラ達はそんな空気の漂うオークリー基地の、最初のモビルスーツ隊の構成員として赴任させられたのだ。

最小限の人数で構成されたモビルスーツの部隊とそれ以外の陸軍の兵士達。整備員は常に他の兵士の虐めに苛まれ続けて覇気を失い、気力を失い。モウラはその度に彼らの挑戦を受けて立った。キースを、二ナを、そしてコウが恐らく還って来るであろうこの場所を守る為に。

生傷の絶えない日が続いた。時にはあまりの仕打ちに耐えかねてモビルスーツのボルトを締める為の巨大なスパナを持ち出して振り回した事もあった。それでも大勢を占めるならず者の責めに何時までも耐えられるほど彼女はタフではない。

そんな時にオークリーへと赴任して来たあなたは、あたしやキースと一緒に奴等と喧嘩してくれたね。どんなに大勢でかかって来ても怯む事無く、臆する事無く。

素手で陸軍の連中をあつという間に叩きのめすその姿は、あたしやキースや二ナが知っているコウとは違った。奴等の間をひらひらと飛び回り、一撃で熨していくあなたを見て、あたしはコロニーが落ちてからの五ヶ月間の間に何があったのかを勘繰ったほどだった。まるで別人の様だったからね。

でもあなたは相手を叩きのめしても、相手を憎んだりはしなかった。自分で怪我をした相手の下へ見舞いに行き、罪を全部被って営倉に入り、そして又喧嘩する。

あなたの階級は下がってしまったけど、それと引き換えにあなたはこの基地の皆の信頼を得る事が出来た。『伍長』で隊長つてのも変な話だけど、それでも皆はあなたの背中に着いて行く事に決めたんだ。あなたの優しさが、あなたの強い意志が。

こんな掃き溜めみたいな場所に居ても生きる価値はあるのだと。あなたは拳で皆に伝えて、理解を求めて。それを成し遂げたあなたが。

そうだよ、コウ。『シャーリー白鷺』と言うコードネームはあなたがつけたんじゃないか。仏教の故事に準えて、未来を失ったこの基

地の兵士を希望の明日へと導く為に。

そのあんたが。先頭に立たなきゃいけないあんたが、何で他人顔で此処にいる？

あたし達を棄てて、そして『あの事』を一生懸命に取り繕うとする二ナの気持を顧みずに去っていったあんたが、何故？

憂いと共に放たれた棘。だがコウはそれを受け止めて尚、複雑な笑顔を崩さずにモウラの顔を見上げた。モウラの濃い茶色の瞳に映る、心に深い疵を負った気高い鳥が後悔を顧みない視線をモウラに刻んで。

「そうか、そうだな。もう俺は軍人じゃない、只の農夫さ。コウ・ウラキと言う、只の。」

一言一言を選びながらモウラに語り掛けるコウの声。その言葉がモウラの中に充満した、不満という名の貯水池の堰を切った。

「そうだな、だって？」

握り締められた手を振り払ってコウの両肩を掴んで。キースの行動を押し留めようとした筈のモウラを選択が、何の衝動によって齎されたかを感じたキースの手が思わず掴んで制止しようとする。

「モウラ、止める。」

鋭く放たれたキースの言葉も振り切って、モウラはコウに向かって怒鳴った。

「あんた、本当にそれでいいのかい！？ モビルスーツから降りて、黙って出てって、それで本当に！」

激情に駆られたモウラの両手に力が籠る。コウの盛り上がった肩の筋肉を引き千切ららばかりに握り潰そうとする臂力が、コウの無意識によって跳ね返されて。それでも尚加力を続けるモウラの両手が激しく痙攣する。

「あんた、あの時に                      フォン・ブラウンで脱走した時には帰ってきたじゃないか！ モビルスーツを降りる事を、ガンダムを降りる事を諦めきれずに戻ってきたじゃないか。それなのに何で此処

まで来て諦め切れるんだ？ あんたが突然軍を止めたのをキースが、二ナが、あたしがどんな思いで見送ったと思ってるんだ！？」

モウラを見上げるコウの顔から笑顔が消えた。自分の言葉がコウの心に届いている事を悟ったモウラが尚も喚いた。

「あんたが除隊届けを取り下げられた事は知ってる。でもね、あんたがこの土地から オークリーから離れられなかった事も知ってるんだ。でも予備役に編入されたあんたと接触する事を禁じられたあたし達がどんなに苦しんだか少しでも考えた事があるのかい？ 直ぐ傍にいながら会う事も 年に一度の予備役訓練の際に立ち会う事も許可されないあたし達のこと 二ナの気持を考えたい事が、」

「やめて、モウラ。」

吐き出されるモウラの激白を遮る静かな、それでいて強い意志を感じさせる声がモウラの背後から響いた。思わず振り返るモウラの視野の中に映った二ナの影。

「二ナ……」

「お願いモウラ、もう止めて。」

呟かれる再びの制止を求める言葉とサングラスの奥で揺れる瞳に気圧されたモウラが思わずコウの前から離れた。

遮る物の無くなった空間の中で向かい合うコウと二ナ。それはコウの見る悪夢の中で何度も何度も巡り合った状況の、風景を携えた焼き直し。

距離を置いたまま向かい合う二人の景色をコウの両手が動いて弄んだ。手にしたゴーグルを再び顔に掛けて二ナに向かい合う。その目に浮かぶ言いよりの無い感情を誰にも見透かされる事の無い様にコウが頭を一つ下げて、二ナに言った。

「お久し振りです、パープルトンさん。」

それは言葉の形をした刃。光の束ごと空間を疵付けた感触を感じ取ったキースとモウラが肩を並べて、揺らめく空気の向こう側に佇む二ナを振り返った。

微かに震える肩、高鳴る鼓動で早くなる呼吸。そしてサンガラスの奥で揺れる二ナの蒼い瞳が絶望と言う名の色に塗り潰されて。だが彼女はその全てを覆い隠す様に軽く頭を下げて、凜とした声で空間の疵口を蔽った。

「ウラキさんもお元気そうで、何よりです。」

互いの思いを互いに貫く互いの刃が互いの血で汚れてしまう。差し出された剣先を躲す事無く受け止める二人の心は自らの体の自由を奪い去る、時の進めを押し留める。

周囲に渦巻く喧騒と言う名の日常さえも届かなくなったコウと二ナの対峙する空間は、コウが見た悪夢の世界だ。閉塞する感情が生み出した仮想の現実を目の当たりにして心の奥底に眠るコウの蟠りが動き出す。

喉元を競り上がり、舌の上にまでにじり寄るその言葉を吐き出すとした瞬間、二ナの言葉がそれを封じ込めた。

「モウラ、私はもう行かなきゃ……………データの分析が終わるから。」

蚊帳の外にいた二人が気付かぬ内に何時の間にか頭を上げていた二ナがモウラを見た。その目に宿る無言の意志がモウラの助け舟を否定している。二度と訪れない一隅の機会を有効に利用せんが為に二人の口から会話を導き出そうとしたその口を嚙んで軽く頷くモウラ。その行為に感謝する様に固い笑みを返した二ナがコウに向かって軽く会釈をした。

「では私はこれで失礼します。」

二ナの口から吐き出されたその言葉でさえ震えを帯びて。踵を反す二ナの背中に向って目を閉じて無言で頭を下げるコウ。モウラにしか分からない、いつもと違う二ナの歩調の忙しさに遣り切れなさを募らせるその耳にコウの声が聞こえた。

「キース、モウラ。悪いけど俺もそろそろ行くよ。」

声を掛けられた二人が我に帰ってコウを見た。声の主はその場からの一刻も早い退場を願う様にイグニッションをオンにする。唐突

に告げられた別れの言葉を否定して、キースが口走った。

「待てよ、コウ。久し振りに会ったんだ、せめて飯ぐらい一緒に食ってつてもいいだろ？ 二年ぶりなんだぜ、積もる話も山ほど

「キース。」

通電を告げる赤いインジケーターを見詰めていたコウが不意に顔を上げた。ゴーグル越しに浮かぶその瞳に描かれた決別と、後悔と、自傷の念がキースの心に我が事のように押し寄せて言葉を失わせた。

「俺達が接触する事は許されない。……それは俺が予備役に編入を願いだした時に出された唯一の条件だ。此処で俺と話している事を誰かに見られるだけでも、残っている皆に迷惑を掛ける事になる。」

「そんな事かまいやしないって！ どうせ此処は『忘却博物館』だ、誰かが見てたつてそれをお上に告げ口する奴なんているもんか。それに誰かが密告チクった所でそれをまともに取り合う。」

時はあの頃に トリントンでテストパイロットだった頃に遡って。自分の立場も忘れて捲し立てるキースの言葉を掻き消すドウカテイのセルモーター。鼓動を取り戻した獣の心臓は咆哮を上げて、一時取り戻したオークリーの日常を踏み躪った。

突然の爆音に耳を塞ぐキースとモウラ。二人の姿をじっと見つめて、何かの感傷に囚われて自分の最も身近にいるキースの顔を覗き込む、コウ。

「キース。」

心の間隙から漏れ出したコウの呟きは、アイドリングを続けるエンジンの鼓動の合間を付いて放たれた。

「……俺は、みんなを棄てたんだ。……自分勝手な理由で、全てを。」

その呟きを耳にしたモウラの足が途端に動いた。憤然とした表情でコウの元に迫ろうとするモウラ。心のやり場に堪え切れず、規則正しく空気を掻き乱すドウカテイの排気音に負けない大声で怒鳴り

声を上げた。

「あんだ、まだ！　自分が加害者面してればそれで全てが丸く収まるとでも」

実力行使でバイクから引き摺り降ろそうと。降ろしてコウが見捨てた皆に成り代わってその腑抜けた顔に拳の一発でもお見舞いしてやろうと。

衝動と確固の混在する意志で伸ばされたその手がコウの胸倉に届く前に、キースの手がモウラの分厚い胸を叩いた。止めると言うには余りにも力の籠ったその一撃に、モウラは思わず顔を顰めてキースを睨む。

「キース、どうして!？」

モウラの声はそこまでだった。モウラの顔を睨み上げるキースの目に点る強い意志の光。それはモウラの取ろうとする行動を絶対的に阻止しようとする表れだった。気圧されたモウラの動きが止まった事を確認して、キースがコウの方を振り返った。

「わかったよ、コウ。……元気でな。」

キースは笑いながらコウの目の前に右手の拳を差し出した。その手を見詰めるコウが、初めて歯を見せて笑いながらその拳に自分の拳を軽く打ち付ける。

「ありがとう、キース。……じゃあ。」

深い感謝の念がゴーグルの奥に沈んだコウの目に宿っている事にキースは気付いていた。それがモウラの怒りから自分を守ってくれた事に対する物なのか、それとも自分のした行いを咎めずにいてくれた事なのか判断は出来ない。だが最後に見せたその目の光だけが以前の、自分の見知ったコウ・ウラキ本人の物であると確信したキースは深い安堵に覚えた。

「今は、これだけで十分さ。」

人知れず独白するキースの目の前をゆっくりとターンするコウのドウカティ。巨大な車体を軽々と振り回して元来た方向に向かってゆっくりと走り去るその後姿を小さくなる排気音と共に視界に収め



て。キースとモウラは自分達の戦友の行方に思いを馳せて、其々の思いを噛み締める。

強い日差しに晒されて渴いた風が、立ち尽くした儘見送るキースとモウラの頬を撫せていた。日の光は頂点を過ぎ、二人の足元に僅かな影を生み始めて、そして伸ばし始めて。

小さくドアをノックする音が二度。基地司令室内で思い雰囲気に包まれたままの三人が入室の許可を与える前に、その人影は優雅な身のこなしで室内へと入ってきた。静かにドアを閉めるセシルの後姿に目を遣りながら、ヘンケンが声を掛ける。

「よお、早かったな。」

ヘンケンの声に釣られてモラレスとウェブナーの視線がセシルに集中する。だがその視線を送る顔には議長の入室を出迎える様な深い安堵と感謝の念が籠められていた。二人の笑顔を確認したセシルが静かにヘンケンの隣の席に着いた。

「久し振りじゃな、セシル。偽装カバとは言えこの男のお守は大変じゃろう。どうせこのろくでなしの事だ、面倒な事は全てお前さんに押し付けてのほほんと平和を満喫し取るんじゃないやろう？ 全く、お前さんの苦勞を考えると同情に耐えんわい。」

「いえ、そんな。」

にこやかな笑顔を浮かべてモラレスの言をやんわりと否定するセシルがヘンケンの顔を振り向いて言った。

「もうすっかり農夫の姿も板についてますわ。このまま艦を降りても十分生活できるくらい。もしかしたらこっちの方が性に合ってるんじゃないやありませんか？ 艦長。」

「皮肉かよ。」

そう言いながら煙草に手を伸ばそうとしたヘンケンの手の甲をセシルの手が引つ叩いて阻止した。痛みに顔を顰めて手を引つ込めるヘンケンの咎めるような視線を、笑顔のままで受け止めるセシル。その二人の遣り取りを正面から眺めていたウェブナーが呟いた。

「やっぱり中佐のお守を副長に頼んだのは正解だったようですね、他の連中だったらこうは行かない。相変わらずお見事です。」

賞賛するウエブナーに向って軽く会釈をするセシルと、相對する表情を浮かべて賛辞を送ったウエブナーを睨むヘンケン。そのウエブナーに向ってセシルが尋ねた。

「それでお話の方は何処まで？ 我々の追加戦力にコウ・ウラキ伍長を加えると言う事でしたが。」

「む……………」

セシルの問い掛けに一つ唸ったまま黙り込むウエブナー。セシルがヘンケンの表情を窺う。だがヘンケンの表情も正面のウエブナー同様、浮かない顔で宙を睨んでいる。二人の表情を不思議そうに眺めるセシルに向って、モラレスが重い口を開いた。

「その件じゃが…………… 大変残念ではあるが断念する事にした。悪く思わんでくれ。」

固い表情でセシルに決定事項を告げるモラレス。だがセシルは未だに残る微笑を崩さずにモラレスの顔を見詰めた。それが理由の催促だと気付いたモラレスが尚も言葉を続けた。

「理由はこの二人には話したが、あくまで儂個人による医学的見地からの判断じゃ。詳しくはその机の上のファイルに記載してある、読んでみてくれ。」

モラレスに促されたセシルの繊細な指が机の上のファイルに伸びた。

手に取り表紙扉を開いて一枚目に目を通す。セシルの瞳が目まぐるしく紙面上を駆け巡っているのがモラレスには分かる。彼女の立場ならばこの程度の報告書に目を通す事など造作も無い事なのだろう。そのスピードはヘンケンやウエブナー、そしてそれを書いたモラレス本人を遙かに凌ぐ勢いでページを開いていく。

造作も無い事なのだ、戦闘艦のCDC (Combat Direction Center: 戦闘統括所) の責任者たる、セシル・クロトワ少佐にとってこれ位の事は。

十ページにも及ぶ報告書を瞬く間に読み終えたセシルの手がファイルを静かに閉じた。

「なんて酷い事を…… ウラキ伍長はこの事を？」

モラレスに尋ねるセシルの表情からは既に笑顔が消えていた。哀れみを浮かべた瞳が微かに潤んでいる。

「言つてはおらん、だが本人も自分の体の変調に関しては薄々気付いておるかも知れん。自分が叩きのめした相手をわざわざ見舞う様な優しい男じゃ、戦闘中に殺人衝動に駆られる自分の心境の変化には耐えられまい。故に『自殺依存者』に知らず知らずの内に自らを追い込む羽目になっていくという訳なんじゃが…… どちらにしても今のままでモビルスーツに乗せる事は自殺幫助と同じ事じゃ、そんな事を医者である儂が許可出来る筈がなかるう？」

「では、対処療法はどうです？ 生成されているのが麻薬物質だとしたらその症状を緩和させる薬品を投与すれば」

セシルの言葉にヘンケンとウェブナーの表情が変化する。その意見に一縷の希望を求める三人の顔。だが回答権を有するモラレスだけがその光に手を翳して濃い影を、紡ぐ言葉で作り出した。

「その可能性も模索しての儂の判断じゃ。…… 確かにこの物質がアンフェタミンだったとしたら抗精神病薬のハロペリドール辺りが有効に作用するじゃろう。じゃがセシル、考えてみい、」

言葉を切ったモラレスが真っ向から見詰めるセシルの視線を避ける様に目を逸らした。

「…… 人の感情を根本から塗り替えるほど強烈な合成麻薬に、何時までそんな物が対抗できると思う？ 量が増えれば副作用も発生するじゃろう。吐き気、痙攣。最悪の場合は心房細動を起こして死に至る。 行き着く所は同じじゃよ、やはり彼はモビルス

ーツに乗ったまま死を迎える事になる。」

「要するに、打つ手無し、か。」

諦めた様に司令室の宙を見上げるヘンケンの指には何時の間にか火の点いた煙草が挟まっていた。紫煙の行方を辿りながら、呟く。

「なあセシル。この報告書と今までの彼の行状を顧みるに、ウラキ君はよつぽど酷い戦場を戦い抜いて生き残った兵士なんだと俺は思う。こんな事言っちゃまえば指揮官としては落第だとは思うんだが、彼の事はもうそつとして、このまま無事に人生を送らせてやる事も有りなんじゃないか？ その権利を得る資格が彼にはあると思うんだが。」

「私も中佐の意見に同感です。戦術的に考えた場合、これほど稀いな戦闘能力を持った兵士が突然戦線を離脱した場合の影響は大きいでしょう。それこそ戦況がそれ一つで引つ繰り返りかねないほどにその可能性を考慮するならば彼の　　コウ・ウラキ伍長へのスカウトは見合わせた方が妥当ではないかと。」

二人が異口同音に放つセシルへの説得には、それでも諦めきれないと言った微かな離愁すら漂っている。だが指揮官であるからこそ配下に置く兵士の安否は最大限気遣つてやらねばならないと言つ、ヘンケンとウエブナーに共通する方針はコウの人生を尊重する方向へと大きく傾きを見せていた。

だがその声を耳にしている筈のセシルの表情に笑顔は戻らない。何かを思い詰めた顔を浮かべながら、美々しく整った唇が言葉を紡いだ。

「……彼は本当にモビルスーツに乗る事を　　戦つ事を諦めたんでしょうか？」

唐突に空間に放たれたその質問に、セシル以外の三人は耳を疑った。コウの予備役編入の書類にサインしたウエブナーが真っ先に声を上げてセシルの質問に答える。

「だから軍を離れて農夫になったのでしょうか？　戦闘中の彼の身体データはその報告書にも詳しく記載されていますが、その数値を見る限りでは彼は明らかに戦闘中に異常な興奮を　　殺人衝動にも取れる　　覚えている。ドクも言っていました。それが受け

入れる事の出来る人格は明らかに性格の破綻した人間に限られるでしょう。そうではないウラキ伍長が軍を離れる事には何の不思議も、

矛盾すら感じえませんか？」

「そう、何の不思議も、矛盾も無い。」

セシルの口から出る肯定の意志表示と、表情に浮かぶ否定的な視線。その視線をセシルに回答を与えたウェブナーに真直ぐ向けて、言葉を繋ぐ。

「……だから私には矛盾が感じられるのです、彼の今の姿や行動に。」

何かを確信した面持ちで話すセシルの横顔を無言で見詰めていたヘンケンが口を開いた。彼女の言に自分達が持ち得ない何らかの情報が得られている事は明らかだった。

「セシル、何故そう思う？ ウラキ君が農夫になって麦を作っている事に何処か疑問でもあるのか？」

「そう、その『麦』ですよ、艦長。」

途切れるセシルの言葉は彼女の頭脳が回答を求めて、会話の間中も限界まで稼働している証拠。戦闘宙域の真つ只中でも滅多に見られないセシルの様子を窺いながら、ヘンケンはセシルの言葉の続きを待った。其の好意に甘える様にセシルは一つ頷くと、更に言葉を続けた。

「……彼が何故麦を選んだのか。私はその事をウラキ伍長に尋ねた時、彼は遙か遠くの何処かを見詰めながら聖書の逸話を口にしました。麦が地面に落ちても生きようとすれば、その麦は只の一粒に過ぎない。でもそれが種となる為に自分を殺す事が出来たら、そこから多くの麦を実らせる事が出来る。」

「『ヨハネの福音書』の一節じゃな、確かエルサレムの演説と記憶しておるが。」

セシルの齎す情報を興味深げに聞き入っていたモラレスが言った。「かのイエス・キリストが自分の死とキリスト教の原理思想を民衆に説いた有名な逸話じゃが、それを彼が君に語ったと？」

モラレスの問いに小さく頷くセシル。髪と同じ色をした濃い翠の瞳が焦点を失って、ほんの数時間前の光景を思い出す。

「彼が『死』を求めるならば、軍に残つてモビルスーツに乗り続ける事が一番の近道の筈です。伍長自身がその事を前提としてこの言葉を語つたと言つのならその心情は理解も出来ません。ですが自らの意志で『死』から離れた彼が何故この言葉を支えにして生きているのでしょうか？ それに」

セシルの脳裏にコウの畑の光景が蘇つた。金色の穂、煌く光、響き渡る振鈴の音色。

「彼はまだ『何か』と戦っている。泥だらけになりながら、自分の体を痛めつけながらそれでも尚、今だに。……『死』を求める人間にあれだけの物を生み出せる筈が無い。」

セシルの眩きを聞くヘンケンとウェブナーの姿勢は知らずの内に前のめりになっていた。表情からは一瞬前に浮かんでいた諦めの表情が消え、セシルが紡ぐ一の言葉に光を見つけようと思案の面持ちさえ浮かべて。だが眩くセシルにそのヘンケンが厳しい表情を浮かべて尋ねた。それはまるで自分の中の楽観を否定するかの様に。

指揮官として『楽観論』と言う思考を閉塞させてしまう状況に自らを、自分の下に集う仲間を浸らせる愚だけは避けなければならなかった。

「セシル、ウラキ君が未だに何かに抗う意志を持っていると言う事は百歩譲つて認めよう。だがそれと彼をモビルスーツに乗せると言う話とは全く別次元の問題だ。『種』になろうとすると言う事はイコール『死』を求めると言う事。そんな心構えの兵士をこれから『テイターズ』に叛旗を翻そうと言う俺達の陣営に迎え入れる訳には尚更いかん。今の俺の立場と性格は副官であるお前が一番良く分かっているだろう？」

「彼が『種』？ ……いいえ、それも違うわ。」

セシルの疑問を理解し、尚且つそれを言い消そうとするヘンケンの顔をぼんやりと振り向いたセシルが何かを閃いた様に眩く。ヘンケンの言葉の中に紛れ込んだ誤回答を否定する声には確定的な響きが滲んでいる。

「志を失ってしまった戦士が『種』に等なれる訳が無い。そうじゃない、もしかしたら……いえ、たぶんそう。」

自問自答を続けるセシルの表情が目まぐるしく変化を続けた。数多の可能性に満ちた選択肢という水槽の中を手探りで掻き回す思考と言つ名の手が、遂に彼女の掌の中に小さな塊を握らせた。

「彼は『実』なんですよ、艦長。」

「どういう事だ？」

思わず尋ねたヘンケンの視界の中で劇的な変化を見せるセシルの面立ち。難解な数式を苦難の末に読み解いた学生のような満面の笑みを浮かべて、力強く答えた。

「……そうよ。彼は『実』なんだわ、それなら行動の矛盾にも説明がつく。『実』である彼には『種』の立場で語られた逸話の意味が解らなかつた。彼の心の何処かにはとつくの昔に『誰かの種』が蒔かれている。『実』となつたウラキ伍長は」

セシルの瞳に焦点が戻つて、ヘンケンの瞳を貫いた。  
「実らせる場所を求めて彷徨っているんだわ。『種』の遺志を受け継ぐ為に。」

「『至高』だと？ それは何の事だ。」

怒気混じりに目の前に佇む声の主に向つて尋ねるバスクではあつたが、其の喫水は大きく嵩を減らしている。浅くなつた怒りの代わりに彼の心を支配する物は、類稀な狂人が解き放つた言葉に対する純粹な好奇心だつた。

「貴様の師であるフラナガンが一体何を予言したと言つんだ。『生まれ乍らの新人類』とは一体どういう意味だ？」

男の放つた言葉をバスクなりに意識して尋ねる其の言葉に、男は微かな不快感を示して言つた。

「『新人類』等と言つ時代錯誤な概念ではありません。『ニュータイプ』と言つのはあくまで能力に付けられた名称に過ぎない。私が申し上げているのはもっと高位の位置に存在する、生まれ乍らに其

の能力を開花させた最高の『素材』を持つ人間の事です。」

自分達が多大な犠牲と莫大な金銭を次ぎ込んで開発しようとしている能力者の事を『時代錯誤』とまで蔑んだ男の顔を、バスクが訝しげに眺めた。投げ掛けられる懐疑の視線を物ともせず、

「『ニュータイプ』とは元々の素養を持った人間が何らかの要因

主に死生観を伴った極度のストレスですが によつて

後天的に発動する能力の事を指します。どういう物かはバスク大佐もご存知だとは思いますが。」

「敵の存在を探知し、予測する能力。貴様らから接收したデータによればそれがミノフスキー粒子に干渉する事を利用して、意志による遠隔操作が可能な武器を開発したとも書かれてあつたが、それ以外に何かがある？」

「其の認識は誤りです。残念ながら、それは『ニュータイプ』ではない。」

断言する男の言葉に愕然とするバスク。自分達が其の有用性を信じ、被虐の限りを尽くした人体実験にまで手を貸して求め続けた能力の実体を完全否定する男の前で、驚きのあまりに半開きになった口から断片的な問い掛けが漏れ出した。

「な、何……だ、と？」

「私やフラナガンに言わせればそんな者は只の『部品』です。人殺しに少しばかり特化した能力を持つ。……だからこれだけ大量

の『強化人間』を『生産』する事が出来るのですよ。消耗、損耗した時の為だね。」

そうバスクに語る男の顔が自虐に歪んだ。それが自分や自分の師であるフラナガンが求めている者ではないと分かっているながら、そうせざるを得なかつた科せられた運命を呪っているのかも知れない。男の目が凍り付いたバスクの顔を見上げて尚も続いた。

「私が言うのはそんな取替えの利く部品連中の事を言っているのではない。生まれ乍らにして其の能力を發揮して世界の進化を促進させる能力を有する者。政治、経済、科学等の様々な分野において未



来を予見し、創造する事で世界を導く先駆者たる存在の事を指すのです。…… フラナガンは嘗て私の前でそう予言しました。必ず近い将来に、そういう者が現実には頭角を現す筈だと。」

「貴様の求める其の能力を持った存在の一人がこの  
手の中に残っている皺だらけの紙切れに視線を落としながらバスクが毒づいた。」

「ルナリアンの小娘だと言うのか？ 馬鹿馬鹿しい。」

吐き棄てるバスク。だが男はそんな侮蔑の言葉と表情を前に何の動揺も起こさない。

既に男は気付いていたのだ。この戦いの主導権が自分の手に委譲した事に。一瞬の空白　　バスクに自分の考えを認識させる為の心の余裕を与える為の　　後に男はバスクに提案した。

「バスク大佐、今貴方に与えられた選択肢は二通りだ。一つは此処で私を解任して、今貴方が躍起になつて創ろうとしている『ニュータイプ専用兵器』に載せる為に役立たずの強化人間達を連れて行くか。それともこの

男の指が再び懐を弄つて、一枚の写真を取り出した。恐らくアナイム社の人事部から借り受けてきたのだろう、其の写真に写った二ナはスカイブルーの制服を纏った胸像として収められている。

「二ナ・パープルトンと言う女性を私の元に連れて来て、私の可愛い強化人間達が百パーセントの力を発揮出来る兵器の開発を継続するか、…… 選ぶのは、貴方だ。」

勝ち誇つた様に告げて写真をバスクに手渡す男の顔が、恐ろしく冷酷な表情を浮かべて。弱者を射竦める様な視線にたじろいだバスクが辛うじて其の動揺を押し留める事に成功した。声を震わせない様に注意しながら言葉を吐き出す。

「貴様の『要求』は理解した。早速軍の上層部に掛け合つてこの小娘の転属を申請する。早ければ一週間後にはこの研究所に赴任する

それは駄目です、バスク大佐。折角の極秘開発プランに手掛かり

を残す羽目になる。そういう正式な方法ではなく、もっと他の手段を探るべきです。」

含みを残す男の言葉にバスクは苛立った。発言の悉くに対して主導権を握る男の発言に憤りを隠せないまま、バスクは声を荒げて尋ねた。

「では他にどんな方法があるというのだ！ 貴様、我等テイターンの力を侮っておるのではあるまいな？ その様な策を弄さずとも我らの力ならば手掛かりごと抹消してこの小娘を貴様の元へと送り届けてやるわ！」

「其の抹消した筈の手掛かりを今し方貴方は目にしたではありませんか、もうお忘れか？」

男の指摘した事実はバスクの苛立ちや憤りを霧散させるだけの説得力を持っていた。手の中に残る紙切れと写真を思わず握り潰しそうになって、其の行為を思い止まらせようとする強烈な意志が彼の手を震えさせた。発言の進捗を求めて口を嚙んだまま睨み付ける視線を受けた男が、さも自分の考えが名案であるかの様に歪んだ笑みを浮かべた。

「そんな遣り方じゃなく、もっと確実な方法があります。……」

幸いな事にあの基地を中心に半径二十キロ以内に人の居留地が存在しない。つまりはそんな所で何が起ころうと誰にも知られる事は無い、という事です。違いますか？」

「…… 貴様、自分が何を口にしていいのか分かってるのか？」

男の意図を察した「軍人」としてのバスクが殺気に満ちた声で男に尋ねた。男の提唱する『同胞殺し』の提案を鵜呑みにする事は、軍の武官という立場において容認する事は不可能だ。

だが男は、バスクの其の言葉と言外から漏れ出す否定の色合いが全くの虚偽である事に気付いていた。男の手が其の遣り取りをあぐねた様に蓬髪を掻き揚げて、告げた。

「バスク大佐、もういい加減私に隠し立てするのはおよしなさい。」

私の要求を受けた貴方がそれを満たす為に連邦勢力内の研究拠点を地球内外問わずに襲撃して、大勢の科学者を略取しているのを私は知っている。ジャミトフ閣下に命令されて貴方が極秘裏に組織した『傭兵部隊』を使つてね。」

其の言葉が今日この場でバスクに向けられた最大の衝撃波だった。反論しようとする意志も、偽証しようという口も全て動きを封じられたバスクの、補正眼鏡の裏で濁った光を放っていた両目の焦点が失われる。

「それを何故私が知っているかを貴方が知る必要は無い。要は貴方が其の部隊を動かす意志があるかどうかという事だけだ。『忘却博物館』を閉館する意志があるというのなら、私と貴方の野望は成就に向けての新たな一步を踏み出す事が出来る。」

「もし、其の意志がなければ」

苦しげに詰まらせた息を吐き出して問い掛けるバスクの顔を見上げて、男が言った。

「私は別に。だが貴方は今後宇宙史に残るかもしれない最大の手柄を失う事になる。今私が創り上げようとしている理想の強化人間に適合する兵器が完成したならRXシリーズ等足元にも及ばない、究極の兵器に成り得る。そうすれば連邦が対コロニー政策を進める上において絶対的な支配力を手中に収める事が出来る。それだ

けの輝かしい未来を貴方は自らの下らない感傷で棒に振る覚悟が有るありで？」

卑劣な言葉に魔力を纏わせて紡がれる男の声がバスクに目の焦点を取り戻させた。濁った瞳の奥に冥府の影を投影したバスクが、思い詰めた様に男に向つて呟いた。

「俺は、やはりさつき貴様を撃ち殺しておくべきだった。……」

貴様は人間ではない、人の理想の影で其の欲望を食い物にする、只の悪魔だ」

バスクが揶揄する言葉の端々ですら、其の男の心の何処にも感傷を与えない。寧ろそれこそが本懐と言わんばかりに笑みを浮かべて

自分を見上げる男の顔を睨み付けて、バスクは初めて其の狂人の名を口にした。

「 エルンスト・ハイデリッヒ。科学に魂を売り渡した狂信者め。」

其の部屋の壁はまるでモニターで作られているかの様だ。

縦横にモザイクの様にはめ込まれた画面が予め定められたルーティンによって規則正しく切り替わっていく。映し出されるのは彼らが守護領域と認識する研究所内の敷地。監視カメラの映像は深夜にも拘らず、僅かな光を寄せ集めて画像を取り込む『スターライトカメラ星の光の瞳』を駆使して、課せられた任務を厳格且つ実直にこなすべく休息すら忘れて、ひたすらに変化の無い景色を映し出す。

だが其の変化は突然で、しかも瞬きをするほどの僅かな間に発生した。

トラッキングが乱れて画像が歪む。それだけを取ってみれば何の事は無い、機械に稀に発生し得る電圧の乱れによる障害の様にも見える。

しかし彼らが守護を命じられた領域は連邦に属する民間工業の中でも一二を争う軍需産業の極秘研究所であった。厳密に設計された警報システムは例え如何なる障害があろうとも『スタンドアロン独立且つ自律』で機能し続ける事が絶対の条件として、設計と設定が其の企業に属する大勢のシステムエンジニアによって為されていた。

起こる筈の無い障害の発生。それは何らかの危険の襲来を言外に予言する機器の悲鳴。これが六年前　戦争の最中に起こっていたならば即座に意見を聞き入れ、対処と便宜を図ってくれていた事だろう。だが平和と言う墮落は彼が叫ぶ警鐘をただのシステムエラーと認識し、彼がシステムを通じて齎す悲鳴を聞き届ける為に配置された『警備員』と言う不確定なシステムから『危機管理』の文字と役目を奪い去っていた。

絶対の安全性と言う実績に身を委ねた彼らの意識は予期せぬ危険を不具合によって伝えようとするモニターの羅列に背と目を背け、専ら目の前に積み上げられた拳銃弾の山と手の中に広げられた五枚

のカードの組み合わせによって優劣を競い合い、奪い合つと言つ行為に没頭する事を余儀無くされていた。

希望と欲望と絶望に血走つた目をテーブルの上に投げ出したままの姿で。

「おつ、オールインだ！」

耳まで真つ赤に染めた男が満を持して大声を上げた。震える手を差し出して目の前に詰まれた拳銃弾の山　それでも他の三人よりは遙かに少ない　をテーブルの中央へと追い遣る其の姿を、男同様に欲望の坩堝の中でもがく三人の男たちが其々の思惑を表情に浮かべながら眺めた。

男が積み上げた掛け金と同じ額を張るのがポーカーのルール。今月の給金分を使い果たし、来月分まで前借してまで勝負を続ける不運な男に廻つてきたツキの大波を其の声と仕草によつて感じた隣の男が思わず非難の声を上げた。

「手前、嵌めやがったな？　今まで大人しく保留を繰返してると思つたら、このチャンスを待っていやがったのか。」

苦々しく毒づく男の目の前には「オールイン全額賭け」を宣言した男よりやや少ない拳銃弾が積まれている。幾度かの「ベットラウンド賭け廻り」を経て積みれた掛け金は、もう後戻りの利かない額にまで　それは他の

男達も同様である　達していた。死に体と化していた男のツキが幻である事を信じて、毒づいた男は乱暴にチップ代わりの拳銃弾を自分の山に追加した。勢い余つた何発かは弾け飛んでテーブルの下に転がり落ちる。

「おい、あんまり乱暴に扱うなよ。ブランク空砲じゃないんだぜ？　暴発したらどうする。」

毒づいた男の向かい側に坐つた男が上体を沈めて床に転がった弾を拾つてテーブルの上に戻した。他の三人よりも遙かに高い山を抱える其の男はにこやかな表情を其の緊張の中でも崩さずに、さり気無く自分の山に弾を追加する。横目でチラリと策を弄した男の顔を

見て、穏やかな口調で言った。

「ツキもチャンスも平等だからな。今まで負けに負け続けたんだ、一回くらいビッグチャンスが廻って来てもおかしくはないだろう？」

まあ、最も

戻した視線が自分の手の中に広げられた五枚のカードを見詰めている。其処に出現した今日のツキの度合いが何ら損なわれていない事を確認して、男の顔が自然に綻んだ。

「これで負けたらお前は来月、俺達の代わりにずっと夜勤を一人で勤める羽目になる。残業でもして稼がないと払い切れる金額じゃないからな。」

「冗談じゃない。そんな事になってたまるかよ。」

勝ち頭である男の挑発に顔を歪めて抗議する、捨て身になった男の声。だがそれは事実で現実だ。

一か八かで打って出たこの勝負に負けるような事があれば、来月の給金まで失った男の身柄は他の三人の言い成りになるに違いない。少なくとも自分のシフト以外の毎晩、夜勤をさせられる事は確定的だ。そんな事になったら自宅に帰って家族の顔を拝む事も叶わなくなる。

だが、万が一にもそんな事はありえない。

少なくともこの手役の前に其の予想が現実となって降り懸る事は絶対に無いのだ。

勝ち頭の男の挑発に向きになって反論する男の手が、彼を餌食にしようとする仲間の思惑を覆す事の出来る喜びに震える。小刻みな其の動きを目にした正面の男が、片眉を吊り上げて声を掛ける。自分のカードを裏返しにしてテーブルの上に置き、残ったカードの束を手の中で弄びながら尋ねる其の姿は、この男がこのラウンドの『親』である事を証明していた。親である其の男は場の状況を整理統括する立場である事を自ら弁えて、極力感情を載せないよう注意しながら三人に問い掛けた。

「どうだ、掛け金を上乗せする奴はいるか？」

親である男はそう言いながら他の三人と同じ弾数を目の前に押し遣った。

これで四人がテーブルの中央に出し合った掛け金は同額。ポーカーでは此処でレイズがかからない限り、ベットラウンドを終了して次のターンへと移行するのがルールだ。其々の意志を確認するべく親である男が役目に准じて卓を囲んだ他の男達の顔を一瞥する。其の視線を真っ先に受けた　　こういふ事は勝ち頭の意志が優先する　　男が口元に笑いを浮かべて一言呟いた。

「コールだ。」

この回の勝負に負けた所で自分の種銭には聊かの被害を被る事のない男の宣言は、其の卓で資産を奪い合う他の競技者の総意となつて存在を果たした。無言で頷いて同意する他の二人の仕草を確認して、親は静かにラウンドの終了を告げる言葉を口にした。

「よし、では手を開こう。ショーダウン……誰からだ？」

「コールしたのは俺だ、俺から開こう。……キングとジャックの」

そう言いながら勝ち頭の男が手札をテーブルの上で開く。一纏めに置かれたカードの上をなぞつた掌の影で展開するカード。まるでそれが自らの運命を決する判決文　　ある意味そうなのだろう

であるかの様に凝視する二人の男。其処に現れた手札の意味を理解した二人の表情の明暗が分かれた。

チップ代わりの銃弾を床に落として毒づいた男の表情は、明らかに苦渋に満ちて。

有り金全てを掛けた男の顔は安堵に囚われて。

「フルハウスだ。」

キングのペアとジャックのスリーカード。

『ハツタリ』フロップをかける事無く勝負出来るツーペアとの成立確率の差は凡そ三十倍と言う難易度の高い手役を引き当てた男の顔は、果たして勝者の余韻に浸りきる事は出来なかった。その原因を醸し出す負け続けの男の安堵の表情が男の声に疵を齎している。側で苦渋に



満ちた表情を浮かべた男が罵声を上げて手の中のカードを裏返しのままテーブルの上に放り出した。

「くっ …… そっ！マック（Muck）だ、マックっ！」

それは自ら負けを宣言する行為だ。投げ出したカードが目の中の拳銃弾の山に引っかけかかって止まる。カードを堰き止めた山に値する金を失った男は失意の心境共々体を後ろに投げ出して、椅子の背凭せもたれに体重を預けて天を仰いだ。其の仕草の横で未だにカードを手にしたまま黙って事の推移を見守る、今までは不運のどん底に喘いでいた男の変らぬ姿勢。

「あんたはどうなんだ？ 次は親の番だぜ。」

手役を晒した男が親である男に尋ねた。親である男は促されるままに手札を重ねてテーブルに置いて男と同じ仕草で掌を動かした。広がるカードが示す手役の正体を前にして勝ち頭の男は呆気に取られ、親である男の表情は僅かに綻んで。

「悪いな、俺もフルハウスだ。 …… 10とAの<sup>エース</sup>。」

手役が同じならば主要構成部分のカードの大小が優劣を決する。

ワイルド以外では最強のAを突き付けられた勝ち頭の男が其のカードに目を見張った後、ふつと溜息を吐いて親の顔を見た。諦めの笑いが張り付いたままの顔で皮肉な口調が漏れ出す。

「やられたな。すっかりあんたの表情に騙されたぜ。この勝負の勝ちはでかいな。」

「いや、まだだ。」

勝負の帰趨は決したと確証して次のチャンスを狙う為に新たなターンへと移行しようとした男の思惑を、親である男の呟きが制止した。其の視線の先に坐ったままの、未だに手札を開かぬ男の姿を見つめたまま。

この時点で負けを宣言しない男の手役が親の役より強い事は

つまり、この男は一発逆転のチャンスを物にした 明ら

かだった。このターンの勝者となった事が確定した男は掌の中で扇上に広がったカードから眼を離さないまま、勝利の余韻に震えてい

る。

負けが確定した三人の興味は、失った自分達の金よりもそれを失う要因となった男の手役の正体へと移行した。

およそ七百分の一の確立で出現するフルハウスを凌ぐ手役は四つ。だが其の出現確立は場に手を晒した二人の役を境に一気に六倍以上に跳ね上がる。彼に勝利を与えた大波の正体を知ろうと、親の男が興味津々で声を掛けた。

「どうした？ 手を皆に見せてみる。そのまま固まったままだと負けを宣言する事になるぜ。」

負けた事には変わりが無い。ほんの少し意地悪な響きを覗かせて促す男の声に誘われて、正面に坐ったまま震えていた男の顔が喜悦に歪んだ。手の中のカードを一枚、又一枚と勿体ぶった動きでテーブルの上へと並べ始める。

次々に並べられていく絵札。トランプの構成要素である四つの記号トの中では最も強いスペードで揃っていく手役を、六つの瞳が信じられないと言った色を浮かべて見詰める 当然だ。

一組の中に存在する絵札と10を合わせた枚数は二十枚。其の内の七枚は既に二人の男が使っている。いや、此処まで勝負を投げ出さずに着いて来た、手を投げ出した男の中にも何らかの絵札は存在しているかも知れない。それだけの障害を掻い潜って目の前にカードを並べ続ける男の得た偶然は、最早奇跡に等しい物である様に思える。

手の中の一枚を残して揃えられた10からキングまでのスペードの絵札。震える手で残りの一枚を握った男の目がカードから眼を離せず固まる三人の表情を窺いながら。

「…… おいおい、嘘だろ？」

「スペードの9でもストレート・フラッシュ。こいつの勝ちだ。」

「万が一、残ったカードがAだったら…… 掛け金倍付け。俺達は全員破産状態って事か？」

自分達で予め取り決めた独自のルールロカルを振り返りながら、怯えた

声を上げる勝ち頭の男。其の言葉の意味を理解した残りの二人は思わず唾を飲み込んだ。残り一枚のA　　しかしそれは確かに親の男の手の中には存在していなかった　　を引き当てていると言う、考える事すらおぞましい奇跡の可能性を言及しようとするかもしれない三人の表情を嘲笑って、男が最後のカードに指を掛けた。

音も無く全ての灯りが消滅した。

突如として出現した墨色の景色は男の意識を現実から遠ざけた。手の中に在った起死回生のツキも、彼の一挙手一投足を固唾を呑んで見守る同僚達の表情も掻き消してしまった漆黒の闇が、何によつて齎された物かと言う事さえも認知出来なくなった男が思わず声を上げた。

「お、おい。どうしたんだ一体？」

何かの悪戯だと　　ひよつとしたら負けたくない同僚の中の誰かが仕掛けた罠の可能性を、ありえない事ではないと　　疑った男の手が無意識の内に手の中のカードを握り締めた。それが無くなつてしまえば自分の勝利を証明する物が無くなると言う恐怖が男の意志とは無関係にこれ以降のゲームが続行不可能になる可能性を無視してカードをしわくちやにして掌に収めた。男の問い掛けに對して墨坪に沈んだ同僚の一人が言葉を返す。其の男の声も自分を突如取り巻いた異常な事態に緊張を隠せない声音で呟いた。

「何だ、落雷か？　　……　　変だな、そんな情報はインフォメーションには無かつた筈だが。」

遊興の意識から一瞬にして業務への帰還を果たした其の男の声は今し方親をしていた男の声だった。針の穴ほどの光も差さない漆黒に満たされた室内の中で身動きもとれずに只座り込んでいるだろう男の姿を想像しながら、彼は再び誰にとも無く問い掛けた。

「それにしても一遍に電気系統がダウンするなんて　　……　　非常電源はどうしたんだろう？」

「けつ、大方本社の方で勝手に機能を凍結してたんじゃねえの？  
ここんとこ予算の削減とかで総務部から通達が廻ってきてたじゃね  
えか。ったく幾ら大掛かりな戦争が終わって稼ぎが薄くなつたから  
って、こういう事まですることねえよな？ 全く、上の連中は何考  
えてるんだか。」

「まさか。其の文章が廻ってきたのはほんの二、三日前だぜ？ 幾  
ら『顧客のニーズに迅速に対応する』って言うのが建前のうちの会  
社でも早すぎるだろう。」

其々の思惑を暗闇の中で吐露して事態の回復を無言で待つ四人。  
彼らが勤務する保安部門の中央監視センターは二十四時間三交代  
制で運用されている不夜城だ。軍需を基幹と知る彼らの会社の中で  
も最重要機密を預かるこの研究所の監視システムが、例え偶然にせ  
よ何らかの障害が発生する事は男が晒そうとした手役以下の確立の  
筈だった。監視センターを逐次機能させる電源ラインは他の施設の  
物とは別系統に隔離されており、其の配線図、敷設構造、埋設場所  
等は嚴重に身元を管理されたごく少数の保安員にか知らされていな  
い。又それに加えて各々の保安員すら全ての構造を熟知している者  
など皆無であった。細心の注意を払って運営されているこの保安セ  
ンターの電源が正・副・予備の三系統に渡って同時にダウンする事  
等、この施設を設計した者にすら考えが及ばない事である。

だが現実には未曾有の事態が彼らを取り巻いて、漆黒の闇と沈黙  
の沼に彼ら四人を飲み込んでいる。勝ち頭の男が最後に放った言  
葉から幾許かの時間が経過した時、事態の復旧が認められない暗闇  
の中で自分の手の中に存在する幸運を詳らかにしようと望んだ男が  
焦れた声を上げた。

「おい、絶対何か変だつて。こんな時間まで復旧しないなんて幾ら  
なんでもおかしいだろ？」

其の闇の中に変わらず存在するであろう彼の同僚に向かって問い掛け  
られた言葉が、目標を探知出来ない音波ソナーの様に空間へと消えて行く。  
動揺に塗れた男の半ば錯乱気味の怒鳴り声が目の前を埋め尽くした

闇へと放たれた。

「おい、何の冗談だよみんな。何とか言ってくれよ。……畜生、さては」

黙して語らない同僚の態度に不愉快な意図を察した男が突然立ち上がった。ガタンという大きな音を立てて倒れる椅子の音と、テーブルの上から毀れる拳銃弾が甲高い金属音を暗闇の中に残して消える。其の状況の変化にも反応の無い彼の同僚の一人が坐っていたと目される空間に向って、闇雲に手を伸ばした男が怒鳴った。

「お前だな！？　こんな時の為に手の込んだ仕掛けをしやがって、汚いぞ！」

闇を手探る男の手が右隣で賭け札を放り出した不遜な同僚の肩に触った。手掛かりを得た其の掌が男の肩を掴んで力一杯揺さぶる。其処に何らかの抵抗が生じる物だと覚悟をしていた男の力は呵責の無い意志を孕んで、感情の赴くままに手を前後させようと。

苛立ち紛れに自分の意志を伝えようとした往復運動は只の一回も繰り返される事は無かった。

初動につられた同僚の体が掌から滑り落ちた。伝わった感触に意志は無く、意味は無く。重力の導くままに崩れ落ちて床に倒れる、直前まで憎まれ口を叩いていた同僚の体が立てる何かに湿った音が男に残された聴覚だけを刺激した。墨の様な闇に埋められた世界で起こる異常な事態を感覚的に知り得た男が震えた。震えは男の発する問い掛けにまで伝わって。

「お、おい、何だよ一体。何の芝居だよ？　いい加減に震えに引き攀れた男の声が気配の無くなった二人の男に向けられて。問い掛けながら立ち上がった其の男は闇の中で起こっている事態が異常且つ非情である事を無意識に認識した。

訓練の末に選り抜かれた警備員としての資質と義務感に刺激された彼の体が暗闇の中でも正確に、機器の有りかをイメージして。ほんの少し其処から後ずさりをすれば行き当たる制御パネルに向って振り返る男。其処に備え付けられている非常時にのみ使用を許可さ

れた、本社との回線を繋ぐホットラインを手に取りうと決意して。

「そのまま」。

其の囁きが余りにも耳元で聞こえた為、男は自分の脳が喋ったのかと錯覚したほど。

だが密やかで淫靡な殺気を匂わせた其の声は確かに彼の記憶の中に欠片も存在する物ではなかった。恐怖と言う感情と共に湧き上がる叫び声が彼の声帯をこじ開けようとした瞬間に、発声機能の終端で最大限に開かれた彼の口腔が柔らかい物で蔽い尽くされた。

それが何者かの掌だと認識出来たかどうか。次の瞬間に喉元に走った冷たい、痺れる、其の後に暖かくなる感覚。彼は下腹部に有りつ丈の力を込めて、口を塞がれたのもお構い無しに叫び声を上げた。

くぐもった、助けを求める叫び声の代わりに出た音は、噴出す液体を泡立てる空気の噴出音と甲高い断末摩の胡弓。耳朶を打つ耳障りな雨音が彼の足元で大きく鳴り響く。恐らく自分に押し寄せているであろう死神の顎から逃れようと全身の力で呪縛から逃れようとするが耳障りな雨音が一瞬の内に遠ざかり、比例して失われる力。まるで大量の睡眠薬をウォツカで一気に飲み干した時の様な、酩酊とも睡魔とも判別しかねる意識の消失が彼を襲った。

足に感覚が無い。崩れ落ちようとする彼の体を、彼の口に当てられた手の持ち主は恐るべき膂力で支え上げてゆっくりとテーブルの前へと誘導した。倒れていた筈の椅子の感触が微かに尻の下に残って。そこで彼の下半身の触覚が消え失せる。

男の手が自分の顔から離れていったと感じた時には、既に生物としての力は微塵も残ってはいなかった。そんな不幸が訪れる前に確かに心の其処から楽しんだ、ポーカーと言うカードゲームが繰り広げられたテーブルに突っ伏したまま暗闇を見詰めるだけの男の顔。其の間が自分の視覚による物なのか、それとも既に焦点を失って機能しなくなった瞳孔に下ろされた暗幕なのかを判別する事は、もう彼の命では不可能か思われたその時。

彼の視界がほんの微かに明るくなって。ぼんやりと浮かぶ光の中に煌く巨大な曲刀<sup>ククリ</sup>が、視界の片隅に残っていた折り目だらけのカードを切っ先で持ち上げた。滴る血が刃先を伝わってカードを濡らし、彼が死ぬ間際に確かに掴んでいた幸運を、あの世の手向けに見届けさせよう。

ぼやけた視界に映り込んだスートは紛れも無く黒の剣<sup>スペード</sup>。カード全面に散らばった九個の剣が天に向って。それは今後の行く先を暗示するかの様に彼の眼前へと指し示される。取り零した事実を確認するまでが彼の現世での最後の役目であった。

全てをやり終えて退場を果たそうとする彼の耳に頭上から迎えに来たどす黒い天使の声が、やはり彼の命を嘲笑う風情でいやらしい響きを伴って降り注いで来た。

「残念。自分を救うほどの奇跡は起こらなかった様だねえ。」

「ブージャムからダンプティ。 “バリスターは眠った” 繰り返す、 “バリスターは眠った” 。」

受信を知らせる青いLEDの輝きが、エンジンのアイドリング状態を表示する赤い点滅の残る暗闇を照らし出す。浮かび上がった其の横顔は何処と無く狂気を孕んだ蒼白い肌を表情と言葉に貼り付けて、抑揚の無い声で呟いた。

「ダンプティ了解<sup>ロケ</sup>。状況をフェイズ2へ移行する。ブージャムは速やかに “バンダースナッチ” を開始せよ。 “バンカー” を探し出せ。」

「ブージャム、了解。」

全てが作戦の符丁で展開される短い会話が終了した後に残る静寂と暗闇。闇で息を潜める男の左手が握り締めたレバーを静かに前方へと押し込んだ。出力レベルを現すインジケーターが赤の点滅から青の領域まで拡大して、其の瞬間に闇は彼の周囲で息を吹き返した計器類の輝きで白夜を取り戻した。足元で噴き上がる小型核融合炉

の息吹が男の手足を震わせて。それに凶悪な舞台の幕開けを予感した男は、乗り込んでいたモビルスーツを戦闘態勢へと移行させた。

「ダンプティから全機へ。エンジン始動、戦闘モードへ。これより作戦をフェイズ2へと移行。当該目標の敵勢兵力に対して陽動を掛ける。もとい、殲滅戦だ。後始末には『ボロゴウ』が控

えている、余計な事は考えずに派手にやれ。」

「ラーズ了解。」

「トローヴ了解。」

通信封鎖開けの不鮮明な音声を通して、彼らの声に残る狂気ははつきりと認識する事が出来る。意思は其のまま手足を伝わって繋がる巨体へと送り込まれた。

鳴動する機体がアクチュエーターのピストンを伸縮させて膝関節を持ち上げる。リアクションホイールの助けを借りて立ち上がるモビルスーツのオートランサーがコクピットの足元で軸受けを鳴らす。索敵の欺瞞を目的に掛けられているレーザー波を吸収消滅させる巨大なEMファイバーシートを跳ね上げた、夜間迷彩色を纏った五機のジム・コマンドは研究所の敷地内を一望に見渡す小高い丘の上に茂る林の中から特徴的な頭部を突き出した。

全身を黒で覆われた其のモビルスーツに彼らの素性を知る手掛かりとなる物は記されてはいない。所属を表す部隊章インシグニアすら描かれていないジムの機体。だが闇に潜めた頭部のシルエットだけが異様な形状を夜空を背景に浮かび上がらせる。彼らの開発の範となった『RXシリーズ』に良く似た形状を持つ頭部に突き出た多数の角が異界の使者を髣髴とさせて。夜襲専用コーデイナイトされた様々なセンサーを頭部に設えたジムの顔面の半分を占めるゴーグルを透かして、駆動音を上げながら奥で左右に動くスターライトカメラの存在を外部に知らせた。

「はっ、所詮は民間会社の警備用モビルスーツだ。何匹出て来た所で動く標的まじには変わり無い。」

通信封鎖を解除された無線機から、『ダンプティ』を名乗った男



の耳に嘲りの声音が届く。これから繰り広げられる饗宴を待ち兼ねた様に声高に吐いた部下の言葉を嗜める様に、『ダンプティ』はヘッドセットのマイクに呟いた。

「侮るな。幾ら民間とは言っても配備されているのは『ANUBIS4』だ。八十三ミリの直撃を食らったら只では済まん。各自、警戒を怠るな。」

「と、言ってる傍から御出ましの様ですぞ、隊長。」

違う声音が会話に割り込んで来たと同時にセンサーが収集する情報を解析したAIが警報音を鳴らした。敵勢脅威を察知したセンサーはジムの目であるスターライトカメラの焦点を自動的に目標へと合わせる。皆既日食の最中の景色の様に浮かび上がった研究所のガレージの一角が開いて、灯りを背景にずんぐりむっくりとした二足歩行の機体が鈍重な足取りで闇夜へと飛び出して来た。腕代わりに取り付けられた二門の八十三ミリアデン機関砲が、自分達に迫り来る脅威の姿を追い求めて左右に振る姿をスクリーンに刻み付ける。

「流石に対応が早いな、もう此方の動きに気付いたか。……視界モードをSRからIR（赤外線）へ。ラーズ隊は前衛へ、トーブ隊は援護に廻れ。ダンプティは後方で待機する。」

「ラーズ1、了解。」

「ずるいな、隊長。一人で高みの見物ですか？」

「鴨撃ちが嫌いなら代わってやってもいいんだぞ、トーブ2。せいぜい『ハンプティ』の弾着評価でも黙々とやってるんだな。」

にやりと笑いながら無線から流れる減らず口に応える蒼白い顔の男。一瞬の沈黙の後、からかわれた部下の声が無線から苦笑交じりに流れてきた。

「トーブ2了解。ラーズの援護に廻ります。」

「よし。」

短く応えた男の視界を横切る曳光弾の束。恐らく付近に仕掛けられた重力センサーが断線した付近を目掛けて相手が発砲してきたのだろう。制圧射撃の弾幕は彼等が布陣した場所を僅かに離れて、そ

れでも八十三ミリの弾着は周囲の林を木っ端微塵に破壊するだけの威力と密度を彼等の目に焼き付けた。だが其処に齎された状況の混乱は、彼等にとつての行動の切っ掛けとなった。

「良いタイミングだ、これで奴等も暫くはこちらの位置が掴めまい。司令車、現在の状況を報告しろ。」

「現在研究所を中心に半径百キロ圏内に於ける民間車両及び航空機の運行及び存在は皆無。作戦終了後のマスコミへの情報提供は『シナリオB』にて対応する事が、情報局より事前に通達、……現在承認されました。」

「武装した“ジオン”」

其の単語を口にした『ダンプティ』の聲が微かにくぐもる。

「を名乗るテロリストがハンブルグ郊外のCDC（疾病管理予防センター）を占拠。これを包囲した鎮圧部隊と交戦の後、自決と周辺地域の汚染を画策してセンター最深部に封印してあった『GGガス』を含む全ての致死性兵器を開放」

「そこで『ボロゴブ』の出番となるわけですか。」

『ダンプティ』の無線に割り込んでくる『トーヴ』。彼の声も『ダンプティ』と同様に微かな苦渋を忍ばせている。

「そう、『封じ込め』だ。死にたい奴は施設に残れ。空軍の奴等が跡形も無く『焼いて』くれるぞ。」

作戦名“テストユード”開始

掛け声と共に、横一列に並んだ五機のジムの手に各々の得物が握られた。前衛を勤めるラーズ隊の手には近距離戦闘に有利な、銃身の短い短機関銃。援護に廻るトーフ隊の手にはアサルトタイプのライフル銃。口径こそ敵となる『ANUBIS4』には及ばないが、弾頭表面を装甲と同じ材質であるチタン合金で覆った高強度被覆弾は連邦軍だけが使用可能な装甲貫通弾である。初速、発射速度でこの兵器を上回る物は地球上の戦闘下に置いては存在しない。

男のモニターに部下全員のライフテレメーターが表示される。戦闘準備が整った事を示す其の表示を視界の隅で認識した男の口が、

駑りに逆らう狂気に歪んで宣託を為した。

「トリプルタクトリ W・W・W」、オンボード。」

微かな敵の気配を自らの攻撃によって見失った、警備用の民間モビルスーツに搭乗する警備員は迫り来る恐怖に耐えながら警備システムから送り込まれてくる周辺状況の分析結果に目を凝らしている。自分の頭上を覆う硬化テクタイト製のキャノピー越しに浮かぶ夜の景色など情報の取得には何の役にも立たない。ジムの約半分の体高、同じ重量、全身の駆動機構の一部が露出した『ANUBIS4』という機体は開発した技術者によって与えられた運動能力の限界まで振り絞って、鰻の頭のような頭部を左右に振って敵の姿を追い求めた。

「畜生、今ので見失った！」

手応えの無さを肌で実感する内部の男が毒づいた。ほんの少し前に取った夜食のサンドイッチが喉まで競り上がってくる様な悪阻の予兆に見舞われながら、男の目はモニターに釘付けになっている。

警報発令と同時に自動的に散布される大量のミノフスキー粒子は敵味方の区別無く、走査手段を無効化に追い込む。だが迎え撃つ此方には研究所の周囲に縦横無尽に張り巡らされた有線式のセンサーと、研究所内部で全ての管理を一喝して処理する当社自慢のスーパーコンピュータが存在する。代替手段を備えている此方の方が状況は圧倒的に有利な筈だ。

だが男の期待に反してそのリンクモニターに何らかのインフォメーションが表示される事は無い。

「ちっ、初めての緊急出動スクランブルとは言え、やはり訓練通りには行かないか。」

呟く男の声に上書きされる様に、通信機から仲間の恐怖に犯された声が流れてくる。

「キャツ、キャクストン主任。相手が見当たりません、ぼっ、僕はどうしたら」

「落ち着け、 エミリオ。」

無線機から流れてくる声の主は、若い。共に今晚のアラート待機を命じられたエミリオという若者をキャクストンは良く知っている。年は二十歳。一昨年の春から此処に配属されてから今日までキャクストンの部下として任務に就き続け、そして

「まだ、大丈夫だ。相手も此方の出方を伺っている筈だ。残りの機体が稼動するまで持ちこたえるぞ。十分で良い。」

「で、でも お父さん。」

私の娘婿。

死を覚悟した『一年戦争』。ア・バオア・クーと言う最後の激戦を戦い抜いて生き残った彼に齎された朗報は、自らの退役勧告と地球に残した愛娘の懐妊と言う悲喜交々《こもごも》のドラマだった。

だが、キャクストンは其の事実を諸手を挙げて歓迎した。自分の孫が此の世に生を受けると言う事態は、何者にもまして変え難い喜びであった。自分が収入を得る手段を失う事など其れに比較すれば瑣末な事に過ぎない。

軍を退役したキャクストンは退役後に終生与えられる軍人年金で余生を過ごそうと考えていた。地球に戻り、どこかに土地でも買つてのんびりと。たまに訪れてくる娘の顔に戦争で失った妻の面影を重ねながら。孫の姿に在りし日の娘の、そして其の三人に平和だった時代を過ごした自分達の記憶を思い出しながら。

だが退役後に与えられる筈の、彼が期待していた軍人年金の支給額は契約当初に記載されていた額を大きく下回り、大学を卒業したばかりの新社会人（ニューソサイエティ）が受取る初任給にも届かなかった。契約書の隅に小さく書かれていた『連邦の経済事情による大幅な支給額の変更の可能性』と言う特約事項が、軍の思惑通りの効力を発揮していたのだ。

自分の将来のビジョンは失われてしまったが、生来の軍人

彼の半生は連邦軍人として生きる事が全てだった である

キヤクストーンが其の事に異論を唱える筈も無く、止むを得ない事だと呟きながら小さなアパートを借りて余生を過ごそうと。彼の価値観の中で自分の事などは後回し、大事な事は愛娘の家族が平和に暮らす事。其れだけが彼に残された、たった一つのささやかな願いであった。

歴戦のモビルスーツパイロットであるキヤクストーンに研究所の警備主任の話が舞い込んで来たのは丁度そんな時だった。

軍人年金の減額を余儀なくされた連邦政府が其の穴埋めにと退役軍人に対する再就職の斡旋を順次行っていると言う噂は、同じく生き残った仲間内の四方山話の端々に上がっていた。だが、金銭にあまり執着心を持たないキヤクストーンにとってそんな話には興味が無い。寧ろ初老を迎えた自分の代わりに、もっと若くして退役しなくてはならなくなった他の退役軍人の為に其の話を断ろうかとも

其の話の内容を自分のアパートに足を運んで来た人事部の管理官に聞くまでは考えていた。

「再就職先は……元MPI社の研究機関であるハンブルグ研究所。内容は研究所を警備する為に新設されたモビルスーツ隊の教育、運用になります。この話、キヤクストーン元少佐には真に打って付けだと私は考えておりますが。」

其の言葉　目の前に坐ったエリート然とした細身の管理官が提示した就職先　がキヤクストンの心を動かした。

「其の前に一つお伺いしたい。」

丁寧に尋ねるキヤクストーンが目の前に座る管理官の顔を見つめる。フレームの無い眼鏡を掛けた其の男はキヤクストンの余りにも節度正しい物言いを耳にして苦笑した。

「『聞きたい』で結構ですよ、少佐。……退役したとは言え階級は私の方が遙かに下です。それに」

其れが彼の癖なのだろう。管理官は瞼を閉じて眼鏡の曇を人差し

指で押し上げながら言葉を続けた。

「『一年戦争』の最中に最前線に常に立ち、戦い続けて生き残った貴方の指揮官としての手腕を私は高く評価しています。この話を他の方に持つて行く事も出来たのですが、担当の私としては是非少佐にお願いしたいと。……で、聞きたい事とは？」

男に尋ねられて一瞬の躊躇がキヤクストンの心中を襲う。

自分の実力を買ってこの仕事を斡旋してくれた管理官に向ってこんな事を聞いても良いものか。其れこそ公私混同と揶揄されても仕方無い質問なのに。

だが、キヤクストンはどうしても尋ねずにはいらなかった。娘から先日電話で聞いた内緒話の真偽を確かめる為に。

「其の新設部隊の隊員の中に、エミリオ・エスターと言う人物がいるかどうか確認したい。」

「エミリオ・エスター、……お知り合いです？」

キヤクストンが特定の個人名を挙げた事に戸惑った面持ちで尋ねる管理官。しかし其の右手の情報端末は既に素早く動いて、当該の人物の情報をMP EI社が管理するデータバンクへと照会していた。一連の鮮やかな手の動きをじっと見詰めていたキヤクストンが、口籠って答えた。

「私の、娘婿だ。」

「なるほど。……うん、確かに在籍していますね。エミリオ・エスター、所属は？」

「警備部だ。」

短く告げるとキヤクストンはいきなり席を立った。何事かと見上げてキヤクストンの動きを見守る管理官の視線を背中に受けて、彼は窓の外に目を向けたまま言った。

「どうやら楽隠居を決め込んでいた私にも、やらなければならぬ事が出来た様だ。この話、快くお受けしよう。」

ほんの少し前まで全身に漂っていた退役軍人特有の枯れた風情が見る見る影を潜めて。傾きかけた日の光が差し込む窓の外を見詰め

るキヤクストンの背中には紛れも無く歴戦の勇士の者だと管理官は思わずにはいられなかった。感慨に耽って言葉を忘れた管理官に向って、振り向いたキヤクストンが告げた。

「平和な時間等何時まで続くか解らない。もしそうなった時に俺の経験を彼らに伝えておけば、少なくとも死ぬ事は無い。……私にこの話を持ってきたのはそう言う事だな、管理官？」

「やはり、少佐は私が見込んだ通りのお方だ。……ご理解、ありがとうございます。」

笑顔で差し出した管理官の手をがっちり握り締めるキヤクストン。其の掌の感触と伝わって来る熱を感じた、老兵を再び戦いの舞台へと誘おうとする彼は自分の選択が本当に正しい事を実感した。

間違い無い。この人は死ぬまで現役であり続けるのだろうと。

「エミリオ、俺が前に出る。お前は下がって残りの機体が上がってくるのを待て。」

命令を告げる声は既に軍人の物だ。傍にいたのが自分の娘婿だと言ふ繋がりも忘れて、キヤクストンはエミリオに命じた。脚部を構成するギミックがシリンダーの力を借りて交互に伸び縮みする。嘗ての一年戦争で自分が搭乗したジムとは比較にならないほどギクシヤクした足取りで前へと進む不恰好な其の機体は、マニピュレーター代わりに両腕に取り付けられた八十ミリを隣の機体の胴体に押し当てて力づくでの後退を促した。

「そんな、お父さん！」

夜間照明の光を跳ね返すキャノピー越しに目を合わせる二人。其の表情が完全に窺える距離に迫った二人の機体は、前方に細長く伸びた頭部を突き合わせるような形で対峙した。キヤクストンの視界に映るエミリオの怒った顔。リンクして無線機から流れる怒鳴り声。「お父さん一人を前面に押し出すなんて！ 僕も行きます！」  
「無理するな、エミリオ。此処で強がった所で生き残れんぞ。怯える事は恥ではない。」

言い残したキヤクストンの機体が抗うエミリオの手を押しつけて前へと進んだ。キャノピーの影に消える義理の父の後姿を血走った目で見詰めるエミリオが、尚も彼の決意を押し留めようと叫んだ。

「お父さん！」

「これは上司からの業務命令だ。エミリオ・エスター。お前は此処で待機、全機体が展開した所で研究所敷地内の全周防御を指示しろ。…… 心配するな、これでも一年戦争の生き残りだ。あの時に比べればこの程度の危険等物の数では無」

キヤクストンの言葉はその時キャノピー越しに轟いた重砲の発射音を聞きつけた聴覚によって閉ざされた。大気を夜の闇ごと切り裂



く滑空弾の甲高い風斬り音が、鵠<sup>めえ</sup>の羽音の様に迫り来る。

「重砲！？ しかもこの音は」

其の瞬間に敷地内を照らし出す夜間照明の鉄塔に、敵の放った滑空弾が直撃した。基部を粉碎されて自重を支えきれなくなった骨組みが破砕音を上げて崩れ落ちる。だが其の姿を目に出来たのはほんの一瞬だった。次々に飛来する砲撃は一発の無駄も無く、研究所内を周囲と同じ暗闇に埋没させる事に成功した。

突然に訪れた状況の変化はキャクストンとエミリオの我を忘れさせ、失われた視界を取り戻す為に額に掲げてあつた暗視ゴーグルの存在すら二人に気付かせない。しかし周囲を油断無く警戒するキャクストンの思考は、闇が訪れる寸前に耳朶を叩いたあの懐かしい砲撃音を思い出し、そして戦慄の眩きを漏らしていた。

「百二十ミリ加濃砲。まさか……RX-75だと！？」

「それを耳で聞いて解る貴様は、元連邦軍の兵士だな？」  
突然無線機から流れ込んで来た、冥い声音がキャクストンを戦慄の窮みに追い込む。

焦点を合わせずに見詰めていた目の前の暗闇に微かに発生した違和感。キャクストンは歴戦の勇士ならではの条件反射で其の違和感目掛けて引鉄を引く。毎分二百発の速度で火を噴く両腕のアデン砲の弾帯の中に五発に一発の割合で紛れ込んでいる夜間照準用の曳光弾が光の束となって降り注ぐ。多銃身を回転させる為に左右で唸るイナーシャモーターがキャクストンの耳から音と言う情報を奪い去った。

曳光弾が放つ微かな光を受けて浮かび上がる影。連邦軍の主力モビルスーツであるジムに似たシルエットの機体は低い姿勢を保ったまま、キャクストンとの距離を詰めようと地面を蹴り上げた。

バーニアを使用しない歩行移動としては破格の勢いでキャクストンの眼前に飛び出すジムの影。敵の脚部ギミックが放つ臆代わりのアクチュエーターの作動音が、防弾キャノピーに包まれたキャクス

トンの耳にまで届くほど大きな音を上げた。

状況の不利を悟って後退しようとする彼目掛けて地面擦れ擦れから振り上げられる、何か。

首筋を刺す恐怖に駆られたキヤクストンの左腕が反射的に防御の体制を指示した。目の前に迫るジムの右手の延長線上に伸びた、得体の知れない恐怖を遮る様に機関砲を蔽うカバーを向けた瞬間、激しい衝撃と破壊音がキヤクストンの機体に襲い掛かった。星すら塗り潰した闇の空を舞うカバーの破片とそれを追って振り上げられた、黒塗りの巨大な山刀がキヤクストンの機体の鼻先を掠める。

「実剣装備かつ！」

夜襲に光を放つビームサーベルは使えない。返して言えば実剣を装備していると言う事は襲撃してくる部隊が夜襲専門の部隊だと言う事だ。跳ね上げられた左手の重量によってバランスを崩す機体を保持する為に両足のペダルを踏ん張って重心を下げる。ジムの黒い山刀を掻い潜った形で懐を取ったキヤクストンの右手が兵装の作動レバーを握り締めた。

残った右手の八ミリが野晒しになったジムの胴体目掛けて猛然と火を噴く。機体の構造上其処にしか設置する事の出来ないジムのコクピット目掛けて曳光弾がばら撒かれた。

だが確実にコクピットを直撃されて息絶える筈のジムは、強烈な駆動音と残像を残してキヤクストンの眼前から消え去った。予備動作として残しておいた脚部の溜めとカスタマイズされた足裏のクッションスプリングの反発力。至近距離からの銃撃をいとも容易く交わす事の出来た、それが理由だった。

敵の動きと位置を勘で察知したキヤクストンが逃げたジムに正対しようとして鈍重な機体を必死に操作して。

「くそっ！ こののろまめ、さつさと動けっ！」

光を放つ計器盤に向って怒鳴るキヤクストン。其の罵声までもモニターしていたかのように、瞑い声がスピーカーから流れ込んできた。「あんたの乗ってる機体がジムじゃなくて良かったぜ。今の一撃を

躲すとは相当の手練れと見た。…… 退屈しのぎには打って付けの相手だ。」

弾幕を回避した程の運動能力を有する其のジムならば今の一瞬に間合いを詰めて仕留める事も可能だっただろう。だが其の声の主が搭乗した黒いジムは僅かに間合いを離れたまま、右手の山刀をキヤクストーンに突き付けて闇の中に立っていた。

「貴様ら、何者だ！？ 何の理由で連邦軍が民間の研究所を襲ったりにしている！？」

「それを答える義務は無いし、尋ねる意味も無い。が、俺達が此処へ何をしに来たかと言う理由なら分かる筈だ。少なくとも戦争の生き残りである、あんたならばな。」

それまで漠然としていたキヤクストンの思考が男の放つ死の匂いで明瞭になる。意図を察した彼の体が、自分の置かれた戦術的に不利な状況と戦略的な敗北を悟って小刻みに震えた。

それでも戦士としての本能と死地を潜り抜けた指揮官としての経験が、この場に於ける最良の手段を選択しようと過去の戦闘経験と言う目録を猛スピードで捲り上げる。

「そつ、その不審なモビルスーツ！ 大人しく武装を解除して動力を停止しろ！ おつ、脅しじゃないぞ！？」

キヤクストンの記憶にも無い、恐怖に上ずった叫び声がエミリオの機体の外部スピーカーから暗闇に放たれた。大音量で流れた其の声は周囲の林の木々に木霊して残響を発生させる。キヤクストンの機体から眼を離れたジムが首のギアの駆動音を残してエミリアの方を振り向いた。

突き付けられた二門の機関砲の銃口を眺めながら、

「…… まだ、若いな。坊や。」

この場を支配する主従を見失ったエミリオの恫喝に聊かのプライドを傷付けられたのが気に食わなかったのか。黒いジムの脚部が僅かに折れ曲がり、キヤクストンの銃撃を躲した時と同じ姿勢になるのを目の当たりにしたキヤクストーンが思わず叫んだ。

「止めるっ、そいつに手を出すな！ お前の相手は俺の筈だろう！  
？」

ジムとエミリオを結ぶ進路を遮る様にキヤクストンの両腕の機関砲が炎を吐き出す。機先を殺がれたジムの姿勢が付近にばら撒かれる八十三ミリの光の束から逃れる様に後方へと飛んだ。

余りに素早いその反応は、数的優位に立っている筈のキヤクストンとエミリオの心中に絶望しか齎さない。それ程に自分達の搭乗している『ANUBIS4』と敵のジムには運動性能に雲泥の差があった。追い討ちを掛ける様に炎を吐くエミリオの両手。だが其の黒いジムは戦闘経験の無いエミリオを嘲笑うかの如く巧みに機体を左右に走らせて、光の連なる射線から機体を逸らせる。それは嘗てジムを使っていたキヤクストンにとつても初めて目にする光景だった。二足歩行の状態でバーニアもホバーも使わず、これ程素早く動けるとは！

「止める、エミリオっ！ 無駄弾を使うな、奴等の思っ壺だぞ！？」

キヤクストンの怒鳴り声に怯えた様にエミリオの機関砲が沈黙した。回転モーメントの残る多砲身がカラカラと齒車ギアを回して、銃口から柵引く硝煙が渦を巻いて立ち昇る。

それ以外の動きと音の失せた暗闇の中で、再び黒いジムが手にした山刀をキヤクストンに突き付けて言った。

「何なら二人一編にでもいいんだぜ？ それ位が丁度いいハンドだ。暫くは邪魔が入らないからな。」

「邪魔が入らない、だと？ 貴様、それはどういう  
俺が単機ひじりで此処を襲撃たすねて来たとは、あんた、思ってないだろ？  
と言う事は、あんたと一緒に緊急発進スクランブルした他のお仲間は今頃どうな  
ってるか、想像してみないか？」

男の声がスピーカーから流れた瞬間に、キャノピー越しに遠くで  
鳴り響く爆発音が二人の耳に届いた。

夜闇に沈んでいた研究所の無機質な佇まいを浮かび上がらせる炎

の光は、男の予言通りキヤクストンの仲間が配置されたと思われる敷地内のあちこちから上がっている。僅かに光源を得た景色の中に浮かび上がる、それでも目に鮮やかな夜間迷彩を纏ったジムと光を跳ね返す山刀。

「……な。俺の仲間は俺ほど優しくない。鬺り殺しだな、ありや。」

キヤクストンの神経を逆撫でする、首筋を舐め上げる様な野卑な声がモニターから流れる。二人の命を覆い尽くそうとする絶望と抗う闘志が鬨ぎあう視線の先で、黒いジムは手にした山刀を体側に当たりと降ろした。

「さあ、これであんた達に残された時間は俺の仲間が此処に集まってくる迄になった。……生き残りたいのならば、精々抗え。俺を楽しませる。運が良ければ生き残る事の出来る、これはゲームだ。」

自分が命を賭けてジオンと戦ったあの凄惨な日々を。大勢の仲間が散ったソロモンを、ア・バオア・クーでの出来事を『ゲーム』と呼んだ其の男の声がキヤクストンの矜持を蔑ろにする。そう感じた瞬間にキヤクストンの心の片隅で耐え難い怒りが生まれた。産声を上げたそれはキヤクストンの全てを、相手と同じ殺意と言う闇に塗り替えていく。

『ANUBIS4』に背負われたバックパックから伸びる給弾ベルトの中を、ガラガラと言う音と共に新たな弾帯がキヤクストンの両手の機関砲へと吸い込まれる。リロードの完了した両腕の銃口を黒いジムに突き付けたキヤクストンが、敵から見れば背後に身を隠すエミリオに向って言った。

「エミリオ、お前は後退して増援を待て。此処は俺独りで行く。」

「そんな、お父さん一人で行かせるなんて！　せめて僕が援護に回ります。二人で食い止めれば他の機体が起動するまでの時間くらい」

「そんな生易しい相手じゃない。奴等が此処へ来た目的は、」  
キヤクストンが間合いを離れたまま闇に構えるジムの機体を睨み

付けて、自分なりの分析に拠る考えたくもない可能性を吐き棄てた。

「理由は分らんが、俺達を皆殺しにするつもりだ。」

「( )名答。」

モニターから流れて来た其の声はまるでクイズ番組の司会者が、難問の答えを言い当てた回答者に向ける賛辞の様に軽薄で非徳に聞える。何の得にもならない正解を手にしたキヤクストンが返礼の引鉄を引いた。

轟音の羅列と共に噴出す炎の束が黒いジム目掛けて襲い掛かり、一瞬の後にそれは予想通りに躲される。直撃を受ければ無傷では済まない火力を前にして、実は慎重に事を推し進めようとしている事を認識したキヤクストンは短い連射での牽制を続けながら、エミリオに命令した。

「とにかくお前は此処を離れてハンガーに向かえ。着いたら電源を入れずにシャッターをこじ開ける。じゃないと」

敵の作戦が殲滅だとしたらと言う前提に立つて、次に奴等が狙う可能性の高い攻撃目標。言及しようとしたキヤクストンの言葉を遮る様に、突然耳障りなサイレン音と共に黄色い回転灯が周囲に光を振り撒いた。

思わず振り返ったエミリオの視線の僅かに後方、闇に沈んだ筈の建物の一角を照らす投光器の光が開き始めたシャッターの姿を浮かび上がらせる。直感的に其の事実を悟ったキヤクストンが怒鳴り声を上げた。

「馬鹿野郎っ！早く灯りを消せ、奴等の狙いは」

「メインハンガー、インサイト視認。距離二千、仰角二十五度、方位ピトピトサンマル一一三〇。」

精密射撃を行う為に計器類の灯火を全て消し去ったコクピット内に坐った男が、普通の二倍ほどもある大きさのヘルメットから伸びたマイクに向って静かに告げた。

音声を認識した『RX-75《ガンタンク》』の新世代型思考A

Iは主の欲求を満たす為に自動的に操縦系統へと介入し、ギアをピポットの位置に動かした。軽く噴かしたエンジンが繋ぐクラッチは足代わりの左右の履帯キャタピラを反対に回して車体をその場で旋回させる。重力の影響を受ける鈍重な其の巨体は静止の瞬間に全てのサスペンションを大きく沈ませて、傾斜と復元を交互に繰り返した拳句に目的の射撃位置へと肩に担いだ砲身を向けた。

「『ダンプティ』から『ハンプティ』へ。風が出ている、誤差修正左へ十メートル。間違っても味方には当てるな。」

「了解。」

モニターから流れてくる指揮官の陰気な軽口にも動ずる事無く、一個の部品の様な雰囲気醸し出すそのパイロットは瞬きを忘れた瞳で目の前に下ろされたバイザーを凝視している。

二門の砲身基部に取り付けられたレーザー測距儀と電波式反射スコープからの映像が彼の相方であるAIの内部で自動的に処理され、映像として彼の目の前に届けられていた。中央に水平に並ぶ、一つの大きな三角を中心に対称に並ぶ小さな三個の三角は太古からの照準器の名残。引き金を引くと言う最終的な決断をヒトと言うソフトに委ねた開発者が残した、兵士に勝利の実感を与える為の心配りである。バイザーの裏に映し出された、光の漏れる建物に大きな三角が合わさっている事を確認したパイロットがAIに向って命令を下した。

「砲弾装填。初弾H・E・S・H（High Explosive Squash Head：粘着榴弾）、次弾A・P・I・T（Armor Piercing Incendiary Trace r：焼夷徹甲曳光弾）を選択。」

命令を下した彼の声がガンタンの給弾機構を動かした。背後に設置された弾薬パッケージが指示された弾薬のハッチを開いて、背中から砲身基部へと続くサイロへ砲弾を押し込む。一方通行のサイロの中をコンベアによって運ばれる砲弾が薬室内に装填されると尾栓が閉じられて、射撃準備が整った事を知らせる赤い点滅を主であ

るパイロットの目の前に表示する。全ての準備が整った事を確認した男が、一連の操作の最終段階へと移行した。

「グランドアンカー、射出<sup>ロケット</sup>。」

ガンタンク底部より撃ち出された四本の杭が地面に本体を固定した。周囲の林に木霊する地鳴りと足元から湧き出す土煙が獲物に狙いを付けた猛禽の叫びを髣髴とさせて。

微かな衝撃の後に照準に誤差の生じていない事を認識した男が、そこで始めて感情を表した。歪んだ笑みに吊り上る口角の隙間から彼はマイクに向って呟いた。

「発射<sup>ファイア</sup>。」

再度の砲撃音が敵の狙いを伝え切れなかったキャクストンの耳に届く。自分の思い描いた最悪の展開と結果を予想して、それでも尚一筋の希望にしがみ付く事を懇願するキャクストンの瞳孔が齟齬を伴って拡大する。隙を見せられない凶悪な敵を前に動きを封じられた彼の頭の上を甲高い叫びを上げて飛来する、悪意の矢。其の行く先を振り返る事すら出来ないキャクストンの背後で、普通の砲弾とは違う炸裂音が轟いた。

腹の底を震わせる様な破壊音と重低音を伴った衝撃波。其のどちらもが敵の仲間が放った弾頭からは伝わってこない。代わりに伝わって来た物は何か柔らかい物が押し潰される様な気味の悪い音と

其の瞬間にキャクストンの持つ戦争の記憶は合致する音紋を拾い上げて意識に伝えた。其の正体を悲劇の予感と光景に重ね合わせて怒号を上げる。

「H・E・S・Hかつ！」

弾頭部の金属は薄くて柔らかい。着弾の衝撃によって坐滅し、目標にへばり付く事によって初めて効果を発揮する特殊弾頭。持ち込んだ運動エネルギーが相殺されてゼロになった瞬間に起爆する、弾頭部に仕込まれたPBX爆薬が単一指向の破碎エネルギーを接着面



で炸裂させた。

其の音はまるで空のドラム缶を巨大なハンマーで叩き壊した様な、  
濁いた音。炎も煙も上げない地味な二発の砲弾が炸裂したメインハ  
ンガーの照明がそれを境に消滅した。開き掛けた扉の隙間から勢い  
良く噴出す風が密閉した室内の中で飛び回った、自分達の身を守る  
筈の耐爆コンクリートの破片によって切り刻まれた機械や人の破片  
を巻き込みながら外部へと噴出する。其の様を辛うじて横目で見る  
事の出来る立場にあったエミリオが絶望の呟きを漏らした。

「そんな……みんな、そんなあつ！」

「まだだエミリオ！ 対空防御、次が来る！ 次の弾は恐らく曳光  
弾だ、弾速が遅い。光目掛けて弾幕を張るんだ！」

キヤクストンが捲し立てた瞬間に遠くで轟く砲撃音。冷や汗に塗  
れた顔で別々の方向を凝視する二人。キヤクストンは未だに山刀を  
脇に垂らしたままで佇む黒いジムを。エミリオは砲声の上がつた遠  
くの林から伸び上がる二筋の光を見詰めて。

両肩に担ぎ上げられた百二十ミリが轟然と火を噴いた。巨大なマ  
ズルプラスチックが周囲の林を一瞬真昼の光景の様に染め上げて。地に  
眠る獣は逃げ出し、羽を休める鳥は意識を失う。巨体を震わせて闇  
に襟口する世界を引き裂く影の背後から、細かく砕かれた粒子が吐  
き出された。

駐退機（発射した際に生じる反動（recoil）を砲身のみを  
後座させることによつて軽減するための装置）を持たない無反動砲  
は発射の際の衝撃を軽減する為に発射ガスを後方に噴出する機構を  
採用している。プロトタイプのガンタンクも含めて全てで採用され  
ているこの方式が、この機体には違った形で運用されていた。

砲身の尾栓が開いた瞬間に吐き出される筈の発射ガスが其の後部  
に装填された強化プラスチックの塊を粉碎する。粉々になったそれ  
はカウンタース（相殺重量物）として後部シャッターから飛礫の  
様に吐き出されて発射の際の運動エネルギーを打ち消す。

この機体だけが時代遅れの方式とも言えるデイビス方式を採用している理由は夜戦専用の砲台と言う理由に他ならない。後部より吐き出されるプラスチックの飛礫は熱を伴わない為、赤外線によっても探知されにくい仕組みになっているのだ。

強い風圧を伴って背後に撒き散らされる悪意の残滓が悠久の時を刻んだ木々の群れを薙ぎ倒す。それでも足りないとはかりに樹脂の礫が木々の幹に叩きつけられて。静寂の世界を一変させるマリンバの不協和音が次弾を装填するガンタンクを取り囲む。

「全弾命中。次弾装填。」

砲撃音の残響が残る操縦室内で響く、冷徹な男の声。バイザーの裏に映し出される確かな破壊の傷跡を直視した男の目が二度瞬きを繰り返した後。

「…… 焼き尽くせ。発射。」

何の躊躇いも無く慈悲も無く、男の指が軽やかに引鉄を引いた。

闇の彼方から飛来する鎗矢の炎。孕んだ音速が纏った光を筋に変えて、目を見開いて凝視するエミリオの視界に焼き付ける。

其れが彼と義理の父の希望を絶望へと誘う『インドラの火』であると認識したエミリオは両腕の八十三ミリを天に向って振り上げた。眼前の計器盤の上に空間投影されるディスプレイのレティクルが自らの動揺を受けて大きく揺れる。片隅に表示される距離計測カウンターの数値が桁飛ばしに激減する様子に焦りながら、彼は光に向ってトリガーを引いた。

鳴り響く破壊のゆらぎ。吐き出される曳光弾の束。エミリアの八十三ミリは主の意思を遂げさせんと発射速度の上限まで多砲身バレルの回転を上げた。焼け付く砲身が煙を上げて、全弾を吐き出す意志を固めた『ANUBIS4』の機体が反動によるめいて。それでも奇跡にしがみ付こうとするエミリオの手はトリガーを握り締めたまま離さない。

手を離してしまえば、其の妖精が彼の手から擦り抜けて消えてし

まう事を怖れる様に。

「当たれ、当たってくれえつ。頼むっ！」

コクピットを席卷する八ミリの射撃音とエミリオの怒声が交じり合う。意思を同じくした二つの願いは十字の中心に映し出された、既に輪郭を臚に現し始めた弾体に向って叩き付けられる。だがその懇願にも似た叫びを嘲笑うかの様に一直線に迫り来る、殺意の塊。

光陰を掴み損ねる、彼らの手。

「駄目だ、エミリオ！ 弾を追うんじゃないつ、弾道の前に弾幕を

」

振り向かずともエミリオの身に襲い掛かる、新兵特有の症状を感じたキヤクストンの指示がマイク目掛けて叩き付けられた。

移動する目標に対して行う予測射撃リドと言う手法を教えていなかった。平和な時代に戦闘教則を教えなければならなかった等と

は予想も付かない。自分の迂闊さに腸を捻じ切られる思いで、キヤクストンは自分の意識だけを背後へと向けた。自分の叫びに我が愛しの娘婿が逸早く気が付いて、自分と彼の求める九死に一生の結果を齎せてくれるであろう事を一心に祈りながら。

だがキヤクストンの祈りを彼の娘婿に届ける為の時間と距離は圧倒的に足りなかった。

キヤクストンの指示に反応したエミリオの機体が腰部と上半身を繋ぐギアを最大限に駆動させる。工学上最大限の稼動範囲まで捻られた上体の先で放たれたエミリオの弾は、既にメインハンガーの屋根を掠める位置にあつた。

其の刹那を諦め切れずに放たれる炎の束。暗く沈黙したメインハンガーを叩き起こす様に弾痕を穿つエミリオの希望。暗闇に弾ける対爆コンクリートの欠片が夜空を舞って、彼らの仲間が潜んでいた建物の周囲に降り注ぐ。

其の全てが水泡に化す瞬間は、着弾音と衝撃波と共に唐突に訪れた。

打撃音と共に降り注ぐ、エミリオの物とは比較にならないほど大

量のコンクリートの残骸が敷地内のコンクリートに雨音を響かせる。其の直後に沸き起こる圧倒的な炎の輝きと耳を劈く高周波の雄叫び。既に無傷な物は存在しないであろうメインハンガーの暗闇を打ち破る、雷神の鉄槌。

「対爆防御っ！」

そう叫ぶのが精一杯だったキヤクストンの命令を受けたエミリオの機体が膝部のアクチュエーターを最小に縮めた。小さく跪く彼の機体の背景で湧き上がる熱と光と衝撃と。一瞬の内に火球と化したハンガー内から噴出す、全てを無に帰す殺意の炎がエミリオを包み込んだ。

命中と同時に超高温で吐き出される焼夷の焰が密閉された空間内を完膚無きまでに焼き尽くす。『A・P・I・T』と呼ばれる非人道的な、しかし敵の戦意を殺ぐには絶大な効果を齎す二発目の特殊弾頭は、辛うじて生き残っているかもしれなかった彼らの仲間と、残存する兵力と弾薬の全てに引火した。

内部で起こる誘爆が強度の薄い天蓋を吹き飛ばして炎の柱を吹き上げる。未だに残る八十ミリの弾頭が敵を求めて夜空を奔る。火山の噴火にも似た其の光に照らし出された黒いジムは、満足げな声でキヤクストーンに呟いた。

「良い光景じゃねえか、……炎と破壊、叫喚と絶望。これこそがあの頃の俺達の生きる全てだった筈だ。……違うと言うなら

「 ジムの手首がぐるりと回った。手にした山刀の刃の向きを上に向けてキヤクストーンに突き付ける。

「 俺と戦って、勝利を手にして。証明して見せる、実力だな。」

煽られたキヤクストーンの手が引鉄を引いて男の挑発に応えた。吐き出す火の束が黒い影を埋め尽くす様に広範囲にばら撒かれて。怒りを伴ったその弾幕の直ぐ傍で身を躲して走る、炎の光に輪郭を浮かび上がらせた異形のジム。血走った目に其の姿を焼き付けて、機

体の稼動限界までスロットルレバーを押し込む。

鈍重な其の足が敵との間合いを詰める為の一步を踏み出す。言葉も無く、叫びも無く。ただ絶望と希望に染められたキヤクストンの口から吐き出される重苦しい呼吸音だけが通信機のモニターを充たしていく。

其の意思と決意を蔑ろにして手にした山刀を振り上げる黒い機体が、呼ばれる様にキヤクストンの眼前に迫った。大上段に振り上げられた黒い刃がコクピット越しに浮かび上がるキヤクストンの頭上目掛けて襲い掛かる。

キヤクストンの手が左のレバーを力一杯捻り上げた。光ファイバーによつて伝達される彼の意思は寸暇のタイムラグも起こさずに機体の左腕へと伝達され、その結果は即座に反映される。刃に向つて振り上げられた、カバーを斬り飛ばされた左手の銃身が決殺の意思を籠めたジムの刃を受け止めた。鈍い音と共に食い込んだ刃がバレルの一本を切断する。

「おおっ！」

感嘆符を伴う敵の呟きがモニターを通してキヤクストンに届く。そんな物に何の感慨も無く、戦いに塗れて生き残ろうとしたあの日に立ち戻つたキヤクストンの右手が引鉄を引いた。衝撃に気を取られている隙に振り上げられて、ジムの脇腹に押し当てられた八十三リが絶対の急所目掛けて火を放つ。しかし一瞬前に其の意図を察した獲物は刃を引いてキヤクストンの間合いから跳びずさっていた。

見失つた残像を駆け抜ける、彼の殺意。

「其の反応速度だけがあんたに与えられた唯一の勝機だな。全く

」

どこか愉快そうに、しかし其処に潜んだ蔑む様な声がキヤクストンの恪気を逆撫でる。間合いを離れた相手の距離を伺つて機体を前進させるキヤクストンに向つて男が言った。

「民間企業がそんな技術を開発しようとするから、俺達みたいな下種に狙われる羽目になるのさ。大人しく勧めに従つていれ

「良かった物を。」

「何？」

襲撃の意味を覗かせる男の発言がキヤクストンの耳朵を通して思考へと接続される。

「勧め、だと？」

「そうさ。」

短く応えた黒いジムは再び山刀をキヤクストーンに突き付けた。其の姿が操縦する男の姿形を投影する様にキヤクストーンには思える。印象を思い描く彼の脳裏に浮かぶ、穢れた男の口がキヤクストーンに向って言った。

「元ジオンの国営公社の意地だか何だか知らねえが、そんな下らない物と社員の命を天秤に懸けるとはどうかしている。其の機体に導入された『フライ・バイ・ライト』機構を考え出した科学者さえ此方に引き渡せば全ては丸く収まった。…… わざわざ俺達がドイツの山奥にまで出張って来なくて済んだって訳だ。」

「そんな事の為に」

理不尽な破壊と殺戮。何の主義も主張も無く行われる欲望の果てに鎮座する鬼達等、キヤクストンの目は凄惨な戦場を徘徊する度に何度も目に焼き付けさせられた。其の事実に向面し、目にする度にこれは戦争なのだ。赤子を尻から串刺しにして城門に掲げたヴラド・ツエペシの如き所業を手を拱こまねいて肯定するしか無かった、これは遂に現実の物となった自分への罪なのか？

「これだけの事を仕出かしたと言っのか、この外道！」

煩悶に塗れる自らの良心を手中に取り戻す為に、敵の行為を否定する。過去と言う名の地獄から這い上がるうとする爪の剥がれた其の指を踏み付ける様に、男はそんなキヤクストンの心情をただ一言で否定した。

「命令だ。元軍人のあんたにそんな事は言わせねえ。」

ジムの体勢が僅かに沈む。下半身のギミックが軋みを上げて折れ曲がり、突貫の為のタメを生み出す。突き付けた山刀を脇に垂らし

て独特の斬撃の構えを見せるジムのコクピットからキャクストンへと送信される、一方的な最後通告。

「さあ、此処まで生き残った元軍人のあんたになら分かるよな？  
更にこの先生き残るには俺を斃すしかないって事が。 あそこで蹲ってるあんたの息子を助ける為にも。」

男の台詞に誘導されて思わず振り返った其の視線の先に、業火の嵐の中から這いずる様に逃れようとするエミリオの機体が影絵となつて存在した。

押し寄せる熱で下腹部に仕込まれた核融合炉が爆発しなかつた事はエミリオにとって幸いだった。制御する各関節のモーターと油圧シリンダーが殆ど焼き付いた状態で摺り滑りしようとする其の機体を死の蔓延する焰から引き摺り出した物は、脱出力プセルを持たない『ANUBIS4』と言うモビルスーツを開発した技術者が操縦者に送る最終手段と言う贈り物だった。脱出プログラムを自動的に立ち上げたAIが融合炉の出力を臨界まで押し上げて、各動力機構に最期の力を送り込む。

熱によって断線する事を免れた光ケーブルを駆け抜ける退避命令は残った全てのモーターを駆使して、機体を地獄の炎の中から救出する事に成功した。

周囲の気配が危機的な状況 機械に敵の存在の有無など理解しようが無い を脱したと判断したエミリオの機体のAIは、最期の力を出し尽くしたと判断した瞬間に次の行動に移った。

彼に課せられた最期の仕事は大昔のSF作家が作品の中で提唱し、今尚それが良識として語り継がれる三原則の第一義『人命の尊重』。

横たわったまま全ての動力が停止した機体のウインドウに表示される『E・O・L(End of Life)』の点滅が、やつとの思いで瞼を開いたエミリオの視界に飛び込む。其の瞬間、彼の機体はコクピット周りに仕掛けられたごく少量の火薬に起爆点火した。  
「うわっ！」

突然押し寄せた煙と硝煙の匂いに思わず叫び声を上げるエミリオ。勢い良く吹き飛ぶキャノピーが外界の空気を素のままエミリオの心肺に送り込む。

肉とオイルが入り混じって焦げる、吐き気を催す様な臭気を胸一杯に吸い込んでしまったエミリオの体を其処から遠ざけようとする彼の愛機は、シートの下に仕掛けられた火薬に点火した。

シートごと空中に舞い上げられるエミリオの体。其の瞬間に自由落下を防ぐ為に設えられたパラシュートが展開して、エミリオだけを空中に残して。彼の命を救う為に空へと飛び出したシートは其の役目を終えて、彼の足元へと炎の輝きを受けながら落下した。

彼の仲間を幽界に送り込んだ業火の熱に炙られたパラシュートが焼き切れる。揚力を失った薄手の冠毛は彼の主人の体を支え切れずに地に落ちた。

落下の衝撃を両足のクッションで受け切れなかったエミリオの体が勢いを残して横滑りに転がって。着地を確認した彼の背中からの脱出ギアは間髪を入れずに役立たずになったナイロンの布切れをパージした。

痛みに横たわったまま、分離されたパラシュートの行方を目で追うエミリオ。其の行方で対峙を果たす二つの機体。熱風によって遠ざかる白い花弁が間合いを遮ったと感じたその時、切っ掛けを得た二体が同時に互いの距離を詰めた。

「お父さんっ！」

彼の命を守る為に一步を踏み出した尊敬すべき義父の姿。安否を気遣うエミリオの叫び声は背後で尚も炎を上げる絶佳の渦に掻き消された。

「もう左手は使い物になるまいっ！」

中央部分で切断されて垂れ下がる金属のパイプを直視した男が叫びながら間合いに踏み込んだ。下段から振り上げられる山刀が唸りを上げてキヤクストンの左側面を襲う。致命打を避ける為に進路を



遮る役立たずの左手に加わる衝撃。ダメージを告げるキヤクストンのA Iが深刻な状況である事を赤い点滅で知らせた。

渾身の力で斬り飛ばそうとした山刀の切れ味を済んでの所で押し留める左手のメインフレームに亀裂が走る。後一撃しか持ち堪えられない耐久力を認識しながら、キヤクストンの右手がさっきの映像をリピートする様に、しかしほんの少しアレンジを加えて再現した。吐き出す炎はコクピットではなくジムのセンサーが集中した頭部を目掛けて。高く掲げた右腕の先にあるメインカメラとセンサーの角諸共、頭部が直撃を受けて破碎した。

「ぬっつ！」

着弾の衝撃に唸りながら後ずさりするジムのキヤクストンが最大出力で追撃する。吹き飛ばされた頭部のメインカメラから肩口のサブカメラへと切り替わる間の隙を逃さず利用して距離を詰めるキヤクストンの戦術は、嘗て彼が敵によつて教えを受けた経験の賜物だった。だが運動性能で遥かに劣る『ANUBIS4』を持って実現させた其の要因は、彼らが無法の限りを尽くして奪おうとする『フライ・バイ・ライト』システムによる所が大きい。既存のシステムによるコンマ何秒かのタイムラグを消滅させたこのシステムは、それだけで敵に対する優位性を確保する事が出来る。

総重量の三分の一を占める鈍重な脚部がコンクリートを蹴り上げて前進する。時間の猶予を求めたジムの左手が、再び零距离射撃の体勢に入ろうとする生き残った八十三ミリを掴んで脇に押しつけた。

其の瞬間。

「喰らえっ！」

キヤクストンの掛け声と共に倒れる『ANUBIS4』の上半身がジムの腹部を直撃した。鰻の頭のようなコクピット先端部がジムのコクピット前面の装甲板に鈍い音を立てて突き刺さる。衝突の衝撃で粉々に粉碎されたキャノピーの破片がキヤクストンの頬を切り裂いて血を滴らせる。剥き出しになったコクピットで鬼と化した歴戦の勇士が血を流させた事を相手に後悔させる様な視線で、へこんだ

装甲板越しに坐る敵の姿を睨みつけた。

トーションバー

打撃の衝撃を受け止めたジムの足裏の緩衝バネが壊滅的な悲鳴を上げて碎け散る。しかし其の衝撃を倒れる事無く受け止める事に成功した無頭のジムは、再び右手の山刀をキャクストン目掛けて叩きつけて来た。キャノピー越しにしか聞えなかった風斬り音が剥き出しになったキャクストンの五感に命の危機を訴えて。

反射的に敵の手を振り解いた右手が、腰部のギアの助けを借りて敵の武器の前面に翳される。窮地に陥った敵が繰り出した渾身の一撃は右手の骨組みを切断して内部に仕込まれた油圧系統に干渉した。『ANUBIS4』の血液とも言える油圧系統を流れるタイプ？オイルが動脈を切断された人体さながらに勢い良く噴出する。

激減する数値は駆動停止までのカウンtdown。致命的な損傷を受けた事を計器ではなく、自らの感覚で知ったキャクストンの両足が脚部の運動制御の為の三つのペダルを微妙な強弱をつけて踏み抜いた。残存するオイルを駆使して唸りを上げる下半身全ての油圧モーターが重心の低い機体を瞬時に旋回させた。

「何だと！ そんな事が」

ホバーシステムや履帯走行によってのみでしか再現出来無い筈の信地旋回機動を巨大な脚部の踏み変えによって再現するキャクストンの機体。不恰好な舞いを贅辞の衝動と驚嘆の思いで見詰めながら、男が後退しようとする重心を引いた。

男が思わず選択した無意識の後退。其の動きを発生させる事がキャクストンの狙いであり、同時に彼に与えられた唯一の勝機であった。

破壊された脚部のサスペンションはジムの機体を容易には下からせなかつた。バランスを崩し、それを復元する為のオートバランスサーが作動するまでの一瞬に賭けて、キャクストンは腰部にある上半身と脚部を繋ぐギアに力を加えた。猛然と振り回される上体と其の肩から伸びる壊れかけの左腕が、既にダメージを与えられていたコクピットの装甲板に叩きつけられた。

纏った遠心力と衝撃が左腕を砕く。裏拳を放ったキヤクストンの機体の左手は圧力の残る油圧オイルを噴出しながらばらばらになった破片を宙へと撒き散らした。役目の終わったアデン砲の欠片と共に仰向けに倒れていくジムの影。

最後の力を振り絞ってジムに駆け寄るキヤクストンの足が山刀を握った右手を、機体の全体重を乗せて踏み砕く。伝達機能ごと大破したジムの右手が残存する機能に負荷を与えない為に、腕の付け根から爆砕離断した。爆破の襲撃によって身動きしたジムの機体を残った足で踏み付けて、既に機関砲としての機能を喪失した右手を損壊直前のコクピットに翳して叫んだ。

「命が惜しかったら答えろっ！ 貴様の所属部隊名は、姓名と認識番号は！？」

「俺が油断したとはいえ、其の機体で格闘戦を挑んでくるとは。

…… 強いな、あんた。」

キヤクストンの放った質問に対してまるで見当違いの感想を口にする男の声。

「此処でお別れとは至極残念だ。あんたとはもっと違う場所で、同じ機体で戦いたかつたぜ。」

「…… 答える気はない、と言う訳か。」

キヤクストンの胸中にある回顧録に新たに記載される、名も無き兵士の語る其の理屈も理由も元軍人としての身の上では十分に理解が出来る範疇だった。

民間施設に夜襲をかける部隊、目的は民間人の略取、そして余りに手際のいい攻撃。それらの要素を鑑みればこの部隊が如何に情報を秘匿されなければならない位置に存在する物かという事は容易に想像がついた。自分が現役の時にも、その様な部隊が暗に活躍したと言う事実を噂ながらに耳にしていたキヤクストンにとって彼らの様な部隊が実在していたと言う事は悪夢ではなく、事実の追認にか過ぎない。

「では、話は此処までだ。皆の仇を取らせてもらっぞ。」

振り上げた右手がコクピットに狙いを定める。後一撃此処に叩き込めばパイロットは装甲板ごと押し潰されて絶命するだろう。右腕を操作するグリップを勝利と共に握り締めたキヤクストンの掌から滴り落ちる汗が床に毀れたその時に、不意に男の声がモニターから流れた。

「…… 耄碌もろろくしたな、あんた。」

それは覚悟を決めた男の台詞ではない。言葉に隠された意図を読み取ろうとした其の間を埋める様に、男の言葉がキヤクストンの耳朵を打った。

「タイムアップだ。残」

最後までキヤクストンの正義を掻き毟る男の声が奏でる、侮蔑混じりの言葉を全て聞き取る事は出来なかった。聞き耳を立てた瞬間にキヤクストンの全身を襲った強烈な衝撃と固い金属を破壊する甲高い叫びは『ANUBIS4』の全ての機能を断絶させる。其の行為が敵の砲弾に拠る物だと気が付いたのは分断された上半身が宙に浮遊していると理解した瞬間だった。

横たわったジムの爆砕ボルトが点火する音と遠くで響く砲撃音が混在する。距離を置いて戦いの行く末を見守って来たエミリオの耳は其の音を同時に耳にする事が出来た。

背後の紅蓮が放つ圧倒的な熱がエミリオのパイロットスーツを焦がす。だが彼の心はそんな熱等及びも付かない程強烈な恐怖に煽られて延焼を始めた。遙かな距離を闇に紛れて高速で飛来して来る致死性のスキール音はエミリオの外耳を取り巻いた拳句に脳へと浸入する。

「お父さん、駄目だ。離れてっ！」

正確無比を見せ付けた敵の砲撃の狙いが彼の義父の機体である事は明らかだ。エミリオの脳内をぐるりと一周した甲高い悲鳴は出口を求めて彼の脊髄へと殺到する。脅迫に等しき圧迫を受けたエミリオの条件反射は彼を行動へと駆り立てた。

落下による打撲で全身に蔓延する痛みも忘れて、加護を呪<sup>まじな</sup>う様に地に投げ出された手足が一斉にコンクリートを蹴立ててエミリオの体を先へと進める。

願わくば少しでも養父の傍に近寄り。思い叶わぬならば、せめて声の届く場所まで。

地を蹴る手足は獣の如く。炎から遠ざかるエミリオの影がヒトの進化の過程を具現化する様に影絵を残す。だがそれは進化の先に存在する自己崩壊への序曲に過ぎないと言う事を、彼の求める日常への帰還と言う名の希望は理解をしていなかった。ヒトの力では届く事の出来なかつた距離の向こうに存在する、彼の希望を打ち砕く為に用意された絶望の映像。

キヤクストンを直撃した弾頭の名称がAPFSDS（Armor Piercing Sabot Fin Stabilized Discarding Sabot：装弾筒付翼安定徹甲弾）である事等、民間人であり続けたエミリオには知る由も無い。だが装甲の貫通力、命中精度、破壊衝撃力等の総合力で高く評価され、現在の主流となっている弾頭は確実に『ANUBIS4』の胴体を貫通して両断せしめる事に成功した。

吹き飛ぶ下半身の僅かに上を緩やかに舞う、敬愛する義父が乗り込んだコクピットの哀れな姿を目に焼き付けながら繰り返す単語は唯一つしかない。それでも他の言葉を探し出すにはあまりにも少ない時間と自閉の自失に覆われる己の表現力の不足を嘆きながら、吐き出さねば気が狂ってしまうだろうと言う思いに駆られて雄叫んだ。「お父さんっ！」

反射的に脱出レバーから手を離したのは骨の髄まで染み込んだ人殺しの本能なのだろう。開放されたコクピットから体が投げ出される事の無い様に彼の体を拘束する五点式のシートベルトの緊迫を体を感じながら刹那、キヤクストンは思った。

浮遊する感覚と抗い難い殺意に導かれて彼の記憶は過去へと遡る。

暗い闇しか目にする事の出来ない彼の意識が辿り着いた先は、嘗て彼が生存だけを賭けて  
戦場では主義主張、正義すらも関係ない  
ジオンのモビルスーツと渡り合った最後の激戦地、ア・バオア・クーだった。

巨大な質量を持つ小惑星が発したと思われる僅かな重力は、天地の区別の無い宇宙空間で自分の置かれた状態をはつきりと教えてくれる。制御を離れて旋回する機体を押さえ込む為に、卓越した技術と経験を持つ彼の反射神経が両の掌に握られたレバーを操作した。コンマ何秒、数ミリ単位で動かすレバーから送られる命令は、それまで彼の期待を一度も裏切らなかつた記憶に沿って、空中浮遊する機体の制御を彼自身の手に取り戻させる筈だった。

しかし閃く様に動き続ける彼の手が其の手応えを感じる事は無い。人の英知や能力を其の瞬間に凌駕した彼の運動能力は、目にする景色がまるでクレイアニメの撮影現場の様に酷く緩やかで穏やかに時を刻んでいる様に見える。遅々として変化を果たさない彼の周りの世界に苛立った彼は思わず心の中で毒づいた。

“このポンコツめ、早く言う事を訊け。其の間抜けな『くるくる』を今直ぐ止めて銃を構えろ。さもないと”

毒を吐いた所で制御を取り戻す訳でも、状況が激変する訳でも無い。だがそんな状態でもキヤクストンの平衡感覚は失われる事は無かった。地上よりも長く宇宙で過ごしたキヤクストンにとって其の感覚は踏み出した足が小石に毛躓いたほどの障害に過ぎない。

だが戦場では其の一瞬が命取りになると言うのに。

状況を把握しようとする両目が炎の光に照らされた星の表面を照らし出す。爆発して狼煙を上げる施設、其の炎の前で攔坐したままの『敵』の機体。対して味方は自分の傍で大破した『夜間迷彩のジム』一機。

“良かった、これは大戦果だ。”

困難な任務を達成した時にはいつも訪れる、えもいわれぬ達成感と安堵を噛み締めたキヤクストンが旋回する機体の赴くままに視線

を進める。へこんだ装甲板は済んでの所で味方のパイロットの命を守る事が出来た様だ。

“ 何処の部隊だか知らないが、運のいい奴め。 ”

“ それくらいで済んだ事を神に感謝するんだな。 ”

頭を吹き飛ばされたジムの機体に一瞥をくれるキヤクストンの冷や汗に塗れた表情に笑みが浮かぶ。 作戦が成功したのならこの後に自分がやるべき事は決まっている。母艦に帰って自分のロッカーを開け、扉の裏に挟んである遺書をシュレッダーにかけて、代わりに愛する娘へ無事を知らせる手紙を書こう。

ついでに戦争がもうじき終わる事を伝えなければ。地球の片隅で私の帰りを首を長くして待っている、寂しい思いをさせてしまった娘を心から喜ばせる為に。

なに、それはそんなに遠い先の事じゃない。もうじき味方が助けに来てくれる筈

移動を続けるキヤクストンの視野の片隅を過る黒い機体の群れ。大破したジムと同じ迷彩が施された機体が大地を踏み締める姿が炎に照らされて闇に浮かび上がった。

地獄の中で傷付いた自分『達』を迎えに来た『黒天使』イスラフィールが救いの手を差し伸べる為に現れたのだと。殺伐とした心中を瞬く間に塗り替える深い平穩の油絵の具はパレットナイフの先端に油断と言う名の色を盛り上げて、彼の心に描き殴った。

彼の肉体を掻き抱いて廻るコクピットと言う名の運命の風車。かたむねのま 自分の未来を繋ぐ為に突如現れた彼らの巨大なゴーグルが輝きを放つ。其の照り返しに視線を奪われたキヤクストンの目が彼らの手に握られた銃口が寸分違わず自分に向けられている事を知ったのは、感情の全てを『死に至る病』の淵から完全に遠ざけた瞬間だった。誤射フレンドリーファイアの危機を悟ったキヤクストンが未だに緩やかに流れ続ける時の流れに逆らって、破碎されて外気に晒される頬に力を込めた。

「おい

素直な自分の気持を言葉に出来たのは其の二文字だけだった。

自分目掛けて放たれる三つのマズルフラッシュと廃薬孔から吐き出される空の薬莢までもが完成した動画の背景として存在する。自分に殺到する筈の頭ほどもある弾丸を目にしてしまう事を恐れる様に手を翳すキヤクストン。だが次の瞬間には訳の分からない衝撃と共に視界が開けた。断面に残る冷痺と暖かな血飛沫を携えて。

最期に飛び込んで来た三機の黒いジムの禍々しい其の姿。キヤクストンは自分の欲した思いが間違っていた事を知った。彼らは仲間を地獄から救い出そうと馳せ参じた『黒天使』等ではなかったのだ。彼と仲間を死へと誘う『死天使』だったのだと。



目に見えない死神の両手に弄ばれるコクピットと言う名のお手玉<sup>ヒートンバッグ</sup>、鈍い音と共に装甲板を食い千切る弾丸がキヤクストンの亡骸が安置された棺を睨ませようとする重力の導きを拒絶した。

着弾の度に与えられる貫通衝撃はジムの半分の重量になった『ANUBIS4』の上半身を宙に押し留めて蹂躪を続ける。千切れ飛ぶ装甲板の破片と吐き出されるオイル、混在するキヤクストンの肉の欠片が煙混じりに闇の大地へと振り撒かれて。人の形を削られていく義父の姿を現実の光景として受け入れられず痴呆の様な表情に開いたエミリオの節穴が、抉り取られて消えて行く幸せな時間の行く末をただ見つめた。

原形を失った彼の棺は原初の塵に還る手段すら失って、壊れる証だけを大地に響かせて落下した。刻み込まれた無数の弾痕は落下の衝撃を助けに、穿った穴の拡大を画策して実行に移して。強度を失った『ANUBIS4』の上半身は地面に叩き付けられた瞬間に其の輪郭を失う。

拡大した瞳孔で再び訪れる闇を見つめる若者。エミリオ・エスタ<sup>1</sup>と言う名称を同じ種の生物に授けられたその個体は、進化の頂点に立ったと自負する支配者のプライドを失って愚かな下等生物の領域まで其の感情を逆行させる。

何の為に自分がここにいるのか、何故戦わなければならないのか。運命と死に抗う意義を失った、世界の覇者の人と形をした下等生物は存在意義<sup>レソントール</sup>の消滅と共に記憶に残る本能に身を委ねた。湧き上がる恐怖、未知の領域への侵入、そして期待。

矛盾に渦巻く欲求が個体の生命活動を促進させる。耐える事を必要としなくなつた衝動的な生理欲求を留める物は、理性にも活動の何処にも欠片も無かつた。

生暖かい液体が坐像の如く動きを止めたエミリオの下半身を濡ら

し始める。

失禁が始まった。

「良い腕だ、『ハンプティ』。」

コクピットの暗闇に響く、喝采交じりのその声でさえ陰気な面持ちを想像させて。モニターの先でにこりとも笑わずに自分の仕事を評価する上官の表情を思い浮かべながら、『ハンプティ』と呼ばれたパイロットは呟いた。

「奴はお遊びが過ぎるんですよ。追っかけといて正解だったぜ、全く。」

「そう言うな。」

自らの油断によって窮地に陥った『ラーズ1』の不手際を責めるな、と仲間が死んでも眉一つ動かさない指揮官は言う。珍しい事もある物だと驚いた『ハンプティ』は恐らく其の後に続くであろう上官の判断の吐露に耳を傾けた。

「あの機体があそこまで動けるとは俺自身も、本部の作戦立案者も知らなかっただろう。操縦者の技量に頼った所も大きいのだろう、それにしても奴等の開発した『フライ・バイ・ライト』システムと云うのは大した物だ。戦闘中の全ての挙動に於いてジムより一步勝っていた。奴が後れを取るのは当然だ。」

「…… 殺っちゃ、まずかったですかね？」

敵の機体を総合的に高く評価した上官に向って、彼は恐る恐る尋ねた。

より精密な射撃を可能とするAPFSDSを使用するのならば要求に応じて狙いを変える事も可能だった。ただ二機が異常に接近したあの状況で、味方に被害を与えず確実に仕留める為にはどうしても動きの少ない胴体部分を狙うのがベストの選択だった。手足を狙う事は万が一の事態

突発的な要因によって狙いが外れる  
を考えると賭けに近い。

『ラーズ1』に向けられる筈の譴責が実は自分に向って放たれる用

意が為されているのではないかと言つ疑念は払拭出来ない。

「わざと生き残らせて拉致すると言つ選択肢もあつた」

「バカ言え。」

『ハンプティ』の質問に対して、上官の容赦の無い罵声が飛んだ。

予想外の反応に軽く首を竦める『ハンプティ』の耳に届く言葉の続きは、自分の判断に疑念を抱いた彼の心を否定する物だつた。

「『対象』<sup>パッケージ</sup>以外に与えてやれる物は、死だけだ。余計な物を抱え込む暇も隙間も俺達には無い。」

其の言葉の何処にも同情や侮蔑等、自らを論う感情の一片も籠つてはいない。ある種の尊敬と感慨の念が染み入る様に耳にした『ハンプティ』の心中を過る。

肥大化する『ティターンズ』と言つ軍の影で、汚れ仕事を一手に引き受ける『殲滅部隊』としての性格を持つ『旅団』<sup>ブリゲード</sup>。其の中でも『先鋒』<sup>ファースト・インパクト</sup>を担う『W・W・W』中隊を率いる彼にとつて、皆殺し以外の選択肢は無いのだと。

単純であるが故に分かり易い。其の意思に賛同した志願兵で構成された賛同して実行さえすれば正規、捕虜分け隔て無く入隊出来る 傭兵の集団が自分達である。其処に人の世の斟酌<sup>しんしゃく</sup>を持ち込んで正論を語ろうとする行為こそ、愚かだ。

束の間の思索に耽る『ハンプティ』の意識。押し黙つたままの彼に向つて、指揮官である『ダンプティ』からの命令が静かな声で流れた。

「これで状況は終了だ。『ハンプティ』は速やかにLZ（Land ing Zone：着陸地点）に移動。ガンペリーに収容の後、原隊へ帰投しろ。」

「『ハンプティ』了解。」

「周囲の『消毒（痕跡を消す事）』を依頼する事を忘れるな。『ボロゴウヴ』は此処まで面倒を見てくれないからな。」

エミリオの視界の中で影が動く。彼の義父を粉々にした三つの影

は規則正しい油圧モーターの音を響かせながらゆつくりと無明の葬儀に加わった。尻の下で揺れるコンクリートがエミリオに距離まで認識させて。感情にまで波形を及ぼすその振動は彼の選択肢を極端に制限した。

徒手空拳の身である自分に『戦う』と言う選択は無い。ただ死を『覚悟』するか、『回避』するか。微塵にされた義父ならば不名誉な二者択一に感じるであろう分岐を、民間人として生きて来たエミリオは何等恥と思う事は無かった。

頭上に掲げられた女神の天秤に振り分けられる運命の分銅。左右均等に載せられ続ける生死と言う名の重量に不安定な均衡を保ち続ける指示針が大きく一方に傾きを見せて中心の針を振り切る。

非現実の世界にただ一人取り残された自分に与えられた幻想。妻と、息子。

脳裏に浮かんだ二つの面影に突き動かされた決意が彼に神託を与えた。垂れ流された自分の尿に手を付いて、再び進化の初期状態まで時を戻したエミリオの手足が本能に塗れて地面を叩く。四つん這いで地を駆ける影絵は生きる事に不慣れな小鹿を思わせるほど滑稽で、無様で。

敏捷とは言えない其の姿を暗闇に振り撒く負け犬。『死』と言う火花に火を点けられた尻尾を柵引かせて遁走するエミリオ。其の視線は希望を求めて逃避行の先にある光を探して。

彼の仲間を焼き尽くした炎。其れを常軌を逸した彼の目が光と勘違いしたのは当然の事だったのだらう。一目散にメインハンガー目掛けて走るエミリオの視線はその炎を背景にして現れた白い影を目標撃した。

熱風に煽られてゆらゆらと。其処から生え出た二本の影がコンクリートを踏み締めて。炎に翳る白い色が研究所員が残らず着用する作業着だと気付いたのは、エミリオの自我が浮かび上がった希望に縋ろうと手を伸ばし、其の思いが全身に波及して上体を起こした瞬間だった。二足歩行と光を手にしたヒトと言う種は慣れた動きと速

さを手に入れて、彼我の距離を一気に詰める。

「たつ、たすけてくれっ！」

潤れた喉と嚙れた声。声帯に貼り付く恐怖の酸味を味わいながら豺狼さいろうの如き喧号けんごうで救いを求めるエミリオの声。竦んだ様に立ち尽くしていた白い影が何かに怯える様にびくんと反応した事を確認したエミリオの意識は、地獄を映し出す映像からの脱却を果たした。

気のせいでも夢幻でも無い、正常化する視界の中に映し出された研究員の顔。

其の者の素性等全く知らない。ただ男の着用したセキュリティタグ入りの白衣だけが男の確かな身元を保証する。地獄の原野に現れた自分と同じ顔をした、弱者である事を隠しもしない初老の男の顔を噛み付く様に見初めて、エミリオは縋り付いた。

「た、頼むつ、俺をシエルターまで連れてつてくれ。連邦軍の襲撃にあつて警備隊は全滅した。今直ぐ本社にこの事を」

此処に在籍する所員しか使用する事の出来ない、地下深くに存在するシエルター。

NBCR (Nuclear・核 biological・生物 chemical・化学 radiological・放射能)兵器全ての攻撃に対応できる閉鎖性と環境保全を約束するその施設は、中から鍵を掛けさえすれば一ヶ月の籠城に耐え得るだけの備えが施されている。所員の身の安全を守る為に配備された警備部の人間だけが知る情報を記憶の中から拾い出して、エミリオは微かな生の匂いを感じ取っていた。

其処に辿り着きさえすれば。

恐らく其の思いは男の顔を凝視して止まない自らの表情にも表れているに違いない。二人を取り巻く状況がどれだけ危機的且つ絶望的な物かと言う事を訴えるエミリオの顔を見、声を聞いている筈の目の前の男は、其の瞬間に何故か怯えた目をして頭を振った。

だらしなく開いた口が震える様に動いて何かを口走る。だが血飛沫ぶく殺戮の現場から一刻も早い脱出を至上の願望としたエミリオの

目に、彼が何を訴えているか等を理解する余裕は無い。自分の主張を一方的に押し付け続けて要求を飲ませる事に血道を開けるエミリオの両手が男の肩を掴んで激しく揺さぶった。

「あつあんた何を言ってるんだ、早く此処から逃げるんだ！ 奴等の狙いは此処にいる科学者の略奪だ。彼一人を誘拐する為に他の全てを皆殺しにするつもりなんだぞ！」

白磁で出来た男の顔の真ん中に空いた二つの穴は血走って瞳孔を濁らせたままでエミリオの顔を　それは鏡を覗いている様だ

瞬きもせずに見詰めている。届かぬ思いを両手に籠めて尚も揺さぶるエミリオの手を、堪り兼ねた様に呟いた研究員の声が押さえた。

「…… ゆ、ゆるしてくれ」

唐突に漏れたその言葉の意味を理解する事も、いや認識する事すらも拒むエミリオの生存本能。

エミリオが彼に声を掛けたのは、自分が生き延びようとする道端に蹲った同類の姿を認めたからに過ぎない。共に手を携えて生存への道程を選択しないのならば、それはしょうがない事だ。今はそれ所ではない、自分がこの地獄から落ち延びて生きて愛する家族の下に帰還する事こそが重要且つ最大の、そして唯一の望み。それを遮る弱者の存在はエミリオにとっての障害に過ぎない。

的を得ない反応に業を煮やしたエミリオの、相手の肩を掴んでいた両手に力が籠る。か細く伸びる家路を塞ぐ意地悪な科学者の体をどけようと。それがどんなに非人道的であろうとも構いはしない。

『カルネアデスの板』に掴まれる者は一人しかいないのだから。

動かなかった。

まるでその場に根が生えた様に動かない科学者の体。エミリオより僅かに低い背丈の、そして千切れた義父と同じ位の年恰好のその姿の何処にそんな力が存在するのか。渾身の力を込めて退けようとするエミリオの膂力を嘲笑う様に、白髪交じりの乱れた頭髪を額に

貼り付けた科学者は立ち塞がったまま動こうとはしない。その原因がその科学者から齎されている物ではなく実は自分によって顕れている物だと理解したのは、自分の視線が突然相手の肩の高さまで下がった瞬間だった。

「えっ ……」

堰を切った様に両足から抜けていく力。感覚の喪失は一気に腰まで及び自分の体が浮遊している感覚に襲われる。だが視線の落下はその位置に留まったまま、自分の顔を見下ろす形になった科学者の表情を捉えて離さない。エミリオの視界の中で歪み始めるその表情は、まるで精密に描写された絵画がグラフィックの力を借りて動き出した様にも見えた。

そしてエミリオが観察する彼に浮かぶ表情の中で一番大切な事。拡大した瞳孔で見詰める彼が自分を過去の者として捉えていると言う事。

「おい、あんた、一体」

焦点を失って、震えながらエミリオを見詰める科学者に向かって掛けた言葉と共に吐き出される何か。喉を詰まらせて咳き込んだその口から噴出したその液体は勢い良く科学者の胸元にぶちまけられる。

どす黒い、粘り気のある液体はたったそれだけでエミリオの中から全てを奪い去ろうと。事態を把握しかねたエミリオの視線がゆっくりと男の胸元を汚した自分の血、そしてその脇に付けられた男の右手へと視線を移した。

脇から伸びる枯れ木の様な細い手は何かの重みに耐えかねて今にも折れそうなほど項垂れて。その掌に握られた何かの柄が自分の腹に突き付けられて。それが巨大な刃だとエミリオが理解したのは、其処を始点として自分の体内に広がる痺れと激痛との入り混じった悪寒が席卷したと感じた瞬間だった。

その事実が齎す行く先を想像しようとしたら呆然と見下ろすエミリオの耳に、目の前の科学者とは違う男の声が、科学者の背後に隠れ

た位置から届いた。

「だめだなあ、先生。それじゃあ人は直ぐに死なない。」

自分に広がる死の悪寒を煽る様に、その声は愉快でいやらしく聞える。背後からにゅっと伸びた手が科学者の右手　　エミリオ

の腹に突き立てられた刃の柄を握り締め、離す事が出来ない

を掴んで、支配者の倫理に背く初老の科学者の決意を嘲笑った。

「ほづら、こうするんだ。」

一気に捻られる科学者の手と男の手の影をただ見詰めるエミリオ。捻られた瞬間に自分の腹から生えた刃が実はかなり幅広の物であったという事が分かる。だがエミリオが人としての感性を保つ事が出来たのは其処までだった。

腹の奥で何か断裂する音が鳴った。途端に臓腑の底から湧き上がる液体が彼の喉を埋め尽くす。生を求める肉体の本能はそれが生命の維持に必要不可欠な液体である事を知りながら、窒息による死を恐れて吐き出した。

更なる吐血が目の中の科学者の腕と白衣を黒く染めて。湿った雑巾を叩き付ける様な音が生死を分かち三人の周囲に鳴り響く。

「これでいい。腹腔動脈を切断されれば人間は一分と持たない。：

…いい勉強になっただろう？ あんた達が頭の中で考える『人殺

し』の手段とは違う、これが『手応え』<sup>リアル</sup> ってもんだ。　　加えて

俺の趣味で言うならば、

血で黒く染まって闇と同化した自分の体から刃が勢い良く捌かれる。引き出された瞬間にその刃が中央から僅かに曲がっている事が分かった。未だに地上に存在するネパールと言う国に端を発するグルカ兵が、名誉と象徴を驕りして携える『曲刀』<sup>ククリ</sup> と呼ばれる巨大な鉞は刺創で痙攣するエミリオの横隔膜と腹筋を難無く断ち割って、その先端に内臓の一部を引っ掛けて外部へと引き摺り出した。

夜闇に溶け込む黒の中に混じり合う柔らかな白。腹圧に押し出される残りは腹の半分を切り開かれた断面から噴出して地面へと湿った音と共に零れ落ちる。



「これが、いいなあ。最高だ。」

黒い歓喜に包まれる男の声を微かに耳にしながら、エミリオの体は刃と言う支えを失って、自らが溢した臓物の上へと平伏す様に崩れ落ちた。

もう僅かな力しか残らないエミリオが望む物。

血溜りに沈む自分の頬を持ち上げる力も無く。微かに感じるその暖かさが過去の世界にエミリオの意識を帰巢させて。目の前にある白い柔らかな肉は妻の、そして息子の姿にそっくりに見えた。

其処に還りたい。

もう一度会って、二人を抱き上げて言うんだ。照れくさいけど自分の今の気持を言い表すにはその言葉しか思いつかないんだ。

“愛している。”

決意はエミリオの手を僅かに動かした。痙攣する腕が、震える指が遙か遠くでほんの少し先にある面影を掴む為に動き始める。

それさえ手に入れば、自分は還れる。あの穏やかな日々。妻と息子が共に手を携えて自分を出迎えてくれる、あの家に。温かい笑顔と耳を擦るような柔らかい声。

言うんだ、必ずその言葉を。自分の口で。

猛烈に押し寄せる感覚の無い睡魔に抗いながら、動かぬ手に力を込めて。周囲に漂う鉄の匂いを感じる事も無くただひたすらに、視線の先に横たわる自分の大事な物の姿を求めて。

「……まあだ生きてんのか。往生際の」

もう少し。あと

感覚の無い指先が二人に届いたと思った瞬間に降り注いで来た悪魔の嘲り。

耳にした時がエミリオに残されていた渴望の最期だった。死の痙攣を纏いながら、それでも有りつ丈の命で伸ばした手の甲を一気呵成に踏み潰す悪魔の踵。掌全ての骨が一溜りも無く砕け散って、地に縫い付けられたまま蠢動を繰り返した拳句に息絶える。足の裏か

ら伝わる末期の生動が途絶えた事を確認した悪魔の声が満足そうな  
声音を含んで吐き棄てた。

「悪い餓鬼だなあ。」

全てを潰した男が科学者の手から自分の曲刀を薙り取って、刃を  
黒く濡らした粘り気のある血を大きく振り払って。

飛び散る飛沫が苦悶を浮かべて蒼白い顔のままに絶命したエミリ  
オの頬を濡らして地面に垂れた。

「気は済んだか『ブージャム』？」

成り行きの一部始終を音声によって聞き留めていた『ダンプティ』  
が、一仕事を終えて曲刀を鞘に収める『ブージャム』に尋ねた。耳  
に嵌め込んだ骨伝導イヤホンと喉元に巻かれた咽頭マイクを其々の  
手で押さえた『ブージャム』の体が返り血で汚れる。だか彼はそん  
な事には意にも介さず、淡々と応えた。

「ええ、まあ。」

「『対象』<sup>パッケージ</sup>の確保は？」

「完了しています。“バンカー”は現在私に帯同して移動中。『ト  
ーヴ』隊に合流と同時に引き渡す予定、<sup>オーバー</sup>どうぞ。」

微妙に歯切れの悪い返事を繰り返す『ブージャム』。声音の色を  
聞き咎めた『ダンプティ』が指揮官ならではの厳しい口調で、その  
理由を問い質した。

「何だ『ブージャム』。言いたい事でもあるのか？」

その問い掛けに『ブージャム』の顔色が変わった。人の命等路傍の  
石ころの様に地獄の淵へと蹴り落とす事に何の良心の呵責も覚えな  
い筈の男の手が微かに震える。言葉を詰まらせたまま立ち尽くす『  
ブージャム』の耳に再度『ダンプティ』の冷酷な命令が届いた。

「言え。」

それは恐らく最後通告。逆らえば自分が他人に与えた死よりも無  
残な物が待っているに違いない。急拵えのブリーフィングルームで  
垣間見せる氷点下の無表情を思い浮かべながら、『ブージャム』は

覚悟を決めて申し出た。

「『ダンプテイ』。実は生き残った職員を上層階の部屋に集めて監視してあります。その……」

「誰の判断だ？」

「じつ、自分ではありません。」

押し寄せる恐怖にどもりながら『ブージャム』は答えた。一言一句を間違えれば目の前の肉塊と同じ運命が待っている。死を当たり前の様に他人に与えるからこそ誰よりも自らの死と言う物を恐れると言う、一種矛盾した人間心理が『ブージャム』の心臓に爪を立てる。だが此処まで言ってしまったのならもう後には引けない。自分の放つ言葉を何度も何度も脳裏で校正を重ねて、意を決して口にした。

「地下シエルターに立て籠もろうとする所を何とか押さえたのですが、その後の処分を思案している内に、その」

「はつきり物を言え『ブージャム』。お前達は其の者達をどうするつもりだったんだ？」

問い掛けに隠された彼の『ブージャム』に対する明確な非難が、氷の刃となって『ブージャム』の心胆を貫いた。彼が手に掛けた多くの無辜の人々が味わった最期の瞬間と同じ感覚が彼の生理を揺さぶって、『ブージャム』の下半身から力を奪う。

「いいか、よく聞け。」

『ブージャム』の震える膝と歯の根を万力で締め上げる様な、瞑い殺気に満ちた声が彼のイヤホンから脳内に侵入した。

「貴様らが作戦遂行の為にどういう手段を採ろうが、どんな殺し方をしようが俺は関知しない。だがな。」

言葉の影から伸びる『ダンプテイ』の黒い腕は『ブージャム』の内耳を貫通して、彼の脳内で再生されていた淫欲の映像を一气呵成に捻り潰す。

「これ以上人の尊厳を踏み躪る行為を俺の前で行うと言うのであれば、貴様らは自分の命を覚悟しろ。……手向かう事が出来るの

ならば精々やってみる事だ、地上戦力でこの『サイケデリック・ジム』五機と遣り合う事が可能だと、本気で思う事が出来るのならば。

其の通信は恐らくその場に立つ三機のジムのコクピット内にも流れていたのだろう。『ダンプティ』が宣言した瞬間に三機の左手は一斉に火器のボルトを引いて、新たな弾丸をチャンバー内に押し込んだ。吐き出された弾体が地面に落ちてコンクリートを抉り、其の振動は恐怖に立ち尽くした『ブー ज्याム』の足にまで伝わった。

瞬きも出来ずに見上げる闇の先に、炎に照り返されて浮かび上がる三機のジム。『ブー ज्याム』の罪を裁く為に動き出す黒色の巨人は、其の最初の一步を彼に向って踏み出した。

彼の邪しよまな提案を存在ごと一蹴する為に迫り来る、戦争の帰趨を決定付ける為に開発された巨人族の影を血の海の中に佇んだまま、痴呆の様な顔で見上げる『ブー ज्याム』。『ANUBIS 4』を蜂の巣にしたばかりの銃口が彼目掛けて突き付けられる。

「これが脅おそしで無い事は、貴様になら分かる筈だ。…… 理解出来たのなら速やかに任務を遂行しろ。 無線は開いておけ。

もしも貴様らがこの期に及んでその様な行為に及ぶのなら戦争犯罪の証拠ごと、この場で俺が消去してやる。『ボロゴーブ』の落とした火炎の中で己の犯した罪を神か仏にでも懺悔するんだな。」

スピーカーから流れ続ける阿鼻叫喚。甲高い悲鳴と怒号と時折響く銃声に満たされていた『ダンプティ』のコクピットが静寂に包まれた時、彼の機体は弾着観測の為に身を隠していた場所からメインハンガーの傍に到着した。未だに大きな炎を上げて燃え盛る建物の明かりに映し出される二つの残骸と血溜りに沈む人であった物の影。熱でばやけるモニターのモードを赤外線から通常モードへと切り替えた『ダンプティ』の視界に、ほぼ大破して横たわるジムの上に蹲つて炎を見詰める『ラー スー』の姿が映った。

「『ラー スー』、無事か？」

自分の部下ながら其の無秩序振りには嫌悪を隠せなかつた『ダンプティ』が『トローヴ1』と共に其処に残る部下の名を呼んだ。恐らく『ダンプティ』の音声は装着されたまま表情を押し隠している彼のヘッドセットに届いていたのである。振り向く事も無くじつと炎から顔を背けない『ラーズ1』はぽつりと答えた。

「また無様に生き残ってしまった。援護射撃等、余計なお世話だ。」

ぶつきら棒に吐き棄てる『ラーズ1』。不機嫌な其の物言いは意外にも『ダンプティ』の心中に蟠る別の不機嫌を氷解させた。『ブー ज्याム』に見せた不愉快な声音を払拭して以前の冷静さを取り戻した『ダンプティ』が形式的に尋ねた。

「機体の損害状況は？」

「損傷率二十パーセント、ほぼ中破。自立行動は出来ませんが脚部の破損により単独行動は不可能です。『リカバリー』を要請します。」

「許可する。至急『M S R S (Mobile Suit Recovery Squadron:モビルスーツ回収班)』に連絡を付けておく。奴等が任務を完了する頃には到着する筈だ。」

「ありがとうございます。」

口数少なく答える『ラーズ1』の姿を頭上から眺める『ダンプティ』。

公式非公式を問わず現在展開中の作戦行動の中でも最も苛烈で凄惨な現場を担当する自分の部隊で、常に先陣に立ち戦い続ける『ラーズ1』。だが彼は何時の瞬間に置いても作戦の成否以上の事に興味を持たず、まるで修行を終えた僧侶の様な出で立ちで基地への帰路に着く。

其の徹底した行動は指揮官である『ダンプティ』ですらも畏敬の念を感じ、そして残念ながらその事が彼と仲間の協調性を失わせる要因となっていた。故に『ラーズ1』には固定した僚機が存在せず、ともすれば今夜の作戦の様に単独行動を余儀無くされる事もしばしば起こる。

優秀な『ポイントマン』であるが故に『ラーズ1』を喪失する事は部隊にとつての大きな痛手となる。彼の行動に危惧を感じた『ダンプティ』は再三に渡って注意を喚起し続けた。だが上官である『ダンプティ』の忠告に同意を表す『ラーズ1』の眼の奥に残る憎悪の焰の存在を、彼は知っていた。

それが何らかに対する復讐を意味している事は疑い様の無い事実であろう。だが傭兵の集まりであるこの部隊に過去や志願の動機はいらぬ。必要なのは任務遂行に必要な能力と、人である事を捨て去る精神力。自分達が生息する水域と同じ深さで泳ごうとする者だけが法外な報酬と連邦公認の殺人許可証を手にする事が出来るのだ。それが出来ない者、出来なくなつた者に与えられる物は、誰にも知られる事の無い、自分達が作戦と言う名を借りて奪い続けた命の行方と同じ場所への片道切符。例外は、無い。

隠し切れない執念を抱える彼がそれらの特権を気紛れで手放す事はあり得ない。例えどの様な人と形で自らの本性を覆い隠そうとした所で、彼が今この部隊に存在して戦い続けている事、それが彼の目的の為に必要な手段であると言う事実を『ダンプティ』は確信し、そして未だに炎を見詰め続けて蹲っている『ラーズ1』の影を見詰めながら無線機の周波数を切り替えた。

眼球を干上がらせようとすする其の炎は自分の心中に渦巻く妄執。瞬きを忘れて見詰め続ける『ラーズ1』の両手は湧き上がる失望と、生き残つた安堵と言う二律背反にせがまれて、瘡を罹患した子供の様に震え始めた。

不随意に震える手を誰にも見られない様に、隠した私怨を悟らせない様に『ラーズ1』は押し寄せる痛みを怨みに変えてバイザーの影で血走る瞳を凝らして其の炎の向こうで繰り返されているであろう、殺戮の魔宴サバトを想像する。

仄かな明かりの下に浮かび上がる冤罪の死刑囚、裁かれる事無く執行される極刑。そして代行者を名乗る地上班の兵士達の足元に広

がる鮮やかで生臭い緋。征服者の手によって繰り広げられる終焉の挽歌は虐げられた敗者にのみ与えられ、命と共に地へと振り撒かれる血潮と異なつた彩を持つ澱んだ闇が、黙しじまを引き連れて世界を支配する。

其の世界こそが、彼の望んだ世界。

自らの生死を運命の前に差し出して気紛れな占せん卜ぼくに委ねる戦い方は、恐らく彼自身も知る通り歪んでいるのだろう。だが『ラーズ1』にとつての其の行いは『男』として生きる事を失つた彼自身が、未だに生き続けて此の世に何を為す事ができるかと言ふ事を知る為の大事な儀式だ。

『ラーズ1』の視線が、砕けた輪郭を炎の影に沈めようとする『A NUBIS4』の無残な残骸を憾うらみみの籠かごつた横目で見詰めながら、密かに心の中で呟いた。

奴こそが、俺自身を支配する暴棄の運命から救い出してくれる『救世主』だったのかも知れないのに。

他人の手によつて為された彼自身への神託。敗者を蹂躪する事によつて得られる快感を中断させられた彼の脳裏に運命を嘲笑う雄山羊バフオムが姿を現した。右手に死、左手に生を掴みながら『ラーズ1』に問い掛ける。

“お前に相応しい物は、どちらだ？”

溢れる妄想と逆流する血液。教会を模した闇の神殿に吊り下げられた鐘の音が雄山羊の尖つた口から滴る涎と共に繰り返される。彼の外耳を舐め上げる様に響く悪魔の声は、彼の理性を押し流して潜めた本能を皮膚の上まで浮き上がらせる。だが其の瞬間に必ず訪れる肉体の変調は彼の意識を常に現実へと引き戻すのだ。

股間に刻まれた傷の疼きに耐えかねた『ラーズ1』が漏れ出そうとする苦痛のうめきを、唇を咬んで押し殺す。破れる皮膚から流れる一筋の血が顎を伝って滴り落ちた。

現世と幽界の馬の背で滑り落ちるまで踊り続けようと試み、未だに其の不安定な足場に片足で立ち続ける『ラーズ1』の生殖器はあ

の日に犯した罪と共に消え失せた。あるのは肛門付近から臍の下にまで続く醜く引き攣れた縫合痕のみ。失った箇所を埋め合わせる為に無理矢理寄せ合わされたその患部は覆い隠そうとする陰毛と同じ様に歪いびつに歪んだ彼の運命を暗示した。其の傷が自分の体に刻み込まれたあの日から。

「…… アテリア・フォス。」

血の滲む唇が微かに歪んで「ラース1」の肉体に生涯忘れえぬ傷を刻みつけた者の名を呟く。血走った瞳は焦点を失い、眼球の底に刻まれた偽善者の相貌を睨み付けて。

異例の人事によって中隊長へと昇格を果たした「ラース1」には与えられた地位と名誉がどういう意味合いの物か分かっていた。

R&R (recognition and recuperation: 慰労と休養) を間近に控えた作戦で、自分の部隊を援護する筈の前線司令部が敵の余りに統率の取れた攻撃に怖気づいて「ラース1」らの部隊を最前線に置き去りにした挙句に彼一人を除いて全滅させたと言う不祥事。其の事実が前線全体に波及して士気が低下してしまう事を懸念した軍上層部が画策した、隠蔽の為の口止め料だという事を。

彼を逃がす為に盾となつて斃れる友人の声と、弾薬が底を尽いて補給を求めながら手にする事無く無念の死を遂げていく倍する数の仲間の叫びを耳にしながら、決死の覚悟で包囲網の只中へビームサーベル一本に望みを託して飛び出した「ラース1」。彼の背後から届く「生きる」と言う仲間の切なる願いは、そのまま彼の生き様に呪いとして刻み付けられる。

自分達を見捨てた軍に対する怒りと、死んでいった仲間達の願いの板ばさみに合った「ラース1」は傷だらけになつた機体を引き摺つて戦域を離脱した瞬間に自らの感情を凍結した。

唯一人生き残つた事に対する賞賛も、事実が「ラース1」の口から漏れる事を恐れる上官の危惧も彼の胸には届かない。外部からの



干渉を一切拒絶した彼の理性は恐ろしく危うい足場の上に立ち、強靱な意志の力によつて支える事によつて其の均衡を保つていた。

其の足場から滑り落ちてしまえば自分の心中で渦巻く憤怒が彼の意志を残らず支配してしまふであろう事を知り、憤怒と言う名の激情に取り込まれた自分が復讐と言う二文字を携えてどの様な行為に及ぶかを理解した上で、敢えて彼は仲間の呪いに身を委ねる決断をした。

自分の心を一生殺して生きる事、それこそが自分の足元に臥した仲間達の魂に報いる唯一の手段だと信じ、そして自分の一生を彼らの為に捧げる事を誓つた。

次の作戦の準備と予定通りのR & Rを消化する為に立ち寄つたヨーロッパ西岸に浮かぶ小さな島の川の辺に居を構える基地。『ベルファスト』と呼ばれる連邦軍基地に常駐していたモビルスーツ隊の女性隊員を所望したのは彼ではなく、年上で古参兵の彼の部下の一人だった。

古参とした鳴らした彼が『ラーズ1』に対して其の提案をしたのはほんの出来心に過ぎない。新しく参集した部下の為に一席を設ける訳でもなく、唯ひたすら無口に　　ともすれば其の行いは全員の鬻ぎを買つた　　ハンガーに座り込む上官を見兼ねた、彼なりの歪んだ気遣いの果ての提案だった。男であるならばその様な下種な提案には何らかの反応を示す筈だと。彼は其処から『ラーズ1』の感情を解き解す切っ掛けを作ろうと考えたのだ。

だが、それは『ラーズ1』にとつては別の感情を湧き上がらせる切っ掛けにし過ぎなかつた。小さく頷いて軍内部に於ける犯罪を許可する『ラーズ1』を前にした其の古参兵は狼狽した。まさか新任の中隊長がいきなり自らの地位を汚泥に浸す様な行為に手を染めるとは予想していなかつたのだ。慌てて自分の提案を取り下げようとする古参兵の瞳を強烈な怨恨の籠つた目で見上げる『ラーズ1』。上官としての威厳を湛えた眼光は、古参兵の弱気を恐怖へと変貌させた。

この目に逆らう事は死を意味する。彼は長い戦闘経験からその事を十分に理解していたのだ。

『ラーズ1』は其の女性隊員を知っていた。一人でポツリと坐るハンガールの片隅に近寄つて来ては『ラーズ1』の過去をしきりに問い質そうとする彼女。仲間の制止の声も振り切つて『ラーズ1』が抱える心の闇の正体を解き明かそうと努力する彼女の姿は、傍目には博愛精神に満ちた修道女シスターにも似て。事実彼女はベルファスト基地内のどの職員からも好かれる、非の打ち所が無い容姿と性格を有した女性である事は間違いないかった。

許せなかつた。

古参兵の申し出を『ラーズ1』が許可した理由は自分に好意の目を向け、過去を抉り出そうと試みる其の女性隊員の存在を否定する彼自身の願望による物だつた。

戦火の及ばぬ後方で何食わぬ顔をして平和を満喫する、幸福に満ちた彼女の素顔。友が、仲間が不条理に撃ち斃される戦場を知る事も無く、彼女を取り巻く友や仲間の忠告にも耳を貸さずに無遠慮に彼の心に土足で浸入しようとする彼女の言葉。

其の全てが自分を置き去りにした事実を覆い隠して仲間の死すらもプロパガンダに利用して正義を喧伝する偽善者然とした軍の上層部の姿に重ね合わせた彼の心は、其の瞬間に揺れ動く足場の上から一気に奈落の底へと滑り落ちた。

其の女の全てを『穢したい』と思つた。

其の女の言葉や態度。全てが死者に対する冒瀆だと思つた。

人気の無い、深夜のハンガーで上官の命令と言う大義名分と共に犯行に及んだ部下達が『ラーズ1』の心中を凶る事等出来はしない。死者との盟約を破つた『ラーズ1』は、自分の罪に加担した外道と共に戦争犯罪人として極刑を受ける覚悟を固めた。ティターンズと言う組織を統制する為に策定された軍規は厳格を極めており、其の

中でも戦争犯罪 特に軍内部での に関する刑罰は有  
無を言わさぬ重罪が確定している。短い期間では有るが指揮官とし  
ての教練を受けた『ラーズ1』はその事を十分理解していた。

理解しているが故に、使者を裏切った自らの最期を彼らを裏切っ  
た軍の手に委ねたのだ。自分の仲間の手を下した奴等の手で、仲間  
の住まう天上とは域を違える地獄に落ちようと。

だが事態は『ラーズ1』の望んだ極刑とは全く正反対の方向へと  
流れ始める。

それは加害者である自分達が『テイターズ』であり、被害者の  
女が『連邦軍』であると言う立場の違い。軍内の一勢力でありなが  
ら未だ最前線にて実戦を続ける勢力と言う事実と其の實力は既に軍  
全体に影響を及ぼすほど強大な物となっていた。その事に不快感を  
覚える連邦軍とテイターズの将兵の間での小競り合いは各方面軍  
の到る所で勃発しており、喜ぶべき事に其の殆どが示談と言う形を  
借りてテイターズ側に勝利を齎していた。

軍内だけではなく、連邦政府内でも強い影響力を行使し始めた主  
流派に抵抗出来るほど気骨のある勢力は、既にこの時存在していな  
かったのだ。そしてこの事実が連邦軍からテイターズへと転属を  
求める兵士の増加を誘引する理由にもなりつつあった。

ネズミ講の様に兵力を増やしていくテイターズの興隆を指を啜  
えて眺めるだけの傍流に成り下がった連邦軍。弱者の立場にしがみ  
付いた一人の女性隊員に降り懸った傷害事件などテイターズに取  
つては犬に咬まれた程度の事で、取り立てて表沙汰になるほどの大  
げさな事ではない。成り行きで仕出かしたこの不祥事も良くて示談  
最悪でも連隊長からの譴責処分済む筈だ、と『ラーズ1』の弁護  
に当たった弁護士は願望を反故にされた怒りで喚き散らす彼の前で  
驚嘆の表情で告げた。

実際に事態は弁護士の予想通りの展開を見せた。MPによる身柄  
拘束も無く、これと言った事情聴取も行われないうままお咎め無しと  
言う御白洲の裁きをした彼らがささやかな宴を催した基地内の

ブレイルーム。民間人ならば確実に懲役刑を下される犯罪ですらも隠蔽する、テイターズズの力と其の勢力に属する事の恩恵を噛み締めた外道の群れと、それを失意の目で眺める『ラーズ1』。

「こんな物なのか」と。

死者に呪いを掛けられた自分には自由に死ぬ事すらも許されないのか。矜持を失い、他人を傷付け、死を覚悟しても生き続けなければならぬのか。それも自分の仲間を見殺しにし、自分を此処まで追い込んだ『テイターズ』に無様に助けられて。

『ラーズ1』は生きる目的を自らの手で失った。自らの犯した罪さえ裁かれる事が無いというのなら、せめて次の戦闘には華々しく散つてやるうと。

仲間の喧騒を尻目に絶望の境界を思い浮かべようとしたその時。

其の女はやって来た。栗色の長い髪と般若おもての面を携えて。

「……やはり、お前か」

アデリア・フォス。俺の歪んだ運命の鍵を握る者は。暴棄の嵐に吾が身を曝して地獄を求め続ける俺の道標。

お前は俺の罪を裁いた。俺の罪を裁く事でお前は罪を得た。ならば。

お前と俺は同じ世界の住人として等しく、互いに寄り添い縋って生きていかななくてはならない筈だ。

全てを失った俺が未だに生き残ると言う定めは、全て神によってお前の元へと導く為に引かれた茨の畔。鋭い棘は俺の五体を切り刻み、流れる血は犯す罪と同量の苦悩を俺自身に思い知らせる。

その道程の果てで俺の到着を待ち侘びるお前は、やはり俺と同様に自らの罪に塗れて汚れていなければならない。

俺と同じく何も無い、空虚な魂を抱えて泣き叫んで居なければならぬ。

もしお前がそうでないのなら俺がお前をそう変えてやる。罪に塗れたお前が抱えた未練をこの俺が断ち切つて、お前が俺と同じ世界

の住人である事を俺が教えてやる。

だから、待っている。アデリア・フォス。

俺達が同じ畔の袂に佇んで、抱えた罪に吾が身を苛む宿命を携えて生きる者同士だと神が決めたというのなら、俺達は必ずどこかで廻り合う。

だから

「待っている。何時の日か、必ず

互いの罪を互いに裁いて、手を取り合って地獄へ墮ちる。それが俺の望み。

手にした『ラーズ1』の刃がアデリアの喉を貫き、アデリアの断罪の剣が彼の心臓を刺し貫いて抱き合ったまま共に息絶える。斜陽煌く宿業の畔の上で、茨に塗れて斃れていく互いの光景を想像して押し寄せる激痛も顧みず鬼面の哄笑を浮かべる『ラーズ1』。

それは彼自身にも気が付かない、奇怪に歪んだ愛情の現れであった。

死の宴の痕跡は熾き火一つを闇に残して静寂の海に沈んだ。

寂寥の風鳴りは意味も無く存在を奪われた大勢の子羊に送る、母なる大地からの鎮魂歌。『グレゴリオの無伴奏』は『聖歌』の意味を正しく捉えてハンブルグ郊外の森林を本来有るべき姿に戻そうと尚も其の息吹を上げる。

気を利かせた傍観者が壊れたチェンバロで伴奏をつけようと、夜空に不気味な音を漂わせてセツシヨンに加わった。風の音に混じって闇に眠ろうとする森林を揺り覚ます轟音は、巨大な黒い影を引き摺って研究所の上空に差し掛かりつつある。

のっぺりとした腹から零れ落ちる流体構造を持つ何かが夜空に巨大な花を咲かせる。落下速度を抑える為のパラシュートに繋がれたそれはゆらゆらと、摘み取られた野菊が人の手より取り落とされて再び地に根を張り、生への回帰を求める姿で研究所の敷地目掛けて舞い降りた。

天より舞い降りた二輪の花は、彼らの悪意。

ぶら下がった爆弾の先端が研究所のコンクリートに接地した瞬間に野菊の茎は最後の目的の為に炸裂し、暴虐とも言えるその威力を一気に開放した。

研究所の敷地を埋め尽くす、それはまるで二つの太陽。

大地を基底として半球状に拡大した火玉は互いに手を取り破滅の力を増幅した。内部に吹き荒れる断罪の業火は善悪問わずに灰燼に帰す。形あるもの無きもの一切の区別無く、原初の塵へと還して彼ら其々が請い敬う神々の御許へと彼らの全てを吹き払う。

それが人の手によって創られた、人の罪を覆い隠す為の、人に為せる外道の極み。

一瞬にして周囲の酸素を奪い取る巨大な火玉が、促進される破壊力と言う進化の果てに訪れる自己崩壊の法則に従って突如消滅した。真空と化した地獄の空間を取り繕う様に流れ込む空気の塊が、被災を免れた周囲の木々を薙ぎ倒して何も無くなった広大な原野に殺到した。其処に存在した筈のハンブルグ研究所と言う痕跡を多い尽くさんばかりの勢いで。

そして巨大なキノコ雲と言う狼煙を残して、彼らの宴は終了した。立ち去る者には次なる修羅を、留まる者には無念の死と言う結果だけを残して。

「『我は死なり、世界の破壊者なり』か。」

ポツリと呟いた『ダンプティ』の言葉を聞き留めた『トーヴ1』が通信回線を通じて尋ねて来た。

「何です？ 其の台詞。」

「ヒンズー教の経典に書かれてある一節だ。人類が初めて核爆発実験を行った時に立ち会った研究者の一人が呟いた言葉だそうだ。

…… この光景は正に其の言葉に相応しいとは思わないか？」

「まあ、核の使用を南極条約で禁じられている以上、現時点で最大の破壊力を持つ爆弾ですからね。…… なるほど、うまい事を言

う。」

「どちらが、だ？」トーヴ1』。」

言葉の隅に揶揄の含みを忍ばせて尋ねる『ダンプテイ』。感情を表に出す事を嫌悪する上官の余りにも意外な其の言葉は、『トーヴ1』の返答を躊躇わせるには十分過ぎる力があつた。束の間の逡巡の沈黙の後に『トーヴ1』はこの場に相応しい回答を口にした。

「どちらも、ですよ中佐。」

彼の回答に自虐の笑み

しかしそれはほんの微かに口角が

攀り上がる程度

を浮かべた『ダンプテイ』が無線機の周波

数を調整する。連邦軍の暗号回線のチャンネルに数値を合わせた『ダンプテイ』が、恐らく其の向こうで自分の報告を待ち侘びているであろう通信担当の士官に向つて、撤収の為の第一声を放つた。

「こちら『W・W・W』、『ワイワイウィンキー母雁旅団』HQ応答せよ。」

無線封鎖開けの余りにも早いタイミングでの通信に、面食らつて

慌てる女性の驚いた声が『ダンプテイ』のkokピットに流れた。

「こつ、こちらM・G・B・HQ。『W・W・W』どうぞ。」

「ミッシェル作戦終了。これより『バックグラブ対象B』を連れて原隊に帰投する。以上。」

「了解しました。予定回収時刻はGMT（グリニッジ標準時）〇四マルヨン〇〇、誤差プラスマイナス〇五でお願いします。」

「了解した。交信終了。」

一切の無駄口の無い会話を成立させた『ダンプテイ』がチャンネルを解除する。通常回線に復帰した通信機のスピーカーから『トーヴ1』の口から漏れる安堵の溜息が流れた。

「安心したか、ケルヒヤー。」

作戦中に呼ぶ事の無かつた『トーヴ1』の名前を口にした『ダンプテイ』が、他の誰にも会話の内容を聞かれない様に『トーヴ1』の機体に手を掛けて接触回線で通話を始めた。語り掛ける其の声に残忍な集団を束ねる冷酷な指揮官としての面影は無い。

「こつという非道な作戦はジオンでは考えられない物だからな。やはり連邦、特に『ティターンズ』と言う連中は頂けない連中だ。反吐

が出る。」

秘匿された会話にも拘らず息を潜めたケルヒヤーが無言で相槌を打つ。同意の沈黙を破ったケルヒヤーが『ダンプティ』に尋ねた。

「こんな事を何時まで続けるつもりなんですかね、テイターズはいろんな所から科学者を掻き集めて、今回に到ってはよりにもよって皆殺しとは。彼らの目的が最終的に『アレ』を創り出す為の物だとしてもこのやり方は酷すぎる。」

「だが、我々は此処に『留まる』しか手段は無い。少なくともこの部隊の背後に潜む『操りし者共』の手掛かりを掴むまではな。」

其の言葉を口にした『ダンプティ』の表情が失望に曇る。

其の手掛かりを掴む為に傭兵の集まりであるこの部隊に身を投じた仲間。だが幾度の凄惨な作戦を完璧に達成しても得られる成果は規定された報酬と束の間の休暇期間のみ。それが終われば再び言われるがままの非道を繰り返す日々を送らざるを得ないのだ。ジオンの将兵であったという誇りを血泥の中に叩き込んでまで。

「だがケルヒヤー、既に反テイターズ勢力は到る所で動き始めている、我々の身边が忙しくなっているのが其の証拠だ。『敵』が多くなれば我等は必ず動き出す筈だ、自分達の利益を拡大する為に、あざとく、姑息に。」

「そうでしょうか？」

疑問の言葉をぶつけるケルヒヤーに向って『ダンプティ』は恐らく目と鼻の先にまで近付きつつあるチャンスを予想して、そして期待して言った。

「お前は知らないのか？ 闇はな」

『ダンプティ』の視線が夜の闇に沈んだ研究所の跡地を睨み付ける。

「夜明け前が一番瞑いんだよ。」



## 秘められた想い

見た目より重い音がするのは内部に防弾用の鉄板が仕込まれているせいだ。司令官室と通路を仕切るドアがゆっくりと開いて仏頂面のヘンケンのそりと廊下に姿を現した。いつ終わるとも知れない民間人との会合に暇を持て余して欠伸をした、ドアの側の警備兵が慌ててそれを噛み殺す様を一睨みしてから踵を反して出入り口の向こうを険しい顔で眺めた。

ヘンケンの視線をすりと交わすようにセシルが退出し、其の後に続く人影。対峙したヘンケンと同様の不機嫌極まるウェブナーの表情が、この会合の結果が失敗に終わった事を警備兵に予感させた。それは決して彼らにとつても無関係な事ではない。オークリー基地にルートを持つ業者は限られており、其の中でも生鮮や主食の半分を引き受ける農場の組合長にそっぽを向かれてもしようものなら、それだけで明日からの彼らの糧食に影響が出る。幾ら陸戦部隊の連中が躍起になってウサギを獲って来た所で新鮮な野菜や穀物の代わりにはならないのだ。オークリー基地と言う名の陸の孤島があつという間に難民キャンプの様な状態になる事は間違いない。

喧嘩別れとなった会合の最後に互いが交わす棄て台詞を固唾を呑んで見守る警備兵。彼の視線に映るウェブナーの不機嫌な表情

彼の記憶でも司令がそんな顔をした記憶が無い 　　が次の

瞬間には砂礫の如くに崩壊して笑みが浮かんだ。

「いや、実に有意義な時間を過ごささせていただきました。組合長のご英断に感謝します。」

きちんと整えられた髭が笑顔で歪む。ウェブナーの方から差し出された右手を見下ろしたヘンケンが、ウェブナーとは違ったシニカルな笑みを浮かべてしっかりと握り締めた。

「まあ、買い掛けを止めて現金取引と言うのでしたら、こちらの方としても条件としては申し分ない。組合員に支払う代金は一日でも

早い方がいいですからな、彼らも仕事に張り合いが出るでしょう。その代わり

「分かってます。次回の価格協定の見直しの際には必ずベツケナーさんの所を真つ先に協議させていただきますよ。その結果次第ではカリフォルニアベースの入札にも参加し易くなる。」

「今日の会合がお互いに利益を齎す切っ掛けとなつて欲しい物です。『雨降つて』とは正にこう言う事を言つんでしような。」

嘘を取り繕う様な二人の会話を耳にするセシルが神秘的な笑みを浮かべて二人の表情を眺めた。

実際、基地との商品の取引が現金に変わった事は事実であるし、それによつて開拓地域で働く農夫達の金銭的損失が早期に補填されると言つのは確かだ。ウェブナーがヘンケンに約束する全ての事項は『表向き』のヘンケンの職業には全てプラスの方向へと働くだろう。

だが、ここに集まつた本来の目的と『裏の顔』が携えた議題に関しては何の進展も無かつた。コウのスカウトに関する議題の是非はセシルの一言によつて混沌の度合いを深め、四人の意見は二つに分かれた。コウの人と形を知るヘンケンとセシルは賛成の立場に廻り、残されたデータを重く見たウェブナーとモラレスは二人と反対の立場を採つた。互いが互いを説得すると言つ不毛な議論を繰り返した挙句、会合は物別れになる事を余儀無くされる。

会話の漏洩を防ぐ為に盗聴器の傍に貼り付けたICレコーダーの再生時間が限界を迎えた事で時間切れとなつた議論の結末は、結局保留と言つ最も時間を無駄にした形で終了する事となつていた。

“あの言葉さえ、ウラキさんの口から聞かなければ。”

貴重な会合の機会が無駄に終わってしまった理由を其処に求めるセシル。だが其のお陰で彼女の中ではコウに対する疑問の大半が氷解しつゝあつた。

穏やかな物腰と言えは聞えはいいものの、彼の言動や立ち振る舞いには何処か自暴自棄な影が見て取れる。セシルもヘンケンもコウの事を認めてはいたが、生き方に対してはかなり批判的な見方をせ

ざるを得ないと言つのが本音だった。

それはそうだ。今時『機械も使わず自分の手だけで作物を育てよう』などと発言し、実行し、成果を上げる農夫等彼以外に見た事が無いし、噂でも聞いた事が無い。

だがセシルはコウが『一粒の麦』の逸話を口にした時に見せた視線に気が付いた。触れただけで砕け散る罅割れたクリスタルの様な生き方をする彼が一瞬見せた『生への足掻き』。此処ではない何処か遠くを見詰めて呟く彼の目には一体何が映っていたのか。

セシルには分かつていた。尋ねた自分の姿を透かして遠くを見つめるコウの瞳が見ていた物。

彼の視線の先に有った物は真つ青な空、大気圏を通り越して成層圏を突き抜けて其の行く手に広がる静謐不偏な、宇宙の間。

「奥様には感謝しなくてはなりません。」

ウエブナーの意味深な言葉が回想するセシルを現実へと引き戻した。ウエブナーの顔へと視線を固定したセシルの黒い瞳。交錯する視線に秘められたウエブナーの感謝が其処には有った。彼自身も反対の立場に回りはしたが心の何処かではセシルの分析の様な、自分達の価値観を覆す考えを待ち望んでいたのかも知れない。彼がセシルに告げた言葉は『表』の意味でも『裏』の意味でも共通する感謝の意であつた。

「奥様からこの様な提案がなされなければ、話し合いは破談になる所でした。ベッケナーさんはいいい伴侶をお持ちだ。」

形式ばつた言い方では有るが、ウエブナーにはそれに取って代わる賛辞の言葉を見つける事は出来なかつた。反対の立場に立つては見た物の強力且つ新たな戦力の補充は現在反ティターンズを取り巻く勢力に置いては必要不可欠になっている。増大する戦力と拮抗する為には一騎当千の強兵の存在こそが羨えていく士気を高める起爆剤になる筈なのだ。其の資質を持った予備役の兵士を予測に基づいた理由等で諦める事は出来ない。最悪の展開と結論に落ち着こうとした議論の行く末を見事に崖っぷちに軟着陸させたセシルの洞察力

を、ウェブナーは共に宇宙を駆けていた時と同様の尊敬の眼差しで見詰めた。

ウェブナーの視界の中で、つこりと笑みを浮かべて静かに会釈を返す、一年戦争開戦初期に勃発したルウム戦役にてジオンによる旗艦アナンケ拿捕後の代行を務めたマゼラン級戦艦二番艦『ホーライ』の副長として壊走する連邦宇宙軍の殿を務め、損害を最小限に留めて自らもルナツーに帰還したと言う武勇伝の持ち主、セシル・クロトワ少佐。

戦功と実績から言えば恐らくこの三人の中では誰よりも輝かしく、そして華々しい未来が待ち受けていた筈の彼女がその後どの様な経緯でヘンケンの乗艦する『スルガ』それもサラミスを改装した輸送巡洋艦だ　の副長に収まったのかは定かではない。だが僚艦の艦長を務めていたウェブナーも与り知らぬ内に彼女は何時の間にかヘンケンの側に立ち、ヘンケンの補佐として十年來の付き合いの様な振る舞いを見せていた。当時は様々な憶測を呼んだ二人の関係も六年を経過した今となっては二人を繋ぐ絆が純粹な『上官と部下』の関係止まりである事を疑う者はいない。

最もそれはこの二人が『本当の夫婦ではない』と言う事実を知る者だけに限定されてはいるのだが。

「では、私達はこれで。ウェブナー司令、新たな契約書は近日中にこちらに届けさせますので、くれぐれも反故になさるような事だけは　」

「分かつております。これでも軍人の端くれ、自分の決断には責任を持つ主義ですからな。」

それは近い内にもう一度この問題について話し合おうと言う意味。二人の瞳がお互いの意志を確認し合い、硬く握り締めた手に同意を求め合う。其の光景を顔を上げたセシルが焦点の合わない瞳でぼんやりと見ている。

聡明に見える彼女の面影に隠された思考は未だ自分の脳内でちくちくと棘を立てる、彼女が抱き続けるコウに対する最後の疑問を払

拭する為に其の集積回路を最大限にまで駆動させていた。

彼は生を求めてモビルスーツを降りて農夫になる決心をした。そう結論付けた自分の判断は正しいのだろうか？

なるほど彼は未だに何かに抗って戦ってはいる。自然と言う猛威に体一つで向き合って、今日彼は一つの成果を手に入れた。

だが。

金色の麦畑に佇むコウ・ウラキと言う農夫の姿。セシルが遠くから其の光景を目にした時脳裏に一枚の絵画が浮かび上がった。遠い昔にベルト・モリゾと言う印象派の女性画家が描いた油絵のタイトルは『穀物畑』。

キャンバス一杯に描かれた金色の麦畑に立つ一人の農夫。だが油絵の具を盛り上げて置かれた其の農夫には影が無い、輪郭が無い。そして遠めに見れば人であると認識できる農夫の顔を近くで見ると目鼻立ちが、無い。

其処に描かれた人の姿は『人間』としてやはり何処か間違っているのだと。

そして其の絵に重なり合って存在を誇示しようとするコウ・ウラキと言う人の生き方も間違っているのだと。

生きようと望んだ拳句に、彼は死んでいるのだと。

人は生きる為に歩む道の上で自分の生を誇示しなければならない筈だ。其の為に神は塵から吾が身に似せた形を作り、あし肋から番を創り賜うた。其の姿形は神に示された道の果てに還る事を定められた元の塵に戻るまで、長く此の世に保ち続けられなければならない。

逆説的に言えば其の姿を保つ為に、人は『自分は此処にいる』んだと存在を指し示し続けなければならない。

だが彼にはそれが無い。心の中に蒔かれた種を抱えたままただおるおると、まるで其の種を芽吹かせまいとするかの如く自らを殺し続けるコウ・ウラキと言う人間の抱えた矛盾が、セシルには分からない。

モビルスーツの操縦に類稀なる才能を持つ『悪魔抜い』が、何か

に怯えるかの様に自らの半身を遠ざけようとする理由。

それは、何？

『一粒の麦』を自らの生きる糧として農夫の道を選んだ彼の目が見詰める遠い宇宙。二度と還る事の無い決意をした筈のあの宇宙そらを何故今更足掻いて彼は求めようとしていたの？

「セシル、どうした？」

セシルの頭の中で回り続ける思索と言う名の回転木馬メリーゴーランドを強制的に停止させるヘンケンの声が耳に飛び込む。はっとしたセシルが焦点を取り戻した瞳の先に、心配そうに見詰めるヘンケンの表情があった。

「ぼんやりするとはお前らしくも無い。何処か具合でも悪いのか？」

放たれる言葉通りの意味を、ヘンケンの目はセシルに伝えてはいない。セシルが思索しよくに現を抜かしている時は大概こういう風な表情をする事が長い付き合いで分かっているヘンケンヘンケンは暗にセシルに語っていた。

“今日の所はここまでだ。後でウラキ伍長の所へ行つて情報の収集に当たるぞ”

指揮官としての強制を湛える無言の圧力はセシルの意識に『偽装』の二文字を思い出させた。心中で聊ちやうどか慌てながら、それでも表情にはその事をおくびにも出さずにヘンケンの問い掛けに返答する。

「いえ、何でも。……慣れない議論で少しのぼせたようですね。少し外の風に当たればじきに収まります。」

「そうじゃな、気分が悪い時にはそれが一番。」  
ウェブナーの背後からひよっこりと顔を出すモラレス。白衣のポケットに手をつ込み、中を弄りながら何かを探している。

「組合長が引つ切り無しに煙草を噴かすもんじゃから、そりゃ気分も悪くなるじやろう。ほれ。」

そう言いながらポケットから引つ張り出した掌の中の物をセシルに預ける。秘色のセロハンに包まれた小さな飴が転がった。

「奥さんには薄荷<sup>かひ</sup>じゃ。そしてあなたにも。」

モラレスがヘンケンの掌に無理矢理飴を押し付ける。

「あなたには禁煙飴じゃ。煙草も程々にせんと健康を害するぞ？」

あなた達の仕事は体が資本なんじゃろう。」

「いや、それはそうですが今更飴を舐めて誤魔化す気には

「ばかもん。」

ヘンケンの反論をやんわりとした口調で遮ったモラレスではあったが、其の目には本気でヘンケンの体を心配している意志が見て取れた。怖じて口を閉ざしたヘンケンに向って言葉を繋ぐモラレス。

「同じ時に、同じ物を見、同じ物を食べる。具合の悪い時には尚更じゃ。そうしないと夫婦等元は他人同士の繋がりがりじゃ、あつという間に離れてしまうぞ？ これは儂の『夫婦円満』の為の呪い<sup>まじな</sup>みたいなんもんじゃ、ありがたく受取つとけ。」

上官と部下でありながら偽装結婚を続ける二人の精神状態を、傍にいる警備兵に気付かれない様に気遣うモラレスの言葉が二人の胸に染みた。

任務とは言え本来は宇宙を住処として船の中で寝泊りしていた二人が地上に降りて何年が経過しただろうか？ 反ティターンズの地下組織の中核となって活動する二人にとって、今現在の状況は決して喜ばしい方向へと向っていない、いや寧ろ悪化しているのは確かだ。ヘンケンの性格から言えば直ぐにでも現存の組織を纏め上げて然るべき指導者に預け、叛旗を翻す為の準備に勤<sup>いそ</sup>しみたい事だろう。宇宙に上がり、艦隊を操り雌雄を決する。それがこの二人にとつての本懐であり、又宇宙こそが二人の真価を發揮できる領域の筈なのだ。

本来の生活を封じて慣れない同居生活を続ける事が思わぬ軋轢<sup>あつれき</sup>を生み出す。今日二人の意見が分かれたのが其の証拠だ。二人にも気付かぬストレスから来る見解の相違がその予兆を現している。初期段階で発生する危機を悟ったモラレスなりの、二人に対する労いと激励の儀式がそれだった。

「ありがとうございます、ドクター。ありがたく戴きます。」

モラレスの気遣いを悟ったセシルが丁寧にお礼を述べる。其の顔をチラリと見たモラレスの表情に悪戯っぽい表情が不意に浮かんだ。其の顔をヘンケンに向けて呟く。

「何なら口移しでもいいんじゃないぞ？ 何せ夫婦なんじゃからな。」

「なっ！ 何を」

からかう様なモラレスの発言に慌てふためくヘンケンの顔色が変わった。歳相応の余裕を失った瞳が大きく見開かれて虹彩が左右に泳ぐ。縋る場所を探す様に右往左往する視線を横目で眺めながら、微笑んだセシルがヘンケンの掌から飴を取り上げた。

「あなた、じゃあこれはあたしが、後で。」

静かに囁いたセシルの顔を複雑な表情で見下ろすヘンケン。其の視線をなぞる様に上目遣いに見上げるセシル。二人の間に流れる空気と意識の差を直感したモラレスが、彼だけが知るセシルの秘密を鑑みて心の中で呟いた。

“ やれやれ、セシル。お前さんも不憫な女じゃなあ。”

慌てたヘンケンがこれ以上の戦線の維持は不可能だとばかりに帰路への撤退を決意した。歴戦の指揮官を言葉一つでやり込めた老医師の顔をこれでもかと睨みつけながら、出口へと続く長い廊下で一歩を踏み出す。その時ヘンケンの体に小走りで走って来た二ナが正面からぶつかった。

「きゃっ！」

「おっと。」

屈強なヘンケンの胸板に跳ね返された二ナが尻餅を着いた。手の中に抱えていたファイルの束が盛大な音を立ててヘンケンと二ナの間の距離を埋める様に床へと散らばる。出会い頭の衝撃で頭を押さえながら蹲る二ナの姿を呆然と見下ろしていただけのヘンケンの表情が、次の瞬間には起こった事の全てを理解して狼狽に変わった。

「し、失礼。お嬢さん。怪我は無いかね？」



そう言いながら慌ててしゃがみ込んで足元に振り撒かれたファイ  
ルと中から飛び出した書類を拾い集める。一冊一冊を手の中で纏め  
ながら、それも多分ヘンケンの指揮官としての癖なのだろう  
彼の目は時折隙間から見え隠れする書類の内容を備に追っ  
ていた。

記載されている数字の羅列は恐らくモバイルスーツに関するデータ  
に間違いない。時間毎に変化する出力変動とそれを操作するパイロ  
ットの運用に関連する事項を記載した詳細なデータログなのだろう  
が、其の質量が桁違いだ。手の中へ収めることに重みを増す資料を  
盗み見ながらヘンケンは驚嘆を禁じ得なかった。其処にあるデータ  
量は自分が預かっていたどのモバイルスーツ部隊の解析データよりも  
分厚く、そして多岐にわたる項目で記述されている事が分かる。

そして膨大なデータ記録はたった三人のパイロットの物である事  
がヘンケンの驚嘆を加速させた。散らばった書類の海の波間に未だ  
漂う三枚の起動ディスクがヘンケンの推測の根拠となっていた。

「い、いえ、こちらこそ失礼しました。お怪我はございませんか？」

「  
ヘンケンと同じ高さに頭を下げ、周囲の書類を慌てて集める二  
ナ。ヘンケンに向けて言葉こそ掛けてはいるが、其の目はしきりに  
床の上を這い回っている。何かを探す二ナの姿と呟く様に謝る声を  
耳にしたヘンケンは収集の其の手を止めて、二ナの顔を見詰めた。

「……　　なんででしょう？」

ヘンケンの眼差しに気付いた二ナが手を止めて、ヘンケンの視線  
に向き合った。何処か人を寄せつけず、何処か人の情けを拒む。さ  
つき演習場のど真ん中で出会った少女と同じ、いや、彼女よりも遙  
かに温度の低い声を放った二ナに向ってヘンケンが尋ねた。

「いや、其の美貌の割には妙に冷たい声をお持ちの様だ。何か嫌な  
事でもあったのかと思ひましてね。思い過ごしでしたらご勘弁願  
いたい。」

ヘンケンには当人にも自覚の無い無邪気な悪意を言葉に込める癖

がある。嫌悪の面持ちを露にした二ナが彼の問いには答えずに視線を逸らして、無言でファイルの回収を再開した。“勘弁してくれって言ったじゃねえか”と心中で一人ごちたヘンケンにはばつの悪い表情を隠す事も無く。不器用な上官の背中に見兼ねたセシルが上体を屈めてそれを手伝う。

廊下にしゃがみ込んだ他の二人とは対照的に膝を軽く曲げて、立ったまま長い手を伸ばして二ナやヘンケンよりも素早く書類を集める姿は優雅としか表現しようが無い。其のセシルの手が四枚目の起動ディスクに触れたのは書類の海が引き潮を向かえて元の場所へと収まり、二ナがほっとした表情を見せて立ち上がった瞬間だった。

「あら、これ

セシルの足元に置き去りにされた3.5インチの透明な保護カバーに包まれたディスクを彼女のしなやかな指が拾い上げる。セシルの眩きを耳にして、セシルの手に視線を向けた二ナの表情が一瞬にして強張った。小さく息を呑んで立ち竦んで、笑えば愛らしく見えるであろう其の唇を小さく開いて戦慄わななかせたまま。

それはセシルの記憶の中に存在するどの機器 航空機から戦艦まで にも当てはまらない違和感を持つていた。最近作られた物にしては妙に古く、保存状態が劣悪だったのか所々カバーが欠けている。

其の状態でも恐らく起動には問題が無いのだろうが、それでも全てのモバイルスーツパイロットが脱出の際にこれだけは持ち出すと言われるほど重要な役割を担うディスクがこんな無残な形で存在している姿を彼女は見た事が無い。彼女の経験ではディスクの状態とパイロットの状態は比例しているのが常である。これ程ぼろぼろのディスクの中にデータが保存されているパイロットの損傷は良くて四肢の一部欠損。悪ければ、植物状態かあるいは。

興味を引かれたセシルの手がディスクを裏返して眺めた。それは単に好奇心から来た衝動的な行為に過ぎない。だが流麗な筆記体で書かれている擦り切れたローマ字を目の中に焼き付けたセシルは、

恐らく其のディスク内に保存されているパイロットの名前である事を予測して、そして物語る事実<sup>に</sup>戦慄を覚えた。

“！                    コウ・ウラキ。”

「                    返してください。」

懇願する様な二ナの声はセシルの好奇心の首根っこを掴んで引き戻し、現実のセシルの頭まで持ち上げた。

顔を上げたセシルの視線の先に強い意志を秘めた二ナの蒼い瞳がある。セシルに向って差し出された手が微かに震えて、それ以上の言葉を紡ぎ出せない二ナの口が小さく開かれたままで。『傷だらけのディスク』を境に変化する一人の女性の表情の変遷を目の当たりにしたセシルの手が二ナの勧めに従う事をほんの僅かな間、躊躇した。

セシルの思考回路に侵入した微かな違和感が、そして二ナに対する更なる好奇心が手を止めた理由だった。セシルの頭の中で渦巻くコウに対する疑問を解析する最後の鍵が、彼女の手の中のディスクに封印されているような気がしたのだ。まるでロゼッタストーン<sup>の</sup>解読に最初に成功したトマス・ヤングの閃きの様に。

感情を殺しきれずに震える蒼の瞳を見詰めるセシルの漆黒。自分の取った理不尽な行いに対する二ナの反応を見逃すまいと五感の全てを総動員して、手を差し出したまま彫像の様に固まる女性の観察に当たろうと。

「お、おいセシル。どうした                    」

両者の間に流れる不穏な空気の板ばさみに遭ったヘンケンが思わずセシルに声を掛けて振り返った。だが視野に入ったセシルの表情はヘンケンの口から言葉を奪った。

嘲っている。其の顔は自分の妻として偽装されたセシル・ベツケナーではない、自分の絶大な信頼を欲しい俣に操る、セシル・クロトワの顔。弥勒菩薩を思わせる『古拙微笑』<sup>アルカイタマイル</sup>でありながら、爛々と輝く虹彩が彼女の慈愛を否定する。幾多の修羅場を鬼神の如く駆け巡って生き残った戦士としての顔が、あろう事か民間人上がりの軍

属の。それも初対面の女性に向って叩きつけられていると言う事態にヘンケンは少なからず動揺した。

だが、ヘンケンは湧き上がる動揺を表情には表さない。何故なら彼は其の顔をしたセシルの事を他の誰よりも深く理解していたからだ。

セシルが状況を弁えずにそんなことをする事は有り得ない。彼女がそうするならば、其処には彼女がそうしなければならぬ何らかの意図が必ず介在している筈なのだ。

彼女の行動や言動の全てに於いて絶対の信頼を寄せているからこそ自分はセシルの上官である事が可能であり、セシルは自分の副官として傍に居続ける事が出来るのだ。過去も、今この時も、そして未来に到るまで。

三人を包む不穏な無言の空間は静寂と言う名の空白を孕んで、傍で観客として見守るウェブナーとモラレスまで巻き込んで領域を拡大する。ほんの数秒の沈黙が齎す静止画像の舞台劇が、絞り出す様な二ナの台詞で色を戻して動き出す。

「お願い……………返してっ。」

懇願や依頼等と言う怯情きやうだ交じりの声ではない。セシルに向って放たれた言葉は強制を孕んだ威嚇に満ちている。

セシルの漆黒を跳ね返す様に燃え上がる、蒼の中の緋。セシルに向けられている筈の敵意の視線は熱を孕んで、対峙する二人の間に立つヘンケンの表情を歪ませた。当てられて目を細めるヘンケンの小さな視界の中で動き出すセシルの手。

ヘンケンの副官の表情を収めたセシルが微笑んで、二ナの前へとディスクを差し出した。軽く小首を傾げて二ナに向う姿はまるで動物に餌を与えているかの印象をヘンケンに与える。しかしセシルの顔が微笑みを取り戻した時点で、彼女の二ナに対する何らかのトライアルが終了したと言う事実もヘンケンの意識の中に確認された。

無言で差し出されたディスクを、無言で引っ手繰る二ナの手。大事そうにファイルと共に胸に抱えて一礼を返してきたのは、彼女に

残った大人としての礼儀の一欠けらのなせる仕草だったのだろう。狭い廊下に散らばる四人の間を摺り抜けて廊下の先へと足早に立ち去る二ナの影。

ウェブナーに促されて後を追う警備兵の背中と共にその後姿を見送りながら、ヘンケンが重い空気に耐えかねた様に呟いた。

「なんだ、ありゃあ。……ウェブナー、お前も色々大変だな。つくづくご同情申し上げるぜ。」

後頭部を軽く掻き上げながら顔を顰めた。

「この基地で働く女性に遭ったのは彼女で二人目なんだが……まあ、何と言うか個性派揃いの性格と言うか何と言うか。ひよつとしてお前の趣味なんじゃねえだろうな、“ツンデレ”つつうのか？

あれ。」

「勘弁してくださいよ、中佐。この歳でそれは色々無理です。それに意味も間違ってます。」

「彼女は？」

二ナの影が消えた後も何かを追って廊下の先を凝視するセルシが、二人の会話に割り込んで来てウェブナーに尋ねた。柔らかい口調ではあったが、其処にヘンケンの副官としての義務を果たそうとするヘンケンも恐らく彼女の名前は知りただろう。セ

シルの声音を感じたウェブナーは、司令官室で行われた議論の時の口調で答えた。

「二ナ・パープルトン技術主任。民間からの囑託と言う形でこの基地の技術開発部に在籍しています。再建当初からの配属ですので、何故此処に居るのかと言う事までは分かりません。調べては見たのですが」

「また、『お上の意向』って奴か。密室政治なんぞ何処の時代の遺物を再現しようとしているんだ？ ジャミトフは。」

「しょうがないですね。」

ヘンケンの毒舌に首をすくめたウェブナーが説明した。

「この基地を再建した連中は『立ち上げ』専門の連中だったんで、

基地がある程度の体を為した時点で皆逃げる様に帰ったそうですよ。ですから再建当初から残っているメンバーはモビルスーツ隊の隊長と整備班長、彼女とコウ・ウラキ伍長、後陸戦隊員が何名か。ジャブローに記録されている彼らの軍籍は公式では抹消されて、全てこの基地からが最初になっています。」

「軍籍の改ざんか？ 益々胡散臭い連中だな。」

「それだけ勢力が強大になっていると言う事でしょう。彼らの過去を知りたければ」

「レベル5のアクセス権限が、必要？」

セシルの問い掛けに無言で頷くウェブナー。

「推測ですが多分それ以上。恐らくはジャミトフに近い者に限定されるでしょう。彼らが過去に何をやったのかは知りませんが。」

「じゃが、この基地に来てからの事なら、分かる。彼女はウ

ラキ伍長が予備役に編入される前まで付き合っていたんじゃよ。」

不意に放ったモラレスの発言に目を見張るヘンケンとセシル。二人の無言の問い掛けに小さく頷いたモラレスが言葉を続けた。

「そんなに驚かんでも、この基地では公然とした事実じゃ。何せ世間が狭いからのう。じゃがモビルスーツ隊の隊長と整備班長、そしてウラキ伍長と二ナ君はこの基地に赴任する前からの知り合いだと聞いておる。それ以上の事は本人達が頑なに喋ろうとはせんがね。」

「一山幾らの叩き売りにあつたと言う訳か、市場の<sup>マルシェ</sup>苳じゃあるまいし。で、ドク。情報はそれだけか？」

角ばった顎を指で摘みながら疑いの眼差しでモラレスの顔を見据えるヘンケン。あらぬ嫌疑を掛けられたモラレスが其の視線を跳ね返す様に上目遣いで睨み付けた。

「それだけに決まっとるじゃろう、医者の仕事は何と勘違いしておる？ …… この儂を疑うとはいいい度胸じゃ、ヘンケン。何時からお主は死んだ儂の親父になりおつた？」

売られた喧嘩を安値で買い叩くモラレスと買い叩かれて憤慨する

ヘンケンとの間で飛び交う視線に火花が散る。割って入ったウエブナーが二人の視線の艦砲射撃に被弾しながら間を取り成さなかったら互いの一族の成り立ちにまで言及する醜い口喧嘩がまたぞろ勃発する所だ。

だがウエブナーの挺身とセシルの機転が二人の開戦を未然の所で食い止めて、四人は其の代償として別れの挨拶を交わす事無くその場を後にする羽目になった。怒りのやり場の収まらないヘンケンが肩越しに、背後の激昂した老医師の罵声に舌打ちしながら言った。

「ドクの野郎、絶対何か隠していやがる。上官に向って隠し事とは軍医の風上にも置けねえ奴だ。」

「あら、艦長。何時から軍務に復帰為されたのですか？ そうならそうと早くおっしゃって頂ければ良かったのに。それなら私も『あんな』回りくどいやり方じゃなくて、直接お二人を止める事が出来た物を。」

セシルの言う『回りくどいやり方』を思い返してヘンケンが怒りの視線をセシルへと向けた。だが其の口から吐き出される筈の恫喝は上手く形にならずに、吃音交じりの言葉に変わった。

「お、おっ、お前があ、あん、あんな事を仕出かすからだな、俺の言いたい事がこれっぽっちも言えずにドっ、ドクの」  
「私の胸、意外に大きかったでしょ？」

セシルの表情が妖艶な色を浮かべてヘンケンに向けられた。

ドクとヘンケンの度重なる紛争に立ち会い続けたセシルは幾度目かの和平工作の失敗の果てに究極の手段を考案していた。それは自分の体を武器にヘンケンの全ての機能を凍結すると言う、ヘンケンに言わせれば余りに不埒な女の技。セシルの手練手管に対して否定的な評価を下していながら今回も、ドクに向って獣の様な唸り声を上げようとしたヘンケンは其の二の腕に押し付けられたセシルの胸の感触を認識した時点で、セシルの読み通りに全ての機能を麻痺させてしまった。

「ばっ、ばか、お前何言ってるんだ。上官をからかうのもいい加減

にしる！」

「だから、夫婦ですつてば。あ・な・た。」

にこりと笑ったセシルの表情がヘンケンの恠気を押さえ込む。何も言えなくなつたヘンケンの視線から避ける様にセシルは二歩下がって静々と歩き出した。ヘンケンの怒りを収める事に成功したと悟つた時点でセシルは自分の役割に忠実に戻る。その一線の引き方の巧みさもヘンケンやウェブナーから一目置かれるセシルの身の振り方の特徴でもあつた。

セシルを背後に従えて長い廊下を出口へと向うヘンケン。其のヘンケンが何かを思い返した様に、後頭部を掻きながらセシルに呟いた。

「しかしなあ、幾ら難にも稀な美人と言つても俺は御免被りたいね。あの性格のキツさは普通の男には御しきれんぞ。まあ、ウラキ君が彼女と別れたいが為に予備役の道を選んだとしても俺は諸手を上げて賛成するね。大体初対面の人間　それも民間人の好意をあらんな顔で睨み付けるなんて人としてどうかしてると思うぞ、俺は。そうは思わんかセシル？」

突然、セシルの足が止まつた。

「『彼女と別れたい』」

ヘンケンの台詞の一節を口にしたセシルの変化にヘンケンが気が付いたのは二三歩先に歩いての事だつた。シンクロしていた二人の歩調が乱れた事を知つたヘンケンが思わずセシルを振り返る。

「セシル？」

ヘンケンの目に映るセシルはその時自分の思考の中に溺れる哲学者の様な顔で足元を見詰めている。これ程何回もセシルが一つの事を考え込む顔を見る事はヘンケンにとつても久しい経験だ。最後にセシルのそんな顔を見たのは、ア・バオア・クー宙域から民間人を連れて脱出する時以来だろうか。敵味方が入り乱れて不毛な殺戮を繰り返す地獄の海原を、武装を降ろして避難スペースに当てた『スルガ』を操艦一つで切り抜けた時の事を思い出して郷愁に駆ら



れる。

だがヘンケンにはそれと同時に違和感もある。

それはこの場所が二人が戦いに日々を費やした戦場でも宇宙でもなく、戦争の終わった平和な地上であると言う事。自分の身を脅かす要素の何一つ無いオークリー基地の廊下の片隅で思考を飛ばすセシルの顔を、ヘンケンは沈黙を守って見守った。其のヘンケンの心遣いに気付いたセシルが、不意に視線を上げる。

「……やはり貴方は私の見込んだ『ヘンケン艦長』ですわね。艦長の根拠の無い回答にはいつも驚かされます。」

文面だけから推測するならばそれはただのからかい言葉にしか過ぎない。だがセシルの黒い瞳はヘンケンに対する尊敬の念を顕すかのように、薄暗い廊下の照明を受けて輝きを増している。

「彼女が……二ナ・パールトンがウラキさんの心の何処かの時かれた種に関係していると言うのなら。それが二人の別れた大きな理由なのかも知れないですけど、それさえ分かればウラキさんの矛盾の全てが　彼がモビルスーツを離れた理由が。いえ、離れなければならなかった理由が分かりそうな気がするんです。」

「彼女が？」

あからさまな疑問の表情がヘンケンの顔に浮かんだ。二ナの目から迸った敵意はヘンケンにはなくセシルに向けられたものではあったが、其の光景をまざまざと思い出して呆れた声で言った。

「手伝ったお前に対してたかがディスク一枚渡す渡さないであれだけ失礼な態度を取った彼女が、鍵を握っている？……なあ、セシル。お前の人を見る目を俺は信用してはいるが、今回ばかりは少し間違っているんじゃないのか？人の好意を仇で返す様な奴にそんな物を求めてどうする。」

否定的な立場でセシルに尋ねるヘンケンの顔をじつと見詰めるセシル。上官に疑問視された自分の能力を釈明する様に答える。

「そんな事は無い。私はウラキさんと艦長が『同類』の『やぼてんだと分かっていますもの。』」

「や、『やばてん』だと？」

コウと同列に置かれた事よりも部下に『野暮天』だと揶揄された事に驚きを隠せないヘンケン。つかつかと歩み寄ってヘンケンの顔の直ぐ傍まで自分の顔を近づけたセシルが言った。

「そう。彼女のあの目の意味が分からない艦長も、ウラキさんと同じく女心の分からない『野暮天』だと申し上げたのです。ご自分で自覚してらっしゃらないのですか？」

お互いがその気になれば唇同士を触れ合わせる事の出来る距離にある二人の顔。だがヘンケンは挑発的に構えるセシルの表情と視線を上官としての顔で睨み付けた。

偽装とは言え上官である以上、部下であるセシルに対しては毅然とした態度で振舞わなくてはならない。一分の隙も見せないヘンケンの視線が至近距離にあるセシルの虹彩を視神経まで揺さぶる様に貫いた。

「セシル少佐、上官として貴官に説明を求めよう。お前から見てパルプルトン技術主任の目は何を物語っていた？」

その男の部下にしか与えられない眼光を浴びたセシルの感情が喜びに震える。

やはり、この人はこうでなくては。

農夫の姿で畑に立つ精悍な姿も棄て難くはあるが、やはり私にとつての『ヘンケン艦長』は誰よりも豪胆で、裂帛の気迫を放って人を従える。全身から滲み出る、指揮官として絶対不可欠なオーラを纏い続けるヘンケン・ベツケナーという艦長。彼に対する尊敬と憧れこそが私に連邦宇宙軍暫定旗艦『ホーライ』艦長と言う立場を棄てさせた、唯一つの理由。

セシルの長い睫毛がヘンケンの気迫に屈服した様に静かに閉じる。自分の気持を悟られない様に瞼で瞳を包み隠したセシルが僅かに微笑んで静かに答えた。

「あの目は『嫉妬』ですわ、艦長。」

「も、ダメ。頭ん中数字がぐるぐる回ってるウ。」

アデリアが夕食の乗ったトレイの前に額を預けて突っ伏した。其々の手に握ったナイフとフォークをふるふると震わせながらそのまま床にまで沈み込みそうな上体を辛うじて支えて呟いた。

二ナの講義は其々に優秀な成績で士官学校を卒業した二人の学習能力を持ってしても理解出来ないほど難解且つ熾烈を極めた。ブリーディングルームのホワイトボードに書き連ねられる大量の数式と対応するコンピューター言語とそれに付随する操作説明。技術主任としてオペレーションシステムの内容を完全に把握している二ナにしか出来ない講義ではあったが、それをこの場で把握しろと言われた所でパイロットである二人には無理な相談であった。

モビルスーツの動作は基本的に予め組み込まれた動作パターンによって行動するようにプログラムされている。例えば火器管制をアクティブにすれば正面のモニターに照準用のレイトイクルが表示されるが、その時には火器を握った手が自動的に上がる様になっている。機能の強化によって煩雑になるパイロットの手順の負担を少しでも軽減する為のオペレーションシステムではあったが逆にその事はパイロットの操作の独創力を奪う事になる、と講義を始める前に教鞭を取った二ナは言った。

故に今回の二ナの講義はオペレーションシステムを切った場合での操作手順の説明となった訳だが。

「大体さあ、非現実的だと思わない？ 今のオペレーションには“マニュアル”が存在しないんだよ？ それなのにわざわざマニュアル状態を仮定したモビルスーツの操作説明をされても、ねえ。足元の石ころ一つ拾うのに両手両足ばたばたさせて操作しなきゃなんないなんて、何処のロックバンドのドラマーよ。」

「ん？ ああ……。」

アデリアのぼやきに上の空で返事するマークス。むっとしたアデリアが顔を上げると、向かい側に坐ったマークスは目の前にある食事にも付けずにしきりに両手を動かしている。見るからに落ち着

きの無い 入らない  
自分の話に全く感心の無い態度を取った事も気に  
入らない マークスの足をアデリアの爪先がテーブルの影で  
蹴り上げた。

「痛ったつ！ 何するんだアデリア。仮にも上官だぞ、俺は。」  
「ふんだ。『食事の時位は和氣藹々あゐあゐと無礼講で』って最初に言った  
方はどなたでしたっけ？ マークスこそ何よ。あたしの話を今日は  
ちつとも聞いてないじゃないっ。士官学校の主席様はそんなにいい  
子ちゃんぶってうらなり道を極めたって訳？」  
「あ、これが。」

アデリアの憤懣の原因を自分の手の動きにあると知ったマークス  
が軽く笑った。本来ならば部下であるアデリアの取った態度の対し  
て何らかの叱責を与えても憚られる事は無い立場のマークスではあ  
ったが、不思議と一度もアデリアに対してそんな素振りを見せた事  
は無い。色彩の違う左右の瞳がアデリアのむくれた顔を眺めて言っ  
た。

「これは今日の講義とは関係ないよ、俺の癖みたいな物。それに主  
席を取ったのは結果論だよ。皆からのいじめに対抗する為に、仕方  
なく。」

そう言いながら何事も無かったかの様に食事を再開するマークス。  
赤ワインで柔らかく煮込まれた野ウサギの腿肉をフォークで突き刺  
して口に運ぶ。口の中でほぐれていく肉の繊維と染み出す旨味に顔  
を綻ばせながら咀嚼を続けるマークスを見て、アデリアが呟いた。

「……ごめん、マークス。言い過ぎた。」  
「いいよ、アデリアの話聞いてない俺も悪い。……で、何だ  
っけ？ マニユアル操作が非現実的だった？」

尋ねるマークスの目の前でアデリアが手の中のフォークを宙で振  
りながら言った。

「そおよお。デフォルトで設定された動作パターンが720種類、  
そこに普段の演習の自律学習モードで認識されるパイロット独自の  
動作パターンが加われれば戦闘行動には何の支障も無い筈よ。なのに

何で今更そんな七面倒臭い事を

「でも、俺達はキース隊長に負けた。それも『俺のザク』に初めて乗った隊長に、だ。」

事の発端は全てマークスにある。賭けに負けた代償の延長戦を戦ったアデリアに向って罰ゲームの顛末を、まるで他人事の様語るマークスの顔をアデリアが歯をむき出して睨み付ける。怒った顔でも愛らしさが損なわれる事の無いアデリアの顔を笑いながら見詰めるマークスが言葉を続けた。

「そっか、アデリアは見てないからな。……隊長、ザクで走って射線から逃れたんだぜ。信じられるか？」

ぼつりと言った其の言葉こそ如何に非現実的であるかと言う事はモビルスーツパイロットにしか分からない。ジェットやホバー等ではない『通常動作』によって銃撃を躲す事が本来に出来るのだろうか？ 何個ものモーターとアクチュエーターを伸縮させる命令を瞬時に発令し、きちんと目的を持って秩序正しく機体を制御する事等、本当に？

アデリアの脳内でその時の動作手順がタイムテーブルを伴って何通りも再生される。答えは何れも不可能、ネガティブ幾ら考えても見事なまでに蜂の巣にされる自分の機体しか思い浮かばない。

「……本当？」

目を見張って恐る恐る尋ねるアデリアに向って頷くマークス。アデリアのトレーの中に自分のデザートを、今日一日自分につき合せた事を侘びる様にスプーンで寄越しながら言った。

「あれが多分OSを介さない『マニュアル』モードって事なんだと思う。多分隊長はマニュアル操作に慣れているんだ、と言うかマニュアルで戦わなくてはならない状況に、常にいたって言うか」

「で、あたし達にもそれをやれって言う事を二ナさんは言いたい訳？」

「やらなきゃ、俺達は自分も守れない。隊長も死ぬ。……そう

いう事だよ。」

モウラの放った危惧を再び口に出して結論付けるマークス。観念した表情のアデリアがようやくトレーの中の野ウサギの赤ワイン煮込みに手を付けた。

カリフォルニア州周辺は世界でも有数の葡萄の産地として知られている。アイランド・イスラフスによる被災を免れたブドウ畑は現在でもワインの原料となる良質の葡萄を産出し続け、其の恩恵はこのオークリー基地にも届いていた。ピノ・ノワール種で作られるブルゴーニュワインに似た赤ワインは常に地下の倉庫に保管されており、野ウサギの煮込みには必ずといっていいほどのワインが、惜しむ事無く投入される。

赴任当初には言葉だけでも気分を悪くしていたアデリアだったが、意を決して　　マークスの強い勧めもあつたが　　一口口

に入れた途端にたちまちこの料理の虜になった。野趣溢れる野ウサギの風味とワインのコクが口の中で渾然一体となる瞬間は筆舌に尽くしがたく、今まで自分が食べたどの料理にも無い陶酔感がある。

最もそれは一目でコックとは思えないほどの上背と体格を持つ、豪快な性格で知られる巨漢のコック長が持つ繊細な業の賜物だと気付いてはいたが。

肉を切り分けて

ナイフ等必要無い

口に入れた途

端にアデリアに浮かぶ至福の顔。

「……　これを水で流し込まなきゃいけない自分の立場に罪悪感を覚えるわ。ほんと、グレゴリーさんていい腕よね。」

「全くだ。いろんな基地を回ってきたけど、此処の食堂だけは超一流だ。民間人だって聞いたけど、何処の店にいた人なんだろう？」  
「楽しそうだね、二人とも。」

二人の会話の間に突然割り込んで来る若い男の声。二人が顔を上げるとアデリアの直ぐ傍に東洋人の顔立ちの、眼鏡を掛けた男がにこやかな笑顔で立っていた。面識のあるアデリアが笑いながら片手を上げて、隣に坐る様に促した。アデリアの隣の椅子に腰掛けなが

ら初対面のマークスに向って右手を差し出した男が言った。

「初めまして、マークス軍曹。自分は司令部付きのシステムエンジニア、ルオ・チェンと言います。アデリアからお噂はかねがね。」

言葉の端々にマークスなりの疑問符を貼り付けながら、それでも笑顔で握手を交わすマークス。技術職の人間が漂わせる独特の線の細さは隠し切れないが、それでも何処と無く人懐っこい笑顔と声音の柔らかさはマークスの心中にある警戒心を解くには十分だった。

挨拶を済ませたチェンが徐にアデリアの隣に坐って、改めて尋ねた。「それで？ 今日此処に僕が呼び出されたのはどういうご用件かな、アデリア姫？」

「姫、だつて？」

「五つ蠅い、マークス。…… チェン、コウ・ウラキ予備役伍長つて知ってる？」

二人分のデザートを口に運びながらアデリアが尋ねる。何の変哲も無いバナラムースなのだが、手作りはやはり美味しい。知らずの内に綻ぶアデリアの顔を眺めながらチェンが答えた。

「ああ、遭った事は無いけどデータと噂だけは。で、その人がどうしたの？ パーソナルデータの閲覧なら管理部を通せば演習記録以外の物が手に入るけど。」

「演習記録以外？ 何で演習記録だけが手に入らないの？」

パーソナルデータとは個人の戦闘能力を数値化して記録した物だ。其の中でも特に重視される物が演習時の戦闘記録である。有事の際に借り出される非常勤の予備役兵の貴重なデータが閲覧出来無いと言う事は、戦闘時のフォーメーションを組むのに支障が生じる恐れがある。どれだけの能力が、どういう適性があるのかも分からないのにコンビネーションを組む事等は出来ない。長距離狙撃に適性のある兵士を最前線で戦わせれば、結果は日を見るより明白だからである。

「さあ、其処までは僕にも。でも何人か予備役登録の人がいるけど皆同じ扱いだよ？ 閲覧には司令の許可が必要。ま、穿った見方を

すれば『そんな者この基地には必要無い』って事なんじゃない？」

「ふーん、まあいいわ。で、」

突然前屈みになってチェンの方へと体を寄せるアデリア。チェンの体が彼女の動きに合わせて微かに揺れた。

「其のウラキ伍長なんだけど、軍歴を調べて欲しいの。軍に入隊時から現在に到るまでに参加した作戦やら行事やらイベントやらを詳しく、全部。」

周囲に聞えない様に小声で話すアデリアの顔を、ほんの少しの猜疑心とそれ以外を埋め尽くした好奇心で見詰めるチェン。次の瞬間にマークスの方をチラリと見て尋ねた。

「調べるのはお安い御用だけど、それは上官の許可を得ての事だよ  
ね？」

「それは大丈夫です。私が許可しました。」

それがアデリアの独断ではない事を証明する為に、マークスが強い語調でチェンに言った。上官であると言う事を強く滲み出させたマークスの意志を感じ取ったチェンが、今度はマークスの方へと体を向けた。

「了解しました、軍曹殿。正式なご依頼と言うのであれば断る事は出来ません。近日中に結果を軍曹の元にお持ちします。」

「なによ、頼んだのはあたしじゃない。何でマークスの所に持って  
くのよ？」

除外され掛けた事に憤るアデリアに向かって軽くウインクをするチェン。

「コンビなんだから二人で見ればいいじゃない。それにさ  
そう言うってチェンはアデリアの耳元を手で隠して呟いた。」

“二人だけの秘密なんて、いい口実が出来たじゃないか。”

其の言葉はアデリアの血圧を一瞬で最大にまで上昇させた。火を噴きかねないほど赤面した顔を正面に坐るマークスに見られない様に素早く振り返るアデリアに向って、何も気付かなかったマークスの無頓着な声が届いた。



「お、おい、アデリア。どうしたんだよいきなり？」

「う、ごめん。ちょ、ちょっとムースが喉に痞えて」

わざとらしく咳き込むアデリアを横目にチエンが如何にも愉快だと言わんばかりの視線を投げ掛けた。其のチエンの顔を同じ様に横目で睨み付けるアデリア。二人が繰り広げる喜劇の一シーンを不思議そうに眺めるマークス。三者三様の表情をした関係の繋がりを断ち切る様にチエンが腰を上げた。

「じゃあ、僕はこの辺で失礼します。あ、アデリア。この前の借りがあるから今回の報酬は無しでいいよ。」

チエンが投げ掛けた言葉に肩を震わせて咳を止めるアデリア。台詞の中に聞き捨てならない単語の存在を認識したマークスが、にこやかに笑うチエンに視線を上げて尋ねた。

「報酬ですか？ それはどういう」

「よろしかったら差し上げますよ。」

チエンが懐から一枚の写真を取り出してマークスに差し出した。促されるままにそれを手に取るマークス。チエンの台詞に心当たりのあるアデリアが其の一部始終を顔を上げて凍り付いた表情で見詰めた。

チエンに手渡されたそれは一枚の写真、それを見たマークスの顔がほんの少し前にアデリアが起こした症状と同じ、高血圧による赤面状態に陥った。

「こ、これは……」

紛れも無くアデリアだった。それも胸元に『HOOTERS』（アメリカの男性に大人気のお色気レストラン）のロゴをあしらったタンクトップとショートパンツを纏って、恥ずかしそうにポーズを取る彼女の姿。

「きゃあっつっ！！」

全てを察したアデリアが食堂全体に響き渡る叫び声を上げて飛び上がり、猛禽類の勢いでマークスの手から写真を雀り取った。あまりの声に食堂に居合わせた全員が何事かと三人へと視線を向ける。

事の経緯を知る為に沈黙する食堂の空間の中をアテリアの震える声が飛び回った。

「な、ななな、何で、あんたがこっ、これ、これ」

正常に作動しない言語野をフルに活用しても尚、言葉にならない台詞を投げ掛けるアテリアに向って、チエンがにこりと笑って言った。

「まだあるよ。この写真では儲けさせて貰ったから大事に取ってるんだ。今までのデータも全部。……何ならマークス軍曹に

」

「消しなさいよっ！ 消さないって言うんなら今からあんたの部屋に行つてご自慢のサーバーごとぶっ壊すわよっ！」

「どうぞどうぞ。だってデータの保管場所は此処じゃ無いもの。もつと意外な場所に隠してあるから、探しても無駄だよ。」

そう言い残して手だけを振って食堂を後にするチエンの後姿を、真っ赤な顔で歯軋りをしながら睨み付けて見送るアテリア。わなわなと震える肩を、同じ様に真っ赤な顔をして見詰めるマークスが声を掛けた。

「な、なあアテリア。さっきの写真なんだけど」

「は、はひっ!? な、何でしょう？」

引き攣った声で返事をしながら、思わず敬語を使って振り返るアテリアに向って、伏目がちに視線を落としたマークスが尋ねた。

「お、お前さあ。そ、その」

アテリアの心臓がばくばくと高鳴る。写真についての感想でもマークスの口から出ようものなら其の速さはドラムロールの域まで跳ね上がるだろう。途轍もない羞恥とほんの僅かな期待に高まる胸を押さえながらマークスの言葉を待つアテリアに向って、マークスが呟いた。

「フーターズで働いた事が、あるのか？」

刹那、アテリアの何処かでスイッチが入った音がした。ブレーキも掛けずにバックギアに入れてしまい。あまつさえそれが繋がって

しまった様な感情の逆転がアデリアの脳内に吹き荒れる。言葉を失ったまま立ち尽くすアデリアに向って、自分に見れば割りとう気の利いた台詞で状況を打破出来たと悦んでいるマークスの惚けた声が飛び込んで来た。

「？ アデリア、おい」

「…… バカッツ！！」

大きな声でマークスを罵倒したアデリアが、いきなりくるりと踵を反して足早に食堂の出口へと歩き去った。

彼女に何事が起きたかを全く理解できないまま、呆然と後姿を見送るマークスの周囲を再び食堂の喧騒が取り囲む。事態の決着を見届けた無責任な観客は役者の退場によって終劇の到来を確認したのだ。ポツリと其処に取り残されたマークスは目の前に置き去りにされたアデリアのトレーに自分のトレーを重ねて、自分もこの空気の中から退場しようとして焦りながら立ち上がった。

周囲の好奇の視線に晒されながら使用済みのトレーを厨房の返却口へと置くマークス。其の視線の先に洗浄機の前で腕組みをしてマークスの顔を眺める巨漢の男がいた。物も言わず視線を送るグレゴリーの顔を見上げたマークスが、何か言いたげな彼の瞳に気が付いて、思わず尋ねる。

「グ、グレゴリーさん。何か？」

「…… ばーか。」

言葉の内容とは裏腹に彼の鈍感さを哀れむ様な視線を向けたグレゴリーが、マークスの手から食器を受取ってシンクの中へと放り投げた。

秘められた想い（後書き）

事情により「Mother Goose Brigade？」  
と「？」を部分改稿させていただきました。

事情の説明と経緯は活動報告にて詳細を記載しておりますので是非、ご一読戴けたらと思います。

お手数をお掛けして本当に申し訳御座いません。

穏やかな間接照明の光に浮かび上がる質素な部屋。

個室こそ士官に宛がわれてはいたが予算の無いオークリー基地では内装等に金を掛ける余裕は無く、調度品の陰に見え隠れする剥き出しのコンクリートの壁が常に稼働し続ける空調機よりも冷たい空気を、集う二人にいつも感じさせる。

枕元に置かれた煙草にキースの手が伸びて、手探りで抜き出して火を点けた。横たわったまま点火されたオイルライターの炎が彼の周囲よりほんの僅かな温もりをキースに与えて、寄り添う様に横たわるモウラが、輝きに魅入られるキースの横顔を眺めながら尋ねる。「ねえ……」

モウラの声がキースの指を動かした。カチンと言う音と共に閉じられた蓋が二人の世界に生み出された灯りと温もりを遮断する。見届ける様に眺めるキースはモウラの顔を横目で眺めながら、無言で問い掛けの続きを促した。

「何で昼間、あたしを止めたんだい？」

再びの沈黙が二人の間に流れる。お互いの目を触れ合える距離で見詰める其の行為を、キースは突然何かを回想する様に冷ややかな天井を見上げて呟いた。

「モウラ、トリントンの事覚えてるか？」

キースの示唆は勿論初めて二人が出会い、そして自分達を戦火の渦へと否応無しに巻き込んで言った『デラーズ紛争』勃発の日の事である。モウラは微かに笑いながら、悲しい記憶と甘い記憶の入り混じったその日の事を思い浮かべて言った。

「忘れる訳が…… あんたとあたしが。そしてコウと二ナが初めて出会った日。忘れる訳が　　ううん、忘れられない。」

モウラの言葉がキースの中の記憶を呼び覚ます。そうだ、その日は俺とコウにとっても忘れる事の出来ない特別な日。掛替えの無い

物を手に入れる切っ掛けになった日。そして。

それを手に入れる為に掛替えの無い物を、一人の男の手によって奪われた特別な日。

「二ナさんから後で聞いたんだけど、コウ、アレン中尉の遺品を整理すると言われただろ？ …… あいつ、アレン中尉の部屋で口ツカーの片づけしながら泣いてたってさ。」

思い出す様に呟くキースの横顔をじっと見詰めるモウラの瞳。其処に視線を宛てながらモウラの心はキースと同じ過去へと遡って記憶の映像を映し出す。

オーストラリア方面軍トリントン基地所属のモビルスーツ部隊が三名だけを残して壊滅したあの日。無傷で帰還したのはコウの搭乗したガンダム一号機のみで、キースのザクは頭部を切り飛ばされて辛うじて動く程度。彼らを預かっていた指揮官のバニング大尉に到っては敵の重モビルスーツと刺し違えた拳句に右足脛部の骨折と言ふ被害を被った。

だが彼らが戦った相手の正体からすればそれは奇跡の仕業に違いない、とモウラは今でも思う。彼らが戦った相手はジオンの中でも『干サインザボール最後の切り札』と呼ばれた通称『ソロモンの悪夢』、アナベル・ガトー率いる強者の集団だったのだから。

あの時失われた兵士の中にもしキースが含まれていたなら、二人はこうして此処にはいない。自分の元へとキースを送り届けてくれた何某かの力に人知れず感謝の麗辞を心の中で呟きながら、モウラはキースの言葉の続きを待った。

「ガトー相手に生き残った事が奇跡だったのに、コウの奴 …… あいつ昔からそうなんだよなあ。何かやな事あると直ぐに自分を責めて、抱え込んで。」

「でも、その辛さや試練と真正面に向き合ってから初めて乗ったガンダムでも、あそこにいたパイロットの誰よりも上手く操る事が出来た …… 違う？」

モウラの言葉はコウ達がトリントン基地に帰還した直後に二ナか

から見せられた、一号機の起動ディスクに刻まれた初動記録パーソンデータに由来する。

ガンダムゼライランサス一号機はロールアウト時の慣熟運転の後にトリントンでいきなり予期せぬ実戦を迎えた訳だが、其の機動性と出力は恐らく当時連邦軍に存在したモビルスーツの中でも別次元の性能を誇っていた。故に試験運用をトリントン基地で実施するに当たりアナハイムは機動核となるバーニアのみを先行して送りつけ、テストパイロットのジムに取り付けてある程度慣れてもらってから試験に入ろうと考えていた。またその際に記録される其々のテストパイロットのデータが、一号機のテストに適したパイロットを選ぶ基準になる事はアナハイム内クラブワークスで検討された既定事項の一つであった。

二ナの予想ではそれでも恐らくパワー・ジムと一号機の間には瞬間駆動率と反応速度に格段の差が存在するから、恐らく試験当初の段階では其の性能の半分も引き出せ無いだろうと予想していた。

しかしその時取り出されて解析されたコウの起動ディスクには  
「あたしも長く整備士やつてるからあの数値の異常さはよく分かる…… キース達はそれまでザクに乗ってたんだろ？」

「S7（連邦宇宙軍機動兵器学校：Earth Federation Space Force Fighter Weapons School）ではこれでもジムに乗ってたんだぜ。もつとも専ら必要の無くなった陸戦用ばかりだったけど。俺はトリントンでザクに乗った時『こんな乗りにくい機体はいやだ』と思ったけど、あいつは子供みたいに喜んでたなあ。動かしてる気がするとか何とか騒いでたっけ。」

「それ、何となく分かるわ。コウは『モビルスーツマニア』だもんね。二ナもあの時言ってたわ、『何あの人、あたしのガンダムを無断でじろじろ眺めて』って。」

仄かな明かりの下で其の光景を思い浮かべて笑う二人。だが其の笑顔を翳らせる過去と言う名の記憶。

「あいつ、不器用だからさ。」

ポツリと呟くキースの、コウに対する一つの評価が二人の表情から暖かな笑みを消した。

「……自分の気持を上手く相手に伝えられないんだ。それに自分の気持にも気付かない。……何も変わって無いよ、コウは。少なくともあの時の目だけは昔のまんまさ。」

「じゃあ、あんたはコウの気持が分かっているって言うのかい？」  
責める様に訴えるモウラの言葉はある種の嫉妬を孕んでいる。あの戦いを通じて深く知り合った二人の間にも分からない事がある。モウラには自分に分からない事が自分の愛する男にだけは理解出来ていると言う事に一抹の悔しさを覚えた。

「全部じゃないさ。でもコウがああ言う言い方をする時は決まって自分ではどうにも出来ない事があつたって言う事さ、アレン中尉の戦死と同じ様に。それにあの目は」

キースの目が天井から壁際のキャビネットに移動する。其処に置かれた幾つもの写真立てにはキースの歴史の中でも楽しかった過去の写真が封印されて置かれていた。

両親と共に、仲間と共に、愛するモウラと共に。撮られた場所や相手は違えどもそれらがキースの今まで過ごした生涯の中で美しい記憶である事には変わりが無い。そして。

其の全てを霞ませて彼の目が凝視する一枚の写真。数々の難関を突破してトリントン基地と言う名の、モビルスーツの試験運用にのみ特化したエリート集団に配属された記念に撮影された、肩を組んで笑う二人の写真。

「もう一度、帰りたいって心の何処かで思ってるって事さ。あいつ鈍感だからやっぱり自分自身で其の気持に気付いて無いだろうけど。」

「そう言えば、モウラ。」

自室へ戻る為に脱いだ下着を身に着けるモウラの背中に向ってキースが尋ねた。



モビルスーツの整備士として中尉の座を手に入れたモウラの背中  
は、恐らく大の男でも手こずるほどの重さのレンチや器具を扱う為  
に逞しく鍛え上げられている。およそ女性らしさの欠片も無い其の  
背中や彼女の体躯が、実は彼女の中の女を隠し通そうとする為に生  
まれた物である事をキースは知っている。モウラ・バシットと言  
う女性が其の見た目とは裏腹に、誰よりも思慮深く、優しく、そし  
て自分の見た目にコンプレックスを持っているという事に気付いた  
瞬間に、キースはモウラが可愛いと思った。

そしてそれが二人にとって恋に落ちた瞬間でもあった。

「ん？ 何？」

手に取った整備用の繋ぎを軽く叩きながら片足を通すモウラ。本  
当はキースの部屋へこんな服を着て訪ねる事などしたくは無い。し  
かし基地内でも階級的には上位に位置する二人が逢瀬を重ねる事に  
規律と風紀の乱れを危惧した二人は、互いの部屋を訪れる際には作  
業着で尋ねる事と決めていた。

部屋の出入を基地内の人間に見咎められても整備班長と隊長と言  
う関係ならばモビルスーツ隊関係の話し合いと言う事で辻褄が合わ  
せられる。自分達の立場を隠れ蓑にこの様な策略を弄してまで会  
たいと思う事に良心の呵責を感じない訳ではないが、それでも会  
たいと思ってしまう事が二人の愛情の深さを物語っている。

「コウとニナさんって何であんなにギクシャクしちゃったんだ？」

ラヴィアンローズに三号機を受け取りに行った時からそう思ってた  
んだけど……俺はてつきりオークリーで二人が一緒に住むのか  
と思ってたのに。」

キースの其の問い掛けにモウラの動きが止まった。

「オークリーと一緒にになってからの二人は変だったよ。何か無理し  
て一緒にいるみたいだったし、二人だけで会う事も無かった

モウラ？」

モウラの着替える手が止まった事に気が付くキースが声を掛ける。  
其の声に我に返ったモウラは慌てて着替えの手を早めた。

モウラは知っていた。落着間近のアイランド・イースの中で二人の間に何が起こったのかを。

そこで二人がガトーと出会い、コウがガトーを撃ち、そして二ナがコウに向って引き金を引いた。二ナはコウの手によって傷付いたガトーとその場を去り、そしてコウの元へと帰って来た。

其の全ての理由を。

無理矢理に繋ぎとめようとする関係に耐え兼ねた二ナが苦し紛れに吐露した其の経緯の全てを聞いたモウラが、その時に二ナの取った行動が正しかったとは思わない。だが間違っていると思っただが故にモウラは二ナの行動の全てを赦した。キースがコウの事を理解しているのと同じく、自分の犯した罪に苦しむ二ナの事を誰よりも理解してあげたいと言うモウラの優しさは全てを失ってしまった彼女の僅かながらの支えになっているのだらうと今でも思う。

コウを失ってしまった二ナがオークリーに留まる理由は何も無い。だがそれでも彼女が此処に残っているのはモウラに対する感謝と、最愛の物に対して犯した罪に対する贖罪なのかも知れない。寝食を忘れて旧式ともいえるザクやゲルググのプログラムの改良に血道を開けているのが其の証拠だ。

其の姿は、自分がやらなければこれはコウがやっていた筈の仕事だと言わんばかりの説得力を持って周囲の心配を退け続ける。

「モウラ…… お前、何か知ってるのか？」

キースの観察眼は実に鋭い。百人の人間が見過ごすほんの些細な違和感でもキースの目はそれを見つける。其処から導き出される推論はほぼ正解に近く、それが恐らくキースを此処まで生き延びさせた原動力だとモウラは信じている。

恐らく今回もキースはモウラの心理の変化に気が付いたに違いない。だがモウラは自分の愛する男に全てを見透かされたと感じた上で、敢えて答えた。

「ごめん、キース。それだけはあたしの口からは」

言える筈が無い。言えばキースはコウの友人として二ナの取った

行動を激しく非難するだろう。そしてあたしは二ナを庇う為にキースと

「言いたくなければ、言わなくていいよ。……聞かない方がいい事も、ある。」

言い淀むモウラの背中に向って掛けられるキースの優しい声。取り繕うでもなく、ただモウラの意志を尊重して自らの意見を押し殺すキースの優しさが、今のモウラには途轍もない傷みとなって襲い掛かる。

いつその事問い詰めてくれた方が今のあたしにとってはどんなに嬉しい事か。二ナと共有する苦しみを、自分の愛する男と分かち合えない苦しみはそのまま罪となってモウラの心を苦しめる。だから、せめて。

「ありがとう、キース。」

振り返ったモウラの体がベッドに横たわったままにキースに押し掛かる。触れる唇の温かさや愛しさがモウラの中から束の間、自分の罪を忘れさせる。それを黙って受け止めてくれる彼だからこそ、あたしはこの男を好きになったのだと確信する。

唇を僅かに離して見詰め合う二人。別れの時間を惜しみ、互いの愛情を確認しあった時間が過ぎ去ってしまった事を惜しみ。二人がこの呪縛から逃れる事が出来るのは何時の日だろうかと互いに問い掛ける無言の瞳が交錯して、答が出せないまま失望の色を湛えて沈み込む。押し寄せる不安と惜別を振り払う様に、キースの瞳に大写しになったモウラが告げた。

「じゃあね、キース。……また、明日。」

ゆっくりと顔を上げるモウラに向って頷くキース。仄かな明かりの中で静かにベッドの周囲を回り込んで出口へと向うモウラの影を顔を上げて見詰めながら、無言で見送る。二人に許された僅かばかりの幸せな時間を断ち切る様に、立て付けの悪いドアが軋んだ音を立てて夢と現実をにべもなく繋ぎ合わせて。

廊下の明かりで影絵と化したモウラが、肩越しにキースに言った。

「時間が来たら必ず……キース、あなたには必ず言うから。だから、ごめん。」

俯いた大きな影絵は呟くようにそう言うと、彼女の愛した男がこれから迎えようとする安らかな眠りを妨げない様にそっと境界の扉を閉じた。

モウラの足は扉を背にしたまま動けない。もう一度出遭う事を願いながら、出会ってしまえば必ず起きてしまう波乱を予感しながら立ち尽くしたまま何も出来ない自分は、此処で廊下に立ったままにいる今の自分と同じだ。二ナの本当の気持と選択を知っているからこそ、コウに会いたい。会って聞きたい、あなたの本心を。そうしないとあたしとキースはずっとこのまま呪縛めいた運命に囚われたまま先には進めない。

でももし尋ねた答えが自分の思惑と外れていたら、その時あたしはどうするんだ？ 自分が欲しがる幸せの為に二人の気持を捻じ曲げて、元の鞘へと収めようとするのか。

そんな我俣を通そうとするあなたは一体何様のつもりだ、ええ？  
モウラ・バシット。

「……出来やしないよ、そんな事  
「何がですかあ？」

深く考え込むモウラは近寄ってきた人の気配に気付かなかった。漏らした呟きが聞き取れるほどの距離に立った赤毛の少女は不思議そうな顔で、険しい表情を浮かべたモウラの顔を見上げている。突然の声に驚くモウラ。

「うわっ！ ジェシカ、あんたいつから其処にっ！？」  
モウラと同じ色の繫ぎを来た少女はショートカットの赤毛をフルフルと振りながら、やれやれといった面持ちでモウラの問いに答えた。

「何時からって、今ですよ。さつきからずっと班長探してたんですよ、部屋にもいないし。きっと此処だーと思ってキース隊長の部屋

の前まで来て見たら、案の定。」

「案の定ってあんた、此処は士官専用の宿舎だよ？ それにあんたアラート勤務は？ 今夜はあんたとアストナージが当番の筈じゃ」

「アストナージ上等兵殿は、現在当直の陸戦兵の方と『ジン・ラミール』（二人制のカードゲーム）に夢中でありませう、班長殿。それより」

笑いながら自分の同僚を茶化すジェシカに呆れ顔を向けるモウラ。其の顔には訳がある。

本来アラート勤務と言う物は性質上前線若しくは紛争が起りそうな地域に隣接する基地に限られて実施されていた。ところが先日ジョンを名乗るテロリストがハンブルグ郊外の疾病管理予防センターを襲撃して保管してあった細菌などの致死兵器を大量にばら撒くという事件が報じられた。

幸いな事に鎮圧部隊の手によって空気中への流出は免れた物の『封じ込め』の為に使われた爆弾は付近一帯を残らず焦土に変え、施設内の生存者は襲撃したテロリストも含めて皆無と言う結果と相成っている。事態を受けて連邦軍は宇宙からの渡航者の数を制限し、警戒も強化された。奇しくも『そうしている間にも地球は悪意の危機に晒されている』と議会で演説したジャミトフの言葉を実証してしまった形になった地球上の各基地は、規模の大小に関わらず一年戦争以来の大規模なアラート体制を実施する事を決定する。

「こんな僻地にジオンが来て何する気だ」と言う口さがない兵士達勿論其の中にはマークスやアデリアも含まれる の  
不満を他所に基地司令であるウェブナーは直ちにアラート勤務のシフトを通常シフトに組み込む事を決め、指示を受けた各部隊は公平且つ民主的な『ジャンケン』と言う形でアラート勤務の人員を割り振っていった。

尤も連続しての夜間勤務が無い様に極力士官達が率先して勤務シフトを肩代わりしてはいるのだが、総数の少ないオークリー基地で

はそれも思う様に行かず、時として何日も連続してハンガー内に待機せざるを得なくなる。かくいうモウラとキースも昨日までは三日連続の勤務をこなしたばかりで、今日は久々の休養日と言う事になっていた。

軍歴からも抹消されて事実関係すら隠蔽された『トリントン基地襲撃事件』を経験したモウラ達には直ちにそれを実行に移したウエブナーの気持がよく分かる。

あの時もそうだった。戦争と言う名の闇は平和な日常を一瞬にして悲劇に変えてしまうほど罪深く、そして一度起ってしまったばかりがつかまで逃れられない、たちの悪い悪夢なのだ。そしてそれがここで起らないと言う保障は何処にも、無い。

「今日、ウラキ伍長が基地に来てたんですって？ 何で教えてくれなかったんですかあ？」

睨まれた事にも表情を変えずに屈託の無い顔を向けるジェシカが少女らしい甲高い声で尋ねた。まだ幼さの残る彼女は丁度アデアの二つ下に当たる、まだ未成年だ。だが其の腕前と機械に対する洞察力は若手の整備士の中では群を抜き、歴戦である筈のアストナージが舌を巻くほどの速さと正確さでモビルスーツを次々にロールアウトさせる實力を持っていた。予算上の制約から外部の整備士を雇う余裕の無いオークリー基地に於いては、そして数少ない整備士をやりくりするモウラにとっては貴重な人材と言えよう。

だからといって好き勝手にさせるほどモウラは寛大な人間ではない。とかく規律を蔑ろにしがちの彼女を上司の厳しさで譴責するモウラであったが、それにも一切懲りる事無く自由を謳歌する彼女の姿は陸戦兵の間でも話題になっている。

燃える様な赤い髪と円らな瞳、そして常に濡れた様に艶やかな赤い唇がどうも荒くれ連中のつばに来る様で、彼女の周囲には群がる男の噂が絶え間ない。最も「あの子の尻にはきつと尻尾が生えていて先が尖っている筈だ。じゃなければあの年であんなに男あしらいが上手い筈が無い」とは現実に触れ合う機会の多いキースの、ジェ

シカに対する評価である。

「何でつて……コ、いやウラキ伍長は直ぐ帰ったからね。それに伍長が有事と訓練の日以外にはこの基地に出入禁止になっている事位あんたも知ってるだろう？……て、言うか。ジェシカ、その事誰から聞いた？」

「警備のハリスさんから。話しかけたら直ぐ教えてくれましたよ？」

「せめて目上には階級をつけな。そうやって直ぐに友達扱いにする所があんたの悪い癖だ。」

「はい班長。……で、ウラキ伍長つてば今日は何しに此処へ来たんですか？まさかこの基地の意中の人に会いに来たとか？」

上目遣いで見上げるジェシカの瞳は女であるモウラにしてもどきりと思わせるほど魅力的だ。だがそれこそがこの少女の手だと知るモウラは相手の姦計にはかからないぞと言わんばかりの眼光で睨み返す。

「はずれ。ウラキ伍長の働いている農協の組合長の奥さんを送って来ただけだよ。とーっても美人の、ね。」

そう言いながらモウラはキースの部屋の扉を後にした。幾ら防音になっているとは言え此処での立ち話は何かと支障がある。それに士官専用　それも男性に限る　の宿舎で何時までも立

ち話をしていいる所を誰かに見咎められたらそれこそ整備班の沽券に關わるうという物だ。

それだけでなくモビルスーツ隊には二ナといいアテリアといい、どう言う訳が美形の女性が揃っている。仕事一途の二ナや恐ろしい二つ名を持つアテリアに手を出す奴はいないだろうが、この子は違う。違う所か本人はそれを楽しんでいる節が見え隠れする所が在る故に、モウラの叱責は常にジェシカに向けられる羽目になる。向けられるが故に其の姿は常に男共の同情を買い、彼女の手元には慰めの言葉と余るほどの贈り物が溢れる様になる。ジェシカが此処に入隊してから妙に男連中からのモウラに対する風当たりが強くなった

と感じるのは、決して気のせいではあるまい。

「えー、美人って言っても人妻でしょ？ 伍長ってひよっとして年上趣味？ それとも欲しがりさん？」

脇を着いて歩くジェシカの言葉に、そう言えば二ナもコウより年上だったな、と思いつつモウラは目の前の小娘の無邪気な推測に内心驚いた。

「さ、さあ。其処までは知らないよ。…… 今日はやけにウラキ伍長の事であたしに絡むねえ、ジェシカ。どういう風の吹き回しだい？」

これだけ男を虜にするジェシカがモウラの前で男の話題を口にする事は滅多に無い。モウラや二ナとの間では専ら機体整備の内容や日常会話しか行わない彼女が『ガールズトーク』を率先して行おうとする事などモウラには初めての経験だった。尋ねたモウラの進路を塞ぐ様に回りこんで後ろ歩きで歩くジェシカが意味深な笑みを浮かべた。

「だあって、かっこいいじゃないですか。」

「はあ？ かっこいいって、コウの事言ってるの？ あんた。」

唐突なジェシカの発言に素でコウの名を口に出して意外な顔をするモウラと其の反応を満足そうに見上げるジェシカの顔。ジェシカの表情を呆れ顔で見詰めるモウラではあったが、ジェシカが嘘偽りを言っている訳ではないと言う事は理解できる。視界の中で少女らしくない小悪魔の笑みを浮かべたジェシカが告白した。

「顔は美形だし、体はがっちりしてるし。言葉遣いは優しいし、何より笑顔に影があるところがいいじゃないですか。それにあのモバイルスーツの扱いの上手さと来たら。」

「そういえばあんた、予備役訓練のシミュレーターの担当だったね。コウ、いやウラキ伍長とは其処で会ったんだ？」

本来であればそれはモウラの仕事である。しかし件の理由からコウが参加する予備役訓練にモウラが参加する事は認められず、事態に窮したウェブナーが急遽抜擢したのがジェシカだった。未成年で



あるが故に世情に疎く、しかし職能に関して高評価を得ているジェシカは一切の結果を他言無用とすると言う誓約書にサインをした上でコウのシミュレータープログラム及びモニタリングを担当した。故に此処でモウラにその事を話すジェシカの行動は既に誓約違反と言う事になる。

しかし其処がジェシカのジェシカたる所以だ。彼女は恐らく今までの経緯やモウラとの会話の中からモウラとコウに何らかの関係がある事を察知し、そしてモウラの前でならコウの事を喋っても良いと言う事を自認している節がある。

ジェシカの形や口調から小娘等と侮っているとその強かさに痛い目を見る事になる。

其の強かな小悪魔は珍しく照れくさそうな笑顔を浮かべてモウラに言った。

「えっへっへ。会っちゃいましたよー。なんか運命的な出会いって言うか、こう何て言うかハートにビビッと電気が走ったというか。」

「整備不良の漏電だ、そりゃ。そうでなけりゃああなたの気のせい。」

コウに対する感想を取り付くしまも無く一蹴するモウラの声を聞いたジェシカかくるりと振り返ってモウラの前を歩き出す。恐らく声音の変化からこれ以上の詮索は危険だと判断したのだろう。この辺の身の振り方が如何にも強かな女であると印象を同姓に印象付けしてしまう、彼女の利点でもあり欠点でもある。

「あー、でもいいよなあ。好きな人の機体を整備して送り出すなんてどんな気持なんだろう。あたしも一度でいいからそんな事やってみたい。」

「うちにはマークスがいるだろ？ 彼の機体で十分じゃないか。」

「ダメダメ、あれはアデリアのものだもん。あたし人の物には興味ないですから。」

「自分に靡かない奴は物扱いかよ、全くあんたは。」

「ね、班長？」

前を歩いていたジェシカが呟きと共に足を止める。唐突な行動に

ぶつかりそうになったモウラの寸前でジェシカがくるりと振り返り、モウラの顔を円らな瞳で見上げた。

「……どんな気持ですかあ？」

問い掛けられたモウラの顔全体に動揺が広がった。自分とキースの関係は公表していないとは言えある程度の公然たる秘密と言う位置付けがオークリー内でも為されている。本人達が上級士官であるが故に規律を重んじ、乱れさせない様に配慮する努力を汲み取って彼らの周囲も気付かない振りをしてきているのだ。

暗黙の了解を公然と口に出して問い掛ける、モウラの部下たるその小悪魔は自らの本領発揮と言わんばかりの悪どい笑顔を前面に押し出してモウラの表情を愉快そうに眺めている。部下である以前に年下にからかわれたと思つたモウラが、声を荒げて言った。

「こらっ、ジェス。大人をからかうのもいい加減にしないと」

その姿は子供を叱り付ける母親の姿に見えるだろう。だがジェシカはモウラの叱責を頭上から浴びせかけられているにも拘らず、更に上位に位置する悪魔の笑みを浮かべてモウラの怒りと対峙した。その笑みの中に浮かぶ真つ赤な唇が動いてモウラに言った。

「……首に痕、付いてますよ？」

対地雷並の破壊力を持ったその言葉はモウラの叱責を一瞬にして爆散させて別の感情に塗り替えた。思わず首筋を押さえて色黒の顔を真つ赤に染めるモウラ。余りの動揺に眼下のジェシカの顔に視線すら固定出来ずにうろたえる。無言で羞恥に震えるモウラの様子を満足そうに見上げたジェシカが、更なる地雷を自分の上司に叩き付けた。

「……うそ。引っかかりましたね、班長？」

モウラの理性に投じられる焼け石。感情が沸点を超えて怒りの蒸気を吹き上げるその僅かな間隙を突いてジェシカの足は脱兎の如くモウラの元を離れた。してやられたと憤慨したモウラが辺り構わず怒鳴り飛ばす。

「くおらあつ！！ ジェスっ！」

その怒鳴り声ですら彼女の疾走には敵わないだろう。あつという間に廊下の向こうへと遠ざかる背中を頭から煙を噴き上げて見送るモウラ。仁王立ちになつた彼女に目掛けてジェシカの捨て台詞が届いた。

「じゃあ、班長。あたしは持ち場に戻りまーす。今度ウラキ伍長が基地を尋ねて来たら必ず教えてくださーい。」

快活な声を夜中の廊下に響かせて一目散に駆け去るジェシカの姿。陸戦隊を焚き付ければショットガンを抱えて仕留めに行くんじゃないかと思つほどの逃げ足を披露するその背中を見送りながら、モウラは腹立ち紛れに腰のポケットに入れてあつた無線機を取り出した。送信のスイッチを押すか押さないかのタイミングで彼女はもう一人の勤務要員であるアストナージを呼び出す。

「こらあつ！ アストナージっ、あんた今何やってるっ！？」

アストナージは階級こそ上等兵ではあるがその実績は一年戦争の終結を戦艦の中で迎えた事からも分かる様に一流の整備士の資質を持っている。彼は生き延びる為にモビルスーツのみならず火器、果ては戦艦内の熱核エンジンの整備まで独学で修得し現在ではこの基地でモウラに次ぐ整備班副長の肩書きを担っている男だ。

どのような経緯でこの基地まで流されて来たのかは理解出来ないが本人曰く「何でも出来る奴は何にも出来ない上司に疎まれる」と言う理由で、自らこの基地への赴任を志願したらしい。ただ、先輩の立場として同僚のジェシカの言動や行動を放任せざるを得ない所がモウラにとって物足りない部分ではあつたのだが。

久し振りに聞く上司からの叱責に答えるアストナージの声が動揺に揺らめいている。

「はっ、はい、班長。なんでしよう？」

「あんたの相方が士官宿舎を徘徊中だっ！ アラート勤務中にあんた達は二人して何やってんだあつ！」

「へっ？ ジェスが？ …… あああーっ！ あいつ俺の抱き枕身

代わりにして抜け出しゃがったなあっ！　ちつくしよ俺のマリちゃんに何て事してくれてんだあっ！」

「あんたの趣味なんざあどうだつていいっ！　あんたら罰として明日からのジムのC整備、二人だけで明日中に終わらせな。完了するまで飯と休憩は、抜きだっ！」

「　　そ、そんなあっ！」

悲鳴を上げるアストナージ。歴戦の整備士をして悲鳴を上げさせる『C整備』とはモビルスーツの運用を二日から三日休止して行われる完全検査整備の通称である。各部の点検、メンテナンス、消耗部品の耐用期間前交換は言うに及ばず核融合炉の燃料棒の交換、装甲板全体の非破壊検査まで行う重整備だ。エンジンに関しては専用のブースと機械、そしてアストナージはその経験があるので二人でも何とかなるだろう。だが問題は　　。

「勘弁してくださいよ、班長。誰が非破壊検査用のUTM（Ultrasonic Testing Measurement）を一日中抱えてるつてんですか？　そんな事したら俺の明後日の大事な非番は全身筋肉痛で　　」

「知るか、そんな事っ！　一日中死んでろっ！」

失望の叫びを上げるアストナージの声を中断する無線機の送信スイツチ。込み上げて来る怒りを大きな溜息と共に吐き出したモウラの背後から静かな声が響いて、モウラの心臓をどきりとさせた。

「　　……　　あー、その、バシット中尉？」

低いトーンで周囲を憚る様に呼び止められたモウラが思わず振り返る。その視線の先にはドアの隙間から顔を出すウェブナーがいた。「こっ、これは司令！　あっすっすいません、お休みの所をお騒がせして。」

「いや、まだ休んではいなかったのだがね……　　その、なんだ。」

凍り付く様に直立不動になるモウラの姿を見て、ウェブナーは咳払いを一つすると窘める様たしなに言った。

「部下の規律を正すのは尤もな事だが、時と場合を選ばんと何かと自身に不都合な事が起らんとも限らん。特に彼女は（ジェシカ）アリスト上等兵はまだ子供だ。母親代わりに躡けるのは構わんが、何事も程々に、な？」

「はっ！」

母親と言われて内心“せめて姉と言つて下さいよ、司令”と呟きながら敬礼を返すモウラがウェブナーの忠告に対して感謝の意を告げた。

「不肖の私めに過分なご助言、感謝に堪えません。以降この様な事の無きよう奮励努力致します。」

「よろしい、では君も早く休みたまえ。アラート勤務のせいで何かとシフトが窮屈になってる昨今だ。休める内に休んでおかんといざと言う時に身が持たんぞ？ 軍人とはそういう物だろう。」

閉じる扉の影に満足した表情で隠れるウェブナーの顔を固い表情のまま見送るモウラ。

扉が閉じた事を確認してハアツと安堵の溜息を付いたその瞬間、彼女の視線は焦点の陰に隠れた人物に向けられる。ドアから半分顔を出したまま心配そうな表情を浮かべてモウラの身を慮る、キースの顔が其処にあった。

困惑の表情を浮かべて見詰めるキースの目に向って小さく手を振り、困った様な笑顔を返すモウラ。そんな小さなアクションでもキースの心配を払拭するには十分だった。崩れる固い表情の裏側から表れる微かな微笑を残して、安心した面持ちで静かに扉を閉めるキース。

見送ったモウラが踵を返して自分の宿舎へと向うその足取りは、自分が予想しているよりも遙かに速い速度と大きな音を立てて彼女の体を運んだ。一刻も早くこの場から逃げ出さなければと言う焦りと、小娘の姦計（ジェシカ）に引つかかって上司としての威厳を部下の前で損なってしまったと言う悔恨がモウラの足裏で大きな音を立てている。

脇目も振らずに出口へと向うモウラの目が壁に掛けられている姿

見の前を通り過ぎて、ぱたと止まった。モウラの体躯より遙かに巨大なその鏡は本来、士官がこの建物を退出する時自らの身嗜みを最後に点検する為の物である。鏡を通り過ぎようとする自分の姿を横目で睨んで言った。

「待てよ？ まさかほんとに痕が残ってるんじや」

実はジェシカは本当にその事に気が付いてあんな事を言ったんじゃないのかと。未成年の小娘が放った揶揄にしては度が過ぎていると感じたモウラが自分の首筋を念入りにチェックした。

万がジェシカの指摘が本当の事で、宿舎にいるほかの女性隊員にその事を見咎められたら狭いオークリーの事だ、あつという間にその事が噂になってしまುದらう。自分とキースの関係はある程度公認の物になっているとは言え、そんな事が表沙汰になるのは基地内の風紀に関わる由々しき問題だ。

いや、それよりも自分が恐れているのはこの事が二ナの耳に届いてしまう事。彼女が今佇んでいる世界を知っていながら背徳にも似た行為に手を染めているという忸怩たる思いが、モウラの行動を支配している。

「ほんとに付いてたらどうしよう……明日も暑くなるってのにポトルネックの長袖着て隠せてるか？」

ぶつぶつと呟きながら首筋を伸ばして痕の有無を懸命に確認するモウラ。その仕草を目に留めた鏡の中の彼女が不意に手を止めて、呟いた。

「……あたし、なにやってんだろ？」

その運指はピアノリストを思わせる速さで僅かなスペースにはめ込まれたキーボードの上を駆け巡る。ラヴェルのトッカータにも似たりズムで仄かな明かりに照らされた部屋の中を飛び回る二ナの奏楽はハンマーが叩く弦の音色の代わりに無数とも言える記号の羅列をモニターの上に生み出している。

恐らくオークリーの基地内では彼女にしか分からない基地内のメ

インコンピューターとのチャット内容は彼らの流儀に従って二ナの指から話すよりも早く語られ、彼らは二ナからの質問に短く二者択一で答えを返す。その繰り返しだが二ナの動きに変化を齎した。時には微かに笑い、首を傾げて新たな会話に没頭する二ナは男物のYシヤツ一枚と言っしどけない姿で足を組んで“何時彼らがあたしの考えを認めてくれるのか”と言う答えを探し出す事に躍起になっている。それが就寝前の二ナの儀式になっていた。

モニターと言う祭壇の前に置かれた今日の供物はオペレーションシステムのマニュアル化に伴って連動する基本動作システムの介入について。デフォルトで設定された基本動作プログラムを書き換えてマニュアル操作の選択肢を追加し、その際に必要最小限の動作パターンを連動させてパイロットの補助<sup>アシスト</sup>に使用する。

アナハイムから支給された現状のプログラムではオペレーション<sup>アンティザブル</sup>を解除にしない限りマニュアル操作を行う事は出来ない。だがそれでは、キースならばともかく一度もマニュアルでモビルスーツを動かした事の無いマークスやアテリアには操縦に負担を強いる事になるのは今日の講義を受けた彼らの顔色を見ても明らかだ。

眉間と額に皺を寄せて一生懸命で理解しようとするのは新世代の性なのか。二人の発想にはイメージと言う物が欠けている様な気がすると言ったのは、今日実際に戦ったキースの言葉だ。実際に戦場を何度も踏み、その命を削るストレスの中で生き延びようと試みたキースやコウにとってはそんな事

二ナの顔色が一瞬翳る。踊る指は心の影に囚われてタップを踏む事を中止する。

モニター上にあるカーソルが点滅して、二ナに会話の続きを要求した。心の中を過る過去に目を背けて再び自分に課せられた作業に没頭しようと運指を再開する二ナ。

ただ二人にはそれを実践する機会も状況も十分に与えられ

てはいない。唯一キースとの模擬戦がその貴重な機会となる訳だがそれでは足りない。自身の不利な状況を絶対の意志を持って覆そうと言う気力、それが無い以上彼ら二人がそのままマニュアル操縦に挑む事は可能であっても現状以上の機動力を手にする事は困難である。

故にシステムを完全マニュアル状態にするのではなく、デフォルトで設定された基本動作720種類を削って必要最低限の動作に限定する。その動作をマニュアル動作の補助アシストに加える事によって、少なくとも移動や待機状態の姿勢の保持にまでパイロットが神経を割く事は無くなる。

……あの時もそうだった、デンドロビウムのコクピットで出撃待機状態を保持し続けるコウはその姿勢制御に神経と体力を磨り減らした

二ナの瞳が焦点を失った。記憶は遠い過去の、まさにあの日に遡る。アイランド・イース落着間近のアルビオン。不転の全力出撃を敢行しようとするコウが尋ねて来た、阻止限界点到着までの時間。狭い機内に押し込められたままで逃げ出す事も出来ず、苦しい呻き声と共に問い掛けられた言葉に二ナは答えた。

モリスよりも、シモンよりも、誰よりもコウの傍にいて彼を支えていたかった。もっと他の言葉が　　コウの力になる真実の言葉がきつと其処にあった筈なのに、彼の呻き声を聞いた二ナはそれを口にする事を躊躇った。

何故その言葉が言えるというのか。その言葉は彼に『死を恐れるな』と言う意味と同じ事。生きて欲しいと願う私がどうしてその言葉をコウに告げられるのか？

揺れる蒼の瞳。その瞳に映るモニターのカーソル。点滅を繰り返す一本のか細い線は二ナの回想に傷を付ける様に更なる会話を要求する。



例えば『歩く』と言う動作一つとっても各部を構成する機器に様々な動きやストレスを与える。足を踏み出すのではなくて『倒れこむ上体を支える為に足を出す』。その繰り返しを継続させる為には体幹部に設置されたリアクションホイールによるバランスの修正が欠かせない。現状のプログラムをマニュアルにするとそんな簡単な動作までもがパイロットの手に委ねられる事になる。計器の水平儀を睨みながら絶えず振動に襲われるコクピット内で手足を微妙に操作してその行動を継続させるには体力的にも無理がある。ましてや其処に戦闘行動が加わればその操作の煩雑さは想像を絶する忙しさだろう。コウは『モビルスーツの動きなんて所詮は自分の動きの延長線上にあるんだから、そんなに難しい事じゃない』と言ってたけれど

トツカータからソナタ、そしてセレナーデ。二ナの指がキーボードの上でゆつくりと止まる。指の動きと連動して画面の上を走っていたカーソルは終点に到着する列車の様に緩やかな運行を余儀無くされ、そして止まった。

震える二ナの指はカーソルの運行を再開しなければと僅か一センチの空間を彷徨いながら、惑いながら。だが彼女の願いは末端にまで伝わる事を拒絶して、その繊細な指がカーソルと言う観客のアンコールに応える事は無く。代わりに二ナの意志は無意識に保存用のファイルを呼び出して、中途となった会話の内容を封印するかの様にモニター画面から締め出した。

険しい視線でモニターを睨み付ける二ナの前で、保存の終了したハードディスクはテキスト画面を起動画面へと切り替える。訪れる静寂。

演奏の終了した小さな会場は沈黙と言う名の虚無と、傷心と言う名の今日を二ナの前に連れて来た。世界中の誰が見失っても自分だけは間違える事の無い、焦陽降り注ぐ日差しの中に影を霞ませて佇むコウ。何も理由を告げずに姿を消したあの日とは雰囲気や体の

輪郭は大きく違っている。でも自分と合わせた視線で繋がる複雑な感情　基地を出て行く前の日に投げ掛けた遣り切れなさに溢れる感情を抑えきれない瞳の色　　はあの時と寸分も。いいえ、それは多分出会った時から彼の瞳に浮かんでいた、彼自身のジレンマに支配され続ける複雑な感情を秘めたコウの眼。

過去の郷愁に捉われる二ナの視線がデスクの隅に置かれた起動ディスクをじっと見詰めた。

置かれた四枚のディスク。真新しい三つと壊れかけの一つ。表面を大きく走る一本の亀裂が二ナの心を映し出す様に存在を焼き付ける。

腫れ物を触る様にコウの起動ディスクを取り上げる二ナの指。旧式の筐体の前面に開かれたスロットにそのディスクをそっと押し込もうとして、そしていつもの躊躇が始まる。

これが最期になるかもしれない。このディスクを押し込んだ瞬間に壊れてしまったら、そう考えただけでこのディスクを閲覧しようと言う気持が萎えてしまう。勿論そんな事が起りえる筈が無いと自分で分かっているにも関わらず、しかしそれを蔑ろにして大事な物を全て失ってしまうと言う偶然も、偶然以上の確率で起り得る。

コピーは取れない。コピーを取るにはディスクの持ち主の乗った機体　　モバイルスーツでなくても、航空機でも船舶でもいい

のハードディスクに介入接続してデータを吸い上げない限り複製出来ない仕様だ。

本人の認証が無ければ動かないモバイルスーツのセキュリティを利用したコピーガードの仕組みを、今更ながら二ナは恨めしく思った。複製を作ろうにもこのディスクの持ち主はもう此処にはいない。それどころか彼は自身の存在意義とも言えるモバイルスーツパイロットと言つ職業を捨てて別の世界へと旅立った。

彼にとっては掛け替えの無い物だった筈なのに。

揺れ動く二ナの気持が手の中のディスクを微かに震わせて。それでも二ナの指は赴くままに壊れかけのディスクをスロットへと静か

に押し込んだ。見たいという気持を抑えられない彼女の衝動はその後に起こりえる喪失の危険を恐怖の奥に押し込んで、それでもそれが壊れる事が無い様に彼女の中の神に祈りながら。

彼女の指から離れたディスクが何かから逃れる様に深い穴に吸い込まれて。その一部始終を見詰める二ナの指が求める様にその後を追いかけて。伸ばすその指先を遮る様に閉じられるスロットハッチ。二ナの指が其処に軽く触れて、後悔した様に微かに退いた。

一瞬の間を置いて点灯する緑色のLED。間接照明の灯りに遠慮する様に点るその輝きは二ナに安堵を齎した。微かな唸りと共に高速回転するモーターとそのディスクに記載されたデータを呼び出す為に駆動するハードディスクのドライブ音が、感傷の狭間に迷い込んだ二ナの心を救い上げる。

読み取られた起動ディスクは二ナにパスワードを要求した。無機質な文字で浮かび上がる連邦宇宙軍第三種機密事項にこのディスク内容が指定されていると言う注意事項、そしてこのディスクを閲覧している貴方が本人若しくはその関係者に該当するかを詰問する文章。もし悪意の有る第三者がこのディスクの内容を利用した場合に例外無く軍法会議に掛けられる、と言う警告文。だが羅列される文章内容の全てを破棄した二ナの指は、躊躇無くキーボードの空間上を跳ね回って一つの単語を打ち込んだ。

“Sun Flower”

その言葉はガンダム一号機の空間機動強化型であるフルバーニアンのトリアルが終了した月面のリバモア工場で他愛も無い会話から生まれた、二人だけが知るパスワード。花言葉は

「……………私の目はあなただけを見つめる」……………」

何度意味を聞かれても恥ずかしくて答えられなかった、コウの知らない言葉を呟く二ナの声が舞い散る中で展開を始めるプログラム、切り替わる画面を瞬きもせずに見詰める二ナ。明度を増したモニタ―は一瞬の点滅の後に、押し込まれたディスクの冒頭に記載されているパーソナルデータを表示した。

姓名、階級、年齢、所属、そして顔写真。

コウ・ウラキ戦時中尉。

画面の中のコウは少し若い。それは二ナの中のコウの面影と一致する。この顔で彼は泣き、笑い、怒り、そして。

画面の中のコウはどこか真面目な顔で二ナを見つめている。二ナの目には確かにそう映る、画面の中のコウの口が微かに開いて何かを二ナに問い掛けている。はっとした二ナがその言葉をその声で聞く事だけは耐えられないと、両耳を思わず塞いだ。

彼は答を求めている、そして私はその答えを持っている。でも言えない。答えられない。答えた所で貴方に分かって貰える自信が、今の私には欠片も残っていない。

あの時、ガトーと引き離す事で貴方の大事な物まで奪い去ってしまった今この私が貴方の叫びに応える資格は、無い。

「コウ ……」

呟いた二ナの唇を伝う一筋の涙がぼとりと。それが切っ掛けだった。

大きく開かれた蒼い瞳を濡らして。二ナの視界を曇らせながら溢れる暖かなそれは、室内の空調によって冷まされた時に初めて二ナに存在を気付かせた。その感触に慌てて頬を押さえる二ナが思わず呟いた。

「 …… 涙？ 何で、私 ……」

ぼやけてしまった視界の中に霞んだコウの顔を取り戻す為にしきりに瞬きを繰り返して。しかしその度に押し出される涙が彼女の求める現実を否定する様に更なる勢いで涙を溢れさせる。一筋でしかなかった物が後から後から伝わって、膝の染みを大きくして。その事実を受け入れざるを得なくなる二ナ。

そしてそれは自分の裏側で氷点下に凍結させた本心と対峙しなければならぬと言っ事。

「忘れられる、訳 …… ないじゃないっ。」

進った二ナの言葉が彼女自身の体中を駆け巡った。

血が、心が沸騰する。全身に溢れる熱と失った悲しみが類義の意味を携えて彼女の全身を震わせている。感情の暴走に耐えられなくなった臉が強く閉じられて、溢れる涙をこれ以上捨ててしまわない様に天を仰いだ。

あの場所で別れたまま、再び出会わなければ良かったのか？ コウがこのオークリーに配属されると聞いて、ティターンズから供出された誓約書にサインもせずにとあらゆる手段を使ってこの基地に辿り着き、彼の帰りを待っていたのは間違いだっただろうか。彼の為に自分が諦めた物を再び取り戻そうとする事は、所詮は叶わぬ夢にしか過ぎなかったのか。

繰り返す自問自答は狂った様に二ナの心を掻き糞った。傷が広がり、言葉が溢れ、受け止める掌の隙間から零れ落ちて行く二ナの後悔。後悔は次の瞬間に『罪』と言う名に書き換えられて彼女の心を暗い澱みに変えていく。

微かな嗚咽が二ナの唇を侵して零れ落ちた。涙が目尻の堰を切つてダークブロンドの髪を濡らす。悲哀の海に溺れる二ナの心を終わり間近に迫った今日の記憶と言う波が押し流して、巻き込んで。翻弄される彼女の記憶に焼き付けられた、掛け替えの無かった者の顔が懐かしい声で無情にも問い掛けた。

「なぜ、ガトーを選んだんだ。二ナ。」

大きく見開かれた蒼い瞳が虚空を睨む。焦点の無い目が有る筈の無い声の持ち主を追い求めて殺風景な天井を探す。だが、それは手に入れる事の出来ない幻影だ。そして現実も同じ。

許しを請う様に二ナが叫んだ。

「違っつ！」

頭を振って否定する二ナから溢れる悲鳴は慟哭へと変化した。秀麗さを思わせる彼女の唇が微かに歪んで慈悲を望む言葉を紡ぐ。

「あたしは貴方を選んだのよ、コウっ！ 貴方を選んだから、ガトーと共にあそこを去らなければならなかったのっ」

その台詞が孕んだ矛盾を繋ぐ鎖は錆びて朽ちたまま二ナの心の中

だけにある。幾ら二ナが望んでも、錆びた鎖は繋ぐ端から崩れ落ちて元の輪を象る事は出来ない。そして意味も無い。

「コウがいなくなった今となっては。」

天を仰いだ蒼い瞳が舞い降りて再び目の前のモニターに釘付けになる。潤んだ瞳から流れ出る涙を拭いもせずに画面の片隅に映るコウの顔を凝視する二ナ。

私に向って何かを言っただけだった。あんな挨拶なんかじゃない何かを。

例えそれが私を罵る言葉でも構わない。私のした事を詰って蔑まれた方がまだ救われる。私はあなたにそれだけの事をしたのだから。でも、でも私は。それでも私はあなたの声が、本当の音が聞きたい。

渴望に震える二ナの唇が、心の底で蠕ったまま幾度と無く繰り返されるその言葉を遂に堪え切れずに呟いた。

「……………何か言っただけ、お願いよ。……………」

コウ

「

向日葵（後書き）

事情により「Mother Goose Brigade？」  
と「？」を部分改稿させていただきました。

事情の説明と経緯は活動報告にて詳細を記載しておりますので是非、ご一読戴けたらと思います。

お手数をお掛けして本当に申し訳御座いません。

## あるいは裏切りと言つ名の世界

夢を見ていた。

目に映る物耳にする物。その全てがいつものあの場所である事をコウに教える。だがその日の夢は何故かいつもと違っている。

先ずそれが夢だと分かっているという事。そしていつもなら此処で途絶えてしまう景色が未だに消えずに残っているという事。

血の海の中に横たわるガトーがいる、その光景を眺めながら震える二ナがいる、そして硝煙の棚引く銃を握り締めたまま呆然と立ち尽くす自分がいる。三人だけでは余りに広い管制室の空間は銃声の残響と核パルスエンジンの轟音に満たされて。

そうだ。これは。

あの時の、続き。

磁力に反発して駆け出す二ナの足。鉄の床を叩く靴底が裁判官の持つ木槌の様な音を立ててコウの耳朶を打つ。齎される判決は言葉ではなく行動で示され、その事實はコウにとって到底受け入れられない映像と衝撃だけを残して眼前で展開した。傷口からの出血を手で押さえてガトーの体を抱き上げる二ナが顔を覗き込んで大声で呼びかける。

「ガトーっ、しっかりして。ガトーっ！」

其処に勝者への賛辞は無く、味方の安否を気遣うと言つ心配りすら見当たらず。赤と紫が一つになる様を目の当たりにしてコウの白いパイロットスーツからはどす黒い何かが湧き出した。体を駆け巡る薬物は膨れ上がる負の感情に呼応してコウの思考を闇で染め上げる。乗倍の殺意に満たされていくコウの体が熱を帯びて、血の海に横たわるガトーの体を掻き抱く二ナの姿を映し出す眼球までもが熱くなる。熱に魔まされた子供の様につわ言を紡ぐ音声で、コウは二ナに問い掛けた。



「二ナ 何をしているんだ……？」

呆然と立ち竦んだままの愚者の前に突き付けられた現実を決して有り得てはいけない光景だ。右目と左目が同時に取り込む今と未来の情報の先で火花を散らすコウの脳細胞はフィラメントの様に白熱し、そして瞬時に焼き切れた。真っ暗になる脳裏の世界はそのままコウの視界に帳を落とす。黄昏行くコウの世界の彼方から彼目掛けて放たれた女の声さえ拒む様に。

「もう止めて、コウっ！」

名前が彼を現実へと導く。薬物の力をも凌駕する二ナの叫びはコウの意識を再びアイランド・イスの管制室へと連れ戻して。だが目の前の光景が夢の様に消え去る事は無い。殺意の焰が焼き尽くそうとする理性を抱え込む様に抱きながら、糧となる現実を否定するコウの叫びが過去の自分を殺してしまうほどの苛烈さで二ナ目掛けて叩き付けられた。

「…… そいつから離れる、二ナっ！ そいつが誰だか分かっているのかっ！？」

拳銃を持ったままの右手が熱い。夥しい熱が殺意を孕んでコウの手を操ろうとする。目の前にいるのが二ナでなければ自分はきつとこの引き金を引いているに違いないと確信しながら、撃鉄を落とす為の最後の障害を取り除こうとする抗い難い欲望はコウの言語野の大半を支配下に収めようとしている。彼を人の領域に繋ぎ止めている二ナの形をした良心は、コウの叫びを受けてその深い蒼の瞳を大きく見開いて叫んだ。

「この人はもう戦えない、あなたは勝ったのよ！ これ以上殺しあう事なんて必要ない筈だわ、だから、もう止めてっ！」

「気でも狂ったのか二ナ！ そいつはガトーだ、君のガンダムを奪い、そのガンダムで大勢の人を殺して そいつのお陰でアレ

ン中尉は、バニング大尉は

息が、詰まる。

呼吸すら自らの思うがままにならないコウの、閉ざされたバイザ

「の奥に潜めていた瞳に明らかな狂気の焰が宿る。」

「ケレイさんはあつ！！」

口にしただけで箍たがが外れそうになる、心の底で自分と同じ価値観を持ちながら戦争と言う名の狂気の中で命を奪い合う事しか出来なかつた恩人の名前。あふれ出す殺気は遂に瘴気の様に噴出して管制室全体に蔓延する。腐臭に似た禍々しい香りは三人の世界から音すらも奪い去って。

だが世界が光を失おうとしても二ナの瞳は変わらない。蒼の輝きを虹彩に彩らせてコウの齎した闇を吹き飛ばそうと輝きを強めて睨み上げた。

「分かつてるつ、そんな事分かつてる。でもあなたがこの人を殺してそれでどうなるの？ 何かが変わるの？ 世界が、あなたが、それともあたしが！」

「言つなあつ！」

二ナの言葉はこの戦いの中でコウの心を常に苛んで来た疑問。その疑問の答えを知る為の手段を取り上げられたコウは逆上した。

何も変わらないと分かっているながら大儀の無い戦いを余儀無くされたコウにとって、二ナの掲げた問い掛けはそのまま彼自身の疑問へと取って代わる。私怨の赴くままに奪い取る命は彼の罪となつて手足を枷取り、生き抜く為に血濡れた手足に力を込めて更なる殺戮に身を投じて罪を重ねる。戦士や兵士とは遠く離れた場所に蹲るコウの魂は穢れに満ちたまま救いと贖いを誰かに求めて、そしてその相手は今目の前で自分の愛する者の腕の中で苦しげな息を吐いている。

この男が俺の全てを変えてしまった。そしてまた変えようとしている。掛け替えの無い、それさえあればこの先何が遭っても生きて行けると信じて止まないただ一人の存在を。

「そんな事は関係ない！ そいつがいなければ、そいつがあんな事さえしなければ 見ろ、俺の手を！」

コウの叫びがバイザーを超えて吐き出される。自分の叫びに耳を

奪われる事も忘れてコウは言葉を喚き続けた。

「これが人殺しの手だっ！ この手がケリイさんを殺した、バニング大尉を救えなかった、コンペイ島で、そして此処で大勢の人間を殺して血塗れになった手だ！」

コウの意志は遂に良心を破棄して殺意に身を委ねた。二ナに抱かれたガトーの体に目掛けて突き付けられる銃口が非常灯の光を受けて鈍く煌く。

「全て、そいつのせいだっ！ コロニーは止められない、死んだ人は生き返らない。でもガトーは殺せる！ 俺はその機会を与えられたんだ。正義や善悪なんかはどうでもいい、それでも俺自身が罪を背負って皆の無念を晴らせるなら俺なんかどうなってもいい、俺はその為に此処まで戦って来たんだっ！」

「正気なの、コウ！？ そんな物があなたの戦う理由だ！？」

その恫喝に二ナの可憐な唇が歪んだ。震えながらも睨み上げる二ナの目に怯えの色は無い。仮初の正義を口にする断罪者を威圧する輝きが蒼の瞳を席卷してコウを睨み付ける。

「あなたの心の中には復讐しか無かったの？ ただ仲間や周りの人達を失った憎しみに任せて大勢の人を『殺した』のはそんな物の為だったと。もしそうだとしたらあなたとガトーは別の世界の人よ、そしてあなたは決して力を手に入れてはいけない唯の殺人鬼だわっ！」

唯一の理解者と信じた二ナに否定されるコウの生き様。蟠る怒りと失望が体中に広がってコウの中の理性を掻き消そうとする。抗いはそのまま問い掛けとなって二ナに向って放たれた。

「何故、分かってくれないんだ俺をっ！ 俺が殺人鬼だと？ そんな…… そんな事を君の口から 愛してくれてると信じていたのにつ！ それとも俺への気持は嘘だったのかっ！？」

「そんな事っ！」

叩き付け合う二人の叫びが互いの心の直ぐ傍で、鈍く輝く刃を擦り合わせながら鬨ぎ合う。傷つける事すら厭わない互いの価値観は

そのまま相手の存在を否定しようとする行為へと変化を果たして。

お互いが理解している筈だった、昨日までは。二人の手は間違はなく差し伸べられて繋がれていた筈なのに、それを離してしまったのは何故だろう。戦争と言う名の狂気の激流と目の前に横たわる無力な敵の変わり果てた姿が二ナの心を変えてしまったのか？ だとしたら繋いだこの手を手放してしまったのは、彼女の意思。

それを甘んじて受け入れろと言うのか。そして彼女を疑えと。その結果が自身の心の中心に大きな風穴を開けてしまう類の物であったとしても。

「あたしはこの人が好きだった……好きだったこの人とあなたが戦う事の結末を見なければと此処まで来た。でもそれがこんな事につ！私はず！」

告白する二ナの声は悲鳴に近い。溢れる思いにはちぎれる心は二ナが最後まで隠し通そうとした秘密を言葉にして垂れ流した。

「二人がこうならない事だけを祈ってきたのに！ましてあなたのそんな変わり果てた姿を見せ付けられる事になるなんてっ！」

コウの背負う罪を少しでも軽くしようと。それでも重荷になるのなら共に背負って歩いていこうと。そう決意をして乗り込んだ二ナの前に立ち尽くす愛する者の姿。私はこんな者の為に命を懸けて此処に辿り着いたのではない。

何故分かってくれないの、コウっ！

コウの腕は怒りに震え、二ナの体は変わり果ててしまったコウの姿を目に焼き付けて失望に震える。言葉を失って唇を振るわせる相違えた二人の世界を再び同じ舞台に引き戻したのは、血の海に横たわった男の口から突然に発せられた言葉だった。

「成る程、戦えない者を私怨に委ねて殺してしまえば殺人か……  
一理ある。」

脇腹の銃創に押し当てられていた二ナの手を振り払って自らの手に置き換え、身動きをしたガトーが呟く。自分の体の上で起った異変に気付いた二ナが思わず叫んだ。

「ガトーっ！」

「何っ!？」

状況の変化が齎す感情の意味は異なる。だがその先の現れる二人の反応の結果は驚嘆の二文字。衝動的に動きを止めた二人を置き去りにしてガトーの体が動き出した。体を捻る度に、腕を、足を動かす度に襲い掛かる猛烈な痛みがガトーの表情を曇らせる。だが敵国の教本にまで名を残した伝説の撃墜王はその口を堅く噛み締めて、呻き声一つ漏らさず上体を起こした。

「どいてくれ、二ナ。此処から先に君は来てはいけない。」

ガトーの血塗れの手が二ナの宇宙服に押し当てられる。掠れた血糊が新たな赤を二ナの服に上書きして異なった色調のモザイクを織り成した。意志を伝えるその手に加わる力は流れ出た血の量に等しいかの如くにか弱く、それを補うかの様な強靱な意志が二ナの体を押しつけようと。

「ガトー、何を　だめっ、動かないでっ！」

ガトーの強い意志に逆らえなかった二ナの体が絶る言葉だけを響かせて血塗れの床の上に残された。傷付きながらも誇りを捨てない猛禽の輝きがコウの姿を睨み付け、宿木代わりに羽を休めた二ナの体をどけた手が冷たい床を叩いて上体を支える。次に選択するガトーの行動を予期した二ナが叫んで制止しようとガトーの肩に手を掛けた。

掌に伝わる懐かしい感触と夥しい震え。彼女が愛した嘗ての男は傷の痛みと郷愁の温もりを感じながら、しかし振り払う為の努力を怠らない。全身の力を両足に込めて、置かれた二ナの両手を振り解いてゆつくりとコウの眼前に立ち上がった。

「だが、コウ・ウラキ。貴様は間違っている。」

呆然と見据えたまま動けないコウに向って、苦悶の表情すら噛み殺したガトーが轟然と言い放った。仁王立つその姿を止める事も出来ずに見上げる二ナの頭上でガトーの、以前と変らぬ声が強くコウに対して宣言する。

「…… 私は、まだ戦えるぞ。私を討って貴様の本懐を遂げられると感じるのならばそうすればいい。誰も貴様を怨みはしない。」

「何を…… ガトー、貴様あつ！」

ガトーの言葉に我に返ったコウの右手は銃を振り翳す事を躊躇わない。だがその構えはおよそ戦闘教則を無視した無様な物だった。伸ばした右手はがくがくと震え、支える左手は震えを押さえる為に右腕の肘を握り締めて。狙いの定められないジレンマがバイザーの陰に隠れたコウの表情を焦りに歪める。

「戦いは常に私怨によって始まると以前、私は貴様に言ったな？」

嘗ての私もそうだった。ソロモンで散った大勢の仲間とドブル中将の怨みを晴らさんが為に連邦と戦い、大勢の兵士をこの手で葬った。貴様の今はあの時の私と同じだ、何も変わらん…… だがな。」

微かな微笑みすらも浮かべて訥々と語るガトーの声はコウの表情を少しづつ変えていく、その変化は跪いて呆然と見上げる二ナの目にも明らかだった。殺気に満ちた視線が緩み、眉間の皺が薄れていく。それはまるで道に迷った破戒の者が新たな悟りを開く瞬間に起る変化にも似て。

そしてその事実が二ナに与えた物は予期せぬ、いやコウが此処に来る前にガトーと交わした会話の内容だった。頭の中で繰り返されるあの時の一節、ガトーの望みが二ナの思考に衝撃を加えた。

ガトー、あなたはコウに何をしようとしている!？」

「私は今大義を持って戦いに臨んでいる。そして自らの犯した罪が意味ある物に変わる瞬間は誰の身にも訪れるのだ。貴様はここまで血塗れの手を握り締めて『星の屑』に深く関わった。そしてこの戦いを通じて選択せざるを得なかった自分の行いに対して自戒の念を覚える今この瞬間こそが、貴様にとって『私怨』を『大義』に変える為の機会だ。」

「俺の、罪が…… 意味ある物に、だと!？」

「そうだ。」

強い肯定の言葉が迷いに満ちたコウの心を激しく打った。鷲色の

瞳に宿る強い意志、そして鏢迫り合わせた二人だけにしか判らない信頼感が敵味方の境界を喪失させて繋がる。

「既にコロニーは大気圏突入の最終段階に入った、もう誰にも止められん。だが此処で私を討つ事は貴様にとって一つの決着を着ける事になる。私に勝つたと言う事実が貴様を変える。それはこの先に広がる未来への分岐点になる筈だ、罪と大義の。」

「待て、ガトー。貴様が口にする、貴様自身の大義とは何だ。貴様らの目的はコロニーをジャブローに落とす事で連邦軍を混乱に陥れる事ではなかったのか？」

「違う。だがそれは人それぞれに違う物だ。私には私の大義があり、ここで貴様に語るべき事ではない。それにそれは」  
揺らめいていたガトーの体が突然静止した。両足を肩幅に広げてしっかりと踏ん張り胸を張ってコウの前に立ったその姿は生気に満ちている。

強い威厳を放ちながら、しかしその表情は暖かく。連邦軍が『阿修羅』と信じた男はその非なる意味を掲げてコウの眼前で真の表情を見せていた。

「私を討つた後に分かる。この戦いを通じて私と戦った貴様こそが手に入れる事の出来る唯一つの物。その時貴様が踏み拉いた万骨の命は貴様に大義を与える筈だ。今の私がそうである様に。」  
討てと命じるガトー。撃とうとするコウ。だが右手に力が入らない。指は命に掛かっているのにその冷たい爪を引く事を躊躇っている。

「どうした、コウ・ウラキ。私を撃て。此処で撃たねば貴様は一生罪の意識に苛まれて生きて行く事になる。貴様がこの先宇宙そそで生きようとするのなら迷うな。そうしてこそ貴様は初めて私の」

「やめて。」

二ナの手に握られた銃が迷う事無くコウの体に向けられている。

それはその場に居合わせた演者が『全く』予想だにしなかったシリオだった。ガトーを捉える事も出来なかったその手に震えは無く、彼女の瞳は真直ぐ銃口の先に存在するコウの顔を睨み付けたまま動かない。

銃を構えた二ナの姿を直視して愕然とするコウと振り返って未練な視線を向けるガトー。二ナの行為を暗に非難するガトーの視線を無視した二ナがコウに向って告げた。

「やめて、コウ。」

尋常ではない怒りの焰が二ナの蒼を染め上げる。血の気を失った顔色がその光をより強調して彼女の瞳を輝かせて。それは決して苦し紛れや成り行きで起こせる類の物では無い事にコウは気付いた。

二ナは決意をしたのだ。

自分よりガトーを選ぶという、余りにも身勝手な選択を。

「何故…… どういう事なんだ、二ナっ！ 何故俺を」

コウの言葉を阻む様に銃声が木霊した。反動で跳ね上がる二ナの肘、天を突く銃口。吐き出された弾はコウの遙か後方の構造物に跳ね返って甲高い金属音を残して消える。柵引く硝煙が消え切れないままの銃口を再びコウの姿目掛けて突きつける、二ナ。

「何故なんだ、二ナっ！？ そいつは俺達を、ガンダム二号機をつ  
！」

そして取り戻せない平和な日々を。

詭弁を弄しながら血相を変えて訴えるコウの視界の中で二ナの瞳から怒りが消えた。代わりに浮かび上がる不思議な色彩をコウは言葉で表現出来ない。コウが今まで見た事も無い二ナの表情が其処にはあった。

例えて言うならそれは絶望と言う名の暗闇に似た、深い悲しみ。

「そうじゃない…… そろそろ事じゃないのよ、コウ。」

二ナの言葉と共にもぎ取られる半身。コウの中に残った物は行き場の無い怒りしか無い。押さえ込まれていた薬物が再びアドレナリンと反応して抑え難い殺人衝動をコウに齎す。だがその手が再び誰



かを撃つ行為に染める事は有り得なかった。

罪人同然の自分に道を指し示そうとした好敵手、そして今でも愛して止まない掛け替えの無い者。自分のこの手が今もし誰かを殺さなければならぬのだとしたら、それは間違い無くコウ自身。

鬼面を浮かべて矛盾に耐えるコウの表情が壊れていく。人としての理性を失いそうになりながら、声も無く二人の姿を睨み付けるその前で二ナがガトーに寄り添った。磁力靴のスイッチを切って床を蹴る二人の体がゆっくりとコウの傍を通り過ぎて、非常用のエアロツクへと泳ぎだす。

「さて、待つてくれ、二ナっ！」

去っていく二人の姿を追って叫ぶコウと振り返った二ナの視線が束の間交錯する。遠ざかる愛しい蒼を追いかけてコウが尚も叫んだ。「二ナ戻れっ、戻ってきてくれ。傍にいてくれるんじゃないのか、いつも、俺の傍に　　二ナアッ！」

その言葉は届いている。言葉だけではなく紡がれる文字の一つ一つが二ナの瞳を揺り動かす。だが彼女の体が、動きが、そして行き先が変わる事は無い。迷わず辿り着いたエアロツクの通路に降り立つ二人の姿目掛けてコウの血を吐く様な叫びが轟いた。

「二ナアッっ！！」

その叫びが残響を残して管制室を揺るがせる。だがその言葉の残滓を締め出すかの様に、機械仕掛けのエアロツクはその扉をモーターの軋みと共に閉じていく。扉の影に消えて行くガトーの背中、そして最後までコウの姿を見つめ続けた悲しい蒼が冷たい金属に遮られて。

エアロツクの摘みが回転してロツクされた事を無機質なチャイムでコウに教える。それはコウにとっての全ての終わりだった。

ありとあらゆる物を失ったコウの口から吐き出される獣の咆哮は彼の中に流れる血の一滴まで震わせる様に、唯一人残された広大な空間を埋め尽くして響き渡った。

「うおおああアアッっ！！」

夜明けにはまだ程遠い時間だった。目を開けた暗闇の先で蒼白く光る二つの目はエボニーだ。コウの叫びに驚いたエボニーは飼い主の異変に驚いて距離を取ったままじつと成り行きを観察している。心配するでもなく、かといって無視する訳でも無く。

今のコウにとっては彼の持つ独特の距離感があった。少なくとも過去の幻影に苛まれる心を覗き込まれる事に抵抗を感じたり、心を碎いて押し隠すような事をしなくて済む。

「……ごめんよ、エボニー。驚かせちゃったか。」  
ベットに横たわったまま差し出した手が夢の中に消えて行った。二ナの代わりの何かを求める。狭い部屋の片隅で蹲っていたエボニーは飼い主の発作が収まった事を確認すると緩やかな足取りで近付いてするりと頬を摺り寄せた。

闇に溶け込んだ髭がコウの指に固い感触を残して消える。その全ての現実が、コウに失われてしまった現実と取り戻す事の出来ない貴重な者の存在を知らしめる。

「二ナ……」  
失った物はあまりに大きく。言葉は溜息と共に黎明の部屋を舞う。エボニーの両目が何故か舞い飛ぶ言葉の欠片を追う様にコウの頭上を緩やかに彷徨う。目に見えない何かが消えた事を確認したかの素振りのエボニーは、徐にベットの上に飛び上がってコウの体に身を寄せた。

丸くなって後ろ足に顎を預ける様を窓から差し込む月明かりで眺めながらコウの手が静かに頭を撫でる。手の動きがエボニーの咽喉鳴りの始まりと共に止まり、コウの目は古ぼけた梁の剥き出しになった冷たい天井を見上げて。

「何故、あんな夢を……今まで一度も見なかったのに。」  
その眩きには一抹の後悔が混じる。昨日二ナと出会わなければあの夢の続きを見る事は無かっただろう。偶然の邂逅と交わす言葉がコウの記憶のか細い川を遡って悲劇の源流に到達した、ただそれだ

け。

なのに何故、こんなに心がざわめくのだろう？ もう一度二ナと共に過ごしたいと思っっているのか。誰にも知られない様に封印した心の奥底に眠る、自分自身の身勝手な理由で。

「……何を馬鹿な。自分から手放しておいて、今更」

呟きはコウの中に隠された願いを否定して、コウ自身に与えられた罪を言葉によって思い知らせる。吐き出された後悔を照らし出す様に二ナの瞳と同じ蒼光が、宇宙を駆けた時と変わらぬ冷たさでコウの眠りを誘った。

その部屋の空気が異常に冷たいのは、館内電話以外に何も乗っていない古ぼけた机の向こうに坐る白髪頭の男のせいだろうと『ダンプテイ』は思った。

机の上に投げ出した両手を顎の前で組みながら見上げるその姿は厳格な為政官の姿を髣髴とさせる。だが肘を掛けたその机を広大な物に見せる小さな身体が彼の印象を正義や善意とは程遠い所に存在する悪意を感じさせる。端的に表現するならば正に地獄の底を徘徊する小鬼と言った所か。直前に立つ『ダンプテイ』の顔を焦点の定かではない瞳で睨み上げながらその小鬼は低い掠れ声で告げた。

「次の作戦が決まった、一週間後の未明になる。」

小鬼の手が解かれて机の引き出しを静かに開く。その間も視線は『ダンプテイ』の動きを注意深く観察したまま離れない。噂によると過去に命を狙われた経験から引き出しの中には常に安全装置を外したままの拳銃が作戦指示書と共に収められているらしい。

その逸話がこの小鬼を揶揄する為に生まれた物が真実なのかは定かでは無いが、少なくとも他の部隊長から流れて来た話を疑う事だけはこの小男の人となりを見てからでは不可能だろう。少なくとも居ながらにして身の危険を感じさせるだけの邪悪さを、この小鬼が持っている事だけは疑い様が無い。

注意深くゆっくりとファイルを取り出すその手は小さく、細い。

骨を思わせる小鬼の手が作戦ファイルを『ダンプティ』に向つて机の上を滑らせた。『ダンプティ』の視線は小鬼の顔からファイルへと自然に誘導されて、その分厚い紙の束を取り上げた。

開いた先に有る書類は全て手書きによる物。この部隊の作戦指示書が誠に手間のかかる手書きによって作成されている理由は完全なる機密保持の為だ。他の部隊の様にコンピュータで作成する指示書の方が手間が省けて時間的効率がいいのは確かなのだが、その過程に於いて必ず何処かしらに痕跡が残る可能性が無いとは言えない。いかに人手を動員して完全に消去したと確認したとしてもだ。

万が一この非合法部隊が世間の目に曝された時にその存在を根底から否定する為には常日頃からの証拠隠滅が不可欠な事項だ。故にこの部隊の作戦部では立案に際して大量のボールペンが消費される事になる。今の時代には希少価値極まる商品であるにも関わらず、だ。

柔らかな筆記体はその文字を書いた者の姿や心根を読んだ者に思わせる。だがそこに書かれている文面は書体に反比例するかの様に非人道的で冷酷だ。冒頭のページを開いて一瞥をくれた『ダンプティ』の期待を裏切る事の無い文面は、彼の視野に作戦の概要となる名称を文字列で伝えた。

「オークリー基地、ですか…… 軍の施設、それも基地を襲撃するのは今回が初めてですね。」

「基地とはいえ、まともな戦力の存在しない駐屯地の様な物だ。」

「…… 多少の火器とモビルスーツは存在するがな。前回の研究所よりは組し易いだろう。」

「ですが准将、今回の相手は曲がりなりにも訓練を受けた軍人です。それにモビルスーツ部隊が配備されていると言うのであれば今までの様には」

「分かつている。」

『ダンプティ』が懸念する危惧を一蹴する様に小鬼が不機嫌な視線を向けた。ファイルを取り出した筈の手は何時の間にか引き出しの

中に収められて何かを握っている。

成る程、噂は本当だった様だと『ダンプテイ』はその姿を視界に収めながら心の中で呟いた。何らかの敵意を見せればこの男はすぐさまこの場で処断する覚悟と権利を有している事を思い出しながらも、しかしその事を不愉快に思いながらも極力表面に出さない様に努めて『ダンプテイ』は小鬼の次の言葉を待った。

「今回は予備の小隊をつける。新規参入の隊員によるモビルスーツ五機だがそれで十分事足りる筈だ。」

「新規、ですか。」

言葉を受けて『ダンプテイ』の手が付箋の張られたページを開いた。今回の作戦を遂行する為に選定された兵士の一覧が其処には記載されている。地上部隊、モビルスーツ部隊、基本的には『W・W・W』中隊の面々の名前とデータが細かい文字で書き連ねられている。“これも手書きとは作戦部の連中もまめな事だ”と変に感心しながら眺めるその最後に、今回参加する新戦力の兵士のデータが追加されていた。

「……ざつと見る限りでは一年戦争以降に軍に参加した者の様ですね。能力的には十分なのですか？」

「不服かね？ 中佐。」

『ダンプテイ』の言葉に込められた異議申し立てを明らかな不快感で現す小鬼は三白眼の両目を細めて睨み上げた。粘り付く様な視線は『ダンプテイ』の視線を遡って網膜内に浸入し、臍腑を軋み上がらせる様な嫌悪感を齎す。

「いえ、ですがフォーメーションを組むと言うのであればそれなりの戦歴を有する者で無いと小隊内の戦闘力のバランスに欠けると思っています。」

嫌悪感を小鬼に悟られない様に視線を逸らして尚もファイルを捲りながら言葉を続ける『ダンプテイ』。その目があるページに辿り着いた時、彼のぼんやりとしていた視界はそこに書かれている指示書の内容を読み込む為に焦点を合わせた。

「バランス等。今回も貴様達の任務は基地敷地内の完全制圧だ、実働は地上部隊が行う。モビルスーツ隊は前回と同様、作戦を完了した地上部隊と同時に撤収しろ。」

言葉の端々に侮蔑の色が見え隠れするこの小鬼も『アースノイド至上主義』論者であるティターンズの一員だ。恐らく『ダンプティ』の経歴が元ジオンの兵士である事を知っている彼にしてみれば自分の配下にこの様な男が存在している事すら許し難い事なのだろう。

だが与えられた任務を常に完璧にこなす自分達の中隊をさしたる理由も無く解隊したり閑職に追い込む事も出来まい。積み上げて来た実績こそがこの小鬼に対する唯一の抵抗手段である事を理解している『ダンプティ』はいつもの物言いに顔色一つ変えずに、小鬼が口走った作戦の概要について尋ねた。

「成る程、作戦としてはほぼ前回と同じと考えても宜しいのですか？ 対象を保護した後に撤収、『ボロゴーブ』の証拠隠滅を確認して原隊帰投と言う流れで。」

「対象は殺害しろ。『ブージャム』にはそう命じてある。口頭でな。」

冷徹な声で下される命令に、ファイルにクリップされた対象の顔写真を見詰めていた『ダンプティ』の視線が動いた。思わず目を離れた視線の先にある小鬼の濁った両目を見詰める。

「バスク大佐のご命令だ。今回の対象は発見次第に速やかに殺害、その後合流して撤収しろとお達しだ。」

自分よりも階級が下の者に対して敬語を使わなければならないこの組織のあり方はどこか歪んでいる、と常日頃から『ダンプティ』は思っている。

小鬼との会話の端々にたまに上る『バスク・オム』と言う人物との面識は無いが、さぞや優秀な士官なのだろうなとその形を想像して、目の前の『准将』と比較してしまう自分が居る。だが彼から下されるオーダーこそが『ダンプティ』をして『非人道的』な所業であると断定せざるを得ない内容に満ちている。

二つの事実が物語る『バスク・オム』と言う人物の完全な人間像。まかり間違つても軍の上位に存在してはいけない筈の、独裁者。

「それについては疑問があります。よろしいですか、准将？」

出来るだけ相手の自尊心を傷つけない様に柔らかな声音で尋ねた『ダンプテイ』の思惑は予想通りの成果を上げた。無言で頷いて言葉の先を促す小鬼の表情を確認して『ダンプテイ』は言葉を続けた。「殲滅が目的ならば地上部隊は今回不要なのは無いでしょうか？ 敵性戦力を完全に無力化した後に周辺を封鎖、その後に『ボロゴープ』による『封じ込め』を行った方がこちらの損失も少なく、不確定要素も少ない様に自分には思えるのですが。」

「この事は依頼主の意向ではない、あくまでもバスク大佐の私的見解によるご指示だ。表向きはあくまでも対象の保護、しかし戦闘行動時における不慮の事故と言う物はしばしば起こり得る物だ。」

「つまりは保護すると見せかけて殺せと？ 何故その様な回りくどい事を。」

「貴様がそれを知る必要は無い、と言いたい所だが」

小鬼の顔が『ダンプテイ』の視野の中で醜悪に歪んだ。人の心の醜さを全て表情に凝縮した様な嘲笑いを浮かべた小鬼の口が口角を捻り上げて、愉快な声音で眩きを漏らした。

「その娘は『月面人<sup>ルナリアン</sup>』だ。バスク大佐にとって見ればその様な人種の力等借りたくは無い、と言つた所ではないのかな？ 如何なる能力を持つておるのかは知らんが所詮はスペースノイド、一人や二人居なくなつた所で未来が変わる訳ではない。そうは思わんかね、中佐？」

同意を求める表情に嘲笑を浮かべて。挑発する様な小鬼の行状は果たして『ダンプテイ』の心中から感情的な憤りを引き摺り出すまでには到らなかつた。怒りを微かな咳払いに変えて『ダンプテイ』が返答する。

「閣下の意を推測にて判断する事には同意出来る立場ではありませんが、ご命令と有らば速やかに拝命いたします。」

「ほう、命令とあらば同種殺しも厭わんか。流石は元ジオン、この地球にコロニーを降らせただけの事はある。貴様らが幾ら自由と独立を謳った所で全ての源は此処に存在していると言うのにな。」

畳み込む様な嘲りを続ける小鬼の顔が変化する。笑みが消え、心からの軽蔑だけが表情に残ったまま『ダンプテイ』をねめつけた。

「良かるう。その情の薄さこそが貴様を此処で雇っている唯一の理由。貴様がそれを躊躇えば、この小娘の未来はそのまま貴様に降りかかる未来である事を覚えておけ。」

小鬼のその言葉と同時に『ダンプテイ』の手にしたファイルが勢いよく閉じられた。パン、と言う軽い音は彼の手に込められた力が思った以上に強かった証。おくびにも出さなかった怒りは彼の掌を通じて罪の無いファイルに叩き付けられた。

「では中佐、速やかに準備に移りたまえ。解散。<sup>デスマス</sup>」

小鬼の宣言に空いた右手をこめかみに当てて敬礼する『ダンプテイ』。だがその表情はファイルの中に記された対象の顔を思い浮かべたまま焦点を失って小鬼の後ろの空間を彷徨っていた。

「中佐。」

司令官室を退室した『ダンプテイ』を出迎える『トーヴ1』の声はどこか落ち着きが無い。その声の根拠が自分の表情に拠る物だと認知するのにさほどの時間は掛からなかった。無意識に力の籠る眉間に浮かんだ皺の存在を軽い痛みと共に確認して『ダンプテイ』は旧知の部下の顔を見た。

「酷い表情です。何かあったのですか？」

心配そうに尋ねる『トーヴ1』を他所に『ダンプテイ』は手の中のファイルを差し出した。

「次の作戦が決まった。決行は一週間後の未明、内容は其処に記載してある通りだ。『トーヴ1』は速やかに関係部署に作戦計画書を回して詳細な時間割タイムテーブルを作成しろ。補正と承認には私も立ち会う。」

饒舌な語り口は心の疚しさを隠す為の下地として『ダンプテイ』



の本心を塗り潰そうと。しかし長年生死を共にして来た『トーヴ1』にその様な姦計が通用する筈も無く。言葉の裏に隠された憤りの炎を関知した『トーヴ1』が越権を覚悟の上で尋ねた。

「中佐、この様な発言は差し出がましい事だとは思うのですが、もし次回の作戦が中佐にとつて忍耐の限界を超える不条理な物であるならばお受けになる必要は無いかと。我等は傭兵です、作戦の不参加には懲罰ではなく報酬受領権利の剥奪が契約によって取り決められている筈です。今からでも遅くありません、准将の所に戻って作戦の辞退を申し入れるべきです。」

「いや、ケルヒヤー。」

否定の言葉を連ねながら一瞬の葛藤によって言葉が詰まる。

先程の小鬼の捨て台詞をまともに捉えるほど『ダンプティ』は世間知らずではない。金銭でのみ繋がりを持つ傭兵に対して作戦の不受理を理由に処罰でもしよう物ならその影響は恐らく旅団全体を構成する全ての兵士に波及するだろう。それが士気の低下で済めばいいが内部分裂や反乱の恐れまでが予想されるとなれば話は変わる。

旅団を預かる長として君臨する准将の立場が危うくなるばかりではなく、ひいてはこの部隊の存在そのものが日の目を浴びてしまう可能性も考慮しなくてはならず、そうなれば今日まで築き上げて来たティターズの信頼と言う物は瞬時に瓦解してしまつたろう。最もその前にティターズは旅団に対して何らかの措置を施す筈では有ろうが。

『ダンプティ』がケルヒヤーの提案に対して否定的に応えたのはそういう脅しに屈したからではなかった。

「私が断つてもこの作戦自体が御破算になる事は有り得ない、ならば私が出る。……出なければならぬ理由が出来た。」

「? と、言いますと?」

『ダンプティ』の発言に作意を感じたケルヒヤーが鸚鵡返しに尋ねる。心情を配慮しようとする表情から上官の意図を読み取るうとする視線へと切り替わつたケルヒヤーの視線を『ダンプティ』の目が

辿りながら、ポツリと呟いた。

「潮時だ。」

その言葉が意味する物はこれ以上ここに留まって戦い続ける事が不可能になったと言う事。そして自らの矜持を穢してまで『操りし者共』の情報を集める事を断念すると言う事に他ならない。それは即ち今回の作戦に対して密かに叛旗を翻すと言う事を『ダンプティ』はケルヒヤーに対して宣言した事になる。

ケルヒヤーが上官の意図を理解するのに要した時間はほんの瞬き二回の間。僅かな間を利用して自分の心の整理を付けたケルヒヤーの表情は以前の落ち着きを取り戻して『ダンプティ』に向き直った。「ではその事も含めて時間割の作成を開始します。最終目的地はどこへ？」

「ハワイに隠遁している『中佐』を頼ろうと思う。カリフォルニアベースからなら直通便が使える筈だ、宇宙へ帰るのなら彼を頼るしかあるまい。」

「了解しました。携行人数は？」

「私とお前、そして」

一瞬言葉を切った『ダンプティ』の視線がケルヒヤーの手の中のファイルへと移動する。視線を追ったケルヒヤーが作戦計画書を開いて冒頭のページに貼り付けられている今回の目標となった女性の顔写真を見詰めた。

「<sup>パッケージ</sup>対象となったその女性だ。」

ケルヒヤーの視線が顔写真を睨んだまま離れない。眉間に皺を寄せて過去の記憶を掘り返そうとして微かに呻きながら呟きを漏らした。

「この女性……確か、何処かで。何処だったか。」

彼の脳裏にある千を越える紳士録を捲っても其処に映し出された女性の容姿と合致する者は見当たらない。ましてや戦場一筋の彼にとって女性の知り合いは数少ない筈なのだが、それでも彼の記憶はその写真の女性の面影を整合させるには到らなかった。記憶の壁に

折り畳まれた微かな手掛かりまでも掘り起こそうと躍起になるケルヒヤーの容姿を見かねた『ダンプティ』が、これ以上の負担を強いる事を軽減させようと。

「グワンザンだ。覚えていないか？」

『ダンプティ』の放った短い言葉がケルヒヤーの記憶に明確な輪郭と映像を齎した。記憶の淵に沈んでいたその時の光景と艦橋に座り込んだまま泣き叫んでいた民間人の顔を合致させたケルヒヤーの表情が驚愕に埋め尽くされる。

「そんな馬鹿な、何であの女性が」

ケルヒヤーの最後の記憶から此処に到るまでの纏れた経緯を、彼の持つ人としての論理は説明する事が出来ない。無骨な素顔全体に広がる困惑の色を隠せないまま『ダンプティ』を見つめる視線は軍人とは思えないほど人間味に溢れている。自分に向って投げ掛けられる視線に対する答えを見出せない。其処まで説明される事は今の自分の立場では有り得ないであろう。まま『ダンプティ』は言った。

「理由は分かん。だが今回はそんな事は二次だ、とにかく『ブージャム』よりも先にこの女性を探し出して保護する。先の事はそれからだ。」

その口調には強い強制が籠められて。『ダンプティ』からの言葉を部下に対する命令と認識したケルヒヤーは崩れた姿勢を正し、踵を強く鳴らして敬礼した。

「了解しました。では『トーヴー』は現時刻を持って作戦の具体的な立案に掛かります。明後日には全ての準備を整えて作戦地域に移動できるかと。」

「よし、では直ちに取り掛かれ。時間割は『トーヴー』の作成した計画に沿って実行する。各部隊にも順次その事を伝える様に。」

「はっ！」

返礼と共に敬礼を解いたケルヒヤーが踵を返して『ダンプティ』に背を向けた。少ない時間を惜しむ様に『ダンプティ』の見送る視

線に目もくれず、急ぎ足で廊下の先へと向うケルヒヤーの背中を頼もしく思う。彼が明後日と言うからには遅くても明日の深夜までには全ての準備が整うだろう。

『W・W・W』の作戦行動が未だ嘗て破綻せずに完璧な成果を上げ続けているのは、実はケルヒヤーの実務能力に負う所が大きい。そして今回も彼の能力は最大限に発揮され、必ず自分の思惑通りの結果を齎すに違いない。

遠ざかつて行く、軍人を絵に描いた様な幅広の肩から伸びる逞しい手に抱えられた一冊のファイル。『ダンプティ』はケルヒヤーの背中から彼の物となつた作戦命令書に視線を移動させて、物憂い視線を其処に繰れながら思わず呟いた。

「あの女性も、何の因果か」

研究所の最上階の一面を占める広大な窓から黎明の空を見詰めるハイデリツヒの双眸は空の光を受け止めて血の様に赤い。瞬きもせずに凝視する夜明け前の暗闇の中で、差し込む微かな光は其処に佇む二人の人影の輪郭を朧げに象ろうとしている。ハイデリツヒの背後に控えた、未だに薄い輪郭の人は控えめではありながら口調に微かな非難の色を忍ばせて尋ねた。

「宜しいのですか、所長。あのような軍人を信用して。」

背後から問い掛けられた言葉を無視するかのようにハイデリツヒは沈黙している。厳かに流れる一瞬の静寂を愉しむかの様な微かな笑みを浮かべて、ハイデリツヒの瞳は空け行く空を変えていく紅の閃光を瞬く事無く凝視して。その姿を人と言う殻を被った全く別の存在で有る様に感じてしまうのは背後に控える男だけが抱える印象では無い。

見栄えとか印象とかのおよそ人が気を配る外見に全く配慮をしないその風貌から伸びる白の蓬髪が微かに彩られるまでの寸暇の時を過ごした後に、ハイデリツヒの口が開いて男の問い掛けに応えた。

「信用？　する訳が無い。」

言葉短く吐き捨てたハイデリツヒが踵を返して男の方に向き直った。背後の朝焼けの光によって影取られた表情に、誰に対して向けられた物かも判然としない嘲笑が張り付いたまま。

「あのバスクと言う男は正直言つて無能だ。テイターズと言う組織があつた男を重用する限り何れは致命的な失態を犯して全てを崩壊に導く事は間違いない。無能は無能なりに現場であくせく働いておけばいい物を、変な色気を出して政治等と言う分不相応な魔窟に足を踏み入れるからああいう風に肩肘張つて生きていかなばならない羽目になる。まさに道化<sup>ヒエロ</sup>だな。まあ、尤も、」

ハイデリツヒの嘲笑が崩壊する。壊れた先にある彼の感情の表現は更なる邪悪さを増して彼の顔を支配した。

「　　そうでなければ困る。道化は道化なりに精一杯観客の要望に応えて踊り続けてもらわねば、わざわざこの研究所をテイターズ直属の機関に推し進めた意味が無くなる。彼らの力無しには『実証』にも支障をきたすのでね。」

「ですが故にあの軍人がこちらの思惑通りに動くと言う保証も無い。無能と言えども今日までにあの地位にまで登りつめた人物ならば何らかの権謀術数は持ち合わせていると考えるべきでしょう。何もこの様な素質の持ち主の参画を奴に委ねなくても　　」

「奴は殺そうとするだろうな、あの女性を。」

それが当然であるかのように断言するハイデリツヒの表情から悪魔の笑みが消える事は無い。口にしたその結果までもがハイデリツヒの想定内の事柄である事を確認した人影は、その意図を理解出来ないまま口を噤んで続きを待つ。

「奴は無能では有るが正しく軍人だ。恐らく私の申し出を受けて自分が下克上を果たすと言う願望よりも、組織のバランスが崩壊すると言う危機感を優先させるに違いない。そういう点においては奴は矛盾だらけの、中途半端な人間なんだよ。そのまま私の申し出に乗つておけばテイターズ等と言うちっぽけな一勢力だけではなくこの人類の生存圏全ての権力を手中に収める事が出来ると言うのに。だ

が奴の様な小者が抱える矛盾によって引き起こされる判断が、今回の私の思惑でもある。」

「この軍人が女性を殺害しようとする事が、所長の思惑……で  
すか？」

人影の問い掛けにハイデリツヒの表情から笑みが消えた。背後から差し込み始めた朝の光を受けた眼鏡が怪しく輝いて彼の両目に宿った狂気を蔽い尽くす。

「“ニュータイプ”としての彼女はまだ生まれてもいない、謂わば覚醒前の状態だ。自分の仕事や研究の影に見え隠れする力を彼女や周囲の人間は唯の才能としか思わないだろう。実際彼女のなし得た仕事は奇跡と呼べる代物ではあるが世の理の常軌を逸したと言うほどの物でもない、あくまでも人の考えの及ぶ常識の範囲内に留まっている。もし彼女がその能力を完全に発揮していたとしたらこんな物では済まない、恐らく此の世の人類誰一人扱ふ事の出来ないガンダムが出来上がっていたに違いない。」

「何故、それが分かるのですか？」

「彼女の身边を調査してその兆候が現れていないかを精査したからだよ。生まれてから現在に到るまでに彼女が残した足跡 各学校の成績はもとより論文、作文の類に到るまで。全ての綱目に於いて検討した結果、彼女がニュータイプとして覚醒したと言う事実を見出す事は出来なかった。尤もあのガンダム三機の基礎理論を立ち上げた時のデータには、僅かながらニュータイプ特有の閃きによる論理の跳躍が見受けられたがね。」

この人物が其処まで検証して断言するのならば、彼が欲して止まないあの女性が覚醒前のニュータイプである事は十中八九間違いないのだろう、とハイデリツヒの正面に立って朝日に目を細める人影は思った。

フラナガン・ロムの右腕、そしてニュータイプ研究の第一人者としてジオン国内に名を馳せ、自他共に認めるフラナガンの後継者と目されながら理由不明の逐電によってフラナガン機関から籍を抹消

された狂気の科学者。ことニュータイプ理論に於いてはその卓越した分析力と非道とも言える実証によって師をも凌ぐ一家言を構築し、その師をして『生まれてくるのが十年早かった男』と言わしめた鬼才。

エルンスト・ハイデリツヒ博士。

「ですが所長、分かりません。何故所長は彼女の略取をテイターンズに委ねたのです？ あの軍人が彼女を殺そうとするという事まで予想していながら。」

「…… 分からのかね？ 不勉強だな、君は。」

「は……？」

明らかに気分を害したと言わんばかりの冷たい声が入影の口から言葉を奪った。ひゅうと漏れるハイデリツヒの吐息の次に続く言葉を待つ瞬間に訪れる恐怖は筆舌に尽くしがたく、自らに与えられる死の宣告を待つ咎人に似ている。

実際ハイデリツヒの逆鱗を逆撫でて此の世から姿を消した部下の数は彼が知るだけでも数え切れない。人の命等屠畜と同列にしか考えない狂人が気の赴くままに下す極刑を、命懸けの弁明で回避しようとする有りつ丈の思考回路を動員する人影。冷や汗を流してハイデリツヒを見詰める怯えた目を睨み付けた狂気は、虹彩に湛えた狂気をそのままに言葉を繋いだ。

「ニュータイプの最も効果的で、且つ効率の良い発動条件は何だね？」

危険区域を越えて恐怖に汚染される思考回路に忍び込むハイデリツヒの問い掛け。楔の様に打ち込まれたその言葉を必死で引き抜こうと人影は脳内記憶の巨大な本箱を引つ繰り返して答えを探す。膨大な資料と研究の結果によって構成されたニュータイプ理論の序章の文面を掻き分けながら答えを探す人影は、その手で正解となる文面を掴み取った。

「死に直面若しくはそれに類する環境に置かれた時、自己防衛本能によって発動するケースが一番効率的で最大の効果を上げる」

「命拾いをしたな、君は。」

両手を後ろ手に組んで、人影があつた男の姿が差し込んでくる朝日に晒されて輪郭を露にした事で初めて分かる、冷や汗で顎まで濡らした若い科学者を眺めるハイデリツヒ。身体の何処にも寸鉄も帯びていない事を理解していながら、ハイデリツヒの吐いた台詞には強烈な信憑性がある。例えどの様な状態でも彼は対象への懲罰をいとも容易くやってのけるには違いない。　　どういふ手段かは分からないが　　と言う恐怖と、それを免れたと言う安堵が若い科学者の膝から力を奪つた。がくがくと崩れそうな膝を残量僅かな意志の力で支えてハイデリツヒの次の言葉を無言で待つ。

「そう、彼女を未だ体験した事の無い地獄へ追い遣る事が今回の目的だ。他のニュータイプ同様、圧倒的な死の匂いこそが彼女の中に眠る資質を目覚めさせる事になる。それが全ての始まりだ、彼女が『至高』に辿り着く為の。」

ハイデリツヒの顔に再び笑顔が戻つた。

「それに彼女を生かしてオークリーから脱出させる為の手も既に打つてある。ニュータイプとして覚醒した彼女ならば手駒はそれだけで十分な筈だ。科学の力が暴力を圧倒する様を私も直にこの目で確かめてみたい所だが」

その景色を想像するハイデリツヒの視線が広大な空間をスクリーンに見立てて泳ぎ回る。命の危機が去つた若い科学者は目の前に立つ、狂気が影を潜めた上司の姿を額の汗を拭いながら見つめて言った。

「彼女がこの研究所に合流すればそれも叶います。今いる彼らの能力が最大限に発揮されるモジュールが完成すれば、それこそ科学の勝利ではありませんか。」

死の捕囚より釈放された科学者の舌はまるで油でも注したかの様に滑らかに回る。だが彼の吐いたその賛辞はハイデリツヒの空想を中断させるには十分な迂闊さを孕んでいた。



宙を彷徨っていたハイデリツヒの瞳の焦点が不愉快な色と共に焦点を取り戻し、彼を至福の世界から呼び戻した無粋な輩と思しき男の顔を見詰めて吐き捨てた。

「彼ら？ 彼らとは誰だ？」

思わぬハイデリツヒの問い掛けに言葉を失う研究者。それはただ単に彼の言葉がハイデリツヒの機嫌を損ねてしまったと言う事実を知りえたと言うだけではない。その研究所に集う科学者達が私情と倫理を土塊の中に埋めてまでも解明と発展に邁進する研究成果の数々である『強化人間』

人工的に作られたニュータイプ達

以外に『彼ら』と言う言葉に該当する存在等、彼の見識に照らし合わせてみても思い当たりも見当たりにしないからだ。

科学者は自分の物言いが十分に理解されていないのではないかと自らの言語力の力量を疑い、再び同義の質問をハイデリツヒにぶつけた。

「いえ、ですから研究所内で実験体として『保管』している強化人間<sup>サンプル</sup>達の事です。数は少なくなりましたが彼らの力が十分に発揮される環境が整いさえすれば地球圏に類を見ない、最高の戦闘集団が完成するでしょう。我々の報告を心待ちにしている『株主』の方々に  
も

「君は『キク』と言う花を知っているかね？」

瞼を閉じ、片手を翳して発言を押し留めるハイデリツヒに感情は無い。人らしさの欠片も無くなったハイデリツヒの口がまるで機械仕掛けの様に動いて、声帯を通して発せられたとは思えない様な声で言葉を紡ぐ。

「『キク』、ですか？」

得体の知れない感覚に襲われながらやっとの思いで、だがそれが精一杯の言葉だった。若い科学者が尋ねるとハイデリツヒの瞼が微かに開いて彼の足元を見詰める。

「『菊』と言うのは今や連邦に吸収され尽くして帰属意識すら失つ

アイデンティティ

た東アジアに生息する花の名前だ。私はその中でも特に『和菊』と

呼ばれる物が好きなのだよ。」

唐突に展開する、何の脈絡も無い会話の流れに戸惑う科学者が声を出せないままハイデリツヒの表情を見詰めた。

『好き』と言う言葉を吐くその口には一切好意的な影は宿らず、淡々と語る口調が予め決められた台詞を読んでいるような気さえ、耳に入れる科学者の心に齎す。ハイデリツヒは目の前で立ち竦んだままの部下に何の興味も無いといった風情で更に続けた。

「『菊』を育てる園芸愛好家達はたった一輪の大輪を咲かせる為に惜しめない努力と手間をそれに費やす。……私が特に気に入っているのはそのやり方だ。実に合理的で理に適っている。」

「ど、どの様な育て方をされているのでしょうか。」

ハイデリツヒの会話の残した全てのキーワードから透けて見え始めるその答え。部下として長くハイデリツヒの片腕を務めてきた副所長と言う立場が理解するハイデリツヒの考えと、人としての良心の残る科学者として理解出来ないハイデリツヒの考え。

否定をすれば死、肯定すれば外道。尋ねた科学者の顔を暗い目で睨んだハイデリツヒが彼の心中の葛藤等歯牙にも掛けずに言い放つ。「自分が選んだその一輪を咲かせる為に、生まれて来る全ての蕾を切り落とすのだよ。……根より吸い上げた全ての物をその一輪の為に与えるのだ。そうした犠牲の果てに完成する作品こそが見る者全てを魅了し、支配下に治める『究極』の名に相応しい存在となる。」

暗喩によつて示されるハイデリツヒの意志を理解して息を呑む科学者の咽喉が鳴った。恐怖に歪む科学者の顔と反比例してハイデリツヒの顔は愉悦に溢れた。だが其処に残った双眸には悪魔の意識を残したまま。

「さあ、始めようじゃないか。彼女が『至高』であるならば、我々はそのに見合った『究極』を彼女の為に用意しなければ、な。」

「ちよつ、ヴェスト軍曹！ 何やってんですか！？」

ハンガー内の異変に気付いたアストナージが手元にあつた野戦用のヘッドセットを引つ手繰たくつてマイクに怒鳴つた。モウラに命じられた罰則であるジムのC整備の段取りの最中に起つた事件はただでさえ不安定なアストナージの情緒を更に逆撫でするほど大胆で、無謀だった。少なくとも眼前で動き出そうとしているザクのセッティングを認知しているアストナージにとつてはそう思える。

アイドリングを始めた薄緑のザクは確かにマークスの予備機だ。彼が使用しても何ら咎め立てする事は出来ない。だがそのセットは以前キースが乗り込んで演習を行った時から手付かずであり、と言う事は搭載されているOSのオートパイロットは全て解除されている筈だ。

病み上がりの怪我人が歩き出すような覚束無い足取りで整備用のケージから機体を剥がすザクの姿を見止めたアストナージが、これから起こり兼ねない悲惨な状況を想像して、声を荒げた。

「ジェスっ！ ハンガー内の整備士を非難させる！ 馬鹿が無茶を始めやがった！」

「聞えてるぞ、アストナージ。」

アストナージの暴言を聞きとがめたマークスが答えた。笑い混じりのその声がヘッドホンから流れた瞬間に間髪入れず怒鳴り返すアストナージ。

「ヴェスト軍曹、一体何考えてんですか！？ その機体はまだOSを戻して無いんですよ？ 軍曹に扱える訳が無いっ！」

「ご忠告に感謝する。だが今日はこの機体で出る、悪く思わないでくれ。」

「なっ……………」

マークスの答えに絶句するアストナージの眼前でザクは危なっか

しい第一歩を踏み出した。オートバランサーのご加護によって辛うじて立つてはいるがそれにも限度がある。急激な重心の変動が発生すればそれを制御するプログラムが機能していない以上、コントロールリカ操作と復元は全てパイロットの力量に委ねられる。その操作するパイロットが訓練兵あかんぼつ以下の経験しか積んでいないとなると。

「冗談じゃないっ！」

「悪く思うに決まってるでしょうがっ！ モビルスーツはあなたの玩具じゃないんだ、そんな状態でぶっつけて演習に出て壊れたら誰が修理すると思ってるんです？ 少しは整備する人間の事も考えてくださいよ。」

「アストナージっ！ やばいって、アデリアも出るって！」

ジェスの肉声の叫びがヘッドホン越しに耳に届いてアストナージの愚痴を中断させる。考えたくも無い程に信じられない、取り込んだ情報に驚愕の目を見張ってもう一つのケージを見詰める彼の目に一瞬前に見た光景が更に『劣化』して再生される。

「おい、ちよつと待て。あの機体のOSは初期のままの筈だ、誰がいじった!？」

「自分で切ったわ、悪く思わないでね。」

惚けた口調で言いながら緊張した声音で返ってくるアデリアの台詞がマークスとの回線に割り込んで来る。若干の距離を置いて動き出した薄緑と砂漠迷彩の機体はまるで双子の様にぎこちない歩調でゆっくりとハンガーの出口へと進み始めた。足元を蜘蛛の子を散らす様に逃げ惑う整備兵を踏まない為に一歩ずつ慎重に足を踏み出す姿を見てアストナージが怒鳴り飛ばす。

「『自分で切った』って……二人して何訳のわからない事言ってるんですか！ 思うとか思わないとかじゃない、無理だっって言ってるんですよ。せめてシミュレーターで訓練してから乗ってくださいよ、そんなんじゃキース隊長に今日もこてんこてんにされちまいますよ！」

「そんなのやってみなきゃわかんないじゃない。ひよつとしたら勝

つて凱旋つて事もあるかもよ？」

「震えた声で強がっても説得力無いって！ アデリア、アストナージの言う通りにした方がいいよ。今のあんたじゃ私が見たって無理だから！」

「年下に言われるとちよつとカチンとくるわね、ジェス。」

むつとした声でジェスの忠告に答えるアデリア。後ろを振り返つたアデリアのザクのモノアイが赤く光つて眼下のジェスに向けられる。だがたつたそれだけの事でもアデリアのザクのバランスは崩れて軽くよろけた。思わず差し出した右手がハンガーの内部で剥き出しになつた鉄骨を掴んで轟音を響かせる。

「おつとつと」

響き渡る鉄の軋む音と長年に渡つて降り積もつた埃と劣化した錆の舞い落ちるハンガーが緊張に包まれる。互いに避難を呼び掛けあう空間の中でアストナージだけがその光景を注意深く見守りながら指示を飛ばした。

「おいっ！ 誰か班長に連絡しろ。緊急事態だ、キース隊長にもこの事を知らせてあの身の程知らずな二人を説得して」

「いいんでないの？」

アストナージの手に握り締められたヘッドホンから突然モウラの声飛び出した。慌てて周囲を振り返るアストナージの視界に、ハンガーの出口で様子を見守るモウラと二ナの姿があつた。

「構わないからそのまま出しちゃいな、あたしと技術主任が許可する。」

いたつて平静なモウラの声に愕然として、あんぐりと開けた口を閉じる事も忘れて二人の姿を見つめるアストナージ。モウラが出した許可に異を唱えたのは意外にもジェスの方だった。

「班長、そこは空気読みましようよ！ こんなよたよたの酔っ払いが出ていったつてキース隊長に瞬殺されるのがオチですよ？ 演習なんかやるだけ無駄ですつて。」

「ジェス、あんたねえ」

「ジェスの言う通りだわ。多分今日は負け戦でしょうね。」

アデリアの恫喝を封殺したのは二ナだった。技術主任から敗戦のお墨付きを戴いたマークスとアデリアはぐっと押し黙ったまま、慣れないザクのマニユアル操作に集中する。それでも民間人の操る民生のモビルスーツ以下の動作スピードしか出せない二人の体たらくを見て二ナが言った。

「でも二人が自分でマニユアル操作の重要性に気が付いて、率先して訓練に参加したという事は正しい判断よ。何事も経験、物事の発展と進化は負ける事によって得る事の方が大きいという事も往々にしてあるわ。だから今日は二人の自主性を尊重してこのまま演習に参加する事を許可します。整備班の皆には苦勞を掛けるけど、ここは黙って見守ってやって。」

「いやいやいやお言葉ですが技術主任、」

二ナの説得に我に返ったアストナージが慌てた。会話の流れる果てに行き着く結論を何とか自分達に被害の及ばぬ方向に向けようと努力するアストナージの目が泳ぎながら遠くに立つ二ナを見下ろす。「それで我々が納得してもキース隊長がダメでしょう？ それにこんな状態のザクで演習に参加して本人達は納得して負けても、後で後始末する我々にとってはたまったもんじゃない。負ける事で上手くなるのは金持ちの道楽だけで、返って来るのは山の様な請求書の束ですよ？ ここは大人しくシミュレーションで訓練を積んでからでない」と

「俺も承認済みだ、アストナージ。」

キースの声と共にハンガー内に響くモビルスーツの起動音。奥でケージに拘束してあったゲルググの固定ワイヤーが何時の間にか解かれてアイドリングを始めた機体のモノアイが点灯した。天蓋から差し込む日の光に浮かび上がったキースの乗機は先に出た二人とは対照的な滑らかな動作でケージを離れて、壁に駆けてある演習用のサーベルを手取る。

「何、ハンデはつけてある。二人は野戦用標準装備、俺はこのサー

ベル一本。それならば構わないだろう？ 少なくとも無茶をして貴重なパーツを破損する確率は少なくなる。」

「『少なくとも』って……それだけ？ 疑う様で申し訳有りませんが、もし万が一パーツを破損する様な事態が発生したら」

捲し立てるアストナージの横を通り過ぎるキースのゲルググがそのカメラだけを擦れ違い様に振り向けて言った。

「その時はよろしく頼む。前線ではそういう事もまま起こりうる事態だ、これも整備班に対する一つの訓練だと思って対処してくれ。」

「ちよつと、隊長。そんな人事ひしごとみにたいに」

「こりやダメだわ、アストナージ。人事だもん。」

諦め交じりの呆れたジェスの声がアストナージの耳に届いた。キースのゲルググがアストナージの答えを待たずに通り過ぎていく。

ほんの僅かでも自分の意見に耳を貸す気が有ったならばキースはその場に佇んでアストナージの意見を求めたであろう。だが過ぎ去っていく背中では明らかに有無を言わさぬ決定が為された事をアストナージの軍人としての意識に知らしめ、それはアストナージにそれ以上の抵抗を断念させるに到った。

かと言ってキースに向って敬礼を返さないのは彼なりの抗議の意思表示だ。キースのジムに横付けされた作業車の籠ハケットの手すりを握り締めて、負けじと赤い発光を睨み返すアストナージ。憤りに溢れた見送りに向って片手を上げるキースのゲルググを睨みながら、アストナージの声が飛んだ。

「りよおかいしましたあつ、中尉殿おつ！ 私の明日の休日がなくなるらない事を切にこの場でお祈り申し上げますっ！」

慇懃無礼な捨て台詞を吐くアストナージの歯がギリギリと鳴る。未だに制御の覚束無い二機のザクの背中に固唾を呑んで見守る整備士の目が無言の抗議となつて突き刺さる。めらめらと燃え出しそうなハンガーの空気を背中に感じたマークスが思わず呟いた。

「何か、皆に申し訳ないな。ほんの軽い気持でやった事なのに此処まで整備班の怒りを買つとは思わなかった。」

「何言つてんの、あたし達は操縦するのが仕事。あつちは直すのが仕事なんだから気にする事無いわ。それにね、」

マークスの弱気を叱咤する様にアデリアが無線越しに言った。台詞の所々のアクセントが違っているのは緊張しているからなのだろう。

「這つてる赤ちゃんが立とうとしている時に手助けをする母親なんてろくなもんじゃないわ。うちの整備班も母親面して意見するんならもっと放任しなきゃ。何時までも過保護にしてるとろくな子供に育たない　　きゃあつ！　　」

話に夢中になって操作が疎かになったアデリアのザクが途端にバランスを崩した。傾く上体を立て直そうと両脚のペダルを闇雲に踏みかえるアデリアの意志に逆らつて膝を折る機体。まるで土下座をする様に基地のコンクリートに倒れた機体から金属の歪む嫌な轟音とアデリアの悲鳴が混じつてハンガーに届いた。

「ため、アデリアアッ！　こおのお下手糞あつ！　　」  
「なによ、ばかっ！　　」

無線に飛び込んできたアストナージの罵声に怒声で返すアデリア。ぎこちない手足を駆使してようやく立ち上がったアデリアのザクがハンガーに向つて肘を叩いて中指を立てる。煽る様な仕草を目にしたアストナージが怒鳴り声を上げた。

「お前、それが出来るんならもつとチャツチャと歩けよ！　わざとやってんじゃねえだらうな！　　」

事態の切迫したアストナージには最早階級等関係ない。上官に向かって吐くには余りにも無礼な暴言を口にする彼に向つてマークスが代わりに答えた。

「済まない、アストナージ。見ての通りだ。出来るだけ壊さない様に努力はするが、後はよろしく頼む。明日の非番には君のリクエストを一番に聞くから。」

アデリアの手を引きながらキースの後に続くマークス。中の良い幼い兄妹の様なその背中を見つめながらモウラがアストナージに告



げた。

「アストナージ、今日は特別に後二人回してやるから整備を早く終わらせな。昨日の件は無しにしてやるよ。」

苦笑交じりに話すモウラの好意を喜ぶどころか顔を顰めて聞き入るアストナージに笑顔は無い。これから自分に降りかかる災難は小型冷蔵庫一台分もある重さの非破壊検査機器を担いで筋肉痛に苛まれる所の話では無い事がモウラの口調から想像できる。

黙り込んだまま遠くに立つモウラの顔を見下ろしながら、アストナージは呟いた。

「ヤロ、こうなったら整備班全員の買い物を奴等に押し付けてやる。覚悟してる？」

じりじりと照りつける日差しがほんの少し天頂を行き過ぎて僅かな影を基地に齎す。ハンガーの屋根でパラソルを差した整備士の一人が手にした双眼鏡に目を押し当てたまま突然大声で叫んだ。

「副長、帰って来ました！ シャーリー帰投！」

「状況を確認しろ！ 機影は何機だ!？」

胸の前に腕を組んだアストナージの人差し指が事態の進捗を急ぐ様に小刻みに動く。あみだに被った作業帽の庇で影になった両目。これから自分に降りかかる事態を予感して目尻を細める。仁王立ちになって屋根の上にいる観測員の報告を黙って待つアストナージとその背後で各々思い思いの準備体操を始める整備士達。

モウラは二ナと共に少し離れた場所でその光景を眺めて共通の感慨に耽っていた。思い出す事も躊躇われるがその雰囲気は在りし日に二人が味わった空気と同じ匂いがする。

そうだ、あの日のアルビオンの整備ブースと同じ空気。

「一機確認っ！ モビルストランポコンーツ回収車に随伴して来ます。繰り返します、機影は一機、キース隊長のゲルググです！」

悲鳴にも似た観測員の声だけが無言の緊張を高めた基地の敷地内に木霊する。報告を耳にしたアストナージの両目が途端に見開いて、

肉眼ではまだ臆げにしか捉えられない彼方のキース達のいる方向を睨み付けて口を開いた。

「いよおおっつし！ 聞いたかお前ら！」

それはまるで自分自身に湯を入れている様にも見える。腕を解いたアストナージが踵を返して背後に控える整備士達に向って言い放った。

「我が麗しのモビルスーツ隊の皆様は今日も我等に思わぬお仕事をお恵み下さった！ これも自らのスキルを高めるいい機会として真摯に受け止めて奮励努力する様に！ いいか！？」

その物言いは如何にも宛て付けの様に聞えるがアストナージの目は笑っていない。一年戦争を生き延びた歴戦の整備士としての気迫に満ち溢れた視線には茶化そうと待ち構えていたジエスですらも声を潜ませてしまうほどだ。沈黙して克目する部下の視線を受けたアストナージが尚も捲し立てる。

「二班に分かれて整備を行う。ゲルググはケージに固定したら速やかに各部の機能チェックを行って待機状態にまで持っていけ。その後こちらを手伝ってくれ。      ジエスっ！」

「はい副長。」

軽く敬礼を返すジエスの顔を真剣な表情で見詰めたアストナージが厳しい口調で言った。

「お前にはアテリア機を任せる。夕飯までには補給込みで機体をロールアウトさせる。」

「夕食までに？ そりやまた厳しい。」

「何言ってる、戦場じゃこんなもんじゃ済まないぞ？ 一刻も早く損傷した機体を最低限稼働状態に持っていかないとこっちがやられる。ここがその最前線で今が戦闘宙域の真っ只中だと思って作業にかかれ。貴重な戦力を壊してのこの帰ってきた哀れなパイロット達にオークリー最速を見せてやれ。」

普段とは違う厳しい表情でそう告げたアストナージの表情を不思議そうに見詰めていたジエスの顔が『オークリー最速』の言葉を聞

いて綻んだ。そのまま片手をこめかみに素早く当ててウインクをしながら。

「了解副長<sup>アイサー</sup>。夕食までに必ずロールアウトしてご覧に入れます。」

言うなり赤毛を揺らしながら踵を返して一目散にアデリアのケージへと駆け去るジェス。その後姿を見詰めるアストナージに向って少し離れた場所で様子を見ていたモウラが、ある事を不審に思っ  
て尋ねた。

「おい、アストナージ。まさかあんた一人でマークスの機体を整備するつもりかい？」

整備士を二つに分けたという事は一度に二機しか整備する事が出来ない。キースとアデリアの機体に人員を振り分ければ当然アストナージの周囲には人はいなくなる。ポツンと一人で佇んでハンガーの中の様子を見守っていたアストナージがモウラの質問に振り返って答えた。

「まさか。多分俺の予想ではアデリアよりマークスの機体の方がなまじ動いている分だけ損傷は激しい筈です。ジェスにはまだ荷が重いでしょ。」

「ふーん。あたしの予想も同じ。で、それが分かってて、何で？」

「マークスの機体には二人で当たります。俺と」

言葉を切ったアストナージの視線が笑いながらモウラの顔に注がれる。既に意図を察していたモウラが繋ぎの袖を捲くりながら笑い返した。

「あたしも数に入れてたか。OK、アストナージ。じゃあ久々に実戦を潜り抜けた整備士の腕前と言う物を、ぴよぴよやかましいひよっ子共に一丁拝ませてやるとするか。」

アストナージの直ぐ傍を颯爽と通り過ぎるモウラの足取りは軽い。意気揚々とハンガーに足を踏み入れた二人の姿を見た他の整備士は、久し振りに見るその光景に目を

ジェスですら　見張った。普段はどちらかが整備を行っていると片方は事務処理の為に席を空ける事が多い二人がタッグを組ん

で整備を行う事等、今となつては目にする事の出来なくなつた光景だ。愛用の工具箱を其々手に取りマークスのケージに向う様はその行動だけで周囲の者を圧倒する。作業車のバケットに工具箱を置いて、工具を一纏めにしたホルスターを腰に回しながらモウラが尋ねた。

「さて、アストナージ。ジェスには晩飯までに仕上げろつて言ったんだ、あたし達はどうする？」

尋ねられたアストナージはケブラー製の作業用手袋に手を通しながら、宙をぼんやりと見詰めて暫し考え込む。やがて何かを思い付いた様にモウラに目を向けるとニヤリと笑つて答えた。

「そうですね、ひよつ子どもが晩飯なら、俺達は…… 日没までに。」

「上等！」

モウラの言葉に互いの手が飛ぶ。打ち合わされる二人の掌から大きな音が響き渡つて、喧騒の渦巻くハンガーの空気に力強い伴奏を加えた。

そこには既に二人の居場所は無かつた。

自信とプライドの補強に回した強がりごとキースに叩き潰されたマークスとアデリアがハンガーへと帰つてきた時には既にその空間自体が一種の特別な戦場と化していた。怒号交じりの指示が飛び交い、天井に設えられたホイストクレーンが唸りを上げて行き交う様はまるで臨戦下の野戦整備場の様だ。行動不能に陥つた二人のザクをあつという間にケージに固定して、損傷箇所に群がってパーツを次々と剥ぎ取つていく整備士達の姿はまるで獲物に群がる蟻の様にも見える。

設置された全ての無影灯が放つ眩い光が照らし出すハンガーの片隅で二人は今日の顛末を如何にして侘びれば良いかを思索しながら、その光景を眺めているしかなかった。

「ねえ、なんか…… すごくない？」

「」

話しかけるアデリアの声も耳に入らないほどマークスの意識は初めて見る整備班の動きに眼を奪われている。アデリアの機体の膝からカバーが引き剥がされて折れ曲がったシリンダーがアセチレンで一気に切り飛ばされる。それを駆動させる二個の油圧モーターは耐熱手袋をはめた整備士の手で直に引き抜かれる。バーナーの熱で灼熱したモーターを握る手から煙とセラミックファイバーの焦げる匂い上がり、男は間髪いれずにその廃品を足元の容器に投げ落とした。

水を湛えた容器に落ちたモーターから水蒸気と致命的なクラック音が鳴り響く。

「こういつのを見るのは初めてだろうな、お前達には。」

呆然と見守る二人の背後でキースの声がした。戦場と化したハンガーには当然キースの居場所も無い。作業の邪魔にならないようにと気を使う部外者の居る場所はどうかやら二人の居場所と同じ所に落ち着いてしまうようだ。キースの問い掛けを耳にしたマークスが上官に対する敬礼も忘れて呟いた。

「これが、『U整備』状態……何て早さだ。」

アージエントメンテ緊急整備、通称『U整備』。戦闘中の艦船に帰還したモビルスーツを極短時間で補修・補給を完了して再び戦域へと送り出す為の、整備員の間では暗黙の了解とされる整備方法だ。当然訓練等で身に付く代物ではなくおよそ一年戦争を生きて潜り抜ける事の出来た一握りの整備クルーのみに修得を許された、経験のみが物を言う禁断のカテゴリに当たる。

マニュアルや教則等は全く無視して、どんなに損傷した機体でも一応の稼働領域まで持つていく為にはどんな手段も厭わないと言う速度のみに特化した整備手段を目の当たりにしたアデリアとマークスから声が出ないのも無理は無い。再生利用リサイクルなど全く眼中に無い破損部品の扱いは自分達が此処に赴任して来てから全く見た事の無い光景だった。

「うちの整備班にこんな特技があったなんて知らなかった。あたし

なんか畑違いだから『構造理論』の時間に教官の口から出た噂話しか知らないもの。普段はのんびり作業してるのに

「そんな事。整備班の耳に入ったら明日から整備してもらえなくなるぞ、アデリア。」

上官として忠告するマークスのたしなめ声にも強さは無い。ある意味アデリアと同じ見解を持たざるを得ないマークスに、アデリアの発言を否定する力は無かった。人が変わった様に作業を続ける整備班の姿を見て自分達が如何にスタッフに恵まれていたかを思い知るのは他の基地に居たアデリアも、そして多くの基地をたらい回しにされてきたマークスにも初めての経験だった。

「此処のトップは二人とも一年戦争の生き残りだからな。状況に応じて様々な整備手段を教えておく事は上官として当たり前前の指導だ。整備班のこの姿を見る限りでは彼らの指導方針と技能の習得状況はすこぶる良好と見えそうだ。」

「確かにこれなら何処の部隊に出向しても引けを取らない。俺がたらい回しにされたどの基地でもう整備を行う事の出来る整備クルー等今まで見た事も無い。」

キースの発言を受けて感慨に耽るマークスが呟く。その言葉を待っていたかの様にキースが二人に言った。

「さて、整備班の実力の程は二人にもよく理解できたと思う。上官の指導が行き届いている部隊がどれだけ有益に働くかと言う事もな。」

その発言は二人の意識を整備班から遠ざける事に大いに役立った。ビクツと首を竦めたまま凍りつく二人の背中に向ってキースは尚も言葉を繋ぐ。

「で、此処からが本題だ。その有能な整備班のご利益にあやかっただ当モビルスーツ部隊の部隊員達は今日の演習で何を身に付けたのかな？ 貴重なモビルスーツを二機も行動不能にしたんだ。それに値する十分な見返りを期待してもいいんだよな、俺は？」

どこか笑いを含んだキースの声に恐る恐る振り返る『部隊員』の

二人。腕を腰に当てて少し前屈みで二人の顔を覗き込むキースの目を見た途端に、二人の体はばね仕掛けのように跳ね上がって敬礼を返した。

「もつ、勿論であります。マニュアル制御下での戦闘を許可していただいた事によって貴重な経験をさせていただいた事、隊長並びに整備班の方々、技術主任殿に対して感謝の言葉もあります。」

こういう時のマークスは実に頼りになる、とアデリアは思う。少なくともこれだけ動揺した中でよくもこれだけ丁寧な言葉遣いが出る物だと、上ずったマークスの台詞を耳にしながら横顔をチラリと見た。

「そうだな、そうでなくては今日の罰ゲームを免除した意味がなくなる。」

意味深に破顔するキースの言葉に緊張を隠せない二人。どんな無理難題が下るかを其々の脳裏に其々で想像しながら悟られない様に唾を飲み込む二人に向ってキースが告げた。

「今日はお前達の覚悟に免じて強制的な講義の時間は免除にしよう。その代わり、今日行った演習で得た自分達の課題を復習して次に繋げる様に。今度の演習は今日のように模擬戦用のサーベル一本とは行かないぞ、心しておけ。」

「ありがとうございます！」

マークスの返礼に先んじてアデリアが声を上げる。だがその表情は次の瞬間に疑問符を湛えた物に変化した。キースの言葉の裏を読んできましたアデリアが恐る恐るその事実を確認する。

「あの、隊長？ 今日の課題と申されましたが私達 いえ、特に私なんですけど今日の演習ではひっくり返ってばかりでまともに隊長と戦闘行為も行っていないんですけど。一体何が課題で何が課題でないのかも理解出来ない私はどの様に復習をすれば」  
「心配するな。」

笑い顔を残したままキースがサングラスを外して二人を見る。アデリアは自分に注がれる優しい視線を受けて背筋の寒くなる気がし

た。キース隊長がこんな目をした時には決まってるくでもない事を言う。

その目が優しければ優しいほど、特に。

「次の演習までにはまだ時間が有る。それまでにお前達はありとあらゆる手段を使って課題を克服しておけ。勿論技術主任の助力を仰ぐという選択肢も含めて、だ。」

それは言外に強制を意味する言葉だ。キースの指し示す克服の為の手段。それは寧ろ唯一といってもいいだろう。を耳

にした二人の表情に諦めの色が広がる。昨晩に受けた講義内容を頭の中に思い浮かべてその難解さに悪戦苦闘した、罰ゲームに匹敵する数時間の記憶が蘇る。不安の色が広がる二人の表情をどこか愉快で、しかし満足そうな表情で眺めたままのキースが言った。

「そんな顔をするんじゃない。普通の基地でこんな事をしたら今頃お前達は営倉送りにされている所だぞ。今日のお前達の行動に難色を示す基地司令を説得してくれた技術主任に心から感謝するんだな。」

「ちよつと、チェン。それどういう意味？」

尋ねる言葉にほんの僅かな憤りを忍ばせて。だがチェンを見るアテリアの目には不満の色がありありと見えている。自前のラップトップを広げて隣に坐るチェンを睨み付けるアテリアとその態度を柳に風とばかりに飄々と受け流す司令部付きのシステムエンジニアの姿を心配そうに見詰めるマークス。

問い掛けと言う形を取った責め言葉を受けているチェンはその様な状態でも穏やかな笑顔を崩さずにアテリアの憤懣に答えた。

「どつという意味も無いよ。コウ・ウラキ伍長のキャリアは予備役から始まつてるって事さ。0084年4月に当基地に予備役として入隊、0064年日本生まれ。父数馬、母良美。本籍は東京都世田谷区、まあこの辺は出生地の戸籍謄本の受け売りなだけ。身体的特徴身長175センチ体重68キ口瞳の色は黒。視力は右1.5左



は2・0。入隊時身体検査の評定はA　　つまり何処にも障害が見受けられないという事。その他の経歴・経類は不詳、前歴不明……　これが人事部のアーカイブに保管されているコウ・ウラキ伍長の全データさ。他には何も無い。」

「有り得ない。そのデータが正しいとしたらウラキ伍長は民間人からいきなり予備役に登録された事になる。戦時下ならともかく今の時代にそんな徴兵の様な事がある筈が無い。ましてや彼の登録はモビルスーツパイロットとして登録されているんだろ？」

チエンの回答を聞いたマークスが傍観者から参加者となって二人の会話に口を挟んだ。

「そうですね。入隊時より彼の登録はパイロットとしての登録です。そしてパイロットとして採用される為には欠かせない筈の適性検査の記録すら残ってない。つまりはウラキ伍長は何の根拠も無いままこの基地に居たという事実も抹消されて最も配属が難しく最も適性者の少ないパイロットと言う難関を一瞬にして、それも登録当時には尉官と言う階級を得て突破したという事になります。」

「で、あんたはそれを本<sup>マツ</sup>当だと思ってるんだ？」

意地悪い口調のアデリア。自分の切った切り札がなす術もなく尻尾を巻いて逃げ帰ってくる様を詰るような目で見詰めるその瞳をチエンは、別段感情を揺らす事無く平然と眺めた。穏やかな笑いが消えない事に、二人の世界に足を踏み入れたマークスは内心驚く。

この感情の安定感はこの歳相応の物ではない。まるでAIの様だ、それも人の形をした。

「まさか。でもこれ以上のハッキングは無駄な事さ。尉官クラスのアクセス権限ではこれが限界、これ以上は佐官以上のパーソナルコードが必要になる。此処で佐官といえばウェブナー司令官しかないからハッキングした事が表沙汰になる確率は大、幾らなんでも自分で自分の首を絞める様な事は出来ないよ。」

チエンの回答は恐らく彼が出来る限りの手段を講じての結果なのだろう。即答されたアデリアは表情から憤りを引っ込めて、失望と

諦めの顔色に取り替えた。小さな溜息が漏れる音が小さな喫茶スペースの仕切に跳ね返ってそこに居合わせた三人の耳にも届く。

「そっかあ、だめかあ…… あんたで出来ないんじゃないわよねえ。」  
で他にそんな事が出来る人はいないわよねえ。」

「ま、僕の他に出来そうな人といえば、一人いるけど。」

「誰よ、それ？」

「技術主任。」

チエンの答えを聞いたアデリアの失望は拡大して周囲の空気を暗くする。コウの経歴を調べる動機を知らないチエンはアデリアの感情を察知して思わずマークスの方を振り向いた。瞳で事情を説明すると要求するチエンの意志をマークスは困惑して送り返すしかない。二人からは何も聞きだせないと悟ったチエンは自分の疑問を二人に対して向ける事を諦めて、アデリアに向かって自分のラップトップの液晶を向けながら言った。

「まあまあ、アデリア。君の望む成果を上げられなかった事は僕としても遺憾に思う。本当に申し訳ない。……で、代わりといっては何なんだけどちょっと面白い物を見つけたんだ。」

「なによ。 あんた、まさかあたしにまたコスプレやらせようって言うんじゃないでしょうね？ やってもいいけど、取り分はギャラちゃんと頂戴。」

そこまで喋ってアデリアは自分に向けられたマークスの視線に気が付いた。目が合った瞬間に昨日の食堂での出来事が蘇って、それはアデリアの顔を色付けるには十分だった。思わず下を向いて一瞬前までの威勢を引っ込める。

「や、やっぱりいいや。あたしもうやんない。ご、ごめんチエン。ほんとにもう。」

「違うよ。」

その羞恥の意味を唯一知るチエンは出来るだけ穏やかな口調でアデリアの想像を否定した。言葉に導かれたアデリアが顔を上げた先に用意されたラップトップの画面には如何にも素人が作ったと思し

きサイトが表示されている。その画面を黙って見詰めていたアデリアがパチパチと瞬きを繰り返した後に言った。

「何これ？」

アデリアの言葉にマークスも身を乗り出してその画面を見詰める。マークスの胸板がアデリアの肩に押し付けられて、アデリアの顔が再び赤面した。普段ならばそんな事は有り得ない筈なのにほんの一瞬前に起こった動揺はアデリアのか細く縊り合された理性では封じ込める事が出来なくなっている。

「まあ、個人で立ち上げているサイトなんだけどちょっとディープな場所にあつてね。世間で色々語られている噂を纏めているサイトなんだけど、その中にちょっと奇妙な物がある事を発見したんだ。」

「これを君が？ 一体どうやって。」

固まったまま声を上げられないアデリアの理由を知らないマークスがチェンに尋ねた。アデリアは両手を膝に置いたままじつと画面を見詰める。「ふり」をしている。

「『コウ・ウラキ』と『ニナ・パーブルトン』で共通する項目を検索してみたんです。そしたらこのサイトが引っかかりました。アフリカで細々と運営している小さなプロバイダのサイトなんですけど。」

「『ニナ・パーブルトン』って、チェン。昨日その事はあんたに話していないのにどうして。」

チェンの言葉に驚いたアデリアが一瞬にして正気を取り戻して尋ねた。やっとの事で呪縛から逃れたアデリアの表情を安心した目で眺めるチェンが穏やかな口調で言った。

「ウラキ伍長と技術主任の噂は僕の耳にも届いているさ。君がウラキ伍長の事を調べてくれ、と言った時にその事を思い出してね。あんまりデータが揃わないもんだからほんの暇つぶしに検索してみたんだ。そしたらその結果が、これ。」

二人の向かい側に坐っているチェンはそう言うと言った手の中のマウスを動かした。二人の目の前の画面にあつたカーソルが生き物の様に

動いて画面の右側にあるバナーをクリックした。全く画面を見る事無く、それも反対側から正確にカーソルを動かしている自体マークスには驚愕に値する。二人が驚いてカーソルを追う視線を楽しそうにみるチェンが、開いた画面の説明を始めた。

「とは言え内容は何処のサイトにもある『都市伝説』を集めたサイトだよ、それなりに眉唾物だし。例えば一年戦争でジオンの実質的指導者の立場にあつたギレン・ザビ総帥が未だに生存して再びジオン勃興を目指しているとか、実は暗殺されたジオン大公の子供達が生きているとか。……まあ、そんな『とんでも話』を集めたサイトなんだけど」

そう言つとチェンは再び手の中のマウスを動かしてクリックした。予め用意されていたウィンドウがその操作一つで液晶上に展開して画面に見入る二人の視界に内容をさらけ出す。夥しい文字列と飾り気の無い壁紙、それが明示された情報の全て。

「……なに、これ？」

チェンの意図が理解出来ないアテリアの言葉が気持を整理する様にゆっくりと紡がれる。スクリーン越しに見るチェンの顔は全く変わらず微笑んでアテリアを見詰める。その笑顔の意味が恐らく画面の内容とは全く無関係の、アテリアの今いる状況に対しての感想だという事が分かつたアテリアは背後にいるマークスに気付かれない様に怒つた顔を投げ返す。それを受取つた瞬間にチェンの説明が始まった。

「どうやらこのサイトに投稿されたネット小説の類らしいんだけどその内容が面白くてね、途中で止めらんなくて昨日一晩で読んじゃつたよ。お陰で今日は寝不足さ、ま、アテリア達の無茶で基地司令がかんかんになって司令室に居座っていたって事もあるんだけど流石に今日は疲れた。」

「それはご愁傷様。で、何でこの話をあたし達に教えようと思ったの？ まさかとは思つけど単純にこの話が面白いから読ませようなんてつまらない事を考えてるんじゃないでしょうか？」

「アデリア、それはこの小説を書いた人に対して失礼だ。……  
それにどうやら」

嗜めたマークスの目はつぶさに、そして休む事無く画面の文字列を追っている。ある程度読み進めたで有ろう頃にマークスは視線を上げて画面の向こうのチェンを見た。

「これはかなりリアルな戦記物だ。…… チェン、この話のあらすじは？」

「舞台は一年戦争終了後の地球。オーストラリアで開発中だったガンダム試作機をジオンの残党が奪って、それを連邦軍が追うという話です。この話の最後に落下するコロニーの名は『アイランド・イズ』つまりはこの基地にもとても縁のある小説なんだ。」

「？ だってあのコロニーは移送中の事故で間違って地球に落下したんでしょ？ まあ、話の締めとしては上手いけど」  
「だから、フィクションだって。」

其々の感想を口走る二人の怪訝な顔を黙って、しかし愉快的表情で見詰め返すチェン。餌に食いついた魚を見る様な目をするチェンの思惑に嵌ってしまった事は悔しく思うアデリアだったが、マークスが食いついてしまったのでは仕方が無い。観念したアデリアはマークスと共にチェンの言葉を待つ。

「この話の中に出てくる三機のガンダムがとんでもない代物だね。最初に主人公の乗るガンダムはともかくとして、奪われたガンダムは核装備。そして最後に出てくるガンダムに到ってはモビルアーマークラスと言うから驚きだよ。最後には全部なくなっちゃうんだけどね。」

「へえ、歴史の影に消えたガンダムかあ…… 面白そうな話だな。」  
「ア。 呟くマークス。入れ食い状態の相棒の顔を上目遣いにみるアデリア。」

「で、何でこの話が検索に引っかけたかと言うと登場人物の名前です。主人公の名前が『神田』<sup>こした</sup>と言う東洋人、そしてヒロインの名

前が『ニーナズ・ロス』。二つの名前が同時に出てくるという条件で検索した結果、当てはまったのがこの小説だけでした。」

「ちよつとお、『神田』はまだしも『ニーナズ』じゃない。イタリア人の名前がどうして引つかかるのよ？」

指で眉をなぞる仕草をしながらチエンを見るアデリア。恐らくその笑顔ならば出会った全ての人に物を売り付ける事が出来るに違い無いトップセールスの表情を浮かべたチエンがアデリアの問いに答えた。

「綴りはどちらも同じさ、技術主任もこの話のヒロインも同じ『NINA』なんだ。それで引つかかったという訳。偶然にしちゃあ出来過ぎてるとは思わないかい？」

「いや、そりゃ偶然でしょ。出来過ぎてるけど、ただの偶然。」

チエンの感想をにべも無く一蹴したアデリアがやつと落ち着きを取り戻したのか傍にあつた克蘭ベリージュースに手を伸ばした。行動と言う物は伝播する様でアデリアに釣られて他の二人も飲み物に手を伸ばした。一口飲んだチエンが再び口を開く。

「確かに偶然かも知れないけど小説としては一読の価値があると思うよ、何処の誰が描いたのかは知らないけれど。それにね、この小説の人物の中で主人公の敵になるジオンの将校だけが実名で記載されているんだ。」

「実名だつて？ ジオンの将校の名前が何で実名だつて分かるんだ？」

手にしたアイスコーヒーを口に運びながらマークスが尋ねる。チエンはマークスの視線に微かな懸念を残して答えた。

「連邦の士官ならば誰でもその名を知る有名人だからですよ。」

「アナベル・ガトー。『ソロモンの悪夢』です。」

チエンの言葉に場の空気が凍結した。飲み物を手にしたまま微動だにせず、ジオンの伝説的な撃墜王の名を口にした友人の顔を見詰める二人。その仕草を愉快そうに見詰める柔和な顔のエンジニア。呼吸音すら完全に静止した世界を突き動かしたのは突然に放たれた

アデリアの笑い声だった。

「あはははっ！ チェン、それは無い、それは無いって！」

その言葉だけを残してテーブルに突っ伏したまま、堪えきれない笑いを尚も足元に溢して落とすアデリア。震える肩を見詰めながらほんの少し失望の混じった笑いでマークスがアデリアの隣にドスンと腰を落とした。

「いや、全くだ。そこまでリアルに書いておいて敵の名前にあの撃墜王の名前を使うなんて勿体無い。それじゃあこの小説が嘘ですって言ってる様な物もんじゃないか。仮に万が一この話が本当の事だったとしてもあのアナベル・ガトーと戦って生き残ったパイロットがいる事自体が信じられない。」

「そうでしょうか？」

二人の反応に異を唱えるチェンが言った。

「かの一年戦争で連邦軍を勝利に導いたアムロ・レイ曹長も元は民間人でした。そして彼が初めてガンダムに乗った時に一番最初に戦った相手が『赤い彗星』と呼ばれたシャア・アズナブルだったと聞いています。そういう事が起っていても不思議じゃない。」

「それは特殊能力の持ち主だったからだろ？ 連邦軍でただ一人のそんな人物とこんな辺境の基地に所属する予備役の兵士を一緒にされても何の信憑性も無いじゃないか。第一それ程の才能の持ち主ならば今までテイターズが放って置く訳が無い、何処かの前線で華々しく成果を上げてその名を内外に轟かせている筈さ。ウラキ伍長にその才が無いから未だにこれだけ残党狩りに苦しんでいるって言うのが今の連邦軍の現状だしな。」

チェンの推論をもの見事に理詰めで論破していくマークスの言葉をニヤニヤと笑いながら、横で大きく相槌を打つアデリア。その二人の表情を代わる代わる眺めた後に、一つ溜息をついたチェンが諦めた様に言った。

「そうか、そうですね…… 何だやっぱり都市伝説は伝説のままかあ。結構信憑性が高いと思っただけだなあ。」

「ま、でもなかなか面白かったわよ、チェン。あたしにしてみればあなたのそんな残念そうな顔初めて見たんだし。マークスに感謝しなきゃ。」

昨日食堂でやり込められた事を相当根に持っていたのか、溜飲を下げたアデリアがさも嬉しそうにチェンに向ってそう告げた。ニヤニヤが止まらないアデリアの表情を見たチェンは、それでも別に悔しそうな顔一つせずにアデリアに話しかける。

この感情の強固さは一体なんなのだろうかと訝しがるマークスを尻目に。

「ごめんね、アデリア。今回は君のお役には立てなかったようだね。また何かあったら何時でも声を掛けてくれるかい？」

「ええ勿論。今回は貸しにしておくから早めに返してね。当てにしているから。」

アデリアの言葉を最後にチェンが席を立つ。手を振るアデリアに同じ様に応えながらにつこりと笑ってゆっくりと出口に向うチェンの後姿を複雑な思いで見守るマークス。

湧き上がる、奇妙な棘。

チェンの持論を理屈と常識で覆したのは確かに自分だ。だが反論をしながらマークスは自分の心の中に浮かび上がる違和感に苛まれていた。

アムロ・レイ曹長の出現は偶然による物だった。そして彼が連邦軍に齎した戦跡は莫大で、それも奇跡に近い物であっただろう。

奇跡とは時に非常識な事と置き換える事も出来る。ではその非常識が再び起らないという可能性は、果たしてゼロか？

「なーに難しい顔して考え込んでんのよマークス。ほら、あたし達も行くわよ。」

考えを廻らせたまま座り込んだマークスの肩をアデリアがポンと叩いて立ち上がった。得意満面な顔を追って視線を上げるマークスがアデリアの発言の意図を読み取れずに思わず聞き返す。

「行く？ ってどこへ？」



「あたし今　とっても気分がいいから、明日の非番を心置きなく過ごす為に課題を今日中に済ませる事にしたの、今決めた。」

「え？」

そんな台詞がアデリアの口から出るとは意外だった。呆気に取られるマークスを、マークスの顔に書いてある台詞を読み取ってプンとむくれるアデリア。

「何よ、そんな顔して。あたしだってたまにはそんな気になるんだから。さ、今からニナさんの所に行つて課題をパパツと済ませちゃうわよ。勿論マークスも一緒に。」

「い、いやそれはいいけど」

マークスは思わず腕時計を見た。父から送られたイタリア製の軍用時計はほんの僅かな狂いもなく夜の九時を差している。夜勤との交替が始まる時間でそれは即ち消灯時間を表していた。

「もうこんな時間だぜ？　幾らなんでもこれからつて言うのは技術主任に失礼じゃないか？　明日の夜にでも改めて窺つた方が」

「はっはーん。」

したり顔のアデリアが、チェンに向けた物とは別の意地悪な顔でマークスを見る。揶揄混じりのその声は明らかにマークスを挑発している。

「マークス、実は一人暮らしの女性の部屋に入った事が無いんだ？」

「なっ何を」

煽る様に見下ろすアデリアの横で思わず立ち上がるマークスの視線がからかい顔のアデリアを睨んだ。だがその視線が定まらないまま左右に泳いで。如何にも凶星を言い当てたアデリアが畳み込む様に言葉を続ける。

「じゃあ、今日がそのいい機会じゃない？　あたしが一緒に行くからこれも将来の勉強だと思つて経験しておく事ね。」

「行こ？」

そついい残したアデリアが彼女らしいしなやかな動きでテーブルを離れる。肩より長い栗色の髪を颯爽と靡かせて歩く後姿には、そのスーツを身に纏っていないければパイロットだとは分からない位の可憐さがある。一瞬見とれたマークスではあつたがすぐさまアデリアの言い残した言葉を思い返して我に返る。そして彼女が自分を揶揄した事に対して抗議の言葉を口にした。

「何が将来の勉強だ。お前こそ将来の為にもうちょっと大人の女つて物をニナさんから教われ、この機会に。」

アデリアの手が古ぼけた木の扉を軽くノックする。二つの響きは軽やかな音色で恐らくその向こうにある、士官専用にしては控えめな広さの室内の隅々まで届いた筈だ。だが訪問を告げるアデリアの仕草に返つて来る応えは無かつた。

「？ 変だなあ、まだこの時間に寝てる筈は無いんだけど」

呟きながらドアノブに伸ばした手をマークスが慌てて掴んだ。思わぬ感触に内心ドキリとしながらもアデリアは努めて動揺を面に表さない様にマークスの方を振り返る。

「な、何？」

「幾らなんでも返事が無いのに人の部屋に勝手に入るのはまずいだろう。技術主任だつて疲れて休んでるのかも知れないし。今日の所は出直してちゃんと技術主任の予定を聞いてからだな」

「何言つてんのよ。せつかく出てきたこのやる気を今使わないでどう使つよ。』今日出来る事を明日まで延ばすな』って言うでしょ？」

「『明日できる事は今日するな』とも言うぜ？」

「屁理屈ね。」

理屈では全く敵わない事は今までの付き合いの中でも、そして先程目の前でチェンを論破した事からも理解できる。マークスの伝家の宝刀が抜かれる前にアデリアは実力行使に訴える事を決意した。マークスに掴まれたままの手でドアノブを掴み、回してみる。もし

それが動かない 施錠されている 事が分ければ自分の貴重なやる気にも諦めが付く。その時はマークスの勧めに従って後日の来訪を約束しようと考えていた。

ドアノブが回る。

そつと力を入れてドアを押すとそれは意外にあっけなく開いた。壁との間に出来た隙間から漏れ出す光が部屋の中に誰かがいる事を指し示す。それが分かった時点でマークスの手はアデアの行動を押し留める事を諦めて離れた。アデアは自由になった手で尚も力を込めてゆつくりとドアを開きながら、それでも遠慮がちな声で中にいるであろう人物に声を掛ける。

「ニナさーん …… ご在室ですかあ？」

ドアの隙間からひよっこりと顔だけ出して中の様子を窺うアデア。状況を確認したアデアの体が続いてドアの隙間を押し広げ、侵入者の後ろでどぎまぎしながら成り行きを見守るマークスの視界にもはつきりと中の様子が分かる様になるまでドアを開いて、呟いた。

「あれ？ いないなあ …… どこ行っただら？」

足を踏み入れるアデアを静止する事も出来ずにマークスはドア越しに広がるニナの部屋の様子を眺める。間接照明の黄色い光に浮かび上がる室内は何処と無く怪しげな印象をマークスの視覚に与える。だがその光景を眺めてマークスに浮かんだ感想は意外な物だった。

「これが、技術主任の、部屋？」

呟きながら戸惑い。戸惑いながら歩を進める。個人の管轄する領域へと侵入したマークスは一目で見渡せるほどの室内に立ち尽くしたまま言った。

「何にも無いじゃないか。」

なるほど、何事もきつちりで行うニナの性格と職業を考えればこの私室の中の徹底した整理整頓ぶりも頷ける。だが整理整頓にも程があるだろう。ベッドにきちんとかけられたシーツには皺の一つも

無く、そして部屋の何処を見回してもその場所が二ナの部屋である事を証明する物が何も無い。まるで入隊前に見せられる宿舎のモデルルームの様な佇まいを呆然と見回すマークスを尻目にアデリアは部屋の奥へと進んでいく。

「アデリア、本当に此処が二ナさんの部屋なのか？」

余りのギャップに『技術主任』と言う肩書きを付ける事も失念したマークスがアデリアに尋ねた。

「お前、どっか部屋を間違えてないか？ 幾らなんでも女の人の部屋でこれはないだろう。下手したら俺の部屋より何にも無いぞ、これ。」

「ううん、でもここが二ナさんの部屋だよ。あたしは今日で二回目…… 前の時と変わんないなあ、やっぱり何にも無い。」

そう呟くと作り付けのドレッサーの前に佇んでじつと一点を見下ろした。やがてその手がそこに置かれた口紅を手にとってキャップを外す。くるくると根元を回して中身を確認して。

「先月の非番の時に買って来た口ゴナのグロスも手付かずかあ。あたしは結構気に入ってるんだけどなあ。」

残念そうに呟くと口紅を元に戻してそっと置く。自分の好意を受け入れて貰えなかった微かな悲しみと空しさを言葉に込めてじつと動かないアデリアの後姿を見詰めて、マークスが尋ねた。

「それで明日の非番に俺をサリナスに誘ったのか？ 二ナさんへのお土産を買ったために。」

「うん。」

小さく頷いたアデリアがマークスの方を振り返った。その表情はマークスが今まで見た事も無い悲しさを湛えて、微かに笑っている。「気付いてた？ 二ナさんって、あたし達が此処に来てから一度も笑った事が無いんだよ？」

その言葉にはっと思いが当たるマークス。確かに、苦笑いのようなシニカルな笑いを浮かべている事はあっても心の底から楽しそうな顔を、そして笑い声を上げた姿を見た事が無い。と言うかマークスに

は今の二ナの姿からは想像が出来ない。彼の持つ二ナの間人像の中で『喜』の感情の一切を削除した姿、それがマークスにとつての『二ナ・パープルトン』と言う存在だった。

「あたしね、四つ上のお姉ちゃんがいたんだ。丁度二ナさんと同い年の。だから何となくな、二ナさんがあたしのお姉ちゃんみたいに思えて」

「『いた』？」

「……一年戦争で死んじゃった。お姉ちゃんも軍人でね、戦艦のオペレーターをしてたんだ。あたしお姉ちゃんと一緒の戦艦に乗って一度でいいから送り出してもらおうのが夢だった。だからモビルスーツパイロットの道を選んだんだけど、丁度士官学校に入学が決まった頃にソロモンでね」

アデリアの告白に動揺するマークス。二ナの笑顔もそうだったがアデリアの身の上話を聞くのも今日が初めての様な気がする。僚機として常に行動を共にしていても語られなければ知る事の出来ない過去、それも普段のアデリアからは想像も出来ないほど悲しい過去の記憶をマークスはただ黙って聞く事しか出来ない。

「お姉ちゃんもね、あたしには厳しかったんだ。ほら、あたしってほつとくとんでもない事するじゃない？ 小っちゃい時からあたしが何か悪い事すると真っ先にお姉ちゃんが飛んできてあたしに雷を落とすの。あたしはお姉ちゃんに嫌われたと思って、辛くて、悲しくていつつも泣いてた。そしたらね」

アデリアの両腕が自分の両肩を抱きしめた。仄暗い明かりの中に浮かぶ長い睫毛がきゅっと閉じて。

「こうやって抱きしめてくれて、それで耳元で囁くの。『ばかね。私があなたの事を嫌いになる訳が無いじゃない。あなたは私のたった一人の妹なんだから』って。その言葉が嬉しくて思わずお姉ちゃんの顔を見ると、いつもお姉ちゃんは笑ってた。……」

こうやって目をつぶるとね

「だからウラキ伍長の事が許せないのか？ 二ナさんから笑顔を奪

った原因の。」

アデリアの表情に微かに残っていた笑顔がマークスの問い掛けと同時に消えた。

アデリアから語られる独白の内容を分析して得た答えは、恐らくアデリアの深層心理の正中を射抜いた。閉じられていたアデリアの瞼が開いた時に、その奥に浮かんだ瞳に複雑な色彩が漂っている。

「……あたしね、あたしの周りの人にはみんな笑って欲しいんだ。あの戦争で悲しい思いをしなかった人はあたしの周りには一人もいなかった。だからせめて生き残ったあたし達だけでも楽しく生きなきゃ、死んだ人達が浮かばれないじゃない？ だから笑えなくなつた人を見ると、ついね。」

「ベルファスト？」

アデリアの過去の疵を氣遣ってマークスの口から飛び出した一つの単語。アデリアはマークスの労わる気持ちを感じて嬉しそうな笑い顔を浮かべた。

「今考えるとね、本当はあの男が憎くてあんな事をしたのじゃないのかも知れない。あの子が乱暴された事は絶対に許せないけど、それよりもあの子の気持が裏切られた事の方に腹が立ったのよ。だってさ、あの子あんな事になつてもその男の事が好きだったんだよ。あの子の目がおかしい訳じゃない、本当はあの男も元はそんな事をする筈の無い良い人だったのかも知れない。もしあの時今のあたしがそこにいたのならそんな事はしなかったかも知れない。このオークリー基地で『戦争の無い平和』の意味に気が付いた今のあたしなら……。」

アデリアの目がマークスの、何処でもないその双異色の瞳を見詰める。マークスに届けとばかりに放たれた言葉の矢は、その視神経を通じてマークスの記憶中枢に刻み込まれた。

「だからあたしね、みんなから笑顔を奪おうとする人となら死んでも戦える。例えそれが誰であっても、敵わないと分かっているも。

あたしね……。」

言葉が、声が途切れた。喉の奥に詰まった言葉を絞り出す様に息を吸ったアデリアの瞳が潤んでいるのがマークスには分かる。

「……戦争が憎いんだと、思う。みんなを変えていく、みんなから笑顔を奪う戦争が。」

沈黙はその言葉の終わりを境に二ナの居室を漂った。マークスの沈黙はアデリアの矜持に対する同意を表し、アデリアはそんなマークスを嬉しく思う。

言葉で語られればそれだけで軽薄な響きを齎しそうな彼女の銘は目の前に佇んでじつと耳を傾けてくれた上官のお陰で強固な裏付けを得た様な気がする。真剣な顔でアデリアの顔を見詰めるマークスに向って、アデリアは笑顔を取り戻して言った。

「ご、ごめんね。こんな話、ちつとも面白くなかったでしょ？ な、なんであたしこんな話しちゃったんだろ、それも人の部屋でだよ？ ほーんとあたしってだめだなあ、ちよつと自分の気分がいいからってこんな話自分からするなんてどうかしてる。」

照れ笑いで取り繕って二ナのベッドへと歩を進めるアデリア。傍に近付くと徐に振り返って皺一つ無いベッドの上に勢いよく腰掛ける。スプリングが軋んで二人の間に流れる静寂と言う名の伴奏に傷を付けて。

「……そんな事、無い。」

マークスがベッドの上で弾むアデリアに向って呟いた。その言葉に秘められた深い意味を知って華やかだったアデリアの笑顔が微笑へと変化する。

「お前が俺に話して、それでお前の気が晴れるのなら、俺はそれでいい。……俺とお前は『僚機』だ、お前の過去に何があったとしてもそれだけは変わらない、不偏の。」

ポツリと呟いたマークスの言葉がアデリアの胸を打つ。求めた答を手にした感動はアデリアの涙腺を知らずの内に緩めた。開いた円らな瞳から遂に零れ落ちる一筋の。

仄かな明かりはそれに光を当てて跳ね返す。

「………… アテリア、お前………… 泣いてる？」  
マークスの問い掛けで初めてその事実を知るアテリア。はっとして思わず掌で両目を拭って。

「し、失礼ね、泣いてなんか無いっ。これはその………… あ、汗よ、あせ。ちょ、ちょっとこの部屋冷房の利きが悪いんじゃない？」

慌てて立ち上がったアテリアが空調のリモコンを探して視線を動かす。それらしき物は丁度二ナのデスクの上にある。急ぎ足で近寄ったアテリアの手がそれを掴んで。

涙で曇ったアテリアの視界はそれをリモコンと間違えて動かした。

「あれ？ 違った。これ…………」

マウスが動いた瞬間にデスクトップのハードが微かな唸りを上げて起動した。安物のディスプレイが発する低周波の音と共に明るくなる液晶。表示される画面。

「やだ、勝手に動かしちゃった。どうしよう。」

焦るアテリアがまるで腫れ物にでも触る様にマウスをそっと机の上に置いた。とは言え今更元に戻す事もままならない。出来る事なら再び待機状態を迎えるまでに二ナが部屋に帰って来ない事を祈りつつ、アテリアは机の前から後ずさる。アテリアの背中隠れていた画面がそれでマークスの視界に飛び込んで来た。

「………… モビルスーツの運用データ、か？」

その画面をぼんやりと見ていたマークスの視界が内容を把握した時点で急速に鮮明になった。ピントを合わせて内容を見詰めるマークスの顔には既にプライベートの穏やかな顔は無い。彼の特長とも言える異常なまでの集中力が、その場に居合わせるアテリアの存在すらも無視してその一点に結集した。マークスの視線を追うアテリアの視界にも当然その画面は映りこむ。

アテリアの目から見てもそれは間違いなくモビルスーツの運用データに間違いはなかった。時間経過と共に記録されたそのデータは出力の増減とそれに伴うコクピットのGの相関関係を示す物だった。「そうみたい。誰のGデータだろ？」



異常にぎざぎざな、まるで人の心電図の様なグラフをじっと見るアデリア。誰のデータと言ってもこの基地にいるモバイルスーツパイロットと言えば自分達とキースしかない。陸戦隊員の何人かはザクを動かす事は出来るが、それも簡単な作業を行うと言う用途に限定される。とてもこんな激しい波の機動を行える腕ではない。とすれば。

「多分キース隊長のデータじゃない？ だってあれだけの實力を持った人だもん、これ位の数値は叩き出す」

「違っつ！」

小さく叫んだマークスがディスプレイの前に文字通り飛んで来た。前に置かれたイスをどけるのもどかしく足で動かしたマークスが立ったまま画面に目を凝らす。

「ちよ、ちよつとマークスやばいって。これニナさんの私物なんだから勝手に覗いちゃダメだつて。」

マークスの手を掴んで引き離そうとするアデリアの意志と忠告は再びマークスの集中力の前に脆くも潰えた。無駄だと分かっているも何とかこの場を離れようとするアデリアの顔を、驚愕に塗り潰されたマークスの目が睨み付けた。

「見る、アデリア。ここを。」

画面の端を指差すマークス。そこはグラフの縦軸の上端部分、そしてそこには必ず指標となる単位が示されている場所である。余りの迫力に押されたアデリアが渋々とマークスの指の先に置かれた数値を見て、読んで。

目を見張った。まるで信じられないと言った表情で、

「な、なにこれ……」

その数値は上限四万キロワット。サラミス巡洋艦の四分の一であり、連邦軍の主力モバイルスーツであるジムの、約三十倍。そんな物は二人の記憶の何処にも無いし、

「……有り得ない。なにこれ、ほんとにモバイルスーツのデータなの？ こんなので」

「いや、これはもうモバイルスーツじゃない。一年戦争の時にジオンが生み出した『モバイルアーマー』<sup>はげもの</sup>のデータに違いない。何故こんな物をニナさんが」

マークスの手がマウスに伸びる。視界の片隅にその動きを捉えながらもアデリアは罪の意識を封殺した。

いや、本当は感じていたのだがこのデータの持ち主を知りたいと言う欲望にはどうしても勝てない。咽喉を鳴らして見守る二人の前に有る画面上のカーソルは好奇心に満ちた『覗き屋』の意志のままに踊り、そして求められるままに最初の画面を呼び出した。そこにはこの記録を残した人物のパーソナルデータが記されている筈。

画面が切り替わる。

顔写真が浮かぶ。

名前が表示される。

「そ、そんな…… 馬鹿な。」

「こんな事って！」

言葉を絞り出す二人の前に表示されたパーソナルデータの持ち主の名前、そして階級。

コウ・ウラキ『戦時中尉』。

人は何故矛盾無しには生きられないのだろうか。とニナは自分の体に起る変調を顧みながら思った。

電算室から一仕事を終えて自室に帰る足取りが軽いのは自分が根っからのエンジニアである証拠。そして最後にそんな気持になった日々の記憶を思い返して心に痛みを覚えてしまうのは、自分が弱い人間であるという証拠。

甘く切なく、そして楽しかったあの日の記憶。この足取りは間違いない。あの日の足取りに瓜二つだと言う事をニナは知っている。そう、ガンダム一号機の空間高機動型『フルバーニアン』がテストフライトの為に月面のリバモア工場のエアハッチから出て行く瞬間に窓に駆け寄ったその足取りに。

両肩から突き出たユニバーサルブースト・ポッドから伸びる白炎を、その体を宇宙空間へと押し出す圧搾式カタパルトの水蒸気を、そしてそれを操る自分の愛する男が飛び立とうとする姿を見送ろうと窓に駆け寄ったその足取りにそっくりである事を。

無機質な空間に撃ち出された機体が試作機である事を示す白と連邦軍の所屬である事を明示する識別パネルの青い色が月の砂漠と境界の無い宇宙<sup>宇宙</sup>を駆け抜ける。初めて乗り込む機体をまるで自分の手足の様に自由自在に操るコウの才能と能力に魅せられながら、リアルタイムで転送されるデータの数値が証明する新機体の実力、産声を上げた我が子の力に昂ぶる心。

ピーキーな特性を持つこの機体を扱える者は彼の他にはもういない。私が彼の為『だけ』に用意したガンダム、見た目の穏やかさとは違ってせつかな所や荒っぽく扱う癖まで考慮して手を加えた機体に満足するコウの笑顔。それを見て分かち合う喜び。

思えばそれが自分のエンジニアとしての最良の時間であったようにも思う。何の迷いも無く後悔も無く、それを造る事の意味さえも

分からず。

デラーズフリートと言う『悪』の権化を誅する為に生み出された白銀の騎士。それを操って立ち向かうコウ・ウラキと言う名の良人は大剣を振るう正義の戦士。彼の上げる戦果に、そしてあの事態を引き起こした被告であるアルビオンの一員でありながら『撃墜王』としての名声を積み重ねていくコウの姿を誇らしく思っていたあの日。

それが彼の心をどれだけ蝕んでいたかを気付く事も無く。

ただ無邪気に。ゲームに勝った子供の様に側ではしゃぐ私をコウはどんな気持で見詰めていたのだろうか？ ソロモンの海を切り裂きながら撃破数を増やす度に訪れる猛烈な罪の意識、そして『目的も無く殺人を犯す』事への耐え難い苦痛。闇に巻かれてもがく彼の心を私は理解する事も無く、時の語り手によって紡がれる英雄譚に憧れる童の様に曇った瞳を輝かせる共犯者の私の姿を。

その罪深さに気が付いたのはガトーとコウが戦端を開いたと知った、まさにその時だった。刹那の時の中で二人は鎧を削り、命を削り。互いが手にする刃の輝きは二人に残された運命の煌き、『愛した男』と『愛する男』が尊厳を賭けて命を取り合うその事実。私の過去と現在に生きる、掛け替えの無い。

人の未来を、それに連なる更に多くの人の願いを斬り棄てる機動戦士と言う名の究極進化の兵器の姿。私はこんな物を生み出してしまったのか。こんな物を与えてしまったのか。

あの二人に。

手の中に在るミニノートには二ナが改良を加えた新たなOSが実装されている。初期動作720種類を半分以下にまで絞込み、空き領域となった部分には新たなシステム『知的記録』インテリジェントレコードと言うプログラムが二ナの手によって書き加えられた。これによってこのOSは使用するパイロットの技量に比例して成長を続ける『補助動作システム』アシストモーションの一翼を担う事になる。

パイロットの戦闘経験

そんな事は二度と自分の前で起つ

て欲しくは無いが　　による複雑な動作を全て記録する事は勿論スロットルを空けるタイミングや各プログラミングを呼び出す反応速度などをパイロット個別に記憶しカスタマイズ出来る機能を持ったこのOSはきつと彼らの力になる筈だ。　　技能に応じて最適化されたモビルスーツは恐らく彼らの能力を飛躍的に向上させるに違いない、とニナは苦い記憶の復元を自覚しながら思った。

そう、この試作品は既に有った。それはコウの乗るフルバーニアに試験的に採用され、その恩恵に与った彼はコンペイ島で『撃墜王』の称号を手にするに到り、そしてガトーとの死闘の果てに相打ちとなりソロモンの海で二機のガンダムと共に散った。

私はあのソロモンの海で自分の生きた証を失った。そして未来の希望を取り戻した。

コウが生きて戻ってきた時に私の心を支配した物は失望よりも安堵だった。ガトーと戦い続けるコウ、二人の姿は私には手を取り合つて次の世界に向おうとする別次元の『妖精』の様にも思えた。彼らの紡ぐ『御伽噺』を理解出来ないままその背中を見送るしかなかった自分の存在を、気持を疎ましく思っている自分がいる。

それは恐らく心配などと言う俗な表現では言い表せない。例えて言うなら、それは嫉妬に似た感情。

だがそれもあの時に終わった。そしてそう感じた時に、自分のエンジンニアとしてのキャリアも終わった。

だからコウと一緒に地球に戻つてこんな世界の事など忘れてしまおう、そして二度と彼を此処に戻さない覚悟を決めよう。

余りにも邪で我が侷な自分の決意に与えられた罰。それは愛する者を私の手元に縛り付けようとした欲望と引き換えに与えられた代償。時の歯車を支配する三人の老婆は私達に最後に残ったガンダム三号機と新たな戦場を用意した。それはまるで私の覚悟を試している様で。

私の友人の血を啜って此の世に産み落とされたガンダム三号機。

それは私が愛する者を取り込んで、私の『愛した』者に対峙する為の使命を負う。私の大事な者を全て奪おうとする白銀の墮天使<sup>ステイメン</sup>。

その時私は初めて自分の犯した罪の大きさを知った。  
初めて『ガンダム』を憎んだ。

三号機の起動ディスクにこのシステムを採用しなかったのは、時間が無かったと言う事も有るが実は二ナの心に湧き上がった恐怖と言う部分が大きい。コウの才能が未知の領域にある物とは言え、ほんの僅かな間に伝説の撃墜王と渡り合える実力を身に付けさせる自分のシステム。パイロットの技量に応じて成長していくモビルスーツと言う存在の意味を理解していなかった二ナにとって、コウの変化は自分の持つ才能への恐怖心となって目の前に突き付けられた。

死地を潜り抜ける度に積み重ねられる経験はそのまま彼の技量と成って更なる戦いへと運命を追い遣る。そしていずれ彼は辿り着く。『死』と言う名の、私から最も離れた世界の果てへと。

コウを失うと言う。『愛する男』を失うと言う。未来を失うと言う。

その瞬間に私は気付いてしまった。コウが生きていてくれればそれでいいと、そしてその為にはどんな手段も問わないと決意した自分の意志に。

ルセットが今わの際に呟いた最期の言葉はエンジニアとしての本懐。自分の生きた証を此の世の何処かに刻んで置きたいと言う、当たり前な欲求だ。抱き抱えた手の中に溢れる暖かな彼女の血と共に私はそれを受取らざるを得なかった、同じエンジニアとしての世界に生きる私にそれを拒む資格は無い。

矛盾。

強大な火力を誇る三号機をコウに与える事。シナプス艦長を始めとする連邦軍の方針を一技術者である私が覆せる筈も無い。それに何より奪取されたコロニーはその目標を月から地球衛星軌道へと転換した。畏に嵌って推進剤不足の為に月軌道に足止めされたコンペイ島駐留艦隊にデラーズの、ガトーの野望を阻止する事は出来ない

だろう。間に合うのはラヴィアン・ローズに保管されている三号機とアルビオンのみ。コウを載せなければまた大勢の人の命が失われしてしまう。 矛盾。

そしてコウはまた飛び立って行ってしまふのだろう、空間戦闘用に換装をしていない一号機で無謀にも迎撃に上がったあの日の様に自分の力を過信して、私の創ったガンダムを信じて戦いに挑んだあの日の様に。そして必ず生きて還って来る保障は何処にも無い。

ならば、私の成すべき事は唯一つ。

貴女にコウをあげたりはしない、墮天使。貴女の力は今のコウにとって、私にとっても必要な物。でも貴女にはあげない。

その有り余る力で戦線を拮抗させてくれればそれでいい。貴女にはその力が十分備わっている、だから私はそれを使いこなせるだけの能力を残された時間でコウに与える。でも貴女がコウを連れてその先に行く事だけは許さない。

だから私の罪を貴女に与える事は無い。何故なら、

これは取引よ、貴女と私の。

貴女に命を吹き込む代わりにコウを必ず私の元に戻すと言う。

でも私は知らなかった。

彼女を操る為に必要不可欠な『パーツ』が既に全て備わっていた事に。

自らの手で封印したシステムを再び使う事に罪悪を感じなかった訳ではない。システムだけではなく自分の創った物が自分の愛する男の全てを変えてしまったと言う事実は、少なからずとも再びこのシステムを世に送り出そうと言う二ナの決意に翳りを齎した。

だがだからと言って今それを必要とする者達がいて、自分がそれを持っていながら与えないと言うのは技術者として傲慢なのではないのだろうか？ 彼らはコウ・ウラキではなくましてや此処は戦火の兆しも見えない極限の地。二人にとってこれが必要だと思つたな

らば惜しみ無く与えて然るべき事の筈だ。私達は　　コウはそこにはもういなかったが　　誓った筈だ、彼らを育てると。もし万が一戦火の嵐が再び彼らの頭上に降り注いだとしても必ず生き延びる事が出来るだけの力を二人に与えると。その為に必要な全ての知識を与えると。

「　大丈夫。二人ならきつと、」

普段は温和だがモビルスーツに乗ると人が変わった様に好戦的になるマークスはコウにそっくり。でも彼にはアデリアが就いている。勝気なくせに冷静、優秀なウィングマンが。

あの二人ならばきつと私の創ったこのシステムを上手に役立ててくれるに違いない。それにまだ彼らの周りにはキースが、モウラが、そして私がいる。彼らに何が起ころうともその時には私達が彼らを助ける。もう二度とバニング大尉やルセットを失った時の様な思いをしない為に。それに、

彼らは『コウ・ウラキ』ではなく、ここに『ガンダム』は無いのだから。

電算室のある管理棟から仕官宿舍までの長い渡り廊下を抜けて階層の入り口へと辿り着く二ナの足。様々な思惑と自答を繰り返しながら窓越しに広がる夜景に目を向けて、急かされる様に自室への帰路を辿っていた歩調は滞った。

軍事基地であるが故に夜間の照明は極最小限に限られ、昼間はまるで地上の全てを浮き彫りにする様な強烈な日の光に晒されたオークリーの大地が闇に溶け込んで眠りに付く。同じ空の下で、同じ闇に紛れながらこのオークリーの何処かで眠っている最愛の男の顔を窓ガラスに映しながら、二ナは小さな溜息を吐いた。

自分自身の其の決意がまるでコウのいない隙を突いて画策される悪事の様な意識にも思えて、しかし其れが今一番必要な事であると言う言い訳にも似た必要悪は二ナの気持ちに僅かばかりの救いを齎して。



心の底から自分自身の葛藤を締め出す様に二ナは瞼を閉じて次の一步を踏み出した。そう、この一步の意味は過去からの決別と新たな未来への決意を表している。例え自分が其処に置いて行かれたとしても悔いは無い、未来へ生きようとする若き力に与える事の出来る、私からの贈り物の一つであると其のシステムを位置付けながら、贈るべき二人の顔を瞼の裏に思い浮かべながら。

ある意味このシステムを採用できた事は二人のお手柄である。現状のOSを使用しているパイロットが突然マニュアル操作と言う事態に陥った時にどういう事になるか。今日の演習で二人が仕出かした『無茶な不始末』の結果はウエブナーの胃の痛みと兵站部への追加品の要求と共に二ナに貴重なデータを与えてくれた。

たった一機の、其れもサーベルしか持たない熟練パイロットの操るモビルスーツに傷一つ付けられずに撃破されたと言う無様な戦闘データは常識に凝り固まったコチコチ頭のメインコンピュターを説き伏せるには十分であった。勝敗よりも戦力の維持、兵士の損耗に神経質な演習解析プログラムは二人が齎した結果に対して迅速な改善方法の提示を二ナに要求した。満を持って送り込んだ二ナの新システムに彼らが齧り付くのは自明の理であった。

蓄えられている現在までの演習データと今日のテレメトリーグラフの差異を考慮すれば『其の一機』に勝つ為にメインコンピュターが選択する手段は手に取るように分かる。二つの状況に使用されたOSの仕様の丁度中間位置に当たるこのシステムが試用を認可する事は連邦軍のシステムと自らを標榜するAIならば当然の事であり、それは二ナにとっても予想通りの展開である。限定的とは言えこの基地に所属するモビルスーツパイロットの起動ディスクにそのプログラムの搭載する事を許可された事は二ナの気持ちを軽くした。載せてしまえばこっちの物だ、そしてこの『知的記録』には実績がある。誰にも言えない過去に埋もれた二ナ自身の記憶の中に、確かな形を携えて。

長い廊下を照らし出す蛍光灯の明かりが歩く二ナの影を前後に伸

ばして床を這う。履いたパンプスの踵が叩くコンクリートの音が誰もいない廊下に跳ね返って遠ざかっていく。

先を歩いていく其の足音が行き場を失って戻って来る通路の曲がり角、其処を曲がった所に二ナの部屋がある。空調も満足に利かず、何も無い部屋ではあるが其処が今の自分の全てである事には変わりが無い。

人が生きていく為にはそう多くの物は必要ない、と言うのがこの基地に来て二ナが出した結論の一つだった。ただ数少ない要素の中で本当に大事な物の存在だけはとくに失なわれてはいたが。

あの出来事が齎した影響によつて二ナのライフスタイルは激変を強いられ今日に至っている。過去に刻まれた事実だけが漂う其の部屋はそれでも今の二ナにとってはお似合いの、罪を償うには格好の住まいの様に二ナには思えた。

失った物を取り戻す事は二度と叶わない。だからせめて自分に与える事の出来る、自分に出来る懲罰といえはこれくらいしか考えられない、考えた事も無い。求めたり愉しんだり、そんな物は全て棄てて機械の様に働く為に自分の人生を動員すると言う恩讐に身を任せる生き方を続けると言う事位しか。

それで自分のした事を償えると言うのなら、安い物だ。

二ナの足が廊下の角を曲がろうとして、止まる。静寂の続く廊下の壁に反響して其の耳に微かに届く人の声。自分との内なる会話に終始していた二ナは問答を中断して其の意識を周囲へと向けた。

二ナの部屋は仕官宿舎の中でも女性隊員専用エリアの一角に当たる。ただ自分の立場は技術部門の関係者という事でアテリアやモウラとは別の階の、民間人から囑託と言う形で採用されている基地スタッフに使用を限定された階層にあった。緊急出動や非常事態に際して逸早く脱出路を確保できる位置に宿泊エリアを設けたのは民間人の安全の確保を優先に考えた先任司令官の配慮である。

軍人である以上常に万が一の事態と言う部分は常に想定されてい

なければならず、その時の民間人の保護は古今東西如何なる場合に於いても最優先の考えられる、とは聞こえのいい話だが要は軍事行動において民間人の存在は単に邪魔になるからである。

自分達の職場から部外者を排除し、仕事の専念できる環境を整える。その為其の階層の廊下の先には地下へと続く避難通路の非常扉がある。分厚い鋼鉄で作られた其れは恐らくファウストやRPG等の対戦車駆逐ミサイルによっても破壊出来ない分厚さを誇り、一度閉めれば其処に逃げ込んだ人員の安全は取りあえず確保される事を暫定的に約束する。

だが平和な地上で、其れも『忘却博物館』と軍内部から揶揄されるほど戦火から遠く離れたこの基地に於いて軍規の緩みと言う物は往々にして幅を利かせているという事は摂理に叶った現象だ。特に民間スタッフ専住のこの階では消灯時間を過ぎてから束の間の逢瀬を楽しむカップルが少なくない。彼らは安普請で生るこの仕官宿舎での逢引を良しとせず、たまにこの避難通路の向こう側での秘め事を画策して扉の向こうへと消えて行く。其の方が『音や声が外に漏れにくい』と言う単純かつ重要な理由を優先して。

「…… まったく、もうっ！」  
小さな声で二ナが毒づいて、自分の部屋の反対側にある茶色い壁を睨み付けた。

気持ちは分かるが腹が立つ。基地の周囲に人家が無く、人がいないという事は『そういう施設』が存在しないと云う現状を考えてみればその様な不埒な行動を選択するカップルの心境を非難する事は躊躇われる。だがそれがよりもよって自分の部屋の直ぐ傍で行われていると言う現実には理解が出来ても納得がいかない。

だがだからといって無理やりオークリーに赴任した二ナにこの部屋を優先的に宛がってくれた先任の司令官の好意を無にする訳にもいかなかった。引渡しのほんの僅かな間とは言え司令官として赴任したパイロット上がりの彼はこの基地に於けるこれからのモビルスーツ隊の将来を憂慮して、万が一の時に備えてこの部屋を二ナの為

に選んだのだ。これからこの基地に隔離される事が決まっていた哀れな陸戦隊員の群れが憂さ晴らしに襲い掛かってきても逸早く逃げ込める、二ナの身柄の安全を保障するセフティーハウスとなるこの通路の直ぐ傍に。

憤りを籠めて壁を睨む二ナの耳が聴きたくない物を捉える。其れが男女の声だという事が分かると一層腹立たしい。自分がこの忌々しい鉄の扉をパンプスの踵で蹴り付けると言う不届きな行為に及ぶ前に自室に籠ろうと決心した其の時。

「……？」

二ナが小首を傾げた。

おかしい。いつもならばもっと生々しい会話や声が聞こえて来る筈だと。だが不本意ながら耳を澄ませた二ナの耳に届く男女の声には蜂蜜の様な甘さも、悩ましげな愛しさの欠片も無く。ただ声を潜めて何かを呟く感嘆の声だけが籠められている。そして其れは。

「違う？……」

二ナはそう呟いて声のする方向を探った。周囲に反響して分かり辛い其の声音が、『いつもの場所』の反対側から流れている事を知るのにさほどの時間は掛からなかった。

はっとして振り向く二ナの視線の先には自室の古ぼけたドアがある。そして内開き　いざと言う時立て籠もるのには其の方が都合が良い　のドアの隙間から、其の感嘆交じりの会話は漏れ出している。自分の憤りが見当違いであった事に、そして其の声の主達が誰であるかという事、其の意図を推測した二ナの表情が一転して氷解した。自分の勘違いによって湧き上がってきた感情を思い返して、揺れ動いた心の醜態を顧みながら苦笑する。

鍵を掛けないのは最近の二ナの癖。今夜の様に何時誰かが尋ねてきても部屋に迎え入れる事が出来る様に、最近ではほんの少しの外出ならば鍵を掛けずに部屋を後にする事が多くなった。

昔とは違ってオークリー基地自体の治安が安定してきた事も挙げ

られるが其れよりもモビルスーツ隊の存在が陸戦隊のはみ出し者達に渋々ながら認められているという事も大きな要因だ。モウラやキース、そして……コウの奮戦によつてその地位を確保した彼らは最初は恐怖によつて、そしてそれはコウの行動によつて次第に尊敬へと変わつていった。布教にも似たコウの、懲罰による自らの階級の格下げをも顧みないあの闘争の日々はこの基地自体の安定した日常を齎す事に寄与を果たした。

これは彼が残した、成果の一つ。<sup>あかし</sup>

だが其の日々の間　　味方がいない其の間に彼が私を心の支えにしてくれた事は無かつた。氣遣う私に言葉を返す事はあつても、其の心を開く事は一度も無かつた。拒絶する訳でもなく、感謝する訳でもなく。ただ心配する私の顔をじつと見つめる漆黒の瞳の底に蠢く絶望の影だけが私の心を苛み続ける。

それを彼に植え付けてしまったのが、私。其の影を消そうと努める私の日々の積み重ねを嘲笑うかの様にコウの瞳は陰りを増して、そして遂に　　。

泡沫の様に浮かんでは消えるコウへの思いをそつと両手で包み込んで、自室に無断で居座り続ける二人に対して浮かんだ苦笑は苦笑のまま。閉じた蕾の中で出口を求める様々な思いを握り締めて、そしていつもと変わらぬ技術者然とした表情と秀囲気で武装を固めた二ナは今朝の自分に戻つて自室のドアへと歩み寄る。

無断で自室に入った二人をどの様に叱つてやるつか、せめてドアくらいは閉めて話をしなさい。回りの部屋に迷惑だから、と言う台詞を頭の中に書き連ねてドアの取っ手に手を伸ばそうとして。

ドアの隙間から覗く二人の背中が二ナのその先に続く行動を抑えつけた。浮かんでくる奇妙な疑問に囚われたもう一人の二ナは素朴な疑問を視覚を支配してドアの隙間から室内の様子に目を凝らす本体に投げ掛ける。

何故二人はあそこに立っているのだろうか？

彼らの前には間違ひ無く自分の机がある筈。その机の上にある物

と言えば旧式のデスクトップと17インチの液晶モニター、周辺機器だけ。でも旧式とは言っても司令部付きのエンジニアであるチェンの私物を譲り受けた物だから内容的には十分な性能を誇っている。それに大量のデータを処理する場合にはオンラインで繋がっているメインコンピュータが二ナの仕事の相手をする。この部屋で独自で扱えるのは精々日報の管理が必要なモバイルスーツ隊みんなの起動ディスクの閲覧

思いつきで浮かんだ言葉とある種の予感が二ナの全身の機能に障害を齎した。予想される最悪の事態を脳裏に浮かべた二ナの呼吸は、そこから先の時間を止める事を求める様に休止する。

あなたたち、何を見ているの？

悲哀と後悔の海に溺れた昨晚の記憶。悲しみに掠れて思い出す事もままならない顛末の一部始終の追憶を目が覚めた瞬間から一つ一つゆっくりと思い返して。そして二ナは遂にその時間に辿り着く、そして知る。

曖昧な映像しか残されていないと言う事に。

“あの後あのディスクを私は何処に仕舞った？ 取り出した覚えはある？ いやそもそもパソコンの電源を落とした記憶は？”

覚えていない事を非難する様にもう一人の二ナが捲し立てる。言い返す事も言い訳をする事も出来ない二ナは答えの出ない回答を求めて記憶野の中を駆け回り、そこに全ての意識を注ぎ込んだ彼女の体はドアノブに伸ばした手を一ミリも動かさない。

時と共に押し寄せる恐怖に震える手が彼女の体をその先へ導く事を頑なに拒む。主不在の室内で今まさに進行している事態が自分の考える最悪のシナリオで無い事を、そして昨晚の自分が失意のままに寝てしまったと言う記憶が間違いであると言う事を祈りながら二ナはじつと耳を澄ませた。

微かに聞えてくる二人の会話が二ナが危惧する内容の物ではなく、ごく在り来たりな日常の戯言である事を祈りながら。

「何だよこの反応速度。20msミリ秒なんて単位、見た事も無

い。どうやったらこんな速さで火気管制を呼び出せるんだ？」

「それよりこの火器の種類は一体どういう事？ 一回の戦闘で呼び出した攻撃選択コマンドが、えっと……いち、に、さん……十六！？ 何でこんなに武器を装備出来るの？ 伍長の乗った機体に付いていたウエポンベイってどれだけあったのよ？」

「アデリアの放った感嘆交じりの叫びが二ナの心の奥底に潜んでいた小さな希望を貫いて、殺した。」

『伍長』 アデリアが吐いたその言葉。死んだ希望は光を失い、二ナの目の前に絶望の薄闇を引き連れてきた。

間違いない、彼らが今見ている物は 間違いないっ！ ああ、神様っ！

二ナっ！ あなたは何と言う事をしてしまったのっ！  
自分の犯した過ちを悔恨する二ナの唇に腕の戦慄わななきが伝播する。

震える歯の根が打ち鳴らす奥歯の響きが顎の骨を通じて頭蓋の裏にまでその細かなリズムを届かせる。

ついでやそこに近づけまいとして。二人には私達の様な未来を歩ませないと望み。翻弄された運命の轍から託された生きがいにも似た私達の願いが、こんな所でっ！

「 それにしても、この起動ディスク 」

アレイスターの大アルカナはその手の中で最凶のカードをくるくる回す。正逆全てに負の意味を連ねる『ザ・タワー』。捲られて場に差し出されるバベルに打ち下ろされる雷にも似たマークスの言葉。言葉を繋いだマークスが筐体のスロットに手を伸ばす仕草を絶望に塗れた二ナの目が捉えた。

「俺達のは違って古い形式バージョンで記録されているみたいだけど、一体どんな 」

言葉と共に起こされる行動の未来予測、偶然以上の確率で起こり得る偶発的事故、復元不可能なデータ、喪失の恐怖。

私のたった一つの。コウと共に生きたと言う過去の記録を封じ込めた、大切な思い出が。

蒼白に染まる顔面、焦点を失う瞳、輪郭を消す後悔、押し寄せる衝動。

二ナの手がドアノブを掴んだ。背後で起爆した何かの後押しされて古ぼけた自室のドアを一気に押し開いて中に飛び込む。

勢い余ったそのドアは二ナの手を振り解いて壁に叩き付けられた。背後で鳴り響いた突然の衝撃音に魂消た二人が反射的に振り返る。振り向けられた視界の隅を掠める様にして勢いよく走り込んで来た二ナが、今まさにスロットのイジェクトボタンに触れなんとするマークスの手を振り払ってデスクと二人の間の狭い空間に体を割り込ませた。

これ以上の情報を二人に与えまいとする決意が二ナの指を筐体の電源ボタンへと無意識に走らせ、済んでの所で自分の行為の危険性を察知した意識がその指の行き先をモニターの電源ボタンへと向けた。仄暗い明かりの中を矢の様に奔る指先が一瞬にしてモニターの息の根を止めて全ての閲覧を遮断する。

「ぎ、技術主任 ……」

マークスの口はその言葉を呟くのが精一杯。アテリアに到っては今まで見た事も無い二ナの取り乱した姿に呆気にとられて二の句も出せずに立ち尽くしたまま。至近距離で振り返る二ナの瞳がその蒼が、それ以降の二人の反問を拒絶する様に怪しい光を湛えて言葉と共に叩き付けられた。

「 …… あなた達。」

その声音に潜む怒り、いやそれはそれだけなのだろうか、と耳にしたアテリアは思う。そして違うと思う。

同じ音色の言葉は小さい時に耳元で。『お姉ちゃん』と同じ顔で、同じ声で、同じ目で。そしてそんな顔をした時はいつも。

「此処で見た物は忘れなさい、今直ぐ。そして二度と思い出しては駄目。いい？」

言葉を選んで、気持ちを込めて。散乱する言葉の束を投げ合わせて



文脈を削り上げる二ナの声は震えている。幼い頃の記憶を退行するアデリアの心はその言葉の命ずるままに無条件にその意思を受け入れようとして咽喉を鳴らす。だが彼女の無二のパートナーであるマークスはアデリアを縛り上げた呪縛を断ち切る様に声を上げた。

「何故です？ 技術主任。」

意志を鎮圧する圧力に抗うマークスの口から出た言葉はそれだけ。二ナから溢れる迫力と絶対的な遵守を求める命令は十分に理解できる。だが理に適わない命令を聞くと言う行動規範はマークスの選択肢に存在しない。

理不尽に抗い続け、それ故に地の果てに流れ着いたその若者は二ナから与えられた理由無き服従に対しても反攻の狼煙を上げる。その言葉を聞いたアデリアがはっと顔を上げてしまうほどに。

「その理由を聞かせて下さい、技術主任。それとこの基地に在籍していない『民間人』のパーソナルデータを何故貴女が隠し持っているかと言う事、その理由も。」

マークスの双眼異色が怒りに震える二ナを見下ろす。互いの主張をぶつけ合うその空間が熱を帯びて火花を放つ様だ。

「まるでMPの様な事を言うのね。第一彼は　　ウラキ伍長は『予備役』よ。民間人じゃないわ。」  
「いいえ。」

二ナの主張を立った一言で頭を振って撥ね付けるマークスの顔をアデリアは見詰めている。普段の温和な彼でもなく、モバイルスーツに乗った時の彼でも無い。基地のゲートで初めて出会った時から一度も見なかったマークスの素顔にアデリアは驚いた。いや恐らくどれも彼の素顔だったのだろう。

だが今日まではこの素顔を曝す必要が無かったただけなのだ、少なくとも自分の前では。

「『予備役』ならば有事の際には訓練参加者のデータを統合して編集した『汎用型』の起動ディスクが保管されている筈です。どの機体にも使えて誰でも直ぐに作戦行動が可能な様に。ですがこれは全

くの別物、そして伍長個人　　つまり『民間人』の物だ。」

マークスの言の正当性を知る二ナが口を噤んで更なる眼光で睨み上げる。理で敵わなければ気迫で封殺しようとする二ナの決意は無数の針となってマークスの良心を刺激した。

それを聞いてどうするんだ、と言う自他共通の疑問はマークスの正義を疑い、責め続ける。だがもう引き下がる事は出来ない。事ここに及んでは。

「二ナさん、教えてください。彼は　　『ウラキ伍長』とは一体何なんですか？」

「『彼』はこの基地に在籍していたパイロットでこの基地を離れる際に『予備役』に編入された、ただの民間人　　」

「そう、それだ。」

マークスがまるで予め何かに書き記されていた様な文言を朗読する二ナに、我が意を得たりと言った風情で見詰めて言った。チエンとの会話で感じた棘がばらばらと音を立てて零れ落ちる。

「二ナさん。軍の人事部に記録されている彼の経歴は『この基地に民間から予備役登録された』と言う事になっている。つまりコウ・ウラキ予備役伍長はこの基地には一度も在籍していない筈だ。だが彼を知る貴女や隊長、整備班長や陸戦隊員の何人かは彼がこの基地に再建直後に赴任して来たと言っている。彼についての皆の記憶が間違っているのか、それとも軍の人事部の記録が間違っているのか、二ナさんはどちらだと思えますか？」

つい今し方チエンに見せられたコウのデータを思い出したアデアが、そしてその事実を告げられた二ナが驚きの表情を浮かべてマークスを見た。

「あなた、どうしてそれを。あなたの立場では軍のアーカイブに入る事は許可されない筈　　」

非合法に情報を得たマークスの行いを咎める様に尋ねる二ナの声に力は無い。そんな手向かい等歯牙にも掛けない勢いでマークスが更に尋問の圧力を増した。

「僕がどうやってその記憶を手に入れたかはどうでもいい。僕が聞きたいのは何故、軍がこんな大掛かりな軍籍の改ざんをしてまで彼の素性を隠しているかと言う事だ。そして二ナさん」  
「問い詰めるマークスの眼が強い力で二ナの瞳を射抜く。その奥に隠された隠匿のベールを引き剥がさん勢いで。」

「このディスクを密かに所持している貴女は、その理由をご存知ですね？ 他人が持っているだけで軍の機密事項に抵触するであろうこの記録を、その危険を冒してまで隠していた貴女ならば。」

「マークス、もう止めよう？」

アデリアには血相を変えて追い込むマークスを、追い詰められる二ナを見てはいられなかった。いつも温和なマークスがまるで取調室の刑事の様に、そしていつも胸を張って誇り高く振舞っていた技術主任がまるで嘘を付いた子供の様に、その嘘を責められても尚それを認めようとはしない幼子の様な顔で自分を責める正義に立ち向かっている。余りに痛々しいその姿を見る事は今のアデリアの心情では忍びない光景だった。

居た堪れなくなったアデリアがマークスの手を掴んでこの場からの退場を促す様に小さく引つ張る。

「二ナさんがそう言うんだったらもういいじゃない？ きっと私達に言えない大事な事なんだよ。それにマークスは二ナさんとウラキ伍長の話が聞きたいだけじゃなかったの？ 何もこんな事して、取調べみたいな真似して二ナさんを困らせる事無いじゃないっ。」

「さっきまではそうだったさ、と言うかそんな事も忘れてた。でも気が付いたんだ、このデータを見てキース隊長達が何故僕達に『マニュアル操作』を教えようとしたのか。」

「え……？」

止めようとしたアデリアの手が不意に力を失った。アデリアに向かってそう告げながらもマークスの眼は二ナから離れない。

「二ナさん、そうなんですね？ …… 隊長や貴女が言っていた。」

隊長を超える存在』、それがコウ・ウラキ伍長の事なんですね？」

断言するマークスの眼から二ナの視線が遂に逸れた。それは明らかに無言の肯定である事が二人には分かる。辛そうな表情でマークスの直ぐ傍の空間を見詰める二ナに向って発言を続けるマークス。

「ウラキ伍長のディスクに残されていたデータは確かに常軌を逸している。でもこのデータとデータを残した本人が実在する以上、同じ様な力を持った敵が存在しないという保証は無い。だから隊長や貴女は僕達にその技術を教えようとしていたんですね？　こんな敵が万一自分達の前に現れたとしても、勝てないまでも生き残れる力を与える為に。」

「もう、いないわ……彼は死んだ。」

ポツリと漏らした二ナの呟き。その言葉の意味を理解出来ないアデリアとマークスが顔を見合わせた。

ウラキ伍長は確かに生きている。だが二ナは『死んだ』と言う。どういう意味だ？

言葉の続きを待つて沈黙する二人の耳にその後の台詞は届かなかった。それ以降の沈黙を守って未だに薄明かりの虚空に視線を向ける二ナの姿。内外全ての事象を拒もうとする二ナの頑な態度に業を煮やしたマークスが強い口調で言った。

「二ナさん、僕を見て下さい。僕の顔を。」

命じる様に飛び出したマークスの言葉に撃たれた様に二ナはその視線を再びマークスに向けた。言葉に導かれて顔を上げた二ナの視界一杯に真剣なマークスの表情の全てが映し出されて。

「僕はこんな顔形をしている。アデリアは知っているけど僕の眼と髪の色は劣性遺伝で、この事で小さい時から僕と両親は随分と苦労をした。生まれた国を追われて辿り着いた新天地でも同じ様に蔑まれ、自分の出で立ちで巻き添えを食らう両親だけでも楽にしようと入った士官学校で付けられた仇名が『魔女のマークス』だ。そして軍に入隊した後でもそんな下らない差別は続いた。時には自分の命に関わるほどに。」

それはまるでさっきのアデリアの告白に対する返戻<sup>へんれい</sup>。マークスが放つ熱い眼を二ナは瞬きもせずに見上げている。

「僕は色々な基地に……軍と言う組織に弾き出されてとうとう此処に来た。この基地の何も無いゲートの風景を見た時、最初はやっぱり自分の様な人間にはこの世の何処にも居場所が無い、遂に流刑地送りにされたと思ったくらいだ。……でも、違った。この基地は僕の様な者を差別も分け隔てもせず迎え入れてくれた。言葉遣いは悪くても、規律はなっていないまでもそれでもこの基地の人達は僕の事を『仲間』だと言って接してくれた。だから此処は僕にとつての『楽園』なんだ、多分最初で最後の。」

マークスの言葉が二ナの体から拒絶と言う名の壁を取り払いつつある。二ナを見詰めるアデリアには二ナの表情が次第に険しい物から何らかの決意を秘めた物へと変化していく様子が分かった。

「アデリアは貴女を『姉』の様に思っていると云った。でも僕は何も言わずに受け入れてくれたこの基地みんなの事を『家族』の様に思っている。だから僕は自分の本当の父や母と同じ様にこの基地の皆を守りたい。だから、知りたい。」

「『家族』……。」

二ナの漏らした呟きにマークスが小さく、しかし力強く頷いた。

「『家族』が守れるのなら、守らなければならないのなら僕は何だつてしてみせる。どんな理不尽な事でも無茶な事でもその為に必要な事ならばどんな事だつて構わない。だから二ナさん、教えてください。」

声音にこれ以上無い意志の力を込めてマークスが二ナに尋ねた。

「僕の大事な『家族』を守る為に得なければならぬ力って。『コウ・ウラキ伍長』とは一体何者なんですか？そして何故彼はこの才能を捨てて、この基地を去らなきゃいけないか？たんですか？」

左には強い意志を現す琥珀の色、右に冷静な理知を潜める白銀の光沢。その瞳の何処が気味が悪いのだろうと間近で見る二ナは思う。

マークスの宿した双眼異色は正しく人が生み出した偶然の産物であり、そこには求めても得られる事の無い美しさが混在する。

だが求めて得られない物ならば人はそれを手に入れる事を諦めて自分の価値観からそれらの存在を締め出して決して認めようとはしなくなる、それが『差別』の正体だ。人の罪に穢され続けて尚抗い続けた青年の二色の虹彩の底に輝く願望は差し伸ばされる手となつて、二ナが心の奥に封印してあつた記憶の琴線へと触れた。

アデリアは私の事を『姉』と、そしてマークスは『家族』だと言う。それは私達も同じ。二人の事を掛け替えの無い『家族』と思うからこそ今まで見守つてきたのだから。だけど。

あなた達の事を大事に思うからこそ、隠さなければならぬ事もある。『家族』だからこそ守らなければならぬ物がある。それはあなた達の素晴らしい未来の姿。

私達が生きた現実の全てをあなた達に話してしまつたら、あなた達が泳ぐ清浄な水域と私達が潜む混濁した水域の水は、交わる。日の光の下で健やかに平和を謳歌し続けるあなた達の人生はそれを境に一変する。私達と同じ秘密を抱えて私達と同じ報われる事の無い人生を歩まなければならなくなる。それを少しでも外部に漏らした事が当局にばれれば速やかに存在を抹消されてしまふかもしれないと言つ恐怖に怯えながら過ごす毎日を。

だから、言えない。話す訳にはいかない。

決心を固めた二ナがその決意を言葉にする為に言語中枢をフル稼働する。様々な言葉を拾い集めて意味のある文脈に構成する領域は二ナの頭の中の引き出しを全て開いて今の自分にお似合いの、二人を説得するに足る言葉の欠片を探し始める。

だが言葉の記憶で一杯の引き出しを弄る手が不意に掴み出した、言葉では無い記憶を見た時に二ナの心はある思いに気付かされた。

今ここでその事を告げないとしたらこの二人はこの後どうするのだろうか？

私の願いに気が付いて大人しく従つてくれるのだろうか？

もしこの二人が私以外の何かからこの事実を知ってしまった時。そしてあの『デラース紛争』を調べようとする者達に次々に訪れている偶然の不幸がこの二人の身に襲い掛かったとしたら、私は今日この事を二人に告げなかつた事を後悔せずいられるのか？

握り締められたあの日の記憶。自分が隠し通そうと誓つたが為に失つてしまつた掛け替えの無い存在。

また自分は繰り返すのか？ 苦しみを分かち合う事を躊躇つて、失つて後悔する様な真似を、再び。

育てると誓つた自分の祈りに似た世界に背を向けてまで。

「…………… 一つだけ約束して頂戴。」

呟く様に声を向けてマークスとアデリアを交互に見詰める二ナの瞳にある種の決意の輝きがあつた。マークスと二ナの遣り取りをなす術もなく見詰めていたアデリアにはそう感じる。そしてアデリアの直感の通り、二ナは小さな溜息を吐いて息とは違う何かを吐き出してから静かに告げた。

「今から私が話す事は絶対に他の人に話しては駄目。例えそれがあなた達の親友でも親兄弟でも、そしてキースやモウラにも。この事はあなた達二人だけの胸の中にしっかりしまつておいて頂戴。 ……

… 軍の機密保持とはレベルの違う、あなた達の命に関わる問題だから。 …… いい？」

その輝きが二人に覚悟を促すものと知つてアデリアとマークスは同時に唾を飲み込んだ。例え様の無い悲しみ、そしてこれから話す事に伴う苦しみを孕んだ二ナの瞳は一瞬前まで煮え滾つていた拒絶の光を蒼の中へと静かに眠らせてマークスを、そしてアデリアを見た。

二ナの覚悟を受取つて静かに頷く二人。其の仕草を確認した二ナは二人の予想通りの行動に失望したのか諦めたのか、首を少しうな垂れてから重い口を開いた。

「あなた達が見た起動ディスクは確かにコウ・ウラキ予備役伍長本

人の物。そして此処に記録されているデータの最終更新日は宇宙世紀0083年11月13日、コウ・ウラキ戦時中尉が最後に戦った日の物よ。」

「戦った？」

アデリアとマークスが二ナの言葉に記された一節を同時に呟いた。言葉の正誤を確かめようとマークスが敢えて二ナに尋ねる。

「ちよつと待つて下さい二ナさん。一年戦争が終結して三年も経っているのにこんな激しい機動を必要とする戦争が有ったなんて僕は記憶に無いし、そんな噂も聴いた事が無い。」

「それに其の年にはあたし達は士官学校にいました。それほど戦闘ならば軍に関わっている誰もが知っていておかしくない筈です。」

二ナの言葉を聴いた二人が口々にその内容を否定する。だが二ナは顔を上げて二人の顔を見渡した後に告げた。

「テイターズが其の勢力を拡大する為に利用した、地球圏内の極小規模な地域で発生した紛争。コウは其の紛争の中心で最後まである一人の男と戦い続けて生き残った『撃墜王』<sup>エクス</sup>。その紛争以降彼は予備役に編入されて一切の軍歴を抹消されるまで連邦軍内でこう呼ばれていたわ……………『悪魔払い』<sup>エクンスト</sup>と。」

「あの人が……………あの、『悪魔払い』、だつて？」

不名誉な二つ名を付けられている二人には其の響きに覚えがあった。『白い悪魔』と対を成す『悪魔払い』はどちらも連邦軍切つてのエースパイロットとして其の名を噂に残している。だが其の異名を持つ二人はいつの間にか歴史の表舞台から姿を消し生死さえも定かではなくなっていた。

きつと噂は噂でしかなく戦場と言う特殊な環境が生み出した幻の戦勇の姿なのだろうと、当時のマークスとアデリアは其の都市伝説の噂を持ち込んだ当事者共々結論付けた拳句に不認可の赤判を押して、記憶の隅にその名を追い遣つてしまっている。

だが其の人物が実在し、しかも自分達の直ぐ傍に身を潜めていたとは予想もしていない事実だった。事実の齎した衝撃はアデリアと



マークスの瞼を捲り上げんばかりに大きく開かせる。

驚愕する二人を他所に二ナは言葉を垂れ流す。ついてこれる所まで付いてきなさいと暗に示す二ナの台詞を聞き逃すまいと二人はじつと耳を傾けた。

「マークス、あなたの予想は半分正しくて半分間違っているわ。私  
が、いえ私達があなた達に得て欲しい力は確かにコウと同じ力。でもそれはあくまでこの最終更新のデータに残されたものじゃない、もっと普通の 例えばキースと同じ位かほんの少し上の実力で構わない。此処に遺された記録は間違いなく異能の力、其れも特殊な薬物を使つて導き出された、人が到達してはいけな領域なのよ。私がこの事を忘れなさいと言つたのはそういう意味でもある。」

「ですが、この記録は確かに存在している。という事はこれ程の推力と武器を兼ね備えた連邦軍初のモビルアーマーをウラキ伍長は駆使して戦っていた事の明らかな証明だ。一体彼はどんな機体で誰と戦っていたと言うんですか？」

其の事を尋ねられた二ナの声が一瞬途絶えた。まざまざと脳裏に浮かぶ其の機体のシルエット、妖精シルフェに似た墮天使。そして周囲を圧倒するその母体。

「…… 開発ナンバー『AERX-78GP03』。当時極秘裏に連邦軍とアナハイムの内部で進められていた次期主力モビルスーツ開発計画、通称『Gundam Project』。コウが残した記録は其の内の一機、『デンドロビウム』のコードネームを持つ三号機による物よ。」

「！ ガンダム三号機」  
マークスの頭にチェンが語つたあのウェブ小説の粗筋が浮かび上がった。歴史の影に消えた三機のガンダム、そして主人公とヒロイン。

彼らが戦つた相手の名前。

「ま、まさかウラキ伍長が戦つた相手つて…… 『ソロモンの悪夢』？」

一切を一笑に付していたアデリアの記憶にも其の粗筋は残っていたのだらう。マークスの疑問をアデリアが口に出して垂れ流した。咳きを耳にしたニナが小さく頷く。

「そう、元ジオン公国突撃機動軍第34攻撃中隊指揮官、アナベル・ガトー大尉。そして『デラースフリート』モビルスーツ部隊の総司令官、アナベル・ガトー少佐。」

「『デラースフリート』？」

「この紛争を起こした敵の……いえ、相手方の指揮官が自らの艦隊をそう呼んだ。そして其の紛争は全軍を指揮した『エギーユ・デラース大佐』の名を取って当時こう呼ばれていた。」

彼らの事を『敵』と呼べなくなったニナの瞳が焦点を失う。其の蒼の瞳が見つめる遙か彼方の悲しい日々、失い続けた過去の傷痕。

「『デラース紛争』と。」

「給弾終了っ！ ウラキ少尉、コンタクトっ！」

頭部に差し込まれていた給弾ベルトがモウラの手によって引き抜かれ、開いていたハッチが叩き付ける様に閉じられた。耳元で叫んだモウラの声聞いたかの様に一号機は唸りを上げて起動する。休眠状態にあった核融合炉は制御棒を引き抜かれて一気に臨界に突入した。

「何て無茶なっ！」

耳を劈く高周波を捉えた二ナが怒鳴った。作業用ケージから降りて一部始終を見詰める二ナの前に聳え立つ一号機の全貌。臨界出力でありながらなかなか動き出さないのは急激に上昇した融合炉の力をフィールドモーターに伝達する為のタービンがリミッターによって止められている為。出力が落ち着いてリミッターが解除するまでの間、全身を震えさせてその時を待つ一号機の姿はまるで武者震いをする戦士の様に見える。

「モウラ、やめてっ！ この機体は彼には無理だわっ！ 今すぐ融合炉の緊急停止ボタンを押して」

ジェネレーター等では生ぬるい、今すぐ大本の融合炉を停止して息の根を止めなければ。そうしないと二号機ばかりか一号機までもが私の知らない人に奪われてしまう。だが口調に紛れて浮かび上がった二ナの焦りを強く窺<sup>たしな</sup>める様にモウラが大声を上げた。

「二ナっ。気持は分かるけど今はウラキ少尉が正しいよ。今ここで一番二号機に近いのはウラキ少尉だけだ。彼に任せるしかないっ！」

「そんなっ！ 貴女まで何言ってるの！？ 彼みたいにザクしか乗った事の無いパイロットがこの機体を扱える訳無いじゃない!?」

「ザクだって立派なモビルスーツですよ、パープルトンさん。」

ヘッドセットのイヤホンから二ナの耳に届いたコウの声は固い。それよりもコウの吐いた台詞がついさつき、彼の仲間のパイロットに自分が吐いた毒と同じ台詞だった事に思わず声を失った。気恥ずかしさで熱を帯びる眼球の中をリミッターが解除された一号機が遂に動き始めようとしている。

「ウラキ少尉。ハンガーオフイサー整備責任者のモウラ・バシットだ。今の所その一号機の武装は60ミリ機関砲の五十発と両肩のビームサーベルしかない。二号機より機動力は上回ってるけど耐久力と出力では向こうに分がある。近接戦闘は避けた方が無難だよ。」

「ご忠告に感謝します、バシット中尉。」

この緊迫した状況の中で未だに敬語で返答するコウの声を聞いたモウラが不敵な笑いを浮かべて、自分の傍で動き出した一号機の後頭部を見詰めて言った。

「OK、ウラキ少尉。だが今は階級何ぞ抜きだ。あんたがパイロットならあたしはメカニック、出来るとこまで頑張んな。生きて帰ってきたら後の面倒はあたしが見てやるよ。」

二人の遣り取りの流れを耳を敬て聞いていた二ナがヘッドセットを乱暴に置いて徐に艦内電話を手を取った。

緊急時にのみ通話回線が開くそれは艦橋へのホットラインだ。その行き先が艦長の席に繋がったと分かった瞬間に二ナはそこに座っている筈のアルビオンの最高責任者に向けて言った。

「シナプス艦長、ウラキ少尉を止めてください。奪われた二号機を追ってテストパイロットのウラキ少尉が一号機で」

二ナの呼びかけに応じようとしたシナプスの背後でオペレーターの緊迫した叫び声が響く。シナプスの言葉を掻き消すその音は人の声から破壊音へと移行した。二号機の手によって破壊された資材搬入用のハッチからハンガー内部にとどろく炸裂音と閃光。直撃を示す地震にも似た激しい振動が二ナの足元をぐらつかせる。

「二ナっ！ 敵の砲撃だ、そこじゃ危ないっ！」

ケージの手摺を掴んで上体を乗り出したモウラが叫んだ。だがそ

の声すら届かなくする多重音声の爆発音は敵の攻撃が大規模な物と理解出来る。作業ケージを降下させて一刻も早く二ナの元へ向かって身柄を確保しようとするモウラ。

鈍い油圧シリンダーがのろのろと縮んで後数メートルでハンガーの床に到達しようとした正にその時、モウラの目を焼き飛ばさんほどの閃光が奔った。それがハッチ付近に落ちた至近弾による物だと過去の経験によるモウラの記憶は直感して。

「二ナあつ！」

目を閉じて、出会ってからほんの僅かな間に意気投合した友人の生死を気遣うモウラの叫びが爆音と爆風に翻弄されて吹き消された。

反射的に目を閉じた二ナには一体何が起こったのか分からない。真っ白な光と鼓膜を突き破らんばかりの炸裂音、自分の周囲に吹き荒れる嵐、金属の残響音。思わずしゃがみ込んで頭を覆った所でそんな行為が今の状況に何の役に立つのだろうか？ その状況が何によつて齎されたのかを理解出来る今になって。

衝撃波で全身が痺れている。自分の怪我の状況を確認めようと恐る恐る臉を開いたその目に真っ先に映った巨大な壁、金属の輝き。自分を守る様に翳された物が一号機の掌だと分かった瞬間、二ナは思わず目を見開いて頭上を見上げた。

いつの間にか片膝を突いてしゃがんだ一号機がその左手を二ナの体の前に置いている。二ナを傷つけようとした全ての物から彼女を守り通した左手の鉄くろがねが仄かな熱を帯びている。安否を気遣う様に見下ろす一号機のアイカメラと二ナの視線が交差して。

「……怪我は無いですか？ パープルトンさん。」

外部スピーカーから流れる声には怯えと緊張が走っている。コウの問いかけに答える為の台詞すら思い出せずにただ頷く二ナ。時が止まった二人の均衡を打ち破るように血相を変えたモウラが飛び込んで来て二ナの体を抱えた。

「バシット中尉、民間人の避難区画への誘導をお願いします。…

… 僕は、行きます。」

コウの言葉と共に唸りを上げる一号機のジェネレーター。油圧の作動した脚部のピストンが上体を持ち上げる。軋む音一つ立てずに動き出すそのモビルスーツは一つ一つのパーツが高い精度で組み上げられている事を表している。

二ナとモウラから視線を逸らした一号機が開け放たれたままのハッチへとその一步を踏み出す。ハンガーの床を埋め尽くした小さな残骸を踏み砕く音が、二ナの意識を現実へと引き戻した。

「まっ、待って！」

思わず指し伸ばした二ナの手の先で背を向ける一号機の背中。離れていく何かを追い求める様に尚も掌を翳した二ナの視界の先で、遂に一号機はハッチから戦場へと飛び降りた。

「…………… それがコウがガンダムに乗った理由。そして私との出会い。核装備の二号機を奪取したのがガトーだと分かったのは、後を追った彼らが帰って来てから知ったわ。無傷だったのはコウ一人、トリントン基地のモビルスーツ隊はコウとキースと指揮官のバニング大尉を除いて全滅したけどね。」

「そんな…………… だってテストパイロットの部隊だったんでしょ、その基地つて。連邦軍でも一番上手にモビルスーツを扱える部隊が全滅だなんて……………」

「それが『ソロモンの悪夢』の実力よ。実力だけじゃない、戦略、戦術、指揮能力、その全てに於いて卓越した力を発揮する事の出来る『撃墜王』。それが、アナベル・ガトーと言う男の正体。」

二ナの口から語られる事実を呆然と疑ったアデリアに向かって二ナは断言した。きっぱりと言い切るその態度に気圧されてアデリアはそこから先の台詞を諦めざるを得ない。

「そんな伝説の撃墜王に新米少尉さんが敵う筈が無い。でも彼を載せて帰って来た一号機を見た時私は興奮したわ、やっぱり『あたしのガンダム』は凄いつて。コウが無事だったのもきつと一号機の性

能のせいに違いないって、そう思っていたわ。…… コウに返して貰った起動ディスクを開いて見るまではね。」

「モウラ、これ見て。」

データ管理用のラップトップの画面を二ナが真剣な面持ちで見つめている。一号機の点検が一段落した所で呼び出されたモウラはマグカップの中で冷えたコーヒーを啜りながら二ナの肩越しに画面を見つめて、思わず尋ねた。

「二ナ、これってあの少尉さんのデータなのかい？」

画面の隅にはそのデータの持ち主が正式に登録されていない事を示す『No Name』の表示。だがそのデータを誰が記録したのか等問う必要すら無い。この機体はジェネレーターの事故でテストパイロットを失って以来、誰の手にも触れてなかったのだから。

記録された数値の異常さは専門外のモウラにも分かる。瞬間最大駆動率、反応速度、各モーターから伸びるアクチュエーターの伸縮バリエーション等ありとあらゆるデータが想定範囲の上限を超えて実戦領域にまで拡大している。言を返せばそこまでこの一号機を扱う事が出来なかったとしたら、彼は他のモビルスーツの隊員と一緒にガトーの手によって回顧録に名前を記されていた事になっていただろう。

「信じられない…… 幾らテストパイロットと言っても彼らの乗っていた機体とは格段の差があった筈だよ。それを『ザク』しか乗った事の無い少尉さんがいきなりこんな数値を……」

「ザ、ザクも…… いい機体だわ、モウラ。」

無意識に発したモウラの発言を嗜める二ナ。どこか落ち着きの無い物言いでの忠告を受けたモウラがにんまりと笑って、何故かモーターを睨み付けたままの二ナの後頭部を眺めた。

「で、あたしを呼び出したのは何の相談なのかな？ このプロジェクタの責任者としてはこのデータを見て黙ってはいられないという所なのかい？」

「そ、そうじゃないわ。ただこの基地に残っているパイロットで無事なのはあの二人だけでしょう？ この先一号機の運用試験をお願いするとしたら彼ら二人の内どちらかじゃない。私は整備責任者としてのモウラの意見を聞きたいだけよ。」

「運用試験？」

復唱したモウラの顔が微かに曇る。声音が変わったモウラの顔を振り返って見上げる二ナの目にその表情が映る。不審な表情の二ナを確認してモウラが言った。

「二ナ、残念だけど一号機の試験は中止するみたいだ。ジャブローからの指示でこのアルビオンは二号機奪還作戦の任に就く事がさつき決まったよ。艦内はとつくに臨戦態勢、補充の部隊ももうすぐ到着する。」

出来るだけ二ナにショックを与えないように淡々と語るモウラを見上げるその目が大きく見開かれた。

「じゃあ一号機はどうなるの？ まだパイロットも決まってないって言うのに。」

「一号機は現状のまま軍が受領する事になると思う。パイロットは　んー、多分だけど今から来る隊員の誰かと言う事になるんじゃない？ 実戦経験の浅い新米少尉さんと一年戦争の生き残りと同じじゃあ上層部の受けも比べ物にならないし、まあ妥当っちゃあ妥当な　んー」

「そんな！ ウラキ少尉だって実戦を積んだ立派なパイロットよ。それに相手が元ジオンの撃墜王だったのに無事だった事を考えれば彼にも十分その資格がある筈だわ！」

激昂する二ナの仕草に思わず仰け反るモウラの上体。だが驚いたのはその一瞬だった。二ナの反論の理由がある一点に集約している事を察したモウラが小さく笑って二ナを見た。二ナはそのモウラの笑いを見上げて眉間に皺を寄せて尋ねる。

「……何？」

「いや、随分とウラキ少尉の肩を持つんだなあと思って。それにさ、



『二人の内どちらか』じゃないじゃん、今の二ナの言い方だと。」「モウラの言葉で我に返った二ナの顔が対称移動した。解ける皺、見開かれた瞼、泳ぐ瞳。自分の放った言葉の意味にすら気付かなかった二ナの表情はまるで皆の前で間違いを指摘された優等生の様に羞恥の表情を露に見せた。

「ま、二ナの気持ちも分からないではないけど軍が受領してしまえば後はこっちの管轄だ、それくらいはあんたも承知してるんだろ？それにウラキ少尉はこの基地に所属する隊員だ、幾ら基地が機能しなくなっただと言っても地上軍から宇宙軍に直ぐに移籍する事なんて出きやしない。彼が宇宙軍に必要なよっぽどの理由でもない限りね。」

「ウラキ少尉は今どこ？」

真顔になった二ナが短くモウラに尋ねた。開いていたラップトップの画面をいつの間にかパタンと閉じて見上げている。

「どこって……だから彼はこの基地の所属だから今頃後片付けに追われてるんじゃない？……戦死者がだいぶ出たからね、彼の仲間も含めて。」

モウラの発言を耳にした途端に二ナが立ち上がった。全身から溢れる強い意志のオーラに怯むモウラが思わず声を掛ける。

「って二ナ、どうするの？何する気？」

立て続けに尋ねるモウラの表情を見上げて 立ち上がって

もまだモウラの顔は二ナの頭上にある 視線と語気を強めて言った。

「先ず本社に確認してみるわ、残った一号機の運用データを取る必要性があるかどうか。このまま軍に引き渡しても良いのかどうか。」

「いや、その言い方じゃ端から軍に引き渡す気が無いのがアリアリだけ。……で、どうすんの二ナ？あんた、まさか」

話の成り行きが不穏な方向へと舵を向け始めた事を察知したモウラが顔を僅かに曇らせる。モウラの心中の危惧を他所に二ナが自らの決意を告げた。

「私もアルビオンに残るわ。一号機の運用試験を続けるためにね。」  
「ちよつと！」

二ナの下した決断にモウラが焦った。動揺と憤慨は同時にモウラの顔に表れて色黒の顔色を蒼く染める。

「二ナ、何考えてんの？ 仮にも作戦行動中の戦艦に民間人が乗り込もうだなんて！ それにあんたが言ってる事は作戦に自ら参加しようって事なんだよ？ 幾らガンダムの為だからってあんたがそこまでしなきゃならない義理は無いだろ。」

「私は中途半端な形で一号機が軍に引き渡される事を良しとしないだけよ。あの機体は私の『作品』よ、創造者としては完全な形に創り上げなければならぬ責任があるわ。」

「このお、技術屋があ……全くあんたらの種族ってのはどうしてどいつもこいつも何で自分の事を真つ先に考えられないのかねえ。」

第一！

「厳しい表情のモウラがこの目の前に立つ分からず屋を説得する材料を捜し求めて、自らの後頭部を派手に引つ掻き回す。手元の材料があまりにも心細い事を確認してから、その事実にうんざりした様に二ナに言った。」

「一号機<sup>あれ</sup>を作品だつてあんたが言い切るんならそれを一緒に作る相手<sup>パイロット</sup>はどうするんだい？ 慣熟運転もしてないパイロットの実戦データを集めた所でそれが運用試験と言えるのかい？ それにこんな事言つちやあ何だけどモビルスーツは所詮兵器だ、あんた自身が納得出来ないパイロットのせいでガンダムが撃破されても何の文句も

「彼を乗せるわ。」

捲し立てるモウラを尻目にきつぱりと言い切った二ナがラップトップを抱えてモウラに背を向けた。二ナの言葉の主旨をうまく捉え切れずに息ごと声を止めたモウラが、離れていく二ナの背中を目で追う。渋滞していた思考回路の先頭が言語野に繋がった途端、モウラは大声を上げて二ナの背中に言葉を浴びせた。

「あんたっ、本っ当にあたしの話を聞いてたの！？ 自分で志願で  
もしない限りウラキ少尉はこの艦に乗り込めないんだって！ 幾ら  
開発者のあんたが推薦したって軍の規定をひっくり返せる訳無いっ  
！」

「無茶でも何でもやるわよ、どんな手を使ってでも私自身を賭けて  
でも。一号機には ううん、私には、」

振り返った二ナが肩越しにモウラを睨む。その華奢な体の何処に  
そんな迫力が隠されているのだろうか？ 蒼い瞳から放たれる確固た  
る意思の光は抵抗を続けようとするモウラの、二ナに対する憂慮す  
らも共に放った言葉一つで貫いた。

「彼が必要なのよ。」

「その時からコウの存在は私にとってなくてはならない『物』にな  
ったの。一号機を成長させる為に必要なパイロット、私の作品を仕  
上げる為の大切な絵の具…… そう、私は彼の事を最初は一号機  
の部品程度にしか考えてなかった。」

自嘲交じりの声がアデリアの耳の奥に残る。と同時にアデリアは  
自らの見識の甘さを恥じていた。

二ナの話や聞き限りではウラキ伍長は女性に対してだらしが無い  
人間等ではなく、正しく軍人である。友人であるキースの人となり  
がそうである様に彼もまた同類の士であると認識せざるを得なかつ  
た。そうなるとアデリアの心中にもマークスと同じ疑問が頭を擡もたげ  
て来る。

「何故、ウラキ伍長は二ナさんと別れて、基地を離れなければなら  
なかったの？」

「…… 戦う度に目覚めていくコウと一号機の出会いは運命的だ  
ったと、彼らのその後の戦いを記録していた私にはそうとしか言い  
ようがなかった。コウに操られた一号機は持てる能力の全てを發揮  
して敵を墮していったわ。初陣ではコムサイを撃破、それがアフリ  
カ大陸では三機のモビルスーツを仕留める。たった二回の戦闘で彼

が残した撃墜数は既に『撃墜王』の称号を得るに値する戦果を上げていたわ。でも私はそれを彼の力ではなく一号機の力だと信じていた

ニナの声が不意に途切れた。蒼い瞳が何かを思い出す様にマークスの肩越しの先にある何もない空間に向けられて。

「無意識の内にそう信じようとしていたわ。自分の気持ちに気付かぬ様に、自分の仕事を忘れない為に……でも彼が宇宙に初めて出たあの日、私はとうとう気付いてしまった。」

「ウラキ少尉っ！ 機体を放棄してバニング大尉に保護を求めてください。早く応答を、聞こえますかウラキ少尉！」

ヒステリックなモーリスの叫びが失う恐怖に囚われていたニナの耳朵を打った。耳を塞いで目を閉じて、コウと一号機に起こった全ての災難を何かの間違いだと現実逃避し続けたニナがアルビオンの艦橋で我に返った、それがその瞬間だった。

重力下に於いては無類の強さを発揮した一号機と言えども、その仕様変更をコアファイターの換装に委ねたコンセプトは実質宇宙空間での一号機の使用の凍結を意味する。ニナの静止をも振り切つて衛星軌道上のアルビオンに襲い掛かった敵の前へと迎撃に飛び出した一号機とコウは為す術も無く蹂躪されて、無残な姿を晒した屍の様にたつた今まで戦場を漂流していた筈だった。

だが手足をもがれ、顔を潰された一号機がバーニアをくしゃみのように漏らしながらアルビオンへの衝突コースを取っている事実は超望遠に設定された外部カメラの映像に小さく写る白い影の動きを見てもはつきりと分かる。

損傷によって出力の低下した無線機から受け取る事の出来る音声は雑音だけで、ガイドビューコンに同調する為のアイカメラも機能を止めたモビルスーツが無事に着艦出来る確立など小数点以下だろう。最早アルビオンに接近しつつある一号機は意思を持たない巨大なデブリと同様の危険な障害物でしかない。激突による二次災害を懸念

する対空銃座はその現実を未然に回避すべく全ての砲門を迫り来る  
一号機の影へと向けた。

射程距離限界ラインに刻々と近づく傷だらけの白い機体。自分の  
身を守る為に味方を排除しなければならぬというジレンマと、味  
方の生存を願う視線が全ての銃座の照準機から未だ戦煙の覚めやら  
ぬ漆黒の空へと向けられて。

「やめて下さい！ シナプス艦長、一号機を撃たないでっ！」

アルビオンの総意を知った二ナが振り返りざまに叫んだ。だが二  
ナの懇願を受けたシナプスはそれでも表情一つ変えず、艦内モニタ  
ーにその輪郭を鮮明にし始めた一号機を睨んだまま微動だにしない。  
ただ席の肘掛に乗せた両手が何かに耐える様に小刻みに震えている。  
「お願いです、シナプス艦長！ 一号機を、コウを撃たないでっ！」

「オペレーターっ！ 何をしている、休まず呼びかけんかっ！？」

二ナの叫びはシナプスの中で別の方向への叱責に変化した。肘掛  
を力一杯叩いて頭上に配置された二人のオペレーターを睨み上げる。  
「モーリス、シモンっ！ 二人掛りで呼びかけろ！ 最後まで諦め  
るんじゃないっ、左舷銃座！ 発砲は私の指示を待て。排除の際に  
は出来るだけコクピットへの直撃を避ける、コースを変えるだけで  
良いっ！」

「そ、そんなっ。艦長っ」

「止むをえんのです、パープルトンさん。」

目深に被った帽子の庇に見え隠れする瞳が強い意思の輝きで二ナ  
を射抜く。

「私にはこの艦に乗り込む、貴方も含めて全員の命に対する責任が  
ある。ウラキ少尉がアルビオンに対して重大な脅威を及ぼす存在に  
なるっというのなら、それは私自身の責任に於いて排除せねばなら  
ない。……それが軍と言う物だ。貴方はその事を理解した上で  
この艦に乗り込んだのではなかったのですかな？」

強い苦渋を滲ませてシナプスが二ナに語りかける。口調こそ丁寧

ではあるがその言葉の裏には二ナに対して覚悟を求める意図が感じられる。一号機を、コウを諦めると。

そして同時にシナプスは二ナを非難している。そんな覚悟も無く、貴方は此処に立っているのか、と。

シナプスの言葉に対抗するだけの言葉を二ナは持つてはいない。だが湧き上がる思いを抑え切るだけの力も無い。絶望にひび割れた感情の隙間から次々に溢れる何かを言葉に変えて、二ナはシナプスを見上げた。

「お願いです、一号機はどうなっても良いっ、でもウラキ少尉は

コウだけはっ！ お願い、助けてっ！」

二ナの願いを受けたシナプスの表情が怒りに塗れた。自分勝手な理屈を並べ立てて自分の苦悩を省みようとはしない二ナに向かって恫喝の声を放つ。

「パープルトンさん、いや、二ナ・パープルトンっ！ これは私の判断だ、民間人である貴方が口出しする領分では無いっ！」

シナプスの葛藤は激情となって二ナ目掛けて叩き付けられる。だが二ナはそれでも尚視線を逸らさずにシナプスを見上げている。

自分の迂闊さは分かっている。こうなる事の覚悟も無かった事も理解した。でも、それでも私は

コウを、失いたくないっ！

「スコードロリーダー発砲するなアルビオン。こちらは編隊長のバニングだ。」

二ナとシナプスの叫び以外、音を失っていた艦橋内に突然雑音交じりの交信が響いた。まるでその声が何かの目覚しであったかのように活況を取り戻す艦橋内のクルー達。交信を傍受したモーリスが大声で

二ナやシナプスにも聞こえる様に 尋ねた。

「こちらアルビオン、バニング大尉どうぞ。」

「早とちりするんじゃない。現在一号機をエスコートしてアルビオンへと向かっている。ウラキ少尉はまだ生きています。繰り返す、ウラキ少尉の生存を確認した。」

報告を受けた艦橋内のクルーが一斉に歓声を上げた。徐にシナプ

スが肘掛の無線を手にとつて交信に割り込む。

「シナプスだ。バニング大尉、直ぐにウラキ少尉に機体を放棄する様命令してくれ。現在一号機は本艦との衝突コースをとっている。

速やかに一号機を放棄した後、君が」

「いえ、艦長。それは不可能です。」

「どういう事だ？」

シナプスの表情が安堵から不審へとシフトした。それに伴つて艦橋内の空気も祭りの後の様に沈静化する。シナプスの問い掛けにバニングは指揮官らしい歯切れの良い口調で答えた。

「ウラキ少尉は被弾と負傷の影響で意識が朦朧としているようです。こちらからの応答には一切答えません。しかも奴はうわ言の様にアルビオンへの着艦を求めています。」

バニングの報告に再び艦橋内が暗い景色で覆われた。ほんの一瞬前とは違う色の空気が全てを支配して冷たい空気を醸し出す。シナプスは一瞬沈黙した後、バニングに向かって問いかけた。

その言葉を固唾を呑んで聞き耳を立てる艦橋のクルー達。

「出来るか？ 大尉。」

短い言葉ではあるが、そこに全ての願いと一縷の活路を求めて。そしてシナプスの思う通りにバニングは、言霊を込めて宣言した。

「やります、必ず。やらせて見せます。艦長、一号機の着艦を許可願います。」

「良かるう、着艦を許可する。…… 大尉。必ず彼を、ウラキ少尉を連れて帰つて来てくれ。」

シナプスの言葉が終わつた瞬間に全艦内にけたたましいサイレンが鳴り響く。非常警報が埋め尽くす艦橋の床を二ナの足が駆け出した。視界の隅へと消え去る影を横目で見送るシナプスの瞳が祈りにも似た色を湛えて小さく瞬く。

溢れ出したままの思ひは二ナの心を溺れさせてあつという間に飲み込んだ。真っ白になった頭の中のキャンバスに幾重にも描かれる男の姿。それを追い求める様に二ナの足は踵を返して艦橋の出口へ

と走った。

無重力化で使用する移動用のムーブバーの存在も無視してハンガーに直通するエレベーターへと踊り込む。

扉が閉まった瞬間に涙が溢れ出た。怒りが、悔しさが込み上げてくる。

「私の言う事を聴かないから…… ディスクも持たずに行っちゃうから」

「違う、私のせいだ。」

私が意地を張ってコウに自分のディスクを渡さなかったから、こうなった。

コウがそうする事は分かっていた筈なのに。誰もがそんな事は有り得ないと、一号機で出撃する事など自殺行為だと考える愚行に手を染めてしまう人だと自分だけは理解していた筈なのに。

私が創った一号機を私よりも愛した彼が、きっとそうする事は分かり切っていた筈なのにっ！

自分の罪に向き合う様に二ナは両の掌で顔を覆った。後悔と言う名の液体が血の気の引いた両頬を暖める様に止め処無く流れて唯一人で立つ懺悔室の床に零れ落ちる。

「ガンダムを…… 一号機をどうしてくれんよ……」

「違う。そんな事はどうでもいい。」

空いた穴は埋めればいい、傷ついた物は換えればいい、壊れた物は直せばいい。でも。

失った物は二度と帰ってはこない。コウを失ってしまえば明日からの私は、私で無くなる。そんな私に与えられる一号機に何の価値があると言うのか。私が愛した男を守りきれずに殺してしまったあの機体に、私は明日からどう向き合おうと言うのか！

「あ……！」

胸の底から熱い塊が競り上がる。暗闇の中で大きく見開かれた両



目から涙と共に染み出す想い。

そうだ、私は、コウを

ハンガーへの到着を示すチャイムと宇宙服着用を促す警報音が同時に鳴り響く。首の後ろに繋がれたヘルメットを濡れそぼったままの手で掴んで降ろす。気密と生命維持装置の作動を知らせる青いランプと与圧が始まった事を示すインジケーターがぼやける二ナの視界に同時に映り込んで。永遠を思わせる刹那の時を経てインジケーターが赤い光を放った瞬間にエレベーターのドアが開放された。

二ナに与えられた新たな混沌の世界。巨大なネットに巻かれて朽ち果てた一号機の残骸、それはまるで自分の罪を代わりに償うコウの姿の様に思えて。

涙で霞む視界の中でモウラがコクピットに取り付いているのが分かる。外部から操作できる緊急脱出レバーに手を掛けて、生死不明のパイロットを中から引き摺り出す為に。

足が、鉄の床を蹴って宙へと二ナを送り出した。

「下がれっ！ 強制開放する！」

緊急脱出レバーに手を掛けたモウラが一気にそれを引き切った。コアファイターのキャノピーロックを解除するその機構は一号機のコクピットを一瞬にして真空下へと誘う。一気に沸騰して霧となった残留酸素は内部にあった全ての物を巻き込んで一号機の外部へと流出した。

恐らく被弾の衝撃で生み出された金属の破片がいくつも、そして蓋が開いたままの緊急医療キットのパッケージが、そして

「！ ウラキ少尉っ！」

流れ出るコウの体に力は無く。アルビオン所属を示す純白のパイロットスーツは所々血に染まって。一号機から吐き出された最後の吐息に乗って飛び出した人形はそのままの勢いで誘導路の上を奥へと進む。

「 コウっっ！」

聴き慣れた声の聴いた事も無い慟哭がモウラの耳を貫いた。まるでそこで出会う事が約束されていたかの様に二つの影が交じり合うと。真っ直ぐ飛び出して来た民間人専用の朱色の与圧服はその手を迷う事無く人形を目掛けて指し伸ばした。

「二ナっ！」

驚いて視線を向けるモウラの眼の中で一つになる二つの影。二ナの手がコウの体を抱き止めて、その手が不完全な治療のまま放置されて空気の漏れ出す二の腕の傷を握り締めて。

「……ごめんなさいっ。」

腕に伝わるコウの存在。押し当てた互いのヘルメットを通して微かな呼吸が聞き取れる。コウは、私が愛する男はまだライブ生きている！

「ごめんなさい、コウっ！ 私が意地を張ったばかりに貴方をこんな目につ！」

許しを請う手に力が籠る。それは恐らく手にした者の存在の大きさを確認する為の儀式と同じ意味を持つのだろう。相殺された力で速度を緩めた二人の体がゆっくりと宙を漂って。

「でも、よかった、生きてて。生きててくれて。」

その言葉が私の全て。口を吐いて出た届かぬ想い。

僅かな時の二人の逢瀬は待機していた医療班によって途切れた。負傷者の容態を確認しようとするスタッフの手を振り解いて尚もコウの体を抱き抱える二ナの両手。うわ言の様に続く二ナの言葉と時折混じる微かな嗚咽がモウラのヘルメットに木霊した。

「……あなた、馬鹿だよ。二ナ。」

呟くモウラの目が優しく二人の姿を見守っていた。紆余曲折を経て辿り着く事の出来た二人の、新しい未来への出発点を見る事の出来た喜びは少なくとも今回の戦闘に於ける自分達の損害を束の間忘れる事が出来た。モウラの口から、二人に対する祝福の代わりの言葉が笑顔と共に漏れ出す。

「ま、あたしの友達だ。あなたのそんな馬鹿で鈍感な所もあたしは

大好きだけどね。……何にせよほんと、生きてて良かったね、二ナ。」

「私はコウを死なせない為に一号機の換装に没頭したわ。」  
ポツリと呟いたその言葉には恐らく二ナの、今日までに於ける開発者としてのスタンスが伺える。それは多分この基地での三人の働きにも現れている様にも思う。

自分達を死なせない為に次々にOSを改良し続ける二ナと実践演習を繰り返すキース、その機体を整備する整備クルーの実力を必要以上に高めるモウラ。彼らが自分達に対してどのような経験の根拠を経て其処に考えが至ったと言う事を、マークスは理解して声を失っていた。それは恐らく黙って二ナの告白を聞いているアデリアにしても同じ。

「彼が持ち帰ったデータを雛形にして新たに開発したOSを装備した空間内高機動仕様一号機『AERX78-GP01Fb』」

通称『フルバーニアン』は、私がコウの為だけに創った機体。恐らくこれから後彼が其処に到達するであろう領域にまで全ての機能を拡大させて、オーバースペックとも言える限界性能を潜在的に秘めた機体。あれが完成してロールアウトした瞬間に私は確信したわ。

「  
宙をぼんやりと見つめたまま彷徨っていた二ナの視線が不意にマークスの顔へと戻った。見上げる二ナの視線を間近に受けたマークスの心臓がどきりと高鳴る。それほどまでに二ナの視線には人としての感情が満ちている。」

「コウが二度とあんな目に会う事はない。私が創ったフルバーニアンは当時の兵器年間に登録されている現役の全てのモビルスーツを凌駕する機動性を手に入れたわ。そんな機体に敵う相手がいる訳が無い。……実際にコウはその機体の初陣でモビルアーマーを撃破して、私の予想を証明して見せた。彼の能力はその時点で開花したと言ってもいい。」

「初めて乗った機体で、モビルアーマーを、撃破……ですって？」

過去の事実を淡々と語る二ナの口から飛び出した、現役の二人には想像も出来ない言葉。『白い悪魔』と呼ばれたアムロ・レイ曹長に纏わる戦闘下の逸話ですら御伽噺の様に聞こえる二人にとって、コウが上げた戦果という物はまるで太古の神話の様な響きで脳内へと侵入した。故に聴いて理解をした所で想像が追いつかない。

昨日今日サーキットに出た人間がいきなりレースで優勝してしまう様な物だ、それは。

「信じられない。第一ジオンのそういう類の物は一年戦争の終了と同時に全て連邦側に引き渡された筈だわ。そんな機体が連邦の索敵にも引つかからずに残っていたなんて」

「月にはね、まだ誰にも知られていない箇所がいくつもあるのよ。月で育って、月で仕事をしていた私にも分からなかった最下層の地下都市がね。その機体はそこで密かに眠っていた　フォン・ブラウンと言う名の華やかな表舞台から撒き散らされる汚れた澱を浴びたまま、時の流れに逆らって淀みに沈もうとする多くの世捨て人の集まりの中にひっそりと息を潜めて。」

問い掛けたアデリアの顔を二ナがじつと見つめる。その口から流れる物語が真実である事を、有無を言わせぬ蒼の瞳が証明した。

「そこでコウに何があったのか、私はコウから聞く事は出来なかった。でも、彼はそのモビルアーマーを討った瞬間から　彼と対決したパイロットを撃つてから確実に変わったわ。月を離れてデラズフリートを捜索している最中の小競り合いでバニング大尉が戦死してから、コウの変化は日増しに大きくなっていったわ。誰の目にも、私にもはつきりと理解出来るほど、大きく。」

「どつという変化を？」

二ナの眼光に気圧されたアデリアの口をついて出た鸚鵡返しな質問。二ナは一瞬何かを躊躇い、しかし躊躇しながらも一言一言を選んでアデリアに向かって答えた。

「……コウが二号機を奪還する事ではなく、ガトーを殺して全てを終わらせようとしていると言っ覚悟。そしてそれは私が彼にフルバーニアンを与えた事で実現してしまった、私自身が最も恐れていた現実だったわ。」

「ヘンケンさんはセシルさんと何処で知り合っただんですか？」  
立て付けの悪い古ぼけた円卓を囲んだ二人だけの小さな宴席でコウは、目の前で自家製のバーボンをちびちびと味わって飲むヘンケンに尋ねた。突然切り出された質問の内容に目を丸くして、しかし一瞬後には近所の悪餓鬼の様な表情で笑ったヘンケンが逆に質問を返して来る。

「何だ、藪から棒にそんな事。さてはうちの夫婦の仲睦まじさに当てられて嫁さんでも捜す気に成り果てたか？」

そう言うことやおら手元にあつた古い酒瓶を取り上げて、空になっているコウのショットグラスへと琥珀色の液体を注ぎ込む。精製度の高い高アルコールのその酒は僅かな粘りで抵抗しながらとくとくと、小さな泣き声を上げながらオールドバカラを満たした。

『成り果てた』等と言う否定的な表現で夫婦と言う物を評したヘンケンに向かつてコウは返答に窮する。そんなコウの顔を揶揄交じりの視線で眺めながらヘンケンが言った。

「ウラキ君もそういう事を考える歳になつたという事か。ま、夫婦なんて物はお互いの気持ちや価値観と言つた物で繋がっているだけの、所詮は赤の他人の付き合いの究極だ。形の無いそんな曖昧な物と一緒に生きていけるのかどうかつてのは誰しもが持つ、共通した疑問だ。それに夫婦つて言つても死ぬ時は大方別々だ、残された方は相手との思い出だけで残りの人生を生きて行く事になる。それに納得出来れば、まあ快適な物ではあるがな。」

したり顔で語つたヘンケンがグラスを持ち上げてコウに向かつて差し上げた。コウの心境の変化に対する乾杯の仕草なのだろう、ヘンケンはその中身を一気に呷って静かにグラスを置いた。こつんと鳴る微かな響きが二人の間に残る沈黙を短縮する。

「あいつと俺は元上司と部下でな。有り体に言えば職場恋愛に違い

ないんだが、たまたまあいつの乗っていた艦を俺が助けた時からの付き合いつて訳だ。そんな時やあいつの方が階級が上だったんだぜ。」

「艦？　じゃあお二人は　」

「そう、二人とも一年戦争の生き残りさ。セシルが俺の艦に配属になった時俺はあいつの事を全然知らなくてな、俺の副官に決まったあいつと初めて顔を合わせて事情を知った時には俺も含めて周りの連中は驚いたさ。こんな女性が何でサラミスなんぞの副長に志願したのかってな。そしたらあいつは『今後公私共にお世話になります』とか言つて　まあ、アレだ。要するに『押し掛け女房』って訳だ。」

若干の脚本が混じってはいるが、少なくともセシルとの出会いに関しては嘘では無い事をヘンケンは自分の語りを冷静に聴きながら確認している。そこから先の話は予め組み立てられた台本を自分の言葉で話す事になる。

自分達がある特命を受けて宇宙から地上に降りた事は、彼らが属する組織の関係者以外誰にも知られてはならない極秘事項なのだから。

「一年戦争が終わつて軍に残るか否かの選択を迫られた俺達は今後の身の振り方を考えていた。そんな時に丁度この話が人事の方から舞い込んで来てな。まあ、あの一年戦争を生き延びたんだ、これからはゆつくりと現場を離れて暮らすのも悪くないかな、と。セシルもそんな俺の選択を歓迎してくれてな。それで此処で物作りに勤んでいるって訳だ。」

ヘンケンの嘘の告白に聞き入っていたコウが思い立った様にヘンケンのグラスに液体を満たす。天井から差し込む裸電球の明かりが波紋に揺らめいて古ぼけた天井の梁に鮮やかな揺らめきを残して消えた。

「……　自分もそんな人を知っていました。でも、その人は全てを諦め切れずに再び戦いへと赴いた。その時の彼の選択は間違っていないと自分は思っています。ですが残された人は　」

視線を落としたバーボンの液面がゆらりと拡大して二人の人影をコウの視界へ誘った。ケリイ・レズナーとラトラと言う二人の幻影。

拭い切れない自分の犯した罪の一つ。彼らを永遠に引き裂いたのは、自分の手。

「それもまた人の生き方だろう。俺はセシルと共に生きる事を選んだが、そいつは違ったと言う事か。自分の命を燃焼できる世界を戦いに求め、自分が求めた戦場に共に生きようとした人物を連れて行く事は出来ないと分かっていた。……離れたくないと思いがながらもあえて切り捨てなければならぬ、それも愛情の形の一つなんだろうな。」

「じゃあ、ヘンケンさんはもし万が一自分が戦わなくてはならなくなつた時」

「勿論、二人で行くさ。」

そう言ってヘンケンさんは煙草を手を取った。ゆつたりとした仕草で火を点し、一口大きく吸ってから煙草を吸わないコウを気遣って頭上を見上げて紫煙を吐き出す。隙間だらけの壁面から吹き込む外界の風に乗ってゆつくりと移動するその行方を見届けながらヘンケンが言った。

「それが俺とセシルの共有する価値観なのさ。あいつを置いて行かない、俺を一人では行かせない。まあ、セシルに改まって聞いた事あ無いんだが、多分あいつはそう答えるだろう。夫婦ってのは他人同士だけどそうじゃない、其処に同意しての契約に基づく信頼関係なんじゃないかな？」

それは夫婦等ではなく純粋な上司と部下の関係である事をヘンケンはコウには語らない。ただ赤の他人同士が見えない絆で結ばれているという点に於いてはどちらも同じ意味を持つと思っっている。セシルと言う人間を完全に信頼しているからこそ生み出される関係は夫婦にも勝るとも劣らぬ繋がりを持って二人を結び付けているのだろうと。



もつとも自分の世話で手を焼いているセシルにこんな事を言ったら多分迷惑そうな顔をするとは思うが。

「…… そう言い切れる事が、ヘンケンさんが自分には羨ましいです。自分にそんな強さはありません。自分が生きる事で人を傷つけ悲しませる位なら、自分は。」

「君の知っていた人と同じ道を選択しようって訳だ。なるほど」

「 コウの呟きの真意を看破したヘンケンが一言でコウの深層心理を言い当てた。はっとして顔を上げた先でコウを見つめるヘンケンの顔は静かで、何処と無く厳しさを湛えてコウの表情を見つめている。 「では、此処での生き方はウラキ君の本意ではない、と言う事が。 ならば訊こう。」

ヘンケンが手にした煙草を灰皿代わりに置かれたエポニーの餌の空き缶に置いた。微かに眉を顰めたヘンケンがコウの目を射抜いて尋ねる。

「何故、君は此処に『逃げてきた』？」

断罪者の響きでコウの本心を叩くヘンケンの言葉。その意味に打ちのめされながらコウは口を噤んで目を伏せた。

「私はその時大事な事を一つ、忘れていた。」

ポツリと呟いた二ナの表情は二人の前で見る間に硬くなった。自分の咎を告白する罪人は等しくそんな顔をするのだろうか、今までの二ナの表情を追いかけて黙って聞いていた二人は同時に思う。音量まで衰えた二ナの告白を集中して耳を傾ける二人に、二ナは言った。

「フルバーニアンは確かに私が創った規格外のモビルスーツ。でもそれと同じ物がもう一つ存在する。コウが他のどのモビルスーツにも負けないと言うのなら、もう一つ存在するそれも、同じ意味を持つ。そしてそのモビルスーツを動かすパイロットの力量の差は、歴然。」

「アナベル・ガトー……」

その時のコウが対峙しなければならぬ宿敵の名を呟くマークス。同意して小さく頷いた二ナが言葉を続ける。

「私のフルバーニアンが誰にも負けないと言うのならガトーの奪った二号機にも同じ事が言える。でもね、それでも私はコウがガトーと直接対決する事など有り得ないと思っ込んでいたわ。その後のデラズフリートの動きを追って観艦式を行うコンペイ島宙域に辿り着いた私達が見た物は圧倒的な数の連邦軍艦船だった。これだけの戦力が展開しているのならば彼らも簡単に手は出せないだろう、万が一手を出したとしても少なくともコウがガトーと会敵する事は無い筈だつて。」

「0083年の観艦式って……確かコンペイ島内の熱核炉が暴走して炉心溶融して大爆発を起こしたつて言う、あの」

「貴方達にはそう伝わってるのね、でも違う。」

くくもった声でマークスの語る事実を二ナが否定した。

「それはガトーが二号機によって……装備していた戦術核で起こした悲劇、そして『星の屑』と言われる一連の作戦行動の始まりだったのよ。ソロモン天頂部より放たれた核は観艦式に臨んでいた艦艇の三分の二を瞬時に撃破して宙域を混乱に陥れ、その後の組織立った運用をほぼ不可能にした。それが其処で起こった事件の真相よ。」

「核、兵器が、実際に使われた？ あたしのお姉ちゃんが死んだ、海で」

「人類の有史以来最初に核が兵器として使用されてから、それが二度目の記録。そして全ての指揮系統が混乱した中で独立作戦部隊として外縁部を警戒していたアルビオンは、その悲劇に巻き込まれる事無く追撃に移れる立場にあった。」

「それは……そうでしょう。軍ならば与えられた任務を果たすのが責務、二ナさんの乗った艦がガトーを追撃するのは」

其処まで口に出したマークスがはっとして言葉を止めた。指揮系

統の混乱、統率の取れない連邦軍の艦隊。その中で唯一動ける艦船が二ナの載った艦だと言うのなら、ウラキ伍長とガトーの間に立ち塞がっていた敵味方戦力の壁と言う物は。

「彼ら二人が戦場で出会う事を阻む物は何も無かった。コウはガトーに追い着き、ガトーはコウと刃を交える。私が絶対に起こる筈は無い、起こる事は有り得ないと考えていた状況がああ二人の前に巡って来た事を知った私は『運命』の存在をひしひしと感じた。ガトーが私の二号機を奪い、コウが私の一号機に乗って彼に手を伸ばす。それはまるで私の罪を私に教える為に神様が授けた、偶然を繋ぎ合わせた運命的な物だと感じたわ。でも、」

二ナの目が痛みには耐えかねて細くなる。顰めた眉間の小さな皺から滲み出す苦悩が声になつて。

「彼らが出会う『運命を携えた二人』だと神が決めたのなら私はその時、間違いなく神を呪っていたわ。アルビオンの艦橋で二人の叫びを聞きながら。」

「まだだあつ！」

無線機のレベルを振り切ったコウの叫びがそれ以上の轟音に掻き消される。それを爆発音だと信じて疑わない艦橋のクルーの中で、ただ一人二ナだけはその音が姿勢制御用に胸部に設けられた四連装のアポジモーターの噴射音だと気が付いた。だがその音から齎される情報は二ナに状況の深刻さを読み取らせる。

高速で移動するフルバーニアンのの巨体を瞬時にずらす事の出来るそのアポジの性能は背面に取り付けられたブーストポッドに匹敵する推力を持つ。だがその噴射音が密閉されたコクピットに轟いていると言う事は噴射口から抵抗面までが零距离であると言う事だ。モーターから噴出する熱量は金属の融解温度にいと容易く到達してその面から輻射される熱はコクピット前面の装甲板を。

「やめて、コウっ！」

何故コウがそうしたのかを察知した二ナがあまりの恐怖に堪り兼

ねて叫んだ。艦橋内に充満する諦観と轟音を貫いて放たれたその声にクルーの全員が二ナを注視する。

「今すぐアポジを止めてっ！ あなたまで死んでしまっつ！」

「何と！ ウラキ中尉はまだ戦っていると言うのか、二ナさん！？」

艦長席から腰を上げたシナプスが大声で尋ねる。だが二ナの意識はスピーカーの先で繰り広げられる死闘の果てを凝視したまま離れない。

硬く目を閉じ両手を組んで、彼女の神に祈る為に跪いて祈る姿は古に刻み起こされた女神像のよう。だが石木に起源を持たない生身のそれは押し寄せる恐怖の為に全ての機能を乱していた。呼吸は不規則で肩は震え、油汗の流れる顔が見えない苦痛に歪む。二ナの分析を半信半疑で聞きながらその後姿に目を奪われていたシナプスは次の瞬間にスピーカーより発せられた、アルビオンに所属するエーパイロットの叫びを聞いて天井を見上げた。

「はああああっ！！！」

一瞬で訪れる静寂、金属の融解音、電気配線がショートする火花の様な音。二ナの目が大きく見開かれて艦橋の天井のどこかにあるスピーカーを睨み付ける。その瞬間に不規則な連弾で響く爆発音が流れ出した。

「こちらウラキっ！ 二号機は大破した。行動不能を確認っ！」

ダウンレポート

撃墜報告を習性で叫ぶコウの言葉はアルビオンのモニターでも確認された。報告を受けたオペレーターのシモンが二ナに変わってコウに伝える。

「こちらでも二号機の損傷を確認しました。でもウラキ中尉、一号機は」

シモンの眼前に表示されたテレメトリーには一号機のワイヤーフレームが表示されている。損傷箇所はパーツ毎に赤い色で塗り潰される仕組みなのだが、今シモンの手元にあるそれは殆どの箇所が隙間無く赤い色で染まっている。脱出用のコアファイターですら重度

のダメージを負っているという事は、一号機も二号機と同様のダメージを。

「一号機も大破した。コアファイターは使用不能。近くにいる友軍に援軍を要請してくれ、ガトーはすぐ其処にいるっ！」

正対する損害報告を喚きながら、連続する爆発音の中で慌しく脱出準備に入るコウの服の衣擦れの音がする。コウの発した言葉で微かに浮かんだ喜びの色が二ナの瞳から消失した。再び何かを恐れて震え始める二ナの変調を目にしながら黙って見守るシナプス。

「ウラキ中尉、現在キース少尉が現場に急行中。直ぐに一号機から脱出して下さいっ！ 爆発に巻き込まれます！ ガトーの事は後の人に任せてっ！」

「くそっ！ せめてディスクを！」

その一瞬の遅れが命取りになるかも知れない。パイロットの最後に残された大事な役目である起動ディスクの回収に反射的に移ろうとしたコウの行動を、シモンとの会話に割り込んだ二ナが阻止した。「やめて、コウっ。早く其処から逃げ出して。ディスクなんかもうどうでもいいからっ！」

「二ナっ！」

驚いたコウの叫びの背後で不気味な音が鳴り響く。恐らく臨界を越えた融合炉が暴走を始めたのに違いない。その事実を音で知って焦る二ナに向かってコウが叫んだ。

「何を言ってるんだ！？ これが無ければ君の今までの苦労が水の泡だ。せめてこれだけでも！」

「もういいっ！ そんな物もうどうでもいい！ …… 帰って来て、早く。」

最後の言葉は呟く様に、啼きながら。

「帰って来て、コウ。 …… お願い。」

コウの言葉が途切れた。会話を耳にしていた全ての人に不安と暗示を予感させるその沈黙は再び流れた、躊躇を携えたままのコウの一言によって時を進める切欠となった。

「…… 済まない、二ナ。一号機の事。」

ブツツと言う、何かが切断された音。コウがヘルメットから無線機のジャックを引き抜いてコクピットから離脱した事を示す赤い『ESCAPE』と言う文字がシモンのモニターに表示された。それはパイロットが完全に機体から離れた事を示している。

コウのスーツから発している救難信号とキースの機体の反応が一致した事を確認して、シモンはゆっくりと席を立った。跪いたまま上体を折り曲げて、何かを耐える様に動かない二ナの背中に向かつて歩み寄り、優しくその背中に手を当てた。

「ウラキ中尉は無事です。キース少尉が保護した事が確認されました。さあ、元気を出して、これで全てが終わったのですから。」

「二号機、爆発っ！ 一号機も誘爆を開始しますっ！」  
シモンの代わりにただ一人オペレーター席に残ったスコットが頭上のモニターを見上げて報告した。最大望遠で固定されたモニターの中に映る、互いに互いの胸を刺し貫いて煙に巻かれるその無残な姿を見上げながら二ナが呟いた。

「何故」

シモンと二ナの姿を見下ろしていたシナプスが二ナの言葉を耳に留めた。自分の作品を同時に失った『芸術家』の発言にはあまりに懸け離れた二ナの言葉を記憶に留めようと、耳を済ませて注意を向ける。

「何故、あの二人が戦わなくてはならないの？ 何故……」

言葉の意味を図りかねて眉を僅かに動かすシナプスの視界の中で、全てが終わった事を知る二ナが未だに何かに打ちひしがれている様子だけが鮮明に映り込んでいた。

「分からない。」

二ナの話聴きながらアデリアが唐突に言った。視線を上げた二ナの目は何処と無く優しく、そして疲れている。二ナの生気が告白が進むに連れて失われて行くのを見てられないと言った風体でアデ

リアが語気を強めた。

「何でそれがいけないの？ ウラキ伍長は忠実に自分の責務を果たしただけじゃない。神を呪う？ 運命の二人？ 私に言わせればそんな言葉遊びでガトーとウラキ伍長を繋げようとする二ナさんが分らない。只の元ジオン兵と連邦のパイロットの戦いでしょ、そんなの。だったら相打ちでもガトーを止めたウラキ伍長を褒めてあげてもいいじゃない。それが何？」

あまりの物言いにマークスが慌ててアデリアを見た。二ナとマークスの視線の先でじつと佇んでいるアデリアは明らかに何かに怒っている様だ。その怒りの発露が一体何なのかは定かではないが。

「さつきから聴いてると二ナさんはちつとも嬉しそうじゃない。自分の好きな人が敵を倒して、任務を全うして生きて帰ってくるのにそれ以上の戦果は望めない筈なのに何で二ナさんはその事を喜ばないの？ 笑いながら話せないの？」

アデリアのその台詞にさつきまでの会話を回想してある事に思い当たるマークス。

そうか、アデリアは笑わずに二ナがウラキ伍長との出会いを通じて全ての真相を語ろうとしている事に対して憤りを感じ、自分の心のあるべき場所にいなくてはならない姉の姿から離れていく二ナの心の徘徊に対して怒っているのか。

自分の笑顔を自分自身で失ってしまったと。諦めた態度で話している目の前の疲れ果てた語り部に対してその心の在り方を詰っているのか。

恐らくそれは二ナも同じ考えに行き着いたのである。アデリアの怒りを受け止めた二ナの目がアデリアの足元に落ちて、瞬きを一つした後に静かにその理由を告げた。

「私ね、コウと知り合うずっと前に、ガトーと付き合っていたの。その一言に取り残される二人。怒りや疑問で充満した狭い二ナの居室の空気はその一言で粉々に砕け散った。天井から降りて来る戦慄という名の鍾乳石は支えを失って三人の頭上へと振り注ぐ。」

「え、何……？」

「そ、そんな。二ナさんと、ガトーが…… 恋人、同士だった？」

呆氣に取られて全ての感情を霧散させてしまった二人の前で小さく頷く二ナの頭があった。言葉さえも失ったアデリアとマークスを置き去りにして二ナは更に言葉を繋いでいく。

「彼と知り合った時、私はまだ高校生だった。…… ジルベルト・フォン・ローゼンマイヤー、それが彼のフォン・ブラウンに於ける名前。アナハイムで働くテストパイロットだと自分の素性を偽っていた彼に憧れた私は、後を追ってアナハイムに入社したわ。」

「私、アナハイムに就職が決まったの。」

人工的に創られるフォン・ブラウンの黄昏。人類が月面と言う環境で生存する為に外界との接触を完全に遮断する為の広大な天井はスクリーンとなって暮れ行く空を演出している。

茜雲から反射する紅い光に染められた街並を一望出来る高台の上で、二ナはその隣に立つ長身の男に告げた。満面に輝く華やかな笑顔と上目遣いに見上げる蒼の瞳を受け止めた男の表情は一瞬驚いた様に目を丸くして、しかし直ぐにその内心を押し隠す様に笑顔を浮かべた。

「そうか、おめでとう。」

「…… それだけ？ 私、結構がんばったんだけどなあ。もうちょつと褒めてくれてもいいんじゃない？」

「む……」

男は顎を指で摘んで紅玉と瑠璃の鬩ぎあう空を見上げた。肩に掛かる濃茶の髪が風にそよいで困惑する表情を二ナの視界から隠そうとする。

出会ってから半年の間にその男のそんな表情を見た事がなかった。二ナは、是非ともこの貴重な機会を逃すまいと男の顔を覗き込む。二ナの視線が自分の顔の下に移動してきた事を視界の隅で確認した



男は、慌てて取り繕う様に思いつくままの台詞を呟いた。

「これで君も明日から立派な納税者だ。」

「……なに、それ？」

華やかな笑顔が大きく弾けて、その可憐な唇から笑い声が奏でられて。屈託の無い二ナの笑い声は男が自分の発言を振り返る為の良転機となつて自分の言葉を振り返らせる。あまりにも外的外れで場違いな発言に苦笑する男と、その男がそんな言葉しか見つけられない事を分かっていた二ナの笑顔が交錯した。

「い、いやすまない。どうにも俺はこういうのは苦手で、その

」

「いいわ、その方が貴方らしくて、いい。」

そう言つと二ナの手が男の腕を絡め取つた。思わぬ行動に困惑する男の思いを他所に、二ナの頬が男の二の腕に預けられて。その一部始終を見下ろす男の目から困惑の色が剥がれ落ちて、思い遣る様な視線に変わった時、二ナがポツリと呟いた。

「これで、一緒ね。やっと一緒に好きだけいられる。……嬉  
しい。」

そこに紛れる他意は無く。純粹に湧き上がる淀みの無い感情の湧き水は心地良い暖かさを伴つて二ナの心を満たしていく。これから訪れる幸せな未来、ほんの僅かな障害ですらもその輝きの前には蕩けて落ちてしまつたろうと想像する二ナの手を包み込む様に男の手が添えられた。暖かなぬくもりを感じた二ナに浮かび上がる喜びの顔。

「ね、ジル？」

自分の幸福は彼の幸福だと信じて疑わない二ナが男に同意を求めた。男はそれを言葉にはせず、只握った手の力の強さで思いを伝える。

「君がアナハイムに就職したとして、寄宿舎は出る訳だろうか？ 暫くはアナハイムの寮で生活する事になるのだから今までとそう変わらないだろう？ 門限は必ずあるし、ずっと一緒にいられるって事

は  
「

「貴方と一緒に住んじゃおうかな？」

二ナの放った唐突な提案に男の手が震えた。慌てて眼下の二ナを見下ろした男の目と二ナの視線が指呼の距離で交わる。男の瞳には動揺と懸念、二ナの瞳には願望と悪戯。互いの思いが溶け合って違う色彩を生み出した虹彩のキャンバスは微かな不安をそれぞれに齎した。二ナが尋ねる。

「どうしたの、やっぱりそう言うのは駄目？」

「い、いや、そういう訳じゃないんだが　　そういう事はやはりご両親の許しを得なければいけないんじゃないのか？　それに幾ら何でも未成年を　　」

うるたえながらしどろもどろで言葉を搜す男の顔は二ナが思わず笑い出してしまうほど緊張している。今までに得た事の無い新たな発見の数々を手にした二ナが、くすりと笑って自分の提案を引っ込めた。

ほんの僅かな失望も残したまま。

「嘘よ。幾ら何でもそんな事。それにね、私ジルとはちゃんとして置きたいの。私がアナハイムで一人前になって、お父さんやお母さんの前で堂々と結婚を宣言出来る様に、その時までにはちゃんと。」

そんな言葉が本心でない事は二ナ自身が一番良く知っている。

本当は直ぐにでもジルの家に押し掛けて一緒に住みたい。親の事を引き合いに出しているのも大嘘だ、自分に生き方を押し付ける父と母に反発して家を飛び出した自分が何を今更そんな事に拘って体裁を取り繕おうというのか。そんな大事な事まで隠したまま嘘を塗り重ねる自分に嫌気が差す。

だが、そうしなければならぬ理由は確かに、自分の隣に存在する。ジルだ。

優秀なテストパイロットらしく物事を論理的に、合理的に考える彼の前では自分の我侷など子供の駄々同然なのだろう。決してその気持ちをも自分に向けて告げた事はないが、自分に注がれるその瞳の

鳶色が彼の言葉よりもその事を雄弁に二ナに物語る。そう思われるのが嫌だった。

背伸びをしても自分の拙い理想が掲げる大人である様に。そう自分自身を戒めた二ナは彼の嫌がる事、嫌われそうな事の全てを自分の中に封印した。その事が時には自分の感情を歪めてヒステリックな衝動に身を委ねたくなる時もある。だがそんな事よりも、二ナには守らなければならない唯一の物がある。

この人と一緒にいたい。それさえ失わなければ自分はどんな事にも  
それがたとえ親元に帰る事だとしても  
耐えら  
れる。

失う事を想像した二ナの体に力が入る。男の手を握り締めた掌が汗ばむ。僅かながらの変化ではあったが男がそれを感じるには、二ナの手は十分すぎる熱を放っている。

「大丈夫か、二ナ？ 何処か具合でも？」  
心配そうに声を掛ける男のその言葉ですら、二ナには痛みとなつて突き刺さる。彼が自分を労わる度にそうあつてはならないと、自分の弱さで彼を縛り付けてはいけなくと強く心で戒める。

この人の人生をこの人と共に歩む事を望むのならば、この人が望む伴侶にならなければと。それが例え自分の生き方を捻じ曲げる曲りくねつた添え木であっても自分はそこに大きな根を生やして生きて行くのだと。

「ううん、何でもない。」  
その言葉はもう何度も何度も。男にその言葉を言わせてしまう度に反射的に答えてしまう、偽りの台詞。だが二ナは迷わない。

人はそうしなければ大事な物を何一つ守れずに手放してしまうと言う事を本能で分かっているから。

「そう言えばジル、仕事は今忙しいの？ 最近ちつとも連絡が取れなくてハラハラしたんだから。今日の卒業式に間に合わないんじゃないかって。」

自分の心の痛みを和らげる為に二ナは話題を変えて、男の顔を覗

き込んだ。互いに見つめ合う事を予感していた二ナの未来予想は以外にもその時間軸をずらしてそこにあった。

男は二ナから視線を外して遠くの空を眺めている。優しい光の欠片も残らないその瞳はすつと細く、投影スクリーンの機能を停止するフォン・ブラウン上空に広がる宇宙を見つめて。

「そうだな、忙しいと言われれば、そうだ。いろいろ行かなければならない所があつてね。近い内にまた月を離れなければならない。」

「月を離れる？ 何処へ行くの？ 新型機のテスト？」

「おいおい。」

男の手が矢継ぎ早に質問する二ナの顔を見下ろした。降り注ぐ視線を受けて二ナの心は安堵の溜息を密かに漏らす。

良かった、あの目は何かの間違いだったのだと。

「そんな事を言える立場じゃない事は君にも分かるだろう。……

いかな、将来アナハイムのシステムエンジニアになろうとする者がそんな事では。」

男の嗜める言葉と再びその目に宿った優しい光が二ナの顔へと降り注ぐ。その流れに逆らう様に二ナの言葉は男の視線を遡って思いを告げる。

「もつと知りたいの、ジルの事を。仕事の事だけじゃない、貴方の見ている事考えている事悩んでいる事困っている事。……私も

貴方と同じ場所にいたい、貴方の隣に立っていたい。……それ

って我俣なのかな？ 間違ってるのかな？」

「いや、そんな事はない。二ナ、君は正しい。」

二ナの求めに生真面目に応じる男は短くそう答えたまま、それ以上の言葉を口には出さない。自分の言葉に対する男の肯定がそのまま男の求める真の願いである事を感じ取った二ナは、求める様に静かに目を閉じて顔を上げた。引き付けられるように近づいて来る男の顔、吐息が熱い。

確かにそこにいるのだと。二ナが感じる男の熱が頬から唇へと移行して。一つに混ざり合うお互いの呼吸は何度も何度も行き来を繰

り返して、それが掛け替えの無い物だと言う真実を二ナの心に齎した。それが離れてしまえば何かが変わってしまう事を恐れた二ナの唇が男の存在をしきりに求め続けて離れない。

二つの影を一つに絡めて影を映し出すはるか天頂に輝く水の惑星が、二人を営みを見守る女神の様に柔らかな蒼光を放って、月の全てを照らし出していた。

「二号機のコクピットに乗り込もうとするガトーを見かけた時、その男がジルだとは分からなかった。長い銀髪のを後ろで束ねた連邦軍の大尉がまさか私の知っている男と同一人物だとは、ましてやそれが、伝説の撃墜王アナベル・ガトーと私の知るジルとが同一人物だなんて考えもしなかった。でもフォン・ブラウンの街角で流れていたデラーズの犯行声明を見た私は、デラーズの傍らに立つガトーを見て愕然とした。私の知っていたジルとはすっかり雰囲気も表情も変わっていたけれど、あの目だけは」

そこに存在した事実は今でも二ナの心の傷となって厳然と、しかも拭い難い染みの様にこびり付いたまま消えずに残っているのだろう。それを二人に向かって告げようとして声すらも掠れていく二ナの心中に思いを馳せながらアデリアとマークスは黙って二ナの言葉を待った。心の疵が蟠る黒い塊となって二ナの口から吐き出された時、二人は彼女が本当にガトーの事を愛していたのだと言う事を知る。

「間違いなくジルだった。私から目を逸らして宇宙を見上げていた時に見せた、何処か遠くを見つめている冷たい目。……」

多分その時にはデラーズフリートの決起は間近に迫っていたのだと思う。ジルは、いえガトーはその日を最後に私の前から姿を消したわ。アナハイムに在籍していたと言うデータだけを人事部のバンクファイルに残したまま。」

「そんなっ！」

静寂を破ったのはアデリアだった。アデリアの心の変化が傍で見

ているマークスには痛いほど良く分かる。アデリアは二ナの告白の中に没入し、二ナの過去を追体験している。感受性の高いアデリアにとってその時二ナが受けた傷心という物は自身にとっても耐え難い痛みと怒りを伴って自身を苛んでいるに違いない。その発露ゆえの叫び声だろう。

「何てひどい男なの、ガトーって！ だって二ナさんを騙していた訳でしょう、自分は月を離れる決心をしていながら、その事を黙って何食わぬ顔で思わせぶりな態度まで取って！ 女の純情を弄んで置き去りにする様な男なんて、人の風上にも置けないわ！」

憤懣を露にして捲し立てるアデリアの興奮が二ナの居室に漂っていた冷たい空気を振り払う。アデリアの取った態度に感謝をする様に　それは過去の悲しい記憶に埋没してしまいそうになった二ナの心を救い上げた　二ナは穏やかに笑って、アデリアを見た。

「アデリア、違うのよ。ガトーはそんな人じゃなかった。私との事を只の遊びと割り切って……　ううん、そうだったらどんなに良かった事か。でもそうじゃなかった、ガトーは私の事を愛していたから、別れざるを得なかったの。」

「騙されてるのよっ！」

二ナの論評を真つ向から否定するアデリア。

「人の記憶が嫌な思い出を美化して覚えていると言ってもそんな考え方って無い。それに決起が間近の迫っていたのなら二ナさんに近づいたのだから偶然とは思えない。自分の恋人を敵の内部に侵入させて機密情報を盗み出させるって手口を何かの本で読んだ事がある。きつと二ナさんはガトーに利用されたのよ！　そんな相手の事を、死んだ敵の名誉を庇う事なんて無いっ！」

二ナの過去に対するもう一つの見方をアデリアが怒声と共にそう表現する。二ナの立場を弁護しながらもその怒りはこの世に存在しないガトーよりも目の前で息づく二ナに向けられて。

「庇っている訳じゃないわ、それがジルから最後に告げられた、事

実だから。」

落ち着いた口調で意外な事実を告げる二ナの顔をマークスは黙って見つめた。二ナの思い出に抵抗を続けて息を荒げたアデリアは肩を微かに上下しながら、穏やかさを取り戻した二ナの表情を見た。さつきまで苦しげな顔をしていた二ナの顔にはもうその面影は無い。アデリアの二ナに対する憤りが彷徨う過去の自分に救いの手を差し伸べているのだと、その表情の変化を追っていたマークスは察していた。

「この機体は私の友達、ルセット・オデビーが作った物。」

そう呟いた二ナが後ろ手でモニターのスイッチを入れた。起動音と共に再び明るくなる液晶に浮かび上がる三号機のテレメトリーデータの数々。二ナがそれを横目で確認しながら、その瞳にどこか懐かしそうな色彩を浮かべて言った。

「機体自体のコンセプトの発想は私。一号機と二号機はどちらもモビルスーツが一戦力として稼動する為の究極の目的を求めて私自身が手がけた物。でもこの三号機は違う。」

そう言う二ナの指がキーを軽く押した。画面が切り替わり、其処にアデリアが眺めて疑問に思っていた兵装選択コマンドの記録が呼び出される。

「ガンダム自体をコアブロックの様に定義して、その本体に多種多様な兵器を詰め込んだコンテナを抱えて戦場を制圧する巨大な武器庫。これ一機で一艦隊を壊滅させる事の出来る大量殺戮兵器。それが『AERX-78GP03』、コードネーム『デンドロビウム』と呼ばれた、コウが乗った最後のガンダムよ。」

「戦場を制圧、一艦隊を壊滅？ 馬鹿な、そんな事がたった一機のモビルスーツで」

マークスの呟きを聞き届けた二ナの指が再び動いた。画面が切り替わって其処に二人がまだ目にしていなかったデータが映し出される。

モビルスーツのセンサーを通して記録される戦闘記録のデータの

詳細が其処にはあつた。どの兵装が作動してそれがどのような結果を齎したか。無機質なコンピュータはその一部始終を冷静に

その行為が一体どれだけの人命を奪った等省みる事も無く

淡々と記録している。

目を凝らして画面に食い入る二人の意識に二ナの言葉は働きかけた。時間の経過と共に無数に点在する罰点が、その兵装を使用した事による惨い事実を如実に表している。

「コウがこの機体で挙げた戦果がこれ。機動巡洋艦1、重巡<sup>サブ級</sup>3、軽巡<sup>サイ</sup>7、モビルスーツに至つてはその宙域に展開していた敵の80パーセント以上を撃破もしくは戦闘不能に至らしめた。彼がこの機体で挙げた最初で最後の戦果が、それよ。」

事も無げに事実を告げる二ナの口調は紛れも無く技術者としての冷酷な響きを持っている。ことこの分野に関しては二ナはそのスタンスを捨てる事は出来ないのだ。人格とは別の部分に存在する二ナ・パープルトンはその機体に秘められた事実を二人の前で暴露した。

「『ステイメン』と呼ばれるガンダム本体とそれを収納する母機の『アームドベース・オーキス』。二つの兵器を一人のパイロットが操る事によつて様々な戦場の局面に対応出来る様に開発された機体は二つのOSを必要とする。私はそれを操作する時に生じるパイロットのストレスを考慮して、万が一の可能性だけを示唆してこの機体の開発を断念したわ。それは私のモビルスーツ開発の理念から全く外れていた物だったから。」

「万が一の可能性、と言う事はそれが無いとこの機体を運用する事は出来なかつた、と言う事ですか？」

「普通のパイロットが普通の状態で、と言う意味よ。」

マークスの問い掛けに二ナは簡潔に答えた。

「三号機をコウに与えると言う話が軍から出された時、私は焦つたわ。あの機体はそれなりの訓練を積んだテストパイロットでも十分には運用出来ない代物。事実一人、テスト中に実験宙域に乱入して来たジオンとの戦闘で喪失している。…… そんな機体にコウを



乗せて戦場へ送り出せる訳が無い。いくらコウが才能に優れたパイロットでも恐らく性能の三分の二も發揮出来ないだろうと言うのが私の予測だった。でもそれだけ使いこなす事が出来るのなら、少なくともコウがその機体に乗って死んでしまう事は無い……一  
号機を造った時と同じね、私はそう思った。」

「しかしウラキ伍長は三号機を操って、不十分な状態でもこれだけの戦果を挙げた。」

「挙げられる訳がない、それだけではこれだけの結果を。」

二ナの口調が一瞬にして変化した。その背後に隠れた恐怖にも似た怒りは眩きを漏らしたマークスの心を凍らせた。

「その万が一の可能性が…… 私が『そんな事を彼女がする筈が無い』と高を括っていた事が、私の予想を超えて既に存在していたのよ。二つのOSを操る為にパイロットの反応速度を増大させる神経伝達促進剤、『PI4キナーゼ・タイプ?』と呼ばれているこの機体の為だけに開発された試薬が。」

二ナの腕の中でルセットは見る見るうちに生気を失ってゆく。

ナカト少佐の放った弾丸はコウを庇ったルセットの背中から侵入して確実に彼女の心臓を直撃した。鼓動を繰り返す度に送り込まれる事なく吐き出される大量の血液は大きく穿たれた背中の中からは常に溢れ出して、二ナの腿と床を濡らしている。

「ルセットオっ！」

そうしなければ逃げてしまうと信じているかの様に。二ナの両手がルセットの体を渾身の力で抱きしめた。命を、心を手放さない様にと願う二ナの想いは、ラヴィアンローズの格納庫で繰り広げられた悲劇トラジディと言う名の戯曲によって周囲を取り囲んだ機械の群れから神を呼び出す事無く終演を迎えようとしている。ルセットの頭上に舞い降りようとする緞帳の存在をその手の中に実感して、それを止められない自分の無力さと運命の残酷さを心の中で齒軋りする二ナ。そして彼女はその運命の根底に流れる或る物の存在を、彼女の背後

で息を潜める白い巨人の存在を密かに呪った。

ガンダムこんな物さえなければ。

こんな事さえ私が考えなければ！

「に、二ナ……………」

手の中で失われていく友人の、命の残り火にも似た微かな声が二ナの耳を捉えた。薄っすらと開くその目には既に生者の輝きを残せずに空しく宙を駆け巡って。

「ご、ごめんなさい。貴方に黙って三号機を……………でも私

」

「もうしゃべらないでっ！ 今コウが医者を呼びに……………」

「……………貴方に、負けたくなかった。仕事でも、恋でも。」

二ナの瞳孔が大きく開く。ルセットが口にした今わの際の言葉の思わぬ事実<sup>に</sup>二ナの視野から全ての物が消滅した。手の中で息絶えようとする友人の存在も、軍医を求めて狂った様に大声を上げるコウの姿も、そして自身の呼吸でさえも。

「私、ジルがガトーだと直ぐに気づいた。貴方はそれを知った上でガンダムをテストしているんだと思っていた。ガンダムのデータを取得するために全てを犠牲にする事を躊躇わずに……………でも、違ったのね。」

焦点を失って呟くルセットの言葉が、何も無くなった二ナの世界に彼女の姿だけを呼び戻した。喘ぎながら震えて死を迎えようとするルセットの、蒼白くなってしまった頬に二ナの涙が落ちる。大理石と同じ透明さと冷たさを触れる事無く知らしめる柔らかな皮膚の上を伝う雫は、ぼやける二ナの視界からルセットの息使いと共に遠ざかっていく。

「貴方が、そんなに……………彼《ウラキ中尉》を、愛、している、なんて。」

「ええ……………ええ、そうよっ。私はコウを……………」

「だから、あんなに……………拒んだのね。私の三号機に乗せる事を。ガトーと同じ……………世界に行ってしまうのを恐れて。」

「そつよっ！」

堪り兼ねて飛び出した二ナの叫びは直ぐ傍で二人の安否を気遣うモウラの元へも届いた。驚いて視線を向けるモウラの動きすらも眼に入らなくなつた二ナが慟哭を放つ。

「もうこれ以上あの二人を戦わせる訳には行かないっ！ あの二人は互いに呼び合つてるのよ、私には分かるっ！ お互いのどちらかが斃れるまで、死んでしまふまで。決着を付けるまで戦おうとしている。私は、わたしはあ」

「でも、其れは…… 貴方が二人に与えた、運命。」

ヒツという、声にならない声が二ナの喉から迸つた。

分かつていた。分かつていながら気付かない振りをしていて、またしても。

わなわなと震える手の中でぼんやりと微笑むルセツトの顔を凝視する二ナ。声が出ない、言葉が出ない。ルセツトの宣託は二ナの触れられたくない本質を貫いて答えを、応えを求めた。

「…… 三号機を、お願い。…… 貴方には、その、責任があるわ。」

血に塗れた手をルセツトが伸ばした。既に視力の失われた目が二ナを捉える事は出来ない。だが手を伸ばした先にある何かを求める様に振りかざした掌を二ナは受け取らざるを得ない。

「責任 何故、ルセツト？」

宙に浮かんだままのルセツトの手を握り締めた二ナが尋ねた。既にそこには温もりの欠片も無く、痙攣にも似た死の前兆が始まっている。だがルセツトは自分を攫つて行こうとする神の御手を振り払う様に声を絞り出した。

「彼らの運命を創ってしまった、貴方自身の。…… だから貴方

は、見届け、なけれ、ば、ならな、い。」

「ルセツトっ!? しっかりしてっ！」

願いも空しく揺り籠に包み込まれる彼女の魂。呪う事しか術を持たなくなつてしまった二ナがルセツトの体を大きく揺さぶつて切れ

掛けた魂の尾を繋ぎとめようと。

呪詛と同義の意味を持った祈祷にも似たその行いがルセットの未来を変える事は、果たして無い。

「もし、そうなり、たく、なかつた、ら、あなたが、けりを、つける、のよ。あなたが　　えらんで　　」

声を紡ぐ為の大事な呼吸は失われた。目を閉じるルセットの体を掻き抱いた二ナの耳が口元に押し当てられて。その柔らかな耳たぶに押し付けられたルセットのルージユが微かに開いて、最期の吐息と共に言葉を吹き付けた。

「ほんとう、に、ごめん、二ナ。わたしは　　」

二ナの記憶に刻み付けられる、ルセットの最期の言葉。全身の痙攣がその一言を告げる為だけに注ぎ込まれて彼女の命を終わらせた。

「あなた、を、まき、こ、ん　　…　　だ。」

「先遣隊の準備、完了しました。」

星だけが瞬く暗闇の中でケルヒヤーの声がダンプティに届く。報告を受けた彼の目が夜闇の中で鵠の様に蠢く巨大な影を捉える為に瞳孔を開いて刮目した。

襲撃計画に関する或る程度の雛形がケルヒヤーの脳内に残っているとはいえ、立案から実行に至るまでの時間は迅速を極めた。オークリー基地周辺の詳細な地形データに関しても軍のデータベースには完全な形で保管されている。ケルヒヤーの行った作業と言えばその地形が今までに行われたどの作戦に類似していて、『敵戦力』がどのケースに当て嵌まるかと言う事を検索して組み合わせるだけの単純な作業だった。

唯一の懸念は今回の対象が曲りなりにも地図に記載されている陸軍の基地であると言う事、そして自分達が軍の施設に対して侵攻を行った事がない。個々の経験は、別だ。と言う未知の状況に対する対応の変化である。ダンプティが准将の前で疑問を提唱した通り、少数とは言えどもある程度の戦力を有した施設を隠密裏に消滅させようと言うのは甚だ難儀な話だ。民間の其れとは警戒網のレベルが違うし、何より現在地球上の陸軍基地には夜間待機勤務が義務付けられている。完全な奇襲は期待出来ないだろう。

前回に行った自分達の作戦によって齎された障害を省みながら作戦立案者のケルヒヤーは新たな行動をダンプティに提案した。其れが現在行われようとしている先遣隊による偵察行動であった。

基地施設に隣接する最寄の町に民間人として潜入し、基地周辺の情報収集に当たる。衛星写真や3D画像による地形の解析は夜襲専門の部隊である彼らにとってはある程度の指標にしか過ぎない。実際に現地を調査して新たに更新された道路や建物、物資の流れを把握する事が彼らの役目である。現場で入手するそれらの新しい情報

が部隊の行動方針を急速に変化させる可能性があると言う事は、長く第一線に留まり続けるダンプティにとっての常識である。

「ラーズ1に命令。現時刻を持ってラーズ1以下六名は先遣隊としてサリナスに待機、当該目標の詳細な情報収集に当たれ。」

ダンプティの背後で声も無く佇んでいた影はその言葉と共に踵を鳴らして敬礼した。ラーズ1の動きに導かれる様に同調する、ラーズ1の背後に隠れていた五人。

「現時点で俺のモビルスーツ隊の指揮官経験者はここにいる三人だけだ。俺とトーヴ1はまだ最後の詰めが残っている。悪いが貴様にこの新人を率いて現地に向かつてもらう。」

「陸上部隊に任せれば良かったんじゃないのか？ わざわざ俺達が直に現地へ向かわなくても」

「あいつらは信用できん。特に今回の作戦に関してはな。」

出来るだけ感情を込めずに呟いたつもりではあったが、心の底に渦巻く嫌悪感は隠しきれなかった。吐き捨てる様に言ったダンプティの顔を闇に透かして不思議そうに見つめたダンプティが言った。

「意外だな…… あんたにそんな感情があるとは思わなかった。」

「俺とて木鶏や木石の類ではない。それにモビルスーツ隊と陸上部隊は此処に限らず常に反目を続ける関係だ、例え銀河の果てまで互いのあり方について論戦が続いたとしてもな。…… 軽蔑したか？」

「下らん事を」

聞くな、と言う最後の言葉を省略したラーズ1が敬礼をしたまま命令を復唱する。

「ラーズ1、現時刻を持って先遣隊指揮の任を拝命する。以下五名、新入隊の各員を持って作戦を実行する。以上。」

「よし。」

ダンプティがラーズ1の言葉を聞き届けてゆっくりと動いた。暗闇の中を正確に、小隊指揮官の脇を通り過ぎた彼の足は五人の前で立ち止った。

「いいか、貴様らはまだこの部隊の事が良く理解出来てはいないだろう。故にモビルスーツに乗機する前にまずこの任務をこなして貰う。貴様らに部隊としての『免罪符』を与えるのはこの後になる。各員肅々と作戦を実行する事を期待する。」

「何だよ、こんな退屈な任務他の奴にやらせりゃいいじゃねえか。こっちは新兵じゃねえんだ、早いとこモビルスーツに乗ってパパッと済ましちまおうぜ。」

その声は明らかに、暗闇に立つ五人の中から聞こえて来た。下卑た声で欲望を隠さない言葉に対して眉を顰める三人。退廃極まる空気の中をダンプティが平然とした声でゆっくりと言った。

「今、発言をした者、一步前へ。」

上官の命令　　正確にはダンプティはまだ彼らの上官ではない。試用期間の名目で非常召集を受けた彼らの所属は未だ各々の原隊に置かれている　　を受けた影が一つ、前へと進み出た。闇に慣れたダンプティの目に映る男はニヤニヤと笑いながらダンプティの反応を見ている、いや、観察していると言っべきか。

「貴様の所属と姓名、階級を聞こう。」

「へっ。」

影に向かって歩みながら尋ねたダンプティに向かって男の不遜な声が響いた。声と共に吐き出された唾が滑走路のアスファルトを叩く。

「部隊内で互いの名前も呼ばずコードネームで呼び合うあんた達に、俺達のそんな物が必要か？　だったら俺達にも早いとこ其れをくれよ。俺達はその為にこの部隊に志願したんだ。」

「勘違いするな、貴様らはまだ正式な部隊構成員ではない。補充でも登用でもない貴様らの立場はあくまで予備戦力だ、其れが欲しければ大人しく命令に従え。」

「そんな事をしなくても俺達をさっさとモビルスーツに乗せて実績を見せりやすむ事なんだから？　何だったら今からそのすか賺した新任指揮官と指して対決してどっちが実力が上かを決めたっていいんだぜ。」

「こっちは長い事宇宙の最前線でジオンの残党狩りをやってきたんだ、そこらの奴には負けねえだけの実績がある。」

背後からの挑発にも動じずにじつと敬礼の姿勢を崩さないラーズ1。そして其れはケルヒヤーやダンプティにしても同じだった。無言で男の罵詈雑言が流れる空間にじつと動きを止めたまま、小さな反乱に耳を傾ける。

「此処はそういう部隊なんだろ？ 氏素性や所属、連邦軍や元ジオンですらも関係ない、傭兵の集まりなんだろ。だったら其れをあんた達の目の前で証明してやるって提案してるんだ、俺だけじゃない『俺達』はな。」

「成る程、貴様のその意見は貴様だけの物ではなく、ここにいる五人の総意だと言う事か。弁舌や階級を以ってしてではなく實力によつて権利を手に入れたいと……悪くないな。」

「物分りがいいじゃねえか、『殺戮部隊』の指揮官にしちゃ。そうだよ、俺達はその為に此処に志願したんだ。軍規や倫理や世論に晒されずに心置きなく任務を遂行できる部隊……いや『舞台』と言つてもいいな。とにかく俺達は敵が殺したくて此処に来たんだ。

其れなのに最初の任務が地上部隊がやる様な『斥候』紛いの仕事じゃあ、意味がねえ。」

それが代表の意見である事を示す、他の五人から漏れる含み笑いを耳にするダンプティ。だがその表情には何の感情も抱かない、寧ろ伶俐な刃物を思わせる無表情が存在している。

「なあに、俺達がちよつと本気を出しやあ敵の殲滅なんざ物の数じやねえ。あんた達も今まで色々苦勞して来たみたいだがこれからは安心しな、俺達があんた達の代わりに思う存分敵を殺してやるよ。何だつたらあんたの地位を俺に譲ってくれてもいい、そうすりゃあんたはもつと楽にこの先昇進する事が……」

パン、と言う乾いた音が暗闇に鳴った。

糸の切れた操り人形の様に地面に崩れ落ちる男の額には小さな穴が開いている。突然侵入した9ミリの鉛の固まりは一瞬にして男の



後頭部に其れに倍する穴を穿つて、その進路上にある全ての物を貫いて飛び出した。噴出す血液と脳漿と男の脳味噌がさつき男の口から吐き出された唾と同じ地面へ大きな音を立てて撒き散らされる。代償として求めた物は男の減らず口と生命活動の終息。

いつの間にか振り向いていたラース1の手には標準装備の拳銃が握られている。鼻を突く硝煙の匂いはその小さな銃口から流れている事を生き残った四人に知らしめた。思わぬ事態に恐怖の沈黙を護る四人に向かつて、ラース1の無機質な声が響く。

「不敬罪と反逆罪を適用 …… 当該作戦に於ける戦死者一名。」  
「貴様らは大事な事を失念している。」

ラース1が手にした拳銃を腰のホルスターに仕舞う様を見届けながらダンプティが言った。

「ラース1が任務を拝命した時点で貴様らは当部隊の作戦に組み込まれた。故に現時点からラース1の取る全ての行動は俺の責任によつて全て認可・免除の効力を持つ。いい機会だ、此処でお前達に教えて置いてやろう。」

何の怒りも感情も持たずに一人一人を 其れも恐らく友軍の貴重な戦力である隊員を あつさりと排除した事に恐怖を覚えた四人に向かつて、ダンプティは静かに言葉を繋いだ。

「俺達が持つ『殺人許可証』は何も敵だけに適用される物ではない。貴様らは勿論仲間や味方に対しても有効なのだ。逆らう者には容赦はしない、よく覚えておけ。」

ダンプティの宣言に弾かれた様に敬礼を返す、運よく生き残った四人の影。掌を返した様なその動きにも何の感慨も持たずに滑走路の方を振り返るダンプティ。

その視界の中に割り込んで来る小さな双発ジェット機の機体が誘導員の手によってゆっくりと彼らの傍へと駐機体制を取った。鼻先で停止位置を示す無口な男が手にした緑色のルミノールが頭上で交差して、パイロットに停止を示す。

この部隊に於けるダンプティの最後の作戦行動は遂に動き始めよ

うとしていた。

ニナは言葉を躊躇った。その先の事を話すべきなのかそうでないのか、其れはニナ自身にも判断が付きかねているのが黙って耳を傾けていた二人には分かる。

マークスとアデリアの前に唐突に現れたウラキ伍長の過去と言う名のディスクは、秘密と言う名のベールを剥がされて輪郭を現した。同時に浮かび上がって来た事実は其れが過去の結果としての記録でしかないと言う意味合いを二人に提示する。だが数値とグラフで残された過去の結果は人の意思の改ざんを加えられない場所で、今を生き続ける者の傷跡と共に厳然とした事実として存在する。このデータがここに残っていると言う事はルセツトの死後、ウラキ伍長は三号機を駆って戦場へと再び舞い戻り、ガトーと再び見えた事を示しているからだ。

「マークス。貴方が目にしたデータはその時のコウが残した記録。でもコウは其れでもガトーを墮とす事は出来なかった。……この記録は即ち、ガトーのデータと同義語なの。だからもうこのデータの事は忘れて。この記録は死者の残した遺言、生きて歩く物が目指す物じゃない。」

「ニナさん、其れは違う。このデータが例えガトーの物と同義ではあってもこれを記録したウラキ伍長は生きている。彼が生きて僕達の前にその姿を残している限り、この記録は遺言と言う物とは違うと思う。ウラキ伍長が軍を離れて僕達と生きる世界を違えてしまっただと言う事は間違いないのだけれど、少なくとも

マークスの目が生気を帯びてニナを見つめた。その先の話を促す様に虹彩が煌く。

「彼は死者じゃない。」

断言して言葉を締めくくったマークスの言葉の後に再びの沈黙が漂う。

ウラキ伍長とニナの出会い、そして彼らが

勿論その道行

きに同行して今ここで二人の上司として存在するキースやモウラも含めて　　どれだけの戦いを強いられて今に至ったかと言う事は十分過ぎるほど理解が出来た。デラースフリートとの戦いは彼らから戦後の楽観論を奪い去って、彼らの後に続く世代に今もどこかで息を潜めている戦争の危機と言う非現実的な現実を教えようとしている。キースが『自分を超える』と発言した事も、モウラが整備士達に全ての技術を教え込もうとしている事も其れで全て辻褃が合う。

悲劇と死者の魂を積み上げた上に生きる彼らには今の全てがまやかしなのだ。隠蔽された事実をひた隠しにして束の間の平和に甘える自分達に、二度と同じ思いはさせまいと。その為の力を誰にも気取られぬ様に密やかに後達に植え付けようとする彼らは、そんなあざとい遣り方を採らなければ成らなくなった時点で自身の未来を諦めたのだ。

其れが正しいのかどうかは今の自分には分からない、とマークスは思う。恐らく二ナの口から語られた事実は彼女が先立って緘口令を強いた事からも分かる様に、恐らく何らかの、かなりの危険を伴う情報なのだろう。共犯者となった自分達には二ナやキースと同じ様にその歩みを諦めて、生きる為に過去に縛られる運命が待っている筈だ。自分達が味わってもいない、他人の過去に。

マークスの中に眠る反骨心　　其れが彼の真骨頂と言ってもいい　　はその確定した将来を前にむくむくと頭を擡げて鎌首を上げて、見えない呪縛に恐怖を覚えるマークスの中で縮こまろうとする自我に問い掛けた。

だからと言ってここで聴かなければ良かったと。心を抉る様な思いで過去の記憶を語り続けた二ナに対してその言葉が面と向かって言えるのか？ それにここまで聞いてしまったのならどの道二ナやキースと同じ道を辿る事は間違いない、ならば中途半端にここで彼女に背を向ける事は有りや、無しや？

其れでいいのか、マークス。本当にお前はそれで？

二ナに断言したその一言は恐らくマークスの内部で瞬時に行われた葛藤の果てで無意識に生まれた言葉だ。だが其れは二ナの決意を促すには十分な言葉なのかも知れない。

「PI4キナーゼ・タイプ？」を使ったコウですらガトーを止める事は出来なかつたわ。其れは即ちコロニーの着陸を阻止する事が出来なかつたと言う事。でもその瞬間にデラーズフリートから停戦勧告が発せられた時に私達はこの全ての紛争が一部の者に利用された『茶番劇』だった事を思い知らされた。ガトーが二号機の核を使って多くの船を沈めた事も、ケリイさんやバニング大尉やルセットが…… ガンダムに、私の創ったガンダムに関わって命を落した大勢の人達の死ですらも全て彼らの仕組んだシナリオ上の筋書きにしか過ぎなかつた。」

「『茶番劇』？」

その言葉が決していい意味で使われる言葉でない事はマークスにも分かる。だがそれだけ多くの犠牲の上に成り立って得る成果がどの様な類の物であるか等見当も付かない。第一『茶番』の意味は『滑稽な座興劇』を演じると言う意味だ。二ナの告白の何処が『滑稽』で『座興』だと言うのか。

「…… 彼らは地球周回軌道上に『ソーラーシステム』を設置して、コロニーが阻止限界点を越える瞬間を待ち構えていたのよ。恐らくそうする事で自分達が地球の危機を救ったと言うプロパガンダに利用して、地球と宇宙を切り離す為の機会として利用した。其れが今のティターンズの始まりよ。」

「そんな馬鹿なっ！ 二ナさん、その推論は危険すぎる。幾ら何でも連邦軍の一勢力が 其れも元は一大隊に過ぎなかつた部隊がそんな事を画策するなんて信じられない！ それじゃ、まるで

「クーデターに利用しようとしたのよ、彼らは。」

断言した二ナの言葉に戦慄を覚えるマークス。突拍子も無いと思われる二ナの推測はデラーズ紛争以降に推移して行った連邦の勢力

図による物だと分かつてはいても其れを受け入れられるほど想像力は豊かでは無い。だが二ナはマークスの疑問を払拭する様に事実を積み重ねている。

「設置された時間から逆算すると彼らは二号機が奪取された直後から動き始めていた計算になる。もしその目論見が成功していたなら連邦軍の在り方は大きく変わっていた筈。ティターンズは旧連邦軍の勢力を一掃して全てを青黒い色ティターンズカラーに塗り替えていたに違いないでしょうね。」

「でも、失敗したのね。…… 現にコロニーは私達が今いるここにあるもの。」

起こりや過程を省略して結果のみに注目したアテリアの言葉。小さく頷く二ナの髪が微かに揺れた。

「私は地球軌道上にソーラーシステムの輝きを見た時、あるう事が成功してくれと祈っていた。例え彼らの思惑が自分達の勢力を拡大する為の物であったとしても、少なくともコロニーさえ無くなればコウとガトーの戦う理由が無くなる。…… 卑怯？ 冷酷？ そんな言葉が何？ 私やコウが犯した罪がそれで清算されるのならば願っても無い事だった。…… でもガトーは、そんな私の邪まな思惑を捻じ伏せてソーラーシステムを無力化した。」

頭を垂れた二ナの顔は覆い被さった髪の毛の影に隠れてアテリアからは見えない。だがアテリアには分かっていた、其処に浮かんだ表情には陰りや憂鬱と言った在り来たりの言葉では言い表せないほど悲しい顔の二ナがいる事を。

全ての責任をその小さな背中に背負って、全てを棄てて生きようとする稀有な才能を持つエンジニアの姿。其れは私の知っている、いや知っていた二ナさんの姿じゃない。

二人の前ではいつも凜として背筋を伸ばし、胸を張って腕を組んで睨み付ける技術主任のあの姿の影にこんな悲しい過去が隠されているとは信じられなかった。いや信じられない…… 信じたくない！

湧き上がる鬱憤に険しくなるアデリアの眉間の皺。伴って微かに吊り上げる目の前で、尚も二ナは自戒を吐き出す。

「コロニーが阻止限界点を越えた時、私は私自身の罪を私自身の手で贖おうと思った。コロニーを正確に目標に落とす為には最終軌道調整が必ず必要だったし、その為の推進剤もまだ残っているに違いない。その為にガトーは必ずコロニーの管制室に現れるに違いない…… 其処に到達出来るのは戦いの中で一步輪の外側に立っている私にしか出来ない。…… そして私の予想通りの時間、予想通りの場所にガトーはいたわ。」

「じゃあ、二ナさんはガトーからコロニーの制御を奪って目標を逸らす事に成功したんですね？ 軍の施設やジャブローではない、この場所を選んで。」

連邦軍人として生きるマークスやアデリアにとっては彼らの目標がジャブローである事には間違いないと思う。それだけの大質量兵器を落下軌道に乗せたのなら連邦軍本部に落す事が戦術的には最も正しいやり方だ。そのコロニーがジャブローに落ちなかった以上、デラーズフリートの目的は未然に回避されたのだろうと考えるのが自然である。

だがマークスの考えを少し踏み外した所に二ナの告白は存在した。「ガトーの、いえデラーズの目標は初めからそんな物じゃなかった…… ガトーは言ったわ。『このコロニーをジャブローに落とさない為に私は此処に来た』と。」

「え……」  
絶句するマークス。アデリアはそんな二人のやり取りを腕組みをしながらじっと見つめている。

「じ、じゃあデラーズフリートの目的って一体なんだったんですか？ それだけの犠牲を払ってあのコロニーを地球まで運んで、それをジャブローに落とさないなんて話の筋が合わない。ジャブローに落とささえすれば命令系統が消滅した連邦軍はただの烏合の衆だ。自分達が逃げる事も、他のスペースノイドの勢力を糾合してかつて

のジオンの様に決起する事さえ出来る、以前よりも簡単に、そして強力に。」

手にした最終兵器を手放す様な戦術レベルでの矛盾にマークスは耳を疑った。それ以上に重要な、彼らの作戦の目的を知りたいと願うマークスの声に従って、二ナはアイランド・イーズ内でガトーから僅かに聞いたその単語を始めて口にした。

「彼との会話の中に出てきた『操りし者共』。……彼らの存在を皆の前に浮かび上がらせる為に『星の屑』は決行された、とガトーは言っていた。この紛争だけが茶番なんじゃない、スペースノイドとアースノイドの反目と言う対立構造その物が、実はこの世界の裏側で蠢いている何らかの力に仕組まれている陰謀なのだと。」

「余計な事を。」

管制センターの出口へと急ぐ道すがらに偶然に手に入れた緊急修復キットの中から二ナがパッチを取り出して、ガトーのパイロットスーツに空いた穴を覆う様に貼り付けた。

これで真空下での宇宙服の与圧は確保される筈だ、だがその下に空いた銃創からは未だに出血が続いているのだろう。少し青ざめた顔色に鳶色の瞳だけを輝かせてガトーが言った。

「其れは手当ての事？ それとも」

二ナがガトーの顔を睨み上げた。怒りの色が深い、とガトーは思う。その目にはかつて自分が目にした事の無い、成長した彼女の自我が現れていた。

「貴方がコウに対してしようとした事を止めた事？」

「両方だ、二ナ。君が罪を肩代わりしようとした相手がコウ・ウラキだったと言う事情までは大体飲み込めたが」

脇腹を押さえながらガトーが壁に凭れた。そうすれば少し苦痛が和らぐのだろうか、ガトーは浅い呼吸を繰り返して自分の状態を確かめる。

「君の望みが以前の彼を取り戻す事だと言うのなら諦め

る。もう手遅れだ、二ナ。……彼の目を見たか？ 引き金を引く事に何の躊躇いも持たない彼、コウ・ウラキはもう既に一人前の立派な戦士なのだ、私と同じ舞台に立つ事でしか生きる価値を見出せない、戦いの女神アテナに選ばれた

「まだだわ！」

戦場の最中に剣を交える事でコウの多くを理解し得たと自負するガトーが伝える論評をにべも無く否定する二ナ。空ろにその瞳の中で漂っていた何かガ形を成して凝縮し、その矛先は言葉となってガトーの元へと向かった。

「いいえ、まだ間に合う。それにそんな事はさせないつ、……」

コウを貴方と同じ世界になど行かせないわ、私が必ず止めてみせる。

┌

まだ辛うじて動ける事を確認して若干の平静を取り戻したガトーに向かつて二ナは強い口調で言い放った。敵愾てきがい心剥き出しで放ったその台詞に思わずガトーは現状認識について尋ねざるを得ない。

「では、何故君は私と今ここにいる？ 彼を止めると言うのなら、いつそ私の事など放って置いて欲しいものだ。彼の傍に付いて元の世界へと帰還する、其れこそが君の本懐ではないのか？」

その問い掛けは意地悪な物言いに聞こえたのかも知れない。二ナの表情が少しづつ変化していく。眉を聳えて目尻を吊り上げるその表情は

「傷ついた貴方をあそこへ見捨てて行けと？ コウに撃たれた貴方がコロニーと共に地球へと落ちていく……行き着く所は貴方がやろうとした事と同じだわ。貴方の死と共にコウの中に眠っている何かが目覚めるのだとしたら

┌

二ナの形相が変わっていた。懐の奥にそつと仕舞ってあった大切な物を奪おうとする悪意に対して牙を剥く動物の様相に酷似している。

「その時コウに訪れる変化を知っているであろう貴方を絶対に死なせる訳には行かない。貴方を守ってあそこを離れる事が今



の私に出来る唯一つの事。貴方にそのトリガーだけは引かせないわ、ガトー。」

「君は彼に向かつて引き金を引いたと言うのに、か。 ならば何故、あの時私を撃たなかった？ 彼の手を汚させなければまた彼の運命も、この先へと続く話も変わっていただろうに。」

「悔しいけど、」

唇を噛んだ二ナの口元が微かに歪んだ。

「過ぎ去ってしまった過去の過去を自分の手で無かった事にするだけの勇氣や決心は私には無い。でも未来を失う覚悟なら二号機にコウを乗せた時から出来ているわ。彼が死ぬのなら、」

その迫力はガトーを怯ませる。二ナの言葉が目の前に立つ、今や彼女の敵に回った過去の記憶に向かつて叩きつけられた。

「私も、生きてはいない。」

彼女の聡明さと同居するこの愚直さは尊敬に値するな、とガトーは小さく笑いながら思った。

笑う事でぶり返す痛みもさほど気にはならない。其れよりも彼女が自分の命を賭けてまで護ろうとする存在に出会っていたと言う事がガトーには嬉しかった。出来る事ならば彼をこのまま帰して、二ナの求める幸せの中で共に歩める様にしてやりたい。ガトーの心中にふとそんな考えが過ぎっては、消える。

其れはガトー自身のコウ・ウラキと言う青年に対する評価の思わぬ変化だった。彼の人となりが今ここで自分に敵意を剥き出しにする二ナの全てを作ったのだとしたら、其れはとても素晴らしい事なのだろうと。別れを告げずに彼女の元を去った時に彼が唯一願った望みの形が、自分と相對した敵の手によって彫り上げられてここにあるのだ、と。

だが、しかし。

彼らが夢見る未来と言う名の希望も、幸せを手に入れた彼らが世代を重ねてその血脈を伸ばそうとする世界も、それはやはり『操り者共』によって作られた幻像に他ならないのだ。二ナ達だけでは

ない、この世界に生きとし生ける全ての人類に彼らの謀略による悲惨な運命が波及する『可能性』があるのだ。彼らと言う存在がこの世界の何処かで息を潜めて全てを操ろうとする限り。

ギレン閣下の意思を受け継ぐ為に敗残の将となりア・バオア・クーから撤退した自分達がこの世界の裏側に潜む巨悪の存在を知り、ギレン閣下の目指した世界の容が実は文字通り彼らに『操られて』創られた『理想郷』にしか過ぎなかったと言う事実を知ってしまった。故に彼らを打倒すべく 其れは同時に敵討ちをも意味する この作戦の大綱を発案したのはエギーユ・デラーズその人であった。

だがその要であったエギーユ・デラーズと言う名の巨星も既にこの世界から退場し、彼の意思に賛同して集った仲間もその大半がシーマ・ガラハウの裏切りによって壊滅させられつつある。恐らくこの戦場に残っている兵力は最早戦闘を継続出来る程の数は残っておらず ドズル中将の仰った通りだ。数は力なり。 正しく敗残兵と呼ぶに相応しい。

我々の運命は既に終盤へと差し掛かった。そしてここからそこまでの距離はそう遠くない。

だから私はこの戦いの全てを語り継ぐ者を残さねば成らない。だからこそ私は、このアナベル・ガトーは後に続く資格と権利を得た者に、私の遺志を継がせなければならぬ。

自分達の全てを投げ打って成し遂げた『星の屑』が散った跡に生み出される『揺り籠<sup>cradle</sup>』を護る為に。

「 二十」  
その声は今も太陽の光を受けて白く輝く月にいた頃と同じ様に、優しい声で。

「 すまんっ」  
その声はあの時に告げる筈だった言葉を再び心の深奥から掘り起こして、後悔に塗れた吐息と共に吐き出して。

声音が変わった事に気付いた二ナがその焦点を合わせた瞬間には

ガトーの体が直ぐ傍にあった。ガトーの全体重を乗せた強烈な当身が二ナの鳩尾に炸裂する。伝わる衝撃は宇宙服を貫いて横隔膜を一瞬だけ停止させ、そのショックは二ナの生体維持機能へと伝播した。生命の危険を感じた二ナの身体機能は休眠状態を求めて二ナの意識を遮断する。

「！ ガ、トー ……」

薄れ行く意識の中で呟かれた彼の名。力を失って肩に預けられるその重みに嘗ての想いが蘇る。

金色の、豊かで柔らかな髪が頬を擦り微かな吐息が首筋を撫ぜる。二ナの体を抱いたまま、襟首を掴んで遠くに霞んだ過去の記憶へと連れ戻した時空神はガトーに残った戦士ではない部分の感情を手にした青銅の鉤爪で縦横無尽に掻きまわった。

思い出す事、忘れ得ぬ事、あの日あの時あの場所で、紛う事無く手に入れ掛けていた安寧の日々を。激しい痛みと共に蟠った桃源郷での思い出を。

そしてガトーはその全てを受け止めた後で痛切に思い知らされた。やはり自分はこの少女を心から愛していたのだと。

そしてまたしても自分に課せられた運命は彼女から大事な物を奪って行かざるを得ないのだと。

二ナが語る物語を真実だと証明する者はこの場には存在しない。彼女が語る妄想にも似た物語は実際の所彼女を信じるマークス自身にしても、もし何の裏付けもなく二ナの話聴いていたらそう思った事は間違いない。

しかし自分が目にしたウラキ伍長のデータ、そして自分達が聞かされていた0083年に起こった事件に対して違う理由付けをしなから理路整然と語る二ナの話否定する事は難しかった。否定するにはあまりにも信憑性があり、そして虚言や妄想癖を持つ人間の会話にしては破綻が無い。

様々な部隊を渡り歩いて来たマークスには配属された先に必ずと

言っつていいほど存在した、戦争によって精神を苛まれた拳句に自分の世界へと閉じ籠つてしまった兵士達と接した経験がある。彼らは自分の存在を誇示せんが為に虚言を弄して不必要な混乱や差別の種を撒き散らしては周囲の人間を巻き込んで、間違つた道へと煽動していたのだ。もし二ナの語る物語に其れと共通した部分が欠片でも見えよう物なら今すぐ軍医を呼んで彼女を然るべき施設に預ける手続きを採るだろう。

だが今の二ナにはそれらと共通する因子が欠片も見えない。「じゃ、じゃあもしガトーの言う事が、万が一正しいのだとしたら。コロニーが地球に落ちた事も……いや、そもそもあのジオンとの戦争自体が既に何者かによって仕組まれた物だ、と。そういう事なんですか？」

その話を真実と仮定するならば。もつと突き詰めていけば其れはジオン公国の建国にまで遡ってしまうのではないのか？ 途轍もない可能性に言及するマークスの声が、自分の仮定に対して恐れを成して震える。しかし二ナはその問い掛けには小さく頭を振って否定の意思を示す。

「そんな昔の事までは私にも分からない。ガトーの言つた『操りし者共』と言う集団がどの様な存在かすらも見えないのに……いえ、その正体がもしガトーに分かつていたのならわざわざ地球にコロニーを落とすなんて真似はしなかつたでしょうね、直接敵陣に殴り込んで自分の仲間の……戦いで失つた多くの命の敵を執つたに違いないわ。彼らは敵の正体を確かめる為に『星の屑』作戦を決行し、そこで発生する世界の混乱に乗じて権勢を拡大しようとする集団の正体を暴こうとした。でもガトーが考える以上に敵の力は強大で、彼はそれらの正体を知る前に命を落してしまつた。」

それではデラーズ紛争という名の戦闘自体が未必の行為に他ならないと言う事になる。デラーズフリートと戦つた連邦軍にコロニーの着陸を防ぐと言う大義名分があるとは言え、その彼らが実は『操

りし者共』によつて密かに踊らされていたとしたら連邦軍ですらも被害者と言う事に成り得る。自分達が正義を唱えて行動し、命を奪つて行く行為までもが背後に隠れて世界を操る勢力によつて画策された物だとしたらそれは最も遣り切れなく、そしてガトーやデラーズの死はやはり彼らに仕組まれた物であつたのだと。マークスがデラーズ紛争という名の狂想曲ラフソナテに対してそう結論付けようとした時、二ナの口から予想外の言葉が苦しげに漏れてきた。

「でも確実に残つた物が二つある。」

自分の思考の沼から引きずり出されるマークスの意識。はつとして焦点を結んだ先には二ナの薄紅色の唇がある。形のいいそれが小さく開いて先の台詞みらいを繋いだ。

「『星の屑』が成功した事によつて恐らく世界は近い内に大きな動きを見せるでしょう、ガトーの予言、デラーズの思惑の通りに。そして」

そこに二ナやキースやモウラが必死になつてオークリーの隊員達を鍛えている理由がある事をマークスははっきりと理解した。一年戦争が終わつて仮初の平和の中で短い春を謳歌していた彼らがガトーの襲来によつて巻き込まれた戦争と言う名の非日常の世界。其れが再び起こる可能性があると示唆する二ナの言葉。

「そして、彼は自分の望みどおりに、コウの目の前で命を落した。」

その言葉が語る真実にマークスは目を見張つた。ガトーの最期の望み、それは。

「ガトーはコウの中に『種を撒く』事に成功した。自分と同じ世界へとコウを連れて行くための。」

コクピットを埋め尽くす光。集められた太陽の輝きは集約される光の粒子を衝撃波に代えて天空を切り裂く。絶対的な死を予感させる圧倒的な力の前にコウの体は全ての命令を拒絶した。自分の半身が今、自分の機体を拘束する敵にもぎ取られてしまったと言う事も其れは一つの原因なのかも知れない、コウの全ては確かにその瞬間、

生存に対する執着を棄てて、死を受け入れる事に躊躇いを持たなかった。だが全ての計器の数値すら読み取れなくなった異空間に、高圧的な男の声が轟いた。指揮官特有の厳格な威厳を持ったその声は一瞬にしてコウを死の顎から引きずり出す。

「スロツトルを開ける、コウ・ウラキッ！」

怒鳴り声に誘われて反射的に動く左腕が握ったレバーを全開位置に叩き込む。同時に頭上で鳴り響く巨大なモビルアーマーの絶叫。

デンドロビウムを襲っていた致死性の痙攣は猛烈な慣性へと姿を変えて決着の付いた二機の機体を天頂方向へと押し上げた。

「ガトーっ！」

「未熟者めが、此処で諦める事などっ、」

光の何処からか流れて来るガトーの罵声が休眠寸前のコウの意識を現界へと辛うじて留める。だが死に抗おうとするデンドロビウムとノイエ・ツィールに叩き付けられたソーラーシステムの咆哮はまるで其れまでの鬱憤を晴らすかのように二つの機体を蹂躪した。戯れる二羽の蝶が縋り付いた長大なメガビーム砲は溶解しながら吹き飛ばされた、ノイエに立ち向かう為に振り翳された大剣クレイモアを掴んだクローアームは基部から捻じ切られて粉々に砕け散った、唯一生き残った兵装コンテナは内部に残っていた弾薬と共に爆散した拳句にデンドロビウムのメインスラスタを巻き添えにする。

「この私が許さんっ！」

周波数と言う数値だけで繋がった無線機を通して耳元で響く怒声がまるでノイエ・ツィールの叫びの様にコウには聞こえる。死の間際に追い込まれながら尚も生へ手を伸ばす彼らの意思は長く伸びた炎と化し、現存する戦艦の推力を遥かに凌駕して光の奔流を掻き分ける。

デンドロビウムの損害状況を目視するガトーは爆散して分離したコンテナがノイエの前面装甲板を吹き飛ばしたのを確認した瞬間に姿勢制御用のモーターを動かしてデンドロビウムと自分との位置を入れ替えた。ソーラーシステムから放たれる神火は盾となったノイ

工の背面を容赦なく焼き焦がし始める。機体表面の温度を示すセンサーがエラー表示を示したまま動かなくなり、人類に計測できる限界の数値を表示した後に息絶える。

融解を始める機体の背面、デンドロビウムをロックする四本のマニピュレーターが機能不全を起こして停止する。それでも宇宙を疾駆する巨大なジオンの紋章はその手に抱えた微かな希望を救うべく、雄叫びを上げて光の大河を目的地に目掛けて突き進む。

光の緞帳を抉じ開けようとする両肩のブーストバイндаが耐熱限界を超えて爆発した。減少の一步を辿る推進力にノイエがその意思を全うする事無く沈もうとしたその時、歯を食い縛って尚も生への望みを捨てなかったガトーの視界に一際大きな残骸が映った。視認したガトーの手が反射的に火気管制を呼び出して、背面装甲の影で未だに機能を残していた左手を迷う事無く撃ち出した。鋭く窄められたクローアームは光に翻弄されながらもガトーの導きに応じてその残骸に突き刺さり、その爪を残骸の内部で大きく開いてロックする。掌のメガ粒子砲にミノフスキー粒子を供給する為のフレキシブルケーブルは光圧に耐え切れずに離断した。

「間に合えっ！」

祈りを叫んでクローアームの収納をノイエに命じる。辛うじて繋がっている基部のモーターが猛烈な勢いで命綱となつた有線ケーブルを巻き戻した。機体に残つた全ての力を振り絞って巻き取られる一本のロープに掴まつたノイエと彼が抱えた最期の希望は次々に部品を光の粒へと変えながら、しかし全てを奪われる事無くその濁流から無明の岸へと辿り着いた。

自分の得た生と運命の悪戯に感謝をしながら眼下を荒れ狂う光の川を見つめて無念の吐息を漏らすガトー。巨大な残骸の影に隠れたまま光の河を席卷する閃光の行進は其処で生み出される新たな死者を意味している。

互いの主張を後背に立てて雌雄を決する事すら奪われて無常な死を遂げねばならない兵士の無念は如何ばかりか、とその光を憎悪の

目で睨みながら思いを馳せる。彼らもまた『操りし者共』の被害者なのだ。其れを世界の影に隠れてほくそ笑む彼らの見えない顔を思い浮かべて、怒りがこみ上げる。

そして自分にも訪れようとしている斜陽の時をその身に感じながら。

既に宇宙に漂う自分の手足は傷だらけで満足に動かす事も叶わない。自分の運命が自分の全てを授けようとした好敵手の手を借りて、実は自らが立ち向かおうとした大きな闇によって捉えられてしまった事に幾許かの無念を感じるガトー。残り少なくなつた僅かな時間で成し遂げられる物はあまりにも少なく、そして無意味な物なのかも知れない。例え運良く生き永らえたとして。

悔恨を繰り返すガトーの鳶色の瞳が光の途絶えた宇宙へと向けられて。最後の救いを求めて指し伸ばした左手が刺さつたまま何事も無かつたかの様に宙域を漂う巨大な残骸が目に留まる。穏やかな輝きを取り戻した太陽光が微かな鎮魂曲を奏でて揺らすその残骸を埋め尽くした色彩は見紛う事無き鮮やかな赤。偶然ではない何らかの意思の介在した邂逅を認識したガトーがその残骸の正体をもう一度、瞬きを繰り返しながら確認して震える声で呟いた。

「またしてもこの命救われました…… ありがとうございます、閣下。」

元ジオンの将兵に賞賛と畏怖を持ってグワデンと呼ばれたその戦艦は光嵐の残滓を受けてゆっくりと動いた。奇跡的にガトー達を死より救い出した有線ケーブルは最後の役目を終えて弾け飛ぶ。離れていくグワデンのシルエットを穏やかに眺めながら、ガトーは裏切り者によって失なわれてしまった、今は亡き面影に向かって呟いた。「行け、と申されますか、閣下。…… 分かりました。閣下の望みのままに。」

ガトーは一つ、小さな溜息を吐くと死に掛けたメインカメラの淵に映る白い巨体に目を遣つた。全ての機関を停止したまま眠り続けるデンドロビウムを繋ぎ止めていた四本のアームを爆砕ボルトでパ



ージして、死者の墓地へと解き放つ。無重力下で加わった慣性によって緩やかに漂うその姿を見送りながら、もう一人のアナベル・ガトーが力強く宣言した。

「コウ・ウラキ。私の勝ちだ。」

勝ち名乗りを上げるガトーの足元に赤い液体が滲み出す。彼らの陰謀は二機の機体を飲み込む事は出来なかったがその正体を知ろうとする不倶戴天の、其れもデラーズ亡き後の要となる存在の命に正確に届きつつあった。激しい衝撃が加えられた事でガトーの肉体に空けられた銃創は内包した血管の断裂部分を刺激して彼の命を垂れ流す。霞んでいく意識と失われる手足の力を自覚して尚、眼下で恐らく『無事に』意識を失っているであろう『未来』に向かつて声を掛ける。

「すまん、貴様に討たれてやる事はもう出来んが」

ガトーの顔に笑みが毀れた。こんな気持ちで笑う事はいつ以来なのだろう、と思う。二ナと月にいた頃か？ いや違う、もっと昔の事だろう。其れは多分自分がまだ幼い頃に友人達と過ごしたあの頃まで遡る。

心から嬉しそうな顔で、声でガトーが言った。

「いい戦いだった。心から礼を言う。」

意を決したガトーの手がゆっくりと動いてノイエのアポジを起動させた。吐息の様な炎を断続的に漏らして機体を翻す『新たな希望』

まるであの日の二ナと別れた時と同じ様に、ガトーはその視線を隠れていくデンドロビウムの機体に投げ掛けながら、

「いつか、私を追って来い。……この星の海のどこかで、私は」

ガトーが両足に渾身の力を込めた。生き残ったバーニアが長い炎を吐き出して傷ついた巨体を約束された敗者の地へと誘う。ガトーの目が遙か彼方に瞬く星星の輝きをしっかりと見つめながら、そしてその口が歓喜に溢れて最期の言葉を躍らせた。

「『貴官』を、待っている。」

そこに生み出された束の間の沈黙は話に耳を傾け続けるマークスとアデリアに対して、これ以降の話を聴く事の覚悟を要求しているのかも知れなかった。口を噤んだまま静かに二人の顔を交互に眺めた二ナがその表情を見定めた後に小さな溜息を吐いて、再び重い口を開いた。

「ガトーが死ぬのを私は救助の為に戦闘宙域外縁部に待機していたアクシズの艦の中で聴き届けたわ。連邦軍の退去勧告を受けて離脱する艦内に流れたガトーの最期の叫び声を忘れた事はない。でも私にはその声がコウを呼ぶ声に聞こえた。……今でも忘れられない。」

二ナの目は蒼く輝きながらその焦点をこの世界に結んではいない心の奥底で封印されたままの記憶の宝箱を混ぜ返して中身を整理しながら、次々と取り出される過去に傷付きながらそれでも並べ続けているその姿はあまりにも痛々しい。全てを取り出したその中にかの神話に告がれるパンドラのような奇跡が待ち受けていると分かっているのならまだ救われる。だが現実には既に答えは出ている。話の続きから現在に至るまで二ナに与えられた奇跡は無く、彼女は形骸と化した思い出の匣を抱えたまま親を亡くした孤児の様に小さく蹲っているだけだ。

「私はコウの元へ戻らなければならなかった。ガトーが帰還の機会を棒に振ってコウと戦ったと言う事を、私をその船まで運んでくれたデラーズフリートの生き残りの兵士から聞いた時に、私はガトーが遂に自分の望みを叶えたのだと悟ったわ。……彼の言っていた全ての条件が揃ったと分かった以上、もう私に選択の余地はなかった。コウの元に戻って彼が二度と戦いに身を投じない様にしなければならぬ。ガトーの目論見だけは阻止しなくてはならないと決心してアルビオンへと帰艦したわ。」

「もし、ウラキ伍長が死んでいたら？ 二ナさんに裏切られたと思

い込んでそのままコロニーに残っていたとしたら、」

「そのままシャトルで大気圏に突入するつもりだった。あの場所に集った三人がこの場所で全て召されてしまえば、神様の気紛れもそう悪い物じゃない、コウの生まれた星に墜ちて死ねるのなら、私はきつとコウの元に行ける。……でもコウは生きていた。ガトーが自分の機体を盾にしてデンドロビウムをソーラーシステムからの直撃を回避してくれたお陰で。」

「ガトーが、自分の機体で……いや、と言うか友軍に向かってソーラーシステムを使ったって……フレンドリー・ファイア誤射？」  
「悔し紛れよつ。あたしならそうする。」

マークスの問い掛けに即座に声を返したのは何かに沸々と怒りを燃やして背後に立っているアテリアだった。ここにいる三人の誰もがその回答の正誤を知る事は出来ないのだが、咄嗟に口を付いて出たアテリアの回答は実は正着だった。コロニー迎撃の指揮を執ったバスク・オムは自分の作戦を台無しにされた腹いせをコウとガトーにぶつけたのだ、アテリアの吐いた毒そのままに。

「でもコウはアルビオンにはいなかった。第一地球軌道艦隊の旗艦に向かって発砲した事でステイメンごと拿捕されたコウはそのままジャブローに収監されたわ。軍事裁判によってコウに与えられた刑は懲役一年の禁固刑、私はその間に様々なコネを使って彼が釈放後に配属されそうな場所を探った。」

「それで辿り着いた場所がこのオークリーだった。」  
マークスの言葉に二ナが力なく頷いた。

「キースやモウラと立場の違う民間人の私が、彼らと同じ様にテイタインズから供出された宣誓書のサインを拒否すればどうなるかと言うのは一つの賭けだった。証拠を隠蔽する為に民間人の私だけが暗殺されるかも知れない可能性も考えた。でも最期までアルビオンに乗っていた  
戦闘艦の乗組員として宙域に留まっていた

事で軍属徴用の条件を満たしていた私は、キースやモウラと同じ条件でこのオークリーに配属される事が決まったわ。」

「機密事項の守秘義務、ですか。軍人が其れを破れば間違い無く重罪だ。軍法会議に掛けられて良くて終身禁固、悪ければ銃殺刑。」

今現在二ナが自分達に対して行っている行為こそが正に其れに当たる。その事実二ナが語る秘密を背負わされる以上の重みを肩に覚えるマークス。

「その条件を飲む事で私はこのオークリーに赴任する事が出来た。そして何時か刑期を終えたコウがオークリーに着任すると言う事も確信していたわ。彼がそんな宣誓書にサインをする筈が無いと信じていたから。」

戦場で分かれた絆を手繰り寄せる為に二ナがどれだけの苦労をしたかを自分の未熟な想像力で推し量る事は、マークスには躊躇われた。

昨日までの一民間人がある日突然軍へと編入され、様々な制約と理不尽な約束事の遵守を強要されると言う事はどれだけのストレスが掛かる事か。今まで彼女が属していた世界との全ての縁を切られ、そして抱えた不安と疵に苛まれながら逃げ出す事の出来ない天井の無い監獄に押し込まれる事が普通の人間に耐えられる類の物だとは考えにくい。だが、自分の目の前で過去を述懐する、尊敬すべき技術主任は其れをやつてのけて現在に至っているのだ。愛する者の安否を知りたいが一心で。

改めて二ナの姿を眺めながらマークスは思う。この線の細い女性の何処にそんな力が隠されているのか、と。

「…… アナハイムのガンダム計画は其れを推進した専務の、連邦軍に対する裏切り行為の発覚によって抹消される事が決定したわ。彼は連邦軍に協力姿勢をとる裏でデラーズフリートにも物資を供給していた。専務はその責任を取って自殺してしまったから本当の真相は闇の中へと葬られたけれど、その事実は逆にアナハイムと言う企業に対する連邦軍の不審を生んだ。連邦軍は当面のアナハイムとの取引を凍結し、該当する取引の中には次期主力モビルスーツ開発計画も含まれていた。…… 私が命懸けで見届けた、私のガンダ

ムはその時に終わった。その機体が存在した事も含めて全てのデータを抹消されたのよ。跡形も無く。」

「全てが、抹消……………？」

二ナの言葉を聞いたマークスは思わず彼女の背後のモニターを見た。全てを抹消されたモバイルスーツの、其れも起動する為の鍵となるディスクが何故ここにあるのか。もしデータを消すと言うのならこれは真つ先に消去されるべき対象となる筈だ。それが何故。

マークスの視線の動きに気付いた二ナが問わず語りにマークスの疑問に答えた。

「このディスクは、処刑された元アルビオンの艦長のシナプス大佐の遺品の中から出てきた物…………… どういう経緯でシナプス艦長がこのディスクを手に入れたのかは分からない。でも遺族の方が艦長の遺言の通りに軍の検閲を避ける為にわざわざ私を尋ねて来て渡してくれたのよ、見つければ自分達も拘束される事を省みずに。」

唯一つ、奇跡的に残った二ナの過去。其れがこんな傷だらけの一枚の物に収められて。だが其れは纏わる全ての者の運命を支配する十戒の石版と同じ意味を持つ。

「このディスクを手に入れた直ぐ後に、コウは私の元へ帰って来た。…………… でも怖かった。どんな顔をしてコウに会えばいいのか分からなかった。でも、誤解されても嫌われても私達には少なくとも未来へと歩む権利だけは与えられたと思っただ。私に与えられたその時間を私はコウの為に捧げるつもりで生きるつもりだった。…………… 私は彼を決して宇宙には行かせない一生を彼の元で、彼と共に暮らそうと心に誓って彼を迎えに行っただ。」

モウラの無言が二ナの背中を押す。ジープのシートを滑り降りた彼女の体はいつもと違う日常を迎えたオークリーの大地に降り立った。

地面に下ろした足がふらつく、怯える心を隠す様に笑顔を作って

彼女が求め続けた掛け替えのない存在の帰還を歓迎する為にその足を踏み出そうとして。

陽炎の先で輪郭を歪めながら二ナを見つめるその男の顔に笑顔は無かった。ただ何かに戸惑う様に空ろな視線を歩み寄り影に投げ掛けたまま立ち竦むコウに向かって、二ナは言わなければならぬ言葉告げる。

「お帰りなさい、コウ。」

取り戻す事の出来た無二の存在を今すぐに抱きしめたいと心から二ナは思う。だが湧き上がる欲望にも似たその願いに答える力は彼女の四肢に存在しなかった。駆け出そうという意思は体の何処かで喪失したまま、現実を確かめようと指し伸ばした両手は上がらない。願いを成し遂げられないままたとぼとぼと歩いてコウとの距離を縮める二ナに向かって、やっとコウ・ウラキと言う男は口を開こうとする。言葉を生み出す予備動作の息継ぎを耳にただけで二ナの足が恐怖で止まりそうになる。次の瞬間にコウの口を吐いて出る言葉の意味を推測しながら負のイメージしか思い浮かばない二ナの耳に届いた、コウの言葉。

「やあ、二ナ。」

あれほど。聴き慣れてきた筈の声は他人。その声音のどこか重い響きに気が付いた時に初めて二ナの目はコウの輪郭をはっきりと捉える事が出来た。

ほんの三ヶ月離れていただけで人間はこんなに変わってしまうものなのか、と。キースやモウラには分からないコウの変化は二ナだけの物だった。浮かべた笑顔にあの頃の朗らかさはなく、自分に向けた視線の中にあの頃の暖かさは無い。以前のコウ・ウラキと言う人間から自分が愛した全てを切り離れた存在、それが今二ナの目の前に立つ男だった。

「…………… どうしてここに？ ここは連邦軍の基地、民間人の君がいる所じゃない。」

問い詰める様なコウの質問と共に一陣の風が駆け抜ける。道の両

側で朽ち折れた麦畑が乾いた音を立ててざわめく。コロニーの落着  
によって発生した熱でからからに乾いた麦の穂鳴りはまるで二ナを  
攻め立てる合唱シンコフレコールの様に彼女の周囲を取り囲んだ。二ナの声が彼らの  
怨嗟に塗れながらコウの元へと届けられる。

「アナハイムは首になつたわ。今はここで軍属として技術部に勤務  
しているの。」

体の奥で破裂しそうななつた感情全てを必死の力で押し隠して、  
そう告げるのが精一杯だった。

二ナを見つめるコウの表情には幾重にも重ねられた複雑な感情が  
交差する。怒りと疑いと蔑みと悲しみと、そしてほんの僅かに見え  
る喜びと。最後にコウの表情を掠めた二ナの求めて止まないその思  
いは、しかしすぐさま他の思いに覆い隠されてあつという間に消滅  
した。コウの瞼が何かを隠す様に静かに閉じられて、そして再び開  
く。

「そうか、無事でよかった。」

その言葉に隠された二人だけの秘密をコウは封印して笑顔を浮か  
べた。理性と言う名の嘘が模ったコウの表情をじつと見つめて、そ  
して二ナにも同じ瞬間が訪れる。笑う事では取り繕えないお互い  
の心は今二人が立つ僅かな距離を深い溝で隔てて繋ぎ止めたいその  
手を断ち切る。二ナの指先から何かが毀れて離れていく錯覚が残る。  
いや、其れは間違いじゃない、いま、確かに何かが。

「キースとモウラもここにいるのか……不思議だな、あれから  
まだ半年しか経ってないのに何年も前の出来事みたいだ。」

コウが彼らの背後に立つゲルググを振り返つて呟いた。コクピッ  
トから脱け出したキースはハッチの縁にある懸垂用ケーブルを使つ  
て地上へと降りようとして、いまだにその動かし方が分からずにも  
がいている。いつまで経つても不器用な、だが地球軌道を席卷した  
あの豪火の中を生き延びた昔と変わらない親友の姿に安堵の笑みを  
浮かべるコウ。

「ねえ、コウ。」

二ナがコウに向かつて尋ねた。

「また、モビルスーツに乗るつもり？」

キースの行方を追いかけていたコウが驚いた様に二ナを見た。答えを求めてコウの顔を見つめる二ナの瞳を直視できずに、コウは僅かに視線を逸らして逆に二ナに尋ねた。

「何故、そんな事を聞くんだ？」

理由を問われた二ナが思わず顔を伏せた。まるで二ナの質問を非難する様に非干渉を求めるコウの理由はただ一つ。其れはコウの心中に自分の存在の占める範囲が小さくなっているという証拠。そして其れはキースやモウラの名前が記された友人帳からも除外されたという意味。コウを護る為に留まらなければならぬ立場にいなければならない自分がとうの昔にその権利を失ってしまった事を理解した二ナの肩が小さく震える。

コウがそんな二ナの姿をじつと見ながら、ズボンのポケットを弄つてある物を取り出して俯いたまま佇んでいる二ナの手に渡した。

其れは所々メッキの剥げたウイングマークだった。モビルスーツパイロットである事を証明する小さな金属は表面に残った残り少ない金の場所に日の光を与えられて二ナの目を眩ませる。傷だらけになったコウの証に目を細める二ナに向かつてコウが静かに言った。

「君が付けてくれないか？ 二ナ。」

「えっ？」

コウの依頼に思わず二ナが顔を上げた。目の中に映ったコウの顔は穏やかに笑っている。

「君の手で付けて欲しいんだ、もし君に何処かで出会った時にはそうしよう決めていた。」

其れは例え敵味方に分かれていたとしても。言外に語る決意に絆ほだされた二ナの手が微かに震えながらウイングマークをコウの胸元へと持っていく。ストッパーを外して剥き出しになったピンを胸ポケットの折り返しに差し込み、貫通したピンの先が体を傷つけない様に再びストッパーで固定する。



大きく広げられた十二枚の小さな羽根は其れの示す意味をコウに代わって二ナに主張した。

「また、乗るよ。俺は。」

ポツリと語るコウの声を二ナは一生忘れないと思った。胸元からそのままコウの目へと移動する二ナの虹彩の先に、何もかも吸い込んでしまいそうなコウの黒い瞳があった。

「その為に俺は軍に還って来たんだ。もう一度、モビルスーツに乗る為に。」

揺ぎ無い決意は言葉だけではなくコウの全てから滲み出して。その言葉の果てにあるガトーの予言した未来の暗闇に向かって歩く決心をしたコウ。

そして二ナは決意した。

彼を地上に繋ぎ止める為の『足枷』<sup>ドローム</sup>になろうと。

「コウがオークリーに赴任してから暫くの間は平和な日々が続いた。尤も『平和』と言うのは私にとってと言うだけの話で、コウやキースにとっては陸戦隊員とのいざこざを繰り返す毎日だった。活躍の舞台を奪われた拳句にこんな基地に閉じ込められた陸軍の兵士がその元凶のモビルスーツ部隊に対して嫌がらせをするという事は日常茶飯事だった。モビルスーツパイロットは貴方達が此処に来るまで一人もいなかったけれど、暴行を受けた整備士が医務室に担ぎこまれる度にコウは陸戦隊の兵舎に向いていつて敵を執る、そんな事の繰り返しだった。最初は少尉だった階級も降格に継ぐ降格であったという間に伍長まで下がった。でもね、」

今までの話の間で唯一その瞬間だけ、二ナの声音が暖かく変化した。恐らく二ナにとってその記憶だけが唯一安らいだ時間だったのだらう。

「少なくともその間、コウがモビルスーツに乗る事だけは避けられた。私は禁錮を終えて営倉から釈放されるコウを何度も何度も迎えに行ったわ。私にとってはそんな事恥ずかしい事でも何でもない。」

片手を上げて照れ臭そうに出てくるコウを笑って迎えてあげられる自分がまた彼の傍にいる、形だけでも其れが叶えられた事が嬉しかった。そしてこのままコウが私と同じ時間を過ごして、もう一度あの日の二人に戻れたら。…… ううん、戻れないかも知れない、でもあの日の様になれたらと願っていた。」

「でも、そうはならなかった？」

全てを過去形で語る二ナの言葉は逆説的にマークスには取れる。

二ナの心境を察して短い言葉で尋ねるマークスの言葉に小さく、諦観を浮かべて頷く二ナ。

「彼は…… モビルスーツに乗れなくなった鬱憤を…… 陸戦隊員とのいざこざで晴らしていたのよ。」

苦しげに告白する二ナの表情はあつという間に暗闇を纏っていた。声や息すらも途切れそうになる重圧の中で二ナはなおも言葉を繋いだ。

「コウは…… ウラキ伍長は私や皆に内緒でドクのカウンセリングを受けていた。彼の体は既にモビルスーツに乗れない体になっていたのよ。」

二ナの目が硬く閉じられた。目尻から零れ落ちる一筋の涙が話を聞く二人に動揺と事態の深刻さを伺わせる。

「そう、全て…… 私のせいっ！」

悲しみを絡めて吐き出される自虐の叫びに静寂は奪われた。微かな嗚咽が流れる仄明るい部屋の中に漂う焦燥と悲観と悔恨が集った三人から真実の果実を取り上げる。

袋小路に迷い込んだその部屋の空気に飲み込まれる三人の意識を集める様に、ドアの辺りから遠慮がちな声が忍び込んで来たのはその時だった。

「…… その続きは、儂の方から話そう。」

突然の声の侵入に驚いて、息を詰まらせて顔を上げる三人。思い思いの動きで確認する視線の先にあるドアの隙間がゆっくりと開いて、だらしなく白衣を引っ掛けた初老の男が薬袋を片手に姿を現し

た。

「すまん、そういうつもりじゃなかったんじゃが……しかし  
其処から先の事は儂の方から説明した方が、早いじゃろう。」

モラレスはそう言うした後手にゆっくりと、しかし確実に二十の部  
屋の扉を閉めた。

三人の姿を視界に納めたモラレスが心の中で溜息を吐いたのはほんの僅かな後ろめたさ故の事だった。苦楽を長く共にしたヘンケンやウェブナーにすらひた隠しにして来た事実を、真実を求めた彼らに先んじてここに集まった三人に話す事になろうとは。

ヘンケンやウェブナーに提示したデータに現れる『オピオイドによる意識障害』と言う症状は嘘ではない。だがモラレスはコウがモバイルスーツに乗れない理由をその前段階に発生する症状に端を発していると言う事を二人には告げなかった。コウから相談されたカウンセリングの内容を他人に漏らすと言う事は自身の倫理にも反するし、何よりその時のコウの憔悴振りを知るモラレスが彼を裏切る事など有り得なかった。モラレスがその事を二人に向かって言わなかったと言うのはただ単に医師としての仁義に基づいての行動ではあったのだが、ヘンケンが別れ際に吐いた捨て台詞紛いの愚痴は偶然にも其れを見抜いていたと言えよう。

「まあ、僕も軍医の端くれじゃ。医者には軍以上に個人情報に対する『守秘義務』という物があつてな、故にカウンセリングと言う治療も任されるといふ訳なんじゃが」

モラレスは其処まで話すとちらりと二ナの顔色を伺う。視線が向けられた事を知る二ナは、果してモラレスの方を見なかった。空ろな視線を床に落とし、危いまでに感情の鬨ぎ合うその横顔をモラレスの目に与えたまま。モラレスは二ナの無言での促しを受けて言葉を続ける事に決めた。

「結論から言おう。コウ・ウラキ伍長はモバイルスーツに対して猛烈な拒絶反応を示す、其れが彼がモバイルスーツに乗れない本当の理由じゃ。」

告白の端を切ったモラレスがゆっくりと二ナの元へと近寄る。モラレスの言葉に対しても一切の反応を拒絶する二ナの脇に立ち、手

の中の薬袋をデスクの上にそつと置いてマークスの方へと振り返った。白髪交じりの眉毛が微かに動いて二人の顔を交互に眺める。

「彼の欲求がモビルスーツの搭乗を望んでいると言う部分は全く揺らいではおらん、じゃが肉体は其れを拒否するんじゃないよ。ウラキ伍長の場合は嘔吐反射とそれに伴う全身の運動機能障害。……まともにモビルスーツなんぞ動かせる状態では無くなる。」

「い、いやドク。其れは変です。」

淡々とコウの症状を語るモラレスに向かってマークスが否定の声を上げた。小さな抗議を受けたモラレスの眉尻がピクリと上がる。

「だって、ウラキ伍長は予備役登録されてるんでしょう？ 予備役登録の更新には年に一度の訓練と健康診断が義務付けられている筈です。モビルスーツパイロットだったら当然演習も内容に含まれている訳ですから。」

「シミュレーターなの。……ではマークス、お前さんもアテリアも勿論シミュレーターに乗った事はあるとは思うが、正直あれと現実と比較してどう思った？ いつもの実戦演習と同じ様な感覚で操縦する事が出来たかな？ 違うじやろう。」

モラレスの言葉が凶星である事を証明するマークスの表情。言葉は途中で意味を失い、綴ろうとした口だけが空しく息を嚙む。

「機械の振動も無く音も無く体感する重力の慣性もない、所詮は数値によって組み立てられた紛い物じゃ。仮想空間の中でがちゃがちゃペダルやら何やらを弄った所でそれが現実の手応えをパイロットに与える事は出来ん、それ故ウラキ伍長は訓練を満了して未だに予備役に登録できるんじゃない。じゃが訓練を満了した事によって得られたデータによってウラキ伍長の体の変化にも気付く事が出来たんじやが　　二ナさん？」

上背の小さいモラレスの顔の横にデスクに腰掛けた二ナの顔がある。モラレスは顔の作りに似合わぬ大きな眼の中の黒目だけをぎよろりと二ナに向けて尋ねた。

「さっきあんたが言った『PI4キナーゼ・タイプ？』と言う薬品

のデータは手元に残つたらんのか？ その構成式だけでも分かれば治療法の手掛かりが見出せるんじゃないが、」

モラレスの問い掛けに二ナが思わず顔を上げた。思わぬ所から差し出された救いの手に微かな可能性を見出して、今まで彼女を支配していた絶望が消失する。だがそれも一瞬の光芒に過ぎなかった。手の中にある現実の重みはそれだけで二ナの顔色を元の場所へと引き戻した。

「申し訳ありません、その時のデータの全てはテイターズに消去されました。私もその薬品が三号機に積まれていたと言う事と試薬の名前は偶然知っただけで。」

「『偶然』、ね。…… まあええ。」

そんな訳無かるう、と意味深な視線を二ナに向けたモラレスだったがそれ以上の追求を諦めて、会話の再開を待つマークスを見上げて言った。

「ではしようがない。今から儂が話す事はウラキ伍長を蝕んでいる不治の病に関してと言う事になる。その薬品の詳しい組成が分からん以上治療法は無い。…… 二ナ君も辛いとは思うが聴いて置いてくれ。」

正対するマークスの喉がごくりと鳴る。その場に佇む二人の聴衆の表情を確認したモラレスは仮定による講義の授業のチャイムを鳴らした。

「恐らくその薬品の成分の元になった『酵素』の名前からでしかその正体を推測する事しかできんのじゃが多分それは『PI-3キナーゼ』と呼ばれる、細胞膜のタンパク質を利用して神経伝達反応を促進させる既存の酵素の発展系じゃと思われる。元々『PI-3キナーゼ』と言う物は癌細胞の増殖に深い関わりのある物で、既にその存在は人類が最も愚かで豊かであった二十世紀と言う大昔から知られておる。」

仮定の話とは言いながらモラレスの口調には揺ぎ無い自信が感じられる。それはモラレスにとっては感覚ではなく確実に捉える事の

出来た未知の物質の正体に対する確信による物だった。コウのデータを密かに軍のコンピューターに照らし合わせても未解答や解析不能の答えしか得られなかったモラレスが手にする事の出来た実感。

「人間の体と言う物は未だに完全な解析が成されておらん巨大な化学プラントじゃ。人を死に至らしめる異質な新生物の中にも人体に有益な化学物質が発生する事もままある。そこに着眼した奴らの慧眼を医に携わる者としては褒めにやあなんのじゃが、それが戦後の兵士の未来にまで影響を及ぼすと言うのなら話は別じゃ。大昔の戦争の時に戦闘薬として使われた『麻薬』とポジションには大差ないわい。…… 恐ろしい事にそれらとウラキ伍長に使われた『PI4キナーゼ・タイプ?』には大きな違いが幾つかある。それを使ったからと言ってウラキ伍長が世間に不適格な人間になつていくかというところではないし、実生活にはなんら支障の無い状態で過ごす事が出来る。…… 遣り切れん事ではあるが、の。」

モラレスの表情に微妙な影が浮かんだ。医に携わる者として人間の機能を激変させる様な薬が実際に存在する事に一抹の怒りを覚える。だが同時にそれを創る事によって人の新たな可能性を見出せるかも知れないと言う所に人の御しきれない性を覚える。

人の為に役立つ薬と言う物はいつでも人の命を蔑ろにして生まれて来た。手術に欠かせない麻酔薬一つにしても最初にそれを創つた日本人は自分の母と妻を犠牲にして実用化に漕ぎ着けたのだ。医学の繁栄とはその足元に打ち捨てられた死者の積み石を踏み躪つた上に立つ楼閣であると言う事をモラレスは十分に理解している。

「じゃがウラキ伍長のシミュレーションデータを分析すると、この如何にも有益な見せ掛けを誇る酵素の持つ危険性ははっきりと浮き彫りになる。『PI4キナーゼ・タイプ?』の特徴は体内麻薬、特にアドレナリンに対して優先的に反応すると言う所じゃ。副腎皮質から血流に乗って脳に到達したアドレナリンはノルアドレナリン受容体に取り込まれてストレスに対する臨戦態勢を肉体に要求する。その際にこの薬は連鎖反応を誘発して全神経細胞を賦活化させる役

割を担うんじや。人の限界を遙かに超える反応速度はそうして生まれる。そしてそれに伴いもう一つの変化が精神面に現れる。」

「もう一つの変化？」

反射的に尋ねたマークスの言葉。モラレスの言葉に何かを思い当たった二ナの目が大きく開いて初老の教授の顔を見た。

「神経伝達速度を上げる酵素だと言う事はそれは人の脳内にあるA<sup>テン</sup>10神経系にも大きく影響を与える筈じや。精神神経と言われるA10神経に浸潤して『臨戦態勢を指示する』アドレナリン。脳内の麻薬レセプターに取り込まれたそれが発する命令は『殺人衝動』に近い意味を持つ物になる。実際演習中にウラキ伍長に取り付けられた脳波計もそれを証明しておる。」

アイランド・イーズの中でコウが採った、人が変わった様な立ち振る舞いを。二ナの記憶はあの時のコウの顔を思い出す。

鬼の形相で立ち尽くしたコウの手に握り締められた拳銃は何の良心の呵責も無くガトーの脇腹を撃ち抜いた。その現場に立ち会った二ナは長く裏切りの戦場にその身と心を晒されたコウが『そういう行動』に何の斟酌も持たなくなった故の結果だと、今の今まで信じていた。

だが、それは間違いだったのか。あれは彼の体内に打ち込まれた試薬の副産物によって成しえた所業だと

「戦いに身を投ずるほど。命の危険を感じるほどその酵素はウラキ伍長の体を殺意の塊に変えていく。彼がその戦場を離脱する

生死に関わらず　　まで、な。一年戦争の末期に対特殊能力兵士用のプログラムで似た様なシステムが開発されていたと言う噂を耳に挟んだ事はあるが、これはそんな生易しいもんじやないのう。モビルスーツの心を司る一番重要な部品に狂戦士の能力を与える

…… 『画期的な戦闘薬』と言う事になる。そして画期的と言うからにはもう一つ大きな特徴がある。それはこの試薬はたった一回の使用でその効果を持続する事が出来ると言う点じや。」

その事実のコウのシミュレーターが残したデータによって実証さ



れている。彼の体内に残ったアンフェタミンに似た麻薬組成。使用から三年の時を経た現在になっても彼の体内で製造されているそれがモラレスの仮説を強固に裏付けた。

「問題はこれの特性が『薬品』ではなく『酵素』であると言う事じや。二ナさんから名前を聞いたお陰で儂の推測が間違っではない事があった。…… 化学合成された薬品とは違って『酵素』と言う物は元々人の体内に馴染み易い。恐らくこの薬はウラキ伍長の脳内の何処かに残留し続け、未だに任務遂行の為の準備を整えておるんじゃない。彼にその機会が訪れれば何時でもその能力をフルに発揮できる様に。」

「つまり」  
マークスが顎に手を当てて小首を傾げる。モラレスから得た情報を頼りに自分なりに理解の出来る理論を構築してそれを口にした。

「元々人の体内に存在しなかったこの酵素がこれからはウラキ伍長の体内物質の一つとして存在し続ける、と言う事ですか？ 彼がアドレナリンを分泌する様な状況に追い込まればそれはいつでもウラキ伍長に超人的な反射速度を与える、と？」

「マークスの問い掛けに小さく頷くモラレス。だがその表情には事態の深刻さを伺わせる深い皺が眉間に刻まれている。」

「先ず、現状ではなくウラキ伍長がモビルスーツに乗り続けたと仮定して話を進めよう、現状彼の体に起こっている症状を交えてな。」

…… 前回行った予備役訓練の際のシミュレーターに於いてウラキ伍長は卓越した結果を残した。彼は旧式のザクを使ってゲルググで組織された一個小隊を十分に全滅させた訳だが、その際に奇妙な反応をテレメトリー中の生体記録部分に残している。」

「え。ザクで、ゲルググ一個小隊を十分に…… 全滅？」  
自分が演習で使っている機体を即座に思い浮かべるマークス。

一年戦争末期にジオンに配備されたゲルググという機体は製造数こそ少なかった物の、全ての面に於いて優秀な機体であった。機動力、火力、汎用性に於いては連邦軍に標準配備されたジムを遙かに

凌ぐ高性能を実現している。連邦軍の上層部をして『あと三ヶ月配備が早まっていたなら戦況は逆転していた』と言わしめたその機体で構成された一個小隊をたつた十分で。それも自分達があれほど嫌っているザクで沈めたと言う事実は驚嘆に値する。

声を失うマークスに向かってやれやれと言った風情のモラレスの修正が飛んだ。

「引つかかる所は其処じゃないわい、マークス。儂が言いたいのはその後じゃ。……彼は小隊を全滅させるまでの十分間の間に少なくとも三回、全身の機能が完全に停止した事を示す『ハング・アップ(hung up)』を記録してある。不随意筋によつて行われる生理機能以外の全てが無反応になるその状態は僅か十秒程に過ぎんのじゃが、その間ウラキ伍長の意識は一切の外的要因に関しての反射を失つておる。儂はその原因が『オピオイド』と呼ばれる脳内麻薬の分泌に拠る精神の拮抗状態ラストサルベーション『最期の救い』だと睨んでおる。つまり過剰且つ長時間分泌されるアドレナリンがこの酵素と連鎖反応を起こす事で、ウラキ伍長の体は異常に傾いたそのバランスを平衡に戻す為に其れを発生させる。彼がモビルスーツに乗り続けて戦場へと向かえば間違いなくこの症状は発症して彼を死に至らしめる。物理的に彼がモビルスーツに乗る事の出来ない理由の一つが、それじゃ。」

モラレスの言葉を顔を伏せて聞いていた二ナの肩が震えた。その身震いは肩に掛かった髪にまで伝わっている。

「では、もしウラキ伍長が運良く敵を倒し続けて生き延びる事が出来たなら……此処からは酵素の名前からの推測にしかならんが、やはり同じ運命がウラキ伍長には待っていると思われる。『PI4キナーゼ・タイプ?』が『PI-3キナーゼ』を組成の発祥とする酵素だとするならば、その特性も同じ物だと考えるのが妥当じゃ。」

モラレスが傍らの二ナの顔を横目で見やった。恐らく此処からの話は二ナにとって残酷な事実を突き付ける事になるであろうとモラレスは認識している。

だが医師として身内にその症状を話さないと云う事はモラレスの倫理に反する事でもあった。数々の戦場をヘンケンと共に潜り抜けたモラレスは大勢の仲間の死を見届けてきた。彼らに対して真実を隠したまま神の導きに委ねる事の遣り切れなさを感じたモラレスは何時しか嘘を吐く事を諦めた。馬鹿正直なインフォームド・コンセントを繰り返す自分が人の死を見取る事に何の資格も無い事を承知の上で、敢えてそうし続けた。そうする事で、少なくとも彼らは死に対して向き合う事が出来ると確信しての事だった。

そう、自分の隣に立って自分の犯した罪に打ち震えている女性は、紛れも無くウラキ伍長の身内なのだ。

「『PI-3キナーゼ』と言う酵素は伝達物質を形成する際に細胞内のタンパク質を利用する。その事で神経細胞内に新たな伝達組織『セカンドメッセンジャー群』と呼ばれるネットワークを張り巡らすんじやが、その際に行われるタンパク質の『解裂』が一番の問題なんじや。」

「『解裂』？」

「簡単に言うなら細胞内のタンパク質を『喰って』自分の成長に役立てる、と言った所か。それが進むと神経伝達組織は『カスパーゼ・カスケード』と呼ばれる階層進化型神経伝達へと進化する。60兆個の細胞が端末となってその全てが脳と言つ生体コンピュータへと接続されるんじや。そうなった時ウラキ伍長の目に見える世界がどう変化するのは興味津々と言った所ではあるんじやが……」

『PI4キナーゼ・タイプ？』は恐らくその後も進化を止める事無くタンパク質を喰い続けて、其れはやがて細胞核に到達する。細胞核内の全てのタンパク質を喰い尽くされるという事は

「そんなっ！」

二ナが小さく叫んだ。恐らくコウの体に起こった変調を調べる内に二ナにもある程度の医学の知識が身に付いているのである。モラレスが震えの大きくなった二ナの肩を視界の隅に収めたまま言葉を続けた。

「アポトーシス (apoptosis)。…… PCD (Programmed cell death) と呼ばれるプログラム細胞死は本来であれば生物が活動を維持し続ける為に必要な生態維持活動なんじゃが、この酵素が戦闘員の戦闘能力を上げる為だけに開発された薬品と言つのならそんな生ぬるい事は言つたらんじやろう。『PI4キナーゼ・タイプ?』にとつての正常な活動が生体の反応速度を『どんな事をしてでも上昇させ続ける』と言う事だと仮定するならばその特性は対象の活動の維持を前提としない筈じゃ。その酵素は被験者がその生命活動を終了する最後の一瞬まで被験者の細胞を破壊して神経伝達を促進させ続ける、そう考える方が妥当じゃ。」

「予定された死を宣言した法廷に沈黙が流れる。モラレスはその静けさを傷付ける様に小さく息を吐いて徐に言つた。

「じゃが、これはあくまで仮定と推測に基づいた話じゃ。本当にその試薬が僕の想像した通りの過程を経て人を死に至らしめるとは限らん。ウラキ伍長に起こっている体の変化は現在の所では試薬による反応伝達速度の上昇と、それに伴って生成される麻薬物質による精神の拮抗状態による反応停止。ただ軍の中で医に携わる者としてはそれだけでも十分彼に対してモビルスーツパイロットの適正に不適合の烙印を押すに値する。…… それに人と言うのは自己の崩壊にとても敏感な生き物でな。恐らくウラキ伍長はモビルスーツに乗れば自分が何れは死に至るかも知れないという事を本能で嗅ぎ分けておるんじやろう。彼の拒絶反応が戦傷記憶から来る物であれば恐らく軍に戻つて来る事は無かつた。じゃが彼は再びモビルスーツに何らかの理由で乗り込もうとしておる。彼が抱える強情な意思と肉体の乖離が齎す矛盾こそが彼の拒絶反応の原因だと考えても差し支えはあるまい。」

「ではその肉体と精神の抱える矛盾がウラキ伍長の中で解決した時、彼はまたモビルスーツに乗る事が出来る、と?」

「その意味を分かつて口に出したか、マークス?」

事はそう単純ではないのだ、と凄みを増した目で語るモラレスがマークスの顔をじろりと睨む。

「彼がそう決断する事イコール、自身の死を覚悟すると言う事じゃ。…… 儂はな、そういう奴は軍にいちやいかんと思うんじゃよ。」

二ナ君の言う事が確かな物だとしたら少なからず近い将来にまた戦争が起こる。その時にこんな絶望的な運命を背負った者が戦場に立つてはいかんのじゃ。彼は確かに人の繋がりがから遠く離れた、孤立した存在なのかも知れん。じゃが人と言うのは一人で生きる事など有り得ず、彼もまた何らかの人の繋がりの中で生きている一つの存在なんじゃ。その彼が戦場へ死を前提として赴いた時にぽっかりと開いた穴は誰が埋めればいい？ 彼が二度と帰ってこないのだと言い聞かせてその穴を埋めようとする、彼の人生に連なった者達は何を代わりにそこに嵌め込んで補うと言うのか。…… そんな者は、彼の代わりなどありやせんのだ。彼と全く違うピースを嵌め込めばその違和感に苦しみ、彼と同じ様な運命を持つ者を嵌めれば再び訪れるかも知れない喪失の予感に心を痛める。彼の死と言う物は彼だけの物じゃなく、彼の周りで彼を支え続けた人の繋がりをも殺してしまう事になるんじゃ。軍医と言う者が兵士の命を救う事に第一義の使命を担うと言うのなら、帰還の当てる無死人をわざわざ戦場に送る事などあつてはならん事じゃと儂は思うし、その為の治療を施す気など無い。」

低い声で強く言い放つモラレスの言葉はその場の三人を彼自身の思想によつて縛り付けた。そしてその言葉は傍らでじつと床を見つめたまま黙り込む二ナに手向けられた物である事をマークスとアデリアは、いや恐らく二ナも理解していた。

二ナの秘めた決心を叶える為に尽くした微力な力、しかしそれはモラレスがこの基地の軍医である以上コウをモビルスーツに近づぐ事すら許さない大きな力。モラレスが言う所のコウに連なる人の繋がりの中心に二ナが存在し、彼女がそれを失つてしまえば彼女自身のあり方も変わってしまうであろうと予感して紡ぎ出されたささや

かな決心。

決してコウを死なせないと言う決意を二ナの為に暗に指し示すモラレスの顔を二ナがやっと見上げた。綺麗な蒼を澱ませていた罪と言う名の絶望はほんの少し影を潜めた様にモラレスは思う。目と目で共感する二人の姿をじつと見つめながら、眉間に皺を寄せて何かを考えていたマークスがポツリと呟いた。

「じゃあウラキ伍長はモビルスーツに乗れなくなった事に絶望して軍を離れた。だが隊長や技術主任と同じ立場であるウラキ伍長は何かの制約を受けて予備役登録と言う形でオークリーに永住する事を余儀なくされている……今の彼を取り巻く現状はそういう事になるんでしょうか？」

「私はその事実を知った時にはもう遅かった。」

マークスの洞察が正解である事を認める様に、二ナがマークスを真っ直ぐに見つめた。

「彼は私達が知らない間に基地指令に退役を申し出て、却下された代わりに出された交換条件を無条件に飲んである日突然この基地を飛び出したわ。キースにも、モウラにも、」

二ナの瞳が潤むのをマークスは見た。

「私にも、何の理由も別れの言葉さえ告げずに。」

「二ナっ！」

その知らせは突然だった。鍵の掛かっている居室のドアを蹴破る様に乱入してきたモウラがベッドの上に横たわる二ナの肩を乱暴に揺さぶる。尋常ではない目覚めを要求された二ナの意識はそれでも生来の低血圧に由来する休眠状態から浮上する事はなかった。

片手の袖で開く事を拒否し続ける瞼を刺激して僅かな時間の睡眠すら妨げる声の主を確認する為にぼやける視界を確保する。

「モウラ？ …… 一体どうしたの、こんな時間」

ぼそぼそと尋ねながらベッドの脇にある時計に目をやる。人の動きに反応して表示明度を変えるそのデジタルは明らかに緊急事態以外では世界中が眠りの底に沈んでいる時間を示している。不満を露にして二ナが言った。

「まだ四時じゃない。何事」

「コウが、いなくなっただ。」

血相を変えて二ナを見つめるモウラの只ならぬ雰囲気を認識するのに数秒。切迫した声のモウラの台詞を理解するのに数秒。貴重な時間を自らの生理現象によって損失してしまったと気が付いた二ナが深い眠りの底から一気に覚醒への梯子を駆け上がる。見開かれる二ナの目を、深い眠りの森の住人から現実へと覚醒しようとする表情を見守ったモウラが尋ねた。

「あんだ、知らない？」

モウラの問い掛けに答える事無く跳ね上がる二ナの体。あまりの勢いに怯むモウラを無視して手近にあったストラックスに足を通した途端に部屋を飛び出した。

「二ナっ！」

我に返ったモウラが壁に掛かっていたガウンを引っ手繰って二ナの後を追う。民間人の宿舎から兵舎までの長い廊下を二人の足音が

リズムを乱したまま鳴り響く。

「コウっ！」

「二ナさん!？」

背後から聞こえた二ナの叫びに思わずキースが振り返った。血相を変えて駆け込んで来た二ナがキースの体を押しつけてコウの部屋へと雪崩れ込む。張り裂けそうな心臓の鼓動と整える事すら思いも付かない息を荒げて、それらが齎す脈動を視線と焦点へと置き換えてその先にある筈の愛する者の痕跡を探した。

だが揺れ続ける二ナの視界に其れらしき物が映る事は微塵も無かった。駆け続けた体に籠った熱が感情の揺らぎの振幅を表す様に。焼き切れそうになる思いを繋ぎ止める為に繰り返される吐息の熱だけが空っぽの部屋に流れ込み。コウ・ウラキと言う名の存在の歴史を詳らかにする様々な証拠の数々が跡形も無く姿を消して。きれいに整ったベッドと机はその部屋の住人が誰であったのかと言う事すら気付かせないまま、ただ闇の中に沈んでいる。

二ナの足が空っぽの部屋へと踏み出される。その背中からキースの声が聞こえた。

「コウの奴、いなくなっちゃったんだ。俺が早朝訓練の打ち合わせで何の気無しに部屋に来て見たらもぬけの殻でさあ……あいつ、一体何処に」

「だめだ、キース。コウの奴何処にもいない。非番の連中総出で探してるけど見つからないんだ。」

無線機を片手に飛び込んできたモウラがキースに向かって声を掛けた。手にしたガウンを肩で息をする二ナの肩に羽織らせながら、まるで彫像の様に固まった二ナに向かって再び尋ねる。

「二ナ、あんた本当に何も知らない？ 昨日の晩なんかあったとか今までにどこがおかしい所があったとか。早く何とかして連れ戻さないとかのままじゃああいつ」

脱走兵の烙印。軍との契約を一方的に破棄して逃亡を図る『脱走



兵』にはその職務の特殊性から厳しい処罰が待っている。ましてや今の四人の立場は事実上軍の監視下に置かれている故に極刑は免れない。

テイターズから供出された誓約書にサインをしなかった時点で四人にはその行動に関して完全なる制約が掛けられていた。軍務以外にこの土地から離れる事　この基地にいる限りそんな事は有り得ない

は絶対に許されないと言う条項はこの基地に赴任する際に交わした契約のトップに挙げられた物だ。

モウラの問い掛けに弾かれた様に二ナが動いた。駆け出した足は机の前で止まって両手が狂った様にスチール製の引き出しを次々に開ける。願いと祈りの両方が捧げられた二ナの行為を嘲笑うかの様に手応えも無く簡単に開く冷たい引き出し。

最後に開いた引き出しが勢い余って床に落ちて大きな音を立てた。その時空っぽの様な見えた中からひらひらと床に舞い落ちた一枚の無垢な紙切れが二ナの目と注意を奪う。床に落ちたその何かを確かめる為に慌てて拾い上げて裏返す。

二ナの手が溢れ出す思いで震えた。

其れはアルビオンの艦内で撮った二ナのポートレートだった。暈けた背景は明らかにあの日のハンガー、輪郭を鮮明にして浮かび上がった自分の姿の片隅に打ち込まれた日付は間違い無くガトーを追って宇宙を彷徨っていたあの日。

非戦闘員用の朱色の繫ぎを纏った二ナは起動ディスクを片手に掲げて朗らかに笑っている。その笑顔が何に対して向けられていた物か、誰に対して向けられていたのかを二ナははっきりと思い出した。モビルスーツ機械の事以外にはいつも思春期の少年の様な態度だったコウが、初めて自分から『写真を撮らせてくれ』とせがんで残した一枚。

それはバニング大尉を失って、コンペイ島宙域に辿り着くまでのほんの僅かな時間だったと二ナの記憶が叫びを上げた。そして二ナがまだ自分に課せられた運命に気付き事無く、コウだけを見つめる事が出来た掛け替えの無い時間の狭間。

何の疑いも無く苦しみも無く、ただひたすらにコウだけを追っていたあの時の。

置いていかれたっ。コウ、あなた

「二ナっ！？　すっかりしな！　あんたが分かんないんじやあ他の誰にも分かりやあしないんだ。何か心当たりとか無い？　コウが行きそうな場所とかやりそうな事とか。あいつがモビルスーツを棄てて軍を逃げ出す事なんてあたしにとっては有り得ないんだからっ！

「ゲート、」

肩を掴まれてモウラに問い質された事で可能性を思いついた様に二ナが呟く。掠れて、単語でしかなかった呟きが次の瞬間には実体を成して二ナの口から飛び出した。

「そう、ゲートよ。……　モウラ、ゲートの当直の警備兵は！？」

この基地から出て行く為には必ずあそこを通らなければならぬ。きつと記録が残っているか、それとも警備兵が眠らされているか

「眠らされてるって、それじゃあ脱走確定じゃないかっ！」

キースが仰天した声を上げた。だが二ナはキースの動揺を意に介さずに言葉を捲くし立てる。

「いいえ、まだ分からないわ。それにこんな夜中ならばそう遠くにも行っていない筈。私達だけで何とかコウを連れ戻さなきゃ。」

そして理由を。声を。

聞かなければ、何としても。

私の願いがそのまま終わっていい筈が無い。私はその為に全てを諦めてコウを選んだのに。全ての運命が等価で交換出来ると言うのなら、私の全てを賭けた対価には恵みに似た何かがあってもおかしくない。

それがこんな答えで、結末で終わるなんてあつてはいけない。

私の願いは届かないのか、それとも身に余る大それた物だったのか。神様は私が手にしようとしたたった一つの喜びまでも奪い去る

うと言うつもりか。

私の犯した罪はそれほど大きく、無残な物だったと。

キースの足が二ナの提案にいち早く反応した。踵を返してゲートへと向かおうとするキース、そしてその後を引き摺られる様に動くモウラと二ナ。

既に基地内の全ての明かりが点灯してコウの行方を追っている。兵舎の外へと飛び出した三人を出迎える、水銀灯で照らされた滑走路。基地中に設置されたサーチライトが狂った様に敷地内を駆け巡る中を迷う事無く基地ゲートへと走る三人の影。

その行く手を遮る様に一つの影が暗闇から進み出た。立ち塞がった影の前でキースの足が慣性を相殺しようとしてどたばたと音を立てた。「待ちたまえ。」

キースの後を追って走ってきたモウラと二ナには逆光の中の人影が何者なのかを判別する事は出来ない。だがその声を聞く事が出来たキースだけはその場で直立不動になって敬礼の姿勢をとった。

「こんな夜中に何処へ行くこうと言うんだね？ 君達は。」

柔らかかではあるが強い意志の感じられる芯の通った声の持ち主であるウエブナーは両手を後ろに組んで三人の前に立っていた。彼の背後には当直勤務を示す腕章をした警備兵が控えている。

「い、いえ、基地指令。お騒がせして申し訳ございません。実は私の部下であるウラキ伍長が現在行方不明でありまして、基地全体で搜索している所であります。」

「それならば今すぐこの馬鹿騒ぎを止めたまえ。もう必要ない。」  
自分達の覚悟を『馬鹿騒ぎ』と評された事よりもキースはウエブナーのその態度に驚いた。脱走の疑いがある兵士をそのままにして責任者たる指令が冷静に『追うな』等と言う命令を発せられる訳が無い。

「いえ、しかし指令。ウラキ伍長は未だに見つかっておりません。何としても基地に連れ戻して。」

「その必要はないと言ったのだ、キース中尉。……ウラキ伍長

は本日零時を持って予備役へと編入された。民間人をこれ以上搜索する必要は無い。」

ウエブナーの言葉の意味を瞬時に理解できる人間などその場にはウエブナーと背後の警備兵以外にはいなかった。声を失ったまま立ち尽くす三人の前に警備兵が進み出て、手にしたファイルを淡々と読み上げる。

「本日 マルサンマルマル 三時、コウ・ウラキ予備役伍長は当基地より退去。

…… 此処に本人のサインがあります。」

差し出されたファイルを引っ手繰るキースの手。震える手で握られたそれを背後から近づいて見つめるモウラと二ナ。その視線の先には間違いなく見慣れたコウの字があった。例え誰が忘れても二ナが、そして整備記録にサインを貰うモウラが見間違える訳が無い。

「そんな！ …… 何でだよ、コウ。お前、どうして」

「訳を、訳を教えて下さいウエブナー指令。どうしてコウは」

ウラキ伍長は急に予備役に編入されたりしたんですかっ！？」  
縋る様な目をした二ナが進み出る。胸の前で合わさった両腕が離れない。離してしまえば何か零れ落ちそうな恐怖に囚われた二ナの切実なる声が闇に溶け込んで。だがウエブナーはその声をじつと聞き届けた上で静かに口を開いた。

「詳しい事は私にも分かん。ただウラキ伍長より上申された退役届けを送ったジャブローからの命令書に基づいてウラキ伍長の処遇は決まった。そしてその命令書は軍の上層部がウラキ伍長の『希望』を十分吟味した上で判断を下したと聴いている。 …… これが彼と軍の交わした誓約書の写しだ。よく読んでみるといい。」

それがウエブナーの手にあると言う事は、彼は既にこの事態を予測していたのだと三人に告げているのも同然だった。予測していたからこそここで三人の到着を待って、この書類を用意周到に準備していたのだ。

さほど分厚くも無い紙の束を手取る二ナにとってそれは同じ枚数の鉄板を預けられた様にも感じる。敷地内を煌々と照らし出す無

影灯の助けを借りて絶望に塗れた二ナの目が文字を追う。そこに羅列された条文の数々を読み取り理解し、そして絶望から諦観へと變化した二ナの意識は彼女の体から全ての力を奪い取って地の闇へと吐き捨てた。崩れ落ちる膝を支える事さえ諦めて冷たいコンクリートへとしゃがみ込む、望落の影絵。

モウラが動けなくなつた二ナの手からその書類をもぎ取つた。一心不乱に読み込むその傍らで同時に目を通していたキースから怒声交じりの驚きが迸る。

「なんだよ、これっ！ どういう事なんだ！？」

「ウエブナー指令っ、これは本当ですか！？ コウと私達の接触を一切禁止するなんて、そんな理不尽があるんですか！？」

「何も不思議な事ではない。民間人と軍人の交流は定められた時以外では原則として禁じられている。それが少し厳密になつたと言っただけの話だ。」

「民間人って…… 指令、非礼を承知でお伺いします。ウラキ伍長は民間人といえども予備役軍人です。基地に登録されている軍人との接触を禁じると言つのは余りにも矛盾が過ぎるんじゃないでしょうか。」

モウラが尚も食い下がる。このまま終わつていい筈が無いと思つているのはモウラも同じだった。二ナのあの日の選択を密かに打ち明けられて、それでも友人の抛り所となる為に全てを許したモウラにとつてはそれを見過ごす訳には行かなかつた。自分の目の前で崩れ落ちた友人の心を救い上げる為に何としてもそれだけは阻止しなければならぬ。

だがウエブナーはモウラの問い掛けには答えなかつた。無言ではありながら静かに三人に注ぐ視線が彼の意思を何よりも雄弁に物語る。

理不尽も矛盾も、軍人である以上命令書が発行されれば受け入れなければならぬ。例えここが地の果てに忘れ去られた辺境の駐屯地であるうともそれは必ず守られ、破る事など考えてはならない絶

対の効力と拘束力を持つ秩序なのだ。それを知っているからこそ君達はここにいないのか、と。

「トンプソン、てめえっ！」

キースがやおら怒鳴って当直の警備兵に掴みかかった。胸倉を一杯締め上げられた男の体が大きく伸び上がる。

「何でコウを止めなかった!? まさかいつかコウにやられた事を根に持ってそのまま行かせたんじゃねえだろうな。そうだとしたらとんだ逆恨みもいい所だ、ぐれてたお前をぶん殴って更生させてくれたのはあいつのお陰なんだぞ!? この野郎、恩を仇で返すよな真似しやがって！」

「俺だつて止めたんだよ! そんな事出来る訳ねえじゃねえかつ！」

当直の警備兵の声はあつという間に涙声になっていた。

「俺だけじゃねえ、ウラキ中尉のお陰でどれだけの基地の人間が救われたか。そんな事言われなくても分かってる……でもよ、あの人に『君も軍人だったらちゃんと自分の職務を全うしろ』って言われたら俺を『軍人』にしてくれたあの人にそんな言い方されたらどうやって俺は止めればいいんだよっ！」

いい歳をした大人がキースの手の中で泣きじゃくる。彼の言葉に秘められた無念を知ったキースの手から力が抜けた。浮き上がった足の裏をコンクリートの地面へと戻した警備兵が泣きながら尚もキースに尋ねた。

「なあ、キース中尉。俺は明日から何を頼って生きればいい? あの人がいなくなって俺は、俺達は何を指してこれから生きていきやいいんだ?」

その言葉を聴いた二ナの両肩が大きく震えた。地面に向かって吐き出される絶叫が乱反射を繰り返して遠い夜空に木霊する。沈黙を持って二ナの慟哭を見守る四つの影はただ成す術も無く、彼女の魂が無謬の闇へと吸い込まれていく様を見守る事しか出来なかった。

そうよ、コウ。私は明日からどうすればいい?

貴方を失った私は明日から何の為に、何を探して生きていけばいい？

教えて。

マークスの直ぐ脇を無言のアデリアが擦り抜けた。歩調に遅れてなびく栗色の髪はまるで熱を帯びているかの様に熱い。項垂れたままの二ナの前で仁王立ちになったアデリアが低い声で唸った。

「いつまでそうしているつもり、二ナ・パープルトン？」

フルネームを口にするアデリアの声音には彼女が今まで二ナに対して持っていた敬愛の情すら感じられない。叱り付けたに違いない台詞の後でアデリアの両手は二ナの両肩を掴んで揺さぶった。

「二ナさんの私達に対する気持ちも分かった、二ナさんがどれだけ苦しんで後悔をしていたかも分かった。でも、何で、」

アデリアの腕の動きに反応する二ナ。目を逸らさない真っ直ぐなアデリアの視線が過去の幻影で傷だらけになってしまった二ナの蒼から心に向かって訴えた。

「二ナさんはまだここに居るの？」

その問い掛けが静かであるが故にマークスにはアデリアの堪え切れない痛みと怒りがその声に込められている様に聞こえる。沸き立つアデリアの怒りに気圧された三人が見つめる中でただ一人、動く事を許された少女は尚も眼の前の咎人に問い掛ける。

「私たちの事なんてどうだっていいじゃない、世界がどうなったっていいじゃない。二ナさんはウラキ伍長を追いかけてここまで来たんじゃなかったの？ 生まれた月を捨てて、両親を捨てて、それでも彼が何よりも大切な物だと信じていたから危ない橋を渡り続けてきたんでしょ？ それが、そんな決心がたったそれだけの事で簡単に諦められる物なの？ ウラキ伍長が何も言わずに出て行ったのなら追いかけて訳を聞けばいいじゃない。今まで二ナさんが犯した危険に比べればそんな事ちつともたいした事じゃない。」

「だめよ、アデリア。私がそんな事したら貴方達にも迷惑が掛か

る。これ以上私のエゴの為に皆を危険に晒す事なんて

「自分の臆病の言い訳に私達なんか使わないでよっ!!!」  
突如として激発するアデリアの声。全身の力が二ナとの唯一の接点である両手に込められて思いを伝えようと奔走する。

「ウラキ伍長が捨てたモビルスーツに関わる意味が今の二ナさんにある!? ウラキ伍長が今どんなになつてるか分かつて、それでもまだこんな所に居るつもり!? そんな場合じゃないじゃない!」  
今のウラキ伍長に一番必要な物は二ナさんだつて事が何で自分で分らないのっ!?

「彼が私を必要とするのなら、何故彼はこの基地を出て行つたりしたの? 違うわ、アデリア。コウにとつて私はもう必要の無い存在、いいえ寧ろ自分から全ての物を奪い取ろうとする憎むべき敵にしか過ぎなかつたのよ。彼の目を見る度に私はそう思い知らされた、あの日の目を取り戻そうとして何度彼に近づいてもコウの目が私の気持ちを遠ざける。私がそう願つても彼の願いが同じ物だとは限らない、それでも自分のエゴを押し付けた結果がコウを失う事に繋がつた。だから私はこれ以上自分の為に大事な物をなくす事に耐えられない。」

「ウラキ伍長の言い分を聞いてもいなくせに分かつたような事を言うのね、そんな傲慢な考え聴きたくもないっ。」

アデリアの言葉に二ナは声を詰まらせる。二ナの願いや考えを根本から否定する若き反逆者<sup>レジスタンス</sup>は背後のマークスのお株を奪う勢いで言葉を紡いだ。

「二ナさんは昨日私達に言つたわよね? OS任せにモビルスーツを動かしても決められた性能以上の物は発揮出来ない、その可能性は操作の自由度をパイロットに選択させる事で無限に広がるって。あたしもマークスも二ナさんの言葉を確かめる為に今日マニュアル操作に挑戦した。ちつともうまく動かせない、立ってるのがやつと何度も何度も転んでぼろぼろになって、それでもあたしは初めてモビルスーツを自分の手で動かす事ができたと思つた。それを教えて



くれた、それを許してくれた二ナさんが何で昨日のあたし達と同じ事を言うの？ マニユアルなんか必要ない、OSの基本動作だけで十分だって思ってた昨日のあたし達と今のままで十分だって考えてる二ナさんは全く同じじゃない。」

思い当たった二ナの目が大きく見開いた。そうだ、確かに。

そしてその持論はあの戦いを生き残った彼コウによって築き上げられた、確固たる。

「そうじゃないって。それは間違ってるって誰が二ナさんに教えたの？ キース隊長？ 違うでしょう？ 二ナさんが誰よりも生きて帰ってきて欲しいと望んだウラキ伍長が教えてくれた物なんですよ？」

二ナさんの心の中にはウラキ伍長がまだ、いるのよ！ 何で目を逸らすの、知らん顔するの！？ ウラキ伍長って二ナさんにとってそんな小さな物！？」

「…… 違う」

震える二ナの唇が小さく開いて声が漏れた。微かに振る頭かぶりが精一杯の否定を現して。

「取り戻す事に命賭けで、守る事に全部賭けて、それでも彼が離れちゃったら理由も聞かずに自分を責め続けるそれって何？ ここまで来て今更何が怖いのか、ためらう事があるって言うの？ 二ナさんの決心ってそんな事で挫けちゃうようなあやふやな物！？」

「…… 違う。」

二ナの呟きは大きくなってマークスとモラレスの耳にも意味として捉えられた。潤んだ瞳が何かに抗う様にアデリアの目を見つめたまま動かない。

「何で自分に嘔吐くのっ、取り繕ってごまかさないでっ！ こんな所で泣いて縮こまって何にも出来ませんでしたって済ませるつもり？ そんなにぼろぼろになって笑う事まで忘れちゃって、二ナさんは本当にこのままでもいいと思ってるの！？」

「違うっ。」

「違うと思うんなら答えてよ、二ナさん！ 二ナさんは彼の事を、

ウラキ伍長の事を誰よりも、何よりも

アデリアの言葉が切欠となって二ナが目尻から涙が零れた。小さく息を吸って身構える二ナに向かって、身を千切る様なアデリアの問い掛けが叩きつけられた。

「愛してるんじゃないの!?」

「愛してるわっつ!!」

暴走する感情の昂ぶりと反比例する縋る目が救いを求めて彷徨う。忘却と言う広大な砂浜に何度も埋めたその思い。深く埋める度に何度も波に洗われて浮かび上がって来るその思い。その引き潮を何度恨んだ事か、何度感謝した事か。想い出す事に心を痛め、思い出した事に安堵して。数え切れない夜と昼を過ごしてさえも色褪せる事の無かった過去に苦悩と歡喜を繰り返して。

「愛してる、愛してるっ! 何で私がコウを忘れる事が出来るの!? あの人の無しに私は生きていけない! 私が死ぬその瞬間まで私がその事を忘れる訳が無いわ! あの人は私の全てだったのよっ!」

咎人の慟哭が堰を切って溢れ出した涙と共に迸って懺悔の室を席卷する。二ナの手が未だに両肩に置かれたアデリアの手首を掴んで、言葉のままに力を込めた。

「でも私と一緒にいたらコウは嫌でもあの日の事を思い出す、モビルスーツの事を思い出すっ! そうしたらきつとコウは今まで以上に苦しむのよ! 私と過ごしたあの日々が、私にとっては掛け替えのない思い出が彼にとっては苦痛でしかなかったと分かった時の私の気持ちがアデリアに分かる!」

三人の前にいる二ナは少なくとも彼らの知る二ナ・パープルトンと言う人となりとは全く別の者だった。ブロンドを揺らしながらアデリアの攻めに立ち向かおうとする二ナの姿はまるでアデリアの妹の様な印象をマークスに植え付けた。

「何度この基地を飛び出してコウを探しに行こうと思ったか。コウの居場所を知るためにジャブローのデータベースに潜り込みさえし

たわっ！ でも手掛かりを見つけた所でどうすればいい！？ またあんな辛そうな顔をするコウの前で私は何を聞けばいい！？ あなたの言う通りよアデリア、私はコウに会うのが怖かった。もう二度と会えないんだと諦めて、彼がこのまま穏やかな生き方をする事を彼のいなくなつたこの場所ですつと願ひ続けて。……それが私の決心だと信じていたつ、この前ここでコウを見つけるまではつ！

ニナの手がアデリアの手首を突き放した。迷う事の無い掌がニナの顔を包んで悲しみを押し隠す。

「コウの胸に飛び込みたかつた、抱き締めたかつた…… 離したくなかつたつ！ 行かせたくなくなかつたつ！ でももしこんな私をコウが許してくれたら一緒にいればいつか同じ事が起こるのよつ！ あれだけ好きだつたモビルスーツに乗れなくなつただけじゃない、自分の体にそんな薬を打ち込んで二度と元に戻れなくなつた原因を作つたのが私だと知つたら彼はきっと私を許さない。私が彼から全てを奪つたのは間違いない事実なのよつ！」

「そんなのニナさんのせいじゃないつ！ 彼に起こつた身の不幸を自分で全部背負つてどうなるつて言つたの、何が出来るの！？ 偽善にも程があるつ！」

顔を覆つたニナの手をアデリアの両手がこじ開けた。力づくで引き剥がした掌の影から現れる、そば濡れたニナの表情を睨みながらアデリアが問う。

「ウラキ伍長から何を奪つたの？ 何も奪つてないじゃないつ！ ウラキ伍長がここにいて、ニナさんがここにいて。モビルスーツだつてここにあつた。二人の欲しい物はちゃんとここに揃つてた。ウラキ伍長がモビルスーツに乗れなくなつたつて言つたら二人で何とかすれば良かったんじゃないつ！ 今迄みたいに二人で力を合わせてその方法を、遣り方を見つければよかつたんじゃない！」

「でも、私は知らなかつた、教えてくれなかつた！ 彼は何にも言わずに黙つて出て行つてしまつた、もう昔には戻れないのよ！ そ

んな私に何が出来るって言うの!? 遣り方を探す、どうやって!? 彼をもう一度モビルスーツに乗せろとも言うの!? そんな事出来る訳が無い、そんな事をする位ならあの時死んだ方がましだった。あんなコウを見るくらいなら私はもう生きていたくないっ!

「このっ!!」

アデリアの右手が閃いた。その事態を全く予想していなかったマークスは目の前に振り上げられたアデリアの手を押さえる事が出来なかった。あつという間にマークスの視界から消えたその手は一直線に二ナの左頬目掛けて振り下ろされる。

狭い部屋に満ち溢れていた騒乱を一瞬の内に肅清させる打擲音。

二ナの頭が大きく揺れて打たれた頬をアデリアに晒した。

「卑怯者っ!!」

「アデリア、止めるっ。」

出遅れたマークスの両腕がアデリアを体ごと抱きかかえて二ナとの距離を離そうとする。だがアデリアの体は密かに快く思っている男に抱かれている事も忘れて獣の様に抗った。

「自分がウラキ伍長から目を背けてたって事が何で分かんないのっ!? ウラキ伍長が怖いんじゃない、自分の罪と向き合う事が怖かったって何で素直に言えないのよっ。ガトーの遺志を継いだウラキ伍長がもがき苦しむ姿を見てられなかったって、何でそんな事がわかんないのよおっ!!」

暴れるアデリアがマークスの拘束を振り解いた。頬を打たれて微動だにしない二ナの元へと再び向かったアデリアが今度は両の二の腕を掴んでしゃがみ込んで、二ナの顔を見上げた。

「二ナさんのやった事が原因だっと思っんなら最後まで責任取んなさいよっ! 二ナさんの友達も最期にそう言っただんでしょっ!?

託された人がそんな事を言うなんて死んでいった人に対する冒瀆だわ、そんな事私、許さないっ!!」

「コウを失う事でしか私の罪は償えない! ルセットとの約束も果

たせないっ！」

アデリアの顔を二ナが泣きながら振り向いた。紅く色づいた頬の痛みも忘れて二ナはアデリアの心の底から滲み出た提案を必死の思いで退ける。

「コウが私の事を嫌いになっけてくれてもいい、それでモビルスーツに乗れなくなつたとしても、いいっ！ 彼さえ生きていてくれれば、幸せにさえなつてくれれば！ そこに私がいなくなつたつて構わない！ 私が一人で苦しむ事が彼を救う唯一の手段なのよ！ コウを選んだ私が彼を死なせない為にはそうするしかなかったっ！」

「そんなの罪の償いじゃないっ！ ただ自分の罪を他人に押し付けてるだけよ、そんな事でウラキ伍長が幸せになれるとも思つてんの！？」

怒号の中に刹那覗かせたアデリアの問い掛けは二ナの口から言葉を奪つた。

そう信じなければ自分の今が無に帰する事になるのは分かつている。だがそう信じなければ願わなければあの日の記憶と後悔に飲み込まれてしまう。見えない現実と願望を瞼の裏に浮かべて過ごす、未来の自分と枝分かれした道を歩むコウの背中に手を伸ばしてはその掌を握り締めて自分の思いごと捻じ伏せた今までの日々。それは自分の運命すら縛り付けた呪いにも似た頸木だったのかも知れない。力づくでその木をへし折つて悲運の呪縛から解き放とうと躍起になる、目の前にしゃがみ込んだ少女の姿の解放者リレイターは華奢な体に秘められた情熱を両手に集めて二ナの体を強引に揺さぶつた。

「間違つてる間違つてる間違つてる間違つてるっ！ 二ナさんは絶対に間違つてるっ！」

「アデリアっ。」

その勢いは留まる事を知らず。慌てたマークスがアデリアの手を掴んだ。だがアデリアは制止の意味を込めたその手を振り払つて尚も二ナの肩を揺さぶり続ける。

「彼の本当の生き方って何？ 彼が取り戻さなきゃいけないものは

何？ それを知っているのは二ナさんだけでしょう？ 全部無くしたウラキ伍長がそれに変わる物を見つけれられると思う？ 見つけれっこ無いってこのまま放っておくのか？ 彼の魂を救ってあげられるのは他の誰でもない」

アデリアの表情が変わった。迸る怒りがその過程のどこかで懇願に変化して。

「二ナさんしかいない、ううん、二ナさん以外の誰に其れが出来るって言うのよっ、彼にとっての自分がそうだってまだ分からない！？」

「アデリア、もうよせっ。」

「二ナさんが何もしなければウラキ伍長は何も取り戻せないまま、何も分かんないまま終わっちゃうのよ！ いえもう終わってる、彼は空っぽのまま、生きたまま死んでる。彼がもしこのまま死んでしまったんならそれは二ナさんのせいよ！」

「アデリアっ！ 止めるっ！」

今までに無い激しい口調でアデリアを止めようとするマークス。だがアデリアの声はその先にある決定的な言葉を勢い余って口走った。

「あなたが彼を殺したんだわっ！！」

「フォス伍長っ！」

一線を越えてしまったと思った時にマークスの口から迸ったファミリーネームはアデリアのそれ以上の攻撃を遮った。軍人としての性はアデリアの体から激情と言う名の熱量を奪って理性を目覚めさせる。動きの止まったアデリアの手を優しく掴んだマークスが、二ナからそれを引き剥がした。

「…… もう止める。命令だ。」

階級を盾に中止を迫る事はマークスの本意ではない。だが自分達の体に染み付いた後天的な条件反射に頼らなければ彼女の怒りが際限なく二ナにぶつけられていたに違いない。アデリアの怒りが収まった事を確認したマークスが腕の力を緩めて言葉と共に行使した拘

束を解こうとしたその瞬間に、不意にアデリアが振り向いてマークスの顔を見上げた。

露になるアデリアの顔、浮かんだ表情そしてやり場を失った感情の末路。

頬を伝う涙が仄かな明かりに照らされて、二ナにぶつけていた怒りを無言でそのままマークスに。声にならない憤りは彼女の体を貫いて力に変える。僅かな力で握られたままのマークスの手を振り解いて発条ばねの様に弾けたアデリアの体は口を押さえた掌の間から嗚咽を漏らして部屋ぶつの出口へと走った。

内開きの扉が勢い良く開いて外部の光を懺悔の室へと誘って、その明かりの中へ振り返り返りもせず飛び出していくアデリアの影。開け放たれたままの入り口から遠ざかっていくアデリアの足音は法廷の審議を終了する事を告げる裁判官の木槌の様に、けたたましい音を上げて消えていく。

再び訪れた静寂の中でモラレスも、マークスも二ナも何も言う事は出来ない。立ち尽くしたままそれぞれの思いを噛み締めて、それぞれの心に去来する思いを見つめてそれでもそれを何かの音にする事はどこか躊躇ちゅうちゆわられて。やがて僚機に置き去りにされたマークスが彼女の残した顛末を清算する為にゆつくりと動いた。

机を腰におろしたまま項垂れて、伝う涙を拭く事さえ思いつかなくなつた二ナの前に立つマークスの顔に浮かぶ忸怩じくじ。

「…… 技術主任、部下の数々の非礼を許してください。フォス伍長には後日謝罪に伺う様命じておきます。」

その形式ばつたマークスの物言いに二ナの顔が何かを感じて打ち上げられた。見上げる先にあるマークスの異色双眼は不思議な色彩を湛えて二ナへと向けられている。左目に設えられた琥珀色は強く輝いて二ナに何かを語りかける。右目に残る白銀が周囲に残つた光を集めて、二ナの中から何かを吸い上げようとして。

「二ナさん、僕とアデリアは生い立ちも違う。彼女は彼女の人生を精一杯生きてここにおいて、僕は僕の人生を悔いの無い様に生きよう

「と、思、つ、て、こ、こ、に、い、る。」

静かな口調で諭す様に語り掛けるマークスの表情を二ナが泣きながら見つめている。マークスの眼が何かに耐えかねた様に少し逸れてあらぬ方向を見て。

「アデリアの言っている事が本当に正しいかどうかなんて僕には分からない。本当は二ナさんの選んだ事がウラキ伍長の為に正しくてアデリアの考えは間違っているのかも知れない……でも。」

マークスの視線が再び二ナに向けられる。正対する異色の瞳は互いに拮抗してお互いの正義に疑問をぶつけた。

「僕は、アデリアが正しいと思う。二ナさん」

その人生の大半を理不尽の中で生き続けてきた青年は、瞳を光に晒しながら二ナに降り注いで。何者にも屈しなかった強い意志は彼の言葉に乗せられて二ナの心に届けられた。

「あなたは、間違っている。」

その言葉に対する回答を拒む様にマークスは二ナの元から離れた。打ちひしがれて視線だけを動かす二ナに向かって小さく、しかし心の底から謝罪の意味を込めて敬礼するマークス。踵を返して急ぎ足で退出する意味は先に飛び出したアデリアを案じてだと言う事にすら思いを馳せずに見送る二ナ。アデリアが残っていた足音とは明らかに違っている大きな音が二ナの耳朶を打って、それでも励起する事の無い感情は当て所も無く彷徨い続ける。

「……若い、と言う事は、ええ。」

モラレスの言葉に二ナの顔が動いた。後ろに手を組んで事の経緯をじっと見守り続けた老獪な医師は微かな笑いを二人が退場した扉ゲイトに向けて呟いた。

「絶望を跳ね除けて未来に向かって迷わず思いの丈を馳せる事が出来る。儂らがそれをするにはほんのちよつと絶望の数が多過ぎたよっじゃ。人が臆病になる事は止められん、傷を負う数が増えるほどに治りは遅くなって何時しか傷を負うことを恐れて。それが間違っている等とは傷を負った事の無い者にしか言えん言葉じゃ。じゃが



微笑のままの眼でモラレスが二ナに視線を流した。

「生きていく事が傷付く事と同じ意味を持つのなら、それに恐れる儂らはやはり生きてないと言う事になるんじゃないやろつか？ まあ、儂にも答えは出んがね。」

「ドク……私は」

「今日はもう休みなさい、何も考えず。……薬の量はいつも通り、一錠じゃ。それでぐっすり眠れる。夢も見事無く眠るがええ。」

モラレスの足が二人の後を追う。ゆっくりとした足取りで出口へと向かうその小さな背中を無言の感謝で見送る二ナ。開きっぱなしのドアを閉じる事が自分の仕事であるかの様にノブを握って、悲哀と後悔の残り香が漂ったままの二ナの部屋を出て行くこととするモラレスの足が、何かを思い留まったかの様に止まった。シルエツトだけを二ナの目に残す老人はその穏やかな顔を肩越しに二ナに向けて言った。

「眠れば明日じゃ。それは誰の身にも平等にやって来る。……明日と言う日が今までで一番いい日にならないと言う保障はなかるう？」

取り留めの無いコウの告白は、夜更けのあばら家の室内を照らし出す小さな明かりの中をまるで今わの際の蜉蝣かげろうの様にふわふわと浮かんでは消えていく。

民間人であるヘンケン      コウはそう信じている      に

対して語られる事実は殆ど無くその多くは抽象的な表現に終始する。だが二ナとの関係を吐露して尚且つ、何故自分がそこから逃げ出したのかを語り始めた時、ヘンケンはセシルの予感の中していた事を理解した。コウ・ウラキと言う名の人間が抱えた矛盾の鍵が基地で働くあの女性に由来している事は間違いの無い事実だった。

「……ふむ、」

コウの言葉が一段落した所でヘンケンは小さな溜息で間を取った。取り留めの無いコウの告白を総括する為でもあり、また自分の考えを纏める為の時間を自らの手で作り出す必要があった。

手にしたグラスの中にたゆたう琥珀の光に一瞥を繰れて静かに唇を浸し、過去から現在に至るまでそれを手にした人々に尊敬の念を込めて『バカラ』と呼び続けられているそのギヤマンが再びテーブルに置かれるまでの間、コウは一言も発する事はなかった。

「…… the Porcupine Dilemma、か。」

コウの告白を聞いて思い当たる言葉はそれしかない。乾き切った立て付けの悪いテーブルとグラスが奏でる軽い音と共に呟いたヘンケンの顔を不思議そうに見つめるコウに向かってヘンケンが小さく笑って 柄にも無い事を言ってしまったとばかりに説明する。

「大昔の哲学者が語った戯言を二人の心理学者が寓話にしたタイトルだ。『ヤマアラシのジレンマ』と言えばどこかで聞いた事があるだろう？ 寒空にいる二匹のヤマアラシがお互いに身を寄せ合って暖め合いたいが、針が刺さるので近づけない様に人間関係の困難さを表現した話さ。君の話を聴いていると何となくその話が頭に浮かんだ。」

「『ヤマアラシのジレンマ』……」

「モビルスーツに乗れない鬱憤を晴らす為にそこら中の諍いに首を突っ込んで仲裁し、と言えば聞こえはいいが売られてもない喧嘩をバーゲンセールのように買い漁って相手の罪ごと引つ被り。それでも笑顔で出迎えてくれる彼女の振る舞いに居心地の悪さを感じ。」

…… 彼女の気持ち確かめようとして棘だらけの自分の心を相手にぶつけてみたら何の事は無い、相手の心も棘だらけで自分も傷付いてしまった。お互いが傷つけ合わない距離に居るのは居心地がいい、でも物足りない。もつと良く知りたい近づきたい。…… 君は今幾つだ？ そんな事はハイスクールの内に済ませとけ。」

コウの悩みを一言で批評するヘンケン。ヘンケンの性格からしてそのような優柔不断な考えは過去の哲学者の寓話を『戯言』と評し

てしまうほどつまらない物だった。

彼が駆け抜け、生き抜いて来た戦場ではそんな鈍らな考え方は通用しない、いや寧ろそんな考えが一瞬でも脳裏を過ぎるう物ならたちまち敵艦の集中砲火やモビルスーツの餌食になってしまう事を身をもって知っている。正か誤か、二者択一の命懸けの賭けに全て勝ち抜いて来たからこそ今自分がここに生きて存在できているのだと言う事を一番身に沁みて理解しているのはヘンケン自身であった。

最もその幸運がこれから先も続くかどうかは神のみぞ知る。それを続ける為にはセシルや彼を支える多くの仲間の力無くして実現は有り得ないと言う事も十分分かつている。恐らく自分の目の前で視線を逸らしたまま座っているコウにしても同じ事が言えるだろう。ただ自分と彼との大きな違いは『その事を知っているのか否か』と言う一点に於いてのみだ。

「忘れちまつた方がいんじゃないのか？ その女性の事は。」

アドバイスと呼ぶには余りにも率直過ぎるヘンケンの勧めにコウは思わず顔を上げた。期待していた訳ではないが行き詰った自分の考えに何らかの指針を求めて告白したコウの思惑は外れた。コウが絶った目の前の組合長は軽い口調で、しかし真剣な目でじつとコウの顔色を伺っている。

「その為にここに逃げ込んだんじゃないのか？ モビルスーツを整備する代わりに年代物のバイクを弄ったり、自分が生きている事を実感する為に機械を使わず麦を育てる。ウラキ君自身が今の生活に十分満足しているのならばそれを君は幸福と捉えるべきだ。それ以上の物を求めた所で身に余る幸せは自分自身を追い込む事にもなるだろうしな。何、女にしたってこのエリアには独身の女性も大勢居るぞ？ その中から自分の価値観に沿った伴侶を選ぶ事だって不可能じゃ。」

「それが出来れば？」

それに、彼女は…… 二ナと他の

女の人を比べるような事が。」

「不思議な事を言うんだな、君は。君自身が逃げ出した事を根にも

持たずに甲斐甲斐しく当てる無き帰宅を待つ女性だと、彼女がそんなお人よしだと信じる事が出来るのか？ 傷付く事にすら耐えられずに基地を飛び出した君が。そんな発想は傲慢以外の何者でもないな、俺に言わせれば。」

ヘンケンがタバコを取り出す。オイルライターの蓋が微かな金属音を上げて開く。

「そこまで彼女の事を信じているのなら何故傷付く事を恐れる？

…… 違うよ、ウラキ君。君はやはり彼女の事を信じてはいないんだ。信じていないから彼女の体から突き出た針に毒が塗つてあるのではないかと疑い、それで自分が致命傷を負う事を恐れている。

…… 彼女との間に何があったのかは知らんがその考え方だけでも人間関係にとつては修復不可能なほど大きな亀裂だ。埋める事なんどとても出来やしない。」

思い当たるコウの顔が過去の記憶に苛まれて苦痛に歪む。彼の心を苛み続ける大きな棘はあの日のアイランド・イーズの管制室の中で起こつた出来事。二ナが自分に銃を向け、ガトーと共に去つて行く姿を目の当たりにした事。忘れようとする度に失う事を恐れ、目を背けようとする度に突き付けられるあの日の記憶。

「まあ、」

フリントの擦過音。ヘンケンの手に握られたライターからタバコへと火の手が移る。ジジツと言う微かな燃え音までもが二人の耳に届く完全な沈黙の後にヘンケンは言葉を繋いだ。

「そんな大事な事を人の意見で決めようつて言う所に無理がある。

そんな事あ本人に面と向かつて聞けば済む事だろう？ 彼女が自分の事を本当はどう思っているのか、彼女が亡くした彼氏の代わりとして自分に接しているのか…… それを甘んじて受け入れるもよし、拒否して彼女の事を忘れるもよし。決めるのは君自身だ、ウラキ君。」

「俺は基地に出入りする事が出来ません。それでどうやって彼女に会うつて、」

「嘘吐くなよ、昨日セシルを基地まで送つたくせに。」

フフンとせせら笑ったヘンケンがコウの言い訳を一言で撃破した。言葉を失って口籠るコウに向かってヘンケンが言った。

「やろうとすればやれる事をやらない、出来る事をしない。それは卑怯で臆病な人間の言い草だ。何時から君はそんな事を言う様になった？ 君は自分で麦を育てて分かった筈だ、自然を相手に戦う農業にとって言い訳は通用しない。手を加えれば実り多く手を抜けば少なく。収穫の日に自分の手に握られる命の数こそが自分の成した行いの全てだ。君は今日君がやって来た事の成果をその手にした筈だ、それを手にしたばかりの君がそんな言い訳を口にするとは信じられんな。しかし」

ヘンケンの眼がじつとコウを観察している。ジレンマと言うのは『進退両難』つまりある問題に対して二つの選択肢が存在

し、そのどちららを選んでも何らかの不利益があり態度を決めかねる状態の事を指す。二ナ・パーブルトンと言う女性を境にして揺れ動く決意と気持ちを操ってコウの本音を聞き出そうと策を巡らせるヘンケンではあったが、その試みはどうやら水泡に帰したという実感を持たざるを得なかった。

彼自身が秘していた物は自分の過去に関してのみであり、セシルがコウを解き放つ鍵だと思っている二ナとの関係については当の本人にも理解が出来ていないという事が今までの会話の中から読み取れる。理解が出来ないものを理解しろと勧めた所でそれは当人同士の意思の疎通が介在しなければただの思い込みに過ぎない。

第一、男と女のそんな悩みに首を突っ込んでいけしゃあしゃあとしていられるほど自分は野暮な人間じゃない。セシルが思っているよりも、だ。

コウ自身がこの先その女性との関係をどうするのかを決めなければヘンケンが手を貸す余地は無い。それはセシルとて同じだろう。例えば不利益があろうとも一つを選択する事によってその人の運命は開ける。そのどちららを選ぶかはコウが決めなければならぬのだ。

未だにその覚悟が決まっていなかつた以上、自分に出来る事はアドバイス以外に無い。

「あれほどの妻を育てた人間が嘘を吐かなければならなかつて所が俺がウラキ君にその女性の事を忘れたほうがいいと勧める根拠だ。君の本質は君の畑が物語っている、それを捻じ曲げなければならぬ事を君に選択させる存在は君にとつて得にはならない。

……得にもならない事を受け入れて生きていられるほど人は便利に出来ちやいなんだ。」

ヘンケンの予想通りその一言でコウの目は沈んだ。人の意見に容易く左右される、それこそが彼の中で決意の固まつていない証拠。今自分が言つた意見ですらも受け入れながら認めない、そんな葛藤がヘンケンには手に取る様に分かる。だが故にコウの生き方を一変させる為の導火線の先端がそこにある。其処に火を着けられるのは、彼自身か彼女か？

「お、もうこんな時間か。……すつかり遅くなつちまつたな。」腕時計を覗き込んだヘンケンが呟いて静かに立ち上がった。何度もサイクルを重ねたであろう古い酒瓶には僅かな量の液体しか残つていない。徐に手に取り明かりに翳したヘンケンがほんの少し後悔の色を浮かべた。

「マズいな……飲みすぎたな。これじゃセシルの奴に怒られちまう。あいつも怒ると静かにおつかねえからな。」

そう言うとヘンケンは沈んだ顔のままのコウに向かつて酒瓶を投げた。何も言い返せないままぼんやりとヘンケンの動きを追いかけていたコウがそれで我に返つて、慌てて酒瓶を受け取つた。

「この話の続きはまた今度にしよう。それまでボトルキープだ、マスター。」

今までの深刻な空気をかき混ぜる様に軽口を叩くヘンケン。コウがその物言いに思わず笑みを漏らして頷いた。

「でも補充は出来ませんよ？俺はお酒は作つてないし」

「明日サリナスへセシルと一緒に行くんだろ？その時こつそり買

って来といてくれ。今度はそうだな、もつと強い酒がいい。テキー  
ラ位かつとなつて頭の芯が痺れる様なのが。」

にやりと笑つてヘンケンが出口へと向かう。一部屋しかないコウ  
の家の出口までは何歩も歩く事は無い。座つたまま見送ろうとする  
コウに向かつて出口の扉を開いて外の空気を招き入れたヘンケンが、  
外界を照らし上げる月の光の眼を細めて言った。

「ウラキ君。俺も君も多分間違いだらけの人間だ。きっと今までに  
も大きな、多くの間違いをしでかして大勢の仲間を失つたのだろう。  
あの時にこうしていれば、あの時こうしなければ良かった。後悔で  
創られた様な生き方をしているんだよ。」

ヘンケンが肩越しにコウを見た。コウの目に映つたヘンケンの横  
顔には例えようも無く奇妙な笑顔が浮かんでいる。自嘲的で悲嘆を  
交えた微笑。

「だがそれでも人は何かを目指して生きていかななくてはならない。  
選択を間違つた事で取り返しがなくなつてそれを後悔したとし  
ても、やっぱり選ばなきゃならないんだ。それが出来なくなつてこ  
こへ逃げ込んで来た」

そのヘンケンの声をコウは多分忘れないだろうと思つた。コウに  
向けた物に間違いの無いその言葉は深い悲しみを湛えてコウの胸の  
奥に染み透る。

「君は間違つていると、思う。……じゃ、明日よろし  
くな。」

声を残して扉を閉ざすヘンケンの後姿を凝視したまま別れの言葉  
すら告げられなくなったコウ。頭の中で何度も反響を繰り返すヘン  
ケンの言葉を口に出す。

「……俺は、やっぱり間違つてているのか？」  
その問い掛けを手にした酒瓶に向けて呟く。無機質である筈のそ  
のガラスは頭上で光を放つ裸電球の光を捉えて、鈍い輝きをコウの  
瞳へ咎める様に跳ね返した。





## 眠れる森の美女

「はい、オーライオーライ、そのまま真つ直ぐ」

昼過ぎのハンガーに響く間延びした整備員の声。軸線をずらした後方ではバックミラーに自分の姿を移した整備員が頭上に上げた手をゆっくりと振りながら、目の前をバックで進入する巨大なモビルスーツ専用のローダーを誘導していた。広大な荷台に横たわっているモビルスーツには機体を保護する為のケブラーシートが掛けられ、この下に隠されている物が軍の物であると言つ事を内外に示す『keep out』のテープが張られている。荷受に先駆けてジャブローから送られてきた命令書と、荷物の内容が書かれた書類とそのテープの存在を交互に見やったモウラがちつと舌打ちしながら呟いた。

「何が『keep out』だよ、全く。そんなに大事なもんならわざわざ此処に持ってこなくても良いじゃないか。どうせ厄介事の種ばかり押し付けるつもりの癖に。」

毒づきながら輸送担当の責任者から渡された受領確認の書類にサインをする。遠く離れたアマゾンでアナグマの様に息を潜める本部の遣り様に対して述べた不満を間近で聞く羽目になったその男は、日に晒されて色褪せた帽子と焼けた顔を綻ばせてモウラの愚痴に同意した。

「ジャブローのお偉いさんには現場の事なんか分からんのですよ。この機体も地下の倉庫に入りきらなくなったから弾き出された様なもんで別に他意がある訳じゃない。本当はスクラップになる所を未使用の機体だからってどっか邪魔にならない所にも飾つとこうつて腹なんじゃないんですか？」

「未使用？ そんな機体なら何処の基地でも欲しがりそうなもんだけどね。ましてや『この機体』は最近じゃ滅多にお目に懸かれない代物じゃない。」

男の言に含まれていた、最近では滅多に使われなくなった単語を耳に留めて目を丸くするモウラ。現状の連邦の方針を考えれば素性が何であれ新品の機体がこんな辺境へと配備される事など考えられなかった。

デラーズ紛争の最中に起こったコンペイ島での核攻撃によって連邦軍はその戦力の約半分を喪失した。紛争の結末がデラーズの敗北に終わったとは言え、彼らが残した危機感は結果として連邦政府の方針に大きな影響を与え、軍内部で戦力の増強を謳うティターンズの台頭を許す事にはなっている。

しかしだからと言って失ってしまった将兵や艦船、そして近代宇宙戦闘の主流であった艦隊戦偏重主義を根底から覆す要因になったモビルスーツを一気に補う事は不可能だった。民生の工場をフル稼働させても標準配備として採用されたジムを戦時下の様に大量生産する事は困難を極め、何よりそんな動きを外部に知らなければならず『藪をつついて蛇を出す』様な羽目にならないとも限らない。不安定な情勢下に置かれた連邦政府が今や最も注意を払わなければならない事は、ジオンと言う反連邦の旗手を失った他のコロニーを収める各自治体の動向になっってしまったと言うのは、謂わば彼ら自身が撒いた種であった。

不足したまま遅々として増強の図られない戦力に業を煮やした連邦は、現在開発中若しくは新たに生産される戦力が十分な域に復旧するまでの最も安上がりで手っ取り早い方法として、接收又は鹵獲ろかくしたジオンのモビルスーツを予備戦力として投入する事を決定した。ジャブローヤルナツィ、そして各基地の倉庫で封印されたまま眠っていた機体を叩き起こして再び戦いの空へと舞い上げる。敵国の機体を自戦力として登用する事については軍の内部で賛否両論が巻き起こったが、反対論者にそれに取って代わるだけの代案を用意する事は出来ない。代わって賛成論者には彼らの反論をねじ伏せるだけの材料を手に議会へと登壇し、その案の帰結は誰の眼にも明らか

であつた。

賛成派がこの法案を推進した根拠はこうだ。一年戦争に勝利した連邦の影響下にはジオンから亡命して来た技術者や科学者が少なからず存在している。彼らの能力を生かす再就職先を斡旋する意味でも、また戦争の終結による景気の停滞によつて職を失つた労働者の雇用を確保すると言ふ意味においても敵国のモビルスーツを再生すると言ふ計画は即効性のある景気回復策であり、何より物資の動きが外部に悟られにくい。

実際その計画が実行に移された時点で発生した経済効果は彼らの予想を遥かに超えた。旧ジオニツク社やMIP社に在籍していた技術者は自ら進んでこのプロジェクトに参画し、思わぬ副産物まで連邦社会に恵んで今尚拡大の一步を辿っている。彼らが派遣された、倒産寸前だつた企業の内いくつかは彼らが密かに暖めていた数々のアイデアを再生されるモビルスーツに搭載して軍部からの賞賛を浴びて受注をもぎ取つた。連邦からの要請による受注は彼らの懐に莫大な資金を流入させ、彼らはそれを手に民間型のモビルスーツ用途は産業用に限定されるが　　の開発に着手する。

自らの企業の生存を賭けて軍から民間へと市場を移した先見の明は今や連邦軍との取引をほぼ独占するアナハイムの傘下を離れて民間の企業として独自の開発路線を進みつつある。

戦火に焼け爛れた地上を復興させようとする人々の願いは敵国の科学者が作つた機械によつて叶えられ、世界の至る所で活躍を続ける作業用のロボットは自らの手で壊した世界を自らの手で修復しようとして現在も稼働を続けていると言ふのは、恐らく人類が戦争と言ふ愚かしい行為に手を染め始めてから何度も繰り返された摂理に違いない。

戦力増強計画の大綱が連邦政府の議会を通過してからと言ふ物は専ら新型機は今尚続く紛争の最前線へと配備される事が多くなつた。主に宇宙空間で繰り広げられる戦闘に供給されるジムは宇宙空間仕様様に限定され、それは逆に戦線より遠く離れた地球上の連邦軍基地

に廻す重力下仕様の新型機を製造するラインが占領された事を意味している。勢いそれらが齎す状況は地球上の基地にジオンのモビルスーツを蔓延させて、気が付いた時には地上軍を構成する部隊の約半数がジオンのモビルスーツを主戦力として使用すると言う事態になっていた。

ましてや基地の再建が遅れて申請が後発になってしまった、尚且つそれほど戦略的拠点として重要視されていないオークリーに正式採用の機体が配備される事など有り得ない。

かく言うオークリー基地に配備されているジムもキースの機体である一機のみである。その機体も此処に運ばれて来た時には何年も土に埋まっていた物を発掘した様な状態でモウラの元へと文字通り『送りつけられた』。

スクラップ同然の機体をコウやニナ、アストナージらと共にやつとの思いで稼動状態にまで持っていった時の感動をモウラは今でも忘れられない。融合炉が唸りを上げてモーターを回転させて、働き始めた油圧がジムの指がゆっくりと動かしした瞬間に、その様子を固唾を呑んで見守っていたモウラ達は誰彼かまわず抱き合ったほどの歓喜を爆発させた。

連中の鼻を明かしてやった事もモウラの喜びの一因ではあったがそれよりもジムの運転試験でコクピットに座ったキースの、

「うおおおおっ！ やったあ、これでジオンの基地じゃなくなるうっ！」

モウラにとってはジムもザクもゲルググも同じモビルスーツに変わりはない。だが自分の気付かなかった些細とも思える事を気に病んで、それが払拭された事に喜びを爆発させたキースの声を聞いた事がモウラに無上の喜びを与えた。愛する人の為に自分の力が役立つたと言う実感ほど嬉しい物はなかったのだ。

だがそれ以降ジムがこの基地に配備される様子は無い。マークスやアデリアが赴任して来た事によってこの基地にも彼らの分を申請する権利は発生しているのだが、彼らの為に送られてきた機体は時

代遅れとも言える『ザク』の後期型だった。最もジオン軍の中で使用頻度、損耗率共に群を抜いて高かった機体であるが故に交換部品も豊富にストックされている機種ではあるのだが、流石にこれにはモウラも絶句した。

「今時『ザク』う？ ジャブローの連中あたし達の税金を着服してんじゃないだろうね、よりにもよってそんな骨董品を持って来るなんて。何かの嫌がらせかい？」

カラーリングの異なった二機のザクがケージに固定されている様子を眺めながら、モウラが隣に立っているアストナージに尋ねた。アストナージは手の中の書類に目を通してながら小さな溜息をついて、モウラの質問への的確な答えを模索する。

「ええと、デザートイエローの方はオデッサ、オリーブドラブの方はフィンランドでの接收となってますねえ。まあどちらの機体も地上での接收になってますんで重力下使用には問題無いとは思いますが……しかし、ですよねえ。」

「って、一年戦争の時のもんかい？ …… 参った、こりゃ相当ガタが来てるぞ。メインフレームが歪んでなきゃ良いけど。」

顔を顰めて後頭部を書き上げる仕草はモウラが本当に困った時にだけ見せる癖だ。隣に立つアストナージが同じスキルを持つ上司の困窮した様を横目で見ながら恐る恐る尋ねる。

「一応治具はジムの物が使えるとは思うんですけど…… どうします？」

到着した機体は中古品である事が前提である故に先ずC整備から行う事が慣例である。もし全部をばらした時にモビルスーツの骨格とも言えるメインフレームが歪んでいたとしたら、それを矯正してから再び組み立てなければパイロットの命に関わる。

モビルスーツと言う機械てくの塊を支えるフレームには設計段階でかなりの剛性が確保されているのだが、戦闘下に晒された機体は自分の主人の手によって限界以上の機動を要求されているのが常である。それでもある程度の耐久力は増しされて計算されてはいるのだろ

うが、何かの弾みでフレームが歪んでしまっていると言う可能性も無くはない。

歪んだフレームをそのままにしておくで機体全体の重量<sup>マス</sup>バランスが崩れて歪んだ場所に重量が集中する。その歪みは搭乗しているパイロットが知らない間に次第に大きくなって行き、金属の耐久限界を超えた瞬間に破壊される。パイロットは突然挙動の変わった機体に翻弄され、立て直す事も出来ずに敵の砲火の餌食になるのをモウラとアストナージは何度も目にし、そしてその度に痛恨の思いで口ツカーを蹴り上げた。

二人が一年戦争の間に何度も何度も味わった忌まわしい記憶であり、それと同時にU整備と言う類稀なるスキルを身につける事の出来た二人への惨い代償とも言える。

「……運を信じてやるっきゃないかあ。歪んでたら直すまで。どつちにしても彼らに整備不良の機体を渡す訳にはいかないし。」

……アストナージ、場合によつちや二ナにも手伝って貰わなきゃダメかも知れない。一応連絡だけはしといて。……それと、

諦めた様に指示を出すモウラが二機のザクから視線を放してその足元を見た。真っ白な繫ぎを着た紅い髪の少女が道具箱を片手に下げて、今にもザクに飛び掛らんとばかりにうるうるしている姿が見える。

「あのお嬢ちゃんにも手伝ってもらうか。丁度人手も足りないし。」

「つて、あの子まだここに来てもないド新人ですよ？ 幾ら何でもいきなりモビルスーツのC整備ってのはハードル、高すぎませんか？」

「あの子の服、よっく見てみな。」

モウラに促されてアストナージがちょこまかと動き回る少女の姿に眼を凝らした。

なるほど、派手な髪の色に目を取られてしまいがちになるが良く見ると、手袋以外の部分に汚れが無い。その少女には先ず手ごろな所で基地の車両<sup>ボッコ</sup>を整備する所から始めさせたのだが、それでも着用

した白い繋ぎの何処にも油染みが見当たらなかった。これはその少女がいかに要領よく整備を終わらせているかを示している。

「……なるほど、見かけに騙されちゃいけないって訳だ。あの歳でアレだと、将来有望な整備士になれるかもって所ですか？」

「あたしもあの位の歳にはもう産業用ロボットを触ってた。早すぎるって事は無いだろ？ 若い内に経験を積ませるのが上司の器量つてもんだ。」

「こらあつ、ジェスつ！ ちよろちよろするんじゃない！」

アストナージの怒鳴り声に我に返るモウラ。一昔にも思えるその思い出から眼を放したその先に映った光景は、まるで瞼の裏の出来事を再現している様に思えた。

繋ぎの色は白から他の整備士と同じ緑色に変わってはいたが、あの時と何も変わらず 内容の如何に関わらず彼女に対する評価は激変してはいたが 両手で工具箱を提げてローダーの周りをうろつろしているジェスの姿が眼に止まる。モウラの器量を常に試し続ける可愛い顔の小悪魔は次の獲物をその荷台に隠してあるモビルスーツに定めていた様だ。

「来た来た来たつあたしのオモチャ。へっへっへっ、一体何が入っているのかなあ？」

変な節回しでしゃべりながら唐突にローダーによじ登ろうとするジェス。覚悟はしていてもいつも予測不可能な行動で周囲を冷や冷やさせるジェスの行動は、今回もやはりモウラの心拍数を上げる事に成功した。

「こらつ、ジェス！ まだ受け取りのサインしてないんだ、サインするまでは司令部の持ち物なんだから勝手に触るんじゃないよ！」

慌てて呼び止めたモウラの顔を見て、不満そうな声を上げるジェス。名残惜しそうに引き返して足元に置いた工具箱に片足を預けて、腕を腰に当てて何かを言う様はまるで古参の整備士の様だ。

「えー？ じゃあちゃっちゃんとサインしちゃってくださいいよお。ア

ストナージと違ってあたし非番返上で来るの待ってたんですからあ。

「全く、あの子は。」

そう言いながらも苦笑いを浮かべて手早く書類にサインするモウラ。今や戦場より遠く離れた地上で長閑な基地の風景と空気に触れた輸送担当の責任者はその穏やかさにつこりと笑って、書類の写しをモウラの手に預けて頷いた。振り返ったその男が手を上げるとローダーを牽引していた車体はヒッチを外して荷台だけをその場へと置いていく。

「じゃあ、確かにお渡ししました。後は煮るなり焼くなりご自由につて所ですか。……早くお嬢ちゃんに許可をあげて下さい、見てるこつちが気の毒になる。」

男の言葉に誘われてモウラがローダーの方を見るとジエスが既にロープに手をかけながら、モウラの合図を待ちわびてこつちを見ている。お預けを食らった子犬の様な目をしたジエスのその姿を見たモウラが怒る事も忘れて、自然に零れてきた笑い混じりに言った。

「ほら、もう受け取ったよ。取って良しっ。」

「せえのっ！」

モウラが言うなりニヤリと笑ったジエスの手がロープを思いつきり引いた。複雑に絡められたトラッカーズヒッチがジエスの拳動で弾ける様に解き放たれて。荷台の左右に引っ掛けられた固定用のロープはこまねずみの様に駆け回るジエスの手によって次々に緩められていく。全ての結び目を引き解いて緩んだロープを手馴れた仕草で一まとめに丸めたジエスがその束を肩にかけたまま荷台の上へと駆け上がった。

「おお、愛い奴じゃ愛い奴じゃ。ささ、もそつと近こつ寄れ。近こつ寄つてお主の顔をよく見せておくれ。」

「うえ、き、気持ち悪っ！ お、お前何だよその言い方。何処で覚えてきたんだよ？」

ケブラーシートの端に手をかけて引き剥がさんとするジエスに向



かつて尋ねるアストナージ。ジェスは動きを止めて、ん？ と言う顔を向けてごく普通に答えた。

「衛星放送の日本映画。『時代劇』って面白いんだよ、エロくて。ほら、ウラキ伍長と今度会った時に日本の予備知識がないと何かと話を合わせ辛いじゃない？ だから勉強してるんだ。…… っては日本人て皆あんなにエロいのかなあ？ ウラキ伍長も日本人だったらあの属性は、あり？」

「へつと笑いながら再びシートに手を掛けるジェス。あの子は何て事を口走ってんだ、二ナが聞いたら卒倒するぞ、と心の中でその時の事を想像しながら修羅場を思い浮かべるモウラ。日本人に対する理解の方向性が趣味一辺倒の見当違いに突っ走っている事についてキツく言及したいモウラではあったが、今はそれ以上にシートの下に荷物に用がある。ジェスに対する指導と説得は後回しにする事を決めて、モウラはジェスの動きを追った。

モビルスーツを覆うケブラーシートは薄いとはいえかなりの重量がある。ジェスは腰を屈めて全体重を足に乗せ、全身の力を下半身と背筋に込めて一気呵成に捲り上げた。

「よいしょおっ！」

旅の埃と共に舞い上がったシートが肌蹴られて、ジェスの足元で露になったのは明らかにモビルスーツの頭部だった。明り取り用の天窓から差し込む強い光がその特徴的なシルエツトを照らして返す事無く吸い込む。

つや消しの黒で塗装された頭全体に顔面部を埋め尽くす十文字のスリットを縁取る鮮やかな赤、そしてその中に埋め込まれた単眼。モノアイ

「うわあ、何だこれ何だこれっ！ すっごーい！ 初めて見たあつ！」

「はしゃぐジェスの手からシートシートの端が滑り落ちた。小さくジャンプして手を叩くと言う歳相応の喜び方を見せ付けるジェスの姿は、やはり彼女がそれなりの年齢である事を改めて周囲の仲間知らしめる。あいつめ、今日の所は自慢の尻尾を自分の部屋に置き忘れて

きたなとモウラが皮肉めいた笑顔を浮かべた時、背後の頭上から今日初めての聞き慣れた声が響いた。

「珍しいわね、MS-09なんて。」

技術屋らしく形式番号で眼下のモビルスーツの名を口にする二ナの声を聞いてモウラは凍り付いた。理由は明白、今だに荷台の上でダンスを踊る小悪魔が漏らしたコウについての発言に起因する。どんだけあの小娘はあたしの度量を試す気だと心の中で呟きながら、恐る恐る背後の二ナに声を掛ける。

「お、おはよう二ナ。今日はえらく遅いんだね？」

「え、そう？ …… 昨日ドクから貰った薬が効いたのね、今日はぐっすり眠れたわ。お陰で、ほら。」

振り向いた時に眼にする二ナの眉毛がどうぞ吊り上ってませんようにと祈りつつゆっくりと振り返るモウラ。だがその願いは二ナの顔に掛けられたサングラスによって判別不能になっていた。

ゲッティの大振りなミラーレンズは顔を覗き込むモウラの不思議そうな表情をモウラ自身の眼に跳ね返す。

「眼が腫れぼったくて人に見せられないっしたら。 …… どう、似合う？」

小首を傾げてにこりと笑う二ナ。好んで着る白のブラウスに金属製のアームバンド、濃い藍色の生地で仕立てられたレベッカテイラーのテーパードと金の髪がよく映える。まるでファッション雑誌から抜け出して来た様なその出で立ちをしげしげと眺めながらモウラが、一瞬前までの狼狽も忘れて尋ねた。

「あんな …… そんな服持ってたっけ？ い、いやすごく似合ってると思うけど。」

「あら、ご挨拶ね。私だつて一応これ位は持つてるわよ？ なあにモウラ、それじゃ私が女じゃないみたいじゃない？」

「あや、い、いやそう言う意味じゃなくってさ。何か今日はいつもと違つて言うか、見違えたつて言うか …… 何かあったの？」

その違和感二ナのファッションだけから来る物ではない、とモ

ウラは思う。笑い方や口調、二ナがモウラに向かって発信するどれもがいつもとは違って、それでいて何か懐かしい物を感じる。記憶の琴線に触れるその違和感をモウラは照れ笑いを浮かべながら必死に過去へ向かって探ろうとして。

思い出した。その雰囲気は間違いなくあの頃の。

アルビオンに乗ってキース達と共に星の海へと漕ぎ出した時と同じ、あの頃の雰囲気だ。

「たまには、ね。…… 息抜きも必要だね。『張り詰めてると壊れちゃう』ってね。」

溜息混じりにそう告げる二ナの言葉を額面通りに受け入れるモウラではない。だがそれ以上突っ込んで尋ねる事も躊躇うモウラの傍に立って二ナは目の前の荷物を見上げた。

「どうせ此処に廻して来るんだからそれなりに訳ありの機体だとは思うけど、今度は何？」

二ナの言の通り、オークリーに廻されて来る機体はいずれも訳ありの物が全てだ。キースのジムや二人のザクはジャンクと呼んでも差し支えの無いものだった。創設当初から配備されているゲルググ二機にしても宇宙専用の機体に無理やり重力下使用のバックパックを取り付けた物で、二ナが弄らなければ歩く事もままならなかった。何かと手のかかる当基地の戦力のラインナップに今度はどんな足手まといが加わるのかと言った面持ちで二ナが尋ねた。

「ん、まあ…… それなんだけどね。ジャブローから送られて来た資料によるとどうも未稼働の機体らしいんだ。倉庫に保管されていたのが邪魔になって此処に送られてきたらしい。」

「未稼働？ じゃあ試運転もしてないって言うの？」

「いや、炉の制御棒の封緘ふうかんは外れてるんで一回は動いている筈だっ  
て書いてるんだけど ほら、資料。」

モウラが、説明するより読んだ方が早いでしょ、とばかりに二ナに手の中の資料をよこした。

興味深深で読みふける二ナを尻目にジェスの作業は続いている。

ホイストによって吊り上げられた荷台はドムを固定したままハンガーの空いている壁面に宙吊りになって運ばれていく。整備用のケージは既存の五機で満杯で、整備をするには荷台をケージ代わりに使うしか手段が無い。オークリー基地の整備士達が好奇の目で眺める中をジェスの指示によって壁面に固定される荷台。高所作業用のバケットが後を追う様に二人の前をハンガーの奥に向かって走り抜けた。

「……これだけ？」

二ナが不満そうに書類をぺらぺらと捲ってモウラに催促する。予想通りの二ナの反応にモウラはやれやれといった表情で問いに答えた。

「そう、それだけ。」

「だってこれじゃ何にも分からないわ。分かっているのは外形的な特徴だけじゃない。健康診断だってもう少し中身のある書き方をするわよ。接收場所や機体番号や形式名称まで未記入ってどういう事？」

「

製造の際にメインフレームに記される機体番号の刻印はそれが何処のメーカーで何処の工場トレーサビリティシステムで、何時頃作られた物であるかを知る事の出来る固有機体追跡機能の為の大事な証拠だ。軍に納入された際に登録された機体番号はその機体の履歴としてアーカイブに記録され、その機体に誰が何時頃乗り込んでいたかを詳しく知る事が出来る。

「未稼働の機体だってんなら、未登録って事もあるかも、じゃない？」

モウラの言葉に二ナが首を横に振った。あくまで可能性としてではあるが実験機として何らかの意図を持って製作された機体ならばその可能性も無くはない、と思う。だが二ナはモウラの意見を即座に否定した。

「モバイルスーツとして作られる以上それは軍事の目的を有する機械と言ふ事が前提なのよ。試作機、実験機に関わらず機体番号は必ず

刻印されていなければならぬわ。ジオニック、ツイマツト、アナハイムに関係なく。軍に記録がなくても企業のデータバンクに記録が残ってないって事は意図的な物が無い限り有り得ないわ。」

それは自分のガンダムにも刻まれていたのだから、と二ナは暗にモウラに告げる。なるほど、あの三機も試作機でありながら元々は実験機の性格を持っていた。それにすら刻印の義務が生じていると言うのなら、目の前のドムにもなければならぬと言うのが道理だ。「それに形式名称が記載されてないって。……何、まるで厄介払いされた捨て子みたいじゃない。」

いかにも二ナらしい過激な表現で正体不明のドムを論評する二ナ。ことモビルスーツの事になると辛辣な口調を取り戻す二ナの言葉を聞いたモウラが苦笑いを浮かべた。

「捨て子かあ、じゃあ差し詰めこの基地は養護施設であたし達は彼らのお世話をする施設のおばさんってどこ？」

「私はまだそんな年じゃないわよ。モウラの言ってる事が私達にぴたり当てはまるって事は否定しないけど。」

おっ、とモウラが二ナの言葉に驚いた。さっきの女性発言と言いつい年齢についての発言と言いつい、否定の声を上げる二ナの振る舞いに昨日までの彼女との相違を感じる。昨日までの二ナであつたらモビルスーツ以外の話題には何の興味も持たずに流して話を進めていた筈だ。ところが今日はモウラが口走る軽口にすら反応して対話を完成させている。

例えて言うなら『Yips』：精神的な原因などによりスポーツの動作に支障をきたし、自分の思い通りのプレーができなくなる運動障害』を克服した野球選手の投げる球を受け取った様な仄かな感動すら覚える。

返事も忘れて二ナを眺めるモウラに向かって二ナが振り向いた。不思議そうな顔で見上げる二ナに向かって心中の驚きを隠したモウラが言った。

「じゃあ可哀相な捨て子を捨てた施設のおばさんとしては他の子と

同じ様に、訳隔てなく育ててあげるとしましうかねえ。目が空いた時に初めて見たお母ちゃんがあんな小娘じゃあ先行き心配だし。グレでもしたら大変だ。」

「相変わらずジエスには厳しいわね。私に言わせればモウラがジエスのお母さんみたいよ。じゃああのドムはモウラの孫って事になるのかしら？」

「ちよつと、二ナ？」

さっきのモウラの発言に軽くお返しを見舞った二ナがモウラの声を見無視してハンガーの奥へと歩き始める。遣り込められたモウラは自分がジエスの母親代わりと揶揄された事よりも、一晩であの頃の雰囲気を取り戻した二ナの身に一体何があったのかを推し量る方へと意識を向けながら、しなやかに歩く後姿を追いかけた。

外部から電源を供給されたドムはメンテナンスモードに入っている。整備関係に関するシステムはジオンも連邦軍も関係なく然るべき所にスイッチがあり、然るべき操作で整備モードに切り替わる。全身の装甲を大きく開口して内部構造を剥き出しにしたドムの素性が明らかになるのは時間の問題だ、と整備に携わる整備士もそれを眺める仲間も確信していたに違いない。

だがコクピットに潜り込んでシステムチェックを行っている二ナから飛び出した言葉は、今までモウラが聞いた事も記憶にもない台詞だった。

「……だめ、開かない。」

座席に深く腰掛け、脇にあるコンソールに立てかけた腕に顔を乗せてじつとドムのシステムモニターを見つめている二ナが呟いた。指は手元のキーボードを離れて、代わりにもう片方のコンソールをリズミカルに叩いている。サングラスから僅かにはみ出た眉尻は二ナの浮かべている表情が険しい物である事を周囲に知らせた。

「どつ、二ナ？」

コクピットに直付けされたバケットからモウラがひよっこり顔を

出して二ナに尋ねた。二ナの弱音に驚いた事も事実だがその障害が機械的な部分で解消できないか、と指示を仰ぐ意味合いもある。だが二ナは顔を手の甲に預けたままの姿勢で、モウラに向かって視線だけを上げて言った。

「恐ろしく頑固なセキュリティね。八個のアルファベットと八桁の数字の組み合わせって言う所までは分かったんだけど、それって幾通りの組み合わせがあるの？」

「え、ええ？ …… えーっと、十六かけ十五かけ」

「約二十一兆よ。おまけに電源を入れた時に分かったんだけど解除コードが乱数表示されてるわ。多分この機体を最後に触った誰かが他の人に使われない様にセキュリティコードを弄ったんでしょね。…… 何分間隔かは分からないけど絶えず変化する暗証番号を見つけるなんて最新鋭のコンピュータでも無理、この機体を動かすにはそれこそプログラムを最初から作らないと不可能よ。」

「それでジャブローでも手を焼いてこっちに送り着けて来たって訳か。此処なら何とかするとも思ったのかねえ？」

モウラが二ナの肩越しにモニターを見つめた。真つ黒のDOS-V画面の中央で目まぐるしく踊りまくる十六桁の文字。その全てが正しく入力されないとこの機体は一切の入力を受け付けないと言うならば、とモウラが二ナに尋ねた。

時間は多少掛かってもこの機体の現役復帰を諦める事は整備士として考えられない。

「二ナ、モビルスーツのプログラムを一から作るとして、どれ位掛かる？」

それは二ナの過去を知るモウラだからこそその提案だった。他の整備士には聞こえない様に耳打ちするモウラに、二ナはやはりモウラの意図を察して何食わぬ顔で答える。

「『あれ』を創るのに約一年。それもアナハイムのスーパーコンピュータの三分の一を独占して作らせて貰ったものだから。此処にある設備じゃ無理だし、例えばジャブローのメインコンピュータに

アクセス出来ても無理でしょうね。軍と企業では内容に違いが有り過ぎるし、欲しい機能が備わっていないもの。そこから創るとなるとそれはもう一個人が作れるもんじゃないわ。大勢のシステムエンジニアが寄って集って創り上げる大企業の中核コンピューターをプログラムする気でやらないと。」

「二ナは言葉を切ってじつとコンソールのある一点を見つめた。全ての計器が集中する一番向こうに小さく開いたスリット。」

この機械には見覚えがある。間違いない。

「 巧妙に偽装してあるけどこのアビオニクスは間違いないくアナハイムの物だわ。起動ディスクを差し込むスリットがアナハイムの規格に準拠している。…… ほら、ここ。」

指を指して場所を示す二ナに向かってモウラが尋ねる。

「 …… ん、で？」

「で、じゃないわよ。これは明らかに矛盾してる。起動ディスクの規格統一は一年戦争終結後にアナハイムを中心に行われた物よ。それまではお互いの企業が作ったモビルスーツのデータが勝手に弄られない様に各社とも規格がまちまちだった。ドムが生産されたのは一年戦争の間だけだったからこの機体にアナハイムのアビオニクスが搭載されているという事は、当時連邦軍に武器を供給していたアナハイムがジオンにも技術提供をしていたと言う動かぬ証拠になるわ。」

それはあの時にアナハイムがデラーズフリートに物資を供給していた事と同じ様に。その件は専務の自殺によって真相を闇に葬られてしまったが、今また再び二ナの目の前に姿を現した事実はその時の疑念を再び思い起こさせる物だった。

「てことはつまり、この機体はジオンがアナハイムの技術協力を受けて作られた『宇宙専用』のドムだって事か。」

「『宇宙専用』？」

モウラの言葉を聞き逃さなかった二ナが復唱して聞き返す。モウラは自分の思い通りの言葉に注目してくれた二ナに向かって小さな



笑みを漏らして答えた。

「そう。こつちも開けて見て色んな事が分かってきたよ。このドムは純粹に宇宙空間での運用を目的として作られたもんだって事がね。装備されているバックパックと本体内蔵の脚部エンジンはは何れも熱核『ロケット』だ、重力下使用のドムが装備している『ジェット』や『ホバー』じゃない。おまけにスラスタークバーが異常に小さい。」

元々ドムという機体はツイマツト社（ZIMMAD）が社運を賭けて開発した陸戦用のモビルスーツである。一年戦争前に極秘に行われたジオン軍の主力機選定の為のコンペにEMS-04を擁して挑んだ彼らは競合相手となったジオニツク社のYMS-05に敗れた。敗因は搭載したエンジンの出力に機体が耐え切れずに空中分解したテスト中の事故による物だが、敗れたとは言え絶対の自信を誇る自分達の技術をこのまま歴史に埋もれさせる訳にはいかなかった。ツイマツト社の技術者達はいつか自分達の技術がジオン中興の手助けとなる日を夢見て臥薪嘗胆の思いで研究を重ね、そして意外にその日は早く訪れる事になった。地球陥落を間近に見ながら連邦軍の思わぬ反撃に遭遇したジオン軍はその理由を現状配備されているザクとMS-07Bの機動力不足と捉え、直ちにその欠点を補う機体の開発を各社に命じた。

だがザク・グフと言う名機で立て続けに正式採用を果たしたジオニツク社にとつて、これだけ短期間の間に新機軸の機体を開発する事など困難であった。ジオニツク社の混乱を感知したツイマツト社がこの千載一隅のチャンスを見逃す筈も無く、予てから検案していたグフ試作実験機からモデファイされた『プロトタイプ・ドム』をジオン軍に提出する。

ズダに搭載された『土星エンジン』は宇宙空間では暴走と隣り合わせの危険なエンジンであった。だが大気と重力と言う抵抗力が常に存在する地上下の運用に於いてならば際限なく出力が上昇する事

も無く、暴走を防ぐ事が出来る。安全性向上の為に開発された制御リミッターを新たに付け加えたズダのエンジンはそのまま試作機に搭載され、そして彼らの思惑通りの成果を上げて、望みを叶えた。試作機は僅かな構造変更を受けただけで、ほぼそのままの形でジオン軍のモビルスーツの中で三番目の正式名称『MS-09』を与えられて戦場を駆け巡る事を許される。

新機種の登場は前線で戦うジオン軍、連邦軍双方の兵士に強烈な印象を与えて、膠着した戦線は遂に大きく傾くかと思わせた。だが残念ながら戦術的に優位に働く事象が全体の戦略に及ぼす影響は余りにも小さく、しかも遅きに失した。

連邦軍が投入した『RX-78』<sup>ガンダム</sup>のヴァリエーションである陸戦型ジムによって戦線は一気に押し切られた形になり、地球上での橋頭堡を失ったジオン軍は宇宙への退却を余儀なくされ投入した地上戦力の全ては連邦の鹵獲若しくは破壊を許す事になった。

国力の大半を既に注ぎ込んでいたジオン公国にとって喪失した戦費は戦争継続に於いて致命傷とも呼べるほど莫大な額に上った。戦力を増強するにしても主な生産ラインは既に地球上に移転しており、それが接収された瞬間に生産力を奪われたジオン軍は突撃機動軍中佐、マ・クベの提唱した統合整備計画に準じてその製造拠点を自国の各社に置くしか選択肢が無かった。

しかも戦線の縮小と言う戦略的敗北で被害を被ったのはジオン公国だけではなく、其処に参画していたジオニック、ツイマットの両社もであった。開発費用を捻出する事もままならなくなった両社は宙間戦闘用に配備するモビルスーツを地上戦用のモビルスーツの改修によって対処する旨を公国軍司令部に打診し、受理される。

ジオニック社のザクは一年戦争の当初より運用が続けられていた為、機体自体のコンセプトが古い事や装甲が貧弱な事を除けば宇宙での活動に支障をきたす事はない。だがツイマット社のドムはそうはいかなかった。ジオニック社がグフの空間用改装計画を資金難によって見送った事を受け、採用の糸口を見つけた彼らは再びコンペ

に参加する。あまり乗り気ではなかったジオニック社の提出した高機動型ザクを抑えて、彼らが提出した『MS-09R』は再びジオン軍に正式採用される運びとなった。

重装甲によるパイロットの生存能力の確保や操作性について高い評価を得ていたドムはそのエンジンをジェットからロケットに転換する事で、後退を続けていた戦線を押し戻す為の更なる戦力として期待された。もつともそれは本国で密かに開発が続けられていたジオニック社の『MS-14A』が登場するまでの僅かな間に過ぎなかったのだが。

「じゃあ、これって地上じゃ使えないって事？ …… 何よ、それじゃあほんとにジャブローの嫌がらせじゃない。」

二ナが非難の声を上げた。自分が今まで苦労してた時間とはち切れた脳細胞を返せと言わんばかりに、戦時下ならばMPがすつ飛んで来そうな発言をする二ナに向かってモウラが思わず苦笑いをする。「まあ、エンジンの換装は気長に申請を出してりゃいつかは何とかなるでしょ。でもねえ、機械的な部分は何とかなるにしても肝心の操作系統がこのざまじゃあ、何とも。」

「でも何で今頃になってリック・ドムなんて送って寄越したのかしら？ どうせだったらアナハイムの本社に送って構造解析してもらった方が早いと思うんだけど。」

「それがさ、どうも只のリック・ドムでも無さそうなんだよね。」  
「どういう事、と疑問を口に出さずに視線だけでモウラに送る二ナ。答えを要求する二ナの熱い眼差しを受けてモウラが応えた。

「リックドムなら左胸に拡散ビーム砲が付いてる筈が無いんだ。でもこの機体にはある。ひよつとして後付けされたのかと思ってその辺りを探ってみただけで配線的に問題が無いんだ。それに ……

何と言うか全体的な印象がどうもあたしには違って見えるんだ。リック・ドムならあたしもソロモンで鹵獲した機体を見た事があるから何となく分かるんだけど、この機体は何と言うか …… ちょ

つと印象が違う。

「<sup>シヴァイ</sup>」

「それだつたら『？』の可能性は？ ジオンの統合整備計画で地上用のドムが改修されたのならそれも有り得るんじゃない？」

「だからあ、さつき『純粹に宇宙空間での運用を目的に作られた』って言ったじゃん？ そういう改装の形跡がこの機体には何処にも無いんだよ。仮にもしそうだったとしてもこの機体にアナハイムのアビオニクスが搭載されている説明が成り立たない。あれは一年戦争の最中に行われた物だからね。改修に参加したツイマットの技師達がこれを見たら鼻から煙を吐いて怒り出すに決まってる、とつくの昔に躍起になって付け替えてる筈だよ。」

モウラの意見に納得して、ふむ、と鼻から息を吐く二ナ。

完全停止した融合炉に繋がる操作系统全てを閉鎖する封印が解除できない限りこの機体が動き出す事は有り得ない。絶対に解けない魔法を掛けられた、全てが矛盾だらけの機体。それにジャブローがこの機体をアナハイムに送らなかつた事も気に掛かる。

計算高い事で知られるティターンズの連中ならばこの事を取引の材料として、『あの時』以来アナハイムに対して続けられている法外で理不尽な要求への上増しを考えそうな物だが、とも思う。その一方で二ナの眼にはこの一連の不可解な状況がジャブローの見えない意思としてこの機体に散見する様々な矛盾ごとこの地に封印しようとしている様な印象を受ける。

私達をここに封じ込めたのと同じ様に。

だがあの戦いで残った全ての物証は自分の知る限りでは殆ど消去されている筈だ。それにあの事件の真相を知ろうとした者はやはり世界で暗躍する諜報部の手の者に暗殺若しくは蒸発と言う憂き目にあっている。世界中に張り巡らされたネットの隙間から滲み出して来る微かな情報を頼りに世界の近況の手掛かりを求める二ナではあつたが、軍に属している限りは身の安全は保障されている代わりに情報の取得に対する権限は著しく制限されていると言つのが実情だ。そんな僅かで大雑把な醜聞塗れの電子配信タブロイド誌の中にも、

自分達と同じ様な境遇に陥る関係者を生み出しかねないほど大掛かりな紛争や陰謀が存在したと言う気配は見えて来ない。

ドムがここにある理由について思案を巡らせる二ナがモウラの体越しに横のモニターに視線を送る。外部電源によって作動しているモニターはかつて自分が手がけた一号機の物より狭く、それがこの機体の年式を感じさせる。整備の為に跳ね上げられたシヨルダーアーマーがモニターの全てを埋め尽くし、何かの意図があつて塗られたであろう眼にも鮮やかな緋色に焦点を置いてポツリと眩いた。

「……まさに『眠れる森の美女』つて感じね。掛けられた魔法を解いてみないと正体も分からない、さてこのお姫様の目を覚ます事の出来る王子様は何処にいらつしやるのかしら？」

「動かなくなつた年代物の機械はハンマーでぶつ叩いて無理やり目え覚まさせるつてのがあたし達のしきたりなんだけど？」

「乱暴だわ。」

返つて来たモウラの答えに笑いながら、二ナはコンソールから引つ張り出された入力用のキーボードを置んだ。解除コードが分からない限り二ナがここで出来る事は何もない。ただ二ナ自身もモウラと同様にこの機体の再起動を此処で諦めるつもりはなかった。このアビオニクスがアナハイムの物だと分かった以上自分の付け込む隙はどこかにある筈だ、今に見てなさいよと心に誓つてシートから腰を上げた。

二ナが店仕舞いを始めた事を受けてモウラが先にコクピットからバケツトへと乗り移つた。狭い開口部から腰を屈めて出てくる二ナに手を差し出してサポートする。伸ばされたその手を眺めながら、二ナが不意にモウラに尋ねた。

「そう言えばモウラ、今日……」

「ん、何？」

笑顔で聞き返したモウラに向かつて二ナが一瞬ためらいを見せた。言葉を止めた唇が小さく開いたまま時を無くして。だが束の間の時を経て二ナはその先へと言葉を進めた。

「アデリア、来てない？」

モウラの手が二ナの手を掴んでバケットへと誘う。強い力に引張られて二ナの体はまるで蝶の様にひらりとバケットの中に納まった。コクピット内での作業が完了した事を眼下の整備士に手で合図しながらモウラが答えた。

「今朝来たよ、つつつても来たのはマークスだけだね。あいつら昨日のお詫びに皆の買出しを引き受けてくれるんだと。整備班全員の買出しリスト持ってサリナスに向かったよ？ 今頃はもう着いてるんじゃないかな。」

「そう………」

小さな溜息と共に呟かれるその言葉にモウラはどことなく二ナの安堵を感じる。ふつと気になって横に並んだ二ナの横顔を眺めて。

サングラスの淵から覗く二ナの目が赤く充血しているのが分かる。少し腫れもある。それは二ナ自身がモウラに語った様に過睡眠から来る腫れとは全く違う物である事をモウラに教えた。

「二ナ、あんた昨日アデリアと………」

直感に従って聞いただそうとするモウラの言葉に小さく肩を震わせる二ナ。

その事について触れられる事を拒む様に二ナの手がバケットの手摺を強く握り締める。普段はそんな仕草などおくびにも出さない二ナの変化を目にしてモウラは自分の質問が今の彼女にとってどれだけ残酷な物であるかを察した。恐らく昨晚、アデリアと何かあったのだろうと理解して、それでも。

「……… いや、何でもない。」

彼女を責めないと決めたのだと。自分が二ナの友人である以上、彼女のどんな行いもどんな決断も許すと心の誓ったのだと、あの日二ナから告白された日の記憶を思い出す。

破顔したモウラが二ナへと振り向く。その笑顔に自分の全ての気持ちを込めて伝えたモウラに向かって二ナは困った様な、しかし精一杯の感謝を込めてサングラス越しに笑顔を返した。

「で、それがお前の罪滅ぼしって訳か？」

シヨップिंगセンターに併設されるカフェのデッキでマークスがしみじみと言った。日差しを遮るタープの無い席の向こう側に置かれた二台のカートは既に物が崩れ落ちんばかりに積み上げられている。過積載も甚だしい二台のカートの持ち主は青銅製のテーブルの対岸に分かれてお互いのオーダーに喉を潤している最中だった。

「全く、そんなんだったら最初からあんな事言わなきゃいいのに、お前ってほんと不器用」

「……言われなくたって分かってるわよ……」

テーブルに突っ伏したアデリアの栗色の髪が日差しに揺れる。ティファニーのナビエーターで隠した藍色の目が充血して腫れている事は既に確認済みだ。薄いニットに白のサマーセーター、デニム地のショートパンツにサンダルと言う出で立ちは恐らくこの近辺に通る男性諸氏の視線を引き付ける事は間違いなく、実際彼女が何者かを知ろうとする野次馬が遠巻きに二人を眺めている視線は常にマークスも意識している。

だが今日の前で反省しきりの声を上げるアデリアは、恐ろしい二つ名を持つモビルスーツ乗りでもなければどこかのグラビアを飾るモデル紛いの美少女でもない。有り金全部をドッグレースの一点買いにつっ込んで呆気なく敗れ去った拳句、帰宅する電車代をどうしようかと悩む賭博初心者の負け組に見えるのは気のせいか。

「大体、整備班の買出しと二ナさんへのお土産が同じ量ってのはどういう事だ？ それにその包み」

マークスがちらりとカートに目を遣った。二手に分かれたマークスがアデリアと合流してみると既にアデリアのそれは満杯になっていた。いくら地の果てに押し込まれて世情に疎いマークスでも専門店街を一回りしたカートが満杯になっているという事の意味くらいは分かる。

「よく分からないけど全部ブランド品だろ？ 一体どれだ

「使ったんだ、そんなに給料貰ってないぞ？ 賞与だってまだだし。」

「……貯金、全部。」

「搾り出す様に呟くアデリアの答えを受けてマークスが大きな溜息をついた。恐らくその貯金の中にはチェンに貰った出演料も含まれているに違いない。足を紐で結ばずに断崖絶壁から飛び降りた僚機の行動を咎める様にマークスが言った。」

「そんなに落ち込むんならいつその事謝っちゃえば良いじゃないか。『昨日はごめんなさい、私が言い過ぎました』って。二ナさんだってそんなに心は狭くない、きつと笑って許してくれるって。それに多分二ナさんも今頃アデリアの事探してるんじゃない。」

「……絶対いや。だってあたし間違ってるじゃないもん。」

「そのカートの山は既に謝ってる証拠だろ、とマークスは言及したい所であったが不意に持ち上げられたアデリアの表情を見て思いとどまった。どうやら物を買う事と謝る事とは彼女にとってまったく別の次元の話であるらしい。」

「見掛けの可憐さの中に隠された意固地なまでの頑固さが、マークスだけが知るアデリアの長所だと思う。絶対に揺らぎそうにも無いアデリアの決意を突きつけられたマークスは、いつもの通り彼女の自主性に従うしかなかった。」

「分かったよ。その代わりそのプレゼントの山はアデリアが二ナさんに直に渡すんだぞ？ それ位はやらなきゃな。」

「マークスの勧めを耳にしたアデリアがそれまでの消沈振りを払拭して上体を起こした。懇願の為に合わせられた両手がマークスとアデリアの間を遮る。」

「ええっ？ あたし無理、マークス代わりに渡して来てよ。……」

「ねっ、ほんとお願いつ。何でも言う事聞くから。」

「周りの人がびっくりするから誤解を招く言い方するな。それに気まずいのは俺も一緒なんだよ。」

「珍しく聞くマークスのぶっきらぼうな物言いに前で合わせた手を」



解いて、しげしげと見つめてくるアデリア。サングラス越しに注がれる視線に最初に出会った日の事を思い出して、マークスは思わず視線を逸らした。

「…… 何で？」  
「…… 俺も二ナさんが間違ってるって言っちゃったんだよ、ついで。」

今度はアデリアが呆気に取られた表情でマークスを眺めた。アデリアにしてみればてっきり自分の暴言の後始末をマークスが綺麗にしてくれたかと思いついていたのだ。夫唱婦随こそが僚機の基本だと士官学校時代に教え込まれたのは確かだが、まさか揃いも揃って同じ行動に出ているとは夢にも思っていなかった。

アデリアが恥ずかしそうなマークスの顔をじっと見つめた後、はは、と笑って背もたれに体を預けて空を仰いだ。

「ほーんと、あつたし達つて不つ器用。こんなんでよくコンビとしてやっていけるかだわ。ほんと、やんなっちゃう。」

「俺はアデリアが正しいと思ったから二ナさんにそう言ったただけだ、別にお前の味方をしたり肩を持ったわけじゃ」

「うん、分かってる。」

上体を起こしたアデリアがマークスを見つめる。マークスの視界の中でアデリアの表情が変化した。零れんばかりの笑みはマークスの心の中で燻っている気持ちに火を着けかねない。

「ありがとね、マークス。やっぱりマークスが僚機でよかった。」

「そうだ、忘れてた。」

気を取り直してそそくさと立ち上がったアデリアがいそいそとカートの向かう。その後姿を眺めながら、そついやどちらがああプレゼントの山を二ナさんに渡す事になったんだ、と結論の出ない論議に思いを走らせてアイスコーヒーを口にするマークス。

慣れはしたが炎天下を思わせる日差しは既にマークスの飲み物の氷すら溶かして人肌近くにまで暖めている。これじゃ基地で飲むコーヒーの方がいくらかましだな、とぼんやり考えていたマークスの

手元にカートから戻ってきたアデリアが小さな包みを差し出した。

「はい、これ。」

テーブルの上に置かれた包みは丁寧なラッピングが施されている。怪訝そうな表情で見つめるマークスを他所にアデリアは、早く開けてと体全体で意思を表す。

「俺に？」

訝しい表情でアデリアを見つめるマークス。促されると言うよりは急かされた感じで手を伸ばしたマークスが不思議そうな顔をしたまま丁寧な包み紙を開いた。中に収まった白い箱のフタを開けると、そこには今若者の間で流行のイヤーフック式の携帯が治まっている。

「……なに、これ？」

「見た通りの携帯電話。マークス、持ってなかったでしょ？」

別にマークスが携帯電話を所持していないのはただ単に必要ないからだ。実家への連絡は基地からの衛星電話で間に合うし、基地の外に親しく付き合う友人もない。第一友人を他の基地で作る事が出来るくらい人間関係の機微に長けていたとしたら、恐らくここに来る事はなかっただろう。

今の自分にとっては不必要とも言えるその華奢な機械を指で摘み上げて、珍しそうに眺めながらアデリアに言った。

「いや、それは見れば分かるけど……お前、二ナさんのと一緒に俺の物も買ってきたのか？」

「いつ、いやだ、かつ勘違いしないでよっ！」

マークスの言葉をどういう意味で受け取ったのか、アデリアの顔が真っ赤になった。アメリカンコミック風な書けば頭の天辺からボン、と煙が吹き上がるとでも言うのだろうか、狼狽を極めるアデリアがオロオロとしながら言葉を詰まらせた。

「そ、それはあれよ、日頃お世話になってる部下からのっほっほんの心ばかりのお礼のつもりよっ、絶対マークスの考えてるようなプツ、プレツ、プレツセントなんかじゃないんだから！」

「？　そうか、まあ有ればいつかは必要にはなるかも知れないな  
……　悪いアデリア、氣い遣わせて。幾らだった？」

アデリアの好意の押し付けに感謝の辞を述べたマークスがごそごそとポケットをまさぐって財布を取り出そうとする。その仕草を見たアデリアがまたかこんちくしょうと言わんばかりに小さく怒鳴った。

「バカッ、そんなのもう知らないわよ！　いいから黙って受け取ってよ！  
【ほんとに唐変木なんだから、いったいいつになったら】」

「？　なんか言ったか？」

早いとこ察しの悪いこの相棒を何とかしないと自分の精神衛生に関わるわね、と心の底で決心しながらアデリアは嫌味な笑いを浮かべてマークスに言った。

「マークス、今度あたしとここに来る時までとその携帯の使い方完全に把握しといてね。今日みたいに待ち合わせ場所を決めて時間になったら落ち合うなんて、気になって買い物に集中できないからそれと」

じろりと。座ったままアデリアの顔を首を傾げて見るマークスの全身を、頭の前からつま先までじっくりと眺め回した後に溜息混じりに言った。

「今度は私服で来なさいよ。何でたまの非番の日にあんたは制服なんて着てる訳？」

「連邦軍人だから。」

「周りから浮いてるって自分で気付かない？　って言うか一緒にいるあたしがこんな服着てんのに何であんたがそうなのよ。」

「逆だよ。俺が私服で来たらこんなもんじゃ済まないよ。服なんて学校を卒業してから一回しか買った事がない。そんなに俺の禁断のコーディネートが見たいのか？」

「……　分かった。じゃあマークスは人前に出られる様な私服が一着も無いって事で、OK？」

やっぱり口じゃ敵わない、とアデリアは早々に攻撃方針を変える事を決意した。戦略目標を鎮圧する為には先ず敵に対して最も有効な戦術を採用すべし。戦史の時間に習ったその言葉をアデリアは教科書通りに忠実に再現する事に決めた。

口で敵わないなら、実力行使あるのみ。

「じゃあ、今度はマークスが貯金をはたく番ね。今度の一緒の休みはここへマークスの私服を買いに来るのよ、いいわね？」

「よくない、ちっとも良くない。服なんか官給品で十分だよ。それに俺の見た目はアデリアが一番分かってるだろ？ これに似合う服なんて」

「だーいじょうぶ、大丈夫。あたしに任せときなさいって。マークスの髪と目にぴったりの服をあたしがきっちりかつきり合わせてあげるから。黙って立ってりやかっこいいんだからマークスは大人しくモデルになつてればいいの。」

そう言うつとアデリアは徐に立ち上がってそそくさとテーブルの上に乗せられたままの飲み物をマークスの分まで片付け始めた。

「お、おいアデリア、それまだ途中」

「どうせぬるくて不味いんでしょ？ 顔に書いてあるわよ。それにそうと決まったらこんな所ではーっとしてる場合じゃないわ、とりあえず下見がてらあちこち見て回らないとね。マークスは荷物をバンの置いて来て、あたしはここを片付けとくから。」

「ええっ？ お前、まだ行くのか？」

アデリアの発言に耳を疑うマークス。驚いた顔をするマークスに向かつてアデリアは片付けを中断して、右手で銃の形を作って“バーン”といいながら肘を折る。掲げた腕の陰から僅かに顔を覗かせる美少女が長い髪を風に靡かせ、小さくウインクをしながら言い放った。

「あんたも、来るのよ。」

ラーズ1の提案を耳にした四人が一齐にテーブル上に広げられた

地図から目を離して顔を上げた。四人の視線の先に立つラーズ1は室内の空気を一変させた原因が自分である事にも我関する事無くじつと窓の外を眺めている。

「作戦の順番を変える …… のですか？」

「おやおずとした口調でラーズ1の機嫌を確かめる様に、四人の中で年長者らしき男が尋ねた。

今回彼らが遂行を命じられた作戦はオークリー基地周辺の偵察が主体になっている。大気圏外から撮られた衛星写真では確認出来ない微妙な地形の起伏や基地の生命線とも言えるライフラインの確認、そして自分達が作戦を開始する時刻に通常ではどの様な警備体制が敷かれているかを調べる為の重要不可欠な任務である。今までの作戦では衛星写真とネットワークを通じての情報の収集のみに終始していた。不測の事態による情報の漏洩を恐れていた為

旅団が始めて『斥候』を派遣したと言う事実は彼らがいかにかに『軍の基地』を襲撃する事に対して神経質になっているかを裏付ける事が出来る。

事前に聞かされていたこの任務の位置づけを聞いて緊張を新たにしたり新規参入の四人なら兎も角、長く旅団の実戦部隊の先鋒を務めるこの男が初めて実施される作戦内容を訂正する事など考え付かない事だった。およそ命令違反とも思えるその提案は軍の規律を下敷きに考えても戦略の常識から外れた物であると言って構わない。

「そうだ、今晚実施する基地周辺の施設の偵察は後回しにする。任務の重要性から考えて、先ずオークリー基地の内部の状況を知らなければならぬ。」

「それは理解できますが …… しかしあの基地は基地と言っても駐屯地のような物、配備されている機体も時代遅れのものばかりと事前に渡された資料には記載されています。何をさておいても調べなければならぬほど重要な事では

「敵を侮るな。」

静かではあるが強い否定を交えてラーズ1は言った。指揮官然と

したその声音に含まれた自信と威厳は尋ねた男に聞く耳を持たせる。恐らく彼に帯同する他の三人も同じなのであるう、じつとラーズ1の言葉に耳目を向けている事が雰囲気によって理解出来た。

「例え駐屯地と言えども基地は基地だ、そしてモビルスーツ一個小队ともなれば少なくとも三機の機体がいつでも緊急出動できる状態スランブルで待機している。時代遅れの機体であろうと部隊員がまだ若かろうと奴らも軍人だ、それなりの訓練や経験のある者だと決めて懸かった方が賢明だ。」

ラーズ1の発言には説得力がある。確かに周辺の地形を調べるよりもいち早く敵の戦力を確認しておきたいと言うのは、近い内に敵として対峙しなければならぬ彼らにとっては本音に近い。前線でジオンの残党狩りに参加して生き残った身の上とは言え、今までとは勝手の違う部隊で勝手の違う相手と戦わなければならないのだ。その不安を払拭する意味でも相手に関する情報は一つでも多く手にして置きたいと思うのが強襲する側の理屈と言う物だ。

「しかしそうになると今準備している装備を全部変えなければなりませんね。あの辺りは砂漠地帯ですから夜間になると冷え込みが厳しい、それに対人レーザー用のフェライトシートを携帯しないと。」

……  
一旦カリフォルニア基地に戻って決行を明日の晩に見送りますか？」

「いや、それは必要ない。」

笑ったような気がする、と自分の問いに答えたラーズ1の声を聞いた男は密かに思う。男の思惑を意に介す事無くラーズ1は言葉を続けた。

「今から作戦会議に入る。作戦の開始は会議終了後、準備が整い次第直ぐに決行する。」

「い、今から……ですか？」

ラーズ1の提案の意味を解する事が出来ずに戸惑いの呟きを漏らす面々。驚く四人を尻目に未だに窓の外から視線を離さないラーズ1は右手に握られている折りたたみ式の双眼鏡をぶらぶらと振りながら小さく頷く。

「いくらなんでもそれは無茶だ。地上班の連中ならともかく我々はモビルスーツパイロットです、確かに地上戦の最低限の教練は訓練課程で済ませてはいますがそれはあくまで自分達が敵の中に孤立した時にのみ役立つ緊急脱出の為の手段で、彼らの様に臨機応変に対応できる代物じゃない。」

「分かつている。お前達にも俺自身にもそれほど活躍や能力は期待していない。我々の本分は他にあるのだから。」

男の反論にいくらかの譲歩を見せたラース1の手が双眼鏡の隅から小さなメモリーカードを取り出した。先ほどから会話を続けている男を気に入ったのだろうか、ラース1は後ろ手にそのメモリーカードを放り投げて男に渡す。行動による彼の意思を推測したその男はすかさず隣の男に目配せしてその中のデータを開く様指示した。予期せぬ贈り物を手渡されたもう一人の仲間は慌てて手元にある携帯用のプリンタにカードを差し込んでデータ解凍の為の操作を始める。

「作戦の立案は俺が行う。お前達は速やかに準備し、指示通りに実行すればそれでいい。」

断言するラース1の言葉は命令に近い効力を持って四人の耳から脳内へとプリントされ、そして其処に記載された上官からの命令は至上だ。彼らが見せた束の間の戸惑いはラース1のその言葉によって影を擲めた。

一斉に敬礼を返す四人の態度を背中で察したラース1がようやく窓の外から視線を離して振り返った。

その表情に息を呑む四人。

今までのその冷静な声は一体その表情の何処から放たれていたのかすら分からないほど、ラース1の顔は大きく歪んでいる。一人一人の命を造作も無く奪った瞬間にも何の感情も見せなかつた双眸は大きく見開いて目尻を引き攣らせ、瞳の中に燃え上がる冥い炎は殺気を伴って四人の影に叩き付けられた。

大きく歯を剥きだして嗤うその顔はまるで悪魔の長の様に解けな

い鎖で四人の心を縛り上げる。

「し、指揮官殿 …… 何故、その様な

心臓を握り潰されそうな声で辛うじて尋ねる男の顔を睨みながら、  
ラーズ1は尚も口角を上げて逆に尋ね返した。その声すらも冥界の  
澱みから漏れ聞こえる妖魔あやかしの呻りに等しく。

「どうした、俺の顔に何か付いているか？ それとも俺の顔はそんなに恐ろしいか。お前達の期待を裏切るようで悪いが、俺はこんなに愉快な気分は久しぶりだ。お前達も笑うといい、遠慮はいらない。」

促された事が逆に四人の心胆を氷点下に晒して凍えさせる。その様をまるで愉しむかの様に嗤い顔を崩さないラーズ1の視線の先に、携帯用のプリンタから吐き出されつつある二枚の写真が現れた。一瞥したラーズ1は自分の要求を端的に絞って四人に命令する。

「作戦目標は、その二人だ。 …… 必ず生かしたまま俺の所へ連れて来い。必ず、だ。」

思わず視線を落とした四人の前に吐き出された二枚の写真。ラーズ1と会話を続けていた男の取り上げた一枚には豪華な銀の髪にカーキ色の連邦軍の制服を纏った青年の笑顔、その腕にはオークリー基地所属のモビルスーツ部隊を表す濃紺の地に白い鳥が羽を広げてジオンの紋章を銜えて飛ぶ部隊章インシグニアが貼り付けられている。

そして其の場に置き去りにされたもう一枚の写真に写った美少女栗色の長い髪が午後の光に照らされて煌くその表情に浮かぶ、万人誰もが見とれるであろう華やかな笑顔。

凍り付いた心と体で再び見上げた四人の視線の先に映ったラーズ1の表情、そして全身から放出される狂気に抗える者は少なくともこの場には存在しなかった。瘴気にも似た怨念に憑依された四人はおびえた表情だけを貼り付けたまま、操り人形の様にギクシャクと敬礼を返す。

手中に収めた手駒の体たらくを哄笑を上げて睨み付ける、地上に光臨した悪魔の長。人の姿を借りた彼の背後に広がる大きな窓から



は今や伏魔殿バクマモニウムの如き輪郭を露にした、サリナスで最も賑わいを見せる場所であるシヨッピングセンターが冲天の日を浴びて巨大な全貌を覗かせていた。

## 開幕ベルは突然に

試着室のカーテンを開かず、頭だけを差し込んで、自分が選んだコーデインイトの仕上がりを確認するアデリア。傍から見れば奇妙に見えるその光景も実は一軒目の店で起こった騒動を経験した上で、の予防措置だった。

突如として光臨した異界の青年の姿形に中てられた買い物客はその正体を確認せんと好奇心を剥きだしにして二人の元へと押し寄せ、渦の中心で木の葉の様に翻弄された二人は愛想笑いと無愛想笑いを振りまきながらほうほうの体で一軒目の店を後にした。その際どちらも前者でどちらが後者であったかは言うまでもあるまい。

マークスの容姿はことファッション界と言う異質な世界に於いては決して卑下する様な物ではないとアデリアは常々思っていた。プラチナのように輝く銀色の髪や神秘的な二色の瞳は普通のモデルが真似しようと思っても不可能なほど彼の存在にマッチしている。それは生まれながらにしてその『欠陥』と苦楽を共にして来た持ち主だからこそ得る事の出来た唯一無二の資質なのだと思う。

だが当人も知らぬ間に封印され続けてきたその兵装の破壊力はアデリアの想像を絶する物だった。自分が彼の隠れた才能を発掘したのだと人に喧伝したい欲求と、彼が放つ神がかり的なオーラが彼を観とめる全ての女性を虜にしてしまうと言う不満がアデリアの心中で複雑に絡んで、マークスに向ける表情は必然的に不機嫌な物になってしまふ。

「……………にしてもこの服窮屈だな。これじゃなんかあった時に体が動かないだろう。男の普段着なんだからもつと機能性を重視してだな。」

試着を終えてぶつぶつと不平不満を垂れ流すマークスの表情とは違う意味でありながら同じ様な表情で見つめるアデリア。ひとしきり愚痴った後で視線に気付いたマークスがアデリアに向かって同意

を求めた。

「 な、アデリアもそう思うだろ？ 」

「 そうね。よく似合ってると思うわ。 」

ぶつきら棒に言い放ったアデリアの言葉にマークスが奇妙な表情を浮かべた。会話が噛み合っていないと気付いたのはマークスだけで、自分の思考の中に体を浮かべられるアデリアにはそれが何についての事なのかを気づく機会も無い。

「 お前、俺の話聞いてたのか？ 俺はこんな動き辛い服はいやだつて言っただぞ。何でそれがそうなる？ 」

「 似合ってるんだから良いじゃない。それに最近の服って皆そんな物よ、出来るだけ体のシルエットを強調出来るようにタイトな作りになってんの。今時軍の服みたいな機能一辺倒のデザイン無視的な服なんてアウトドアシヨップにしか売ってないわ。 」

「 何だ、それを早く行ってくれよ。じゃあそこに行こうぜ、こういうのはどうも俺には 」

「 だめよ、それじゃお金にならないじゃない。 」

「 …… なに言ってるんだ、お前？ 」

当初の目的から逸脱していくアデリアの発想を嗜める様にマークスが言った。

言われて気付くアデリアではあったがその発想と表情を変化させる気は端からない。確かにマークスの私服を選ぶ事が目的ではあるのだが、この先コレクションを増やして行く為に必要なマークスの実弾が心許ないのは自分の給料明細から推測しても明らかだし、ご自慢の貯蓄など高が知れている。吹けば飛ぶような残高の口座預金にしがみ付くよりも現実の資産を活用してこの先の運用資金を確保していくプロセスを構築する為にも最初に購入する服は慎重に選ばなくてはならない。

それにアデリアが自分のへそくりを作る為の根城に定めたチェンの販売網は伊達じゃない。生写真の売り上げは勿論の事、アデリア達が身に着けている服を購入する為にクリックされるアフィリエイ

ト広告はその売り上げに依じて服飾メーカーから巨額の還付金をチエンに齎してその一部がモデルの下に入ってくる。チエンが立ち上げた合法的なネットビジネスの仕組みを知っている以上、アデリアが偶然手に入れた金の卵に最初に施す装飾について神経質になるのは当然の事だった。

しかし、何でも良く似合う奴ねえとアデリアは心の中で舌を巻く。自分の様な素人の見立てた服でも難無く着こなしてしまうこの才能は何なのか、とマークスの出で立ちを眺めながら思った。

世の中で『モデル』と持て囃される人種が陰でどれだけ苦勞をしてその体型や容姿を保ち続けているかと言う事をアデリアは色々なファッション雑誌の記事を読んで知っている。ましてや此処に立っている男はそんな世界の対極に位置する『軍』と言う名の異次元に居を構える名も無き一兵士に過ぎない。確かに軍人と言う物が自分の肉体を財産とする以上常に鍛え上げられていなければならないのは当たり前  
それは自分についても同じ事が言える。アデリア自身も自分の体型を維持する為に特段の努力をしている訳ではない  
なのだが、自分の審美眼に絶対の自信を持つアデリアが思わず畏怖の念を持ってしまうほど、マークスのモデルとしての資質は群を抜いている様に思う。彼が今まで差別され続けていたのはその容姿が不気味だからではなく、ひよつとしたら自分が初めてマークスと出会った時に感じた通り、余りの美しさに嫉妬してしまったのが本当の理由なんじゃないのかと思わず考え込んでしまうほどだ。

「まるで、ギリシャ神話のナルシスね …… 変な深みに嵌んなきゃいいけど。」

ぼそりと呟いたアデリアが姿身に映った自分の容姿に眉を聳やかすマークスを上目遣いに眺めた。鏡に映った自分の姿をまるで異星人でも見るかのように顔を顰めるその光景を見る限りではマークスがファッションと言う魑魅魍魎に魅入られる事は有り得ないと思う。資産を無限に食い潰す悪魔に付け込まれる為の大事な『興味』と言

う資質をこの金の卵は欠片と言っていていいほど持ち合わせてはいなかった。自分の知る限りマークスの趣味は専ら軍人らしいアウトドア系の物

最近は趣味と実益を兼ねて兎狩りがマイブームの様だが 限定され、とてもじゃないがそんな服を着て悦に入るマークスの姿を想像する事は出来ない。どちらかと言えば考えたくも無いという思考の部類に入る。

「どうだ、アデリア？ お前のお眼鏡に適った服はあったか？」

アデリアに尋ねたマークスが上着のボタンを外し始める。辛抱が限界に来た様に窮屈な服を脱ぎ始めた行動を察して、アデリアはカーテンから顔を抜き出して背中越しにマークスの問いに答えた。

「いや、有り過ぎて困るわ全く。この分ならなんか色々試してみたい感じ。今まで見たくカジユアルなもんだけじゃなくてもっと砕けた感じの服もね。…… もう一軒回って見よう、あそこはそういつた感じの服が置いてあるし。」

「それはいいけど色々って、お前まさか俺にコスプレさせるつもりじゃないよな？」

マークスのその台詞が、チェンに見せられた写真を根拠にしている事に気づいたアデリアが思わずカーテンの方を振り向いた。

「…… ちょっと、マークスっ！」

激昂したアデリアが思わずカーテンを力いっぱい開け放つ。下着姿でズボンに足を通したばかりのマークスがびっくりした表情でアデリアの方を振り向いた。何事かと目を丸くして呆然とするマークスに向かって顔を紅潮させたアデリアが我も忘れて仁王立ちのまま一気に捲し立てた。

「人の事、マニアか露出狂見たく言わないでくれるっ！？ あたしだって好き好んであんな格好したんじゃないわよ、心臓病の子供の移植手術にいっぱいお金がいるから、いっちなばん売れそんな格好をしたのよ！ 嘘だと思っんならチェンに聞いてみて」

「わ、悪い、アデリア。俺が悪かった、今の発言は心から謝る、謝るから」

「謝るから、何っ!？」

照れ臭そうに困った様なマークスの笑顔もアデリアに現在の状況を説明するには力が及ばない。彼女が自分の仕出かした振る舞いの迂闊さにやっとな気が付いたのは自分の背後で巻き起こった嬌声と歓声の嵐が巻き起こった時だった。

凍り付いた様に動きの止まったマークスとアデリアの視線と思考がやっとな息を吹き返したのは申し訳なさそうに呟いたマークスの言葉を耳にした瞬間、そしてそれは彼女の顔が紅潮している原因を全く別次元の領域へと転換して。

「……カーテン、閉めてくれる？」

懇願するマークスの言葉を受けたアデリアが慌ててカーテンを引き戻す。気恥ずかしさで急激に上昇した血圧と心拍数で軽い眩暈を起こしながら、それが自分の行いを恥じている事からだけで齎された事ではない事を理解する。

考えて見れば僚機とも言えどもマークスのセミノードを目にした事など一度も無かったアデリアにとって、普段はパイロットスーツに包まれたその頑健な生身を目にする事は衰弱した心臓を強制的に動かす強心剤エピネフリンよりも効果の有る物だった。

「ご、ごめんマークス。」

口籠りながら謝るアデリアに向かってカーテン越しに流れて来るマークスの声はいつも決まっている。ははっと笑いながら優しく許してくれる声は、アデリアが何度も耳にしたお決まりの文句だ。

「いいよ、事情も知らずにそんな事言っただ俺も悪い。これからは気をつけるよ。考えて見りゃお前がただ自分のお金目当てでそんな事する筈ないもんな、うん。」

衣擦れの音に紛れて流れて来るマークスの声に小さく安堵の溜息を漏らしながら一抹の幸福を感じるアデリア。

今日に限らず昨日に限らず、マークスとコンビを組んだあの日から自分は常にマークスに迷惑を掛け続けて来た様に思う。その中には恐らく本来ならば叱責されて然るべき事項も含まれているに違い

ない。だがマークスが自分に対して叱責した事はアデリアの記憶の中には殆ど無く、叱責された時は必ずアデリア自身に猛烈な非が存在する時だけに限られた。昨晚の暴言を吐いた時の様に、永遠に会う事の無い姉の如く。

同情や恐怖心からではなく、自分の事を慮つて常に正しい道へと導いてくれるパートナーを人はどれだけの確立で得る事ができるのか。恐らく奇跡よりは多いが偶然とも思えるその確率を、運命に翻弄された果てに辿り着いたオークリーの地で手に入れる事の出来た幸運に感謝するアデリア。この関係が部隊の上司と部下、僚機と言う関係だけではなく永遠に続く関係であつたならばどんなに自分は幸せになれるだろうと火照つた頭で妄想する。

自分が恋人から妻になり、そして母になる姿などベルファストの一件以来考える事も躊躇われた。自分が救つたと思つていた女性隊員から恨みの言葉を浴びせられて何の弁解の機会も与えられずにこの地に流されてきたアデリアにとってそれは自分の中での禁忌に近い意味を持って存在しているのだ。

人の幸せを独り善がりに壊してしまつた自分に与えられた罰なのだと、そして自分を受け入れてくれる相手など存在してはならないのだと言う先入観に縛られたアデリアは、この男の存在マークスによつてその呪縛を解かれつつある。

それが自分に与えられた僥倖だと、自分にその資格があると信じてもいいのだろうか？ 響離する胸の内で喜と哀と言う名の分銅を載せた天秤が左右に振れてアデリアの過去と未来を裁きに掛けた。

人を傷付けた過去と人を愛する未来、天秤の皿に置かれる罪と望みの分銅はそのどちらに重きを置いて決断を促そうとするのだろうか？ アデリアがそう考えた時脳裏に浮かんだあの光景が天秤の針を一気に未来へと振り切つた。

昨日の夜の二十、罪に囚われて笑う事を忘れた哀れな、我が尊敬する技術主任の打ちひしがれたあの姿を。

彼女の様にはなりたくない。彼女の様に自分の罪に縛られたま

「大事な物を失いたくないと心から思うのだ、決して嘘偽り無く。」

「……ねえ、マークス？」

「こんな状況で告白するのは自分でもどうかしていると思う、でもアデリアは今言っておきたいと心を決めた。今言っておかなければきっと後悔するだろうと、この気持ちが冷めない内に鈍感で鳴るマークスに自分の気持ちをはっきり伝えておかなければ、多分自分は心の炎に焼かれてどうにかなってしまうだろうと言う焦燥に駆られる。」

「……アデリア。」

カーテン越しに聞こえた緊張したマークスの声に心拍数が更に上昇した。

自分とマークスが同じタイミングで同じ事を考えている事は今までに何度もあった。まさかと疑いながら、もしかやと期待を膨らませてマークスの言葉を待つアデリアの前に、カーテンを勢い良く開けて顔を覗き込む異色の双眼があった。

紅潮したままで喉から心臓が飛び出すかと思うほど驚いたアデリアの顔をじっと見つめたマークスが、アデリアが予想したよりも遙かに冷静な表情で唐突に尋ねる。

「何か、焦げ臭くないか？」

アデリアの編隊指揮官の問いに一瞬にして血の気が引く随伴機。

緊張の解け切った自分の意識に湯を入れて演習モードへと切り替えたその瞬間。

悲劇の開幕キヤラルホルンベルは突然に、しかし確かな予言を醸しながら二人の会話を遮った。

「リネン室の方はうまくいったようです。現在延焼中。」

火災警報と共に切り替わったモニターの画面に釘付けになる二人、館内全体の保安を担う為にシヨッピングセンターの管理責任者から給与を得て業務に従事している筈の男達に代わって機能を掌握したラーズ1と年長者の男はそれぞれの表情で炎を見つめていた。ラー



ス1はこれから始まる狂言の開演に心躍らせて、だが彼の傍らに立つ男は同じ世界に同衾する気にはなれなかった。

ラーズ1が立てた作戦の最終目標はオークリー基地に所属する二人の関係者の拉致だ。しかしその為にこれだけ大掛かりな、しかも犯罪行為に手を染めていい筈が無いと思う。しかしそれがもし許されると言うのであれば自分が望んで入隊した『旅団』の力は絶大な物だという事の証明になる。自分達の間で流れた噂が本当なのかどうかを図る為のこれは、いい機会なのかも知れない。

狂った様に点滅するランプが男の目を奪う。警報と同時に近隣の消防署へ通報する警戒システムは既に自分達の手で切つてある。保安管理用のAIがいくらヒステリックに泣き喚いてみた所で現在の主導権はこちらが握っている、自分達が自主的に通報するか若しくは事態に気付いた誰かが連絡しない限り消防隊が出動してくる事はない。

それにシヨップینگセンターの最下層

地下五階にあるリ

ネン室で起こった火災が全体に蔓延するにはかなりの時間が掛かるだろう。自分達が占拠した保安センターは地下一階にあるのだが、そこに火の手が届く事すらいつ頃になるのやら。

火の手上がる光景が映し出されているモニターは何十台と壁面に埋められている中のほんの一つに過ぎない。館内全体の様子をモニターする監視カメラの画像の殆どは、若干の動揺こそ見られる物の不思議な顔をして買物をする人々の様子が警報の鳴り響く前と変わり無く映し出されている。暗い嗤いを巨大なポリゴンの集合体に向けたラーズ1が呟いた。

「分かるか、これが平和と言う物の姿だ。」

独特な感嘆の声音が男の耳に忍び込む。自分達の前でたった一つの感情を露にしているラーズ1が放つた言葉とは思えないほど、絶望に満ちた声だ。

「彼らから遠く離れた場所で起こりつつある恐怖、それを警告するシステム。だが彼らはそんな物に耳を貸す事も無く平和な世界を未

だに満喫している。自分達がそんな目に遭う筈が無いと根拠の無い動機にしがみ付いて仮初の幸福に溺れると言うのは見ていて滑稽だな。」

「滑稽……ですか？」

尋ねた男の顔をラーズ1の目が追った。嗤いの中に潜む狂気が男の心の自由を奪い、操る。

「そつだ。この世に神がもしいるのなら同じ事を考えるだろう、人間と言うのは何と愚かしい、独り善がりな生き物である事かと、な……よく見ておけ、俺達の仲間が彼らの為に死んだ。」

ラーズ1の薦めに従って男の目がモニターに映し出される平和の光景のモザイクを次々に追いかける。だがその時男は、自分達とラーズ1の立ち位置の決定的な違いに気が付いた。

自分には家族がいる、そして館内でラーズ1の立てた作戦に従って任務を続けている仲間にも。自分達はモニターの中で動き続ける大勢の見知らぬ人々と同じ世界に生きているのだ。

確かに生きて行く為の手段として軍という名の不条理を選択はしたが、それは世界が自分達にそうさせたに過ぎない。一年戦争を引き残り、未だに続くジオンの残党との小競り合いを雨後の竹の子を引き抜く様に刈り取って今だに生き永らえている。そして彼らは悟つたのだ、このままでは何れ死ぬ、と。

死が逃れようの無い物ならば、せめて自分の命に値段を付けるとしたらそれは幾らになるのだろう。大掛かりな戦争が終わって彼らの身に訪れた物は、やはり世間を吹き荒れた不景気と言う名の不幸だった。彼らの上官の何人かは依願退職という形で軍籍を抹消された、そして残された者達にも給与と危険手当の大幅な減額と言う現実が待っていた。軍という組織との契約が終わらない限り自分達に選択の自由は無く、彼らはその日が来るまで生き残る事でしか未来を手にする事は出来なくなった。

だがその日が来た時に先の光明がある筈がない。軍で培ったスキルは平和の中では殆ど役に立つ事が無く、寧ろ潰しの利かない軍

人上がりは何処の企業でも、よほどの功績やコネが無い限り敬遠されているのが現状だ。再就職の当ても無く、今より多額の報酬を手に来る手段に自分達が、多少のリスクに目をつぶってでも手を出したのは必然の流れに過ぎない。

それは何の為に。自分達は『誰の為に』それを選択しなければならなかったのか。

自分達の家族を養うために、自分達の家族が永らえて過ごせる為に。それを『愚かしい』等と揶揄する事は許されるのか？

「自分にはそう思えません、指揮官殿。平和は戦いから遙か彼方にあって然るべき物、決して無くなつてはいけないものだと思いますが。」

「正直だな、貴様は。……やはり貴様が一番使える様だ。」

正論をもってラーズ1の言に楔を打とうとした男は、意外な反応で『使える』と言う表現を呟いたラーズ1の言葉に動揺を覚えた。

「貴様の様な奴は撤退のタイミングを見誤らない、俺は今冷静ではないからな。だから貴様を俺の傍に置いているのだ。恐怖に怯えながらも自分を失わずに状況を把握する。それこそが優れた副官の資質と言う物だ、覚えておいて損は無い。」

自分に与えられている役割に驚いて慌てて敬礼で応える男。狂気に侵食されている様に見えてその実決して戦略を見失っていない男の理性の強さに驚きを隠せない。何故この男が先遣隊の指揮官として配置されたかと言う理由の根拠に、改めて『旅団』の実力を思い知った。

「貴様の言う事は正しい、平和と言う物は無くなつてはいけない物だと俺も思う。だがそれはこの世からそれを脅かす物が無くなって初めて口に出来る、ただの理想論だ、今でも世界の何処かで小さな戦争は続き人は死んでいる。現実が現実である限り、彼らが入り浸っているこの世界は幻に過ぎないのだ。ましてやつい最近までそんな混沌に踊らされていた彼らがそれを忘れていい筈が無い。そうは思わんか？」

ラーズ1の指が自分の耳に着けられている携帯を軽く叩いた。それが発令の準備をしるといふ合図だと言ふ事に気付いた男は慌てて自分の携帯のスイッチを入れて準備した。

「だから、今からその時の事を彼らに思い出させてやろうと思うのだ。あの日に突然訪れた破壊と混沌の日々を、そして逃げ惑った彼らが本当に望んだ人としての本能をな。」

「何故ですか、指揮官殿。今更彼らにそんな物は必要ないでは」

「俺が必要なんだ。奴らを拉致する為に。」

強く言い放ったラーズ1の声は男からそれ以上の反問を遮った。言葉を失ってそれ以上の手向かいが自分の身に及ぼす致命的な被害を予見した男が固い表情で命令を待つ。その仕草の見事なまでの線引きに満足したラーズ1が男に嗤いながら命じた。

「勘違いするなよ、俺は此処にいる全ての人に感謝している。『奴』と再び巡り会わせてくれた大勢の子羊達に。その機会は有効に使わせて貰う事にしよう。…… 作戦をフェーズ2に移行、テンカウントで同時に発破しろ。」

「何だ、エレベーター来ないじゃないか。」

荷物を満載した自分のカートが他の客に触れない様に気を遣っている男は頭上にあるエレベーターの指示板を見上げながら呟いた。

独りごちた男の意見は既にその男の物だけではなく周囲でエレベーターを待つ人々の総意であり、彼と同じ様に買い物物を済ませて家路に着く為に地下の駐車場へと向かおうとする客でこった返すエレベーター前は早朝のラッシュアワーのホームの様な状態に陥っていた。全館を下から上まで縦に貫くエレベーターは四箇所に分散して配置されている。カーゴリフトの役割を兼ねるその容積は巨大で一度に十人分のカートとそれに連なる重い物客の全てを滞りなく指定の階へ運搬できる能力を有していた。このショッピングセンターが設計される段階で予想された混雑を少しでも緩和する為に鳴り物入り

で導入された、軍用艦船に搭載されたエレベーターの技術は思惑通りの性能を発揮してこの施設の繁盛に一役買っている。

だが当店ご自慢のエレベーターも全く動かないのではどうしようもない。呟いたその男と妻、そして手を引かれた子供は既に他の三箇所も回った後に此処へと辿り着いた。何処に行っても同じ光景しか映らない現状はいかにも異常な事態であると言う事を彼自身に覚えさせる。地下五階に停止したまま十分以上も動かないエレベーターに起こった異常事態の理由と、それを回避する為に施設側が用意した対策を待ち焦がれる人の薨いっかは未だに打開できない現状に不満の声を上げつつあり、自分自身もその輪の中に加わりたい心境ではあったのだが。

「困ったわねえ、この子のピアノ教室。もう直ぐ発表会だから今日はどうしても先生の所に行かせたいんだけど。」

「あたしは、もうちよつとここにいたいなあ。」

髪を両側で小さく結んだその女の子ははにかみながら母親の顔を見上げて駄々をこねた。小さな天使の反乱を耳にした父親と母親は思わず笑いながら、同時に彼女の顔を見下ろして。

「こら、ミランダ。そういう事を言うもんじゃないぞ？ せつかくママも先生も一生懸命教えてくれてるんだから。」

「そうよ？ みんなの中からミーちゃんが選ばれたんだから、ミーちゃんはみんなの分まで一生懸命弾かなきゃ駄目でしょ？」

自分が選ばれたと言う事を優しく教えた母親に向かつて笑顔で応える女の子。カートの制御を諦めて手を離れた父親が彼女の身体を尚も続く混雑の波から守るように抱え上げた。間近に近寄った父親の顔を見つめて、嬉しそうに笑う女の子の髪が小さく揺れる。

「そうだ、ミランダ、こうしよう。今度の発表会にはパパもお休みを取って見に行くから発表会が終わったら此処でご飯を一緒に食べよう。ミランダが上手に弾けたらミランダの欲しい物何でも買ってあげるぞ、だから今日は先生の所へ行くこと。それでどうだい？」

その言葉を聴いた女の子と母親の顔は違う心境で同じ喜びを顔に

表した。女の子は与えられたご褒美に期待を膨らませて、母親はいかにも父親の親バカさ加減に呆れながらも心の底から幸せに塗れた笑顔を満面に浮かべて父親の顔を覗き込んだ。

「……ほんと、パパ？」

「本当だとも。お仕事もこの所うまくいってるから一日くらい休んだって大丈夫さ。それよりミランダ、ミランダが上手にピアノを弾いている所をパパは見たいんだけど、ミランダはパパにちゃんと約束してくれるかな？」

「うんっ！」

無邪気な子供の高らかな返事とその愛らしさに愛想を崩す父親の顔を交互に見やりながら、またかとはかりに男の妻が声を掛ける。だがその顔に浮かんでいる気持ちには非難の欠片もなく、好意に溢れていた。

「いいの？ そんな安請け合いしちゃって。いざと言う時にまた呼び出しーなんて事になったら、この子ほんとにあなたの事恨むわよ？」

「なあに、大丈夫さ。」

彼女の眼に映る、時を遡って蘇る同じ顔の二人が互いに頬をすり寄せ合って彼女の老婆心を仰ぎ見る。こうしてみるとやはり親子ね、と瓜二つの表情に感嘆を覚えながら彼女も笑いを共有して。

「ここの所大きな仕事もないし、今の現場は粗方片がついた所だしな。これからはお前達と一緒に過ごせる時間も増えるだろう。ミランダに顔を忘れられない為に少しは父親らしい所を」

「ゼ口。発破。」

足の裏から何かが突き抜けた。男の視界が突然揺れてふわりと体が浮き上がった様な気がした。頼りなくなつた足元を確かめる様に全身に力を込めて踏ん張る、だがその努力を嘲笑って彼の周辺にある全ての物が揺れていた。

荷物が満載されたカートから零れ落ちてゆく彼らの欲望、そしてそれを拾い上げる事の出来ずに水位を減らしていく甕の水嵩。蔓延していた雑言は一瞬の内に小さな悲鳴へと移り変わり、散乱する荷物で身動きの取れなくなつた買い物客は蹲つてただ何事かと辺りを見回す。そしてそれは男にとつても例外ではなかつた。周囲の変化に表情を曇らせた妻と娘の表情を交互に見やつた後、不意にエレベーターの指示板へと眼を走らせた。

指示板の文字が消えている。

「あなた、一体何が」

怯えながら問い掛ける妻に向かつて分からん、と答えようとした時、男の耳が聞き慣れない不思議な音を捉えた。

鼓膜を引つかく様な高周波の残響と階下から次々に押し寄せる破裂音。その音源が間違いなく自分達が乗り込もうと待ち構えていたエレベーターシャフトを伝つて上がつてきている事を知つた男の手が、思わず手の中の宝物を壊れんばかりに握り締めた。

非常ベルの音はその爆音で薙ぎ倒された。マークスとアデリアに耳を塞ぐ暇すら与えずに炸裂する金属の破壊音は現実味のない光景を二人の前で披露する。

巨大な二枚の扉が時間差で彼らの遙か向こうを左から右へ飛び去つていく光景、そして追いかけて来る爆風に紛れて飛び散る、一瞬前までは人であつたであろう部品。そして何百キロの鉄の塊が新たにそこで作り出す凄惨な聖餐。まるで貪り食う様に人のいきれを散らかして舞い飛ぶ扉は大勢の鼓動を消し飛ばした拳句に階を支える巨大な内部構造物に激突して進撃を止めた。響き渡る轟音とコンクリートの破壊音は呆気にとられた二人の意識に事態の深刻さを思い知らせる。

「何だ、爆発!?」

咄嗟に反応するマークスの手にしがみ付いたアデリアが口を押さえて小さく喘ぐ。我に返つた瞬間に臍腑から込み上げて来た物を押

さえ込もうと口に当てた手を小刻みに震わせて、藍色の瞳は苦痛と悲しみに濡れている。一瞬にして蔓延した鉄の匂いと苦し紛れに噛んだ唇から染み出す鉄の味がアデリアに更なる吐き気を催させた。

喉の奥に指を突っ込まれた様な不快感に苛まれながら何とかそれを堪えて、やっとの思いでマークスに向かつて話しかける。

「エレベーター、シャフト……多分何かのガスに引火したんだわ」

アデリアがそこまで話した途端に突然二人の足元が大きく揺らいだ。訓練によって挙動の変化に慣れているマークスの手がすぐさま試着室の壁を握り締めて体勢を確保する。二人分の体重を支えるにはいかにも心許ない厚さだが、今はこれ以外に頼る物が無い。自分の縋った物が予想外の耐久力を持っている事を信じて、マークスは自分の手に縋っているアデリアの体を抱き寄せて叫んだ。

「アデリア、吐いてもいいから俺の体にしがみ付けっ！横揺れが来るぞっ！」

命じられたアデリアがマークスの言う通りに両腕を胴体に廻した瞬間にそれは来た。

建物の安全を地震と言う災害から守る為の耐震構造は湧き上がる暴力的なエネルギーを緩和する為にベクトルを全て横方向の鉄骨へと受け流し、それは巨大であればあるほど建物を大きく揺るがし始める。

モビルスーツを運搬する為に開発されたカーゴリフトがこの建物に採用されている事をマークスは知っていた。その扉が一瞬にして破壊されるほど膨大なエネルギーが建物の構造を振動させたのなら、その後に発生する免振の為の横揺れは。

そこまで考えて時間切れだった。試着室ごと揺らした激しい横波は力一杯踏ん張ったマークスの足を大きく浚う。足を留める事を諦めたマークスがアデリアを抱えたままで倒れまいとバランスを取る。モビルスーツで培った技術を全て曝け出して凌ぎ切ろうとがんばるマークスの努力を嘲笑う様に激しい横波は左右に二人の体を揺らし



続ける。拳動に耐えかねたアデリアの目が硬く閉じられて手の力が緩んだ。今にも解けそうなアデリアの手を力一杯掴んだマークスがアデリアの耳元で大きく叫んで。

「吐いてもいいから手を絶対離すな！ 持っついていかれるぞ！？」

「…… 言われなく、た、つて。」

離すもんか、と。マークスを締め上げる両手に力が籠った。アデリアの支えとなる為に腹筋に力を込めて鉄の様に硬くしたマークスの目は彼の眼前に広がる阿鼻叫喚の地獄を余す所なく描き続けている。

辛うじて生き残った人々の上に崩れ落ちていく、人々の欲求と企業の利益が詰め込まれた陳列棚のドミノ倒し。加算された重量が凶器となって息の根を止める為に階層中を暴れまくる。崩れる柱、倒れるオブジェ、飛び散る液体、吹き荒れる絶叫、怨嗟、救い、そして沈黙。突然途絶える叫びが昇華を果たす人の命脈だと知り得るマークスに訪れた、差別無く分け与えられた死に対する理不尽。運命による悪戯。自分達にそれが決して訪れないと言い切る事の出来ない曖昧な予感。

救いを差し伸べる事も出来ずにただ、目の前の命が失われていく光景に目が痛む。その痛みは恐らく心から来るものなのだろうとマークスは感じて、そして苦しむ。

無為に奪われていく命と今ここでそれを見せ付けられる自分との違いは一体何なのだ。それを運命などと言う言葉一つで片付けるな、お前もいつかはあつち側に行くことになるのかも知れない。

昨日の夜に二ナが予言した言葉の一言一句を思い出す。彼女が予言した近い内に訪れるかもしれない戦争、それが勃発した時に起こりえる物と、今の現実は何の違いがあるというんだ。

そう何の違いも無い、命が無駄に消えていく事には何の違いも無いのだ、マークス。

それが戦争と言う物だ。理解しろ、そして恐れて、畏れる。お前が踏み込もうとしている入り口の先には同じ世界が広がっている。

その光景に呆気にとられているのはマークスやアデリアだけではない。建物の一番端に位置する保安センターの中で爆発の影響を全く受ける事無く状況を眺めるラーズ1の部下の男にも等しく訪れていた。監視用カメラの幾つかは爆発の余波で使用不能に陥っていたが、それでもまだ壁面のポリゴンの集合体はポリゴンで在り続けている。映し出される景色の殆どで繰り広げられる光景は彼の心胆を寒からしめ、しかしそれは悲劇の映像を目にした事よりもラーズ1が立てた作戦のあまりの効率の良さから来るものであった。

斥候任務の最中に万が一敵に追われた時に使用する、身元が露見する事を阻止する為の自爆用の爆薬はいくらC4（コンポジションC-4。プラスチック爆薬の一種、安全性が高く起爆には信管・雷管が必要）とは言え、それほど多くは無い。少なくとも単独ではこの建物の柱一本をやっと吹き飛ばす程度の量しか持ち込んでいなかった。しかし作戦の立案者たるラーズ1が指示した『全てのエレベーターを降ろした後に基底部に仕掛けて、一斉に爆破』と言う指示を忠実に実行した事によって齎された絶大な破壊力は、恐らくそれを仕掛けた他の仲間達の度肝をも抜いている事だろう。

モノロー/ノイマン効果。原理としては対戦車榴弾（成型炸薬弾：HEAT）に使用される物と同じではある。ラーズ1はこの建物のエレベーターの底部がすり鉢状になっている事を知った上で敢えて爆破場所を選んだ。そこで起爆させればエレベーターシャフト自体に充満する物理効果がこれだけの被害を発生させる事を計算していたのだ。

狭い空間内で突然発生した膨大な爆発エネルギーは挿鉢の頂点に向かつてその威力を集中させ、ベクトルの全てを費やして穿孔から一気に外部へと噴出する。そのとき発生する爆風の速度は最速部でマツハ20、惑星間航行速度に匹敵する爆風が発生させる衝撃波は<sup>ソニックブレイム</sup>周囲にその余波を撒き散らして一気にエレベーターシャフトを駆け上がった。

それが同時に四発。等間隔に配置されたエレベーターシャフト内で同時に発生した衝撃波は互いに共振して絡み合いながら建物中を襲った。爆発の原理を余程深く学んだ者でないこの戦術を考え付く事は不可能であり、当然男には全く予期する事すらも出来ない。しかし男を啞然とさせた事の原因はラーズ1の立てた作戦が膨大な戦果を齎した事に由来する物では、決して無かった。

「な、何と言う」

生き残った全てのモニターに映りこむ惨状を目の当たりにして男は言葉を失った。たった二人の人間を拉致する為に一般人を巻き添えにする事すら躊躇わない、それは嗤いながらモニターを見上げるラーズ1に対するささやかな非難であった。だが上官に対する批判とも取れるその言葉の続きを男は口にする事が出来ない。それを口にした自分の仲間には既にこの男に額を打ち抜かれて戦線だけではない人生からも離脱していたから。

自分にも等しく訪れ兼ねない死の恐怖を苦い唾と共に味わいながら一気に胃の腑へと飲み下した。ごくりと言う大きな音が自分の耳にもはつきりと聞こえる、それと同時にラーズ1は男に向けてその嗤い顔を突き付けた。

「モビルスーツに乗ってはいはこんな景色を拝める事はそう無いだろうが、よく覚えておけ。俺達の部隊にはこういう汚れ仕事も、まあある。」

「し、しかし彼らは一般市民です。我々の目標には何の関わりも無い人々に対してこのような」

「だから、『まあある』。…… お前が来たのはそう言う所だ。」

嗤いながら強い口調で男の反論を封じたその声には服従を強制する意思が見え隠れする。男の目の前で腕を組むラーズ1が男の反応を愉しんでいるのか、それとも観察しているのかは定かではないが少なくとも試されているのは確かだ。男はラーズ1の作戦が自分に対する部隊への適性検査である事を願って一切の情を心の奥へと押し込めた。

不思議な事にそうすると幾分心が軽くなった様な気がする。目の前に広がる瓦礫の廃墟は敵を匿ったスペースノイドの集落で、自分達は敵のスパイを捕らえる為に秘密裏に潜入した特殊工作員であると自分に嘘を吐いたその時に男の理性は再びラーズ1が求める機能を回復して男の手の中へと帰還した。

「しかし指揮官殿。これだけの規模の爆発になると直ぐに異変を察知されて公的機関が動き出すでしょう、彼らがここに到着するまでに我々は対象を確保できるのでしょうか？」

「それでいい。冷静と冷酷は常に一組として持ち合わせていなければならぬ。冷静さを失えば判断を誤り、冷酷さを失えば情に流されてやはり判断を誤る。心を殺さねばこの先あの『殺戮部隊』<sup>マザークリス</sup>で生き残る事は出来ない。」

満足そうな声音でラーズ1が言った。賛辞を呈された男の手が勢いよく上がって敬礼する姿を認めた後にラーズ1は男の問いに答えるべく言葉を続ける。

「大昔にこのアメリカ大陸で大規模なテロがあつてな、救助に入った消防隊員もろとも巨大なビルが崩壊して大勢の犠牲者が出た事がある。それ以来災害現場へのエントリー方針は大幅に変更されて現在に至るまで変わっていない。……宇宙で長く戦っていた貴様らは知らんだろ？が地球ではこういう場合、先ず建物自体の剛性が保証されない限り救助活動は行われぬ仕組みになっているのだ。二次災害を防ぐ為にな。」

その知識は何時如何なる状況でも任務を完璧に果たして来た彼らならではの言葉だった。戦略や戦術だけではない雑多な知識を身に着けていないとあらゆる状況に対応する事が出来ない。逆に考える。爆発の原理や物事の仕組みなどの、モビルスーツに乗っている以上全く無縁とも思える理論にも精通していないとこの部隊では働けないという事の証明である。

「では、我々が館内を歩き回って対象を探す為の時間は確保されていると考えるよろしいのですね？」

「いや、残念だがそういう訳でもない。」

否定するラーズ1の声には不思議と焦りの色が無い。否定するのであればここからの時間はより貴重な物である筈だ、だがその時間が限られていると暗に告げるラーズ1は悠然と男の顔を眺めている。その嗤い顔のまま。

「生存者が何人いるかは分からんが、この中からたった二人の男女を的確に探し出す事は難しいだろう。こちらの人数はたった五人、探す範囲はこの建物のショッピングモール全域だ。一日がかりで探したとしても見つかるもんじゃない。」

正奇を織り交ぜて語るラーズ1の一連の発言はまるで禅問答の様に男には思える。正対したままラーズ1の真意を待つ男はじっと押し黙ったままその先の言葉を待った。

「だが、もしあの二人を他の生存者から切り離す事の出来る手段があったとしたら？ 川砂に眠る砂金を選別する様に奴ら二人だけを選び分ける事が出来るとしたら？」

「そのような事が出来るのですか？」

間髪を居れずに男が尋ねた。ラーズ1の真意を引き出すタイミングはここしかない。男の思惑に従って告げられた問い掛けは男の予想通りの成果を上げてラーズ1の口から答えを導き出す事が出来た。

「ある。奴らが大勢の中から浮かび上がらざるを得ない状況を作り出す為にはこの方法が最も合理的だ。簡単で、しかも人にこちらの意図を知られる事がない。」

ラーズ1はそう言うのと目の前の制御パネルに置かれているスタンドマイクを手を取った。それが自分の求める答えに繋がるのかどうかを疑問に思う男が不審な目を向けてラーズ1の動きを眼で追う。

「ヒントは奴らと俺達に共通していながら相反する価値観だ。奴らと俺達は同じ軍人だが俺達は目的の為に手段を選ばない、だが未だに穢れた事のない奴らは自分達の理想に殉じて、これから起こる事態にどう対処してしまうか」

ラーズ1の脳裏には確定した未来の光景が存在する。自分がこれ

から起こすアクションに対して、実戦に参加した事の無い兵士が採る行動は今まで何度も眼にして来た。それは彼らの持つ倫理の対極に位置する自分達にとっては真に愚かしいとも言える行為。

だが彼らはそうせざるを得ないのだ、『軍人』と言う職業を選択した理由が偽善的であればあるほど。

「もう直ぐ、分かる。」

阿鼻叫喚の蔓延する廃墟の一角で突然瓦礫の山が持ち上がった。

血管の浮き出た腕が震えて押し掛かったままの合板の壁を一気に上へと持ち上げる。連邦軍のカーキ色は埃に塗れ、その腕で所属部隊を高らかに名乗る白鷺は土に汚れて痛々しい。だが彼らの主は秀麗な眉目に苦痛の色を燃やしながら、更なる命を滾らせてそこに居た。アデリアとの外出の為に選んだお気に入りの夏服が汚れる事もお構い無しにマークスは、全身の力で試着室の残骸を跳ね上げる。耳が痛くなるほど大きな音と共に巨大な木の板壁は反対側へと倒れてその下に隠れていた二人の姿を露にした。

「…… やつと収まったか。」

片膝立ちの状態で辺りを見回して状況を伺うマークスだが出て来た言葉はそれだけだった。

支える為に握り締めていた試着室の壁が遂に倒壊して二人に押し掛かってきた時、マークスはアデリアの上に覆い被さって守るのが精一杯だった。暗く閉ざされた僅かな空間の中で時折漏れるアデリアの小さな悲鳴を耳にしながらその度に、何かの決意を告げるように抱き締めた腕に力を込める。彼女の怯えはその腕からマークスの意識に直に伝わり、流れ込んで来る感情で思わず胸が熱くなる。

守らなければならぬ者への誓いを言外に込める力で訴えて、死と地獄を生み育む大波が押し寄せるのをやり過ごして。幸いな事に災厄は二人の頭上を通り過ぎて有り余る暴虐の力を全て吐き出してはいたが、それが残した傷跡は眼にしたマークスの想像を遥かに超える物だった。

恐らく吹き抜けになったエレベーターシャフトから流れ込んで来る異臭に鼻の奥がツンとする、催涙ガスが晴れた時の様に微かな痛みが眼を襲う。だが火災による煙の発生は意外に小さく、それが周囲の状況を知ろうと目を凝らすマークスにとつての仇になった。手の中で震えているアデリアの顔を思わず覆って見せまいとしてしまふほど。

そこに全ての死に方がある。爆死、圧死、斬死、穿死、そして憤死。死に埋め尽くされた瓦礫の床から漏れ出して来るうめき声の合唱がさながら獄界の詠唱アリアの如くマークスの感情に訴えかける。まるで無傷で生きている事が罪であるかのように。

苛まれる意識と鼻腔に流れる生臭い鉄の匂いに思わず眉を顰めながらマークスは、手の中で小さく震えたままのアデリアを見下ろした。

軍人である以上訓練での生傷が絶えないのは当たり前前の事ではあったが、それでもマークスはアデリアの体が傷付く事が嫌だった。恐るべき二つ名を擁していようがモビルスーツの操縦に長けていようがそんな事は関係ない。軍人としてのアデリアよりも女性としてのアデリアの大切な所を守りたいと願ったマークスの誓いは今回も辛うじて叶えられた事を、彼の異色双眼は自身の主に伝えた。

「アデリア、怪我は無いか？」

大いなる緊張と微かな安堵が織り交ぜられて、しかし思い通りに操れずそれは陳腐な台詞にしかならない。後頭部に廻されたマークスの掌の力で周囲に何が起こっているのかを理解したアデリアは小さく頷いて反応した。マークスの声を耳にしてアデリアを襲っていた震えは収まっている。だが搾り出された彼女の問い掛けは表層化に隠れた何かを伴って可憐な唇をわなわなと動かした。

「…… あんな、あんな死に方って、無い。…… 人が、今までそこにいた人がみんなバラバラに…… そんなのって、そんな人の死に方じゃ、ない、よ。」

「落ちて着けアデリア、思い出すんじゃない。」

「みんな生きてた、楽しそうだった。あたし達を見て笑ってた……  
それが、あんな、何で、こんな事に――」

アデリアの肉体を襲う突然の痙攣。しがみ付いた腕から伝わるアデリアの恐怖はまるで断続するジャーキングの様に激しくマークスの体を揺さぶった。

「みんな何も悪くない、何にも悪い事してないっ。それなのになんでこんな事になっちゃうの？　なんでみんなこんな死に方しなきゃいけないの、何で――」

マークスを見上げていたアデリアの瞳が突然焦点をマークスの両目に合わせて訴える。

「マークス、教えてよ。どうしてこんな事が――」

「……」  
「汝、死者にくすしき事跡（みわざ）を現したまわんや、亡（うせ）にし者立ちて汝を讃（ほめ）たたえんや」だ、アデリア。例え神様でも訪れる死を何とかする事はできないんだ。…… 誰の上にも等しく、そしていつか必ず訪れる。だから受け入れて、そして忘れる。――」

それは聖書に書かれた『詩篇』の中の一文だった。「神（エリ）よ、何故（エリ）あなたはわたしを捨て（タニ）られるのですか」の前段に置かれた、死に臨んだ者が思い知る小さな恨みを口にして記された事実と自分の心境を逆説的にアデリアへと伝えるマークス。くすんだアデリアの栗色の髪を無意識の内に掻き毟りそうになる手を必死の思いで堪えながらアデリアの顔を覗き込む。加えられた力と憤りがアデリアの表情から怯えの影を退けた。

死んだ者に出来る事は生者には何も無い、だが生者は同じ地平に居ながら死の淵へ引きずり込まれようとする仲間の手を握る事が出来る筈だ。一人でも多くの命を、一人でも多くの人生を、一人でも多くの未来を救う為に人は互いの手を取り合う、そしてより多くの人の明日を守る事を望んで自分達は進む道を何年も昔のあの日に決心した。

そう、決めたのだ。平和を守る軍人と言う生業で生きていく事を、自らの意思で。



「アデリア」

「生存者の確認。」

マークスの思いが通じたかの様にアデリアの口調に力強さが蘇った。恐怖の色に染まっていた双眼の藍は群青を取り戻して強い意思と共にマークスを睨み返す。怒りにも似たその表情はアデリアが自分が今為さねばならない事に全霊を賭ける決意をした事をマークスに教えた。

「先ずはこの階から。エレベーターシャフトの爆風で被害を受けたラインを境に四区画に分けて、各個に搜索。軽症で自力歩行可能な者は四人一組で搜索に協力させる事。医者、医療関係者は発見次第、要救護者の応急措置に当たらせる。」

「この階の搜索と救助者の確保が終了したら、歩ける者を集って他の階へ移動して作業を続行する。人手が集まれば搜索時間も短くなって重傷者の生存率も上がる、救急隊が到着するまで持たせられれば後は彼らの仕事だ。落ち着いたか、アデリア？」

改めて問い掛けるマークスに向かってアデリアが頷いた。顔色こそ青ざめてはいるが表情には感情が戻っている。モビルスーツでキースと戦っている時にはお互いこんな表情をしてるんだな、と妙な感慨に耽りながらマークスは思わず小さく笑った。

「？ どうしたの、マークス。」

廃墟の傍らで安堵の笑みをマークスに齎した当の本人はそんな事とは露知らず、訝しげな眼でマークスを見上げる。恐らくアデリアの眼の中にはマークスの不謹慎さを咎める色も残っているのだろうが、それが誤解である事を得心させている暇が無い。表情を変えずにいつもと変わらない穏やかな声でマークスはアデリアに言った。

「何でも無い。アデリアの顔を見てちょっと安心しただけだ。」

「何を悠長な。それ所じゃない、時間が無いのよ。急がないと助けられる者も助からなくなるかも知れないのに。」

「そうだ、そうだな。時間が無い。」

アデリアの言うとおりだ、とマークスはアデリアの頭から手を離

してゆつくりと立ち上がった。続いて立ち上がるとするアデリアに手を差し伸べるだけの余裕を取り戻して、マークスは再び周囲を見回した。

同じ景色である筈なのに人は気の持ち様で自分の目の中にある者をこれほど変えてしまうのか、何の救いも見出せないと思いつ込んでいた地獄の光景が今では只の被災地へと鞍替えしている。漏れ出して来る苦痛と悲嘆の声は彼らがまだそこで生きているという証だ、一人でも多くの未来を拾い集めて無事に今日と言つ日を生き延びさせる。それこそが今自分達がやらなければならない責務に違いない。マークスの手に握まりながら重みを感じさせずにふわりと立ち上がるアデリア。服に纏わりついた埃を軽く叩き落としながら周囲を振り返って眉を顰める。彼女自身が決めた覚悟を遥かに超えるその光景はやはり彼女の感性に抉る様な傷を付けて眼の奥を熱くする。だがもうここで立ち止まっている訳にはいかない。ここから自分達が費やす一秒は救いを求めている見も知らぬ誰かの絶命までのカウントダウンなのだから。

「そうだ、マークス。さっきあげた携帯持ってる？」

不意にアデリアが尋ねて、自分のパンツのポケットから携帯を取り出して首を傾げた。長い髪と耳との間に出来た隙間に手を差し込んで自分の携帯を耳にかける。仕草に見とれていたマークスはアデリアの不審そうな視線を受けて慌てて自分のポケットを弄って、小さな銀色のそれを取り出した。

「あ、ああ。ここに貸して。」

有無を言わさぬアデリアの口調がマークスの手を無意識の内に動かした。差し出された携帯を手にとると何個か並んだ小さなボタンの一つを指先で押して、マークスの耳へと取り付けた。

「これでよし、と。……聞こえる？」

アデリアの声が二つになってマークスの耳に届いた。左耳からはアデリアの肉声、そして携帯を掛けた右耳からはイヤホンを通した

アデリアの声が聞こえる。思わず携帯を指で軽く押さえて頷くマークスにアデリアは説明を始めた。

「ほんとはちゃんと教えてあげたいけど今は時間が無いからとりあえずこの機能だけ使おう。VOX (Voice Operation Transmision: 音声反応式通話機能) にしてあるから何かしゃべれば全部こっちに聞こえるから。音声を捉えてからスイッチが入るからタイムラグで最初の一言は途切れるかも知れない、だから会話の頭には必ずコードネームをつける事、いい？」

「了解だ、シャリー05。」

「今言つたでしょ、言い方が逆よ。『シャリー03、了解』 ……

… 演習の時のいつもの口調でいいのよ。」

聞いてた？ と言わんばかりに睨み上げるアデリアの表情を小さく笑って見下ろすマークス。もう大丈夫だ、与えられた理不尽を呪い押し寄せる恐怖に怯えていた彼女は影も形も残っては居ない。顔から引いた血の気は未だに戻っては居ないがマークスの目の前で冷静且つ強気に指示を出すアデリアはいつも通りの彼女だ。

連邦軍北米方面軍オークリー基地所属モビルスーツ小隊『シャリー白鷺隊』四番機パイロット、アデリア・フォス伍長。通称『ベルファストの鬼姫』その人に間違いない。

「シャリー03、了解した。」

「OK、あたしも良く聞こえる。じゃああたしは対角線のフロアから始めるわ、マークスはここのフロアをお願い。 …… で、マークス。」

アデリアの強い口調がマークスの耳朶を打つ。思わず瞬きを繰り返すマークスの顔を緊張と不安が<sup>な</sup>緋い交ぜになった藍色の瞳が見上げた。

「あたしと一っだけ約束して。 …… 危ないと思つたら絶対そこに近寄らない事。あんたどこかそういう所、あるから。」

場所と時間の差はあるにしても生き残った監視用カメラがモニタ

「へと送る映像には確かに生存者の姿が映っている。それを幸運と呼ぶべきなのか不幸と呼ぶべきなのは、ラーズ1がこれからこの被災地に起こそうとする状況を知る男には断言できない。もしかしたら此処で何も知らずに死んで行った者の方が幸運だったのではないかと思えるほど、ラーズ1の立てた作戦は辛辣且つ非人道的だと思う。たった二人を拉致する為に我らの指揮官は此処に生き残っている被害者全てを利用しようとしているのだから。」

「パニックを……起こすのですか？」

選り様の無い言葉を駆使して男がラーズ1に尋ねた。恐らく自分が尋ねた言葉の意味も非難も意図も、ラーズ1には伝わっている筈だ。そして理解した彼が自分に対してどの様な行動を起こすかと言う事も、先に仲間が命を絶たれた事によって理解できる。だがそれでも男の口がそれを覆い隠そうとする事はできなかった。

ラーズ1が男を嗤ったまま睨む。瞳の奥に燃える狂気が男の口からそれ以上の言葉を奪った。熱い吐息を漏らす様に宣言するラーズ1は獲物を前にした蛇の様に瞳孔を縮めながら言った。

「そうだ、おかしいか？」

「いえ、ですが」

ラーズ1の企みを止めさせたい、と思う。男はラーズ1の翻意の為に彼の意図する作戦の矛盾を指摘する決心を固めた。もしそれが受け入れられたならばこの被災地で生き残った人々は救助隊の到着をじっと待つだけで済む、少なくとも。

「この状況でパニックを起こす為には『力』が足りません。群衆の暴動で初めて成り立つ状況をこの場で引き起こすには余りにも」

「それは今彼らが死に囲まれているからだ。瓦礫に散らばる千切れた手足、夥しく流れ出して止められない血液、むせ返る鉄の匂い

……『死』と言う状況が自分の足元に当たり前のように転がっている状況が彼らから力を奪い、現実と言う物を見失わせているだけだ。だがこの状況は長く続かない……見る。」

ラーズ1の顎が示したいくつかのモニターに彼の言う状況の変化は現れ始めていた。動ける者は這い出して、立てる者は立ち上がった。それぞれの意思で廃墟の床を彷徨い始める。まるで集まる事が当たり前であるかのように、示し合せたかの様に人の集団は寄り集まって集団を作り始めた。

「これが一年戦争で蹂躪された人々に根付いた危機管理能力だ。いや、動物の本能なんだろうな。生と死を境にして同じ世界にいる生き物同士が集まって意識を共有する、彼らはそうしなければ生き残れないと言う事が過去の経験から分かっているのだ。自分が再びその世界に置かれた事で彼らは思い出した。ほんの何年か前に起こった一年戦争の修羅場をな。」

深手を負って動けない者を背負って集団の中に加わる者、瓦礫を引つ繰り返して助ける者、手法は様々だが主旨は一貫している。

『生きている者を助ける』事。そこに差別や立場や貧富は関係ない、ただ救いを求める物に手を差し伸べる無償の愛の光景に男は目を奪われた。

自分達が宇宙で行って来た『残党狩り』の相手も『宇宙野郎』<sup>スペースノイド</sup>と言う蔑称で名指しながらも同じ星にルーツを持つ『人類』だ。もし自分が同じ意味を持つ光景に出くわしたとしたら果たして自分はモニターの向こうで同じ種を助けようと躍起になっている彼らと同じ事が出来るのだろうか？ 主義主張を超え、恩讐を超えて手を差し伸べる事が果たして。

「美しい光景だな、」

ラーズ1の言葉に男が我に返った。言葉を切った瞬間に溢れる憎悪の音を男は聞いた様な気がした。

「…… 偽善者共め、反吐が出る。」

ラーズ1の表情に狂気が迸る。今まで支配していた嘲笑が影を潜めて剥き出しになった嫌悪感が露になる。

何も変わらない、奴らと。俺の部隊を見捨てて死地に追い遣った連邦軍の腐った士官共と。そうやって助ける事で自分の行為に酔い

しれて、自分達が今まで犯した罪が許されると思っている。罪を犯さぬ者等いない、許される罪など無い。故に人はその罪を一生抱えて後悔しながら生きなければならぬ。なのに。

こいつらはそうやって自分の罪から逃れようとしている。奴らもそうだった、俺に地位を与える事で自分達の犯した罪に蓋をして忘れようと試みた、だが俺だけは忘れない。俺が忘れてもあの日戦場で俺の周りで死んでいった仲間がそれを許さない。そんな事で人の犯した罪が許される物か。

そうだろう、アデリア・フォス。俺の罪を抱えて同じ世界の階に立つお前もこの廃墟の何処かでそう思っているだろう、我が愛しの。今、その化けの皮を引剥いて、貴様らの本性を曝け出してやる。貴様らがいかに身勝手に生き汚い代物かと言う事を思い知らせてやる。運よく生きていられたならば今日と言う日に自分が犯した罪の光景を、息絶えるその瞬間まで後悔する事だ。」

「これで全部？ 他には居ない？」

栗色の髪的美少女は懸命な表情で集まりつつある集団に声を掛けて尋ねた。散乱する什器の間を飛び回って生存者に声を掛け、比較的軽症の者を集めて搜索救助に当たらせる。彼女の説得に応じて出来上がった幾つもの集団が今全ての作業を終えて彼女の元へと導かれる様に集まりつつあった。

彼女の口から放たれる声音がまるでこの地獄に生まれた天使の歌声の様に、しかしそれでいて逆らう事すら考えられないほどの力強さで人々の行動を支配する。だが集まって来た人々がアデリアの年恰好を眼にした瞬間、誰もが不安に駆られた。人生の年輪も感じさせず機微すら知らなそうなら若き少女 殆どの者が彼女より年上であったと言う事もある が先頭に立って指揮している事に不安を持たない者などこの状況下ではないのも無理からぬ事ではあった。

「君は、一体何者だ？」

不安は言葉に取って代わり、アデリアに尋ねた男の言葉に周囲の者が声を落として耳を敬てた。夢現同然の世界に飛び込んでしまった集団を束ねる為には強い指導力が必要だ、そして目の前で指示するその少女がそれを携えているとは控えめに見ても思い及ばない。だがアデリアにもそれは十分に分かっている事実であり、彼女はそれを釈明する為に声を上げて説明した。

「私は北米方面軍オークリー基地所属、アデリア・フォス伍長です。…… 申し訳ありません、現在このエリアには消防や警察関係の方がいらっしやらなかったので、不肖ながら私が指揮を執らせて頂きました。」

「軍人か？ そりやまた」  
その後が続くであろう自分の見た目に対する正誤の評価を黙殺してアデリアは言葉を続ける。

「現在この反対側のエリアで私の上官が、私と同じ様に生存者を捜索しています。この階の捜索が終了するまで皆さんはここで静かに待機して下さい。重症の方には医療経験者の方が付き添ってあげて、先ほど捜索をしてくれた方々はお手数ですが隣のエリアで私と共に生存者を捜索救助してください。」

「何でだよ、そんな事する位なら早く脱出路を探してこの建物を出る事の方が先じゃないのか？」

別の一角から上がった声は細波の様に集団に広がった。賛同する人々、そして“そりやそうよね、あたしだってそう思うもの”と心の中で呟くアデリア。自分がもし軍人で無かったならば同じ事を言うかも、とも思う。

だが今脱出路を見つけた所でそこから逃げ出せる者は次のエリアを捜索する為に一番必要な軽症者のグループ、彼らが居なくなれば次のエリアで同じ事をまた一から始めなければならぬ。そしてそれを待ち続けるだけの余裕は未だに瓦礫の中で助けを待ち侘びる人々にも、勿論アデリア自身にも無い。

「お気持ちとは分かりますが今は生存者の捜索が先です。ここで人手

が足らなくなつては助けられる者も助からなくなるかも知れません。次のエリアでも同じ様に人手を集めればここの半分の時間で終了する筈、ですから

「その間に火事にでもなつたらどうするんだ!? こんなところで全員揃つて逃げ遅れて焼け死ぬなんて真つ平だ！」

集団の一角で若い男の声が上がる。その意見に同意する声がそこ彼処でクローバーの芽の様に頭を覗かせてアテリアに向かつて花穂を伸ばした。何とかその芽を押さえ込もうとありつただけの理性で笑顔を作る。

「落ち着いて下さい。これだけの事故ならばきつと近くの消防署に通報が届いている筈です、今動いて万が一二次災害が発生したら救助活動の妨げになります。ですからここは落ち着いて

「何だよ、ねえちゃん。軍人だからって偉そうに言つてんじゃねえ。ジオンと戦うしか能が無えくせに、いざとなつたら民間人に説教か？」

弾けた理性の代わりにこめかみに青筋が浮かび上がる。腹の底で蟠った怒りがアテリアの笑顔を引き攣らせた。

「も、申し訳ありません、あたしの言い方がお気に触つたのでしたら謝ります。ですがここはあたしの言う通りにして頂ければ

「あたしの言う通りにして』どうすんだよ、助かるって保障はあるのかよ? どうせ非番の日にそんな格好してる様じゃせいぜいオークリー基地で受付かなんかやつてる程度なんだろう? そんな奴に軍人つて言うだけで頭ごなしに指示されるなんざご免だぜ。」

おい、早く非常階段までみんなで

「あたしが怒鳴んなくて済むつて言つてんのよっ!!」

堪忍袋の『底が抜けた』アテリアが眉を吊り上げて大声で怒鳴つた。突然上がったテンションとあまりの剣幕に不平不満だらけの雑草の群れは一気に薔を切り飛ばされて沈黙する。恐らく平時であれば軍人が民間人に対してしてはならない条項の一つに掲げられた『



『<sup>パワハラ</sup>職権乱用』であるにも拘らず、アデリアの怒りは収まる事無くその男目掛けて叩きつけられた。

「いい加減にしなさいよ、あんたっ！ 大の男がピーピーと、女々しいったら！ 男だったらつべこべ言わずに手伝いなさいよ、自分だけ助かれば後の事は知らないってどういう了見っ！？」

名指された男がたじたじになって後ずさる。アデリアは自分の意思が集団に伝わる様に語気を強めて言った。勿論溜まりに溜まった鬱憤と怒りを吐き出す様に。

「いいっ！？ あたしは何も逃げないって言ってるんじゃないの、ただ隣のエリアも一緒に探してくれて頼んでるだけなの！ この階の全員が一箇所に揃ってれば救助隊が来た時に誘導がし易いしそれに重傷者は一刻も早く病院で手当しなきゃいけない。その時間を短縮するのを手伝って言って言ってるだけなの、分かったっ！？」

むん、と両手を腰に当てる周囲を見回すアデリアの目。呆気に取られて見つめ返して来る群集の一人一人と視線を交えて覚悟を見せるアデリアの耳に、その時反対側で自分と同じ様に救助活動の主導権を握っているであろうマークスの声が聞こえた。

「リー03から05」

「05聞こえます。どうしたのマークス、何か問題でも？」

「……お前、声が大きい。こっちまで丸聞こえだぞアデリア。怒鳴る時には怒鳴りますって一言断ってからにしてくれ。」

VOX機能は声に反応する。アデリアの怒鳴り声は携帯を通じてそのままマークスの耳にまで届いていたようだ。マークスの携帯から、恐らく彼の周囲に控えているであろう救助者達の笑い声が忍び込んで来て些細なトラブルの一部始終が彼らに聞かれていたであろう事をアデリアに教えた。

「……やだ、今の、ひよっとして聞かれてた？」

「直撃寸前のソナー手なみの速さで携帯を耳から外したから、俺の周りの人はみんな。……しかし携帯ってすごいな。こんなに良く聞こえるんだ。」

「…… ねえ。そこ、感心するところ？」  
恥ずかしさで紅くなる顔を抑える為に妙につっけんどんに応えるアデリアを、今まで見せていた猛々しい表情とギャップに苦しんで不思議そうに見つめる周囲の人々。痛いほどの視線を浴びて、やっとな目されている事を知ったアデリアが思わずキツときつい視線を向けて睨み返した。

「どうやら向こうも落ち着いたようです、驚かせてすみません。」  
マークスが頭を下げる向こうに中年の男性の笑顔があった。マークスの搜索したエリアにはアデリアの側とは違って幸運に恵まれていた。彼の前に立つ男は自らの素性を消防隊の指令だと名乗り、そして幾人かの医師も被災者の中には含まれていた。

彼らはマークスが其処に辿り着くよりも早く集団で周辺の搜索を始めていて既に何人もの怪我人の救助と治療に当たっていたのだ。災害現場を主戦場とする彼らの手際は呆れるほど鮮やかで、手近に転がっている残骸を選び分けながら怪我の症状に適合した応急処置を魔法の様な速さで施していく。指揮を執っている中年男性に主導権を預けようとしたマークスが自分の素性と共にその旨を申し出た時、その男は静かに笑って言った。

「申し訳ないが私は遠慮しておく。私も要救助者の一人だ、それよりの階に居る被災者の救助方法を思いついた君の方が適任だと思う。君の仲間が反対側のエリアで同じ事をしていると言うのなら指揮系統は一本にしておいた方が混乱しなくて済むだろう。」

マークスの要請をやりわりと断った男だったが彼の働きはマークスの能力を補って余りある物だった。マークスの方針をあっという間に理解し、行動を起こして結果を出す所は並大抵の物ではない。その男の肩書きにも恐らく『元』が付くのだろうと暗に思いながら、マークスは男の好意に甘えて指揮を執った。短時間で集められた被災者が不安な表情を見せる事無くマークスの言に耳を傾けていられたのはこの男の存在が大きいのだと認識している。

マークスの謝罪を受けて、アデリアとの会話を聞いていた男はにっこりと笑って言葉を返した。

「いや、災害現場では何かと気弱になりがちだ、寧ろ彼女の様に元気がある者が先頭に立っていた方が何かと都合がいい。私も、みんなも」

言葉を切った男が集団を見回した。釣られて送られるマークスの視界にみんなの顔が飛び込む、瓦礫の廃墟の中で蹲りながらその表情に浮かんだ微笑が彼らを埋め尽くす。

「彼女から元気を貰った。それだけでも彼女は現場を指揮するに値する人物だと私は思うよ。軍も私のいた頃とは違っていい人材を育てているようだね。」

「ではあなたも以前」  
「マークスが自分の勲の正しさを証明しようと思わず尋ねた時、男の手が小さく上げられてマークスの言葉を遮る。」

「おっと、昔話に花を咲かせてる場合じゃない。それはここを無事に抜け出せる事が出来た時に改めて話をしよう、サリナスの消防本部から感謝状が君と彼女に贈呈される時にでもね。……さて、

この後私達は何をすればいいのか、指揮官殿のお考えを伺おうか？」  
「男がそう言う周囲に座っていた軽症者の男達が立ち上がったマークスの元へと近づいて来た。人を助けると言う使命感に燃えた瞳

がありありと彼らの目の中に宿り、その力強さはマークスに勇気と自信を齎す。人の意思と善意に後押しされると言う事がこれほど心強い物なのかとマークスの心中に感慨を齎して、その勢いを駆って同胞と化した彼らに次のエリア搜索の指示を出そうとしたその時だった。

強烈なハウリングが廃墟に木霊して耳を劈いた。

「？ 館内放送、何で今頃」

眉を顰めたマークスが音の発信源であるスピーカーの位置を探そうと天井を見上げる。急降下爆撃のスキル音を聞く様な、一瞬前

まで浮かんでいた微笑みも忘れて恐怖に戦いた顔でマークスと同じ天井を見上げる人々。降り注ぐ音の針が人々の心を十分に苛んだ後、突然止まって沈黙を守った。

「何だ、警備室がまだ生き残ってるのか？」

男が消防士ならではの分析力でその発信源を特定した瞬間、突然警備員の物と思われる叫びが言葉の意味を成して廃墟の空気を貫いた。

「崩れるぞっ、逃げろおっ！！」

暴発する心臓の鼓動と連携する様に、景色がマークスの周囲で色を失って動き始めた。

罪と罰 ？（前書き）

「東北地方太平洋沖地震」におきまして、被害にあわれた皆様によりお見舞いを申し上げますとともに、犠牲となられた方々とご遺族の方々に、深くお悔やみを申し上げます。

## 罪と罰 ?

閉ざされた廢墟の床から湧き出す影。瓦礫の山を押しつけ乗り越えようとする自他の血に塗れた人の姿。マークスが次に向かう筈だったエリアに残っていた生存者はその予想を遥かに超えて多かつた。しかしそこから這い出す彼らの全ては人と呼ぶにはあまりにも凄惨で、個として総称される生物の生命力を最後の一滴まで搾り出す為に、今まで築き上げた理性の籠たがを叩き壊したなれの果てだった。

力尽き、或いは運無く斃れて死を待つ敗者の傍らを脇目も振らずに駆け抜ける彼らの同胞。撒き散らされた生への残滓を嗅ぎ取る様に引き摺られて再び立ち上がる敗者。逆らう物は自らの手で引き千切り、置き去りにした身体の不具を省みる事無く、欠損した人影は零れ落ちる大切な命を押し留めようと大きな傷口に手を添える。硬く握り締めた指が押し留める事のできる命はほんの僅かで、止め処なく滴る黒い液体は終焉を刻む秒針の様に大きな音を刻みながら碎けたコンクリートに降り注ぐ。

徐々に失われていく力を振り絞って死神の鎌の餌食になるまいと足掻く断末魔の咆哮はマークスの意思から耳を塞ぐと言う選択肢を奪った。記憶に記録される修羅の悲鳴が彼の感情から現世まよの光景である事を忘れさせる。

地獄と言う名の世界が真に存在すると言うのなら、それは今正に自分の目の前にある世界なのだろう。

無辜むこの人々が怨嗟の呻きを合唱しながら幽鬼の如く歩く様を他に何と表現すればいいのだろうか？ 理由など無く意思すら無く、ただ細胞に刻み込まれた自己消失の恐怖に後押しされて歩を進める彼らは、彼らだけが嗅ぎ取る事の出来る出口に向かって大きな流れを作りつつあった。

非常階段へ通ずる通路こそが彼らの求める終着点、日常へと帰還する為の凱旋門。瀬戸際の人の群れはこの階にただ一箇所設けられ

たそこを目指すが為に巨大な紡錘系を形作り、命と引き換えに手渡される通行手形を手にする為に小さな諍いいさかをあちこちで始めた。運と天恵によって残されたそれぞれの体力の全てを振り絞って強者が弱者を蹂躪して捻じ伏せて。生命が求める最後の摂理を具現化したその世界は、人という名を冠する世界の支配者が今わの際に訪れるであろう原罪の袋小路。

啞然としたまま、遠くで勃興するその光景を傍観者の如く眺めるマークス。苦界の極限に投げ出されたまま茫洋と漂う彼の意識が現実から離れてその地獄へと惹き付けられる。だが忘我の境地を彷徨っていたマークスの意識を再び現実へと引き戻したのは、マークスを補佐して集団を纏め上げた消防指令の激怒だった。

「馬鹿な事をつ！ 警備員め、血迷ったか。全館でパニックが起こるぞ！」

人を守る立場の人間が絶対に口に出してはならない禁忌を犯した者に対する、同業者として憤懣を怒鳴り声に滲ませながら遙か彼方の天井に埋め込まれたスピーカーを見上げて消防指令が叫んだ。

彼の危惧は最も身近な場所でも芽吹き始めて不吉な前兆を集団内の秩序にも与えている。自分達の安全を保障する筈の警備員から齎された信用ある情報は、衝撃と言う形で動揺の渦を巻き起こしつつある事がはつきりと分かる。しかし戦闘に関しては博学で鳴るマークスも畑違いの災害に関しては人並み程度の知識しか持たない。

その瞬間に見せたマークスの表情も危機を喧伝した警備員と同等の罪を持つのだろう、途方に暮れて一瞬の逡巡を見せたマークスに代わって消防指令が集団に向かって大きな声で言い放った。

「みんな、落ち着いて！ この建物が崩落すると言うのなら今動くのは非常に危険だ。全員で場所を移動しよう、少しでも崩落から免れる場所へ！」

指揮官特有の凜と澄み切った声が集団の隅々に届く。彼の発言が正しいと証明される事は無いが少なくとも説得力に溢れるその声音が集団の動揺を抑えた。

「この建物が崩落すると言つのなら、恐らく強度の無くなった外壁部分から崩れる筈だ。だから私達はあの」

男が視線を向けた先にはこの階の中でも尤も被害の大きいエレベーターホールがあつた。巨大な扉が吹き飛んだ事で奇しくも掃き清められたその場所には僅かではあるがフロアの床が残っている。

「エレベーターホールへ移動する。怪我の軽い者は歩けない人に手を貸して、医療関係の人は担架を作つて重傷者を運ぶ手筈を整えて時間が無いぞ、急いで！」

「何言つてるんだ、よりにもよつて爆心地が一番近い場所に避難するなんて。第一あそこが崩れないつて保証はないだろう？」

「大丈夫だ。」

一角から上がった疑問の声に即座に男が対応する。発言の根拠を息を呑んで聞き入る全員の前で男は手短かに説明を始めた。

「このシヨッピングセンターは売り場面積を確保する為に最小限の柱で各階を支えている。建物全体の強度はその柱と外壁、そして館内中央を貫くエレベーターシャフトが確保している。だからこの建物が崩落する時に一番確かな強度を持っているのはあの四本のエレベーターシャフトの周辺にある鉄骨だ。その上に避難していれば少なくとも生き残れる可能性が高い。」

「可能性が高いつて、絶対じゃないのか!？」

「当たり前だ。『絶対』なんて事がこの世にある訳無いだろう、安心しろ。そこが崩れる時にはこの建物にいる全員が生き残っちゃいない、あの世で君に謝ろう。」

そう言つと男がにやりと笑つて見せた。

窮地に陥つた時に浮かべる指揮官の笑みほど心強い物は無い。消防指令の回答に氣勢を殺がれ、しかしそこに集まる被災者と同じく覚悟にも似た満足を得られた男は「よしっ、じゃあしょうがない」と小さく呟いて立ち上がった。合図となつたその動きが再び集団に活気を齎して生き残る為の算段に動き始める。

その中でマークスはやはり自分の集団の一員として消防隊長の指



示に従い、移動の手筈を整えようとしたその時だった。

「待て、君はいい。」

マークスの動きを止めたのは消防指令の声だった。思わず見上げたマークスの視線に高さを合わせる様に男が跪いて、周囲で忙しく動く人並みに聞こえない様な小さな声でマークスに言った。

「この集団は私が引き受ける。君は彼女の所へ行つてやれ。」

自分の手に余る脅威に遭遇したマークスは、消防指令のその声が無かったとしたら恐らくそのまま集団と共に避難していたかも知れない。だが促されたマークスが消防指令の言葉に秘められた真意に気が付いて、はつと我に返った。

この集団はあの放送が流れるまでは確実に秩序を保っていた、それがあの一言でいとも簡単に瓦解の危機に晒されたと言う事は。

「そつだ、察しがいいな君は。……私が出した指示と同じ事を

彼女の集団にも伝えるんだ、そして」

言葉を止めて険しい視線を向けた先で小競り合いを続ける暴徒未満の集団疎開。その彼らの行く末を案じる様に、遣り切れない表情を浮かべた消防指令はマークスに言った。

「彼らにも。……このままではあそこで『揉めてる』

連中は全員崩落に巻き込まれて助からない。だが幸いな事に動ける連中はみんな非常階段を目指して集まっている、一々探す手間が省けたと言う事だ。」

消防指令がマークスに与えた命令はどう鼻肩目に見ても無謀極まりない事だった。彼はたった一人で いや、アデアの力を

借りたとしても この混乱を収束させて自分に秩序を取り戻せと言う。だが暴走しつつある被災者の群れをどうやって押さえると言つのか？

「そんな、自分達だけでどうやって」

竦み上がるほどの不安はそのまま言葉になってマークスの口を吐いて出た。だが消防指令はそんなマークスの弱気を見透かして、恐

らく部下にも同じ様に発するであろう語気で一気に貫いて粉碎する。「君は連邦軍の兵士だろう、何の為にその服を着ている？」

その言葉がマークスの心に大きく押し掛かる。「出来っこない」と言う本音ですらも封じ込める魔法の言葉はマークスの背筋に痺れる様な電気を奔らせた。厳しい表情でマークスに決断を促す消防指令は尚も言葉を続ける。

「君の着ているその服はこの世界に平和を齎した象徴だ、連邦の人々がそれを忘れる事はできない。そして君も連邦軍の士官ならばその誇りを蔑ろにする事無く、君にしかできない職務を全うするべきだ……いいか、軍人と言うのは敵と戦う事だけが仕事なんじゃない。戦う術を持たない人々の為に自分の力を捧げる、それを為し得る者こそが軍人であると名乗る事が出来る。少なくとも私はそう信じている。」

男の目がマークスの胸元に貼られた十二枚の小さな翼を見つめた。嘗ての大戦を終わらせる最大の要因となった、モビルスーツを操る資格者である事を示すウイングマークは小さな輝きを放って男の意見に同調する。少なくともその光を目にしたマークスにはそう思えた。

「……覚悟を決める、敵わないまでもこの事態の收拾に全力を尽くすんだ。今の君と彼女に与えられた役割はそれしかない。」

至近距離でマークスを見つめるその眼が発する『さあ行くmove!』と言う声が、マークスの心に火を点けた。キースの号令以外では感じる事の無い、沸き立つ様な使命感がマークスの両膝を持ち上げる。

無言で小さく頷いたマークスが消防指令の微笑に見送られて、瓦礫の野に足を踏み出した。

残念ながらアデリアはマークスほど幸運には恵まれていなかった。文字通り振って沸いた災難はいとも簡単にアデリアのグループの秩序を崩壊させ、狂乱の坩堝くわうぼへと追い込みつつあった。小さな火種が延焼していく様子を押し留める為の説得力も根拠も無いアデリアに

はただ声を荒げて彼らの行動を抑える事しかできない。

「待ってって言うてんでしよう!? 逃げんなこらあつ!」

喉が痛むまで大声を上げて逃げ出す彼ら呼び止めようと試みる。だが新たな恐怖に捕えられた彼らの足はアデリアの呼び掛けにすら急かされた様に、アデリアの最も望まぬ方向へと駆け出して行く。小競り合いが發展して小さな闘技場と化しつつある廢墟の彼方を目指して走り去ろうとする集団を、アデリアは脇目も振らずに猛然と追いかけた。

しかし彼らの後を追うアデリアにも彼らの逃亡が間違っているとは断言するだけの根拠は無い。寧ろこのビルが崩れると言っのならば自分もすぐさまマークスと合流して一目散に現場を後にしたい位の衝動に駆られる。

だがマークスからの指示が与えられない以上、僚機として選択出来る行動は指揮官からの命令に従う事と言っ唯一つしかない。心に渦巻く迷いと喧騒と自分の叫び声で聞き取れなくなった携帯を掌で強く耳に押し当てながら、アデリアは受話器の向こうで同じ様に苦勞しているであろうマークスに向かってとっとう弱音混じりの音を上げた。

「もう! マークス、お願い何とかしてっ! あたし一人じゃ押さえられないっ!」

吐いた弱音と心の迷いは彼女の足を鈍らせて、視界に捉える集団の背中はどうんどん遠くなっていく。移動速度に体力がついて行けずに脱落する何人かの逃亡者の脇を擦り抜けて、何とか先頭集団の最後尾に取り付こうと手を伸ばす。服を掴んで引き摺り倒してでも彼らを止めると決意したアデリアが逃げる背中を引っ掴もうとしたその瞬間。

突然、アデリアの目に男の背中が大写しになって飛び込んできた。服を掴む為に伸ばした手が男の背中のだ真ん中に命中して、アデリアの足を止める為に巻き添えを食らった大きな身体が前方へと弾け飛ぶ。

「うわわっ！」

倒れた男の後頭部を踏み付けたアデリアが勢い余って集団の中に踊りこむ。立ち竦んだままの人垣に囲まれたまま、何かと訝しげに周囲の様子を観察する追跡者は逃亡者の意識が殺気となって進行方向へと振り向けられている事に気付いた。

一瞬にして急変した事態を把握する為に、手っ取り早く隣に立つ男の顔をそつと盗み見る。焦りと怒りに歪んだその男はアデリアの視線を気にも留めずにひたすら前を睨んでいる。

「話を聴け。この先には行かせない。」

聞き間違える筈が無いと分かっていたながら信じられない。喉の奥から搾り出す様に唸るマークスの声が携帯だけからではなく両の耳から飛び込んできた事にアデリアは驚きを隠せない。

事の真偽を確かめる為にアデリアは、やはりマークスの理不尽な命令に対して思わず足を止めてしまった集団の人垣を掻き分けて先頭を目指した。密度の増す重量の隙間に肩を捻じ込んで、やっとの思いで先頭へと躍り出たアデリアの前に開ける廃墟の世界に立ち塞がるマークス。両手を大きく広げて、しかしその全身から滲み出す断固とした決意がアデリアの前にある。大勢の逃亡者から投げ掛けられる殺気に逆らう様に険しい表情で、マークスは先頭の男を睨みつけた。

「命が惜しければ直ぐに引き返せ。危険だと分かっているここを通すほど、俺は酔狂な人間じゃない。」

「そんなのは俺達の勝手だ、あんたに四の五の言われる筋合いはねえっ！」

マークスの視線によって掛けられた呪縛を解き放とうと、先頭の男が怒鳴り声を上げた。正当化する為の手段を力に頼る事で手にようと決めたその男は、仁王立ちになったマークスに向かって脅し文句を吐き付けた。

「あんたこそ命が惜しければ俺達の邪魔すんじゃないやねえ、とつと道を空けて隅にでもすっこんでろっ！」

恫喝と共に踏み出された足はマークスを退ける為に踏み出された一歩。まるで下手糞なミュージカルでも始まったかの様に同期しない全員の一歩が不揃いな音を立ててアデリアの周囲を埋め尽くす。それでも道を譲ろうとしないマークスを何とか守ろうと駆け出したアデリアの視界の中で、事もあろうにその一歩を集団に向けて踏み出したマークスの姿が映った。

「駄目よ！ マーク

アデリアが言い終わる前に、相手の歩幅を踏み越える様に交差する左足。男の懐に潜り込んだマークスのスタンスが大きく広がって砕けた瓦礫を踏みしめる、軸となった利き足が鋭く旋回した瞬間に繰り出された掌底は残像を残して男の顎を一瞬にして撥ね上げた。

意識の糸が切れた操り人形はあれよと言う間に崩れ落ちて、電光石火の出来事に慌てて足を止める逃亡者達。先頭でその光景を目の当たりにしたアデリアですらも、自分のお株を奪ったマークスの実力行使と言う展開が信じられずに凍りついた。

「次は誰だ？ 遠慮なく掛かって来い、相手になるぞ。」

どすの聞いた声で相対する逃亡者を挑発しながら小さく軽やかなステップを踏んで、戦う意思表示を見せるマークス。子供の頃から護身の為に続けていたボクシングの技術は士官学校時代のカリキュラムに組み込まれていた『近接戦闘概論』でも相手に遅れを取った事は無い。

『神の五戒』を語源とする『オーストックス正統派』の構えはそれに逆らう者全てに裁きを与えんとマークスの体を動かした。気を放つ両肩が小さくフエイントを繰り返す度にその威力を見せ付けられた逃亡者達は、瘡かさを起こした子供の様に小さな痙攣を繰り返して後ずさる。ゲインラインを失った集団はアデリアの存在だけをポツリと残してマークスからの距離を開け、故にアデリアの傍には期せずしてマークスが寄り添う様に立っていた。

啞然とした視線だけで上官の表情を追っていたアデリア目掛けて、マークスが軽くウインクをして意味深な笑みを浮かべる。

恣意的に相手の顎に決めてしまった一撃<sup>カウンター</sup>を後悔していない訳ではない。だが暴走する集団を一瞬で抑えるには罹災以上のインパクトを与える事が必要不可欠だとマークスはここに至るまでに考えを纏めていた。中心となる核を沈黙させる事で暴走を抑える事ができるのなら実効的な手段　　暴力に訴える事もやぶさかではない。アデリアの知るマークスには似つかわしくない博打の様な判断は、果たしてマークスの予想通りの結果を集団の勢いに齎しつつあった。瞬殺と言う強烈なインパクトと好戦的<sup>アグレッシブ</sup>な対戦相手の出現はそれだけで逃亡者から覇気を奪って目標を見失わせる。

集団の目から狂気の色が剥がれ落ち、戸惑いの色が露になった事を知ったマークスは構えによる威圧を止めて、消防指令から受け売られた指示を自分の言葉で言い聞かせた。

「この先に行くのは危険だ、それより全員エレベーターホールに移動するんだ。怪我の程度の軽い者は重傷者に手を貸してやれ、傍に転がってる廃材で担架を作って運ぶんだ。」

「そんな所で死ぬのを待っててか!?」冗談じゃねえ、幾ら軍人でも何処の馬の骨とも分からねえあんだの言う事なんか聞けるかよ!

「あの中に飛び込んで

なけなしの勇気を振り絞って声を上げた男の顔を睨みつけながら、後方で巻き起こりつつある惨劇の舞台を振り返らずに指し示したマークスが問い掛ける。

「無事に　　いや、もうそんなもんじゃないな、五体満足でここから出ていく自信が君にあるのか?　　ならば止めはしない、君一人で行け。」

言葉を言い換えたマークスの指摘通り、指し示した親指の先に広がる世界は既に小競り合いから白熱した『<sup>バリ・トゥード</sup>全てが有効』に変わっていた。飽和し切った人数を減らす為に手近に転がった残骸を取り上げて得物代わりに振り下ろす人々。何某かの有利な条件を携えた者だけが生き残る狂騒劇的一幕を、冷静になった目で見つめる集団が

声を失って息を呑んだ。

「……俺の老婆心を理解してもらえて光栄だ。で、理解が及んだのなら大人しく指示に従ってくれないか？ 反対側の被災者達も既にそうしている、避難を手伝ってくれたサリナス市の消防指令が言うにはそこが構造的に一番頑丈な造りになっているそうだ。」

敢て自分の意見としてではなく伝聞の含みを持たせて説明するマークス。この状況下では畑違いである軍人の意見に何の説得力も無いと言う事がさっきの経験で分かっている、だが災害に関してそれなりの知識を持った人物の発言だという事を言葉の中に匂わせる事によって、自分の指示に信憑性を付加しようと計算したマークスの発言は功を奏した。お互いに顔を見合わせて残された選択肢を確認する集団から無秩序の気配が消え失せる。

「……分かった、じゃあ俺達はあるたの指示に従ってくついでいけばいいのか？」

覇気と弱気を交換した男が縋る様な目でマークスを見つめた。選択肢が極端に狭められた時に下す判断には確固たる意思など存在しない、ただ強者が選んだ選択肢に身を委ねるのが弱者の唯一の役割だ。覇を唱える者としてマークスを選択した逃亡者達は一斉にその目を異色の眼を持つ銀髪の青年へと期待を込めて注ぎ込む。だがマークスはそれらに向かって小さく笑って頭を振って残念そうな声で答えた。

アデリアの予想通りの答えを。

「ありがとう。だが頼りにして貰ったのは嬉しいが、俺とフォス伍長は次の場所へ向かわなければならぬ。だから集団の移動は」

マークスはそう言うのと視線を初めて自分の背後に向けた。マークスの一撃を食らって昏倒したまま置き去りにされていた男が断ち切られた意識を繋ぎ直して頭を振っている。深刻な怪我の無い事を確認して心からの安堵を表情に浮かべたマークスがその男に向かって声を掛けた。

「 眼が覚めたばかりで申し訳ないが君にお願いしよう、突つかつてくる元気があれば十分だ。いいか、君が責任を持って必ずみんなを 残してきた怪我人も含めて全員をエレベーターホールまで連れて行くんだ。分からない事があったら反対側にいるサリナス消防隊の指令に聞けば何でも直ぐに教えてくれる。」

しかめっ面でマークスを睨み上げる男の顔から視線を逸らしてアデリアに目配せをするマークス。アイコンタクトとマークスの意思を理解したアデリアが小さく肩を震わせて、「信じられない」といった表情で溜息を吐いた。

「い、今手を挙げた相手に頼み事するなんてあんた、どうかしてる。俺がその約束を守らずに一人で逃げる事だつてあるかも知れないんだぜ？」

顎を押さえながら尚も憎まれ口を叩く男は未だに揺れる膝を押さえてゆっくりと立ち上がった。慌てて駆け寄ってきた仲間に肩を抱えられて辛うじて立つ男に向かってマークスが挑発的に笑って言った。

「ならばまた改めて、今度は非常階段の入り口で叩きのめすまでだ。今度はぐうの音も出ないほど、完璧に。」

マークスの言葉に其の場に居合わせたアデリア以外の全員が驚きの表情を浮かべる。そしてアデリアは再びの溜息と共に躊躇いを吐き出した。自分の考えていた『まさか』を迷いも見せずに実行しようとするマークスの無謀さに呆れて、それしかこの混乱を鎮静化させる策が見当たらないと言う事を理解して。

ここに至るまでの一から十が自分の知っているマークスらしくない方法である事に若干の違和感を覚えてはいたが、異存はない。編隊長エリートを補佐し、実行するのが僚機ウイングマンの仕事なのだから。

「非常階段つて …… 叩きのめすつて あんた達正気か！  
？ あんなに人数が居て、しかも連中はあんた達以上にイカれてる、そんな中に飛び込んで喧嘩を売ろうなんてまともな人間の考えることじゃない！」



「まともじゃないから、軍人なのよ。やっと分かってもらえた？」

それまで惨劇の幕間をじっと見つめていたアデリアが突然振り向いて集団にその笑顔を向けた。栗色の長い髪が遅れて靡いて、清楚で秀麗な顔形だと皆に印象付けていたその表情に凄みのある笑いが浮かんでいる。腹を決めたその顔は美しくあるが故に何処か背筋の寒くなる程の畏怖すら感じさせる。

「君達はツイてた、相手が俺で。彼女は」

マークスは隣に立って集団から眼を逸らさずに胸を張るアデリアを横目で見ながら、彼女のあまりの変貌に眼を見張る彼らに向かって静かに告げた。

「俺より、強いぜ。」

「警備システムを呼び出せ。これから言う対象条件を検索しろ。」  
鋭く発せられた命令文が男の体を跳ねる様に動かしした。制御パネルに埋め込まれたコマンド入力用のキーボードに取り付いて、旧式ではあるが確かな入力を約束したその大振りなキーを連打する。

彼らの手によって休眠状態を余儀なくされていた監視用AIは取り戻した制御を祝うかの様に警備室のあちらこちらで歓喜の声をあげた。唸りを上げるハードディスクの起動音はその目覚めの数だけ機能を回復して、彼らの口とも言うべき液晶パネルを点灯させて指示を待つ。全ての準備が整った事を確認した男がラーズ1の方を振り向いて、次の命令を促す様に硬い表情で小さく頷いた。

「ベクトル検索<sup>サーチ</sup>。施設内を移動する入館者の流れに逆行する、若しくは滞らせる要因となる障害物並びに人物全てにフラグを立てる。全監視カメラは無作為で抽出する監視を中止し、フラグ対象の映像のみを警備室のモニターに出力。」

ラーズ1の言葉をなぞる様に液晶の上を走る文字、Enterの後に続く一瞬の沈黙。ショッピングセンターでは頻繁に起こる軽犯罪を摘発する為に組み込まれたそのシステムは、呆れるほどの従順

さと正確さを誇示する様に検索結果をモニターへと転送し始めた。

次々に切り替わる壁面のモザイクは所々欠けていて、ラーズ1のお目当ての目標が映し出されるかどうかの保証は無い。だがラーズ1はまるで大昔に流行ったパズルを読み解く様な勢いで画像の一つ一つに隈なく眼を走らせ、リアルタイムで提供される映像に映るぼやけた影を分析する。

男がそれを見る限りではその殆どが大きな瓦礫の塊や倒壊した陳列棚で、人の姿をフォーカスしたモニターは半分にも満たない。だがラーズ1はその半数の中に表示された逃げ惑う人波の中から確実に何かを見つけ出し、口角を大きく上げて悪魔の嗤いを浮かべた。

「馬鹿め、一緒に逃げればいいものを。偽善を施そうと試みるから、そうなる。」

呟いたラーズ1の視線を追って男が一個のモニターに釘付けになる。非常用電源の駆動によって焦点こそ曖昧だが、そこには写真に見たあの少女と銀髪の男が映っていた。非常階段の入り口を背にして押し寄せる大勢の暴徒の前に立ち塞がり、見事な体捌きで次々と薙ぎ倒していく姿はまるで何処かのテレビドラマのヒーローの様に男には思える。

だが男の体は眼を奪われるその光景とは全く別の行動を起こした。ラーズ1に指示されるよりも早く、直ちに対象かどうかの判定をAIに求める。予め照会データバンクに保存してあった二人の画像を呼び出して本人確認の為のコマンドを打ち込んだ男は、手元の液晶に表示される結果を嗤いながら佇むラーズ1に向かって告げた。

「マッチングプロパー適合確率出ました、99.2%。ほぼ対象に間違いません。」

「女を、アルファ男を、としてマーク。……何階だ、奴らが居る場所は？」

「南側専門店街の三階、非常階段付近です。3、2、1、

マーク。対象のロック、完了しました。」

その声を境にラーズ1の表情が変わった。顔中を埋め尽くしていた嗤いが影も形も無く消え失せて、鋭い眼光だけが男に向かって注

がれる。攀り上がった口角にその面影を残したまま、ラーズ1の緊迫した声が飛んだ。

「作戦を直ちにフェーズ3に移行、対象に向かって『デコイ』を放て。…… 此処から先は貴様達の演技力に掛かっている。必ず対象を囲いの中に誘い込め。」

鞭で打たれた様な痺れを覚えて、慌てて耳に嵌めた携帯に向かつて作戦の発動を他の隊員に伝えようとする男。ラーズ1の立案した作戦がいよいよ最終段階に入った事をその口調によって理解した男の体が思わず震える。口の中に広がる酸味の利いた唾液を思い切り飲み干して、グループ通話による発令を試みようとした時。

「待て、一つ大事な指示を忘れていた。」

呼び止めるラーズ1の声が男の発令を押し留めた。顔を上げた男の眼に映るラーズ1は何を思ったのか、再び身も凍る様な嗤いを取り戻している。声の無い男の戸惑いをまるで愉しむかのようにラーズ1が言った。

「必ず から畏に誘い込め。そうすれば は放って置いても自分の方から畏に飛び込んでくる。」

「？ …… 女の方、からですか？」

尋ねる男の顔を見ながら笑うラーズ1が男の質問の愚かさを笑っているのか、それとも自分の思惑通りに事が運ぶこの状況を愉しんで笑っているのかどうかは分からない。だが男にとって確実に言える事は、ラーズ1の指示が完全に『ゲーム』を支配していると言う事だ。掌の上で玩ばれる様に操られる対象の二人と、その巻き添えになった大勢の市民に対して男は初めて憐憫の情を持った。

「知らないのか …… 『雄』とはそう言う物だ。自分が死ぬと分かっているにも『雌』を助けずにはいられない、DNAには逆らえん。」

男の顔に微かに浮かんだ哀れみすらも嘲笑う、冷酷な声。ソーンダイク（19世紀の心理学者、動物の教育測定分野の権威）もかくやと思われるその発言は、明らかに対象となった二人に向けられ

た物。そしてそれはいよいよラーズ1の手中にある『ダイクヒンショップ黒の司教』  
チエックメイトが王手を掛ける升目に辿り着いた事を示していた。時を刻み続けた  
チエス・クロック対局時計の上に置かれるラーズ1の手が、鋭い眼光に形を変えてその  
ボタンを強く叩き込む。

新たに時が刻まれ始めた彼らに向かつて非常な宣告を与えるのは  
自分の役目。耳に差し込まれた携帯を取り落とさない様に、命令を  
一言一句間違えない様に強く押し当てた掌の中でラーズ1の命令を  
他人事の様言葉にする男は、タイムアップを知らせるフラッグの  
落ちる音を聞いた気がした。

マークスに向かつて殺意を露に抗う男、手にはナイフ代わりの歪  
に歪んだ廃材。破断された先端はぬめりと湿った鮮やかな赤を纏わ  
り付かせて立ち塞がったマークスの体目掛けて牙を剥く。本能のま  
まに闇雲に突き出されるその先端を見つめながら、一体幾人の身体  
を傷付けたのだと小さな怒りを覚えるながらマークスの左手は一挙  
動でその得物の進路を逸らした。

擦過する廃材を手に、人を傷つけ続けたその男は理性を亡くした  
表情に驚きの色を浮かべたままマークスとの間合いを縮めざるを得  
ない。勢い良く迫る目標に向かつて繰り出された右の拳が計った様  
なタイミングで顎にヒットし、一瞬にして意識を刈り取られた暴徒  
は孕んだ狂気と共に眠りの淵へと横たわった。

乱戦の続く臨時の闘技場は参戦者の密度を上げて、なまなか生半な根性で  
は潜り抜ける事ができない程の活気に溢れている。その先にある非  
常階段の入り口を目指して走る二人は参集する人垣を飛び越え、時  
にはやむを得ずに討ち倒して排除しながらやっとの思いで辿り着い  
た。だが闘技場の中に紛れ込んだ邪魔者と認定された二人は、暴徒  
の欲求を阻害するだけの存在として彼らから放たれる殺意を一手に  
引き受ける羽目になった。そうなる事もマークスの作戦だとしたら  
“ やっぱりむちゃくちゃだわ”と、アデリアは心の中で溜息を付く。  
一々断られ無くてもマークスの考えは分かっている。彼は殺到す

る戦いの勝者から全ての権利を剥ぎ取って、自分達がチャンピオンになるうとしている。王者から下される詔勅は彼らに抗って敗れた敗者に服従させると言う意味を持つ。自分達が暮らしている民主主義の理念からは遠く離れた理屈ではあるが、軍ならではのトップダウンが劇的に事態を收拾する力があるのもまた事実だ。

だが言うは易し、行ふは難し。負ける気はしないが勝つには数が多すぎる。相手の目が覚めるのが早いのか、それとも自分達の気力が尽きるのが早いのか、生死を賭けた根競べだ。負けて謝ったからといって許されるレベルじゃない、もう既に。

「大丈夫だ、アデリアっ。きつと何とかなる」

肩を並べてお互いの敵に相對する二人の心を繋いでいるかのよう  
に、アデリアの杞憂を感じ取ったマークスが振り返りもせずと言っ  
た。その声を聞いたアデリアが不敵な笑いを浮かべて弾ける様に次  
の相手へと立ち向かう。離れていく背中を横目で追いながら、自分  
目掛けて飛び込んで来る殺意の影を怖気で感じ取ったマークスが怒  
鳴りながらステップを踏んだ。

「っ 善なんだがなあっ！」

焦点を合わせない事で周囲の異変を読み取り、尚且つ相手に狙い  
を絞らせない『観の見』は横合いから繰り出された何かの影を捉え  
る。上体を屈めてやり過ぎた瞬間に放たれた左フックは狙うまで  
もなく間合いに入り込んだ相手の左わき腹に炸裂した。

人間の臓器の中でも最大の質量と体積を持つ肝臓と言う名の急所  
が悲鳴と激痛を同時に上げて男の戦意を喪失させ、のた打ち回って  
反吐をぶちまける男の頭に蹴りを入れて意識を飛ばしたマークスは  
次の挑戦者の姿を求める。流れる様な動きで挑戦者の攻撃を次々に  
秒殺し続けてきたマークスだったが、波状攻撃の休息と対戦相手か  
ら発生する慄然は彼に終戦間近の局面に事態が差し掛かっている事  
を知らせた。遠巻きにマークスを見つめる怨嗟の視線を痛みに覚え  
ながら、彼は同じ様に挑戦を退け続けている唯一の味方に眼を向け  
る。

白兵戦ならばオークリー基地の猛者共にも一目置かれるアデリアの体術は、まるで麻酔薬でも嗅がせたかの様に失神者の量産体勢に入っている。見た目の美貌で侮られたとは言え、現役の兵士八人をいとも簡単に病院送りにしてしまった『ベルファストの鬼姫』が正気を失った素人相手に負ける事など考えられない。現にマークスは一人を相手にするのが精一杯なのに対してアデリアは少なくとも二人以上を同時に捌いて、あまつさえ熨している。華麗な舞から繰り出される強烈な蹴りと鈍い打撃音を耳にしながらマークスは、本気のアデリアと喧嘩をする事がどれだけ命知らずな行為かと言う事を思い知らずには居られなかった。

絶対的に不利な間合いと体重差をアデリアは持ち前の身体能力と俊敏さでカバーする。僅かな間合いの出し入れで相手の攻撃を誘いながら撃ち終わりの隙を狙って懐に飛び込み、がら空きになった急所目掛けて的確に肘を当てる。八極拳における裡門頂肘りもんちやうぢゆうを鳩尾に決められた相手があまりの衝撃に呼吸を失い、体を折り曲げた瞬間を狙い澄まして放たれるアデリアの上段回し蹴り。零距离から弧を描いて繰り出された華奢で凶暴な足の甲が小さな息吹と共に相手の首筋へと送り込まれて、その瞬間に蹴られた相手は昇天する。

ぐにやりとひれ伏す相手の姿に眼もくれずに、マークスに与えられた倍の状況を捌き続けるアデリアは険しい表情のまま苛立ち紛れに言い放った。

「ったく、あとからあとからワラワラとキリが無いわねえ。いい加減に」

刹那、頭上から襲い掛かる鉄の棒を眼を細くして見切りを付ける。勝利を確信して振り下ろした男の拳にアデリアが手を添えて受け流す。体側を掠めていく男の力を利用して上体を捻り込んだアデリアは一回転して後ろ足を振り上げた。後ろ上段回し蹴りが一広も無い間合いから真上に放たれて、体勢を崩して曝露された男の顎を薙ぎ払う。バカになった口腔から吹き飛んでいく何本かの前歯が意識を無くした男の巨体と共に瓦礫の上へと撒き散らされた。

まるで演舞の様なアデリアの蹴りに眼を絆された対戦者達はその一撃で遂に止まった。相手を仕留めたばかりの足を宙に浮かべたまま、鬆開の姿勢（体のどこにも力みの無い構え）を保持するアデリアが大声で怒鳴り付ける。

「諦めなさいよ！ あんた達まだやんの！？」

アデリアの恫喝が与えた影響は傍でその声を聞いたマークスの眼にも明らかだった。勝ち鬨同然の声に金縛りに遭った対戦候補者は鋭い眼光で辺りを見回す一人の少女に向かって怯えを隠せず、累々と積み上げられた敗者の群れと掠り傷一つ無いその身体、奈落の底に似つかわしくない覇気に溢れるその声が生きる為に罪を犯す事を躊躇わなかった彼らに罪悪感を蘇らせた。

芽吹いた畏怖は敗者となった彼らから抵抗と言う二文字を消去し、しかしそれが直ぐに改心への道筋を歩む道標となる訳ではない。日常への生還を尚も希望する彼らの妄執は言葉となつて立ち塞がったままの二人に向けて叩き付けられた。

「頼むからそこをどいてくれっ、ここはもう直ぐ崩れるんだぞ？」

お前達の邪魔はしないから俺達もそこを通してくれ！」

懇願して泣き喚く一人の男が武器を棄てて跪いた。圧倒的な力の差に服従を選んだ男の行動はその行く末を見守る群衆にも波紋の様に浸透していく。浮かせた足が必要以上の勢いで地面に落ち着かせたアデリアがにつこりと笑う。彼女の足で砕かれた瓦礫の音が周囲の壁に反響して不気味なコーラスを奏でた。

「心外ね、あたし達ここから逃げるつもりなんてこれっぽっちも無いわよ？ それどころか救助隊が来るまでここに残るつもりなんだけど。勿論」

背筋を伸ばして勢い良く差し出された指が、立ち尽くしたままアデリアの声に耳を傾ける敗者の群れを左から右へとなぞっていく。

「あんた達も無理矢理お供に加えてあげるけど？」

大胆不敵なアデリアの挑発。にも拘らず再び励起される狂気の数はごく少ない事がマークスには分かる。

アデリアの発言は生へと執着するしかなかった暴徒の目を覚ませる為に十分な衝撃を持っていた。この闘技場に蔓延したルールと真つ向から対立した勝者の言葉は敗者に対しての隷属を意味する。以心伝心でマークスの意図を察していたアデリアが尚も暴徒の反抗心を鎮める為に言葉を続けた。

「ここでごちやごちやしてる間に崩れたらどの道同じ事よ、それよりも少しでも大勢の人が生き残れる可能性に賭けてみたいとは思わないのかなあ？」

暗く濁っていた暴徒の眼に光が宿る。アデリアから提示された生への道標は彼らに暴力以外の新たな道を指し示した。廃墟を吹き通る彼女の涼やかな声と絶妙な会話の間に感心して成り行きを見守るマークスはその時、アデリアの過去の経歴を思い出していた。

事件を起こす前に彼女が在籍していたベルファスト基地、そこに常駐するモビルスーツ部隊の小隊長であったという事実。当時の階級的にはその資格を与えられる条件には達していないが、抜擢された以上確かにアデリアには人を率いる能力があったのだと言う事を横目で見るマークスに改めて認識させた。

「そんな…… そんな可能性があるのか？」

小さな声で呟かれる縋る様な問い掛けに、アデリアとマークスの視線が交錯した。自分の出番はここまでとばかりに眼で合図して、発言の優先権を無言でマークスへと委譲する。

「この階にいる他のグループは既にエレベーターホールに集まっている、残っているのはここにいる貴方達だけだ。無闇にここで争って時間を費やすよりもそこに集まって救助を待つ方が賢明な判断だと思っが？」

言葉が通じれば獣ではない、とは誰が言った言葉だったか。マークスから目を離して後ろを振り返る彼らに捧げられた巨大なモノリスは、人に立ち返った彼らに与えられる最後の希望の見える。遮る物を失ったただっ広いフロアの中心に未だに屹立する巨大なエレベーターシャフト、その根元に蹲る様に身を寄せる人々の姿。彼



らの選択肢とは真逆の道を歩こうとする同じ種の存在を確認した人々の目から、残り少ないながらも未だにその残滓を漂わせていた狂気が完全に消失した。

「あそこに　　あそこに行けば絶対に助かるのか？　俺には妻も子供もいる、生きてもう一度家族に会う事が　　」

「残念だけど、」

男の吐いたその言葉に、マークスは彼の代わりに集団の引率を請け負った消防隊長の顔を思い出す。同じ問いを向けられた彼の回答と同じ言葉をマークスは遮る様に口にした。

「『絶対』なんて言葉がこの世の中にある訳が無い、だから君の未来も保障はできない。だが俺達は連邦軍の兵士だ。連邦軍人である以上、貴方達民間人の安全を確保する事を最優先に考えている事を約束する。一年戦争の時と同じ様に。」

誇りを持って、力強く。消防指令から出された宿題をマークスは見事に解いて見せた。自分は一介の軍曹でそんな言葉を語れるほど立派な人間じゃないと自覚はしていても、人の見識を取り戻した彼らにとっては將軍も自分も同じ『連邦軍』の軍人だ。そして一般市民を守る為に全てを費やして任務を全うすると言う点に於いて將軍も軍曹も同じ義務を有する。マークスが背負っている物を改めて敗者に突き付けたその時、思慮を取り戻した彼らの目にマークスの着衣がやつと飛び込んだ。

「あんだ、連邦の兵隊さんだったのか？」

深い安堵に包まれた声を耳にして、マークスは小さく頷く。

一連の問答は直ぐに周囲を侵食して人々の手から武器を奪った。力を失った手から零れ落ちる幾つもの廃材が、乾いた音を立てて廃墟の床を跳ね回る。

もう彼らが再び獣に戻る事は無い、分の悪い博打に勝利した事を確信したアデリアが両手を腰に当て小首を傾げて困った様な顔で笑った。その顔を覗き見たマークスが、暴徒からただの被災者へと変貌した彼らの迷いを断ち切る為に努めて優しい声で命令する。

「元氣な奴は倒れている人に手を貸してやれ、手当ては後からでも十分可能だ。あそこには医療関係者もいるから指示を仰いで処置をお願いすればいい。君達が自分で撒いた種だ、責任を持つてみんなを連れて行け。一人もここに残すんじゃない、いいな？」

鎮圧された牙狼の群れに発せられたマークスの指示は彼らから牙を抜き取った自分達とて例外ではない。加害者責任を全うする為に率先して彼らの中に混じって、怪我人の手当てをするマークスを見習って行動を起こす相棒<sup>アデリア</sup>。

だがそれは嘗ての地球で人々に自愛の手を差し伸べた一人の修道女のように、アデリアを博愛主義に目覚めさせる切欠となるエピソードのワンシーンにはなり得なかった。力の抜けた身体を抱き起こして背中に膝を当てて活を入れる、筋肉質ではないが瞬間放出力に優れる彼女の身体を持ってしても大の男を目覚めさせるのは一苦労だ。「よっこいしょ」と気合混じりに力を込めるその姿はまるで年頃の娘が父親か兄の背中にじゃれ付いているかのように見える。

目を覚ました相手が夢現の中でアデリアの指示を聞き入れ、耳口から忍び込む柔らかな音色に癒されて我に返った瞬間に取り戻す記憶は壊れたブラウン管の様に途絶する世界。遠ざかっていく光の中に最後まで残ったその顔の持ち主が、自分を深い眠りの淵から呼び覚ます声の主と同一人物だと認識した彼らの体は仕掛けの様に跳ね上がった。

一様に、誰一人の例外も無く。

引き攣る悲鳴を上げて四つん這いに逃げ出す男の姿を、活を入れたまの姿勢で呆然と見送るアデリア。後を追いかけて自分の暴力を正当防衛だと弁解する努力はとっくの昔に諦めた。無様に晒すその背中を小さな溜息交じりで見送ったアデリアが、それでも何か釈然としない心境で呟く。

「なに？ あたしってそんなにおっかない？ …… ショックだなあ。」

アデリアが相手をしたその悉くが彼女の発言を耳にしたら、銘々に無責任の石礫を放り投げて否定の声を上げるだろう。そんな目に遭う謂れは無いアデリアには彼女なりの正当な理由が存在するのだが、緊急避難と言う名目を掲げて及んだ行為にしては余りにも実力差が有り過ぎたという事も事実だ。

暴徒と化した一般市民に対して常日頃から有事に備えて訓練をしている連邦公務員が、何の斟酌も無く力に訴えたと言う行為自体平時においては十分に重罪に値する。しかしマークスの判断通り、その手段を行使する事でしか秩序を回復する事ができなかったとしたらそれは正当な物だとアデリアは思う。でなければ何の為にわざわざ怪我をさせずに意識だけを飛ばすと言う難しい戦いを貫徹したと言うのか。

人の為に振るう暴力、そして目の前に広がる崩れ落ちた建造物。規模も人数も違い過ぎるがそれはあの日のベルファストをアデリアに思い起こさせた。心の中をちくちくと刺す不快な痛みがアデリアの表情を曇らせる。

力の意味、正義の意味。

或る男に投げ掛けられた、あの言葉。

自分の部下に対する卑劣で不埒な行為への謝罪と贖罪　軍  
警察に出頭して自首を勧める　を求めてプレイルームに赴いたアデリアを待っていた物は、更なる女性蔑視の言葉と自分をも毒牙に掛けようとする仲間の形をした犯罪者達だった。衆人環視の前で浴びせられた罵詈雑言と共に赴いた部下に対する侮蔑の言葉、その全てに辛うじて耐え抜いて尚も食い下がった連邦軍にも稀な女性小隊長に向けられた兵士達の結論は、言葉ではなく力。

組み敷かれたアデリアの顔に至近距離から吹き付けられる下種の吐息が彼女の逆鱗に触れる。パイロットスーツの下に着たインナーがその男の手で引き千切られて、上半身を剥き出された時点でアデリアの理性は股間への一撃と共にこの世界から吹き飛んだ。

結果は軍の人事部に保管されている懲罰記録に記されている通り。仲間を失神させたアデリアを羽交い絞めにしようとする男達の腕を掻い潜り、迂闊にも半裸になった身を庇う事無く渾身の一撃を繰り出すアデリア、娯楽に飢えた物見由山の兵士達。だが勝敗が決しても狂った様に追い討ちを掛けるアデリアの鬼気迫る表情に、異変を感じた彼らが慌てて軍警察に通報した時には既に手遅れだった。

自分達がアデリアの行動を阻止出来なかった事で共同正犯の罪に問われる事を恐れた観客はあつという間に雲隠れし、什器備品の散乱するプレイルームでただ一人呆然と佇む半裸の少女。そして加害者であろうと思われる彼女の眼は足元に横たわって股間を真っ赤に染めた一人の士官と、力の抜けた体を抱き抱えて泣き喚く女性隊員へと注がれていた。ありとあらゆる恨みの言葉を女性隊員から投げ掛けられて、その度に肩を震わせる少女の姿はまるで自らを鞭打つ聖女のように警官達には見えたと言う。

「君に与えられる選択肢は二つだ、フォス曹長。」

深刻な顔で告げるその基地指令の階級までもが少佐。一年戦争の余波で焦土と化したベルファスト、舞台を宇宙に移した事によって戦線から取り残された北欧に位置するこの基地に関する人事は、再建途中の基地に有りがちな異例の抜擢がまかり通っていた。

基地指令の階級は元より女性兵士だけで編成されたモビルスーツ部隊の常駐配備、そして曹長と言う階級でありながら小隊長に抜擢されたアデリア・フォス。その全てが終戦後の混乱をなかなか収拾できない連邦と軍と各報道機関による世論誘導の手段である事は、関係者だけが知る秘密だった。復興の為に士気高揚の旗手に選ばれたアデリア達にその真意を伝えられる事は無かったが、引つ切り無しに基地に訪れる軍の広報や地元テレビ局の取材要請を全て受け入れる方面軍司令部や基地指令の態度を見ていればあらかたの想像は付く。

来る日も来る日も記者のインタビューやフラッシュに追い回され

ながら、アデリアは　　いや、その対象となつたベルファスト  
基地全体に厭世的な空気が蔓延している事を肌身で感じていた。

無論アデリアとて軍に　　最高の難易度を誇るモビルスーツ  
パイロット　　志願したのは見世物になる為ではない、自分の  
最も大事な物を奪つて言つた『戦争』に対する憎しみゆえの事であ  
る。自分の姉も同じ志で軍を選びソロモンの海に散つてしまった、  
その遺志を継ぐ事こそが自分の使命だと考えていた。遠く離れた場  
所で起こっている戦争が生み出す悲劇を知つていながら何も出来ず  
に宇宙を見上げて手を拱こぶいているのはもう嫌だ、と強く願つた故の  
発露。しかし現実には自分を含めたモビルスーツ隊に相応しい任務  
が与えられる事は無く。

ベルファストで急遽編成された自分の部隊が一年戦争で失つた戦  
力の補充という緊急課題に基づき、女性兵士の現場への投入を意図  
した物であるという事は頭では理解できている。軍人の立場を自覚  
するアデリアが自分の主張や思惑も押し留めて全ての取材に嫌な顔  
一つ見せずに協力するのは当然の事だと思つている。

だが任務とは全く関係の無い所で磨り減らされる神経は、アデリ  
アの心にも不満と言う劇薬を生み出す要因になり、それは今自分の  
目の前に座る上司に対する直接的な評価になつていた。

自分の正義を信じて疑わないアデリアにとって、心の底で疎まし  
く思つていた基地指令からの申し出は意外な物だった。確かに相手  
を病院へと送り込んだのは自分だが、それには自己防衛と言う立派  
な理由がある。それに八対一の戦力差、性別による戦闘力を鑑みれ  
ば自分がいかに不利な立場にいたかと言う事など火を見るより明ら  
かだ。どう鼻屑目に見ても自分に下される処分は譴責か、減俸か。  
いずれにしても軽微な物だろうと信じて疑わなかつたアデリアは、  
座りの悪いstuhlデスクの向こう側に座つて深刻な顔を浮かべる  
基地指令の顔を不審な目で見つめて言つた。

「二つ、とは。一体どう言う事でしょうか、指令。」

「こちらが除隊届けになります。除隊の際に条件となる項目は貴官の場合特殊な物も含まれますので良くご一読の上、署名なされた方が宜しいかと。」

尋ねたアデリアに向かって基地指令の代わりに口を開いたのは、隣に座っている弁護士風の男だった。陰湿そうな性格を滲ませる切れ長の目を僅かに開いたその男が手元に置いてあつた書類をすつとアデリアの前に滑らせながら、言った。

淡々と男の口から告げられるその言葉をまるで信じられないといった風情で、呆然と書類に目を落とすアデリア。望外に降つて湧いた様なその提示に思考回路までが断線する。呼吸と心臓の鼓動だけが大きく頭の中で耳障りな音を立てて、聴力の殆どを失くしそうになつたアデリアの耳に、忍び込む様に基地指令の言葉が続いた。

「私も君の今の立場、今までの功績を考えるとこの様な選択しか与えて遣れない事を心苦しく思う。だが、君はまだ若い。条件付ではあるが軍を止めても十分に幸せになれるだろう。この先の事を考えれば多少の不条理を飲み込んでも、それで今回の事が不問に処されるというのなら良しとしなければならぬと考えるんだが？」

「『不問』？」

基地指令が覗かせた一つの単語を反芻する事でアデリアは我に返つた。不問とは自分に非があり相手に罪が無かつた時に使われるべき言葉だとアデリアは思う。焦点を合わせたアデリアの藍色の瞳が真つ直ぐに基地指令の顔を見つめて言葉の意味を確認する。

「不問とはどういう意味ですか、指令。私は何も悪い事をしていない。確かに相手の兵士を傷付けたのは認めますが、彼らだって無抵抗だった訳じゃない。私がそれだけの処分を受けると言うのなら彼らにも同じ処分が与えられてしかるべきです！」

「成る程、加害者なりの意見ですな。被告は皆そう言う。」

口を挟んで来る弁護士に向かって思わず怒りの目を向けて怒鳴ろうとするアデリアの顔を、基地指令はきつと睨んで押し留めた。それが今のアデリアにとってどれだけ不利な条件になるかと言う事を

視線でアデリアに伝える。

実際取調室で行われる会話の一切は法廷が開かれた時に重要な証拠として裁判官に提出される、そうだった時に被る不利を予測しての基地指令の行動だった。

「ですがフォス曹長　　でしたかな？　貴官の動機が部下に対する暴行に端を発しているとは言え貴官の取った行動はれっきとした犯罪行為に他ならない。しかも貴方の部下からはその後貴方の行動の動機を裏付ける為の　　被害者達に暴行をされた事に対する告訴も為されていない。つまりこの件は貴官が、私怨によって引き起こした唯の傷害事件という扱いになるのですよ。」

「そんなっ！　私怨なんかじゃない、私は彼女に謝る様に彼らに言った。彼らはそれを笑った拳句に私まで　　」

「それを証明する物は何も無いのですよ。貴官が引き起こしたあの現場、大怪我をした　　うち一人は再起不能だ。彼らがこの事件に関する全ての証拠です。」

「じゃあ、彼女に聞いてみてっ！　彼女は私と一緒にあそこにいた、彼女が第三者として全てを知ってるわ！」

「だから　　」

やれやれといった顔で抗弁するアデリアを見つめる弁護士が小さな溜息を吐いて言葉を切った。テーブルの下においてあった両手を挙げて肘を突き、組み合わせた両手で自分の顔にこれから浮かぶであろう笑みを悟られない様に表情を隠して、その言葉を口にした。

「　　証明する物は何もない、とさっきから申し上げている。被害者達から暴行を受けたと言われる貴官の部下の証言も含めて、ですが。」

絶句したアデリアを失望させるには十分な男の言葉だった。自分の正義を証明してくれる筈の、掛け替えの無い部下が結果的として彼女の敵に回ったと言う事実。そして男の発言はアデリアの脳裏に一つの可能性を浮かび上がらせた。

“被害者にそんな事を尋ねるなんて有り得ない”と否定を続けるア

デリアの良心が、組んだ掌からうつすらと覗く男の口角を見て消し飛んだ。触る事もおぞましい曖昧な予測に尋ねる声まで震える。

「……………彼女に何をした？……………」

アデリアの中で渦巻く蟠りが異様なオーラとなって彼女の背後を黒く染め上げた。

アデリアが今回の行動を起こした発端が自分の部下の為に為された事だと言う事を理解した上で、感情を逆撫でる様な発言をした弁護士にはその全てが計算ずくだった。自分に手出しをしよう物なら儲け物、監視下にある密室での民間人に対する暴行と言う事件はその事実が記録されるだけでも後々の公判で何かと都合がいい、絶対的な勝訴を勝ち取る為の揺ぎ無い証拠を手に入れようと画策するその男は、アデリアの怒りが頂点に達した瞬間を見計らって煽る様な台詞を発した。

「被害者の弁護士として当然の事を尋ねただけですよ。彼女が被害者の男性達にどの様な仕打ちを受けてどの様な行為に及んだか。勿論その中には彼女自身に非はなかったかどうか、互いの合意の上で行われた行為ではなかった等の性癖含みの精査も含まれる事になりましたがね。」

アデリアがその瞬間物も言わずに跳ねた。腰掛けていたパイプ椅子が大きな音を立てて床へと倒れる。吹き飛んだ理性を追いかける事さえ忘れて躍り懸かる上体、真っ先に相手の体へと伸ばされた左手が胸倉を掴んで引き付ける。

「この、下種野郎っ！！」

いかにもその男の卑しい品性を具現化した様な、くすんだ銀色のネクタイごと握り潰した左手に応える様に右手が肩の上まで上がる。だがその行為はアデリアの思いを遂げる寸前に背後に控える軍警察の兵士によって未遂に終わった。両手を二人に羽交い絞めにされ、尚も振り解こうともがき続けるアデリア、彼女の暴走を止めたのは基地指令の厳しい声だった。

「席に着きたまえ、フォス曹長。君がこの事について抗弁する為に



は軍の法廷に被告人として立つしか方法がない、そして」

基地指令の発言の理を認めたアデリアから抗いの意思が消える。

やっとの思いで取り戻した理性が命令を聞き入れて、拘束を解かれた体はわなわなと震えて腰を落とした椅子をがたがたと揺らす。眉間に皺を寄せたまま基地指令と不躰極まりない下種な弁護士顔を交互に見やりながら、アデリアは基地指令の言葉を聞いた。

「君に一切の勝ち目は無い。その事を理解した上でこの方は『示談』を提案されているのだ。彼を雇った依頼主の意向でな。」

「それが即時除隊と言う事ですか指令。こんな外道の言いなりになつてこんな外道を雇った依頼主の言いなりになつて、私が罪を被れと!？」

「それ以上言つと、名誉毀損で今度は私が告訴しますよ? 民間人に対する看過し難い暴言ですな、貴官の仰り様は。」

再び跳ね上がるつとめるアデリアの体を今度は基地指令の手が押し留めた。弁護士との間に差し出された上官の手を振り払えないまま、取り留めの無い怒りだけをそのまま着席の力に換える。簡素な造りのパイプ椅子がアデリアの尻の下で歯軋りの様な悲鳴を上げた。「もう一つ、選択肢が君にはある。それは司法取引によつて自分の罪を認めた後にジャブローから指定された基地へと転属する事だ。」

これ以上弁護士とアデリアを絡ませる事に危機感を抱いた基地指令は、話を切り替える為にもう一つを選択肢をおもむろに提示した。指令の手元からアデリアに差し出されたもう一枚の書類には、アデリアの身に覚えの無い告白文と空欄の署名欄がある。

「勿論、罪を無条件に認める事によつて君は降格になるだろう。しかし君が軍に残ろうと言うのならその望みは聞き入れられる。例えそれがどの様な辺境になつたとしても、と言う条件付ではあるが……それが先方の用意した最大限の譲歩だ。」

「不名誉な二者択一ですね。」

除隊か降格か。どちらにしてもアデリアの軍歴に傷が付く事には変わりがない。一方的に与えられる罰を譲歩だと説明されてもそれ

を無条件に飲み込む事には同意しかねる。部下を庇う事もできなかつた敵同然の上司に向かつて語気を強めるアデリア。

「それが彼の依頼主である『ティターズ』の意向だ。彼らは君が現場復帰を果たした被害者達からの報復を受けない様に配慮をしてくれている、それを避けるには住む世界を違えるか、絶対に交流する事の無い条件の場所へと転属するしかないだろうと言うティターズの見解を私は指示せざるを得ない。だが、どちらにしても君の身柄をヨーロッパ方面軍で預かる事は不可能になった…… そう  
いう事だ。」

基地指令が意識的に会話の中に差し込んだ『ティターズ』と言う語句を耳にしたアデリアは、それで自分を取り囲む大まかな話の流れを理解するに至った。

自分が病院送りにした相手はティターズの隊員で、本来であれば軍内部での事件に関してはある程度の対等な処分が下される所を今回は自分の所属する『ヨーロッパ方面軍』と言う看板がそうさせなかった。ヨーロッパ方面軍には旧体制派の佐官が多く、新興勢力であるティターズの部隊を駐留させる事に難色を示していると言う話を聞いた事がある。だが今回アデリアが引き起こした傷害事件は被害者であるティターズの側に部隊を送り込む為の格好の口実を与える形になったのだ。この事が拮抗する旧体制とティターズの勢力争いと言う砦に穿たれた螻蛄スズメバチの一穴となる事を危惧した方面軍の司令部は『高度に政治的な判断』によつて。

「…… 私の身柄を差し出したんですね、指令。自分達の保身の為に、私をティターズに。」

「君が私の判断をどの様に受け取るかがそれは君の自由だ。だがフオス曹長、誤解の無い様に断つて置くが先方でも君の身柄を引き取る事はできないのだ。…… 考えても見たまえ、前線で未だにジオンの残党と戦う現役の兵士が女性隊員一人に袋叩きにされたと言う事実が彼らの内部で広まったらどういう事になるか。精鋭で構成されていると言うティターズの権威には傷が付き、それは彼らの

母体である連邦軍の屋台骨に何らかの風評被害を与えんとも限らん。彼らはこのことが表沙汰になる事を好まんし、我々も回避したい。故に互いにこの件に関して協議を重ねた上で決断を下した。君の拘留期間が長かったのは意見の調整に時間を要したからだ。」

「私はその条件を両方とも断つたとしたら？ 異議を唱えてサインをしなければ私にはどういう処分が下されるのですか、私はその選択をする可能性くらい織り込み済みでしょう？」

険しい表情で詰め寄るアデリアに向かって基地指令の代わりに口を開いたのは弁護士の方だった。アデリアの提案に計算高い笑みを恐らくそれはその通りなのだろう。裁判に勝訴する事で手にする事の出来る弁護士の報酬は意外に多い 浮かべて答えた。

「貴官には軍法廷での証言の機会が与えられます。勿論弁護士を付ける事も可能だが、今の貴官の立場で依頼を引き受けてくれる弁護士など居ないでしょう。せいぜい軍選弁護士が貴官の弁護をいやいや引き受け、そして貴官は敗訴する。軍兵士八人に対する重篤な傷害罪 貴官が士官の一人に向けて行った過剰行為には殺人未遂が付くかもしれない。どちらにしても『連邦軍アンデス刑務所』送りになる事は間違いないでしょう、それもそれ相当の長い刑期は覚悟された方がいいかと。」

「やけを起こすな、フォス曹長。」

アデリアの意図を悟った指令がきつい口調で嗜めた。

自分がこの申し出を受けなければこの件は少なくとも軍の中で表沙汰になり、策を弄した勢力に何らかのダメージを与える事が出来るかもしれない。刑期や罪状で怯む様な性格ではない、ただ自分の正義が誰にも認められないまま有耶無耶にされてしまう事が怖かった。それならばいつその事、相手と刺し違えて誇り高く散った方が幾らかましな生き方の様に思える。思い描いた長年の夢を戦争によって奪われてしまった自分が再び天に召された彼女と合間見える為には、その様な薄汚い陰謀に巻き込まれる事こそ穢らわしいとさえ

感じる。

「いいか、君の所属している連邦軍は君が今考えてる様な事態を決して望まない。君に与えられる選択はここに提示した二点のみだ。そして君は連邦軍人である以上そのどちらかの条件を必ず選択しなければならぬ、これは命令だ。」

アデリアの覚悟を命令と言う強制によって封殺する基地指令の声が狭い取調室の中に木霊した。

がんじがらめに縛られた自らの窮地を察してもアデリアの口から何らかの言葉が零れる事はなかった。今まで自分を取り巻いていた世界が急に窄まって息さえ苦しい、代わりに押し寄せる猛烈な孤独感がアデリアの口から言葉を奪った物の正体だった。机の対岸に居る二人の顔からも目を離してただわなわなと机上の書類に眼を落とすまま震えているアデリアに向かって、弁護士の方がこれ以上は時間の無駄だとばかりに立ち上がりながら言った。

「依頼主からは今日中と言う事でしたがまあいいでしょう。貴官に一晩の猶予を差し上げます、今晩一晩拘置所の冷たい床で頭を冷やしてよく考えなさい。どちらを選んだとしても貴官が被害者の兵士達とこの先一生顔を合わせなくて済む事には変わりが無い、貴官の身辺と将来を慮ってくれたティターンズに感謝する事ですな。」

……では私はこれで。それでも何かと忙しい身の上なので。」  
恩着せがましい捨て台詞を吐いた弁護士が足元に置かれたゼロハリバートンを手にとってゆっくりと出口に向かう。その後姿をやり場の無い怒りに燃えた瞳で睨みつけるアデリア。

その憎憎しい背中を末代までも語り継ぐと記憶の中に焼き付けようと誓ったアデリアの視線を感じ取ったかの様に、ドアを開けて退出しようとしたその男は唐突に振り返ってアデリアの殺気と対峙した。

「貴官が信じる正義などこんな物です、フォス曹長。」

叩き付けられる恨みを歪んだ笑いで往なした弁護士が、言った。

「如何に貴官が自分の正義を謳い上げた所で所詮は何も知らない子

供の理屈だ、そんな下らん理屈がまかり通るほどこの世の中は甘くない。より大きな力の前には貴官の信じる正義など取るに値しない、眉唾物の愚かな主張だ。」

「……何が言いたい？」

今にも激発しそうになる下半身のバネを必死に堪えるアデリアには男の下卑た微笑を睨みつけるのが精一杯の抵抗だった。弁護士はアデリアの忍耐力の全てを奪わんとするかの如く、蔑んだ口調で言葉を続ける。

「『正義』とは力、なんですよ。清廉潔白を是とする貴官には信じられないかも知れないが、世界はどこまでも不公平に出来ている。世間知らずのお子様にもそれが理解出来る日が必ずやって来る、いずれ貴官が穢れたと自分で感じた時に初めてそれを知る事になるでしょう。……ではまた明日、良い返事を期待して伺う事にしましょう。」

自分の信じる全てを否定されたアデリアの頭の中が真っ白になる。いつの間にか立ち上がった体を背後から再び屈強な兵士の手によって取り押さえられて初めてアデリアは自分がその弁護士に飛び掛ろうとしていた事を知った。腕を極められて身動きのできない上半身を尚も拘束する為に机へと押さえ付けられた顔を濡らす生暖かい物。アデリアは自分が泣いている事に気が付いた。悔しさと絶望に塗れた心を抱えたまま。

悔しさが溢れ出す。

あの下種がほざいた理屈を何としても覆したかった。力が正義なんかじゃない、正しい事が正義なんだと証明したかった。

だが今自分が人々を守る為に使ったのは紛れもない『力』。彼らの命を守る為に正義を貫く事が暴力へと繋がった。他に選択肢は無かったし、もしあつたとしても自分達の稚拙な頭では思いも付かなかった。

あの時とは状況も違つし、自分も少しは成長した。正義の本質は

多種多様であり、一言で言い表せる事のできない複雑な物だと言う事も知っている。あの時の暴力と今の暴力が全く性質の違う物である事が唯一の救い、だが総称として言い表される物は、どちらも同じ『力』だ。

結局、自分はその日に犯した間違いをここで証明したに過ぎなかった。あの下種に言われた『力は正義』と言う台詞、そして自分はその言葉の正しさもいつか証明してしまう事になるのだろうか

「アデリアの様に正義を語る偽善者がいつかまた戦争を生むのよ！

この人殺しっ！！！」

「アデリア、どうした？」

記憶の中の雄叫びと聞き慣れた優しい声が重なり合う。束の間、過去の泥濘に身を浸っていたアデリアの意識はまるで見えない手で引き上げられた様に現実へと戻された。ぼやけた視界の中で再生されていたあの日の景色が消えて、彼女の居た場所にはマークスが立っている。

「え、あ…… ううん、なんでもない。」

自分の葛藤を見透かされない様に笑おうと努めるアデリアだったが頬が動かない。声のトーンを上げて無理やり口角を上げる事で生まれる作り笑いがやっただ。

「そっちはもう終わった？ じゃああたし達も急ごう。」

この距離なら分からないだろうと。自分の後悔はマークスの作戦に対する侮辱に値すると感じたアデリアは絶対にその事を悟られまいと全ての演技力を動員した。

マークスとてこんなやり方で事態を鎮圧したいとは考えていなかっただろう、だがそれしか手段が無かったとしたら。そして未熟な自分達がそれ以外のベターな方法を見つけない事が出なかったとしたら。

アデリアにはマークスの無念さが理解出来る。曲がりなりにも二年もコンビを組んで来た相手だ、こんな方法を取ったマークスが意気揚々と自分の手柄の様にこの顛末を語る事なんか有り得ない。彼自身もまたアデリアと同様に悩み苦しんでいるのだ、自分の未熟さを後悔して。

その気持ちを誰よりも知っている自分がマークスを否定する事などあつてはならないと思う。例え間違つたやり方だつたとしても彼は立派にやり遂げたのだ。だから誇りに思つていい、思わなければ自分の間違いが大好きな相手によつて証明されてしまったとしても。

「よかつたわねマークス、上手くいつて。さすがは」  
心からの賛辞を精一杯の明るい声で捧げようとしたアデリア。だがその言葉はマークスの行動によつて途切れざるを得なかつた。突然瓦礫の山を飛ぶ様に駆けて来たマークスがいきなりアデリアの首を掴む。びっくりして見上げるアデリアの目に眉間に皺を寄せて眉を吊り上げたマークスの顔があつた。自分の何かに対して猛烈に憤っている事は明らかだ。

「お前、何で今まで黙つてたっ!？」  
その質問に息を止め、声を失つて全身を硬くするアデリア。自分の演技力が足りないばかりにマークスに自分の気持ちを悟らせるハメになつてしまったと言う後悔が心拍数を急激に押し上げる。眼球まで揺らす動悸が目映るマークスの輪郭を二重三重にも揺らした。脳細胞が悲鳴を上げるほど駈けずり回る言い訳のクロスワードはどうにも上手く仕上がらない。何も出来ずにただ立ち竦むアデリアに向かつて、マークスが再び問い掛ける。

「どこをやられたっ、頭か、腹か？ くっそ、何で怪我したならしたつて早く言わないんだ!？」  
「へ？」

マークスの言葉が、意図が理解できないのは、アデリアがあまりにも深く過去の記憶の中に没入していたからなのかも知れない。マ

マークスの怒りが実は身を案じての焦りである事にアデリアが気が付いた時には、彼女の体は既にマークスに抱きかかえられていた。初めて見るマークスの取り乱した表情が直ぐ傍に。

「ちよつ、ちよつとマークス」

「いいから黙ってじつとしてろっ！ 今すぐ医者<sup>ハテイ</sup>の所まで連れて行ってやる、畜生、何て馬鹿なんだ俺は！ お前が怪我してる事を気が付かなかったなんて相棒失格だっ！」

「い、いや、だからこれはちがっ」

走り出そうとするマークスの拘束から逃れようと胸板を押すアデリア。幾らマークスがタフでも過酷な任務をこなして来たその体にダメージが無い訳が無い。あまつさえ一人一人を抱えて避難場所まで瓦礫の上を走るなんて無謀にも程がある。第一あたしは。

「だ、大丈夫だつて。どこも怪我なんてしてないから、だから降ろして、一人で歩ける」

「どこが大丈夫なんだ！ そんな赤い顔してどこも悪くないなんて事があるかっ！」

マークスに指摘されて始めて自分の顔に血が上っている事にアデリアは気付いた。その原因に思い当たつて尚も上昇する血圧は、この状況を逃れない限り沈静化する事が不可能である事をアデリアに知らせる。

“あんたがいきなり抱きかかえるからこうなったのよっ！”

心の中で思い切りどやし付けたアデリアがエイヤツと胸に当てた手に力を込めた。マークスの両手に乗つかつていたアデリアの体がまるで羽毛の様にふわりと宙に浮き、猫の様な敏捷さで翻した体が軽やかに瓦礫の上に降り立つ。

「アデリアっ！ お前」

「いーからちよつと待ってなさいって言ってるのっ！」

マークスの叱咤を堰き止めて尚、倍の勢いで投げ返すアデリア。背を向けたまま胸に手を当て、大きく深呼吸を繰り返して胸の動悸が治まるのを待ち侘びる。顔の火照りが収まった事を自覚出来る段



階に来て、アデリアはマークスの方を振り向いた。

「ちよつと落ち着いてよ。あたしがどこか怪我してる様に見える？  
全く心配性なんだから。」

それはいつもと違ったマークスに触れたからか、アデリアは自分に自然な笑顔が戻った事が分かる。照れくさくて、でもどこか嬉しい。心の底に蟠っていた過去の澱を払い除けてくれたマークスに送る、心からの感謝。

「そりゃ心配するだろうっ！ 呼びかけても応えないし、気が付いたと思つたら変な笑い方するし。ぜんぜん普段のお前じゃないぞ！  
？」

「当たり前よ。あれだけの人数相手にしたんだから、そりゃ無敵のアデリア姉さんだつて疲れるに決まつてんじゃない。」

マークスの心配を揶揄する様に否定したアデリアが不意に廻し蹴りを放った。マークスの目の前で綺麗な弧を描く軌道は彼女の体を軸足を中心に一回転させ、寸分の乱れも無く振り出した足を元の場所へと収めた。

突然の拳動に呆気にとられるマークスに向かって、アデリアが両手を腰に当てて上目遣いに尋ねる。

「どう？ これでもまだどこかおかしい？ 何だつたらここでもう一舞いしようか？」

挑発する様に見上げるアデリアの瞳をじつと見つめるマークスの表情から幾許かの危惧が薄れた。いつも通りの技の切れを目にしたマークスが彼女の申告を疑う余地は無い、その動きに違和感があれば自分には直ぐに分かるのだから。例えそれがどんな些細な怪我であつたとしても、だ。

それでもマークスの心中から全ての不安が払拭される事は無い。尚も確認する様にマークスは尋ねた。

「…… 本当に、大丈夫なんだな？ 後で嘘でしたー何て事が分かつたら、真剣に怒るぞ。」

「嘘じゃない。両親と姉に誓つて。」

胸を張って片手を小さく上げて宣誓するアデリアの顔を怒った様に見つめていたマークスが、それでやっと表情を緩めた。大きな溜息に混じって吐き出される戦慄がアデリアには見える様、肩を落として全身で安堵を表現するマークスに感謝と謝罪の言葉をアデリアは口にした。

「ありがとね、マークス心配してくれて。」

「当たり前だろ、馬鹿。ほんと、十年は寿命が縮んだ。」

その物言いがそしてマークスの何もかもが嬉しい。自分自身が彼の世界に大きな存在を占めている事を実感出来るその言葉を手にしたアデリアは、マークスの二の腕をぽんと叩いて言った。

「さあ、マークス。急ごう？ こんな事してる場合じゃない、あたし達も早くみんなに合流して」

喜びを湛える藍色の瞳がマークスの異色と交差して。マークスの立てた高難度の作戦を完全制覇する為にアデリアが行動を起こそうとしたその瞬間、背後で苦しげな男の声が二人を呼び止めた。

「ま、待ってくれっ！ あんた達、連邦の軍人さんか？」

## 罪と罰？

地下五階から一気に駆け上がってきた男の足が声を聞きつけてびたりと止まる。頭上から漏れてくる狂乱の喧騒、悲哀の呻き。それは一刻も早く現場に向かおうとする男に突き付けられた初めてのの、しかし最大の障害だった。

一気に駆け抜けた一階部分に残っている被災者の数は少なかった様に思う。だが一階と言う地の利を考えるとそこで被災の憂き目に会った人々は、恐らく周囲の窓を叩き割って皆逸早く館外へと雪崩出たのだろうと男は推察した。人氣が無い事は男にとっては真に都合がいい、少なくとも上層階に移動する行為を目撃されて呼び止められる事がない。

だが二階から上に行くに従って、被災者が逃走する難易度は加速度的に上がる。元々ショッピングセンターと言う構造上、開放感を演出する為に各階層の高さは他の建造物より大きく設計されている。二階部分で普通の三階建ての高さ、三階部分ではその倍。勇氣のある者ならば二階の壊れた窓から飛び降りる者も居るのだろうが、三階から同じ事をすれば唯では済まない。それは例えるなら直立したモビルスーツのコクピットから飛び降りると言っているような物で、自分ならば大声で悪態をついた拳句にタラップなりロープなりを寄せと地上に向かって怒鳴りつけているだろう。

足を止めたまま耳を傾げざるを得ない怨嗟の旋風、吹き抜けの非常階段のシャフト内に充満するその声は自分の頭上の全てに残る生存者の狂気の奔流。今にもそれが雪崩を打って降り注いで来る錯覚に襲われた男の体が緊張で強張る。だがラーズーが作戦前に告げた『予言』は又しても居合わせた全員の予想を覆してその空間にも存在した。狂気の陰を纏って駆け下りて来る者は唯の一人も見当たらない。

「自我は時として他人の死を省みない」とは、住む世界を変えたか

の様に変貌を遂げたラーズ1がブリーフィングにも満たない作戦会議で呟いた言葉、人々が争いに疲れて本当の目的に気が付くまでの場所は使い放題だと予言した。五・六人が並んで通れる広さの階段も、明かりの途絶える事の無い誘導灯も全てはこの作戦の為に用意された物である、と。

真理だ、確かに。

悪魔の如き彼の千里眼を今度こそ信じざるを得ない、と男は思う。作戦の発動からここに至るまでの状況、そして未来予測と心理分析、予め決められた長さのシークバーをなぞるかのごとく進む時系列は、男にラーズ1の実力と正しさを認識させる。だがその事は全ての事象の悉くが確実に時間内に収まってこそ初めて出来る、完成までの工程計画だ。故にどんな遅滞も、些細な手抜かりも許されない。

戸惑いも躓きもラーズ1は決して許さないだろう。彼の理想を阻む物に彼から与えられる罰は基地で経験した通り、無慈悲な死あるのみ。自分の隣で崩れ落ちたあの男と同じ運命と同じ階級と同じ葬儀が待っている、家族に詳細を伝えられないまま消しゴムで消される様に消去。空の棺が埋葬されて墓碑が立てられて終わり。

最悪の未来を思い描きながら胃が引つ繰り返りそうな緊張を抑えて、男は作戦の遅滞無き続行を決意して注意深く階段を上った。物音を立てない様に押し上げる事で、次第に自分の視線の高さへと現れる二階の踊り場、僅かに伸びる連絡通路、その先にある非常扉。獣の咆哮と騒乱が渦巻くその景色を覗き見た男が静かに体を壁際に寄せた。

ここに人が存在する事自体が彼らにとっては怨嗟の対象足りえる。ここに誰かがいる事をもし彼らが知ったら、矛先は間違いなく自分に向かって降り注ぎ、その時点でこの作戦は予定変更を余儀なくされる。失敗ではないだろう。ラーズ1なら代案は既に考えてあるに違いない。筈だ。ラーズ1の懲罰を待つまでも無く、

自分は彼らの手に係って無残な姿を晒すだろう。どっちもごめんだ。散乱する瓦礫を音を立てない様に踏み越えて、男の体が踊り場へ

と到達した。曲がり角のほんの僅かな窪みに身を潜めて、尚も二階の様子を伺う男の意識。今となつては腹立たしいほど広い連絡通路を微塵も存在を認識させない様に移動しなければならぬ男の足は、なかなか見つからない隙と刻々と過ぎ去る秒針の進みに焦りながら小刻みに揺れた。

「？」

何かが足に触れたと思った。

その感触は確かだ。例えるならば夜の海を泳いでいる時に海藻が足に絡み付く様な微かな。予期せぬ違和感に男の目が下がったその瞬間、それは確かな形と力で男の足首に張り付いた。

「！」

慌てて、そして思わず口を押さえて飛び出そうとする悲鳴を抑える。瓦礫の隙間から伸びる泥の手、泥に見えるのは黒い液体に交じり合つて汚れる埃。小さなそれは本当に芽吹いたばかりの草の様に伸び出した人の体の一部分、男の目が釘付けになつたまま離れない。

「……………」

喧騒に紛れて聞こえる小さな声、余りにもか細く言葉かどうかも分からない。恐怖よりも好奇を優先した男の感情が肉体を突き動かしてその声に耳を澄ませた。自分の置かれた状況を忘れさせるには十分すぎる存在、そしてこの先の展開に何らかの役割を示すかも知れない、天啓を感じる。

男が足首を握つたままの手に軽く触れるとそれは何かを理解してそつと離れた。男が小さな手の根元を締め上げる大きな瓦礫を物も言わずに、渾身の力で持ち上げる。強度を上げる為の鉄筋が内包されたそれは予想以上に重く、大きくそして硬い。音を立てない様に慎重に、慎重に。

壁に立てかけたコンクリートの板の下に横たわる少女。赤い髪は両方で結ばれて。リボンの色が血の色。

片方の腕は肩からもぎ取られて陰も形も。べったりと床を染め上げる黒は赤とのグラデーションで時間経過を男に教える。

奇跡以前の問題だ、もう助からない。

「…………… パ、パ ……………？」

うつ伏せになった顔から今度ははつきりと聞こえた。男の腕が無意識の内にその小さな体を抱き上げる。光の中に無残な面影を曝け出して浮かび上がる無実の花は枯れる間際のマーガレットの様に無残で、穢れて。

埃塗れの小さな頭を撫で上げて、前髪を整える。人の温かみを感じた少女の目がうつすらと開く。枯渴した力で世界を求める瞼の奥に隠されていた、唯のガラス玉。失われた焦点、開いた瞳孔、青白い水晶、もう何も見えてはいない。

「マ、マ は？ …… 呼んでる、のに、どこに ……」

残った手は更なる温もりを求めて宙を彷徨う。男の手がふらふらと危いそれを掴んで力を込めた。自分の体温が奪われるほど冷え切った肌の感触は少女に過去の記憶を与えて言葉にする。

「パ、パがいるから、だいじょうぶよね。 …… パパ、ママ、には、やさしいもん。」

男の手がそれに応えて力を入れた。世界に繋がるうと試みるそれが、彼女にとつての大事なシグナル。力の無い微笑が少女の顔に浮かんで、意思が。最後の力は握られたその小さな手に込められて。

男の手に逆らう様に伸びる掌はゆっくりと、確実に、間違いなく男の頬に当てられた。

冷たい肌に塗り付けられた暖かな液体が表情を変えない男の頬に刻まれて、小さな震えが骨を伝わって脳に届く。コマ送りの様に分解されて変化する少女の表情、口角は上がり、目と眉は困った様に下がり。

止めてくれ。何故、そんな笑い方をする？

「…………… ピア、ノ。 …… ひきた ……」

失われていく力が最期の彩りだけを残して垂れ下がった。男の手の中で息を引き取るその子の胸が穏やかに止まって、それが彼女に与えられた人生の全てであった事を男に知らせる。無言でその姿を

見つめていた男の手がそつと顔に翳されて、光の届かなくなった水晶を苦しい現実から隔離する為に臉を下ろさせた。

幸せそうな笑みを浮かべたまま。動く事を止めたその身体を静かに床へと寝かせた男の手が、女の子の胸ポケットに隠れていた紙切れを引つ張り出す。

写真。幸せだった過去、焼き付けられた陽だまり。

この幸福は彼女の短い人生の中に確かにあつた。微笑む両親に挟まれて零れんばかりの笑顔を振りまいて、それが世界の幸せの容であればいいと願う心を忘れずに。裏返したそこにはマジックで書き込まれた家族の名前が、見失わないように忘れないように綺麗な字で、祈りを込めて。

「……『ミランダ』。」

呟いた男の手がびりびりと写真を破り始めた。三人の中から両親の部分だけを破り捨て、手の中に残った笑顔の少女を握り締める。

余った幸せは少女の残った手の中に。自分の手でしっかりと握らせて、向こうに行っても決して道に迷わないように。片足にぶら下がった小さな赤い靴を脱がして懷に仕舞い隠す。

亡骸を元の場所へ静かに収めた男が再び立てかけたままの蓋を静かに少女に覆いかぶせた。人に手向けられる最期の粗末な目印を沈痛な目で眺めた男が、その周囲に散らばる埃や血を両手で自分に擦り付ける。義務感だけとは言い難い、何かに憤る様に乱暴に身体に描く赤と黒を見下ろした男が、心の中で呟いた。

これで準備は整った。小道具は、多い方がいい。

心の中でそう嘯く男の声に被さって響く大きな叫びを男は無視しようとする。だがそれは自分が冷静になろうとするほど大きく、男の心を侵食して体中から迸りそうになる。

お前達さえここにいなければ。

記憶の中で穏やかな、華やかな笑顔を浮かべる二人の対象を憎悪する。

お前達さえここにいなければ、この子が死ぬ事は無かった。この

子には幸せな未来があつた、両親に囲まれて育ち恋をして結ばれて子を産み未来を繋ぐ約束があつた。

お前達だ、お前達が全て台無しにした。

そう思わなければ遣り切れなかつた。男の怒りがお門違いな物である事には男自身が気付いている、だがそう思わなければ自分達の間違いを自分で認めてしまう事になる。ラーズ1の言いなりになつて大勢の人を死に追い遣つた自分自身を許せなくなる。死の恐怖に囚われて他人に死を与える羽目になつた自分の臆病さをこの先一生後悔する事になるかも知れない。

だから心を焼き尽くすほどの怒りの炎でその全てを埋め尽くす。残つた物は純粹に敵を憎む力だけ、あの敵を捉えてこの惨い世界の顛末を俺達の代わりに償わせる。

瞑い光を瞳に宿した男の体が再び壁際に沈み込んだ。

振り返つたアデリアの目に飛び込んで来た男はそのまま息を切らせて蹲つた。埃塗れの着衣、血に汚れた顔が生々しい。背後から現れたという事はこの階以外のどこからか逃げ出してこの階にまでやつて来たと言う事、男が潜り抜けた様々な困難と恐怖をその体に刻まれた血の跡から想像して、アデリアは思わず男の元へと駆け寄つた。

「大丈夫!? どうしたの、何があつたの!？」

切迫した男の形がアデリアから言葉の丁寧さを奪い去つている。血相を変えて差し出される両手は男の肩を掴んで小さく揺さぶつた。怪我をしているかも知れないという配慮を差つ引いてもその力は強い、がくがくと全身を揺らされて尋ねられたその男は乾いた血を頬に貼り付けたまま絶る様な目で見上げた。

「お、お願いだ、娘が。娘がいなくなつたんだ! 一階で騒ぎが起こつた隙にみんなに巻き込まれて、た、頼む! 一緒に探してくれ、あんた達しかいないんだ!」

「落ちていて、一体下で何があつたんですか?」



アデリアに遅れて駆けつけて来たマークスがアデリアの隣にしゃがみ込んで男の顔を覗き込んだ。短く刈り込まれた髪は普段の男の風体がいかに精悍であるう事を想像させる。だがここに跪いて助けを請う彼の姿にはその一片の欠片も窺う事は出来なかった。戸惑い苦しむただの父親の姿、大切な物を失う事を危ぶむ血だけが齎す哀れな存在があるだけだ。

「一階だったら恐らくどこからでも店外に逃げる事が出来る筈。避難する人に巻き込まれて外に出た可能性は？」

「分からない、分からないんだっ！ ものすごい爆発があつて気を失つて。気が付いたらあの子がいなかったんだ！ 周りは死んだ人だらけで、でもあの子が、あの子だけがそこにいなかったんだ！」

「奥さんがつれて出たという事は？」

「妻は死んだっ！」

慟哭に言葉を失う二人。握り締めた両手をわなわなと震わせて見つめる男の姿を無言で見つめながら。

「妻は、妻は私の手の中で　だから私にはもうあの子しか

ミランダしか残っていないんだ、だから　」

血に染まつた男の手がマークスの肩に縋り付く。救済を求めるその目がマークスの異色を怯えもせずに見み付けた。

「　お願いだ、あの子を、ミランダを探してくれっ！　あの子に何かがあつたら私は、もう私には何も無いんだっ！」

差し出された掌から零れ落ちた写真に写る少女。恐らく何かの拍子に破けてしまったそれは男の最期の抛り所のように小さく切り取られて皺だらけで。その愛くるしい表情をじつと目に焼き付けるアデリアとマークス。

「分かりました、私が行きます。だから、元気を出して。」

傍で放たれた言葉にマークスが驚いて振り返った。恐らく男を力づける為に微笑んだアデリアが男の肩にそつと手を置いて、優しく語り掛ける。

「いや、待てアデリア。俺が行く。お前はここに残って　」

アデリアの決断を遮ろうとするマークスに向かってアデリアは微笑を捨てて小さく睨みつけて、言った。

「マークスはここに残って。まだ皆の避難が終わってない以上、責任者はあんたよ。マークスにはまだやらなければならぬ事がある、私が行くわ。」

「馬鹿っ！　ここはもう直ぐ崩れるかも知れないんだぞ！？　お前一人にそんな事を押し付けてのうのと避難してろって言うのか！？」

「マークスが行くと言ったら、あたしは多分マークスと同じ事を言うわ。……あたしが先制、マークスが後詰め。それで今まで上手くやって来たんじゃない？　だから、ね？」

アデリアのその言葉で脳裏に蘇る日常の戦闘演習。索敵に優れるアデリアが必ずキースの姿を先に見つけて先制、そしてマークスが追い詰める。一度も勝った事は無いけれど、確かにそれが二人の確立したスタイルだった。暗黙の了解で派生した役割分担を思い浮かべながら、それでも何故今になってそんな事を持ち出すんだと憤慨するマークスを笑顔で嗜めるアデリア。

「それにさ、」

アデリアが藍色の瞳を長い睫で翳しながら言った。

「さっきも言ったけど、マークス。あんた危なくてもその先へ行こうとするじゃない？　そんな鉄砲玉、野放しに撃ったらあたしの心臓が持たないわ。だからマークスはここで大人しくあたしの帰りを待ってて。この人の子供を見つけたら、必ずここに帰ってくるから。」

状況や役割や危険や不安を無視する様に、アデリアの本質を表す様な華やかな笑顔がマークスの言葉を封じ込める。閉じ込められたマークスの意見は心の中で強く跳ね返りながら、マークス自身に問いかけた。

こいつはいつもこうだ。何か都合が悪い事があると必ずこんな顔をして俺の意見を遠ざける。卑怯な手だと思いながらそれに一度も

逆らえない自分がいる。今回もこの笑顔に逆らえないのか、俺って奴は。

「分かった、アデリア。行ってくれ。但し  
アデリアの笑顔を裏返した様な硬い表情のマークスが、眦を引き締めて告げた。

「見つけて保護出来ても出来なくても、もうここには戻って来なくていい。速やかに店外に逃れて救助を待て。いいか、これは命令

「<sup>ネガティブ</sup>聞けないわ、それだけは。」

「アデリアっ！」

「例えマークスがあたしの事をファミリーネームで呼んだとしても聞けないわ、そんな命令。」

声を荒げたマークスの言葉を静かな声で受け流したアデリアが、男の脇に手を当てて立ち上がらせる。感謝の表情で満面を埋め尽くしながら何度も礼を繰り返す男の傍でマークスに背を向けたアデリアが、マークスの気遣いによって湧き上がる激情をひた隠して言った。

「あたしは、マークスの所に必ず帰ってくる。…… 命令なんかじゃない、これは約束よマークス。あんたとあたしの。」

小さく振り返ったアデリアが笑って耳の携帯を指で小さく二度叩く。その音はこつこつと、確かにマークスの耳朶から聴覚へと流れ込んで。硬い表情で頷きながら聞こえた事をアデリアに伝えるマークスは、彼女が嬉しそうに笑って去っていく後姿を黙って見送る事しかできなかつた。

「『デコイ』、と接触。作戦通り捕獲場所キルゾーンに向かっています。」

オペレーションを続ける男の声に隠し切れない嗤いを浮かべてモニターを見つめるラーズ1。

そうだ、お前はそうする筈だ。アデリア・フォス。お前に残った正義がお前を破滅へと駆り立てる。俺への罪の償いを求めるお前は

必ず博愛と言う花園に身を埋めて、咲き誇る花を愛でる様に安らぎを求めようとする。

だがそれが間違っている。

お前はあの日から俺と同じ世界にいる。俺に破滅を気付かせたあの日から、お前の運命は俺の運命と共にある。お前の破滅は俺の願いの成就、そして俺に与えられる、追い求めて止まなかった救済への道しるべだ。

歩け、歩け。走れ、走れ。

お前の辿る畦道の果てには俺が待っている。お前にお前の運命を俺が気付かせてやる。

お前の運命は俺の破滅を救済に変えるだけの役割でしかなかったという事に。

九十九折しゅうじゅうしちゅうを飛ぶ様に。アデリアが非常階段を駆け下りる。

棚引く髪は炎の如く。重力に逆らって体のどこにも触れる事無く常に空気をかき乱す。小さな瓦礫によるめきながら大きな瓦礫を飛び越えて、シャフト全体に蔓延する鉄の匂いを掻き分けながらアデリアは追い求める。幸せの手掛かり、未来に伸びる運命の糸の端。それはたった一つの小さな命かも知れないけれどそれを心の支えにしている人がいる。亡くしてしまえば自らの存在も否定してしまう人がいる。

それを黙って見過ごせる訳が無い。力は正義である事を証明してしまつた自分に課せられた新たな命題。

正しい事が正義である事、証明してみせる、今度こそ。

アデリアの後を追って階段を駆け下りる男、先行するその影を見ながら舌を巻く。

あの少女と同じ速さで走る事はできない、被災者である筈の自分が彼女と同じ速さで走る事こそナンセンス、だが見失う訳には行かない。獲物を餌に誘導するのは『デコイ』たる自分の役割なのだ。

最も自分が全力で走ったとしてもあの早さに追いつけるかどうか疑わしい。運動神経とモビルスーツの扱いは比例すると昔何かの講義で聞いた事はあるが、果たしてそれが真実ならばこの少女はそれに関して比類なき才能を持つ事は間違いない、一度も戦場に出た事が無いくせに、だ。

そう、男は誰に教えられる事も無く自分の前を走る少女がモビルスーツ乗りだと確信する。地上戦の部隊ならこんな無謀な走り方はしない、周囲の状況を確かめつつ足場を探って進むその歩みは地球の重みに引かれて遅くなる。だがモビルスーツを操る者にそんな先入観は無い、自分の体の延長線上にモビルスーツの手足があると認識している操縦者ほどその動きは自分の操るそれに近い拳動を体現する事になる。彼女が今そういう風に動けると言うのなら彼女の操るモビルスーツもまた然り。

故に心の中に生まれる戦慄と恐怖。

彼女をここで捕らえなければいずれ近い内に自分達はこの少女の操るモビルスーツと雌雄を決しなければならぬ。自分の実力は彼女と対峙して、刃を交えて無傷でいられる事が出来るや否や。

近未来に訪れる筈のオークリーの敷地、何度シミュレーションを繰り返しても地に叩き伏せられる自分の姿に焦る足が瓦礫を粗く蹴り付けた。

アデリアが一階の非常口に辿り着く。残骸が織り成す災害と言う名のモザイク模様、エレベーターの扉と言う鉄槌で掃き清められた区画は三階で見た景色とそう大差は無い。だが唯一つ自分達が被災した場所とは違う所があった。

それはそこにもう誰もいないという事。そして路面店の参画をメインとする一階部分ではより多くの残骸が集積して、見通しが利かないという事。

複雑な迷路の様に入り組んだ一階の売り場は広大な空間を利用して様々な飾り付けがなされていた。五月の第二日曜日はアンナ・ジ

ヤービスが提唱した、世界中の母親に感謝する記念日。それに因んだ催し物が象徴となる白い花と共に絢爛な雰囲気を醸し出していた筈であった。

だがその痕跡も今は無く。散乱した象徴は白ではない何か塗れて地に墜ちて、人々に多幸を齎す様々なオブジェが向きを違えて倒壊している。無論その下に組み敷かれた人々の明日は事切れてはいたけれど。

中から叩き割られた路面側のウィンドウから吹き込む外気が館内の臭気を巻き上げてアデリアの鼻腔に流し込む。思わず咽むせそうになつて口を押さえたその後ろから、やつと追いついた男がぜいぜいと息を切らして声を掛けた。

「ま、待ってくれ。そんなに早くは」

「急がないとここも倒壊の危険があります。一刻も早くお子さんをミランダちゃん、でしたか 見つけて館外に逃げ出さないよ。」

口を押さえたままで振り返るアデリア。男に向けた瞳には深刻な色が伺える。

「どんな小さな手掛かりでも構いません、私に教えてください。貴方はどこに倒れていました？ こんな事は大変申し上げにくいのですが、私をそこまで 奥様の亡骸のある場所まで案内していただけますか？」

アデリアの提案に男の心臓が大きな音を鳴らした。

迂闊だった、と思う。事の成り行きで吐いた作り話が自分を窮地に陥れるとは思ひも付かなかった。だがここまで来てそんな事で動揺している暇は無い、男は険しい顔で 心の動揺を隠す為にわざと 小さく頷いてアデリアの前に出た。

他の階同様掃き清められた、扉の作つた電車をエレベーターホールに向かつて歩き出す。そこが一番被害の大きかった場所、探せば遺体など幾らでもある筈だ。俺に釣り合った年恰好の女性など、幾らでも。

早足で歩きながら始めて眼にする被災地の状況を確認する。予想以上の破壊力、それを生み出した物が自分達の仕掛けた爆弾である事に複雑な感傷を覚える。

まるで、戦場の様だ、ここは。

例えて言うならそれは巨大な車輪で轢かれた。例えて言うならそれは巨大な刃で引き裂かれた。

人でありながら原形を留めない諸々がそこにはある。現実の映像モニター越しに見るのでは無い、物体としての存在と喪失を表現する現実。自分の犯した罪に揺れる心。

その全てを必死に堪えて、背後から付いてくるアデリアに悟られない様に足を速める男。早めれば失われる目的地までの距離と時間捏造までの猶予。

“ あった。 ”

男の足がそれを目指して駆け出した。目を開いたまま瞳孔を固定して、アッシュを血に染めた女性の姿。巨大なコンクリートの台座に横たわった彼女が男に反応する事はない。駆け寄った男が亡骸の前で足を止めて崩れ落ちた。

本当に涙が出た。自分の妻がもしこんな目にあつたとしたら恐らく泣く所では済まないだろう、そう思うと涙が溢れた。

嗚咽する男の傍らにしゃがみ込んで十字を切るアデリア。その手が晒された女性の上半身を抱いて顔を覆う。身も知らない女性の身体に刻まれた傷口から流れる血液が白のサマーセーターに染み込む事にも何の躊躇も無く、いとおしむ様に包んだその手が離れた時には亡骸の瞼は閉じていた。そうして浮かぶ静かな表情が、その女性に与えられた久遠の安らぎを表している様に男には見える。

「本当にお気の毒です。出来れば奥様のご遺体を運んで差し上げたのですが、今は」

「……分かっていません。ありがとございます。その言葉だけでも彼女は喜ぶでしょう。」

流した涙を手の甲で拭いながら男が立ち上がった。つられて腰を

上げるアデリアに向かつて男が血の乾いた貌を向ける。

「私はここに倒れていました。」

男の言葉を受けてアデリアが周囲を見渡す。遠くの壁面に叩き付けられた歪んだ鉄の扉以外に見通せる場所は少ない。散乱したままの残骸は二人に覆い被さる様に両側に渦巻いている、外界から差し込む光を遮る廃墟の木漏れ日はそれだけでアデリアの目から確かな情報を滯らせる。ここはそんな場所。

「ここからだと思える方角は限られていますね。私達が通つて来た道を辿るか、それとも」

アデリアが視線を左右に向ける。僅かに残つた通路の跡地がそこにある。倒壊する什器が野放図になった竹林の様な様相を呈していたが、人が通れる隙間が無くはない。実際そこを何人かの生存者は通つたのだろう、明らかに押しのけられた跡がある。

「この左右のどちらかを通つて逃げたか。小さい子供さんだったらこれくらいの隙間があれば簡単に逃げられるでしょう。」

この狭い通路の何処かで息を潜めて助けを待っているかも知れない少女の姿を脳裏に思い浮かべて、アデリアの目は険しくなる。時間が残り少ないと言う事もある、だがそれ以上にその子を早く親の元へと還してあげたいと切に願う。

彼女にとつて帰還を果たす日常は昨日までとは違つた物、大事な物を一つ失つてその事実気付いた時に彼女は何と世界を呪うのだらうと。

そんな境遇の者は多分今日ここで大勢作り出されたとは思ふ。だがこの子にとつての世界は優しい父親と母親に囲まれて過ごす、小さくても暖かな物であり、その世界が壊されたと分かつた時に彼女は神をも呪う事になるのだ、と。

欠落した者が彼女の人生に与える物は大きい。良きに付け悪しきに付け、それは彼女に与えられた運命の分岐点。

自分と、同じだ。

「私は右の通路を探してみます。貴方は」



「私は元来た道を辿ってみます。ミランダは賢い子だ、ひよつとしたら一番人通りの多そうな場所を目指して逃げたかも知れない。」  
「分かりました。」

アデリアは男に向かって小さく頷くと、恐らくマイクの向こうで成り行きを見守っている相棒に向かって話しかけた。

「05から03。そういう事よ、まだ女の子は発見できない。これから搜索を開始する。」

「3、了解。こっちはもうちょっと掛かりそうだ。状況が終了したら、俺もそっちへ向かう。」

「ちよつと、マークス？」

マークスの言葉を咎めるアデリアの視線に、その場を立ち去る男の背中が映った。時間が無い事を思い出したアデリアが慌てて獣道のような通路に足を踏み入れる。

「それじゃ、あたしが来た意味が無いじゃない？ マークスはそこで皆と一緒に救助が来るのを待ってて。」

「あたしの来た意味は、無しだ、アデリア。」

その声はイヤホン越しにからでも怒っているのが分かる。聞き咎めて足の止まったアデリアの耳にマークスの憤りが流れ込んで来る。

「んな事だろうと思った。自分が危険に立ち向かう事で俺を守って、それで誰に何の得がある？ さつきは百歩譲って許可したけど、任務が終わればそれは御破算<sup>なし</sup>だ。あるべき本来のコンビとしての活動を俺は優先する。」

「いや、だからそれは」

取り繕おうと言い訳を考えて二の句が告げなくなるアデリア。無駄な事なのは十分分かっている。真意を看破された以上、理屈や弁舌で論破できる相手ではない事は良く知っている、なんせ一度も勝った事が無いのだから。

「大丈夫、直ぐに女の子を見つけてそこに戻るから。マークスは皆とそこで待ってて？」

何とかマークスの意思を翻そうと自分の決意をマイクに向かって

囁き掛けるアデリア。だが返って来た強い応えにアデリアは絶句するしか無かった。

「 3から05、状況が終了次第、こちらから迎えに行く。上官命令だアデリア。復唱しろ。」

“ この、わからずやっ!”

頑固極まりない上官の決断を心の中で怒鳴りながら、それでも彼女の為に抜かれた伝家の宝刀に思わず苦笑するアデリア。そんな命令は聞く耳持たないと何度も言ったのに自分の意思を捻じ伏せて服従を強制するこの頑固さはいかにもマークスだ、怒っている時の。

「ごめん、マークス。分かった。」

05から03、作戦を続

行。こちらの状況の変化が認められない場合、待機して03の到着を待つ、以上。それでいい?」

「 3、了解。」

最後に聞こえて来たマークスの声に刻まれた微かな安堵を耳に残して、アデリアは思わず小さく微笑んだ。

アデリアと別れた男は迷わず真っ直ぐに非常階段の入り口に到着した。

仕掛けた罠はこの下の階層、ショッピングセンターの警備中枢の集中する地下一階に定められている。公にはされてはいないが万が一の凶悪犯罪に即応する為に、ここには所轄の警察署と同等の拘留施設が存在している。簡単な拘留施設と取調室、そして警備員専用の武器庫。殺傷性能を持つ携行武器こそ保管はされていないが、そのカテゴリーに収まらない非殺傷武器の全てがそこに保管されている。全館を監視する警備システムと相まって、このショッピングセンターは単独で治安が維持できると言うのがある意味売りにはなっていた。

そこには全てのシステムを掌握してこの作戦の指揮を取るリース1がいる、恐らく他の仲間も既に終結しているだろう。罠に飛び込

んだ獲物を捕らえる為の万全の準備を整えて。

「『タリホー』から『デコイ』。『お茶会の準備が出来た』」

耳に付けた携帯から突然声が飛び出した。

「『デコイ』了解。」

それは男の予想通り、『お客様をお迎えする』準備が整ったという事。『マザーグース』の名に恥じぬ合言葉を耳にした男は、交わした言葉の先に佇むラース1の嗤い顔を想像して緊張を新たにしたりホー』の傍には間違いなくラース1もいる、この成り行きをあの忌々しい嗤いを浮かべて見守っている事だろう。

彼らが待ち受けているであろう地下一階へと続く非常階段を見下ろした男が懐から取り出した赤い靴を下手したてでゆっくりと非常階段の踊り場に放り投げる。合皮で作られた靴の表面を覆うエナメルが、非常灯の明かりを男の瞋い目に跳ね返した。

「彼女は大丈夫なのか？」

マークスの傍へと近寄って消防指令は周囲を憚る小さな声で耳打ちした。マークスが集団を引き連れて彼らの待つ避難場所へと辿り着いた時に、出迎えた消防指令が最初に引っかけた事が先ずそれだった。

彼が困難を極める任務を達成して無事に帰還した事は彼にとっても喜ばしい事だったが、マークスと共にそこにいなければならぬ筈の相棒の姿を見る事が出来ない。勿論一度も目にした事は無いが、その形は彼との会話の中から何となく想像できる。

事は自然と彼の口からその質問をマークスに向かって投げ掛ける結果となった。消防指令の質問にマークスが口を開いた。

「アデリア　いえ、フォス伍長は被災者の要請を受けて行方不明の子供の捜索に向かいました。連絡は取れてはいますから今の所はまだ」

気丈に振舞おうとするマークスの瞳を消防指令の両目が見つめる。

「確かに今の所、不規則な振動とか音とか言う崩壊の予兆は感じられないが、しかし、何時この建物が崩れ落ちるかは私にも分からない、勿論、君にも。それが分かっただけで行かせたのか？」

微かな非難を口調に滲ませて消防指令がマークスを問い詰める。

返す言葉も見当たらずに無言で頷くしかないマークスの仕草を見た消防指令は、それ以上の詰問を諦めた。

「……余計なオプションを付けたな、君達は。この階の要救助者をここに集めただけでも十分に賞賛されて然るべき行為だと言うのに。」

消防指令は優しい声でそう言うのと振り返って、背後で新たな被災者を迎えてごった返している集団に向かって、強い声で命じた。

「怪我人は最優先で応急処置をして、元気な者は身体を出来るだけ小さくして彼らの為に場所を開けてやってくれ。崩壊時の応力を考えると避難範囲はホールから十メートルから十五メートル半径に収めて、窮屈かも知れんがもう少しの辛抱だ。」

指示を受けた避難民はあつという間に対応を始める。医療関係者はその少ない集団の中で既に一定の地位を固めていた。三・四人単位で動く急拵えの医療チームはあつという間に重傷者に取り付いて応急処置に入る。治療の為の材料は恐らく廃墟の中から掻き集めて来た雑多な物に間違いは無いのだが、それらを縦横に駆使して傷口を縫い合わせ、消毒し、包帯代わりの布を巻く。軍の研修や講義では目にする事の無い即興で生み出された救命技術に注目するマークス。

「君の名前を、まだ聞いてなかったな。……私はハイデッカー、リチャード・ハイデッカー。」

目を奪われたままのマークスの意識を惹き付けるように消防指令が右手を差し出す。その声に視線を向けたマークスが反射的に握り返した。無骨ではあるが、暖かい。大勢の命を救ってきたであろうその手を握り返しながらマークスが答えた。

「北米方面軍オークリー基地所属、マークス・ヴェスト軍曹です。」

「では、ヴェスト軍曹。君に相談があるのだが、私にこの集団を一人任しては頂けないだろうか？」

軍に対して民間人は須らく敬語で対処するのは世の慣わし、だがマークスは突然口調が変わった消防指令の言葉よりもその発言に秘められた彼の意思に驚いた。びつくりした顔で見つめるマークスに向かつて小さく片目を瞬かせるハイデッカー。

「ここでの貴官の奮闘にサリナス市の消防組織を代表して感謝の意を表したい。貴官は以降、貴官の望む任務に邁進されたし。」

握手で繋がれたままの手が突然離れて、消防指令の額に翳される。年季が入った敬礼を受け取ったマークスが思わず鏡写しの様に敬礼を返した。

「……ここは私が任された。君は早く彼女の所に行きなさい、早く。」

「い、いえしかし」

「分からん奴だな、君は。」

捧げた手をゆっくりと下ろした消防指令は皮肉交じりの笑顔を浮かべる、少なくともマークスにはそう見えた。食い下がるうと言葉を繋ぐマークスの声を遮る様に消防指令は言った。

「ここで君が必要とされる事はもう無くなった。だから君の力が必要とされる所へ向かいなさい、と私は言っている。今、君の助けが本当に必要な者は誰だ？ 今、君が本当に助けたいと思っている人は誰なんだ？」

鱗が剥げる様にマークスの硬い表情が変化した。軍人という殻で覆い隠していた本心はマークスの顔を年相応の物へと作り変える。

「分かったならば急ぎなさい。ここはもう大丈夫だ、もっとも建物が崩落してしまえばそうも言っではいられんが、少なくともそれはお互い様だ。崩れる前に必ずエレベーターホールの前に避難してくれ。私はここで君達の無事と全員の生還を神に祈っている事にしよう。」

「……有難うございます、ハイデッカーさん。ではお言葉に甘

えさせていただきます。」

今度はマークスの方からハイデッカーへと右手を差し出す。その手を力強く握り締めた無骨な手が伝えるハイデッカー自身の願い。心から無事を祈ると。

「必ず、生きて再び会おう。君と彼女 特にフォス伍長には是非ともお目にかかりたい。きつと素晴らしい部下なんだろうな。」  
「はい。」

躊躇いも無く返事をしたマークスの顔に浮かぶ、自分が褒められた様に嬉しそうで、少し照れた様な笑顔がハイデッカーの心にマークスの印象を深く刻み込んだ。

「自分も、そう思います。」

遠くの方で自分を呼ぶ声がするのをアデリアは聞いた。外部から流れ込んで来る喧騒に紛れて届いたその声が、個人の名前ではなく職業としての名称である事を聞き取ったアデリアはその声の主が共に一つの対象を捜索している男の声だと理解した。

「どうしました!？」

見えない相手に向かって大声で返事をしながら捜索を中断して、元来た道を引き返す。切り開いたばかりの残骸のブッシュで体を削られない様に、慎重且つ大胆な歩速でエレベーターホールへと辿り着いたアデリアの目に膝に手を当てて息を切らせた男の姿が映った。慌てて駆け寄るアデリアの姿を苦しそうな表情で眺めた男が何度かめの息継ぎの後にやっと言葉を発する。

「あの子の、あの子の靴が。あそこに、」

震える手で指を刺したその先には非常階段の入り口がある。アデリアは林の隙間から唯一見通せるその場所を遠目に見つめながら男に尋ねた。

「靴が、あそこにあっただんですか？」

「地下に向かう踊り場に、あの子の靴が、あった。…… 多分、駐車場に向かったんだと 何かあったら車で皆待ち合わせる

様に、妻が教えたから

「 苦しい息の下で経緯を語る男の傍らをアデリアが、言葉を遮る様に走り過ぎた。影すら捉えられない勢いに慌てた男が踵を返して追いかけてようとしたりした時には既に遠ざかる背中が見えるだけ。『デコイ』である自分が翻弄されている事に軽く舌打ちしながら、それ以上引き離されない様に後を追う。

「マークス、聞こえる!?」

アデリアが全速力で走りながらマークスを呼んだ。足から伝わる振動で耳に差し込んだイヤホンが揺れる。外れそうになる携帯を強く片手で耳に押し付けたアデリアがマークスの声を捉えた時には既に非常階段のシャフトに侵入していた。

『 どうした、03。                    って言うかお前コールサインはどうした? 何で                    』

「 女の子の靴を                    」

意外なタイミングでアデリアの声を聞きつけたマークスが尋ね返した時には既にアデリアの目は赤いエナメルを見つけていた。足場の無い段差を滑り降りる様に駆け下りたアデリアが一気に傍まで近寄って拾い上げる。

「                    見つけたわ。どうやら地下の駐車場に向かったみたい。

あたしも今からそこに行く。」

マークスと会話を続けながら人の気配を背後に感じて、振り返ったアデリアの頭上にいる男。壁に手をつけて大きな呼吸を繰り返す。新たな手掛かりを発見した喜びに小さく笑ったアデリアが、手にした靴を軽く振って確認を取ると男は小さく、何度も頷いてそれが少女の物である事を肯定した。

“ 当たり前だ。”

「 とりあえず爆発の被害の少なそうな地下一階から探してみる。そこで落ち合おう? 」

『 “ まで、落ち着け。アデリア。俺の方ももう片付いた。今すぐそこに行くから                    ” 』

「待つてられない。」

マークスの制止が全部届かない内にアデリアは断言した。

「ここに来て随分と時間を使ったわ、いつ崩れるか分かんないんだつたらぐずぐずしてる暇なんか無い。あたし先に行つて彼女のお父さんと一緒に探してるから追っかけて来て、現在位置は駐車場のエリアプレートを読み上げて知らせるから。」

マークスとの打ち合わせの最中に男はやつとの思いで階段を下りてアデリアのすぐ傍に立っていた。手の中にある証拠の品を男の手に優しく手渡しながら、アデリアは男に視線だけで捜索の続行を促した。驚きと喜びを混ぜ合わせた表情で同意の意思をアデリアに伝える男が何度も頷いた。

「じゃあ、マークス。そういう事でよろしく。」

「全く！ どつちが無茶なんだ、言つてる事とやつてる事があべこべだぞ、あいつっ！」

マイクの向こうでマークスの諫言を反故にするアデリアにまでよく届く様に、非常階段に続く連絡通路に木霊するマークスの罵声が反響してその先に広がるシャフトに伸びる。足元に敷き詰められた未整地の瓦礫を踏みしめて未知の空間へと侵入したマークスは、初めて眼にする被害の大きさと規模に思わず目を奪われた。

「一体どうやって……アデリアの奴、よくこんな所をあんな時間で一階まで降りられたな。」

思わず感想を口にするマークスの足下に広がる世界。吹き込んだ瓦礫が階段と言う階段を全て埋め尽くして足の踏み場も見当たらない。薄く積もった埃の上にくっきりと残るサンダルの跡だけがアデリアの進路を物語つてはいるがその全てが不安定な形で置かれた瓦礫の上にある事を確認して、改めてアデリアの身体能力の凄まじさを実感する。昔何かの本で忍者は水面の上も沈む事無く走り抜けると言う話を読んだ事があるが、この階段を駆け下りる事の出来るアデリアならばそれを実証する事が可能かも知れない、と妙な感想す



ら浮かんでしまう。

同じ事をするなどマークスには到底思いも付かない、それでも瓦礫の隙間に残るもう一つの真新しい足跡　　恐らく少女の父親の物だ　　を探しながら階下へと向かうマークス。焦りとは裏腹に速度の上がない事に苛立ちを覚えながら、しかし着実にアデリアの元を目指して。時にはバランスを崩し、その度に全身を大きくよめかせて必死に体勢を立て直してやっとの思いで二階の踊り場まで辿り着いてやっとな周囲に意識を向ける事が可能になる。

途端にマークスの中で緊張が走った。まるでそれは過去の映像を巻き戻して再び最初から再生を始めた様な錯覚、耳目を疑いながらもそこで繰り返り広げられている変わらぬ悲劇と惨状の繰り返しに心を痛める。

怒号と喧騒。そこで互いの生存権を賭けて戦う人々の数は、声の大きさによる概算でも三階より遙かに多いと思う。三階で終了した過去の事象は時間の経過と共に拡大し、より過激になったという事を二階での現状は証明している。脳裏に鮮明に蘇るあの惨劇を思い浮かべたマークスの体が無意識の内にその場所へ向かおうとして、止まった。

それを短時間で終息させる事ができないと言う臆病な自信がある。

三階での乱戦を勝ち抜いた自分は二階でも同じ事がもう一度できるのか？　確かに三階の被災者だけを助けて二階にいる人達を助けないという道理はない。だがここで飛び出して再び彼らに戦いを挑んで勝てる見込みはあるのか？　いつ崩れるかも分からないという恐怖に苛まれながら状況も分からず、どれだけの人数がいるかも見当も付かない。不確定要素が満載のあのフィールドに飛び出して確実にこの戦いを収める事が出来るのか、

自分一人で。

そう、アデリア抜きで自分を為し得る事が、本当に？

戸惑いと後悔。心の中で渦巻く二つの感情は闘ぎあ<sup>せめ</sup>ってマークス

の良心に問いかけ続ける。答えも決意も、判断すら下せず、物陰へと身を潜めるマークス。誰にも気付かれない様に観察が可能な格好のスペースを見つけて、ほんの僅かでもいいから考える為の時間を手に入れようとしやがんだその時に、奇妙な違和感がマークスの目に留まった。

マークスの足元にある大きな瓦礫、コンクリートの一枚板の下から漏れ出す赤い川は細い流れを生んで階段を伝わり落ちる。一滴、また一滴。

「ミランダちゃん！ いたら返事して！？」

アテリアの放つ大声が空しく無人の廊下に響き渡った。非常等の明かりに浮かび上がった地下一階の通路は静寂だけを糧として延々と果てまで続く。

ショッピングセンターを管理する為の施設が集中しているこのフロアは一般の買い物客が入り込まないように、途中ゲートを設けて厳重に管理されている。だが予想外の被災に遭遇した事でそのシステム自体が無効化されているのは明白だった。パスが無ければ開かない筈のゲートは開放されたまま、そしてその階で忙しく立ち働いている筈の裏方の姿も無い。無人の廊下を一步一步辿りながら、アテリアはひたすらその先にある駐車場に入る為の従業員通用門へと向かっていった。

少女の父親はこの広い敷地を手分けして搜索する為にゲートの先で別れた。彼が娘を必死で呼ぶ声もこれだけ距離が離れるとアテリアの耳に届かない。しんとした狭い廊下の中でただ一人、心細さを密かに感じながらそれでも気丈に少女の名前を呼び続けるアテリア。いつ起こるかも分からない建物の崩落に巻き込まれたくないと言うのが焦る理由なのだが、それ以上に一人ではあまりにも寂し過ぎる空間であったと言う事の方がアテリアの焦りを増長させる原因だった。

言葉を放って耳を澄ませる、その手応えの無いやり取りの繰り返し

し。少女の声だけではなく、どこからも何の反応も返ってこない所を見るとこの階層にいるのは自分と少女の父親のただ二人なのかも知れない。だが逆にその事がアデリアの心細さに拍車をかけて、心のどこかでマークスの到着を待って行動を起こした方がいいと囁く。

「…………… 何考えてんの、あたしっつたら。時間が無いってマークスに言っつて降りて来たの、あたしじゃない。」

自分の弱気を叱咤して奥へ奥へと続く長い廊下をひたすら。明滅を繰り返す、扉単位に設置されたカードロックのインジケーターが魔物の瞳の様に見えて気持ちが悪い。モビルスーツのコクピット内で点滅する物とそれは同類である筈なのに、そこだけに嫌悪を感じてしまうのは気のせいかな？

「この階にはいないのかなあ……………」

アデリアの呟きは予測の域を出ない分析だが、自分の呼び掛けに何の反応も見られない以上、この区画には人がいないという証明になる。視界の奥に遂に廊下の突き当たりの壁を見止めてアデリアはそう思った。その一角に開いた真っ黒な開口部が従業員用の通用門だと知って、アデリアの足が何故か不意に止まった。

非常灯に照らされた世界から隔絶された闇の空間。まるで死者を招き入れる様に誘う黒より暗いその先に、生きている事を実感しているアデリアは進入する事を本能的に躊躇う。自分の指先までも塗り潰して五感の一を欠如させようとする暗黒の世界に尻込みを覚える自分に向かって、使命感と言葉で捻じ伏せながら足を出そうとした瞬間に、耳元で突然声がした。

「…………… アデリア、」

マークスの声だ。とても小さく、か細い呟き。

腕の無い少女、赤い髪にこびり付いた血糊が生々しい。穏やかな顔で眠る様に息絶えた亡骸が直ぐ傍に、マークスの視界の中に静かに横たわる。

間違いない、この子に。

混乱する思考、反芻する記憶。あの父親は確かに一階で被害にあったと言っていた筈。何故少女の体がここにある？

もしかして被災後の混乱で自分のいた階を間違えたのか。いや、それは無い。何故ならこの階で被災したのなら彼はあの乱闘を潜り抜けて三階に来た事になる。それにそれだけの損傷を傍にいた少女が受けたのなら、彼がほぼ無傷でいられる事は先ず考えにくい。それに彼の妻は一階にいたではないか。

では一階で片腕を失った少女が、父親が気を失っている僅かの隙に我先に店外へと逃げ出そうとする人込みを掻き分けて非常階段に辿り着き、わざわざ出口の無い二階にまで上がって来て、事切れる。

そんな馬鹿な、有り得ない。

次々にわき上がる疑問がマークスの中で得体の知れない物質へと変化して澱んだ。何か、いや全てがおかしい、と。

マークスの頭の中で大きな音を立てて警報が鳴る、聞いた事も無いその轟音は幾ら止めようと思ってもなり続けて止む事がない。得体の知れない何者かがまるで心臓を掴んで絞り上げる、早まる鼓動。澱んだ黒い水面を掻き散らして立ち上がる、輪郭の失われた幽鬼の腕がマークスの心に襲い掛かる。不安と恐怖に耐えかねたマークスの口から悲鳴代わりの言葉がなけなしの理性を総動員した後、零れ落ちた。

「…………… アテリア、直ぐに戻って来い。何か、変だ。」

「え？ 何、何て言ったの？」

携帯を強く耳に押し当てながら尋ねる。よく聞き取れないのはここが地下で、しかも他の店舗区画からは隔離された階層だからだとアテリアは判断した。あまりにも奥深くまで侵入した為に携帯の微弱な出力では会話すらも儘ならないのだらうと、アテリアは踵を返して元来た道を遡る。

大丈夫、ほんのちよつと戻れば直ぐに聞こえる様になる。迂闊だった、とアテリアは自分の行動を反省した。連絡が取れなくなる事

こそが今の自分にとっての最大のピンチ、イヤホンの向こうから途切れ途切れに届くマークスの声に勇気付けられて、でももっとよく聞こえる様に欲しながらアデリアは居場所を求めた。

「マークス、今どこ？ あたしはまだ地下にいるわ、もう直ぐ駐車場に――」

早くここまで来て、と願う言葉を押さえながらマークスの声に応えるアデリア。自分の心そのまま脳内に反響して何を伝えたいのかさえも曖昧になって、告げる言葉すら分からなくなったアデリアが自分の考えを纏める為に与えたマークスへの寸暇。その瞬間に耳から飛び込んできたマークスの声は控えめだったが、今自分が味わっている感覚と同じ色に染め上げられている事に気付いた。

「直ぐに戻ってくるんだ、アデリア！ 何かが変わだ、お前達が探してるその女の子は、ここで――」

その直後に強烈な殺気が背後から放出されたのをアデリアの五感が捉えた。外部に晒された耳口が捉える微かな金属音、それが何かは分からないが明らかに自分に向けられた物だと分かる冷たい残響。

「死んでるぞっ！！」

内耳が震えるほど大きな音で叩きつけられたマークスの声に連動したかのように重なる発砲音。

振り返る暇も無く背中の中真ん中に叩きつけられた強烈な衝撃、突き抜ける波動、止まる呼吸。

アデリアの体は強烈な蹴りを不意に喰らったかのように、冷たい廊下の床の上に投げ出された。

## 罪と罰？

跳ね上がる銃口、棚引く硝煙。銃身を短く切ったタイプの散弾銃ライアットガン（暴徒鎮圧用ショットガン。装弾数が多い）は弱装弾を吐き出したにも拘らず強い反動リコイルを射手に齎した。標準的な口径である12ゲージの弾頭はライフリングを切られた単弾頭スラッグによって十分な直進性を与えられて目標へと迫る。

先端で鈍い色を放つ水色。ラバー製の弾頭に穿たれた窪みが風圧に耐えかねて空中で花の様に散開した。アデリアの背中に命中する寸前に起こったその現象は、貫通力を全て打撃力に変換する事で強力なストッピングパワーを生み出す。大きく開いた花弁を思いつきり叩きつけられたアデリアは暴風に薙ぎ倒される朽木の様に二メートルの距離を叩き飛ばされた。

「！」

冷たい床に叩きつけられて息が止まる。いや息が止まったのは直撃によるショックの為か、ともかく生まれて初めて味わった衝撃に頭の中が真っ白になる。パニックを起こした運動機能と意識障害を直前のマークスとの会話の回想と分析する事で回避しようと試みるアデリア。

“マークスは最後に何と言った？ あたし達の探してる少女がマークスの所で死んでる？ じゃああのお父さんは何で地下にあの子がいるって言ったの？”

“いや、今はそんな事どうでもいい。とにかく自分が誰かによって何らかの攻撃を受けた事には間違いない。呼吸は苦しいけど何とか手足は動く。今は一刻も早くこの状況を逃げ延びてマークス”

一秒足らずの時間で行動骨子を構築するアデリアの思考。だがそこまで考えた瞬間に、アデリアの背中に張り付いたラバー弾に変化が起こった。

背中に張り付いたままだった花弁がアデリアの体からポロリと落ちて内部構造が露出した。アデリアの体に電極だけを差し込んだその弾頭から鞘サホと呼ばれる後部部品が電線を延ばしながら外れる。細いテグスの様な二本の電線が伸びきった瞬間に、その最新鋭の暴徒鎮圧用特殊弾頭は秘匿されていた能力の全てを開放した。

「グウツ！！」

アデリアの口から呼吸交じりのくぐもった叫びが上がった。全身を襲う猛烈な痙攣が彼女の体を鉄に変える。硬直する全身、白熱する視界、声を出そうにもその元となる横隔膜ですら一枚の板になってしまったような感覚。

テイザーエクスレップ(TASER XREP)と言う名称が付けられたスタンガンの最終進化形態は対象に対して百万ボルトの電圧を瞬時に供給する。全身の筋肉に対して作用する暴力的な電圧は屈強な肉体を持つ者に対してより効力を発揮する、皮肉な事に体を鍛えれば鍛えるほどその効果は絶大だ。

全身を構成する筋肉全てが拘束具へと変化するその電撃の効果はアデリアとして例外ではなかった。モビルスーツを動かす為に作り上げられた全身の筋肉群はかの高名なハリー・フリーデーニですら脱出が不可能な戒めとなつて彼女の華奢な体に襲い掛かる。

「！！！！」

全身がこむら返りを起こした様だ、あまりの激痛に声も出ない。痛みから逃れる為ではなく筋肉の収縮によつて強制的に閉じられる瞼が視界を遮る。それでも瞼の裏に浮かぶ暗闇が真っ白に見える、まばゆく輝くその世界が周囲からどんどん暗くなって狭まって。

そしてそれは突然にアデリアの世界に暗闇を齎す。まるで電源を落としたモニターの様突然断絶する画面、それに釣られてマークスの事を考える事すら覚束なくなつて。

アデリアは意識を失った。

通用門の暗がりから姿を現した男が忍び足でアデリアに近づいた。

次弾をチャンバーに装填した事でイジェクトポートから吐き出された空薬莖を空中で捕まえて、未だに熱の残る銃口をぴたりと向けたままアデリアの様子を観察する。設計上有効とされている20秒間の電撃が収まっている事、そしてアデリアの意識が完全に失われている事を確認した男が無言のまま拳を上下に動かした。ハンドサインによる伝令によって同じ暗がりの中から走り出て来る二人の人影が横たわったままのアデリアの体にそそくさと近づいて、手にしたマジックバンドであつという間に主要箇所を固定した。

「『帽子屋』から『タリホー』、『ヤマネ』は籠の中。」

アデリアを肩に担ぎ上げた男が携帯に向かって囁く。

『『タリホー』了解。直ぐに『ヤマネ』を『ティーポット』に押し込め。じきに次の来客がある。』

ラーズ1の傍で指揮を執っている男の声に小さく頷いた男が静かに背中を傍の壁に預けた。何も無い廊下の壁の顔に見えたその一角が突然どんでん返しの様に回転して、アデリアと男の影を新たに生み出された暗闇の中へと吸い込んで再び閉じた。何事も無かった様に元の静寂を取り戻した廊下の上を、残った二人の男が次の獲物を仕留める為に駐車場の暗がりへと向かって走り出す。

瓦礫の階段を駆け下りるマークスの速さはアデリアのそれとは比較にならないほど優雅さに欠けていて、しかも遅い。だが配慮の欠けたその足捌きが齎す移動速度は特殊部隊の兵士から見ても十分に賞賛に値する物だった。不安定な瓦礫が崩す体勢をたたらを踏んで立て直しながら、その傾きを利用しながら下降の速度を緩めない。それは周囲の状況すら読み取れないほど凝縮した、異常なまでの集中力の為せる所産であった。

“畜生、やっぱり一人で行かせるんじゃないなかつたっ！”

心の中で轟く自責の念と途轍もない後悔がマークスの表面に固められた上辺の殻を剥ぎ取っていく。剥き出しになった感情がマークスの心をアデリアを想う気持ちで染め上げて、それが今の彼の原動



力となつて全ての感覚を支配していた。アデリアの元へ向かうと言う事以外の選択肢と彼女の身に降りかかった何某かの災難の正体を解析する事も無く。冷静と言う二文字を理性と共に置き忘れたまま走り続けるマークスには何もかもが些細な事柄に過ぎなくなっている。

だから通行者を制限する為に設置されている管理用ゲートが開きっぱなしになっている事すら疑問に思わない。普段のマークスならばそこで足を止めて異変を察知するだけの勘を働かせる事が出来た筈、だが地下一階に到達したマークスはあつと今にそこを駆け抜けてその先に見える通路を目指した。

突き当りから左右に伸びる暗い廊下を何度も振り返って見比べながらアデリアの行方を捜し求めるマークスの目に、暗がりから走り出る男の姿が映った。

「へ、兵隊さん！ 一体何が」

泡を食った表情で尋ねてきたのは行方不明の少女の父親だった。

「急に反対側で発砲音がして、彼女の悲鳴が聞こえたんだ！ 慌ててここまで引き返してきたんだけど、一体彼女に何があつたんだ！？」

「それはこつちが聞きたい位だつ！ 貴方の娘さんは二階の踊り場で亡くなっていた、一体どういふ事なんだ！？ 貴方は一階で被害にあつたんじゃないのか！？」

血相を変えて問い質す口調にはそれ相応の感情が入り混じって、唯一のはけ口となつた父親を責め立てる。記憶の中に渦巻く疑問の欠片を取り出して男に差し出すマークスの視界の中で、果たして男の表情が見る見る変化した。マークスの顔を鏡写しにした様な焦りに塗れたその表情が込み上げて来る悲しみに覆い尽くされて皺だらけになつて、堰を切つた様に目尻から零れ落ちる彼の涙が頬を伝つて顎へと届く。

「そ、そんな ミランダっ、どうして！」

哀れに歪む男の顔を見つめながら、マークスは男の肩を両腕で掴

んだ。熱に靡される感情のままに揺さぶるその両手に後押しをされる様に、マークスが悲しみに暮れる父親に向かって強い口調で促した。

「いいか、貴方は直ぐに二階に行つて娘さんを連れて三階に向かうんだ。エレベーターホールに大勢被災者がいる、その中には医者も混じっているからもしかしたら蘇生処置が可能かも知れない。とにかく最後まで諦めるな、いいなっ!？」

「わ、分かった。それであんたはどうするんだ？」

男が泣き顔のままマークスに問い掛ける。その表情をキッと睨み付けたマークスが言わずもがなの口調で男に尋ねた。

「アデリアは確かにこっちに行つたんだな!? 間違いないのか!？」

男が現れた通路の反対方向を指差して怒鳴り付けたマークスに男は二の句を失つて小さく頷く。小さく舌打ちしたマークスが男の両肩から手を離すと、踵を返して非常灯の弱い光に浮かび上がった仄暗い廊下を駆け出した。

「アデリアッ! どこだ、聞こえたら返事をしろっ!」

肉声と音声に反応する携帯のマイクの両方から消息不明になった同僚に呼びかけるマークス。無音を保つ携帯のイヤホンを些細な変化も聞き漏らすまいと強く耳に押し当てながら、遠くまで一直線に伸びる廊下を駆け抜ける。

地下区画は恐らく爆風によつて吹き飛ばされる障害物が少なかったのだから、壁のひび割れが随所に見える以外に大した被害は見受けられない。故にどこまでも見通す事の出来る一本の廊下に人影が無いのは走りながらも確認できる。そしてそれはマークスの心中に更なる焦りを生み出した。

そこに今までいた筈の、恐らく自分よりも大切な僚機の姿を見出す事のできない自分と世界に性急な回答を求める。

「くそっ、アデリアッ聞こえてないのか!? 一体今どこに

自分の口から飛び出た吐き捨てる様な叫びが妙な違和感を伴って自分の耳朵を叩く。自分の足が奏でるけたたましい足音と声しか跳ね返ってこない世界の中で起こる不思議な現象にマークスの足は突然止まった。

「アデリア、おいっ！」

その叫びが自分の携帯から聞こえてくる。何かが自分の叫びを捉えてこだまの様に返って来る事に気付いたマークスが、その現象が起る為のたった一つの可能性を思い浮かべて薄暗い廊下の床を見回す。自分の携帯と繋がっているラインはこの世で唯一つ、それがこの傍に。

壁際で小さく光を放つそれがマークスの目を奪った。

「……間違いはない、アデリアの」

拾い上げて呟いた言葉までもが自分の耳に空しく届く。ここに確かにアデリアがいた証拠を手に入れたマークスがスイッチを切って自分の胸ポケットに仕舞い込む。

その場所から廊下の突き当りまで人影は無い、と言う事はアデリアはこの廊下を抜けてその先の駐車場へ向かったに違いない。開放された従業員専用の入り口の先に広がる漆黒の闇に目掛けてその視線を上げて立ち上がった瞬間に、マークスの視界に小さな煌きが映り込んだ。

それは視点を上下に変えた事によって偶然にマークスが得た、貴重な情報だった。必中を期す為に狙いを定めた銃口が動いた事によって、非常灯の明かりが将星に反射する。その光を目にした瞬間に廊下の脇へと体を投げ出したマークスの咄嗟の判断と発砲はほぼ同時に発生した。

耳を劈く轟音に鼓膜の機能を失いながらそれでも目を閉ざす事無く一部始終を確認するマークスの意識。散開する弾頭の先端が衝撃波を撒き散らしながら直ぐ耳元を擦過して走りぬけた。

「！誰だっ!？」

反射的に問い掛けるマークスの視点は弾頭の行く末を追い掛ける。猛烈な空気抵抗を受けた弾頭はそのエネルギーを失って、まるで投石の様な勢いで廊下の床に転がり落ちる。金属音のしないその弾頭の正体がゴム製で或る事を悟ったマークスが再び闇の中に潜む得体の知れない悪意に向かつて上体を起こしながら吠え立てた。

「貴様、こんな事をしてただで済むとでも思っているのか、貴様のやっている事は立派な犯罪だ」

全てをマークスが言い終えぬ内に次の発砲音。反響する音で上下左右の感覚がおかしくなる、だがマークスはすぐさま回避の為に体を前方へと投げ出す。遮蔽物の無い空間でマークスの取った行動、そして弱装弾による弾速の遅さと言う二つの要素が今のマークスにとって全て有利に作用する。至近を通過する際に発生する雀蜂の羽音の様な高周波がマークスの耳にドップラーを与えて消える。

「この野郎っ！」

頭の中が沸騰したマークスが立ち上がると、闇の向こうで次弾をチャンバーに押し込む為にポンプを操作する音はほぼ同時に発生した。再び敵が自分に狙いをつけるまでに何秒かかるか、だがそれまでに距離が詰める事が出来れば。

駆け出す足が廊下に張られたリノリウムを蹴り上げて、マークスの突貫を援護する。理性の外れた本能が彼に齎す力は想像を絶する瞬発力を恵み。あつという間に迫り来る暗闇の中に隠れて銃口を振り上げる敵の、接近警報代わりのうるたえる呼吸音をマークスの耳が捉える。

動揺した射手が放つ銃弾など余程の偶然や神のご加護でも無い限り、その目的を達成する事は無い。マークスの勢いに逃げ腰になった敵の放ったラバー弾は、今度はマークスの体に掠りもしなかった。あらゆる方向へと飛び過ぎて跳弾音を撒き散らす悪意を尻目にマークスは一気に暗闇へと飛び込んだ。

目の前にある銃身をその勢いのままに掴み上げて、銃把にしがみ付いたままマークスの顔を見上げた男の顔を勢いよく殴り飛ばす。

全体重と突進の勢いを全て載せたその一撃は男の体を闇の中へと叩き飛ばした。

「貴様あつ！ アデリアをどこにやった!?」

何の根拠も無くただ直感でアデリアの身に起こった異変の手掛かり

元凶かもしれない　　を持つ犯人だと認識したマークスが倒れた男の体に馬乗りになった。胸倉を掴みあげて無理やり起こした上体にぶら下がる、腫上がった男の顔目掛けてマークスが怒声を叩き付けた。

「言えっ！　貴様アデリアをどうした!?　貴様の目的は!?」

締め上げる手の痛みすらも感じなくなったマークスが尚もがくがくと男の頭を揺らす。至近に迫った鬼気迫る表情に怯えながらも頑なに口を噤んだままの男に業を煮やしたマークスが手に掴んだままのライアットガンを構えて男の顔面に突きつけた。ポンプを前後して新たな弾をチャンバーに押し込む、排出された空薬莖が男の体にぽとりと落ちた。

「いいか、これは脅しじゃない！　幾らラバー弾でもこの至近距離で顔面に食らったらどうなるかお前でも分かるだろう、棺桶の蓋も開けられない様な無様な死に顔を晒す前に白状しろ、アデリアを、彼女をどこにやった!?」

地面に投げ出された男の顔間近に突きつけられる銃口。その将星越しにマークスの表情を見上げていた男の表情が突然変化した。恐怖に歪む顔、大きく見開かれた目。それを自分の脅しの効果によって齎された物だと思つた瞬間、突然背後から投げ掛けられた言葉でマークスの尋問は中断した。

「兵隊さん、止めるんだ！　今警察の人を呼んで来た、だから殺しちゃ行けないっ！」

聞いた事のあるその声に、今にも引き金を引き絞らんとしていたマークスの指はぴたりと止まった。男の顔に照準を合わせて背後の様子を探ろうとするマークスに向かって少女の父親が一人の男を帯同して現れた。精悍な表情の中にどこか影を秘めた瞳をシールの様

に貼り付けた男の顔、輪郭すらはつきりしない薄闇の中でマークスの意識に刻み込まれる気配がその男の所属する職業をマークスの生息する水域と同深の物と推測させる。男は父親の体を押しつけてマークスの前に回りこむと、銃身に手を掛けて静かに言った。

「話はその方から伺った。君は連邦軍の人間だそうだね。所属は？」

その声音自体に不気味な温度がある、まるでかつて赴任した事のある極北の地、レイキャビクの大気を思わせる様な冷たさ。隙間風のように忍び込んだそれはマークスの沸騰した頭の芯をあっという間に冷却する。侵入した冷気が背骨まで痺れさせた時点でマークスが銃身の狙いを僅かに緩めて男の意思に応えた。銃身に手を掛けられて発砲する訳にはいかない、発射ガスで彼の掌が火傷するからだ。

「オークリー基地所属、マークス・ヴェスト軍曹です。」

「よろしい、ではヴェスト軍曹。君の銃を私に渡してくれ。ここから先は私の仕事だ、君の」

男はそこまで言うと言ったマークスの胸につけられたウイングマークに目をやった。

「本分はこの様な事ではない筈だ。この犯人の確保は私に任せて、君は後ろに下がらたまえ。」

「いえ、しかしこの犯人は私の同僚に何らかの危害を加えたと言う可能性があります。彼女の安否を確認する上でも是非とも今ここでその情報を提供して頂きたい。」

「なるほど。」

マークスの提案に小さく頷いた男が全く表情を変える事無く足元にいる犯人の顔を見つめた。睨め付けられた男の顔が与えられた恐怖の為に大きく歪んで口を割った。

「傷害罪、いや銃器を使つての犯罪ならばれっきとした殺人未遂。そして誘拐、拉致監禁、随分と罪状を重ねた物だな、お前は。」

男の手が銃身を握って、マークスの手から無理やりライアットガ

ンを引つ手繰る。為すがままに銃を手渡したマークスの前で男は新たな弾を装填した。排莖された未使用のラバー弾が勢いよく床に転がり落ちる。

「いや、言い方が不味かつたな。お前が単独犯であると言う確証は無い、もしかしたら仲間もどこかこの敷地内に隠れているのかも知れん。そうなれば『お前』と言う言い方は妥当ではない、『お前ら』  
と言い直さなければ」

言葉を切った拍子にびたりと男の体に狙いを向ける銃口。

その始終をじつと見つめるマークスの脳裏に何かが引つかかつては消え、再び蘇っては囁きかける。警官が職務に忠実に犯罪者に対して行使する制圧行為、その姿に何の疑う余地も無く間違つた部分は欠片も無い。だが。

この警官は今なんと言つた？

傷害罪や殺人未遂までは自分に対して行われた行為によつて証明は出来る。だが彼はアデリアがどうなつてゐるかと言う事までは分からない筈だ。彼を呼んで来た父親にしても銃声を聞いただけで、その後でアデリアを襲つた不慮の事態に関しては何も知らない。

これだけ切迫した状況の中を推測だけで決め付けるにはあまりにも証拠が足りない。

誘拐、拉致監禁。なぜ断言できる。

なぜ、分かつた？

「いや、それも妥当じゃないな。誰にでもはつきり分かる様にちゃんと言い直そう。」

男の声に不意に濺みか掛かる。この世の物とも思えぬ嗤いを貼り付けたラースーがゆっくりと銃口をマークスに向けて、瞋い声で言い放つた。

「『俺達』、だ。」

轟音と閃光。

銃口から放たれるマズルフラッシュ発射光が至近距離で対峙した二人の体を、薄闇に白く浮かび上がらせた。

猛烈な着弾の衝撃、弾け飛ぶ体。ほぼ零距离から発射されたラバー弾はその先端のインパクトを展開させる事無くマークスの体に直撃した。先端に穿たれた窪みが衝撃でつぶれてマークスの体の表面で炸裂する。皮膚を破り、肉を裂き、筋繊維にまで届いた弾頭部はそこで初めて仕込まれた電極を深々と差し込んだ。

皮膚と言う絶縁体を失った体に直接送り込まれる百万ボルト、マークスの体がAEDを受けた瀕死の病人の様に大きく跳ね上がった。仰け反る。掛け値無しの百パーセントはマークスの口から叫びを奪い、マークスの意識を一瞬にして刈り取る。低周波の音だけが響く闇の中で、マークスに組み敷かれていた隊員がようやく上体を起こしてラース1に言った。

「す

」

恐怖から開放された安堵感はその作戦を反故にしかけた事に対するお咎めが何も無かった事に由来するのかも知れない。だが彼の判断はラース1が続けて取った行動により間違いである事が証明された。すみません、と謝ろうとした射撃手の男の視界からラース1が遠ざかる。呆然と見送るその視界の中で、床で異様な痙攣を繰り返すマークスに近づきながら再びポンプを作動させるラース1の後姿が映った。

「ラース1、何を

」

それは自分よりもこの男に興味の対象が移った事による物だ、と理解した後でまさかとは思いつながら、しかしながら彼の興味をそそのめる物の可能性を思いついた男がラース1の背中に疑問と制止を投げ掛ける。だがラース1の背中から溢れる黒い瘴気は現世の空気を拒んで次の行動へと打って出た。仰け反るマークスの体に突き付けられる銃口、侮蔑と嘲りの入り混じった嗤い。

「ラース1、止めてください。彼は大事な捕虜の一人

」

口走る制止を掻き消す発砲音、再び弾けるマークスの肉体。二発目の高電圧はマークスから意識以上の物を喪失させて違った物に変



貌させた。白目を剥いて口角から泡を吹くマークスを嘲笑いながら更にアクションを起こして真上から叩き込まれる次弾。発砲の度に浮かび上がるその嗤い顔が顕現を果たした魔界の悪魔を彷彿とさせて、その勢いに恐れを為した男達は止める事すら忘れて。電撃が齧す低周波の輪唱カレンと宙に舞う空薬莖の行方を目で追うだけの存在に成り下がる。

恐らくあの哀れな男は次の一撃で心臓が止まるだろう、それが其の場に居合わせるラーズ1以外の男達の見解。ラーズ1は一体彼をどうする気だ？ オークリー基地の内情を知る為に必要な、彼は大事な情報源ではなかったのか？ それをここで殺す事に何の意味があると言うのか、自分達は今まで何の為に彼の作戦を忠実に遂行してきたのだ？

異口同音の思いが駆け巡るその冥闇に響くポンプの擦過音、金属のロツクする硬質な音が死刑執行の前奏曲の様に男達の耳に木霊する。止める気力も無く、自分達の疑問を払拭する手段さえ考え付かない男達の目の前で大きく口を開けて引き金を引き絞るラーズ1。ストロボに照らし出されるその顔を再び視界に収める事だけが自分達に出来る事だと諦観の眼差しを向けて見守る。

だがそのストロボも、与奪を告げる轟音も彼らの耳に届く事は無かった。代わりに響くカチンと言う乾いた撃針の落ちる音だけが、余韻の中に響き渡って薄闇に吸い込まれて消える。

ラーズ1の左手が再び素早く前後して引き金を引く、だが結果は同じだった。吐き出される薬莖も無く、閃光すら生み出せずただ硝煙の香りだけを周囲に撒き散らす銃口。

「…… 悪運の強い奴め、命拾いをしたな。まあいい。」  
マークスの体が電撃の刑罰を終えてぐにやりと横たわる。吐き捨てる様に呟いたラーズ1が弾切れになったライアットガンを直ぐ傍に放り投げた。ガシャンと言う音だけが響くその場所で、ただ呆然と見守っていた男達に向かってラーズ1が命令した。

「こいつもさっきの女と同じ場所に放り込んでおけ。…… そう

だ、あの女にこの男がどうなっているかよく分かる様に、よく見える場所に寝かせておいてやれ。あの女がどんな顔をしてこの男を見る事になるのか、楽しみだ。」

そのラーズ1の嗤い顔には一見変化が無い様に男達には思える。だが男達はラーズ1の雰囲気は男への銃撃を境に変化している事に気がついた。

心を映し込む様に変化が無く、瞑さだけが目立っていた彼の瞳の奥に燃え上がる黒い炎の存在。呪縛から解き放たれた男達がそれぞれの心にその意味を問いかけ、しかしそれが彼自身の心に潜む何を表しているのかは誰にも見当がつかなかった。

全身が痛い、頭の芯がずきずきする。

澱みの底に縛り付けられていたアテリアの意識がやっと頸木の鎖を解いて水面へと浮上する。暗闇に差し込む一筋の光が次第に大きくなって、それが目覚めの始まりだと理解するアテリア。網膜に差し込むその光が今まで自分が居た世界とは全然住処を異にする場所だと判断して今まで経験した事の無い、唐突に意識が途絶する瞬間までの記憶を思い出そうと試みた。

背中に加わった衝撃の跡はみみずばれになっているだろう、身動きを繰り返しながら体の各部分の損傷を確認する。指は、足は動く。全身に蔓延った筋肉の痛み以外にも変わつた所は無い。それも何とか我慢すれば動ける程度には回復している。

視界が確保出来ない状態で自分の現状を急いで確認する。椅子に座らされている事は分かる、指は動くが後ろ手に組まれた腕と足首は何か金属の輪で固定されて思い通りに動かす事ができない。恐らく手錠か何かでがちりと固定してあるのだろう、と言う事は。

「……………要するに絶対絶命、って事か。」

溜息混じりに呟きが口を吐いて出る。現状の把握には十分な情報を得る事は出来たが、そうやって来ると自分が何故この状況に置か

れたか、いやそもそも何故自分が狙われたかと言う意味や動機が分からない。頭の中を一瞬、子供の頃に親に連れられて無理やり見せられた安っぽいB級ハリウッド映画の粗筋が過ぎったが、そんな事が現実に関自分の身に降り掛かるなんて信じられない。よしんばそうであったと仮定しても白昼堂々と美少女をかどわかす様な間抜けな国家的犯罪組織がいるとも思えない。

不自由な身の上は逆にアデリアに心の中で冗談を言えるだけの余裕を与えた。どうせじたばたして始まらない、もしじたばたするのなら相手が何らかのアクションを起こした時に生まれる隙に乗じるに限る。それまではこのまま体力を温存しておかなければ。

脱出の機会を窺うのが作戦の第一目標、その為には。

うつすらと開いていた瞼に力を込めて静かにこじ開ける。非常灯の明かりとは違う、自然光に近い色のLEDで照らし出された影の無い部屋。片側の壁面に敷き詰められた鏡はマジックミラーだ、恐らくその向こうで自分を拉致した犯人が中の様子を見張っているのだろう。ショッピングセンターの地下にまさかこんな設備があるとは夢にも思っていなかったアデリアは、自分が既に遠い所に連れ去られてしまったのではないかと言う不安に駆られて、小さく身震いした。

「目が覚めたか？」

機械的に処理された声が頭上のスピーカーから降り注ぐ。アデリアは鏡に映った自分の顔をキッと睨みつけて、開口一番憎まれ口で応戦した。

「彼氏でもないくせにその尋ね方は何？ こんな目にあってあたしが色っぽく答える事でも期待してるのかしら。」

「これは失礼。」

含み笑いの混じった声がアデリアの耳に届く。笑っていられるのも今の内だ、あんた達のそういう隙に付け込んで自由になった暁にはこっ酷い目にあわせてやる事を密かに心に誓うアデリア。瞬きもせず鏡を睨み付けたままのアデリアに向かって再び男の声が聞こ

えた。

「これから私の質問に答えて貰う。予め言っておくが君の置かれている状況は極めて遺憾だ。私は君の身柄を無事にご両親の元へお届けたいと願っているし、殊更にトラブルも起こしたくない。だが君の取る態度如何によつてはその約束も反故にせざるを得ない事になるかも知れない。ここはお互いの利益を優先して協力し合う事が得策ではないのかと私は考える。」

「？ 只の人攫いじゃない？ それもこの物言いは捕虜に対して尋問を始める時の喋り方だね。…… まあどちらにせよ盗人猛々しうってこういう事を言うのね」

相手の言葉を心の中で分析してそう結論付ける。だが心の中에서도都合のいい相手の言い分に向かつて毒づきながらアデリアは口を開いた。

「連邦軍北米方面軍オークリー基地所属、アデリア・フォス伍長。認識番号0147241。」

「よろしい。ではフォス伍長、オークリー基地での君の所属は何かね？」

思ったよりも素直に第一声を放った事が意外だったのか、それとも捕虜になった時の答弁に相手が慣れているのかスピーカーの声は理知的な言葉運びで尋ねた。相手がこういう荒事に慣れていると言ふのなら自分もそれなりの対応を選ばなければ。アデリアは士官学校で習った教科書通りの対応を一言一句、毅然と答えた。

「連邦軍北米方面軍オークリー基地所属、アデリア・フォス伍長。認識番号0147241。」

捕虜になった際には相手の設問に対して一切の解答をすることは出来ない、いかなる情報も敵に与えない為だ。だが人間の心理として完全に沈黙を守るといふ事は逆に精神的なストレス 呼ばれれば反応するという本能的反射行動に於いて を自身に与えて、それが口を割る要因にも成りかねない。故に十九世紀の終わりに締結された『ハーグ陸戦協定』に則って必要最小限の回答を行う事で

それを回避するという手法が取られていた。勿論自白剤等を使用すればそんな抵抗は何の障害にもならないのだが、そうなれば今度は『ジュネーブ条約』第十三条と十四条が相手をする。捕虜の肉体的危害の一切を禁じるこの条約は1949年に締結されてから宇宙世紀に至るまで、不変且つ重要な条約として今日に至っている。

「オークリー基地について尋ねよう。現在常勤の基地構成人数は概算で何人だ？」

設問の意味をアデリアの脳はフル回転で考える。犯人は私個人の情報ではなく、『私の所属する基地』の情報を欲しがっている。と言う事は私の素性を知っていて質問をしているという事になるのだが、では自分は確実に狙われていたと言う事か？

「……連邦軍北米方面軍オークリー基地所属、アデリア・フォス伍長。認識番号0147241。」

「オークリー基地にあるモビルスーツは全部で何機だ？ 機種並びに実稼動数を予備機も含めて答えたまえ。」

「……連邦軍北米方面軍オークリー基地所属、アデリア・フォス伍長。認識番号0147241。」

基地じゃない、『私の所属する部隊』に関してだ、とアデリアは相手の声と同じ言葉を重ねながら思った。と、言う事は犯人は連邦軍、それもオークリーと言う『忘却博物館』に対して何らかの興味を抱いているという事になるのか。

“あんな所に興味があるってどういう事？ はみ出し者の寄せ集めの吹き溜まりみたいな所に、誰が興味を持つって？”

何日か前にコロニーの残骸の傍で出会った一人の男、ヘンケン・ベツケナーの顔を不意に思い出す。あの時一瞬ではあったが彼の正体をジオンのスパイと思ひ込み、即座にマークスに否定されてはいたのだが今となつてはその時の直感に焦点が当たる。今の連邦軍に敵対する勢力と言えば、ティターンズが未だに手こずっているジオンの残党と、アクシズ辺りか？ しかしジオンの残党が十二単衣の様な戦線を掻い潜って地上に降下できるとは思えないし、アクシズ

は今の所事実上の中立国家だ。そのどちらも連邦に対して何らかの反攻を企てると現時点では考えにくい。

ふっとアデリアは昨晚の二ナの告白を思い出した。デラーズフリートが襲撃したトリントン基地には核装備のガンダムがあって、それを強奪されたのがデラーズ紛争の始まりだと言っていた。ひよつとすると実は自分の所属する基地には自分の知らない秘密が隠されていて、それを狙った未知の第三勢力の仕業ではないか？

「アラート勤務で夜間に待機する機体は何機だ？ その人員を決定する方法と命令系統は誰が行う？」

「じゃんけんだ、と言ったらどんな顔をするだろうと、アデリアは大声で答えてやりたい衝動に駆られる。だがそれこそが相手の尋問のテクニクなのかも知れない、実はそんな事は当の昔に掴んでいて、アデリアが面白半分に答える事によってそれ以降の尋問の足掛かりにしようとしているのかも知れない。すんでの所で気を取り直したアデリアが、言った。

「連邦軍北米方面軍オークリー基地所属、アデリア・フォス伍長。認識番号0147241。」

「なるほど、強情な女だ。」

丁寧な口調は影を潜めて、代わりに溜息交じりの声かスピーカーから流れ出す。恐らく鏡の向こうでイライラしながら室内を眺めている正体不明の犯人に向かってしてやったりと笑い返すアデリア。その顔を鏡映しに見た彼女は自分の表情の余りの変わり様に思わず咳払いをして笑みを隠した。

「こちらとしても出来れば穩便に事を進めて置きたかったのだが、協力する意思がないと言うのでは仕方が無い。君に対する聞き方を変えるでしょう。」

男の声と共に鏡の傍に設けられていた一角が開いて どう

やら鏡の裏とを繋ぐ隠しドアの様だ 野球帽を目深に被って

マスクで顔の大半を覆った男が現れた。無言で室内へと入った男は壁際を伝う様にして アデリアからの予期せぬ反撃を避ける

為に アデリアの正面へと回りこむ。まんじりともせずに見つめるアデリアから少し距離をとる様に立ち止まった男が、足元に置かれた白いシートに手を掛ける。

「やれ。」

頭上から降り注ぐ短い命令と共に男の手がシートを勢いよく捲り上げた。頭上にあつた無影灯の光はそのシートの影をアデリアの目から隠して、今の今までその物体を景色の中に溶け込ませていた。だがそのベールが剥がされた瞬間に浮かび上がった代物は一瞬にしてアデリアの何もかもを吹き飛ばす破壊力を秘めていた。

吸った呼吸が小さな悲鳴と共に喉元を過ぎたまま還つて来ない、瞬きが止まる、頭の中で色々な物が弾けて痛みが存在すら感じ無くなる。一瞬の空白の後にアデリアの腹筋を大きく押し込んで飛び出した大きな叫びを、アデリアの耳は確かに聞いた。

「マークスッ！！」

連邦軍の夏服の所々に開いた穴、そこを中心に広がる血の染みが大きな円を作ってシャツの大半を埋め尽くして。目を閉じたまま微動だにしないマークスの体がアデリアには見てはならない者の様に見える。呼吸は、胸は、腹は動いているのか？

「マークスッ、ねえ、マークスッ！！ マークス、マークスッ！！」

戒めの頸木を解き放とうとする獣の様に跳ね上がるアデリアの身体、呼び声が雄叫びの様に室内に反響して。手足を固定した手錠の鎖がまるで南京錠の様にガチャガチャと大きな音を立ててその叫びを後押しする。繋がれた手首の皮膚はあっという間に裂けて血が滲み出す、だがアデリアにはそんな事の一切に構っている余裕が無かった。

頭の中が真っ白になって冷えて固まるような感覚、心臓の鼓動は耳が痛くなるほど煩くて、全身の血液が激流となって駆け巡っている筈なのに震えが収まらない。喉を何かで締め上げられる様に失われていく呼吸に抗う様に、自分の未来を失う事を認められないアデ

リアは更に大きな声と大きな力で動かない上官に呼びかける。

「マークス、マークスッ！ お願ひマークス、ねえっ！！」

「今はまだ生きています。」

アデリアの激情に頭から冷や水を浴びせる男の声が聞こえた。アデリアの全身を支配していた猛烈な力の発生がそれで滞った。

「だが、ここで話が長引くようだとどうなるかは分らない。早く医者に見せて然るべき処置を施さないと彼の命は保障できない。」

「殺してやるっ！」

アデリアがマークスから視線を背けてガラスの向こうの犯人を物凄目で見つめた。

「もし、マークスに何かあったらお前達を殺してやるっ！ 大事な事があつても何があつてもあたしはあんた達を許さないっ、必ず、どんな事をしてでも地の果てまででも追いかけて、必ず一人残らず息の根を止めてやるっ！！」

「それは実に物騒な予言だと思つが、だがいいか？ 彼が生きるも死ぬも、私達のせいではない。君がここで強情を張つて非協力的になればなるほど彼の命は危険に晒されるのだ。言つなければ彼の生死を決めるのは君の判断如何に掛かっていると云つてもいい。違つか？」

本末転倒な論理のすり替えにアデリアの体が怒りに滾つて跳ね上がる。手首の傷が大きく裂けて遂に血が溢れ出した。強く握った拳の間を伝わって白い床にぽとりと零れ落ちる。

「さて、ここで君の意思をもう一度確認しておきたい。君は私達の質問に素直に答える気があるのか、否か？」

最後の決断を求めて降り注ぐ冷たい声に、怒りで煮えたぎるアデリアの頭が震えながら垂れ下がる。俯いて床を見つめる絶望の面を長い栗色の髪が覆い隠して煌いた。

何故、今二ナの顔が思い浮かんだのだろうか？

選択肢の全てを奪われて、項垂れたまま床を見つめるアデリアの



視線の先に浮かび上がった、昨日の夜の二ナの泣き顔。

マークスを助けられるのはあたしじゃないと言う事。

ウラキ伍長を助けられるのは二ナさんじゃないと言う事。

自分が昨日の夜に二ナに向かつて叩き付けた提案は今自分の元へ理不尽な形で返つて来た。マークスを助ける為には自分は今まで築き上げた大事な物を、大事な仲間を敵に売らなければならぬ。裏切り者の誹りそしを一身に浴びて、自分の求める正義等と言う理想は跡形も無く碎け散る。

その苦しみ。その痛み。一つの体を二つに引き裂かれるような拷問にも似た選択を。いや、もう選択の余地は無い。あたしにとってマークスは全て。彼を失う位なら。

「！」  
アデリアの目から涙が零れた。穢れていく自分の矜持と共に浮かび上がる、証明しようとして遂に果たせなかつた自分の正義のあり方と過去に示された正義の定義。それが真実だと言う事を痛いほど思い知らされる今日と言う日、そして。

“二ナさん”

だから、彼女は。

彼を裏切つたんじゃない、彼を守る為に自分の全てをも裏切つたのか。

今の自分がそうしなければならぬように、二ナも彼女の中に抱えていた全ての物に背を向けて。それでもコウを守る為に、助ける為に自分の全てを捨て去つたのか。

心の命脈を断ち切るほど鋭い刃を自分の胸に突き立てて、途轍もなく重い枷を嵌めたまま生きてきたのか、自分の不幸が彼の幸せになる事を世界の片隅で祈り続ける事しかできないまま。

「言う通りにする」

他の誰にも聞き取れない小さな声は自分自身に対する確認作業でしかない。アデリアの口が微かに動いた事を見て取つた男はもう一度アデリアに尋ねた。

「よく聞こえなかった、フォス伍長。もう一度、はっきりと、声に出して宣誓しろ。協力するか、否か？」

原罪の御手に掴まれたアデリアの心にはその声すら神の啓示の様に聞こえる。耳を侵すその囁きに許しを請う様に。奥底に秘められた大事な物の一切を奪い尽くすその言葉に導かれるまま、アデリアは贖罪代わりの叫びを上げた。

「言う通りにする！ だから、お願い！ マークスを、マークスだけは助けてっ あたしはどうなっても構わないから！」

これはあたしの罪だ。

あたしが振り翳した正義があの日 of 彼女を、そして二ナさんを傷つけた。だからその罪を最も自分にお似合いな形で清算する時が来たのだ。

でも、それでも。

例え世界中を、例えマークスを敵に廻してしまふ事になってもあたしは構わない。

マークスが、ただ生きてさえいてくれれば、それでいい。

尋問を行っている『タリホー』の顔に安堵の表情がやっと浮かんだ。

泣きながら救いを求める少女の顔は、その男にとっては余りにも印象に残る物だった。心が痛む、あれほど勝気だった少女があられもなく泣き喚く様を見て動揺しない者などいないだろう。決して勝ち誇った気分にはならないが、しかし自分達の作戦の完了が目前に迫った事には間違いが無い。『タリホー』が思わず醸し出した空気は同じ部屋で息を殺して成り行きを見守っていたほかの隊員にも伝播していた。

専門外の拉致作戦を、ラーズ1の立案とはいえここまで完璧にやり遂げたのだ。恐らく少女と共に一人部屋に踏み入った仲間も同じ顔をしているであろうと思つて、相手に見えない笑顔を投げ掛ける。その耳元で、ラーズ1の声が響いた。

「…… あれは、誰だ？」  
部屋中を支配している穏やかな空気に一石を投じて暗澹たる波紋を広げるラーズ1の声、作戦の開始から今までずっと行動を共にして来た『タリホー』にはラーズ1のその声を聞いた記憶が無い。思わず振り返って顔を見上げた。

嗤っていない、そこに張り付いた別の顔を見た瞬間に『タリホー』の膝はがくがくと震えた。

「し、指揮官殿？ 一体」

「おまえは、誰だ？ 何故お前がそんな事を言う？」

その問い掛けは、その視線は明らかにガラスの向こうで泣き崩れる少女に向かつて告げられている。眉を吊り上げ血走った目を大きく開いてその奥に隠れていたどす黒い炎を露にして、悪魔に取り付かれた、いや取り付いていた悪魔がその存在を誇示した表情をガラスに映し出して自分の顔に問い掛ける。

「お前はそうじゃない、そうじゃないんだアテリア・フォス。それはお前の世界じゃないっ。」

ラーズ1の手が目の前に置かれた巨大なサバイバルナイフに伸びる。反射的に阻止しようとした『タリホー』の手が届くのに先んじて、ラーズ1の手がその鞘を掴んで取り上げた。

「お前を俺から奪っていった物は、何だ？ お前が俺と同じ道にいないのは、何故なんだっ？」

鞘のスナップが小さな音を立てて外れた。一気に引き抜かれた刃渡り三十センチの身幅の広い刃はガラス越しに差し込む尋問室の明かりの照り返しを受けて大きく光を撒き散らす。

「指揮官殿っ、何をされるおつもりですか!？」

不穏な空気を察知した『タリホー』が思わずマイクのスイッチを切って尋ねた。だがラーズ1はその一切の問いにも答えず、呆氣にとられたまま見守る隊員の脇を足早に過ぎ去って監禁室のドアノブの手を掛けた。

再び開いた隠しドアから出てくる人影。涙で霞むアデリアの目が状況の異変を察知して音のした方角を追いかけた。映りこむ人影らしき物は輪郭すらぼやけてなかなか形にならない、だがそこから漏れ出して来た声を聞いた瞬間にアデリアの記憶はそれの合致する人物のデータを脳裏に弾き出して、驚いた。

「お前は、本当にあのアデリア・フォス曹長か？」

そこから噴出すオーラは嘗て自分の知っていた人物の物とは正反対だ。自分の知るあの人物ならばそれはもっと厭世的で、尚且つ退廃的でなくてはならない。少なくともベルファストのプレイルームで出遭った時のあの男はそうだった。

だがそこに立つ男からは過去の記憶に合致する何もかもが抹消されている。大きく開いた口から吐き出される息には瘴気に似た殺気が混じり、血走った眼の真ん中に張り付く瞳孔の奥には形容の仕様が無い、何か得体の知れない焔が燃え盛っている。今し方自分が対峙した暴徒に共通する何かを携えて立ち尽くすその男の輪郭を、瞬きをして涙を吹き上げたアデリアの目がはつきりと捉えて、思わず正体を口にした。

「…… ヴアシリー・ガゼエフ大尉？」

ドアを開け放ったままつかつかとアデリアに歩み寄るラーズ1。手にしたナイフが光を跳ね返してアデリアの虹彩を眩ませる。泣き腫らした目を細めてラーズ1の顔を見上げたアデリアの正面に立ちはだかったラーズ1が、ほんの少し前かがみになってその顔をアデリアに見せ付けながら、言った。

「その名前を知るお前は、本当にアデリア・フォスカ？ …… いや、違うな。俺の知ってる奴はそんな奴じゃない。」

「なぜ、貴方が どうして、ここに？」

「そんな事はどうでもいい、それより。」

ラーズ1は言葉を切ってアデリアを見下ろした。アデリアに対する警戒を全く意図しない零距离にその身を置いたままのラーズ1が右手のナイフをぶらりと体の横にぶら下げたままでアデリアに尋ね

る。

「何故だ、何故お前はそんな風になってしまったんだ？」

アデリアに向けるその顔に最早悪魔の形相は無い。あるのは見えない物に向かつて懇願を繰り返す、神に裏切られた無力な信徒の面立ちがあるだけだ。呆然とラーズ1の顔を見上げるだけのアデリアに向かつてラーズ1は問い掛け続けた。

「お前はそうじゃない、お前は俺の罪を背負って俺と同じ世界にいないんじゃないのに、お前はどこに行ってしまったんだ？ あの日のお前は、俺の股間を蹴り潰したあの日のお前は俺の罪を肩代わりするのに相応しい、もつといい顔をしていた。それなのに何故お前はこんな所で泣いているんだ？ そうじゃない、それはお前のする事じゃない。」

まるでぶつぶつと何かを唱える様にアデリアに話しかけるラーズ1の変わり様に驚いた、マークスを包んでいたシーツを握ったまま立ち竦んでいた男がラーズ1に向かって歩を進めようとして、凍りついた。接近を拒むラーズ1の視線を猛烈な殺気と共に叩きつけられた男の足は、自分の意思とは関係ない本能による回避の為に一広の距離を後ずさった。

「お前を、変えてしまったのは、そいつか？」

見上げるアデリアの目が捉えたラーズ1の視線は、自分の仲間だった男からその足元に倒れているマークスへと落とされた。浮かび上がった絶対的な殺意の放射に寒気と怖気が同時にアデリアの体を襲った。

「そいつさえいなくなれば、お前は俺の元に戻ってくるのか？ そいつを殺せばお前は、あの日俺を裁いたあの目を取り戻す事ができるのか？」

アデリアの元を離れようとするラーズ1。変わり果てた嘗ての仇敵の姿に我を忘れたままのアデリアの意識が急速に一点に収束して、心臓を叩いた。ドクンツと言う拍動が心臓の中の血液を全て押し出してしまったかのように胸が苦しくなる。自分の体を襲うその変調

が、マークスに訪れようとしている絶対的な、有無を言わさぬ死の匂いだと感じてアデリアは追いつがろうと全身に力を込めた。

アデリアの倍の自重で拘束していたその椅子が大きな音を立てて動いた。だが手足の戒めは彼女を解き放つには至らない。反動でゆっくりと倒れていく景色の中を遠ざかるラース1の背中に向かって、床に倒れたままのアデリアは叫んだ。

「やめて、ガゼエフ大尉っ！ 私は何でも言う事を聞く、あの日の事を償えと言うのなら今ここで私を殺しても構わないっ、だから、だからその人には手を出さないでっ！！」

「そんな物言いがお前の口から出てくる事が許せないんだっ、私はっ！！」

マークスの足元で立ち止まり、背を向けたままアデリアの叫びに負けないくらいの大声で言い返すラース1。あまりの音声に異様な気配を察した彼の部下が、全員持ち場を離れて室内に雪崩れ込んで来る。動揺と懇願と入り混じった空気が支配し始めた尋問室の中でラース1の周囲だけがその全てを拒む様に闇の祠を模る。手にしたナイフを力一杯握り締めたラース1が堪り兼ねたように叫んだ。

「お前は、俺をあの日裁いたっ！ お前は俺の罪を背負って、俺はお前を追いかけてやっここで出会ったっ！ お前は俺を救う義務があるんだ、お前は俺を救わなければならんだ、俺を死なせてくれない亡者の葬列からっ！！」

怒りで背中が震えているのが分かる。アデリアは懇願の言葉を失って、倒れたままでラース1の後姿を見つめた。

「お前と俺は殺しあうんだっ、お前と俺は一緒に死ぬんだっ、お前が俺を解き放つんだっ！ 何故分らない、何故分かってくれないっ！？ やっと手に入れた道標を俺は」

ラース1の手がマークスの銀髪を掴んだ。全身の力を込めて引っ張り上げる。

「こんな男の為にっ！ 失わなければならないのか！？」

「冗談じゃないぞ、そんな事が許されてたまるものかっ！！」

目を閉じたまま吊り上げられたマークスのから空きの喉に目掛けて、振り上げられ、振り下ろされる、断罪の白銀。

世界が、壊れていく。

コマ送りの景色の中で自分の叫びまでもが千切れて空しく宙を舞う。

自分の罪が、

自分の罰が、

自分の大事な物を永遠に奪っていく。

煌く光はもう直ぐ私の全てを変える。

私はその瞬間に黒く染まるに違いない、私の罪と同じ色に。

赤でもなく、白でもない、世界を彩る全部の物から何もかもが消え去って、

真つ黒な私がそこにいる。

自分と同じ色だけが私の欲しい物に成り下がって、

私はきつとそれを求め始めるのだ。

その色と一緒にになる為だけに、その色と一緒に消え去る為だけに。

そうなる為に、その為に、私は、今日まで、生きて来た、のか

血を吐く様なアデリアの絶叫、ラーズ1の予期せぬ行動を制止しようとして動き出す人影、自分に目掛けて襲い掛かる思惑の鍵爪を跳ね除けて振り下ろされるラーズ1の右手、求むるがままを切り裂く為に輝く鋼の刃。

その全てを凌駕して一直線に放たれた黒い閃光が、今まさにマークスの喉に届こうとした切っ先に命中した。重量に加算された体重と速度はそのまま威力となつて、ラーズ1の殺意と決意ごとナイフを壁の淵にまで弾き飛ばす。

自分の渴望を吹き飛ばされたラーズ1がその行方を呆然とした目で追った。壁に当たって砕けたガラスの灰皿が刃から照り返される

光を受けてキラキラと、プリズムの様に照り返しを七色に変えて部屋中を染め上げる。

「…… フリスビーなんてやった事は一度も無いが  
全員の背後から静かに投げ掛けられる声に思わず振り返る望まざる処刑場の刑事達。床に倒れたままのアデリアだけがその姿を視界に納める事が叶わなかったが、記憶の片隅に残っていた微かに聞き覚えのある声を捉え、思い出し、そして耳と現実を疑った。

「…… 死に物狂いになれば何とかなるもんだな。」  
人影が、開きつ放しになったとどんでん返しの入り口からゆっくりと光の中に姿を現す。洗い晒しの白いＴシャツ、陰影を付けて浮かび上がる筋肉の凹凸、髪と同じ色の憂いを帯びた瞳がじっとラーズ1の姿を凝視する。

「それ以上、彼らを傷つける事は許さない。…… 『弟』と『妹』を返してもらおう。」

コウはそう言い放つと、気迫に押されて道を空ける隊員達の間からラーズ1の元へとその一歩を踏み出した。



彼は助けようとしただけなのだ、瓦礫の下に埋もれて救いの声を上げる人達を。

モビルスーツに乗っていた者ならばいとも簡単に操れる筈の民生型のパワーローダー、近くの工事現場に置かれていたそれを積載トラックごと現場に持ち込んだ運転手には残念ながらその経験だけが足りなかった。大声を上げて操作可能な人員を探し求めるその男の呼びかけに答えたのは、無言で駈け出したコウの足音だった。

男の体を押しつけて荷台に上がる、人の身長の二倍ほどの工作用機械には防弾版やモニター等はなく、剥き出しのフレームに囲まれた簡単な操縦席と手足を差し込む溝がある。靴を履き、手袋を嵌める様に先端部のマニピュレーターへと差し込んだ手足を動かせばその動きを真似て駆動する仕組みになっている。巨大なペンチの様な両腕は人工筋肉で作動し巨大な鉄骨や資材を単独で運搬できる性能を有する。故に今まさに被災者が直面している生命の危機を打開する為には打って付けの道具足り得る筈だった。

だがセシルの視界の中で、荷台に駆け上がったコウの後ろ姿は瞬時にして消え失せた。驚くセシル、慌てて駆け寄ったセシルと男の眼を尻目にコウは蹲って震えていた。溢れ出る何かを押し留める為に押さえられた口から苦痛の呻きが漏れている。

「おいっ、あんた大丈夫か！？」

突然に起こったコウの変貌に男が是非を問い正す。俯いたまま顔も上げられないコウはそれでも小さく頷いて口を押さえたまま立ち上がった。空いた方の手を震わせながらパワーローダーのフレームに手を掛けてよじ登ろうと試みる。だが。

抑えた口元から指の間を通過して液体が噴き出した。くぐもった声と嗚咽、それは繰り返す毎に大きく激しくなってセシルと男をさらに驚かせる。為す術もなく見守る二人の前で、それでも何かに執着

する様にフレームを鷲掴みにしていたコウの手がついに離れて支えを失い、トラックの荷台に崩れ落ちる。庇う為に飛び乗ったセシルの足元でコウは何度も何度も嘔吐えうきながら、震える手脚で地に伏せる事を拒み続けた。

「誰かつ！ 他に誰かいないのか！？ 早くしないと瓦礫が崩れて中にいる人が死んじゃまうつ！」

こんな奴がコレを動かせる訳がない、コウを候補者から除外した男が尚も募集の声を周囲にばら撒く。応える者もなく、それでも新たな候補者が名乗りを上げる事に一縷の望みを繋ぎながら男が大声で探し求める。その足元でセシルに肩を押さえられたコウが、嘔吐の間隙を突いてか細い声で男に言った。

「俺が…… 動かす。だから手を貸して」

「馬鹿言っつなつ、あんたその状態で何か出来ると本気で思っつてんのか！？ いいからあんたはあっちに行っつてくれ、邪魔なんだよ！」

吐き捨てる男に向かってセシルが何かを言い返そうとコウの肩から手を離れた。だがコウはその手を震えの収まらない手でセシルの手をしっかりと握って押し留める。懇願を込めて言った。

「頼む、俺をこれに乗せてくれ。俺は何としても」

言葉に出来たのはそこまでだった。セシルの両手で肩を抱かれたまま再び激しい嘔吐を繰り返し始めるコウ。すでに溢れてくる内容物の中に固形物はない、全身の筋肉が痙攣してその全ての力が嘔吐に回っているコウの体からは徐々に体温が失われている。薄いTシャツ越しにそれを感じ取ったセシルがコウの耳元で囁いた。

「ウラキさん、ここは他の人に任せて。どちらにしても先ずその発作を収めないよ。」

セシルの声を遠くに聞きながら、それでも頑なにその場所から離れる事を拒み続けるコウ。だがコウの口から吐かれる液体の中に赤い物が混じり始めた瞬間に、セシルはコウの肩を強く抱いて大声で諭した。

マロリー・ワイズ（激しい嘔吐によって食道の粘膜が破れて出血を起こす症状）が始まっている、これ以上はここについてはダメ。

「ウラキさん、ここを離れるのよ。今の貴方じゃ無理よ！」

セシルの呼び掛けにそれでも頷かずに、吐く物が無くなっても痙攣を繰り返すその姿を両手の中に感じながらセシルはあの日のモラレスの言葉を思い出す。ドクは言っていた、ウラキ伍長がモビルスーツに乗れない理由は脳内麻薬による精神の空白状態による物だと何を言っている。それはあくまでもコウがモビルスーツに乗ったと仮定した場合の事だろう。だが今ここにいる彼はモビルスーツどころか民間の工事機械すら動かせなくなっているではないか。

セシルはその時初めて知った。

コウがモビルスーツに乗れない真の理由を、そしてモラレスが自分達に嘘を吐いていた事を。

全身を覆う無感覚の殻の上から僅かに感じるひんやりとした冷氣、コウがそれに気がついた時意識は急速に現実へと復帰した。

冷氣の正体が自分の額と脇の下に挟まれたアイスパックによる物だと分かった時に、コウの眼は世界を覚えた。大きく見開かれた眼の中に映るセシルの顔、心配そうな表情で額のアイスパックを取り上げながらコウに尋ねた。

「気分はどう、ウラキさん？」

「あれからどうになりました？」

尋ねるセシルに向かって言った言葉がそれだった。セシルはコウの問い掛けを聞いて、につこりと微笑みながら答えた。

「大丈夫よ、あれから直ぐ他の人が来てパワーローダーを動かしたわ。瓦礫をどけて大勢の人が助かった」

「…… 駄目だったんですね。」

セシルの顔に焦点を合わせながらぼつりと呟くコウ。思わず表情を曇らせてしまったセシルの顔を、その表情を裏付ける心境を気遣う様にコウは言葉を続けた。

「あのパワーローダーではせいぜい五百キロの荷物を捕まえるのが精一杯だった。あそこで崩れかけている瓦礫を立て直す事なんて、とても、」

「それが分かっている何故ウラキさんは乗り込もうとしたの？」

言葉を紡ぐコウの表情に危うい物を感じたセシルが尋ねた。

コウの心の深奥にある物、それはモラレスが言っていた『無自覚の自殺志願』に間違いない。だがその一瞬コウの表情に浮かんだ物は明らかに無自覚であった物が『自覚』へと姿を変えた事をセシルに教えた。コウに向かって問い掛けた言葉にはセシルの押し殺した怒りが混じっている。

コウは心まで貫くセシルの視線から逃れて頭上に張られた天幕を見上げた。コウが気を失っている間に到着した消防隊は既に館内に突入し、被災者を次々に救出している。予想以上の被害の甚大さに火急かつ速やかな事態の收拾が不可能だと判断したサリナスの消防隊はショッピングセンターに隣接する駐車場の一角を借りて仮設の救護施設を展開し、救命措置の必要があると判断された被災者を一時的に処置する段取りを組んでいた。

セシルの機転によりその一角を間借りしてコウが治療を受ける事が出来たのは、たまたまそこに居合わせた医師の手が空いていたからに過ぎない。だが口元を血で汚して意識を失った男が担架で運び込まれたら誰だって被災者と見間違えるだろう。実際コウの姿を一見した医師はすぐさま容体を確認して、それが存外軽傷だと判明するとセシルにアイスパックを手渡してそのまま天幕を後にした。未だに野戦病院の残り香が漂うその天幕の下で答えを躊躇うコウに向かって、セシルが言った。

「『己が生命を愛する者は、此れを失い、此の世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。』……ウラキさんは以前、私に言いましたよね？ 貴方はその言葉の意味を知りたいとも。」

コウの眼がピクリと動いてセシルの顔に焦点を当てた。穏やかではあるが凜とした鷲色の瞳がコウの眼に降り注がれる。コウの瞳を捉えて離さないセシルの眼はそこから何かを語りかける様に訴える。

「……それは貴方が命を引き換えにしなければ、知る事ができない物なのですか？」

静かな声であるが故に胸に迫る迫力がある、セシルの言葉を耳にしたコウが静かに目を閉じて一つ溜息を吐いた。

「……それを知る価値が今の俺にあるんでしょうか？ 時々分からなくなる。もしかしたら一生このまま、その意味の欠片も掴めずに終わってしまうんじゃないか、ならばいつその事分らないまま。。。」

「ふっん。」

セシルのその言い方は、間が抜けている様で実は厳しい。まるでコウの過去を蔑んだ様な相槌にコウの表情は硬くなる。セシルは一瞬沈黙を守った後に、満を持した様にその言葉を口にした。

「分かる訳がない、『己が命を愛する者に』。」

それは明らかにセシルの、コウに対する非難だった。コウの体がピクリと動いて、そのまま凍り付いた様に動かなくなる。

「その意味に私言及する事は止めておきます。それはウラキさん自身が見つけた物、ウラキさん自身が探し出さなければ意味がない。でも今の貴方は自分の事しか見ていない、貴方の周りで貴方の事を見ている、思っている、慮っている大勢の人の事を知ろうともしない。そんな自己愛エゴイストに神の言葉を理解できる筈がない…… 違いますか？」

コウがゆっくりと上体を起こした。セシルの言葉に瞳を沈ませながら膝の上に置いた両手に視線を落とす。溢れだす感情を必死で抑え込む意思が掌を小刻みに震わせて、そこに設えられたままの何某かの後悔と誓いをセシルに示す。

彼の掌に刻まれた物が無数の皺以外に何かあるのか等、セシルに分かる訳がない。だがもしそこに何か重要な物が存在するのだとし

て、彼がそれを求める事こそが彼を世界に帰還させる唯一の糸口である事をセシルは知っている。人としての輪郭を失ったコウ・ウラキという人間に影を付ける為の、たった一つの手掛かり。

「お、何だ人違いだったか。」

セシルの背後から流れて来たその声に、思わず二人が振り返った。年の頃は四十に届くかどうか、しかし精悍な顔つきといかにも鍛えられた肉体を服の下に隠した男が笑顔を浮かべながらコウの顔を覗き込んだ。

「失礼しました。私はサリナス消防隊指令、リチャード・ハイデッカーと申します。部下からここに男女が運び込まれたと聞きまして、つきり私の知り合いかと。」

「お知り合い、ですか？」

未だに虚ろの境界を彷徨っているコウに代わってセシルが尋ねた。問われたハイデッカーは少し笑顔を収めて、若干深刻そうな影を表情に浮かべて事情を説明した。

「いえ、知り合いと言っても被災地で偶然知り合った若者なんです。が、年の割になかなかしつかりした連中で。二人だけでパニックを收拾した後に、行方不明の子供を捜しに行ったままそれつきりなんですよ。部下にも指示して全館を捜索させているのですが、被災規模が大きすぎてまだ見つからない。」

「まあ、そんな事が。それは心配ですね。」

相槌を打つセシルに向かって、額面通りの不安げな顔を向けるハイデッカー。

「ええ、二人とも軍人とは言え災害現場に慣れていない、下手に危険な場所にも踏み込んだりしたらレスキューでも助けられるかどうか。低層階から地下にかけてはこれから捜索しようかと。」

「軍人？」

コウが初めて口を開いた。その声にセシルが気付いた時にはコウの眼の虚ろが消えていた。焦点を合わせてハイデッカーの顔を見上げるコウに向かって、強い意志を取り戻した目に晒されたハイデッ

カーが言った。

「え、ええ。二人ともオークリー基地所属のモビルスーツ乗りだと言っていました。女性の方は知りませんが男性の方は銀髪で、瞳の色が違っていたなあ。なかなかの美男子でした」

説明を続けるハイデッカーの台詞をじつと聞き入るセシルとコウ。その時、そのハイデッカーの言葉に割り込む様に天幕の外で言い争う声が聞こえた。

「 だから、そんな事はあり得ないんですよ、お巡りさん。」

ここの警備システムは殆どAI任せになっていて、何かあったら全部やつらの判断で自動的に対処するプログラムになっているんです。警備室から警備員の声が聞こえたって、そんな事ある訳ないでしょう？ だってそこには誰もいないんだから。」

「！ ちょ、ちよつと待ってくれ、今の話は本当か？」

会話を小耳に挟んだハイデッカーの血相が変わって、二人に向けた説明を止めてその男の所へと向かった。新たな尋問者の襲来に警備会社の制服を纏った小太りの男は、手にしたタオルで汗を拭きながら どうやら騒ぎを聞きつけて押っ取り刀で駆け付けたらしい 新たな抗議を直訴するハイデッカーに視線を向けた。

「俺は実際に現場でその声を聞いたんだぞ？ あの警備員のヘマのお陰で全館がパニックに陥ったんだ。まさかあんた、この期に及んで罪逃れに嘘を言ってるんじゃないだろうな？」

凄むハイデッカーの表情には明らかな怒りが滲み出ている。被災地での秩序を守る為の役割を担った物の致命的な不手際を同じ世界に生きるハイデッカーが看過する訳にはいかない。睨みを利かせるハイデッカーの表情に一瞬怯みながらも、しかし自分に非がない事を証明する為とその警備員は口角泡を飛ばして言い絶った。

「嘘じゃない、第一俺だってここのAIからの接続がオンラインタイムアウトになったから点検しろって本社に言われて来たんだ。五十キロも離れた現場から車を飛ばして来てみりゃこんな有様で拳句の果てに犯人扱いされて、いくらなんでもあんまりだ、冗談じゃない。」

警備員の真剣な表情に嘘がない事を止むを得ず看過したハイデッカーが困惑の表情を浮かべた。押し黙って何度も状況を反芻しながらそこから類推される可能性を模索する。だがハイデッカーに与えられた束の間の熟考の時間はその思考迷路で描かれた本の扉を納める衣擦れの音で幕を閉じた。

視線を上げた先でコウが簡易ベッドから足を下ろしてブーツに足を通している。

「ウラキさん、何を？」

「俺が捜しに行きます。セシルさんはここで待っていて下さい。」  
不安げな表情で尋ねるセシルにそう言いながら前屈みになってブーツの紐を結び始めるコウ。コウの起こしたアクションを見止めたハイデッカーが慌てて制止の声をかけた。

「待ちたまえ、この現場は完全な被災地だ。一般人が立ち入る事は大変に危険だ、第一君はここに体調不良で運び込まれた患者ではなかったのかね？」

「もう大丈夫です、この通り、」

そう言うコウはすつくと立ち上がってハイデッカーの方を振り返った。

「歩けます。」

「そういう事を言ってるんじゃない、一般人は立ち入り禁止だと言っているんだ。捜索はレスキューに任せて君は大人しくここで休んでいてくれ給え。」

「自分は、コウ・ウラキ予備役伍長。彼らの仲間です。」

…… 軍の権限はご存知ですよね？」

強い口調で言い放つコウの顔を疑わしげな表情で眺めたハイデッカーが、今度はセシルの顔を見た。確認を求める彼の視線にセシルは無言で頷いて肯定の意思表示をする。

いかなる場合においても軍の権限は全てに優先して尊重されなければならぬ、卑怯とも言えるその命令に『元軍人』であるハイデッカーが従わない理由はなかった。口を閉ざしたまま忌々しげにコ



ウの顔を睨みつけるハイデッカーを他所に、コウはじつとシヨツピングセンターの入り口を凝視した。

「キースの部下なら俺にとつても無関係じゃ居られない。……必ず二人を連れてここに戻ってきます。セシルさんはそれまで、申し訳ないですが医者に声を掛けて置いて下さい。万が一重症でもここである程度処置が出来れば、基地に連れ帰ってドクに任せれば何とかなる。」

コウはそう言うと再び両の掌に視線を落として見つめた。震えは止まっている、身体の変調の治まりを確認したコウは拳で何かを握りしめる様に固めて天幕の出口へと歩き始めた。

何の躊躇いも無く足を踏み入れたコウに気圧されるラース1の部下は自分達の行いやラース1の真意を計りかねるといふ不安も相まって、あつという間にラース1までの道を空けた。左右に分かれて、それでも尚不審な表情でコウの行方を見守る看守の間を歩くコウはラース1の直ぐ傍まで歩を進める。

自分の欲望の捌け口を予想もしない手段で阻止されたラース1はただ痴呆の様な表情でコウの顔を見つめている、コウの手がラース1に捉えられているマークスの体に手を回したかと思うと一気に持ち上げた。まるで重力を感じさせないその一挙動によってコウの肩に担ぎ上げられるマークスの体。ラース1の手から銀の髪がもぎ取られる。

「き、貴様つ、一体どういつつもりだ!? 何の権利があつて俺の邪魔をする!」

語気を荒げたラース1がコウに向かって吠え掛かる。だがその言い草は余りにも陳腐だ、冷静であり冷酷な人となりを標榜していたラース1と言う士官は影も形も消え失せて、まるで自分の玩具を取り上げられた子供の様な癩癩を起してコウの姿を睨みつける。だがそんな物にはお構い無しにラース1に背中を向けたコウは、通りすがりに足元に落ちてているゴミでも拾うかの如くアデリアを椅子ごと

持ち上げた。

成人を二人、いやアデリアを拘束した椅子は恐らく彼女の倍以上の重量があるだろう。だが何の気合も無く二人を確保したコウは驚きの視線を向けるラース1の部下の間を足早に歩いて、開きっぱなしになった隠し部屋の扉の奥へと姿を消した。

「しまった！ 武器をあそこに置いたままだつ！」

『タリホー』の叫びが周囲に致命的な失態を犯した事を知らせた。

まさかここに一般人が侵入して来る事など思いも寄らなかった彼らは、ラース1の変貌ぶりに慌てた拳銃に手持ちの武器を全て別室に置き去りにしていた。とは言ってもそこに置いてあるのは個人用装備のナイフと護身用拳銃が何丁か、唯一の非殺傷兵器であったライアットガンはさつきラース1が捕虜に向かって全弾を撃ち尽くして既に用済みになっていく。五対一と言う状況ならば何という事も無いのだが、それでも銃器を手にされる事は脅威だ。それなりの犠牲を覚悟しなくてはならない。

身構えて扉の向こうから現れる人影を待つ彼らの前に、再びコウが姿を現した。

「な、に？」

彼らの前に初めて姿を現した時と同じ様に、両手に何も持たずに室内へと歩みだすコウの様子をそれぞれが疑いの眼差しで凝視する。もしかして自分達に見えない様に、背後に獲物を隠しているのではないかと服の歪みや皺の一本に至るまで不自然な所はないかと観察する彼らの視線に答えてコウが次のアクションを起こした。後ろ手に扉をゆっくりと閉じて、鋭い視線を彼らに向けたまま言った。

「俺は民間人だ、君達に向かって振り上げる物など何もない。」

そう言うどドアの前に仁王立ちに立ちはだかつて、言葉を続けた。  
「一つ、ゲームをしよう。」

暗い部屋に運び込まれたアデリアは緊張から解き放たれたシヨックで意識を失いそうになる。隣に横たえられたマークスの微かな呼

吸音を耳にしながら、もう片方の耳でドア越しに聞こえるコウの声に耳を傾ける。

「君達が素手で僕を排除出来たなら、彼らの身柄を君達に引き渡そう。」

“！なんて事を言ってるの！？ 五対一で普通の人が勝てる訳ないじゃないっ！”

コウの提案の無謀さに意識が遠のく。せめてこの枷が全て外れたならすぐさま加勢して突破口を見出す事が出来るのに。

だがアデリアもラーズ1や他の連中と同様に、コウの振る舞いに呆気を取られてその提案を失念していた。忸怩たる思いを心に残したまま、自分達に訪れる運命の行く末を思い描いてさらに気が遠くなるアデリア。その耳に遠雷の様にコウの声が忍び込む。

「だが、もしも君達が俺を排除出来なければ、彼らの事は諦める。」

いいか、武器は無しだ。断わっておくが俺は一切の手出しをしない、それがこのゲームのルールだ。」

尚も提案される絶望的なルールに目の前が真っ暗になるアデリア。奇跡が遣わした救いの使者が実はただの自殺<sup>山師</sup>志願者であったという事実に一縷の望みを断ち切られる。

「やれっ！」

その声は激昂したラーズ1の物だった。余りのコウの迫力に怖じる彼らを背後で煽り立てる様にラーズ1の怒声が轟いた。

「何をしている貴様ら、折角作戦目標を手に入れて置きながらここで諦めてどうする！？ それも相手はたった一人だ、いいからやるんだっ！」

燃え上がる憎悪と執着が無形のオーラとなって彼らの背中を押し上げる、だがそれでもコウの全身から発する闘気 闘う意思が無いのに

に足を遮られて一歩も前に出る事が出来ない。

業を煮やしたラーズ1が壁に駆け寄って、拾い上げたナイフを無影灯の明かりに煌めかせながら自分の意思通りに動かなくなった彼らの背中に向かって脅し文句を投げかけた。

「どうしてもやれないと言つのなら、分かっているな。思い出せ、ここに来る前にお前達の仲間に俺が何をしたかという事を！」

コウと対峙する彼らの背中が記憶の恐怖でビクンと痙攣する、その仕草を見たコウが彼らから視線を外してラーズ1を、強烈な殺気の籠った目で睨みつける。

「そんな遣り方が、指揮官としての君のポリシーか。彼らの指揮官とは豪い違いだな、俺の知っている彼らの指揮官は少なくとも部下にそんな事を強要はしない。そんな遣り方でしか人を動かせない所に君の致命的な欠陥があるんだ。そんな事では何時か、どこかで命を落とす事になる。」

「上等だ、俺の事も分からずに知った様な事をぬかすな！俺はそれを手に入れる為ならどんな事でもするっ、悪魔と取引をしても構わない。この命と引き換えにしてもだっ！」

ラーズ1の慟哭を耳にしたコウの眼から殺気が消える。

その思い、その気持ち。自分がかつて経験した。

紛れもないあの宇宙、遠望の闇を湛えた光の海で輝くただ一人の仇敵を追い求めた、あの日に。

コウの眼に浮かんだ僅かな憐憫が切っ掛けになったのだろうか、全身を恐怖に震わせた彼の部下の一人が崩壊するオーラの間隙をついて、コウの顔面へと右ストレートを繰り出した。

鈍器で肉を叩く鈍い音がドア越しにアデリアの耳に聞こえる、その瞬間、ついにアデリアの意識は綱渡りを止めて眠りの深淵へと落ち込んだ。

陸軍の兵士がモビルスーツパイロットを敵視しているのには理由がある。自分達が多大な犠牲を払って勝ち得た戦果を、事によつてはたった一機で手に入れられる火力と機動力を保持している事が一点。その他に自分達が過酷な環境で作戦に従事しているその頭上を、涼しい顔で跨いでいくその姿に遣り切れないほどの妬みを感じるのだ。

「椅子に腰かけたままで人殺しをする」と言うやつかみ文句は嘗て陸軍の兵士が空軍の兵士に喧嘩を売る時に使われた常套文句、今はその対象がモビルスーツの兵士に禅譲されているに過ぎない。

だがモビルスーツを動かすという事は只ならぬ体力を必要とするという事を、当事者以外の者は知らない。絶え間なく全身を襲う振動に揺さぶられる脳、戦闘行動によつて発生するGはパイロットの体をまるで洗濯機に放り込んだかの様に蹂躪し、しかし彼らはその過酷な環境の中で常に考え、行動し、成果を上げねばならない。大昔に『パイロットの六割頭』と表現されていた戦闘行動中の思考能力は現在に至つては五割に届くかどうか、だがその有効領域を拡大する為に

敵よりそれが劣る事があれば、それは即ち自身の敗北に繋がる

彼らは日々過酷なトレーニングを続けて、どの軍の兵士よりも強靱な肉体を手に入れるのだ。モビルスーツパイロットの門戸が他の軍よりも異様に狭いと言うのは、それが根拠になっている。

コウに襲いかかる彼らとてその体力に自信が無い訳ではない、いや寧ろつい先日まで最前線でジオンの残党と血で血を洗う闘争を繰り広げてその悉くを生き延びて来たのだ。死に物狂いで勝ち得た生に裏打ちされる自分達の体力に、一片の疑いを持つ筈が無い。

束になつて襲いかかり、火の出るような連打を浴びせる。勿論五人同時にコウの体に攻撃を当てる事は出来ないが、それでも同時に複数以上の打撃や蹴りが彼の体を削っている事は間違いない。見る見るうちにコウの顔面は腫れ上がり、彼の纏つた着衣を乱れさせていく。

だが、彼らに出来る事はそれだけだった。両足を踏ん張つたまま仁王立ちで彼らの攻撃をすべて受け入れ、防御の欠片も起こさないコウの体は彼らの予想や未来に反して微動だに揺るがない。鈍い音が響いたかと思えばそれは仲間の腕の関節が挫かれた音であり、くぐもつた悲鳴が漏れたと思えばそれは仲間の体が悲鳴を上げて抗議を鳴らす吐息であつたり。彼らにそれだけの犠牲を要求しているに

も関わらず生贄になったコウ自身はアラモの砦の様に彼らの目標を守り続けている。

「な、何だこいつっ！ いったいどう言う体の作りをしていやがるっ?!？」

一人の男が吐き出した弱音は背後に控えるラーズ1に向けた弁解に似た物だったのかも知れない。だがその声を耳にした処でラーズ1のスタンスに変化が起る筈がない。無駄だと分かっていたいながらそれをアピールせずには居られなかった男が息を詰めてコウの腹目がけて拳を繰り出した。狙うは右のわき腹、当たれば悶絶必至の肝臓。だがドンという鈍い音の後に続いた物はやはり同じ結果だった。

腕を伝わる振動と関節に襲いかかる衝撃に顔を顰めた男が、思わずコウの顔を見る。乾坤一擲を極めたその一撃を間違はなく急所に食らった筈のコウは腫れ上がった目を少し開いて男の顔に焦点を合わせた。

「…… どうした、もう終わりか？」

口の中が切れて籠った声音ではあるが、そこには明らかに継続の意思がある。赤くうつ血した手の甲を擦りながらその男は、それ以上のコウに対する攻撃の無益さを思い知る。人体に点在する急所という急所を間違はなく自分達は叩き続けている、だがそれでも何の効果も得られないと言う現実の理由はただ一つ。それは彼らの攻撃の全てがこの男の鍛え抜かれた筋肉に阻まれて、ただ単純に急所にまで届かないという事を示している。

「怯むな、こいつもただの人間だ。根負けしたらおしまいだぞっ！？」

『タリホー』が男の情気を挫く様に声を上げ、脇をすり抜けてコウへと襲いかかる。繰り出す連撃は間違いなくコウの耐久力を削り取るだけの苛烈さと威力を持ち得ていた。腰の引けないその攻撃を受け止めたコウの体が僅かにぐら付く。

『タリホー』の覚悟は即ち、作戦を指揮する責任者の使命感に抛り所を得ている。作戦当初からラーズ1と行動を共にし、現在進行形

の不測イレギュラーの事態の遭遇するまでの間、彼はその傍らで手足となり続けた。ラーズ1がそれを望むのであれば自分は必ず成し遂げなければならぬという、いかにも模範的な軍人の思考が彼の行動原理として存在する。故にラーズ1の意図がそこに存在する限り『タリホー』が後に引く事は出来ない。

強い意志を込めた一撃がコウの意識を奪いそうになる、累積される打撲係数はいよいよコウの意識を蝕んで、屈強を誇る肉体は崩落間際の楼閣の様相を呈し始めていた。

崩れ落ちたコウの体を遠巻きに見つめる五人の男達、そこに横たわるコウの体が満身創痍であるのと同じ様に彼らの体もまた同じ代償を自らに刻んでいた。

自慢の体力は見る影もなく朽ち果てて、上がった息で肩を上下させながら満足げな表情で。しかし彼らはその景色を心の底から信じる事は出来ない、鋼鉄の意思と肉体を携えた男コウが、今また再び立ち上がって彼らの前に立ちはだかる姿を想像してその先へと踏み込む事を躊躇う。不可視のイメージに恐れ戦く彼らの背後から、ラーズ1の焦りに塗れた恫喝が響いた。

「何をしている、こいつはもう動けん！ お前達はさっさとあの二人をここに連れて来るんだ、まだ尋問は終わっていないっ！」

どのような状況に置いても必ず絶対の効果を示したラーズ1の脅し文句が、今の彼らにはもう通用しない。全ての体力と忍耐を使い果たして荒い呼吸を繰り返す彼らにはコウの体を跨いでその先に進む事も、彼らの目標である二人の人質を奪還する事さえも苦役に属するほどの難事業に感じる。自分の欲求が彼らの手で遂げられないと分かったラーズ1が、苛立つ様な足取りで彼らの前へと進み出て振り返った。

「お前達が出来ないと言うのなら、俺がやる！ この部屋に連れて来るまでもない、どこで尋問しようと同じ事」

男達の表情がラーズ1の言葉によって変化するのが分かる、だが

その一瞬に隠された違和感がラース1の視線と脳裏に警鐘を促した。彼らの視線が発言者たる自分に向いていない、その行方は自分の肩越しを通り過ぎて、今は背後となったドアの方向へと注視を注ぐ。唯一の、有り得べからざる可能性を閃いたラース1が思わず背後を振り返った。

「…… まだだ、まだ俺は立っているぞ。」

今まで足元に倒れ伏していた筈の男はいつの間にか息を吹き返して、音もなく気配もなくラース1の背後に立っている。形が変わった顔形に空いた口から洩れる継続の宣言と勢い良く延ばされた手が、ラース1の背中をドンと押しつけて指呼の距離を遠ざけた。

「…… ゲームはまだ終わってはいない、続けるんだ。続ける気が無いのならばここから立ち去れ、それがルールだと言っただろう？」

加えられた力以上にその言葉はラース1の足を大きく欲望から引き離れた。彼の求めを退け続けるただ一人の民間人の存在がこれ程までに重く押し掛かった事があつただろうか？

否、無い。今まで自分達が蹂躪して来た民間人はほんの一握りの例外を除いて、皆死の匂いに晒されて泣き喚き命を請うた。人が人である事を辞め、命と言う唯物を神の祭壇に捧げ続けて来た彼らだからこそ到達出来たその境地に民間人如きの立ち振る舞える余地など無い、筈だ。

だがこの男は違う。ラース1が心で囁く悪魔の祝詞に翻弄されながら、任務と言う建前だけで力無き民間人を容赦なく蹂躪して来た世界を真つ向から否定してこの場に立っている。どす黒くて粘り気のある粘液の様な欲情の渦を、まるで逆に掻き回して止めてしまう様な揺ぎ無い力がラース1の望みを遙か彼方に連れ去って行く、自分が誤って進めた歩数以上に。

そんな事が！ 断じて許してはならない。

認めてしまえば、それは俺の今までの、これから死に至るまでの全てを自身で否定する事になる。そんな事があつてたまるか！



振り向きざまに煌めく一陣の光がコウの顔面に降り注ぐ。空間を切り裂く孤弓が完全な間合いでコウの眼窩を捉える。放出された殺気と今までと明らかに違うラース1のその顔が、コウに危機を知らせて上半身を操った。水晶体のほんの数ミリの空間を掠めて過ぎ去るサバイバルナイフの切っ先を潰れかけた目の端で追いかける。

「止めて下さい、相手は民間人です！ 証拠が残る様な行為はまね

一連の行動を視界に収めてラース1の明白な意図を直感した『タリホー』が叫ぶ。だが既にラース1の心は次元の違う何かに乗っ取られて、最も忌まわしい物へと変貌を果たしていた。

気合い交じりに吐き出す吐息には憎悪が溢れ、光彩を埋め尽くした瞳孔は内出血を起こした様な赤に塗れて妄執を露わにする。振り出されたサバイバルナイフは彼の技量をそのままに具現化してコウとの間合いを自由自在に切り開く。その一閃一閃全てが致命の一撃である事を対峙し続けるコウと見守る彼の仲間には理解した。

「ラース1っ！」

無駄だと分かっているながら『タリホー』は禁忌を犯して彼のコールサインを叫ぶ。彼から与えられた自分の役割を全うしなければならぬ瞬間が刻々と近づいて来ている事を彼は実感する。

既に指揮官は正気を失っている、この作戦は失敗だ。全てが計算通りに動いていた完璧な時間割が最後の最後になって破たんしたのだ、ここに乱入して来た名も無き一人の民間人の手によって。

間合いの調整を終えつつあるラース1の刃が遂にコウの体に届いた。切っ先がコウの二の腕を切り裂いて血飛沫をまき散らす。浅手ではあるがその刻印が次の攻撃への確かな予兆を確信させる彼らの視線、そしてコウの視線と、

脳内麻薬。

あの不快な感覚と共に、また始まったとコウの意識が彼に眩く。全身に張り巡らせる神経がもぞもぞと、這い巡る虫の様に動き出す

気配。そして目の前にある全ての景色が絵画の様に色だけを残して速度を落とす。

目を射る刃の煌めきが妙に眩しい。それが自分の命を絶つ為に振り翳された悪意の容である事も忘れてしまうほど、鮮やかで、淫媚で、不快で。渾然とする心境が首筋にのめり込んで頭の芯を侵食する、目の奥に明滅する視神経の電源がショートした様に火花を放つてコウの視界を脅かす、それが刃の輝きなのか自分の感情の光なのかも分からなくなってしまふ程、大きく、激しく、あどけなく。

全身の筋肉群が一斉に駆動する、時間の限界を超えた開放は関節の靭帯を歪めて表面筋肉を裁断する。至る所で発生する内出血と付随する激痛は常人以上の速度でコウの脳へと状況を伝達、それが彼の脳を犯しつつある酵素反応に火をつけた。

燃え上がる焰の野火、殺意という名の快樂いざなみに誘いざなわれる安らぎの樂園。

再び。

弧月がコウの体を切り裂いたと思った瞬間に生まれた新たな未来と世界。ラース1の手に握られたサバイバルナイフの切っ先が目指した目的の場所へと到達していない事は、次の瞬間に起こった電光石火の一撃で彼らの意識に刻みこまれた。

その右手がいつの間そこにあったのかすら分からない、瞬きをしなくても捉える事が不可能なほど異質な右ストレートはラース1の顔面を三日月の様に歪めてめり込んだ。コウとほぼ同じ体格のラース1がまるで冗談の様に壁際まで吹き飛ばされる様子を、結末を予知出来なかったラース1の部下達は茫然と見守るしかない。

『タリホー』が自らの義務感から来る理性を総動員してその呪縛からいち早く自らを解き放つ。残像すら残らないコウの一瞬の体勢の変化を目に焼きつけながら、まるで雰囲気の変わった彼の姿を見て、戦慄した。

荒く吐き出される吐息には憎悪の影、潰れかけた両目に灯る殺意

の残滓、そして。

「ルール、いはん、だと！」

燃え上がる憤怒が彼の言葉を眩ませる。まるでラーズ1の心に巢食う闇の巻族がそのまま憑依して、真名を吐露する間際の悪魔の様なその姿。触れてはならない異形の気配は零れる言葉を途切れ途切れでしか人に聞かせる事が出来ない。その二律背反に苛立ち悶える、さつきまで人であった者は必死に言葉を紡ぎだす。

「い、けっ！ もう、こ、ここに…… いるん、じゃ、ないいつ。はやく。」

伸ばした右手で顔面を掻き毟る様に押さえつけるコウ。曝露される自分の素顔を光から隠す様に覆うその手が激しく振動して全身を揺さぶる。

立っている事さえ覚束ない半死人の様なコウの立ち振る舞いを目にして、だが『タリホー』はその姿に猛烈な恐怖を感じた。ラーズ1の物とは比較にならないほどおぞましく、そして内包された暗黒の帳が緞帳の影から深さを覗かせて、底なしの深さを提示する。

迷っている暇はない、この男は今、自分を突き動かす衝動を必死に抑え込んでいる最中なのだ。もしここで自分達が彼の勧めに応じず、ここに立ち止まる事を 作戦の続行を決意 選択 したとしたら、彼は間違いなく自分の意志に関係なくその衝動に飲み込まれるだろう。

彼の、理性の籠が跳ぶ前に。

「総員、指揮官殿を回収の後に退却っ！ 作戦は失敗した。急げっ！」

『タリホー』の強い口調が世界の時を動かした。凍り付いた様に動けなかった男達がその声を皮切りに足を床から剥ぎ取る、白目を晒したまま意識の無いラーズ1の身体を担いで一目散に出口へと向かう。

『タリホー』がどんでん返し of 出口を潜る瞬間に、ふとコウの方を振り返った。命拾いをした力無き民衆と同じ心境に駆られた彼は、

彼らを脅かし続けた者の正体を記憶に留めておこうとその顛末を見届ける。『タリホー』の向けた刹那の視線の中でコウは、震えながらその場に跪いて手を押しあてた顔面を床に叩きつけながら何度も何度も末魔の咆哮を繰り返す。

咎人が苛まれる罪の意識に耐えかねて、目に見えぬ何かに憐みを乞う様に。

撤収ルートはコースB、即ち駐車場からの脱出を諦めて被災者と同じルートを辿る事を示している。ラーズ1の意識が戻らない

恐らく当分は 以上現在の指揮権は『タリホー』が持っている。彼は作戦発動から経過した時間を考えて、既に消防が現状入りしている事を予想した。故に単独で最も被害現場に近い場所から脱出するよりも、被災者に紛れ込んで消防隊に救助された方がより安全だと考えたのだ。

実際こちらにはラーズ1と言う怪我人がいる、彼を救護隊に預けて治療してもらえればそれだけでアリバイは成立する。身元を確認されたところで旅団の偽装工作に疑いを持つ者など軍関係者にもいないだろう、偶然その場に居合わせた観光客として処理されるのが当然の成り行きだ。

アデリアとマークスを拉致した廊下を駆け抜けて一気にゲートへと向かう。そこを潜って非常階段に到達すれば後は演技力の勝負になる。いかにも地下で被災した風を装って消防隊に助けを求めればそれで脱出路は確保されたも同然、自分達は何の苦も無くこの地を後にして、原隊へと帰隊すればいい。

『タリホー』の思考がそこまで未来予測を立てた時、不意に先頭の足が緩んだ。ラーズ1の目が覚めたのかと一瞬恐怖に駆られた『タリホー』が状況を確認する。

「どうした？ なぜ足を

それはラーズ1が目を覚ましたからではなかった、そして自分を立てた未来予測を覆す様な途轍もない障害が立ちはだかった為でも

ない。

なぜこの場所にそんな存在が許されるのか？ 『タリホー』の差し向けた視線の先にぼつんと佇む一人の女性。非常灯の明かりに紛れて浮かび上がる翠色の髪と、秀麗な顔立ち、そして。

「ここに民間人の男性が来た筈です、どこですか？」

全く何の疑いも無くそう断定する女性の顔と声には研ぎ澄まされた怜悯な刃が見え隠れする。通路の真ん中に立って言い放つセシルに向かつて、先頭の男が答えた。

「何の話だ？ 俺達はここからやっと逃げ出した所なのにそんな事まで分かる訳が」

「坊やには聞いてない。」

口調と声音が変わる。射すくめる様に睨んだ眼が彼らを掻き分けて、真つ直ぐに最後尾に控える『タリホー』を捉えた。

「お前が、指揮官か？ 言え、ここに来た民間人をどこに遣った？」

それは軍に属する者ならば誰にでも分かる、指揮官特有の口調だった。しかし何よりも『タリホー』が恐れたのは、その女性が持つ独特の雰囲気だった。

まるで今まで被っていた兎の毛皮を剥いてみると、中から虎が飛び出してきた様な整合性の無い矛盾が『タリホー』に服従を強制する。必死の思いで植えつけられ後天的な本能に抗って復唱を拒む『タリホー』の表情を射抜いたセシルが、獣の唸り声を思わせる低い声で言った。

「お前達の背後に、いるんだな。」

言うなりセシルの足が前に出た。背後から湧き出る強烈なプレッシャーに怖じて後ずさりする男達を、歩を進めながらセシルが命じた。

「どけ。」

見えざる手が彼らの身体を一齐に押し退ける。壁際に張り付いて動けないまま、彼らの間をゆっくりと歩き過ぎるセシルの横顔をま

んじりともせず、ただ眺めて見送る男達。セシルもそんな男達には一瞥もくれずに堂々と通り過ぎてゆく。

まるで無様な戴冠式の光景が繰り広げられた廊下を、対岸に抜けたセシルが背を向けたまま、彼らに言った。

「もし、彼の身に何かがあったとしたら、お前達は二度と私の前に出てこない方がいい。」

細くて長い首だけがぐるりと動いて、セシルの顔が彼らに向けられた。茫然とその光景だけに心を奪われていた彼らの意識に氷の楔を打ち込むセシルの視線、絶対的な死を覚悟させる恐怖に鷲掴みにされた心臓が一斉に高鳴りを見せた後に、止まりそうになる。

間違いない、この顔は、百戦錬磨の戦士の顔、だ。

「……この世に生きている事を、後悔させてやる。」

壁に空いた僅かな隙間から洩れる白い光がセシルの目を打つ。そっと歩み寄ったセシルがゆつくりと手を掛けると、その隠し扉はいつも簡単に回転してセシルの視線を中へと誘った。あまりの照度の差に眩む目を凝らして覗きこんだその先に蹲る人影、着衣の乱れや顔の形が変わっていても見間違える事の無い男ががそこにいた。大きく息継ぎを繰り返しながらうつ向きになって震えるコウに向かつてゆつくりと歩を進めるセシル。

傍らにしゃがみこんで肩に手を掛けたセシルの掌の温かさに反応したコウが、腫れ上がった顔を上げて潰れかけた目を向けた。コウをそんな人相にしてしまった彼らに対して怒りを覚えるよりも、そういう手段でしか自分の望みを叶えられなかった不器用なコウの選択を微かに笑う。

「……まさか、無抵抗とは。手酷く遣られましたね。」  
呆れた口調でコウの行いを評価しながら、腫れた部分を優しくなぞる。人は何らかの危機に瀕した時先ず反射的に頭を守る様に行動生理学上出来ている。それは恐らく遺伝子に刻みこまれた防衛本能から由来している物なのだが、コウの顔に刻まれた打撲跡を見ただけでセシルはコウの強靱な意志の力が本能を封じ込めたのだと悟った。でなければここまで顔形が変わる事などあり得ない。

セシルの洞察が凶星である事を証明する様にコウの顔が歪んだ。多分笑ったのだろうが顔中の筋肉がうまく連動していない、セシルが触れた部分の感覚が戻ってきてそこに痛みを覚えたコウはやはり顔を似た様に歪める。

「彼らは？」

「慌ててここを出て行きました。彼らが担いでいた人は意識がありませんでしたけど。」

「どうやら完全に無抵抗という訳にはいかなかったらしいと、セシ

ルは壁際に落ちているナイフの煌めきに視線を向けた。その記憶を思い浮かべたコウがふっとセシルの顔から視線を逸らす。

自分の意思とは関係なく、抑えがたい欲望を伴って発動する殺意の影をコウは憶えている。その力が齎す結果を知りながら、恐怖しながらそれでもまた委ねてしまう自分の闇に猛烈な嫌悪を感じる。

怯えた自分の顔を誰にも見られない様に背向けた先にある隣室へのドア、コウはそのまま痛む体を推して立ち上がった。

「ウラキさん？」

不意に立ち上がったコウの気配を感じてセシルが振り向く、よるめく足を引きずってドアへと向かうコウの背中を見て、セシルがすかさず肩を貸そうと。

「いえ、大丈夫です。それより隣の部屋に二人がいます。彼らを見てあげて下さい。」

静かにセシルの援助を拒むコウの目がセシルの視線をそこに誘導する。コウの言葉に従って先に隣室へと立ち入るセシル、コウが遅れて入った時には既にセシルの手はマークスの首筋に当てられていた。脈を見ている。

「どうやら安定しているから命には別状が無いみたい、傷の程度は派手だけど。女の子の方は気を失ってるだけね。」

手慣れた様子で前髪の奥を止めていたヘアピンを抜き出してアデアの手錠の鍵を解くセシル。指先をほんの少し抉っただけで弾ける様に外れる手錠を見て、コウはセシルを不思議そうに眺めた。

ヘンケンの良き妻君でありながら時折見せる小技の数々は、彼女の素性を普通の女性だとコウに特定させる事が出来ない。勿論ヘンケンの告白から彼女が以前戦闘艦の上位職に就いていた事は窺い知る事が出来るのだが、それにしても軍隊に属していただけの人間が手に入れる事の出来る技術の範疇を、彼女の実力と知識は凌駕している様に思う。

道を間違ったとしても彼女ならその一流に到達するだろうと思いつながらじつと様子を眺めるコウの視線に気づいたセシルが、いかに



もと言った顔で笑って言った。

「これくらい、女性の嗜みですよ？」

不遜なジョークではぐらかしたセシルがアテリアの手足の枷を床に転がした。あまりの堂々とした嘘に思わず変わった笑いを浮かべるコウ、その表情の変わらぬ内にセシルが尋ねた。

「さて、これからどうしましょう？ このまま彼らの後を追って出て行っても呉越同舟になりかねないし、わざわざ彼らに再びチャンスを与えてやる事は無い。足取りを掴まれない為にも別のルートで抜け出した方がいいですね。」

「それに、彼らに帰隊コースを知られない方がいい、待ち伏せに合う可能性がある。」

深刻な声で呟いたコウの発言を耳にしたセシルがコウに尋ねた。

「ウラキさんも、やはり気がつきましたか…… 貴方の思う通り、彼らは軍人。それも宇宙から降りて来てまだ間もない。」

コウは彼らの会話から、セシルは彼らの足運びから。戦闘艦に長く乗り続けると磁力靴で歩く癖が足につく。第一種戦闘配備以外の時間はソールを床から離さない様にする時間が多くなる為自然とべた足になってしまふのだ。セシルは彼らと対峙したほんの僅かな時間の中にその事を見抜いていた。

「…… ジオンやデラーズの残党ならばこの辺の地形にはあまり詳しくない筈、でも彼らがオークリーの基地の人間である事が知られている以上、その目的地までのコースは限られている。規模は分かりませんがそのルート全てに網を張られていたら、撒くどころの騒ぎじゃない。」

コウの言葉を受けて無言で足元を見つめるセシル。ヘンケンならばこの瞬間、セシルの頭の中がどういう風になっているのかを言い当てる事が出来るだろう。猛烈な速度で頭の引き出しにある情報を分析して最も成功率の高い作戦を導き出すのが、コウの知らない『セシル・クロトワ』に常に課せられた任務なのだ。生体電算機が弾き出す答えの演算を完了したセシルが、視線をコウに向けて確認し

た。

「基地に向かわなければ、いいのですね？」

「え、ええ。」

「じゃあウラキさんの家へ。」

上目遣いに素っ気なく答えるセシルの言葉にコウは若干泡を食って理由を尋ねた。

「そ、そんな。彼らはオークリー基地の人間、僕は彼らと接触する事を禁じられている。それなのに彼らを匿うなんて」

「理由は貴方の家がどこにも登録されていないからです。私の家も考えましたが万が一の事を考慮するならウラキさんの家が一番適している、例え衛星を使っても貴方の家に表示されるデータは、」

にっこりと笑ってセシルが言う、こういう時の彼女は酷くおっかないと以前ヘンケンから聞いた事がある。

「唯の農機具の倉庫ですから。人の住んでいない場所なら彼らにマークされる筈が無い。」

セシルの提案には一分の疑問を挟む余地も無い。基地を後にしてからの足取りを誰にも知られない為にヘンケンからその倉庫を借りて転がり込んだ事が、隠れ家として絶好の条件を満たしているのは皮肉な話だ。セシルの無邪気な笑顔に毒された雰囲気、コウは一つ溜息をついて提案に同意した。

「……分かりました、じゃあ俺の家に匿いましょう。基地への連絡は？」

「ヘンケンに任せます。組合長から基地への電話ならば傍受されても唯の儲け話としか思わないでしょう、基地の誰かを家まで呼び出した上でウラキさんの家まで案内させます。最も携帯の電波は変調<sup>スクラ</sup>周波が掛っているのでそう簡単には傍受出来ないでしょうけど。」

考え得る限りに於いて完璧なセシルの作戦に目を丸くするコウ、好奇に満ちた視線を向けるコウに向かってセシルは更なる提案をした。

「さあ、急ぎますよ。ぐずぐずしているとここにも搜索隊が乗り込ん

で来る、私が彼らだったらここにもまだ被災者がいると消防隊に報告して、私達の身柄を彼らに預けてマークを外さない筈。そうなる前に逃げ出さないよ。」

それは暗にコウに二人を運べと言っているのと同じだった。最もセシルの体ではアデリア一人を背負うのでも重労働だろう、コウは痛む体を推して再び二人の身体を両肩に担ぎ上げて立ち上がった。累積する打撲で震える足を踏みしめてセシルに尋ねようとするコウ、だが既にセシルはコウの視線の傍には影も残さず出口へと歩き出していた。

「セシルさん？ 何処へ」

「この駐車場を抜けた先に地下街に抜ける作業員通路がある筈です、そこを使って地下街を通って私の車の置いてある駐車場へ向かいましょう。サリナス市街を抜けてしまえば、こっちの物です。」

振り返りながら答えるセシル、コウの表情に浮かんだ？なぜそんな事まで知っているのか」と言う素朴な疑問符。セシルがコウの問いに再びあの笑顔で答えた。

「非常口は予め確認しておけ、とご両親に習いませんでした？」

明かりを消した室内に静かな夜の帳と柔らかな月明かりが差し込んでコウの横顔を映し出す。腫れを引かせる為にアイスパックを押し当てたコウの傍で静かな寝息を立てるアデリアとマークス。

コウの寝台は二人が眠るにはあまりにも小さく、止むを得ずバイクを収めてある隣の車庫から引つ張り出した古い脚立に板を並べてその上にマークスを寝かせてある。怪我人には全く持って申し訳ないと思わなくもないのだが、これもレディファーストが世の習いだと自分に言い聞かせて意識の無いマークスに受け入れさせる。

セシルが立ち去った後の小さな窓から見える周囲の景色に目を凝らすコウ、だだっ広い農地のだ真ん中に立つこの小屋に身を隠して接近する事はこの満月では困難だろう。しかも周囲の畑は全て収穫を終えて空き畑と化している、青白く浮かび上がった地面に残る麦

の根まで見えるこの景色を誰にも見咎められずに歩く事など不可能に近い。

所々に出来る影をぼんやりと眺めながらコウはあれからの出来事を思い返す。真つ暗な駐車場をまるで夜目の利く動物の様に、迷う事も無く真つ直ぐに作業員用の出入り口へと辿り着いたセシルが扉を開ける。

非常用では無い電力によつて供給された明かりの輝きがコウの目を束の間眩ませ、取り戻した時にはそこが無人の地下街である事を知った。退避マニュアルに記載された通りの避難手順によつて人払いを受けた地下街を颯爽と歩き去るセシルと後に続くコウの姿は駐車場に辿り着くまで誰にも見咎められる事は無かった。

そこまで予測してこの退避コースを選んだのだとしたら、やはり自分の前に行く秀麗な面の女性の能力を改めて評価せざるを得ない。ヘンケンの細君としての能力の優秀さの留まらず、それはまるで艦隊指揮を補佐する参謀長のそれに匹敵するんじゃないか、とコウは思う。

更に付け加えるならマークスの手当てをしたのもセシルだった。血だらけの夏服を袂で切り開き、胴体に穿たれた四か所の傷を熟練の医師の様な風情で値踏みした彼女はすぐさま治療に取り掛かった。見た目の派手さと出血ほど傷口は深くないと言つのはサリナスでの見立てと同じで、しかしセシルはマークスが失神した理由がスタングンの過剰な攻撃による物だと見守るコウに説明した。恐らく瞬間にして300万ボルトの電圧を食らった心臓は危うく止まるところだったかも知れない、と。

だがセシルにしてみればそれくらいの事で失神するなんて、と思つたらしくぼつりと？ …… 最近の若い子つて”と言う眩きを洩らしたのをコウの耳は聞き逃さなかつた。

身体の中に潜り込んだラバーを無理やり引き剥がして 当然マークスはあまりの痛みに絶叫したが 褥瘡痕じょくそうこんの様な傷口に無菌パッチを張り付けた後に抗生剤を飲ませる。目を覚ました二

人が状況を把握できずに一時的なパニックで錯乱状態に陥ったが、今はスプレーで打ち込んだ鎮静剤がよく効いて眠りに落ちている。目が覚めた時にはすっかり元通りの二人に戻っているだろう、傷口の手当の為に巻かれた包帯以外は。

明かり取りの天窓から差し込む蒼光が粗末な机の上に差しこむ。上に置かれた透明な瓶の中身が光を乱反射させて梁だらけの天井にモザイクを刻む。ヘンケンに頼まれたテキーラはその半分を消毒の為に使われてそこに置き去られている、コウはあまりにも印象的で過酷だった今日という休日。それはこの二人にとっても同じだろう。を忘れようとボトルの首に手を伸ばす。

グラスが手元に無い事で一瞬その首を掴む事を躊躇したが、どうせ今晩で飲み干してしまうだろう、それほどまでに今日一日に起こった出来事を心の中から閉め出してしまいたい。静かにボトルを掴んで手元に引き寄せる、乱反射のモザイクが歪んで揺れた。

突き付けられた現実はやはり基地を離れた時から何も変わってはいない。自分の身体はモビルスーツに類する機械を動かす事が出来ない身体になっている事を、自分の身を持って確認した。

ヘンケンやセシルに？機械を使わずに麦を作る”事を信じられない事だと言われたが、使わないんじゃない。あの時は怖くて使えなかったのだ。

最近になってようやくバイクや車に関しては発作を起こす事無く動かせる事が分かって来たが、思わず手を掛けたパワーローダーにすら発作を起こす様ではこの先永遠にあの類の機械を操縦する事は出来ないだろう。心の中で絶望しながら、それでも尚時間の概念に微かな望みを繋いでいたコウの願いが今日という日に無残にも打ち砕かれた記念日でもある、一晩くらい酔いつぶれても罰は当たらない。

だが、コウの手元に残った物はそれだけではなかった。手繰り寄せたボトルを右手に置いて、空いた左の掌をじっと眺める。その目に浮かぶ色にはサリナスの救護所で見せた深刻な瞑さが影を潜めて

穏やかなたゆたいたすら覗かせている。

小さく息を吐いてスクリュー栓に手を掛ける。捻った瞬間に起こるガラスと金属の摩擦音と、朽ちて傾いだドアを小さく叩く音が同調してコウの耳に届いた。

「夜分に失礼します、オークリー基地の者ですが。」

遠慮がちに名乗るその声は明かりの無いコウの部屋に神秘的に忍び込んで来る、コウは乾杯の機会を後回しにされた事を知り、テキーラの瓶を再び元に戻してゆっくりと立ち上がった。アテリアの枕元で不思議そうに身体を起こして見つめるエボニーに笑いかけながら出入り口へと向かう。

「こちらこそ呼び立てして申し訳ありません。本来ならばお伺いしなくてはならないとも思ったのですが」

相手の声は女性だった、様に思う。コウはオークリーから誰が来たのかと考えた。

基地の女性の数はそう多くない、声からしてモウラでは無い事は確かだ。後は妙に人懐っこい整備班の少女と、ドクの所にいた看護婦か。いずれにしても自分の過去を知っている人物では無さそうだ。

基地を離れてから二年余りで主要な兵員 何らかの事情で  
オークリーに軟禁状態にある訳ありの兵隊 以外の異動は滞り無く勧められている筈だしそうなれば必然、自分がオークリーにいた事すら知る者は少なくなっているだろう。

「事情があつて、自分はオークリーに」  
そう言いながら立てつけの悪いドアを思いつきり内側に開いて外界と自分の視界を繋げる。月明かりの下でぼつんと入口に立つ人影、その眩い髪の色を目にした瞬間にコウの全てが凍り付いた。

両肩で纏められた髪、青白い光を輪にして映すブロンド。小さく息を呑む声と見開かれた、忘れた事の無い蒼い瞳。

「……コウ。」

二ナの口から零れた自分の名前がまるで別人を呼ぶ声の様にコウには聞こえた。口をあけたまま呆然と立ち尽くしたままの二人の時

間を再び呼び覚ましたのは、背後でコウの背中を見送っていたエボ  
二一の泣き声だった。

ストン、と音も無く朽ちかけた床板に降り立った黒猫はまるで突  
然の来客を歓迎するかの様に二人の間に割り込んで、二ナの足に身  
体を摺り寄せた。感触に足元へと視線を下した二ナを見上げた金色  
の瞳が月の光で温かい色彩を浮かべる。

「何故、君が。」

拾い集めた言葉を紡いでもそれだけ言うのがやっとだった。エボ  
二一の助けを借りても尚衝撃から立ち直れないコウに向かって二ナ  
は言った。

「キースとモウラはアラート勤務、整備班は新しく来た予備機の整  
備に掛りつきりなの。私が一番手が空いているから、ここに。」

「そ、そうか。」

「それより、二人は？」

切迫した二ナの声でやっと現実を取り戻すコウの意識、二ナの  
前から身体をどけて無言で入室を促す。その仕草は基地にいた頃と  
変わっていない事を心の底で思い出しながら質素な室内へと歩を進  
める二ナ。

明かりを消したままの暗い室内の反対側、窓際に静かに寝息を立  
てるアデリアとマークスの姿を見て微かに緊張する二ナ、コウが二  
ナの背後で言った。

「彼の方の傷は見た目が派手なだけで命には別状ない、彼女は今眠  
っているだけだ。パニックを起こしたんで鎮静剤を打ってもらって  
眠らせてある。」

二ナの緊張を解き解す様に出来るだけ静かな声音で背中に語り掛  
ける、コウの言葉を受けたその背中から力が抜けて、肩の位置が微  
かに下がったのが分かった。吐息交じりに二ナが呟く。

「……よかった、臨時ニュースでショッピングセンターの火災  
事故が流れてからアデリアの携帯に電話したんだけどずっと通話中  
で繋がらなくて。まさか二人が巻き込まれてたなんて考えもしなか

「つたわ。てつきり暢気な顔で帰って来るもんだとばかり。」

薄闇を通して二人の怪我の具合を知ろうとする二ナの視力の助けに、コウは頭上からぶら下がる裸電球のスイッチを捻った。フィラメントが白熱して黄色く焼ける色がガラス越しに室内を照らす。最近では見かけなくなつたその穏やかな明かりの中で二ナは、コウの方を振り返つて愕然とした。

「コウっ！ どうしたのその傷！？」

「えっ……？」

血相が変わつて睨み付ける様に見上げる二ナの顔に思わずたじろいで、しかし次の瞬間自分の仕出かした迂闊さに後悔する。

匿つた二人の所在を基地に知らせる事を優先するあまり、自分の手当てを後回しにした事が裏目に出た。だが心の底に滲んだ苦汁を表情に浮き上がらせる前に、懐かしささえ覚える二ナの強い口調がコウを捉えた。

「薬箱はどこっ！？ それぐらい持つてるでしょう！？」

コウの答えを待たずに左右を見回してそれらしき場所を探し求める二ナ、眼下で打ち振るわれる金の髪が懐かしい香りをコウの鼻孔に運び込む。

過去の記憶に囚われそうになつたコウが慌てて我に帰つた時には二ナの姿はそこには無い。流しの上に作り付けられた水屋に向かつてすたすたと歩み寄つて、背伸びをしながら観音開きの戸を開く。組合から支給された薬箱を両手で引つ張り出した二ナが中身を確認して、再びコウの元へと舞い戻つて来た。

「そこに座つて、早くっ！」

薬箱をテーブルの上で開いた二ナがコウに向かって命令する、啞然とそれを聞いたコウは言われるがままに椅子に腰かけた。すかさず二ナがコウの顔に屈み込んでじつと傷の状態を観察する。

「ひどい…… あちこち切れてるじゃない。何で早く手当てしなかつたのよ。」

呟く様な二ナの声がコウの顔に降り注ぐ、二ナの蒼い瞳に自分の



顔が映り込んで見えるのが見える、コウは小さく瞬きしてそれから眼を逸らそうとした。

「駄目よっ、動かないでっ。」

無意識に起こるコウの回避行動を言葉で制した二ナが、動けなくなったコウの傷に細い指先を這わせる。伝わる温もりと同時に起こる疼痛がコウの表情を曇らせて、それでもそこに二度と得る事の無かった繋がりを感ずる。じっと二ナの顔を見上げるコウの視線を余所に、二ナは傍らの薬箱を掻き回しながら医療用接着剤のチューブを取り上げた。

「それ、沁みるから嫌なんだよな。無菌パッチじゃ駄目かい？」

「これが使える程度の傷だったのを幸運に思いなさい。もう少し深かったらドクにここまで来て貰う所よ、針と糸持参でね。」

二ナがそう言いながらコウの額にチューブの先端を押し当てる。

押し出された液体が傷口に触れた途端に痺れる様な痛みがコウを襲った。

「痛ったっ！」

「我慢なさい、これくらい。」

顔を顰めたコウを優しく叱りながら、二ナの指が傷口を摘まんだ。

医療用の接着剤は元々手術後の切開創の閉鎖用に開発された物だが民間にフィードバックされてからの歴史は長い。傷口を乾燥させる事無く瞬時に固着できるタイプの物はモビルスーツの救急キットの中にも含まれていて、その事はいかにこの薬剤が応急処置に対して有益な効果を持つかという事を如実に表している。二ナが摘まんだ傷口はそのまま赤い筋だけを残して元通りに塞がる、よっぼどの強い力が加わらない限り再びそこが開く事は無い。

自分の変わり果てた顔に向き合えない為に手鏡の一つも持ち合わせしていないコウには分からなかったが顔の所々が打撲による裂傷を受けている様で、それは二ナの手の動きと加わる痛みで窺い知る事が出来る。真上から差し込む裸電球の光に翳された二ナの顔がコウの瞳を覆い尽くして、心の中のどこかに眠っていたあの気持ちを呼

び覚ます。

それを胸の奥で必死に堪えて絶対に面に映してはならないと誓うコウ。激情が喉の奥を焦がして痛みすら伴ってコウの決意を挫こうと掻き巻る、全霊で耐えるコウの喉が小さく鳴った。

くっ付いたばかりの傷の上から無菌パッチを張り付ける二ナの顔を黙って眺める、その視線に気づいた二ナがやっと落ち着いた様に笑った。

「これで暫くは大丈夫、あんまり派手に動かなければね。」

硬い表情で見上げたままのコウを見下ろした二ナがそこで初めて我に返った。手にした接着剤のチューブを慌てて薬箱に放り込んで元の場所へと戻す、コウは水屋に薬箱を押しこむ二ナの背中に向けてポツリと言った。

「ありがとう、二ナ。」

水屋の扉を閉めようとする二ナの手が一瞬滞る、音を立てずにゆっくりと閉じた二ナがコウの方を振り返って、手当てをした時に振り撒いたあの笑顔は影を潜めて。

「ううん、私こそごめんなさい。勝手に貴方の部屋を散らかして。俯き加減にそういうと二ナはコウの向かい側の椅子に腰を下ろした。明かりを跳ね返すテーブルの上のテキーラに視線を遣って、咳く。

「…… お酒、飲むようになったのね。どうして？」

「付き合ひさ、ここの組合長が酒好きでね。それに組合の集会になるとどうしても最後は宴会になるんだ、無理やり勧められてる内にいつの間にか。」

「そう。」

二ナの顔に安堵が浮かぶ、よかった、と。コウは自分の幸せの形をここで手に入れてうまくやっている。戦場から遠く離れたこの大地に、一人根を張って暮らしているんだと。心の底で疼く小さくて鋭い痛みを覚えながら、それでも自分の僅かな望みが叶えられた事に喜びを感じる。

「私の方は相変わらず、キースやモウラもうまくやってるわ。貴方が基地を去った後に配属されたのがこの二人、キースに毎日絞られてるわよ。」

「キースの部下なら上達も早い。何せキースはアルビオンで一番練成訓練に出ていたからな、あの三人に教わったキースなら上手く彼らにも教える事が出来るさ。」

「それがまだ全然。最近のOSって何でもかんでもプログラム化されてるからパイロットが過保護になるのよ、昨日もOSを切ってマニュアルで演習したらボロボロになって帰って来たわよ。全く、せっかく私が講義したって言うのに何にも役に立ってないんだから。」

憤然とした声で愚痴る二ナを驚いた顔で眺めるコウ、見咎めた二ナがそのままの顔で尋ねた。

「何？ 私何かおかしい事言った？」

「いや」

コウが穏やかな顔で笑みを浮かべた。

やはり二ナはモビルスーツから離れてはならない、モビルスーツの事を話している時の二ナが最も二ナらしい、とコウは思う。彼女からそれを奪ってしまう事は即ち、彼女自身を奪ってしまう事と同じだ。

故に自分はオークリーを後にせざるを得なかった、モビルスーツを動かせなくなった自分が彼女の役に立てる事は無い、そしてその日は未来永劫永遠に来ないのだと言う事を今日という日が証明した。自分が彼女を受け入れる為の存在意義はモビルスーツに乗り続ける事しかなかったのだ。あの日、銃を向けられて拒絶された自分にとっては。

「それにしても、どうして二人をここに運んだの？ 被災したのなら消防隊に任せれば良かったのに、そうすればもっと手際よく治療が出来てたでしょう？」

二ナの問いを受けたコウの顔から笑顔が消えた。それを説明する為には事実を、推測も交えて話さなければならぬ。コウは一瞬の

逡巡の後に決心して口を開いた。

「…………… 彼らは被災して怪我したんじゃない、何者かに拉致されてたんだ。」

今度は二ナの顔から笑顔が消える番だった。コウの告白は絶え間無い疑問と矛盾を二ナの心に湧き上がらせて、それが言葉になるのに左程の時を待たない。

「何故？」

「俺にも分からない。ただ俺がそこに駆け付けた時には五人の男がいた、そして恐らく全員軍人だ。」

険しい目で二ナを見つめるコウにとつて、その発言は得体の知れない気配を自らに知らしめるのに十分だった。ただの犯罪者が彼らを拉致して金品を強奪しようと言うのならまだ辻褃が合う、だが二人を拉致した男達にその意思は無く、少女はともかく少年の方は人質としての価値すら見出していない。同時に四発も至近距離から撃ちこまれたスタンガンがその証拠だ。

「何某かの勢力が彼らを何かの目的で狙ったとするのならオークリーに直接帰隊するのはまずい、それでセシルさんが彼らをここに匿う様にと」

「セシル？」

「組合長の奥さん、今日はヘンケンさんの代わりにサリナスに買い出しに行ってたんだ。」

「ああ、あの人。」

その二ナの物言いが妙に刺々しく感じたコウは、ふっと二ナの表情を観察した。微かに眉間に皺を寄せて目尻を吊り上げて、それは明らかに二ナが何か気に食わない事がある時の表情だと知っていた。「知ってるのか？」

「基地でこの前見たわ、私あの人あんまり好きじゃない。」

「そうか？ でもよく気がつく優しい人だぜ？ 頭もいいし」

「セシルを庇うコウの顔をやはり表情を変えずにじっと見つめる二」

ナ。確かに物腰と言ひ声音と言ひ、何処をどう切り取つても夫に仕える貞淑な妻以外の何かである筈が無い様に見える。

だがニナは彼女と対峙した時に見せたあの目を知っている、まるで猛禽が獲物を狙う寸前に見せる瞳の煌めき、燃え滾る挑発の炎の存在を。ともすれば怖じ気づきそうなその炎に晒されたニナが耐抗出来たのは、彼女の手ニコウのディスクが握られていたからだ。

だがニナがその事をコウに告げる事は無い、彼の世界に今更立ち入る資格など自分には無い事を分かつていたから。

「それよりなぜ軍人が彼らを狙つたのかしら、確かに彼ら自身はそれぞれ訳ありでこの基地に飛ばされて来た訳だけど、それにしてもそんなに酷い目に合わなければならぬ謂れは無いわ？」

彼らはこの基地に赴任して来た事で十分に罰を受けている、それなのにそんな事をしてまで二人を傷つけるなんて意味が分からない。」

話題を強引に逸らしたニナの顔から険が消える。目まぐるしく変わるニナの表情と話題を追つてコウが答えを慌てて探した。

「それこそ俺よりもニナの方が心当たりがあるんじゃないか？何か変わった事とか何か運び込まれたとか  
新型のモビルス

「ッ、」

そこまで口に出してコウははつとニナを見つめた。それはまるで帰ってくる事の無いあの日の出会いと同じ様に。偶然に出会つたトリントンで二人を連理の枝の様に結びつけたあの。

ニナの表情がにわかになつた。今まで見せていた過去と変わらぬ笑顔は姿を消して、呟く言葉にすら押し寄せた苦しみを滲ませながら。

「無いわ。来るのはいつもと変わらない訳有り揃いよ、そんな物は、もう、無いのよ。」

無くなつてしまったのだとニナはコウに向かって告げる。それが一体何を指しているのか、何の意味を持っているのかという事を言外に知るコウ。

絶ち折られた枝が二度と再び絡み合う事が無い事を二人は知つて

いる、コウはそれを繋ぎ止める為の奇跡を今日失い、二ナはそれを結びつけない為に敢えて拒み続けている。互いに背を向けて歩み出す道が交わる事が無いのと同じ様に二人の未来もまた、別の空を指して枝を伸ばそうとしている。

あの日々は、甘く切なくそして儂く希望と絶望に満ちた掛け替えの無い日々を取り戻す事はもう二度と叶わない。

無言で向き合ったまま互いに視線を逸らした二人の耳に静寂の雑音が届く。それはアデリアとマークスの穏やかな寝息であったりエボニーの身じろぎであったり。煌々と世界を照らして闇を払う月光が大気の粒子と混じり合っしてしん、と言う音を醸し出しているのかも知れない。

時の刻みすら届かぬ狭い室内の真ん中で互いの存在を意識しながら決して触れ合おうとしない二つの影、沈黙は二人の言葉で破られた。

「……………コウ、……………二ナ？」

同時に放った互いの名前に顔を見合わせるコウと二ナ、蒼と黒の光彩が互いの視線に混じり合う。

「あ、いや……………聞きたい事があるんだ。」

「……………私もよ、コウ。何故オークリーを、いえ。」

二ナの瞳に力が籠る、心の内から溢れだす感情が貫く様にコウの目を射る。まるで心の底まで見透かそうとする様に。

「私を置いて、基地を出て行ったの？」

アデリア、私に勇気を。

貴方の勇気を私にちょうだい。貴方のその真っ直ぐな強さが私は欲しい、

だからコウを取り戻す為の勇気を、私に。

何も言えずに目を伏せるコウに向かって二ナは尚も言葉を繋いだ。「貴方がモビルスーツに乗れなくなった事はドクに聞いたわ。何故

黙ってたの？　もしかして貴方がモバイルスーツに乗れなくなった位で私が貴方を嫌いになるとでも思った？」

何も答えずコウは目を伏せた。言葉に刻まれる二ナの願いがコウの心に忍び寄る、それはまるで泥沼に沈めようと誓った自分の願いを否定するかのように。頭上より垂らされたか細い糸を握りしめさえすれば、それで全てが救われるとでも言うのか、報われるとでも言うのか。

夢の中で手を差し伸べるあの男と同じ立ち位置で。

「……俺は、ガトーじゃ、ない。」

呟いたコウの答えがそれだった。

「俺は、ガトーにはなれない。……彼の代わりには、なれないんだ、二ナ。」

その名前に二ナの瞳が大きく揺れた。

その言葉に二ナの心が大きく揺れた。

何度も何度もコウの呟いたその言葉が脳裏の鏡で跳ね返されて思考の迷路に立ち止まる。それを洩らしたコウの心境も理由も、何一つ見つける事が出来ないまま戸惑う二ナ。

「……貴方は、貴方よコウ。私はそんな事一度も考えた事無いっ、彼はもうこの世にいないのよ。私が何故」

「じゃあ、何故、俺に銃を向けた、何故俺を撃った？」

振り絞る様に尋ねるコウの言葉に返す声すらも忘れてしまう。その理由を私にここで打ち明けると言うのか。

小さく開いたままになっていた二ナの唇が微かに動いて大きく息を吸い込む。アイランド・イーズの出来事を再び記憶の中から引き張り出して時系列を整理する、出来事と事実と言葉と。

“彼の様な男がこの先にもきつと現れる筈だ。連邦、ジオンを問わず私達が命を賭けて成し遂げるこの『星の屑』の未来に起こる動乱を目の当たりにして、志を同じくする者達が。……彼を通じて其の希望を見出せただけでも、今の私に後悔は無い。”

忘れもしない、ガトーの声が半鐘の様に二ナの脳裏に鳴り響く。

”どうした、コウ・ウラキ。私を撃て。此処で撃たねば貴様は一生罪の意識に苛まれて生きて行く事になる。貴様がこの先宇宙で生きようとするのなら迷うな。そうしてこそ貴様は初めて私の

”

ガトーがコウに何をしようとしたのか、何を求めたのかが私には分かる、

でもコウは知らない。

ガトーがコウの中に撒いた種、それがコウの中に植えつけられた事を私は知っている、

でもコウは知らない。

私は何故コウに銃を向けた、何故コウに向かって引き金を引いた。ガトーを撃つ事も出来なかった私が何故？

コウを、ガトーにしない為に。

コウを、失いたくない為に。

もし、彼がモビルスーツに乗れなくなった理由がガトーの撒いた種に起因していたとしたら。

彼自身がガトーと同じ世界を共有する事を、私のあの行動が押し留めているのだとしたら。

私が私自身の決意を告げる事こそが、彼の中に眠ったまま枯れようとするガトーの種子を発芽させる要因だったとしたら？

心の底に封印していたガトーの姿が黒い色シルエットに変わる、もうどんな顔をしていたかも定かではなくなっていたがその輪郭と印象的な銀髪は今も二ナの脳裏にある。それが一瞬にして絶望的な冥黒に塗り替えられた事を二ナの意識は感じ取った。

そして訪れる強烈な強迫観念と溶解していく嘗ての恋人の輪郭、



境目を失ったそれは大きな鉤爪を伴って二ナの心を握りしめた。

大きな拍動が一回、目の裏まで痛むその衝撃波を受け止めた額に汗が滲む。

ガトーと言う過去の悪霊に縛られたなけなしの決意がズタズタに切り裂かれる。まるで朽ちたゴムの様にポロポロと零れ落ちたそれは、どんなに掻き集めようと思っても二度と復元不可能なほど粉々になって底沼の泥濘へと沈んでいく。

声が、出ない。

唇が痺れたまま動かない。

息が、出来ない。

助けて、コウ。

「…… やっぱり、そうなのか。君は、君の目はまだガトーを追っているのか。」

違う、と。諦観極まる声音でそう呟くコウに向かって二ナは叫んだ。だがその切なる思いを遂げる為の手段も機能も、ガトーの亡霊は奪い去ってしまった。心の中で轟いた自分の絶叫が全身を駆け巡った揚句に瞳に届く、蒼の光彩が湧き出す感情で揺らぎ続ける。「このオークリーに来て君の顔を見た時、俺が君の為に出来る事はもうモビルスーツに乗る事しか無いと思った。ガトーの代わりでも構わない、君が君でいられるのなら俺はそれでもいいと思った。いつか、君が僕の所に戻って来た事を間違ってたと思ってくれるように。」

『二ナ』では無く『君』。遠ざかる心を二ナは見る。ほんの束の間絡み合った二人の気持ちは縊り糸を解す様に解けていく。まるで夢の中のワンシーンであったかの様に。

「でも、もう俺は君の為にガトーを演じる事は出来ない、俺には

…… もう出来ないんだ。」

ガラガラと、二ナの中で何かが崩れる音がする。

まだ間に合うと思っただ。でもアテリアの恫喝が築き上げた二ナの勇氣には致命的な見えない亀裂が入っていた、それに気がつかなか

ったのは自分自身。

ほんの少し力を加えられただけで脆くも崩れ去る砂上の楼閣の傍らで、手で掬い上げる事すら出来ずに見守るだけの自分。

手放した物を取り戻そうと言う身勝手に自己欺瞞に満ちた欲望が与えた罪、コウの拒絶は自分の罪に下された無辺の刑期で贖う為の罰なのか。そしてそれはやはり、もう。。。

「あたし、帰る。」

肩を震わせて自分の激情に耐える二ナの背後で声がした。静寂を破る突然の声音に驚いた二人が視線を向けるその先に、アデリアが上体を起こして座っている。茫然とその姿を見守る二人の視線を受けたアデリアがゆっくりと掛けられたシーツを捲って足を下ろした。「ほら、マークス。あんたも一緒に帰るのよ。とつくに目が覚めるんでしょ？」

傍らの急造寝台で眠るマークスの肩を優しくポンと叩くアデリア、だがそれだけでもマークスの傷に障るには十分だった。

「痛ってえっつ！」

突然大きな悲鳴を上げて跳び起きるマークスの姿をコウと二ナはびっくりして見つめる。衝撃で痛む傷を手で押さえながらマークスがアデリアに言った。

「お、お前ちよつと待て。こっちは怪我人なんだぞ？ 何て事すんだ。」

「いいから早く立つて。二ナさんがわざわざ迎えに来てくれたんだから、これ以上他の部署に迷惑掛けらん無いでしょ？」

痛みに顔を顰めるマークスに向かって諭す様に声を掛けるアデリア、だがその目がマークスの着衣に向けられた時アデリアの表情が変わった。

「？ あれ？ どうしてあんたの服がこんなに綺麗？ あたしが見た時には血だらけで」

「それは俺の服だ。軍曹の服はあまりにも酷い状態だったんで処分させてもらった、勝手に済まない。」

首を傾げるアデリアの背後でコウの声がした。マークスの物と同じカーキ色の夏服、肩口に張り付けられた部隊章まで同じ。胸元のネームタグこそ外されていたがそれは確かに連邦軍で支給される、

正式な制服に間違いなかった。マークスが思わず顔を上げて言った。「いえ、ありがとうございます。お借りした制服は必ず後日、綺麗に洗濯してここにお届けに」

マークスの申し出にコウは小さく頭を振った。微かに歪めた口元が小さな笑顔である事を、コウの顔を見た三人は知った。

「君にあげるよ、受け取ってくれ。……俺にはもう、必要の無い物だ。」

そしてコウの呟いた言葉の意味も。

二度とここに来てはならないと言う言外意思表示を受け取った二人がよろよると立ち上がって、肩を並べて敬礼した。コウが立ち上がって遠慮気味に敬礼を返す、おざなりな様でいて、しかし型の崩れないその格好にマークスはコウの人柄の全てを感じた。

やはりこの人は、伝説の撃墜王なのだ。

「さ、二ナさん。行こ？ 早く基地に戻らないとみんな心配しちゃうから。」

急かす様に二ナの肩を押して立ち上がらせたアデリアが、手を引いて出口へと導く。恐らくまだ鎮静剤の効果は続いていて本当は立っているのがやっとなのかも知れない、だがアデリアは一切の体調不良 精神的なダメージも含む を気力でねじ伏せて

二ナを外へと押し出した。痛む体を押して予めドアを開いておいたマークスをその場に置き去りにして、月明かりの元を歩き去る音がコウの耳に届く。

「あいつめ、怪我人に殿任せてどうすんだ、全く……失礼しました、ウラキ伍長。部下の非礼をご容赦ください。」

「こちらこそ自己紹介がまだでしたね、軍曹。……自分はオークリー基地所属、コウ・ウラキ予備役伍長です。」

階級に習い、自分より上の階級である年下のマークスに丁寧な口調で語るコウ。マークスが思わず踵を鳴らして背筋を伸ばした。音を聞きつけたアデリアがひょっこりとドアから顔を出してマークスの姿を背後から眺める。

「北米方面軍オークリー基地モビルスーツ隊所属、マークス・ヴェスト軍曹であります。どうぞよろしく。」

コウの右手がマークスに向かってゆっくりと差し込まれる、マークスは躊躇う事無く伝説の撃墜王の手を握りしめた。掌に刻まれたごつごつのタコやマメがマークスの感触に刻まれる、何処にもモビルスーツ乗りの面影が無いその手にマークスは微かに憂いの表情を浮かべる。

「…… アテリア・フォス伍長です。」

敵意満々でコウを見つめるその目と裏腹な小さな声がマークスの背後からコウに届いた。コウが穏やかな笑顔でアテリアの顔を見る、そのコウに向かってアテリアは待ってましたとばかりにため込んだ鬱憤を叩きつけた。

「いいですか、ウラキ伍長。今日はお互い色々な事が有り過ぎました、ですから疲れてますっ。大事な話や要件は後日日を改めて、もう一度話し合った方がいかかかと存じますがどうでしょう？」

慇懃無礼に捲し立てるアテリアの言葉に慌てたマークスが思わず振り向いた。

「お、おいアテリア。お前なんて事を口走ってんだ。仮にも個人のプライベートに口出しする権利なんて俺達に」

「有る訳無いのは分かってる。でっかいお世話なものね。でもね、幾らなんでもこんなのって無い。どさくさ紛れに結論を出すべき話じゃない、だってニナさんにとって大事な事なもの。」

マークスにまで反論の火の粉を浴びせたアテリアが再びコウの顔を睨みつけた。明らかに返答を待つその表情に向かってコウは、その微笑を欠片も崩さずに告げた。

「フォス伍長、気持ちは大変嬉しいがもう済んだ事なんだ。多分この事をまた話し合った所で結論は同じだと俺は思う。それに俺は君達オークリーの関係者と接触する事は契約によって禁じられている、再び話し合う事は出来ない。」

「そーですか。そーいう事でしたら今日マークスがお借りした貴方

の服を後日二ナさんに頼んで届けて頂きます。ご都合のよろしい日にちを教えてくださいただければ即日お伺いいたしますからっ。」

「だから、これは軍曹にあげた物だ。返されても」

「いいですねっ!？」

そう言い放ってドカンと力一杯ドアを閉めるアテリア。安普請の小屋はその一撃で微かに揺らぎ、まるで抗議の悲鳴を上げるかの様にギイギイと建屋を鳴らした。あまりの剣幕に怯えた、と言うよりは呆れかえって見送るマークスに向かって、コウは言った。

「軍曹、貴官は良い部下をお持ちの様だ、そして貴官も。……」

頼み事を出来る様な資格も権利も持たない自分ですが、

コウの目に力が籠る。微笑の中でそこだけが嘗ての光を取り戻している様にマークスには思えた。

「キースを……キース中尉を頼みます。」

「分かりました。隊長には貴方がそう言っていたと、必ず伝えます。」

目礼と共にそう告げたマークスが踵を返して出口へと向かう。先回りをしたコウが傷の痛むマークスの為にドアを開く、室内の明かりと蒼光の境界線にマークスが進み出た時、コウが不意に立ち去ろうとするマークスの背中に声をかけた。

「……ありがとう。」

思わず振り返って怪訝な顔でコウを見るマークス。思わず尋ねた。「いえ、それはこちらの台詞です。自分も、フォス伍長も貴方に助けられた。貴方が駆けつけて下さらなかつたら今頃私達はどうなっていたか」

「いや、そうじゃない。」

マークスの返事をやんわりと否定するコウの手が持ち上げられて月の光に照らされた。土と戦い続けた孤独な農夫の手はゆっくりとその掌を開いて、まるで光を受け止めるかの様に蒼に翳した。じっと見つめて静かに呟くコウの声はあまりにも穏やかで。

「……今日、初めて。」

包み込む様に握りしめられる拳に光が舞った。

「俺は、この手で誰かを助ける事が、出来た。」

入口の前に佇んで蒼白の世界に灯る四輪駆動車の赤いテールランプが遠ざかって行くのを黙って見送るコウ、視線の死角から不意に声が上がったのは目線を切って室内に戻ろうと振り向いた瞬間だった。

「そういう事だったんですね、彼女との間にあった出来事と言うのは。」

セシルの声だった。月が齎した小さな影、建物の壁際にひっそりと立つセシルの身体がゆっくりと光の降り注ぐ場所へと進み出た。

「聞いていたんですか……いえ、聞こえたんですね？」

コウの問い掛けに静かに頷くセシルの顔には微かな後ろめたさが覗く、コウはそんな表情をしてコウを見つめるセシルに向かって小さく笑いかけた。二ナとの会話を盗み聞きされた所で何かが変わる訳じゃない、もうとづくに終わった事だから、とコウの目がセシルにそう告げる。

「俺は一度は彼女に拒まれた男です。彼女の選んだ男が死んで、彼女が俺の所に戻って来た時に俺は未練にも彼女の為になる事ならば何でもしようとして心に誓った。でもその時には俺の身体は彼女の最も必要とする部分を失ってしまっていた。取り繕って、誤魔化して。」

それでも何とか彼女の傍に居続けようと嘘をつき続けた拳句がこのさまです。……二度とモビルスーツに乗れなくなった兵士など、彼女にとって何の価値も無い。」

「まるでウラキさんは自分の事をモビルスーツの為の部品か何かの様に言う。壊れた部品はもう用済みだと？ 本当に彼女が貴方の事をそう思っているんですか？」

セシルの問い掛けにコウの顔が不思議な表情を浮かべた。嘲笑、悔恨、苦惱。入り混じる様々な感情が集約して出来る歪な絶望。

「いえ、……そう思わなければ、彼女の事を諦める事が出来な

い。自分勝手に女々しい人間です、俺は。」

コウはセシルに静かな声でそう告げると背を向けた。月下の光から逃れる様に扉を潜ろうとするコウの背中に向かって、セシルが言った。

「 私は、撃てますよ? 」

コウの逃げ足がピタリと止まる。その言葉が何について言っているのか、分かる。視線も、全身も凍りついた様に動かなくなったコウの影に向かって、月下のセシルは尚も言葉を続けた。

「 私は、あの人を撃てる。 」

「 何故? 」

「 愛しているから。 」

絞り出すような声で尋ねたコウに向かってただ一言、セシルの表情には誰にも見せた事の無い一人の女性としての感情が滲んでいる。心の中に封印した真実を告げるセシルはヘンケンと共に歩み続ける事の覚悟をコウに語った。

「 私の未来はあの人と共にある。あの子の未来が消えてしまうと云うのなら、私の未来もそこには無い。だから、私はヘンケンを撃てる。 」

時を違えて表現を変えて。昨日の夜ヘンケンがコウに告げた事と同じ言葉を語るセシル。ヘンケンとセシルの間にある強い絆がその一言に集約されている事をコウは知る、目を伏せたままゆっくりと振り返ったコウが尋ねた。

「 愛しているから、共に終わりを迎える事を望む、と? 」

セシルの覚悟を問うコウに向かって、セシルは華やかな笑顔を浮かべて言った。

「 さあ? 」

答えをはぐらかせて踵を返して、セシルの足はゆっくりと入口から地面へと続く三段の階段を下りた。青白い大地にポンプスを下ろしたセシルの視線のはるか先にヘンケンの大型四駆が息を潜めて止まっている、そのドアの横で長い感覚の点滅を繰り返す煙草の火口



と不確かな輪郭の人影があった。月明かりに描かれた一本の畦道を歩きだすセシルが去り際に、その言葉を肩越しにコウに投げかける。

「彼女は、どうだったんでしょね？」

胸に突き刺さるセシルの言葉がコウの呼吸を止めた。

終わりの無い沈黙を打ち破る様にここでいい、とアデリアが運転席の二ナに告げた場所は基地のゲートを潜ってモビルスーツのハンガーの明かりを遠くに臨んだ滑走路の上。万が一の時の為に医務室の電源を立ち上げて待機していたモラレスは傷の状態と処置の状況を二ナから連絡を受けた途端に「じゃあ、明日でいいわい」と一言言い残して通話を終えた。既に基地の明かりは必要最低限な物を残して夜間モードに入っている、コウの家と同じ月明かりの下に降り立ったアデリアは助手席のドアを開いたまま何かを躊躇う様に立ち尽くしていた。

「アデリア？ 大丈夫どこか痛むの？」

不穏な気配を感じた二ナがアデリアの背中に向かってそう尋ねる。アデリアは二ナの声に小さく肩を震わせて、それでも尚じつと外の景色から目を離せないでいる。夜間に灯るハンガーの微かな明かりに背を向けて輪郭の無い地平を臨むアデリア、身体の痛みを堪えてマークスが後部座席から地上へと足を下ろした時、突然アデリアが二ナの方を振り返った。体調を気遣う二ナの視界の中でアデリアは勢いよく深深と頭を垂れて、言った。

「昨日はごめんなさい、二ナさん！」

その声と言葉と態度に目を丸くしてアデリアを見つめる残りの二人。髪の毛先が地面届こうかという所まで頭を下げたまま動かないアデリアの姿を見て、二ナは昨晚の彼女の姿からは想像も出来ない豹変ぶりに驚き、マークスは絶対に謝らないと、全財産を投資してまで謝罪を物量作戦に頼ろうとしたアデリアの思わぬ方針変更に驚きを隠せない。

「うっん、いいのよアデリア。私こそ…… ありがとう、アデリ

ア。貴方のおかげで私はコウの本心を聞く事が出来た。その勇気を貴方から貰えただけでも、昨日の夜の事は私にとって価値のある事だった。」

「それはウラキ伍長が基地を離れた理由？」

頭を上げて二ナの顔を見つめながら尋ねるアデリアに向かって、二ナは静かに笑って頷いた。その笑顔があまりに可憐で、切なくて二人の脇で見えているだけのマークスの胸までが痛くなる。

「コウはもう私の所へ帰ってくる事は無い、帰って来てはいけないのよ。今のまま、農夫として一生を終える事が彼の為でもあり、そして私の願い。もし私が彼を撃つた理由を告白した事で、彼をモビルスーツから遠ざけている因子が取り除かれてしまったならば、私はその事をもつと後悔する事になるわ。だから、これでいい。」

微かに目を伏せる二ナのその仕草とその言葉が決して本心では無い事を二人に教える、だがそれが分かったからと言って二ナの言葉を覆す事の出来る確固たる信念も方策も二人は持ち合わせてはいなかった。コウが死んでしまう位ならば、と言う二ナの決意は二人の内から 特に同じ考えと決断を選んだアデリアから言葉を奪った。

「とにかく、今日の所はキース隊長の所に出向いて無事を報告してから休みなさい。明日は朝一番で医務室に行って、ドクの診断を受けるのよ？ 二人とも。」

二ナはそう言うとき悲しそうな表情のアデリアに視線でドアを閉める様に促した。僅かに後ずさりをして空いたままの助手席のドアを静かに閉じるアデリアの右手、鈍い金属音が夜空に木霊して余韻を残す月明かりの下を二ナの乗った四輪駆動車は静かに動き出した。

車内から視線を送る二ナに向かって小さくお辞儀を返すマークスと、何も出来ずに佇むアデリアが蒼光の元に置き去りにされて。

遠ざかるエンジン音と頼りなく輝くテールランプをじっと眺めるマークスがアデリアの方を振り返る。アデリアはマークスの視線に気づかないのか、じっと二ナの去った方角を見つめたまま身動きも

しない。後ろ髪を牽かれる思いで二ナの残像を見送っているであろうアデリアに気を遣ったマークスが、黙ってハンガーの明かりに向かつて歩き出した。

多分アラート勤務のキースとモウラがそこで自分達が帰ってくる事をやきもきしながら待っている筈。そう思うと心の中が温かくなる、マークスは自分の家の無事に帰還出来た事をやっと実感した。

遠くに見えるハンガーの明かりがこれ程懐かしく、また嬉しく感じた事は無い。自分の事を待っている人達が確かにそこにいる、それは自分の家に帰って父と母に出会う以上に大きな喜びを伴ってマークスの心を安寧に誘った。

そう思うと足取りも軽く、そして早く。

「！」

突然背後から羽交い絞めにされて、マークスの足は急停止を余儀なくされた。丁度鳩尾の辺りに回された華奢な両手が思ったよりも強い力でマークスの身体を締め上げる、思わぬアデリアの行動と力がマークスの傷を刺激して。マークスは抗議の悲鳴を上げた。

「痛てっ！ おま、何するんだアデリ

「…………ごめん。」

聞いた事も無いアデリアのか細い声。それでも離れる事の無いアデリアの両手は何かを確かめるかのようにマークスの身体に巻きついている。

背中越しに伝わるアデリアの、遣り場の無い悲しみを受け止めたマークスがハンガーに向かう事を後回しにして季節外れの月光浴に身を任せようと決心した時、アデリアの額がマークスの背中にこつんと当たった。

「ちよつとの間でいいから、このままでいて。こっちは向かないで。」

「

アデリアの吐息で背中が熱くなる、マークスは黙ってアデリアの求めるがままに背中を与えた。微かな震えが押しつけられた額を通じてマークスに伝わる、胴体に回された両手が借り物の服をぎゅっ

と握りしめて何かを押し留める。だが。

「…………… 何にも」

堰を切った様にアデリアの口から零れ落ちる悲しみを、涙を、マークスは感じた。アデリアの悔しさを分かち合うマークスはそのはけ口を雲一つ無い夜空に求める。見上げた先に広がる紺碧の宇宙、数多の星星の煌めき。

頭上に降り注ぐ月光の愁霖<sup>しゅうしん</sup>。

「何にも、出来なかったよっつ……………」

声にならない嗚咽の影で、アデリアが呟く。自分の無力さを呪う強い力がマークスの傷口を刺激する、だがマークスはその痛みをじつと堪えてアデリアの悲しみを背中で受け止めた。

身体の痛みは時間が経てば直す事が出来る、しかし心の痛みは薬や時間などでは決して直す事が出来ない疵が生み出す物なのだ。

心の痛みを和らげる事の出来る治療薬、それは、その為にはその要因を取り除く事しか手段が、無い。

「そんな事はないさ、アデリア。少なくとも今日俺達は、」

マークスは去り際のコウの言葉を思い出した。ありがとう、と告げて握り締めた彼の両手、その拳に月の光が舞ったのを見た瞬間にマークスは、確かにコウの中で何かが変わった事を感じ取った。仄かではあるが成し得る事の出来た者だけが手にする事の出来る無上の喜び。

「…………… 大勢の人間を助け出す事が出来た。ウラキ伍長も含めてな。」

思い掛けないマークスの言葉にアデリアの額が背中から剥がれた。頭を見上げてその先の夜空を、マークスと同じ空を見上げて泣きじやくるアデリアに向かってマークスは言った。

「アデリア、頼みがある。」

「えっ……………？」

アデリアにとってそのマークスの声は強い物に感じたのだろう、不思議そうに声を上げたアデリアに向かって、マークスは言った。

「明日の夜、チエンを俺の所に呼んで来てくれ……彼に頼みたい事がある。」

そう言ったまま黙って夜空を仰ぐマークス。満天を埋め尽くす星にも負けないほど強い光を放つ彼の異色ヘテロクロミア双眼が、揺るぐ事の無い決意を蒼白の天球へと刻みつけた。

## 内通者

「こんな不祥事は我が隊始まって以来の事だ。」  
デスクの上に山と積まれた書類の向こうで、部隊員に『小鬼』と  
揶揄されている最高責任者はくぐもった声で呟いた。本来ならば電  
子書類で遣り取りされる報告書はこの部隊に限っては機密保持の為  
に採用されていない、故に全てが簡単に隠滅出来る紙媒体での記述  
になる訳だがその事が司令部の作戦本部を混乱の渦に巻きこんでい  
る。

様々な個所から連邦軍へと送られる情報を逐一傍受して隠蔽工作  
に乗り出す、一つ行動を起こす毎に承認を必要とする書類は『小鬼』  
の目の前であれよと言う間に積み上げられて、それは今も尚進行形  
だ。臙鞘炎寸前まで自筆でサインをしていた『小鬼』はその受けた  
痛みを目の前に立つ『ダンプテイ』へと怒声に変えて叩きつけた。  
「中佐っ！ 黙っていは分からん、何とか言わんかっ！ 貴様は  
どう言うつもりでそんな作戦を許可したのだっ！？」

許可などする訳が無いだろう、と『ダンプテイ』は心の中で毒づ  
いた。自分が先遣隊に与えた命令はあくまで斥候、任務の意味を拡  
大解釈した所で現地での情報収集と基地周辺の地形の偵察に留まる。  
誰が好き好んで偶然出くわした基地の人間を拉致する為にテロを起  
こせ等と命令する物か。

だが実に辻褄の合わないラーズ1の行動に疑念を抱いた『ダンプ  
テイ』は現地で待機していた情報部の人間に彼らの身柄の確保と事  
情聴取を要請した。そこから浮かび上がって来た興味深い事実、そ  
れは以前から『ダンプテイ』が抱いていたラーズ1の無機質な印象  
の正体を裏付けるには十分な報告だった。暗号通信によって現地か  
ら送られて来た報告書には、今回の事件の動機がラーズ1が部隊に  
入隊する前に巻きこまれた傷害事件の加害者を拉致しようとした事  
が発端になったと書かれていた。

『マザーグース旅団』はティターンスの特殊部隊と言う位置づけではあるが性格的には外人部隊のそれに近い、金銭での契約を優先するが故にその隊員の過去の経歴・素性などを考慮しない事がほとんどだ。この短期間に需要を増した作戦内容とそれに見合った構成員数を確保する為に契約を乱発した弊害と言ってもいい。

ティターンスと連邦軍の間でその二人に関して覚書が交わされていたと言うのならその内容は必ずこちら側が把握していなければならなかったのだが、バスク・オム直属の懐刀と言う位置づけから本隊との交流も皆無だ。求めれば必ず全資料を提供しなければならぬという高圧的な規約は本体からの軋轢を生み、それは何時しか求められなければ何も提出されないと言う暗黙の了解となっていた。情報共有の連携を欠く閉鎖性こそが今回の危機を生み出したのだと『ダンプテイ』は思う。

だが任命責任は自分が負わなければならない事も『ダンプテイ』には分かっている。視線を床に落としたまま、神妙な顔で口を閉ざしていた『ダンプテイ』が返答した。

「全ては私の責任に於いてであります、准将。彼らを先遣に任命したのは私、故に全責任は私にあります。」

「貴様の首一つで責任が取れるほど甘い状況ではないっ、見ろっ！」

激昂した准将が突然立ち上がって目の前の書類の山に手を掛けた。立ち上がったも『ダンプテイ』の胸のあたりまでしか無いその男はその勢いで机の上を薙ぎ払う、床に雪崩落ちた書類が散乱して『ダンプテイ』の足元まで押し寄せた。

「この事実を改ざんする為にどれだけの危険を犯したと思っっている!? ジャブローに潜入させている諜報員が情報を遮断しなかったら今頃はティターンスだけでは無い、連邦軍全体が蜂の巣を突いた騒ぎになっている所だ。もしこの事がジャミトフ閣下の耳にでも入って見ろ、我々の旅団自体が消滅するかも知れんのだぞ!? それがどつという事だか理解した上で貴様はそんな世迷言を吐いているの

「かつ!?」

「はっ! 我が浅慮な発言をご容赦ください、准将。言葉もありません!」

大声で言い放った『ダンプティ』が顔を上げて踵を合わせた。カッツと言つ耳障りな音が部屋中に木霊して息を荒げる准将の呼吸に混じる。目を血走らせて『ダンプティ』の顔を睨みつけた准将が怒鳴った。

「この無能めっ! 貴様の様なジオンの残党がここでのうのうと息をしていられるのは誰のお陰だと思つてゐる!? 作戦もまともに遂行出来ないどころかバスケット閣下よりお預かりしたこの旅団を解散の危機に追い込んだその罪は万死に値するぞ!? 貴様の様な役立たずなどわざわざ軍法会議に掛けるまでも無い、今こそ旅団の倅いに従つてこの儂自らが過恨の根を絶つてやるわっ!」

准将の震える手が引き出しを乱暴に引き出して中を弄つた。どうやらあの噂は本当だったらしいと、直立不動でその光景を見守る『ダンプティ』。ここで命を落としてしまう事は甚だ本意ではあるが仕方が無い、元々そういう部隊である事を認識して潜り込んだのだ。

自分達の起こしたデラーズ紛争の終結以降急激に勢力を伸ばしたティターンズ、その中でも中核に位置すると思われるバスケット・オム大佐の直属にいる事こそが『操りし者共』に最も近づける手段なのではないかと考え、ごく一部の同志にその意思を伝えて志願したのだ。自分が例えここで処刑されたとしてもそれは大勢に影響を与える事は無い筈だし、何よりも未だに成果の上がらぬ潜入工作にも嫌気がさしていた所だ。

自分がいなくなつても作戦自体の遂行に問題は無い、既にそれは弾み車の様に動き出している。代わりに指揮を執る事になるケルヒヤーには難儀を背負わせて申し訳ないが、奴ならば一人でも上手く事を運ぶ事が出来るだろう。

引き出しから抜き出された准将の手には護身用の拳銃が握られて



いる、震える手で狙いを定めるその銃口を呆気無いほど落ち着いた表情で眺める『ダンプティ』。そんな銃口を揺らしては一発で仕留められないぞ、と心の中で呟きながら引き金に掛った准将の人差し指が白くなつていく様子を、そしてその後が続くであろう意識の断絶する瞬間を待つ。

「いつから君は『殺人許可証』を手にする事を許されたのだ？ 准将。」

機械を通して響くその声は今まさに引き金が落ちる寸前に『ダンプティ』の背後から放たれた。抑揚の無い異質な声はそれだけでその持ち主がどういう素性の者で、どう言う立場にいる者なのかという事を二人に知らせる。『ダンプティ』の肩越しにその男と正対する事になった准将は右手の銃を振り上げたまま固まって、その男の階級を口にした。

「カ、大佐<sup>カーネル</sup>。いつラサから戻られた？」

さつきまでの激昂が嘘の様に収まり、代わりに恐怖が准将の表情に浮かびあがった。頭髪の無い頭から右半分の顔をチタン製の外郭で覆った男はゆっくりと『ダンプティ』の傍らを通り過ぎて准将の銃をもぎ取る。マガジンを抜き出してスライドを引き、空になった銃を大佐の右手が握りしめた。

機械造りの右手がいと簡単に銃を変形させて使用不能になった所で、大佐は准将に向かつて言った。

「旅団構成員以外の基地内での銃器の使用は固く禁じている筈だ。まさか君がその事を知らない筈があるまい？」

「わ、私だつてこの旅団を預かる立派な構成員だ、私が銃を持っていて何が悪い？」

「構成員、君がか？」

大佐の目が准将を冷ややかに見る、右目だった場所にある穴から覗くCCDが焦点を合わせる為に微かなモーター音を響かせる。

「大昔の共産主義国の政治局員の様な立場の人間がよく言った。君が私にそう認められたいのならばこの穴倉から抜け出して民間人の

一人でも殺して見せる事だ。君が現場に出るだけの勇気があれば是非そうしてくれ。」

そう言うと大佐は手の中にある使い物にならなくなった拳銃をそのまま床に投げ捨てた。ガシャンと言う音がしてバネに弾かれて歪んだスライドが分解する。

「君がどうしてもこの件に関して異議を唱えたいと言うのなら、あのバスク・オムにでも直訴するがいい。それが君の権利であり、仕事だからだ。ただし、」

男の右手が不気味な音を立てて拳を作る。人工筋肉が収縮して関節を動かす音が沈黙の続く室内に不気味な疵を残した。

「私は君が欲しがっても与えられない物を持つ一人だと言う事を覚えておいて貰おうか……この件に関しては私が預かる。それで異存は無いな？ 准将。」

文字通りの殺し文句で完全に服従を強制された准将が、まるで閻魔大王に叱責された「小鬼」の様に何度も何度も頷いて肯定した。

大佐の無事な左半分の横顔を眺めながら「ダンプティ」は厄介な事になった、とここには居ないケルヒヤーに呟いた。

「ウスタシュ」と呼ばれるこの大佐はこの旅団の実働部隊の全権を握る最高指揮官だ。経歴係累一切不詳のこの男の事で分かっている事と言えば、一年戦争時のア・バオア・クーに於いて負傷した後に被せられたチタン製の外骨格と欠損した右腕の代わりに取り付けられた義手である。『ダンプティ』にはそれがどういう仕組みで動いているのかは分からないが、普通の義手とは違って脳波を感知して直接駆動の出来る試作品だと言う事だ。瀕死の重傷を負って生と死の境を渡り続けた拳句に手に入れた新たな武器、それを携えた上官が『ダンプティ』を横目で見ながら言った。

「戦歴に傷がついたな、中佐。貴様の隊だけが我が旅団で唯一『完全』を誇っていたのだが、こんな事になって非常に残念だ。」

機械の声はその言葉の中にどうい感情があるのかと言う事すら『ダンプティ』に気づかせずに耳に届いた。『ダンプティ』はその言

葉を受けて身体を大佐に向けて、素早く敬礼した。

「申し訳ありません。旅団に対しこの様な危機的状況を齎してしまつた事を陳謝いたします。つきましては作戦を再考の上、日時延期を検討したいと思います。」

「…… ふむ。」

『ダンプティ』の提案を受けた大佐が生身の左手で顎を掴まんで考える。歩をゆつくりと前に進めて床に散らばつた書類の山を踏み躪つた大佐は『ダンプティ』の視界から准将の姿を遮る様に振り返つた。

「その提案は却下だ中佐。旅団指揮官として作戦開始の日時を繰り上げる事を君に命じる。」

「馬鹿なっ！」

大佐の命令に同じ考えを声に出して叫んだのは『ダンプティ』では無く准将だつた。

「大佐、今の状況で旅団を動かす事なぞ馬鹿げているっ！ 我々はその存在を絶対に他に 自軍にすら知られてはならない特殊部隊群なんだぞ、そんな危険を冒してまで敢えて作戦行動を起こすとは。それも決行日時を早めるなんて非常識だ！」

「状況次第ではその非常識も常識たりえると言うのが、孫子以来の兵法の常道でね …… オペレーター、現在の地上連邦軍の勢力図を准将の部屋に転送しろ。」

デスクに置かれたインターホンの通話スイッチを押して、作戦統合室のオペレーターに命じる大佐。准将の部屋の壁に取り付けられた大きめの液晶がヴン、と音を立てて点灯した。

「これがリアルタイムで表示されている連邦軍の展開図だ。ジャブローの作戦室とここをリンクしてあるので数秒の違いも無いだろう

…… さて、」

メルカトル法で表示された世界地図には主要な連邦軍の基地と各方面群ごとに色分けされた担当区域が表示されている。大佐がその中から北米大陸の部分を大きく指で囲む仕草を見せると、その部分

だけが拡大されてスクリーン全体に表示される。

「これが現在の北米方面軍の状況だ。そしてこれが  
大寫しになつた北米大陸の西側を更に指で囲む。詳細な地形デー  
タと共に表示されるその場所はカリフォルニア周辺の地図であり、  
そこに存在する全ての連邦軍基地が兵力の総数に準じて赤い点で示  
される。荒野のど真ん中に位置するオークリーは小さな赤い点、そ  
して北米最大の軍事拠点となるカリフォルニアベースは赤い円で表  
されている筈である。」

「？ これはどう言う事だ？」

スクリーンを食い入る様に見つめていた准将が呟き、「ダンプテ  
イ」は目を見張る。カリフォルニアベースを示す円はオークリーを  
示すものと遜色が無いほど小さな物で、その代りサリナスを中心と  
した地域に赤い円が示されている。

「カリフォルニアベースに駐留している部隊の展開図だ。」

見ての通り殆どの部隊がサリナス周辺に駆り出されている。」

「『テロ対策特別法』に基づく治安出動、…… そういう事ですか。」

「デラーズ紛争以降、外敵によるテロ行為の拡大を防ぐ為に政権与  
党はいくつかの特別法案を議会に提出した。その中でもこの『テロ  
対策特別法』はテイターンズ肝いりの議員連盟がごり押しした一つ  
で、治安活動に於ける軍部の介入をより安易に行えるようにした物  
である。『ダンプテイ』はカリフォルニアベースの殆どの戦力が『  
ラーズ1』の仕出かした不始末によつてサリナス周辺に展開してい  
る事を察した。」

「その通りだ中佐。サリナスでの事件が反連邦勢力によるテロ行為  
の可能性が存在する以上、連邦軍はその法案に従つて行動せざるを  
得ない。故に現在、オークリーの後詰め立場にあるカリフォルニ  
アは空の状態だ。モビルスーツはおるか航空戦力まで駆り出してな。」

「『ラーズ1』の暴走が絶好の陽動のなつた訳ですか。結果論と呼

ぶにはあまりにも軽拳に過ぎましたが。」

「結果も幸運も与えられた条件の一つに過ぎない、それをどう役立てて勝利に結びつけるかは指揮官の力量と決断に係っている。私はこの機会を千載一遇と捉えたのだが、君はどう思う？」

確かに、と『ダンプテイ』は思う。戦略的に考えて後詰め部隊が留守であると言う事はオークリーに異変が起つた時に速やかに部隊を展開する事が出来ないと言う事、更に主力が集結しているサリナスはオークリーと山を挟んで反対側に位置する。

無線封鎖をしまえばオークリーでの異変を察知される事は無い、縦しんば察知されたとしても状況を把握するには時間がかかる。それにオークリーに援護に向かうにも主力部隊は大きく山を迂回して進撃しなくてはならない。航空兵力ならまだしも主力となるモビルスーツ部隊が到着する頃には作戦は完了しているだろう。

そしてもう一つ。

カリフォルニアベースに駐留部隊がないと言う事は、今あそこはガラ空きだ。つまり自分とケルヒヤーが脱走した後に向かう目的地までの障害が無い事を意味する。辿り着いてしまえばそこに潜入している同志の力を借りてハワイ行きの輸送船に乗り込む事は、容易い。

確かに大佐の言う通り、これはチャンスだ。

「了解しました、大佐。ご命令を謹んで受諾いたします。現時点を持って作戦名『イリオス』を発令、直ちに部隊を率いて現地へ向かいます。」

踵を鳴らして敬礼する『ダンプテイ』に向かって頷いた大佐が義手を掲げて返礼する。

「作戦決行は明後日の未明、〇一〇〇とする。それまでに現地にいる五人と合流して部隊を展開しろ。」

「……彼らも、作戦に参加させるのですか？」

「なんだ、不満か？ 人手不足じゃなかったのか？」

不気味な声でジョークを飛ばす大佐の声に過剰に反応したのは准

将の方だった。部隊の存続を危うくさせた張本人達をお咎め無しの上、作戦に随行させる。そんな軍規にもとる行為を斡旋する大佐に向かつて准将が吠えた。

「大佐、幾らなんでもそれは軍規違反だつ！ 彼らの身柄は嚴重に拘束した上で然るべき処断を与えねばならない。そんな連中を大事な作戦に参加させるなどもつての外だつ！」

「処断？ するにきまっている。」

背後で顔を真っ赤にして捲し立てる准将の顔を一瞥して黙らせた大佐が、今度は『ダンプテイ』の顔に視線を向けた。

「この責任は中佐、貴様が自らの行動で示せ。……意味は分かるな？」

作戦中に『名誉の戦死』を遂げたとしてもそれが公になる事は無い、それにこの作戦の最後には『ボロゴープ』の支援を受ける事になっている。そこで何が起ころうとも彼らの炎が跡形も無く全ての証拠を消し去る。

「はい、大佐。部下の不祥事は私の責任です、自らの行動で必ず望まれる結果をご覧にいきます。」

「よし。……いいか、中佐。くれぐれも言っておくが情に絆されて引き金を躊躇う事の無い様に。『ボロゴープ』は」

言葉を切った大佐のＣＤがジイツと言う音を立てて『ダンプテイ』に焦点を合わせる。まるで『ダンプテイ』の裏切りを見透かしたかの様な表情で言葉を続けた。

「君の管轄では無くこの私の直轄部隊だ。君がしくじれば今度は私の出番と言う事になる、そんな面倒は出来るだけ避けたいのでね。」

…… ああ、それと、」

大佐の顔が『ダンプテイ』を離れてスクリーンへと向けられた。機械と生身を併用するその視線がじつと砂漠のど真ん中にある小さな赤い点を見つめた。

「現場周辺の全ての最新データは作戦室に届いている。後で受取って置く様に。」

「届いている、ですか？」

言葉のあやに気付いた『ダンプティ』がその部分を復唱する、大佐は呟きに似たその質問を耳にして小さく笑って答えを明かした。

「誰でも命は惜しい物だ、ましてや自分がその当事者選ばれたとあってはな。……内通者からオークリーの詳細なデータが送られて来た。存分に活用する様に。」

電算室の暗闇に光るガラスの反射。様々な色の点滅に囲まれたその影はただ黙々と小さなモニター画面を見つめてキーボードを叩き続けている。時折起こるエラー音に小さく舌打ちをしながら、再び作業を再開する白い指が何度目かの拒絶を味わった後に影が暗闇で呟きを洩らした。

「くそつ、案外ガードが堅いな。」

苛立たしげに眼鏡の弦に人差し指を当てて押し上げながら、モニターに映る文字の羅列を睨み付ける影、しかしその状況が一変したのは影の耳に引っ掛けられていた携帯から断続的なブザー音が流れて来た時だった。

「……」

廊下に仕掛けておいた接近警報、モニターの光を受けた白い指が強制終了のキーを叩く。データ消去の可能性をユーザーに問うウィンドウが持ち上がる暇も無く、その端末は一気に沈黙した。唯一の光源であるモニターを失った電算室が再び暗闇を取り戻す中、影はゆっくりと立ち上がって出口へと向かう。

出口の前で一つ深呼吸をした後にドアノブに手を掛ける、回して自分の身体を廊下の明かりの中へと押し出した時に接近警報を鳴らした主は男に向かって声を掛けた。

「チェン、どうしたんだこんな時間に？」

ウェブナーと対峙したチェンは心の中の動揺を笑い顔で押し隠した。

「もう勤務時間は終わっているだろう？ 残業の申請を受け取った。」

覚えはないが。」

不審な目を向けるウェブナーに向かってチエンは笑いながら答えた。

「ああ、いいえ。ちょ、ちょっとまだ調べ物がありまして、さっき思い出したもんですから。タイムカードは打っちゃったんでサービス残業扱いで。」

「私はサービス残業も認めた覚えは無いぞ。いかな、司令室付きのオペレーターが自ら規則を破る様では他の者に示しがつかん。時間内に効率良く仕事を終わらせる事も軍には必要な事だと言う事を忘れるな。そんな事では有事の際に味方を混乱させる様な仕事しか出来んぞ？」

「了解です司令官。」

軍属ではあってもその扱いは普通の一般兵と変わらない。ウェブナーの叱責を受けたチエンは背筋を伸ばして敬礼して、肯定の意味を示した。その姿を満足そうに眺めたウェブナーが肩にポンと手を当てて、言った。

「分かったら今日はもう休みたまえ。どうせこんな辺境の基地だ、調べ物は明日でも十分だろう？ 私もジャブローへの定時連絡が終わったら休もうと思う、お互い自分の健康管理には留意しないとな。」

「まだ続いてるんですか、あの日記？」

「その物言いには幾ら民間人とは言えど承服出来んな、せめて日報と言ってくれ。それにつつがなく一日を終えたと言う事をいかにジャブローに知らせるかと言う事も、それはそれで技術のいる事なんだ。穴倉で退屈している奴らの興味を引かないようにな。」

とは言う物のチエンの表現は的を得ている、と思わずにはいられない。連邦勢力の外延部が最前線となった今、ジャブローよりも奥深くに位置する『忘却博物館』に何を報告しろと言うのか。せいぜい出来る事と言えばモビルスーツ隊の演習結果とデータ、そして備蓄量の変化位だ。平和と言う名の退屈が齎す倦怠感がこれ程の物と



は考えた事も無かったウェブナーにとって、その報告すらしなければならぬ現在の連邦軍の体質には辟易する。

「いつの世も、お役所仕事とは手間がかかる割に報われないもんですね。心から同情しますよ。」

「よしてくれ、これでもこの基地の司令官だ。場所や規模は違っても中佐と言う立場に違いは無い。他の者より多く給料を貰っている分、何かと厄介事を押しつけられる物なのだよ。君も歳を取れば、分かる。」

ウェブナーの愚痴に苦笑しながら敬礼してゆつくりとその場を後にするチェン。チェンが退出したばかりの電算室のドアノブに手を掛けたウェブナーが、ふと歩き去るチェンの後ろ姿に目をやった。

何処となく落ち着かない様子をその背中に映しながら廊下の角へと姿を消す彼の後ろ姿を、根拠の無い不信感を拭えないまま見送った。

「チェンっ！」

背後から大きな声で呼び止められたチェンが慌てて後ろを振り返る。管理棟から一般居住区画へと移動した矢先の事だった。レンズ越しに見える通路の先から小走りに駆け寄って来る栗色の髪を真っ先に確認してチェンは小さく安堵の呼吸を洩らす。

「全く一体今までどこに隠れてたのよ、あっちこっち探したわよ。」  
不満を口にするアデリアに向かって微笑むチェン。どうやらこの勢いだと本当に基地中を掛け摺り回って自分を探していたらしい、昨日の今日で忙しい身の上だとアデリアの身体を慮りながらチェンは軽く息を上げているアデリアに向かって答えた。

「怪我は大した事無いつて言うのは聞いていたけど、流石にモビルスーツパイロットって言うのは鍛え方が違う。もう走れるんだ。」

「馬っ鹿、違っわよ。これでも結構しんどいんだから。ね、もう仕事終わったんでしょ？ 今から時間空いてる？」

「時間？ 勿論空いてるけど」



てあるんだ、間違えようがないじゃないか。」

「そ、それは、そうなんだけど」

煮え切らない態度で尚も尻込みをするアデリアの姿を見て、チエンがにやりと笑った。

「まだ告白してないんだ？」

ボンツとアデリアの顔から音が出た様な気がチエンにはした。赤絵の具をぶちまけた様に一瞬で染まったアデリアの顔を面白そうに眺めながら、尚もからかう。

「二人がピンチになった時に僕はてっきり告白を済ませたもんだと思っただけだ。ほら、よく言うじゃない、人間って窮地に陥った時に最も傍にいて欲しい人を求めるって。あれだけの事があったんだ、アデリアがヴェスト軍曹に想いを打ち明けたっておかしくなかったと思うけど？」

既に二人が遭遇した昨日の出来事は報告書としてウェブナーの元に届いていた。出来るだけ推測を交えず、客観的な論点に立って記述をしたつもりではあったのだがアデリアの立場からすると文面にある種の感情が封入されてしまう事はいた仕方ない事なのかもしれない。

口述速記された文章をジャブローに送る正式な報告書として文面を起こしたのはチエンである。故に昨日のサリナスでの一件はその一部始終をチエンにも知られている事になる。

「でも、ヴェスト軍曹は命がけてアデリアを助けに来てくれたんだろう？ だったら脈ありだよ。他の基地のカップル見たくいずれはお互いの部屋を行き来する事になるんだ、ここは勇気を出して彼の部屋を偵察して置く事も必要なんじゃないかな？」

「…… えーっと、言いたい事はそれだけかなあ？」

チエンを睨み付けるアデリアの目に光る羞恥と怒り。それは違う感情でありながら同じ延長線上に立つ感情の表現だとチエンが認識するより早くアデリアの蹴りが顔面を襲った。手加減はしているのだろうがそれでもサリナスで見せた物と同等の速さで奔るつま先を

チェンの身体がひらりと躲す。このやり取りに慣れていなければ出来ない芸当だ。

「あつ、あたしとマークスはそんな関係じゃないわよッ、じよ、上司と部下で同僚でコンビで！ とつとにかくあんたが思ってる様なイヤラシイ事なんか考えた事も無いんだからっ！」

「それはそれで大問題だ。健康な男子と女子がお互いにそんな事を考えた事も無いなんて、ドクのカウンセリングを受けた方がいい。最も相談をした所で多分笑いながら、二人に避妊具を渡すに決まってるけどね。」

「ひに、！ あ、あああんたって奴はアツ！」

本気モードに入ったアデリアが吠える。薄笑いを浮かべたチェンが次の攻撃に備えて軽く身構えた瞬間に、アデリアの背後の扉が開いて声がした。

「おい、アデリア。なんて大声出してんだ、他の部屋に迷惑だろう？」

「ごわッ！ ツツツテ、とツツー」

言葉にならない叫びを上げてアデリアが硬直する。ドアの陰から顔を覗かせたマークスがアデリアの肩越しにチェンの姿を見止めて小さく頷いた。それがここでの立ち話では済まない要件だと悟ったチェンがゆっくりとアデリアに向かって歩き出す。硬直したままのアデリアの肩を掴んで無理やり振り向かせたチェンが、そのまま背中を押してアデリアをマークスの部屋へと押しこんだ。

「突然に済まない、チェン。」

木人の様にぎくしゃくと歩くアデリアを事もあろうにベッドに座らせて、サイドテーブルの椅子をチェンに勧めたマークスが開口一番に言った。ベットに腰かけたアデリアはここ一番の覚悟を決めたのか部屋中をきよるきよると眺めている。少なくともその仕草を横目で眺めているチェンにはそう見えた。

「……マークスの部屋もほんと、何にも無いのね。二ナさんの

部屋とあんまり変わらないじゃない。」

「そうでもないさ、少なくとも木の股から生まれたんじゃない証拠くらいは置いてある。」

目配せをした後にアデリアの視線を促した先に置いてある写真立てを見ながらマークスは言った。家族の集合写真はどこか色褪せて、しかもどこかしら影がある。厳粛そうな父親と優しそうな母親の表情に笑みが無い事にアデリアは気付く。

それがマークスの家族に訪れた悲劇が齎した結果なのだと。マークスがこの様な外見を　アデリア的には類稀なる資質だと思うが　持って生まれてこなければマークス家は息子の門出の

日にこの様な表情をしなかったのだろうかと思う。それでも色褪せたこの写真が幾度もの転籍を経ても尚彼の部屋に飾られている事がマークスの両親への愛情が深いと言う事をアデリアに教えた。

「本当は妹もいたんだけど写真に映る事を拒んでね、そこには入って無いんだ。」

「妹さん？」

「エリザベート、今年で十六歳になる。俺のおかげでとぼっちりを受けた事を今でも憎んでるんだ。だから　」

そこまでで言葉を切ったマークスがテーブルを挟んでチェンの向かい側に腰かけた。マークスとアデリアの会話をにこやかに聞いていたチェンがそこで初めて口を開いた。

「『愛憎表裏』と言いますからね、人を深く愛せばそれはやがて憎悪となる。妹さんもきつと軍曹の事を深く愛するが故にそうなったんですよ、いつか自分で気がつく日が来ますよ。」

ポツリと漏らしたチェンの言葉に強く反応したのはアデリアの方だった。脳裏に蘇るガゼエフの言葉、それが正しくその言葉を具現化した様な台詞だったと言う事を否定できない。

だがその為に自分は危うく最も大切な者を失いかけたのだ、とてもチェンの様に美辞麗句でそれを飾り立てる事など出来ない。

人の業の最も救い様の無い部分だ、その感情は。

険しい視線でチェンを見るアデリアに気付いたマークスがこれ以上の話題の展開を収めてチェンに向き合う。アデリアの心に渦巻く不安な気配を察したマークスがチェンに尋ねた。

「チェン、わざわざ俺の部屋にまで足を運んで貰った事に感謝する。早速だが本題に入ろう。アデリアの友人である君に尋ねたい事があるんだが、君はどの程度の規模のシステムまで潜る事が出来る？」

「？ それは実に唐突で、しかも漠然とした質問ですね、軍曹。僕のを試したいと言うのならそれは御遠慮願います。これでも一応連邦軍の軍属なので。」

にこやかではあるがきつぱりとした拒絶の言葉を口にするチェン。マークスはそれでも無言の圧力でチェンの答えを求める、チェンが言った。

「そうですね、システムと名のつく物ならどこにでも。企業・コロニー・軍事施設、ありとあらゆるネットの世界が僕の遊び場です。」

「例えばそれがジャブローのメインサーバーでもかい？」

「！ マークス、それって！」

マークスの問いに目を見開いたアデリアが小さく叫んだ、勿論声こそ上げないが向かい側に座るチェンも同様の表情でマークスを見る。マークスがテーブルの上に肘をつき、両手を口の前で組んでチェンの答えを静かに待つ。

「……条件によりますね。先日もちらつとお話しましたが士官が閲覧可能なアーカイブまでなら基地司令のパスを使って潜る事は出来ます。最もそれが基地司令の耳に入ったら僕は懲罰対象者のリスト入りですが。」

「そこに多分、俺の欲しい情報は無いんだ、チェン。俺の欲しい情報は恐らくもつと深く……ジャブローのデータベースアーカイブの最深部、」

マークスの手がゆっくりと降りて口元が露わになる。その薄い唇

が小さく動いて、遠慮気味に言葉を吐いた。

「レベル5だ。」

チエンの顔色が微かに変わる。マークスの提案はチエンに重大な軍規違反を犯せと勧めている。最高刑は、銃殺刑。

だが不思議な事にチエンの顔色は                   マークスの予想通り

それ以上の変化を見せなかった。緊張した表情でありながら好奇心に満ちた感情が見え隠れする、それは何故マークスが自分に対してその様な要求をするのかと言う理由と強大なシステムに挑むと言う蛮勇が齎した理性なのかも知れない。

「………… お探しの物は？」

小さな声で尋ねるチエン、固唾をのんで見守るアデリア。マークスが答えた。

「一つは軍機密『PI4キナーゼ・タイプ?』と言う薬品に関するデータ全て、そしてもう一つは『ヴァシリー・ガザエフ』と言う人物の足取りについてだ。」

「事情は説明していただけるんでしょうか？」

「『ヴァシリー・ガザエフ』に関しては報告書にも記載されている通り、アデリアがベルファストで起こした事件の被害者だ。彼が今と言う立場にいるのか知りたい。」

「それを知ってどうするつもりですか？ まさか敵討ちなんて時代錯誤な事を考えてるんじゃないでしょうね？」

チエンの問い掛けに小さく首を振って否定するマークス。

「俺が知りたいのは、彼が今どの部署に所属しているかと言う事だ。アデリアの証言だと彼と彼の仲間はある程度の秩序を持って行動していたとあるが、俺にはどうもそれだけだとは思えない。俺を撃つたあの男の雰囲気は                   その、上手く言えないんだが俺達と同じ世界に生息している人種だと感じたんだ。」

「同じ世界？」

「そうだ。ジオンの残党でもアクシズでもない、連邦軍の匂いを感じ

じた。彼が未だに連邦軍に所属している。俺の勤だが、それならば彼の軍籍の記録がそこに無ければならない。だが、多分

「そのヴァシリー何某たる人物の記録はそこにはない、と？」

確認を伴うチエンの問い掛けにマークスはコクリと頷き、アデリアには彼の行動が強烈なインパクトとして記憶に刷り込まれ、それ以上の情報の分析を行う事を意識的に拒否していた。分析してしまえばそこに存在する彼の深層心理。アデリアに対する歪んだ愛憎。を改めて思い知らされる事になるし、それによって生み出されそうになった絶望の可能性を思い出す事は必至だ。気を失ったまま一度もサリナスで目を覚まさなかったマークスが密かに温めていた分析結果をアデリアは克目して眺めるしかなかった。

「俺は幾つもの基地を渡り歩いて、連邦軍の兵士の標準形デフォルムを知っている。そこに全く当て嵌らないタイプの兵士と言うならば、それはきつと規格外の部隊。例えて言うなら特殊部隊群に属しているんじゃないかと思ってる。そんな物が連邦軍にあれば、の話だけだ。」

「特殊部隊群……そうですね、」

そこで言葉を切ったチエンが眼鏡の奥の瞳を僅かに細めてマークスを見た。一瞬の表情の変化ではあったが正対したマークスにそれは不気味な印象を与える。

「特殊部隊の人間が頭数を揃えてまでアデリアを拉致しようとした理由は何かが知りたい。勿論彼の私的な感情が優先した事には違いないのだが、少なくとも部隊を動かす以上は何らかの建前が必要だ。それが分かれば彼らの本当の狙いがはつきりすると思うんだ。」

「それならば、多分“地獄の底”まで潜り込まないと調べられないでしょうね。……で、もう一つの探し物『PI4キナーゼ・タイプ?』とは何ですか？」

チエンの言葉にマークスが迷った。それを打ち明けてしまう事は



チエンまでこちら側に引きこんでしまふ事になる。今更ここまで喋  
つておいて何をかいわんやの心境ではあるが二十との約束がある以  
上、二人がチエンにその事を語る事は出来ない。

「…… 濟まない、チエン。それを君に教える訳にはいかない。  
頼み事をしている身分で甚だ身勝手だとは思ってるのだが」

「そちらが探し物の本命と言う訳ですね？」

質問にただ頷いて返答するしかないマークスをじっと見つめて、  
チエンが質問を続けた。

「…… ヴェスト軍曹、ここでの話は僕は聞かなかつた事にする  
と仮定して一つ質問があります。貴方の提案は確かに僕の興味をそ  
る物ではありませんが奈何せん危険が大きすぎる。僕が危険を承知  
で貴方の依頼を受けなければならぬ正当な、僕が納得出来る理由  
をお聞かせ願えますか？」

その質問を境に室内に重苦しい沈黙が流れた。時が止まつた様に  
身動きすらしめない三人の影を、大きな音を立てて駆動する空調の風  
が撫ぜる。しばしの無言を圧したマークスが静かに口を開いた。

「アデリアの、そして俺の願いだ。」

アデリアの肩が小さく震える、チエンの目が横目でそれを追つた。  
「奴の執念はいつかまた、アデリアの周囲に忍び寄って彼女を脅か  
す事になるだろう。そうなる前に俺は先手を打って奴を追いこむ。

二度とアデリアに手出しが出来ない様に奴の所属する部隊の全貌を  
暴きだす。」

チエンの目にマークスの怒りの炎が映り込む。自分が殺されかけ  
た事よりもアデリアの身に降りかかる災難を振り払おうとする強烈  
な意志の輝きがチエンの心に届く。

「そしてもう一つ、アデリアが届かなかつた願いを叶えてやりたい。  
…… その為には君の協力がどうしても必要なんだ、チエン。」

言い放つたマークスの視線と眼鏡の奥から目を細めて見つめるチ  
エンの視線が交錯する。表裏の彫像と化した二人の姿をただ見つめ  
る事しか出来ないアデリア。アデリアは知っている、マークスがそ

の表情をした時にはどんな諫言も通用しなくなっている事を。

「ずるい人だ、貴方は。」

チエンがにやりと笑いながらマークスに言った。

「怖い顔をしてそんな殺し文句を懐に忍ばせていたとはね。……」

軍を退役しても十分遣り手のセールスマンとしてやって行けますよ、商人の息子の僕が保証します。アデリアの願いを叶える為だと言うのなら仕方が無い、及ばずながら力になりましょう。」

「引き受けてくれるのか？」

チエンの言葉にマークスとアデリアが同時に立ちあがった。二人から疑心暗鬼の気配が消えて晴れやかな光すらも零れ出している様な印象を受ける、だがチエンはそんな二人の希望に水を差す様に静かに言った。

「慌てないで、今すぐに出来る仕事じゃない。少なくともレベル5に入る事の出来るパス　　將軍以上の地位の人の物を持ってこないといけない訳ですから時間は掛ります。それに世界最高のセキュリティを誇るジャブローのデータベースをハッキングするんですから、それなりの準備もしないと。何せ相手はあの“サンダーバード”だ、なまじつかな用意だとんでもない事になる。」

「“サンダーバード”？」

「ジャブローに張り巡らされてる電子防壁の愛称さ、僕達ハッカーの間ではそう呼んでる。見つかったらあつという間に追っかけられてサーバーごとお陀仏。そして　　」

チエンの口元が不気味に歪んだ。

「無事に帰ってきた奴は一人もない。」

明後日の夜、管理

棟一階のSIPC(Spare Information Processing Center:予備電算室)にこっそり来て下さい。それまでに準備を整えておきます。」

「部隊に、合流しろだと？」

ほぼ軟禁状態に置かれているサリナス郊外のモーターの一室で連

絡員からの命令書を受け取ったラーズ1は思わず相手に尋ねた。腫れ上がった頬をアイスパックで隠したままのその顔が不気味に歪んで伝令の顔を見上げる、言われの無い殺気に襲われた情報部人間は言葉を詰まらせながら口述で命令を復唱した。

「そ、そうだ。明日深夜に本隊がサリナスの南百キロの海岸に上陸する。ラーズ1以下先遣隊はその場所にて部隊に合流、直ちに作戦の準備に移行しろとの命令だ。」

「それだけか？ 他には。」

脅迫する様に凄みのある声で伝令に問い質すラーズ1、だが尋ねられた男はそれ以上の情報は持っていないと言わんばかりの怯えた顔で後ずさりをした。

「無い、私が本部から受けた電文はそれだけだ。あと、お前達が部隊に合流する為の最大限の支援を要請された事以外には、何も。」

震える声を耳にしたラーズ1が黙って視線を泳がせる。自分から意識の外れた事を悟った伝令は小さく敬礼して足早にその部屋を立ち去った。扉の閉じる音と共に同じ部屋で息を殺して聞き入っていた四人は大きな溜息を吐いて貯め込んだ緊張を押し出した。

「…… どうやら俺達については、お咎め無しとは。」

「あれか？ 俺達のやった事で軍がサリナス周辺に展開してるってニュースで言ってたが、もしかしたらそれが作戦に何らかの有利な条件を与えたんじゃないか？」

「そんな事どうでもいい、俺はてつきり極刑が待ってるって覚悟してたから命があるだけめつけもんだ。この失態を何とか作戦で挽回しないと、今度こそ本当に、だぞ？」

互いに無駄口を叩いて自分達に訪れた僥倖の正体を模索し続ける三人、輪から離れた場所で内心ほっと胸を撫で下ろしながら見守っていた『タリホー』がやはり自分と同じ様に輪の外に座ったままのラーズ1に目を向けた。

「指揮官殿、これからのご指示をお願いします。軟禁ももうじき解除になる様ですし、ここは一刻も早く現地に飛んで部隊の到着を待

った方がよい選択かと。」

ラーズ1に向かつてそう語る言葉にも喜びが混じる。指揮官の許しも無しに不謹慎な事だとは思うが嬉しさは隠せない、軟禁状態に置かれた時点で自分達に下される裁きに情状酌量の余地があるとは到底思えなかった。遠く離れた家族の姿を思い浮かべて何も残せずに消えてしまう自分の運命を呪い、そして諦め。

しかしそれがどういふ神の悪戯か、再び生きてこの世界に存在する事を許されたのだ。心の底から喜ばない方がおかしい。

『タリホー』がラーズ1に向かつて指示を仰いだのにはそういう経緯がある。ラーズ1とて同じ心境にあるに違いないと確信して求めた指示だった。だが『タリホー』は狂気の治まったラーズ1から吐き出された問い掛けに思わず息をのむ事になる。

「おかしいとは思わないか？」

泳いでいた視線がいつの間にか『タリホー』の顔に当てられている。サリナスの時とは違う、初めて会った時の彼と同じ無機質な表情と感情に向き合った『タリホー』はその質問の意味が分からなかった。

「先遣隊としての任務に失敗した俺達に何の処罰も無くそのまま原隊に合流しろと言う指示は、俺の知る旅団ではあり得ない。まるで無秩序なテロリストの言い様じゃないか。」

「もしかしたら彼らの予想通り、ラーズ1の立てた作戦が今回の計画に何らかの好材料を齎したのでは無いのでしょうか？ サリナス周辺に軍が展開したと言うのならそれは恐らくカリフォルニアベースの駐留軍の筈、オークリーへの援護が減ったと言う事を考えても結果論ではありますがこちらに優位に展開したのでは無いのでしょうか？」

「ではお前に聞く。俺達先遣隊に与えられた任務とは何だった？」

「それは、オークリー基地周辺の地形の偵察と重要施設の位置と戦力の確認」

「そのどの一つも俺達は達成してないじゃないか。」

『タリホー』の回答を遮ってラーズ1は呟いた。その言葉にラーズ1の抱える疑問の正体に気付いて顔色を変える。

「その状態で作戦が発動したと言う事は俺達の任務が他の誰かに取って代わられて、しかも既に全ての情報が原隊に集まっていると言う事だ。まるで俺達の存在など意味が無い、取るに値しないと言われている様な物だ。」

「そんな　　じゃ、じゃあ私達に処罰が下されないと云うのは

」

「おかしいとは思わないか、ケルヒヤー。」

『ダンプティ』は作戦前のブリーフィングを行う為の会議室へ向かう道すがら、肩を並べて歩く旧知の間柄にして戦友である部下に小さな声で尋ねた。

「まるで俺達の作戦がつまりと予期した様なタイミングでの『内通者』の出現　……　どう思う？」

」

上官に尋ねられたケルヒヤーにしてもそれは謎だ。『ダンプティ』の率いる部隊の作戦その全てを立案していたのは自分であり、それは今まで一度も破綻をきたした事が無い。増長していた訳でも油断していた訳でもないが不慮の事態に備えて予備案を隠し持っていたのも確かである。だがその一切を採用する事無く予定通り、いや決行時間を早めると言う『大佐』の命令にはどこか疑念を感じる。

「状況を分析するにはあまりにも判断材料が少な過ぎますが、私にはその『内通者』という存在が私達の作戦とは別の目的で存在していた様な印象を受けます。　　そうですね、『ダブルスタンダード二重基準』の様

な　　」

「どういう意味だ？」

ケルヒヤーの発言に足を止める『ダンプティ』、ケルヒヤーは自分が抱えていたブリーフィング用の資料のファイルを上官に手渡しながら答えた。

「その内通者は初めからオークリーを壊滅させる為に内偵を続けて

いたのでは無く、何か別の目的があつてオークリーに潜入していたのではないかと。私達の作戦が失敗した事を受けてそれだけの情報をリークして来ると言つのなら、恐らく何らかの取引が行われたのではないでしょう。私達の知らない所で。」

「命惜しさに送つて来たと言つたぞ、大佐は」

「もしそうならばそれは軍人じゃない、恐らく民間人が軍属か

どちらにしても愚かな行為です。そんな約束を、」

「ああ、」

手渡されたファイルを脇に抱えて再び歩き出す『ダンプティ』。

後に続くケルヒヤーに向かつて肩越しに台詞の続きを投げかける。

「俺達<sup>W.W.W</sup>が守る訳が無い。俺達の作戦で生き残る予定の者はたった一人しかいないんだからな。」

巨大なデスクの他には何も無い所長室の椅子に深深と腰掛けた蓬髪の科学者は、神経質な表情で相対する男の顔を見上げて薄ら笑いを浮かべて言った。

「どうやら先方は取引に応じた様だ、全ての資料は連中の手に渡つた。これで彼らの作戦を阻害する物は何も無い。」

「しかし所長、それでは奴らの思う通りに作戦が実行されてしまいます。所長は彼女を生き残らせる事が目的では？」

男の問いにゆっくりと両手を組んでフム、と溜息をつくハイデリツヒ。

「勿論そうだ、その為の準備と材料は既に手配はしているのだがそれが百%確実に機能するとは限らない。それに彼女を生き残らせる事が目的ではなく、彼女の中に眠る潜在的な力を目覚めさせる事が私の目的だ。その為には彼女が命の危機に瀕しなければ話にならないんだが」

「浅い呼吸で息継ぎをして次の言葉を紡ごうとするハイデリツヒ。

言葉とは裏腹にその顔には期待交じりの薄ら笑いが未だに張り付いて動かない。

「 覚醒しなければ『生まれながらの新人類』と言えども唯の雌だ。そこで死んでしまう様なら到底私の研究を完成させる手助けにすらならない、いっその事死んでしまえばいいと思っっている。」  
「それでは、所長の研究はご破算になってしまします。今更そんな

「 そうなつてしまった所で私がそれを悲観する事は無い。私が生きている間に『究極』を完成させる事が出来なくなる、ただそれだけの事だ。しかし人類はいつか必ずそれを見出し、その魅力に取り憑かれた私以外の誰かがそれを完成させる事になる。それが『科学』と言う物だ。」

何かを嘲笑う様に、ハイデリツヒの目が細くなつて男の姿を通り越したどこか遠くの世界を眺めた。

「この世界を破滅に導こうとする『人類』と言う罪人が育てた『林檎の木』、実つた果実をもぎ取つて口にしてしまうのは当然の事だとは思わないか？」

それはもしかしたらハイデリツヒが思い描く、人類という種族の抱えた混沌の未来図なのかもしれない。怪しい光を湛えて尚も空虚な世界を彷徨うハイデリツヒの瞳孔を見つめながら立ち尽くしたままの男は、零れ落ちる狂信者の予言に反旗を翻す事は出来なかつた。

瞼を透かして届く光と人の気配。コウは目を覚まそうと努力したが瞼がなかなか開かない、それどころか左右のこめかみを突き抜ける猛烈な痛みで頭を抱える始末だ。頭痛の原因を削減する為に先ずシーツを被って光を閉ざそうとしたコウに向かって人の気配は呆れた声で言った。

「全く、一晩でこんなに飲んだのか？ 俺の分は一体どうしてくれるんだ。」

床の上に転がったテキーラの瓶を拾い上げて中身を朝の光に翳すヘンケン。底の方に僅かに残ったテキーラがキラキラと反射しながら部屋中にプリズムの残滓を飛ばす。

「…… すいません、ヘンケンさんの分は今度街に出た時に改めて買ってきます。」

「ああ、そうしてくれ。…… セシルから昨日の夜の話は聞いた。あいつ、怒ってたぞ？」

「セシルさんが？」

ヘンケンの予想外の言葉に思わず瞼を開くコウ、だがやはり襲いかかる二日酔いの痛みに思わず眉を顰めて頭を押さえる。これ以上痛みを増やさないように注意深く上体を起こしたコウに向かってヘンケンが小さく笑いながら言った。

「そう、それだ。憂さ晴らしにテキーラを一気飲みする様な君の行動にセシルは怒ってるんだ。『自分の事を大切にしない人間なんて私は認めない』だとさ。あんなに怒ったセシルは珍しいぞ？ 俺も数えるほどしか見た事が無い。」

そうか、やっぱり怒っていたのか、と。コウはセシルが昨日の晩に言い残した言葉の中に含まれた猛烈な棘の存在を思い返した。

『彼女はとうだったんでしょね』セシルのその言葉には『そんな事も分からないの？』と言う、彼女なりの強烈なメッセージが隠



されていた。自分の中で納得した答えに突き付けられた否定に戸惑ったコウはその全てを洗い流そうと残ったテキーラを臍腑に流し込んで床に就いたのだ、夢の欠片をも遠ざける為に。

「じゃあ、セシルさんにも謝らなきゃいけませんね。俺達の問題にまでそんな心配をして」

「…… 『俺達』 ねえ？」

冷やかす様に復唱したヘンケンが床に倒れたままの椅子を起こして反対向きに腰かけた。背もたれの上に両腕を乗せ、そこに顎を預けてコウを見る。

「別れた女に使う言葉にしちゃあ無粋で、しかも実に独り善がりな表現だな。未練があるならばつきりと彼女に伝えれば良かったんじゃないのか？」

はつきりとコウの心の奥底を見透かした様に『未練』と言う言葉を口に出したヘンケンの顔を、コウは痛みにも目を細めながら振り返った。決してコウの事をからかっているのではなく、真剣に心配している事を表情から読み取る。

「いえ、それももう。…… 何となく昨日で吹っ切れたんですよ、もう彼女の為にこの身体が役に立たなくなつたと分かつた時点で彼女の事は諦めました。モバイルスーツに乗れない自分なんて」

「おお、それで思い出した。」

ヘンケンがコウの言葉を遮って不意に目を輝かせて大きな声を上げた。耳から侵入した声帯の波動が直接コウの脳に響いて視界を霞ませる、涙目になったコウに向かってヘンケンが笑いながら尋ねた。

「乗れなくなつても、見たいよな？」

「え？」

ヘンケン唐突にそう言う立ち上がり腰のポケットに差しこんであつたコーラの瓶を差しだした。啞然として受け取ったコウに向かって続けざまにツールナイフを手渡しながら栓を開ける様に促す。

「『トーテムポール』で今日面白い見世物があるんだと。それでウ

ラキ君を誘いに来たって訳だ。」

「見世物、ですか？」

『トータルタイム』とはオークリー基地での演習に使われる『アイランド・イーズ』の残骸の事だ。基地では位置座標で表されるが地元ではその威容から別名を冠されている。『アイランド・イーズ』の到着によつて大勢の命が失われた、それを弔う為の意味合いとして屹立する墓標柱グレイフメイカーだがそこにはもう一つの意味がある。

『辱めの柱』ディスクレジットポール。特定の個人、グループに対して償いを請求するため立てられた彫刻柱、辱める事で相手に義務の履行を要求する呪いの彫刻。コウがその意味を知った時あまりの皮肉な表現に思わず苦笑してしまった。言い得て妙な名前を付けたその命名者に言つてやりたい、まさにその通りだと。

「まあ、軍の接收地だから柵の内側には入れんが外から見分には構わない、だとさ。さあ、とつと支度をして出かけようぜ、早くしないと始まつちまう。」

「い、いえ始まるって何がですか？」

ゆっくりとコーラの栓を開けながら尋ねるコウに向かってヘンケンは楽しそうに言った。

「模擬戦だと、オークリーのモビルスーツ隊VSジャブロー本部選抜のな。ここの所そう言った大きな行事が無かったからみんな張り切って出かけてったぜ？ セシルも弁当持つてとっくに向かつてる頃だし、この辺に残ってるのは俺達だけだ、さあ。」

視線で身支度を促すヘンケン、コウが手の中のコーラをじつと見つめながら尋ねた。

「……なぜ、コーラなんですか？」

「なんだ、知らないのか？ 二日酔いにはコーラが効くって相場は決まつてる、俺の経験上間違いない。」

時系列はヘンケンとコウの会話から遡って四時間前、宇宙

暦0086年6月21日・午前七時。

「『ヘリオス13』、こちらオークリー管制塔。進入を確認した、そのまま一番滑走路への着陸を許可します。」

「『ヘリオス13』了解、滑走路を視認した。これより着陸態勢に入る。」  
「『ヘリオス13』了解、滑走路を視認した。これより着陸態勢に入る。」  
「『ヘリオス13』了解、滑走路を視認した。これより着陸態勢に入る。」

”

急に砕けた口調で尋ねるパイロットの声に思わず誘導管制官は含み笑いを洩らしながら答えた。

「何事も形式は必要でしょう、私も久しぶりの空のお客さんに慌ててマニュアルを引っ張り出した所ですよ。ビーコンがまだ生きていれば無事に着陸できると思います、念のため計器からは目を離さないでくださいね？」

”何てこつた。OK、オークリー。お心遣いに感謝する。”

呆れた様に通信を終えるパイロットの声を聞きながら、管制官の後ろに立つウェブナーが肩を叩いて労をねぎらう。一応の役目を終えた男はそれぞれに答える様にヘッドセットを頭から外しながら、振り返りざまに安堵の笑みを洩らした。

ジャブローから緊急入電として当該機の派遣を通達されたのは何と到着の二時間前だった。夜勤の担当者からその電文を受け取ったウェブナーは直ぐに就寝中の管制員と地上班を招集、当の本人は乱れた頭髪を手櫛で撫で付けながら管制塔へと上がってくる始末だった。

突然の、それも予告無しでの珍客の訪問に慌てふためくスタッフを叱咤激励しながら、それでも何とか緊急事態に対応出来るまでの体勢を整えるのに約一時間。『ヘリオス13』がオークリーのレーダーコンタクトを受ける直前に準備を完了した事にウェブナーは心の中で誇らしく思った。

「しかし何でまた事前通知無しに司令部からこんな辺境に輸送機を飛ばしたんだか。昨日の夜には何も言っていなかったんでしよう？」  
自分の役目を終えた事で饒舌になった男がウェブナーに尋ねた。

規律を重んじないオークリーでは大体どの隊員も誰に向かつてこんな口調で話す、ウェブナーが苦笑いをしながら答えた。

「そうだな、時間から逆算すると定時連絡の後にジャブローを発つた事になるんだが昨日の時点ではそんな事は匂わせてもいなかった。いつも通り。」了解」としか返ってこなかったしな。」

「また倉庫からがらくたが溢れて、慌ててこちらに送りつけて来たんじゃないでしょうね？ 司令からもたまには連中に言っただけでいいから、ごみはちゃんと分別して決まった日に出してくれ。」

「『分別』したからここに届いたのかも知れんぞ。それにこつちは回収業者だ、持ち込みには対処せんとな お、到着した。」

管理棟の最上部に建てられた管制塔の窓越しに滑走路を眺めるウェブナーの視線の中を連邦色のカーキ色で塗装されたミデア輸送機が駆け抜ける。逆噴射の轟音を上げながら滑走路の先端まで到達した巨体はそこでゆっくりと停止して機首を誘導路へと向けた。いつもと変わらない強い朝日の中でパドルを振り上げた降着誘導員マーシヤラがミデアの前に立ち、まるで凱旋パレードの先導者の様に機体を所定のポストへと誘導する。

「さて、誰が来たのかは知らんが司令部からのお客様だ、丁重にお出迎えしないと今晚の報告書が面倒な事になる。」

ウェブナーは冗談めかしてそう言うのと傍に置いてあった帽子を取り上げて目深に被った。鏡の無いこの部屋では自分のいで立ちを確認する事も出来ない、髪の流れを少しでも目立たない様にする為に帽子の中へと押し込んだウェブナーが管制官の男に目配せをして尋ねる。男が親指を立ててにやりと笑った事を確認したウェブナーは急ぎ足で階下へと続く階段に向かって踵を返した。

機関を停止したミデアの巨大な後部ハッチが油圧によって静かに下ろされる。最大でモビルスーツ五機を搬送可能なコンテナボックスは与圧から解放されて清々しい外気を風切り音と共に内部へと

取り込む。南カリフォルニア特有の乾燥した空気を胸一杯に吸い込んだ男が地面に降りる間際のハッチに足を乗せて外の様子を伺った後に口を開いた。

「何だ、どつかで見た様な景色だなア、おい？」

テイターズカラーの軍服を纏ったその男は彼の行動を呆れた様に眺める背後の人影に尋ねた。理知を瞳に覗かせる黒髪のその男はハッチに立つ男の行動に笑いながら応える。

「モンシア『大尉』、輸送班に怒られますから勝手な行動はくれぐれも慎んでください。と言いますかもう怒鳴られていますよ？」

「モンシア、気持ちは分かるがそうはしゃくな。ウラキヤキース達は逃げやせんさ。」

ハッチが地面に設置した事を知らせる青ランプが点灯した時点でスロープに足を乗せるベイトとアデル、モンシアは接地の衝撃でバランスを崩しながらも滑走路に飛び出していち早くオークリーの洗礼を浴びる。

「馬つ鹿野郎、そんな事分かんねえじゃねえか。俺の姿を見つけたウラキあの野郎がケツ捲って逃げ出したらどーする？ 今日こそはあの日の借りを返しに来たってのによ。」

「やれやれ、意外と執念深いんですね、まだ根に持つてるんですか？ あの時の賭けは成立して、しかも大尉は負けを素直に認めたくないですか。」

「だーれが素直に認めたよ？ 『生きてる限り負けは無い』ってのが我がベルナルド家の家訓だ、今日こそは奴に俺様の諦めがデラーズやガトーよりも悪いって事を骨の髄まで思い知らせてやる。」

「だから手前てめえの家は貴族じゃねえって言うてんだろ？ それにその名前は禁句だ。基地司令だ。」

ベイトが地上に降り立った時点で管理棟の扉が開いて、ウェブナーが姿を見せる。警備も部下も連れずに近寄って来るその姿を見てアデルが呟いた。

「随伴無しとは、なかなかの強者つわものの様ですね。」

「腕のいい奴は出世しねえのが今の連邦軍の常識だ、穴倉に籠ったままぞろぞろと腰巾着を引き連れて練り歩くどっかの基地司令に見せてやりてえぜ、全く。」

ベイトとアデルが自分達を送りだしたジャブローの上層部を擲擧している間にウェブナーは三人の前に辿りついた。階級は三人より遙かに上でありながら、顧客を迎える礼に沿って先に敬礼するウェブナー。列を揃えた三人が直立不動の姿勢で敬礼をした事を確認した後にウェブナーが言った。

「北米方面軍オークリー基地の指揮を任されておりますクリス・ウェブナーと申します。『博物館』へようこそ。」

「連邦宇宙軍第三軌道艦隊旗艦『オラシオン』所属、モビルスーツ隊の指揮をしておりますアルファ・A・ベイト大尉であります。オークリー基地への滞在を許可願います。」

「宇宙軍、ですか。またなぜ急にこの様な畑違いの場所へ？」  
ウェブナーはベイトに尋ねながら三人の顔を眺めた。別に物珍しい訳ではない、ただ三人の階級を現す襟章が全て『大尉』を示す物であった為、誰の手からジャブローから渡されたであろう命令指示書を受け取ればいいのか迷っていた。ウェブナーの微かな困惑を感じ取ったベイトが言った。

「現在『オラシオン』はジャブローでドック入りの最中でありまして三人とも休暇中であります。艦に所属する三小隊の隊長である我々にジャブローからの命令書が手渡されたのが昨晚の午後九時、内容は未確認であります。」

ベイトが手の中にある命令書をウェブナーに手渡す、ロウで封緘されたその封筒を開いて中身を取り出して三つ折りになった書面を開く。素早く眼を走らせた。その仕草だけで三人にはこの基地司令が『戦艦上がり』である事が分かる。ウェブナーが不思議そうな顔で呟いた。

「緊急物資の搬送及び基地戦力練成度の確認、向上の為の視察とありますね。物資と言うのは？」

「コンテナ内に格納してあります。何でも試作型の実弾式長距離ライフルと言う事でありますが詳細は聞いておりません。」

「今時実弾使用のライフルとは…… またうちの整備班が涙を流して喜ぶでしょう。何せうちのクルーはそう言った物に目の無い連中が揃っていますから。」

心の中でやつぱりか、と思いながらウェブナーは命令書を元通りに畳んで封筒に押し込んだ。ニコリと笑う。

「分かりました、滞在を許可します。物資の搬出は整備班が行います、練成度の確認と向上に関しては当基地のモビルスーツ隊の責任者と打ち合わせをした上で、自由にして頂いて結構。来た様です。」

ウェブナーの送った視線の方向に人影が現れた。管理棟の影になっているモビルスーツハンガーから駆け出して来る二人の影を見た時に、三人の目には例え様も無い懐かしさの色が込み上げる。息も切らさず掛けて来るキースとモウラの姿を見た三人はそのまま体勢を正対して敬礼する。

思わぬ珍客の来訪に満面の笑みを浮かべて走り寄ったキースはその三人の姿を見て、同じ様に直立姿勢で敬礼を返した。

「オークリー基地モビルスーツ隊の指揮を執っておりますチャック・キース中尉であります。当基地への来訪を心から歓迎します。」

背後で同じ様に敬礼するモウラ。ベイトとアデルが同時にウインクしながら、モンシアは二人だけしか来なかった事に不思議そうな顔をする。

「では、私はこれで。必要な物がありません是非声を掛けて下さい、何かと物資に不自由している基地ですが出来るだけの便宜は図らせて頂きます。」

そう言い残して管理棟へと戻るウェブナーの後ろ姿を見送る五人、だがウェブナーの姿がドアの向こうへと消えた瞬間にその硬い雰囲気は一変した。口火を切ったのはキースだった。

「どうしてここに!? みんなお元気そうで！」

「まさかお前が隊長とは世も末だ、連邦軍の人材不足ここに極まりってヤツか！」

ベイトが差し出した手を両手で握り返すキース、その頭をモンシアの手が掻き毟って押さえつけた。

「まったく！ 手前の様なひよっ子が隊長だとは部下の苦勞が偲ばれるってもんだ、あア？」

破顔してキースをもみくちやにする二人の横からアデルが肩を叩く。

「いえ、これもキース中尉の素質による物です、あの戦いを生き延びたのですからそうなってもおかしくは無い。自分はそう思います。」

ベイトの差し出した手をぐしゃぐしゃになった金髪のキースが笑いながら握りしめる。喜びを爆発させる四人の姿を外側で眺めながら、やはり満面の笑みを湛えたモウラが声を掛けた。

「お三方もお久しぶりです。出世なさいましたね？」

「おお、『でつかい姉ちゃん』も元氣そうで何よりだな。相変わらずキースを尻の下に敷いてのさばってんのか？」

「『でつかい姉ちゃん』だけ余計だ、こらアツ！」

こめかみを曳く付かせながら駆け寄ったモウラがベイトに向かって笑いながら手を差し出す。アルビオンでは自分の機体の担当だった腕利きの整備士へ親愛の情をこめて握り返すベイト。

「どうして三人が揃ってここに？ ここだけの話ですが私達の接触は禁じられている筈では？」

それはデラーズ紛争が終結した際に彼らと連邦軍の間で交わされた宣誓書の条項に挙げられていた最重要項目の一つである。ベイト達は宣誓書にサインしたが故に主流である宇宙軍に残り、モウラ達はサインを拒んだが為に地球に取り残された。お互いがそれぞれに選択した道とは言え、隠蔽すべき軍の恥部の記憶を持つ彼らが接触する事は普通ではあり得なかった。

「さあねえ、俺達は軍人だから命令に対しては従順且つ速やかに行



動しなきゃならねえ。大方呆けたどつかの將軍が人選を誤って送りだしたんじゃないか？ ま、何にせよこのチャンス逃す手はねえ。って訳で三人で来たって訳だ。」

モウラとベイトの会話を横で聞きながら残りの三人が顔を見合わせる。もう二度と会う事が出来ないと確信していた世界に訪れた神の悪戯に顔を綻ばせるキース、モンシアがキースの髪から手を離しておもむろに尋ねた。

「おお、そついやウラキの野郎はどうした？ あんにやろう手前に店番任せてのんびりと朝寝坊を楽しんでやがんのか？ けえーッ、まーったく成り上がりの撃墜<sup>キース</sup>王様はご出勤まで王様扱いと来てやがる。」

モンシアのその言葉に一瞬で我に帰るキースとモウラ、その表情を見たアデルが思わずキースに向かつて尋ねた。

「どうした、キース中尉？ ウラキ少尉に何かあつたのか？」

苦しげな顔で押し黙つたままの二人の風体を見た三人がゴウに発生した深刻な状況を想像する、演習中の事故もしくは自分達の選択とは違う特殊な環境故に生まれた想像もつかない事態。

「ウラキ伍長は自分の意思で当基地所属の予備役に編入、すでに退去いたしました。」

動きの止まつた五人から少し離れた場所でのその事実を冷静な声で告げる女性の声。振り向いた彼らの目に二ナの姿が映り込んだ。

「おおつ、二ナさん！」

大声を上げたモンシアが素早く声に反応して駆け寄つた。その後ろ姿を追う様にゆっくりと歩き出す四人、真つ先に駆け寄つて二ナの手を両手で握りしめたモンシアが迫る様に言った。

「まさかこの様な辺境の地で再び貴方に巡り合えるとは何たる偶然、いやこれは神様が俺達二人に与えた恵みによる必然。このベルナルド・モンシア、今度こそ貴方を悪の手から奪い返す為に参上つか奉りました。　　て、今何て言いました？」

何も言わずににっこりとほほ笑む二ナを見てモンシアが思わず尋

ねる、そこへ被せる様にベイトがモンシアの背後から声を掛けた。

「久しぶりです、二ナ・パープルトン。元気そうで何よりだ。……」

「ウラキがこの基地にいないって？ それも『伍長』ってどういう意味だ？」

「予備役に編入とはどういう事です？ それじゃあまるで退役軍人と同じ扱いじゃないですか。」

口々に疑問を投げかけるベイトとアデルの背後でその様子を見守るキースとモウラ、三人に正対した二ナが詰め寄る三人に向かって言った。

「理由は分かりません。」

「分からないって…… あんたが分からないんじゃ他の誰が分かるって言うんだい。奴の居場所は？」

「それも分かりません。ただ予備役の編入は本人の強い意志で申告された事で、ジャブローで審議された後いくつかの条件付きで認可されたと言う事です。彼と接触しない事もその一つです。」

冷静な口調で淡々と話す二ナに驚きの視線を向ける三人、いやそれはキースやモウラも同様だった。まるでコウがいなくなった事を他人事のように三人に告げる二ナの口調や表情は明らかに昨日までとは違う彼女の様な気がする。モウラは二ナのそれがまるでコウと知り合う前の彼女の様であるかと心の中で呟き、キースは昨晚アデリアとマークスが帰隊した時に頑なに事実を隠ぺいした キー  
自身も詳しく問い質さなかったという事もあるが 事に何か関係があるのかと勘繰りながら二ナを見守る。

「なるほど、そんじゃあん時の仕返しはもう出来ないって訳ですね？」

いつの間にかニヤけていたモンシアが真顔に戻っている。モンシアの言葉を受けてベイトとアデルも真顔で二ナを見つめている。その表情を受けた二ナが背後から聞こえる足音を聞き付けて振り返った。視線の先で駆けて来るキースの部下の姿を横目で見ながら微笑む。

「キース中尉、彼らが来ました。」

二ナの呼びかけにキースが反応した。三人の傍らを過ぎて二人の隣に立ったキースが踵を返して直立の姿勢を取る、その背後に駆け寄ったアデリアとマークスが見事な姿勢でベイト達に敬礼をした。

「紹介します、僕の部下で当基地のモビルスーツ隊の隊員です。」

「マークス・ヴェスト軍曹であります。」

「アデリア・フォス伍長であります。」

二人に向かってそれぞれに軽く敬礼を返すベイト達、モンシアが二人の姿を舐め回す様に見ながら言った。

「ふーん、坊やお嬢ちゃんかい。俺ア男には興味ねえんだがそっちのお嬢ちゃんは気になるねえ。どうだい、今度俺とサンパウロの夜でも満喫しに行かねえかい？ これでも結構女の子を喜ばせるコツを心得てるんだぜえ？」

「申し訳ありません、大尉殿。自分は任務の為当基地を離れる事が出来ません、お心遣いに心から感謝いたします。」

煽るようなモンシアの言葉にむっとした表情を浮かべて、しかし必死に堪えて対応するアデリア。隣に立つマークスの表情を横目で睨んで『あんたも何か言い返しなさいよ』と目で告げるアデリアの声を黙殺したままマークスは微動だにしない。

「そんなつれない事言うなよ、せっかく上官が誘ってんじゃねえか。こんな埃臭え場所に閉じ籠ってたんじゃあせっかくの色気も台無しだ、たまには思いっきり羽目を外してストレス解消しねえと可愛いボデイが干からびちまうぞ？」

アデリアの額に掲げた手がわなわなと揺れる。ニヤけたイタリア系の上官のふざけた顔を直視しない様に視線を相手の胸元に向けて、それでも目尻は攣り上がっている。モンシアがアデリアの残り少ない忍耐力を根こそぎ刈り取る様に姿勢を下げてアデリアの目に自分の顔を突き付けた。

「んー？ 返事はどうなんだい？ ここで言い辛れえッて言うんならあとで聞いてやってもいいんだぜえ？ なーに時間は今日一日

十分ある、お嬢ちゃんさえその気になれば明日の今頃にヤラテンの世界だ。一人で淋しいツてんならここにいる全員をご招待してやってもいい。」

「こ、このお」

隣に立つマークスにはアデリアの堪忍袋の尾がドツカンと炸裂した音が聞こえる。慌ててアデリアとモンシアの間に身体を捻じ込んで、火花を散らす二人の視線を遮った。

「申し訳ありません大尉殿。彼女は現在病み上がりで体調がすぐれません。もしご都合が宜しければ後日、大尉の部隊に正式な書簡を持ってご返答とさせて頂きたいのですがよろしいでしょうか？」

「『病み上がり』イ？ 俺にヤア坊やの方がよっぽど病み上がりに見えるんだがよ、そんなふらついた足元でこれからヤレんのか？」

キース中尉つ。」

上体を起こしたモンシアの口から形式ばった呼び方をされたキースが驚いてモンシアを見た。人を喰った様な笑いは健在だがその目は真剣だと言う事が分かる。

「『ヤル』とはどういう事ですか、モンシア大尉？」

尋ねた瞬間にベイトが正面から近づいてキースの肩をポンと叩く。自分よりわずかに背の高いベイトの顔を見上げたキースに向かってベイトが言った。

「なに、今日一日どうせ暇なんでな。せっかくだから貴様らと模擬戦でも、と思っただがどうだ？」

「模擬戦じゃねえ、これア軍事教練だ。相手もいねえだろうひよつ子の手前らに宇宙軍きつてのモビルスーツ隊の隊長達が三人も、雁首揃えて胸を貸してやるうってんだ。断りやがったら罰があたるぜえ？」

モンシアの売り言葉に苦笑いしながらアデルがキースの傍へと近寄って来る、肩越しにマークスとアデリアの顔を交互に眺めながら言った。

「失礼、フォス伍長。この人は昔っからこうなんです。女性に対す

る一つの挨拶だと思って聞き流してください。

良い隊員達

ですね、キース中尉。お互いの意思の疎通がよく通っている、これなら面白い模擬戦になりそうだ。」

思わぬ申し出に信じられないとばかりに硬直して声を失ったキース。代わって声を発したのは二ナだった。

「技術主任である私からも隊長にお願いします、こんな機会は

連邦のE級と模擬戦が出来るなんて滅多に無い機会は

是非お願いします。」

二ナの言葉はキースやモウラの心中を代弁する物だった。元より断る道理が無い、降って湧いた様なこの機会を反故にする事など及びもつかない。

「ありがとうございますっ！ よろしくお願いします！」

頭を深深と下げるキース、そしてモウラとマークス。アデリアだけは頭を下げながら猛烈な笑みを浮かべて小さく拳を握りしめる。

「礼なら後にした方がいいかも知れんぞ、キース。終わった後に『やるんじゃなかった』と後悔する事になるかも、だ。久々に手加減なしの真剣<sup>マク</sup>でやるからな、覚悟してるよ？」

ニヤリと笑いを浮かべたベイトが後の二人に目配せする。小さく頷き合う三人の姿を余所に二ナは、新しいOSをどこに仕舞ったかを頭の中で探し始めていた。

モウラと二ナに連れられてハンガーへと向かう三人の後ろ姿を見つめながら  
アデリアだけは睨み付けていた  
アデリアが呟いた。

「ちょっと、何あれ。テイターズのパイロットってみんなあんなハラメント野郎ばっかなの？ ほんつとムカつくっ。」

恐らく頭の中にはガゼエフの影も覗いているのだろう、嫌悪を隠せぬアデリアの隣でマークスが三人の印象を評して言った。

「なんか、三方とも性格がバラバラで不思議な感じです。確かに一人一人はそれなりの経験と実力を兼ね備えたパイロットだとは思

うんですが……あの三人でチームが成り立つんでしょうか？」

「彼らは元々チームさ、『不死身の第四小隊』出身のな。」

「『不死身の第四小隊』？」

耳慣れない言葉に首を傾げるマークス、無理も無い。そのチームが勇名を馳せたのは彼らがまだ士官学校に入学したかしないかの時期『一年戦争』末期に行われた『チェンバロ作戦（ソロモン攻略戦）』と『星一号作戦（ア・バオア・クー攻略戦）』の損害評価時に於いてだ。二つの戦いで合わせて七割以上の損耗率を記録する中無傷で終戦を迎えた部隊は殆どいない、希少種とも言える生き残りはその貴重な経験を買われて後進の指導に当たっている者が多く、ましてや一堂に会して模擬戦の相手になってくれる事など今の連邦軍では奇跡に近い確率だ。

「そう。こんなチャンスは二度と来ないぞ、技術主任も言っただけど全員がエース級だからな。お前達もいつも以上に全力で掛らないとあつという間に絞められるぞ？ 心して教われ。」

「じゃ、じゃあんな奴らが隊長より強いって事？ 信じらんない、て言うか認めたくない。」

「当たり前だ。彼らは俺の元教官で」

その言葉を口にする事にキースは喜びを感じる。トリントンの戦いで殆どの仲間を失い、最後まで生き残ったコウも傍には居ない。その言葉を口にする事が出来ると言う状況がこれ程までに嬉しいとは思ってもしなかった。

満面の笑みを浮かべて二人の表情を見つめたキースが、口元を綻ばせながらその言葉を口にした。

「『戦友』だ。」

ベイト達は模擬戦にゲルググを選択した。キースの予備機を含めて丁度三機あつたと言う事もあるが、何より紅白戦と言う事もあつて機体は統一した方がいいだろうと言うベイト達の意見による物だ。もっともそうなるにキース達はジムとザク二機と言う混成部隊に

なり、その性能差は格段にベイト達に分がある様に思えるのだが決してそうではないと言う事は二ナやモウラ、そして当のベイト達にも分かつている事だった。

「ゲルググは元々宇宙戦用に開発された機体だ。汎用性が高いから地上戦にも使えるって触れ込みで改造しちゃいるが、地上戦用に作られたジムやザクに比べて小回りが利かねえ。一対一ならパワーに物を言わせる事も出来るが、これはチーム戦だ。そのの所をどう補って戦うかと言う事が俺達に勝つ秘訣と言ってもいい。」

模擬戦前でのブリーフィングで指導教官宜しく、アデリアとマークスの前で機体についての説明を行うベイト。モンシアとアデルは既に機体のセットアップの為コクピットに潜り込んで着々と準備を始めている。

アデルのコクピットにはジェスが潜り込み、モンシアのセットアップには二ナが立ち会う事になった。『門前の小僧』で二ナのセットアップのやり方を見様見真似で習得したジェスは通常範囲でのセットアップ変更を出来るまでに上達している。『マニュアルを見ずにコントローラーを動かす』世代の特権とも言えよう。

「二ナさんも良いけどあつちのお嬢ちゃんもかわいいねえ。なんだアキースの野郎、まるで自分の為のハーレムでも創りやがったのか？」

隣のコクピットでアデルの前に潜り込んで作業をするジェスの様子を見たモンシアが言った。機体の各部を動かしながら背後で指示を出すアデルとにこやかに対応するジェスの姿はまるで年の離れた仲のいい兄妹の様だ、と二ナは言った。

「兄妹？ 親子の間違いじゃねえの、そりゃ？」

「そんな事を言うとアデル大尉に怒られますよ？ もう同じ階級なんだから昔みたいに先輩風を吹かせる訳にもいかないでしょう？」

二ナはそう言うとモンシアの前に潜り込んでセットアップの準備を始めた。モンシアの足の間には体を沈めた二ナがキーボードを引き出してモニターを見つめる、勢い二ナの身体はモンシアに密着して

作業をする事になる。両肩にかかる金髪と身体の触れ合う感触に思わず目尻を下げて、この千載一遇のチャンス逃すまいと二ナの身体に手を伸ばそうとするモンシアの顔面に二ナの手の中に入ったチエックリストが叩きつけられた。

「痛ってえっ！いきなり何すんだ二ナさん！？」

「セクハラする暇があるんでしたらチエックリストでも読み上げて下さい。セッティングはアルビオンの時のままでいいですね？」

「あ、ああ、ペダルの踏力だけ3.5に変えてくれ。後はあの時と同じでいい、って、憶えてんのか？」

ファイルの直撃を食らった鼻を赤くしたままチエックリストを手にとったモンシアが思わず二ナに尋ねた。二ナと最後に別れて以来、何年経った？彼女はあの時アイランド・イーズに向かったまま消息を絶ち、彼女の安否が確認されたのはアルビオンが地球衛星軌道上で廃棄されて生存者が地球に降下してからの話になる。三年の月日を経過しても尚あの時の記憶を持ち続けている事にモンシアは驚いた。しかしその驚きを裏付ける様に二ナの指はキーボードの上を軽やかに走って次々にセッティングを変えていく。

「…… 驚れえた、ほんとに憶えてるんだ。」

「モンシア大尉のだけじゃなくてちゃんとみんなのデータも頭に入れてありますよ？ ベイト大尉はスロットルの開度抵抗をプラス0.3、利き腕が左手だから大尉の反応係数にジエネレーターが追い付かないせいです。アデル大尉は乗ってた機体がガンキャノンだったせいか比較的大人しめのセッティングですね。三人の中ではモンシア大尉のセツトが一番過激ヒキキだったので私が受け持ちました。」

「じゃあ、当然キースのも」  
チエックリストに目を通しながら真顔で二ナの後頭部に話しかけるモンシア。

「ウラキの野郎の分も憶えてるって訳だ。」

モンシアの言葉に二ナが反応した事はキーボードで踊る指がピタリと止まった事で分かる。出撃準備のハンガールの喧騒を遮る沈黙は



ほんの一瞬、二ナが言った。

「…… ええ、勿論。」

「あなた、変わったな二ナさん。あん時とは随分と変わった。」  
感慨深げにそう呟くモンシアの言葉を余所に、二ナの指が再びキ  
ーボードを叩き始める。無言で聞き流す二ナの様子や心情を無視し  
てモンシアが言葉を垂れ流した。

「昔のあなたじゃ俺の機体のセッティングに関わるなんざ考えられ  
ねえ。少なくともあの戦いの渦中にいた時のあなたならな……  
ウラキと何があった？」

モンシアの問い掛けに沈黙を持って返答する二ナ、モンシアが尚  
も言葉を続ける。

「あれだけの酷い状況ナンバーテンでも生き延びたあなたとあの野郎だ、俺アて  
つきりそのまんま結婚でもしちまうんじゃねえかと思ってたんだが  
ねえ。それがどうい風ナンバーテンの吹きまわしだか知らねえがいつの間にか  
別れたと来てやがる。もしそうだと分かってたんならこの俺が二ナ  
さんの事を」

「マリーさんに言い付けますよ？」

ぼそりと呟いた二ナの言葉に思わず体を仰け反らせて息を飲むモ  
ンシア。指の間に挟んだ写真をひらひらと、肩越しにモンシアに見  
せつけながら二ナが言った。

「アデル大尉に聞きました、ご結婚なさったそうでおめでとうござ  
います。これでモンシア大尉の女遍歴も年貢の納め時と言う事です  
ね？」

「あ、アデ、アデルの野郎余計な事を　　二ナさん、いやそれ  
よりその写真は一体」

「アデル大尉から頂きました、何でも今日一日だけ絶大な効果を発  
揮する魔除けの護符だと言う事で。さっそくご利益があったみたい。」

二ナがその写真を手元に置いてしげしげと眺める。自分達の記憶  
の中にあるモンシアの笑顔とは全く違った、照れ臭そうな笑みを浮

かべてウエディングドレスの女性と共にタキシード姿のモンシアがそこには映っていた。

「あらまあ意外でしたわ、モンシア中尉の好みがこんな可愛らしい女性だったなんて。知らない人が見たらちよつとした幼女趣味ロリコンに見えますね。」

「マリーは幼女じゃねえっ、れつきとした二十四歳だっ！」

モンシアの両手に抱え上げられたマリーの姿は背格好が小さく、どう鼻眞目に見ても小学校の高学年だ。モンシア自身が大声を上げて抗弁しなければ誰にも信用して貰えないほど幼い風体をしている。「ああ、それにしてもモンシア大尉がどうして一生懸命私を誘って下さらないのかと思っていたら全然大尉の好みじゃなかったなんてショックです。これでも女ですから人並み以上の自信がありましたの。」

「お、おお、おおおっ」

頬に片手を当てて薄ら笑いを浮かべながら、フルフルと頭を振る。二ナの後ろ姿を見つめながらワナワナと震えていたモンシアが上体を起こして隣のゲルググに向かって大声で叫んだ。

「アデルルッ！！ てつめえよくも余計な事をつ！ 人の恋路の邪魔するなんてどんだけだアッ！？」 馬に轢かれて死んじまええっ！

「それを言うのなら『馬に蹴られて』ですよ。全く、結婚して落ち着いたと思ったらやっぱりパープルトンさんにちよっかい出したんですか？ お守りあげて正解でした。」

二人分の忍び笑いを含んだアデルの声がコクピットの無線機から洩れて来る。足の間でくすくすと笑う二ナと隣のコクピットの二人を交互に見やりながら、からかわれたモンシアが大声で宣言した。

「もーこうなりやけだ、このモヤモヤは模擬戦で晴らすしかねえっ！ 二ナさんにや悪いがここだからかわれたお返しに奴らをギツタンギツタンに叩きのめして、せめてものマリーへの土産話にさせて貰うぜえっ！」

「さて、それはどうでしょう？」

激昂するモンシアの前から立ち上がってコクピットから抜け出す二ナ。離れていく二ナの感触を名残惜しそうな目で見送るモンシアに向かつて二ナが言う。

「こつちにも秘策がありますから。ひよつ子だと思つて舐めてかかると『また』痛い目に遭いますよ、モンシア大尉？」

ポケットから抜き出した三枚の起動ディスク、訝しげな眼でそれを見つめるモンシアの前に『オールドメイトばば抜き』のカードを広げるが如く翳した二ナが自慢げに笑つてモンシアを見る。二ナが擲擧した、コウと一号機による過去の敗戦を脳裏に浮かべたモンシアが不敵な笑いを浮かべて二ナに向かつて切り返す。

「なるほど、それがあん時のウラキの野郎の代わりつて訳だ。だが、そんな起動ディスクの書き換えだけで俺達に勝てると思つてるんですかい？」

「とんでもない、無理に決まっています。でもこのディスクの中には私のとつておきの発想が詰まっている、大尉が彼らと三回戦目を戦う頃にはきつと克目して彼らの事を見る様になるでしょうね。」

二ナの考案したOSの新機軸『インテリジエント・レコード』を搭載した三人の起動ディスクを大事そうにポケットに仕舞う姿を眺めながらモンシアは、二ナの発言からそのOSの正体が二ナによつて作り上げられた『成長機能を備えたOS』である事を言外に知る。「それでキースより先に諸手を上げて賛成したつて訳だ。俺達との模擬戦で得られるデータを残らずそれに記録する為に……いやはや、抜け目のない事で。自分の作品を仕上げる為にどんな機会でも卒なく利用する所なんざ、あの頃のまんまだぜ。」

「大尉がおっしゃった通り、この基地にいる限りこんな機会は滅多にありませんから存分に活用させて頂きます。ですから決して手を抜かないで『ギッタングリッタ』の叩きのめしてあげて下さい。皆さんにそうして頂ければ頂くほど、あの子達は強くなる。」

二ナはモンシアにそう言うところコクピットに隣接しているバケット

に飛び乗った。振り返ってバケツトの操作盤に手を伸ばして下降のボタンを押そうとした二ナに向かって、モンシアが言った。

「なあ、二ナさん？」

操作盤から視線を上げたのは耳に届いたモンシアの声が今までに聞いた事も無い静かな物であったからだ。視線の先でコクピットに座ったまま、チエックリストの項目通りに計器盤のスイッチをオンにするモンシアが手を休める事無く言った。

「俺ア二ナさんが思ってる通りの女にだらしない男だ、だがそのお陰で他の野郎には無い取り柄が一つだけある。 何だと思

います？」

「さあ？」

小首を傾げて返事をする二ナに、モンシアは作業の手を止めて真っ直ぐに見詰めながら言った。

「『女を見る目』です。…… マリーは見ての通り幼い顔立ちをしてるが芯のしっかりした女でね、俺が女のケツばっか追っ掛けるのを我慢して、黙って待っていてくれやした。他人に都合のいい女と言われちまえばその通りなのかも知んないが、それでもマリーは何時でも俺の帰りを笑顔で出迎えてくれる。俺がマリーと結婚を決めたのは、多分その笑顔が見たいからなんですよ。」

初めて明かされるであろうモンシアの胸中を聞かされた二ナは黙ってモンシアの表情を眺めている。モンシアが言葉を続けた。

「俺達『モビルスーツ乗り』は他の誰よりも死が一番近い場所にいる、あん時もそうだった…… 二ナさんが抜け出したアルビオンの甲板で敵の砲火が飛んで来る中何度駄目だと思った事か。でもその時俺の頭の中じゃ他の誰でも無いマリーの笑顔しか思い浮かばなかったんでさあ。もっかいここを生き延びて、またマリーに会うんだと。そう思つて死に物狂いでジムを動かした。ま、運よく生き延びて今ここにいてるのは結果論なんですがね。」

「モンシア大尉の口からそんな台詞が出るなんて思つてもみませんでした、もっと刹那的な生き方をしてる方だとばかり思つてました

から。」

「人一倍臆病なだけなんでさあ、いつもモビルスーツに乗って出撃する時には手が震えて、こんな棺桶で死ぬのはいやだーって叫びたくなる。でももう逃げられないと思っただ時にはいつもマリーの笑顔を思い出すんです。コレを生き延びればあいつに会える、何人殺してでもあいつの元に帰るんだってね。」

モンシアの口から零れる血生臭い表現が決して非道な物ではなく、鮮やかな命の煌めきに感じるのはなぜだろうと二ナは思う。戦争という前提が無ければ兵士と言うのは唯の人殺しだ。だが彼らには守らなければならぬ物と者があり、その為に互いの命を削り合って生きていくしか術を知らない人種である事も二ナは知っている。あの時の、コウモ

「俺アウラキの野郎は大ッ嫌えだが、奴が二ナさんを選んだ事には納得してる。それアあんたが俺の目から見て『いい女』だからだ、マリーには負けませんがね？」

にやりと笑って二ナの顔色を伺うモンシア。モンシアの意外な言葉に驚いて、しかしモンシアの本質の琴線に触れた事で初めて知る稀代の女つたらしの告白にっこりと笑って答えた。

「初めて会った時にそんな台詞を聞いたかったですわ、それなら私もひよつとしたらデートの約束をお受けしたかも知れませんが。」  
「あつ、そっかあ！俺とした事が何てへマをしちまったんだろ、くうーっ。大事な所でいつもこれだあ、我ながら手前の不器用さ加減にいい加減嫌気がさすぜ、全クっ！」

額に手を当てて本気で悔しがるモンシア、その姿があまりにも滑稽に見えた為二ナが思わず吹き出した。素の表情を見られたモンシアがばつの悪い表情を向けても尚二ナの笑いは止まらない、お腹に片手を当てて押し寄せる笑いの衝動を何とか収めようと努めるのだが、思えば思う程その波は止まらない。初めて聞く二ナの大きな笑い声にハンガーで作業をする全員　アテリアはコクピットから身を乗り出して凝視している　　が注目する中、モンシアが

二ナに向かつて微笑みながら言った。

「やっぱり女は笑った顔が一番いいや。男は誰でもその為に命を張って頑張れるんださあ。俺も、ウラキの野郎も。」

宇宙暦0086年6月21日・午後十二時。

金網のフェンスの向こうは連邦軍の敷地である、とご丁寧に書かれた錆だらけの注意書きは人だかりでコウの位置からは見えなくなっている。閑散としている様に思われたオークリーの何処にこれだけの人住んでいたのだろうと疑問に思わせるほど大勢の観衆が歓声を上げてオベリスクを見上げていた。

距離にして500mほど離れた場所に立つそれは晴れ上がったカリフォルニアの空を切り裂く様に屹立して、その物体が過去にどのような厄災を齎したか等忘れてしまふ程の存在感を示している。大声を上げて叱咤激励を繰り返す人々の声に耳を済ませたコウは、それがオークリー隊に向けられた声援である事に驚いた。

「そりゃ、当たり前だ。誰だっておらが地元の部隊を応援するに決まってるだろう？」

コウの疑問にそう答えるヘンケンはセシルと共に少し小高くなった丘の上に陣取って戦況を眺めている。昨日の今日でセシルと顔を合わせる事に後ろめたい気持ちを抱えていたコウだったが、セシルはいつもと変わらぬ明るい表情でコウの手に自家製のレモンスカッシュと共に双眼鏡を手渡した。

「はい、ウラキさんの分。宇宙仕様の物ですから倍率に気をつけて、フィルターが邪魔だったら取ってもいいですけど、太陽は覗いちゃダメですよ？ あっという間に網膜を焼かれますから。」

宇宙空間で使用する双眼鏡は口径を大きくする事で光を取り込みやすくしている。暗闇に浮かぶ超長距離の物体を視認する為に設けられた様々な機能はその度を越した集光性以外はまさにうってつけの道具と言ってもいい。

「これは？」

「

「私の私物です、宇宙軍時代の。ウラキさんもきつと見に来るだろうと思つて用意しておきました。」

昨晚の事実を知りながら尚、自分がモビルスーツ戦を見に来ると信じて疑わないセシルの洞察がそこに存在する。コウはセシルの先見を観念した様に笑つてそれを受け取つた。

「戦況は？」

「フォックス・ハント」

「対戦方式は『キツネ狩り』、攻守を交互に入れ替えての殲滅戦。

一回戦目は三十分、二回戦目は五十分。どちらもジャブロー選抜の勝利です。」

セシルの報告にヘンケンがチツと舌打ちをして答えた。

「なーにをやつてんだあ、俺に食つて掛つた時のあの威勢の良さは何処行つたんだおい。この試合が午前の部最後なんだからちつとは見せ場を作つてもらわないと」

「いえ、これは相手が強い。」

ヘンケンの不満に水を差す様にコウが言った。ヘンケンが思わず自分の双眼鏡を目から離して隣に立つコウを振り返る、コウはそのままオベリスクから目を離さずに呟いた。

「この相手に五十分持ち堪えた彼らを褒めるべきです。凄い……」

ジャブロー組の三機は恐らく三人ともエース級のパイロットです、あのゲルググをよくもここまで動かしてる。」

一回戦目はキツネ側でオベリスクの中に陣取つた、地の利がこちらにあるにも拘らずマークスとアデアはおび出されて十字砲火の餌食となる。二回戦目は狩人の側、相手の陽動に引っかかつて各個に撃破される。

相手の出方は分かっている、モンシア機が前方全域警戒としてこちらの出方を伺い、動き出した時点で指揮官のベイトが布陣を分析して対応策を割り出して実行に移す。作戦の要となるのはモンシア機であり、それを撃破してしまえば数的にも戦術的にも有利になる筈なのだがそうは問屋がおりさない。キースの銃撃をまるで知つて



いたかの様にヒラリと躲す自分のゲルググの姿を目の当たりにして、アデリアは驚きの声を洩らした。

「何でそれが当たらないのよおっ！」

三回戦目は三機による全周警戒を張った。同一範囲に固まる事は相手からの包囲殲滅を受ける恐れがあるが、モンシア機の存在を確認した時点で足止めして後方へ退却・一点突破で建物の外部に展開する作戦をキースは採用した。相手が雪崩れ込んだ時点で自分達は建物の外を迂回して包囲、キツネ狩りの攻守を逆転させようと言う算段だった。

「アデリアっ、下がれ！ 建物の外に一気に抜けるぞっ！」

「行かせるかよ、坊主っ！」

後方へと下がったマークスの機体の行く先に放たれるペイント弾の弾道。リード射撃によって確実に相手の機体を捉えたと確信したベイトの眼前で、マークスはザクの巨体を翻して回避行動に移った。一発の着弾も無く難を逃れたマークスの動きを見たモンシアが今度は驚きの声を上げる。

「おいおい、それがザクの動きかよ？ とんでもねえな」

脳裏に浮かぶ二ナの言葉、『ひよっ子だと舐めてかかるとまた痛い目に遭う』。確かにその通りかもしれない、とモンシアは思う。

一回戦目に見せた動きとは段違いの機動性を彼らの相手は見せている、キースが仕留めにくいのは三人とも理解しているが故にその目標をアデリアかマークスのどちらかに絞っているのだが其れも簡単にはいけなくなっていた。それは消費していく弾倉の数からも明らかだ。

「アデル、奴らを外に逃がすな。援護しろ。」

短く命令を下したベイト機の影からアデルが援護射撃を逃げようとするアデリアに放つ。同時に突進して近接戦闘に移行しようとしたベイトの模擬刀アタックによる突撃を見たアデリアが一瞬の硬直を見せた。

「一機目っ！」

ベイトがそう怒鳴ってアデリアの機体目掛けて模擬刀を振り下ろ

す。まさか銃の間合いの有利さを捨てて近接戦闘で相手を仕留めに  
来るなど考えもしまい、相手の虚を突くベイトの攻撃は思惑通りに  
アデリア機を仕留めたかに思われたその瞬間。

「何っ!？」

ベイトのモニターからアデリアの機体が消えた。空を切る模擬刀  
が床を叩く直前にベイトはアデリアのザクが自分を回り込む影を見  
た。後ろを取られた形になったベイトが慌ててペダルを踏み込んで  
バーニアによる回避を試みる、同時に周囲に着弾するアデルの援護。  
「! これを躲すか!」

感嘆の声を上げるアデルの眼前でアデリアは『足』を遣って弾幕  
を回避した。そのままの勢いで壁へと走ったアデリアのザクが破れ  
目を抜けて外へ脱出する姿を目で追うモンシア。

「やるじゃねえか、お嬢ちゃん。あのタイミングでベイトが仕留め  
そこなつた所なんざ初めて見たぜ。」

「凄いですね、彼女は。まさかバーニア無しで弾幕を躲すとは思  
いませんでした。だんだん動きがよくなっている。」

ベイトの傍に近寄って来るモンシアとアデルが口々に感想を述べ  
る。

「なるほど、どうやら攻守の逆転を図つたつて所か。さっきの戦  
いで持ち堪えた事で活路を見出したつてか?」

「どうする、指揮官殿? このまんまじゃあ袋の鼠だぜ、奴ら嵩に  
かかって追い詰めた気になつてやがる。」

「ここに固まつてるとまずいです、弾幕で足止めをされた所で各個  
撃破。さっき私達が執った戦法をそのまま利用するとはキーヌ中尉  
も侮れませんね。」

それぞれが周囲を警戒しながらこの先の戦況を予測する三人。分  
析と判断はこの場合指揮官であるベイトに委ねられ、責任を課せら  
れた当の本人はキーヌ達の意図と思惑を読み取って不敵な笑みを浮  
かべた。

「フン、束になつてかかって来れば勝てるっても? どうにも舐め

られたもんだぜ。」

そう言つとベイトが二人に向かつて模擬刀を装備する様に指示する。ペイントガンを静かに床に置いた二人は背中のラックに収めてある鞘を引き抜いてスイッチを入れた。ヴン、と小さな唸りを上げて伸び出すレーザーブレードが薄い光を放つて実体化する。

「どうやらホームルームの時間は終わり、これからが本番だ。有利になつて付け上がつてる甘ちゃん連中に一年戦争の生き残りの怖さを教えてやれ。」

発言の意図を察した三人が一斉に散開して外壁部分へと駆け出して行く、ベイトは真っ直ぐ、恐らくその壁の穴から侵入するのが一番簡単で確実な場所に向かつてゲルググを移動させながら言い放つた。

「戦いは数や状況だけじゃない、個の力が相手を上回つてこそ初めて勝利を手にする事が出来るんだつてなあっ！」

「なるほど、外に出て仕切り直しか。攻守を入れ替えて体制が整う前に一気に殲滅しようつて腹なんだろうが、そう上手くいくかな？」

外壁から飛び出して地上へ降り立った三機のモビルスーツが散開して再び跳躍を開始する、舞い上がる砂塵を突き抜けて大空へと向かう姿をコウは何も言わずにただ見つめている。バックパックのバニア全開で外壁すれすれを伸び上がるモビルスーツの姿はまるで鳥が天空を目指して駆けあがる姿にも似て、応援に立ち会う人々の心を魅了した。大きな歓声が上がる。

「どうだ、ウラキ君。これで彼らに勝ち目はあるのか？」

「……無理でしょう。俺があっちの側ならオークリー側の意図は見え見えです、各個に散開してそれぞれを待ち伏せるでしょう。」

「対一ならば機体のポテンシャルもパイロットの実力もジャブロー側が圧倒的に有利です、キース達に勝ち目はない。ただ」

戦況を冷静に分析するコウの手が震えているのがヘンケンには分

かる。自分の横でセシルの双眼鏡を目に当てたままじつとモビルスーツを眺め続けるこの男が、再びあの機体に乗り込む事は恐らく無い。

戦力にならなくなったからだとか愛する者の役に立たなくなったからだとか、そんな物は自分の本心を覆い隠す為の言い訳でしかない。とヘンケンはセシルの報告を耳にして思った。そうじゃない、彼はもつと大事な物を失ってしまったのだと。

自分の存在意義を証明する為の半身、自分が生きる為に必要な掛け替えのない物、彼にとってモビルスーツに乗ると言う事はそれと同義に当たるんじゃないのか、とヘンケンは一縷の望みを繋いでいたセシルもあの日の会合以来、コウの参戦に一縷の望みを繋いでいたセシルもヘンケンのその意見に同意した。そしてそれは保留にしてあった議題の結論を導き出すに十分な論拠となる。

彼らはコウを諦めざるを得ない、類稀なる資質を持ったこのエースパイロットが失った物はそれほどまでに大きいのだと。

だからヘンケンはこれでいいと思う、少年の頃に誰もが憧れる英雄願望に思い焦がれたままの姿で地を生きる彼の生き方を認めてやらなければ。

それこそがコウ・ウラキと言う一人の人間の人生を穏やかに全うさせる為の手段なのだから。

「一つだけ勝機があるとすれば、カギを握るのはあの二人です。彼らがジャブロー組の裏をかい合流して一機でも墜とす事が出来たなら、勝つ見込みはあります。」

「あの二人？ 隊長機じゃないのか？」

ヘンケンの思考はコウの放つ何とも言えない雰囲気には押し縮されて収縮する。焦燥と期待の混濁するコウの声は既に一観客の予想では無く、関係者のそれになっている。

「キースはそう簡単には墜ちません、打って出なければ少しの間なら持ちこたえられる。その僅かな時間に戦況を動かす事が出来るかがこの戦闘の勝敗を決めます。」

「僅かな、ね。……ちなみにそれはどれ位だ？ 十分、五分？」

「コウと同じくザクの消え去る方向へと目をやりながらヘンケンは尋ねた。まるでコウの声が聞こえたかのように二機のザクは空中で軌道を交差させて合流を凶っている、キースのジムとは反対側の壁へと取り付いた二人のザクからヘンケンは目を離してコウの横顔に眼を向けた。」

「ジャブロー組がそうと気付くまでと駄目でしょう。一分か、二分。」

エンゲージ  
交戦と同時に決めない

ジムが構内に飛び込んだ瞬間に発生する大出力のバーニアが掻き鳴らす甲高い噴射音。状況の異常を感じたキースの機体が慌てて跪いたその頭部を掠める模擬刀の軌跡、後を追って駆け抜けるベイトのゲルググ。

「いい反応だ、キース。改良型にしちゃよく動く。」  
壁に激突する寸前にアポジを噴かして方向転換を図るベイト、振り向きざまに振り下ろされたキースの模擬刀を体の正面で受けきるモニターに大写しになるゲルググの装甲板の内側からベイトの声が聞えて来る様だ。

「だが、お前はどちらかと言うと接近戦に向いて無い、いつまで俺とやり合えるかなっ！？」

叫びと共にスロットルを押し上げる、出力の上がったゲルググはキースのジムを押し返して一気に間合いを離す。崩された体勢を立て直そうとするジムに向かって追い打ちを掛けるベイト、振り下ろされた模擬刀を済んでの所で躲して距離を保つジムを見て、ベイトが言った。

「残念ながらお前達の考えはお見通しだ、俺達が殺し間キリングファイナルドのど真ん中でお前達に囲まれるのをじっと待っているとも思ってたのか？ そんな甘い考えが通用すると思ってたんなら」

手にした模擬刀を構えて対峙する二機のモビルスーツ、ベイトが

吠えてフットペダルを思いつきり踏み込んだ。

「お前はまだまだ小隊長の器じゃねえって事だっ！」

アデルはその破壊音を自分の正面の穴からではなく、モンシアの向かった方角から聞いた。ベイトがキースと交戦を始めた事は無線を通じて分かっている、同時突入では無く時間差での突入

それも自分の前には誰もいない  
が行われた事にアデルは一抹の不安を覚えながらモンシアとの回線を開いた。

「モンシア大尉、どうやらそちらに二人が向かった様です。今から援護に  
」

「いらねえよ、お前はベイトの援護に向かえ。ひよっ子共の相手は俺一人で十分だ。」

忌々しそうなモンシアの声がアデルの耳に届く、どうやら既に二機のザクと交戦中らしい。対応に忙殺されるモンシアの息遣いと端々に聞こえる口汚い罵り文句を耳にしながらアデルは、モンシアの安否を危惧して再び援護の必要性を解く。だがモンシアはその問い掛けにモンシアらしからぬ冷静さで対応して来た。

「いいから早くベイトと一緒にキースの野郎を先に仕留めてこい。そうすりゃこの二人を墜とす事なんざ造作もねえ、お前らが帰って来るまでに俺がこの戦線を維持する事が出来れば、それで俺達は勝ったも同然だ。」

モンシアの提案は的を得ている。今までの二回戦ではどちらもキースを最後に仕留めている、それはアデリアとマークスを第一脅威目標に挙げていたと言う事もあるが何よりキースが仕留めにくいと言う事を三人とも共通の認識として持っていたからだ。実際三対一になってからのキースの奮戦ぶりには目を見張るものがある、二回の対戦でベイト達が完全勝利出来なかったという事実がそれを証明している。

「今度こそ完全勝利でこの試合を終わらせるぞ、弟子にいつまでもでかい顔させたんじゃあバニング大尉に申し訳が立たねえって

モンだ。分かったな？」

今は無き上官の名前を引き合いに出してまで勇気を鼓舞するモンシアの物言いに日頃の余裕が無いと言う事を悟ったアデルが、モンシアの意見の正しさを認めて復唱した。

「了解です、アデル機はベイト機と合流の後敵隊長機を排除の後にモンシア機の援護に回ります。御武運を。」

そのアデルの堅苦しい復唱に向けて放たれるであろうモンシアの憎まれ口を耳にしている暇はアデルには無い、徐々に動きを良くしていく二機のザクを相手にあのモンシアが『負けない戦い』を余儀なくされると言うのだ。一刻も早く役目を果たさなければ敗北必至の状況を予測してアデルはモンシアの姿を確認する事無くベイトの向かった方向へとバーニアを吹かして去っていく。

「へ、男に武運を祈られてもなあ。第一これくらいのピンチで運頼みになるようじゃあ『オラシオン』の第一小隊の名が泣かあ。要は

モンシアが物陰から躍り出て一気にバーニアを噴かす、一直線に猛烈な勢いで迫るゲルググの姿にうろたえた様にザクがペイント弾を乱射する。着弾した個所は電氣的な信号のカットが施されて機能を停止し、それがダメージとしてコクピット内のモニターに表示される。コクピットをカバーした左手と何か所かのシリンダーが停止したがそれでも致命的なダメージは無い。あつという間にザクの懐をとったモンシアが模擬刀をその勢いのまま叩きつける。

「先手必勝。攻めこそが最大の防御って事だ、分かったかひよつ子共っ！」

迷わずコクピット目がけて振り下ろされるモンシアの模擬刀、間違いないその刃がザクのコクピット前面の装甲板に当たり、その瞬間に致命傷と判定されたザクは機能を停止する。勝ちを確信したモンシアが歡喜の笑みを浮かべて眺めるモニターの中で、果たしてそのザクは信じられない動きを見せた。

「！ 何だと、この野郎っ!？」

降りていく刃を掬り抜ける様に逃げていくザクの巨体。そのザクは攻撃の呼吸を読んだ瞬間に後ろへ跳んでモンシアの模擬刀による攻撃を躲そうと試みていた。慌てて腕を伸ばして何とかその先端をザクに当てようとするモンシア、どこかに掠りさえすればそれでザクの機能の何パーセントかは喪失する、このまま無傷で逃してしまえば自分の機体の損傷と比較して間尺に合わなくなる。

ゲルググの上半身が伸びきる、だが模擬刀の先端はザクには届かない。そう思った瞬間にモンシアの身体は精密機械の勢いで連動して回避行動に移っていた、こいつが自分を誘き出す為の陽動だとしたらもう一機の執る行動は

「ちいつ！ こしやくな真似をつ！」

伸ばした右手を畳んで模擬刀をゲルググの上半身に寄せる、その瞬間に横合いから突き出されたもう一機のザクの模擬刀が当たった。受けた瞬間の反動を利用して体勢を立て直しながら離脱するモンシア、遊園地のコーヒーカップから眺める景色の様を目まぐるしく動くモニターに迫るザクの影を追いながら、右手のスロットルとフットペダルを微妙に操作して信地旋回を終了する。ピタリとザクの正面に向かって対峙したモンシアの機体を見て、ザクはそれ以上の追撃を中止して間合いを取った。

「おお、あぶねえ。……負けが込んでちったあ知恵を遣いだしたって所か。だが、お嬢ちゃん。」

そう言いながらモンシアがじりつと間合いを詰めに掛る。カーキ色のアテリアのザクはその拳動だけで後方へと下がる羽目になる。

「俺をここで早く仕留めねえと、キースはあつちで犬死だ。そしてらまたお前さん達は全滅する事になる、それが嫌なら」

コンソールの手元にあるいくつかのトグルを押し上げるモンシア、姿勢制御用のアポジにバックパックの出力を振り分けて速度よりも機動性重視のセッティングに変更する。ゲルググのスカートの中に隠されたスラスタが咆哮を上げてモンシアの身体を揺さぶった。

「かかつてきなっ！」



「畜生、外したっ！」

たった一度のチャンスかもしれないのに、と臍を噛むアデリア。目の前で全てのスラストに火を入れたモンシアのゲルググが自分の周りを回り込む姿を追い掛ける。

「怯むな、アデリア。援護する。」

「はいっ！」

無線から洩れる声に力強く答えたアデリアがフットペダルを蹴っ飛ばしてザクの足に力を加えた。0スタートゼロの瞬発力は摩擦抵抗が発生する分二足歩行での機動の方が早い、アデリアは動き出しにかかるモンシアへと一気に駆け出した。彼我の距離をダッシュで詰めて突きを繰り出す、出力のタイムラグで出遅れたモンシアは迫ってくる模擬刀を弾き返すとそのままの体勢で距離を取って回り込む。

「甘いな、お嬢ちゃん！ 相棒の方がお留守になってるぜっ！」

回り込みから全部のスラストの推進力を直進に切り替えて真正面に姿を晒したオリブドラブのザクへと突進する。モンシアがあつという間に近づくザクに向かって吠えた。

「さつきみたいならたえ弾じゃあもう止めらんねえぜ、どうする、坊主！」

間合いに入ったザク目がけて模擬刀を振り下ろす、敵のザクはあまりの速さに銃を撃つ事も出来ずに硬直している

ものだと思いついていた。だが。

ザクが一気に踏み込んでゲルググの懐に潜り込む、振り下ろした右手を銃で受けてそのまま体を翻す。超信地旋回を見せたモンシアの標的はその背中をモンシアのモニターに大写しにして埋め尽くした。

「何イツ!?」

叫んだモンシアが反応する暇も無く激突する両機、金属の凹む嫌な音と轟音が耳を劈いた後に訪れる激しい衝撃。HANSとシートベルトによって強かに絞め上げられたモンシアが慌てて機体のコン

トロールと間合いを取り戻す為にスロットルとペダルをエレクトロンの演奏の様に目まぐるしく操作する。後方へと飛んだゲルググの眼前を掠め去る模擬刀を見て、モンシアは言った。

「なるほど、あくまで坊やは囷に徹しようって訳かい。ひよっ子にしちゃ悪くねえ、いいコンビネーションだ。だがな」

二機のザクの姿をモニターの真ん中に捉えたモンシアが言うなり、足元にある三本のフットペダルの内両サイドのペダルだけを交互に踏み始めた。スカートの中で左右に動くスラスタがゲルググの巨体を一定のリズムで左右に揺さぶる。

「世の中にあこんな機動も存在するんだ。地上ですーっと取っ組み合いをしてた奴には分からねえだろ？」

バックパックのバーニアが火を噴いた途端に横方向の動きに縦への突進を加えるモンシア、物影を利用したスラロームを繰り返しながら二機の元へと迫るゲルググが模擬刀を右八双の位置に置いて構える。狙いを定められないザクが慌てて散開する姿を確認したモンシアは、一步出遅れたアデリアに向かってその矛先を向けた。

「遅えっ！ そんな時には身を隠すんだ！」

斬り上げる軌跡の先には間違いなくアデリアのザクがいる、一機目を仕留めたという確信がモンシアにはあった。間合い、タイミング、全てがドンピシャ。最悪でも重篤な損傷を与える筈の一撃がアデリアの機体に迫る。

だがその剣先が今まさにアデリアに触れようとした時に、二機の間割り込んで来る影にモンシアは気が付いた。歴戦ならではの第六感でそれが危険な殺気を孕んでいる事を察知したモンシアの全身が自動的に回避行動のマニューバを選択する。

振り上げた剣の軌道を無理やり変えたその先に、やはりマークスの剣が迫っていた。打ち合わせた刃先をなぞる様に滑らせたモンシアが再び間合いを取る為にそのまま二機から遠ざかる。

「チツ、厄介だな。一機一機は大した事ねえんだが、コンビネーションは中々見所が有りやがる。こりゃ、奴らがキースを仕留めて来

るまで大人しく待つべきかあ？」

「二ナの予言が正しい事を認めざるを得ない。三回戦目の奴らの動きは今までと段違いだとモンシアは舌を巻く、と同時に二ナが切り札として上げたOSの威力に心の底から感服していた。」

戦闘機動のレベルが上がれば上がるほどオークリー組の動きは良くなつていく、対応する彼らの動きがリアルタイムで更新されて直ぐに自分の物になると言うシステムは敵にとってみれば脅威だ。例えばそこで撃墜されても生きて起動ディスクを持ち帰りさえすれば、そのデータは次の機体に反映されて新たな経験値として活用する事が出来る。戦えば戦う程広がって行く機動パターンのヴァリエーションは其れを使用するパイロットが生きている限り無限に成長するやがていつか『撃墜王<sup>キース</sup>』を名乗るその日まで。

「二ナさんめ、とんでもねえ物を考え付きやがったな。このモンシア様が受けに回らざるを得なくなるとはねえ。」

反対側の壁の寸前でくると体勢を翻すモンシア。再びスラロームによる高機動突撃を掛けるには十分すぎるほどの距離を取ったと思つたモンシアが不思議な光景を目にして二機のザクを注視した。

「？ 何する気だ、坊や？」

モニターに映るマークスのザクが模擬刀を正眼に構えて腰を落とした。バックパックから吹き出す炎によつて巻き上げられた砂埃が急速に二機のザクの姿を覆い隠す、次の瞬間に一直線に煙の中から飛び出して来たマークスのザクを見たモンシアが思わず高笑いを洩らした。

「はっ！ それで俺の真似のつもりかよ？ 坊主のザクにはスラストターが付いてねえだろっ！？」

迎撃の為にやはり模擬刀を正面に構えるモンシア、一直線に向かつて来る相手に対する機動は決まっている。剣を受け流して体を躲した所で背中から一撃、バックパックを破壊してしまえばそれだけであるザクは死に体だ。そうすれば自分はアデリアのザクを相手にしさえすればいい。

「焦ってやけを起こしても勝負には勝てねえ、それをいやっていう程叩き込んでやるぜえ！」

薄笑いを浮かべたままモニターの中で姿を大きくするザクに向かって毒吐くモンシア。まるでチキンレース（別々の車に乗った2人のプレイヤーが互いの車に向かって一直線に走行するゲーム）の相を呈する二機の接近はモンシアの思惑通りの展開になるかと思われた。マークスは譲る気が無い、ならば寧ろ好都合。

突き出された模擬刀の先が互いに回避不可能な間合いに進入する、モンシアがそれを見て教科書通りの機動を開始する。刀を受けて右半身に躲した後に。

「！」

ザクの模擬刀を受け損ねたモンシアが焦った。ゲルググの至近に迫ったザクが突然サイドステップで軌道を変えた。動かなくなった左手の方向へとずれたザクの姿を見てモンシアが思わず後方へと下がる、追い打ちを掛ける様に走って迫るマークスのザク。

「何だ、その動きっ！？ まさか」

死角となる左側へと回り込まれない様に左旋回を続けるモンシア、ただ回り込んでいる訳ではない、細かくフェイクを入れながら不規則なステップを踏んで隙を伺うザクの動きを見たモンシアが今まで考え付かなかった一つの可能性に気が付いた。

幾らコンビネーションがいいとは言ってもお嬢ちゃんと坊やの戦技レベルは同じ位の筈、だがお嬢ちゃんの援護の回っている筈の坊やのザクの動きは明らかに彼らの実力を超えている。と、言う事は。

「まさか、手前っ！ 乗り替えやがったのかっ！？」

「流石だ、モンシア中尉。もう気が付いたか。」

キースにとってモンシアは自分の戦技教官だ、あの日のアルビオで猛烈にしごかれた時の事を思い出したキースはモンシアが大尉である事を忘れていた。冷静な声で呟きながらモニターの隅に表示

される数値を読み取って、モンシアとの距離を測るキース。ペダルの強弱とスロットルの開け閉めによって不規則な歩行を実践するキースの目はじつと何かを待っている、モンシアの注意を惹きつけ、刀の切っ先をこちらに向けざるを得ない状況。そして。

「今だっ、アデリアっ！」

モンシアが誘き出された場所は左右が大きく開けていた。モノアイ単眼仕様のモビルスーツの弱点とも言える視野の狭さはこの一瞬で証明される、キースに気を取られたモンシアがモノアイを右に動かしたその瞬間左側の側面からアデリア機が突撃した。ゲルググのコクピットに充満する接近警報に負けない大声でモンシアが怒鳴った。

「デイレイ、デュアルアタック時間差二列突撃だとおっ!?!」

無意識の内に回避操作を行うモンシアの手足、ゲルググの全てのスラストーに火が入る。だが重量級のモビルスーツの巨体は地上では重力の枷に囚われて思う様には動けない、それでも尚迫り来る脅威目標に向かって模擬刀を振り上げようとするゲルググの懐に飛び込んだアデリアが腰溜めに構えた模擬刀をゲルググのコクピットの位置に突き立てた。

断絶する電気信号、真つ暗になったコクピットに残されたモニターの明かりに浮かびあがる『You lose』の文字。接触した事で初めて可能になる『お肌の触れ合い通信』を使って、モンシアがアデリアに言った。

「…… やられたぜ、お嬢ちゃん。降参だ。」

勝敗が決した事で一時的にエネルギーがカットされ、柄だけになった模擬刀をゆっくりとゲルググから離れたアデリアが喜びを爆発させた。

「や、った …… やった、いやったあっ!!」

「だがな ……」

モンシアがそう呟いた途端にアデリアのザクに着弾の衝撃が走った。文字通り八チの巣にされるアデリアのザクはあっという間に機

能停止に追い込まれ、モンシアのコクピットと同じ闇の中で同じ文字を見せつけられる。

「え、何……なによあつ!？」

「そんなに世の中甘くねえ、特に敵を仕留めた瞬間には油断するなつて教訓だ。いい勉強になつたな？」

暗闇の中で胸ポケットから取り出した吸い掛けの葉巻に火を着けて、ゆつくりとくゆらせるモンシア。無線から洩れ届くアテリアの毒舌をBGMに聞きながらこれからの展開に想いを馳せる、だが結果はもう見えている。ベイトとアデルはキースのジムに乗ったマークスを苦も無く仕留めて戻つて来たのだ、機動力に劣るザクに勝ち目は無い。

吸い込んだ煙を口の中で弄んでそつと吐き出す、換気の為のエアクリーナーが作動する耳障りな音を全く無視してモンシアは、点滅する損害報告の文字を深刻な顔でじつと見つめていた。

「あつちやあ、やっぱりだめだつたかあ。」

勝者と敗者が遠目にも一目で分かる様に肩の接近灯を点滅させてオベリスクから降下して来るゲルググ、周囲に湧き上がる嘆息の喧騒に紛れてヘンケンが呟いた。隣で双眼鏡を目から離さずに勝者たる三機の姿を見つめるコウはヘンケンとは違う視点で　モンシアの機体に張られた白い目印は撃破された機体である事を示す

明らかに興奮した声音で言った。

「いえ、それでも彼らは一機墜としていて。仮にもエース級を二人掛かりでも仕留めるなんて、なんて奴らだ。部下の二人も凄いけどそれよりも彼らを纏めているキースが凄い、やっぱりあいつは指揮官の才能が有る。」

突然いなくなつた自分の代わりにオークリーのモビルスーツ隊を率いる羽目になつたキースの苦勞を誰よりも理解しているコウ。アテリアとマークスが赴任して来るまでの間、仲間のいないハンガーでただ一人きりで小隊の存在を守り続けた無二の友人の成長を見て

思わず歓喜を迸らせる。オベリスクを見上げるコウの顔を埋め尽くす無垢な笑顔、それはまるで少年が心の底から望む物を見上げる憧憬による衝動。

ヘンケンとセシルがお互いに顔を見合わせて隣に立つコウの変化に笑みを交わす。

自分達が群黒の静謐広がる宇宙に生きる様に、人が未来を求めて新天地としてコロニーを求めた様に彼もまたモビルスーツに憧れてパイロットを志したに違いないと言うのはこのイベントにコウを誘おうと提案したヘンケンの言葉だった。自分達が重力の井戸の底から宇宙に帰る日を夢見る様に、コウもまた夢を見ているのではないのか、と。

セシルはヘンケンの意見に否定的　それは二ナとの遣り取りを聞いてしまった事とモビルスーツに乗れない身体であると言う事を知ってしまった為　ではあったが、全く別の観点からコウの抱える問題にアプローチを掛けたヘンケンの直感に口を噤んで耳を傾けるしかなかった。

「じゃあ、セシル。彼はなぜ機械弄りが好きなんだ？ 家の四駆を直してくれたり自分のバイクを弄ったり。ウラキ君の懐具合を詮索する様で申し訳ないが予備役は退役軍人よりも給付金が多い、その気になれば新しいバイクを買う事だって出来る筈だ。だが何故彼はあんな年代物の、それも高いバイクを買って乗りまわしているんだと思う？」

「それは　」  
「それはセシルには分からない感情なんだ。いや、決してお前にその能力が足りないと言ってる訳じゃない、これは『男』にしか分からない根源的な感情なんだからな。」

上官の言葉にセシルははっとしてヘンケンの顔を見つめ直した。  
論理<sup>ロジック</sup>で物事を理解しようとする自分に無い、ヘンケンの持つ直感に畏敬を抱くセシルはその後に続く言葉を待ち侘びる。ヘンケンが言った。

「理屈じゃないんだ、セシル。彼は　　ウラキ君は戦史に名を  
連ねる数多のエースの様に戦う事が好きなんじゃない、彼は、ただ  
機械が　　モビルスーツに乗る事が好きなんだ。俺はそう思う。」

「『悪霊払い』と言う二つ名まで冠した稀有な才能を持つ、連邦屈  
指のエースが、ですか？」

「それはモビルスーツを操縦する事から延長する悲劇的な結果に過  
ぎない、戦争と言う未曾有の事象が彼にそう言う選択を強制したん  
だ。彼の苦悩は、そして矛盾は多分そこから始まっている様に思う。」

セシルの背筋を気持ちのいい寒気が走る、全身が総毛立つ様な感  
覚。まるで一番敏感な性感帯を羽毛でなぞられる様な恍惚に似てい  
る。

自分には遂にはつきりと見出せなかったコウの矛盾を我が敬愛す  
る上官は何の根拠も無く、しかしそれは自分が抱えた無限ループを  
続ける疑問に対して疑念の欠片もはさみ様の無い完全なる解として  
セシルに提示した。

「彼の中に抱えた『種』が何であるか、そんな事は芽吹いてみない  
と分からない。だがセシル、それがどういった類の物であれ彼は絶  
対にモビルスーツに乗る事を諦めない。」

「言いきれますか？」

我ながら意地悪な質問だな、とセシルは思う。だがそう聞かずに  
は居られなかった、ヘンケン・ベッケナーと言う一介のサラミスの  
艦長に対して抱いた自分の先見の明を証明してほしいと思う。ヘン  
ケンがそこまで言い切る事の出来る、自分の知らない大きな力の正  
体を。

「無論だ、……　　誰だつて好きな物を諦める事なんて出来っこない  
じゃないか。」

ヘンケンの言葉に驚いた様に目を丸くするセシル。だがそれは寸  
暇の沈黙の後に穏やかな笑い声に変化した。セシルが見せた突然の



変化に今度は訝しげな顔をしてセシルを見つめるヘンケン、だがセシルはそんな事はお構いなしにクスクスと笑っている。

そうね、好きなものを諦めるなんて出来っこない。例えそれがどんなに鈍感で『やぼてん』な人だと分かかってしまっても。

誘って正解だった、と二人は互いに視線で同意する。

コウを自分達の陣営にスカウトする事は白紙に戻すしか選択肢が無い、だがコウは二人にとって掛け替えのない友人の一人だ。友人が苦しむ姿を見て手を差し伸べない奴などいない、手を差し伸べないとしたらそれは最早友人とは言えない。

二年を共に闘い、収穫と言う戦果を上げた友人としてヘンケンにはコウの力になりたいと思う。だがそれは彼を自分の道へと誘う事では無く、彼が本来生きるべきであった平和な世界へと導いてやる事だと思う。彼を苛む様々な要因を今のヘンケンに取り除いてやる事は出来ない、だがいつか彼が自分の意思でその苦難を捻じ伏せて立ち上がろうとした時にこそ初めて必要になる、今日と言う日の記憶だとヘンケンはある。決して戦争の為ではなくて平和の為に築き上げる未来の世界、コウにはそれが一番相応しい。

微笑を浮かべたヘンケンがふとセシルからコウへと視線を移す。

ヘンケンが力になりたいと心の底から望む友人は、大きな笑顔を浮かべたまま懂れに煌めく瞳でオベリスクを眺め続けていた。

カニバル 模擬戦は日没を前に終了した。午後に行われた三回戦も全てベイト達の勝利に終わった、だが午前の部とは違ってその内容は演習場の

周囲を取り囲む近隣の観客を十分に魅了して足る内容だった。

午前まで一回戦に掛る時間は一時間以内、それが午後になると全てが一時間を超える熱戦となつて尚且つ戦闘内様も少しずつ変化を始めていることが素人目にも明らかになる。簡単に墜とされていた筈の二機のザクはいつの間にか単機でゲルググと渡り合えるようになり、勝てはしないものあっさり負けに結びつく様なやられ方

をしなくなっていた。

人が変わった様なオークリー組の健闘に観客は届く筈の無い声で応援の歓声を上げ、聞こえる筈の無い彼らはまるでそれに後押しされるかのようにゲルググと渡り合う。オベリスクの中一辺倒だった戦場は互いの戦力の拮抗と共に行動範囲を拡大して何時しかオベリスクの周囲の荒野を使つての屋外戦にまで及び、それがより一層の人々の目を引き付ける。勝敗が決した瞬間に放たれる人々の嘆息は何時しかブーイングへと変化するまでになっていた。

オベリスクに掛る西日によって出来た大きな影に翳されるコウの姿。撤回の始まつた演習場からやつと双眼鏡を外したコウがセシルと共に座っているヘンケンに向かって、嬉しそうに言った。

「今日はありがとうございます、本当に、楽しかった。」

「自分が『あれ』に乗れない事も忘れてか？」

にやりと笑つたヘンケンがコウを見上げてそう尋ねる。コウの答えを待たずにゆっくりと腰を上げたヘンケンは傍に近寄つてコウの手の中にある双眼鏡に向かって黙つて手を差し出す、コウが満足した笑顔でそれを手渡しながら言った。

「ずっと昔の事を思い出しました、親父に連れられて地元の基地祭に言った時の事。その時はモビルスーツなんか無くてまだ航空機がアクロバット飛行をしている様な小さなお祭りでしたけど、それでも見てるだけで楽しかった。……『乗れなくなつても、見たい』つて本当なんですな。」

「そう言つてもらえると俺も誘つた甲斐が有るつてもんだ。実を言うとな、もし断られても首に縄をつけても引き摺つて来いつてセシルに脅されたんだぜ？ 牽引用のロープを使う羽目にならなくて本当に良かったぜ。」

「ひどいなあ、まるで昔の西部劇じゃないですか。本当にセシルさんがそんな事言つたんですか？」

ヘンケンが笑いながら片目を瞑つてコウに合図をする、ヘンケンの背後でセシルは二人の会話を笑つて聞きながら地面に敷いたシー

トを畳んで、少しドスの効いた声でヘンケンの背中に言った。  
「さあ貴方、片づけを手伝って下さい。もし手伝って頂けないのならこのシートみたいに折り畳んで車の荷台に投げ込みますよ？」

既に日はとつぷりと暮れて夜間照明に照らされた滑走路上を『ヘリオス13』が移動している。駐機場からハンガーの前へと近づいて来た機体は来た時と同じ様にカーゴベイのハッチを下ろして、原隊へ復帰する為のパスポートの到着を息を潜めて待っている。そのすぐ傍で帰隊の為の挨拶をウェブナーに済ませたベイト達は、整列するキース達に向かって敬礼した。

「ではこれより第三軌道艦隊旗艦『オラシオン』所属、ベイト大尉以下三名。原隊へ復帰する。本日における寛大な処置、及び協力に感謝する。」

「こちらこそ今日は貴重なご教授、本当にありがとうございます。一同を代表してオークリー基地モビルスーツ隊の隊長である私から、御三方に感謝の意を表します。」

互いに整列して対峙した全員が一斉に敬礼を交換する。退去の際のお決まりの儀礼はしばらくの沈黙をもって終了する、敬礼を解いたモンシアがアデリアの方へと歩み寄って来て言った。

「中々やるじゃねえかフォス伍長、見直したぜ。キースの手助けがあったとはいえ、俺が落とされたのは一年戦争以来だ。ま、その調子でがんばんな。」

差し出されたモンシアの手をびくりして見つめるアデリア。『お嬢ちゃん』から格上げになった事もそうだが午前中とは全く違うモンシアの態度に面食らう、尚も小さく手を振って握手を求めるモンシアの手を握ったアデリアが、おずおずと顔を上げて言った。

「あ、ありがとうございます。モンシア大尉？」

「礼なんかいらねえよ。それよりどうだ、これからこのモンシア様を墜としたご褒美として二泊三日のジャブロー旅行と洒落こまねえか？」

「新手のナンパかつ!?」

怒鳴ったアデリアがモンシアの手を慌てて振り払った。だがモンシアは拒絶された事を意に介せず会話が続ける。

「お前さんだけじゃねえ、ここにいる整備員も含めたモビルスーツ隊の全員をジャブローの研修にお迎えしようってんだ。キースも二ナさんも、そののでつかい姉ちゃんも全員でな。」

モンシアの口から告げられた思わぬ提案に湧きたつハンガー。連邦軍の最新鋭の武器や精鋭部隊が駐留するジャブローで研修を行うと言う事はパイロットや従事する技術者にとっても貴重な経験になる。そしてそれは滅多な事でお目に掛れる事ではない。

「なに、ミデアの腹は空っぽだ。ここにいる全員を運ぶなんて訳はねえ。そうと決まりやあ善は急げだ、俺達はここで待ってるから全員支度してここに帰ってこい。帰隊時刻も迫ってる」

「いえ、お言葉ですがモンシア大尉。」

モンシアの代表演説に水を差したのはキースだった。遮られたモンシアは少し心外な表情を浮かべてキースの顔を伺う。

「幾らなんでもモビルスーツ隊全員で基地を空けると言うのは、当基地の責任者の一人として納得がいきかねます。それに確かにジャブローの研修と言うお話は魅力的ですが、話によると一つの部隊を何班かに分けて行くと聞きました。それをいきなり」

「かまやしねえだろ? どうせこの基地は『忘却博物館』って言われてる位影のうすーい基地だ、四五日空けたって問題ねえ。ちまちまシフト割して長い事お勉強するよりも短期集中で研修した方が時間を有効に使えると俺は思うがね?」

状況は圧倒的にモンシアの側にある。二度と得られぬかも知れない絶好の機会をふいにしようとするキースの発言に対して整備班からの心無いヤジが飛ぶ。だがキースは背後のハンガーを厳しい目で一瞥して反乱のシュプレヒコールを収めた後に、再びモンシアに向かって言った。

「モンシア大尉、分不相応な御申し出、心から感謝します。ですが

やはりいきなり原隊を空にして研修に行くと言うのは出来ません。もしよろしければ日程を調整の後に規定通り、何班かに分かれて派遣すると言うのは

「今日じゃなきゃ、駄目なんだよっ!!」

キースの提案を遮るモンシアの激発。あまりの変化に驚いたキースがモンシアの顔をまじまじと見て驚きを更に深める、モンシアのトレードマークとも言える人を食った様な笑いがその表情の何処にもない。暫くの沈黙の中で身動きすら忘れたモンシアの肩をベイトがポンと叩いた。

「だから言ったじゃねえか、そんな事急に言い出しても相手が困るだけだつて。まったく手前は何時も後先考えねえ、だからマリーに拾われたつてのが分かんねえのか？」

「へん、大きなお世話でえっ!!」

言葉を吐き捨てるのとくると背を向けるモンシア、代わりに向き合ったベイトが困惑するキースに言った。

「すまなかつたなキース、こいつの無理につき合わせて。今の話は後日、本部から基地司令を通してお前達に話が行く様にする。だからみんなも期待して待つてくれ。今日は久しぶりに楽しかったぜ。」

微笑んだベイトの手を促されるままに握りしめ、戸惑った記憶を自分の中から追い出して笑うキース。すぐさま横合いから差し出されたアデルの手を握りしめ視線を向ける。

「今日は勝たせて貰いましたが私が思うにそれほどの実力差は無かつた様に思います、良い部下の育て方をしてますね。これからもがんばってください。」

年下でも階級が下でも謙虚な姿勢を崩さないアデルがそう告げながらにつこりと笑う、キースの視線の端に覗くモンシアの背中が動いて名残惜しそうに手を握ったままのアデルに言った。

「おい、もう帰る時間だよ。」

モンシアの視線の先で振り回される光はコンテナの中から。出発

時刻を過ぎても乗り込もうとしない三人に業を煮やしたミデアのパイロットが、操縦席を離れて彼らに乗機を促している。横目でそれを見たベイトがチツと舌打ちをして毒づいた。

「全く本部の連中は物事の機微つてもんが分かっちゃいねえ

くれぐれも言つとくが例え勧められてもジャブローなんか配属されんじゃねえぞ、あんな日の差さない場所に閉じ籠つてたら人の心も分からねえ頭でつかちになつちまうからな。」

「オークリーの方がましですか？ 連邦軍でも爪弾き者の集まりですけど？」

キースの問いにベイトがおツと言う表情を浮かべて笑った。思えば自分達の会話に対するキースの反応が彼の成長を如実に表している様な気がする、アルビオンの頃は新兵丸出しの臆病者だった青年がよくもここまで成長した物だと。

「当たり前えだ、ここには少なくとも空がある。なーんにも無くてもな。じゃ、キース。元気でやれよ？」

ベイトはそう言うところと踵を返してコンテナへと歩き始めた、続いてアデルが手を振りながら後に続く。ただ一人、モンシアだけがその二人の背中を見送る様にじつと佇んだまま動こうとはしない。不思議に思ったキースが声を掛けようとした瞬間、突然モンシアはくるりと振り返ってキースの傍に近寄って来た。無言で手を差し出す。

「も、モンシア大尉もお元気で。機会がありましたらまたお手合わせ願います。」

「おう。機会があつたらな。だからよ」  
手を握ったキースの耳元に顔を近づけて、モンシアが周囲に聞こえないような小さな声でキースの耳元で囁いた。

「次会う時まで、死ぬんじゃねえぞ。」

月明かりに照らされた滑走路の上をミデアが滑走する、羽毛が風に吹かれる様にふわりと浮きあがったその巨体をじつと見送るキース

スの背中にモウラが声を掛けた。

「どうしたの、キース。さっきから何か考え込んで？」

「何か変だとは思わないか、モウラ。今日のモンシア大尉の態度。」

二人の会話を横で聞いていた二ナがキースの言葉に同意する様に頷いた。ハンガーから少し離れたその場所に立つ者はその三人しかない、モウラはキースの問い掛けに彼女特有の楽観論を振り翳して答えた。

「そりや変にもなるだろうさ、だってあのスケベ親父が結婚だよ？」

それも相手は幼女みたいな形の可愛らしい女性と来た、あたしやモンシア大尉の性癖が実は小児性愛<sup>ペド</sup>じゃないかと睨んだね、うん、間違いない。」

「いや、そう言う事じゃなくて」

「モンシア大尉だけじゃない、あの三人がこの基地に来た事自体が既に変だわ……　　そうでしょ、キース？」

二ナの問い掛けにキースが頷く、モウラは二人の共有する疑問に対して尚も偶然を祈る様に捲し立てる。その口調を聞いてもモウラが二人と同じ違和感を抱えている事は明らかだった。

「だからベイト大尉の言った通り、どこかの将軍が間違つて彼らを派遣したんじゃないの？　あの紛争の存在を知らない連中が地球に残つてたとしても別におかしくないだろ、これだけ徹底的にあの事実は隠匿され続けてるんだから。」

モウラの指摘する可能性も無くは無。デラーズ紛争の存在自体が三年の月日を経て徐々に風化してきている事も事実だ、それは世間のメディアから未だに続く宇宙での戦いが報道されなくなってきたている事と同じ様に軍による　　主にティターンズだろう

隠蔽工作が完全に機能している事を示している。故にティターンズに未だに属さない連邦軍の上層部がそう言う命令書を発給してしまつたとしても不思議ではない。

キースが黙つて心の中で渦巻く不安と疑問に向き合つて考え込む、その背中をやはり同様の不安に襲われる二ナとモウラがじつと見つ

める。その時モウラの背後のハンガーから大きな声で自分呼びながら駆け寄って来る整備員の声でした。

「どうしたの？ 何かライフルに問題でもあったの？」

駆け寄って来た整備員はベイト達と共に搬入された試作型長距離ライフルの整備に当たっていた男だった。そこに集まっている三人がモビルスーツ隊の中核を担う三人だと知った男が慌てて帽子を脱いで足を止める、尋ねられた男は手に握った紙切れをモウラに渡しながら言った。

「いえ、さつき予備弾倉のチェックをしてたんですが、そしたら装填済みの弾の間にこんなものが」

紙切れと一緒に手渡された懐中電灯を点けて表面に翳すとそこには一行にも満たない文字が書かれている、その字体の持ち主に心当たりのあるモウラが呟いた。

「…… ベイト大尉の字だ、間違いない。なんだろ、これ？」

モウラがそのままキースの元へと運んで紙を見せる、キースはモウラの問い掛けに何も答えないままただじっとその文字を凝視して、暫く沈黙を守った後に言った。

「モウラ、モビルスーツ隊の警戒態勢を一段階上げる。司令に気付かれない様に『イエロー』を発令、全員に伝えてくれ。」

「え？ キース、今何て？」

モウラは聞き間違えたと思った。『コンディション・イエロー』とは三段階ある警戒態勢の中段域に位置するスクランブル待機の事を指す。だがこれが普段のスクランブルと違う点は使用する機体だけではなく、『全モビルスーツ』に対象が拡大すると言う点と、完全武装状態での待機であると言う事だ。聞き直したモウラに向かってキースはもう一度、念を押す様に言った。

「現時刻を持ってモビルスーツ隊は『準臨戦態勢』のまま待機、乗組員及び準乗組員にはハンガー直近での就寝を命じる。…… これはくれぐれも内密だ、指令や他の部署に気付かれたらパニックになる恐れがある。」



「ちょ、ちょっと待ってキース、一体どういう事？ そんな事急に言われても訳分かんないよ、一体どういう事なんだい？」

深刻な顔のキースから発せられた命令に対して説明を求めるモウラの表情を不安そうに眺めて、キースへと無言の圧力を傾ける二ナ。キースは手の中の紙を今度は二ナに渡しながら言った。

「これは、今はもう使われてない昔の符丁でね。でもバニング大尉がアルビオンで指揮を執ってる時によく使ってた言葉なんだ。」

「『PAN・PAN・PAN』……キース、どう言う意味なの？」

訝しげな顔で紙の表面に視線を走らせる二ナが尋ねる、まるで走り書きの様に書かれたその符丁に隠された深刻な意味をキースは緊張した声音で二ナに教えた。

「『緊急では無いが差し迫りつつある危険』を表す大昔の航空用語さ。ちなみにこの言葉をバニング大尉から最後に聞いたのはガトーが核を発射する前。」

「それって、キース。まさか」

キースの言葉で思い当たる戦いは唯一つ、コンペイ島の観艦式典にはバニング大尉はもういなかった。と言う事は

キースは二人の心に浮かんだあの日の記憶を肯定する様に言った。  
「そう、バニング大尉が撃墜されたあの日、バーミンガムの護衛に向かった道すがらだ。」

「くそおつ！！」

大声で怒鳴ったモンシアが貨物室の間仕切りを渾身の力でぶん殴った。与圧で保護されているとはいえ人が空を旅するには十分とは言えない居住区を駆け抜ける轟音、モンシアの放つ怒りに負けない大声でベイトがモンシアの行動に異を唱えた。

「もう止める、モンシア。これ以上は俺達にもどうする事も出来ん。」

「手前はよくそんな他人事みてえな事が言えるな、だからってこの」

まま指を銜えて見てろって言うてんのか、あアッ!?」

何時もの口喧嘩の領域を二人のオーラは超えている、仲裁に入ろうとするアデルの身体を押しつけてモンシアがベイトに迫った。

「頼むベイト、今からでも遅くねえ。戻って奴らに情報を伝えて連れて来ちまおう、ほんの二三日基地を空けさせるだけでいい、そうすりゃその間に」

「何が起こっても関係ねえってか、手前自分の言うてる事が軍法会議もんだって分かって言うてんのかッ! そんな事してもしほんとに何かあつたら手前は見殺しにした奴らからだけじゃねえ、助けた奴らからも恨まれるぞッ!」

「恨まれんなざ今更のこつた、何とも思わねえ。それよりあいつらを失つちまう事の方が損じゃねえのか? 手前も見たる、あいつらの腕を。あの嬢ちゃんを俺を一撃で仕留めやがった、手前だつて坊主の乗ったジムに追い込まれてたつて言うじゃねえか。奴らがこのまま黙って訳の分かんねえ連中に襲われるのを遠くの方で眺めてるって言うのかよ!」

「そんな事あくまで推測だ、奴らが一体何の目的でそこに上陸したのかすら分からねえのに早合点するんじゃねえ。もしそれが軍事行動だつたとしたら手前のしようとしてる事は明らかかな反逆罪になるんだぞ!? それが分かっているから艦長もこれ以上の介入を許可しなかつたんじゃないか!」

「じゃあなんでうちの大将はあんな武器を俺達に預けたんだよ!? オークリーが目標だつて分かっているからじゃねえのか!」

互いの主張が平行線を辿る一方なのは当の本人達がよく分かっている、怒りのはけ口を失くしたモンシアが再び隔壁をぶん殴って毒づいた。

「畜生、一体うちの大将はどこまで情報を掴んでやがるんだ。せめて『敵』の戦力規模だけでも分かりやあもつと他のやり方も思い付いたかも知んねえのによ。これじゃあまるで最期のお別れをさせに来たんじゃねえかって勘繰りたくもなるぜ。」

「そうとも言い切れない、ひよつとしたら艦長は私達にオークリーの戦力を確認させたかったんじゃないでしょうか？」

「衛星からのデータが届いた。」

ダンプティは橋頭保として設置した海岸のテントの中で、司令部より送られた電子メールを開きながら言った。添付されたファイルを開いて興味深々の面持ちで待つケルヒヤーに画面を向ける。

「……稼働機体は予備機も含めて六機ですか。それも一機を除いては全てうちの機体だ。ゲルググとザク、楽勝ですね。」

「油断は禁物だ、それに動作解析の結果によるとゲルググの側はテイターズジョンの精鋭が操縦していたらしい。オークリーの側はザクとジムと言う事になるんだが、中々筋のいいパイロットだ、よく彼らに喰らい付いている。」

ダンプティの言葉にケルヒヤーが小さく口笛を吹いて感嘆を露わにした。

「ではこちらもある程度の損失を覚悟しなくてはなりませんね。当初予定のフォーメーションを変えますか？」

「そうだな、……いや、やはり予定通り先鋒を新入りに任せよう。彼らも自分の置かれている立場は弁えている様だし、それに」

ダンプティの表情が微かに曇る、浮かんだ眉間の皺に隠された意味を押し量って口を噤んだままモニターを見つめるケルヒヤー。

「背中から撃つ人数はなるべく少ない方が、いい。」

「彼らの実力ならばそこいらのパイロットと十分に渡り合えます。」

勝てないまでも負けない戦い　籠城戦に持ち込めば万が一襲撃されても応援が駆けつけるまで十分持ち堪えられる筈です。」

「籠城戦？　こんなただっ広い荒れ地の真ん中でか、何処にどうやって砦を築いて全周防御をしようってんだ？」

「地の利は彼らに有ります。攻城戦の常識と彼らの戦力を考えれば」

二個小隊をもつてしてもオークリーは落とせないでしょう。それにキースは私達の仲間、『不死身の第四小隊』の一員です。彼らがむざむざと敵の手に掛る事なんて私には想像できません。」

「アデル、」

隔壁を睨みつけていたモンシアが初めて視線をアデルに向けた。

アデルがモンシアを説得しようとして精力を傾けた言葉も表現も、その全てがモンシアの意にそぐわない物である事が明らかで、深い怒りと悲しみに染まった目がそこにあつた。

「そんな慣用句イデオムに奴らの幸運を求めて何になる？ 第一もう第四小隊は不死身じゃねえ、その名を貰った俺達の上官はな」

アデルが声を失う、ベイトはモンシアから顔をそむけたまま居住区の天井を見上げている。

「宇宙のチリになつて、二階級特進だ。とつくの昔にな。」

ミデアのエンジン音が三人の間の沈黙を絶望の音色で埋め尽くす。モンシアの手が再び隔壁を叩いて、しかし今度はそれを止めようとする者はいなかった。何度も何度も反響する低周波の木霊が鳴り止んだ後に、モンシアが俯いて言葉を吐き捨てた。

「くそつ、ウラキの馬鹿野郎めつ！！」

「

ー 宇宙暦0086年6月22日、水曜日。天気は今日も晴れ、気温は外に放り出しておいたランチであたしの大好きなクレーム・ブリュレに焼き色が付きそうなくらい熱いつて事でOK？

本当は整備日誌を書くのは班長かアストナージの仕事なんだけど、何だか今日の朝から妙にみんな慌ただしくて。だからあたしが代わりに書く事になりました。

え、あたしは暇なのかって？ 失礼ねえ、そんな訳ないじゃん。

……でもあたしの担当の機体はうんともすんとも言わないし、二十さんに聞いたら『そうねえ、ジェスが誕生日を迎えるまでには何とか』だって。しょうがないからアストナージの手伝いの傍らでこれを書いてるって訳。

そう言えばさっきも言ったけど今日の整備班は大忙し。班長が『抜き打ちの訓練だ』とか何とか言って朝から急にモビルスーツの武装点検を始めたの。あたしがここに来てからそんな事一回も無かったからみんなびっくりしちゃってもう大変、倉庫から装備を全部引っ張り出して来てハンガーの床に並べて虫干し状態。あれならあたしの近所のフリーマーケットのベティおばさんの方がもっと上手に並べるって。

でもザクの鉄砲の弾って初めて見たけど、おつきい。一発があたしの手と同じくらいの大きさなんだもん。それをみんなで一本一本床の上に立てて不良品じゃないかどうかを調べてから弾倉に押し込むの、言っとくけどあたしの体重じゃ無理だかね？ そんなのは心優しきおじさん達のお仕事、あたしは横で応援してるだけ。

それからハンガーに置いてあるモビルスーツをあたしドムの以外全部点検して装備を取り付けて。なんかさあ、あたしのだけ仲間外れになったみたいに見えてちょっと可哀そう。仕方ないから作業車によじ登ってせめて磨いてピカピカにしようとやるうって。そしたらさ

「アストナージ、これって何？」

ドムの腰にしがみ付いて、ウエスでごしごしと機体を磨いていた筈のジェスが大声でアストナージを呼んだ。模擬戦で凹んだザクの装甲板を外して内部のフレームの歪みを調べていたアストナージが声のした方向に子猿の様なジェスの姿を見かけて笑った。

「お前、何て格好だよ。その高さから滑って落ちたら骨折じゃ済まないぞ？」

「うっさいなあ、そんなドジ踏まないって。……ねえ、ここに何か取り付ける溝が切つてあるんだけど、何のため？」

アストナージがジェスのしがみ付いている位置にある物に脳裏に浮かべて想像する。それはバケツほどの大きさの円錐形のくぼみで周囲にネジが切つてある。

「それか？ それは野戦用のレーザーカートリッジを取り付ける穴だ。起動用電源を喪失した場合に備えてな。」

「レーザーカートリッジ、何それ？」

小首を傾げて尋ねるジェスにアストナージは「やれやれ、それくらい知つとけよ」と言わんばかりの口調で答える。何時もは何かと同じ目線で会話するジェスに向かってちよつとした嫌みを利かせたつもりだ。

「停止状態の融合炉を起動させるにはプラズマを発生させなきゃならない、一番簡単なのは核爆弾を起爆させて発生させる方法なんだが南極条約で核の使用が制限されてそれも出来ない。それで本来はお前も知つての通り核融合炉を別室に持ち込んでプラズマ発生装置を使って起動させる訳なんだが、そう言った機械は基本的に設備の整った基地にしか置いて無い。プラズマを発生させるのにちよつとした変電所を作らなきゃならないしな。で、万が一野営地やそう言った設備の無い基地で融合炉を交換した際に起動させる手段がこれを使つて事なんだ。」

「説明長つ。……で、どうやんの？」

嫌みのつもりが呆気無く肩透かしを食ったアストナージがつくりと肩を落とす。どうやらジェスの方が役者が一枚上だと言う事を思い知らされる。

「その保管庫の中に入ってる筒をそこに取り付けて横から伸びてるプラグをコンセントに繋いでスイッチを入れる。コンセントが無ければ自動車のバッテリーでもいい、とにかく12ボルト以上の電圧で有れば中のパルスレーザー発生装置が作動して封入してある希ガスが共振する。そして発生したエキシマレーザーが筒の先から融合炉内の核に照射されて点火するって仕組みだ。」

「ふーん、よく分かんないけど簡単そう。そんなに簡単なら整備の時もわざわざ外して起動させずに取り付けてからそうしちやえばいいじゃん？」

「レーザーの出力が弱いから起動確率が五分五分なんだよ。それに連邦軍は『物量作戦』が身上のお国柄だ、いちいち壊れたモビルスーツを直して使うよりも新しい機体を補充した方が早いってんでそれを使った事はあんまり無い筈さ。俺もオデッサで一回しか使ってねえ。」

「へえ、で、そんな時は動いたの？」

「失敗。連邦軍の融合炉は出力は高いけど重水素を使ってるから反応が鈍い、その点ジオンの融合炉はヘリウム3を使ってるから比較的低い出力でも反応が始まる。ま、元々はジオンの技術だから連邦が採用するには無理が有ったんだろうなあ。」

『ジオンの技術』と言う言葉を聞いて、ジェスがじつとドムの頭部を見上げる。

「じゃあさ、この子もこれくっ付けたら動くんじゃないかな？」

アストナージに言わせると、制御系統が動かないと炉に火を入れるのは危険なんだって。出力制御の出来ない融合炉は冷却機能も動かないから直ぐ暴走しちゃうらしい……むー、確かにそう言う

事になるかあ。じゃあやつぱりこの子は二ナさんが何とかしてくれるまで『ハンガークイーン』のままって事よね。

「でもさ、アストナージ。」

心の中で『また始まった』とぼやくアストナージ、『なぜなぜジエス』と揶揄される彼女のスタンスはその疑問が払拭されるまで解除されない。だがジエスがこれだけ短期間に実力を伸ばした要因がその好奇心に由来すると言う事をアストナージも、そしてモウラも知っている。故に整備班全ての人間が彼女に質問には真摯に授受を果たす事が暗黙の了解になっていた。

例えその事でジエスの腕前が彼らを凌ぐ事になろうともそれはそれで仕方が無い、寧ろ一人の才能溢れる整備士を自分達の手で作りに上げる事が出来ると言う期待感の方が彼らにとっては大きな喜びになる。整備士と言う技術者マイスターに課せられた御しがたい矛盾とも言える。「もし周囲に何にも電源が無かったら、やつぱりこれは使えないの？ でもそれじゃ『野戦用』の意味が無くない？」

「結合部と反対側 上になる側に尾栓がある。それを叩けば電源が無くても仕込まれた炸薬で強制的に装置を動かす事が出来る、あてにはなんないけどな。」

「叩くう？」

ジエスの声を聞いたアストナージがそののある方へとジエスの視線を導いた。ジエスが目をやると壁面にモビルスーツのボルトを叩く為の巨大なハンマーが立てかけてある、総重量でジエスの体重の三分の一は有るかと言う代物だ。

「そう、あれで」

アストナージは両手を構えて剣道の面打ちの様に振り下ろした。

「ガツンと。」

万が一そんな事になったらあたしは素直にアストナージを呼ぶ事に決めた。大体あんな重いもん担いで歩けるかっての、班長じゃあ



るまいし。

とにかく今日の作業は終了、あたしの以外は無事息災って言うか完全武装のモビルスーツってなんか違う。普段は付けてない楯とか鉄砲を装備している姿はやっぱりそれが人殺しの武器だったっていう事を教えてくれる。

家ではもうそんな事は無いけれど今もこの世界のどこかでこれを使って戦争をしてるんだって考えると複雑な気持ちになる。手に持った物が銃じゃなくてスコップやくわだったらあつという間に高いビルや広い畑が出来ちゃうのに、何で戦争なんかに使っちゃうんだろう。もつとみんなの為に役に立つ事に使えばいいのに、この子を最初に作った人は戦争の為に使われて悲しくなかったのかなあ？

さてと、もうすぐ夕食の時間だ。今日の夜間当直はキース隊長とアンドレア曹長、整備班は班長とマルトル…… 伍長。おつと目上には階級を付けとかないと、後でまた班長に怒られる。

アデリアを誘ってご飯に行こうかと思っただけどなんかさつきからマークスとごそごそやってるから声を掛けずに一人で行こう、どうせ食堂に行けば隣に誰かが座るから淋しくないし。二人の邪魔すんのもちよつと気が引けるじゃん？

じゃ、これで今日の整備日誌はおしまいです。記録者はジェシカ・アリストでお送りいたしました。

明日も良い一日でありますように、チャオ。

「 時間です、中佐。」

ケルヒヤーの声が聞えた。ダンプティが腕時計に目をやると長針と短針は一直線に伸びている、遙か西に遠く望む小高い山の稜線に掛った夕陽に染められた野営テントの中でダンプティは静かに告げた。

「作戦名『イリオス』を現時刻を持って発動する。『ブージャム』は予定通り先行して基地の北側斜面にて待機、内通者からの合図を

待て。モビルスーツ隊は輸送機で移動の後南側の山陰に待機、作戦開始時刻までそこで最終確認を行う。」

「ベースキャンブ要員は周辺の通信攪乱及び傍受を積極的に行え、特にサリナス周辺に展開中の大隊の動きに注意しろ。必要ならば通信に割り込んで欺瞞手段を使用しても構わん、奴らの後詰の時間をどれだけ遅らせる事が出来るかにこの作戦の成否がかかっている。」

ダンプティに続いてケルヒヤーがテント内で電子機器を扱う要員に向かつて檄を飛ばす、緊張した表情で頷く彼らは皆一様に無言だ。それだけ今回の作戦が難易度の高い作戦であると言う事を彼らは派遣規模と物量の多さで気が付いている。

「安心しろ、相手が軍と言うだけでやる事は何時もと変わらん。全員がそれぞれ与えられた仕事を完璧に、何時もの様にこなせば何時もの様に終わる事が出来る。」

無表情でそう語るダンプティの言葉でベースキャンブの緊張感が薄れる、それを肌で感じ取ったダンプティが隣に立つケルヒヤーの肩を叩いて言った。

「じゃ、行こうか。」

意味深なその言葉と捧げられた目。ケルヒヤーは穏やかに笑って敬礼を返した。

磁気フェライトで塗られた全ての輸送手段が離陸を始める、兵員輸送用のツインローターのヘリがゆっくりと浮き上がると夕陽に向かつてその機首を向けた。それは死を誘う大鳥が本能のままに太陽目掛けて飛び去る姿にも似て。

光に溶け込むその姿を見送る様に巨大なファット・アングルが離陸を始めた。普段はガンペリーを使用する部隊がジオン製のこの機体を使用しなければならなかった辺りに今回の作戦の規模の大きさが窺われる、長距離砲撃用のガンタンクも含めて総勢10機の編成はジオンで有れば三小隊に相当する。

ヘリの後を追う様に動き出す四機の機体を敬礼で見送る要員達、

情報支援の為にその傍を猛スピードで駆け抜けていく二台の装甲型司令車両と観測用のジープ。彼らはオークリー基地を見下ろす高台に陣取って戦況を観察しながら必要な指示をベースキャンプを通じて本部に仰ぐ役割を担う、『ボロゴーブ』の放つ隠滅兵器巨大な火の着弾点を指示する事も彼らの役目だ。

あつという間に人気の無くなつたベースキャンプに残された彼らは遠ざかつていく部隊の姿を名残惜しそうに見つめた後、踵を返してそれぞれの部署に戻って機器の電源を確認した。たそがれている場合ではない、もう既に作戦は始まっているのだ。

悪夢の夜を演出する為の彼らの役割もまた、既に。

「それはあくまで君の推測に過ぎないだろう、キース中尉？ 幾ら君にその権利があるとはいえ、『イエロー』の発令は少々拙速なんじゃないか？」

狭い基地での事だ、幾らなんでも一部の部署が何時もと違った行動を起こせば他の部署に漏れるのは時間の問題だ。モビルスーツ隊関連の部署が慌ただしく動く様を見咎めたウェブナーがキースを呼び出して事の真偽を確認する、キースは立場上昨晚手にしたベイト大尉の筆跡と見られるその紙をウェブナーに手渡して理由を説明するしかなかった。ウェブナーの感想は前述の通りだ。

「いえ、しかしベイト大尉がわざわざこの基地に来てその紙を挟んで行ったのは何か根拠が有る物と思われませう。例えばそれは近日中の物では無いのかも知れない、しかし訓練も兼ねてその様な非常事態に備えておく事は必要ではないかと考えるのですが。」

キースの言葉に腕組みをして考え込むウェブナー、机の上に置いてあつた眼鏡を掛けて、もう一度ベイトの置手紙を眺めた後言った。  
「……その体制を維持するにしても期間が問題だ。もしその様な不穏な動きが有ればジャブローなりカリフォルニアなりがこの基地に警告を発するだろう、だが未だにその様な報告は私の元には届いていないし兆候も見当たらない。もつともカリフォルニアは先日

のサリナスの騒ぎで殆ど出払ってるからこちらの事を気にする余裕など無いんだろが。それにもしその情報が確実な物だったとして、この基地を襲撃する根拠は何だね？」

「い、いえそれは自分にも理解しかねます。何か重要な施設や兵器が有るのならともかく、こんな辺境の駐屯地みたいな基地を襲撃して何の意味が有るのか」

今度はキースが黙りこむ番だった。そうだ、幾らなんでもこの基地を襲撃して得られる物なんか何もない。装備も旧式、要員も最小限。一瞬自分やモウラ達の存在を遂にこの世から抹消する気になったのか、と言う物騒な予感が頭を過ったがそれでも基地ごとと言うのはやり過ぎだ。そんな事をしなくても情報部の人間ならばその気になれば一人ずつ事故に見せかけて暗殺する事など容易い事だろうに、あの紛争の真実を暴露しようとした大勢の関係者と同じ様に。

「まあ、動機も分からんし情報も曖昧ではあるが訓練と称して二三日その体制でいる分には問題は無かるう。私もその間にジヤブローや友人を通じてそんな気配がこの近辺にあるかどうか探ってみる事にする。よろしいキース中尉、明朝をもってオークリー基地全部隊は『準臨戦態勢』のまま待機、尚解除は明後日六月二十五日午前零時とする。」

「明日からの二日間だけですか？」

キースがウェブナーの発令に敬礼しながら尋ねる。たった二日間限定したウェブナーの根拠の所在を確認しようとしたキースに、ウェブナーは笑って答えた。

「私を見損なわないでほしい、これでも軍に知り合いは大勢いる。それに軍以外にもな。二日もあれば香港のオフィス街を闊歩するO Lの下着の色まで特定する事が出来るさ。」

「と、言われた所でこの老いばれ數医者にはする事が無い。有ると言えばせいぜい」

「そう言いながらモラレスはチェス盤に置かれた黒のナイトを摘ま

んでゆつくりと前方に置いた。不用意に自軍を飛び出して来た白のクイーンに睨みを利かせるその一手は対面するグレゴリーの巨体を震わせるに十分な妙手だった。

「うおっ、ドク。それはちよっと」

「待ったなしじゃ。お前さんは強い駒をぞんざいに扱い過ぎる、クイーンはナイトの援護が有って初めて生きる駒なんじゃぞ？ それをこのこポーンに釣られて飛び出して来るから罠にはまる。取られて負けたくなかったらさっさと家に帰つとれ。」

叱責されてクイーンを元の位置へと戻すグレゴリー、そこへ追い打ちを掛ける様に黒のビシヨップが前線へと現れる。これで白のクイーンは自軍に釘付けのまま動く事もままならない、グレゴリーが顔を顰めて次の手を考えている最中にモラレスが尋ねた。

「お前さんの部署も大変じゃのう、慣れない仕事を押しつけられて。子分どもはどうじゃ？」

「まあ、慣れたと言うか。元々自分は料理をする事には興味があったんで別に艦長にここへ行けって言われた時には抵抗は無かったですけど、他の連中は苦労しました。力仕事と言う点では今までの経験が役には立ちましたけど。」

「力仕事、ね。確かにミサイルや弾を運ぶ代わりに鍋釜を使って基地全員の食事を作るんじゃ、ある意味仕事内容に大差はないか？」

「ええ、まあ。」

ほんの少し上の空でモラレスの会話に応じたグレゴリーが劣勢の盤面を睨み付ける、事態の打開を図るべくグレゴリーが残ったビシヨップで打って出た。ポーンの陰に隠れて敵のルークを仕留め、敵陣奥深くから陣形の崩壊を狙った作戦はモラレスの放ったクイーンによって一瞬にして瓦解する。それどころかそのクイーンが自陣の奥深くまで潜り込んで左翼を壊滅させた瞬間に、グレゴリーは両手を膝について頭を下げた。

「ああ、参りました。」

モラレスは涼しい顔で笑いながら手の中の白駒をばらばらと盤の

上へと零す、敗者となったグレゴリーは慣例となった後片づけを苦笑しながら始めた。クリスタル製のそのチェスセットを一個一個大事そうに箱の中に並べて蓋を閉じる、元々はグレゴリーがチェスを始めたのは、モラレスが持っていたそのチェスセットを見たいと思っただのがきっかけだった。

今では基地内で五本の指に入る実力者となったグレゴリーも師匠となるモラレスには敵わない、勝てばこのチェスセットを貰える約束をしたにも拘らず未だに一勝も出来ないままだ。

「お前さんもこりないなあ、そんなにこのセットが欲しいのか？」

「仕事柄、狙った獲物はどうしても逃がしたくないんですよ。ましてやそれが相手の旗艦や宝物となると、もう」

「意地でも撃ちたくなる、と。そう言う欲深い所は『スルガ』の時から変わらんのう、砲雷長。」

にっこりと笑って差し出されたモラレスの手に駒の入ったビロードの箱を手渡すグレゴリー、モラレスはそれを背後にあるカルテの保管庫に仕舞って鍵を掛けた。

「じゃあ、この続きはまた明日の晩じゃ。今日はぐっすり眠って、明日の為の作戦をじっくりと練ってこい。」

グレゴリーが大きな身体を折り曲げてペコリと頭を下げるとおもむろに立ち上がった。ニメートル近い巨体が聳え立った事で出来る影の下で小さなモラレスは笑いながら言った。

「どうせまた、返り打ちじゃ。」

「二ナ、まだ終わんないの？ そろそろ食堂行かないと閉まっちゃうよ？」

モウラがドムに接続してあるシステムモニタに釘付けになっている二ナの背中に呼びかける、それまでじつと画面を走る十六桁を眺めていた二ナはがっくりと肩を落として突っ伏した。

「ん、分かった。」

ぼんやりと答えた二ナが顔を上げてシャットダウンの操作に移っ

た。モニター上を走る文字の羅列があつという間に飲み込まれて消滅する、真黒になった画面をじつと見つめたまま座っている二ナにモウラは再び声を掛ける。

「二ナ？」

大丈夫？　と言つ言葉を続ける前に二ナははつとした顔でモウラを見た。まるでそこにいた事を初めて知った様に驚いた顔をする。

「あ、モウラ………何？」

「何じゃないわよ、食事はどうするの？　早くいかないと食堂閉まつちゃうよって今あたしが言ったの聞いてなかった？」

「う、ううん、聞こえてたけどモウラの声だとは思わなかった、まるでどこか遠くの方から聞えて来た様な気がして………　ちよつと根詰め過ぎたかしら、まだ目の前を数字がぐるぐる回ってる感じがするわ。」

目頭を押さえて小さく頭を振る。今まで見た事も無い二ナの憔悴ぶりに驚くモウラ、少なくとも出会ってこの方そんな二ナの姿を見た事が無い。

「ちよつと、大丈夫？　幾らあんたでも頑張りすぎだよ、乱数の法則を見つけ出して解析するなんてそんな軍のコンピューターでも出来ない事を勘だけでやるうつつたつて無茶に決まってる。どうせなら時間がかかってもアビオニクス全体を交換して連邦の現行システムに乗つけた方が楽じゃない？」

「うーん、本当はそれが一番楽なんだけどね」

目頭から指を離れた二ナが小さく笑つてモウラを見上げた。

「私ね、たまにこういう事があるの。頭の中でずつとモヤモヤしてる物がどういふ事が切つ掛けになるのか分からないけど、突然形や数字になって閃いたりするの。何の根拠も無い数字や数式なんだけどそれを繋げていくとちゃんとした理屈に組み上がったたりしてね、ガンダムのOSを立ち上げた時も最初はそんな感じで始まったのよ。」

「　そう言つと電源の落ちたモニターに視線を向けて、そこにある筈

のない物へと視線を向ける。

「今回もそれに期待して、同じ状況に自分を追い込んでみたって訳  
なんだけど…… やっぱりだめ、もう歳ね。」

「ちよい待ち、あんたが歳だッてんならあたしはどうなるんだい？  
あんたと五つしか変わらない『まだ二十代』のあたしには聞き捨  
てならない暴言だよ？」

苦笑しながら腕を腰に当てて、目を丸くした二ナを睨み付けるモ  
ウラ。二ナが慌てて手を小さく振って、自分の発言が言葉のあやで  
あつた事を説明する。

「ち、違う違う、そういう意味じゃないわ。ただ私達の様な職業

システムエンジニアって就労期間が他の職業に比べて異常に  
短いよ。アナハイムの最前線で働いているSEの平均年齢は大体  
二十歳前後、三十歳まで働いている人は稀なの。私達の世界で二十  
四歳って言ったらもうベテランの域よ、みんなが退職を考えるのも  
その時期。」

「退職って、依頼？ それとも自己都合？」

軍人の世界にはそんな歳で退職する事が稀だ、職業軍人で二ナ位  
の年ならば兵士としてのキャリアも能力も最盛期を迎える時期だ。  
そんな歳で退職を余儀なくされる世界の实情に興味を湧いたモウラ  
は反射的に尋ね、二ナはその問い掛けに小さく笑って答えた。

「男性は大体他の企業の引き抜きに逢うか再就職、女性は『寿』ね。」

「結婚、かあ……」

自分の洩らしたその言葉にモウラはある種の感慨を覚えた。SE  
としての能力が秀いでていなければならぬ二ナの様な人種はその  
力の衰えと共に主力から外される事が運命づけられている、それは  
あたかもパイロットが引退して指導教官への道へと踏み出していく  
理屈に酷似している。だが民間人である彼らには同じ世界にしがみ  
付いて生きる事さえ許されずに、結婚と言う名の新たな世界を選択  
せざるを得なくなると言う事なのか。



モウラ自信がその事を殊更に意識しなかつた訳ではない、整備士にしても体力や視力が衰えれば途端に現場を後進にとって代わられる事になる。自分が現場に立てなくなつたと知つたその瞬間に自身はどのような選択をするのか、キースとの結婚もその選択肢の一つではあるがそれよりも自分は現場に立つて機械を弄つて暮らしていきたいと思う。それが許される環境にある。

「そうよ、だからモウラも少しは自分自身の先の事を考えないと。キースにそつぽ向かれたらまた暫くモビルスーツが恋人の生活になつちゃうかもよ？」

クスクスと笑いながら立ち上がる二ナ、椅子を元の位置に収めてモウラに向けた視線の先に表情を硬くした友人の顔があつた。笑顔でもなく怒りでもない、どこか憐憫の欠片を覗かせたモウラが二ナに遠慮がちな声で問いかけた。

「…… コウに、会つたんだね？」

モウラの言葉に息を飲む。

「『モウラも』…… と言う事は『あんたも』 と言う事を考えなければならぬ時があつた。…… アテリア達を迎えに行つた時なんだね？」

昨日からの二ナの変化に思い当たる節がありながらどうしても聞き出せなかつたその言葉をモウラはやつと確信を持つて口にした。モウラの顔を直視できずに目を伏せる二ナ、無言で答えを待つモウラに向かつて二ナが呟く様に言つた。

「彼女達はコウの家に匿われていた。私は組合長さんにその場所を教えられて向かつただけ…… 大丈夫、」

二ナが笑顔でモウラに答えた。曇つたままのモウラの表情を何とか変えたい、私の事で彼女に心配を掛けてはいけない。モウラは私とコウの間にあつた事を全て知つている、だから私の事を気遣えば彼女は自分の幸せに向き合えない。あそこで出会つた四人だからそれぞれが幸せにならなくてはならないとモウラは思つているだろう、だから私とその選択を後悔してはいないと言う事をモウラに告げなけ

れば。

「 コウは元気だったわ。何も変わってない、色が黒くなつて髪が少し伸びて、身体は一回り大きくなったかしら？ 相変わらず頑固で、とてもやさしくて」

これでもかとり繕う様に捲し立てる二ナ。言葉を探す事に一生懸命でモウラの顔さえ眼中にない、虚ろに映る人影に祝詞でも唱える様にぼろぼろと言葉を垂れ流す二ナに対面したままのモウラが言った。

「二ナ」

険しい表情で一步を踏み出す。近寄つて来る筈のモウラの姿がよく見えない、二ナが慌てて後ろに下がるとコンソールの感触が足に響いた。

「な、何モウラ、そんなこわい顔で」

「もういい、二ナ。 我慢しないで。」

モウラの身体が覆いかぶさる様に二ナを包み込む、幾多のモビルスーツをスクラップになる運命から救い上げた両手が二ナの身体を抱きしめる。傷だらけになった二ナの心を思うあまりに止まらなくなったモウラの微かな震えが押しつけられた胸を伝わって二ナの元へと届く。

モウラの顔がよく見えなかった理由、二ナは笑いながら泣いていた。堪え切れなかった涙の粒が言葉の代わりにぼろぼろと目尻を伝わって零れ落ちる、頬に流れる悲しみが地面にしみ込む前に拭い取るモウラの胸が染みになって広がって行く、それを感じた時に二ナの心を覆っていた虚勢の全てが剥がれ落ちた。

悲鳴と言う名の慟哭が二ナの喉を震わせた。誰もいなくなったハンガーに響き渡る、未来を永遠に捨て去ってしまった背徳者の懺悔の叫び。それでも虚像に許しを請うかの如くモウラの身体にしがみ付く二ナ。モウラがその声を誰にも聞かせない様に強く二ナの身体を抱きしめる。

「モウラッ」

……

モウラ、私はっ

……

わたしは

コウ

といたかったの、でも、でも」

望めば望むほど形となって現れる絶望の未来。自分にではなくコウに訪れる終焉までの、それは恐らくあまりにも短い道のり。コウの手に曳かれて自分がそこに辿いたとしても後悔などしない、でもコウの手をそこへと導いてしまったのはこの私。コウをそこから遠ざける為に私がしなければならぬ事、それはコウに刻まれた運命の糸をこの手で断ち切る事。

自分の未来と引き換えにしても。

自分のどこかにはまだ微かな希望などと言う物が残っていたのだろうか。モビルスーツを捨ててもいい、それでもコウと同じ道を歩みたいと。農夫の妻としても何でも構わない、傍にいただけで幸せを感じる事の出来る穏やかな世界を求めていたのか。

でも、それはもう叶わない。幾ら自分が尽くしてもコウの瞳からあの恨みにも似た疑惑の色が消える事は無い、たった一度の、彼を守る為に選んだ道が数多の分岐を引き裂いて私とコウの道を別つてしまった。

もう二度と、絶対に、戻らない。戻してはならないのだ。たとえ自分の心がズタズタに切り裂かれて流れ出す言葉や感情が全てなくなってしまうとしても。

幾許の時間が過ぎたのだろう、モウラの胸に顔を埋めていた二ナの口から泣き声が止む。モウラの背に回されていた二ナの手から力が抜けた事を知ってモウラは二ナから手を離れた。何か引かれる様に離れていく二ナの目は赤く充血して少し腫れている、しかし虚勢の無い笑顔が浮かんでいた。

「……ありがとう、モウラ。」

「……あなたは馬鹿だよ、何でそんなになるまであたしに黙ってたんだい？　でも二ナらしい、あたしはそう思う。いいかい、これだけはよく覚えといて。」

モウラが解いた両手を二ナの肩に置いた。二ナと同じ位の小さな

笑みを浮かべながら、無二の親友の蒼い瞳を覗きこんで言葉を繋いだ。

「あたしは たとえ世界中の人があなたの事を責めたとしてもあたしだけはあなたの味方だ。あなたが転びそうになったらあたしがあなたを支えてやる、あなたが道に迷ったんならあたしがあなたを導いてやる。あなたは絶対に一人じゃない、一人ぼっちになんかしないから。」

思いの丈を言葉に込めて、モウラが二ナに強く誓う。掌を伝わる熱よりも熱い物を感じて、二ナが笑顔で頷いた。

「キースも一緒なら心強いわ、どうやら迷子にならずにすむかも。」  
「そうさ、キースも一緒。離れ離れになってもあたし達はあなたの味方、だから、ほら」

モウラは作業服の内ポケットから真新しいハンカチを取り出して二ナに手渡す、受け取るなり二ナは涙でぐしゃぐしゃになった頬を拭って遠慮がちに鼻をかんだ。小さく折り畳んでパンツのポケットに押し込みながら言った。

「ありがとう……ごめんね、モウラ。心配かけて。」

嗚咽の残る鼻声で謝る二ナに向かってモウラは何時もの笑顔を見せた。憑きものが落ちた様な顔で、一瞬前までの自分の振る舞いを恥ずかしそうに笑って誤魔化す二ナの表情を見てモウラは内心安堵した。

コウとの決別は二ナに埋めようの無い疵跡を残した、そしてそれはこれから何度も彼女の心を苛むに違いない。でもその時はまたあたし達が彼女の心の支えになってやればいい、彼女がまたいつの日か自分の未来に向き合う事の出来るその時まで。

「いいって。 それよりあたしは食堂に行くからあなたはもう部屋に戻りな、あたしが食堂で出前を頼んどくから 何が いい？」

「いいわよそんな。あたしも一緒に」  
モウラの提案を断ろうとした二ナの顔の前にモウラの指が突き付

けられる、驚いてその指先を見つめて声を止める。

「そんな顔でみんなの前に出てごらん、『忘却博物館』随一のクールビューティー、二ナ・パープルトン技術主任の身に何が起ったのかとみんなに勘繰られるのがオチさ。今日の所は大人しく部屋に引っ込んで、また明日いつもの凜々しい表情でみんなの前に顔を出せばいいじゃん？」

真っ赤な目と腫れた瞼。たったあれだけの時間で自分の顔に起こった変化を悟った二ナは、モウラの指摘が的確である事を認識した。「分かった、じゃあモウラにお願いするわ。ライ麦パンのスライスとレバーペースト、それとヒラメのバジル風味のフリッターとコブサラダ。スープはマンハッタंकラムチャウダーでお願い、トマト少なめでアサリが多め、オレガノは効かせてね。それとデザートに

「ちよ、ちよ、ちよと待って、」

まるで人が変わった様に注文をつらつらと口にする二ナに向かってモウラは、まるで今日が初日のアルバイトの様な顔をして二ナの言葉を遮った。

「まだ食べるのかい？ って言うか細かすぎて一辺に憶えられないよ。…… 全く、アルビオンの頃はあんな不味い艦内食を文句も言わずに食べてたのにこの基地に来てから随分と美食に目覚めたもんだね？」

「だっておいしいんだもの、グレゴリーさんの料理。それに今日はせっかく出前を取るんだもの、人目を気にせずに食べれるわ。だからね、」

え？ と不思議そうな顔で二ナを見つめるモウラに向かって、腫れた目でウインクを返しながら二ナが言った。

「ヤケ喰いよ。」

「遅かったじゃないですか。一瞬待ちぼうけを食わされたのかとひやひやしましたよ。」

小さなコンソール上に埋め込まれたLEDの光に浮かび上がった人影が、ドアの前に姿を現したマークスに声を掛ける。遅参を小さく咎められたマークスは”しっ”と小さく口の前に人差し指を当ててからモニターの前に陣取っているチェンに答えた。

「『イエロー』のおかげで中々仮眠所から抜け出せなかったんだよ。訓練だとは言ってもハンガーの明かりは煌々と点いてるし、これでも隊長やモウラさんの目を盗んで抜け出すには苦労したんだぜ？」

「？ 『準臨戦態勢』訓練ですか、そんな話は聞いてませんけど、何かあったんですか？」

尋ねられてマークスは小首を傾げながら苦笑した。

「さあ？ 思い当たる節と言えばこの前の模擬戦の結果かな。全戦全敗じゃあ隊長だって頭に来て、俺達にお仕置きの一つも与えたくなるさ。巻き添えになった整備班には気の毒だけどね。」

「ああ、なるほど。寝心地のいい布団をお預けにして、仮眠所の力プセルに押し込んだこうつて腹ですか。隊長もなかなか辛辣な手を使いますね。」

「ほんとだよ、ただでさえこっちは一昨日のダメージが抜け切つて無いつて言うのに、こんな体で固い布団に寝かされたんじゃあ」

マークスの愚痴はそこで途切れた。背中にガツンと当たるドアの感触、マークスの身体で遮られたドアの隙間からアデリアの小さな声が聞えた。

「そこ、じゃま。」

驚いたマークスが慌てて身体を前にずらす、その後が続いて開いたドアの隙間からアデリアの身体が滑り込んで来る。後ろ手にドアを閉じながらアデリアが自分の行動の障害物となっていたマークスに向かって不満を口にする。

「ちよつと何やってんのよ。そんなところでボサツと突っ立ってないで、誰かに見つかったらどうすんのよ？」

じろりと睨んだアデリアの視線の先にマークスが苦笑いをしながら謝る姿がある、チェンは二人のそのやり取りを微笑みながら眺めて言った。

「まあまあ、アデリアも遅れて来るのが悪い。女の子はいろいろ身支度に時間がかかる」のが相場だけど？」

マークスとの密会を示唆して遅れた時間の理由　それは仄かに香る香水の匂いを感じた事で分かる　を揶揄するチェンの言葉に、マークスに向けた視線よりも殺気の籠った目を向けるアデリア。どうやら凶星らしい。

「ま、それはさて置き。……　ここでお二人にもう一度お尋ねします、今ならまだ間に合う。ヴェスト軍曹、本当にジャブローのメインサーバーにハッキングを掛けて構わないんですね？」

コンソールの椅子をくると回して座ったまま二人の姿を見上げるチェン。微かに残る笑い顔以外は真剣そのもの、二人に重罪を犯す覚悟を問うチェンに向かってマークスが言った。

「チェン、これは僕の意思だ、アデリアは関係ない。」

「あんた何言ってるのよ、あたしもここにいるんだからあたしもあんなと同罪に決まってるじゃ　」

憤って捲し立てるアデリアの台詞を小さく上げた手で押し留めたマークスが、今度はアデリアに向かって言った。

「アデリア、もし万が一この事がバレたらお前は犯罪現場を目撃した第一発見者として当局に名乗り出る。そして俺とチェンのやった事、やるうとした事をありのまま包み隠さず一切の全てを供述するんだ。それでお前の身辺は安泰に　」

「じゃあやんない。あたしも帰る。」

プツと頬を膨らませたアデリアが拗ねた口調でマークスに言う、びつくりしたマークスが口調を強めてアデリアに言った。

「アデリア、聞け。これは最高刑が死刑に値するほど重い犯罪行為なんだ。チェンはアデリアの為に俺の誘いを受けてくれた、だがお前まで俺の我儘に巻きこむ訳にはいかない。だから　」

「あんだ、ばかじゃん？」

眉間に皺を寄せて、腕を腰に当ててマークスを威嚇するアデリア。言葉に詰まったマークスの顔をじっと睨みつけて、小さな声に凄みを混ぜて呟く様に言った。

「自分に出来ない事あたしに強要するんじゃないわよ。第一チェンはあたしの友達、あんたはあたしの上官。あたしがそんな二人に罪を押しつけてのほほんとしてられると思う？ それとも何、ここに逮捕にやって来るMP相手に大立ち回りでもやらせようって言うのかしら、マークス？」

その時点でアデリアがマークスの勧めに応じないと言ったも同然だった。あくまで二人と行動と運命を共にする覚悟を言葉と視線でマークスに押しつけるアデリア。チェンが言った。

「軍曹の負けです。今回はアデリアの方に理がある、見つかった時には運命共同体と言う事で了承して頂いて良いでしょうか？」

チェンとアデリア、二人の視線に晒されたマークスが暫くの沈黙の後にふうつと溜息を吐いた。心の中に残る、自分の主張が

アデリアの身を守ると言う 通らない事を悟ったマークス

が観念した様な小さな声でチェンに告げた。

「分かった、それでいい。」

マークスの決断に剣のある表情を解くアデリア、にっこりと笑ってマークスの肩をポンポンと叩いて言った。

「ま、言う事よ。恨むんならこんな分ならず屋をあんだの僚機に選んだ人事部と隊長に言っつね？」

上機嫌で告げられたアデリアの言葉に複雑な表情で応えるマークス、チェンが二人の会話のやり取りに小さく笑った。

「それに僕も軍曹の前で大風呂敷を広げたからにはそう易々と捕まる訳にはいかない。大丈夫、その万が一に備えて様々な手段を取ってありますからご安心を。 じゃあ、始めます。」

チェンはそう言うのと椅子を回してコンソールに正対した。司令室の物よりは一回り小さい規模の入力端末を起動させると19インチ



のモニターが小さな唸りを上げて点灯した。起動画面に続いて映し出される世界地図を眺めながらチェンがマークスに言った。

「世界中にいる僕の仲間に昨日コンタクトをとりました、もうすぐ一斉にジャブローへのハッキングを開始する手筈になってます。同時に攻撃する事で『サンダーバード』の追跡と攻撃能力を弱体化させるのが目的なんです、僕達はその影に紛れてジャブローに進入します。」

チェンの指が音も無く enter を叩くと世界地図上に何本もの赤い線が走った。網の目の様に張り巡らされた無数の線がまるで幾何学的に優れた蜘蛛の糸の様に、ジャブローを中心にして歪な円を描く。

「攻撃が始まったら僕達は、彼らが利用している様々なプロバイダを乗り継いで侵攻します。故に僕達がジャブロー内部にいられるのは彼らが全て焼き払われるまでの時間、それでもこれだけの人数が殺到すればかなりの時間が稼げるでしょう。」

「そんな、君の仲間を犠牲にする事になるなんて。」

「軍曹の申し出はそれだけのリスクを負わなければ不可能な事なんですよ。大丈夫、彼らも馬鹿じゃない。ネットカフェやら

なんやら公共の施設を使って行動するとは思いますが。それならば追いかけても個人を特定する事は出来ない、個人的に恨みを持つてる者は設備の整ってる自宅から参戦してるでしょうけど。どちらにしても『サンダーバード』は相当数のサーバーを破壊しながらこちらに向かつて来る、でもその間に僕達は逃げ切る時間を稼げる。」

チェンがモニターを見ながらニヤリと笑う、狂気にも似たその声はチェンの声帯を別の力と人格が震わせている様にマークスは感じる。

「さあ、難攻不落の城に向かつて槍を突き出すドン・キホーテ達。生き残った奴らだけが勝者だ。始まったっ。」

小さく呟いてキーに指を掛けるチェン、固唾を飲んでモニターに食い入るアデリア。マークスはチェンの呟きと共に反射的に画面の

片隅に表示される時計表示に目をやった。

午前零時ジャスト。

日付は六月二十三日に変わった。

## 深く、吸いこめ。

スピーカーから流れたダンプテイの命令にラーズ1は激昂した。既に作戦の最終確認が行われて一時間、フェライトシートの下でじつと息を殺してその時を待つばかりのWWW中隊に配置変更の指示が為されたのは作戦開始まで一時間を切った頃だった。

「ラーズ1は後方で待機、ガンタンクの援護と着弾評価を行え。」

ダンプテイの指示を聞いたトケルヒャー ヴ1だけがその言葉の意味を知る、このままの状態を彼を前線指揮に当たらせる事を危険だと判断したのだ。先鋒として基地に侵攻させる部隊は先日サリナスで騒ぎを起こした新兵達、この作戦に賭ける彼らの意気込みは並々ならぬ物がある事は承知だがそこにラーズ1を指揮官として送り込む事には若干の逡巡を覚える。ラーズ1がこの基地に在籍する一人の兵士に報告書の通りに執着を見せるのなら、彼を野放しにするのは危険だ。再び暴走する事があればこの作戦の骨子、そして自分達の思惑通りに作戦が展開しなくなる可能性もある。

「待つてくれ、ダンプテイ！ 俺をこの作戦に参加させないつもりか！？」

声を荒げるラーズ1、作戦発動中には今まで一度も冷静さを欠いた事の無い優秀な戦士の焦る声を耳にしたダンプテイは、僅かに眉根を寄せて再びラーズ1に向かつて発令を繰り返した。

「復唱しろラーズ1。貴様は後方待機、俺の仕事を代わりにするんだ。」

「馬鹿な事をつ！ 俺のポジションは今までも、そしてこれからも先鋒だ、それ以外の事など頼まれてもお断りだつ！」

「ラーズ1、ダンプテイの命令に従わない場合は命令不服従と見做してモビルスーツを降りて貰う、それが分からない貴様では無い筈だ」

すかさずト ヴー１の警告が二人の会話に割って入る。それは旅団だけではなく軍人として働く上では常識とも言える処置、そしてラーズ１は恨みや渴望に心を焦がしてはいても正しく軍人としての規律を骨の髄まで沁み込ませた戦士だと分かつての取引だった。

身体の底から湧き上がる怒りに頭痛がする、自分の仕事場を奪われると言う理不尽に人間に許された上限一杯まで血圧が上昇してラーズ１の眼底に血を滲ませる、腕が震え、足が震え、臓腑が何かに掻き回される。憑依していた悪魔の山羊が黒い蹄でラーズ１の心臓を何度も何度も蹴り飛ばす、身体の中から捲れ上がる黒い何かを感じながら、しかしそれでも後天的に捻じ込まれた本能とも言える職業意識が辛うじてラーズ１の瓦解を阻む事に成功した。

「…… ラーズ１は後方で待機、タンクの護衛と着弾評価を行う。」

その言葉を告げるだけの事にどれだけの労力と忍耐力を費やした事か。掌に食い込んだ爪の間から血が滲み出る、同等の赤い印が噛み締めた唇から流れ落ちる。

「既に『ハンプティ』は配置に就いている、貴様は直ちに砲撃ポイントへ向かえ。くれぐれも忠告して置くが戦闘エリアには一步も立ち入ってはならない、お前は今日は『壁の花』だ。」

「了解。」

シートの下から起動音をさせて黒塗りのジムが立ち上がる、手にしていたアサルトライフルを乱暴に地面に突き立てると乱暴にシートを剥ぎ取って踵を返した。どうやら装備を使い物に出来なくしたのは抗議のつもりらしい。

「ラーズ１。」

通信機からタリホーの声が聞える。ラーズ１のジムが立ち止まって振り返ったその先にこんもりと盛り上がったシートが月明かりに浮かんでいる、ラーズ１が先鋒を外れた為に以降の指揮はタリホーが受け持つ事になる。

「貴方の様にはいきませんが必ず我々が貴方の代わりに戦果

を上げて来ます、ですから貴方は後方で私達を見守って居て下さい。貴方の援護が必要になる時が、必ずあります。”

ガンタンクを護衛する者の任務には前線で窮地に陥った味方を砲撃で援護する為の目標を指示するという役目もある。ドイツの山中でラーズ1が窮地に陥った時に『ハンプティ』がダンプティの指示で馬乗りになったANIBIS4を仕留めたのと同じ様に、彼らを助けなければならぬケースも有るかも知れない、どれだけの戦歴を積んでここに至ったかとは言え彼らはまだ新兵なのだ。

「最初からそんな気弱な事でどうする、『タリホー1』？」  
ラーズ1は力付けようと心を砕くタリホー1に向かって言った。

「そんな事ではこの前の連中に取って喰われるぞ？ 俺無しでも十分に戦える事をお前達の背後から追いかけて来る味方に思う存分見せつけてやれ。そうしなければお前達に明日は無駄物と思え。」

ジムのアイカメラが小さく瞬いて、恐らくこの月夜の何処からか観察している指揮車に合図を送る。ラーズ1がゆつくりと遠ざかって行くのを振動で感知しながら、トヴ1はダンプティの足に腕を伸ばした。

「まさか作戦から外すとは思いませんでした。何をお考えで？」

接触回線での会話は外部からの干渉を一切遮断する通信手段だ、ダンプティが言った。

『ハンプティ』には作戦終了と同時にラーズ1を破壊しろと既に命じてある。前線に出た奴の背中を撃つのは恐らく困難になる、後方に下げる事で戦意を喪失させ厭戦気分の状態に置いておけば突然の裏切りには対処出来ないだろう。」

我ながら言い訳がましいな、とダンプティは思う。心の中の”ある感情”を悟られない様に出来るだけ抑揚を付けずに声に出したつもりだったが、長い付き合いであるトヴ1には通用しなかった。ほんの少し呆れた様な感情を声に滲ませてダンプティに返答する。

「呆れたお方だ…… 幾ら私達がこの旅団から逃げ出すとは

言え、敵となるラーズ1と戦ってみたいなどと考えると。第一彼がこの作戦を無事に生き残ったとして、あの『大佐』が処罰もせず

に引き続き旅団に在籍させるとでもお思いですか？”

胸の内を寸分の狂いも無く見透かされたダンプティは明かりの無いコクピットの暗闇の中で苦笑した。

「人の運命など先は分からん、俺達とてまさか連邦軍のモビルスーツを操縦する事になろうなどは”あの時”には想像も出来なかつたじゃないか。奴がもしそういう運命にあると言うのなら必ず俺達の前に姿を現して雌雄を決する事になる筈だ。」

「そう言うあやを否定する気は有りませんが……やはりどんな者であれ以後の脅威となる対象は速やかに始末して置いた方が宜しいかと、後顧の憂いを絶つと言う意味においても。”」

「分かつた、この戦いを生き延びて宇宙へ還つたら貴様の言う通りにしよう。取りあえずは目の前にある問題と障害を排除して、我々の目的を達成せねばな。」

ダンプティがそう言うのと交信は終了した。ダンプティの機体から手を離れたトーヴ1は沈黙を以って肯定の意思を伝える、ダンプティは再び暗闇の中で腕時計のルミノールの仄かな光を眺めながら来るべき時に起こり得る修羅の世界にまどろんだ。

前半戦は圧倒的にチェンの仲間達の勢力が優勢だった。それはハッキングの世界にとんと疎いマークスやアデアの目から見ても一目瞭然、ジャブローに繋がる何十本もの赤い線が明滅を繰り返しながら一点へと集中する。だが既に接続から10分を経過してその勢力図に何らかの変化が起る事は無かった。

「そろそろ頃合いだな……じゃあ、僕達も侵入ダイブします。」

プロバイダを通過する度に立ち上がるウィンドウにいちいち暗証コードを入力していたチェンがそう呟いて、enterを叩いた。何十枚も積層した画面上のタブが一瞬にして消滅し、最後に表示された画面に連邦軍本部データサービスの表示が示される。チェンは

パスワードを求めて来るその画面に迷いもせずにある数字を打ち込んだ、途端に画面は切り替わり、利用可能なデータアーカイブの階層が項目準に提示される。

「今のパスワードは？」

あまりにも手際がよく且つ都合のいいその展開にマークスが尋ねた。チェンは画面に表示された項目をスクロールさせながら言った。「僕の疑似認証パスワードです。以前に作って置いた『バックドア』侵入用の合鍵みたいな物。」

「『バックドア』って…… チェン、ジャブローのメインサーバーには誰も侵入出来ないんじゃないか？」

「『バックドア』とは一度侵入したハッカーが再び安全に入室する為に自分で取り付ける、専用の通路の様な物を指す。チェンのそれがここにあると言う事は、以前にこの若者はジャブローへと潜入した事を示している、だが彼はジャブローのデータを守護する『サnderバード』から逃れた者は唯の一人もいないと言っていないか？」

「『サnderバード』が出来た切っ掛けは僕達の様なハッカーが常にジャブローを遊び場に続けていたからなんだ。一年戦争の頃は連邦軍もリベラルな体質だったからそれほど規制はかかって無かったんだけどある時を境に、急に全ての情報が隠蔽され始めた。」

「ある時って？」

「テイターンズが連邦軍の中で台頭し始めた頃。それでも僕の仲間達はその事を面白がっているんなツールを開発してジャブローへと侵入し続けた、体制に反対するとかそんな大それた理由じゃない。ただ自分達が残した足跡に過敏に反応する大人達の反応が面白かったんだ。でもそれも『サnderバード』の登場でご破算になる、軍はどこかの企業に依頼して難攻不落、解析不能の電子防壁を張り巡らせて僕達の侵入をシャットアウトする事に成功した。」

淡々と語っているチェンではあったがその声音に悔しさが滲み出る。その話の後は聞かなくても何となく想像がつく、恐らくチェン

の仲間達はその電子防壁を突破する為に果敢に挑み、そしてその悉くが敗れ去ったのだろう。『無事に帰ってきた奴は一人もない』と以前二人に向かつてチェンが言ったのはその事を指しての事だとマークスは思った。

「ただどつやら連邦軍も防壁を張り巡らせただけで中の事には無頓着だったらしい。ほんとはもつといるんな手を用意してあつたんだけど、勝手口の鍵が開いてるんなら遠慮なく入れさせて貰おう。」

……じゃあ、いよいよデータアーカイブに侵入します。」

チェンはそう言うと言元一枚の紙を取り出した。口に咥えたペンライトでそれを照らしながら、殴り書きされた八桁の数字を叩きこむ。

「チェン、それがレベル5に入る為のパスワードなのか？ 一体誰の認識番号なんだ？」

マークスに質問されたチェンがペンライトの明かりを消して画面を見つめる、記載された番号が間違っていない事を確認してから enter を叩いた。

「……グリーン・ワイアット大将。元ルナツィ方面軍第二守備艦隊司令なんですが何度調べても該当者に行き当たりません。ですが認識番号だけは未だに除籍になっていないので今回はこれを使います。」

「該当者なしで在籍扱いって、それじゃまるで幽霊みたいじゃないか。大将格の人物がどういう事なんだ？」

「さあ？ ……考えられるとしたら彼が何らかの隠蔽すべき陰謀に巻き込まれて命を落としたと言う事くらいですね。地位が高いが故に彼の死を公表する事はその巻き込まれた陰謀自体が白日の下に晒される事になりかねない、それならばいっそ未だにパトロール中と言う事にして存在自体をうやむやにしまおうと。海軍の良識とも言える風習を上手く利用していると言えます。」

チェンとマークスの会話の間に画面は切り替わってアーカイブの一覧が表示された。示された階層は全部で四つ、マークスが何度も



画面を確認しながらスクロールを続けるチェンに尋ねた。

「チェン、階層が四つしかないぞ、後の一つは何処に」

「慌てないで。レベル5の入り口はこの四つの階層の中のどこかのフォルダに隠されているんです。これから目ぼしい所を一つ一つ当たって開いていく事になります。」

「この中から一つ一つって……冗談でしょ？」

「探す手掛かりは有るんだよ。基本的に樹形図ツリーダイアグラム方式で表示される各項目は全て偶数で表示される事が決められている、けどそこへ何かを隠すとするとどうしても歪な形の枝別れを作ってしまう。つまりはそこに都合の悪い若しくは見られたくない物が隠されているって寸法さ。」

そう言いながらチェンは既に言に該当するフォルダにカーソルを当ててクリックした。開いた画面には嘗て一年戦争の初期に連邦軍の要職に就いていた技官がジオンと通じて、連邦軍の秘密兵器の情報を横流ししていたと言う報告書が記載されていた。『サイド7』と言う文字にはマークスにも記憶がある。

「さあ、ここからが本番です。急がないと仲間がみんな焼き払われて僕達は何も得られず撤退する事になります。軍曹もアデリアも手伝って、少しでも違和感のあるフォルダを探してください。」

チェンの頼みを受けてマークスとアデリアが画面を食い入る様に見つめた。三人の視線が集中する画面の上部に現在ジャブローに不正アクセスを続けている仲間の数がカウントされている、それは既に開始時の三分の二を切っていた。

『ブージャム』がオークリー基地正面入り口の北側で陣を張る、自然の地形を利用した窪みに身を潜めて蟹目の暗視双眼鏡を覗く部下からの報告を待ちながら、月明かりの下で各々の装備を点検する。巨大なグルカナイフを鞘から取り出して光に翳した『ブージャム1』が部下に呟いた。

「どうだ、様子は？」

「」

背中をポンと叩かれた観測員は少し含み笑いで答えた。

「ゲートに歩哨は一人だけ。回りに人の気配なし…… 暢気なもんですね、これで軍の基地とは笑わせる。もうちよつと齒応えの有りそうな相手かなと思つてましたが拍子抜けだ。」

「博物館を管理するのに人数はいらねえ、在籍する陸戦（要員）も大した人数じゃねえしな…… だが油断は禁物だ。少なくともここには武器がある、今までの様にはいかねえかも知れん。」

「だと、有難いんですがね。いい加減無抵抗の民間人を殺すのにも飽き飽きでさあ、せつかく地上兵に志願したんスからたまにはきちり戦争つてものをやつとかないと腕がナマつちまいますよ。」

期待を込めてそう言う観測員の声には明らかに震えが混じっている、人はそれを『武者震い』と字して自らを奮い立たせるが本当はそうではない。心の底で蠢く死の恐怖から逃れる為に別の人格を作り出し、臆病な自分と向き合わない為の脳が作り出した幻影を纏つて存在する外殻の様な物だ。だがそうでなければこの部隊でやつて行く事など出来はしない、ただ無為に殺戮を繰り返すこの部隊にはまともな神経の持ち主など必要ないのだから。

自分の装備を確認し終えた『ブージャム1』がナイフを鞘に納めて周囲を見回した。既に準備を完了した三十人ほどの部下がタールを塗り込んだ顔に空いた目だけを向けて合図する、いつもの様に自分よりも早く準備を終えた事に満足したブージャム1が薄笑いを浮かべながら再び観測員の腰を叩いて言った。

「OK、いつでも準備完了だ。内通者からの合図を待つて正面ゲートから突入、手近な建物からローラー作戦で目標に当たるぞ。……」

「…… っつて言うか風潰しに殺していけ、一人も残すな。」  
「隊長、内通者からの合図つて、どう言う風な物なんですか？ まさか信号弾？」

観測員が尋ねるとブージャム1は『馬鹿な事を言うな』と言わんばかりに頭を小突いた。

「そんな訳有るか。時間になったら内通者が基地の主電源を落とす

事になっている、俺達はその暗闇に乗じて内部に侵入するんだよ。」  
「じゃあ基地全体が真っ暗になったら俺達の出番と…… なんだ、いつもと変ねえなあ。」

ひゅうつと小さく息を吐いた観測員がそう呟いて双眼鏡をじつと眺める、ブージャム1は不謹慎なその発言に苦笑いしながら腕時計を見た。

時刻合わせは既にベースキャンプで終わっている、時刻は零時を三十分ほど回っていた。

「チエン、これは？」

アデリアが指さした先にあるフォルダをクリックする、その操作がもう何度続いた事だろう。既に第四の階層へと侵入したチエンの表情には少し焦りの色が見えている様にマークスには見える、

それもその筈既にお仲間が総数の約三分の二を失って尚も減少中だ。恐らく未だに残っている連中は精鋭揃いであらゆる手を使って戦闘を継続し、チエンの援護を果たしているのだろうがそれにも限界がある。根幹となるプロバイダを突きとめられてウイルスを送り込まれた時点でそのサーバーは破壊される、チエンの利用するライオンを守護するハッカーは幾重にも安全装置と予備を駆使して彼の保全に回ってはいるがそれもいつまで続く事か。

チエンがフォルダを開くとそこにはいくつかのファイルがある、数字で示されるファイル名を見たチエンが呟いた。

「こんな所に」

「見つかったの!？」

背中で興奮するアデリアの声を聞き流してチエンがそのファイルをドラッグアンドドロップでメモリに格納する、さつきから何度も見かける光景だがチエンは既に何個かのファイルをそうやって抜き取る作業をしていた。アデリアが訝しげな顔でその行為を咎めた。

「ちよつと、チエン。さつきから何をこそそと盗んでんのよ、ジヤブローのメインサーバーから機密を盗んだら死刑になるんだから

ね？」

「ここにいる時点でもう僕達は終身禁固確定さ、そして目的の物を探し当てたらその瞬間に死刑確定。ま、見つからなきゃ罪にはならないんだけど。」

軽口を叩きながらチエンは再びツリー画面へと戻った。既に第四階層も半分以上網羅して未だにその片鱗すら窺う事が出来ない。チエンがさつきからちらちらと腕時計を覗いている事が彼の焦りを証明している、もう時間が無いのだ。

マークスの目がチエンの焦りを受けて血眼になってツリー画面を凝視する、画面の右端まで埋め尽くされた枝別れを追いながら、その突端に不思議な並びで置かれてあるフォルダが目についた。

「チエン、これは何だ？」

マークスの指先が示された先にあるフォルダは確かに偶数分岐の片側に位置している、だがよく見るとその枝別れの何本か先からが奇数に分かれている。末端だけに注目していれば絶対に見落としてしまう位置にひっそりと置かれたフォルダ、チエンがカーソルを合わせてクリックした。

「ビンゴっ！！ 軍曹すごいっ！」

チエンが歓喜の声を小さく上げる、呆気にとられるアデリアとマークスの目の前でモニターの画面は一瞬で変化した。地球連邦軍の紋章の下に置かれた警告文の羅列、そしてパスワードを打ち込む為の空欄。それは今まで自分達が見た事のある連邦軍のデータベースへのアクセス画面とは一線を画す、おどろおどろしい雰囲気を持っていた。

「さあ、いよいよ連邦軍の暗部に侵入だ、二人とも覚悟はいいですね？」

「ごくりと唾を飲む二人、その音までもが狭い室内に響き渡る様にも感じる。二人が緊張する様を目にしたチエンがにやりと笑いながら、震える指でテンキーを叩き始めた。」

座りの悪いテーブルの上に置きっぱなしの携帯が暗闇に鳴る。コウはベッドの上から起き上がり、薄闇の中で銀色に光るそれを手にとって着信番号を確認した。ぼんやりと空間に照射される情報には相手の名前も無く、ただ番号だけが浮かび上がっている。

「はい。」

コウが一人で喋った事を不思議そうな顔で枕元のエゴニーが見上げる。コウは携帯を耳に掛けると、再び携帯の先に存在する発信元非表示の相手に対して声を掛けた。

「……もしもし？」

「コウ・ウラキ少尉だね？」

唐突に自分の過去の階級で呼ばれたコウは心臓をどきりとさせた。自分がここにいる事、そして自分がかつてその階級で呼ばれていた事を知る者はあの紛争の事実を知る者に限られる筈。コウが反射的に尋ねる。

「だれだ、貴方は。」

「名前などどうでもいいだろう？ そうだな、敢えて私の事を呼びたいのなら『ディープ・スロット』とでも名乗っておこうか。今日は君の人生に関する重大かつ重要な警告を差し上げようと思つて電話をした訳だが、ところで君はコウ・ウラキ少尉本人なのか？」

まるでコウの良心へと纏わり憑く様に、粘り気のある声がコウに悪寒を催させる。得体の知れぬその恐怖を捻じ伏せる様にコウは電話の主へ答えた。

「そうだ、だが今はもう少尉では無い。予備役伍長だ。」

「私にとって君の階級だとか戦歴だとかそんな物には全く興味が無い。私にとって必要な物は、君が私の目的に対して有益か無益かと言う意味だけだ。今のところ君の存在は私にとって有益な物と判断したのでこうして電話を掛けていると言う訳だ。」

微かな含み笑いが時折混じるその声をコウは不愉快に感じる。悪戯電話にしてはたちが悪く、しかし自分の以前の階級を口にした相

手を無碍には出来ない。

「 こんな夜更けに何の用だ、要件があるのなら手短かにしてくれ。こっちは明日組合の会合があるんだ。」

「 オークリー地区農地復興協同組合、だったね？ 収穫が終わって集積した農作物を穀物商社に預ける為の下準備と言うところか、今年の作付はA Aで取引される様だね？ さっき開いた香港での先物ではそう言う情報が既に流れている。よかったじゃないか。」

「 俺の軍籍を知る貴方には関係の無い世界の話だ。与太話はそれくらいにしてさつさと要件を言ってくれ、それと貴方がこの電話番号を知っている理由も。」

「 ふむ」

コウの問い掛けに暫くの間、『デープ・スロート』は答えなかった。何かを考え込んでいるかのような沈黙の時が暫く流れ、コウがもう一度話しかけようと息を吸った瞬間に相手の声が耳に飛び込んできた。

「 まず、後者の方から説明しよう。私は君達が巻き込まれたあの紛争の全てを詳しく知る者だ。そして私はいつでもどこでも誰でも、全てを調べて知る権利を有している。正体は明かせないがね。」

「 『いつでもどこでも誰でも』だと？ どう言う意味だ、それじゃ貴方はまるで」

「 『ジャミトフ』の様だと？ …… 残念ながらその問いには断じてNOだ。私はあんな官僚上がりの俗物では無い。」

気分を害されたのか、男の声には凄みが滲んだ。その声を聞いただけでもコウは、電話の向こうの相手が決して好意を持って自分に電話を掛けて来た訳ではない事が分かる。

「 …… まあ、そう言う立場にある人間だと言う事だけ分かってもらえればいい。だから君の携帯の電話番号も、君の友人、仲間、両親、そして」

コロコロと変わる声音、そしてコウはその人物が一種の精神異常者ではないのかと言う疑念に駆られる。まるで短時間に躁鬱を繰り返すその声は、ポツリとコウの耳に鋭利な刃物を差し込んだ。

「　　」 彼女の、電話番号もね。」

ドスンと、重い何かが臍腑に叩き込まれる。頭の中で激発する感情がコウの声を支配する。

「貴様つ、二ナに何をするつもりだ!？」

その問い掛けは何の根拠も無い、しかしはつきりとした輪郭を持つ確信による物だった。声を荒げて携帯に怒鳴り返すコウのうるたえぶりを嘲笑うかの様に『ディーブ・スロート』は言った。

「　　」 私は何もしないさ、私はね　……　そうそう、丁度良い質問をしてくれた。実はその件について君に耳寄りな情報があるんだが、聞く気はあるかね?」

「勿体ぶつてないでさつさと答えろつ、一体何を知っているつ!？」

「　　」 せっかちな男だな、君は　……　別れた女の事で一時的にはいえ感情を乱すとは、それでもあの紛争で勇名を馳せた『悪霊払い』のする事かね?　……　まあいいだろう、今から私の言う事をよく聞きたまえ。」

コウを弄ぶかの様に愉快的な声でそう語る男の事をコウは信用出来ない。そして男が告げたその発言すらもコウには全く受け付ける事が出来ない物だった。

「　　」 もうすぐ、オークリー基地が襲撃される。」

手元に一枚だけ残った起動ディスクを眺めながら、二ナはベットに横になっていた。寝巻代わりの男物のワイシャツだけの姿で掲げた一枚の過去の記憶を何度もひっくり返しながらか、そしてそれを静かに枕元のナイトデスクの上に置いて照明を消す。一瞬にして襲いかかる暗闇の中でふと心細さに襲われて二ナは小さく身震いした。

「　　」 ……　何よ、今日に限ってエアコンが効きすぎてるんじゃない

の？  
「

心の中に押し寄せる寂しさを空調のせいにして、不満を一人ごちた二ナは足元で折り畳まれている肌掛けを手繰り寄せた。胸元まで潜り込んだ身体は熱を持ったように熱い、だが二ナはなぜかそのシーツを剥ぐ事を躊躇った。

微かな可能性に希望を託していた自分、いつの日かコウと再び巡り合えるその日を夢見ていた自分の愚かな祈りの全ては自分の犯したたった一度の過ちによって跡形も無く潰え去った。自分を守ってくれる者の存在を失った意味は、こんな日常の些細な場所にも隠されているのだと二ナは暗闇の中で思い知る。

一人で眠る事が初めて淋しいと思う、そしてそれはこれから未来永劫に続くのかと思うと遣り切れない。でもそれが自分に課せられた罪だと言うのならば、例えばどんなに過酷な仕打ちでも甘んじて受けなければならぬのだと自分自身に言い聞かせる。肌に掛るシーツの感触を無理やりにも彼に見立てて生きていかなければ。

その世界のどんなに空しい事か。二ナの目尻から暗闇に紛れて涙が一筋零れ落ちる。生きていく希望も夢も無くした人間が歩く茨の道は、私には辛すぎる。

モウラも、キースも、アデリアも、マークスも。みんな私の傍で支えてくれると誓ってくれる。

でも、みんなはコウじゃない。コウの代わりにはなれない。

あの日にぽっかりと空いた心のどこかの穴に冷たい風が忍び寄り、抜き取られた様に大きく深く、底の見えない深淵の闇をまんじりともせず見つめながら二ナはアデリアとマークスに全てを告白した夜に聞いたドクの最後の言葉を思い出した。

“明日と言う日が今までで一番いい日にならないと言う保障はなかるう？”

何度も何度もその言葉を心の中で繰り返しながら二ナは浅い眠りにつく、小さく繰り返される呼吸音がエアコンの音に紛れて仮初の闇に消えていった。



唾然と立ち尽くしたまま呼吸も忘れたコウ、その反応を愉しむかの様に電話の向こうの声の主は一言も喋らない。突拍子も無く告げられたインチキな予言に対して向けられたコウの反応は呆れた笑いを交えた否定の言葉しかなかった。

「何を馬鹿な、そんな事がある訳ないだろう？ 何を根拠にそんなデマを仕入れて来たんだ、嘘を吐くのならもう少し現実味のある

「信じる信じないは君の勝手だ、私がどうこう言う事じゃない。事実だけを述べている。」

「根拠は何だ、大体オークリーを襲撃して何の得がある？ 秘密兵器も何もない、ただの北米の辺境に位置する基地をジオンが攻撃して何になる？」

コウが電話の向こうに捲し立てる。「デープ・スロート」はほんの少しの間を置いて、コウの息が整うのを見計らってから言葉を繋いだ。

「今の君の発言には大きな間違いが二つある、まず一つ。来襲するのはジオンでもアクシズでもない、ティターンズが擁する特殊作戦群、バスク・オム大佐直轄の傭兵部隊だ。……先日ドイツの山中でMPIの研究所がテロリストに襲撃された事件を憶えているかね？ 立て籠もったテロリストを鎮圧、殲滅した部隊が今回の作戦の為に招集された。」

「馬鹿なっ。」

その事件はコウもネットで見て知っている、その経緯は確かに「デープ・スロート」の言った通りだ。だが、

「辻褃の合わない事を言うなっ何故ティターンズがオークリーを襲うんだ、同じ連邦軍だぞ？ それともオークリーに反逆の疑いでも掛けられたとも言いたいのか？」

それともテラーズ紛争の真実を知る関係者を一人残らず消す気にもなつたのか、しかしそれにしてもやり方が粗すぎる、とコウは

思う。もしそうならば真つ先に殺されなければならない、最も殺し易いのは基地を離れた自分ではないのか？ あの紛争の最奥に最後まで留まっていた自分ならその資格が有りそうな物だが。

「彼らの目的はオークリー基地に在籍する軍属、二ナ・パープルトン技術主任の殺害だ。」

男が静かにそう告げた時、コウは我が耳を疑った。いま、この男は何と言った。

誰を、殺すって？

「表向きには彼女の拉致が作戦目標となっているのだがそうではない、彼らは間違いなくパープルトン君を殺す為だけにオークリー基地を壊滅させるつもりなのだ。」

「ふざけるなっ！！！」

激昂したコウが思わず携帯のボタンに手を掛ける、それを押しさえすれば身元不明の男の与太話から解放される。

だがそこから指は動かない。まるで何かに魅入られたかの様にコウの指は固まったまま切断ボタンの上に置かれている、『ディープ・スロット』がまるでコウのその姿を傍で眺めているかの様に言った。

「どうやら思い止まった様だね、いや感心感心。もし切られたのならこれ以上の会話は無しにしようと思っていたのだが、君のその理性と好奇心に免じて君の犯した間違いの二点目について説明しよう。なぜ、テイターズが彼女を殺そうとするのか、それは

「コウの口から声が出ない。喉の奥が干からびた様に乾いている。噴出するアドレナリンをやっとの思いで押さえながらコウは『ディープ・スロット』の言葉を待つ。その時間は刹那の時である筈なのに何時間も何日も、何年もの時を過ごした様に感じる。時間という概念がコウの感覚の中から消え失せようとした瞬間に、電話口で声がした。」

「彼女が『ニュータイプ』だからだ。オークリーが抱えた秘密兵器、それが二ナ・パープルトンその人なのだ。」

「これは、また」

チエンが絶句するのも無理はない。その画面に広がる膨大な資料の数々、過去から現在に至るまでのあらゆる極秘資料のファイルがそこにはある。門外不出を運命付けられた連邦の闇、そして隠匿されるべき事実の数々。確かに政事まつじと言う物は清廉潔白なだけでは成り立たないと言う事をチエンは商売を通じての経験で知ってはいた、だがそれでもこれだけ数多の資料を目の前にしてみると地球連邦と言う名の国家がどれだけ多くの陰謀の基に成り立っているかと言う事を改めて思い知らされる。

「これだけみると蛇頭（中国の犯罪組織）やマフィアとやってる事は変わりませんね、いや絶対的な権力を持っているという点では彼らよりたちが悪い。」

チエンの言葉にマークスもアデリアも言葉が出ない。自分達が正義と信じた組織の中核にこれほど多くの秘密や汚点が隠れているとは思わなかった。

勿論ここにある全てが犯罪や諸々の悪事に加担した証拠と言う訳ではない、しかし声高に宇宙の平和を掲げて秩序を守ろうとする地球連邦の宣伝の影にこの様な思惑が隠れている事を全ての人々が知ってしまったら、今ここにある不安定な平和の構造の全てが転覆してしまうかも知れない。それだけの破滅的な力をレベル5と言う情報ひょうの地下牢は持っているのだと言う事を実感せざるを得ない。

「さあ、ぐずぐずして暇はない、さつさと探して逃げましょう。」

……  
まずは『PI4キナーゼ・タイプ？』からです。」

チエンはそう言うと言った画面の片隅にある検索ウィンドウへと単語を打ち込んだ。サーチコマンドを押して検索結果を表示するウィンドウが現れるまでのわずかな間にチエンは記録媒体を取り替える。フラッシュメモリーを取り外して光ディスクをスロットへと押し込むのを見てマークスが尋ねた。

「どうして交換したんだ？」

「」

「ファイルの大きさがどれくらい分からないんで安全策です。光ディスクならばかなり大容量のデータでも保存出来るので途中で間誤付く事ありません、ここからは一つのファイルに対して一枚を使う事になります。」

「当たり前のように説明するチエン、マークスが思わず尋ねた。」

「…… そうやっていろんな企業のデータファイルに忍び込んで機密を盗み出していた…… 何て事は無いよな？」

思わず画面から顔を上げて徐にマークスを振り返るチエンの顔には不思議な色が浮かんでいた。マークスの言を肯定する薄笑い、言に隠された非難を心外だと否定する憤りが交差して出来あがった無表情。チエンが何かを言おうと小さく口を開いた時にアデリアが言った。

「チエン、出たわ。」

アデリアの言葉に押されて二人の目が再びモニター画面へと引き戻された。検索結果に表示された対象ファイルは唯一つ、そのファイルへと誘うアドレスが点滅している。チエンはカーソルを合わせると迷う事無くクリックした、同時に起動するスロットのモーター音が低い音を響かせる。

「『LAS患者に於ける脳内活性状況と個体差によるサイコミュ発生比率の頻度検証考察』…… どうやら医学論文の様ですね。それも世界標準語じゃない、中世期に使われた医療関係専門の言語の様です。」

「『医療関係専門の言語』？ 何それ。」

「分かりやすく言うとAD世紀に地球で使われていた民族毎の言葉の一つで、ジオン公国語の元になっている物さ。と言う事はこの論文は連邦の物じゃない、ジオンの科学者の手による物だって言う事なんだけど」

チエンがそう呟きながら画面をスクロールしていく。どうやら内容に関して言うなら専門的過ぎて、ここにいる三人では全く内容を把握出来ない代物の様だ。時折混じる化学式の羅列や判読不可能な

長文の洪水をどんどん上流へ押し流した後、ページは遂に最後の署名欄へと到達する。

「内容に関しては後で誰か医療関係者にでも聞くとして、今僕達に分かる事と言えばこの論文を誰が書いたかと言う事しか無い。…

… っと珍しい、今時自筆だ。 …… 凄い癖字、誰だつて？」

「え、つとね 任せてこういうのは昔ものつすごい字の汚い子がいてね、何とか うーんと、ふ、フラナ …… フラナ

グン・ロメ

「！ フラナガン・ロム、なんと。サイコミュの発見者にしてニユータイプ理論の先駆者がこんな論文を書いていたなんて。元々は医学博士だと噂には聞いていたけれど本当の事だったんだ。」

新たな発見を得たチェンが興奮して一人ごちる。その傍らでマークスはフラナガンの下に書かれた共同研究者の名前を口にしていた。「共同研究者はエルンスト・ハイデリツヒと書いてあるな。」

フラナガン博士と共同研究をしていると言う事はこの人もニユータイプ研究に携わってる人なんだろうか、でも聞いた事も無い名前だ。」

「そりゃレベル5に名前が挙がる科学者ならばそれなりに何か秘密があるんでしょ？ どっちにしてもあたし達には縁遠い世界の人だわ、それになんかあたし、この名前嫌い。不気味な響きがあるんだもん。」

眉を顰めてマークスにそう答えるアデアリアの顔を眺めながらチェンが小さく笑う。記録の終わった光ディスクが自動的にスロットから吐き出された事を確認したチェンが再び新しいディスクに交換して画面に臨んだ。ウインドウを閉じて新たな条件を検索する。

「じゃ、急いで次だ。」 ヴァシリー・ガザエフ大尉 “ 正しいのかい、アデアリア？ ”

チェンの問いに顔を曇らせて頷くアデアリア。その名前を聞く事には得体の知れない不安を覚えているのが横に立つマークスには分かる。だからこそここで奴の正体をはっきりさせておかなければならない

と思う。

全てはそこからだ、奴と再び相見えた時に少しでも相手の情報を得ているか否かで対応がかなり違って来る。

チエンがキーを叩いて検索に入る、だが今度はあつという間に画面に結果が表示される。二ナの居室で見たコウの軍暦フォームと同じ形式で記載されたガザエフの履歴、あまりの速さにマークスは目を疑いながら呟いた。

「？ そんなに簡単に検索できる物なのか、特殊部隊の要員は

」

「いえ、軍曹。どうやらこのファイルはこの階層にある物じゃない様です、ほら、ここ」

指さしたその先にはファイルアドレスが記載されている。一番最後にスラッシュで囲まれている数字が階層のレベルを表している様だ、その数字は「2」。

「……ばかな、極秘事項じゃないって言うのか？ あれだけの事をしておいて、そんな馬鹿な。」

「ある意味極秘でしょう、もしこの人物が確かに二人の前に存在していたと言うのなら……このファイルは戦没者に関するデータベース内に存在しています。つまり、彼はもう死んでる。」

チエンの言葉に二人が絶句した。黙ってスクロールをするチエンの指が書類の背景にある文字を指し示す、「KIA（Killed in action：戦死）」を表す赤い文字がでかかと張り付けられて、経歴の最後に「ヴァシリー・ガザエフ大尉はサイド1・ケルン方面のジオン残党との小規模な戦闘に於いて戦死」と書かれてある。

「そんな、チエン嘘じゃない、本当にあたしは彼をこの目で見たのよっ！ それだけじゃない彼は部下を連れてあたしとマークスを拉致して、そして」

その瞬間の映像を思い返して身震いするアデリア、もしあそこでウラキ伍長が助けってくれなければマークスは彼に殺されていた。忌

避するにはあまりにも鮮明で戦慄を伴うその記憶を吐き気のする想いで脳裏に浮かべるアデリア。

「勿論僕はアデリアを信じる。だが、これで君が提出したサリナスの一件の報告書が信憑性を失った事も事実だ。何せ死んだ筈の人物が首謀者になって二人を拉致して何らかの情報を聞き出そうとしていたなんて、記録上ではあり得ない事になるからね。恐らく提出されたジャブローの査察部でもその事実が発覚した段階で破棄されてあの一件は迷宮入りになるだろう。」

「そんな……じゃあマークスの身体に空いた穴はどう説明するの？ まさか彼の亡霊がマークスに取り憑いて悪戯半分にスタンガンを撃ち込んだとも言うの？」

「いや、そうじゃない、そんな事じゃないアデリア。……もしその一切合財の事が全て事実だとするなら」

憤慨して声音が大きくなるアデリアの言葉を押し留めてマークスがチェンに言った。チェンはマークスの予想が正しいと言う事を無言で頷いて肯定してから、マークスの言葉の続きを口にした。

「そうです軍曹、間違いないでしょう。彼が所属する部隊はその存在を自軍にも知られてはならない部隊『Mercenary of the Geese』<sup>傭兵</sup>だと言う事になります。前科身元など全ての来歴を考慮せずに入隊可能で、ただ兵士として働く事だけを目的とする特殊作戦群。多分その一切のデータは絶対に閲覧される事がありません、あるとしたらそれは恐らくその部隊が本拠地としている基地の保管庫に紙媒体で収納保管されている筈です。」

「紙媒体？　なんで？」  
「発覚した時に直ぐに焼却、その部隊の全てを何らかの手段で消去出来る様にさ。だからもし軍曹がその事実を公にした瞬間にその部隊は一瞬にしてこの世から消え去るだろう、核の使用も辞さないほど完全にね。」

南極条約などと言うお題目ですら通用しないと云うチェンの予想にアデリアの背筋が寒くなる。そんな恐ろしい部隊にあの男は在籍

しているのか、ならばその男に衝け狙われる私は一生あの男の黒い影から逃れる事は出来ないと言うのか。

アデリアの身体が押し寄せる絶望と恐怖で小さく震える、マークスの手がアデリアの肩をポンと小さく叩いた。驚いてマークスを振り向くアデリアに向かって頷きながら応えるマークス。

「大丈夫だ、アデリア。心配するな、それならばそれで奴らはここには手が出せない。　　そうだな、チェン？」

「軍曹の言う通り。彼らは連邦軍にその存在を知られてはならない部隊、と言う事は彼らが動けば連邦軍は彼らを敵と見做して攻撃する事になる。幾らなんでも自軍と戦闘をするなんて暴挙を許可する筈が無い、いきおい彼らの相手はジオンの残党若しくは連邦に敵対する勢力に限定されている筈さ。だからこのオークリーが目標になる事なんてあり得ないのさ、有事の際にはカリフォルニアの大隊が援護に来る事に通例で決まってるし。」

「じゃあ、あたし達はなんで彼らに拉致されたの？　彼らは確かにオークリーに関する情報提供をあたしに求めて来た、その事はどう説明すればいいの？」

「君の報告書を読んでみて、彼の目的は明らかに君自身だったような気がするんだ。もつともそれが君自身だったのか君自身の何かだったと言う事は今一判別出来ないんだけど、少なくともオークリーの何かが目標になっていたのでは無い様な印象を受ける。それが訓練だったのか、暴走だったのか　　とにかく今ある手持ちの情報じゃこの事に答えを出すには不足しているとしか言い様が無いんだ。」

既にスロットの入口にディスクは飛び出していた。釈然としない表情を浮かべたままのアデリアとの会話をそのディスクの回収で中断したチェンは再び画面を元に戻して言った。

「さて、この件はまた後日に考え直すとして……　　軍曹、そろそろここをお暇しましょう。どうやら逃げ出すにはまだ十分に時間がある、彼らはよく頑張ってくれた。」



片隅に表示されるゲージの数は当初の数の五分の一を切っている、だがそこからの変動は増減を細かく繰り返して停滞している。恐らく何個ものサーバを並列で繋いで波状攻撃を仕掛けてチェンの帰りを待っているのだらう、チェンが彼らの奮闘ぶりに顔を小さく綻ばせながら言った。

「じゃあ、ここを出しましょう。」

そう言って enter を叩こうとしたチェンの指がキーの上で静止した。彫像の様に固まったままモニターを凝視するチェン、その口が小さく開いて声が漏れたのを背後で不思議な顔で見守っている二人は耳にした。

「何だ、このファイル……？」

レベル5に置かれている樹形図の枝別れは他の四つの階層に比べて異常に少ない。その中でもチェンの視線を惹き付けて止まないそのファイルは一つだけ、枝別れに繋がる事無くポツンと右端に置かれている。チェンの手が新たなディスクを掴まんでスロットに押し込むのを見てマークスが言った。

「おい、チェン。もう時間が無いんじゃないのか？ 早くここを出ないと」

「大丈夫、まだ時間はあります。それにダウンロードするだけならどんなファイルでも十秒も有れば済みます、内容は後でじっくりと確認するとして」

「またそんな犯罪紛いの事を。いい加減にしないとそのうち痛い目にあうんだからね？」

二人の励ましで少し気を取り直したアデリアがなじる様に警告する、アデリアの口調にいつもの明るさが戻った事を確認したチェンが笑いながら答えた。

「残念アデリア、もう立派な犯罪さ。そして君達はその共犯者……さ、このひっそりと他から切り離されたファイルの中身の正体は……と。」

チェンがファイルの上にカーソルを置く。記録媒体のモーターが

回り出してコピーが始まった事を三人に伝える、進捗状況を告げるゲージが表示された。

「…… 予定時間十秒？ 随分でかいファイルだな。中身は一体

」

そう呟いたマークスが思わずチェンのマウスに手を掛けた。画面に見入っていたチェンはマークスのその行動を認識するのにコンマ何秒か遅れた、思わず叫ぶ。

「駄目です軍曹っ！ まだどんな仕掛けが

」

チェンの制止も空しくマークスの指がマウスを動かす、途端に画面が切り替わって画面全体が『警告』と言う文字で一瞬にして埋め尽くされた。

鳴り響くブザー音、赤く点滅する画面。

チェンの指が狂った様にキーボード上を駆け巡った。

「君は君の乗った機体に疑問を抱いた事は無いかね？ 君の戦技レベルがああ機体に乗った事で飛躍的に向上した事は認めよう、だがそれだけであの『ソロモンの悪夢』に太刀打ち出来るほど戦いと言う物は甘くない。その事は君自身が一番よく分かっている事だと思うが」

コウは『ディープ・スロット』の台詞をただ黙って聞いていた、いや聞かざるを得ない状態に追い込まれていた。二ナが『ニュータイプ』、そしてそれが素で命を狙われる、それもオークリー基地ごとと言う。

幾ら情報と事象を整理しても理屈と感情が追い付かない、混乱したままの意識に『ディープ・スロット』の生温かい声が忍び込んで来る。

「君がああアナベル・ガトー相手に生き残れたのは全てあの機体があつたからこそだ、そしてその三機の機体を運用する為の理論をただ一人で創り上げた二ナ・パープルトンと言うSE、彼女がいなければ君は今ここでこうして私の話を聞く事も無かつたと言う訳

だ。”

「あの機体を作ったのはアナハイムだ、二ナはオペレーションシステムを作っただけで機体性能とは関係ない、それで何故彼女が『ニュータイプ』だと言いきれるんだ!？」

「君は料理と言う物を知っているかね？ 優れた料理人は予め自分の食べたい物が脳裏に浮かぶ、その自分の想像上の食べ物を作る為に新しい調理法を開発し、新しい食材を取り入れる。そうして今まで誰も見た事の無い新しい料理が世の中に姿を現すんだよ。

モビルスーツの開発も同じだ、漠然とした物を動かす為に理論を創り上げ、形にする為に理論に沿ったハードを開発する。彼女の脳裏に浮かんだ漠然とした未来形、それが君が乗った三機のガンダムだよ。”

モビルスーツの理論に詳しいコウにもその理屈は理解できる。『デイトプ・スロット』は尚も言葉を続けた。

「一年戦争を席卷した『RX-78-2』と君の乗った機体を比較するとその性能差には格段の違いがある、技術開発と言う進化の過程を一気に飛び越えていきなりあの時代に姿を現したオーパーツ、それを創り上げた彼女の事を『ニュータイプ』と言う言葉以外のどう言う単語で表現できると言うんだ？ 『天才』などと言う陳腐な言葉で表現する事などおこがましい、彼女が『ニュータイプ』である証明、それが君を『ソロモンの悪夢』から守り抜いたあの機体なのだよ。”

狂人の世迷言、そんな言葉がコウの脳裏を駆け巡る。だが狂人と言うにはあまりにも理性に満ちた声で、世迷言と言うにはあまりにも整合性に富んでいて矛盾の欠片も見当たらない。

「……もし二ナが『ニュータイプ』だったとして彼女の命が狙われる理由は何だ？ それだけの貴重な人材ならば保護されてしかるべきだ、なのに何故彼女を殺そうとする？ オークリーにはデラーズ紛争に関係した者もいる、もしかして彼らの抹殺も兼ねての事なんじゃないのか？」

それならば自分の論理の混乱にもある程度の道筋をつける事が出来る、少なくとも動機なき殺人など自分の中では認める事は出来ない。だが『デイトプ・スロート』はコウの求める答えとは全く違う言葉を口にした。

「私自身は彼女を助けたいと心から望んでいる。テイターズが彼女を殺そうという動機は別に彼女がああ紛争の関係者だからだとかそんな込み入った事情じゃない、ただ単に『私が彼女を欲しい』と進言したからなのだよ。その為にオークリー基地を攻撃すると言うのはその部隊が『皆殺しキル・ゼム・オール』と言う役割』を持った部隊だからに過ぎない。彼女……いや、君の大事な人達はそんな一時的な感情や主義主張によつて殺される。この意味が分かるかね？」

「そんな……そんな訳の分からない理由で二ナは殺されるって言うのか、何十人も無関係な人を巻き添えにしてっ！？」

「その答えは私にはではなく、自分自身の胸に問いたまえ。私は軍人では無いから軍人の狂った発想には着いていけそうにない。だが一つだけはつきりしている事がある、君と私の利害は確実に一致していると言う事だ。」

コウの耳朶に深く刻み込まれるその言葉。まるで心のどこかで永久に固まっていた氷河が溶けて、巨大な濁流となつてコウの体中を駆け巡る、胸の奥で発生した灼熱が細胞を焦がし尽くさんばかりに熱を放つてコウの身体を火照らせる。

「お互いの思惑はどうであれ、願う望みは変わらない。後は君の決断一つに係っているのだよ、コウ・ウラキ少尉。」

「もし貴様の申し出をここで俺が断つたらどうする？俺は二ナに振られた男だ、今更自分を見限った女の為に命を賭けるほど酔狂な男だと思うか？」

「……彼女を見殺しにする、と？ふむ」

溜息の中に明らかな嘲笑を交えて『デイトプ・スロート』は沈黙する。コウの耳が次の一言を捉える為に最大限の能力を発揮した瞬間に男の声が響いて来た。

「私は別にそれならそれでも構わない、彼女がいなくなる事で減速する世界の進化はいつの日か再び現れるであろう第二の彼女と第二の私によつて元の形を取り戻すだろう。だが君は失う、全てを。」

爆弾を投げ込まれた様なその言葉の衝撃。

「失う物が大きいのは私では無く、君の方だ。君がどういう決断を下そうと私はその結果と共にワルツを踊る事が出来る、だが君は踊る相手を永久に失つたまま罪悪と言う名の鎖に縛られて、人生と言う華やかな舞踏会場を後にする事になるだろう。」

コウの未来図まで予言する『ディープ・スロート』の声をコウは無言で聞くしかなかった。予言詩の様に綴られる男の言葉が間違っているとは思えない、いや寧ろその通りだと、その通りに自分はないに違いないとコウは思う。

「私の話はこちらまでだ、後は君の好きにするといい。だが願わくば君と私の思い描く未来の近似値が、共に同じ結果である事をここで祈る事にしよう、頼る神などいないがね。」

「答えろつ。貴様は、誰だつ。」

喉元にまで込み上げて来た様々な感情の焰を吐き捨てる様にコウは尋ねた。電話の向こうでコウの恫喝を耳にした『ディープ・スロート』は寸暇沈黙し、その後には静かな声音で答えた。

「……もし君が彼女の命を守り続ける事が出来たとしたらいつかどこかで会う日が来るだろう、自己紹介はその時にでも改めて交わす事にしよう。その時には君の健闘を心から称えて彼女の身柄を丁重に預からせて貰うよ、科学と言う名の神が創り上げる新たな未来の為に。」

断絶する通話、一方的に切られた回線が奏でる断続的な通話音を耳にしながらコウの意識は、直ぐそこにありながら遙か彼方の空の下で息を潜めてその時を待つオークリーのハンガーを思い描いていた。

チエンの血相が変わっている、そんな表情を浮かべる事など想像も出来なかったマークスは自分の引き起こした事態が、この冷静沈着の鎧を青年に脱ぎ捨てさせるほど切迫した危機である事に戦慄した。

「どうした、チエン、どう言う事なんだっ!？」  
「トラップに引っかかったっ、畜生っ!」

毒づいたチエンが画面を切り替える。ネット上で発生している各種の状況をリアルタイムで示すウインドウを全て並列で並べてその全体へと目を走らせる、マークスやアデリアに分かるのは最初から見ているマークスの友人達の接続状況だが驚いた事にその減少速度が加速度的に増大していた。

「すまない、チエンっ! 俺が」  
「謝るのは後でいいです、ここを無事抜けだしたら何か罰ゲームでも考えましょう。」  
反応が早い! アデリアっ、ディスクを

スロットから手で抜いてくれ、消去ロボットが来たっ!  
チエンが素早くドキュメントを開いて中に内蔵してあったプログラムを一斉に走らせる。デコイプログラムは『ハメルーンの笛吹き』と呼ばれる物で本来であればサーバー内を徘徊する監視ロボットの目を引き付けたり、誘導する役割を果たす。

だが異物を排除する白血球の如くチエンのデコイに喰らい付いた監視ロボットはあるうことか寸分の抵抗も許さず瞬く間にそのプログラムを解体した。

「時間稼ぎにもならないのか、何て威力だっ。あんなのに取りつかれたら本体ごと消去されて回線に乗っ取られる、アデリア、まだかっ!？」

「ちよ、ちよっと待ってこう暗くっちゃあ穴が見えなくて  
持っていたヘアピンを真っ直ぐに伸ばして必死でスロットの入り」

口付近にある筈の強制排除ボタンを探す、だがそれを見つけるにはあまりにも室内の照明は暗く尚且つ極度の緊張の為に思う様に手が動かない。

「早くっ！ ダウンローダーに噛みつかれている以上、ディスクを取り出して無理やり終了させないとこっちはここから身動きが取れない っって言ってる傍から」

チエンの目の前に更新状況を示すウインドウが立ち上がりゲージが表示される。プログラムの消去が始まった事と進捗状況を示すグラフはチエンの組み上げたハッキングツールのシステムが片っ端から解体され始めた事を示している、チエンが延焼を防ぐ為に「防火扉<sup>オール</sup>」を起動させるがそれでも勢いに衰えを見せない。

「アデリアっ！」  
「あつたっ！」

アデリアが叫ぶと同時に小さな穴へとヘアピンを押しこむと、スロットは押し出される様にトレイを吐きだした。ダウンロードの強制終了が表示されると同時にチエンはツールの殆どの機能を破棄し、それを囿にしてアクセスシステムのプログラムだけを手元に戻した。侵入したプログラムと比較するとまるで小舟の様な規模の脱出艇を、チエンはレベル5から通常の階層へと浮上させて溜息交じりの感想を呟いた。

「うっわ、危なかった。もうちょっとで回線に侵入されるところだった。そうならあつという間にここを突き止められて明日にはMPが押し寄せて来る、一瞬夜逃げの算段が頭にちらついたよ。」  
「もう、大丈夫なのか？」

安堵の溜息を漏らして椅子の背もたれに身体を預けるチエンにマークスがおおずとお尋ねた。もともとこの危機は自分の不注意が招いた物、責任を感じるマークスにチエンが笑いながら言った。

「いえ、多分奴らは撒き餌を喰らい尽くしたら僕達の足跡を追っ掛けて来るでしょう。でも大丈夫、時間はまだ残ってるしそれにあのハッキングプログラムはぺろりと平らげられるほど小さなもんじゃ

ない。飲茶のつもりで席に着いたら満漢全席が運ばれて来る類の規模ですから奴らも時間がかかるでしょう。」

モニターには切り離されたツールが次々に消去される様子だけが表示されている、それが恐らくチェンの虎の子であった事に気付くマークスは、自分の不注意を心の底から後悔した。

「済まないチェン、君の大事なプログラムを俺のせいで失ってしまった。このお詫びは何でもする、何でも俺に言い付けてくれ。」

マークスの謝罪を肩越しに聞いたチェンは束の間視線を宙に踊らせて何かを考えていたが、突然にんまりと笑って振り向いた。その視線が謝罪したマークスではなくアデリアへと向けられた事で、当のアデリアは嫌な予感に顔を引き攣らせる。

「じゃあ、遠慮なく。プログラムの開発には時間とお金がかかります、時間の方はまあしょうがないとしてお金の方は軍曹でも何とかなる。」

「俺でも？ …… 分かった、どうすればいい？」

「そうですね、先ずは僕の事務所の専属モデルとして働いて貰いましょうか。ああいや軍を辞めるって事じゃなくなってアデリアと同じ様な立ち位置で十分です、モデルになって貰ってその写真をネットで売り捌くと言う簡単なお仕事ですから軍曹でも大丈夫でしょう」

チェンの話を聞いていたアデリアの血相が変わった。確かに自分はマークスの中にその才能を認めはしたが、しかし本人の同意無しに事を進めようなどとは考えてもいなかった。試着の時に見せたマークスの拒否反応を知るアデリアだからこそ、マークスに自分と同じ副業を勧める事には躊躇いがあったのだ。

「ちょっとチェン、幾らなんでも本人の意思も聞かずにそれはやり過ぎじゃない？ 第一マークスにそんな『お仕事』似合わないよあたしは」

「分かった、引き受けよう。」

アデリアの抗弁を遮ってマークスが力強く頷く、表裏翻す心境の



変化に驚いたアデリアがマークスに翻意を促す。

「マークス、考え直した方がいいって。だって仕事なんだからある程度はクライアントの言いなりに仕事を受けなきゃいけないのよ？

そんなに簡単に」

「チエンは俺の頼みで危険を冒して、俺の不注意で大事な資産を失ってしまった。俺はチエンに対して返そうにも返しきれない義理があると思う、そんな事で償いになれると言うのなら俺は喜んで引き受けるよ。」

ああもう、とアデリアは心の中で呆れ果てた。マークスの瞳が薄闇を僅かに照らすLEDの輝きに映る。

そんな目で見られたらこっちは何にも言い返せないじゃないっ！  
「……じゃ、そう言う事で契約は成立です。契約書の方は後日お渡ししますので署名をお願いします。そうだな……いきなり本格的にってのは軍曹も戸惑うでしょうから最初はベテランとペアでお願いしましょうか。」

「そうだな、俺もその方が心強い。モビルスーツの操縦を教わる時も最初は教官との二人乗りタンデムからだしな。で、相手はもう決まってるのか？」

「ええ、勿論。」

チエンはそう言うのと視線をずっと横にずらした、アデリアの顔を人の悪い笑顔でじつと見つめる。

「軍曹もよくご存じの人物です、まずは彼女をアドバイザー兼パートナーとしてネットビジネスの世界を勉強して頂きます。」

「！ ちよ、あ、あんた何言ってるのよっ！」

マークスの事で頭が一杯になっていたアデリアは迂闊な事にさっきのチエンの笑い顔の真意を忘れていた。再び舞い降りて来た尻尾の尖った東洋人の悪魔の笑い顔に我に返ったアデリアは思わず声を荒げた。

「あた、あた、あたしがマーク、マークスのパートナーで、ですって！？ あたしはそんな事一っ言も聞いてないし」

「おや、不服かい？ アデリアが断るのならジェニファーでもカサンドラでも僕は別に構わないんだけど。しかし今まで軍人一辺倒だった軍曹がいきなり華やかな世界に入って来るんだ、それなりに気が知れてそれぞれの世界の知識がある人間の方がいいと思ってアデリアを推薦したんだけど？」

あんたの顔にはそんな事一言も書いて無いっ！

思わず心の中でチェンに向かって罵声を飛ばすアデリアだったが、チェンの思惑が凶星だとは言えそれを口に出す事も出来ずワナワナと震えている。顔を真っ赤にしてチェンを睨みつけているアデリアにマークスが言った。

「アデリア、もし迷惑なんだったら済まないと思っている。でも俺もチェンの言う通り俺の教官はお前が適任だと思う、それでもお前がどうしても俺と組みたくないって言うんなら」

「そんな訳ないでしょう！？」

考えていた言い訳が全て吹っ飛んで、自分の意思とは関係の無い心中の意見が飛び出してしまったアデリア。口にした言葉を反芻して思わず口を押さえ、「しまったあ」と言う顔で俯いた。

「はい、じゃあ軍曹の相方はアデリアで決まり。公私共に一緒に働けるなんて巷でも稀なケースなんだから、頑張って軍曹を一人前にしてくれよ？」

楽しそうな声音のチェンを口を押さえたままギロリと睨みつけるアデリア、そのアデリアに向かって手を差し出したマークスが言った。

「アデリア、俺のミスに付き合わせて本当に済まない。俺が一人前に働けるまでの間、色々と教えてくれると助かる。」

「う、うん……こちらこそ、どうぞよろしく」

呟いておぼおぼとマークスの手を握りしめるアデリアのしおらしい姿を微笑みながら眺めるチェン、二人の姿からモニターへと視線を戻して言った。

「さ、話が決まった所でこんな物騒な所からはとっと逃げ出しま

しょう。」

チエンがキーボードを叩いて帰り支度の為の入力を行う、データサービスのプログラムを離れてアーカイブの外殻に到達するのに時間はかからない。プログラム検索を行ってバックドアのアドレスを打ち込んだチエンが、不思議な顔をして首を傾げた。

「………… あれ、おかしいな？」

止まった手が再びキーボードを叩いて同じアドレスを入力する、だが画面に表示された検索結果は『当該アドレスに該当なし』と言うミスマツチアンサーだった。チエンの顔色が変わった。

「…………… 嘘だろ……………」

ただ事ではないチエンの呟きを耳にした二人が結んだ手を解いてチエンの背後に殺到する、チエンは再びバックドアのアドレスを打ち込んで検索に掛けるが結果は同じ、チエンの緊迫した声。

「バックドアが閉められてるっ！」

叫んだ瞬間に再びモニターのスピーカーから警報が鳴った。接近警報、バックドアに手を掛けた事が仇になる。チエンの貴重な撒き餌を残らず消化した消去ロボットはサーバー内の異変を捉えて再びチエンの元へと肉薄していた。

「おいチエン、時間はまだあるんじゃないのか!？」

背後から肩に手を掛けたマークスが尋ねる、チエンはそれを聞き流して接続状況を示すウィンドウを立ち上げて言った。

「…………… くそお、『鍵』をつけ替えやがったな、電撃だけが取り柄の『サンダーバード』だと思っていたら中々芸の細かい事をする……………」

…………… どうやら僕の仲間も閉め出されてしまった様です。」

その言葉を最後にチエンは黙ってモニターを見つめながら腕組みをする、事ここに至ってはマークスもアテリアも何の手助けも出来ない。ネットの世界で暗躍し続けたと思われる稀有な才能を持つハッカーのお手並みをただ見守る事しか出来ない。

「…………… しょうがない、あれを使うか。どっちにしても穴を開けないと帰り道が無いんだし…………… もつたいないなあ。」

そう言うとチェンの指がキーボードの上で一頻り踊った揚句に enter を叩いた。途端に今まで封鎖されていた回線が接続されて画面に『ON LINE』の表示が現れる。パスワードすらも必要としないその鮮やかな退出にマークスは驚いた。

「何だ今のは？ 何をしたんだチェン。」

「『お札』みたいな物です。以前ここに潜り込もうとした時に外殻部の防壁に『トロイの木馬』を捻じ込んでおきました、中身はどこにでもある対防壁用のウイルスなんです。が相手が属性を解析して分解するまでの僅かな間、通路が開きます。一回こつきりですけどね。」

その言葉を裏付ける様にモニターにはチェンの仕掛けたウイルスが瞬時に破壊された事を示すレポートが表示された。チェンがジャブローを離脱した事で仲間の不正アクセスも終了する、今までジャブローに集中していた赤い蜘蛛の糸は次第にジャブローの位置から末端を遠ざけつつあった。

「さあ、これにて作戦終了。今回は僕達よりも帰りを諦めずに待っていてくれた彼らに敢闘賞をあげるべきでしょう、戦果も上々結果は見てのお楽しみって所ですか？」

チェンが笑いながら肩越しに二人に話しかける、緊張の糸が解れたマークスとアデリアもチェンの笑顔を見て安堵の溜息を小さな笑いと共に漏らした。

「全く肝が縮んだよ、これならまだ一昨日の模擬戦の方が気が楽だ。」

「そうよねえ、モビルスーツの操縦ならまだ自分達で何とかなるけど、ネットの世界じゃ手も足も出ないわ。おまけにあたし達の運命があんたの手に握られていたかと思うとそりゃもう不安で不安で」

「饒舌に軽口を叩きながらアデリアがふとモニターを眺めた。自分達が仕出かした危うい綱渡りを終えた余韻を世界地図でたしかめようとしただけの行動だったのだが、その時アデリアの目は画面で発

生じたある動きに引き付けられた。

「ねえ、チエン？」

口調の変わったアデリアの顔を笑いながら覗きこむ二人、アデリアはその視線も目に入らない位集中してモニターを見つめながら再び尋ねた。

「これ、何だろ？ …… ジャブローから赤い線が延びてきてるんだけど。」

アデリアの言葉を聞いたチエンの顔色が一瞬で変わった。慌ててモニターを振り返るチエンに釣られて二人も食い入る様に画面を見つめる。

地図上に示されるチエン達のラインは既にアフリカ大陸の西岸まで後退している、だがジャブローから伸びる赤い線はチエン達が後退する倍の速さで徐々に差を詰めて来ていた。まるで生き物の触手の様な成長速度を見たチエンが小さく呻いた。

「しまった、送り狼だ。 …… くそつ、もしかしてさつき取りつかれた時にフラグを立てられたのかっ!？」

アクセスプログラムを展開して内部に目を凝らすチエン、自分の組み上げた言語の洪水に視線を走らせ違和感を探る。

「 …… プロトコルが書き換えられている、IPアドレスが別物だ。」

独り言を垂れ流しながら書き換えられていると言うIPアドレスを元に戻す、だがコマンドを入力する度に『レジストリにアクセスするための管理者権限がありません』と言うエラーだけが表示された。チエンが結果を目の当たりにして毒づいた。

「駄目だ、ロックされている。これじゃあ ……  
「どうなるんだチエン!？」

焦燥に駆られたマークスの問い掛けにも沈黙したままじつと画面を睨みつけるチエン、一瞬の沈黙の後にその重い口を開いた。

「 …… 簡単に言うത്『サンダーバード』からの呼びかけに僕のソフトが馬鹿正直に返事をしている状態です。つまりある意味乗っ

取られてると。」

「そんな、じゃあこのまま放って置いたら確実にここが分かってしまうって事じゃないか!？」

「…… 取りあえず応急措置としてこのプログラムをコピーして分散させてみます。場所はキンバーライト・ニューデリー・香港の三か所、そのプロバイダの回線全てにコピープログラムを放出して様子を見ましょう。それでも尚僕達の後を追って来る様だったらもう最後の手段に出るしかない。」

軽口の無くなったチエンの様子を伺うマークス、ただ自分がアデリアの上司と言うだけでこの計画に賛同し、そして自分の不手際で引き起こされたこの危急時にはあまりに落ち着き払っている。

以前ネット小説の話の時に見せた、人懐っこい笑顔の下の素顔を垣間見た時の様な猛烈な違和感に襲われる。

「最後の手段って何？」

自分の思考回路に埋まって言葉を無くしたマークスの代わりにアデリアが問う、チエンがコンソールの右端にある大きめのレバーの視線を繰れながら言った。

「この基地に『サンダーバード』が到達する寸前に全部の電源を落として奴の目を眩ませる、命中寸前に目標が忽然と姿を消したと分かれば奴はこちらの存在もデコイと勘違いして引き返す筈さ。戦艦カウンタメジャーの『対抗措置』と同じ要領。」

「だがそれでは他を追っかけて行った『サンダーバード』が全く関係の無いサーバーを攻撃する事になる、俺達に縁も所縁も無い赤の他人を巻き込むなんて、俺には」

「軍曹、」

チエンが厳しい顔でマークスを睨み付ける。心中の情気を叱咤する様にチエンが言った。

「勘違いして貰っては困ります、僕がこの手に出るのは僕の友人であるアデリアの身を守る為です、軍曹じゃない。彼女の意思が僕達と運命を共にすると決めた以上僕は、たとえ他人を犠牲にしても

彼女の、そして軍曹を守らなければならない。軍曹の心中はお察ししますがこれは僕自身の主義主張による決断です、ですから口を挟まないで。」

厳しい口調でマークスの反論を封じたチエンが再びキーボードに臨んだ。キーを素早く操作して現状のアクセスプログラムのコピーを何十体も作り上げる。

「幸いな事に変わっているのはアドレスだけで他の機能はまだ支配下にある。だから」

自分達の居場所を示す赤い線の末端がキリマンジャロに到達する、チエンはコマンドを入力して一斉にコピーを放出した。クラスターのようにばら撒かれたそれはあつという間に全方位へと拡散を始める。「まだ軍曹の想像通りにはいかない可能性も残っている　　来たっ。」

チエンの言葉の影で『サンダーバード』はキリマンジャロに到達した。拡散したコピーの後を追って分岐するだろうと思われた送り狼は他のコピーには目も繰れずに真っ直ぐ本体へのルートを選択する、チエンが残念そうに呟いた。

「どつやら僕の目の届かない場所も書き換えられているらしい。……　一応後の二つでも同じ事をしてみますが望み薄です。コピーを追って分散してくれたのなら伝送損失を起こして威力その物が弱体化する、そうすれば幾らでも手はあつたんですがこうなってしまうえば選択の余地が無い。当初の予定通り電源を落とします。」

夜間迷彩を身に付けた男達が『ブー ज्याム1』のハンドサインに従って暗視ゴーグルを装着した。単眼仕様のそれはまるで顔から生えた角の様に前方に突き出されて、月明かりの下で蠢く彼らを百鬼夜行の群れの様に浮かびあがらせる。ブー ज्याム1が明るくなつた視界の中で規則正しく動く時計の針をじっと見つめている。

天球儀の様に規則正しく動く十五個のルミノール、それらがまるで規定された星読みの位置に固定されて全ての事象が動き出すまで

の退屈な時間、ブージャム1の脳裏にこれから始まる愉快で至福な一時の光景が明確なビジョンとなって描きだされる。

唯殺すのが目的であると言う事に欲求を満たしきれない部分はある、だがそれでも大勢の人間を圧倒的な戦力で蹂躪する快感と言う物は性欲を充足させるに足る感覚であると言う事を否定出来ない。それは恐らくモビルスーツ全盛のこの時代に於いて地上戦力へと名乗りを上げた彼の部下全てに該当する事だと思う。

命を殺る感覚、自らの手が相手の命を奪り取る感覚は決してモビルスーツでは味わえない、体一つで戦場に立つ彼らに与えられた唯一の特権なのだ。その手に伝わる感覚が何度も何度も繰り返して止まない、鬼畜と罵られようと蔑まれようとその一瞬の説得力の前にはどんな罵詈雑言も気にならない。なぜなら

その気になれば嘲るお前達でもこの手で殺せるのだ、と。

味わった手応えが再び掌に蘇る、喜びに震える手首に回された時計はもうすぐ午前一時になるうとしていた。

送り狼はやはりニューデリーでもチェン達の後を迷わず追って来た。香港ではチェンの懇意にしているソフト会社のサーバーにまで入り込み、『金楯』と呼ばれる門外不出の防壁システムを立ち上げたのだが健闘も空しく、ほんの少しの時間をチェン達の逃亡に稼いだ揚句に解体された。チェン曰く『唯のソフト会社が開発した物にしては不必要に凶暴』な『サンダーバード；改』以前に出くわした物とはまるで別物だそうだが、明らかにジャブローのデータサーバーを守る目的以上の性能を有していると、成り行きを黙って見守っているアテリアとマークスに告げた。

「こんな物がネット上に放たれたら情報の自由化なんかあつという間に淘汰されるでしょうね。自分達にとって有益な情報は保護、害悪な情報は今の僕達がそうであるように情報を書き換えて発信元を特定する。誰が考えたのかは知りませんがこれは連邦による情報のファッショ化です。」



チェンの手は既にレバーに掛っていた。自分達を追って太平洋の海底ケーブルをひた走る『サンダーバード』は日付変更線を越えていよいよカリフォルニアへと迫って来ている。

「サンホセの基地からカリフォルニアベースを経由してオークリーに来る筈です…… カウント開始。」

ハワイの基地を超えてもう既に分岐するプロバイダは一つも無い一本道を駆け抜ける『サンダーバード』がサンホセの基地からカリフォルニアベースへと方向転換した瞬間にチェンがウィンドウを立ち上げた。千分の一秒まで桁を広げるカウンターが目まぐるしく数字を減らしていく。

「後十秒、九、八」

ごくりと唾を飲む音までもが頭に響く、マークスはカウンターを、アデリアはレバーを握ったチェンの手元を見つめている。震えている。

「七、六、」

『サンダーバード』がカリフォルニアベースに到達する、まるで壁に跳ね返るかの様に折れ曲がる赤い線は真っ直ぐにオークリーを指す。

「五、四、」

チェンのアクセスプログラムがオークリーに帰還、チェンの左手が閃くとプログラムを格納してそのままゴミ箱へと投げ捨てる。

「三、」

全タブをタイマーだけ残して強制終了、初期画面に浮かぶ連邦軍の紋章を覆い隠したタイマーだけが不気味に輝いて三人の表情を照らします。一様に無言で緊張極まる視線をカウンターにだけ注ぎこんで。

「二、一」

チェンの腕に力が籠るのをアデリアは見た、その瞬間三人が籠る予備電算室は暗闇に包まれた。サーバーを冷却し続ける為にフル回転で稼働する冷却機の轟音も、壁面を彩る様々なLEDの輝きもそ

の全てがまるで突然息の根を止められた事に抗議するかの様な低周波のうめき声を垂れ流した後に穏やかに沈黙する。漆黒の闇と化した室内でマークスが、姿の見えなくなつたチェンに問いかけた。

「やった、の、か？」

恐る恐る放つた声に反応したのはアデリアだった。マークスの怪訝な声を耳にしたアデリアは自分の記憶に残る最後の映像を思い返しながらマークスに言った。

「多分、大丈夫じゃない？ チェンがレバーを引いた所をあたし見たもの、ね、チェン？」

音のしない暗闇がこれ程心細い物だとは思わなかつた、チェンに呼びかけるアデリアの声にも一抹の不安が滲み出ている。答えは当の本人にしか分からない、故にチェンから事の成否を直に聞きたいと願う二人の耳に、チェンの呟きが聞えて来た。

「…… 違う。」

その言葉の意味が分からず戸惑う二人、今度はマークスが自分の前に座っている筈のチェンに尋ねた。

「違うって？ 上手くいったのか失敗したのか、どっちなんだ？」

それを訪ねる事に緊張する。もし失敗していれば自分達の運命は明日の朝にも決定する、恐らくカリフォルニアベースを進発したMPの手によつて拘束されて軍法会議の後、極刑。恐らく自分達の身辺は跡形も無く整理されて家族の元には『訓練中に事故による殉職』と言つ連絡が届く筈だ。

「いえ、恐らく電源のシャットダウンは上手くいったと思います。」

だから『サンダーバード』がここを嗅ぎつける事は無い。その言葉に大きな溜息と小さな喜びを爆発させるアデリアとマークス、お互いが暗闇の中を手探りで探してそつとハイタッチを交わす。だが、その輪にいつまでも加わりうとしないチェンの行動を不審に思つたアデリアがチェンの背中をポンと叩いて言った。

「ほら、チェン。あんたも喜びなさいよ。何とか敵の追手から逃げ切つて明日を迎えられるんじゃない、頼んだのがあんたでよかつた

わ、他の人だったらこうはいかない」

「違うんだ、アデリア。だから」

「だから、何が違うって言うの？ 上手い事電源を落としたんでしょ、後はプログラムを消去してもう一回電源を立ち上げればそれで済む話じゃない？ 大丈夫、夜中なんだからほんのちよつと停電になった位じゃ気付かれないわよ。」

「僕じゃない。」

切迫したチェンの声が暗闇に不気味な波動で響き渡る、不穏な予感に囚われたマークスがチェンの手を闇の中で探りながら尋ねた。

「チェン、どう言う意味だ？ 僕じゃないって」

マークスの手がチェンの右肩を捉えた。手さぐりで徐々に先へと降りていくマークスの掌がチェンの手の甲に触れた、その置かれた位置に気付いて愕然とする、声が止まる。

「だから」

チェンの手は未だに電源レバーの上、それも一寸たりとも切断位置へと動いてはいなかった。

「これは、僕がやったんじゃないっ。」

一瞬にして人類の英知の結晶が生み出す明かりと言う恩恵を遠ざけられたジェイソンは読みかけのプレイボーイを机の上に放り投げ、て辺りを見回した。

たった一人で夜間の門番をするというのは何も無いと分かっているても不気味だ、それにこの近辺はコロニーの落着で一度は焦土と化した土地。一説によるとハロウインの頃にはその時に焼け死んだ大勢の亡霊がカボチャの仮面の代わりに自分の首をぶら下げて、『水をくれ』と言いながら付近を徘徊すると言う。そんな物の存在を端から信じていないジェイソンでも過去の事件に裏付けられて実にやかに流布する納涼話には怖気を感じる。

「チツ、何だよ。停電か？」

相手のいない愚痴を暗闇に溢しながらジェイソンは立ち上がった。ガラスの向こうへと視線を送る、今の今まで明かりの下でグラビア誌を読みふけていた目はその視力を中々取り戻せない。眩いばかりの月明かりに照らされている筈の周囲の情景は、はたしてジェイソンの目には朧げな輪郭しか齎さなかった。闇に目が慣れるまで数分の時を要するだろう。

「…… やれやれ、こんな事なら一人で当直なんか引き受けるんじゃない無かったぜ。いざという時に話し相手もいないってんじゃないや。どうやって時間をつぶしやいいんだ？」

どちらにしてもこんな狭い所で停電の回復を待つつもりは無い、ジェイソンは気分転換の為に監視ポストの扉を開けて暗い野外へと進み出た。

砂漠の熱の残る生温かい風が全身に纏わり着いて不快な感覚を催す、よく考えてみると停電によってブースの中のエアコンも停止したままだった。電気が無ければ何一つ快適さを得られなくなった文明の進歩に不条理を感じながらドアを閉じて空を見上げる。

眩いばかりの光を放つ月がジェイソンの目に光を投げかけてほんの束の間の安心を齎す、自然の光がこれ程までに心強く感じるとは驚きだ、と心の中で創造主に一頻り感謝の言葉を呟いた後でゆっくりと基地内へと目を向けた。

少しずつ夜目を取り戻していく視野に広がるオークリー基地、いつもと変わらず月夜の下で息を潜めて決して訪れる事の無い有事に備える。

彼にしてもそしてこの基地に在籍している者その殆どが何らかの疵を抱えてこの基地に流れ着いている、民間から登用された一般事務員を除けばその数は百人に僅かに届かない程度か。自らの過去を進んで語ったり挙げて聞きだそうとする者こそいないが、ここはそんな連中の吹きだまりになっていると言う事をジェイソンは知っている。彼自身も陸戦隊員として地球上の激戦地を転戦した揚句に『星一号作戦』にまで参加した歴戦の兵士だった。

敵味方入り乱れるア・バオア・クーへと座礁同然の状態で偶然にも上陸した彼の所属する陸戦部隊は真つ先に味方の上陸を迎え入れる為の港湾部を橋頭保として確保する事に成功した。大戦終息後、彼らにはその功績が認められて銀星章シルバースター（戦闘において勇敢な行為をした兵士に与えられる勲章）を授かる榮譽を得たのは当然の報酬だった。

思えばそれが彼のキャリアに於いて最上の瞬間ときであったのかも知れない。多くの犠牲を払いながら名譽を勝ち取った彼らには本来であれば人々の称賛と、生き残ったと言う幸運　　人類の総数の約半分を喪失する戦いを潜り抜けた　　に拘かって何らかの象徴に祀り上げられてもおかしくなかった。連邦軍とジオン公国にとつての一年戦争とはそれほど膨大な物量と人的資源の損失を課せられた戦いであったのだ。

だが天下分け目とも言われる一年戦争を終結に導いた要因が彼らの様な献身的な兵士の働きによる物ではなく、新たに開発された機動兵器ビルネットによる物だと言う戦後分析がメディアを通じて一大キャンペーン

ーンを打ち出された頃から彼らの処遇は徐々に陰りを見せ始めた。モビルスーツの搭乗資格を持たない彼らの所属する部隊は有名無実化し、時代の趨勢が人から機械へと移って来た段階で彼らの働き場所は無くなった。ジオン残党との遊撃戦に戦闘内容が移行して、次々に打ち立てられる作戦達成項目に『占領』の文字が記載されなくなった時点でユニットとしての地上戦力は不用と化してしまったのだ。

彼らに与えられた新たな任務は地球上における治安維持活動が主な物になった、だが彼らが欲したのは新たな戦場だった。

身体の中に染み付いた生と死の狭間に踊る自分の命、勝利の凱歌と共に昇華する得体の知れない高揚感。魂が震えるほどのあの一瞬を命と引き換えにしても得んが為に彼の部隊は地球外基地への配属を上申する。あれほどまでに心待ちにしていた平和と言う日常が自分達に安らぎを与える場所では無くなっていった事にジェイソンは驚き、そして自分がもう後戻りの出来ない世界の住人の一員と化してしまっていた事に凶らずも納得せざるを得なかった。

だが部隊に命じられた新たな赴任先は北米方面軍オークリー基地の常駐部隊と言う、あまりにも希望とはかけ離れた物だった。部隊の誰に尋ねてもその基地の場所すら定かではない、名も無い基地に配属された彼らを待ち受けていた物は広大な砂漠の真ん中にポツンと建つ鄙ひなびた建物だけ。バラックの様なハンガーの前で『立ち上げ屋』全とした司令官の着任挨拶を耳にしながら彼らは自分達の身に降りかかった事態の真相を把握するに至る。

恐らくその当時、彼らの様に転任を上申した部隊は少なくなかったのだろう、そしてその中でも勲章まで授与された彼らの部隊が一連の陸戦部隊の転任傾向に対して与えられた任務がそれだった。

要するに見せしめである、彼らほど実績のある部隊でも軍の意向に逆らうところなるのだと言う。

オークリーの赤茶けた大地と乾き切った熱風は彼らの心から将来の展望と言う唯一の希望を奪い去った。櫛の歯が抜ける様にこの基

地を去る者は後を絶たず、彼もまた働く場所も与えられずにその鬱憤をモビルスーツ隊に向かって吐き出す毎日に嫌気がさして彼らの後を追おうとした、だがその矢先にある男が突然現れた。

モビルスーツ隊に配属された東洋系の顔立ちのその優男は自分達と同じくささくれた目をしていて、その事がこの基地に居残った陸戦隊員の癪を逆撫でる。しかし自分達の挑戦の悉くを全て受け止めたその男は、自分達が築き上げたキャリアを全く無効化するほどの実力で自分達の嫌がらせを捻じ伏せた。まるで自分達の指揮官の様に。

あの男に出会ってから自分は変わった、と心から思う。行く先を見失った目、遣り場を失った力の発露を平和の為の貯蓄にと求め、有り余る能力と経験の全てを自己の啓発の為に利用すると拳で示した彼の言葉に逆らえる者などいなかった。彼は自分達を暴力で鎮圧するのではなく、暴力に対する罪を常に自分一人で背負って降格処分を受け入れ続ける、その行為は自分達が接して来たどの連邦軍のモビルスーツ乗りにも無い傾向だった。

自分達を導く為にキャリアに傷を負い続けるその男の愚直な行為に心から感服し、そしてジェイソンを含む陸戦隊の歴戦は彼の提案を受け入れる事となった。

あの男がこの基地を去ってからもそれは変わらぬ戒めとなって陸戦隊員の心を律している、自分達に定めた掟を置き去りにして姿を消した伍長は今頃この空の下で何をしているのだろうか？ ジェイソンがふつと遠くの地平に視線を向けたその時だった。

何かの影が動いた様な気がした。

それを気のせいと呼ぶにはジェイソンの経験は新兵の持つそれを凌駕している、不吉な気配に囚われたジェイソンは焦点をぼやかして遠くの空へと目を向けた。暗闇の中で何かの気配を感じるならばそれがベストだと戦いの中で培った経験則が彼の身体を自動的に支配する。

「……………？ 気のせいか？」

その考えに行き着いた瞬間に仲間内での噂話が鎌首を擡げてジェイソンの股間を握りしめる。硝煙弾雨を潜り抜けて来た彼にとつても亡霊などと言う得体の知れない者には得も言われぬ恐怖を感じる、物理手段で対抗出来る代物ならば何の呵責も無く腕前を披露できるのだが幽界かくりよの物ともなるとそうもいかない。痺れる様な寒気が股間を縮み上がらせて丹田を搔き雑せる。

「つたく、あいつらがあんな話するせいでこつちまでおつかなくなんじゃねえか。冗談じゃねえ、まだ停電は治んねえのかよ。」

恐怖を押し隠す為に誰にともなく呟く愚痴を、殊更に大きな声で闇にぶちまける。地上要員としては平均的な体躯のジェイソンがまるで夜から逃げる様にポストの入口へと戻ろうとした瞬間、彼の耳は小さな音を聞いた。

兵士としての勘が、その音に不自然さを感じて立ち止まった。夜行性の動物が放つ気配とは違う感覚、そして得体の知れない怖気を漂わせる不安定な殺気。

” まさか、な …… ”

拳銃を止めてあつたラッチを外す音にも怯えながらそつと銃把を握る、人差し指をゆつくりとトリガーに掛けてから腕に力を入れて、銃を固定してあるホルスターの拘束を解く。万が一の事態に対する即応体制を整えた事を頭の中で何度も確認したジェイソンはゆつくりと音のした方向へと振り向いた。

” 残念、そつちは囷だよ ”

離れた場所からその一部始終を見守るブージャム1の視界の中で二つの影が一つに重なる、前方の気配に気を取られたジェイソンは既に背後に回り込んでいた彼の部下の手であつという間に息の根を止められた。

背中から突き通された野戦ナイフが肋骨の間をすり抜けてジェイソンの心臓を貫通する、捻りながら抜いた瞬間によりにも寄つてこんな日に当直勤務に当たつた哀れな兵士は痙攣を起こしながら、ど



うと地面に崩れ落ちた。傷口から規則正しく吹き出す血液の噴水が五月雨の如く地面を叩いて静寂の闇にリズムを刻み続けている。

地面に倒れた第一の犠牲者の口から加害者の手がゆっくりと離される、その様子を確認したブージャム1はハンドサインで周囲に息を潜めて成り行きを見守っていた部下に集合の合図を送った。月明かりの中を鵜の様に駆けて死体の周囲に集まる地上要員、その数は二十人。ブージャム1は耳をコツコツと人差し指で二回叩くと喉元に取り付けられた咽喉マイクを声帯の上に押しつけて言った。

”これから部隊を二手に分ける、《アルファ》は右手から、《ベータ》は左手から侵攻しろ。建物に取りついたら速やかに侵入して搜索排除、出来るだけ音を立てるな。寝込みを襲うとは言っても気付かれて武器でも持ち出されたら厄介な事になるからな。”

早口で行われる指示に歯を剥き出しながら小さく頷く鵜の群れ、全員に指示が伝達された事を確認したブージャム1が彼の目の前に立つ二人の男に目配せをしながら尚も指示を続けた。

”は4、は5が指揮しろ。2と3は俺と一緒に来い。”

ブージャム1の呼びかけに指名された二人が前に進み出る、一人の男が尋ねた。

”お楽しみ時間を部下に譲ってまで何処において？ 隊長らしくない”

からかう様に尋ねるその男に視線を向けながらブージャム1は野卑な笑いで対抗する、闇にも鮮やかな歯を白く浮き立たせた口腔を歪めながら言った。

”内通者の所へ行く。奴の目論見の甘さが齎した結果と言う物を教えてやりにな。”

「？ 俺の携帯？ 誰からだろう。」

ハンガーの詰め所で雑誌に目を通していたキースは自分のフライトジャケットに入れっぱなしの携帯が着信音を鳴らしている事に気付いた。読みかけのページの縁を折って閉じてから壁に無造作に引

っ掛けてあつたジャケットのポケットを弄つて携帯を取り出す、レザー発振で空間に描かれる発信元の電話番号は明らかに心当たりの無い物だった。

「こんな時間に 何処のどいつだ？」

キースが通話ボタンを押してから耳に引っ掛けて会話を試みようとする、だがキースの耳に飛び込んできた音は接続が中断された事を示す断続的なピープ音だけだった。どうやら先方は繋がると同時に回線を切断したらしい。

「？ どしたのキース、何かあつた？」

訝しげな顔で携帯を耳から外すキースの顔色を窺っていたモウラが尋ねる、キースはその問い掛けに答えないまま相手先へのリダイヤルを試みた。回線接続、そして呼び出し音、だが何回かの呼び出しの後キースの携帯が繋がった先は相手の留守番電話サービスだった。定型文で話される会話を耳にしながらキースは接続を遮断する。

「いや、悪戯か間違いか。とにかく何も関係の無い電話だったみたいだ。」

そう言うつとキースは携帯を元の場所に戻そうとして、しかし思い直した。万が一大事な電話がかかって来た時に直ぐに出られなかつたら先方に失礼だと思つた。様にそれをパイロットスーツの胸元に仕舞いこんで再び読み掛けの雑誌に向き合つた。

明かり取りの窓から差し込む光の中で何度も着信音を響かせる自分の携帯を握りしめたままコウは迷つていた。掛けて来た相手がキースである事は分かつている、だがその電話を取つた時に自分はキースに何を言えばいい？

今晚オークリー基地が襲われるから注意しろ、敵の標的は二ナだ、敵の正体はテイターンスズの傭兵部隊だ。その密告どれ一つをとつてもあまりに現実味が無い、いや寧ろ滑稽で且つ正気を疑われる内容の物ばかりだ。

それにもしあの話が全て真実だとして、自分に何が出来ると言う

のか？ 『ディープ・スロット』は俺が二ナを助けにオークリーへと向かう事を望んでいる、だがもし首尾よく二ナを助けたとしてそれでオークリーへの奴らの攻撃が収まるのか？

答えは言うまでも無い。奴らは二ナの生死の如何に関わらずオークリーを壊滅させるだろう、『皆殺しと言う役割』を持つ部隊ならば尚更だ。一度でも接触した者はその姿を周囲や後世、未代にまでも言い伝えられる事の無い様に完全にこの世からオークリー基地の存在を抹消するだろう。そうでなければ今までその部隊の存在が噂の一つもネット上に流れていないと言う事などあり得ない。

心の中の葛藤が産声を上げて何らかのアクションを肉体が起こそうとした矢先、突如として手の中の携帯が死に絶える蝉の様に沈黙した。空間に映し出される情報には束の間、先方が留守番電話サービスに接続中である事を示して収束する。

コウの掌が小さく震えて、小さな機械が繋げようとした大きな機会を失った事に戸惑い思わず握りしめた。伝わる金属の冷たさに救いを求める様に呟きを洩らした。

「……俺は、一体どうすればいいんだっ。」

「僕がやったんじゃないって……じゃあ誰がこんなにタイミング良く電源を落としたって言うの？」

アデリアがチェンに尋ねる、当のチェンは真つ暗な部屋の片隅に向かつて携帯の発振レーザを向けて何かをじつと見つめている。元々は様々な情報を空間へと描き出す機能なのだが光量さえ考慮しなければこうして懐中電灯代わりに使う事も出来る。

「分からない、ただどこかだけじゃなくて基地全体の電源が落ちてる様だ。ほら。」

チェンはそう言うのと携帯の明かりで壁面の一角を照らした。そこには予備電算室のサーバーを冷却する為の冷却機が置かれているのだが、その電源までもが切れている。サーバーが停止してもその放射熱を抑える為に冷却機は暫くの間稼働するのだが、それさえも行

われていないと言う事は非常用の電源までも喪失している事を示していた。

「嘘だろ？ 蓄電池の供給システムまでダウンなんてあり得るか？ それじゃオークリー基地に電力を供給する変電所が壊れたって事か。」

「まあ詳しい事情は分かりませんが、とにかく何らかの理由でこの基地の全システムが完全停止している事は間違いない。これは復旧に時間がかかりますよ。」

チエンが携帯の明かりを消した事で再び室内には墨を塗った様な暗闇が戻る、空調の音が途絶えた静寂を初めて経験するアデリアは深刻な声で呟いた。

「じゃあ、今晚のパーティーはこれでお開きと言う事でいい？ ……

… マークス、ハンガーに行こう。なんか嫌な予感がする。」

暗闇の中で正確にマークスの腕を引つ張る、その手が微かに震えている事にマークスは驚いた。アデリアが何かに怯えている姿などあの男の事以外では見た事が無い。

「お、おいアデリアどうしたんだ急に？」

「分からない、分からないけど何かこう変な感じがするのよ ……  
誰かが遠い所からハンガーに行けって言ってる様な気がして ……

… ね、マークス戻ろう？」

アデリアが急に手を引つ張ってマークスをドアの方向へと誘う、マークスは暗闇の中へと置き去りにする羽目になった恩人に向かって感謝の言葉を述べた。

「チエン、済まない。俺達はハンガーに戻る事にする。君も早くここを離れて自分の部屋に戻った方がいい、アデリアがこんなに怯えるのは何か訳があるんだろうし俺も何か変な感じがする。」

本来ならば気の強いアデリアが、マークスが思わず口走った『怯える』と言う言葉にも反抗の意を示さない。ぐいぐいと手を引つ張るアデリアの気配を追いながらチエンが朗らかな声　そこに  
は何の恐怖も感じない　で答えた。

「了解です、軍曹。では今日の所はここまでにして後日戦利品を改めて確認する事にしましょう。恐らくハンガーまで真つ暗ですから足元に気をつけて下さい、後誰にも見つからない様に。」

「分かった、忠告感謝する。……じゃ。」

その間アデリアは一言もチエンと会話を交わさない。無言でドアを開いたアデリアはまるで泥棒の様に無言で、闇の中へとマークスを連れ去った。二人の気配が消えた事を察したチエンは徐に携帯を弄ってテンキーを表示する。

十一桁の番号を順番に叩いたチエンは回線の繋がった相手と、闇闇の中でも人に憚はばられる様な小さな声で会話を始めた。

真つ暗になつた室内でベットに横たわっていたその男は小さなノックを聞き付けて思わず上半身を起こした。PX（売店）で働くその娘を見初めたのは今から三カ月も前の話だ、切つ掛けはほんの些細な偶然でたまたま出身が同じ国であつた事。

だが大きな戦争で大勢の人が亡くなつた今となつては同郷の土が巡り合う事すら奇跡にも等しい偶然と言えた。焦土と化した故郷の在りし日の姿を互いに語り合いながら意気投合する男と女、そして二人はその繋がりだけを頼りに恋に落ちた。

いかにも短絡的、そして性急ではないかと言つ後悔に駆られる男の良心ではあつたが、それを表に出すにはあまりにもその娘は魅力的だった。肩に僅かに掛る栗色の髪、そして間近で見れば吸いこまれてしまいそうな黒い瞳。故郷の話をしている時にはその瞳がキラキラと男に注がれて、その輝きが男に更なる劣情を催させる。疚やましい事と分かつていてもそれを押し留める事など敵わない、本能の委ねるままに男は女を誘つた。そして女はその申し出を今夜受け入れた。

慌ててベッドを降りた男が足元を探りながらドアへと向かう、元々小さな居室ではあるがそれでも真つ暗だと記憶だけで辿り着くのは難しい。壁を伝いながら冷たい金属の感触を掌で受けるまで進ん

だ男は手探りでドアノブを握って静かに回した、音を立てない様  
ゆっくりと。

周囲に聞こえたら狭い基地の事だ、たちまち明日の内には口性な  
い隊員達の酒の肴にされてしまうだろう。会話が盛り上がった次  
はそつと部屋を抜け出して女性官舎の端にあるトンネルの存在を思  
い浮かべた、あそこなら周囲に声が聞えても

「 やあ、おそかった 」

男の額に当たる冷たい感触、その姿も正体も知る事も出来ない男  
の頭部を無音で貫通する9mmパララム。射出口に入射口の倍の  
穿ちが生まれた瞬間に男の身体は暗闇の中で崩れ落ちた。

立てつけの悪いドアをブージャム1が静かに押す、キキイと言う  
蝶番の軋む音と共に開く防弾板の仕込まれた重い扉の影に一人の兵  
士が息絶えていた。喉笛をブージャム1のグルカにかつ切られた夜  
勤の兵は彼がそこにいと仲間<sup>かいこう</sup>に告げられて、現状の報告と指示を  
仰ぎに來ただけだった。人の人生とはほんのボタンの掛け違いで表  
と裏に分かれるのだな、とブージャム1は自分が命を絶った哀れな  
犠牲者の瞳孔を見つめながらそう思う。

” お前は運が無かったな、死神の前にこのこと ”

「 入りたまえ。 」

張りのある声で呼びかけられたブージャム1はそれ以上の廻考を  
中断した。相手の勧めにに応じて無造作に室内へと足を踏み入れる、  
暗視ゴーグルの視界には白髪交じりの武骨な男の顔が映っていた。

「 …… まさかとは思っていたが、本当に基地司令自らが内通者  
とはねえ。あんたが仲間を売ったと知ったら他の連中は何と言うか  
ま、俺にやあ関係無いがね。 」

嘲り声でブージャム1がウェブナーに声を掛ける、ウェブナーは  
その物言いに顔を歪めながら吐き捨てた。

「 俺が好きでこんな事をするとも思っているのかつ、貴様らの様  
な下種に 」

「その下種に頭を垂れて命乞いをしたあんたはどうかやら俺達以下の下種野郎って訳だ。自覚が無い所が何とも物悲しい、『老いた麒麟は駄馬にも劣る』と言うがそれはあんたの事だって分かってんのか？」

舌戦に勝利したブージャム1は歯を食いしばって怒りを堪えるウエブナーの元へと近づいた。デスク越しに対峙して見下ろしたまま握りしめたナイフを脅しの様に突き立てる。

「さ、無駄話をしてる時間は無い。さっさと女のいる場所の地図を渡して貰おう、こっちも時間が無いんでね。」

居丈高なブージャムの声に誘われる様にウエブナーの手が半開きになった引き出しを弄る、取り出した紙をデスクの上に置いてゆっくりとナイフの傍まで滑らせる。ウエブナーの手が止まった事を確認したブージャム1がその紙を取り上げようとした時に突然、ウエブナーの手がその紙を握りしめた。掌に取り込まれた紙の潰れる音が耳に届いて、ブージャム1は差し出した手を止めた。

「何の真似だ？」

「…… 貴様っ、約束を破ったなっ！？」

二人の放った声の対比に震える室内、その声に気圧された二人の部下が慌てて銃の狙いをウエブナーの胸元に定める。IRレーザ赤外線ポインタの見えない点がぴったりとウエブナーの勲章に映り込む、それを片手を上げて制したブージャム1が小さく笑いながら尋ねた。「さて、何の事かな？ 俺には思い当たる事が一つも無いんだが貴様はどんな約束を、何処の誰と交わしたんだ？」

「とぼけるなっ、彼女を差し出す事でこの基地全員の命を助ける約束になっていた筈だ！ 嘘だと思っなら貴様らの指揮官に確認しろ、答える。」

ウエブナーはそう言つと血で汚れた手をブージャム1の鼻先に突きつけて怒鳴った。突き立てたグルカナイフから滴り落ちた犠牲者の血は紙を差し出したウエブナーの手に触れていた。

「何故殺したっ！？」

「そう怒りなさんなつて、たかが一人殺しただけじゃねえか。それに指揮官に確認しろつて言つてもこの部隊の指揮官は俺だ、その俺が知らないんじゃないあ他の誰が知つてゐるつてんだ？」

「貴様つ…… 端から約束を守る気などなかったと、そう言う事かっ！」

机の下から引き出されたウェブナーのもう片方の手には銃が握られていた。閃く様に差し上げられた銃口が紙を握った手と入れ違いにブージャムの眉間へと向かう。その勘の良さに舌を巻きながらも

およそ暗闇で声だけを頼りに急所へ狙いをつける事など並大抵の実力では無い  
ブージャム1は両手を上に差し上げながら言つた。

「OK、OK、そうじゃない。俺達がこの部屋に近づいた所をたまあんとん所の兵隊に見つかつたつてだけの話だ。俺達とあんたが会話してゐるつて所を見られたらあんただつて困るだろう？ ま、そう言う点で言うならば俺達はあんたの名誉を守つた良き隣人つて事になる。叱られるなんてとんでもねえ、寧ろ感謝して欲しい位だぜ。」

浮ついた笑いを張り付かせたままゆつくりと机の縁を移動するブージャム1、ナイフを置き去りにしたまま両手を上げてウェブナーの元へと回り込む。暗闇の中で微かな足音を頼りにぴつたりと狙いをつけるウェブナーの姿を眺めながらブージャム1は言つた。

「だがその地図さえ俺達に手渡せばもう大丈夫だ、何せ闇雲に建物を搜索する手間が省ける。勢いあんたとの約束通りみんなの命は守られるつて算段だ、それは嘘じゃねえ。」

「そんな言葉が信用できるか、手も洗わずに口を拭う奴の何を信じると？」

「だからこうやつて武器も持たずにあんたの傍まで近づいてやつてんじゃないか。自分自身が仲間を裏切つたからつてその料簡を他人様にまで押し付けてんじゃないよ、ほら。」

ブージャム1が他の二人にハンドサインで合図をする、命令を受



けた2はウェブナーの胸にピタリと着けていた狙いを外してフラッシュライトを点灯した。光の中に浮かび上がるブージャム1の姿、両手を上に挙げたままで下卑た笑いを張りつかせたその素顔。

素顔？

ウェブナーがその違和感に危険を感じる。奴は、何故、暗視ゴーグルを外して

ウェブナーの目が突然の光の出現に眩む、その瞬間に光が消えてウェブナーの目は一瞬前まで映っていたブージャム1の歪んだ顔だけが残される。慌てたウェブナーがその残像に向かつて引き金を引こうとした時、ブージャム1の低い声がすぐ傍で響いた。

「遅えよ、おっさん。」

ウェブナーの抵抗が最大出力を發揮するまでの刹那にそれは訪れた。銃を握った手首に走る冷たい感触、指先から零れていく鉄の感触、そして臓腑の底から吐き出される苦悶の声。

ブージャム1の手が叩きつけられた腹部からウェブナーの背中に抜ける鋼の刃、鉄の持つ冷たい感触と筋肉が裁断された事で発生する炎症発熱が同時にウェブナーの生理機能に襲いかかる。苦痛の声を上げながら込み上げて来る血で口角を染めて、それでも最後に残った渾身の力で目の前に立つ敵の首を擦じ切ろうと地図を捨ててブージャム1の首に手を掛ける。ウェブナーの為すがままにさせていたブージャム1は断末魔の無駄な足掻きを嘲笑しながら、腹部のナイフを僅かに捻って一気に引き抜いた。

「グウツ！」

刃に纏わり付いた筋肉の収縮が確死の激痛をウェブナーに齎す、思わず声を上げて傷口を押さえた指の間から滲み出す血糊と失われる力。

ウェブナーの膝がすとんと落ちて強かに床を叩いた。自分の目線のはるか下に落ち着いたウェブナーの顔を満足げな顔で眺めたブージャム1は袖口から飛び出した細身のナイフを一閃して足元に血を撒き散らすと再び袖の中にそれを収めた。

「よつ下種、これが俺達の答えだ。思い通りにいかず残念だったな。」

片手で傷口を押さえながら尚も取り落とした拳銃を力の入らない手で探るウエブナーの仕草を見たブージャム1が、すぐ傍に落ちているそれを爪先で遠くへと蹴っ飛ばす。反抗の手段を喪失したウエブナーが鬼の形相で目の前の不実な外道を見上げながら、苦しい息と共に吠えた。

「貴様らっ、よくもっ！」

「元々俺達は目撃者を全て抹殺する事が条件で入隊している、そんな奴に取引を持ちかけようって言うあんたの読みが甘い。ま、これも無駄に長かった人生最期の社会勉強だと思つて冥土の土産に持つてっくれ。」

ブージャム1の予言通りである事は傷を負ったウエブナーにも分かる。僅かの間に混濁する意識、掌に伝わる熱は次第に失われて行き足元の感覚が無い。死を予感させる痺れがまるで床から這い上つて来る様な気がする、それが遂に腰のあたりまで到達した時にウエブナーの身体はちょこんと正座の姿勢で座りこんだ。前かがみになつて必死で出血を抑えようとするウエブナーの行為を無駄な努力だとばかりにブージャム1が声を掛ける。

「無駄だ、そんな事をしても。俺が切つたのはあんたの腹の中を動脈と並行して走っている静脈の一本だ、そこを切られると猛烈な腹痛と吐き気で立つ事もままならねえ。おまけに予後は絶対に回復不能つてお墨付きだ、だからあんたは確実に死ぬ。」

ブージャム1の声を聞いたウエブナーが血走った眼を振り上げて叫んだ。

「殺せっ！ いっそひと思いに殺れ、貴様も軍人ならばそれくらいの情けはある筈だろう！」

「そんな的外れのお願いはもつと真つ当な軍人様に言つてくれ。俺たちや誰一人例外なく書類上では死人扱いだ、あんたの望みを叶えてやる義理は無え。ま、もつともあんたの最期の望みがそれだつて

言うんなら精々残りの時間、懺悔しながらどっかの奇特的な野郎が現れるのを痛みに耐えて待つんだな。」

ブージャム1は吐き捨てる様にそう言うのと憤死間際のウェブナーの髪の毛を掴んで自分の顔を近づけた。一つ目の暗視ゴーグルのレンズがウェブナーの血走った光彩の血管一本一本までもはつきりと捉えてブージャム1の網膜へと移送する、ブージャム1が言った。

「あんたは直ぐには殺さねえ。」

ウェブナーには届く事の無い凄絶な笑みを浮かべたブージャム1がまるで呪殺を生業とする祈祷師の様な顔と声で言った。

「あんたはここで、あんたの基地と仲間が全滅する様を聞き届けるんだ。自分の選んだ愚かな選択と自分の人生の最期を神が悪魔にでも呪いながら。……心配するな、どうせ最後にや跡形もなくなる手筈になってるんだ。墓や葬儀の心配はしなくていい。」

ブージャムの手が乱暴にウェブナーの頭を振り離す、抗う力を失ったウェブナーの身体はまるで支えを失った杭の様にごろりと床に横たわった。ブージャムの口から吐かれた唾が苦悶の表情を浮かべたウェブナーの頬にかかる、それを拭う事も気付く事も出来なくなった哀れな内通者に向かつて、ブージャム1は別れを告げる。

「良かったじゃねえか、最期に指揮官らしい仕事が出来て。あんたは一番後から行って先に逝ったあんたの仲間によく謝んな、ま、その前にあんたは三途の川の途中で船から突き落とされて溺れちまうだろうがな。」

自分の裏切りを嘲笑うあの男の声が途切れてからの位経つのだろう、それは遠い昔の事の様にも思えるしつい今しがたの事の様にも思える。腹の奥底で絶え間なく続く激痛に意識を凝らしたウェブナーが暗闇の中で目を見開いた。全身を凍えさせる痛みを同じ場所で発生した怒りで上書きして、自分に残されたせめてもの贖罪を果たす為に全ての気力を総動員する。

光彩に届く漆黒の闇、果たしてそれが現実の物なのかはたまた顔

を覗かせている死によって齎されている物なのかを横たわったままのウェブナーには判断出来ない。だが自分を晒し者にしたあの男の忌々しい靴音が部屋の外へと消えていく事を機能を取り戻した耳が捉え、無駄に過ぎた時間がそう長くはない事を察したウェブナーは奥歯を砕けるほど噛み締めて全身を動かそうと試みた。

僅かに感覚の残る腕を床に押しつけてデスクの背後のキャビネットに這い寄る。ジャコビアン調の装飾が施された、この基地で唯一と言ってもいい豪華な家具へと血まみれの手を伸ばしたウェブナーは腱を切られた右手を取っ手に引っ掛けて倒れ込んだ。体重を掛けられた観音開きが何の抵抗も無く勢い良く空け放たれる。

内部に隠された小さなコントロールボックスをウェブナーは手探りで探し当て、その表面に突き刺さったままの金属の鍵を摘まむと一気に回した。

連邦軍基地の電源を一元管理するシステムは任命された基地司令に与えられる特権の一つであり、どの基地にも例外なく設置されるそれは有事の際に一切のデータリンクを遮断する為に与えられた封印の鍵だ。全電源を喪失する事で外部からの有線通信そして基地のデータサーバーから送信されるリアルタイムの情報を最寄りの基地に転送する事を拒絶する、言わば万が一基地を占領された時にそこからジャブローへとウィルスを流し込まれない為の防護措置の為に作られた魔法の扉。

内蔵電源のみで生きているその小さなコントロールパネルは残り少ないウェブナーの命を受け入れ、変電所の再起動を瞬時に伝えた。アーク放電を発生させながら再び接続する巨大な開閉器、送電の再開によって加熱する変圧器を冷却する為の送風ファンが鈍い音を立てて回り始める。定格が規定値に達した事を確認した変電所のコンピュータは初期設定でプログラムされている環境保全メモリのコマンドを実行に移した。それは喪失時の状況の如何を問わず、オークリー基地全ての電源を通電テストの為に起動させる検査プログラム。

リレーの様に次々と点灯し始める照明、既に下士官の宿舍に侵入していた チームは突然起こった状況の変化への対応が遅れた。装着している暗視ゴーグルは最新式のパッシブ式の赤外線装置（Enhanced Night-Vision Goggles：ENVG）を搭載していたが、突然の照明に晒された何人かの隊員は上で発生した新たな熱源による画面の焼き付きに怯んだ。闇の中での活動を生業として来た彼らにとって白日の下に自分達の存在が露わになる経験など久しく経験した事が無い。そしてその環境の変化は自分達が作戦を遂行しようと踏み込んだ宿舍全体でも発生していた。

煌々と光を放つ室内の明かりで眠りから覚めた下士官が何事かと廊下へ飛び出す、その中の何人かは全身黒ずくめで銃を構える暗殺者の集団と対峙する事を余儀なくされた。その現実離れた光景に一瞬呆然と立ち尽くす下士官の姿、だが暗視ゴーグルを外して視力を取り戻した暗殺者の一人がその男の身体を八子の巢にした瞬間に現状は一変する。

恐怖に慄いて部屋の中に籠城する者、廊下に躍り出て一目散に逃げ出そうとする者、死の恐怖に対峙したそれぞれが各々独自の判断で行動するその混沌は暗殺者達が踏み込んだ宿舍全体をパニックに陥れようとしていた。

「状況報告！ ハンプティからダンプティへ、トロイアは目覚めた」、繰り返す「トロイアは目覚めた！」

恐らくどこかの丘の上で身を潜めてオークリーを監視しているハンプティから驚愕交じりの声で齎された符丁はWWW中隊が今までに遭遇した事のない事態を顕わした物だった。ブージャムがオークリー基地の全機能を掌握した所で連絡が入り、それを合図にモビルスーツ部隊が陽動を掛けると言う一連の行動はMPIの施設を襲撃した時と基本的には変わらない。高脅威目標たるモビルスーツを所有していると言う点では今回の作戦と前回の作戦では戦力的に類似

している点が多数見られたが故に踏襲された作戦骨子は、ケルヒヤ  
ーから提出された概要に目を通したダンプティにも納得のいく物で  
あった。ただ一つ、地上部隊とモビルスーツ隊の連携と意思の疎通  
が欠けていると言う一点を除いては。

唯一心の何処かで引つかかっていた危惧が的中、しかもよりにも  
よって自分達が当該人物を確保して逃走すると言う困難極める作戦  
に置いてそれが具現化した事にダンプティの心はさざめいた。心  
中での、軽蔑すべき地上部隊の指揮官の顔を借りた運命の神に怒  
号を放つ、何て事だ、と。

「 ダンプティ、指示を。」

ト ヴーの冷静な声が無線機から流れ込んでダンプティは我に帰  
った。恐らく全ての状況の変化　それもどう転んでも悪化す  
るであろう事態を予測した、この作戦の立案者でありダンプティの  
有能な副官は恐らく同じ様に動揺している心中を押し隠してダンプ  
ティに指示を求めて来た。その声を聞いたダンプティの頭脳が反射  
的に次の行動を選択する、どちらにしてもここで味方を置き去りに  
して逃げ帰る訳にはいかないのだ。

「 ベースキャンプに連絡。現在までのオークリー基地周辺の状況と  
サリナス周辺に展開している大隊の動きを報告させろ、場合によつ  
てはシナリオを変更する必要があるかも知れん。オークリー基地を  
中心とする半径十キロ圏内を完全封鎖、基地に通じる道路には最寄  
りの警察に検問を依頼しろ。」

「 了解、警察が検問を張るまでに多少の時間がかかりますが？

” ”

「 構わん、それまでに地域に侵入して来た連中はこちらで排除する  
どうせそいつらの目的地は一つしかない、明かりに群がる蛾を駆除  
するのにたいして時間は掛からん。」

そう言うとダンプティの手がパネル上を駆け抜けて休眠状態にあ  
ったOSを起動させた。操作の確実性を優先する為に未だにジムの  
機器のスイッチはタッチパネルではなくトグルスイッチになっ

る、パチパチと言う金属音がなる度に息を吹き返していくコクピット内の明かりに映し出されたダンプティの左手がゆっくりとスロットルを押し上げた。

腰の下にある融合炉が目覚めて微かな振動をダンプティに伝える、出力が安定した所でダンプティが両足のペダルを少しずつ踏み込みながら命令を下した。

「全機起動っ！ これより作戦はフェイズ2に移行する、各小隊は予定のフォーメーションで『敵基地』への侵攻を開始しろ。ハンプティは基地内の照明設備を無力化、その後各目標への砲撃を開始

「ハンプティ、了解。」

偽装の為に掛けてあったフェライトシートが持ち上がり、その姿を月明かりに現す八体の夜戦専用装備のジムの影。RGM-79N？という形式で呼ばれるジム・コマンドの派生形、通称『サイケデリック・ジム』は夜間迷彩の為に黒く塗られた巨体を立ち上げて各々の火器管制をアクティブにする。オークリーを遠くに見下ろす高い丘の上で全ての準備が整った事を確認したダンプティが、今や真昼の様に明るくなった基地の姿をモニター中央に置いて宣言した。

「よし、各機コンバットオープン、作戦名『イリアス』を開始する。  
ウィー・ウィリー・ウィンキー  
W・W・W」

大きく息を吸い込むダンプティの胸中に広がる不安、既に奇襲の様相を呈さなくなったこの作戦を無事に完遂してあの女性を保護する事が出来るのだろうか、そして自分とケルヒャーはこの地獄を掻い潜ってカリフォルニアベースに辿りつけるのか。

本当に還る事が出来るのか、あの宇宙に？

渦巻く葛藤と疑問を全て言葉に変えて、ダンプティは吐き出した。

「オンボードッ。」

その時、ダンプティのその言葉を待っていたかの様にオークリーが雄叫びを上げた。夜空を切り裂く空襲警報が深々と降り続く月の光を蹴散らして大気を震わせる。





キースがヘルメットを掴んで待機ブースを飛び出した。心の中でまさかと思い、もしかしたらと思う。類似形を描く感情の曲線が交差する時がまさに今この瞬間だったのだろうか、いずれの選択をするにせよ鳴り響く警報が何かの聞き間違いでは無く現実起こった危機の所産だと言う事をキースは誰よりも理解している。

「pan・pan・pan」  
ベイトの齎したと思われるその情報がやはり正しかったのだと言う認識がキースの反応を逸早く早めてハンガーへと向かわせた。キースの後を追って飛び出して来たアンドレアに向かってキースは大声で指示を与える。

「アンドレア曹長、お前は俺のゲルググを使えっ！ 命令があるまで機上で待機、いいな！」

浅黒い肌をした黒髪の青年はキースの命令に小さく頷きながら、今起こっている事の説明を求める。

「隊長、どう言う事ですか！？ 第一種戦闘配備って敵が攻めて来たって事ですか！？ 一体どこのどいつが」

「分からん、とにかく今はモビルスーツに乗り込む事が先決だっただが間違いなくこれは訓練じゃない、そう思って気を引き締める！」

キースの足が煌々と明かりの灯ったハンガーへと飛び込む。無影灯に照らし出された七体のモビルスーツの姿はまるで予め書き記されていた戦いを静かに見守る神像の様に見える、キースは既に電源車に取りついて二体のモビルスーツに火を入れたモウラ目がけて駆けだした。

「ちっ、まだ動けたのか、」

明かりの灯った廊下をまるで何事も無かったかの様にすたすたと歩くブージャム1が呟いた。司令官室のある管理棟には夜間に人の出入りはない、それが分かっている以上不必要に周囲を警戒して部隊との合流を遅らせる必要はないと言うのがこの作戦に疵を付けたブージャム1の見解だった。仮に持ち場に着く為にこの建物へと侵

入して来た敵と遭遇しても殺す覚悟のある者とそうでない者の心構えには随分と差がある、寧ろ手間が省けて好都合と言う物だ。

「、 両隊は取りあえず現状のまま侵攻を続ける、敵に付け入る隙を与えるな。掃討が終わったチームから屋外に出て一旦安全な場所で合流を図る、空気の読めないあのデクノボウ連中の攻撃に巻き込まれない為にな。状況終了次第連絡をよこせ、俺は集合地点で待つ。」

咽頭マイクに指を押し当ててブージャム1が命令を下すと直ぐにイヤホンから返答が返って来た、落ち着いている所を見るとどうやら不測の事態における部隊の被害は最小限に収まっているらしい。ただしブージャム1の耳にも自分達の装備とは違う銃火器の発砲音が散発に混じっている事は届いている。

「流石は軍基地だ、どうやら骨の有るのが混じってる様だ。やりがいがあつていいなあ、おい。」

笑いながら後に続く他の二人に話しかけながら廊下の角を曲がるブージャム1、出会い頭に鉢合わせになった若者の顔を見るなり物も言わずに撃ち抜いた。驚きの表情をデスマスクに張り付けたその犠牲者は後頭部から内容を壁に飛び散らせて床へと崩れ落ちる、まるでゴミでも除けるかのように足で払ったブージャム1がその死体の胸へともう一発止めを打ち込んで、何事も無かったかの様に歩き去った。

「アデリア、急げっ！」

いつもは自分に負けじと肩を並べて走る筈のアデリアがマークスに後れを取っている、そこにいなければならぬ相棒の姿を求めて後ろを振り返ったマークスが思わず叱咤する。

だがそれでもアデリアの足は何時もの軽快さを失ってどこか虚ろなまま速度を上げようとはしない。いつもとは違うアデリアの態度に、と言うよりも自分の叱咤にすら返答もしないアデリアの様子に疑問を抱いたマークスがハンガーに飛び込む前に足を止めて振り返

った。まるでそれを待ちわびていたかのようにゆっくりと足を止めるアデリア、霸気の無い顔でマークスの顔を見つめるアデリアの両肩を掴んでマークスが怒鳴った。

「どうしたんだアデリアっ！　しっかりしろ、戦闘配備なんだぞっ！？」

だがアデリアの表情は晴れない。マークスの言葉を上の空で聞き流そうとするアデリアに向かってマークスは強く両肩を揺さぶった。あり得ない、と思う、彼女のこんな表情は今まで見た事が無い。

自分の知るアデリア・フォスと言う少女はこと演習になると沈着冷静を絵に描いた様なパイロットの筈だ、だが今自分の目の前に立つ彼女にはそんな姿の欠片さえ見当たらない。

睨みつけていたマークスの視界の中で突如アデリアの表情が変化した。その顔はサリナスで被災した時に人々の亡骸を眺めて浮かべた表情と同じだと思う、記憶の糸を手繰り寄せるマークスに向かってアデリアが呟いた。

「…………… 訓練じゃ、無いんだよね、二ナさんの言ってた、これが…………… 戦争なのかな？」

「そんな判断は後回しだ、今はとにかくモビルスーツに乗って戦闘配備に……………」

「乗って、もし本当に戦争になっちゃったら、あたし達戦わなきゃいけないんだよね？　あれに乗って殺し合いをするんだよね？」

「そんな事っ！……………」

だがそこから先の言葉がマークスには出てこない。考えたくもないと思っていた現実、二ナの話聞いた今でさえ自分の身に降りかかってこなければ何の現実味も持たなかったその言葉をアデリアに告げる事が出来ない。

逡巡を見せたマークスに向かってアデリアが声を張り上げて尋ねた。それは自分に課せられた過酷な運命を呪う巡礼者の拝礼にも似て。

「ねえ、戦争なんだよね、これって！　どうして、何であたし達が

っ！  
」

アデリアの中の妄想が具現化して、その恐怖がそのままアデリアの瞳を濁らせる。アデリアの中で巻き起こっている猛烈な恐怖による怯えを目にして驚くマークス、アデリアは尚もマークスの手を掴んで捲し立てた。

「人がいっばい死んじゃうんだよ！？ あたし達だけじゃない敵だつて、どうしてそんな事に巻きこまれなきゃいけないの！？ いやだそんなの、あたし行きたくないっ！」

「馬鹿野郎っ！ お前自分が何言ってるのか分かってんのか！？ 間違いなく敵がそこまで来てるんだぞ！？」

「分かってる、分かってるけど駄目なのよっ！ もしキース隊長が、あんたが死んじゃったらつて思うとそれだけで震えが止まらない、怖いんだよっ！」

頭を抱えて俯きながら何かを振り払う様に首を振るアデリアの姿、マークスはその時初めてアデリアの本当の姿を垣間見た様な気がした。ある種の畏怖を持って語られる『ベルファストの鬼姫』

だがそれは彼女の本当の姿と最もかけ離れた二つ名であると言う事、そして彼女はあの日自分が犯した罪の贖罪としてその異名を甘んじて受け入れていたのだと言う事を。

自分の僚機として常に行動を共にしてきたアデリア・フォスと言う少女は実は誰よりも臆病で、そして彼女はその心の内を知られないが為に並々ならぬ努力を重ねて二つ名に見合った幻影を創り上げていたのだ。

今までアデリアを誤解して来た自分の迂闊さをマークスは後悔した。自分が他の誰よりもアデリアの事理解しているのだと信じていた、だがそれは唯の独り善がりな自分の思い込みで本当の彼女の事を全然気付いてもいなかったのだ。それも分からずただ悪戯に叱咤を繰り返した自分の行いに忸怩の表情を浮かべたマークスが、俯いたままのアデリアの目の前に自分の手を差し出して言った。

「そんなのお前だけじゃない、俺だってそうだ。…… 見ろよ。」

マークスの言葉に顔を覆っていたアデリアの手が離れた。アデリアの視線の先に置かれたマークスの手は小刻みに震えている、それを知ったアデリアがゆっくりと顔を上げてマークスの瞳を見詰めた。「俺だつて怖いさ。キース隊長やお前だけじゃない、この基地にいる誰かが死んでしまうなんて考えたくない。でも俺達が戦わなきゃモウラさんが言った通り、俺達が頑張んなきゃキース隊長だけじゃない、もっと大勢の仲間が死んじゃうんだ。」

震える手でもう一度アデリアの肩を抱いたマークスが言った。アデリアの瞳の中で蠢く恐怖の影を追いだそうとする様にじつと彼女の光彩を金の瞳で射抜く。

「戦う力を持った奴が戦わなければ戦争は終わらない、一度始まった物をどれだけ少ない犠牲で収める事が出来るか。俺達はその為に今日と言つ日の為にモビルスーツに乗る事を選んだんだ。だから、迷うな。」

その言葉にはっとしてマークスの瞳へと意識を注ぐアデリアの瞳。恐怖と言つ名の浸食がアデリアの瞳から追い払われて行く事を知るマークス。

「お前の事は俺が必ず守る、約束する。だからお前はお前の実力を存分に発揮して敵を迎え撃て、あの日エースを落としたのは俺じゃなくお前なんだからな。」

キース以外で昨日の演習中に唯一ダウンを記録したアデリアの実力をマークスは強く信じている。その思いを言外に受け取ったアデリアが小さく頷いた。

「分かった、マークスがそう言うなら、あたし頑張る。」

自分の身体を支配していた怯えと言つ名の悪魔を追い払う様にアデリアが言う、マークスはアデリアの目に精気が蘇って来た事を知って思わず笑った。

「よし、よく言った。その意気だぜ、相棒。」

突然点灯した明かりに、眠りの浅かった二ナは目覚めた。瞼を透

かして届くその輝きを不審に思う意識、思えば自分はこの所天井に設えられた大きな明かりを付けた事が無い筈だ。デスクで仕事をする時にはもっぱらその脇にあるデスクライトかベットの脇にある間接照明を使う、使う事のない明かりが何で今になって？

ベットの上の上体を起こして辺りをきよるきよると見回す、別段変わった事は無い。ただ不思議な事に二十四時間稼働し続ける約束になっっている空調の音がいつもより小さくなっている。

「？ 変ね、停電でもしたのかしら？」

しかしその疑問を基地の構造をよく知る二ナは否定する。モバイルスーツを常駐させる基地には元々膨大な電力供給が必要だ、融合炉を動かす為のプラズマ発生装置だけでもちよつとした変電所を用意する必要がある。そしてその電力は地下深くに設置された専用の変電ユニット内で正・副・予備の三系統に分かれて管理されている。基地が停電状態に陥る為にはその三系統が同時にダウンしなければならず、相互監視を互いのAIが行っている以上その事態は人為的要因が介在しなければあり得ない。

仮にその変電所へ電力を送る送電線網が破壊されても非常用のデューセルが自動的に動き出し、基地内の電力は機能維持に必要な最低限のラインを確保する様に出来ている。故に完全停電状態に基地機能が陥る事はよっぽどの事が無い限りあり得ず、そして二ナはその唯一の可能性に思い当たる事が出来ない。

ベットを離れてデスクの上のパソコンの電源を入れる。ひよつとして何らかの情報が開示されてないかと言う二ナの淡い期待はほんの僅かなタイムラグで表示される初期画面によって裏切られた。

だが変化はその直後に発生する、いつもなら間髪入れずに接続されるメインサーバーへの入口が二ナに対してパスワードの入力を要求して来る。

「…… おかしいわね、そんな事」

ほぼ毎晩の様に使うAIが二ナに対してパスワードを要求する事などあり得ないと思う。自分の家の鍵が突然付け替えられた様な不

安に襲われた二ナがそこに文字を打ち込む事無くじつと画面を見据えて考え込んだ。

表示された事実は明らかにメインサーバのクッキー（HTTP cookie：Webサーバとウェブブラウザ間で状態を管理するプロトコル）が初期化された事を示している。自分の端末に異常が無ければサーバ側に何らかのトラブルが発生してその一切合財が初期化されたと考える方が自然だ。だがオークリーのAIは自分が手を加えて二台の間での自走診断プログラムが常時走っている、もしどちらかにトラブルが発生すればエラーを照合したもう一台がトラブルを起こした側を分離して機能を維持する仕組みになっている。

一つの可能性を除いては。

「…… やつぱり停電？ そうとしか」

腕を組んで首を傾げながら呟く二ナ、その瞬間頭上に埋め込まれたスピーカーからけたたましいサイレンの音と共に合成音声によるアナウンスが流れ込んで来た。

「 当基地に第一種戦闘態勢が発令されました。全隊員は直ちに戦闘配備に着いて下さい。全隊員は直ちに戦闘配備に着いて下さい。なお民間人は最寄りのシェルター及び避難通路へと退避してください。閉鎖まで後三分。」

抑揚の無い声で告げられる緊急事態に現実味を失う二ナの両手が解けていく。何かの聞き間違いではないのかと再び耳を澄ませた二ナの耳に繰り返される不吉な宣告、そしてその合成音声と共に微妙に聞えて来た喧騒と銃声を耳にした瞬間に二ナの意識は現実と言う名のリアルを取り戻した。それは自分が嘗て戦場と言う名の即興劇の演出に一役買ったという経験から来る条件反射に近い物だった。

自分の胸を叩く激しい心拍は死の恐怖によって齎される物、だが二ナの手は自分の体の内部に起こる変調に関わりなく迷わず椅子に掛けたズボンを手を取った。両足を通して一気に引き上げ、ジツパ―を上げてベルトを締める。手が震えないのはあの日の経験による物だと奇異な運命に感謝しながら、二ナはナイトデスクに置いてあ

ったラップトップを手に取った。弾みでその脇に置いてあったコウのディスクが滑り落ちて、床で小さな悲鳴を上げる。

慌ててそれを取り上げて胸のポケットに仕舞い込む二ナ、素足にパンプスを履いてゆっくりとドアへと忍び寄って耳を当てる。

耳朶を叩く甲高い悲鳴と連続する射撃音、途絶する悲鳴と更なる悲鳴、意味消失する言葉の羅列は今まさに生命の危機を迎えて命乞いをする為の絶叫なのだろう、だがその願いを轢き潰す様に鈍い音を立てる処刑のドラムロールはあつという間に人の願いを沈黙させる。自分のいる建物の中で起こりつつある百鬼の侵攻を肌で感じた二ナの心臓が喉元にまでせり上がる。

呼吸が苦しい。

『 民間人は速やかに最寄りのシェルター及び避難通路へと退避してください。閉鎖まで後二分。』

カタカタとなる奥歯の音と共に聞えて来るその情報は、二ナの部屋の傍で緊急解放された退避用通路の扉がAIの手によって自動的に閉鎖されるまでの時間だ。死の恐怖に怯えながら二ナはそつとドアを開いた、僅かな音もたてない様に静かに滑り出した身体を向かい側の壁に張り付かせて息を止める。

角までにじり寄ってそつと通路の様子を伺う二ナの目に焼き付けられる、凄惨な真実の景色。

ドアを開けた黒い服の男達が無造作に銃弾を打ち込む、それでも尚悲鳴の轟く廊下を後にして室内へと消えていく男達の姿に続く絶叫と銃声の輪唱。<sup>ロンド</sup>途絶する演奏は一人一人の命が無情にも断絶する瞬間の証明、そして再び笑みを浮かべた死神の群れは次の獲物を求めて動き出す。それはまるで古代の宗教書の原典に記載されている『過ぎ越し』の様子にそっくりだ、神を名乗る悪魔が何の罪も無い人々を違えた思いを抛り所にして一方的に殺戮して回るその光景に。

逃れる様に目を背けて再び息をひそめる二ナ、その瞬間二ナが隠れた通路の角に程近いドアから一人の女性が恐怖に負けて通路へと飛び出した。彼女の足は迷う事無く二ナの傍にある退避通路を直指



す、廊下に木霊す足音が近づく毎に二ナの心臓の拍動とシンク口する。

迫り来る足音に上書きされる発砲音、柔らかい物に食い込む何かの音が何回も、小さな悲鳴がほんの一回、乱れるリズム、途切れる音。

刹那の空白の後に女性の身体が投げ出されて二ナの横に滑り込む、突然現れたその物体に驚いた二ナが反射的に片手を口に当てて辛うじて悲鳴を押し留めた。壁に背中を押し当てたまま視線だけがその物体に注がれて、目を逸らす事すら忘れた二ナに向かって死の際に立つその女性はゆっくりと視線を向けた。

焦点の無くなった瞳を二ナに向けて、声にならない声が何かを二ナに訴える。背中に滲む赤い染みが見る見るうちに拡大してそれは床へと零れ落ちる、終焉を示す砂時計の赤はリノリウムの床を滑って投げ出されたままの女性の手を汚す。最期の力を振り絞って二ナに向かって指し伸ばされたその手が大きく開いて、見えない何かを掴み取るうと大きく開く。

その光景を震えながら見守る二ナ。手が、足が震えて腰から下の力が入らない。しゃがみ込んでしまいたくなる様な欲求を必死の思いで押し留め、ありつた力の力で上体を壁に押しつけて支える。

恐怖に埋め尽くされて行く感覚、五感の受容体が喪失して身体の周囲になにかぼんやりとした幕が下りて来る様な夢現、現実逃避を試みる二ナが精神がまさに死を甘受せんと朽ち果てようとした瞬間に僅かに残っていた聴覚だけが作用して、二ナに対して情報を提供して来た。

民間人は速やかに最寄りのシェルター及び避難通路へと退避してください。閉鎖まで後一分。以降通路は使用不能となります

合成音声<sup>□</sup>が告げる重大な意味を理解した二ナの意識が喪失した五感のレベルを正常値へと引き戻す、その時アナウンスに混じって聞えて来たのは明らかに自分の元へと近寄って来る軍用ブーツの足音

だった。

「キースつ、非戦闘員の退避完了。ハンガー出口から滑走路の先まで有視界でオールクリア、残念だけどここから提供出来る情報はこれだけだよ。」

スピーカーを通じてキースの元へと届くモウラの声は落ち着いている、流石に一年戦争を経験した者はここ一番の度胸が据わっていると感心するキースに向かって今度は戦争を体験した事の無い兵士の声が聞えて来る。

「隊長、まだ出ないんですか？ こんな所に籠ってたら敵に囲まれて手遅れになっちまうっ。」

怯えを恥じる事無く声に出したアンドレアが尋ねて来る。元々は訓練の際に動けなくなった機体を回収するスイーパーとしてモビルスーツを操る彼らに正規の搭乗資格はない。そんな彼らに完全武装のゲルググを使ってぶっつけ本番で戦えと指示している自分の方が無謀なのだ。

「まだまだ、敵の状況が分からないままここを飛び出すのはかえって的に狙い撃ちされる恐れがある。今は管制室からの指示を待つんだ。」

キースの脳裏にはあの日のトリントンの一部始終が走馬灯の様に流れている。場所も違えば状況も戦力も、そして恐らく敵の素性もあの時とは全く違う物に違いない、だがガトの襲撃を受けて乱戦に陥ったあの状況でハンガーから外に飛び出したカークスのザクが一撃で仕留められた事だけは忘れられない。

あれはもし自分がコウと一緒にアルビオンへとガンダム一号機を見に行っていないければ自分に与えられたかもしれない運命だったのだ。

それに策敵機能の回復していない今の状況でモビルスーツ部隊だけが単独で出撃する事は非常に危険だ。モビルスーツの戦闘力が他の兵器を著しく凌駕しているとは言え、その実力を如何なく発揮す

る為には後方のバックアップが不可欠になる。

戦場を俯瞰で見ることによって得られる情報を逐一部隊に報告して局面単位での戦術を立案する、その役割を担うのが戦艦ならばCIC、地上基地ならば中央管制室である。いかにキースが優れた指揮能力を持っていても一寸先も見通せない戦場に放り出されれば右も左も分からぬままに敵の餌食になりかねない。

「でも、キース中尉、もう警報が五分も流れつぱなしだ。管制室に誰かが入ってスイッチを押せば自動的に警報が止まる仕組みになつてんのに未だに鳴りつぱなしって事は、まだ誰も管制室に入つてないって事でしょ？ 待つてても事態が悪化するばかりじゃあ？」

その冷静な声は殿に控えたマルコの声だ。いつも長い髪を後ろで束ねて飄々とローダーを運転する陽気なイタリア人は、恐らく自分の生涯の中でもとびつきりの危機に直面している事に気が付いているのだらうか？ だがそれ故に的を得ているマルコの発言を後押しする様にバスケスが言葉が続ける。

「やはりここは斥候を出して周囲の状況だけでも確認すべきだ、万が一管制室に不測の事態が起こつていたら、自分達がここで悪戯に時間を消費する事はその分だけ自らを窮地に追い込んでいる事になる。 オークリー 幸いな事にここは地上施設が少ない、ハンガーからほんの少し外に出るだけでかなり遠くまで見通せる。」

陸戦隊の古参であるバスケスはいかにも歴戦の勇士らしくキースに対してそう提言する。ゲルググに乗る予備人員の中では一番年上で最も戦歴の長い 一年戦争の前に勃発したグラナダ攻防戦に従軍していたと言う肩書を持ち 彼の発言には説得力があり、異を唱える事の出来る者は少ない。それは彼が転戦して来た戦場が他の誰よりも過酷であり、そして数え切れないほどの窮地を自らの手で切り開いて生き延びて来た事に由来する。

本来であればオークリーの陸戦隊の指揮官になり得る人材であるにもかかわらず彼はウェブナーからの要請をその穏やかな人となりで拒否し続けている、叩き上げで得た兵曹長という地位は部隊を率

いるには僭越であり、自分には小隊規模が似合っていると云ういかにもバスケスらしい言い分だった。

「どうする、キース中尉？　もし許可が下りるなら自分がポイントマンで斥候に出て見るが？」

バスケスの提案は決して理にかなっていない物ではない、とキースは思う。実際バスケスの状況分析にはキース自身も同意する所が多々ある、それに警報が鳴り始めてからの五分間、未だに戦端らしき物が開かれる様子はないと言うのもキースがバスケスの意見に傾きかけた理由だった。

どれだけの戦力がこのオークリーへ向かっているのかは定かではないが奇襲を敢行しようと言うのなら戦況が自分達の有利に働く様に何らかの先手を打って来るのが常套手段だ。例えばそれはリーダー波をかく乱するチャフの散布であったり、視界を悪くする為に滑走路の照明を破壊したり。とにかく何の欺瞞手段も行使されない以上敵の存在がまだ近辺に到達していないと考える方が妥当だろう。少なくとも射程外。

そのチャンスが今しかないと言う事はキースにも理解出来る、だがキースの第六感はその提案を受け入れる事を拒絶する。理由は簡単、今自分達の置かれている状況が『理にかなってない』と思うからだ。何故何の前触れも無く敵がここを襲撃するのかわ、それも戦略的に何の価値も無いこの場所を。例えばこの基地を占領した所で北米軍司令部とジャブローの間<sup>ジョン</sup>に位置するオークリーは双方からの挟撃が容易に行える場所だ、攻めやすいが守りにくいこの場所を手に入れた奴らは何をしようというのか？

「隊長、あたしが出てみます。」

心中で相反する意見に気を取られていたキースの耳に届くアデリアの声、既にカーキ色のザクはキースの背後を離れて前に出ようとしていた。

「あたしも兵曹長の意見に賛成です。このまんまじゃ埒が明かない、自分達で出来るだけの情報収集はしておくべきだと思います。全体

的な局面はともかく、少なくともハンガー周辺の状況だけでも。」

アデリアの提案がキースの中の天秤を一気に片方に傾ける、皿の底が音を立てて止まる瞬間にキースは嘗てここで部隊の指揮官であった無二の友人の顔を思い出した。

「コウ、お前ならこんな時、どうする？」

「分かったアデリア、お前が前に出る。バスケスはアデリアのバックアップ。」

「おっと、中尉。それは配置が逆だと思う。……自分がポイントマンで出る、伍長はバックアップで。」

自分の意見が採用された事にほんの少し喜びを孕んだ声で

それはこの閉塞状況が少しでも打開できるかもしれないと言う希望も含めて キースの指示を訂正するバスケス、アデリアがさも心外そうな声で言った。

「ちよつと兵曹長、あたしが前に出ます。こういう事は操縦に慣れたあたしの方が。」

「伍長の意見は確かに正しいと俺も思っている、だがこう言う仕事は技量の在る無しよりも経験の差が物を言うんだ。戦場に流れる空気の移動とか相手との呼吸とか、そう言った目に見えない物を備に感じ取れる力が無いと生き残れない仕組みになっている。」

いともあっけなく持論を論破されたアデリアが沈黙する。バスケスは恐らくコクピットの中でへこんでいるであろう、年の離れた妹ほどの少女に向かって労う様に明るく声を掛ける。

「まあまあそうとんがるな、伍長達はこの前のジャブロー組との演習で疲れているだろう？ いざと言う時の為にいつでもその力を発揮出来るようにここは休んでおいてくれ、こういった余計な仕事はサポート組の俺達の仕事だ……じゃ、中尉。」

キースに一声掛けるとバスケスのゲルググは最後尾を離れて集団の前に出た。その影を踏む様にアデリアのザクが続いてハンガーの扉に近づく。正面から姿を見られない様にすつと身体を隠したバスケスが機体を並べるアデリアに向かって方法を説明した。

「俺がハンガーの前に出て振動を感知してみる、少なくとももそれで敵との大体の距離が分かるだろう。感知できなければ敵はまだ敷地内に侵入していないという事、もし感知できれば」

確かに掌につけられた振動感知センサーはコロニー戦を前提として開発されたゲルググならではの特殊装備だ。それを使えば立ち上がってカメラセンサーを使わなくても敵の動向はある程度知る事が出来る。

「地下構造物の多いハンガー内じゃこれは精度が低いからな、どうしても滑走路に出る必要がある。俺が志願したのはそういう訳だ。」  
「でももし振動が感知された場合には敵が直ぐ傍まで来てるって事でしょう？ もし敵がライフルを装備してたら兵曹長は射程内ですよ。」

「だから伍長にバックアップを頼んだんだ。もし敵が撃つてきたら伍長は俺が指示する方向へ撃つて撃ちまくれ。なに、ゲルググの装甲は厚いしここにこうして楯もある、一発や二発直撃されても何とか持ちこたえられるだろう。」

片手に下げたジム用の楯をひょいと持ち上げてアデリアに見せるバスケス。アデリアが頷いた事を確認するとバスケスは姿勢を低くして外に飛び出す準備をする、アデリアはブルパップ型（グリップと引き金より後方に弾倉や機関部を配置した設計）のアサルトライフルを捧げ筒の状態で保持し、バスケスからの合図を待つ。

「じゃ、行くぜ。頼むぞ伍長っ。」

バスケスが一気に滑走路に躍り出た。ゲルググの歩幅は約8メートル、五歩走った所でバスケスは手にした楯で機体前面をカバーしながら地面に手を当てた。その姿をモニターの端にしっかりと収めながらアデリアが半身を乗り出して銃を構える。火器管制の作動したアデリアのモニターにはライフルに取り付けられた照準器のレテイクルが青白い輪郭で揺れている。

「感度最大、全周囲探知開始。」

呟く様に報告するバスケスの声と共にゲルググのセンサーはその

能力を解放した。インフォメーションモニターに三次元で現れた起伏は発生源の位置とその大きさ、移動の有無をリアルタイムで表示する事が出来る。モバイルスーツクラスの重量がそこに表示されるとしたらどんなに微速前進で行軍したとしても一步毎に巨大な波形で示される筈である。

「エリア 探査終了。基地敷地内に敵影無し、引き続き探査を続行する。」

バスケスの報告を聞いたアデリアが思わずメインカメラをバスケスのゲルググに向けた。既にバスケスはアデリアの反応を見透かした様に顔をこちらに向けている。

「兵曹長、もう戻ってきてくださいっ、そこは危険です！」

「ビビるな伍長。こうなりや一発位敵に撃たせて場所を特定しないと寝覚めが悪い。それにこれだけ灯火の下に姿を晒してやってるのに掛かってこれない敵さんじゃあその実力も大したこたあねえって分かる」

その時アデリアの集音マイクに不可思議な音が聞えた気がした。風鳴り。

「風？」

アデリアがバスケスの周囲に目をやる。滑走路上にあるゴミが風で動いているのかどうか、環境レポートを自らのAIに問い合わせ報告させるよりも直接視認の方が早い。だがアデリアの目にそれらしき状況の変化は映らない。

音の方向をドップラーレーダーで探る為にアデリアは一旦火器管制を閉じる。アデリアのライフルの照準器から赤い光が消滅するのを認めたバスケスが思わず叫んだ。

「馬鹿っ、伍長！ 目を切るんじゃないっ！」

「えっ!？」

風鳴りは無視できない位大きくはつきりと聞こえる、それが何らかの物体が空中を超高速で移動している事によって発生している物だと理解したのは火器管制を元に戻して再びバスケスのゲルググを

画面に映し出した後だった。轟音と共に破壊されるジムの楯、貫通弾がバスケスの下半身を粉碎する。バスケスのゲルゲグがゆっくりと体勢を崩しながら摺坐する姿を見たアデリアが自分の頭が痛くなるほどの叫び声を上げた。

「兵曹長オツ!!!」



「直撃弾。脅威目標は行動不能。」

ハンプティはレティクルの中央で跪いたまま動かなくなったゲルググの姿を睨みながら傍らに立つラーズ1に報告した。ラーズ1のジムには着弾観測を任務とするダンプティやガンタンクほどの倍率を持つ照準器が装備されていない、しかし最大望遠で遠景を眺めるラーズ1の目にも被弾したゲルググが動かなくなっているという事実だけは読み取れた。返答の無い傍観者に向かってハンプティは声を掛けた。

「どうだ？ いつもと違う景色の眺めは。お前は何時も最前線だからたまにはこんなのもいい気分転換になるだろ？」

「馬鹿な事を。敵の呼吸も分からぬ場所から仕留めて何が楽しい？ 少なくとも俺にはそんな趣味は無い。」

にべも無くそう言うラーズ1。自分の役割を卑怯者同然に否定されたハンプティはラーズ1の雑言にも気を止めない素振りと言った。「うちの部隊には長距離を任せられるスナイパーがいないからな、必然的に俺がその代りになると言うのは仕方が無い。それでもお前らの援護射撃には苦労してるんだぜ？ 特にお前はいつも一人で敵のど真ん前にまで行っちゃう、お前が突出するお陰で俺の狙撃能力が上がった事には感謝するが、もうちょっと控え目に前進して欲しいもんだ。」

「それも余計な事だ、助けてくれとお前に頼んだ覚えはない。」  
「俺も頼まれた覚えはないけどな。…… まあいい、今日はお前

のお陰で鍛えられた俺の射撃能力を特等席でご披露だ。上手い事残りの連中を誘き出して後一匹ぐらいは喰っちゃみたいんだけどな。」  
そう言つとハンプティはガンタンクのAIに今の物と同じ弾種を装填する様に命じた。精密射撃が可能なAPFSDSが給弾ベルトを通じて120ミリ加農砲に滑り込む、地に縫い付けられたゲルグ

グに当てられたレティクルを微調整しながらハンブティは呟いた。  
「今日は横風が無いからこの距離でもピンショットが出来る、あの  
運の無いゲルググのパイロットの為に前が代わりに祈ってやって  
くれ。」

砲撃音が後からハンガーに届く、超長距離から放たれた砲弾によ  
ってバスケスのゲルググが行動不能に陥った事をアデリアは知った。  
「わあああつつっ！！」

悲鳴を上げながら上体を乗り出してライフルの引き金を引くアデ  
リア、照準の定まらないレティクルがモニターの上を跳ねまわる、  
光の洪水から闇夜に向かつてばら撒かれる銃弾はまるで漁師の放つ  
投網の様に無秩序な航跡を描いて消えていく。あつという間に全弾  
を撃ち切って開放されるスライド、自動的にリリースされたマガジ  
ンが滑走路の上で絶望的な音を立てる、それでもアデリアは何かに  
取りつかれた様に引き金を引く。

それで自分の目の前にある何かが変わって欲しいと祈るかの様に。  
「アデリアっ、よせっ！ 無駄だっ！」

駆け寄ったマークスがザクの肩に手を掛けて接触通信で会話をし  
ようと試みる、だがアデリアの手と足は、そして意思は変わらない。  
絶叫を迸らせるアデリアの行動を押し留めたのは近寄ったマークス  
ではなく、アデリアの不注意で攔坐したバスケスの声だった。

「伍長、弾を無駄に使うんじゃないっ！ 直ぐに新しいマガジンを  
装填しろ。」

無線から流れて来たその声を全員が聞いて色めきたった。下半身  
をAPFSDSによって破壊されたバスケスの機体は辛うじて両手  
で上体を支えてアデリアを睨みつけている。

「兵曹長、すぐに助けに行きますからそこで待っててっ！」  
「軍曹、伍長を止めろっ！！」

恫喝に近いバスケスの声がアデリアではなくその傍らで肩に手  
を当てているマークスに注がれる、マークスは反射的にアデリアの

ザクの肩を押さえつけた。予期せぬ阻止行動を予期せぬ相手から受けたアデリアが思わず叫ぶ。

「離してマークスっ！ 兵曹長を助けなきゃっ！」

叫んだその瞬間にアデリアは再びあの不吉な風鳴りを耳にした。一瞬前に自分の視界に焼き付いたあの信じがたい光景を思い出したアデリアがマークスの手を振り払おうと抗う、だがその願いが叶う前に再び金属の引き裂かれる轟音が狂乱寸前のアデリアの耳朵をぶつ叩いた。視線の先で吹き飛ぶゲルググの右腕、緊急パージ用の火薬が発火して反動で地面に叩きつけられる残った上半身。

「いやあああつ！ 兵曹長っ！！！」

「来るなっ！ 誰も俺を助けるんじゃない、狙い撃ちにされるぞ！？」

残った左手を地面に押し当て、上体を起こしながらバスケスが叫んだ。アデリアの傍を駆け抜けて外に飛び出そうとした二機のゲルググの足がそれedyつと停止する。義憤に駆られて僚機の危機を救おうとする愚かな行為を嗜めたバスケスが、自分の置かれた瀕死の状況にもお構いなしに冷静な声でキースに向かって報告した。

「中尉、上手くいかなくて申し訳ない。どうやら敵は俺が考えた以上に厄介な連中の様だ。俺を撃破したのは恐らく重砲、それも野戦砲クラスの大口徑だ。狙い撃っている所を見ると弾種はAPFSDS、音が後から来る事を考慮すると2キロ以上離れた距離に配置されていると思われる。手練てだれだぞ、こいつぁ…… 演習用ステイツクを出してくれ、今からデータを送る。」

「兵曹長、そんな事はどうでもいいから機を捨てて脱出しろっ！今からならまだ間に合うっ！」

「そうしたいのは山々なんだが、どうやら最初の一撃でそう言った物の系統が故障したみたいだ。残念な事に。」

「そんなっ！！！」

アデリアとキースの声が無線で重なる、バスケスは二人の叫びを冷静に聞き流しながら再び言った。

「いいからみんな演習用スティックを出してくれ　早くしないと貴重なデータが送れないまま犬死しちゃう。」

死に瀕した兵士の唯一の願い、『犬死』と言う言葉で全員の注意を喚起したバスケスの言葉は功を奏した。操られる様に全員の演習用モニターが表示された頃合いを見計らってバスケスが説明する。

「APFSDSは滑空弾だ、だから撃ち上げから始まる水平射撃ではどうしても命中精度が落ちる。故に野戦砲がピンポイントで目標を狙う為にはどうしても高台に設置して撃ち下ろしをする必要がある。機体に着弾した時の衝撃と位置のずれ、命中してから砲声が聞えるまでの時間、その相関関係を考えると敵の重砲の位置は

「  
バスケスが動かすカーソルの動きが全員のモニター上を同期する。はらはらしながら見つめる全員の目前で止まったバスケスのカーソルは基地の南側にある小高い丘の一つを指して、止まった。」

「多分この辺り、但し　」  
その瞬間、またしてもアテリアの耳に届くあの音、まるで死を告げる妖精の羽音から死を告げる黒鳥の羽撃きに変わるまでほんの数秒、そしてその音の途絶えた時　。

爆碎音が再びハンガー内に反響する、全員の目に映った物は残った左手をもぎ取られて地面に転がるゲルググの上半身だった。黴り殺しの目に合う仲間を助けようと居ても立っても居られなくなったマークスがアテリアの楯を掴んで奪い取った。

「マークスっ！　何するのっ！？」  
バスケスの姿に気を取られていたアテリアの手からいとも簡単に楯を奪うとマークスはそれを両手で重ねて保持しながらバスケスに言った。

「兵曹長っ！　今から俺がハンガーを出る、何とか推進剤に点火してこっちの方まで動けないか！？　兵曹長っ！？」

叫ぶマークスが動き出しにかかるうとする、マークスの意図を察して　マークスが二枚重ねの楯で敵の砲撃を受ける間に残り

の者が彼の機体をハンガーに引き摺り込む 身構えた全員の動きを察する様に、そして咳き込みながら断るバスケスの声。

「…… 全電源喪失、おまけに、破片がコクピットを、跳ね、回りやがつ、た。くそつ、手が動か、ねえ。」

バスケスの報告によって生まれる絶望が残った五人を支配する、何とか奇跡に一縷の望みを託すマークスが尚も血走った目と口でバスケスに向かって呼びかける。

「まだだ、兵曹長っ！ 諦めるなあっ！」

「おお、いいなあ軍曹。その意気だ。生き残るにゃあその気概が大切だ、俺が言うんだから嘘じゃ、ね、え。」

途切れ途切れに言うその言葉を彼はどんな顔で言っているのだろうか？ いつも物静かで穏やかなバスケスの人となりを脳裏に浮かべたマークスが、アテリアの目から自然に零れ落ちていく涙の滴。バスケスが言った。

「…… そう言やあ、報告がまだ、終わって、なかった、なあ。」

…… 中尉、重砲には、絶対コバンザメ《護衛》がついて、いる。だから、滑走路を突っ切って向かい側の山の、斜面

「 声が途切れて咳き込みに変わる、くぐもった音はそれに何らかの液体が混じっている証拠。大きく息を吐いたバスケスが再び絞り出す様に言葉を続ける。」

「 を迂回し、てえ、重砲を潰せ。そこから基地に向かって、帰って来れば、多分敵の背後を

「 止めを刺せ、ハンプティ。」

背筋も凍る様な冷たい声でハンプティに指示を出すラーズ1、ぼんやりとはいえいかにも悪趣味なその光景を眺める事にラーズ1は怒りを覚えた。最前線で斬り込んで来たラーズ1にとって戦いとは常に敵の息吹を感じる距離で命を殺り合うものだ決めていた、故に敵の届かない距離から一方的に蹂躪するその作業はラーズ1の価値観に照らし合わせれば唾棄すべき物だった。

「幾らやつても敵は出てこない、奴らに実戦経験は無いがそういう部分では立派に軍人たる資質を備えている。これ以上弾を無駄遣いして奴らの尊厳まで貶める様な真似はするな。」

これに言い返したらこいつは俺を撃つんだろうな、と根拠のない確信を得てハンプティは黙って止めの弾を装填した。薬室の尾栓が閉じる振動、点灯する発射可能を示すサイン、ハンプティが今まで叩いていた軽口を封じ込めたまま無言で引き金を引き絞った。

発射時のガス圧を受け止めた装弾筒サボが砲口を飛び出した瞬間に分離して、中からタングステン合金製の侵徹体が飛び出す。超音速で飛行する弾頭の先端が溶ける事を防ぐ為に取り付けられたチップが高周波の悲鳴を上げて空気を切り裂く、アテリアが何度も耳にした死神の羽音は全てここから生み出されている。

弾道を安定させる為に取り付けられた安定翼が弱い回転を弾頭に与えながら目標との距離を縮める。

彼に意思はない、ただ当たった物を破壊する。ただ、それだけ。

「 つける 」

その言葉が無線機から流れて来たバスケスの最期の言葉だったように思う。告死の矢はハンガー内で為す術も無く立ち尽くした全員希望を打ち砕く様に轟音を立ててゲルググの胴体に命中した。わき腹から侵入した弾頭がコクピット内で潰れて飛散する、巻き添えになる物は有機無機を問わず一瞬の内に裁断されて元の形を失って息絶える、そして貫通モーメントを残した弾頭の飛沫はゲルググのバックパックを貫いて残った推進剤に火を点けた。

目も眩むような火球が残った残骸を天高く吹き飛ばす、爆発による推進力で放物線を描いたゲルググは残り火を纏わり憑かせたまま地に落ちた。現実という観念を失った世界の中で唯一質量を持ち得たガラクタが大きな音を立てて滑走路のコンクリートを穿って止まる、その激しい震動は全てを見守る事しか出来なかった無力な兵士

に人一人の命が自分達の輪の中から欠落した事を教えた。

アデリアもマークスも、マルコモアンドレアもモニターに映る送り火をただ茫然と眺めていた。唯一キースだけがただ一人、手の中にある超長距離ライフルのボルトを引いてチャンバー内に初弾を装填する。鋭い金属音を耳に捉えて我に帰る四人、視線を集めたキースが言った。

「俺も初出撃の日に先輩を目の前で失った。」

ガトーの乗ったコムサイに狙いを付けたアレンを一撃で仕留めたドム・トローパーン、それは戦場の不条理に怯える自分の隙を突いて敢行された乾坤一擲の奇襲だった。今の自分があの時あの場所に居さえすれば、アレン中尉を死なせる事は、無かった。

「マルコとアンドレアはハンガー内の使える物でバリケードを築いてここに立て籠もれ。必要ならば整備班をもう一度呼び戻して手伝わせてもいい、とにかく俺達が重砲を潰して敵の背後を取るまで何としても生き延びるんだ。俺達はバスケスの言い遣した作戦に従う。」

「隊長、兵曹長はっ!? 彼をこのまま置き去りにして」

「アデリア、それも俺が昔上官に訴えた台詞だ。…… その時に上官に聞かれた言葉でお前に尋ねる、『お前はバスケスのミンチが見たいのか?』」

生存の可能性などありはしない、そしてその言葉の意味を噛み締めるアデリアの心中に込み上げて来る複雑な感情。

苦しくて辛くて悲しくて悔しくて、そして憎いっ!

「彼を弔いたいと思うのなら彼が言った様に生き残れ、そして基地に帰還してから己の不明を彼の墓前で思う存分恥じろ。彼を助ける事の出来なかつた己の力の無さを。」

それは恐らく助ける事の出来なかつた自分に向けた言葉。そしてあの日に二ナから聞いた、アレンの部屋でコウが見せた悔恨の光景を思い浮かべての言葉だった。突破口を開く為に命を落とした歴戦の兵士、彼の死を無駄にしない為に勝って基地を守らなくてはな

らない。

コウの様に悔やむのは、懺悔をするのはそれからいい。

「ヴェスト軍曹、フォス伍長。両名は今から俺の指揮下に入れ。予備弾倉は最大限、近接戦闘用にスプレーガンの携行を許可する、マルコとアンドレアから受け取れ。」

指示を受けた二機のゲルググがそれぞれの手にした武器を二人に手渡す、アデリアとマークスはそれを腰のハードポイントに固定する。

「マルコとアンドレアは指示通り、早急にバリケードを構築しろ。

火力は無制限、ここにある武器と弾薬は何でも使っていていい。とにかく持ち堪えろ。」

「でも中尉、重砲が居るんだったらこんなでかい的、<sup>ハンガー</sup>狙い撃ちなんじゃ？」

惚けた口調ではあるが緊張した声でマルコが尋ねた。正規のモビルスーツ隊が全員出撃すれば後に残るのは満足に訓練も受けていない自分達しかいない、頼りになる最古参兵を失った事実マルコの中から陽気さを奪い去ったままなのだろう。そう感じ取ったキースは出来るだけ穏やかな口調でマルコに自分の予測を説明した。

「俺達が外に飛び出せば重砲は狙いを察して退避行動に移るかも知れない、陽動に出て来たと勘違いしてくれば奴らもハンガーより俺達の殲滅を先に狙うだろう。バスケスを狙い撃ったほどの腕の砲手ならば尚更だ。」

キースはそう説明するとシールドの裏に嵌めこまれた予備弾倉を確認してからシールドの取っ手を左腕のロッキングアームに取り付けた。こうすれば射撃の際に自分の身を守りながら両手が使える。

「では作戦を開始する。マルコ、アンドレア」

振り返ったキースのモニターに映る二体のゲルググ、そしてキースはその遙か後方のシェルターの入口に立つ人影を目撃した。マルコと同じ浅黒い肌の大柄な女性はいつもと変わらぬ姿で腰に愛用のツールベルトをぶら下げて、キースに向かって直立不動で敬礼する。



モウラの姿を見て必ずここに帰って来ると心に強く誓うキース。それは他の四人が思わず姿勢を正してしまう程、存外に強い声だった。

「みんなを、頼むっ。」

ひたひたと二ナの元へと迫るその足音には死の残り香が漂っている。ベレッタ製タクティカルブーツの底に刻まれた深いトレッドパターン、ビブラムに滲み込んだ液体がリノリウムの床で弾けて音を立てる。それは湿った嫌な音で一足毎に近づく度に二ナの身体から力を抜き取る。その音が廊下の突き当たりで止まった時、二ナは目を瞑らなければならぬと思う。

トリントンが攻撃を受けた時にも、初めて乗ったコアファイターでコロニーに向かった時にもそんな気持ちになつた事はなかった。至近弾の爆発からコウの乗った一号機に守ってもらつた時でさえ自分が死ぬ事など思つてもいなかった、だが今日は違う。

彼らと与える死は偶然ではなく必然、彼らに向かつて何故そんなに殺すのか等と陳腐な台詞で叫んでみても答える事はないだろう。二ナの心にそれほど確信を与える彼らの出で立ちと立ち振る舞いは口舌にとって代わるだけの説得力を持っていた。二ナの耳に届く足音が傍に横たわる瀕死の女性を過ぎ越した瞬間に二ナの運命は決まる、そして自分出来る事は彼女と同じ運命を与えられる自分の死に対して固く眼を瞑つて耐える事以外にない。

胸が張り裂けるほど大きな拍動が続いて、これ以上無いほど上り詰めた血圧が頭の芯に頭痛を齎す。同じリズムを刻んでゆつくりと近づくその足音が差し込む影を伴って二ナの足元に伸びて来た瞬間に、二ナは短かった過去と瞬時に過ぎ去る未来の痛みを予期して網膜への光を遮断した。

痛みと音は一瞬、願わくば一回で済みますようにっ！！

” パッキンッ ”

薄い金属片を折り曲げる様な固い音がして、二ナの身体が飛びあがる。それが自分に向けられた銃の撃鉄を上げる音だと思った二ナはラップトップを両手で挟んで強く握りしめた。この世に生れて最初で最後、最大にして最悪な激痛が訪れるのを静かに待つ二ナの耳に届く、鈍い発射音。拳銃の先に取り付けられた消音機ハッシュバレットから零れる硝煙、柔らかい物に勢い良く食い込む何かの音。

大きく眼を見開く二ナ、足が硬直する、震えが止まる、頭の中が真っ白になる。

呆然と壁と天井の継ぎ目を眺めて立ち尽くす二ナの耳に再び届くその足音、自分に何が起ったのか、回りがどうなっているのか状況が掴めずに固まったまま動けない二ナの耳には確かにその足音が遠ざかって行く様に聞こえる。偽構全としたその不可思議な現実になナの視線は恐る恐る足音が近づいて来た筈の廊下へと向けられた、そして足元に横たわったまま動かなくなった女性の背中に新たに穿たれた銃痕を見て今まさに行われた処刑の事実を知った。

自分達の囲みから抜け出そうと試みた愚かな行為を咎める様に止めを刺しに来たその兵士は二ナの潜む廊下の角まで来て背後から上官に呼び止められた。小さな金属音はクリツカーと呼ばれる道具で主に犬の躡に使われるのだが、特殊部隊の兵士が何かを伝達する際音で兵士の注意を惹く為に持ち歩く道具でもある。背後で呼ばれたその兵士は慌てて瀕死の女性に止めを刺して踵を返したのである、そのほんの何メートルか先の廊下の角にこの作戦の最終目標が隠れていたと言う事にも気付かずに。

死の恐怖を回避したと言う事実は二ナに過呼吸の症状を発生させる、音をたてない様に大きな口を空けて空気を取り込もうとする生理機能を必死の思いで制御して、少しずつ肺の中に血生臭い空気を流し込む。

細かく上下する二ナの胸元に押しつけられたラップトップが両肺

の容積を制限して、二ナの身体は偶然にも過呼吸による意識の混濁を回避する事が出来た。徐々に収まる激しい動機と鉄に似た生臭い匂いに咽そつな喉を押さえて再び廊下の角から虐殺の現場を盗み見る。

そつだ、何一つ状況は変わっていない。偶然の女神は自分の運命をほんのちよつとだけ先延ばしにただただ、ここに残っている限り未来は変わらない。

『 通路が閉鎖されます。付近にいる基地職員は直ちに屋外へ避難を開始してください。尚この先使用出来る通路は管理棟A - 2、ハンガー直通通路H - 1 』

合成音声告げる時間切れの宣告と共に二ナの反対側の通路で起こる鈍い音と伝わる振動。油圧ポンプが作動して待避壕の頑丈な扉が壁面から姿を現した。普段ならまるで玄関の引き戸の様に片手で軽々と開け閉め出来るそれも有事の際には強烈な油圧の力を借りて強固な砦に変化する。少しずつ狭められていく生存への可能性を発見した二ナの手が震える。

二ナの未来を阻む様に横たわる横たわる女性の亡骸、いつもは鬱憤晴らしに蹴飛ばしていた扉までの距離が途轍もなく遠く感じる。でもその二つの障害をクリアしない限り、自分に生き残る術は無い。生き残る？

二ナは自分の思考の中に紛れた自分の言葉に疑問を投げかける、  
『 生き残る 』。

二ナ、何のために？

迷走を始める思考に身を委ねている暇はなかった。胸の中で湧き上がる何かの激情が爆発して、震える二ナの膝を一気に押し出した。

人影を見た チームの反応は早かった。合成音声告げる避難路封鎖のアナウンスを耳にしながら一人の兵士が油圧の音のする方向へと視線を送る、一階部分の掃討があらかた終わった状態では突当りにあるそれを使う事はあるまいと思つたのだが念の為に確認を

しようとした矢先に、そこへ目がけて走り込もうとする女性の姿を目にした。

慌てて銃を振り上げてその足を止めようとする兵士、だがそれは今し方逃げようとした女性に止めを刺してゆっくりと戻って来る男の為に発砲が遅れた。

銃を向けられた男はその状況で自分の背後に何かがある事を悟る、奥まで調べなかった事を悔やむ舌打ちをしながら血糊の付いた床に突っ伏す男。クリアになった廊下の先を走る女性の姿目がけて銃を構えた兵士が発砲した。フルオートで吐き出される小さな鉛が穿つ弾痕が秒を待たずに女性の後を追う、だがその女性が廊下を渡り切った瞬間に兵士は自分の目的が達成できなかった事を理解した。角度の変わった弾丸が鈍い火花を放って跳弾する。

仕留めそこなつた猟師はマシンガンを構えたまま小走りに突き当たりへと走る、辿り着いた時に目にした物はもう人が通れる程の間が無くなって、尚も完全閉鎖へと向かう扉の存在だった。取り逃がした事に臍をかんだ男が悔し紛れに隙間に向かって銃弾を放つ、マガジンの半分ほどの弾を隙間から叩き込んだ瞬間に重い音を立てて退避壕は閉鎖された。

二ナの背後で弾ける火花、耳元でなる蜂の羽音は扉の隙間から撃ちこまれた銃弾が跳弾となって至近を通過する音。尚も通路の中を暴れまわる鉛玉は二ナの先にある空間をフラッシュバックで染め上げて再び闇の中へと消えていく。

どこか遠くで何かが割れる音がする。人が三人並んで通れるほどの通路が再び暗闇で包まれ、油圧ポンプの作動音が停止した事を確認した二ナが思わずその場にへなへたと座り込んだ。

非常灯が点灯して通路全体を赤く染める、座り込んだままの二ナは自分を取り巻く赤の世界とさつき目にした女性の身体から流れ出る赤を重ね合わせて思わず膝を抱えて震えた。その世界に一人残された自分が感じる大きな孤独と押し寄せる不安、幾つもの命が消え

去つて行く事に対する恐怖と理不尽が二ナの思考から理性を奪い去つて行く。

子供の様に。二ナはまるで遠い昔に両親から一人ぼっちにされた些細な日常に埋没する、泣きながら両親を探して家の中を歩き回る幼子の自分、見知つた筈の我が家がどこか知らない場所の景色に思えて自分の不安を増幅させたあの日の心境。

それは大人になつた今となつては他愛も無い事だと気づくのだが、それしか世界を持たない自分にとって世界の全てから拒絶される様な感覚には耐えられないのだと思う。そしてその時と同じ世界と同じ環境が現実となつて今の自分を取り巻いている。

カタカタと歯を鳴らしながらじつとその場で理性を取り戻す為の時間を稼ぐ二ナ、論理的に物事を構築しながら自分が次に為すべき事を模索しようとする二ナの耳に、鉄の扉の向こうから連続する打撃音が飛びこんで来た。

「………… やはり小火器程度では駄目か。」

扉の前で硝煙の棚引く小銃を手にしたままブージャム5は呟いた。逃げ込んだ女性と自分達を隔てるその鋼鉄の扉の材質が何であるのかは分からないが、少なくとも個人が携行出来る弾頭の類では破壊出来ない代物である事が分かる。試しにフルオートで撃つて様子を見たブージャム5の目に齎された結果は扉に張り付いたまま潰れている弾頭の残骸だつた。

「おい、誰か『粘土』<sup>c4</sup>持つてるか？ あつたらそれを全部隙間に詰めて爆破しろ、こじ開けてでもさっきの女を仕留めるぞ。」

5がそう言うのと最後尾にいた小柄な男が背中に背負つたフィールドバックからオフホワイトの塊を二個取り出した。コンポジション4プラスティック爆薬は3・5キロで200ミリの鉄の柱を破壊する能力がある、2キロも有ればこの鉄の扉を破壊するには十分だろう。

「分隊長、そこまでしなくてもいいんじゃないですか？ たつた一

人逃がした所でこちらに危険がある訳じゃない、どうせ逃げ出した先で死体の山を目にするのが関の山ですよ？」

「1から女は特に念入りに殺せと言われたを聞いてなかったのか？俺達の目的は最終的には対象の殺害だ、もし取り逃がしたのがそのたつた一人の対象だつたとしたら後で目も当てられない事になるぞ？」

5の台詞は脅しではない。もし自分達が対象を取り逃がしたと言う事を1に知られたら彼の怒りの捌け口はそのまま自分達に向けられるだろう。それがどう言う意味を持つのかと言う事を理解し、脳裏にその時の光景を思い浮かべた兵士がぶるつと震えた。既に設置が始まっている爆薬の雷管をひつたくる様に取り上げるとさも自分の罪が軽くなる様に祈るかの如く次々に表面へと差し込み始めた。

虚ろな表情を浮かべながら赤い世界に立ちあがる二ナ、これからどうするのかどうすればいいのか考えが纏まっている訳ではない。ほんの一瞬前に起こった信じられない現実とその理由に何度言及しても回答の出ない思考の迷路を心の中で繰り返し反芻しながら、それでも壁一枚隔てた先に残っているであろう死の回廊から一歩でも遠ざかるべく通路の先へと足を向けた。

履いたパンプスが鉛の様に重い、膝が笑ったまま挫けそうになる。不規則に揺れる視線の先にある何処までも赤い通路を、二ナの足は進む事を選択した。

分厚い扉を叩く小さな音から逃れる様に頼りない歩調の足はそれでも有りつ丈の力を振り絞って交互に動く。何故そんな事が出来るのか、と二ナは自分自身に無意識に選択したその行為の意味を問いかけた。ほんのちよつと前まで平和な眠りに付いていたオークリーに訪れた惨劇、目の前に突き付けられた意味の無い死、そして死を恐れて逃げ出した自分の行動の是非。

何度も何度も。死にかけた事はこれが初めてではない、そして一度は死を選ぼうとした事もある。そうだ、私はあの時死のうと思っ

ていた筈なのに。

アイランド・イズが到着した事によって地球の大気圏はまるで宝石の様な輝きを漆黒の宇宙に解き放った。救助された艦の艦長

もう名前も忘れてしまった　　は男達の魂の輝きなどと

私的な表現でそれを表現したが私にはそうは見えない、もしコウがその輝きに巻き込まれて命を落としてしまったと言うのなら私はその輝きの中で死にたいと確かにそう願ったのだ。ルセットと最期に交わした約束を守ると言う事よりも、私自身のささやかな未来の希望さえもが閉ざされるその世界に生きる価値を見いだせないと思っただから。

私が生きる理由、それはコウがいたからだ。

コウが生きていた事を知った私は全てを捨てて彼を追った、過去を捨てて未来に賭けた。例えばどんなに曲がりくねった山道でも構わない、私が彼を支えて杖となり、私が彼を繋ぎ止めて柵となり。彼の生きた証が即ち私自身の幸せ、そして二人が犯してしまった罪の償いになると信じた。

そして私は全てを失った。私が望んだ小さな希望は大きな絶望に変わって私自身を裁いたのだ。もう二度とコウと私が笑い、語らい、愛を確かめ合う事はない。それは私が目を閉じ、耳を塞いで知る事を躊躇った、私自身が彼の為に選んだ道の筈。

なのになぜ、一人で罪を贖わなければならない筈の私は死を恐れている？　生きる意味も何もかも、大事な物は全てなくなってしまうと言っのに。

なぜ歩くの？　二ナ・パープルトン。

地平線から叫び声が轟く、穏遁とした六月の月闇は産声を上げた人の光から逃れる様に、天空に瞬く数多の星星を宇宙高く引き留めた。目に輝きは見えねどもコウの耳には警報の咆哮が最期を迎えようとする断末魔の悲鳴の様に聞こえる。心の何処かで嘘偽りであった欲しいと願って止まなかった『デープ・スロート』の予言は神

から与えられた託宣に似た未来の光景だったのだとコウの心に教えた。

そこから始まる紡ぎ糸の切れ端は悲劇と言う名の糸車に巻き取られて終わるまで止まらない。耳を塞いで目を閉じる、そうする事で全てから逃れる事が出来るのならばそうする、だが夜空に疵を点ける探哨灯と地平の上で泣き叫ぶサイレンはそうはさせじとコウの耳と目をコウの手から取り上げた。

逃れる様に頭を垂れて暗い床をただ見つめる、それでも尚且つ何かの機械的トラブルと言う現実にあり得るエラーに僅かな望みを託すコウ、祈りをささげるコウ。

やめてくれ、と。

これ以上俺から何も奪うな、失うだけでは足りないのか、戦場と言う名の修羅場で多くの命と未来を轢き潰した俺の罪は全てを失っただけでは足りないのか。彼らと同じ場所に召される事を闇の中から這い出した彼らの手が求める、このまま為す術も無く俺は全てを失って。

『全て』…… 違う、まだ残っている、辛うじて。

自分の手から遠く離れた所にある、自分の半身と信じた物。

まだ、ある。だけど。

天窓から差し込む月明かりが遠くの地平で巻き起こる遠雷に揺らめく、大気を震わす砲声はコウの頭を驚掴みにして無理やり持ち上げた。終わりの始まり、それが意味する物の恐怖でコウの胸は掻き集められる。心の中に閉じ込めていた宝箱の蓋が壊れて大事な物が零れていく、宝石のように弾けていく思い出と言う名の記憶は掻き集めようと翳すコウの掌を滑り落ちて、その形すらも失って。

膝に置かれた両手が震える。

恐怖か、 ちがう。後悔か、 それも違う。

心の中で沸き起こる激情が全身を駆け巡って、しかし出口の見えないジレンマがコウの身体を火照らせる。放っておけば自分の身体は内部から焼き尽くされて炭になって



いや、いつそそうなつてしまいたい。灰になつて吹く風に紛れて  
跡形も無くなる存在、もし自分にそうする事が許されるとしたなら  
絶対にその道を選ぶ。ここでこのまま全てが消えてしまふと言うの  
なら自分の記憶も思い出も自分と共に無くなつてしまえばいい。人  
生はやり直す事など出来ないのだから。

見開いたままの目に映る世界の全てが欺瞞に満ちた虚構であると  
形などに意味はない、光のスペクトルの加減によつて色となり物と  
なる。しかし目に見える物は理屈によつてそう見えるだけであつて  
本当はそうじゃないのかも知れない、定義と簡便に基づいて規定さ  
れた嘘つぱちの世界に生き続けて何になる？

人との繋がり、縁？ そんな物は自分の思い込みとそうであつて  
欲しいと言う利己的な願望によつて生み出される幻想だ、そんな物  
に縋つて生きなければ未来が繋がらないと言うのであれば人生に大  
した意味はない。

頭の芯を氷の様に冷やす自己否定、存在意義を蹂躪する未来への  
決別。自分がここで手を拱こまねいてじつとしているだけでそれは成し遂  
げられる。『デープ・スロート』が予言した通り、全てが終わつ  
て朝日が顔を見せたその瞬間に。

思わず握る拳に月の光が舞い散る。

ではこの力は何なのだ、この痛みは何なのだ、この込み上げて来  
る怒りは何なのだ！？ 人を救つた俺の手が今また光を求めて彷徨  
う、どうして忘れたあの日の輪郭をなぞろうとする？

何故俺は、ここにいる！？

微かな音だつた。

何度も何度もループする問答の合間に届くその音がコウの意識を  
闇の底から引き上げた。見開いたまま焦点を失っていた黒い瞳が月  
明かりの下を、音の在り処を求めて浮遊する。そしてその音の出所  
を突き止めた時、コウの目は現実と言う名の世界へと浮上した。

小さな黒い影が扉の内側をカリカリと引つ掻く、エボニーの爪が奏でるその音がコウに向かってあの日の記憶を叩きつける。

扉を開けた先に佇んでいた二ナの驚いた顔、偶然の邂逅に高鳴ったあの心臓の鼓動は紛れもない真実、そして彼は二ナの事を昔から見知っていた身内の様な態度で歓迎した。彼女の足に擦り寄ってコウの世界へと導いた水先案内人は確かにあの時、コウと二ナの心を結びつけた。弾けて切れた運命の糸が継ぎ目も見えないほど完全な形で、あり得ない筈の可能性を彼はその行動でやり遂げたのだ。

やっとの思いで握り絞めたたった一つのその思い出がコウの頭の中に巢食った氷柱を溶かして消した。うねりを増した激情はコウの足に発露を求める、弾ける様にベットから立ち上がるその足

そしてコウの心に葛藤すら存在する事は許されなかった。

まなじり  
眦を結して天を仰ぐコウの目には嘗て失われた光が舞い降りる、それは三年前に彼ガトーによって聖なる山へと持ち去られてしまった戦士の証。

些細な切っ掛け、だがコウが知るには十分過ぎるほどの断章。

理由など無い、意味も無い。ただそうしたいと欲するのだ。迷いなく、疑う事も無くただひたすらにあの透き通った蒼い瞳を、柔らかな金色の髪を、艶やかな唇を。

未だに愛するただ一人の二ナ・パープルトンと言う名の掛け替えの無いその全てを。

取り返せ、コウ・ウラキ。お前の全てを捨ててでも。

例えお前の命を引き換えにしてしまったとしても。

「……ありがとう、エボニー。」

コウはドアに爪を立て続けるエボニーを背後から静かに抱きあげるとそつと頭を撫でて言った。作業を中断されたエボニーはコウの腕の中で身動きをしながらコウの顔を金の瞳でじつと見上げる。コウの手がエボニーの頭を撫でる度にエボニーの金の瞳は気持ち良さそうに閉じられて喉を鳴らした。

コウがエボニーを床に下ろすと、彼は真つ直ぐベットに近づいてコウの枕に飛び乗った。踵を返したコウが水屋からエボニーの餌を餌箱に注ぐ、封を開けたまま袋を床に置くとコウは枕の上でじつとその光景を見守るエボニーに向かつて言った。

「いいかい、エボニー。もしかしたら俺はもうここには二度と帰って来れないかも知れない、もし帰って来れなかったら、入り口のドアは開けておくからお前はここを出るんだ。……大丈夫、お前は器量がいいから直ぐに誰かが拾って」

黒猫は小さな声で鳴いて抗議する。切々と語りかけていたコウの声が途切れて、普段は滅多な事では鳴かない同居人の顔を見る、黒眼で埋め尽くされたエボニーの目がコウの瞳をじつと見る、語りかける。

ここで待つてる、と。

寸暇の前に心で誓った決死の覚悟に水を差すエボニーの瞳は、彼らしいひた向きな目でコウの顔を睨んでいる。小さな獣が放つ瞳の恫喝に怯んだコウはその意思を理解しながらも、頑なな抗議に小さく頭を振って立ち上がった。

本当は自分のその思いすらも自分の勝手な思い込みに過ぎないのかもしれない、だがそれでもいいと思った。彼がここで帰りを待つと言つのなら自分は彼の為にここに戻らなくてはならない。

まだ、生きなくてはならないのだ、二ナをこの手に取り戻して。

枕に座ったままのエボニーの頭上をコウの手が奔る、ベッドの柱に引つ掛けてあるボブスターのゴーグルを絡めてある鍵ごと取り上げる、その軌跡を首を回して追いかけるエボニーがやっと満足した様に枕の上で身体を丸めた。コウがその姿を微笑みながら見下ろす、じつと見上げるエボニーが一つ鼻を鳴らして伸ばした足に頭を預けて目を閉じた。

踵を返して月明かりを目指しコウは走った。扉を開け放ち、勢い良く飛び出した屋外には今までとは違う蒼い光が満ちている。

暗い小屋の中で小さく灯る赤い光、フロント前面を覆う巨大なスピードメーターの上部にあるランプが点灯してイグニッションに通電した事を示す、コウは右手のボタンを強く押しして獣の心臓に火を入れた。

唸りを上げる1100CC、L型二気筒のエンジンは嘗て世界にその名を轟かせたドウカティという名門がこの世に送り出した究極後方で持ち上げられた二本のエキゾーストから吐き出されるデスマサウンドは淀む事無く同調して、その獣の獰猛な魂が未だこの世に健在である事をコウに教える。

コウの左足がペダルを踏む、消えるニュートラル、動くリンケージ、繋がるシフト。

尻に伝わる小さなショックを確認したコウの右手がアクセルを引き絞る、生まれ出ずる膨大なトルクを受け止める湿式クラッチは僅かに繋がっただけで200キロのマシンを暗い小屋の中から一気に外へと弾き出した。

大地を蹴るトレッド、履き換えたミシユラント63は砂漠を何度も駆け抜けたその走破性をコウの為に解き放つ、最大出力95馬力のマシンの挙動をマルゾッキの力を借りて弧を描きながらコウの願った場所へとフロントを導いた。

畦道の土を蹴立てて巻きあげるリアタイヤ、月明かりに浮かぶ野獣の航走、目指すはオークリーへと続く一本道。

狂った遠近法の頂点の果てに輝く地平線、それはオークリーが放つ魂の輝き。自分が在役した時にも行われた事の無い夜間照明の全力照射はその事実だけでも現在の基地周辺に只ならぬ事態が巻き起こっている事を証明する。

矢も盾もたまらずトップギアでアクセルを限界まで引き絞るコウの右腕、臃げな夜景はコウの両側で色となり、足元で唸りを上げるエンジンの轟音はエキゾーストから吐き出されて霧となる。十分に整備のされていないでこぼこのアスファルトを、たった一本のオー

リンズの減衰力が余す所無くリアタイヤを回して摩擦係数が許す限りのパワーでコウを押し出す。

デジタルメーターは200を超えたあたりで目まぐるしく数値を変え、それがこのコンポーネントに許された限界速度だと分かっている。でもコウは心の中で愛機に向かって鞭を飛ばす。

フルバーニアンはもっと速かった、デンドロビウムはもっとだつ！ 早く、もっと早く、一刻も早くっ！ 間にあわなかったでは済まされない、コンペイ島の二の舞だけはごめんだっ！

泡立つ様な感情と過去の光景が交差してコウの焦りを後押しする。吹き出しつつあるアドレナリンに反応して鎌首を擡げるあの感覚も、スローモーションになりつつある世界も今のコウを支配する事は叶わない。数多の敵を虐げて戦場に君臨した伝説の撃墜王は、研ぎ澄まされて行く感覚と取り戻しつつある能力をフルに使って手の中で踊る鉄騎を操っている。体内で牙を研ぎながら再び浮上の機会を伺っていた後天的酵素群はその能力を発揮しながらもコウの意思に怯えたかの様に頭を竦めて、呆れた様にその超人的な機能の一部分だけを宿主の為に差し出した。

路面を弾ける小石の音が、シールドに阻まれてコウの身体の周囲を駆け抜けていく空気の流れまでもが甘美な音曲と化して背後の陰へと消えていく。オークリーに届くまでの12分間に流れるその音色が終わった時、コウが知るのにはマラーかそれともワグナーか希望と絶望の狭間で揺れ動く未見の未来にコウの心はざわめき、そして絶る様に祈り続ける。流れ行く時の中をひた走りながらコウの脳裏に浮かぶ二ナとの過去、そしてまるで空気の爪に？がれる様に剥がれて行く心の鎧、重く湿った音を立てて轟音と共に消えていくおもっ錘の後に浮き上がる無垢な感情。

愛しているんだ、今も、二ナっ！

オークリーを後にして行く宛ての無い荒野を彷徨いながら、星空を仰いで豺狼さいろうの嘆きを掲げたあの時でさえも。

焼けつく様な日差しの中で呪われた腕を振りながら新たな命を育

もうとしたあの時でさえも。

実りの音が流れる金色の大地に立ち尽くして、その音に耳を傾けていたあの時でさえも。

偶然に出会ったあの小屋の中で君を拒んだあの時ですらも！

忘れようとして忘れる事の出来なかった君の面影を追い掛けて。

諦めようとして諦めきれなかった君の声を思い出して。俺は今日まで生きて来た。

だからもう、これ以上失えない。同じ物を取り戻す事など不可能なのかもしれない、だがそれでも。

君が、生きてさえいてくれれば。

君が、ただ傍にいてさえくれれば。

拒まれてもいい、嫌われてもいい。それでも俺はそこに行く。

君の命がここで消えてしまおうと言うのなら、俺の明日に意味は無いんだ、二ナっ！

誰もいない避難用通路を歩いた末に辿り着いた出口に立ち塞がる鉄の扉、非常用の照明で赤く染まった空間の中で虚ろに動く二ナの目は傍らの壁面にあるロック解除の為にテンキーを見つめていた。

敵の襲撃に備えて作られた退避壕兼用の通路である為に鍵は指令室からの遠隔操作か、若しくは何らかのトラブルが発生した時の為に内部から開く様に出来ている。だがこの通路が設置されて以来一度もそんな目的に使用されなかった。年に一度の避難訓練に於いても、為にその暗証番号を知る者はいない。この基地のシステムを改良し続けていた二ナにとってもまさか自分がこの通路を使う羽目になるとは思わなかった。

だがこういう物には抜け道があるのだ、と二ナの頭脳は記憶の彼方に霞むうる覚えの知識を掘り返して暗証番号解読の手順に移った。テンキーの傍には暗証番号変換用に使われるUSBスロットが設置されている、プログラムの乱数によって不規則に決定される番号を端末から送り込む為のシステムは誰かが不用意に番号を変更しない

為に作られた安全装置である。二ナはそのスロットを見つけると腰のポケットに手を廻した。

取り出された物は小さく纏められたケーブルだった。狭いモバイルスーツのコクピット内で作業をする時に髪を束ねる為のUSBケーブルがこんな時に役に立つなんて、と惚けた感慨に耽りながら二ナはラップトップの電源を入れてそのコードを繋いだ。

液晶に表示される画面にはその小さなシステムが暗証番号の変更を求めるコマンドが表示される、だがモバイルスーツの複雑なシステムを独力で組み上げる二ナにとってその程度のセキュリティを改ざんする事など赤子の手を捻る様な物だ。おまけに二ナのラップトップには小さいながらも自室にあったデスクトップと同じ機能が移植されている。

キーボードにコマンドを入力していても簡単にシステムへの侵入を果たした二ナはすぐさま現在の暗証番号を開示するようにシステムに命じた。電算室のメインサーバを介さない、独自の機能を持つ脆弱なそのシステムはあつという間に二ナの軍門の下って秘匿されるべき暗証番号をラップトップの液晶に表示する。

二ナの目がそれを何度も確認しながら震える指でテンキーを押す、表示された六桁の数字を全て入力し終わった時点で二ナの指は一際大きなボタンを押した。

再び油圧の音が壁面の奥から響いて目の前の扉がゆっくりと開き始める。闇に目が慣れた二ナの瞳に差し込む室内灯の光、自分の身が地獄を具現化した様なあの場所から遠く離れた所に辿りつけた事を実感して、扉が開き切るのももどかしく明かりの下へと滑りだす。

ピシヤリ、と言う湿った音が足元で響いた。

自分の居室があつた場所と同じ様な造りの廊下、そこは恐らく男性士官の宿舎に間違いない。以前はコウに会う為に何度も行き来した場所を見間違える事は無い、だが。

修羅の通り過ぎた戦禍の跡、横たわる贄の群れ、満たされる血泥、漂う鉄臭。

知ってる顔だ、知ってる顔だ、知ってる顔だつ！

二ナの心が絶望の叫びを上げる、何度も何度も繰り返すその音声に塗れて二ナの目は瞬きを忘れた。焼き付けられる死の惨劇、昨日まで仲間だった者達の末期の姿。幾重にも重なって、幾重にも重なってそれらは二ナに刻みつける、理不尽に与えられた生奪の事実だけを。

光を失った目が宙を睨んで訴える。今わの際に唱えた祈りは何だったのか、半開きになった口から滴り落ちる鮮血の滴。光を永久に失ったガラス玉がただ一人地獄の真つただ中に飛び出した二ナに向けられて、生者に対する恨みを無言で表す。

死に対する恐れ、それとも畏れなのか二ナの足は後ずさった。心を埋め尽くす暗闇と生まれ始める空白の輝き、鬨ぎ合う二つのモノクロームは境目で混じり合って二ナの鼓動を大きく揺さぶる。カタカタと震える全身でそのなれの果てにある何かを拒みながら、目を逸らす事の出来ないその光景から自分の身を遠ざけたその時。

突然、トンネルの奥から耳を劈く爆音が轟く、リノリュームの床を染める血溜りが震えて流れる、突風が二ナの目の前を駆け抜ける。目に見えない壁が二ナの前に押し寄せて、躊躇いの枷に囚われたままの彼女の身体を軽々と吹き飛ばした。

閉じられた鉄の扉をこじ開けるにはそのC-4の量はあまりに多すぎた。仕掛けた側の女性官舎の外壁に障を入れながら油圧装置ごと吹き飛ばしたその破壊力は何トンもの重さで立ち塞がっていた防護扉を吹き飛ばして通路の中へと押し込めた。圧縮された内部の空気が唯一つの出口を求めて反対側へと、内部構造を爆砕しながら突き進んで出口へと殺到する、二ナに叩きつけられた空気の壁はそれだけでは飽き足らず、士官宿舎の窓ガラスを残らず薙ぎ払って諸共に吹き飛ばす。打ち捨てられていた血も肉も瓦礫の塊と共に渾然となつて意識を失いかけた二ナの周囲へとばら撒かれた。

礫いしの囁きが辛うじて二ナの意識を繋ぎ止める、爆発の衝撃で全て



の明かりが途絶した通路の床に横たわって、重くなる瞼を意識する  
二ナ。命を諦めようとする闇の聲に耳を貸してその誘いに身を委ね  
ようかとさえ思わずにはいられない。

この目を閉じてしまえば。

この意識を閉じてしまえば。

足音がトンネルの中を木霊して二ナの耳まで届いて来る、このま  
ま虚ろな意識に身を委ねているだけできつと彼らが終わらせてくれ  
る、短いけれど苛酷であった私の半生を。

もう嫌だ。

もう疲れた。

楽しい事もいっぱいあった、でも辛い事はもつとたくさんあった。  
釣り合いの取れない私の記憶は常に私を苛み続けた。もう止めよう、  
そして眠ってしまおう。

ああ、覚めない眠りがこんなにも愛おしく、そして嬉しく感じる  
なんて。

閉じて行く瞼で閉ざされて行く景色の中にたった一つ残された小  
さな欠片、広がり始めた二ナの蒼がそれを捉えた瞬間に二ナの無意  
識はそれ以上の死への道程を否定した。

大きく見開かれた目の中に移ったプラスチックケース、それは  
所々欠けていて今の二ナのように傷だらけのまま。しかしその中に刻  
みこまれた生きて証は紛れも無く何物にも代えがたい、二ナが守ら  
なければならぬ物だった。

思わず目尻から涙が零れてすぐ傍にある床に落ちた。手の中に唯  
一つ残された彼の記憶さえも手放したまま死んでしまうのは悔し  
かった。そう思った瞬間に二ナの身体に力が湧き上がる。

震える手はそれを求めて差し伸ばされた。瓦礫の床を掻き分けて、  
飛び散る血泥を彷徨いながら。

指に触れたそのディスクは冷たい、だが二ナにはそのケースの中  
に収められた彼の記録が彼女に強く求めている様な気がした。

生きるんだ、ニナっ！

あの日のあの声でニナに向かってそう叫ぶコウの声を聞いたニナは、まるでその呼びかけに答える様にディスクをしっかりと握りしめた。

足が痛い、腕が痛い、体中の関節が錆ついた様に鈍い。  
だがまだ動ける。まだ走れる。

ディスクを手に握りしめたままで二ナは立ち上がった。さっきまであれほど焦がれていた無数の死の足音はすぐ間近に迫っている、二ナは直ぐ先の床に落ちていたラップトップを拾い上げると足を滑らせながら駆け出した。逃げ切れる自信なんか無い、生き残れる自信なんかもつと無い。

それでも少しでも前へ。  
生き足掻く為に、前へ。

猛烈な破壊力で通路の内壁を粉々に壊した事で チームの現場への到着は遅れた。足元に散らばった瓦礫に気を取られた彼らが二ナのいた場所に辿り着いた時には既に二ナの姿はそこには無い。不審に思った彼らが、ひよつとして爆発に巻き込まれた可能性も考慮に入れた事が二ナに逃走の猶予を与える結果となる。

彼らが二ナの遠ざかる足音に気付いたのは、二ナが長い廊下の角を曲がって下士官の宿舎に繋がる連絡通路へと差しかかった頃だった。まだ生き残っている明かりの下を懸命に走る二ナの姿を認めただ、<sup>それぞれ</sup>夫々が破壊された窓から銃口を突きだして一斉に掃射を始める、二ナの周囲のガラスの悉くが甲高い音を立てて打ち破られて破片が雨の様に注がれた。

「いやあっ！」

ラップトップで頭を押さえてガラスの五月雨を駆け抜ける二ナ、降り注ぐガラスの破片は容赦なく翳した二ナの手を傷付けて血を滲ませる。流れる血がブラウスを染め、稚拙な塗り絵を生み出しても果たして二ナの足が鈍る事は無かった。まるで野生の力モシカが逃げる様な速さで連絡通路の出口に差し掛かった二ナはそこから一気

に脇の階段を駆け上がった二階へと姿を消す。

当てが外れた チームの面々は小さく舌打ちをしながら一斉に駆け出した。もし連絡通路に脱出していれば遮蔽物の無い状態で十分に狙撃が可能だったのに、と。再び獲物を射程内に収めるべく殺戮者達は瓦礫と血に埋め尽くされた廊下を追い掛けた。

「 ハンプティ、お遊びは終わりだ。本隊は基地の敷地内に侵入する、直ちに目標を破壊せよ。」

無線機から流れ込んで来るダンプティの命令に一瞬どう答えようかと考えを巡らせるハンプティ、逡巡する理由は今現在置かれた状況による物だった。

擱坐したゲルググを吹き飛ばした後にハンガーから飛び出して来た三機のモビルスーツ、動きも編成も見事に訓練された小隊だとも目で分かる彼らに向かって砲撃を加えようとしたハンプティを押し留めたのは他ならぬ着弾観測の任を受けたラーズ1だ。

「待て、お前はここで本隊の援護をしる。あれは俺が相手をする。」  
ダンプティの命令とラーズ1の会話が混線してハンプティに届く、遮蔽物を利用して巧みに姿を隠しながら滑走路をつつ切ろうとする目的は唯一つ、基地を見下ろす高台に位置する砲台たる自分の破壊、どうやらさつき撃破したゲルググのパイロットは最期に敵ながら称賛に値する仕事をやってのけたのだと言わざるを得ない。

機動力に置いて鈍重を誇るこのガンタンクでは三機のモビルスーツを相手にして生き延びる事など不可能だ。故にガンタンクには常に着弾観測兼護衛のモビルスーツがセットで配置される決まりになっている。

ラーズ1の提案は本来ならば至極正しい、敵が砲台の破壊を目指すと言うのなら迎撃に護衛が出て行くのが当然の成り行きだ。だがハンプティにはダンプティによって与えられた極秘のもう一つの任務がある、この作戦が終了した時点で、手段を選ばずラーズ1を殺害すると言つ。

標的を手元から離す事はそれだけでも作戦の遂行を困難にする。ましてや相手は接近戦の達人だ、よほど巧妙に隙を突かない限り仕留める事は至難の業だ。

「 どうしたハンプティ。命令を復唱しろ。 」

優秀な砲撃手であるハンプティは常に冷静でどんな時でも機械の様に行動する、だがその一瞬だけは矛盾の自己解決の時間が必要になった。空白になった会話を不審に思ったダンプティの声音には微かな焦燥が見え隠れする。

無理も無い、これ程までに想定外の事態が頻発する作戦など今までに経験した事が無いのだから。

「 …… ハンプティ了解。直ちに予定の目標及び援護射撃に入る、十秒待て。 」

一度は砲身に装填した滑空弾を建造物破壊用の榴散弾に変えるまでの時間、AIに指示して手順を実行するハンプティの視界に自由の身になったラーズ1の背中が映る。黒い刀身の巨大なマチェットを抜きながらゆっくりと遠ざかる背中を眺めながら、それでも自分の選択に間違いは無いのだと自分に言い聞かせるハンプティ。

” 大丈夫だ、今日は穏やかないい夜だ。その気になれば離れた場所からでも簡単に仕留める事が出来る、さつきもそうやって上手くやったじゃないか。 ”

心の中でそう呟くハンプティの照準器に装填完了のランプが点灯する、ハンプティは尚も心の中で呟いた。

” それに敵と交戦してこの前の様に行動不能になつてくれればそれはそれで都合がいい。止まっただけならば目を瞑っても仕留められるぞ。 ”

レティクルのど真ん中に滑走路脇の照明塔を固定して引き金を引く、鈍い震動と発射音がハンプティの身体を襲った。

空中で散開した無数の鉄の球が仕込んであったキャニスターと共に探照灯の基部をめっちゃめっちゃに破壊する。ダルマ落としの様

トンとその高さを減らした鉄塔は東の間平衡を釣り合わせた後に音を立てて倒壊した。ガンタンクの肩から突き出した二本の加農砲が交互に吠えてオークリーから光を遠ざけて行く。侵食する暗闇が基地の全体を覆い尽くすまでに左程の時は掛からない、そしてその影響は地下に設置された変電所にも及んでいた。

突然の、そして大規模な送電停止を感知したA Iは逆起電力による重大な事故を懸念して

ある意味A Iの判断は正しい

一時的な主幹送電の遮断を決定した。送り込まれて来る大電流を堰き止めて基地機能維持の為の最低限の電力を蓄電池から供給する、一瞬の暗闇の後に再点灯する明かりは既に通常モードでは無く非常用に用いられる赤色灯火に変化した。

オークリーの滑走路を間近に望みながらその光景を眺めるダンプティ、突入のタイミングを計る彼の耳にベースキャンプからの通信が入ったのは遠くに望む建物の明かりの全てが血の様な赤に変化した時だった。

「ベースキャンプよりダンプティへ緊急連絡、サリナス周辺の大隊に動きが見られます。恐らく山の稜線に沿って洩れたオークリーの夜間照明の確認を急いでいる模様、回線に割り込みの許可を。」

「ダンプティ、了解。シナリオはどうなっている？」

「現在シナリオBを脚色して準備中、尚作戦開始の一時間ほど前にジャブローへのメインサーバーへの大規模なハッキングを確認。追跡の結果その内の一本がオークリーの付近で途絶えたそうです。」

オペレーターの報告を受けたダンプティの表情に余裕が生まれた。大隊がオークリーの異変を感知して展開を始めた事は予期するトラブルの中でも最悪の展開であり、作戦が失敗する十分な要因になりえる。だがその様な事実が確認されたとなればそれを理由に治安維持と言う建前が発生する。

「ダンプティからベースキャンプへ。シナリオBからFへの変更を

指示する。オークリー基地内部に不穏分子の存在を確認、彼らはジヤブローへのハッキングによって機密文章の閲覧・記録に成功した模様。重要機密の漏えいを阻止する為にティターンスの精鋭部隊が現在オークリーを制圧中と大隊に報告しろ、必要とあらばバスク・オム大佐の名前を使っても構わん。とにかく大隊の動きを朝までそこに引きとめる。」

「 ベースキャンプ、了解。 」

心の中で、よしと拳を握るダンプティ。取り合えず攻撃の為の大義名分が発生した事で大隊の偵察部隊がここにやって来る事は無いだろう、縦しんば到着したとしても彼らが目にする物は敵に対して圧倒的な物量で蹂躪する中隊の存在だけだ。それがバスク・オムの名前を掲げる部隊ならば余分な詮索を受ける事は無いし、受けたとしても大佐が何とかするだろう。存在が知られた中隊の処遇がどうなるかは別にして。

「 お見事です中佐。これで当面の間作戦に水を差される心配はない。 」

通信機からト ヴーの安心した声が聞える、彼にしてみれば自分の立てた水も漏らさぬ作戦が予期せぬ事態によって最悪の方向へと転がって行く過程にやきもきしていたのだろう。

「 まだ当面の障害が取り除かれただけだ、以前事態は予定外の状態だ。気を抜くんじゃない。 」

ト ヴーの安堵に釘をさすダンプティ、くすりと忍び笑いを洩らしたト ヴーの声を聞きながら作戦を次の段階に移行すべくヘッドセットのマイクに指示を飛ばした。

「 作戦をフェイズ3に移行、各隊は予定通りのフォーメーションで基地敷地内に侵攻。タリホー隊は先行してハンガーを制圧しろ、目標の確保が最優先だ。 」

そう、この作戦の肝はそこにある。ブージャムが口頭で受けたと予想される目標の殺害をダンプティはケルヒヤー以外のモビルスーツ隊の誰にも伝えてはいない、つまり先鋒を務めるタリホーら新規

参入の四人は愚直にその指示を守って彼女の身柄を保護するだろう。ハンガーを制圧するのはオークリーに於ける彼女の役割がモビルスーツに関わっている為に、有事の際には必ずそこに現れるだろうと言っ予想からの指示であった。

民間人からわざわざ軍属になつてまでモビルスーツに関わろうとした人物だ、恐らくそこ以外に彼女が目指す場所は、無い。

とはいえそれは大きな賭けだった。もしハンガーに辿り着くまでに彼女がブージャムの毒牙に掛かってしまったならば二人だけが知るこの計画はご破算だ、だがそうなれば自分とケルヒヤーは部隊からの脱出を諦めてオークリーを完膚なきまでに叩きのめすしかない。次の脱出の機会がいつ巡つて来るかは分からないが、彼らの最終的な目標を達成する為に可哀そうな生贄には役立つて貰う。

『操りし者共』の尻尾の先を自分達が掴み取るその日まで。

ダンプティの脇を四機の夜戦用ジムが通り過ぎる、ダンプティはその姿をモニターで確認しながら次の指示を遠く離れた背後でオークリーを睥睨するハンプティに次の指示を出した。

「ダンプティからハンプティ、オークリー敷地内の照明は沈黙した。予定通り本隊侵攻の為の援護射撃に切り替える、目標は管理棟指令セクション他それに類する施設棟。クラスターの使用を許可する

…… 派手にやるのはいいが、味方に当てるな？」

「ハンプティ、了解。」

地平線の光が消えていく、断続的に発生する砲撃音と共に発生したその変化はコウの目と耳を通り抜けて脳裏に可能性を囁きかける。本格的な攻勢が始まった事を示すその事実。コウの心に焦りを生んで意識を負の世界へと駆り立てる、心に灯る最悪の可能性を払拭する為に尚も愛機に鞭を入れる湧き立つ様な感情がコウの身体を支配する。

しかしその時、コウの目に移り込んだ物は暗闇にならなければはつきりと捉える事の出来ない、点滅する赤い輝きだった。



「！ 検問！？」

小さく叫んだコウがアクセルを一気に戻して両手のレバーを握る、全開走行によるエンジンの過熱を冷却するラジエーターの熱がコウの足元に不愉快な熱を纏わり着かせる、コウの目に映ったその赤い光は確かに地元警察による検問の証だった。予算が無いとは言え犯罪者を追跡するには十分な能力を持つパトカーが二台、オークリーへと繋がる唯一の舗装道路を封鎖する形でコウの行く手を遮っている。

恐らく彼らの位置からもコウのバイクのヘッドライトの明かりは見えていたのだろう、突然道路上で停止した暴走バイクの正体を確かめるべく彼らはライダーに対する職務質問を実施する決心を固める、サイレンの音と共に届く断続的な砲声を耳にしながらコウは二台のパトカーが自分の所へと到着するのを焦慮の思いで待った。

「申し訳ありません、ただいまこの道路は閉鎖中ですので。」

いかにもまだ配属されたばかりの雰囲気を漂わせる青年が折り目正しく制服を着込んで車から降りて来た。もう一人の警官は運転席に座ったままコウの姿をじっと睨んでいる、コウの場所からは死角になってはいるがハンドルの下に隠してある手には万が一の時に使用する飛び道具ライファットガンが握られているに違いない。

「軍からの申し出でオークリー基地周辺を通る幹線道路には通行止めの措置が取られてるんです、お急ぎの所を申し訳ありませんが早急の御用で無ければ夜明けを待つてお出かけになられた方が無難かと。」

「急いで叔母の家に行かなきゃならないんだ、この道を通ると丁度近道だね。…… 伯父が危篤なんだけど、何とかならないかい？」

嘘とでつち上げで固めた作り話を試しにぶつけてみる、エンジンを切らずにゴーグルを嵌めたまま いざという時の為に

言葉を発したコウに向かってその警官は本当に気の毒そうな表情を浮かべてコウの要求を退けた。

「申し訳ありません、ですがオークリー基地の向こう側へ回るのでしたら時間はかかりますがこのまま西に抜けて五号線ウエストサイドを南下すればロバートモナガン二百五号と合流します、あんまり道は良くありませんがその方が早いかも知れません。」

若い警官がコウの為に道を丁寧に説明する、その若者は恐らくコウのついた嘘を信じて、コウの置かれた状況を打開してあげようと何とか別ルートを頭の中で検索したのだろう。

警官が提案したルートは確かにコウもよく知っている道で、そこはコロニー到着の余波を受けて一番めちゃくちゃに破壊された都市の廃墟の脇を抜ける別ルートだ。だがコウの脳裏にはそのルートを思い描くよりも真つ先に別の事実に気が付いていた。

暗闇の中をふつと西の空に目を向けるとそこには確かにあのオベリスクがある。もうこんなとこまで来ていたのか、と言う事は。

「分かった、この道を西に向かえばいいんだね？」

コウはにっこりと笑ってそう尋ねると警官は自分の提案が受け入れられた事を知って、やはり嬉しそうに笑顔を返して頷いた。

「はい、軍の接收地沿いのこの道を真つ直ぐ抜けると突き当たりが五号線です。お急ぎの所を申し訳ありませんがご協力を。」

何度も繰り返し謝る所に彼の人柄が偲ばれる、コウは警官の言葉葉を右手を差し出しながら遮った。

「分かってる、仕事なものね。……じゃあ、先を急ぐんで。」

握手を解いて再びハンドルを握るコウ、今度は慎重にクラッチを繋いでゆっくりと舐先を西へと向ける。バックミラーに映る赤色灯が再び元の位置にターンをするのを確認してからコウの右手は再びグリップを最後まで引き絞った。

貴重な時間が無為に失われてしまった、こうしている間にも傭兵部隊は二十の命に迫っているのだろう。焦る脳裏に一瞬『突破』の二文字が浮かび上がったのはコウの心情を察するに当然の帰結ではあった。

だがコウは敢えてその時間を失わなければならなかった。もしここで自分が検問を突破すれば何の罪もない警官達を引き連れてオークリーへと凱旋する事になるだろう、逃げ切れる自信が無い訳では無く彼らを引き離すだけの力と能力はこのマシンにも今の自分にも十分に備わっている。だがそれ故に職務に忠実な警官達はコウの後を追いかけて傭兵部隊の作戦区域に侵入する事を躊躇わないだろう、そうなってしまうれば彼らの命運は傭兵部隊の良識如何に委ねられる。良識などと言う物が作戦遂行中の兵士に残っていればの話だが。

コウの右側を鏑ついたフェンスが音を立てて流れる、再び全開で地面を蹴立てるドウカテイの向かう先はもうほんの目と鼻の先に存在する。そこを目指してコウは、恐らくもつと失ってしまうであろう時間の間二ナの命に猶予が与えられる事を神に祈った。

あの警官が提示した順路を使ってもオークリーには届かない。基地周辺の何十キロ半径の圏内は間違いなく官憲の手によって封鎖されている、整備された幹線道を使う限りは同じ事の繰り返しを何度も続ける事になる。

だが彼らが予想もしないオークリーに到達する唯一つ残された道、その入口がこの先にある。

ヘンケンから聞いていたオークリーへの近道。軍の演習地であるが故に進入禁止を謳われているその一本道をコウは使わざるを得ない、但しその道は砂と砂利が混在するダート以下の代物だ。安定のいい四輪駆動ならともかく自分のバイクでそこを駆け抜ける事が出来るのか？

ハイビームで照らす闇の先に見えるフェンスの切れ間、閉じられる事の無い金網の門を目にするコウに迷っている暇はない。あつという間に到達したその門に向かってコウは身体を傾けた。バイクの重心が右に動いて進路が変わる、舗装路を駆け抜けた勢いのままコウのバイクは荒れ地グラベルへと踏み込んだ。

突然のμマイクロの変化に空回りする駆動輪、炸裂する横Gで吹き飛んで行きそうな車体を両膝の力とカウンターで捻じ伏せながらコウは月

夜に屹立するオベリスクの根元を睨みつけた。

闇雲に建物の中を駆け抜けた二ナには自分の今いる場所が分からない、自分に向けられる銃撃を逃れて階段を駆け上がった二ナは通路の壁面が指し示すままにひたすらに走った。床に流れる血溜りに足を取られ、転がる瓦礫に蹴躓いても彼女の意思は変わらない。二ナを駆り立てる生への執着はその手に握りしめられたコウのディスクが齎しているのかも知れない、と二ナは走りながら考えた。

命を諦め、未来を諦めようとした二ナの決意は唯の諦観である、とコウに叱られた様な気がしたのだ。

二ナはその正体が知りたかった。本能レベルで死を一旦は受け入れた自分の心境の劇的な変化、そしてこの両足を動かして逃れようとする力の正体を。

息が上がって苦しい、心臓は間もなく音を立てて破裂してしましそう。だがそれでも二ナの意思に微塵の揺らぎも無い、自分の命が運悪く途絶えてしまう最期の一瞬まで二ナは走り続けようと決心していた。辿り着いたその先にどんな結末が用意されているかは分からない、でも少なくとも自分が後悔しなければ与えられるその結果に満足できるのではないか、と信じる。

もう後悔だけはしたくない、後悔続きの私の生にたった一つ、そんな誇りがあってもいいではないか。

“だから生き足掻いてやる、残った力の全てを振り絞って。”

士官宿舎を逃走する二ナにとって唯一つ幸運だった点はその宿舎の掃討が チームによって終了していたと言う点だった。官舎内の生命反応の喪失を確認した チームはブージャム1の命令に従って既に現場を後にして集合地点へと向かっていた、ある意味無人の官舎内を上へ上へと逃げ続ける二ナを追う チームにしても どの連絡が取れない以上その官舎内の状況が分からない。特殊部隊特有の細胞単位による作戦の個別化と部隊長との交信以外、相互の情報共有を禁止するその常識が二ナに対する待ち伏せを防いでいる。

九十九折りに続く長い階段を必死に駆け上がる二ナには目的がある、それはこの建物から隣の下士官宿舎に伸びる連絡通路の存在だった。最上階にあるその通路を使って下士官の宿舎に駆け込めばその回廊を突き抜けた先には管理棟への連絡通路、そしてその先がハンガーになる。退避壕に逃げ込む前に耳にした使用可能な通路、管理棟A-2とハンガーH-1へはその道順で無ければ通る事が出来ない。

非常灯の赤い光に照らされて伸びる自分の影を踏む様に二ナが走る、腿の前が熱くなって脹脛はふひに痙攣けいれんの兆候を感じ始めた時に踏み込んだ五階の回廊の景色も今まで目にした景色と大差はない。唯一の違いは二ナがその光景に麻痺してしまったかのように動揺しなかった事だろうか？ 足元に広がる無残な結果を目にとめる事も無く二ナは一気に駆け抜けた、連絡通路と宿舎を隔てるドアまでもう一息っ！

まるで体当たりする様にドアへと身体をぶつけて突進力を押さえた二ナは握りしめていたラップトップを小脇に抱えてドアノブに手を掛ける。渾身の力を込めてそれを回した。

だがそれは二ナにとって予想外の結果を齎した、いつもは簡単に開く　　と言いか今まで開かなかった記憶が無い　　そのドアに鍵が掛かっている。まるでどんでん返しの様な展開に二ナの焦りは頂点に達する、何度も何度もガチャガチャと、何かの間違いだと言わんばかりにノブを回してドアに身体を押し当てる二ナ。しかし二ナのその努力を嘲笑う様に耳に届くけたたましい足音。次第に大きくなる死神の足音に思わず振り返って、自分の覚悟がこんな所で潰えてしまうのかと言う恐怖に押しつぶされそうになる。

「技術主任っ！　こっちっ、早くっ！」

その声は自分の真横に口を空けていた居室の中から響いて来た。驚いた二ナの手を掴んで引き摺りこむ声の主は入れ替わりに居室に置いてあったベッドをドアの外に押し出してライフルを片手に蔭へと身を潜めて笑いかけた。

「よかった、一人でも生きてたか。」

そう言いながら二ナに向かつて笑いかける兵士の顔を二ナが忘れる訳が無い。二ナの代わりに敵を迎え撃とうとしている彼は、コウがオークリーを離れた時の歩哨。そしてコウの退去を止める事が出来ずにキースの前で泣きじゃくった、あの。

「トンプソン曹長っ！」

トンプソンは二ナに自分の名前を叫ばれて、恥ずかしそうな笑みを浮かべながら二ナに向かつて頷いた。

「誰かがきつとここまで辿り着くかもと思って待ってたんだが

主任一人か？」

味方の存在がこれ程頼もしく思った事は無い、そう思うと二ナの身体に震えが戻って来た。安堵と入れ替わりに浮き上がる恐怖の記憶は二ナの身体に現れる変調だけでトンプソンに事実を伝える、トンプソンが地の底から湧き出る様な暗い声で言った。

「そうか……くそっ！ 管理棟からここに辿り着いたと思ったら途端に鍵が掛かりやがってこのザマだ、錆だらけだが無駄に経験値の高い陸戦隊も不意を突かれちゃどうしようもねえ。」

手にしたアサルトライフルをベットの端から突き出してまだ見ぬ敵目がけて狙いを定めるトンプソンが、左手で足元に転がった予備弾倉を立てて並べながら二ナに向かつて言った。

「主任は急いでハンガーに向かつてくれ。どうやらモビルスーツも出張って来てるらしい、さっきハンガーで盛大に爆音がしてたから多分何かのトラブルに見舞われている筈だ。ここでは主任に用事は無いがあっちには主任の力が必要だろう。ここは俺が喰いとめるから主任は先に向こうへ行ってくれ。」

「貴方一人じゃ無理よっ！ 相手は大勢、それも人殺しに何の遠慮も無い連中よ？ 貴方一人であんなのを相手にするなんて」

「ああ、無理無理。幾らなんでもそんな無鉄砲な事考えちゃ無い。ジョン・ランポ主任が逃げたら俺も後を追う、向こうに辿り着いたらこれで」

「

そう言つとトンプソンは小さなプラスチック状の塊を懐から取り出して二ナの前に差し出した。手で千切られて丸められたC-4には既に雷管が差し込まれてコードが繋がれている。

「連絡通路を爆破する、そうすりゃこれで当面は敵の侵攻を阻める。管理棟に行つて指令室を押さえてしまえばカリフォルニアに連絡して状況を説明出来るかも……」  
とにかく何にしてもここを抜け出すのが先決だ、いいかい主任？」

「でもどうやって？　ここは鍵が掛かつて開かないんでしょう？」

尚も尋ねる二ナの顔をじつと見やつてトンプソンが自分の腰に手を回す、その時トンプソンの耳に開放的な足音が飛びこんで来た。敵がどうやら追い付いて来た事を示すその音はトンプソンの指を無意識の内に動かす、三点バーストで吐き出される5・56ミリの被覆弾頭は小さな唸りを上げて敵の先頭の身体に鈍い音を立てて食い込んだ。被弾した隊員を慌てて羽交い絞めにして階段へと後ずさる敵の姿を目にしてトンプソンは再び動きの継続を図る。

頭を抱えてベットの蔭にしゃがみこんだ二ナに向かって突き出されたトンプソンの手には大ぶりの拳銃が握られていた。連邦軍の物ではないその拳銃はパークライズのスライドにコルト社の刻印を刻んで、撃鉄を起こしたままセフティが掛けられている。

「これでロックを壊すんだ。連邦軍仕様のモンじゃないからちつとばっか反動がキツイがこれぐらいの金具なら一発でぶっ壊せる。さ、やってくれ。早くしないと奴らが体勢を立て直して」

トンプソンが全部を言う事は出来なかった。階段の蔭から何の前触れもなく始まる一斉射撃の音が二人の注意を引いて言葉を止めた。バリエード代わりのベットに食い込む銃弾は貫通力に乏しい9ミリである為にこの距離ではまだ貫通しない。嵩に掛かったトンプソンは再び階段目がけて撃ち返ししながら、射撃音に負けない大きな声で二ナに命令した。

「主任早くっ！　セフティを外してドアの継ぎ目に撃ちこめッ、俺もそんなに長くは持たねえぞっ！？」

必死の横顔を二ナに見せつけて応戦を続けるトンプソン、発言の是非を問うまでも無く二ナは拳銃のセフティを外して銃口を可能な限り留め金のある筈の隙間に押し当てた。冷たい感触の引き金を思いつき引く。

ドカンと言う爆音と共に吐き出されるマズルフラッシュ、捻じ込まれた45口径は有り余る力でロツクの鋼を吹き飛ばす。そして同時にその反動は二ナの身体も後ろへと弾き飛ばした。尻餅を着いて目を白黒させる二ナの目の前で、逃走路を封鎖していたドアはゆっくりと外へと開き始める。トンプソンがすぐ横で銃を掲げたまま呆然と座り込んでいる二ナから銃をそつと取り上げて、錨つたままの肩を気付けでもする様に軽くポンポンと叩いた。

「上出来だ主任。さ、先に行つてくれ、俺はあんたを援護する。」  
笑いながら空になったマガジンを落として次のマガジンを装填するトンプソンの顔を見る、掌で叩きこんだ瞬間に閉鎖するボルトの音を切つ掛けに二ナは通路へと足を踏み出す、横目でその後ろ姿を見ながら再び狙いを廊下の先に定める殿の兵士。

中空に連なる廊下を走りだす二ナの上空で響き渡る魔笛の群れ、降り注ぐ弾雨。

その光景は既に滑走路を渡り終えて対岸の小高い丘からもはつきりと見えた。緩やかにオークリーの上空へと到達した弾体が頭部のカウルをパーシして中から無数の爆弾をばら撒く、SODスタンドオフェイスペインサーと呼ばれるその筐体は箱の中に仕込まれた202発の子弾を存分に吐き出して、クラスターと呼ばれるその形式の爆弾が何故前世紀に禁止されたのかと言う理由を知らしめる。暗闇の中に突如として浮かび上がるオークリーの俯瞰図、しかしそれは今までに誰もが見知った穏やかな光景とは一線を画する世界の現出だった。

滑走路の居場所を示す青白い誘導灯の取って代わったのは無数の鬼火の群れ、地面で発火する子弹は対人・対装甲の為に仕込まれたからくりを周囲にばら撒いて付近一帯の障害物を爆砕する。



モビルスーツの部隊が投入される際に最も懸念される事は対装甲火器に武装された歩兵の存在である。戦場では無類の戦闘力を誇るモビルスーツが唯一示したアキレス腱、それは伏兵によるコクピットへの狙撃だった。脅威目標算定の為に照射するセンサーの類を掻い潜って足元へと肉薄する歩兵の火器に多くのモビルスーツが喰われた。地上を蹂躪された連邦軍が圧倒的不利を打開する為に生み出されたその戦法が実は意外に有効であると双方に認知されたのはオデッサでの戦いが終了した時点、そしてその状況に対応する為にモビルスーツが敵勢力範囲内に侵攻する場合には必ずと言っていいほど制圧射撃が行われると言う事が連邦・ジオン双方の戦術教本ドクトリンに書き加えられる事になる。

故に今日の前で起こっている事実は全く基本に従って行われている侵攻作戦の手順に過ぎない、遠距離射撃によって敵のそう言った対抗措置を悉く叩き潰して部隊の進路をクリアにする。だがそれによって生み出される光景は自分達の帰るべき基地ホームが瓦礫の世界へと変化していく過程である。

「畜生っ！ 俺達の家がっ！」

ふん、あの坊やの声か。と言う事はこちらに向かって来ているのが主力組と言う事になる

「マークス、アテリアと一緒に先に行け。俺はここでこれから基地内に侵入する敵を迎え撃つ。お前達はその間に敵の砲台と護衛のモビルスーツの所へ行け。」

「ええっ!？」

基本だな、一番実戦経験の豊富な兵士が敵の足止めをするのが直掩の常道だ。それにそこから迎え撃てると言う事は長距離攻撃が可能な装備を持っていると言う事か

「お前達二人だけで戦って来いって言う訳じゃない。俺はここで敷地内に侵入して来る敵戦力の規模を確かめる、あまり数が多いようなら俺がここで何機か潰してから合流する。お前達は俺が合流するまでに砲台の正確な位置と護衛の数を把握しておけ、絶対に相手に

気付かれない様にな。」

これも間違つてはいない。目標の敵戦力が分からない以上、先ず情報収集を優先しなければならぬ。どうやら敵の指揮官は相当地に慎重な性格の様だ、だがかなりの歴戦だ。生き残る術を心得ている。

「分かりました、これよりヴェスト軍曹、フォス伍長の両名は敵砲台の観測に向かいます。敵の位置を把握した時点でその場で待機、隊長の到着を待ちます。」

「いいだろう、山の稜線を楯にして平地を移動しろ。俺は別ルートで合流する、ポイントはあの」

どこだ

「丘の頂上直下だ。念を押しておくがくれぐれも俺が到着するまで動くなよ。この作戦は敵の砲台を潰す事が目的じゃない、あくまでも敵の背後を突いて挟み撃ちにする事なんだからな。」

無線機から流れて来る敵の指揮官の指示を耳にしたラーズ1が仄暗いコクピットの中で顔を歪めた。心の底から嘖き上げて来る悪鬼の哄笑を抑える為に関きかけた口を手で押さえる、少しでも声が漏れよう物ならその三人の会話を盗聴している事がばれてしまう。些細な物音も洩らさぬよう細心の注意を払って無線の周波数を元に戻しながらラーズ1は呟いた。

「なるほど、と言う事はあの二人だけになると言う事だ。」

思いも掛けない機会が巡って来た事に運命を感じる。ハンガーを飛び出して来た三機の機体の動きを目で追いながらまさかと思い、もしかしたらと思い。ダンプティから受領した命令の拡大解釈を利用してハンプティの元を離れた事がこんな幸運を俺に齎してくれるとはっ！

丘の稜線に身を潜めてラーズ1は人知れず忍び笑いを洩らす、探す必要など無い、ここでじっとしていれば奴らの方がわざわざ出向いてくれる。この前の続きをまさかこんな最高のシチュエーションで迎えられるとは神と言う奴もなかなか捨て難い。

同じ連邦軍の機体なら使う無線機と周波数は共通している。変換コードの解析をする事も無く、予め北米方面軍が使用する周波数帯で通信を傍受していたラーシーは二度と再び巡って来る事は無いだろうと思っていた奇跡を彼の為に用意した神の存在を称えた。何故なら。

この機を逃して他に、俺が背負わされた罪を償う機会は無い。もう俺に、次は無いのだ。

二人を送り出したキースが丘の上で匍匐したまま銃身の左右に収められている二脚バイポットを開いた。そつと地面に下ろして照準器のコードをリンクする、モニターに映る景色にはライフルのスコープから見える基地の様子が十分な明度を保持したまま映し出されていた。

スコープから取り込まれる光はジムの夜間モードで補正されて肉眼よりは遙かにはつきりと景色を捉える事が出来る、しかしその事がキースには果たして幸運だったのかどうか分からない。少なくとも長距離砲撃によって傷め付けられている基地の惨状を目にしてみよう事だ。

無数の漁火に煌めくオークリーは見るも無残な状態だった。敷地内の至る所の舗装がめくれ上がり、ありとあらゆる地上建造物が被弾している。対爆コンクリートで固められたハンガーだけはこの程度の爆発では小穴の一つも空く筈は無いだろうがそれ以外はまるで激戦の後の砦の様な有様だ。歴史の本で大昔に起こった戦争評価の写真を目にした事はあるが たしかアジアの小さな国だったか 最期まで彼らが立て籠った揚句に陥落した王城の姿にそっくりだ。

「……くそつ、またこんな目に遭うなんて！」

思わず毒吐いて表情を歪めるキース、この光景には憶えがある。

あの日のトリントン、そして俺の運命の始まり。

流れ弾が筈の様な尾を引いてキースの頭上を越えて行く。確たる目標の無い援護射撃は手当たり次第に施設を破壊して回る、その中

の一発が自分の宿舎と下士官の宿舎を繋ぐ空中回廊に命中して破裂した。崩落寸前の渡り廊下に目をやりながら小さく舌打ちをするキース。

その時、胸ポケットの奥で小さな音がしているのを、爆発音に埋め尽くされていたキースの聴覚は微かに捉える事に成功した。

周囲に降り注ぐ子弹の衝撃で揺れる廊下の床、駆け出した二ナは思わずバランスを崩した。窓の両脇に降り注ぐゴルフボール大の爆弾の霰は地面に落ちた瞬間に破裂して周囲の建物を基礎から揺さぶる、噴き上げる爆風で持ち上げられて落とされる廊下の上で二ナはたたらを踏んで辛うじて転げるのを堪えた。トンプソンが出来る限りの視界で周囲の状況を分析しながら、自分達を取り囲んだ爆発の起源を口にする。

「主任走れえつ、『スタインベック』だっ！」

クラスター爆弾を意味する隠語で叫んだトンプソンが開いたドアの蔭から二ナの背中を言葉で押す、その言葉の意味が分からない二ナにも回りに降り注いでいる物が何某かの破壊力を持つ爆弾である事は分かる。トンプソンの叫びを帆船の帆の様に背中で受けた二ナの身体が切迫する状況と恐怖に怯えて前方へと弾け飛ぶ、連絡通路の距離は二十メートルしか　もある。向こうの入口がこんなに小さく見えるなんて、自分はまだその半分にも届いていない。

間にあうか!?

一か八かの決断が両足に蓄積する乳酸の痛みを凌駕した。活動限界付近で駆動する二ナの両膝が全力で華奢な二ナの身体を押し出す、両腕を思いっきり振って腿を上げてスライドの距離を伸ばして時間を縮めて。疾行の為に必要な全ての要素を循環させて機能させる事に成功、後はこれをほんの僅かな時間堪えるだけだと二ナが思ったその瞬間。

突然背後の天井が轟音と共に裂けた。命中と同時に発火する爆薬が子弹の表面を粉碎して四方八方に撒き散らす、その勢いは二ナが

駆け抜けた連絡通路のトラス構造を豆腐でも切る様に破断した。目も眩む様な閃光と爆風が同時に二ナの背中に襲いかかって身体が宙に浮く、目の前に迫って来る床から目を背ける様に二ナは両手に抱えたディスクとラップトップを抱きしめて衝撃に備える。

ドスンと言う鈍い音と右肩に走る猛烈な痛み、床を滑った二ナの身体が一足飛びに下士官宿舎のドアへと叩きつけられた。勢い余って扉の内側へと雪崩れ込む二ナの身体が床の摩擦でやっと止まる、非常灯に照らされた廊下の上で身体をやっと起こした二ナは耳に届いて来る不気味な軋みに慌てて元来た方向を振り返った。開きっぱなしのドアに向こうに見える筈の景色が違つ、向こう側のドアが強度を失つて崩落寸前の通路の屋根によって遮られている。

「曹長っ！」

二ナが思わず壊れた橋の向こう側に一人取り残されてしまった殿に向かつて叫んだ。

「早くこつちへ、今ならまだ間に合うっ！」

その叫びの音量にすらも反応するかの様にぐらりと動く、逆さ向きの勝鬃橋の向こうでトンプソンの大声が答えた。声がした事に安堵し、その姿が今にも眼下にある裂け目の階に現れるかと信じていた二ナの未来はその言葉によって裏切られた。

「いけっ主任っ！俺の体重じゃこの通路はもう無理だ、俺がここで奴らを食い止めてる間にあんたはハンガーまで行くんだ！」

「諦めないでっ！貴方も一緒に逃げるんじゃないの！？今私にそう言ったじゃない！？」

詰る様に翻意を促す二ナの叫びが回廊に木霊する。遠くで鳴り響く破壊の協奏曲コンチェルトと共に混ざり合う二ナの呼びかけにトンプソンの嬉しそうな声が返って来た。

「ありがとよ、主任。俺アあんたに恨まれても仕方が無いっていうのによ。あん時俺が伍長を意地でも引き留めてさえいれば、あんたがそんなに悲しい顔でここにいる事もなかったらうに。」

トンプソンの言葉で二ナに蘇るあの日の光景、キースに胸倉を掴

まれながらただ泣く事しか出来なかつた彼と、そして私。

「そんなの貴方のせいじゃないっ！ 曹長、今すぐこっちに来てっ！ 私が何かロープを作るからそれに掴まって」

「それで主任が俺を引っ張り上げるって？ 無茶だよそんなの、それであんたまで俺の巻き添えにしたんじゃあ伍長にどんな顔して会えって言うんだ？ 頼まれたってごめんだね。」

トンプソンの言葉の端に紛れて再び鳴り響く銃声、息を吹き返した敵が体勢を立て直してトンプソンの元へと肉薄している事は離れた場所で焦燥に駆られながら事態を想像する二ナの意識にも明らかだ。

「それにもう時間が無いっ！ 俺がここを抜かれたら奴らは間違いない所まで逃げるんだ！ 俺の手元に弾が残ってる今の内にっ！」

「いやあっ！ 曹長っ！！」  
「行くんだっ、二ナ・パープルトンっ！ 頼むっ」

声が途切れて苦悶が混じる、被弾の証拠を二ナに向かって示しながらもトンプソンは声を荒げて二ナへと叫んだ。

「俺の事を恨んでないと、憎んでないと！ あんたが俺を許すと思っつんなら行ってくれっ！ ここで俺と心中する事があんたの望みか、違うだろうがっ！」

トンプソンの慟哭が二ナの口から言葉を奪う。行けと言ったハンガーも味方すらも飛び越えて、彼が望む最期の願い。

私に対しての贖罪、そして自分に正しい道を指し示してくれたコウへの贖罪。呪いに似た祈り。

「いけえ、主任っ！！」

一際大きなトンプソンの声が二ナから全ての選択肢を奪い去つた。ただ一つ示されたその道は彼女の為に命を捨てようとする仲間が示した茨の道、流れ落ちる涙を拭う事も出来ずに嗚咽を残して二ナが立ち上がる。両手に残ったコウとの接点を握り締めながら踵を返して、二ナはシェイクスピアにも書く事の出来なかつた悲劇の舞台に

背を向けて駆け出した。

最後のマガジンがリリースされて床に落ちる、ボルトが解放されて唯の工業製品になり下がったライフルを捨ててトンプソンは手元に残された拳銃を握りしめた。グリップの温度を感じて思わずトンプソンの顔に笑みが零れる、そうかこれは今主任が使ったばかりだった。

弾はあと七発、撃ち抜かれた肩をベッドの縁に無理やり押し上げながら両手でその大型拳銃の狙いを定める。片手でその反動を殺す事など不可能に近いが無いよりはましだ。

ドンと言う轟音と共に吐き出されるフラッシュ、激痛で表情が歪む。しかしそれでもその一発は不用意に近づいて来た暗殺者の腹部に命中した。阻止力に優れる。45ACPは敵の身体をくの字に曲げてそれ以上の活動を不可能にする、恐らく永遠に。

有難いと思う、動く物だけ撃てばいい。痛みで霞む目も痺れ始めた指も関係ない、右手の感覚だけが残っていればそれでいい。

彼女はもう何処まで逃げただろうかと二ナの安否に想いを馳せながらトンプソンは、忘れようにも忘れられないあの日の光景を思い出した。それは二ナが自分の職場を訪れるほんの数時間前、月明かりに浮かぶゲートに不意にコウが顔を覗かせたその時の記憶に間違いなかった。

ウェブナー立ち会いの下で行われた簡素な退所式、たった一枚の紙切れに名前を書くだけでそれまでの功績も無に帰る儀式にトンプソンは憤慨した。トンプソン自身も他の陸戦隊員同様コウに鉄拳制裁を喰らった口だ、そして他の隊員と同じ様にコウを慕っていた。明日も見えぬこのオークリーで自分達に生きる意義を見出してくれた恩人、その彼が司令以外の誰にも何も言わずに出て行こうとしている現実を阻止しない訳にはいかなかった。

継る様に何度も何度も翻意を促すトンプソンに対してウェブナーは何も語らず

今思えばそれは同じ気持ちを持ちを共有していたの

かも知れない　　代わりに口を開いたのは当事者たるコウだった。彼は少しはにかなだ様な笑みを浮かべて静かに言った。

「曹長、今の君の仕事は軍の規律に基づいてこのゲートの出入りをチェックする事じゃないか……折角立ち直ったんだ、君も軍人ならば軍人の仕事を全うしてくれ。頼む。」

「だけど伍長、あんたはこの事を技術主任　　」

だがトンプソンはその言葉を最後まで続ける事が出来なかった。

その時のコウの目を忘れる事が出来ない、水銀灯の下でトンプソンに向けられたその黒い瞳に沈む深い悲しみと後悔。声を詰まらせてしまう程の苦渋がありありと浮かんでいる。

「　　済まない、と。もし君の気が向いたら彼女にそう伝えてくれ。」

月明かりの下で跪き、嗚咽を零す彼女の姿を前にして自分は伍長との約束を果たす事は出来なかった。二ナに背負わせた罪の重さに愕然として、そして自分の犯してしまった罪の大きさに慄然とする。自分がもしあの時無理やりにも伍長を引き留めて置けたならこの結果はどうなっていたのだろうか、やはり行きつく所は同じなのか。

いや、多分違うと思う。きっと彼女は露天商の店先に並ぶ品物の様に幾通りもの説得材料を彼の前に並べて、その中から最も彼の苦痛を和らげる事の出来る特効薬を選び出したに違いない。その機会すら自分は彼女に与えてやれなかった。

華やかな笑顔を失い、穏やかな声を失い。あの日を境に変貌してしまった二ナ・パープルトンと言う女性をそう仕向けてしまった自分の許されざる罪をトンプソンは許せない。

コウ・ウラキと言う人間が自分の人生に与えた影響を考えれば考えるほど、想えば思う程その彼に何も返す事が出来ない自分自身を許せない。

だから自分はここで彼女の楯として自分の生を全うする事を選んだ。



せめて、この思いが彼女を通じて伍長の許まで届きます様に。

ホールドオープン。カチツと言う音と共に遊底が解放する、排莖口から宙に舞い上がる最後の薬莖。目で追う真鍮の輝きが鮮やかに煌めいてゆつくりと落ちて行く、キンツと言う金属の囁きと共に浮かぶ苦笑いはトンブソンが自身に下される想定内の判決を受け入れての事だった。

廊下の向こうで瞬く小さな炎と微かな音色、銃口から吐き出される煙を見る前にトンブソンの手から守護天使が弾け飛ぶ。反射的に顔を伏せる彼の肉体に襲いかかる着弾の衝撃、弾ける痛覚。

臍深くで沈黙する異物は彼の命を瞬時に縮める、あつという間に膏を減らした血液は体内での循環を諦めて外界へと出口を求めた。無数に穿たれた無残な銃痕から勢いよく零れ出した血の濁流がトンブソンの服を赤く染めて床へと流れ落ちて行く。

全身麻酔を掛けられた様に身体の自由を失ったトンブソンは、自分の意思ではどうする事も出来ずにそのままゆつくりと仰向けに倒れた。不思議だ、もう痛くない。

ぼんやりと迫り来る死に向かつて感想を述べながら、トンブソンは僅かに残った感覚で右手の位置を確かめ、そしてそれが未だに自分の思った場所に置かれている事を知って安堵と喘命の吐息をゆつくりと吐き出した。

チームの損失はたった一人の兵士に与えられたにしては大きな物だった。1から指揮を任せられたら自身は決して油断をしていた訳ではないがその意思を部下に伝達するには彼はあまりにも若く、そして指揮官としての素質に欠けていた。作戦当初から部隊内に漂っていた戦勝気分を払拭出来ないままこの場に臨んだ彼らはトンブソンの敷いたキルゾーンにいと也容易く曳き込まれ、三人の死者と二人の軽傷者を出した。

仲間に死を齎したその兵士が自分達の放つ集中砲火を全身に浴び

てゆつくりと斃れて行く、獲物との間に無粋にも立ち塞がった哀れな男に止めを刺す為に5は、我先にと殺到する部下の動きを制して自らが先頭に立った。ベットの端から足だけを投げ出した敵の、どんな些細な動きも見逃さない様に慎重に近寄る。

ベットの蔭で5が見た敵は首から下を真つ赤に染めて仰向けに倒れていた。瞬きをしなくなつたその目に既に光は無く、ただ苦しみで不規則に上下を繰り返す胸の動きだけが彼の命を約束している。

5はライフルを肩に収めると腰の拳銃を抜き出した。その筒先に憎しみは無い、ただ一人で自分達に立ち向かつた勇敢な同朋に対しての礼儀だつた。

「勇敢な兵士だつた。心から君の献身を称賛する。」

見上げるトンプソンを覗きこんで、コウは言った。

「勇敢な、兵士だつた。心から君の献身を称賛するよ」

「……………本当ですか、伍長？」

ダブルタップでトンプソンの胸に致命の弾痕を刻む、途絶える鼓動、終わる命。

トンプソンの全身が臨終の痙攣を起こして反り返る、その時将星からその様子を見守っていた5の目に服の下に隠されていたトンプソンの右手が飛びこんだ。

固く握り締めた掌に包み込まれた小さなスティック、その先端に頭を覗かせている小さなボタンを死に囚われたトンプソンの親指は何度も何度も押し込んでいる。

廊下の突き当たりを曲がった所で二ナは聞いた。耳を劈く爆音と猛烈な風の吹き込み、そして引き千切られる金属の叫びと崩落の音色。彼が隠し持っていたC-4はその役割通りの働きを、彼の命と共に全うした事を二ナに教える。そしてその事実を二ナに吐き気を

催させた。

思わず蹲って何度も込み上げて来る不快な物を手で押さえて涙を零す、それが苦しみによる物なのか悲しみによる物かさえも気付かずに嗚咽交じりの嘔吐えずきを繰り返す。

生きる事がこんなにも苦しい。

求める事がこんなにも苦しい。

託される事がこんなにも苦しい。

それでも私は足掻くと決めた。彼の死に背を向けて、無償の献身を踏み越えて。

それを罪だと言うのなら、それを悪だと誰かが罵るのなら。

きつと私の辿り着く先には彼と同じ死が待っている。

だから私は行かなければならない。

自分を待ち受ける運命の姿を自分自身の目で見届ける為に。

クラスター爆弾によって発生した火災によって、未だにその機能を維持し続けるオークリーのAIは即座に火災に対する防御手順を実行に移した。唯一残っていた管理棟へと続く通路が防火シャッターによって閉鎖される、そしてそれは二ナの蹲る場所から目の届く所にあつた。

床に座り込んだままシャッターが下りて行く姿を呆然と眺める二ナ、だが二ナの目には自分の運命が閉ざされて行く事と同義たるその状況にも動揺の色を見せなかった。

頭の中で渦巻き始める白い靄が次第に火花を散らして実体となる、現れた物は様々な数字と文字とイメージ。

二ナの中で何かが変わろうとし始めていた。

言語と言う名の単位で世界を司るありとあらゆる要素がそこにはある、二ナの脳裏で渦巻くその奔流は中心を持たないメビウスの輪の様に、あるいは次元を矛盾に導くクラインの壺の様に規則めいていて不規則に流れ続ける。拮抗する為に起こる摩擦熱で二ナの脳細胞は熱を帯び、そして手を繋いでいる筈のニューロンとニューロンが突然切れてはまた繋がって思考と記憶の一貫性を喪失させる。突然に起こったその現象に戸惑った二ナは自分の置かれている現実も忘れてそのまま廊下へと蹲った。

確かにこれに似た事は今までももあつた、それはハイスクールへの入試の時であつたりアナハイムへの入社試験の時であつたり。思い返してみれば今起こっている現象の一番近々での記憶はやはりあの時 GPシリーズのOSの基礎理論を立ち上げたその時だと二ナは思い出した。浮かび上がってくる数字や文字の羅列をまるで何かの啓示の様に自動速記した後に残された膨大な数式、それが四機のガンダムをこの世に産み落とす切っ掛けになつた始まりの言葉だ。

だが今二ナの頭の中を席卷する物はそんなレベルで語られる物ではない。数字と文字の混在する巨大な旋風はまるで暴風雨の中に佇むレポーターの様に二ナの思考を翻弄し、ともすれば飲み込まれて自分自身がどうにかなつてしまふのではないかと言つて恐怖さえ二ナの心に植えつける。眩暈にも似た平衡感覚の喪失は二ナの足をその場から縛りつけて離さない。

「な、に……これ？」

膨大な量の情報が頭に溢れているのに自分の感情を表すのはそんな言葉しかない、体中の穴と言つた穴から零れ落ちて行きそうな勢いのそれを押し留めるかの様に二ナは思わず顔を押しさえて視界を遮った。真つ暗になる世界の中でもその暴走は収まりそうにもない、焦

りと戸惑いが二ナの決断に拍車を掛ける。

こんな所でぐずぐずしている暇はない、今は一刻も早くハンガーへ。

ここを生き延びて、私は必ずコウの元へ戻って見せる。

ギリ、と。奥歯の音が二ナの脳裏に反響する。自身の変調に対して強烈な意志で隷属を求める二ナの決意は強く噛み締めた唇から滲み出た血と共にその世界に影響を与えた。無秩序を誇る文字の奔流は二ナの強固な意志によって手綱を嵌められてその勢いを弱める、速度を弱めた流れが濁流からせせらぎに変わってゆっくりと二ナの脳裏に、しかし恒常的に動いている事を確認した二ナがゆっくりと顔を押しさえていた手をどけて前を見た。

歪んで見えた景色は既に元の姿を取り戻している。唯一つハンガーに繋がる筈の通路を閉ざした防火シャッターをぼんやりと見つめて二ナは自分の置かれていた現状に気が付く。

この扉も基本的には自分が逃げて来た退避壕のシャッターと同じ原理になっている。一回閉じればその解錠は指令室にいる人間の判断に委ねられ、そして指令室からの命令が伝えられない状況で降りてしまった場合にはその扉に対峙する要救助者自身が暗証番号を打ち込んで開くしかない。そしてその暗証番号の有無までもがさつきと同じ状況に陥っている。

熱を持った腿に手を当てて支えながらゆっくりと二ナは立ち上がった。手にしたラップトップのカバーを開きながらよろよろとハッチの横にあるテンキーに近づいて、ぶらんとぶら下がったコードをコネクターに差し込んだ。

その瞬間に再び渦を巻いて二ナの意識を埋め尽くす文字の乱流、沈静を強要する二ナの意識を押しつけて何かの力がその嵐の中から一握りの文字列を抜き出して二ナの前へと置き換えた。

小さく点滅する六桁、何かに誘われる様にその数字を左から順番に打ち込んでいく二ナの指。最後に enter。

ボタンを押しこんだと同時に動き出す防火シャッターが二ナに向

かつて次のステージを用意した。開いていく扉を驚愕の瞳で見上げる二ナ。

キースにはその音が何故か無視出来なかった。コクピットの微かな明かりの中をまるで警報の様に聞える携帯の呼び出し音、それは自分の機体が重篤な損傷に陥って今にも爆発するかもしれない時に鳴るヒステリックな音と同等の強迫観念を伴ってキースの指を動かした。胸ポケットの底に沈んだままの小さな機械を引っ張り出して情報を表示する、空間にレーザーで浮かび上がった相手先の番号はアラート勤務の為に控えていた部屋で目にした物と同じ番号だった。ボタンを二度押ししながら耳に掛ける、その間に相手にどうやって応答しようかと文言を考えている最中に相手の声がキースの耳に届いた。

「キースか？ 俺だっ」

油断なくモニターを見つめていたつもりだったが、その声を聞いた一瞬意識が逸れた。驚きのあまり姿勢制御のレバーに右手が触れて機体がぐらりと揺らぐ。

「！ コウっ！？」

キースの口から飛び出した声はあの時の口調であの時の声で。無慈悲な現実によって書き換えられてしまった立場とか時間を飛び越えて再び繋がる過去と今。その声だけは絶対に忘れない、嘗て戦場で生まれる数多の死の中から拾い上げたその声に自分は何れだけ勇気づけられ、そして助けられた事か。

「どうしたんだいきなり、いやそれよりにもよってこんな時にお前って奴は」

コウの声に答えながらキースの意識は緊張と懐慕の板挟みに遭う、よく自分の携帯の電話番号を憶えていたな、と言う素直な喜びと現実は今置かれている状況の格差にキースの声音は変に淀んだ。だがコウの声がやはり普通の状態では無い事を聞きとったキースは、コウが今の現状を押さえて通話している事を悟って妙な安堵を憶えた。

「分かつてる、今オークリーに向かつてる最中だ。……時  
間が無い、手短に話すからよく聞いてくれ。今基地を襲撃している  
敵はジオンなんかじゃない、M P I の研究所のテロを鎮圧したティ  
ターンズの部隊だ。」

コウの言葉に絶句するキース、安堵から驚愕へと変化する意識の  
上書き。次に口から飛び出した言葉は奇しくもコウが『デープス  
ルート』に向かつて叩きつけた物と同じだった。

「冗談は止めるよ、何でティターンズがオークリーを襲撃するんだ  
？ 同じ連邦軍だぞ！？」

「詳しい理由は生きていたら後で会って話す、だが奴らの狙い  
は二ナだ。奴らは二ナを殺す為にオークリーを潰そうとしている。」

「ますます意味が分からない。キースは一瞬コウが錯乱しているの  
でないかと勘繰りたくなる、だが携帯から届くコウの口調にそんな  
影は微塵もない。しかしそれにしてもコウの言っている意味は道理  
が無い、二ナを殺す目的も定かではないしその為にオークリーを潰  
すとは全く持ってナンセンスの極みだ。」

「おい、コウ。お前自分の言ってる意味が分かって言ってるのか？  
幾らなんでもそんな突拍子もない話をすんなり信じて言う方  
が、っていかお前の言ってる事が無茶苦茶だぞ？」

「俺だって最初はそうだ。だが俺の所に掛かって来た電話の主  
が言った通りに事態は進行している。奴の言った事は信じたくない  
が本当の事だ、状況は？」

強い口調で尋ねて来るコウの声には以前の力が戻って来ている、  
アルビオンに所属するエースパイロットとしての確固たる意志だ。  
促されたキースがコウに向かつて速やかに応えた。

「バスケスのゲルググが喰われた。どうやら奴ら野戦砲を配備して  
いるらしい、それもかなりの腕利きだ。今俺は南側の丘の上から基  
地を見下ろす位置にいる、何とかここで敵の足を止めてから砲台を  
潰して奴らの背後に回り込む。」

「 トリントンの時と同じだな、じゃあもうすぐ敵の本隊が

「 と思つて待ち構えてるんだが未だに機影が見えない、あの時よりも敵の侵攻が遅い。もし本当にあんな連中が来ているって言うんならこんなにもたもたしない筈なんだが」

キースの発言を裏付ける様に未だにモニターの中にそれらしき影は見えない。ガトーがトリントンを襲撃した時には援護射撃の最中に基地の敷地内に乗り込んで来ていた、勿論ガトー級の指揮官がその何人もいる筈が無い訳で、それを考えれば侵攻の速度が遅くても誤差の範囲内に収まるのかも知れないがそれにしても遅すぎるとキースは思う。照準器を動かして辺りを搜索するが滑走路を埋め尽くす残り火の熱で正確な像を結べないが故にこの機を逃す事は考えられないのだが。

ライフルの照準器に直結しているモニターを操作しながら尚も敷地内を探索するキースに向かってコウの声が届く。

「 とにかく何とか敵の侵攻を遅らせてくれ、常識的に考えてモビルスーツが施設を制圧している最中は他の戦力がいたとしても動きが取れない筈だ、ましてやこんな所まで明かりが洩れて来るほどの乱戦状態じゃ尚更だ。」

「 乱戦つて……… 今の所殴られっぱなしだよ。もう見える所まで来ているのか？ それでお前は」

「 俺が、二ナを助けに行く。」

力強く宣言するコウの言葉にキースは思わず沈黙した。何度も頭の中でコウの台詞を繰り返しながら、その声と言葉の中に強い意志が籠っている事を確認したキースが念を押す様に尋ねる。

「 …… お前が二ナさんを助けに行く 今、本当にそう言つたのか？」

「 そうだ、俺が二ナを助けに行く。だからそれまで持ち堪えてくれ、頼むっ。」

込み上げて来る衝動を抑えられずに、あははっと。キースは思わ



ず声を上げて小さく笑った。この状況下で不謹慎極まりないと指揮官としての自分が嗜める、だがもう一人の自分がそれに対して反論した。

キース、お前さん分かってるのか？ コウが、二ナさんを助けに行くって言うてんだぞ？ 誰にも何も言わずに基地を出て行ったあのコウが自分の意思で二ナさんの元に向かおうとしている、今のお前に笑う以外にどんな表現が？

キースの中にはもう小隊指揮官としての彼はいない、過ぎ去った記憶の中に捨ててしまったと信じていたあの日の笑顔を満面に押し上げてキースが言った。

「しょうがない、お前の頼みじゃ断れないし。……分かったよ、こっちの方は何とかする。お前は二ナさんの所へ行ってくれ、多分宿舎の脇にある退避壕に避難している筈だ。」

「……すまない……ありがとう、キース。」  
耳に届くコウの、心からの感謝をこめて送られる言葉。そう言えばコウにはよく何かを何かと頼まれる事が多いな、昔っから。

「水くさいって、コウ。……友達だろ？」  
『戦友』でも『仲間』でも無く『友達』、その言葉を再び無二の親友に対して使えた事にキースの心は震えた。士官学校に入学した当時から今まで過ごした時間を唯その一言で置き換えたキースの耳に、コウの小さな笑い声が聞えたかと思うと通話が途切れる。

あれほど悲壮な覚悟に塗れていた自分がもういない。コウとの関係を取り戻した事でキースの中に湧き上がる戦意は高揚の一步を辿る、集中力が高まってモニターの隅々まで気を配れる様になったキースが自分の現金さに思わず薄笑いを浮かべた。

気分は悪くない、いや寧ろ良い位だ。それはあの宇宙でコウと轡を並べてデラースフリートと戦っていた時に似ている、まるで殺られる気がしない。

それにコウから得た情報はキースにとっては貴重な物だった。敵がティターンズと言うのであれば使う兵器は共通だ、不十分ではあ

るが戦力が推定できる。それにトリントン襲撃とタイムテーブルが類似すると言っているのであればこの後、野戦砲は基地機能をマヒさせるべく指令室のある管理棟を狙って来るに違いない。

キースは自分の考えを基地の誰かに伝えるべく無線機を取った。その相手は誰でもいい、モウラでもアストナージでも。そしてコウから得た情報の全てを伝えればきつと基地に残っている誰かが指揮を取っているウェブナーにその事を伝えるだろう。モビルスーツの部隊だけでどうやって二ナを殺そうとするのか

機動兵器は

元々面を制圧する為に開発された物で『点』を狙うのには適さない  
キースには思いもつかないが、敵の目標が二ナの命であると分かったら陸戦隊員はどんな行動に出るだろうか？ 少なくともおいそれと仲間の身柄を敵に譲り渡すほど大人しい連中じゃない。

一年戦争で得た経験を抛り所にする彼らの戦いはきつとハンガーで立て籠もるアンドレアとマルコの支えになる筈だ。

コウの情報から端を発したシナリオは次々にキースにとっての明るい材料を<sup>ついで</sup>実しやかに並べたてる、頭の中でその他の可能性を何度も検証してからその結論に間違いの無い事を確認したキースが意を決して無線のスイッチを入れた。だが声を上げて交信を試みようと思息を吸い込み掛けた時、突然脳裏に閃いたある考えによってその声が止まる。

待て待て、待てっキース。ちよつと待て。

同じ連邦軍の機体と言う事は敵と俺達は同じ機器を使っていると  
言う事だ、じゃあもし俺達の使っている周波数帯を敵が知っているとしたら、どうなる？

腹の底で渦巻きだした不安で頭の天辺から一気に血の気が引いて行く、迂闊にも無線で会話をしてしまった二人を呼び戻して計画の全てを白紙に戻そうとするキースの耳に、ヘッドセットを通して聞き慣れた部下の悲鳴交じりの報告が届いた。

「隊長っ！ 敵のモビルスーツと遭遇、いや敵じゃない連邦のモビルスーツ、こんなの見た事が無いっ！ 黒塗りのジムと遭遇し

ましたっ！”

緊迫したマークスの声で自身の不安が的中した事に痛恨の表情を浮かべるキースは、思わず機体のカメラを彼らが消えた方角へと振り向けた。

「アデリア・フォスはどっちだ？」

大胆不敵にも外部スピーカーで話し掛けて来たその声を聞き間違える筈が無い。動きと声を止めてしまったアデリアの代わりにマークスが一步前に進み出てラース1とアデリアの間に機体を割り込ませた。

「答える、貴様らは何処の部隊だっ！？」

「ほう、あの時の坊やか。ここでまた俺とフォス曹長の間に割り込んで来るとは、やはりあの時息の根を止めて置くべきだったな。だがこの前は運良く生き延びる事が出来たが今度は助けに来る者はいない、大人しく俺と曹長の戦いを横で眺めていた方が身の為だぞ？」

「

マチェットを片手に下げて一步を踏み出すラース1に呼応する様にマークスとアデリアは同じ距離を後ずさった。ライフルの銃口をラース1に向けながらマークスが再び訪ねた。

「残念だが俺はフォス伍長の編隊長だ、部下の戦を横目で眺める趣味は無いっ。質問に答える、貴様は何処の部隊に所属している？」

「

恐らく奴の cockpit ではロックオン警報がけたたましく鳴っている筈なのに、とマークスは銃を突きつけられても怯む事無くジリと近づくとラース1を見て焦る。発砲の機会を伺いきれないマークスに向かってラース1はマチェットを突き付けながら質問に答えた。

「それを答える義務は無いし、尋ねる意味も無い。と言いたい所だが今日はお互いに最後の日だ、答えてやる。」

ラース1の言葉を聞いたマークスが素早く背後のアデリアの機体に手を押しつけて接触回線に切り替えた。これで敵の正体がやっと

分かる。

「アデリア、外部の音を拾って隊長に送れ。正体を明かしてくれるってんならこつちも何かと都合だ、隊長も何か手を考えてくれるかも。」

「もつやってる。……畜生、何なのよあいつつ！ 一体どういうつもりであたしに付きまとうのよっ！？」

罵声を吐きながら無線を操作するアデリアのキーを叩く音がマークスの耳にまで届く、それをかき消す様にラース1の高笑いに似たあの声がマークスのコクピットの中に飛び込んで来た。

「俺は連邦軍ティターンズに所属するバスク・オム大佐直轄の特殊作戦群、通称『マザーグース旅団』に在籍するヴァシリー・ガゼエフ中尉。そして俺達の部隊はその中でも作戦成功率100パーセントを誇っていた『W・W・W中隊だ。』」

「『誇っていた』？ 過去形か？」

「この前の作戦で貴様らを取り逃がした事は我が部隊唯一の汚点となった。だから俺に明日の命は保証されない。恐らく俺はこの作戦の成否に関わらず、後日裁判なしの極刑に処せられるだろう。だから」

ラース1のマチエットがだらりと振り下ろされて地面を穿った。

「今日と言う日を俺は、俺をここまで生かして来た運命の神に感謝する。俺の罪を清算する機会を最期に与えてくれたあの雄山羊にな」

「清算だと？ 貴様何の事を言っている、貴様がアデリアに付き纏って何で貴様の罪が清算出来るって言うんだ？」

マークスの放った疑問はそのままアデリアの疑問でもある、その証拠に当のアデリアは一言も話さずに二人の会話に耳を傾けているのがありありだ。ラース1は地面に突き刺したマチエットの柄に片手を置いたまま語り続けた。

「……俺は嘗て戦いの中で仲間と共に死ぬ事が出来なかった。

味方に見捨てられた戦線の中からだ一人、仲間の犠牲を踏み台に

して生き残った醜悪な罪人だ。仲間の悲鳴を耳に焼き付けて、それでも軍の建前の為にその身を利用され続けた俺の気持などお前には分かるまい、仲間に囲まれてのうのうと平和の中で暮らして来たお前などに。」

ラーズ1の言葉の中にマークスは不思議な感情を覚えた。妙な共感、それはラーズ1の言葉の中に今まで差別の嵐に翻弄されてここに流れ着いた自分の過去を垣間見たからだ。奴も自分に課せられた運命を一人でどうする事も出来ずにもがいていた、そして。

「軍の建前に利用されてたのはあんただけじゃないっ、あたしも、あんた達が面白半分に輪姦まわしたあの子も同じ様に軍に利用されていたのよ。自分一人が世界中の不幸を背負った様な気になっ

てそれで誰かが慰めてくれるとも思ってたの!？」

「ふん、やつと俺と話す気になつたか。そんな事は思つちやいない、俺は仲間によつて掛けられた呪いを解く為に、必死で死に場所を探していたんだよ。」

理解不能なラーズ1にたまりかねたアデリアが思わず叫んだ言葉に含み笑いで答えるラーズ1、マークスの腕がアデリアの機体を押して会話に参加しようとする意志を押し留める。

「あの日、お前は。今までどの戦場でも先頭に立つて斬り込んで死ななかつた俺をその一步手前まで追い込んだ。俺の股間を何度も蹴り潰すお前の顔は俺を殺すに値する、実にいい顔をしていた…… だから病院のベットの上で痛みと共に目が覚めた時には実に悔しかった、何故俺をあのまま殺してくれなかつたのかとお前の事を恨みさえもした。どうせなら俺の額を銃で撃ち抜いてくれれば良かったのに、と。」

「そんな事っ！ 同じ連邦軍に出来る筈ないじゃないっ！」

「出来たさ、あの時のお前ならば。自分の正義に微塵の疑いも持たず、まるで神の様に刑を執行しようとしていたお前ならば。ただお前の手に銃が握られていたかいなかったか、それだけの違いだ。」

アデリアが小さく息を吸って息を飲んだ。確かにあの時の気持ち

をうまく言葉にするのは難しい、ひよつとしたらラース1の言う通りに自分が武器を手に使っていたのなら何の良心の呵責も無くそれを使っていたのかもしれない。

「お前に殺して貰えなかった事に絶望した俺は病院から出た後、今の部隊に志願した。自分の過去にも経歴にも何の興味も持たない傭兵集団だ、自分がここで死んでもその事を弔ったりする事も無い。

俺は今度こそ死ぬるといっ一心でこの部隊の先鋒を務め続けた、それはお前が俺に『死ぬ』事の可能性を示してくれたからだ。仲間の呪いでどうしても死ぬなかつた俺に与えられた唯一の光明……

それを教えてくれたのはお前だ、アデリア・フォス。」

「あたしが……… なんて」

意味が分からない、と。そう続けようとする言葉の切っ掛けを見失うアデリア、途切れた言葉を補完する様にマークスが言った。

「貴様が言っている事は唯の妄想狂の戯言だ。それに死ぬなら一人で勝手に死ねばいいだろう、何故アデリアまでわざわざ巻き込もうとする？」

マークスの問い掛けに一瞬沈黙するラース1、奴の理屈の矛盾を突いて理論破綻を仕掛ければ少なくとも冷静さの一部を削ぎ取る事が出来るかも知れない。この先に待つ回避不能な戦闘に際しての密かな戦力を思い描くマークスの仕掛けは、しかし十分な効果を得られなかった。流れて来るラース1の声音は周囲を照らしたす月明かりの様に冴え冴えと響く。

「俺はそれから何度も自分を試した、今まで以上に過酷な戦火の中に自分の身を置き、そして運命を確かめた。何度も何度も死の手前まで来て阻止される状況を見て俺はそこで確信したのさ、『俺は俺の中にいる神によって生かされている』のだと。戦いが終わった後に俺の心の中で奴が囁くんだ、その日が来るまでお前は殺さない、とな。」

「その日、だと？」

「……… 知っているか？ 俺にそんな呪いを植えつけた神の言葉

を。『己が裁く審判にて己も裁かれ、己が量る量りにて己も量らるべし』……仲間の死の上に胡坐をかく俺の罪は、俺を裁いたアデリア・フォスにも等しく分け与えられた。だから俺の罪は俺と同じ罪を背負ったその女と共にこの世から消えなければ清算した事にはならないのさ。そして今夜がその日だ。」

マチエツトを静かに持ち上げるとラーズ1は八双の位置に構えて腰を僅かに落とした。機体の各部に仕込まれたサスペンションが次の命令を待つ様にギシッと鳴る。

「坊やが俺の運命を阻むと言うのなら容赦はしない お前も俺達と共に逝くか？」

「……狂ってる、貴様は。」

マークスはそう呟くと手にしたライフルを右手で構えて、空いた左手で腰のビームサーベルを抜いた。エフィールド発生時の独特の低周波が静かにラーズ1との空間に流れる、マークスの動きに呼応する様に背後のアデリアもサーベルを構えてモノアイの光をラーズ1に目掛けて投げつける。

「そうさ、俺は狂ってる。何故なら」

ジムの機体はその声を境に躍動する、ジェネレーターの唸りを残してラーズ1が二人に目掛けて突進した。

「……ここは、戦場だっ！」

キースとの会話の間に失った距離と時間を取り戻す為にコウのアクセルワークはラフになった。思った以上に激しい起伏と小石の散在するグラベルはほんのちよつとの油断でコウの手から鉄騎のコントロールを奪おうとする、だがヘッドライトの明かりだけで初めての荒れ地を疾走する事が出来るのはやはり自分の中に眠るあの忌々しい力のお陰だった。

月明かりに青い砂煙の帯を棚引かせてオベリスクを駆け抜けるモンスターは有り余る機動力を微妙なバランスの上で大地に押し当てる、コンマ以下のタイミングで変化する拳動をコウの身体が制御し

てオークリーへの一本道をひた走る。

だがその超人的な姿勢制御も嘗て宇宙を駆け巡った時の様に自由自在にはいかなかった。重力と言う名の足枷は減衰装置の跳ね返りをコウの予想以上に大きくし、そしてそれを抑え込もうと体重を掛けたコウは目の前に突然現れたジャンピングスポットへの対応が遅れた。

「！しまっ

！」

叫んだ時には既に前輪は跳ね上がって宙にいた、コウは慌てて天を目指そうとするフロントを全体重で押し込んで元の姿勢を取り戻そうと試みる。だが中途半端なバツクフリップの体勢で宙を舞ったコウのマシンはそのままの状態の後輪から接地した、全重量をリアのサスペンションで受けたドウカティはそのまま後輪を跳ね上げてまるでロデオに失敗したカウボーイの様にコウの身体を前方へと吹き飛ばす。

荒れた地面に強かに叩きつけられたコウは自分の身を守る為に無意識に身体を丸めて衝撃に耐えた、その脇を横滑りに掠めるモンスタアの影。

強く打った背中の子で呼吸が苦しい、コウは地面に転がったまま身体の一部を動かしてみた。顔に掛けていたゴーグルは衝撃で吹き飛んで開いた眼球を夜風に晒す、全身に点在する猛烈な痛みを顔に響めはしたが痺れた箇所が無いのは不幸中の幸いだった。痛みを感じると言う事はそこにまだ神経が通っていると言う事、骨折していたら動いた事すら分からなくなる。

コウの脇を掠めて吹き飛んだバイクの鼓動は聞こえない、息の途絶えた愛機の姿を求める事無くコウは月明かりの夜空を見上げて全身の痛みが耐え得る範囲にまで収まるのを詰まる息を継いで待ち侘びる。

こんな所で寝ている暇はない、そうしている間にも二ナの身に危険が迫っていると言うのに！

猛り狂うコウの感情は彼の身体で息を潜めていた酵素の発動を活



性化した。生み出される脅威的な反射神経の能力だけを宿主の為に提供していたその悪魔は、まるでコウの身体を全て乗っ取るうとするかの如く怒りの炎を吹き上げる。

その炎に魅入られれば魅入られるほど、焼かれれば焼かれるほどに湧き上がる凶暴な殺意はコウの理性をあっという間に黒く染め上げて思考能力を奪い去ろうと。全身の痛みに紛れて這い回るあの感覚を抑え込む為に拮抗する理性が本能とのせめぎ合いで激しい頭痛をコウに齎す、堪り兼ねて頭を抱えようと手を上げたコウの目の中にほんの一瞬映り込む、月の姿。

血走った眼で見上げた夜空にぽっかりと浮かぶその姿を人は皆十六夜と呼ぶ、既に欠けたその望を宵闇の群青へと求める様に猶予いながら夜空に上るその月は、二ナの生まれた故郷の姿。

降り注ぐ蒼光がまるで天空より差し伸べられる彼女の手の様に、偽りの僧侶を演じるコウの魂を包み込む。浮かされた様に荒ぶる熱と激情が潮を引く様に治まって行く事を自覚するコウ、身体のどこかに巢食う峙へと還って行く不愉快な感覚を見送りながらやっと無視出来る範囲にまで縮小した痛みを押して上体を起こした。

初めての事だった。

今まで何度も自分の身体を襲うその変調は自分や他者の痛み無しには治まらない代物だと信じていた、荒天に見舞われた大海原に漂う小舟が突如凧の中へと放り出された様に静寂の如く穏やかなその心中にコウは驚きを露わにする。束の間見上げるその月にコウは今の自分にとって本当に必要な物を教えられた気がする、嘗ての自分がその魂の全てを燃やし尽くした宇宙に浮かぶ、不完全な月の姿に。

「二十つ。」

コウは月に目がけて一言投げかけると立ち上がった。息を潜めて月間に沈む愛機の姿を求めて彷徨う視線、そしてそれはコウの場所から随分と離れた窪みの底に転がっていた。自然と言う名の節理が気まぐれに大地に刻みつけた大きな窪み、雨季には満々と水を称えるそのオアシスに今は何も無い。

コウは痛む体を抱えて崩れる斜面と共に滑り降りながら横たわったままの愛機の傍へと近寄って全身の力をハンドルに込めて不安定な足場の上で機体を起こす。だがアリ地獄の様な斜面は恐らく彼の機体をそこから抜け出す事を許さないだろう、もろもろと崩れる周囲の斜面を見回しながら何処かの斜面が固く締まってないだろうかを探すコウ。

そのコウの耳に突然遠くの方から近付いて来るエンジン音が飛び込んで来た。コウは愛機を放り出して慌てて斜面を掛け上る、自分が辿って来た道をなぞって近づいて来る車のヘッドライトの前に大きく立ちはだかつて両手を振り上げて停車を求めた。

「おおいつ！ 止まってくれ、頼むっ！」

痛む背中を押さえながら叫ぶコウの目前でその車は停車した。安堵の溜息を深く吐いたコウの耳に飛び込んで来る驚きの声、それは聞き慣れた人物の声だった。コウの顔が思わずヘッドライトの影に隠れたその男へ向かって振り上げられる。

「ウラキ君、どうしたんだこんな夜中にこんな所で？」

ヘンケンはその言うコウの傍へと近づいた。ヘッドライトに浮かびあがったコウの姿は全身砂に塗れて、しかも傷だらけだ。ヘンケンが満身創痍なコウの出で立ちと、その傍の窪みに沈んでいるコウの愛機の姿を交互に見比べて尋ねた。

「…… オークリーに向かっているのか？」

ヘンケンの問いに無言で力強く頷くコウ、そしてその姿を見守っているのはヘンケンだけではなかった。ヘンケンの四駆のドアが次々と開いて中から人が降りて来る、それは組合の会合でよく顔を合わせる他の農夫の姿だった。

「パット、それにキャンベルさんまで。どうして？」

「それはこっちの台詞だけ、コウ。まさかお前までオークリーに向かっているとは思わなかったよ。それにまあなんて様だよ全く。」

バイクの運転じゃあ誰にも負けないと思ってただけだな？」

歳格好も背丈も同じ位、コウとの違いはいかにも南部生まれ特有

の彫の深さを印象付けるその顔立ち位だろうか。毒づきながらコウの身体を心配そうに眺めるパットの後ろでずんぐりとした影だけを覗かせるキャンベルが、いつもの様に黙ってコウの姿を覗いている。「俺達もオークリーへ向かう途中だ、知り合いから連絡を受けてな。」

「  
そう言うとヘンケンは背後の二人に目配せしてコウに背を向けた。フロントにあるウィンチのレバーを倒してワイヤーを引っ張り出すとパットに手渡す、フックを手にしたパットとキャンベルが窪みの斜面を一気に駆け下りてコウの愛機に取り付くとレスキューの準備を始めた。」

ハンドルの左右へ八の字にワイヤーを回すとラインにフックを引っ掛ける、車体の中央を正確にとらえている事を確認したヘンケンが手を上げると四駆は路面を外して荒野へ踏み込む事も厭わずに真っ直ぐにバックを始めた。パットとキャンベルがコウの機体を両側から支えて、セシルが微妙なアクセルワークを駆使してゆっくりと斜面から引きずり上げる。荒れ地に十五メートルほどヘンケンの四駆が踏み込んだ辺りでコウのマシンは路上へと姿を現した。

「なぜ、ヘンケンさん達が。それに知り合いって。」

レスキューの礼も忘れてコウがヘンケンに尋ねる、だがヘンケンはコウの質問には一言も答えずにじっと作業を見守っている。コウのバイクを立たせたキャンベルが破損箇所を素早くチェックして一つ頷くと、徐にセルを回した。キュルキュルと言うモーターの音が暫く続いたかと思うと突如息を吹き返したエンジンが再び夜空に雄叫びを上げる、キャンベルが満足そうに呟いた。

「  
いい、エンジンだ。よく手入れが行き届いている、機械はこうでなくてはな。」

満面の笑みを浮かべてコウへと視線を送るキャンベル、無言で促す視線を受けてコウは何の迷いもなく自分のマシンに近寄った。シートは引き裂かれ、マフラーは凹み、フロントのマッドガードは壊れている。だがヘッドライトが点灯して、コウのマシンは持ち主に

未だ戦闘の継続が可能であるという意思を示す。

コウが再び愛気に跨ってサイドスタンドを戻すとすぐ傍までヘンケンの四駆が近寄って来た。音もなく窓が開くと月明かりにセシルの顔が浮かび上がる、ハンドルを握ったままセシルはコウに向かって笑いかけながら言った。

「私が先導します、ウラキさんは後からついて来て。ただしあまり車に近づいたり左右に寄らない様に、跳ねた礫で怪我しますからね？」

「セシルさん、なぜみんなでオークリーに」

「その話は後で。今は時間が無いのでしょう？ お互いに。」

ニコリと笑ってそう言うのとセシルは窓を閉じてアクセルを踏み込む、V8気筒の大排気量エンジンはコウのマシンを凌駕する咆哮を上げてマッドブロックのタイヤで地面を蹴りあげて猛然と加速した。

「乗せてあげればよかったんじゃないっすか？ 詰めればあと一人くらい楽勝で乗っけられたのに。」

ヘンケンの車のずっと後ろから付かず離れず追いかけて来る明かりを後部座席で見ながらパットが尋ねた。無言のヘンケンに変わって隣に座るキャンベルがパットの声に答える。

「好きな物を捨てて行けるものか。あのエンジンを見れば、分かる。」

キャンベルの言葉に静かに頷くヘンケン、だがその表情にいつもの陽気さはなく何処かしら憂いを帯びている事が隣で運転をしているセシルには分かる。

ヘンケンはコウの身体の変調を彼自身が抱える矛盾から来るものだと言った、好きな機械を用いて戦う事の不条理に彼が拒否反応を示すのだと。モビルスーツに乗れなくなったコウが唯一自分の趣味として貫き続けた機械との接点、それが今の彼の趣味である機械弄りでありそこにヘンケンは未来のコウの可能性を見出していた。

だがセシルは後から自分達を追って来るコウの微妙な変化に奇妙

な違和感を持つていた、それは恐らく表情を曇らせてバックミラーを見つめている隣のヘンケンも同じに違いない。パットの言った通りコウのバイクの運転技術は秀逸だ、どんなに速度を上げたとしてもどんな路面であったとしても即座に対応して自由自在に操る技術を持っている。その事は組合の会合でコウが皆の後押しで渋々披露したアトラクションの記憶に由来する。

その彼が。自身の技術の限界を超えてバイクを操っていたと言う事の意味、最高のコンディションのバイクを傷付けてもオークリーへとバイクを向けると言うその意味。

好きな物は捨てられない、それはヘンケンの口からも聞いた言葉だし老練な機関長であるキャンベルならではの言葉だ。だがセシルもヘンケンも今のコウの姿にその言葉を当てはめる事は躊躇われた。傷だらけのバイクに鞭打って追いかけて来る彼の姿にそんな拘りは無くなってしまった様な気がする、では彼が乗れなくなったモビルスーツの代替品を探してまで関わり続けた機械と言う物に無頓着になっってしまった理由とは一体何だ？

彼にとつての機械という名の占める立ち位置が実はもう重要ではなくなっているのではないかとセシルも、そして多分ヘンケンも思っている。機械本来の役割である『道具』と言う名のポジションに落ち着いたからこそ彼はそれを在るがままのスタンスで使う事に何の遠慮も無くなってしまったのではないかと。

それならばコウの取った行動は十分に理解が出来る。道具と言うのは人が何かを為し得る為の手段として使用される物だ、彼が自分のバイクをそうして扱う以上それは彼自身に生まれたもつと大事な目的の為に使われている事になる。その目的が何であるか等と言う事は言うまでもない。

では彼が血相を変えてオークリーに向かう決心をしたと言う事にはどう意味がある？ あれほど頑なに拒んでいた過去を自らの手で追い求めていると言う事はそれ即ち、コウが今まで守り続けていた閉塞された世界からの決別を意味しているのではないのだろうか？

過去から背を向けて歩こうとした未来への扉を押し開く事を諦めて、再び過去の自分に対峙する覚悟を決めたと言う。

しかしコウ自身も気付いていないその彼の変化が行き着く果てにある物。今はどんなに小さな可能性でも、それが彼にとって必然の選択だと言うのならいずれ訪れるであろう拒否反応の消失と共に迎える、モラレスによって予言された彼自身の死。

「とにかく」

セシルの廻想を見透かす様にヘンケンが声を上げた。その言葉の行く先が同じ考えを共有している自分に向けられた物だと当事者たるセシルにだけは分かる。

「要は基地に着いてからだ。ウラキ君にどのような変化があったにせよ、俺達の目的は変わらない。そしてそれは彼の求める物とは、違う。」

冷徹な指揮官としての顔がそこには存在する。声音の変わったヘンケンの下で車内の空気は一瞬にして緊迫した物へと変わった。後席で息を飲むパットと小さく鼻から溜息を洩らすキャンベル、だがセシルだけはそんなヘンケンの言葉に顔色一つ変えずに尋ねた。

「もし私達の目的と彼の目的が重なる様な事があつたとしたら、貴方はどうなさるおつもりですか？ 私達は自分達の仲間を助きたい、彼は自分の過去に向き合う覚悟を固めた……それは恐らく戦況の悪化と共に一致してくる物かも知れませんが、それでも貴方は彼の危難に対して手は差し伸べない？」

意地悪な物言いを敢えてするセシルの問い掛けにヘンケンは黙った。唸りを上げるエンジンの音に暫く耳を傾けていたセシルが答えを促す沈黙が続けた後、ヘンケンが徐にセシルに問いかけて来た。

「……もし俺が、そういう指揮官だつたとしたらお前達は俺に命を預ける事が出来たか？ 彼は貴重な人材である前に」

ヘンケンがキツとバックミラーを見上げる、付かず離れず一定の距離を保って追い続ける頼りなげなヘッドライトの光を睨み付けながら言った。

「俺の大切な友人だ。」

ヘンケンの言葉にパットが、キャンベルがそしてセシルが。彼らは自分達の敬愛する艦長が今だあの宇宙で疾駆していた頃の気概を持ち続けていた事を知って安堵の笑みを漏らした。

再び閉じていく防火シャッターを背に通路の先へと歩む二ナ、その行く手には同じ様に防火シャッターの袋小路が存在する。だが途方に暮れてしまう程の切迫した状況に直面したと言う恐怖が今の二ナには存在しない、まるで家の玄関にでも向かう様にすたすと扉の前に立ち、再び暗証番号の入力キーへと視線を向ける。そのスロツトにコネクタを差し込むだけで再び同じ事が自分の脳内で発生すると言う事が何故かしら理解出来る。

頭に閃く六桁の乱数、導かれる様に押す二ナの指には迷いが無い。そして再び油圧の音を轟かせてゆつくりと持ち上がる鉄の緞帳が二ナを奥の世界へと誘い込む、二ナは呟いた。

「どう言う事……私、一体」

頭の中を支配する文字のラダーが二ナの世界を変えて行く、まるで自分がコンピューターの部品の一つになったような感覚に襲われた二ナがその不慣れな世界に慣れて立ち竦んだ。頭の中で自分に今起こりつつある現象に着いて出来る限り論理的に解析しようと、記憶の扉を叩き壊して知識の全てをぶちまける。

そう言えば、と。ふと思いつく知識が二ナの思考を支配した。嘗て宇宙の全ての定理を数式によって証明したアルベルト何某とか言う数学者は幼い頃、何の脈絡もなく頭の中に数式が浮かび上がったと言う。初めに答えありき、証明はそこに辿り着くまでの過程を示すと言う彼独特の発想は他者による解読を許さず、彼自身の理論によって全てを解き明かすと言う作業を何度も繰り返して現在まで覆される事が無い。

彼は言った。『われわれが進もうとしている道が、正しいかどうかを、神は前もって教えてはくれない。』、二ナ自身もその意見に

は一も二もなく同意する。だが彼は自身の言葉の矛盾を棚上げしてその言葉を残したのだ、それでは彼自身は自らを神と名乗っているのも同然ではないか。

そしてそれは二ナ自身も。彼の言葉に同意しておきながら自分の身に起こっている現象を説明出来ずにいる、彼と同様の矛盾による証明と言う唯一点を除いてではあるが。

確かに自分の生まれた家庭は平凡な家庭では無い、両親共フオン・ブラウンの一角に位置する学び舎で生業を続ける学究の師だ。幼い頃より幾何学や数式に触れ続けた二ナが他の誰よりも理数分野に置いて秀でた力を発揮したのは両親による英才教育の賜物である、だがそんな家庭はこの世の中を探せば大勢存在するだろう。そして引き合いに出したかの数学者の両親はそう言った類には全く無縁の実業家とその妻であつた筈だ。

何の共通項も無い彼と私　いや、自分の中で起こっている現象は彼の物とは比較にならない、何故なら自分の頭に浮かんで来るのは自身の知識の積み重ねによって生み出される数式などではなく、ただの数字の羅列なのだから　に起こっているこの現象を論理的に言い聞かせるにはあまりにも材料が無さ過ぎる。それを言い表すその一言を二ナは考えたくもないと思っている。

科学の使徒が自らを『神』等と言いだしたらおしまいだ。そんな物に頼る事は真実から目を背けているのと同じ事だ。

二ナは知恵熱が起こりそうなほど火照つた頭を抱えて先の防火シャッターを目指して歩き始めた。自身の世界観を変える現象が齎す頭痛で目が眩む、背後で自動的に閉じ始めるシャッターの金属音をぼんやりと聞きながら次の暗証キーへと歩を進めたその時。

首筋を痺れさせる様な鋭い痛みと緊張が二ナの脳髓まで届く。それは彼女が通り過ぎた通路の背後の一つ後ろの防火シャッターを叩く、あの時耳にした打撃音のせいだった。

チームが全滅した事をにわか信じられないのはブージャム以



下 チームの面々も同じ意見だった。しかし通信が途絶えたと言う事、呼びかけに誰も応じなくなったと言う事実は雑音だけが鳴り響くイヤホンを通じて何らかの不具合が チームに発生したと言う事を如実に示す物だった。

「…… 何人が行つて奴らの様子を調べてこい。まさかこの陸戦に殺られたんじゃないと思うが、念の為だ。」

ブージャム1はモビルスーツ隊の攻撃に巻き込まれない様に避難した、管理棟から離れた場所にある駐車区画で部下にそう命じた。もし仮にこの基地に在籍する陸戦隊員に全滅させられたのだと判明したらこれからの作戦行動に置いて彼らの存在と戦力は大幅に見直しを余儀無くされる、しかしそれ以外の要因によつて彼らが全滅させられたのだとしたら。

「まさか、モビルスーツ隊の牽制射撃に巻き込まれたんじゃないやあ

」

部下の一人に尋ねられたブージャム1の顔色が複雑に変化する、それは一握りの恐怖とその他を埋める怒りに満ちていた。そんな事があつてはならないとはブージャム1も思つてはいるが、その考えに行き着いた瞬間にブージャム1の脳裏を過るあの日の映像がその先入観を否定する。M P Iの研究所を襲撃した際にダンプティが見せた恫喝の映像、それが脅しでは無かつたと言う事は今思い返してみてもはつきりと分かる。

もしかしたらそれが意図的に行われたのではないのか、と。奴はこの機に乗じて地上部隊を謀殺して新たな部隊を 少なくとも自分達の指示には忠実に従う 編成し直そうとしているのではないのか？

「それも込みで調べて来い、もし万が一そういう事実を裏付ける証拠がそこで見つかったならばこつちにも考えがある。…… この作戦中に殉職した奴らは灰も残さない様に焼き尽くされる、そこにあの能面を餞向けに供えてやるまでの事。」

ブージャムの視線がちらりと携行ミサイルへと奔る。モビルスー

ツとの万が一の交戦に備えて用意しておいた虎の子の一基を目を細めながら見つめたブージャム1が言った。

「出来れば俺はそうあって欲しいと心から願うがな。味方に至近距離から狙われた時の奴の顔がどう歪むか、是非とも拝んでみたいもんだ。」

現場に到着した地上部隊の別動隊は破壊された連絡橋の袂に蹲る味方の姿を確認した。何人かを率いるその男は恐らく5よりも指揮官としての資質を備えているのだろう、丸くなった影が偽装カバである可能性も考慮して銃口を向けながら用心深く近づく。しかしその男に戦闘能力の欠如が認められた瞬間に彼は小さな声で男に対して何が起こったのかを問い糺した。

「……5が敵に止めを刺した瞬間に突然爆発が起こった、恐らく『仕掛け罠』の類なんじゃないかと思う。俺はたまたま一番後方で警戒に当たっていたから吹き飛ばされただけで何とか動けるか？」

尋ねるその声が氷の様に冷たい、無機質な声音に気付いたのは恐らく彼の部下だけだっただろう。自分の身の安否で精一杯なその生き残りは残念ながらその事に気を留める事すら叶わなかった。

「いや、足が折れている、恐らく肋骨も何本か。申し訳ないが俺はここで下ろさせて貰う、誰か敷地の外まで」

タン、という小さな音と共に額に灯る小さな穴。頭蓋の後ろから吹き出す脳漿の後を追う様に唯一の生き残りは伝令の役目を終えた。硝煙が僅かに柵引く銃口をその場に残して、止めを刺した男は喉のマイクを押しつけながらブージャム1に報告した。

「……隊長、どうやら女が一人この先へと逃げた様です。チームは敵の陸戦隊員の自爆に巻き込まれて全滅した模様、期待に沿わずに申し訳ない。」

表情を変えずに報告する男の耳に、あからさまに不機嫌なブージャム1の声が届く。予期せずになされた小さな楽しみを摘み取られ

た悪童の様な声でイヤホンが震える。

「敵ながらあつ晴れ、と言うよりは、ドジな連中だ。戦力を無駄に減らしやがって…… お前達はそのまま女の後を追え。その女が敵と合流されたら部隊の戦力が減った事を敵に知られる羽目になる、どんな小さな情報も奴らに与えるな。」

「了解、直ちに命令を実行する。」

男が返答する間にも彼の部下は既に追撃の準備に移っていた。小康状態になった牽制射撃の余波を確認して破壊孔から対岸の通路へと渡河用のロープを撃ち込む、既に一人の隊員がロープの上に身体を預けて器用に手繰り寄せながらすすると渡って行く。物も言わずに追撃を始める送り狼達の背中を眺めながら男は、通路の先に身を潜めて息を殺している哀れな子ウサギの未来を思い描いて薄ら笑いを浮かべた。

二ナの脳裏に浮かぶあの時の記憶、それは確かにその音から始まった。規則正しくしかし激しく鉄の扉を乱打する着弾音は二ナに再びの恐怖を思い出させる、無意識に走り出した二ナの目に映るのは次の扉を開く為のUSBスロットだった。

駆け寄るなりそこにケーブルを差し込む、儀式化したその行動によつて齎される情報の仕組みをもう気に留める事もなく二ナは頭に浮かんだ数列を迷わずに打ち込む。油圧で動きだす扉が上がり切らない内にしゃがんで潜る二ナの耳に、別の油圧が作動する音が聞えた。

それがさつきと同じ様に爆薬による爆破であったならばまだよかった。仕掛けるまでに時間が必要だし何よりも爆発の余波が収まらない限り現場に立ち入る事が出来ない。二ナがさつきの局面で運良く逃げ切る事が出来たのは敵の出足が以上の理由によつて鈍った事による物だ。

だが今度は違う、彼らは自分と同じ様に暗証番号を解読しながら次々にシャッターを開いて刻々と二ナの元へと近づいている。二ナ

とほぼ同じ時間で扉を開けると言う事は二ナが手にしたアドバンテージが消滅してしまつた事を意味する。何故敵に今の自分と同じ真似が出来たのかを考えながら、それでも切迫した状況に心を奪われて十分に思考の働かない頭を抱えて二ナは次の扉へと走り寄る。

区画ごとで延焼を食い止める為に防火シャッターの間隔は二ナが考えていたよりも狭い、ドミノの狭間の様な狭い空間で再びスロットにソケットを差し込みながら二ナは心の中で問いかける。

後何枚扉を開けば管理棟への道が繋がる？ それまで敵に追いつかれない様に逃げ切る事が出来るのか？ 刻一刻と背後の迫る敵の息遣いを感じながら二ナは無我夢中でテンキーを叩く。再び上がり始めたシャッターの先に見える鉄の緞帳は二ナの根気を挫かせせよとする、耳朵を叩く油圧の作動するタイミングはほんの僅かではあるがさつきよりも早い。

追い付かれている、何故？

既に自分がシャッターを開けながら逃亡している事は音で気づかれているだろう、その先にある未来予測に二ナの全身は震え始めた。私の決意も、曹長の犠牲も全て無駄になってしまうのか？ 私が望んだ最期の希望は決して手が届かない物だったと、自分の命が尽きる時に後悔しなければならぬのか？

手の中にある傷だらけの起動ディスクが諦めようとする二ナの思いを繋ぎ止める。形として存在するその手掛かりをぎゅっと握りしめた二ナが、全てを萎えさせようとする絶望に向かって激しく、そして初めてその言葉を綴り上げた。

死にたくないっ！

火の海となつたオークリーの敷地をすぐ傍に眺めながら、正門前に辿り着いた五人はそこで事切れている衛兵の傍に佇んで質素な甲いを営んでいる。年長者のキャンベルは暗記している經典の一節を口ずさみながら静かに胸の前で十字を切つて祈りを捧げる、彼の尊厳を守る事も出来ずに放置する事しか術の無い事を知る後の四人は、

心の底から悔しさを滲ませながらキャンベルの動きの後を追い掛けた。

「ジェイソン …… お前が何故」

コウの口から人知れず漏れる呟きがその衝撃の大きさを物語る。絞り尽くされた彼の命は周囲に巨大な池を作った鉄の匂いを振りまいている、靴の底が汚れる事も厭わずに近寄った彼らがジェイソンの安否を知るのに触れる必要はなかった。連邦軍のカーキ色を塗り潰したそれを目にしただけで生きている筈が無いと言う事が分かる、ヘンケンはその惨状を眉を顰めながら一瞥して、言った。

「 どうやらモビルスーツだけじゃない、地上部隊も投入されている様だ。こんな辺境にそれだけの部隊を投入する価値があるとも思えんが、奴らの目的は一体何だ？」

ヘンケンの呟きにセシルですらも返す言葉が無い。状況分析に必要な情報はセシルも同じ様な物だし、なによりも今夜の侵攻が何処の勢力によって行われていると言う事すら分からない。無言で口を噤んだセシルが変わって、ジェイソンの亡骸から視線を上げたコウがヘンケンに答える。

「 …… 敵は、ティターンズ。」

ヘンケンの眉がピクリと上がる。コウの背後に立つパットやキャンベルの驚きよりも小さな反応でヘンケンはコウの瞳を見据えた。セシルは静かに目を閉じてコウの言葉を一言一句洩らさぬ様に聞き耳を立てている。

「 奴らの目的は？」

その事に理由を求める事無くヘンケンは尋ねる、まるでそんな事が起こる可能性を予め示唆する様な面持ちでヘンケンはコウを睨みつけた。

「 敵の目的は二ナ・パープルトン技術主任の殺害です。彼らはその為にティターンズの特特殊部隊をここに投入したと聞きました。」

「 誰に聞いた？」

「 分かりません、ただ彼は自分の事を『ディープ・スロート』と名

乗っただけで」

「フン。」

声を吐き捨てたヘンケンが忌々しそうに呟く。

「時代錯誤の誇大妄想狂め、そんな名前を使って自分が正義の味方にでもなつたつもりか。嫌な野郎だ。」

コウに情報をリークしたハイデリツヒの人物像を一言で看破したヘンケンには声を沈めて息を吐く。各所で起こる爆発の連弾に紛れて沈黙を破ったヘンケンがコウの顔をじつと見据えて尋ねた。

「それでウラキ君はどうする？ 俺達はここにいる仲間達を助けに行く。恐らくこの攻撃で大勢の仲間が殺られてしまったとは思いますが、せめて生き残った連中だけでも逃がそうと思っている。一緒に来るか？」

「俺は二ナを探します、探してこの手で助け出す。」

即答したコウが自分の手に視線を落とす。握った拳をじつと見つめて、過去にその手が二人の人間を助けた事を確かめる。

「そうか、分かった。……これを持っていけ。」

ヘンケンには自分の腰に手を回すと拳銃を取り出してコウに差し出した。見慣れた形のその自動拳銃はコウがあの日ガトーに向かつて引き金を引いた連邦軍の正規装備の物だ、コウが視線を上げて目を見張った。

「俺の私物だ。戦場に一人で向かうんだ、万が一の時の為に武器は持って置くに越した事は無い。」

「でもそれじゃ、ヘンケンさんが」

「俺はこう言うのは昔から苦手なんだ、俺よりセシルの方がよっぽど上手に的に当てる。それに全員それなりに武器は持って来ている、敵に遭遇しても俺の出る幕は無い。ま」

ヘンケンが目配せするまでもなくパットとキャンベルは車の荷台からバックを引きずり出して自動小銃を肩に掛けた。タクティカルベストと防弾チョッキをコウとセシルに手渡しながら無言でキャンベルが促す。

「 そんなドジは踏まんがな。」

身を守る装備を何もつけずに炎に照らし出されたヘンケンの横顔が凄みを利かせてにやりと嗤った。渡された装備を慌てて装着しながらコウはヘンケンに向かつて湧き上がる疑問を問いかけた。

「ヘンケンさん、貴方達は一体」

「私達はある組織から命を受けて地球へと降下した部隊の一員です。」

それはコウが未だ嘗て聞いた事の無いセシルの声だった。ヘンケンの肩越しにコウを見つめるセシルの目には明らかに燃え滾る戦士の炎が灯っている。

「私達は極秘裏にこのオークリー基地を使って有能な人材を集めて来ました。巧妙に身分を隠していずれ訪れる『反ティターズ』の旗手となる為に。」

「じゃあ、この基地司令は」

「無論、俺達の仲間だ。一年戦争の時からなの。」

ヘンケンはそう言うのと戸惑ったままのコウに向かって手を差し伸べる。慌てて触れたコウの手を強く握り締めて、ヘンケンは力強い口調で言った。

「では、ここでお別れだ。君は君の目的を果たせ、俺はそうなる事を心の底から願っている。……生きて再びまた会おう。」

ヘンケンの呼びかけに応える様にコウの手に力が籠る。互いの力で繋がれた腕が震えて、次の瞬間に解き放たれる。踵を返してコウの元を離れて行く四人の影を見送りながらコウはバイクのキーに手を掛ける。

「 ウラキ君。」

キーを捻ろうとした手をヘンケンの声が止めた。爆発音に紛れて遠くから届く声に向かつて視線を走らせるコウに向かつて、ヘンケンが拳を差し出していた。

「生きて還ったらこの前のテキーラの残りで乾杯だ、忘れるなよ？」

「

目が乾く事も忘れてコウは目の前に広がる嘗ての我が家の惨状を目に焼き付けた。制圧射撃の為に放出されたクラスタ<sup>スタインベック</sup>スター爆弾は基地の敷地内の建造物を至る所で崩壊させて炎を巻き上げる、自分が経験した事の無い戦場への第一歩を踏み出す為にモンスターに火を入れるコウ。

彼の足の下で息を潜めていた獣の心臓は主の命を受けて再び獰猛な鼓動を蘇らせて振動を始めた。無秩序に置かれた残骸のシケインを睨みつけながらコウは一気にオークリーの門を潜る。

けたたましく軋むタイヤが未だに何処かで起こる断続的な爆発音に取って代わって世界を支配する。叩きつける様な加速で焼けたコンクリートを蹴立てて奔るコウの向かう先は唯一つ、それはヘンケン達と別れた場所からほど遠くない場所に建つ建物の中にある。

炎の隙間から覗くその入口目がけてコウはマシンを内部へと侵入させた。

「おいっ、そこの戸棚にあるモルヒネを持ってこい！」

ハンガーより少し離れた施設棟の三階にある医務室は絨毯の様に敷き詰められた怪我人で溢れていた。

モビルスーツの攻撃に巻き込まれた隊員はその殆どが夜間勤務で待機していた者達だ、数は多くない。だがそれでも設立以来開店休業状態だった医務室のベッドを外に撤去させるくらいの怪我人が発生すると言うのはいた仕方ない。たまたま当直を買って出ていたモラレスの元には次々と怪我人がより重篤な怪我人を運ぶと言った状況が展開していた。

「手足の動く奴は儂を手伝え、それでもせんと助かる者も助からんぞっ！？」

モラレスは怪我人の間を飛び回りながら次々に適切な治療を施し



ていく。だが多くの者は爆風による損傷と熱による火傷を負った者達だった。切開の為のレーザーメスすら使えない状況で彼が満足出来る様な治療を怪我人に対して施行出来ると言った状況には程遠い、その苛立ちは勢い彼の口調に刺々しさを齎している。怪我の治療を続けながら痛みを訴える患者に向かつて優しい言葉を掛けてやる余裕すらモラレスには無い、それは彼が嘗て『スルガ』の乗組員として医療担当を任されていた時のあるべき姿だった。

「これ位の火傷でビービー泣くなっ！ 大の男がみっともないぞっ！？」

手にしたハサミで衣服を切開しながら患部を見る、その状態が例え『この位』等と言う代物で無くともモラレスの叱咤は変わらない。アンプルの蓋に注射針を差し込んで中の透明な液体を吸い上げたかと思うとすぐさま患部へと直に注射する、一刻も早く痛みを和らげて楽にしてやる事くらいしか今のモラレスに出来る事は無かった。少なくともこの戦闘が終了するまでの間は。

「ど、ドク」

「何じゃ、言いたい事があるなら早く言え、儂や今忙しい。看護婦もまだ来とらんから優しい言葉なんぞかけてはやれんぞ？」

重度の火傷

第三度等と言うレベルじゃない

を負

った隊員が苦しい息を継ぎながらモラレスに向かつて言葉を掛ける、モラレスはその男の患部から注射針を抜きながら応えた。

「は、早くここから逃げた方がいい、もうすぐ敵がやって来る。そうなる前にドクだけでも」

「阿呆か、お前は。」

男の勧めを一蹴したモラレスは注射針を抜いて床に投げ捨てると新たな針を装着しながら言った。

「儂がお前らみたいな怪我人を見捨ててどうする？ そう言う元気があるなら先ずお前がさっさと逃げろ。そうすりゃ儂も心置きなくトンスラしてやるわい、医者を舐めるな。」

早口で捲し立てるとモラレスは、それでも心配そうに見上げる男

に向かつてニヤリと笑いながら言葉を繋いだ。

「僕の心配より先ず自分の事を心配しろ、この戦闘が終わったからこそにいる連中を順番に手術じゃ、お前さんは結構後の方になるからそれまで頑張るんじゃないぞ？」

暗に『お前の傷の程度は大した事無い』と仄めかせて立ち上がるモラレス、恐らく手術ともなればこの男の焼け爛れた腕は根元から切除する事になるのかもしれないが、そうでない可能性もある。それに比べれば運び込まれた時点で欠損している患者の方がよほど重篤な事になる、彼らには義手や義足を装着するしか道が残されていないのだから。

モラレスの言葉に元気づけられた男の顔が微かに歪む、それが笑顔だと言う事を知ってモラレスも笑顔を男の目に降り注いだ。だがそんな束の間の安らぎも長くは続かない、モラレスは男の身体をひよいと飛び越えて隣の患者へと向き合った。

その状態は一目見ただけで分かる、左下腕部の切断による出血性ショック。既に傷口は収縮して出血量は少ないが、それでも流出した血液量と破断の際に血管を伝わった振動で心房細動の症状がみられる。

「くそう、ベラパミル（verapamil：抗不整脈薬）なんぞこんな所にや置いとらんわい、それに輸血をしようにも」

輸液も含めてそのストックは既に底を尽いている。助かるものなら水でもいいから放り込んでやりたい所だが幾らなんでも、とモラレスは思う。患者の間に狭く伸びる獣道の様な通路に置きっぱなしのバッグに駆け寄ると、一本の細いスプレーを取り出して男の剥き出しになった二の腕に当てた。注入されたエピネフリン（epinephrine：蘇生及び血管収縮薬）は急速に低下しつつあった男の血圧を何とか下限一杯で押し留めて死の瀬戸際でその襟首を掴んだ。だが一刻の猶予もない事はモラレス自身にも分かっている、薬の効果が切れればその男はあつという間に意識を失って二度と目を覚まさない領域にまで踏み込んでいくに違いない事を。

浅い呼吸を取り戻した男の脈拍を確認してモラレスは立ち上がった。鞆の中身は今のスプレーで全部使い切った、しかし彼の足元には未だに大勢の患者が彼の治療を待ち侘びている。

ここに担ぎ込まれた全ての怪我人を助ける事など出来ない事などとうの昔に分かっている、記憶の中に混在する負け戦の景色を一瞥しながらそれでも出来る限り多くの生存者を作り出すべくモラレスは鞆の中身の補充に向かう。周囲で治療を懇願しながら苦しい悲鳴を上げる怪我人達に柔らかい笑みを振り撒きながら、それでも心の中では仮面を被って欺き続ける自分のあざとさと時間の無さに舌打ちを繰り返す。自分の無力さを噛み締めるのはこう言う時だ、とモラレスは思った。

一年戦争以前から軍の医療機関（Emergency Rescue Unit：救急救命部）で働いていたモラレスにとつて、兵士が戦傷によつて息を引き取る光景は他の医者よりも多く見て来た。ましてや戦艦に無理やり乗せられてその戦いの場を宇宙へと移してからは更に多くの無残な光景と症例に向き合う事となった。拡大と熾烈を極めるジオンとの死闘は人的損耗の増加を意味し、それを食い止める為には戦争を逸早く終結させるしかないと言う馬鹿馬鹿しいジレンマに追い込まれる。それでも艦船の数だけ振り分けられた医療班は持てる力の全てを振り絞って戦火の中から舞い戻った多くの戦傷者の命を取り留めた、彼らの乗った戦艦が敵の砲火によつて散華の憂き目にあうその瞬間まで。

大勢の仲間が艦と運命を共にする光景を目の当たりにしながら、モラレスは運命の悪戯とほんの少しの幸運に恵まれた。戦時中によくある書類の手違いによつて送り込まれたサラミスは事もあるように巡洋艦とは名ばかりの輸送艦で、そしてその艦の艦長と言えば連邦軍人の範たる物を何も持たず、艦橋で煙草を吹かしながら戦況を見守ると言うモラレスから見れば不良軍人の最たる存在であった。見るべき者は副官と名乗った女性が嘗ての撤退戦で勇名を馳せた佐官

であつたと言う事くらいか、しかしそれは逆に何故この才媛がこんな男の下で大人しく収まつているのかと言う新たな疑問も生み出す事になる。恐らく彼女の階級はこのだらし無い男よりも上である筈だしその才能も能力も到底及ばない筈なのにと。

だがモラレスの卓越した洞察力はジオン敗戦の日に決行された民間人の戦域からの移送を請け負つたヘンケン自らの手で覆される事になる、そしてモラレスはその艦「スルガ」に乗艦して以来一度も自分の誇る仁術を振う事無く今日まで無事に過ごす事をヘンケン・ベツケナーと言う男によつて約束されていた、今日と言う最悪の夜を迎えるまでは。

彼の為に集められた貴重な資産をこのまま無駄にする事は出来ない、とモラレスは今持てる限りの力で治療に当たっている。そして心の何処かでモラレスは自分の前に置かれている現状と言う物に懐疑的な印象を拭えないでいた。それはいかに不意打ちとは言えこれだけの死傷者を出す事になるとは信じられないと言う、仲間の実力をよく知る彼なりの分析による物だった。

派手目を好むヘンケンやセシルとは違い、僚艦として行動を共にして来たクリス・ウェブナーと言う人物は堅実かつ慎重な用兵を好む。モラレスのチェスの仇敵にして上官であるヘンケンをして『負けない戦いを決心した奴は実にしぶとい』と言わしめるほどの鉄壁の守りをウェブナーは得意としている。そのウェブナーが指揮を執る部隊にしては損耗率が激し過ぎると思うのだ。

尤もウェブナーに対する評価はゲームや操艦上の事であり、兵士を動かすと言う事とは多少なりとも違いはあるとは思うがそれでも駒を動かして戦術上での勝利を得ると言う点に於いては何の変わりも無い。その理屈から考えればウェブナーの指揮で負け戦の様な惨状を医務室で目にするという現実にはモラレスにとっては酷く不可思議に思える。

「……まさか、奴の身に何かあつたんじゃないだろうか？」

戦場で最も考えてはならないその可能性をモラレスは口にする、胸騒ぎと引き換えに巻き起こる不安を払拭する為にモラレスは携帯電話を取り出してウェブナーの安否を確認しようとした。だがポケットから取り出した瞬間に鳴り響く着信音はモラレスの意識をウェブナーからもう一人の上官へと移す羽目になった。

カスタムに設定してあるその着信音はフォイクトの騎兵隊行進曲、モラレスは人の悪い笑みを浮かべながら通話ボタンを二度押しした。ヘンケンだった。

「……なんじゃい、今頃のこのこ現れよつて。大方キャンベル辺りを呼んでおつとり刀で駆け付けて来たんじゃろうが、戦況は取り留めもなく劣勢じゃわい。」

「文句はチェンに言ってくれ。状況把握が不十分なままで俺に緊急連絡をして来られても動きのとり様が無い。ウェブナーは？ そこにいるか？」

それはヘンケンの側からウェブナーに連絡が取れなくなっていると言う意味だった。この状況でモラレスが医務室にいないなどと言う事は考えにくい、故にヘンケンはウェブナーが負傷をしてそこにいるのではないかと踏んだのだ。ヘンケンの質問を効いたモラレスの声音が心なしか低くなった。

「いや、ここにはおらん。もしいるとすれば指令室かB棟の司令官室と言う事になるんじやろうか、最悪の場合機密書類<sup>データ</sup>の処分は司令官が自らの手で行わなければならんからな。」

「分かった、じゃあ俺達は取りあえず司令官室に向かう。もしウェブナーと落ち合う事が出来たならまた連絡する。」

「そんなまだるっこしい事をせんでもお前が指揮を取ればええじゃろう、この期に及んでまーだそんな建前に固執するつもりか？ ウェブナーだつてお前が軍務に復帰すれば喜んで指揮権を譲り渡すに決まっとる。」

この劣勢を跳ね返すには強烈なカンフル剤が必要だ、とモラレスは思う。指揮系統の不明瞭なままの戦いをこのまま続けなければいずれ

は チェックメイトのコールを相手に宣告されるだけだ。だがヘンケンにはモラレスの勧めに対しても明らかに頑なな声でその意見を却下した。

「いや、この基地をここまで創り上げたのはウェブナーだ、奴にはその権限と権利がある。それに俺は一介の民間人、何処の馬の骨とも知れない親父がいきなり指揮を執った所で全員が混乱するのがオチだ。ここは奴のお手並みを拝見といこうか。」

「ふん、上手い事厄介事を押し付けおつて。奴のお手並みを拝見したいんならさつさとウェブナーを叩き起こしてくれ、このまんまじやその内医務室が足の踏み場もない状態になりかねん。」

深刻な状態に陥っている医務室の状況はそのまま味方が窮地に陥っていると言う事、だがモラレスはその様な状況にもかかわらず軽い口調でヘンケンに状況を説明する。苦しい時ほど笑いのエッセンスを注入したがるのは過酷な戦場を駆け抜けて来た歴戦にのみ与えられる特権だった。モラレスのその言葉で不意にあの時の景色を取り戻したヘンケンが思わず苦笑交じりに応えた。

「良かったじゃないか商売繁盛で。今まで惰眠を貪って来たツケだと思えばその位の患者幾らでも相手出来るだろ？ ま、俺がもし今のドクの手には掛からなきゃなんないとしたら丁重にお断りするがね、リタイヤ間際の腕利きの外科医ほど信用出来ない者は無いかな。取り敢えず有無を言わさずそこに担ぎ込まれたこの基地の隊員には心の底から同情するぜ。」

「おお、よう言った。もし貴様が掠り傷を負って儂に泣きついて来たらハンマーを持って出迎えてやるわい、ひと月ほどベッドの上で身動き出来んじやったらその減らず口もちつとは静かになるじやろうて。」

携帯に向かって叩きつける物騒なモラレスの物言いに足元で横たわる兵士の何人かが苦しい息の下で微かな笑い声を上げる。悲壮感が蔓延する場所だからこそそんな軽口が僅かな心の励みになる、モラレスは足元で笑う兵士の顔を見下ろして悪戯っぽい表情で笑い返

した。

「じゃ、もう切るぞ？ 早いとこウェブナーを見つけて何とかする様に言ってくれ。もし怪我をしているんなら儂がそこまで行って声の一つも出せる様にしてやるとな。」

「分かった、ドクもくれぐれも用心しろよ。また後で連絡する。」

その言葉を最後に携帯のイヤホンからは断続的なピープ音だけが残された。さつきまで浮かんでいた焦燥の表情を消したモラレスが携帯を耳に付けたままニヤリと笑って歩き出す。

これ以上無い援軍の到着にモラレスの心に生まれようとしていた弱気は四散した。勿論これだけの時間で奴がかき集められる戦力など微微たる物だろう、だがそれでもヘンケンとセシルが到着したと言う事がなにより心強い。それは孤立して敵に包囲された戦場に到着する一個師団に勝るとも劣らぬ安心感をモラレスに与えた。

奴らが来たならもう大丈夫だ、何故ならこと戦争と言う分野に関して二人の右に出る者など自分の記憶の中でも数えるほどしかないのだから。

「これでいいのか？」

携帯のスイッチを切ったヘンケンが足元に向かって低く呻く。キヤンベルに上体を支えられたウェブナーが青ざめた顔に頬笑みを浮かべてヘンケンを見上げた。ヘンケンの背後にはチェンとセシルがそれぞれ沈痛な面持ちで控えている、誰の目から見ても嘗ての僚友の負った怪我が致命傷であると言ふ事は明白だった。

「……ありがとうございます。これでドクは、部下の治療に専念」

そこまで言うのが精いっぱいだった。体内に溜まった大量の血と共に咳き込んだウェブナーの上体が大きく傾く、ヘンケンが跪いて慌てて支えるとウェブナーは間近に迫った艦隊司令の顔を焦点の合わなくなつた目で見つめた。

「……私は、彼らを守りたかった」  
汚れた口が微かに開いてヘンケンに向かって言葉を投げる、懺悔の言葉を吐き出しながらウェブナーの目尻から一筋の涙が零れて頬を伝った。

「…… 彼らは、来るべき日の為に中佐の為に集めた貴重な戦力。一人も欠ける事無く、万全の状態で、中佐の元へとお届けするのが、私の使命。だから」

「取引に応じたのか？ ニナ・パープルトンと引き換えに基地への襲撃を止めさせると言う？」

慚愧の表情で問いかけるヘンケンの言葉にウェブナーは小さく頷いた。自らの選択を嘲笑する様に歪んだ笑いを浮かべて声を吐く。

「たった一人の為に基地を、中佐から預かった兵士を失う事は出来なかった。彼女一人を差し出す事で基地を守る事が出来るのなら、私は奴らの申し出を受け入れた。ですが」

宙を彷徨っていた視線がヘンケンの顔に固定される。ウェブナーはヘンケンの目を見つめると懇願する様に尋ねた。

「中佐、私は。私の選択は間違っていたんでしょうか？」

私の選んだ遣り方は愚かな行為だったのでしょうか？」

「そんな事は無い、俺がお前でも多分そうしたかも知れない。」

…… お前は間違っていない、部下を預かる指揮官として正しい選択をしたんだウェブナー。」

力強く即答するヘンケンの手に力が籠る。その熱も力も既に感じる事の出来なくなったウェブナーがヘンケンの許しを得てにっこりと笑った。だがそれはウェブナーの命を繋ぎ止めていた留め金を外す切っ掛けになったのかも知れない、突然表情を曇らせたウェブナーが再び大量の血を吐き出して全身の力を失った。死に囚われるウェブナーを繋ぎ止めようとするヘンケンの手を握り抜けてウェブナーの上半身が自らの血だまりの上へと横たわる。

「少佐、しっかりっ！」

パットがすぐさま手にしたアンプルをへし折って注射器へと吸い



上げる、強心剤を打ち込もうと二の腕を捲り上げたパットの手を力無く押しつけたウエブナーが小さく頭を振って拒絶の意思を示す。ウエブナーは瞳孔の開いた目を宙に向けて言った。

「中佐、後の、事はお願ひ、します。みんなを私部下を助けて、ください。……夜明けには、多分敵の、航空兵力がここを、焼き払いに来ます。その前にどうか」

血に汚れた手が自分の上官であり仲間の姿を求めて差し上げられる、ヘンケンはその手をしっかりと握って瀕死のウエブナーに向かって応えた。

「分かった、約束する。必ずお前の部下を俺達が助け出してやる必ずだ。」

その声を聞き届けたウエブナーがにっこりと笑って手を離す。思い残す事の無くなったウエブナーに対してブージャム1が与えた傷は彼の予言通りの痛みと苦しみを齎した。死の瞬間までそれが途切れない事を理解しているのは傷の具合を見たパットにしても同じだった。苦痛に歪むウエブナーの顔とヘンケンの顔を交互に見たパットが、ヘンケンに向かって小さく頷いて手元の銃を差し出した。それはブージャム1に暗闇へと蹴飛ばされて行方知れずになっていたウエブナーの銃だった。

「止めが、いるか？」

その声に秘められた底知れぬ悲しみと無念、ヘンケンは銃のスライドを引きながらウエブナーに問うた。体内から湧きあがる痛みと苦悶の表情を浮かべるだけだったウエブナーがその言葉に対して、最期の力を振り絞って微かに笑った。

「……お手数、を、かけます。みんなに、謝っておいて、ください。い。無能な、指揮官で……申し、訳、なかったと。」

ヘンケンが銃の狙いを赤く染まった胸へと定める。ウエブナーは静かに目を閉じながらそっと呟いた。

「……もう一度、みんなで宇宙へ。」

赤色灯の下に轟く一発の銃声が仲間の命を苦しみから解き放つ。

一瞬だけ輝いたマズルフラッシュは周囲を取り囲んだ参列者の顔を煌々と照らしだした。初老を迎えた機関長は静かに目を閉じ、彼の命を救う為の不慣れな救命医を任された若き航海士は固く眼を閉じて顔を背けた。天才的な能力を持つ東洋人のオペレーターは眼鏡を押さえて俯きながら何かを呟き、そして戦友に対して引き金を引いた元指揮官とその副官は瞬きもせず、その瞬間を見届ける。棚引く硝煙の下で満足げな表情を浮かべたまま神に召された男の顔をじつと凝視していたヘンケンは、突然くるりと後ろを振り向いて手の中の銃をセシルに渡した。

静かに銃を受け取ったセシルの横をすり抜けて部下から表情を見られない様に背を向けたヘンケン、震える肩と戦慄く腕をそのままにしてその先にあるドアに目がけて叫んだ。

「チエンっ！」

普段は傲岸不遜を絵に描いた様な態度のチエンが反射的にヘンケンの背中に向かって敬礼した。まるでその態度を目に収めているかの様にヘンケンは次の言葉を吠える様に繰り出す。

「指令室以外にこの基地の全機能に乗っ取れる場所は何処だ!？」

「ハンガー直近に置かれた予備電算室、現在自分のパスワードにて機能封鎖中。いつでも解除してこの基地の全機能を制御出来ます。」

「キャンベルとパットは直ちにグレゴリーと合流して残存兵力を掻き集めろっ！ 敵モビルスーツの暴れている今しか戦線を立て直す機会はない、籠城戦に見せかけて副長の指示を待て

！

敬礼をしたまま小さく頷くパットとキャンベルの前に立つセシルだけは手を身体の前に置いたままじつとヘンケンの背中を見つめている。

「機能掌握までに反撃のプランを立案、以降のオークリーにおける全オペレーションを一任するっ！」

「艦長。」

激昂するヘンケンとは対照的なセシルの声が再びの沈黙を呼び起こす。静かに背中に向かって尋ねた。

「軍務への復帰を、ここで宣言なさいますか？」

セシルの言葉を耳にした三人には「この期に及んで何を今更」という感がある、だがセシルにとってそれははとて大切な事だった。地球へと密命を受けて降下してからの三年間、偽装とは言え夫婦と言う幸せな役回りを演じ続けて来たセシルにとってヘンケンの宣言は幸福な蜜月からの別離を意味する。彼の副官として軍務に復帰する以上その能力は全て勝利の為に費やさなければならぬ、例えそれがどんな非情な選択を迫られる物になろうとも。

セシルの声に隠れている緊張をヘンケンだけは理解した。それを告げればもう元には戻れない、束の間の平和を享受してその波に溺れ続けた日常はあつという間に彼らが生きた鮮烈で、過酷な過去へと舞い戻る。

「……当然だ、ウェブナーの願いを叶える為にはそうするしかない。」

踵を返したヘンケンがセシルの顔をじつと見つめる。指呼にして彼我、一瞬にして遠ざかる二人の関係を互に見つめながらヘンケンは力強い声で、まだその辺でうろついているかも知れないウェブナーの魂に届く様に宣言した。

「反地球連邦暫定政府宇宙軍所属、ヘンケン・ベツケナー中佐。地球連邦軍北米方面軍所属オークリー基地司令、クリス・ウェブナー大佐」の遺志を継ぎ只今より軍務に復帰する。」

「艦長に敬礼っ！」

迷う事無くセシルが声を上げて敬礼する。一分の隙もないセシルの敬礼に遅れてヘンケンが右手を掲げて応えた。

戦いが、また始まるのだ。

いつ終わるとも知れない歓喜と絶望に満ちたあの日々が。

その世界を。  
その現実を。

受け入れる事を躊躇うコウの自我は彼の身体から全ての意思を削ぎ取った。残された物は抜け殻の様に呆然と佇む彼の身体と足の下で鼓動を繋ぐマシンの息吹、奏でる重低音は狭い廊下の壁に反響して悪魔の咆哮に似た何かをコウの耳へと忍び込ませる。しかしそれすらも今のコウの意識を元へと立ち戻らせる事は叶わなかった。

赤い光の下に零れて大きな池を作る同じ色が黒く見えると言う事をコウは初めて知った。

赤い光の下で斃れた人が動かないと言う事をコウは初めて知った。虚ろな目で追う景色の全ては沈黙を伴う地獄の光景、纏わり付く死の残滓は身体の奥に染み透る様にコウの心へと囁きかける。尊厳を蹂躪された揚句に無作為に満遍なく与えられた人の業の果ては彼らの未来を奪った証拠を此処彼処に刻んで何処かへと消え去っている。息絶えた彼らの呪いは未だに生きてここに立つコウ目がけて叩きつけられる。

なぜ、死んだ？

なぜ、ころした？

なぜ、イキテいる？

その囁きもその景色も全てでは自分の中に存在する悪夢の具現化に過ぎなかった。手足を縛る茨の縄は死者の怨嗟に取って代わり、コウの感情を凍えさせる。生々しい殺戮の現場は即ち形を変えただけの自分の過去、彼らを殺した者と同じ様に自分も同等の罪を犯したあの日のコクピットの中で見る事の叶わなかった想像の世界が今ここにあり。

妄想でしかなかった物が確かな形と輪郭で存在を誇示する、夢や幻などでは無い。過程は異なっていても行き着く結末は同じ場所、死と言う名の終末は此処でも過去でも等しくコウの前に置かれた罪

である。

現実との境界を無くしたコウの鼻孔から忍び込む死臭にどす黒い物が込み上げる。コウは慌ててエンジンを切ってバイクを降りるとその場にしゃがみこんで臓腑を渦巻く醜い滓を吐瀉物として床へとぶちまけた。

後から後から雪崩を打って喉を塞ぐそれらを留めておく事すら困難だった。呼吸の為に動作する横隔膜の全てを動員して行われる懺悔の儀式はコウの中から何もかもが無くなるまで続けられる、胃液ですらも枯渇して空気の滓がコウの口角に泡を残して立ち去る。頭の芯に重い痛みを感じながらコウはそこでやっと無限に続くかと思われた吐き気から解放された。

目の前に迫った床に覗く黒い染み、罪の色と呼ぶにはあまりに穢れていて鮮烈で。コウはじっとそれを睨みつけながら自分を取り込もうとする呪音を無視して心の底で光を放つあの男の影に向かつて尋ねる。

これ程までに惨い罪が正義を名乗る事が出来ると言うのか？ 未来を断絶させて希望を刈り取った鬼畜が語る言い訳などどんな大義名分があるうとも正当化される物ではない、それでもお前は義によって戦う事が出来ると言うのか？ 俺もお前と同じ様に。

応えてくれ、ガトーっ！

床へと突っ伏したまま動かなくなっていたコウの手がピクリと何かに反応した。それは道を見失った旅人が何かの手がかりを得た瞬間に見せる閃きによく似ている、コウの意識は現実の中でありながら嘗てよく見たあの悪夢の中を彷徨って、そして正確にその続きをなぞっていた。夢の最後に辿り着く男の声はやはり自分を光の彼方へと誘う言葉を、そしてその後に見れる声と。

「 二十。」

コウの口がそう呟くと床に着いた両腕に力が籠った。地縛に張り付けられた身体が抗う様に持ち上がる、震える膝を握りしめてコウ

は赤い世界の床を踏みしめながらようやく立ち上がるうとしていた。

何をしに此処に來た、コウ・ウラキ。

許しを請いにか？

罪を贖いにか？

手遅れだ、お前はもう許される事は無い。血に染まったお前の手が元の色に戻る事などあり得ない、お前は許されざる者なのだ。

だがお前にはまだやらなければならない事がある。

お前には守らなければならぬ者がいる、そうだろう。

万骨の屍を踏み引き、例え六道魔孔の淵へと追い遣られようとも取り戻すと決めたのだろう、掛け替えの無い大切な者を。

食い縛った唇から鮮血が滲む、床に滴るそれが同じ色の黒と混じり合つて分からなくなる。垂れた頭を引き剥がす様に持ち上げる両足が惨劇の床を踏みしめてコウは怒りにも似たその表情のままて遙か遠くに浮かぶ壁を睨みつけた。

「ニナっ！」

木霊す叫びを追い掛けてコウの足が緩やかに動いた。おぼつかない足取りを速めてキースに教えられた場所を目指してひたすらに、それは爆弾でも用いない限り絶対に破られる事無い鉄壁の防護壁に守られた向こうにきつといる。

その角を曲がった直ぐ先に、地獄と一線を画した空間の中に、きつと。

それはまるであの夢から抜け出そうとする自分の意思を誇示するかのよう。光の先にある筈の応えに向かつて手を差し伸ばすコウ、波打つ世界を踏みしめながらやつの思いで角まで辿り着いたコウがそれを目にする事を待ちきれないと言った風情で大声を上げながら曲がった。

「ニナっ！ 大丈夫」

その声は鉄の扉に阻まれて自分に向かつて跳ね返ってくる筈だっ

た、だがコウは自分の声が再び木霊を孕んで吸い込まれて行く現象を、そして事実を思い知り声を失った。

そこにある筈の鉄壁は跡形もなく消滅していた。猛烈な力で擦じ切られたガイドレールと抉り取られたコンクリートと、そして壁の内部に仕込まれていた油圧ポンプの残骸がその場に打ち捨てられたまま息絶えている。何トンもの重量を誇る鉄の扉はコウの視界に届かない通路の向こうに横たわっているのは間違いない、その爆発の大きさが明らかにこの通路の全てを爆砕するに足る威力を持っていたと言ふ事をコウの目に、そして意識と想像力に働きかけた。

「そんな…… なんて」

コウの目から一縷の希望に縋った光が途絶えた。絶望故に齎される新たな黒い淀みがコウの焦点を眩ませる。それすらも凌ぐ圧倒的な暗闇がコウの前に立ち塞がり、コウは絶望と呪いと祈りを緋い交ぜにした咆哮を深淵に向かって解き放った。

「二ナアあつっ！！」

ハンガーの入口に構築されたバリケードは既に扉一枚分滑走路にはみ出している、整備班と二機のモビルスーツ総掛かりでハンガーの中にある目ぼしい物は全てそれに当てた。整備用のケージですらも全て引っぺがした後にあるのは稼働不能のドムだけとなっている、退避壕へと再避難する道すがらにアストナージがモウラにその光景を眺めながら尋ねた。

「班長、どうせ動かないんだからあれもバリケードに使っちゃえばよかったのに。融合炉は動いて無いんだから弾が命中した所で臨界爆発の心配は無いんだし、それに」

「あの装甲は役に立つ、ってんだろ？ そんな事あたしも百も承知さ。」

『あたしの』と言ってしがみ付いたまま離れないジエスと共にドムを弄っている内にモウラは面白い事に気が付いた。鹵獲されたドムの装甲はその全てが一般的に『超硬スチール合金』と呼ばれる、主

に炭素と鉄で構成される無重力下で鍛造したジオン独特の物で出来ている。純度の高い『チタン』を埋蔵するルナツーを連邦軍の勢力下に置かれているジオンにとってそれに匹敵する金属の開発は喫緊の課題だった。大戦前にグラナダを抑えた事に寄ってその足掛かりを掴んだジオンではあったが資源調査の結果、そこに埋蔵されているチタンは質・量共にルナツーのそれには及ばないと言う事が発覚したのだ。材質面での戦力差　　いずれは連邦もモビルスーツを開発するであろう事をジオンの中枢部は予想していたを何とか埋める為に国中の科学者に檄を飛ばした後に採用されたのがこの『超硬スチール合金』だ。鉄と炭素ならば何処にでも存在し、チタンに硬度は及ばないものその取扱いの容易さは各企業での開発部門に重宝された。連邦軍のモビルスーツが『ジム』と『ボール』しか存在しないのに対しジオンのモビルスーツの形状が様々であったのは加工難易度の差による物だったと言われている。

送り付けられて来たドムの装甲に輝が入って無いかを調べる為に非破壊検査を行っていたモウラはその時、この機体の装甲がチタンで出来ている事に驚いた。しかもコクピット周りには連邦軍の最高機密とも言える『ルナ・チタニウム合金』が使われている。確かに純度比率は以前ジャブローで見せられたサンプルデータには及ばないものの、解析された数値は間違いなくそれに匹敵する物だ。

”　なんなんだ、こいつは。全くいろんな事が謎だらけだよ。アビオニクスはアナハイム、機体装甲はチタン。これじゃまるで連邦が創ったモビルスーツみたいじゃないか。”

自分で吐いたその呟きを頭の中で思い返しながらモウラはアストナージの問い掛けに応えた。

「だけどねえ、あたしはなんかあれをこのまま『ハンガークイーン』のまま終わらせる訳にはいかない、つて。そんな気がするんだ。それに勝手にそんな事に使ったら担当のジェスに恨まれそうじゃないか。」

「そりゃ、そうですけどねえ。この期に及んであれが動く奇跡なん



か期待出来そうにもないし、此処が陥落されちまつたらそんな悠長な事も言つてらんないでしょ？」

「忘れたのかい、アストナージ。」

退避壕の分厚い扉を全身の力で引きながらモウラは言った。

「あたし達は兵士である前に、機械弄りが好きで好きでどうしようもない整備士だ。命惜しさに自分の大切な物を投げ出す様なみつともない真似なんか出来やしない。あんたも、そうだろ？」

モウラの言い草にきよとんと眼を丸くするアストナージ、差し迫った危機にも笑顔を絶やさないモウラの形にアストナージは彼女との経験の共通項であるあの日の事を思い出した。激戦の最中に這々の体で雪崩れ込んで来る傷だらけのモビルスーツを一心不乱に整備していたあの時の気持ち、残り少なくなつた予備部品を遣り繰りしてどうやってこのポンコツを無事に戦線に送り出す事が出来るのかに知恵を絞りだしていたあの瞬間。彼らが対峙していたのはジオンやモビルスーツでは無く目の前に置かれた難問奇問の数々で、自分達の生死に関わる事は価値観の埒外に置かれていたと言う事実。

「……　　そういや、そうだった。　　やれやれ、平和つての

は時には人の心を腐らせちまうもんですねえ、すっかり忘れちまつた。」

「それにジェスにとつちや初めての受け持ちだ、あの子の将来の為にも何とかここは無事にやり過ぎて貰わないと。一番最初に取っ掛かった機体の苦勞が大きけりや大きいほど本人にとってはプラスになるからね。」

そう言いながらモウラは退避壕の中ほどで自分の工具箱を抱え込んでじつと座っているジェスのふくれっ面を横目で眺めた。自分の機体だけが参戦出来なかつた事に彼女なりの理不尽を感じて不機嫌になっている、尤もそれはジェスのせいではない事は自他共に分かっているのだが、それでも納得がいかないと言うのは彼女がほぼ一人前の整備士の仲間入りを果たしている証拠だとモウラは思っている。

「ま、あれが次世代のホープだと言う点には一抹の不安を感じますが、  
けど、それより、」

アストナージがモウラの顔を覗きこんで何かを尋ねようとする、  
だがモウラはその質問の先を読んでぼつりと答えた。

「キースなら大丈夫さ、きつと何とかしてくれる。あたし達に出来る事は隊長を信じて此処で帰りを待つ事、それだけさ。」

「まあ、随分と根拠の無い自信があたりで。敵の戦力もさっぱりだしこっちは既に一機墜とされてる、遺体を回収しないままバリケードの材料に使っちゃまった当方としては不安材料がてんこ盛りの状態なんすけどね。」

自分も含めてこう言う惚けた物言い出来る所が大戦経験者の強みだとモウラは思う。バスケスの死で浮足立つ整備兵を一喝して周囲で巻き起こる制圧射撃による爆撃にも怯む事無く指示を出し続ける事が出来たのはやはりあの時の悲惨な現場に居合わせた経験と培われた度胸による物だ。修羅場で構築された死生観と言う物はこんな時にこそ大きな力になる。

それにアストナージはキースの過去を知らない。彼が敵味方入り乱れて戦い続けたデラーズ紛争の稀有な生き残りであると言う事を。「それでも、信用するしかないじゃん？ あの人の事だから今頃は少しでもハンガーを守る為に何処かの高台で、何？」

モウラは自分の言葉をニヤニヤしながら聞き入っているアストナージの顔を見下ろして、その表情の意味に異を唱えた。

「やっぱ、アレっすか？ 『愛』ゆえにつて奴っすか？」

「……うおおつ、鳥肌もんだぜこりゃあっ！」

茶化す様に小さく叫んだアストナージ、恐らくそこには彼なりのモチベーションを保つ為の秘訣が隠されているのだらう。自らを鼓舞する様に冗談でテンションを上げようとするアストナージに向かって、モウラは彼の想像とは違う方針で行く事を決めて答えを放った。

「そうさ、だからあの人の事は私が一番よく分かる。……アス

トナージ、だからあんたは、」

人の悪い笑顔でニヤツと笑ったモウラが言った。

「『マリちゃん』しか彼女が出来ないんだよ。」

モウラの予想外のカウンターの前後ろに帽子を被ったアストナージの口が開いたまま、凍りついた。

「なあ、敵はどうなってる？」

ゲルググのコクピットは居住性を考えてジオンの他の物よりは大きめに作られている。それでも普段は地上勤務に着いているアンドレアはヘッドセットと言う命綱に向かって縋る様に問いかけた。逃げる事も出来ないこの空間で赤外線モードで表示されるモニターを見つめながらアンドレアは未だに自身の不運を心の中で嘆いている。声音に漏れだすその思いを嗜めるように奇しくも僚機となったマルコは陽気な声で答えた。

「今んとこ、何にも……少しは落ち付いて。敵が構内に侵入したらすぐにお前に知らせてやるから。」

「何でお前はそんなに呑気で居られるんだよっ！もうすぐ敵がやって来るんだぞ？それも兵曹長みたいに俺達を殺しにっ！」

「知るかよ、そんな事。それに兵曹長みたく殺られるツてんなら、そうなんじゃない？」

陽気さは影を潜めて、もうこれで何度目だよと言わんばかりに溜息交じりで応えるマルコ。跪いたままじつと地面に手をつけて、掌にある振動感知センサーのグラフを眺めながらアンドレアに言った。

「そんな事よりあんまりバタバタ動くなよ、肝心な物が分かんなくゃあいざと言う時に手遅れになっちまう。」

「落ち着いてなんかいらねえよっ、もうじき死ぬかも知らないんだぞ、お前も、俺もっ！」

「おい、」

ゲルググのモニターを足元に向けてまで抗議するアンドレアをマルコのゲルググが睨みあげる。

「視線を切んなよ、さつき兵曹長も言ってただろ？ 外部センサーの感度は最大にして、少しでも変化があったら俺に知らせてくれ。お互い持ちつ持たれつじゃないと生き残れるモンも駄目になるかもだぜ？」

「生き残るって、お前まだそんな事」

「そりゃどう考えたって死ぬ確率の方が高いさ、でも生き残る可能性が無くもない。じゃあ少しでもその可能性を高める為の努力ってのは必要だろ？ 何にもせずにはただやられっぱなしってのは無しだ。」

冷静な語り口で淡々と語るマルコの言葉にアンドレアは返す言葉もない。弱気の虫に苛まれる僚機に向かってマルコは力付ける様子を言った。

「それに中尉は何も俺達に『敵を倒せ』って言ってる訳じゃない、あくまでも『此処で立て籠もれ』って言ってるんだ。お前の持つてるそのバズーカと、これだけの弾がありゃあ敵の二・三機は何とか抑えられるだろうよ。」

「本当か？」

「ああ、もっともお前がしっかりと自分の役目を果たす事が出来たら、の話だけだな。」

足元に所狭しと置かれている弾薬の山に視線を走らせながらマルコが言った。

「大体これだけの機材をバリケードにしたんだ、まかり間違ってもさっきの野砲に抜かれる事はねえだろ。……安心したんならさっさと前向いて仕事しろ。いつまでもぐずぐず言ってる」と

「」

マルコの目はアンドレアの足元でバリケードの芯になっているゲルググの残骸に注がれた。

「お前の足元に居る兵曹長に化けて出られるぞ？」  
「しっかりとしろ、この馬鹿」  
「ってな！ モニターに感つ、……おいでなすった。」

一気に緊張の走るマルコの声にアンドレアが慌ててバズーカを急造のキューポラから突き出す。

「敷地内に侵入、中量級二足歩行型。ザクかグフクラスが三機南195度からこちらに向かっている。」

マルコはそこでセンサーを閉じて足元に置かれたライフルを手を取った。ここから先はもう必要ない、やらなければならない事は一つだけだ。銃把のコネクターを火器管制に接続しながら肩に据えたマルコに向かって、震え声のアンドレアが尋ねて来た。

「なあ、マルコ。一つ聞いていいか？」

「何だよ今更、ビビってんじゃねえよ。」

「……もし、敵の数が三機より多かつたら、俺達どうなるんだ？」

アンドレアのその問いに暫くの沈黙が流れる、気休めでもいい、何らかの回答を欲するアンドレアが堪り兼ねて声を荒げた。

「おいっ、マルコっ！ 何とか言ってくれよ。どうなっちゃうんだよ俺達」

「そんな事、」

還つて来たマルコの声には一瞬前までの明るさは見えない、何かに憤る様な怒りを込めてアンドレアの問いに向かって答えを叩き返して来た。

「考えたくもねえ。」

ハンプティは手元に残った最後の一発をどうするか迷っていた。

ハンガーの手前に構築されたバリケードをレイクルの中心に収めながら装填されたままの榴散弾を使おうかとも考えた、だがそれではオークリー内に侵攻しつつある味方に楽をさせてしまう事になる。それに榴散弾と言う弾種は打撃力は大きいが貫通力には乏しい、もし万が一あのバリケードが見た目以上の強度を持ち合せているとしたら最後の一発は無駄弾になりかねない。ハンガーに直接撃ち込んだ所で耐爆コンクリートには輝一つ入らないだろう。

どちらにしても次に予定する鉄鋼貫通弾を装填するにはこの弾を使わなくてはならない、ハンプティは照準モニターの中心からバリケードの影を逸らしてその周囲を手当たり次第に探った。高く聳え立つ管制塔の基部は大きく抉られて既に使用不能になっている、その他に手頃で狙いやすい目標となると。

「？ あの建物」

そう呟いたハンプティの目に留まったのは無傷で残る建物の三階部分の窓だった。既に全基地内の照明が非常照明に切り替わっているにもかかわらず、その階の一角だけは何故か仄かな白色が残っている。

「と、言う事はあそこにはまだ誰かが残っているとと言う事か。」

味方の地上部隊ならばそんな所で目立つ様な真似をする筈が無い、ハンプティの気まぐれはその階の窓の一角をレティクルの中心にしつかりと捕捉した。

そうしなければその患者は助からない、医務室に担ぎ込まれて来たどの怪我人よりもその患者の容体は重篤且つ危急を極めている。

モラレスは唯一自家発電を備えている手術室の無影灯に火を入れた。煌々たる明かりに照らし出されたその患者の顔面は大きく抉られて顔全体の輪郭を損なっている、そして右上腕部からの全欠損。出血も酷い。

「おいっ、元気のある奴の中にA型の奴はいるか？ いるならここに来てくれ、直に輸血する。」

クロスケット  
交差適合試験をしている暇など無い、モラレスの呼び掛けに隣室で手伝っていた軽傷者の何人かが名乗り出た。患者の隣のベットに寝かせてすぐさま輸血針を腕に差し込む、透明な管を伝って患者の腕へと届くその色がまるで命のかけ橋の様に男の生命を現世に繋ぎ止める。

「儂の声が聞えるか？」

モラレスが耳元で呼びかけるとその男は僅かに頭を揺らして反応

する、意識がある事を確認したモラレスは患者を元気づける様に小さく笑いながら囁いた。

「大丈夫じゃ、お前さんの怪我は酷いが助からないと言う訳じゃない。儂は」

そう囁きかけるモラレスの脳裏に浮かんだあの日の光景。同じ様な怪我をしてルナツに運び込まれた連邦軍の士官の姿。

「前にも同じような患者を手掛けた事があるからの、心配せんで大人しくそこでゆっくり寝ておれ。」

そう言いながら残り少ないモルヒネを注射して吸入器を手取るモラレス。全身麻酔の為の薬剤を常備していない為に笑気ガスとの併用で何とか同等の効果を得ようと考えたのだが、そのボンベのバルブを開くのもこの基地に赴任して以来初めての事になる。モラレスは果たしてガスに消費期限などあったのかな、と考えながらゆっくりとバルブを開いて男の口にカップを押し当てた。

撃沈された『スルガ』のクルーは全員救助されて連邦軍の後方支援基地としての任務に着くルナツへと移送された。ヘンケンとセシルの機転によって全乗組員への被害は何とか回避する事が出来たが、それでも自分達の艦を失った事には変わらない。まるでペットシヨップに預けられた子猫の様に所在無げにうろつくとルナツ内を歩き回る一行からモラレスだけが呼び出されたのは、彼が軍のERUに勤務経験のある貴重な生き残りであると言う事を知られた為だった。館内放送で名指しで召集を受けたモラレスが連れて行かれた先は本人も納得の医療区画、そこには停戦後も続けて前線より送られて来る負傷者と医療関係者でこった返す野戦病院と化している。「こちらです、Dr.モラレス。」

足早に先導する若い士官の後をそれ以上の速さで小走りに走るモラレス、百人は収容出来るかと思われる巨大な処置室をガラス越しに見ながら白塗りの壁で囲まれた長い廊下をひた走る。此処にいるのはまだ軽傷者の類だ、自分の手を必要としている物はその先にある

るICU（Intensive Care Unit：集中治療室）  
区画に居るに違いないとモラレスは自覚していた。一刻を争う事態  
に母艦を失ったばかりの老医師は見かけ以上の足の速さで白衣をは  
ためかせている。

「とにかく患者の容体は手術室で見る、検査データは全てそこに回  
してくれ。X線写真と損傷部分のMRI（Magnetic Re  
sonance Imaging system：磁気共鳴画像装  
置）も忘れるな。」

「レントゲン、ですか？ いえ、それはまだ」

「ならば直ぐに撮影しろ、時間はそんなに掛からん筈だ。外傷部分  
の全体像を把握する為には広域に撮影できるX線写真の方が分かり  
やすい。」

横を走る若い士官に指示を出しながらモラレスは通路の左手にぼ  
つかりと口を空けている無菌室へと飛び込んだ。既に何人かの看護  
師が身支度を澄ませてモラレスの為の白衣を手に待ち構えている、  
モラレスがそれを横目に洗面台へと向かった時に鏡越しに一人の大  
男の姿が目にと留まった。

「悪いが此処から先は医療従事者以外立ち入り禁止じゃ、  
何処のお偉いさんかは知らんが」

「貴様がDr.モラレスか？」

野太い声で居丈高に喋るその義眼の大男はモラレスの言葉など何  
処知らぬ風とばかりに聞き流して尋ねて来る。モラレスはこれ見よ  
がしに胸にちりばめられた勲章と階級章を一瞥して言った。

「人に物を尋ねる時は先ず自分から名乗るのが世の通りじゃ、佐官  
クラスになるとそんな事も忘れてしまうのか？」

挑発するモラレスの言葉に男の顔が怒りで歪む、だがその大男は  
直ぐに気を取り直した様に丁寧な口調でモラレスの言葉に従った。

「私は作戦参謀本部長次席補佐、バスク・オム少佐。わざわざ私が  
こんな所にまで出向いたのは貴様に頼みがあるからだ。」

「ほう。」



モラレスは洗った腕を無菌ボックスに差し込みながらバスクの方へと振り向いた。残った水滴を乾燥させる滅菌風と噴きつけられるエタノールの感触はモラレスの表情を臨戦態勢へと変化させる、それは軍人達が戦場へと向かう時と全く同じ眼光をモラレスに齎していた。

「名乗りはしたがその無礼な口調を直す気は無い、とな。……  
で、儂に一体何の用じゃ？」

「単刀直入に言う、貴様が今から手術するその兵士を何としてでも助ける。」

「顔も容体も診てもいない怪我人の命を端から保障しろと言われても困る、それにあなたとぐずぐず問答している間にもあなたの望みが叶えられる確率は低くなる。儂も簡単な説明を受けただけじゃからその所は何とも約束しかねる。」

看護師に白衣を着せて貰いながらモラレスはバスクの命令に淡々と答えた。看護師が手にした手袋をちらりと見たモラレスがすぐさまそれを装着する事を拒絶する。

「それじゃない、あっちの緑色の方にしてくれ。ラテックスだとアレルギーの可能性がある。」

「…… 幸いな事に彼はまだ生きている。…… 彼は一年戦争の英雄だ、今後の予定もある。だからこんな所で死んでもらっては困るのだ。手段は問わない、何としてでも助けると貴様に命令している。」

「英雄、ね。人を最も多く上手に傷付けた者に与えられる、儂ら医に携わる者にとっては聞きとつもない蔑称じゃ。じゃが認めとつはないがあなたと儂で共通した認識があると言う事もまた事実、この者がどういふ素性や犯罪者の類であれ何としてでも助けたいと思う心は同<sup>おん</sup>なじじゃ。」

肘の部分までカバーする手袋を着け終わったモラレスの顔にマスクが装着されて、その表情はバスクの目からは窺えない。だがモラレスは壁に凭れて怒りを包み隠そうと努力しているバスクの顔を鋭

い眼光で見上げながら言った。

「あんたの命令は聞けんが僕は僕の信念に従って精一杯の努力をしよう、それだけは約束する。」

「貴様、仮にも連邦軍本部の佐官の命令が聞けないとは」

「階級で話をするというのならばあんたと僕は同じ少佐じゃ、嘘だと思ふのならばデータベースに照会するとええ。それとも歳で話をしてみるかね、小僧？」

モラレスの両の目が放つ輝きがバスクの表情を凍らせる。唇をわなわなとふるわせながら義眼のレンズに照明の光を反射させたまま固まったバスクに向かってモラレスは鋭い口調で言った。

「分かったか？ 分かったら一般人は早く『僕の部屋』から出てっ  
てくれ、仕事の邪魔になる。」

真つ白な壁と人が死んでもその生命活動を無理やり維持させる事の出来るテクノロジーを満載した様々な医療機器、器具、薬品。あの時彼の命を繋ぎ止める事の出来た要因の全てがここには無い。だがモラレスは自分の矜持に掛けてもその兵士の命を諦める事など出来なかつた。例えば片腕が無くなつても、顔の半分が壊れても人間は生きて行く事が出来る。生きてさえいればきつと新しい明日が新たな運命を携えて人を迎え入れる筈なのだと信じている。生者の生み出す物が有益な物であれ無益な物であれ、それは意味のある物に違いない。死者には出来ない創造と言う力を發揮して未来を切り拓くのは生者にしか出来ない役割なのだから。

あの時拒んだラテックスの手袋が無くても二本の手は健在だ、無痛メスが無くても自前のよく手に馴染んだメスもある。そして自分には同じ症状の患者を手掛けたという自信と経験がある。

「臆するものは何もないわい。いつもの通りにやればええ。……

じゃ、準備はええか、モラレス？」

術前の儀式の様に自分に言い聞かせて手術台の前に立つモラレス。兵士の胸に置かれた小型の心電図テレメトリーに目を遣って、弱く

はあるが比較的安定している波形を確認して徐にメスを取った。まず手掛けるべきは頭部の損傷箇所、脳挫傷の可能性を考えて脳圧を下げる為に開頭処置を施さなくてはならない。腕の離断部分の処置はそれからでも十分間に合う。

「 ？ 何の音じゃ？ 」

あの日に行った施術を思い出しながら患部へとメスを当てたモラレスの手が止まる。治まりつつある誘爆音の影から突如として現れた甲高い風切り音を耳にしたモラレスの記憶はその音が何から発生されるかと言う事を瞬時に検索して回答を導き出した。脳裏に浮かんだその答えを読み込んだモラレスの身体がメスを手放して反射的に手術台の兵士の身体を庇って、怪訝な顔をしてその行動を眺める周囲の兵士と隣の部屋で痛みに耐える大勢の仲間に向かって大声で叫んだ。

「 皆、伏せろおっ！ 直撃が来るぞおっつ 」

！！

ハンプティの放った榴散弾は寸分の狂いもなく施設棟A棟の三階部分に命中した。砕けるコンクリートと歪む鉄骨、そして弾け飛んだガラスの破片が雨の様に中庭へと降り注いだ。

「ドクッ！」

モニターの隅に移った直撃の惨状を見たキースが思わず叫んだ。

医務室の壁を直撃した榴散弾はその部分を抉る様にして三階部分に灯されていた明かりを根こそぎ削り取る。黄泉路へと続く風穴の様にぽっかりと空いた穴からは電気配線のショートによって齎される断続的な光が見え隠れしていた。

「くそおつ！」

そこに運び込まれていた仲間達の身を案じ、そして最悪の結果を思い描いて毒づくキース。どれだけの怪我人があそこに運び込まれた揚句に的にされたのかと思うと心の底から怒りが込み上げて来る、頭に芯に灯る復讐の炎を必死で鎮火しながらキースは状況を冷静に分析しようとモニターの先に潜む高脅威目標の姿を想像した。

やはりこのまま野砲を野放しにしておくのは危険だ、トリントンの時も長距離砲を備えた重モビルスーツのお陰で指揮系統を一瞬にして粉碎されたではないか。お陰で情報を失って混乱した味方は自軍戦力の半分にも満たないガトー達に蹂躪された揚句に部隊を全滅させられた、あの時の悪夢の再現を許す訳には。

だが自分の決心を既に戦闘状態に入っているアテリアとマークスに伝えるにはどうしたらいい？

無線は傍受されている恐れがある、自分が単独で野砲を潰しに向かうという動きを少しでも敵に知られたら直ぐに対抗措置を取られる事は間違いない。自分がもし敵の立場なら一機の増援で容易く足を止める事が出来る、交戦している間の隙を突いて狙い撃ちにすればいいだけの話。それを可能にするだけの腕が野砲のパイロットには、ある。

敵に傍受されない通信手段

一番確実な方法は接触通信だ。

機体同士を接触させて表面を振動させる事によって相手との通話を

可能にする、だがそれは敵との交戦が始まる前のごく限られた時間にしか使えない。動き回りながら出来る物ではないからだ。

その他に言えば無重力空間下におけるケーブル通信、これはア  
ルビオンでもモウラと自分でよく使っていた手段だ。空間下に係留  
されたままのモビルスーツに取り付く為に移動用のワイヤーを整備  
士は使用するのだが、そのワイヤーを使って機内のパイロットと会  
話を行うシステムだ。これならば機体の状況を確認してから移動す  
ると言うタイムロスが少なくなるとモウラは言っていた。丁度系電  
話の様にワイヤーを伝わる振動が

電話？

キースは自分の耳に掛けられたままの携帯の存在に気付いてはつ  
とした。確か携帯電話にはグループ通信機能が

稲妻の様に頭を駆け巡る閃きがキースの行動に確信を与えて後押  
しする。無線封鎖を解除してスイッチをオンにしたキースがヘッド  
セットのマイクに向かってアテリアに呼びかけた。

「02から05、聞こえるか？」

キースの呼びかけに反応したのは雑音だった。背筋が寒くなる様  
な悪い予感に襲われたキースが再び呼びかけようと口を開いた刹那、  
呼吸を乱したままで応えるアテリアの声が返って来た。

「こちら、05。02どうぞ。」

仲間の無事に安堵の息を微かに漏らしたキースが間髪を入れずに  
尋ねた。

「携帯は今持つてるか？」

「携帯 電話？ あ、はい。持ってますが」

「

「何とか交戦の間を作って携帯のグループ通信をオンにしる、無線  
は敵に傍受されている可能性がある。携帯ならばスクランブル回線  
を使っているから敵が回線を掌握するまでに時間がかかる、これよ  
り一切の通信を携帯で行う、グループナンバーは6番だ。」

「えっ、…… って言うかそんな隙を作ろうにも マ

「クス、危ないっ！」

キースのヘッドホンを通じて届く融合炉の唸りでアデリアの機体の出力が目一杯まで上昇した事が分かる。恐らく二人が対峙している敵はかなりの強敵だ、自分よりも、あの三人よりも。

「マークスと連携して前衛と後衛を入れ替えて距離を取れ、何とかして携帯を繋ぐんだ。これからの作戦を指示する。」

「携帯だつて？」

退避壕の中でキースとアデリアのやり取りを耳にしたモウラが思わず間に割り込んでその理由をキースに尋ねようとした。だがマイクを手に取った瞬間にその先をアストナージに抑えられる、目の前に翳された副官の手の甲を驚いて見つめるモウラに向かってアストナージが言った。

「駄目ですつて。今中尉も言つてたでしょ。敵に傍受されてる可能性がある』つて。多分中尉は何かを掴んだんですよ、でなきゃそんな事を言う訳が無い。」

嗜めたアストナージが服のポケットから携帯を取り出して機能を空間に表示した。グループ通信機能をキースの言う通りに6番に設定すると耳に掛けて通信の再開を待つ。

「なるほど、中尉もいい事を思い付いたな。携帯の回線はプライバシーの保守の為にスクランブルが掛かっている、敵さんが躍起になつてそれを解析に掛かったとしても夜明けまでには出来るもんじゃない。」

「それにグループ通信は携帯の中の電話帳に記録されている相手だけ有効だ、生き残ってるグループの中に携帯を持つてる奴が居さえすれば高い確率で連絡を取る事が出来る。さすがキース、目の付け所が一味違うわ。」

既に二人の会話は背後で戦況に耳を澄ます他の整備士の耳にも届いていた。名々が自分の携帯を引っ張り出すと通話の不可に関わらず基地内での自分の知り合いに連絡を取り始める、活気を増した

退避壕の状況にモウラは一筋の光明を見出した様な気がした。

「携帯か、それは気が付かなかつたな。」

チエンの報告を受けたヘンケンは足早に通路を歩きながら予備電算室への到着を急いでいる。既にパットとキャンベルの姿はなくヘンケンの背後で銃を構えたセシルが自分の携帯を取り出してその事を連絡している最中だ。

「敵がこの事に気が付いてアンテナを潰しに掛ければそれまでですが、かなり広範囲に散らばってますからそれには時間がかかります。それにこれで基地内の通信ネット網が構築されればこちらにも有利になる筈です。」

「有利になる？ …… まあ確かにこの状況から悪くはなり様が無いとは思うが。」

「基地内の通信には各通路に設置されているターミナルが使用されます。予備電算室で現在使用されているターミナルを検索して、携帯から発振されている指向性電波を捉えて発信源を特定すればそれはそのままIFF (Identification Friend or Foe: 敵味方識別装置) の代わりになります。」

確かにこの混乱した状況下で自軍の部隊の状況を確認出来るという事は指揮をする段階に置いて必要不可欠な要素ではある、だが

「しかし自分達の状況は把握できても敵の状況はどうやって把握する？」

「それこそ簡単です、敵がやろうとしている事をこちらがお見舞いしてやればいい。相手が連邦軍だって言うんなら相手の通信を傍受してその発信源を特定して追跡します。モバイルスーツはともかく何処かで息を潜めている地上部隊が一度でも何処かに無線を発信すればそれで十分、どうせ奴らは携帯なんか持ち合わせちゃいないでしょう。」

ハンガーへと続くH-1通路の長い廊下を半分ほど過ぎたその場

所に置かれた鉄製のドア、さつきまでアデリアやマークスと共に過ごした秘密の小部屋の入口の取っ手に手を掛けたチェンがヘンケンの方を向いて軽くウインクをした。

「これがホームの『地の利』って奴です、奴らがこれから相手にする敵がどれだけ恐ろしいかって事を思い知らせてやりましょう。

……ま、彼らがそれに気が付いた時には既に遅しって所でしようが。」

月明かりの下で縦横無尽に走り回るジムに翻弄される二機のザク、マークスは赤外線探知で表示されるモニターを必死の形相で睨みつけながらラーズ1の振るうマチェットの軌道を追い掛ける。間合いの取り方や出し入れ、そして肘や手首のモーターを使ってあらぬ方向から襲いかかる剣筋を必然と偶然の組み合わせで凌ぎながらマークスは、その相手が接近戦に於いては只ならぬスキルの持ち主である事を肌身で思い知った。

自分やアデリアの乗っているザクには二ナの考案した『インテリジェント・レコード』搭載のOSが組み込まれて、しかもそれは既実践並みの模擬戦を経験済みだ。加えて今こうして敵と戦っている間にもそのデータは逐一書きされて自機のモーションサポートを行っている筈だ。

だが敵の動きは蓄積されて行く経験を嘲笑うかの様に更なる高みに黒塗りのジムを押し上げる、自分の動きや判断がそれに着いて行けなくなつたその瞬間が最期の時になるのだという事をマークスは戦慄しながら認識した。

「マークスっ！ 援護するから下がってっ！」

アデリアの叫びが周囲の山肌に木霊したかと思うと突然横合いから曳光弾の五月雨が二人の間合いを埋め尽くした。その行動を予測していたかのように一挙動で後方に飛びずさつたラーズ1は無線を使ってアデリアに話しかける。

「無駄だ、アデリア・フォス。お前の腕でそれは当たらない、俺と



戦いたいのならば、抜け。」

「うるさいっ！ 人の会話に堂々と割り込むなっ！」

怒鳴り付けて耳障りなその声を遮断する為は無線のスイッチを切る。アデリアにしてもマークスと同様の認識はある。一対一で叶う相手じゃない事は承知、果たして二人掛かりでも勝てるかどうか。

その時アデリアの耳に掛けた携帯からマークスの声が聞えて来た。触ってから日も浅い携帯なる代物をマークスは短い期間で何とか常人並みには使いこなせる様になっていた。

「03から02。携帯の設定を完了しました、指示をどうぞ。」

荒い息を整えながらの会話はアデリアの耳に不明瞭な雑音を紛れこませる。ラース1の姿を睨みつけながらアデリアはキースからの返答を待つ、だがキースの指示はアデリアにとっては驚嘆に値する物だった。

「二人ともよく聞け。俺はこれから敵の野砲を潰しに行く、お前達は二人掛かりでその敵をそこに抑え込むんだ。」

自分が息を飲む音をアデリアは聞いた。復唱をしなければならぬ事も忘れて声を失う、それはマークスにしても同じ事なのだろう。沈黙を守らざるを得なくなった二人に対して再びキースが口を開く。「このまま野砲を野放しにしておいては被害が拡大する一方だ、俺はこれから単機で野砲を潰してそのまま敵の背後を突く。お前達はそいつが俺に横槍を入れて来ない様そこに釘づけにしておくんだ。」

…… 出来るか？」

例えば。キースに援護を頼んで此処で三人でこの敵を倒してそれから野砲を潰しに行く。

例えば。この場をいったん引いてハンガーに立て籠もりながら敵の出方を待つ。

様々な可能性と勝機を考慮してそれ以外の選択を模索するアデリア、だがキースが提案した一か八かの賭けに勝る案を思い付く事は出来なかった。自分達の位置からは基地の様子を目にする事が出来

ない、だが断続的に起こる爆発音と砲声は成り行きを観察するキースにその選択をせざるを得ない何らかの危急を与えたに違いない。そうでなければ戦力を分散するという戦術上での愚行を選択する筈が無い。

もしかしたら野砲の護衛は複数存在するのかもしれない、敵の配置も総数も不明なままで敢えて単機突入を掛ける事は無謀とも言える。

あともう一機、モビルスーツ手駒が有れば。  
もつと自分に力が有ればっ！

「…… やります、自分が此処を何とかして見せます。頃合いを見てアデリアを援護に向かわせます、隊長は一刻も早く野砲を。」

暫しの沈黙はマークスの脳裏にも駆け巡った事態想定を終える為の時間、だがその声には強い意志と決意の影が見え隠れする。自分の存在までも切り離してラーズ1に対峙しようとするマークスに向かってアデリアが叫んだ。

「なに言ってるのっ！？ あんた一人で何とかなる訳ないじゃないっ、隊長は二人で押さえろって言うてるのにどう言うつもりっ！？」

「奴の狙いはお前だけだ、お前と言う存在が無ければ奴の執念も半減するかもしれない。現状奴の力を少しでも削ぐ事が出来れば後は俺一人で何とかなる、今まで貯めた貯金データを全部駆使してでも奴を此処に止めて見せる。」

「そんな、マークスっ！」  
「それに俺はお前の編隊長だ、エレメントリーダー部下をむざむざ死地に置いておくんて出来るかよ。…… 言ったる『お前の事は俺が守って見せる』って。」

卑怯だ、とアデリア。心の底でそう叫びながら震える唇が次の言葉を忘れてしまう、有無を言わさぬ指揮官としての声にはどうにも逆らえない。例えばそれが内なる心の叫びに逆巻く濁流を流し込む様な理不尽であったとしても。

「…… 05より03へ、了解。」

そう答えるのが今のアデリアには精一杯だった。此処で言い争っている時間も暇も残されてはいない、ただ自分に与えられた任務は此処でマークスを援護しながら離脱の機会を伺う事、そしてキースを援護して野砲陣地を制圧して敵の背後を取る事。そうしなければもつと大勢の仲間が命を落とす事になる。

「戦う力を持った奴が戦わなければ戦争は終わらない、一度始まった物をどれだけ少ない犠牲で収める事が出来るか。俺達はその為に、今日と言う日の為にモビルスーツに乗る事を選んだんだ。だから、迷うな。」

マークスは出撃前にあたしにそう言った。だからあたしは

スティックを握るアデリアの手に力が籠る。それが自分の任務ならば、せめてそれまで自分の力の全てを尽くして奴の力を削ぎ落す。マークスが生きてあたしの元へと還って来られる様に。

瓦礫に埋め尽くされた千畳の広間は既に境目すら失って暗闇に眠る、その一角がゆっくりと持ち上がったかと思うと突然埃まみれの白髪頭が持ち上がった。飛礫の打ちつけられた場所に青黒い痣を浮き上がらせて、所々に血を滲ませて。

しかしモラレスは健在だった。跡形も無くなった医務室の惨状を見回しながらわが身も顧みずに激交じりの大声を飛ばす。

「おおいつ！ 大丈夫かあつ！？ 息のある奴は返事をせい、直ぐに行つて手当てしてやるっ！」

しかしその声に反応する者は無い。空しく吸い込まれて行く自分の呼びかけをそのままにモラレスは自分が庇った、手術台の上の瀕死の仲間の姿を目で追う。頑丈な台は至近の爆風にも持ち堪えてモラレスの身体の下にある、だがその男の胸元に置かれたテレメトリに起伏が刻まれる事はなかった。無残な傷を晒したままこと切れた兵士の開き切った臉をゆっくりと手を翳して閉じたモラレスは自

分の周囲を取り囲むひどい有様に溜息をついた。

男を助ける為に輸血に立ち会った軽傷者の殆どがそこには居なかった。ある者は崩壊した瓦礫に埋もれ、またある者は衝撃波に巻き込まれてその肉体を千々に千切られたまま打ち捨てられる。モラレスだけが大した傷も無くそこに立っているという事は奇跡以外の何物でもない様に思う、だがそう思ったモラレスが自分の足元に目を遣った瞬間にその考えが間違いである事に気付いた。

瓦礫の隙間から差し出された青白い手が空に向かって広げられたまま冷たく固まる、それは恐らくモラレスを守ろうとして楯となった男の最期の願いをモラレスの感情に強く刻み込んだ。

「……ばかもんが、こんな年寄りを庇って死におotte。」

険しい目で見下ろしたモラレスが苦汁を声に滲ませて跪く。命を失った尊い手をじつと握りしめて目を閉じ、誰にも等しく訪れ誰にも等しく手向ける最期の祈りを捧げた。

兵士とは楽な商売じゃな、とモラレスは思う。こうやって殺し合えば一仕事、しかも誰に咎められる事も無い。だが奴らが手管の限りを尽くして傷め付けた者達が運び込まれた時から自分達の戦争は始まる、それも圧倒的に不利な状態から。

苦しみに耐えかねて？き苦しむ多くの命を救って明日の朝日を拝ませようと、だが戦場の医に携わる多くの同胞の命を啜って今尚継続される争いの類は過去も現在も、そして未来に至るまで途切れる事無く続くのだろう。その度に己の限界を超えて、己の矜持に賭けて戦い続けようとする医療と言う至高の芸術をモラレスは誇りに思う。

今また大勢の人間が此処で命を落とした。己が無力を知り、そしてその記憶を胸に刻み込んで再びこの手に掛かる大勢の戦傷者を助け上げる。何度繰り返せばいいのだろうか、こんなゴールの見えない戦いを。人が争わなくなるまでか？

そんな日が来る事など決して無いだろう、人が人としてこの世の頂点に君臨する限り、永遠に。違うと言うならそいつに問おう、

カイン』は何故『アベル』を殺した？

「……………？　そう言や、あの男の傷　　」  
不条理の怒りに痛む心を押さえたモラレスがふと、手術台の上で命を落とした男の傷を思い出して呟いた。

同じ状況と同じ傷、自分が手がけた手術であればほどの難易度を誇る物は稀だった。奇跡的に命を取り留めた後に彼に与えられた物はチタン製のマスクと生き残った視神経に接続されたCCDカメラ、そして医学検証と称して試作された武骨なモーターだらけの義手だった。それまで主流とされた筋電義手とは異なりそれには生体信号を取り出す為の電極が何処にも無かった事を覚えている。

「……………　やれやれ、儂も相当慌てておった様じゃ。助けた方がいいがその後の事まで考えてはおらんかったとはな、あの男と同じ装具があるとは限らんじやろうに。」

脳をカバーする為の金属のカバーとCCDまではモラレスの知識からでもその接続方法は推測出来る、だがあの義手に関してだけは謎のままだった。試作品を手にモラレスの仕事場へと姿を現したその科学者は全く新しい発想での義手だと言っていた。脳波パルスを増大させる事によって漏れだす精神感応波を捉えて作動させる、とか何とか。

「むう、これだから歳を取ると……………　記憶が曖昧になっていかんわい。確か　　」

そう、薬物を使って意図的に脳波を活性化させる、と言っていた。  
薬物っ。

モラレスの足はその閃きに従って無意識に部屋の隅へと歩を進める。部屋の隅に作り付けられたカルテの棚、粉々に砕け散ったガラスと歪んだ扉を強引に引き剥がしてモラレスはその内部を残らず床にぶち撒けた。

「確か、この辺にあの時のカルテと資料が　　」  
迂闊だった、とモラレスは思う。脳を活性化させる薬物と言えば伍長に使用された物と傾向が似ている、資料には患者に施された全

ての治療の記録と治験記録が記載されている筈で当然そこには使用された薬品の全ての構成式が記載されていなくてはならない。床に広がった紙製のファイルを一つ一つ手に取るモラレス。

施設棟A棟の壁を破壊した榴散弾、壁に大穴を空けたのは僅かに遅れて到達したキャニスターによる物だが先陣を切って破壊したのはばら撒かれた鉄製の弾による物だ。広範囲の破壊を主とするその弾体は幾つもの穴を壁面に穿ち、そしてその内の何発かは貫通して手術室のボンベに命中した。

笑気ガス 亜酸化窒素と一般に呼ばれるその気体は酸素と混合する事で爆発的な燃焼速度を發揮する。隣接して置かれたそれぞれのボンベに空いた小さな穴から内圧の減少によって漏れだした笑気ガスが酸素ボンベの中へと侵入する。純粋酸素との混合気はボンベの中で循環して底面に空いた小さな穴から漏れだして壁面を駆け上がる。

破壊された壁面からぶら下がった電気配線は無秩序なショートを繰り返してその時を待つ、やがて舌を伸ばした見えない火竜はその先端を断線した配線へと伸ばした。

点火。

爆発的な燃焼力を持つ酸素が一瞬にしてボンベの中へと炎を引きこむ、三百度で熱せられた混合気は一瞬にして窒素と酸素に分離してその体積を二倍以上に押し上げた。強度の弱体化したボンベを一瞬の内に破壊する内圧と炎の塊、

それは巨大な手榴弾だった。

「あつた、これじゃ。」

モラレスが手に取ったファイルは薄暗い中ではつきりと分かるほど古ぼけていて付箋だらけだ、思えばこの頃が一番人を救うという事に対して真摯な気持ちで向かい合っていたのかもしれない。何度も何度も読み返した跡のあるそのファイルの付箋部分を開きなが

ら一枚一枚目を通すモラレス、その目が不意にあるページを開いたまま止まった。

「……これか仕様は、！何とアレはジオン製だったとはな。しかしそれを何故停戦間もないあの時期にジャブローの佐官が採用したのか——ふむ、持ち込んだ科学者の名はエルンスト・ハイデリツヒ、聞かん名じゃなあ。」

瓦礫の上に座り込んでぶつぶつと呟きながら次のページを捲るモラレス、そこには明らかに違う字体で書かれた論文と膨大な量の化学式が記載されている。釘付けになりながら小さく叫んだ。

「あつたつ！……確かにガン細胞からの抽出物質が元になってはおるが、それにしても奇妙じゃ、これではまるで——」

モラレスの耳に届く奇妙な音、だがモラレスは紙面から目を離せない。

「——オーガスタの連中が」

その瞬間、紙面に目を落としていたモラレスの視界を埋め尽くさなばかりの閃光が文字を掻き消す、モラレスは思わずその膨大な輝きを放つ光源に向かって振り向いた。

猛烈な爆音と振動、そして新たに生まれた爆発の火球が三階部分を再び吹き飛ばす。吐き出された構造物はその勢いを借りて二ナのある下士官宿舎と施設棟B棟を繋ぐ渡り廊下を完膚なきまでに破壊した。

足元を揺るがす猛烈な振動と何重もの壁を突き抜けて届く爆音を耳にした二ナと、それを追う特殊部隊の隊員との反応には差があった。追い立てられる兎には周囲の状況など構っている暇が無い、だが狩人の側には少なくともそれを知り、分析に知恵を巡らせる余裕があった。

隊員達はその爆発が再び始まったモビルスーツ部隊の攻撃による物だと勘違いし、もうすぐ手の届きそうな所まで追い詰めた獲物を

見逃してでも自分達の身の安全を確保する事を決断した。建物の周囲の状況と爆発の原因を探る為の連絡に必要な時間はそう多くは無く、安全が確認された後に追跡を再開してもすぐに追いつけるだろうと言う判断だ。

基地全体のロックを解除するマスターコードが自分達の手中にある以上どんな小細工も通用しない、ただ自分達と追う獲物の距離が遅々として縮まらなかったという事については首を傾げざるを得なかった。

開き掛けのシャッターを潜って次の区画へと雪崩れ込んだ彼らが目にする女性の下半身、一人の兵士が腰だめに銃を構えて引き金を引く。だがその弾道は次の区画へ到達する前に降りて来たシャッターに遮られた。小さく舌打ちをして轟音と共に落ちて来る鉄のカーテンの袂を見つめる兵士を手で静止しながら分隊指揮を任されたその男は咽頭マイクに手を当てて、原隊に向かって発信した。

「捕まえたっ！」

モニターを見つめていたチェンが小さく叫んでキーを叩く、途端に下士官区画と中庭の奥にある林に浮かびあがる赤い点滅を睨みながらヘンケンに報告した。

「敵の地上部隊の位置を捕捉。下士官区画三階に四、中庭に十一。恐らく中庭に潜んでいるのが本隊でしょう。」

「基本に忠実にモビルスーツの攻撃が収まるまでは安全地帯に待機か。奴らはどのタイミングで出て来ると思う？」

「恐らくハンガー制圧の報を受けたと同時にしよう。闇討ち専門の卑怯者の集まりだ、勝てる勝負しかないんじゃないかな。」

モニターを見つめながらそう言うチェンの顔を横目で見ながらヘンケンは眉を上げる。およそ感情をあまり表に出した事の無いこの若者の怒りに驚きながらヘンケンはセシルに尋ねた。

「どうだ、やれるか？」

一言も声を発さずにじっとモニターの光点を凝視するセシル。既



に大食堂の厨房に立て籠もっているグレゴリーとは連絡が付いている、後は作戦を実行に移すタイミングだけだ。

ハンガーを制圧されれば多くの非戦闘員と僅かな小火器しか持たない自分達は壊滅する、唯一の救いは元『スルガ』の砲術科が誰一人欠ける事無く健在であると言う事だ。

砲術科に勤務する兵士は基本火器重器火薬弾薬の類の取り扱いに精通している。陸戦隊を持たない戦艦乗務員の中でも唯一白兵戦や近接戦闘の訓練を行う部署がこの砲術科と言うセクションであり、いざという時には戦闘歩兵としての役割を果たす。敵に対抗するスキルを持つ兵力が残っていた事は幸いだがさりとて現状、その全員に行き渡るほどの武器もそこには無い事も承知している。

本隊の下種共が動き出すまで待つ気など無論、端から無い。敵をそこからいぶり出して『あの場所』にさえ引き込めれば一網打尽に出来る筈。

「…… 分隊の動きが気になります。彼らがこの状況で本隊と離れて何をしようとしているのか」

一網打尽に出来なければ意味が無いのだ。例え四人と言えども十分な火力とスキルを野放しにしておいては万が一という可能性もある。もし肝心な所でこの分隊が作戦区画へと救出に現れればそれが蟻蟻の一穴ともなりかねない、と言うか自分の立てた作戦にしてもそれほど堅牢な堤と言っ訳でもないのだが。

「あつ、技術主任っ!？」

思考を巡らすセシルの耳に突然チェンの声が飛び込んで来る、その単語にはつとしたヘンケンとセシルは同時にチェンへと目を向ける。チェンは耳に当たった携帯を尚も耳に押し付けて大勢の仲間の声で混線する通話の中から必死で二ナの声だけを拾い上げようとしていた。

「二ナッ!？」

モウラは思わず叫んだ。不安や怒りや恐怖の渦巻く会話の洪水を

引き起こす、未だに生き残った仲間の誰よりも大きな声で無二の友人に向かって再び呼びかける。

「二ナっ、あたしだ！ 聞こえたら返事して、二ナあッ！」

「モウラ、無事だったの！？」

自分の声が届いた事に思わず笑みをこぼすモウラ、だがそれも長くは続かなかつた。息を切らせながらも追い詰められた声はモウラの心に不安の影を齎し、そしてそれは二ナの言葉で現実の物だと思いついた。

「敵に追われてるの、あたしのいた女性士官の宿舎と士官宿舎はみんな　みんなっ！！」

「落ち着いて、二ナっ！ 今何処に居るんだ、あたしが今から迎えに行く。だからそこを動かないでっ！」

「だめよっ！！」

「技術主任の位置が分かった、くそっ！ あの分隊の直ぐ先じゃないかっ！」

新たに発生した青い光点は四つの赤の直ぐ先にある。チェンは思わずデスクを拳で叩いて痛恨の表情を浮かべる、セシルは二ナの場所を確認しながら険しい表情を浮かべ、思考回路がショートしそうな勢いで救出計画を模索する、そしてヘンケンは

「ウラキ君っ！ 二ナさんの居場所が分かった、ウラキ君っ！ 今何処にいるっ！？」

心の何処かで崩れ落ちて行く大切な物を受け止める事も出来ずにコウは唯、深淵より深き闇の虚口の前に一人佇む。戦士の光を取り戻した筈の両の目に焦点を失い、輝きを閉ざして。悲しみは彼の全身から全ての力を奪い去ったがその事が逆にコウの身体を地に墮ちる事を妨げた、木偶の様にゆらゆらと揺らめく上体は根が生えた様に押し付けられた両足に支えられてそれ以上の振幅を許さない。

虚構と現実、夢と現、幻と実、両者を分け隔てていた境界が溶け

て混じり合う後に出来る物。喪失と言う切っ掛けは人としての感情を混沌へと追いやり、存在と言う概念すらも不確定な要素として認識させる。曖昧模糊とした魂や命などと言う宗教上の通念を槌の如き衝撃波で破壊された心は、既に生物としての役割すらも果たさない。

自分の手に掛けた者達と同じ世界へと転落していくのが今のコウにはよく分かる。自分を取り巻く地獄で息絶えた者達と自分との間に大きな差は無い、ただ胸の奥にあるちっぽけなの筋肉の塊が動いているか否か。たったそれだけの事が両者の立場を違う次元に隔てる事が出来る要因だ。だがそんな事が今の自分に必要なものだろうか、所詮は体内で生み出される電気信号によつて発生する生理現象に過ぎないではないか。

虚ろな目がゆっくりと背後に向けられてその足元に横たわる、境界をほんの少し踏み越えただけでそうなった只の肉の塊に目を向ける。姿形は違えども彼女と同じ世界へと旅立っていった二ナの姿をそこに重ねてコウは初めて人の怨嗟の正体を知った。

神の手による贖罪と言う名の支払、<sup>ペイバック</sup>神の意思による天罰と言う名の賠償、<sup>ペイバック</sup>神の悪戯による執行と言う名の補填。<sup>ペイバック</sup>

犯した罪に見合っただけの支払いを神はコウに要求し、請求した。命などでは利息にも満たないとばかりに彼が最も必要とした、最も失ってはならない物を対価としてコウの命数から引き落とす。残高全てで清算しても尚残る負債を抱えた心が奥底に眠る獣を呼び覚まし、奪い去られた物を取り戻そうと呪詛の咆哮を上げる。

だがその呪いをコウは何処に向ければいいのか。全て以上を無くす事に納得してしまう程大きな罪を抱えた自分が、一体誰を恨めばいいと言うのか？ 神か？ 名も無く姿も無い神に向かって何を呪い臨むのか？

乱反射するコウの感情は閉塞への一步を辿つて外界からの刺激の一切を遮断した。蔓延する死の匂いも輪郭もコウの感情に何らかの揺らぎを齎す事はもう、無い。支えもおぼつかずにゆらゆらと当て

ども無く歩みを始めようとすコウ、焦点の合わない目はふらふらと宙を彷徨い、幽鬼の様な振る舞いを身に纏って肉の傍らを通り過ぎる。

血河の回廊をよるめきながら何かに導かれる様に足を動かすコウの頭が力を失つてぐらりと揺れる、耳に掛けつ放しだった携帯が鱗の様に剥がれ落ちて床に転がった。

「　　」　　ウラキ君、何処にいるっ!？」　　「　　」

死の静寂に取り込まれたその世界に生み出された生者の叫び、自分を呼ぶその声が一体誰の物なのかと言う事すら今のコウには分からない。ただ自分の名がそこから発せられた事は殻に閉じ籠ったままのコウに無意識の反応を与えた。

足を止め、床の上で赤い光を受けるその金属の欠片を拾い上げ掌に乗せる、使い方すら失念したかのようにそこから漏れだす音をぼんやりと眺めるコウの淀んだ瞳。

包み込む死の残滓に身を委ねる事に恍惚としている自分をかき乱す不協和音、幾重にも折り重なった生者の叫び、喚き、怒鳴り

うるさい、黙れ。

此処に留まる意味の無くなった者に声を掛けるな。死者に対して未練を投げかけて何になる、かの伝道師はこう記述した『義人の中より悪人を分かちて、これを火の炉へ投げ入るべし。そこにて嘆き、<sup>はがみ</sup>切齒することあらん』と。いずれはみんなそうなるのだ、ただ俺は皆より先にそこに行くだけの事、エウリュディケを追って地獄へと墮ちるオルフェウスの様に。

「　　」　　モウラ、来ないで　　「　　」

雑音の様に聞えていた喧騒の渦の中からコウの耳が取り出したた

つたひとつの声。鼓膜を貫通するその聲はまるで撃ち込まれた針の様にコウの脳裏を刺激した、止まっていた思考が急激に息を吹き返して氷の様に冷めていた頭の中が熱くなる、早まる心臓の鼓動が痛い位に胸で疼いて骨まで響く。

「声にならない、湧き上がる熱い吐息を手の中の携帯に吐きかけてコウは、たった一つ残された偶然の奇跡を凝視する。コウの瞳から光を奪い去っていた淀みは萎えて枯れ果て、ただ唯一の可能性を指し示した小さな機械に向かってコウは叫びを上げた。

「二ナツ！ どこだっ！？」

「ウラキ君っ！ ヘンケンだ、今何処にいるっ！？」

コウの叫びを聞きとったヘンケンが尋常ではない大声でコウに向かって声を放った。確かに彼の声だった、とヘンケンは思う。だが回線はその瞬間に大きな雑音を上げて仲間の声を遮り始める、チェンが言った。

「艦長、もうこれ以上は回線が持たない。系統を一元化しないとパニックして逆に通話が出来なくなる。」

チェンの手元が目まぐるしく飛び回る、回線を維持する為の更新コマンドを引つ切り無しにメインサーバーへと伝達しているのだがもう限界だ。全員の安否を気遣う気持ちはチェンも同じ、だがそのシステムを継続していくには基地内のターミナルとそれを統括するサーバーの機能が貧弱すぎるのだ。加えて変電所停止に伴う電力の低下が痛い。

「チェン、ターミナルの使用範囲を絞ります。範囲は士官宿舎を南限として北側全域、下士官宿舎と女性士官官舎は破棄して下さい。」

冷静にチェンに命令をするセシルを振り向いたチェンが尋ねた。

「ですが、もしその範囲にまだ生存者がいたなら」

「いない筈だ。」

今度はセシルの背後に立つヘンケンが強い口調で言った。セシル

の声が冷静なのに対してヘンケンのそれには何処かしら熱い憤怒が込められている様に思う。

「奴らもプロだ、そんなへまはしないだろう。それに各所の制圧をしながらウエブナーの所まで忍び込んで来る様な連中だ、腕はいい。」

説得力がある、チエンは小さく頷くとメインサーバーへネットワークの範囲の縮小を申し出る。過負荷の掛かっていたターミナルシステムはその提案を瞬く間に受け入れ、あっという間に指定された範囲の回線をカットした。雑音が治まり、再び混乱の喧騒が三人の耳に掛けた携帯からそれぞれの耳へと流れ込んで来る、だがその中でヘンケンはその携帯に起こった小さな変化に耳を傾け、そして呟いた。

「…… あいつ、まだ南側の何処かに居るのか？」

コウの手の中に残された小さな奇跡はそれっきり音を止めた。再び訪れる死の静謐の只中に佇んでただ一人、彫像の様な影を赤い光に刻み込んでコウは掌をじっと見つめ続ける。

束の間の中から永遠までの長い道のりをそのままの姿で過ごす遺物全としたコウの手が少し、しかし確かに動く。力の籠った指が一つずつ折り畳まれてそこに置かれた携帯を握りしめる。同じ様に固く閉じた瞼が勢い良く跳ね上がり再びコウの目を下界に晒す、そこに宿るあの輝きは再び。

コウの足が血泥に溢れる廊下を蹴った。

彼を取り込もうとした怨嗟と怨念の闇はあの夢の中と同じ様にコウの腕を脚を罪の茨で絡めて引き摺りこもつと試みる、だがコウの心はその先に輝く小さな光に向かって既に差し伸べられている。

例えその手が？ぎ取られようとも、例えその足が引き千切られようともコウの不退転を覆すには、足りない。

二ナっ！！

茨は朽ち、棘は折れ、蔓は碎ける。

追い続ける死にも負けない大きな声と熱い言葉がコウの心に満ち溢れる、たったその一言が世界を変える。

翳された希望を手に入れる為に。

穢れた手が必死の思いで求めるたった一つの希望を再びこの手に。

通路の真ん中に置き去りにされたバイクに跨ったコウは時を惜しむかの様に勢い良くキーを捻ってセルを回す、轟音を上げたエンジンを乱暴にブン廻してコウはバイクを傾け、クラッチを繋ぐ。闇をも蹴散らす激烈なアクセルターンで方向転換したコウはその勢いを纏ったままで一気に外へと飛び出した。再び訪れる落城の光景は炎と風と嵐と痛みをコウの元へと連れて来る、だがコウはその向かい風に挑むかのようにマシンの舐先を風上に向けた。

叩きつける様な暴力的な加速がコウの身体を焰の林へと押し出す、肌を炙って髪を焦がす炎の柱を巧みなスラロームで掻き分けながらコウは一直線にハンガーを目指す。

自分が二ナを求める様に。

彼女もきつとそこを モビルスーツを求める筈だ。

そうだろ？

「 二ナアッ！！ 」

込み上げる衝動を抑えきれずに赤く爛れた夜空に向かって吠えるコウ。

俺は此処にいるのだと。君のすぐ傍にいるのだと。

伝えたい、届けたい。君が知りたいと願うのならば我が手で引き裂いてでもこの胸の内を教えたい。

誰よりも、君を愛しているのだと。

C r y f o r y o u . (前書き)

随分と迷いましたが、やはり一話で上げようと思います。

かなり長いのでご迷惑かも知れませんが、出来れば一気に読んで頂けるとありがたいです。



「モウラ、来ないで。貴方まで死んじゃう」  
悲鳴交じりに耳へと届く二ナの叫びにモウラは自分の声を被せて  
抗弁した。

「何言ってるんだ、あんたはっ！あんたが死にそうになって、あたしがこんな所でじっと待ってられる訳が無いだろっ！？」  
冗談じゃない、あんたが何と言ってもあたしはそこに行くからねっ、さつさと場所を教えなっ！？」

あたしは、あたしだけであんたの味方だと言った事を忘れちゃったのか、二ナっ！？」

「みんな死んだ、殺されたっ。メリルもバーバラも、私を庇ってトンプソン曹長までっ！もういやだ、私の周りでみんな死んじゃうのなら私は一人でそこに行くっ！それで私が死んじやうのならそれでも構わない、私の代わりに他の誰かが死ぬのはいやっ！」

「二ナっ！あんた自分の命を何だと思ってるんだ！？それはもうあんた一人だけの物じゃ無いんだ、あたしやキースやマークスやアデリアや、あんたを必要とするみんなの為に必要な命なんだっ！

あんたがそこで諦める事をあたしが許す訳ないだろっ！」  
血相を変えたモウラが無線機の前から立ち上がり、踵を返した。

慌てて腕を掴んでモウラの無謀を制止しようとするアストナージの手を振り切って退避壕のハッチへと足早に歩み出す、ジェスがよっこいしょと持ち上げた巨大なレンチをもぎ取ってモウラは言った。

「あんたの事を今まで守って来たのはコウだ、でもコウもキースも此処には居ない。だったらあたしが」

モウラの手が退避壕をロックする巨大なハンドルに掛かった。握りしめて力を籠めるとそれはゆっくりと回り始める。

「あんたの事を守ってる。あたしだけじゃない、もしコ

ウが此処にいたら、きつと、そうするっ！」

ハンドルが回り切ってロックが解除された事を示す巨大な金属音が退避壕内に響き渡る、その時モウラの携帯に割り込んで来る女性の声がモウラの決意に水を差した。

「お止めなさい中尉、お気持ちは分かりますが敵はそれほど甘くない。」

モウラの記憶に無いその声はまるで現状から乖離する涼やかな声、火のついた自分の決意に対して矢を放つそれに向かってモウラは思わず声を荒げて尋ねた。

「誰だあんたはっ！ 邪魔するな、あたしは二ナを助けに行かなきゃなんないんだ、こんな所で」

「ですからそんなに甘くない、と言っています。二ナ・パープルトンの身柄は私達の方で確保に向かいます、貴方方は決してそこから動かない様に。」

その声を耳にしたモウラが一番驚いた事は、静かな口調でありながらも絶対的な権威を滲ませた迫力と信頼感だった。心の中で荒れ狂っていた嵐があつという間に凧同然の状態になってしまう程の効果をその声と言葉は持っている、モウラの手が退避壕のドアを押し開けようとする行為を中断して、そして再び二ナとの会話に割り込んで来た正体不明の女性に向かって尋ねた。

「…… 貴方は、誰だ？」

モウラの問いに声の主は逡巡を思わせる沈黙を湛える、だが決意した様にモウラに向かって言った。

「…… その問いには基地の指揮機能維持に重要な支障をきたす恐れがある為お答えできません。ですがウエブナー基地司令の『戦死』に伴い、指揮権を移譲された者とだけお伝えしておきます。」

「なっ！ …… 指令が 戦死？」

「ばかなっ、指令が戦死だなんてっ！」

動揺したマークスの眼前でラーズ1のマチエツトが空を割く、回避行動の遅れたマークスは思わず右手を上げてライフルを軌道へと重ねた。刃先が金属に食い込む鈍い音が薄闇に響き渡って機関部が切断される、だがその僅かな隙を利用してマークスはラーズ1の間合いから後退した。だが。

「しまった、虎の子のライフルを！」

左手のビームサーベルを右手に持ち替えて、ハードポイントに取り付けてあったスプレীগンを抜き出す。これで火力は品切れだ、半減した攻撃力ではこの相手を約束通りに抑えきれるかどうか。

「……そうか、道理で……こちらシャーリー02、了解した。それでH<sup>ヘッドクォーター</sup>Q、貴女のコールサインは何と呼べばいい？」

キースの冷静な声がモウラの耳に届いた。屋外で活動する三人の携帯は基地内のターミナルでは無く民間が近辺に設置した基地局を経由して電波を拾う、故にチェンが命じたターミナルシステムの制限を受ける事無く会話を傍受する事が出来る。

その事実を疑いながらも戦況の進行具合を分析すれば受け入れざるを得ない、とキースは思う。何の手も無く蹂躪される基地の様子はあの時のトリントン、そして基地司令であったマーネリ准将が戦死した時の状況に酷似している。敵に位置を悟られない様に山陰をゆっくりと移動するジムの機内で鎮魂の溜息を吐きながらキースは言った。

「モウラ、聞こえてるか？……お前の気持ちはよく分かる、俺だって直ぐにそこに駆け付けてニナさんを助けたい。だが今は耐えるんだ、自分出来る事を。やらなければならぬ事を心の内に留めておけ、お前の力が本当に必要な時が必ず来る。」

「でもキース！ニナが危ないんだよ！？それを黙って人に任せるなんてあたしには」

「俺は」  
キースの声がモウラの耳から途絶える。モウラはキースの身に何か起こったのかと慌てて携帯を耳に押し付ける、だが何処か遠慮がちな声で届いて来たキースの言葉を耳にして

「お前の方が、大事なんだよ。」

浅黒い肌の顔を真っ赤にしてモウラはドアの前に立ち尽くした。

いつの間にか背後に忍び寄っていたジエスがニヤニヤと笑いながら、モウラの手からレンチを引き取る。

「感謝します、シャーリー02。私の事は　そうですね、  
『バンディッド』。バンディッドで結構。」

咄嗟にセシルの口を吐いて出たその名前を聞いたヘンケンとチェンが互いに顔を見合わせて目を丸くした。元々そのコールサインは『スルガ』の時にヘンケンが使用していた物だ、『ホーライ』から赴任したセシルは今までとは違う艦内の仕来たり　　そんなものが存在する事自体にセシルは驚いていたが　　出来るだけ合わせようとしていたがそのコールサインを使用する事だけは嫌がっていた。

セシル曰く、『宇宙軍には宇宙軍に相応しい雅やかな名称を使うべきだ』。だがヘンケンは自分の慣れ親しんだコールサインを変更する事だけは頑として譲らず　　験担ぎの意味もある

以来艦橋に立つ二人それぞれに別々の呼び名が使われると言う異例の事態が発生する。

あれほど頑なに拒んでいたその名をこの期に及んで使うとはどう言う心境の変化かとチェンがセシルの顔を覗く、するとセシルはにっこりと笑いながら笑わない目をチェンに向けて言った。

「『山賊』で結構。何か？」

慌ててチェンが視線をモニターに戻してセシルの命令を待つ。この目をした副長がかなりおっかないと言う事を、チェンは忘れていた。

「バンディッドから二ナ・パープルトン、聞こえますか？」

「二ナはその声の持ち主を忘れない。だが彼女が戦死したウェブナーの代わりに指揮権を持ち、名を明かさないと言う事には切迫した事情があるのだろう、二ナはすぐさま返答した。」

「はい、聞こえます。敵が私を追って来ています、早くしないともうすぐ追い付かれるっ！」

「慌てないで、貴方の動きと敵の動き、戦力はこちらの方でも把握して随時監視しています。敵は現在動きを止めて貴方の後方で待機中、貴方はそのまま先に進んで上の階に移動してください。」

「二ナへと迫る危機にも動じず噛み砕く様にゆっくりと話しかけるセシル、その目はじつとチェンの前のモニターに注がれている。」

「上の階に上がったならそのまま突き当たりまで進んで、その連絡通路から施設棟のB棟へと抜けられる。今迎えを遣しますのです。それまでは一人で頑張ってください。」

モニター上に映る青い点が動き出して赤い点との差を広げる、二ナが自分の言った通りに動き始めた事を受けてセシルはすぐさま次の段階に着手した。

「キャンベル？　そこから三人を連れて直ぐに施設棟B棟四階に向かつて下さい。装備A、予備弾倉アサルトの携行を許可します。二十秒で支度をしないと間に合いませんよ？」

「とつくに出来てる。相変わらず人使いが荒い、今出る。」  
「さすが機関長、とばかりに小さな笑みを漏らして息を吐くセシル。二十秒が彼の機転で稼げたのなら恐らく出会うタイミングは二ナが連絡通路を駆け抜けてB棟のドアに手を掛けた位になるだろう、それならば装備の薄いキャンベル達が二ナの援護の為に敵と交戦すると言う事態は避けられる。幾らスキルを持つとは言っても所詮は戦

艦乗り、専門職である陸戦の特殊部隊には敵わない。

「チエン、B棟の防火シャッターを全開放、キャンベル達の通路を開いて。二ナさんを回収次第追って来た敵との間のシャッターを順次閉鎖、頃合いを見て電源をカット。」

「なるほど、『封じ込め』って訳ですか……でもその後はどうするんですか？」

「それは艦長次第です。」

セシルが視線を流してヘンケンの意見を求める、眉間に皺を寄せたままのヘンケンは唸る様に言った。

「取り敢えず奴らの素性を何としても吐かせてやる、その後持つて情報の一切合財をボロ雑巾になるまで絞り出す、特に奴らの所属する部隊の全容をな。」

そう言いながら耳の携帯を頻りに弄ぶヘンケン、セシルはその仕事草を見てヘンケンが抱えた気掛かりを慮って尋ねた。

「艦長……ウラキさんの事ですか？」

聞かれたヘンケンの眉間の皺が少し解れて何とも表現のし難い様子になる。まるで今まで怒っていた子供が自分の誤解に気が付いて困り果てている様、無理もない、とセシルは思う。車の中で自分が問いかけた状況が今現実にも目の前に置かれているのだ。ヘンケンはコウの事を友人と思い出来る限りの力は貸したいと思っている、だが友人であるからこそこれから戦火に塗れる現場へ誘う事は避けたいと望む。

究極の選択を迫られても尚答えの出せない　艦長にしては

珍しい、と思う　ヘンケンを目の当たりにしたセシルが見かねて行った。

「ウラキさんにはこの事はまだ伏せておいた方がいいでしょう、彼女の身柄を確保してから連絡しても十分だと思われませんが。ウラキさんは民間人、この場に飛び込んでいい人間じゃない。」

ヘンケンの決断を後押ししようとする自分の考えるベストの選択をセシルは提案したつもりだった、だがヘンケンはその言葉にも同意せ

ず、ただ小さく唸ってセシルの瞳を見つめ続けるだけだった。

無作為に立ち並ぶ炎を駆け抜けたコウの視界に広い滑走路への入口が見える、そこを抜けて右へと回ればその遙か先にハンガーの入口が見える筈。一本道となった残りの距離を一気に縮める為にコウはアクセルを捻り込んだ。

レッドゾーンに飛び込んだエンジンが後輪を軋ませて前輪を持ち上げる、圧倒的なパワーがブラックマークをコンクリートに刻んで加速する。漁火に映る滑走路に一気に突入しようとするコウは激しく振動するマシンの拳動を腕全体で感じながら、しかし突然の違和感に襲われた。

それは撃墜王としての第六感だったのかも知れない。フルブレーキとギヤダウンを一瞬で終えて全身を右に投げ出す、フルバンク状態で車体を翻すコウの目の端に移った黒い影をコウは確認する様に後ろを振り返る。

「！ 黒塗りのジムっ、何でこんな所に！？」

猛スピードで走り込んで来た小さな明かりが、自分の進路と重なっているにもかかわらず瞬時に方向転換をして激突を回避する様を機上の『ト ヴ2』は呆気にとられて見つめている。と同時に爆発炎上と言う不慮の事態が起こらなかった幸運にほっと胸をなでおろした。

敵が侵攻方向に正対してバリケードを構築した事を知ったダンプティは電撃戦を諦めて力押しで制圧する方法を採用した。元々が遮蔽物の無い滑走路を一直線に進んで敵モビルスーツが出撃する前にハンガーを制圧する計画だったのだが、予想外の出来事が多すぎた。作戦は大幅な修正を余儀なくされたがそれでも数の上で優位に立つ以上、方法は幾らでもある。

籠城戦を決め込んだハンガーの様子を確認したト ヴ1は陥落までの時間を短縮する為にト ヴ2に、隊から離れて単独で迂回し敵

の背後を突く様に命令した。正対するモビルスーツが二機のゲルググである事はハンプティの報告で分かっている。だが新兵の余計な犠牲を出さない為にも、また地上部隊よりも先に目標の身柄<sup>ニテ</sup>を確保する為にも彼らは一刻も早く排除しなくてはならない。

明暗差が織り成す闇を慎重に掻い潜って反対側に回り込み、微速前進で気付かれないように歩きながらやっとの事で射程内に辿り着く。後は味方に合図をして牽制射撃を待つばかりになったその時の出来事だった、コウとの遭遇は。

カメラを眼下に向けながら夜間モードのモニターに映り込む光の主を拡大する、それがバイクに乗った民間人である事を確認したトヴ2は自分の執るべき選択を躊躇した。

「テイターンズっ！　ハンガーに向かう気がっ！？」

コウはそう叫ぶと再びマシンを翻してジムの足元を駆け抜けようと一気に加速した。一刻も早くハンガーに辿り着いて彼らにこの事を知らせなければっ！

マシンの挙動から持ち主の意図を察したトヴ2は慌てた。慌てて無線でダンプティに連絡する。

「トヴ2からダンプティ、大至急援護射撃を要請する。民間人らしき人影がバイクでハンガーに急行中、こちらの存在を知られた模様。」

「ダンプティ、了解。トヴ2はそのまま待機、流れ弾に注意しろ。」

返答と同時に始まる無数の閃光と流れ星、何発かに一発の割合で紛れ込む曳光弾はまるで夜空を彩る花火の様に星と月を隠して其処彼処のコンクリートを穿ち始めた。

「アンドレア、撃てっ、撃ち返せっ！」

耳を劈く轟音と飛び散る火花、バリケードに阻まれて四方八方に



飛び散る流れ弾。削岩機のような音を立てて削り取られる寄せ集めの壁は、果たしてその役割を本人達が想像していた以上に果たしていた。間断無く発光するモニターの中心で震える照準を整えないままにマルコは発砲しながらアンドレアに向かって叫ぶ。

「ど、何処に撃てばいいんだよ、モニターが真っ白で何にも見えな  
いっ！」

「馬っ鹿、モードを赤外線から夜間通常に切り替える。どうせ敵は滑走路の遮蔽物の裏から撃つて来てる、幾つも無いからそれを全部ぶつ飛ばすつもりで撃ちやあ良いんだよ！」

マルコに無線で怒鳴られたアンドレアが狙いもそこそこにバズーカをぶつ放す。狭いキューポラから狙える目標は限られている、それでも一撃必殺のバズーカがこちらの手にあると分かれば敵もそう易々とは近寄れない筈だ。

後方煙を奔らせながら一直線に飛ぶ弾道をモニターの隅で確認しながらマルコは敵の発砲炎を捉えて正確に撃ち返す。マルコ自身にモビルスーツによる作戦行動の経験がある訳ではない、だがモラレスの末弟子であるマルコにとってこの状況はチエスと同じ様な物だった。

相手が駒を置きたい場所に、相手に先んじて自駒を置く。遮蔽物伝いに移動する敵モビルスーツが次に向かいそうな場所を読んでライフルで牽制する、実力差から敵を仕留めるまでには至らないがマルコの戦術は実に理に適っている。実際飛び出そうとすると遮りに掛かる曳光弾の光跡が目の前を奔り、タリホー達はそこから一步も動けない。

コウの周囲を一瞬にして取り囲む硝煙弾雨、飛来する90ミリの被覆鋼弾はまっ平らな滑走路をたちまち荒れたガレ場に変えた。自分の思惑が敵の攻撃によって阻止されたコウはハンガーへのそれ以上の接近を諦めざるを得ない、悔しさを滲ませて後ろを振り返った視線の先に黒塗りのジムの銃口が映った。それは黄泉路の様な黒穴

を真っ直ぐコウへと定めている。

「！」

反射的に速度を維持したまま身体を投げ出す、ほぼ直角に進路を変えた至近にライフルの弾が通過した。衝撃波で目が眩む。

「この野郎、ちょこまかと五月蠅い野郎だ！」

ト ヴ２は自分の弾をせせら笑う様に躲して行ったコウの姿をモニターに映して毒づいた。

援護射撃による欺瞞は予想以上の効果を上げた、だが死線を幾度も潜り抜けて来たト ヴ２の勘は何故か目標となる二機のゲルグゲよりも突然足元に現れた民間人の方を高脅威目標と判断した。アビオニクスのAIはその火力、防御力、戦術的な観点を考慮して当然モビルスーツの側を最優先の攻撃対象として選択するだろう、だが歴戦の兵士に言わせれば本当の脅威になる存在と言うのは倒せるか否かと言う二者選択に尽きる。

幾ら兵装の無いバイクと言えども仕留められない以上その存在は作戦遂行上の小さな疵となる、無傷である以上それが今後どの様な影響を及ぼすのか分からない以上速やかに排除して置かなければならない。

「ちっ、早い！」

モニター上を離れて近接レーダー上の光点と化したコウの航跡を追うト ヴ２が舌打ちをする、予備兵装にシヨットガンを選択しなかった自分の不備を後悔しながら再びモニター上にその姿を映すべく機体を翻した。

「しかし何て運転だ、こんなにクイックにターンするバイクなんか見た事無いぜ。しかも転びもしやがらねえ。」

コウの姿を追い掛けて挨じった上半身に追隨する下半身、特にペダルを何度も踏み換えなければ信地旋回出来ないジムの動きをト ヴ２は鈍重に感じる。元々方向転換に際しては機動途上での操作が推奨されている為、基本動作を司るOSの中にこのプログラムが組

み込まれていない。一瞬の内に後方へと回り込むコウのバイクとは対照的に、遅ればせながらその姿を再びモニターの中央へと送り込む事に成功するト ヴ2。

「……………！……………な、何だこいつ」

ジムの目に装備されたTADS（目標捕捉・指示照準装置）は正確に目標をトレースして停止する、目の前で停止する照準線とレテイクルの中央でバイクに跨ったまま微動だにせずじつとこちらを見上げる青年の姿。画面の隅には火器管制の射撃許可の点滅と目標までの距離が表示される、どちらも目標の生存の可能性をコンマ以下に指定する。だが。

双弁から放たれる眼光は獐猛な獣の如く、焰照に焼き付けられる影から立ち上る殺気は猛禽の如く、その民間人がアクセルを煽る度に轟くエンジンの音は猛り狂う悪魔の咆哮の如く。

一介の草莽くさそうには与えられる筈の無い全ての物がそこにはある、モニターを通して送り込まれる強大なプレッシャーにえも言わぬ恐怖を覚えたト ヴ2が慌てて引き金に手を掛けた。

発砲音と着弾はほぼ同時、だが跳弾の火花を見たト ヴ2の緊張がそれで解ける事は無い、寧ろ、逆だ。

「どこだっ！？」

作動する追尾装置はモニターの位置を限界まで移動させる、だが既に目標は捕捉範囲の外を駆け抜けていた。耳を穢す着弾音に紛れて木霊すバイクのエンジン音をバイクに拾いながら、ト ヴ2は生き延びる事に特化した自分の勘に従ってこの目標を最優先に撃破する事に決める。

あれをこのまま見過ごせない。

あれは、撃墜キース王の、目だ。

モタードと言うバイク。

オフロードバイクに専用のタイヤを装着して舗装路やダートの混在したコースを誰が一番早く走り切るかと言う事を目的に作られた

マシン、低速のトルクと瞬発力に優れコーナーリング時のリーニングルも他のバイクの追従を許さないほど深い。故に信じられない角度と速さでコーナーを駆け抜ける事が出来る、コウの乗るハイパーモーターと言うマシンはその昔、卓越した性能を發揮して世界のモーターシーンを席卷したと言う伝説を持つ。

グリップの限界を超えて転倒寸前の車体を膝で無理やり支えて引き起こす、<sup>マスタング</sup>暴れ馬を調教しながら敵の死角へと回り込むコウはモビルスーツ乗りならではの視点で敵を攪乱する。

陸戦型の弱点が実は歩兵だと言う事をコウは以前、バスケスから教わった。古参である彼の戦歴には当然対モビルスーツとの戦闘を生き延びたと言う実績も含まれている、大勢の仲間を数えるほどの数のザクに蹂躪されながら彼は『ゴーレムハンター』と呼ばれる連中と出逢った。

彼らはエンジンと車体を改造した小ぶりな四駆に無反動砲を積み込んで、蛇行を繰り返しながらモビルスーツの足元へと飛び込むとその真下から股間にある間接部へと弾を打ち込んだ。二足歩行の弱点を突かれた絶対無敵を誇るその新兵器はバスケスの目の前で玩具の様に崩れ落ちたと、面白おかしく話してくれたあの日の事をコウは憶えている。

こうやって常に敵の視界の端に見え隠れしている以上、追尾装置のロックが自分から外れる事は無い。ジムに組まれた予測追尾のシステムは映像だけでは無く音声にも反応する、周囲をバイクで走り回っている以上パイロットが手動で火器管制を切り替えない限りこの場でくるくると回り続けると言う寸法だ。

だがそれはコウにとっても危険極まりない状況だった。飛来する流れ弾はコウの周囲で常に新しい穴を作り、路面の状況を悪化させる。いかにモーターと言えどもダート同然の路面ではその持前のスピードを發揮する事が出来ず、速度が落ちればその事は敵に射撃の機会と自分の命の喪失の切っ掛けを同時に与える事になる。

「何とか、彼らに知らせなければ。」

刻一刻と迫るタイムアップに焦りを滲ませて背中越しの敵を見つめる。平坦な場所を選んで走行するコウの軌跡は少しずつ円を崩して弧を描き始めている、その先端は施設棟と士官宿舎を繋ぐ連絡通路が崩落した現場に届くまでに広がっていた。

猛烈な爆発音が木霊する階段を駆け上がって指定された階に辿り着いた二ナはすぐさま目の前に立ち塞がるシャッターに取り付いた。最初は戸惑った自分の中の変化にも今は慣れて来ている、必要な時だけ呼び出して後は頭の何処かに追い遣る　　尤もその間もぐるぐると動き回る数文字の柱は健在だが　　事を覚えた二ナはスロットにプラグを差し込む。

頭の中に浮かんだ数字をテンキーで打ち込めばそれでロックの解除が始まる、セシルの言葉で若干の落ち着きを取り戻した二ナは自分に生まれたその能力　　現象に興味を抱いていた。

「……　偶然、じゃないわよね？」  
「開くシャッターを潜り抜けながら二ナが呟いた。もしこれが偶然だと言うのなら自分は何れだけ運がいいのだろうと思う、しかしその偶然を生み出す確率は恐らく桁も位も青天井に達するだろう。そしてそんな事が起こり得る筈はあり得ない。」

「万が一これが偶然だとしたら、孫子のツキまで使い潰しても足りないくらいね。」

「？　孫、子？　もう二度と誰も愛さないと心に誓った自分が次の世代の事を、考えてる？」

馬鹿馬鹿しい、と心の中で自分自身を叱咤して二ナは次の扉へと急ぐ。

みんなが求める現実の幸せとか未来とか、叶えられて当たり前前の世界に背を向けた自分がそんな事を考えるなんて滑稽だと思う。そんな事を考えた時もあった、未来に憧れた時も確かに。SEとしてガンダムの開発に心血を注ぎ、それによって引き起こされた凄惨な悲劇の数々に出会った後に知った本当の自分の気持ち。私が求めた

幸せの形は自分のスキルによって齎される成果や結果などでは無く、普通の『お嫁さん』になる事だったんだと彼に出会って初めて知った。

私が過去にも未来にもただ一人愛した彼はモビルスーツが好きだった。少年の様に自分勝手に不器用で、でもとても真つ直ぐで優しくて。意地悪もした、喧嘩もした。それでも彼とモビルスーツの事を話している時はとても楽しかった、彼が喜んでしていると嬉しかった。きつとどんな事があっても彼となら乗り越えて行けると信じていた。しかし私が犯した罪は彼と二人で背負うには途轍もなく重すぎた。彼は重荷に耐えかねて自分の最も大事な物を諦めて世界を閉ざす、私は自分の最も大事な物を諦めて彼が背負う筈だった荷を肩に担いで足を止めた。傍らを通り過ぎるみんなの背中を見送りながら、そうする事が自分にとっての生きた証なのだと自分に常に言い聞かせて。

淡雪の様に浮かんで来る儂い記憶の数々を幾つも幾つも消去した、桜花の様に舞い散る希望を何度も何度も見送った。夢を見ないと決意した自分が求める最期の望みは、自分を支えてくれる自分以外のみんなが幸せになる事しかない。その願いと祈りが叶うのだとしたら自分の悲壮な決心も少しは報われるのかもしれない。

そう、信じたかった。

人一人の人生を投げ捨てただけでは足りなかったのか、と二ナは次のシャッターを開きながら思う。今までもこの後も自分の目の前に広がる光景は類義の世界、何かが有って誰もいない矛盾した現実を二ナの目に突き付ける理由は自分の願いが叶えられなかったという事を示す物。祈りを裏切られた二ナはその理由を人の原罪にまで遡って問いかける。

神と言う物が本当にいるのなら。

運命と言う物が本当にあるのなら。

教えて欲しい、私はこれ以上何を諦めればいい？

モウラやキースやアデリアや、もっと多くの物を全部根こそぎ失

わないと許されないのか、ならば答えは簡単だ。私がこの世からいなくなってしまうばいい、あの日の決意を未練にも先延ばしにしていた自分の愚かさを悔い、優柔不断な生き方にケリをつけてしまえばいい。

“ 卑怯者っ！ ”

脳裏に響くアデリアの声が二ナの思考に楔を打ち込む、彼女は何故私を止める？ 私はこんなに自分自身が疎ましいと言うのに。

三つ目のシャッターが開く。

ならば、何故私はここにいる？

胸元に隠されたコウの起動ディスクを握りしめて二ナは再び問いかけた。自分の命を諦めたあの時、確かに二ナはコウの声を聞いた。今ここで自分の命を諦めないのはコウが『生きる』と言ったから、二度と会わないと、会えないと決めた過去にもう一度会いたいと私が強く望んだから。

たとえそれがどんなに罪深い事だったとしても。

たとえそれが世界を敵に回す事になってしまう事だったとしても、私の手はそれを求めている、求めていたのに気が付かなかったのだ。過去も、今も、

多分自分の命が途切れてしまうその刹那に至るまで、ずっと。

立ち塞がっていた最後のシャッターが遂に二ナの手によって開かれた。赤い光の中に浮かぶ突き当たりの観音開きを目指して二ナの足は床を蹴る、摺りガラスから通して見える光の点滅は日常を変えていく悪意が放つ砲弾と言う名の息吹。少しずつ自分の視界に広がって行くその光の先に、また罪に塗れ続ける世界が待っている。

背中を押す衝動が、足を動かす決意が扉の向こうの世界を追い求める。死を願う自分と死を拒む自分と、天秤の両側に置かれる自分の気持ちのどちらがより重いのかは分からない。ただ二ナは運命が設えた迷路の様なこの瞬間に齎される審判を自分の意思に委ねようと決意した。輝かしくはない未来、再び歩まなければならない峰の

馬の背でその足が立ち止まってしまつまで。

ドアへと取り付いた二ナが取っ手を押し下げて一気に開く、  
風が吹き込んで二ナの両肩に掛かる髪を大きく揺らした。

その力はコウの中に巢食う悪魔が彼の命と引き換えに与え続ける能力、全身を駆け抜ける熱と奥底から湧き上がる殺気はコウの見る世界をとても緩やかな物へと変えていた。だが超人的な反射神経に機械と言うハードは追従できない、悲鳴を上げるタイヤと急速に失われて行くグリップはコウの焦りを大きくする。

出来るだけタイヤを温存する為に未だに掘り起こされていない平らな路面を探してルートを決める、間延びをしていく旋回半径が相手に射撃の機会を与える事にはなるがそれでも機動力を失つてしまふよりはましだった。

大きく弧を描くコウの軌道を追い掛ける様に放たれる敵の銃弾、リード射撃の予測を超えて走るコウのバイクを敵はまだ調整できてはいない。だがそれも今の状態を維持出来ればの話、もし路面やタイヤがこれ以上状況を悪化させるようならばどうなるかは目に見えている。

「どうするっ、何か手を考えないとこのままじゃいつか殺られる！」

バンク角をアクセルと膝の出し入れで細かく調整しながら円の中に立つ黒いジムを睨みつけるコウ。既に旋回半径は五十メートルを超えている、これ以上の範囲拡大は本隊の火線へと飛び込む恐れがある。後何回こんな風に敵の動きを攪乱出来る、一回か、二回か？

コウがゆっくりと動く景色に視線を走らせた。周囲に散らばった残骸の中から敵の動きに対して牽制する事の出来る新たな手段を探し求める、味方に知らせる事が出来る合図でもいい、何か光や音や振動を発する事の出来る物が残骸の中に紛れ込んでいないか。

動く視線の先に一瞬だけ飛び込んで来たその映像、連絡通路が何



かの攻撃によって崩落した後に剥き出しになった士官通路の壁面。絶え間なく続く銃撃の音と火花と、ほんの少し残ったクラスターの残り火に浮かびあがった四階の扉が突然開いて何かが現れた。

「人!?」

まだあんな所に残っていたのか、とコウはぼんやりと浮かぶその影に焦点を合わせる。薪の様な光の揺らめきはその輪郭を臙に映すだけ、だが何処かの地面で遅れて発火したクラスターの生き残りが噴き上げた炎と爆風は一瞬ではあったがその人物の姿をコウの目に鮮明に焼き付け。

「!」

叫んだつもりで声が出ない。瞬きを忘れたコウの目に飛び込んで来るその姿、肩に掛かる金の髪が炎に煌めき、風に揺れる。

「二ナ・パープルトンからバンディッド」

二ナの声聞いたセシルは酷い違和感を感じていた。取り乱した様子も無く、しかし喜んでいる様子でも無い。呟く様に言葉を放つ二ナの声にセシルは、戦場で散って行くパイロットの最期の通信を思い出す。

「バンディッド。二ナ・パープルトン、どうしました?」

胸騒ぎを押さえながらセシルは二ナに尋ねた。恐らくヘンケンもチェンもその会話を耳にしながら同じ心境に駆られているのだろう、ヘンケンは険しい表情を変えずにじつとセシルの背中に視線を落とし、チェンはモニターを見つめている。赤い光点は未だに位置を変えずに、二ナの青い点は既に連絡通路の端に辿り着いている。回廊を渡った直ぐ先の施設棟にはキャンベルの存在を示す光点も捉えられた、作戦は最終段階に入っている。

「四階の出口に到着しました。でも　行き止まりです。」

セシルの表情が、ヘンケンの目が、チェンの指が強張った。

三人に訪れる一瞬の空白は次に迎える嵐の予感、セシルの手がド

ンと大きな音を立ててモニターの前に叩きつけられ、チェンはセシルの命令を待つよりも早く生き残っている監視モニターを作動させた。敵の攻撃でかなりの数が蹴散らされてはいたが、それでも遠目に士官宿舎と施設棟とを繋ぐ連絡通路の有無を確認出来る位置に生き残っている物はチェンの命令で四階部分をズームで捉える。その光景を目にしたセシルが痛恨に極まって小さく叫んだ。

「！ 何て事っ、私とした事が」

もっと早く気が付くべきだったのだ、敵の攻撃でそうなっている可能性があると云う事を！

モニターに映るその光景をまるで親の仇を見る様な目で睨みつけるセシル、自分の愚かさに眩む頭を案じるかの様に耳元から二ナの声が流れ込む。

「バンディッド、もう十分です。私の事でこれ以上貴方や貴方の仲間が危ない目に遭う事は無い、私はここで敵に投降します。」

「二ナ・パープルトン、敵への投降は許可できない、繰り返す。敵に投降は許可できない！ そこに待機していて、何か手を考える。」  
切迫したセシルの声が電波に乗って二ナの元へと。ヘンケンはずぐさま自分の携帯で、食堂に待機しているグレゴリーに命令を飛ばした。

「グレゴリー、俺だっ！ 誰かをハンガーに向かわせてその辺にあるロープを掻き集めさせる！ 破壊された建物の四階で味方が孤立している、渡河の要領で回収するからロープを打ち出す発射筒を持ってキャンベルの後を追え、急げっ！」

「艦長、マズイっ、敵が動き始めたっ！」

赤い光点がチェンの目の前を静かに移動する、セシルもヘンケンもそれが意味する事の意味は知っている。凝視する三人の耳に再び二ナの声が流れて来た。

「ありがとう、バンディッド。でも、もういい。……もしかしたら私は民間人だから敵に投降すれば命は助かるかもしれない。」

だからこれ以上私の為に危険な事しないで、お願い。」

「それが貴方にとつての最良の選択ではない筈です、二ナ。敵と出逢った味方が今までどうなっているか、そこまで逃げて来た貴方が知らないとは言わせない。」

「分かっています、でももうそれしか可能性が  
「ふざけないで。」

二ナの声を止めてしまう程冷たく、そして熱い願いが込められたただ一言。

「生きる事を諦めるなつ、二ナ・パープルトンっ！ この  
意気地なしっ！」

セシルの恫喝が狭い室内に響き渡る、机の上に置き去りにされたセシルの掌が怒りに塗れて握りしめられる。

深いバンクを維持したままコウの手がアクセルを手放した。突然のパワーオフに不安定になる車体を左手だけで抑え込みながら、目の前に迫る小さな影へと手を伸ばす。

それは太さが三センチほどもあるつかと云う太い電線だった。コウの手がそれを掴むと上半身に全力を籠めて持ち上げる、突然の加重変化にバランスを崩しそうになるバイクを速度によって齎される慣性で何とか維持したコウは直ぐにそれをタクティカルベストのベルトに挟み込んだ。再び捻るアクセルはまるで何事も無かったかのような加速をコウに与えて再びの限界機動に挑む、だがさつきまでとの違いはその航跡を追い掛ける様に電線が走っていると言う事だ。

ハンプティによって破壊された滑走路の照明塔、そこから伸びる電線に目を止めたコウは一か八かの勝負に出た。これ以上まごまごしてはいられない、もう、本当に、時間が、無いっ！

コウの身体に固定された電線はその重みでコウの身体をバイクから引き剥がしに掛かる、ともすれば身体を持って行かれそうな強い力にコウは全身の力で抵抗した。脇腹に食い込む電線が蛇の様に肋骨を締め上げて呼吸を奪う、軋む痛み能耐えながらコウは真っ直ぐ

にジムの足元目がけてバイクを全力で走らせた。

一直線に向かう自分の身体目がけて向けられた銃口が突然火を噴く、掠ればそれだけで十分命取りになる90ミリに向かつてコウは猛然とダツシュした。巨大な死が空気を裂いてコウの元へと殺到する、周囲の地面を激しく穿つ。だがトヴ2の放った弾丸の悉くはコウの軌跡をなぞる様に追いかけるだけで致命の一撃を与えられない、残っていたタイヤのグリップは生み出された膨大なパワーを地面へと叩きつけて、残像を残すかの様な加速を車体に齎した。五十メートルの距離を数秒の内に零にするレシオは世界の頂点に立った事のある物にしか与えられない性能だ。

射撃の反動を殺す為に大きく踏ん張ったジムの股の間をそのままの勢いで駆け抜けるコウ、尾を引く様に宙を舞う電線が後に続いて体勢を変えようとしたジムの向こう脛に当たった。後輪をロックさせてブレーキドリフトで一気に車体を翻すとコウはジムの前へと躍り出た、追い縋る様に背後で響く金属の轟音は空になったマガジンが落下する音。

「今だっ！」

その時だけは火器管制がメインカメラに切り替わる、照準は掌で接続されるコネクタを介してライフルの照準器から送られるがマガジンの入れ替えだけはOSに設定されたプログラムを使用しなければならぬ。デンドロビウムの模擬訓練を二ナと共に行っていた時にオートへの切り替えのタイミングが合わずにコンテナからの兵装取り出しを中々マスタースターする事が出来なかった、マニュアルからOSに切り替えての動作は思った以上の時間を必要とする。コウはそのタイミングを自らの的に晒して狙っていた。

急激なターニンで車体を再びジムの股間へと向ける、全開で噴き上がるアクセルが獣の咆哮と共に前輪を持ち上げる、上体を思い切り前方に押し出して跳ね馬と化す車体を瓦礫の野へと押し付けて電線の下をあわやの所で掻い潜る。棚引いていた電線がジムの左足首に蛇の様に絡みつく。

「畜生、奴は何処だ!?」

先手を取られて動きに翻弄されたままのト ヴ2は新たなマガジンをライフルに押し込むと再び火器管制をアクティブにした。時間にすれば十秒足らずの間だったのだが目標はモニター上から姿を消している、画面に表示されたドップラーレーダーの数値は自機に対してマイナスを示している、つまり背後。

「後ろだと、いつの間につ!?」

機体を翻して再びその脅威に正対しようとするト ヴ2。右足を後ろに引いて右足を前に出す事を二三度繰り返して行う、今まで何度も繰り返して来た信地旋回の体捌き。だがその一回目で既に機体に異変が起こった。突然コクピット内に鳴り響く警報音と異常を示す赤い点滅、インフォメーションモニターに表示される『下肢駆動系異常抵抗』の文字。モニターの景色が大きく傾いて自分の機体の姿勢が大きく崩れた事を知るト ヴ2、姿勢制御用オートバランスの緊急作動を示す緑の表示。

右脹脛に掛かった電線がピンと緊張する、それは左足首に繋がったままの電線を引いてその足を掬った。突然の固定で弾ける様にベストから吹き飛ぶ電線の勢いに身体を取られながらコウは何とか体勢を立て直して後方へと距離を取る、肩越しに睨みつける巨大な黒い影はゆらゆらと揺れながら徐々にその振幅を大きくしていた。

崩れたバランスを復原する為に始動するオートバランスは安全な領域にまで姿勢復帰を果たすまで制御をパイロットの手から奪い取る、本来であれば最小の手数で復帰を約束する標準機能もその姿勢を取り戻す為の機能に枷を嵌められるとどういう事になるか。

崩れたバランスを取り戻す為に大きく踏ん張った左足が右の向こう脛に掛かった電線を引っ張って右足を掬う、それを防ぐ為に右足を前に踏み出せば左足が。じっとしていれば直ぐに収まるその挙動もプログラムにその判断は出来ない、振れが大きくなればなるほど

復歸の為の動作は大きくなり、やがて。

右足を大きく取られたそのジムは遂に自由を失った。大きくよけて滑走路のコンクリートへとしたたかにひざを打ち付ける。

金属の歪む大きな音が、牽制射撃の音に紛れて戦火の空気を大きく揺るがした。

キューポラから弾切れになったバズー力を抜き出して次を地面から取り上げようとした時、アンドレアは確かにその音を聞いた。響いて来た方角は敵と対峙しているバリケードの向こう側では無く自分が今まさにモニターを向けている後方から、アンドレアはバズー力を取り上げながら恐る恐るモニターの倍率を上げて薄闇の向こうに眠る音の正体を探し求めた。夜間通常モードで見る夜景は暗視モードよりは暗く赤外線よりは輪郭をはっきりと映し出す、怯えた目でモニターの隅々に視線を走らせるアンドレアの目に僅かではあるが何かの影が映った様な気がした。

「…… な、なんだアレ」

呟いた途端に火器管制が動き出してターゲットとレティクルをモニターに表示する、バズー力に取り付けられている光学サイトが闇に沈んでいるその影の輪郭をアンドレアに対して鮮明に指し示す。それは間違いなく人型、そして数値はモビルスーツ、そして。

「あ、IFFが作動しないって、て、敵イっ!？」

誤射を避ける為のIFFによるトリガーロックが掛からない、ゲルググのAIは操縦者に向かって射程距離内に高脅威目標が存在する事を示して命の危険が迫っている事を教える。対抗手段として上げられたのは速やかな射撃と目標の撃破、敵を照準に捉えた事を示すブザーの音とレティクルの点滅がコクピットに充満する。

「お、おいつ、マルコっ! 敵だ、敵が後ろに」

肩を並べる僚機に向かって声を掛けようとしたアンドレアがモニターに捉えた影が動き出した事を知って声を詰まらせた。四つん這

いになったままのジムが頭をゆっくりと上げる、頭部から突き出された何本ものアンテナとフルバイザータイプのガンカメラ。まるで闇の底から這い出して来る鬼の様な姿でその視線をアンドレアに向ける。その恐怖に耐えきれなくなったアンドレアが目を、口を大きく開いて絶叫を迸らせた。

「うわあああつつつ！！」

右手のレバーの端にある射撃ボタンを力の続く限り、何度も何度も押し込んだ。

弾倉から残弾が無くなるまで、何度も何度も。

航走速度の遅いバズーカの弾頭とは言えどもトヴ2とアンドレアの距離は回避する事が不可能な間合いだった。頭を上げたジムの頭部が初弾によって粉々に吹き飛ぶ、サブカメラへとその機能を移譲する隙すらも次弾は許さない。

肩に命中したそれは基部から根こそぎ右腕をもぎ取る、回避運動によって敵の攻撃を避けようとするトヴ2の意思を嘲笑うかの様に三発目がよろけた胴体の中央部に命中した。コクピットの正面に命中した弾頭は乗員を保護する為の頑丈な装甲板を漏斗状に仕込まれた炸薬であつという間に溶かして内部へ超高温のメタルジェットを吹き付ける、トヴ2の身体も命も、彼の身の回りを囲っていた電子機器の全てが一瞬にして溶解した。

後背へと抜ける金属の液体はそのままランドセルの推進剤に火をつける、誘爆を起こして内部から引き裂かれたジムの上半身が赤い夜空へと吹き飛ばされた。

「何かの間違いじゃないのかっ!？」

「ダンプティが声を荒げてケルヒヤーに尋ねる。あり得ない、新兵が墮とされたならまだしもトヴ2は設立当初からの生え抜きでしかもダンプティよりも先輩だ。この隊の誰よりも実戦経験が豊富でケルヒヤーの次に信頼のおける彼が敵に撃破された等、予想外も甚

だしい。だがダンプティの焦燥を余所にケルヒヤーは、それでも自身が信じられないと言った声で再び同じ報告をするしかなかった。

「 ” 間違いありません、ト ヴ2、撃破。<sup>ロスト</sup> ” ”  
「くっ！」

何て事だ、とダンプティは思わずには居られない。前線での熟練兵の喪失は戦場のバランス維持に多大な影響を与える、強固に構築された戦線も偶然による一撃によって瓦解の方向へ向かう事すらある。あのア・バオア・クーでさえそうであったように。

「敵の後方から回り込む作戦は中止、数で制圧する！ ラース2、ト ヴ2の代わりに前線での指揮を執れ。新兵を敵の射線に晒しても構わないっ！ ハンプティ、牽制射撃はどうした！？ 鉄鋼貫通弾でバリケードを破壊しろ！」

「 ” 落ち着いて下さいダンプティ。敵の別動隊の動きが見えない以上ここで更に前線に戦力を投入するのは危険すぎます。ハンプティにしても位置を把握されない様に移動の最中、攻撃に参加するにはまだ時間が ” ”

「これが落ち着いていられるかっ！？ 一刻も早くハンガーを制圧しないと ” ”

「 ” 焦っては駄目です。作戦の実行を焦って最後の最後にシーマ・ガラハウに裏切られたあの日の事をもうお忘れですか？ 焦りは隙を生み、敵にその脇腹を突かれた時にはもう手遅れです。ト ヴ2の損失は確かに痛手ですがまだ決定的に不利になった訳じゃない。 ” ”

諭す様に無線で語りかけるケルヒヤーの声を聞いてダンプティは我に返った。確かにケルヒヤーの言う通りだ、まだ負けた訳じゃない。

「 ” …… すまない、ト ヴ1。貴様の言う通りどうやら焦っていた様だ。 ”

「 ” 無理も有りません、私も作戦中にこれ程予想外の事態の遭遇するとは思いませんでした。立案者としては恥ずかしい限り



です。”

心の中でケルヒヤーの言葉を否定しながらダンプティは再びモニターに表示される勢力図に目を遣った。ミノフスキー粒子を戦闘濃度で散布している為にレーダーは効かないが、無線の発振電波による位置測定で味方の配置の大まかな形は掴んでいる。遮蔽物の少ない滑走路上で敵の反撃に遭うタリホー達は、それでも敵の給弾の隙を突いてじりじりとラインを押し上げつつある、だが接近すればするほど敵の砲撃の威力と密度は増大してそれ以上の侵攻を許さない。「立て籠もっているゲルググも大したものだ、うまく連携を取ってよく抑え込んでいる。特にライフルで応戦している方は中々の策士だ、奴のお陰で部隊が横に展開出来ない。」

「敵に感心もしていませんがね。…… ラース2、先ほどのダンプティからの命令は撤回する。代わりに私が前線の指揮に立つ。」

「ト ヴ1？」

前線に戦力を投入する事を愚行だと戒めたその本人が、ダンプティの愚策に敢えて乗ろうとする発言に驚いた。ケルヒヤーは咎める様なダンプティの声に苦笑交じりで応えた。

「別動隊の機数は三機、奇襲をかけられてもダンプティとラース2だけで何とかなるでしょう。私は前線の膠着状態を打開する為に指揮を執ります、ハンプティの指揮権を、私に。」

重砲の指揮権を持つと言う事はこの戦域全体を支配下に収めると言う事、ダンプティはその申し出を耳にした時ケルヒヤーの心中を慮った。ト ヴ2は彼の僚機として常に行動を共にしていた、自分の立てた作戦の不備によって大事な仲間を失ってしまった事にケルヒヤーは彼なりの責任と忸怩たる決意を下したのである。

「どうする気だ？」

「立て籠もっている敵をこのまま半包囲状態で追い込みます、火力の密度が増せば補給の為にハンガー内に飛び出して来よう等と言う酔狂な連中にはいなくなるでしょう。非戦闘員が退避壕へと逃げ

込んだ頃合いを見計らって

ダンプティと肩を並べて戦況を見守っていたト ヴーのジムがゆらりと動いて一歩先に出る、モニターの淵に映るその姿を見送るダンプティに向かってケルヒヤーが言った。

「『スレッジ・ハンマー』でハンガーを制圧します。」

強かに打ちつけられる熱風にも怯む事無く、バイクに跨ったまま敵が撃破される光景を見守るコウ。その目には勝者たる輝きも無くただ散って行く命に対しての憐憫の色すら窺える。恐らくこれと同じ様な事が今夜何度も起きるだろう、自分の手を染めた物と同じ罪の赤を背負って生き残ってしまった兵士は何を思う？ 生き延びた事に感謝するのか、勝った事に凱歌の雄叫びを上げるのか、それとも。

感傷に身を委ねている暇は無い。とコウは思う。自分が遂に選ぶ事の出来なかつた二つの行く末に背を向けて、コウは足元で息づく獣の鼓動に鞭を入れた。残り少ないグリップを荒れた路面に刻んで薄闇を駆け出すバイクの上でコウは自分の差し伸べた手の行方を睨みあげる。

感謝も感動も凱歌も凱旋も自分には必要ない、ただ自分だけが知る人殺しの潜在的な汚名を自らの心に憶えて生きていく。自分の犯した罪は多分、自分の全てを投げ出しても到底償う事の出来ない大きな物である事は間違いない。

それでも。

穢れた手が、汚れた指が手に入れたいと望む物。守らなければならない物。この命が神に召される瞬間まで紡がなければならない物。それを俺は知っている、だからもう諦めない。

迷わない。

一直線に瓦礫の野を駆けるコウのバイクは鎗矢の流星を掻い潜って伏魔殿を目指す、辿り着かなければならない場所は。

―― 施設棟、B棟。

「副長っ！ 連絡通路が」

「分かっているっ！」

キャンベルからの報告を一喝して中断させるとセシルは矢継ぎ早にチエンに言った。

「チエン、士官宿舎の防火シャッターをロックして！ AIにパスワードの乱数変換を指示、敵をこれ以上先に進ませるな！」

「さっきからやってる！ だめだっ、敵は連邦軍のマスターコードでロックを解除している。介入不可能っ！」

「キャンベル、その女性にドアを開放する様に指示して！ そのあと壁に出来る限り身を寄せて射線軸に立つ事の無い様に言っつ！」

「無理だっ、俺達の腕じゃその子に当たっちまうっ！ 通路は狭いし距離は二十メートル以上あるんだ、フルオートじゃ援護

できないっ！」

「ロープが到着するまでの間だけでいいっ！ 何としても回収するまでの時間を稼いで」

「ありがとう、バンディッド。」

烈火の勢いで指示が飛び交う通信の間に割り込む静かな声音がセシルの声を詰まらせる。戦場と言う修羅場の中で穏やかな気持ちでいられる事なんか無い、人は絶えず迫りくる死の恐怖と闘い続け生と言う名の一本のロープにぶら下がる事を試みる。自我や理性や道徳や、その他諸々の後天的に身に付けた人としての全てをかなぐり捨ててでも本能のままに望む物。

だが時折、そんな地獄へと放り込まれた『人』と言う存在が心穏やかに現実を受け止める瞬間がある。セシルは艦橋でその声を何度も耳にして、その度に倍する叫びで押し留め、そして翻意も叶わず見送った。

「早まらないで、二ナ。まだ手が無くなった訳じゃない、もうすぐそこに貴方を助け出す為の手段が到着する。だからそれまで頑張っ

て！  
」

焦る音を押し隠す事すら忘れたセシルは既に二ナの事をファーストネームで呼んでいる、視線はチェンの前のモニター上をどの光点よりも早く移動する一つに置かれている。ハンガーに隣接した倉庫を飛び出したそれはこの部屋の前を抜けてもうすぐ外に飛び出そうとしている、到着まで後二分！

「　　」今までの事は本当に感謝しています、ですがもうこれ以上、私の為に誰も死んでほしくない。……もし私を助けに来ている人達と敵とが交戦したらまた誰かが斃れてしまいかも知れない、そんな所を見る事になる位なら私は少しでも血を流す事の無い方法を選びます。」

「馬鹿言ってんじゃないっ！ あんたいつからそんな弱音を吐く様になつたあっ！？」

モウラの手がロックが外れたままの重い扉に掛かった。全身の力で一気呵成に引くと僅かに開いた隙間に身体を捻じ込んで外へと飛び出そうとする、だがほんの僅かのタイミングでモウラの行動は阻止された。堅牢とも言えるモウラの巨体にしがみ付いたアストナージが渾身の力でモウラの身体をそれ以上進ませない。

「駄目だ、班長っ！ もう間に合わないっ！」

「はなせ、アストナージっ！ 二ナが、あたしの友達がヤバいんだ、黙ってこのまま行かせるおっ！」

力任せに上体を振ってアストナージを振りほどこうとするモウラの腕、だがアストナージの肩に掛かったその手が目的を遂げる前に予想外の方向から引き剥がす強い力。赤い髪の少女はその全てを賭けてモウラの腕にしがみ付いて叫んだ。

「駄目だよ、班長っ！ 班長がもし死んじゃったら残ったあたし達はどうすればいいんだよ、あたし達を見捨てても班長はその扉から二ナさんの所に行けるっ！？」

「ジエスっ！？」

振り絞る様に叫ぶジェスの顔を見下ろしたモウラが驚く、ジェスが、泣いている。

「置いて行かないでよ、見捨てないでよっ！　お願いだよ、モウラさんっっ！！」

ジェスの懇願が脳裏に響き、早鐘の様になる鼓動が耳を埋めたその時に、まるでその腕を伝って無くなってしまう様にモウラの力は萎えていった。

わかっている、ジェスが泣いているのはあたしがいなくなってしまう事を恐れているからじゃない。二ナが、自分の見知った顔が死を受け入れてしまった事が悔しいんだ。大人びていると、マセていると心中で彼女の事を評価していたのは一体どこのどいつだ、あたしの手に縋って子供の様に泣くジェスの姿は何処にでもいる、大人になり切れていない一人の少女じゃないか。

ドアに掛けられた手が誰にも気づかれないうちにそっと離れる、その時モウラの耳に二ナの声が流れて来た。

「　　」　モウラ、ごめんなさい。」

「ニナッ!?」

身体にアストナージを巻き付かせたまま携帯を耳に強く押し当ててるモウラ。一言も聞き逃さない様に、二度と忘れない様に。

「　　」　……　今まで、ありがとう。今まで随分助けてもらったのにこんな事になっちゃって、ごめん。でもね、やっぱりあたし、コウがないと　　ダメみたい。」

モウラの顔が大きく歪んで目尻から大粒の涙が零れ落ちる、大きく開いた口から洩れる嗚咽が退避壕に木霊する。モウラの心が張り裂けて二ナの言葉を何度も復唱して、同じ言葉を此処には居ない心の影に叩きつけた。

あんたがっ！

あんたがいないと駄目なんだよ、コウっ！

こんな時に、何であんたはここに　　どうして二ナの傍にいてくれなかったんだっ!?

コウっ！ 何処で何やってんだ！？ ニナさんが危ないって時に何でお前は間に合わないっ！？

モニターを睨みつけたままキースが心の中で叫ぶ。

「ニナさん、駄目えっ！！」

アテリアがコクピットの中で声を囁らせて叫び、声にならない叫びを上げたマークスがラーズ1のジムへと肉薄する。突然の反撃に気押されたラーズ1が後退するのを許さないマークスのビームサーベル、それまで掠りもしなかった刃先が避け切れなかったジムの左腕にヒットした。装甲を削られて剥き出しになった機関部を睨みつけながらマークスが吠える。

「ニナさん、諦めちゃダメだっ、生きてッ！ 生きていないと明日は無いんだ、諦めないでっ！」

開け放たれた四階のドアの向こうで大声を出す味方の姿が見える。必死の形相で耳元で流れる言葉と同じ意味の台詞を叫びながら二ナに向かって何度も何度も呼びかける。強く吹く風はまるで二ナの言葉を遠い宇宙にまで運ぶかの勢いで吹き荒ぶ、両肩に掛かる金の髪を大きく揺らしながらニナは小さく微笑んで、言った。

「モウラ、キースといつまでも仲良く、ね？ アテリアももつと素直になってマークスとつきあうのよ、貴方達羨ましい位お似合いなんだから。」

彼らの未来が保証された事を何故かニナは確信していた。自分を此処まで導いてくれたバンディッド セシルの声がそう思わせたのかも知れない、彼女に任せておけば安心だとニナは、奇しくもウェブナーやモラレスら旧知の仲間と同じ感想を心の中で呟く。

「バンディッド いえ、セシルさん。…… ウラキ伍長の事。」

その名前を口にした瞬間にニナの中から何かが込み上げて溢れた。

自分にそんな資格など無いのかもしれない、でもどうしてもそれだけは言っておきたかった。自分が手放してしまう、たった一つの宝物の行方を。

「…… コウの事を、よろしく願います。」

「二ナっ、二ナ・パープルトンっ！ 返事をなさいっ！ 貴方を助けにウラキさんもここに来ている、だからっ！」

セシルの声だけが電算室の闇に響き渡る。セシルの呼びかけを覆い隠す様に二ナの名を泣き叫ぶモウラ、痛くなる鼓膜と絶望に眩む目を必死の思いで堪えながらモニターの光点を見つめ続けるセシル。敵は四階のシャッターに手をかけた、味方はもう着くっ！

「通信途絶っ、技術主任の携帯の反応が切れましたっ！」

悲痛な声で叫ぶチェンが憤りに塗れるセシルの顔を凝視して報告する。ヘンケンは震えるセシルの背中をじっと見つめた後に、何かを決意する様な小さな溜息を洩らした。

「グレゴリー！ お前が来たのか！？」

通路を覆い隠す様な巨体が猛スピードでやって来る、岩の指揮をとっている筈の砲雷長自らが肩にロープを掛けて走って来るのを見たキャンベルは驚いて叫んだ。血相を変えたグレゴリーは巨体を四人の間に割り込ませると背中に担いだ個人装備の迫撃砲を抜きながら言った。

「指揮はパットと二番手に任せてある、問題無い。孤立してるのが技術主任と聞いて人任せに出来なくてね、それに」

ポケットから取り出したのは渡河用に使う迫撃砲の特装弾だ。先端の穴にロープを差し込みネジを回して固定する、それを発射筒に落とし込むと尾部の炸薬が発火して弾体を撃ち出す。空中で分離した弾頭部分に仕込まれたアンカーは命中するとその反動でフックを開いて固定する仕組みになっている。

「五十ミリの骨董品とはいっても立派な対戦車装備だ、俺の力じゃ

ねえとこいつは扱えねえ。」

そう言いながらもグレゴリーの手は止まらない、火器に精通する専門家を標榜する証明をグレゴリーは自らの手際で四人に示す。あつという間に組み上がった弾頭を一人の手に渡すとキャンベルに言った。

「ぎりぎりまで前に出るから身体を押さえてくれ、反動が凄いから吹き飛ばされるな？」

発射筒を持って通路の端までにじり寄ったグレゴリーが尾部から伸びる湾曲した台座を足の裏で止めて支える。背中を丸めて筒を持ち、鷹の様な眼で慎重に狙いをつける彼の視界には既に二ナの姿が映っていた。

「主任っ！ 今からロープをそつちに撃ち込むっ、危ないからドアを大きく開けて壁際に寄っついていてくれっ！」

野太いグレゴリーの大声は爆発音にも負けないほど力強くよく通る。元々轟音と罵声だけが飛び交う部署でさんざん鍛えられた喉にこの程度の距離は無いも同然、だがその呼びかけに応えて動き出した二ナの反応は、全くグレゴリーにも、そしてそれを見守る他の四人にも理解が出来なかった。

「主任、何をやってるっ!? ドアを開けて壁際に寄るんだよっ! ?」

グレゴリーは自分の指示が焦りのあまり間違っつて伝わっているのかと思った、そして今度は頭の中で何度も言葉を反芻して正確に言つたつもりだった。だがそれでも。

「主任っ! ?」

ゆっくりと閉じられていくドアを目の当たりにしたグレゴリーは構えを解いてすつくと立ち上がった。迫撃砲二キターを握り潰すかと思う程の膂力が二の腕を震わせる。だがそれでも二ナの動きは止まらない、切ない笑顔を隙間から覗かせて、蒼の瞳が止め処なく溢れる涙に濡れて。

「馬っ鹿野郎おっ!」



全身の全ての個所に迸る怒りを込めてグレゴリーが雄叫んだ。閉じていくドアに向かつて叩きつけられるグレゴリーの罵声は風に巻かれて遠い夜空に消えていく。

「ここまで来て諦めてンじゃねえっ！ あんたは生きていたくないのかあっ！！」

轟雷にも似たグレゴリーの声がそれで途絶える、閉じられたドアの向こうに残された全ての思い出に小さく、心の中で別れを告げた二ナがドアの前から身体を離れた。辛かった日々、幸せだった日常、最後まで満たされなかった心の全てに踵を返した二ナは唯一人で、死と生を分ける境界線に向かつてゆっくりと歩き始めた。

「チエン。」

無言で成り行きを見つめていたヘンケンが静かに口を開いた。セシルは机の上に手を押し当てたまま肩を震わせ、チエンはその言葉にモニターへ向けていた視線を声の主へと動かした。チエンの目がヘンケンの双眸へと注ぎ込まれた時、ヘンケンはそれを拒む様に瞼を閉じて静かな声で命令した。

「ディザブル 士官宿舎の主電源を無効へ。全ての照明をカットしろ。」

「艦長っ！？」

それまで声を無くしていたセシルが突然振り向いて、その怒りの矛先をヘンケンへと向けた。そんな事をした所で災害時に独立して動く防火シャッターの機能が停止する訳ではない、無論ヘンケンにも分かってしている。分かっているからそれを命令すると言う意味、それは被弾した艦の一区画を強制的に閉鎖すると言う命令と同義。

「まだ、まだやれますっ！ きつと何か手が残っている、こんな所で諦めるようでは私は貴方の副官を名乗れないっ！」

「セシル。」

目を潤ませながら訴えるその顔をヘンケンは初めて見た、彼女を襲っているであろう無力感へヘンケンにとっては幾度となく乗り越

えて来た挫折、だからこそセシルを救う為に自分が罪を背負わなければならぬ、と思う。

「もついい、お前はお前の出来る限りの事をやり遂げた。……」

人には全力を尽くしても、自分ではどうしようもない事が、ある。」  
これまでのセシルの奮闘を労わるかの様に声を掛けたヘンケンがそつとセシルの肩に手を置いて軽く握った。その力につられるかの様に目尻から零れる一筋の屈辱、ヘンケンに向けられたセシルの表情は自身の心境を鏡に映しているも同然だった。自分が友人と認められたコウの願いを遂には叶えてやれなかった事、そして為す術もなく彼の掛け替えの無い者を敵の手に掛かる事を見送らなければならなかった事。

そしてもうすぐ訪れるであろう最期の瞬間に頭を垂れた彼女がおぞましい物を見ない様、せめて電源を落とす事しか出来なかった事。  
無念はヘンケンの心の奥底で復讐と言う名の黒き焰へ姿を変えた。湧き上がってくる殺意と憎悪はヘンケンの顔に幾つもの皺を浮かび上がらせる、無言でウェブナーと二ナの敵討ちを心に誓うヘンケンの顔をじつと見上げていたチェンが眼鏡の蔓を人差し指で押し上げて、その表情を誰にも悟られない様に背向けると小さく何かを呟いた。

「……士官宿舎の主電源を無効へ、アイ。」

チェンの手がマウスを握ってカーソルを動かす、カチリというクリック音。バッテリーから送電される電流を強制的にカット、遮断<sup>ブレイク</sup>弁<sup>カ</sup>が下りた事を示す赤い表示と士官宿舎の骨格を表す3Dフレーム。まるで地の底から這い出した様な赤い色が骨組みを侵食して行く様に。やがて士官宿舎の内部を表示する枠組みは血の色に染まった、敵の位置を示す赤い点滅もそれに飲み込まれて消えていく。

シャッターまでまだかなりの距離を残して二ナは立ち止まった。

目の上に墨を塗られた様に見えるなくなる通路の様子は二ナの世界の終焉を予言する様に、しかし背後の摺りガラスを通して時折届く微

かな閃光の残り香が景色の輪郭を臙げに浮かびあがらせて二ナに教える。

明かりを消してくれた事を二ナは誰かに感謝した。意図的な物であれ偶然によつて起こった事であれ、とにかくこれから起こる恐ろしい事を自分は目に焼き付ける事無く死んでいける。自分の部屋の前で覚悟を決めた時とは全身を凍らせた緊張も、胸を打つ拍動も格段に穏やかだ。死を覚悟すると、人はこうも心の置き処が変わるのだらうかと。そう思うと自分の中の新たな発見に二ナは小さな笑顔を零した。

今までに何度も自分は死を覚悟したつもりだった。アイランド・イーズの落下場所を逸らす為に制御室に乗り込んだ時、ガトーが死んでコウの安否を求めてアクシズの船から退艦した時、そして今日だがそのどれも今の二ナと同じ心境を共有する事は出来なかった。心は常にさざめき、どこかで一筋の可能性を信じて明日と言う日を求めていた様な気がする。

その時の自分と今の自分との違いは何なのだろうと二ナは思う。辿り着く結果はどれを採っても同じ筈なのにそこまでの道程みちのりが違ふ、あれほど恐ろしいと思つた死を今、何故自分はこんなにも心安らかに受け入れる事が出来るのだろうか？

「コウ、」  
暗闇に思わず漏らしたその呟きは、二ナの今までを支えて来た全て。

胸ポケットの奥に秘めた傷だらけのディスクに二ナはそつと手を置いて、その形を確かめる様にゆっくりと指でなぞる。何度も諦めようとした自分に今まで生きる力をくれた小さな記録。

謝らなきゃいけない事がいっぱいある。

私の造つたガンダムで死んでしまった多くの兵隊さん達に。  
ラトールさんの様に愛する人を亡くして未来を見失ってしまった、もつと多くの人達に。

私を庇つて死んでしまったトンプソン曹長に。

私に道を指し示してくれた、ルセットに。

そして

「……ごめん　　っ。」

忘れる事の出来ないその面影に、あの笑顔に。もう二度と会えなくなつた、私の命よりも大切な、貴方。

ここで叶えられなかつた事を、いつか生まれ変わった未来で、きつともう一度。

闇の中に浮かび上がるコウの顔を振り仰ぎながら佇む二ナの耳にはつきりと届くその音は、自分を迎えに来た死神達がその手の鎌を振り下ろす為に閉ざされていた煉獄への門を抉じ開けた音だつた。

「  
” 対象<sup>アルファ</sup>、確認。”」

ブージャム1の元へ突然齎されたその報はそれまで中庭の奥深くで味方のモビルスーツの攻撃に身動きも取れなかつた地上部隊の士気を高めた。ある者はその場に自分がいなくなつた事を心底悔やみ、またある者は別動隊の活躍を称賛する。だがブージャム1も含めて大勢の物が心底ほつとしたと言つのが彼らの士気高揚の正体だつた。その女を追い掛けて隊の半分が蒸発した、今まで何度もこの様な作戦と同じ役割をこなして来たブージャム1にとってその事実は恐怖だつた。確かに何人かの隊員は必然と偶然の両方によつて損害となる事は稀にあつたがここまで一度に殺られたという記憶は無い、追跡する別動隊からの報告を逐一受けていたブージャム1は腕利きの隊員四人がかりでも中々捕える事の出来ない対象が、実はこの地に眠る怨霊の類が起す祟りの姿なのではないかと思つたまでに追い詰められていた。

疫病神

心の中に浮かんで来る非論理的なその単語を飲みこみながら事態の推移を見守つていた矢先に送られて来たその朗報は、ブージャム1の心中から得体の知れない幻像を追いだすには十分だつた。

「了解、よくやった。今日の一番手柄はお前達<sup>モウ</sup>の物だ、後で准将に懸け合うから欲しい物を適当に見繕<sup>モウ</sup>っておけ。」

部下の前ではひた隠しにして来た恐怖が取り払われてブー ज्याム 1の顔に再びあの笑顔が戻った。目尻と口元を同時に吊り上げ、野卑な嘲いに淫蕩な輝きの瞳を張りつかせた、悪魔の様な。

「女の息の根を止めたら写真を撮って原隊に合流しろ。顔

は絶対に撃つなよ？ 俺はな

頭の中に焼き付けられている対象のポートレート。蒼い瞳と白い肌、包む様な金色の髪に慈母の様な微笑み。膨らむ妄想が女の肌を青白く塗り替えて半開きになった唇の赤い色だけを脳裏に刻んで股間を疼かせる。

「女の顔が大好きなんだ。」

暗視ゴーグルを通して指揮官の目に映った女性の顔は、彼らが最重要目標として指定された対象に間違いがなかった。微かに漏れ出る外部の光を束にして像を結ぶその目は夕暮れの様な明るさで刑場の様子を映し出す、壁際でラップトップを抱えたまま立ち尽くしている二ナの姿を見止めた指揮官は、まるでその世界の雰囲気を見分達の乱入によって壊してしまう事を畏れたかの様に静かな声音で尋ねた。

「二ナ・パープルトン技術主任？」

促す様なその物言いに映像の中の人影は小さく頭を揺らして肯定の意思を示す。相手の手の中に武器やその類の物が隠されていない事を認識した彼の部下は、二ナの返答を受けて突き付けていたライフルの照準を離れた。

これから始まる儀式を執り行うのは自分達では無く、隊を預かる責任者が果たすべきであると言う事を彼らは暗黙の内に了解している。指揮官は手の中のライフルを傍らに立つもう一人の兵士に預けて腰のホルスターに手を伸ばしながら言った。

「貴方には私の上官から殺害命令が出ている。……理由や私の

所属部隊を最期に教えて差し上げられない事は甚だ遺憾ではありませんが、これも軍の作戦の範疇だと言う事をご理解頂きたい。」

偶然にも別動隊の指揮を任されたその男には与えられた力に対する興味も、1の様に歪んだ倫理観や性癖の一片も持ち合わせてはいなかった。人を殺す事に何の快楽も感じない彼が未だにこの隊に従軍している理由、それは軍人という職業に対する自分なりの理想を完遂すると言う信念による物だった。

与えられた命令には盲従し任務は完璧にこなす、部隊と言う組織の中に置いて自分と言う歯車がどれだけ耐えられるかと言う修行にも似た振る舞い。それは例え他の部隊員がどのような鬼畜な所業を選択しようとも輪の外へと身の置き所を処す事の出来る、軍人の規範の理想形だった。

民間人でありながら自分達の前にその身を晒して、何の抵抗も懇願も見せないその女性を彼は尊敬した。恐らく死の恐怖に駆られていただろう、それは身体の中の部分をついても今にも吹き出しそうな慟哭に溢れているに違いない。だが彼女はその全てを残された理性で捻じ伏せて自分達の目の前にその命を差し出したのだ。自分と同じ崇高な姿を最期の瞬間まで保ち続けようと努力する彼女の姿を、心を男は素晴らしい事だと称賛した。

だから1に命じられたからそうするのではない。彼女の人のとしての尊厳を最期まで守る為に、自分はそうする事を選ぶのだ。

「苦しいのは一瞬です。……直ぐに楽にしてあげます。」

「こちらへ。」

取り上げた拳銃の先に消音器サプレッサーを捻じ込みながら男は二ナに言った。部下となった三人が彼女が神に召される為の場所を自ずと空ける、生贄を祀り上げる祭壇としては殺風景な設えと天も見えない暗闇の中に眠る血の回廊オー・ルー・ジュ。二ナの足が震えながら神の御許へとその足を踏み出した。

「チエン、頼みがある。」

二度と開かないドアを険しい表情で睨みつけていたグレゴリーが戦場の風に乾く目を細めて言った。キャンベル達四人は既に二ナ救出の目処が立たなくなっただにもかかわらずその場を立ち去ろうとはしない、寧ろ何らかの変化に最後の希望を託して銃を構えたままじっと対岸のドアを見つめている。

「砲雷長、どうぞ。」

還ってくるチェンの声にも力は無い、それに他の者からの声もグレゴリーの耳には入って来なかった。ここで会話を聞いている全ての者が二ナの身を案じ覚悟を　　結末を聞き届けようとしている。凧を思わせる沈黙の中でグレゴリーが言った。

「傍受している敵の会話の中に技術主任の死亡を匂わす言葉が出てきたら、俺に教えてくれ。」

「どうするんですか？」

グレゴリーは胸のベストから筒状の手投げ弾を三発抜き出して足元の床に置いた。腰を下ろして再び迫撃砲を構えながらチェンの質問に応える。

「彼女を……技術主任の亡骸をテルミット（焼夷弾）

で焼き払う。艦長、『野辺送り』の許可を。」

それはセシルが決めている事ではない、口を噤んでヘンケンの表情を伺うセシルとチェン。ヘンケンも静かに、そしてゆっくりと目を閉じてグレゴリーの言葉の意味を噛み締めた。

助けてやれなかった仲間に対するせめてもの情け、そして自分達の無力を心に刻む為の大切な儀式。誰も彼女を助けたいと望み、そしてその手はついに届かなかった。戦場で幾度も繰り返したその愚行をまさか地上でも行う羽目になるうとはヘンケンも、そしてヘンケンの仲間達も思いもよらなかった。

グレゴリーが使用を求めたテルミットはこれからの作戦の締めにする為に必要な虎の子の三発、だがグレゴリーは二ナの弔いの為にそれを使いきる事も辞さず、そしてセシルも咎めない。作戦が滞っ

てしまう事よりも大切な事があるのだとグレゴリーはヘンケンに教えている。

教わるまでもない、そして彼らを束ねて戦場を駆け抜けたヘンケン・ベツケナーと言う男が、それを許さない筈がない。

深い沈黙の後にヘンケンは瞼を開いてセシルに向かって小さく頷く。同意を求められたセシルは視線を落としてそれを受け入れ、チエンは自分に向けられたヘンケンに向かって何度か瞬きを繰り返す。小さく息を吐いたヘンケンが絞り出す様に言った。

「『野辺送り』を、許可する。グレゴリー、奴らの手に何も渡すな。…… 何も、残すな」

「…………… 何じゃ？ この音」

自分の目の前には死への道が続いている。

闇より瞑き地獄への通路を思わせるその廊下を歩きだそうと決心した二ナは、声の導きに従って震える膝を前に進めた。作業の為に履き古したレッドウイングのモカシンパンプスは最後の勤めを果たそうと二ナの足元を流れる血河から彼女の身を守り続ける、少しでも綺麗なままで、決して他の何物にも穢されぬ様に。

足を下ろすとその床の冷たさが皮のソールを伝わって歩みを鈍らせてしまいそうだと思った、だが二ナは引き込まれる様に上げた足を前に進めて執行人との間合いを自ら詰めた。接点に残る感触と胸に棘を刺す様な痛みが同時に二ナを襲う、それは彼女から無理やり引き剥がされる記憶の積層の痕跡だった。

この世に生を受けてから今までの記憶、父と母、友人、仲間、そして嘗て愛した敵と。

剥がれ堕ちる様に零れていく様々な夢の跡はもう何も自分に語る術を持たないだろう、人はこうして再び土へと戻るのだ。積み重ねた喜びも悲しみも全てを忘れてただひた向きに、地位も境遇も関係なく辿り着く約束の地。

心は何処へ行くのだろう、命は何処へ向かうのだろう。委ねられ



た記憶が一堂に会して遠い宇宙の何処かで次の世界を待っているの  
だろうか。揺りかごにまどろむ赤子の様にいつか自分の目が覚める  
時に広がる世界を夢に見ながら。

いやだっ！！

何の前触れもなく、それは、突然。

鏡の様な水面を突然盛り上げる激情はうねりを増して二ナの心を  
飲みこんだ。どうしても捨てる事の出来なかつた心の欠片が二ナの  
胸を掻き穿る、あの日の記憶、自分の想い、交した温もりが終焉を  
迎えようと誓った二ナの気持ちを覆す。

コウ、コウっ、コウっ！！

大きな声が嵐の中に木霊した。その名を呼ぶ毎に高まる鼓動と痛  
む心、耳を劈く内なる叫びが剥き出しになつた本能のままに欲しか  
つた物を追い求める。さし伸ばす手、荒野を駆ける足、どれもがそ  
の幻を目指して。

狂おしいほど愛しく、切ないほど恋しく。

会いたいっ！！

対象の足が止まった事に異議を唱えるほど野暮な性格ではなかった、その男は二ナの足が止まった理由を心得ている。民間人である彼女がここまで覚悟を決めた事こそが尊敬に値する、だが人はそれほど気高く自分を保っていられるほど強くは無い。

死に対する恐怖は誰にでもある、そしてそれを押し隠して戦いに挑める者こそが真の軍人を名乗るに値すると思う。それは彼女が思っているよりも彼我の彼方に位置して決して届く事は無い。何故なら。

彼女はまだ、その手を血に染めた事がないからだ。民間人である以上染める機会に巡り合う事がないからだ。死を自らの手で誰かに与えた者のみが自らの死を受け入れる事が出来る、罪を知らないままで生を全うする彼女にそれは不必要な物なのだ。

動けない二ナを視界の中央に置いた男が憐憫の視線を注ぐ、闇の中で届く事の無いその表情のままに男の足が一步を踏み出す、連られて下がる二ナの足。

「…… 分かりました、ではこちらから。」

男はそう言うのと二ナを試す様に一步を置いた。だが二ナは胸の前でラップトップを抱え込んだまま、小さく頭を振って同じ距離を後ずさる。男の背後に控えていた部下が二ナの動きを見咎めて確保しようとする動きを片手で制して、再び。

二ナの足がもう一步後ろへと。だがその時二ナの肩は壁に触れてそれ以上の後退を許さなかった。動けなくなった二ナの姿を見た男はまるで腫れ物にでも触るかの様に、二ナの気持ちを刺激しない様に同じ歩調で近づいて行く。

男の足音が次第に大きく二ナの耳に響いて来る、死のプレッシャーに押し負けた彼女の身体がバランスを崩して、壁を背にしてしゃ

がみ込んだ。二ナの視線の丁度同じ高さで鈍い光を放つ拳銃のシルエット、将星に塗られた蛍光塗料の仄かな光が分かるほどの距離で止まった。

思わず間に割って入ってしまったキャンベルの眩きはヘンケンの声を途中で止めた。何事かを問い糺すヘンケンの声を全く無視して自分の聴覚に集中するキャンベル、『計器に頼らなければ機械の具合も分からない等三流の機関士の言い訳、一流の機関士は耳で聞いただけで中がどうなっているかが分かる』と常日頃から配下の者に言い聞かせる彼の耳は確かに今までには存在しなかつた音を捉えた、と思う。ソナー手のキンドルがここに居ればその方向やら物体やらが詳しく掴めるのだろうが、残念ながら軍に入隊してから機関部署一筋の自分にはその機会とは与えられなかつた。

だが。

集中したキャンベルの耳はその音が自分達の頭の遙かに上の方向から聞えている事を教えた。分厚いコンクリートの壁を震わせて轟咆を掲げるその音は同じ間隔で高低を繰り返す、極限まで高まる大きな音は魔の眷属を、極端に落ち込む低い唸りは野に伏す獣を思わせた。獰猛な素性を隠す事も忘れ、ただひたすら思うがままに戦場の大気を蹂躪し続ける遠吠えをキャンベルはじつと聞き入る。

繰り返す正確なパルスはその心臓の刻むリズムを浮き上がらせて、キャンベルはそれが精密を極める機械の機関部が醸し出すロングストロークによる物だと気が付いた。振動による揺らぎが少なく、操縦性を重視した競技用のエンジン。

そしてキャンベルは、自分がそう遠くない過去にこの音と同じ物を間近で耳にした覚えがあった。よく整備されたエンジンはアイドリリングの音だけで持ち主の性格を表現する、安定していながらその心の奥底に秘めた強大な力、押し隠した本性が囚われの鎖を引き千切つてあるべき場所へと解き放たれようとしている。

「！ ウラキ君っ ！？」

記憶の底からその名を掘り起こしたキャンベルが驚きのあまり、コウの名前を叫んで天井を見上げた。

「 …… 俺が、行く。」  
ヘンケンが聞いたのは確かにコウの声だった。繋がった途端に反応するにわか作りのIFF、モニターで位置を確認したチエンが叫び、セシルがコウのやろうとしている無謀に気付いて表情を凍らせる。

「モニターに感っ！ 伍長は屋上、B棟の屋上に居ますっ！」

ハンガーから撒き散らされる光の矢を背にコウはじつと対岸の士官宿舎の屋上を見つめている。煽るアクセルが呼び覚ます獣の鼓動はその回転数を六千辺りで固定して維持、<sup>パシヤル</sup>傷だらけになったタイヤが持ち堪えられるのは後ほんの数時しか無い。身構えたコウがガツンとギアを踏み込んで闇に浮かんでいたニユートラルを消す。

だから、今！

絶妙なクラッチミートは三百キロを超える重量を最大トルクで弾き出した。一瞬にして頂点を作る視界の中でコウの手は更なる力を愛機に要求して、全開で引き絞るアクセルが白煙を上げた車体を左右にふら付かせながら残ったグリップを全て屋上に刻みつける。

迫り来る端境、微かに浮いた前輪が爆風によって内側に薙ぎ倒された落下防止のフェンスに乗り上げる。持ち上がる、投げ出されるハイパーモタード、その足元には高さ二十メートルの断崖。

天空を駆ける獣の雄叫びが尾を引いて、戦場を貫く。高さも忘れて身を乗り出したキャンベル達の頭上を飛び越えるコウの姿、その顛末を予想する事も出来ずにただ呆気にとられて軌跡を追う事しか出来ない十個の瞳。放物線を描いて落下を始めるその物体を驚きの眼差して見上げる事しか出来ない彼らが気付く顛末。

「馬鹿っ！ 二十メートルをどうやって」

怒鳴るグレゴリーの声すら最後まで語り切る事は叶わない、目の

前で宙を舞う彼に残された時間はまさにそんな、刹那に届かぬ光陰。

二ナの姿を目に捉えた時、コウの目にはもう一つの物が映っていた。それは完全に破壊された連絡通路を支えていた基部の鉄骨。

強度を増す為に採用されたトラス構造は主に上面に組まれた三角形の梁材でその強度を維持するように設計されている。故に床面を貫通する鉄骨の本数は意外に他の構造建造物よりは少なくて済み、軽量であるが故に連結する施設への負担が少ないという利点がある。

医務施設を吹き飛ばした爆発によって吐き出された残骸が叩きつけられた事で破壊されてしまったB棟と士官宿舎を繋ぐ連絡通路は確かに跡形も無くなってしまったかの様に見える、だが上部構造が先に崩れたお陰で差し渡していた下部の鉄骨の一部分が掛かった重みに耐えきれず、離断した状態で士官宿舎側に残っていた。

それは僅かな幅、恐らくバイクのタイヤ三本にも満たない接地面を空間に晒したままで突き出ている、グレゴリーやキャンベルにとっては目にも留まらないほどの残骸。だがコウはその一点に命を賭けた。

誘引される悪魔の力は最大限の解像度をコウの目に与える、緩やかに流れていく景色と迫り来る士官宿舎の壁面、五メートル以上の落差を飛び下りても尚足元に僅かに覗く程度にしか見えない鉄骨の端。一メートルも無い足場に目がけてコウは狙いを定める。

「……………立てませんか？」

二ナの前で佇んだ男は静かに尋ねた。頭の上から降り注ぐその声に二ナは目を向ける事すら出来ない、覚悟を翻弄する激情に心を飲みこまれたままその目は銃の将星に塗られたルミノールから動かせない。

会いたいと思う願いが二ナの決意を消し飛ばし、生きたいと思う望みが二ナの身体から力を奪う。あれほど穏やかだった心は瞬く間にその景色を変え、晴れやかな空を消し、煌めく星を閉ざした。垂

れ込んだ暗雲は豪雨と稲妻を呼び込み、震えは唇に現れた。カタカタとなる奥歯の音が鼓膜を叩いて脳の奥に侵入する、頭の片隅で渦巻いているあの文字の柱は二ナの動揺を示すかの様に意識の中で拡張を繰り返す。

足を前に投げ出したままで座り込む二ナの姿を見た男はそれ以上の強制を諦めた。寧ろ失禁もせず良くもここまで耐えたと思う、最期の瞬間までせめてもの美学を追求しようと言ふのならば是非もない。

「分かりました、ではここで。」

二ナの視線が光に惹かれて移動する、二つが一つに。それは断罪を齎す銃口がぴったりと二ナの頭に狙いを付けた事を意味する。

1の要望につきあってやる義理は無い、自分が今彼女にしてやる事はその苦しみを少しでも早く、その痛みを少しでも軽くしてやる事しかない。二ナの前頭葉に向けられた銃口から吐き出される小さな金属は彼女の額を貫通して一瞬で神の御手へと運ぶだろう。

そして彼女はそこに辿り着いて初めて知るに違いない、自分が苦しみや悲しみから永遠に解放されてしまった事を。

男の指に力が籠る、闇の中に漂う空気が二ナにそれを知らせて。力の限り瞼を閉じる二ナ、二度と開く事無いその目に映る最後の光を見ない様に。

その瞬間に狭い通路へと流れ込む重低音の唸り、無限の反響を繰り返しながらそれは押し寄せる荒波の如く闇に充滿した。突然の環境変化は人間の生理に無意識の制動を掛ける、撃鉄の発条が解放される寸前で滞る男の指。鼓膜を震わせるその音を歓迎すべきではないと、男の意識が脳裏で呟く。だがその対応を模索しようとした男は目の前に置かれている対象と自分達の身の安全を天秤に掛けようとして、迷った。

この千載一遇のチャンスを逃す事は出来ない。何故なら彼女に対する処刑命令は既に1から自分達宛てに送られている、ここでもし

何らかの不慮の為にその機会を逃せば今度は自分達の身が危うくなる。

だがその危惧を追い越す様に雪崩れ込むこの音は男にそれ以上の危機感を抱かせた。得体の知れないプレッシャーを感じる男は耳を欝ててその音を確かめる、だが自分の記憶の中にそれに類する物体の影すら浮かばない。

後者の選択に身を委ねた男は部下に片手を振って通路の奥へと銃口を向ける事を指示した。連絡通路側の警戒の必要性も頭の中を過ったが、二ナがそこから一步も動かずに彼らの到着を待っていたと言う事実が彼の頭の中からその選択肢を消去した。

彼らが階下で待機している間に彼女はこの建物から脱出できるだけの時間を十分に持っていた筈だ、その貴重な時間を自らの為に行使せずに自分の命をつけ狙う輩の到着を待っている事など、余程の不具合がこの先に発生していない限りあり得ない。それに戦力を振り分けて、もしも予想外の戦力　彼女を救出しようとして押し掛けた基地の兵士　がここに投入されたのなら戦力の分散は愚の骨頂、全火力で応戦するのが最も理に適う戦略だろう。

突然大きくなり始めたその音に男の喉が唾を飲んだ。通路の先で銃を構える部下の背中を目で追いながら、二ナに突き付けていた拳銃を同じ方向へと構え直す。暗視スコープには通路の先にある階段までの景色がはつきりと映っている、例え敵がどのような装備で、何人で押し掛けてこようと先手を取れば、勝てる。

おかしい、これは何だ？

轟音に混じって聞えるスキル音を捉えた瞬間に男の脳裏に疑問が浮かんだ。その音の発生を境にして突然勢いを増した唸り、レベルが一気に上昇してくつきりと音の輪郭が滲み出す。そんな速度で何かが上がって来るのならとつくにその姿を目にしていなければならぬ筈だっ！

混乱する思考に拍車をかける残響が方向感覚を乱れさせ、恐慌状態に陥った部下の顔が音の正体を求めて宙を彷徨う。だがその音が

突然指向性を持って接近を始めたと分かった瞬間に男は全身の毛孔から冷や汗を吹き出して硬直した。

その矛先は間違いない、自分の背後から 信じられない速さでっ！

滑らかな鉄骨の上に着地した後輪、破壊された基部が衝撃と重みで更に壊れていく事が分かる。だがたった一本のサスペンションでは償却し切れないその反動を制御可能な範囲で殺す事が出来たのは基部の崩落によって吸収されたお陰だった、奇跡同然のその一瞬を必然に取り込んでコウの身体は壊れた橋の袂で躍動する。

傾いた鉄骨の上で棹立ちに立つバイク、コウの膝が残った反動をすべて吸収して大きく折り畳まれる。空気を掻く様に空転して姿勢制御のジャイロの役割を果たしていた後輪は吸い付く様に鉄骨の表面に張り付いて、再びグリップを取り戻した後輪が溶けたラバーで鉄骨に喰い付いて最後の力を振り絞る。

焼けるゴムの匂いがコウの鼻を突く。不安定な足場、天地の境界で進退を繰り返す駆動輪。

行けッ！！

心の叱咤に愛機は応えた。全ての力をささくれだらけの後輪に叩き付けて猛然と加速する、一瞬で届く煉獄へと通じる門扉。

持ち上げられたままの前輪が閉ざされたままの絶望を力任せに叩き割った。

鉄の蝶番は捻じ切れた、摺りガラスは悲鳴を上げて粉々に砕け散った、軽量鋼板の扉はその力を全て受け止めて、何の抗いも出来ずに内側へと弾け飛ぶ。

まるで西部劇の酒場のワンシーンの様に通路へと踊り込んだ来た黒い影、一つ瞳は魔眼の輝きで闇を切り裂く。ハロゲンのハイビームは一瞬にしてその通路内に存在する全ての物体を影と言う名の石へと変える、突然の襲来に驚いた四人が思わず振り向いて、投射さ



れた眩い光に視野を晒した。一瞬にして増幅されるその光はレーザーの様  
に彼らの眼球内を貫通して、張り巡らされる血管ごと網膜を瞬時に焼き切る。

「うおおっ！！！」

脳髄にまで届く痛み悲鳴を上げてゴーグルを跳ね飛ばす四人の死神、だが眼球の後膜全てを焼き尽くされた彼らの目に光が戻る事は、もう無い。視神経を直撃する痛み耐えかねて悶える彼らは手の中の武器を床に投げ捨てて、まるで祈る神を喪った信者の様に両手で顔を押しさえて闇を彷徨う。

「くそおっ！ 目が、目がアッ！！！」

苦悶の叫びを上げながら唯一、指揮官の男だけが手の中の銃を手放す事を拒否した。途絶えた現実に浮かびあがる巨大なエンジンの咆哮目がけて銃口を振り上げる。

自分に銃を向けようとする男の元までは秒以下の彼我、しかし肥大したコウの殺意は刻む秒針を分に変えて時の流れを置き換えた。ゆっくりと流れる景色は嘗てあの戦場で何度も味わった不愉快な感覚、上下同時に点灯するヘッドライトは自分の進路上にある全ての存在をコウの目へと送り込む。

手前に一人、奥に三人。パイロットとしての識別能力は瞬く間もなく状況を読み取る、奔る虹彩が変化し続ける情報を絶え間無く上書きして。

そして。

愛おしい金の髪が大きく揺れて。

濡れそぼる蒼い瞳が大きく見開かれて。

憶えている可憐な唇が小さく開いて震えながら。

「二十あつっ！！」

充滿する死、劈く咆哮、駆け巡る殺意。その全てを凌駕して。

悲しみに満ちた過去と、置き去りにされた現在と、諦めてしまった未来。神が書き記すその全てを破り捨てて、コウ・ウラキと言う存在が信じる魂の最も奥深くから。

たかぶ  
昂る。

みなぎ  
漲る。

ほたし  
進む。

君の名前を、命の限り。

声を頼りに撃ち出された弾丸がコウの頬を掠めた。孕んだ衝撃波に目を細めて男の顔を睨みつけるコウの頬に刻み込まれる新たな傷、だがそこから吹き出した血の玉が筋となって頬を伝って落ちる前にコウの手は、敵の身体に届いた。扉を破壊する為に犠牲になった歪んだ前輪が反射的に手を伸ばした男の腕の間をすり抜けて胸板を直撃する、鈍い音と湿った音。

砕け散る肋骨と潰される内臓の音が苦痛のあまり絶叫する男の顔と共にコウの耳へと刻み込まれた。だがコウの手は至近距離で知る敵の致命傷を顧みる事無く右手のグリップを限界まで捻り切った。掠め去る二十の残像、一瞬の邂逅。

排気量に裏付けられる凶暴な加速が強烈なGを二人に与える。ハンドルにしがみつくコウの目の前で足を浮かしたまま運ばれようとしていた男は最後の力を振り絞って握りしめていた銃を二十へと向けた。

狙いなど無く、的も見えない。だが彼を最期まで動かしていた本懐は今わの際にそれを選択した、残された命に賭けた彼の矜持が指を動かす、引き金を引く。ラピッドファイア速射の限界まで、早く。

床を跳ねる、壁を穿つ男の連弾、だが男の最期の祈りに小さな鉛

でしかない彼らは応えてやる事が出来なかった。二ナの周囲で弾けたそれは彼女の命どころか身体に疵を刻む事も出来ずに空しく闇へと消えていく。

耳に届かなければならなかった着弾の証拠を手に入れられなかった男は自分の祈りが運命の女神に届かなかつた事を知り、それと同時に迎來する冥界の天使に心臓の鼓動を預けて生きる事を諦めた。途絶えた拍動が男の身体から力を奪って取り零した拳銃が床へと投げ出される、冷たく響く金属音は駆け抜ける機械の叫びに埋葬された。

男の亡骸を前輪に引つ掛けたままコウは全力で狭い廊下を疾走する。目の前で置きつつある惨劇の一部始終を知る事が出来ない残りの男達は見えない目を諦めて、耳を頼りに逃げ惑う。視線を真つ直ぐに前に向け、歯を食いしばつたコウは決意を固めて全開のままです突然アクセルを抉つた。突進する力が齎す慣性をそのまま後輪に移して車体を真横に向ける。

床の上に散らばつた血溜りが後輪で巻きあげられる、既に瀕死のタイヤはコウの命じた挙動変化に耐えられない。重心を崩したバイクは一度崩した体勢を復元出来ずに床へと叩き付けられた。諸共に強かに打ちつけられるコウの身体、挟まれた足が悲鳴を上げてコウの無謀を訴える。

だがコウは神経を駆け巡る激痛が脳に到達する前にステップを思い切り蹴り出して横倒しになつた車体を自分の身体から解き放つた。猛烈な勢いで床を滑つていたバイクがコウの仕業によつて姿を変える、それは通路の幅一杯に回転しながら進路上の全てを轢き潰すローラーの様に逃げる男達の背中を追つた。届いた瞬間に巻き起こる絶叫と潰れ、砕ける鈍い音。車体に巻き込まれたまま通路の先へと運ばれる彼らの姿を目で追いながらコウは、残つた慣性に身体を委ねて上体を引き起こしながら腰の後ろに挟んであつたヘンケンの銃を抜き出した。

跳ね回る毎に舞い散る部品 of 散華を見つめながら、その目は確か

に猛烈な旋回を続ける愛機の姿を追い掛ける。闇の底へと沈んでいくそれが寸暇に見せる赤い色、コウが狙い澄ましてその一点目がけて引き金を引いた。

金属を穿つ小さな音が立て続けに三回、ガソリントankに空いた穴から吹き出すハイオクが遠心力によって壁や床へと撒き散らされる。一瞬にして到達する発火可能な気化濃度、最期の瞬間まで獣の鼓動を支えて来た二本のプラグは衝撃でひび割れたシリンダーの間から忍び込んだ混合気に遠慮の無い火花を飛ばした。

コウの愛機の息の根を止める紅蓮がリアルな赤で車体を染める、派生する爆発と猛烈な熱気は炎の輝きを置き去りにして通路の奥へと、犠牲者を吊う火の海は黙しじまを照らして世界の姿を露わにした。

一瞬で様変わりした世界の姿を二ナは、床に両手を着いたままただ茫然と眺めた。満ち溢れる音と燦さかん坐ざめく輝きはどれも今の自分には全く縁の無い物の様に思えた。耳に残った大きな声は紛れもなく自分を呼ぶ声、だが二ナはその声がとうの昔に埋もれてしまった名も無き友の声だと信じた。

瞬きを忘れた目に焼き付けられる真実の姿は二ナにとっての幻。肌突き刺す熱が齎あす痛みは自分の罪に与えられる罰の前触れ。天上に届く焰の揺らめきは直ぐにここまで押し寄せて何もかも、跡形も無く。

だがそれを心待ちにする二ナの心に翳りを差す様に、それは突然現れた。炎の前で蹲すまっていた小さな影が大きくなつて二ナを照らしていた光を減らす、背後から吹き付ける熱気で陽炎の様に揺らめく輪郭は西日を遮るあのオベリスクの姿にも似ている。

根元から伸びる影は真つ直ぐ二ナの足元まで。光によって出来た濃い黒の一本道を辿る様にその影は動いた。ひたひたと鳴る足音が少しずつ二ナの耳孔に忍び込み、次第に近づくそれが確かな輪郭を持つて二ナの視界を光から遠ざける。断罪の焰から二ナの瞳を塞いで新たな影を作ったそれが人であると言う事を知った二ナは、頭上

に差し掛かるその人の顔を床から手を離して振り仰いだ。

何故だろう、この人の顔には見覚えがある。

痴呆の様に見上げる二ナは小さく口を空けたまま視線を離せない。男の口が遠慮がちに開いて声を絞り出す。

「二ナっ。」

耳朵を叩いた自分の名前が眠りについた自分の記憶を掘り起こした瞬間、二ナは全身を貫く緊張に身体を震わせて。

怯えた。

そんな筈は無いと。

彼がここにいる筈が無いと。

自分の目の前に立つコウは自分が求めたが為に生み出した幻で実は自分は既に頭を撃ち抜かれて神様の御許へと向かう途上に立っている彼は罪深い私に神様が与えてくれた慈悲の姿で試練であり決して手にしてはならない手を伸ばせば届きそうそれは触れた途端に霧となる虚ろな物。

いやだっ、そんな思いをもう一度するなんてっ！

触って消えてしまう位なら触りたくない、触れて許されないと言うのなら触れたくない、私の願いが私自身を傷付けると言うのなら願いなどいらぬ。

差し伸ばされた手に怯えて腰を落としたまま後ろへ下がる二ナ、小さく頭を振りながら手を拒む彼女の姿にコウはゆっくりと近づいた。二ナの前に腰を落として傷だらけの両手を大きく開き、身体を静かに寄せて。

抱きしめた。

触れ合う胸と胸の間で確かめ合うお互いの命。コウの肩に預けられた二ナの髪が頬の傷を撫る、微かな痛みは命の証。そして二ナの身体を包み込む様に廻された両手に籠る力と温もりは今ここにいますと言つ眞実。

離れない様に、壊れない様に。コウの両手は届いた望みを抱きしめて震えている。盲いた幼子が確かめようとする様に、それまでコウの脇で広がっていた二ナの両手がコウの背中を何度も叩く。二度三度と繰り返されるその儀式は次第に力強く、掌で音を立てて。何と告げればいいのだろう。千を費やし万を重ねて伝えたいこの想いを。

取り戻した宝の大きさをその重さを。

自分の命に換えても手放せない、彼女に。

「 傍に、いてくれ。」

耳に飛び込んで来たその囁きに、あの日の記憶が蘇る。

月の満ち欠け、不毛の大地。空気の無い戦場で繰り広げられた命の鬨ぎ合いの後に訪れた最高の福音。

月の砂漠を漂う私に差し出された彼の手を、私は確かに握りしめてそれを誓った。

巨人の見守るあの丘で。

見開かれたままで天井を見つめていた二ナの目から溢れだす涙はコウの肩を大きく濡らしても止まらなかった。コウの背中に置かれていた二ナの手が力が籠ってあらんかぎりの力で抱きしめる。

失った時を取り戻そうとする様に。

手放していた自分の愚かさを悔い改める様に。

手にした物の大きさと大切さを確かめる様に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7694j/>

---

機動戦士ガンダム0086 StarDust Cradle

2011年12月15日03時12分発行